國文注釋全書



67

Muromatsu, Iwao (ed.)
Kokubun chūshaku zensho

文學博士 本居豐穎先生
文學博士 木村正辭先生 校訂
文學博士 井上賴圀先生

國文註釋全書

東京 國學院大學出版部刊行

目次

一緒言……編者

一竹取物語抄補注（二卷）……小山儀

一徒然草野槌（十三卷）……林道春

一十六夜日記殘月抄補注（三卷）……小山田與清　北條時隣

一世諺問答考證（三卷）……日尾荊山

一大井河行幸和歌考証（一卷）……井上文雄

以上

緒言

一竹取物語抄補注　竹取物語抄ハ小山儀ノ著ニシテ上下二卷ニ分テリ、和漢ノ書ヲ引用シテコレガ注ヲ施シ、入江昌憙ノ頭書ヲ附シ、卷末ニ此ノ物語ノ作著源順ニアラザル事ヲ辨ゼリ、天明四年四月ノ刊行ナリ、本書ハ此ノ抄ニ田中大秀ノ著タル竹取物語解ノ說ヲ添ヘ、竹取物語抄補注ト題セリ、サレバ書中頭書云トアルハ入江昌憙ノ說、解云トアルハ田中大秀ノ說ナリ。

一徒然草野槌　林道春ノ著上卷八册下卷六册ニシテ合本十三册ナリ、壽命院立安法印ノ著徒然草抄ノ說ヲ多ク引用シテ、其ノ上ニ和漢ノ故事ヲ考ヘテ注シ、加フルニト部家ノ系圖又兼好ノヨミ歌等ヲ擧ゲタリ、刊本ナレドモ至ツテ稀ナリ、本書ハ黑川家所藏ノ刊本、內閣文庫ノ寫本等ニ據レリ。

一十六夜日記殘月抄補注　小山田與清北條時隣ノ共著ニシテ三卷ニ分テリ、本文ノ字義句意ノ解釋、地理歷史ニ關スル引證等最モ親切ナリ、本書ハ更ニ落

合直文佐々木信綱等ノ諸先輩ノ說ヲモ加ヘテ補注セリ。
一世諺問答考證　荊山居士日尾瑜ノ著ニシテ上中下ノ三巻ニ分テリ、正月朔日ヨリ師走ツゴモリ迄ノコトドモヲ、或翁ノ問ニ答ヘタルヲ書キ集メタルモノニ更ニ考證ヲ加ヘタルモノナリ、考證詳細ニワタリ、年中行事ノ故實ヲ知ルニ頗ル便益ナル良書ナリ、本書ハ井上頼圀博士秘藏ノ寫本ニ據レリ。
一大井河行幸和歌考證　井上文雄ノ著ニシテ一巻アリ、大井河行幸ノ和歌ヲ注解シ考證ヲ加ヘタルモノナリ、

明治四十二年十一月

編　者　識　ス

竹取物語抄補注

全



竹取物語抄補注卷之上

序

友人小山伯鳳竹取語注成焉其人之與學可以槩見也哉我社目爲奇士不亦宜乎伯鳳實奇士也伯鳳耽書籍極該博特喜讀山海夷堅等其癖也甞謂丈夫處世志于事功者陋不志于事功而以文事自衒者陋之又陋何足道惟學在躬行豈暇問其佗美哉其志故親戚之親朋友之交善處其難處者皆得之于學於是乎伯鳳之奇不亦益奇乎何在僻編奇袤耶余居恒所講讀不出濂洛之書視之伯鳳之學不啻氷炭而其交膠漆以其趨一之故己學也交也君子必有所摻豈皮相之所得斡耶七龍之笑元章之潔謂盡其人而可乎伯鳳注竹取語是其病間之作吐奇自慰己伯鳳豈盡于斯頌世之粗識伯鳳者得余言乃益奇之又能識余與伯鳳學如氷炭不相容而其交不啻膠漆之有由矣伯鳳曩著王餘魚段卷今又出此書皆屬序于余以相知之深也伯鳳名儀世浪速人

天明癸卯秋八月望藝國賴惟完書于須磨

蓬廬之下

小山たゝしは我やへ〳〵のいとこなりいとけなきよりからやまとのふみをもてあそびいにしへを好みしかひとゝせなにとなくしはふきやみて日をかさねてあつしくあし引のやまひの床にふし久かたの月日をおくりけるにも猶ふみともをまさくりけるが一日たかとりの物語を見て是はこれいそのかみの古物かたりなりさるをあかれる代の先たちもいまた此物語をさとす事なし其ふみあれとも既にほろひたる朝あけつらふことあれともはたつたへさる歟しかも其こゝろ子やす貝のやすくさとるべからず其ことは石の鉢のかたき事のみおほかれは是を注せばやの心つきてことさへくから國のふることをかゝなへてはりうのあきとをさくり吾國のかむさひにしことの葉をうかかひては玉の枝をよち硯の海にすなとり筆の林にかりしてねなうしるしをはりやつかれかもとにおくりてこれ一たひかうかへよ又ことの葉のはつかにもおもふ事あらはあしつゝの隔なくいへすまひ草のすまふことなかれと夢の根のねもころにいひあつらへしかこゝに天この人にさちせすしてよはひわつかにはたち餘り五つと聞ゆるしはすなき人の來る夜になむ

はかなき數となりぬされはなき人の契りたかへしと何かしか塚のうへの劍におもひをかけむのれかにふきをもわすれむほけなくも此ものがたりをのへまきて見もてゆくにもとよりかしの實のひとつももる丶ことなしといへともむち椎のしひていはゝこはからしもやなといはまほしき事もいは間の水のつふ〳〵と今は誰にかいはむあらましかはと思ふそたゝ袖をぬらすよすかとはなりぬしかはあれといまそかりける時いさゝむら竹のいさゝかもおもふふし〳〵をいへとこそきこえつれ此まゝにひとりこちおしこめたらんはなき人のおもふらむ事もうしろめたく安倍のみむらしのあへなきわさを石造のみ子のはちを捨て其かしらに書付れはまことにいしをもて玉にましふるがことなるもいよゝなき玉の光をあらはさんとするものならし

入江まさよし

物語ふみよむ意ばへ

解云○凡ての物語書よむこゝろばへの事吾師本居鈴屋大人の源氏物語の玉の小櫛といふ書に甚委しう云れたり此は物語ぶみ見むと思はむ人は必不讀ではえあるまじければ今は其片端を取て此に記しつ諸の物語のさま各々少づゝかはりてさま〳〵なれども何れも昔の世に有し事を談る由にて或は聊かたち有し事を據として作かへてもかき或は其名をかくしもし替もしてかき或は皆がら作もし又稀には有しことを其儘に書るも有てやう〳〵なる中に先多くは作たるものなりさて其は何なる趣なるものにて何の爲に讀物ぞと云に大方物語は世中に有りとある善き事惡き事珍き事可笑き事面白き事哀なる事などのさま〳〵を書あらはして其狀を繪にもかきまじへなどして徒然なるほどの慰めにもし世中の有やうをも心得て物の哀も知物也かくて何の物語も男女のなからひの事をを宗と多く書たるは代々の歌集共にも戀の歌の多きと同し理にて人情の深く係る事戀にまさるはなければ也といひまた二卷物の哀と云事を委しう云示て彼物語の殊にあはれふかき筋を論ひて凡物語は物の哀知

べき便なるよしを喩されたるを思べし此物語はた其定にて赫映姫の容貌の世になくめでたきを見てはこちあしき苦しさも忘れ腹立しさも慰さむは形のよきに甚く感ればなり又世界の男子貴なるも賤も戀慕ける中に疎に心淺き人は益なき歩行はよし無かりけりとて遂に不レ來也ぬるを猶いと深く感惑てえしも思不レ止此女不レ得では世に可レ在かはと思なり給へる五人の人々の身をいたづらになしけるは大方の世の男の切なる念の狀を書顯はし物の哀を令レ知たるものなりさるを赫映姫は甚つれなく哀しらぬ狀にふるまひたるは彼菟原處女(ウナヒヲトメ)鬘子櫻子などのたぐひ五人の人々には身を分方もなく靡くべきやうもなければつれなきが如くこそ見えけれ帝の御前には然しも情なからず草木につけて文を通はし今はとて天の羽衣着時にも文を獻てところせく煩はしき身なる由をこまぐと奏せるはむげに心なきにはあらぬ由をことわれるになむ有けるされば此物語も物の哀知べきくさはひなれば其意もて讀味べき書になむ有ける

書の名

解云○此物語の名具には竹とりのおきなの物語と云べく省ては竹取の物がたりと云も雖なし此翁をさしてたゞ竹取とのみ云こと主水(モヒトリ)帶刀など云同格也此物語の中にもたけとりとのみもいひ大和物語にも「竹取がよゝとなきつゝ云々と歌にもよめりさて多計登理と云べきか又多迦登理と呼べきかと云論あり六百番歌合の俊成卿の判に云て竹取ノ翁の事たかたけは兩樣にも成べし然而此翁によりてたかとりと云りといふ證據ぞ有べき云々顯昭陳狀にいはく萬葉集竹取翁の事たかとりたけとり兩說なり萬葉にも兩點はべり堀河ノ院百首懷舊の題に中納言師時卿の歌に「春岡に登て見けむたかとりのこゝのゝ子等が事をしぞおもふとよまれて侍れば堀河院の御前にて令レ講歌に彼人たかとりとよまれて別の難も聞え侍らねば其說に附て詠ぜるよし申したけとりとは詞ばかりにて彼卿の歌ほどの證據も聞えず又論敵も元出されねば如二只今一は勝鞭をさし侍るべしたけとりとよまれたらん人にこそ證據は尋まうさまほしく侍れ云々と有を抄の頭書に引て昌憙今按に日本紀に其所棄竹刀終成二竹林一故號二彼地一曰二竹屋(タカヤト)一云々又遂登二長屋之竹(タカ)島(シマ)一とも又竹葉瀨(タカハセ)人名是等を思へば竹何といふべきもの

は多迦と云るが古の正訓なるべし譬へば酒も下に有ては一夜酒といひ上に置ては酒槽酒蟻と云が如し仙覺萬葉抄にもタカトリと點せりもとより此物語ゝ彼萬葉の翁が名より出たりと見ゆれば古風を存して多迦登理と喚べくこそと云り大秀按にたかとりともたけとりとも云べく聞ゆる中に多計登理と喚ぞ宜かるべき先此類の言第四音を第一音に轉して下につゞく格竹萱金舟稻風雨酒目天食などたかむらたかやたかしまたかばたかむなたかばかりすがはらすがそかな山いな穗ふな屋形かざ祭あましだりさかづきまかゝやくなど竹のむらすげの緒云々と皆中間に之字ある意なり取はもひとり（主水）かちとり（楫取）の類又たちはき（帶刀）とのも（主殿）りの佩守に同じ是等は中間に之字あるべきにあらず又今世の言ながら金掘人をかねほり稻刈人をいねかりと云など業を名としたる皆第一音に不レ轉を以思へば多迦登理とは云べからず又天はあめの菜あまの菜あめ菜あま菜といひ食は豐受姬とよをか姬宇賀の魂うけもちの神と種々もに云又高津宮に御宇天皇の御製にはやまの一本菅は子もたず立かあれなむあたら須賀波良ことをこそ須宜波良といはめあたら須賀志賣と一首の内に言を交て須賀とも須宜とも製給へり契沖阿闍梨の云く竹取と名付たるは萬葉十六に昔有二老翁一號曰二竹取翁一也云々此竹取はたかとりと訓を昔はたけとりと訓けるかにて是を本として名附たらし顯昭六百番歌合の時今のたけとりをたかとりとよまれたるを判者咎られたりされど大和物語に「たかとりが云々（季吟翁の抄又類從本是に同し秋成が校本にはたけとりとあり）とあれば通はしても苦しからぬにやと云れきされば强に拘はるべき事にも非ざめれは今は云馴たるに從て多計登理と喚べく定つそも〳〵落凹物語源氏物語など宗として談れる人の名もて附たれば是も蓬生卷に見えたる如くかぐや姬の物語とこそ名付べけれと思ふを繪合卷には竹取翁としも云ればはやくより翁の方を名には負けんかし

つくれる時代

解云○師の（玉の小櫛）云く竹取物語は誰が何時の代に作れりとはさだかに知られね共いたく古き物とも見えず延喜よりは以來の物とぞ見えたると云れたりされど源氏物語に繪は巨勢相覽書は紀貫之かけりと見ゆれば延喜の以往より在し物なるべし元來作物語なれば

拘はるべき事にはあらざめれど彼物語は作主紫式部の
いたく心しらひせられたる物なれば徒然艸にいへる
小野道風朝臣の書る朗詠集のたぐひには非で古くよ
り賞翫て時代も似つかはしければこそ相覽主貫之主
などの物せられつる由に云れけめ據として作れりと
見ゆる寶樓閣經は高野大師の將來れり是は不空三藏の譯の方なるべし
と云は大同の比より後なるべきは更なり昌憙が抄の頭書
云く松浦物語の奥書に貞觀三年四月十八日云々とあ
り然に紫式部物語の出來はじめのおやなる竹取と云
りしかれば猶貞觀の比よりも古き物と見るべしと云
り時代大氐さることながら此奥書は不審しく信がた
くこそ思ほゆれ

作ぬし

解云○此物語たがつくれりと云事しる可らず凡て古
き物語書ども作者のしられたるはなし河海抄に竹取
翁は古き物語なり作者不知とあるを此抄に古人の傳
説には源順主の所作と云りとあれどさだかならず此
書の唐土天竺にわたりて博聞強記ならではいかでか
造得べきと思はるれば若は順主にてもあらむかと云
人など在けむと聞僻めて次には順主の作れるなりと
云觸し猥言にぞ有べき宇都保物語を河海抄に源順作
云々有レ疑と記されたるにもしるし猶此物語も宇都
保も順主ならぬよしは落凹をも此主の作なりと云に
就て落凹物語解に論おきつ皆區々に文體異なれば同
人の所爲ならぬは論をまたずしても明らかに分るゝ
事ぞかし昌憙が云く河海抄に巨勢相覽一説云巨勢金
岡相覽同人也云々但如二高名錄一者相覽猶先代人也金
岡仁明天皇御時人也承和四年九月五日圖二御所繪一と
見え花鳥餘情に巨勢相覽者金岡之子云々金岡寛平時
人爲二其子一則可レ爲二貫之同時人一とあり 大秀云相覽主の事何れにも從がたけれど金岡主は承和より寛平にわたれる人なるべし承和四丁巳より寛平元己酉まで五十三年なり貫之主歯の事二説ありて詳ならねど古今目錄によれば元慶元出生にて寛平元年は十三歳なり又一説は元慶八の生と云へり然ば相覽主を金岡主の子さ云る大氐同時に當るべし
弄花抄に云く金岡子云々
除目成文抄に昌泰二年二月除目執筆時平公讃岐少目從八位
下巨勢朝臣相覽畫師云々 是は寛平元より十一年後にて歳在己未なり 順の作な
らば相覽貫之などが書たりとは云べからず昌泰延喜
の比既に舊にし物語なれば相覽貫之らが書たりとは
云なるべしと抄頭書に云へり

據どころ

解云○此物語は唐土天竺の書共に奇しく珍らかなる

事共を集取て作れり始は寶樓閣經により得がたきを得むといへるは云々の書月宮殿の事は菓經などを思へりと云しを本居翁の許に見せ參らせければ赫映姫の始終また石の鉢火鼠の裘珠の枝など唐土天竺の物名どもなれば彼所の書に據れりと云るゝはさることとなれど此の故事にも此彼似付たる事も有ぬべし抑赫映姫の竹中より現出つひに天に昇給へる事など今世にこそ傳はらね諸國の風土記などには能似よれる事も有しなるべし其不レ傳こそくちをしけれ纔に遺れる中にも山城風土記の加茂大神の始終また古事記書紀萬葉集などにも是に似たる事多ぞかしと云遺されけり

いまはむかしたけとりの翁といへる（ふイ）もの有けり野山にましりて竹をとりつゝよろつのことにつかひけり名をはさるき（ぬイ）のみやつこ〇となんいひける（まろイむイ）

竹は木草の中に益おほきものなればとりて筐簀（カタミアシカ）なとに作るなるべし史記淇園千畝竹其人與二千戸侯一等これも竹園せんほもたらんは諸侯の富におとらすどいふなるべし　さるきのみやつこ猿君宮造と書り本書名可二追考一造（ミヤツコ）續日本紀〇頭注云古事記曰天宇受賣命者猿女君等祖也　日本紀曰勅二天鈿女命一汝宜下以二所顯神名一爲中姓氏上因賜二猿女君之號一故猿女君等男女皆呼爲レ君此其緣也　今猿君宮造と書といふは是によるか但しみたりに猿女君の姓をもて斷するにはあらすたゝ事の似かよへるをあけて後案に備ふるのみ

解云〇今はむかし　凡て物語と云ものは過去し事を後れてまねぶものなれば此物語を始て世々の物語ぶみ今世の俚（サト）び物語に至ても猶昔々と談出るなむ古き效なりけるむかし（ムカシ）とは遠くも近くも過し以前を云言なり安閑紀に往歲古語拾遺に久代とかき常に疇字へ字書に疇曩也左傳註疇昔猶二前日一也襲

爾雅疏在ㇾ今而道ニ既往一)昔字(左傳疏據ㇾ今而稱ニ上世一謂ニ之昔者一也)を用たり萬葉集巻二十に「うつりゆく時見る毎に心いたく牟可之の人し思ほゆるかもとあり○竹取翁　は竹を採て物造て其を鬻て世業とすれば世人然稱し(イヒ)由なり○といふものありけり　は伊勢物語十五段に昔紀有常といふ人有けり大和物語十三段に右馬允藤原千兼といふ人の妻に俊子といふ人なん有けるなどの例に從べしいへると有本は惡し○野山にまじりて　は古今集春下に「いざ今日は春の山邊に交なむ暮なばなげの花の陰かは後撰集春上に「春雨のふらば野山に交なむ梅の花笠有と云なりなど有て交と云言今は彼と是と互に相雜をのみ云へど古へは山に入野に入をも云しなり○竹を採つゝ　此つゝと云言はてに通て聞ゆれと猶言を云重ぬべきを省たる意なり古今秋上に「山里は秋こそ殊に侘しけれ鹿の鳴音に目を覺しつゝと有も度々目を寤し々々する由也此も其定にて竹を採々して也伊勢物語八十二段にかくしつゝまうで仕まつりけるをと有も同し○よろづの事に　は類本に從つ宇治拾遺物語巻六に加茂社に祈て米を得たる處に　此米を萬につかふにとあればの事と云言なき本も惡からず抑籠の類を始て竹の用多き事數へ難し今昔物語舊本に載たるには竹を取て籠を作て要する人に與へて其功を取て世を渡けるにと有此には略けり○さぬぎ　は翁が姓也諸本さるき或はさかきと有を類本に從て改つ大秀既にさぬぎの誤ならむと云置つるか按に不違ざりき姓氏錄に右京皇別讃岐公大足彦忍代別天皇皇子五十香足彦命之後とあれど是は誤にて又和泉國皇別酒部公讃岐公同祖神櫛別命景行天皇々子之後也と有は宜しき由師記傳二十四二十六の巻説なり朝臣の姓(カバネ)を賜し事續後紀巻五六丁に見え和氣朝臣と改給ひし事三代實錄巻九八丁に見ゆ此姓ならむと思はるゝ由は下十三丁に云き○みやつこまろ　は名なり尸にはあらずまろと云こと諸本皆脱せり下に從て補つ造(ミヤツコ)は御臣の意なる由師記傳巻七説なり

その竹の中にもとひかる竹なん(イナシ)一すち有けりあやしかりてよりて見るにつゝの中ひかりたりそれを見れは三寸許なる人いとうつくしうてゐたり

もとひかる竹なん　志怪錄曰嘗聞ニ外舅說一頃歲莊墻間熒々光尺餘時兼兄弟中有ニ不ㇾ寧者一謂ニ之怪一

憂レ之數夕炳然如レ初外貝性不レ甘乃就拔レ之得二一
物一回二燈下一看乃枯竹根耳其光遂滅病者無レ咎似よ
りたる事なればしるす　異苑貝當竹中有レ人三寸
許云々　篔簹竹節中有レ物長數寸絶似二人形一俗
謂二之竹人一　契沖河社　後漢書西南夷傳曰夜郎者初
有二女子一浣二於遯水一有二三節大竹一流入二足間一聞三
其中有二號聲一剖レ竹視レ之得二一男兒一歸養レ之及レ長
有二才武一自立爲二夜郎侯一以レ竹爲レ姓按るに華陽國
志に出たり幽怪錄云鄜延長史有二大竹一凌レ雲可二三
尺圍一伐レ之見三內有二二仙翁一相對曰平生深レ根勁レ節
惜爲二主人一所レ伐言畢乘レ雲而去 夷堅續志 筒順か和名
に津々うつくしうて　珍奇（ウツクシ）日本紀　端正 同　端嚴 同　愛 萬
○頭注云うつくしうてゐたり　俗にあいらしくと
いふかごとし崇神紀汝等二子慈愛共齊此義に通か
ほよき人を常にうつくしといふはかほよき人をう
つくしみおもふ故にいふなりうつくしといふか即
かほよきといふにはあらず　萬十一　あめにあるひ
とつたな橋いかゝゆかん妻かりといはゝ足をうつ
くしとよめり是あやうしとうつくしむなり枕草子
にうつくしきものみつはかりなるちでのいそきて

はひくるみちにいとちひさきちりなどの有けるを
目さとに見つけてをかしけなるおよひにとらへて
おとなことに見せたるいとうつくしといへるも同
意也
解云○本ひかる竹云々　は其光を奇しみて猶能見
むとて立寄て見るに其光は筒中より出たり又其光
を見れは其中に小兒有て其が光なりさて小兒の光
なる由此には不レ云で此兒の容體云處に屋內は光
滿たりと云て此竹の光は即此兒の身より出なる由
はしるきなり○一筋ありけり　は抄本に竹なん
一筋有けり寫本になんと无て下をけるとせり何も
辭格たがへり今は寫本に從て下を改つ○よりて見
るに　は抄本に從つ校本に取て寫本に見ればとあ
り○筒　は和名抄に唐韻云筒 音同一音棟俗用二去聲一 竹名也と
有て都々と云訓を漏せり○三寸計なる人　は抄本
に從つ活本には計のとあり三寸は字音に唱べし下
天羽衣の段 に菜種の大さと云り竹中に人有し例などは
附錄に載つ○美くし　は古事記に愛我那邇妹命乎
とあるを齊明記の御製に于都倶之枳脥稚兒をと有
に依て愛字をうつくしきと師傳訓れたり落凹物語

(卷三)に(右衞門督な)甚白うつくしげなる子の三計なるを膝に居て愛がりゐ給へればなどあり頭書に俗に愛ラシと云が如し顔よき人を常にうつくしと云は良好人を愛しみ思ふ故に云なりうつくしと云が即かほよきと云には非といへり

おきな云やうわれ朝ごと夕ごとにみる竹の中におはするにてしりぬ子になり給ふべき人なめりとて手にうち入て家へ(にイ)もちてきぬめの(妻イ)女(おうなイ)にあづけてやしなはすうつくしきことかぎりなしいとをさなければ箱(籠イ)に入てやしなふ

我朝ごと夕ごと是は翁の秀句なり竹の子といふにつゝけたり「めのをんな妻女なるべし「箱に入て續齊諧記楊寶年九歳時至二華陰一見三黄雀爲レ鴟所レ搏寶取レ之歸置二巾箱之中一唯食二黄花一云々　○頭注云手にうち入て　神樂歌に大宮のちひさ小舍人玉ならはてゝにや云々　をさなければは　古語多くは賢からぬ義なれどこゝは箱に入てやしなふとあれは幼稚の義と見るへし　めの女に云々　舊本今昔物語第三十一竹取翁語云家に歸りて妻(め)の嫗(おうな)に籠の中にしてかゝる女兒をこそ見つけたれと云ければ嫗(おうな)も喜びて初は籠にいれて養ひける云々これによるに女は嫗の字可然和名云說文云嫗(和名於無奈)老女之稱也云々また籠に入れてとあるもはしめに竹をとりよろづのことにつかひといへるに對して可然歟箱は籠の字の誤にや舊本今昔物語の全文後に載す

解云○子に成給ふべき　は我領ずる竹中に坐しに依て籠にと云意を兼ねたる秀句なり○なめり　はなはにあるを約たる言なればなンと唱へしめりは俗に云々デアラウと云意なり○家に持て來ぬ　家にとあれはきぬ家へと云ばゆくと云格なればへと有本は此に不レ合今は類本に從つ○妻　は和名抄に白虎通云妻(和名米)とあり○おうな　は今昔物語なるに嫗と有ぞよき女(をうな)とかけるは誤なり故改つ和名抄に說文云嫗(和名於無奈)老女之稱也靈異記に嫗(於于那)とありおうなおむなと云はみを音便にうともむとも云るにて正しくは意(お)美那と云なり師(記傳卷九)云く少(わか)を袁美那(をうなの事は下に云べし)と云に對て大小を以て老と少とを別てる稱なりと云れたり(猶下をとこをうなの處可レ考)○をさなしは　長(チサ)々しからぬ由にて賢からぬ意なれど此にては形體の少さき由なり體の小さきは少彦名神を

思ベし○籠に入て　は抄本には箱にいれてとあり或說にはこは蓋籠の義なりと云れど箱はもはら板もて造れは此に附なし今昔物語なるも籠とあれば諸本に從つ和名抄に唐韻云籠古和名竹器也とあり今世是をかごと云は堅間籠と云言を略けるにやあらむ竹を取て萬につかふと云るにかなひて籠といふ方ぞ附々しくてよろしき

たけとりの翁竹○とるに此子をみつけてのちに竹○とるにふしをへだてよことにこがねある竹をみつくる事かさなりぬ

よごとに　兩節間順和名抄俗云與河社智度論第十云眞珠出二魚腹中竹中蛇腦中一

解云○竹をとること　は寫本によりつ諸本に此も下も竹をとるに云々竹をとるにと有て一つは衍と思しを寫本によれは妨なし○此子を見付て後にとは竹中に金あるを見しは此子の福分なるよしなり○節をへだてゝよごとに　和名抄に野王按節音切和名布之竹中隔而不レ通者也文選笙賦注云黄帝使二伶倫一斷二兩節間一而吹レ之兩節間俗云レ與故以擧レ之とあり○金ある竹　は智度論に眞珠出二魚腹中竹中蛇腦中一と有と造れるよしなり

かくて翁やう／＼ゆたかに成ゆく此ちごやしなふほどにすく／＼とおほきになりまさる三月ばかりになるほどによきほどなる人になりぬれは髪あげなどそうしてかみあげ○させきちやうの内よりも出さず

すく／＼源氏紅葉の賀にすく／＼しうてと云々注しなのなきをいふ也　すくよか同事也岷江入楚に直々歟と云々　よきほどなる　晋趙末年八歲一夕俄長身長八尺髭鬚滿レ頷獨異志　かみあげ　結髪　さうして　左右シテなるべし　○頭注云すく／＼　祛々業々など書べし共に健の義也祛々詩　かみあげとは髪のさきをそぐなり髪そぎともいふ萬十三「しかれこそ歲のやとせをきる髪の我身を過てと讀る是也又十六「たちばなのてれるながやに我いねしうなゐはなりは髪上つらんか允恭紀云妾自二結髪一陪二後宮一云々　そうしてと書るを見れば奏して歟左右してはとかくしての意歟　きちやうのうち　和名鈔云帳屬有二几帳之名一所レ出未レ詳

解云○やう／＼　はやゝやゝと云事を音便に云る

也萬葉五の長歌に兒の病の事をしまらくもよにくはなしに漸々にかたちつくぼりとあり俗に次第々々に段々になどいふ意なり猶記傳二十八の三十六丁にくはし○ゆたかは豊饒の義なり貧しかりし翁が度々金ある竹を得て豊饒になれるなり下に勢ひ猛の者になりにけりとは此故也○ちごは和名抄に老子注云赤子不レ害レ物和名知子今按云含レ乳之義也と有て言義はさることなれと轉ては大になれるをもいへり若紫卷に紫上のことを十ばかりにやあらむと見えて下の詞にさてもうつくしかりつるちごかなとあり○すく／＼は古事記に明宮段の大御歌にさゝなみぢを須久須久とわがいませばやとある傳に滯らす速にゆく貌なりといはれきこれもその定にて小さかりしが急に大になるさまをいへるなり枕冊子四の四丁にすく／＼しう歩て俊蔭卷に仲忠のことをかゝるほどにこの子はすくすくとひき延るもののやうに大になりぬ日陰葛卷に宣陽殿の女御の御事をいかでとおぼしめせどすかやかに殿には申させ給はぬほどに桐壺卷十五丁にすか／＼ともえ參らせ給はぬなりけり宇治拾遺卷三に雀子を飼處に例よりもする／＼と生たちていみじう大に成たりとあり此すか／＼する／＼など云るも同意也獨異志に晉趙末八歳一夕俄長身長八尺髭鬚滿レ頷と抄に見えたり○三月ばかりになる程に類本には三月ばかりのうちにとあり○よきほどなる人に成ぬれば　は常並の人になれるよし也○髮上　は縣居翁の說に凡古の女の髮のさま幼ほどは目ざしとも云て額の髮目をさすばかり生下れり其過て肩のあたりまで下るほどに末を切て放てあるを放髮とも童ともうなゐはなりともうなゐ子とも云り藤井高尙主の伊勢物語のふり分髮の釋に元を不レ結放て垂る故に髮の二つにわかるゝをふり分がみと云なり萬葉にをとめ子かふりわけかみをゆふの山とよめるもをとめに成ては童なりしときのふり分髮を結故にてこれも放てあるしるしなりといはれたり八年子となりては不レ切で長からしむ其より十四五歲となりて男するまでも垂てのみあれば猶うなゐはなりともわらはとも云り萬葉に「橋の寺の長屋に我ゐねしうなゐはなりは髮上つらむか是は男したる後に髮上し也允恭紀に七年皇后曰妾自レ結レ髮陪二後宮一既經二多年一是は髮上し給ひて上ましゝなり師說に凡て女は年長て髮上るは上代よりの儀なるに飛鳥淨御原宮御宇十一年の詔に自今以後男女悉結レ髮と有を思ふに上代にあぐと云しは本を一に結集擧て結て其末は後へたれたりけむを彼詔に結よとあるは頭上に結綰て

髻となすを云なるべし（是にて允恭紀の髪結のさま心得へし）扨同十三年には男女四十以上髪之結（アゲ）不レ結任レ意也とありて又十五年の詔に婦女垂髪于背猶如故とあるは上代よりの風の如くせよと也故に此十五年の詔の後の萬葉の歌にも髪上る事を多よめるは彼本を結事にて末はたるゝなれば彼詔に違事なしと云れき藤井氏云中昔の女の髪のさまは天武紀に婦女垂髪于背猶如故と見えたるすべし髻どりにぞ有ける續紀に慶雲二年十二月令下二天下婦女一自レ非二神部齋宮宮人及老嫗一皆髻髪上とあれどもすべし髻する人もまじれる御さだめなれは紛もして其世の習のまゝに改らざりけんかし中昔の物語ぶみに見えたるやう皆すべし髻にて髪上するは唯大宮にてとゝ有時のわざなりきと云れき按にいと〱正しくは慶雲の御制を用ひしなるべしされば吹上巻に（神南備胤松源氏君なかしづく處に）女は髪上て唐衣きでは御前にいでず男は冠しうへの衣きでは御前に不レ出と有も御前を恐みて正しくするなり又縣居翁の落凹にあこぎが一人していそがしきには髪を巻上てわざするに主の前へ出るにはかきおろして出しとあり又伊勢物語の高安の女の髪を巻上たる種々を分ていばどうるはしく髪上するは晴也垂て居は常なり巻上るは私なりと云れたるにて心得へし（是は萬葉考別記の二記傳の七玉勝間の十四勢語新釋の二なとの說を摘てしるしつ猶本書を考て知へし）〇さだして　は諸本さうして或そうして校本にそうそくして（是は装束にてさうぞきを誤るにもあらんかと云置つるを）本居翁さうしてとある本よくてうはたの誤にてさだしてなるべしと云おこされつるに從て改つ縣居翁の說にさだは定の意なり後の物に此さだにしてといひ公の訴など斷決する所をさだの庭と云ふもみな定の意なりと云れき此は髪上裳着さするにもよき程の人に成ぬれば其事を議定むる事也忠こその巻に千蔭のおとゞ內に參りてさだめ給ふことあるにつけて宇治拾遺巻九に（敦賀の女旅人宿しけるに觀音嫗に化て物する處に）此人々のゆふさりつとめての食物までさだしおきて出ぬなと有さて今俗に沙汰の字を用ふるは音も意も大抵同しければ後に塡たるもの也字書に謂三沙汰使二之冷然一也また杜詩注に以レ節貯レ沙去二其細一而存二其太一曰二沙汰一とあり物を議定には凶をすて吉をとれは心ばへよく叶へり〇せさせ　上のせ字諸本になきは脱せるなるべし今は校本によりつ枕冊子に殿

守づかさこそよき人にせさせまほしきわざなれ皆此ぢやうにて物語書どもに甚多かる言なり〇裳ぎす　抄本になきは脱せるなり和名抄に釋名云上曰レ裙下曰レ裳（和名毛）梅枝巻に（明石中宮十二の時）御もぎの事おほし急ぐ云々西のおとゞに戌の時に渡り給ふ宮のおはします西の放出をしつらひて御くしあげ（髪上なり）の内侍などもやかて此方に参れり云々子の時に御裳奉るおほとなぶらほのかなれど御けはひいとめでたしと宮（秋好中宮）見奉り給ふ（髪上裳着同時なる證ともすべし）藤原君巻にあて宮は御年十二とげける二月に御裳奉る程もなくおとなに成給ふと有此赫映姫もさるべきとしのほどの姿に成ぬるなりさて裳着袴着には腰結と云ことあり李部王記に康子内親王（醍醐皇女母中宮穏子基経公女）初着レ裳小一條左大臣（師尹公）親王外舅（實は親王のいとこなり）結ニ御裳腰一水左記に敦文春宮（白河天皇第一皇子母中宮賢子關白師實公女承保二年正月親王）着袴也云々關白殿結ニ御腰一給と（和訓栞に）見ゆ猶腰結の事物語書どもに多く見えたり年高き良人を請じて腰結とせし事なり〇ちやう　抄本にはきちやうとあれど諸本帳とあるかた勝るべし和名抄に釋名云帳（猪高反音長）張也施ニ張於床上ニ也小帳曰レ斗（俗云斗帳一云屏帳）形如レ覆レ斗也

今按帳屬有ニ几帳之名一所レ出未レ詳と見え類聚雜要抄（巻四）に帳の圖を載たり方八尺高七尺一寸土居をおき柱十二本（一角に三本）立桁四本をかく（天井なり）金銅の金物を以て餝鏡二面をかく枕の方足の方に帷をかけ兩脇は几帳をたつ中に疊三帖敷たり間なり委は此に云かたし催馬樂にわいへむはとばり帳をも垂たるを大君きませ婿にせむ落窪物語（巻四）に（帥なる君に合せ給ひし後朝の處に）四君まだ帳の内に寐たまへり北方おこし給ほどに帥の文もて來たり男君とり給ひて云々几帳の内にさし入給へば北方取て奉給へどふとしも取給はずと有にて大抵帳の形を知べし按に若は此上に詞脱たらむか少し急なるやうなり

いつきかしづきやしなふほどに此ちごのかたちけそ（うらイ）うなる事世になくやのうちはくらきところなくひかりみちたり

源氏紅葉賀にいつきかしづきと云々齋冊（イツキカシヅキ）寵愛（同）やのうちはくらきところなく衣通姫の體かゝやきて衣の外に透りたる類なるべし拾遺記曰蜀先主召ニ甘后一入ニ綃帳中一於ニ戸外一望者如ニ月下聚雪一世になくとは世にたぐひなきと也　けそう　はれがま

しくいちじるくあらはなる意也　順證

解云○いつきかしづき　は縣居翁（古言梯の）說にいつきは神に仕るは凶穢を忌て清く仕るをいはふともいつくとも云人にいふも凶を忌て吉を用ふるを云かしづくは懇ふ仕るを云と云れき萬葉（卷九に勝鹿眞間娘子をよめる）歌に錦綾の中につゝめる齋兒（イハヒコ）も妹にしかめや云々俊蔭卷に（女の事な）母も父君をひていつきかしづきし時よりも親かたちまさりてなどあり○けうら　は諸本けさうと有て心得ざりしを本居翁けうらの誤とせられたるぞよき下（御狩の段）にも光滿てけうらにて居たる人あり忠こその卷に（忠こその事な）形きよらなる事限なしと云る此に同じけうらは淸らと云言を音便にかく云り落窪物語（二卷）に（正月一日の裝束のさた）より始ていと淸らにし出給へれば又（卷一八部の佛像つくる處）佛きよらなるべくと心に入給ふ又（同挿物に）いとけうらなる緋の糸を云々源氏物語にもきよらともけうらとも有○世になくは世界に比類なく也桐壺卷に（源氏の君な）世になくきよらなる玉の男御子さへ生れ給ひぬとあり○屋のうちは暗きところなく　は赫映姫の光徹て陰なる處までもあかるきよしなり○光滿たり　允恭紀（七年）に皇后之言曰妾弟名弟姫容姿絶妙無比其艶色徹レ衣而晃之是以時人號曰二衣通郎姫一雄略紀に天皇産而神光滿レ殿俊蔭卷に（俊蔭女の事な）形さらにいふ限なしあたり光かゞやきて見る人まばゆきまでみゆ（又忠こその事なもかくいへ）又（此女の生る仲忠を）玉の光炫やく男の子をうみつり　是等は身に光ある人の例なり

翁こゝちあしくくるしき時も此子を見ればくるしき事もやみぬはらだゝしき事もなく（イナシ）なくさみけり翁竹をとることひさしくなりさかえにけり（ぬいきほひまうのものになりにけりイ）

はじめにゆたかになるといふは身の不自由ならぬほど也さかえにけりとは富て身のたのしくある也

解云○翁心地あしく云々腹だゝしき事もなくなぐさみけり　諸本事もなくなぐさみとあれど必衍と見ゆれは寫本によりてなくと云言一つ削つ寳樓閣經に於二竹内一生二一童子一顏貌端正令レ人樂レ見（令以下四字不空の譯にあり菩提流支の譯にはこの意なし）桐壺卷に（源氏の事な）いみじきものゝふ仇敵なりとも見ては打ゑまれぬべきさまのし侍れば若紫卷に（僧都紫上の祖母に云詞に）光源氏かゝるついでに見奉給はむや世を捨たる法師の心ちにもいみじう世の愁わすれ齢延る人の御ありさまなり明石卷に（入道源氏を見奉りて）

ほのかに見奉るより老も忘れ齢延る心ちしてゑみさかえてなどあり○抄本には久しくなりさかえにけりと有も聞えはすれど諸本のかた勝れり此は上なる節ごとに金ある竹を數々とりて勢ひ剛くなれるよしなり○まう　は猛（猛莫杏切健也　勇猛又嚴也）字の音なり師云く漢音バウ吳音ミヤウなれども常に漢をマウと呼といはれき落窪物語二卷に三位中將満水詣の處に御前いと多くてさき追ちらしていとまうにて詣給ふ宇治拾遺五十に大友皇子は時の政をし世のおぼえもいせいも猛なりとあり

此子いとおほきになりぬれば名をばみむろどいむべのあきたをよびてつけさすあきたなよ竹のかくやひめと付侍る（ツイ）

三室戸齋部秋田なるべし但し作名なればしひて考るに及ばず　なよ竹　竹の總名也奈用竹　又奈陽竹ニ萬葉注に仙覺曰なゆたけとは唐竹をいふにやなよ竹といへり同内相通也よながくしてとほくなみよれはなゆ竹の遠くよるともつゝけり「かくやひめ　耀夜姫　赫夜姫　契沖曰古事記垂仁天皇段云又娶ニ大筒木垂根王之女迦具夜比賣ニ生ニ御子袁耶（サリ）

辨王これをかれる歟○頭注云なよたけ　源氏箒木卷に人がらのたをやぎたるにつよきこゝろをしひてくはへたればなよ竹のこゝちして云々注云なよ竹はやはらかにてしかもつよき竹也若竹といふと云々なよとはやはらかといふがことし河海抄になよ〳〵柔也云々萬二なゆたけのとほよる子等とよめるもとをよるはとをゝと同しくたわゝに通してたわみよるなり

解云○みむろと（ミムロ）　は地名なるへし萬葉二の十一丁に玉匣將見圓山乃云々或本歌云玉匣三室戸山乃と有を解に卷七に見諸戸山と有は旅歌の中に有て備中國のみむろとなるへし山城の宇治に三室戸と云あれど後の事と見ゆとあり此も戸は乃の誤か又外に誤字あるか可ニ考宇治拾遺五の卷に三室戸僧正とて三井の門院にやごとなき人おはしけり隆家師の第四の子なりとあるは宇治歟さて此下の字脫か地名の下なれは必のと云へし○齋部　は姓なり○秋田　は名なり博士なとに准て作れる名なり○なよ竹　は冠辭考に萬葉に奈用竹のとをよるこら名湯竹のとをよるみこ是はたゝ和なる女の姿をなよやかなる

竹に譬て冠らせたりなゆ竹は女竹にて皮竹とも云て殊になよゝかにたわめは然云といはれき箒木巻に(空蟬の事を)人からのたをやぎたるに剛き心をしひて加たれはなよ竹のこゝちしてさすがに折べくもあらずとあり竹より出たる人なれば女の手弱やかなるにたとふる奈用竹もて號たる也〇かぐや比賣とつけつ　古板本によりつ類本に附つれ抄本に付はへると有はわろし(侍ると云言はかゝる處に有へき言にあらす)　かくや姫はいた(に容顔な稱たるのみにはあらて)身に光映ある事を取て附たるなり古事記の師木玉垣宮段に天皇(垂仁)娶二大筒木垂根王之女迦具夜比賣命一生二御子袁邪辨王一とある此后の名を取る歟と河社にあり師云迦具は赫と云意其は迦賀とも迦藝とも迦具とも迦宜とも活て同言なり炫は迦賀と訓へし靈異記に炫を加々也計利と訓りと(火之迦具土神炫毘古神の傳に)云れき大秀按に夜は加賀也久の久を省て也と云る歟とも思へと猶考るに師の高比賣命の歌に阿那陀麻波夜と有を波夜は光映にて照曜を云也速玉之男熊野早玉神社これらも皆映玉の意なるを思へ又木花之佐久夜毘賣命の佐久夜は開光(サクハヘ)映(ヤ)の伎波を切めて加なるを通はして久と云なりと

(記傳に)云れたれば彼后の名も迦具波夜を切て迦具夜と申意なること明けしされば此物語なるも具を濁て迦具夜比賣と訓へしさて大筒木垂根王讃岐垂根王此二王之女五柱也とある此后も其中の一柱なればもし其御伯父讃岐垂根王などに思よりて讃岐と云姓もあれは此竹取翁をさぬきの姓と爲たるにもやあらむこはふと思よれゝは云なり(前にかく云置つるが後に類從本を見つれは造麻呂か姓さぬきとありき)後には大鏡に小野宮左大臣云々さふらひける女房をめしつかひ給ひけるほどにおのづから生給へりける女君かくや姫とそ申けるとあり

此ほど三日うちあけあそぶよろつのあそひ(イナシ)をぞしけるをとこはうけきらはず(なうなイ)よびほと(つイ)へていとかしこくあそふ

うちあけ　內擧　うけきらはず　承不嫌　保(ウケ)(日本紀)
よひほどへて　夜(ヨ)甚(ヒ)經レ程よるひるとなく日をかさねてあそぶ也〇頭注云うちあけあそふ　うつぼ物語藤原宮巻に七日なゝ夜とよのあかりしてうちあけあそふ云々今按此うちあけ遊ぶといふは古事記に樂の字をウタケと訓ずチアの反タなれば樂の義歟顯宗紀弘計王室壽辭云拍上賜吾常世等云々釋

云拍上賜者飲酒義也　うけきらはず　仁徳紀盖レ之如レ天容レ之如レ地の容をウケイルヽとよみたれは容不嫌にてもあるべし
解云○うちあげは　古事記に日代宮段に　言動為御室(ニヒムロウタゲセム)樂とありて傳に樂は宇多宜と訓へし拍上の切まりたるなり顯宗紀に天皇為二室壽(ムロホギ)一曰云々手掌憀亮拍(タナソコモヤラヽニ)上賜吾常世等とある是なり酒を飲樂て手を拍上るより云る名なりと見ゆ鈴木氏云あげは次第に聲高く拍を云と云れき藤原君巻に　上野宮あて宮の聟なる女を得て酒宴し給處に　すべて七日七夜とよのあかりして打あげあそぶとあり俗に嫁入の時に婿なる者の婦翁の許に始て行たる時の酒宴を美濃にて切てウチヤゲといひ飛驒にては正しくウチアゲと云り是古言の殘れるなり○萬のあそび　は古事記に石屋戸段に　為樂(アソビ)と有をあそびしとよみ　天若日子段に　日八日夜八夜以遊也　訶志比宮段に　阿二蘇婆勢其大御琴一とある傳に凡て歌舞管絃をば皆あそぶといひ體言にあそびとも云りあそぶと云言の本は今俗にも云と同意なれば何態にも云中に歌舞管絃は遊の至極なる故に殊に其名を負る也と云れき枕册子に　琵琶聲は止てとある段に　殿上人うへの御局にめして御遊あり

宇治拾遺巻一に　鬼の酒宴に瘤ある翁の舞出たる處に　酒まゐらせ遊ありさま云々年ころ此遊びをしつれともなどあり此は名を付たる祝事に種々たのしきわざして遊ふなり○をとこをうな　は諸本男はうけきらはずと有を本居翁をうなと改られき袁登古はもと小男にて袁登賣に對名なるを此頃よりは老若をいはず男を云事となれり袁美那は凡て女なり　されと嫗に對ては大小を分か如し　ヲウナヲンナと云は音便に頽たるなり　上の嫗の解可考　古今序に小野小町は云々つよからぬはをうなの歌なれはなりと有○きらはずよびつどへて　は男女の嫌なく賑しく喚集たるなり散木集に　彌陀の誓は人きらひ不レ給と聞てたのもしさによめる　迎るはせつりもすだもきらはねばもれしもせじなすならずとも抄本によひほどへてとあり上に三日と限たれは夜日程經てとは云べからねば誤なり抑かく男女多く集へて祝事しつれば其集へる人々赫映姫の世に比類なき美女なるを見て其よし云觸らしつるが天下に弘く聞え其を世界の男きゝ感て惑へるよしを次の段に云るいとつき〱し○かしこく　は下　玉枝段十四丁　にかしこくたばかりて　同段四十二丁　かしこ

き玉の枝なし有伊勢物語段二十に昔男女いとかしこく思かはして大和物語百四十七段に奈良帝狩いとかしこく好給ひけり土佐日記正月二十七日條にいとかしこくなけくなどあり藤原宇萬伎云かしこくとは畏る事なるをいたくなし云意に用たりと云るぞよき故によく甚しくいみじくなと云にも通て聞ゆ今俗にもたゞ大なる甚しき事をオソロシクと云同じ心ばへなり

世界のをのこあてなるもいやしきもいかでこのかぐやひめをえてしがな見てしがなとおとにきゝめでゝまどふ

あてとは貴也源氏のあて人といふに貴人と注せりあてやかなといふも氣貴事也　えてしがなとはかくやひめをいかどして娶らんとおもふなり萬葉に藤原卿娶釆女安見兒時のうたに　われはもや安見兒えたりみな人のえかてにすといふやすみこえたり○眞注云高貴アテ眞名伊物解云○此廣き世界に所在男と云意にて其中には貴もあり賤もあるよしなり⊙をのこ　は和名抄に説文云男和名乎乃古丈夫也とあり本は男の子の意なるべきを後に凡て男を云て妻夫那に對たり○あて　は下天の羽衣の段に心ばへなどもあてやかに伊勢物語十段に母なんあてなる人に心付たりける又同四十一段にひとりはいやしき男のまづしき一人はあてなる男のとくある持たりけりと有を古意にあては雲上ぶりたると云語なり源氏に上手めかしきと云はやむごとなき人めきたる意ながら此上衆をも訓にはうはてとよむべしうはの反あとなればあてはうはての意か手は風俗をてぶりと云に同じと云れき俗に上品と云にあたれり○見てしがな　は此はたゞ目に見まほしく思ことなり○聞めでゝ　は俊蔭卷に仲忠母に學ふを猿澗處に此物の音を聞めでゝとあり聞驚見驚見畏見感など古事記にある同風の詞也赫映姫の貌よき事を人傳に聞て戀慕也○まどふ　は大和物語七十六段に監の命婦を彈正親王見給ひてにはかにけさうじまどひ給ひけりと有心の締なく思惑なり今俗にホル、と云り擁囊抄に忙々又恍々と書てホルとよむ文選に魂恍々以失度とはべり李善か注に恍々を失意と釋せりとあり

そのあたりのかきにもいへのとにもをる人だにたは

やすく見るましきものをよるはやすきいもねずやみの夜にもこゝかしこより（出ても穴をくじりこゝかしこよりのぞきイ）のぞきかいまみまどひあへりさるときよりなんよばひとはいひける

垣墻　容易　たやすき也　いもねずうちとけてねもせぬこゝろなり萬葉に徹夜者吾毛いもねかねてきとも　土佐日記　夜はいもねず　おちくぼ物語に夜もいもねずぬはすといひし　覗　垣間見　覗其私屏（日本紀）喚よばひとはいひかよふ事也夜といふ字にかけて作りなせし也結婚（萬葉）○頭注云いへのとにもをる人たにたはやすく見るましきものを長恨歌養ニ在深閨一人未レ識たはやすく輕爾とも書けり欽明紀不レ可ニ輕爾而伐一云々　やすきいもねず萬十二わぎもこに又もあふみのやす川の安寢もねずに戀わたるかも　よばひし萬十三こもりくのはつせをくにゝよばひするとよめりそこには夜延と書けり契沖云ニ伺伺一ノ意なるべし源氏玉葛卷にけさう人はよにかくれたるをこそよばひとはいひけれ云々古事記八千矛神にも佐用婆比爾阿理多々斯用婆比爾阿理加用婆勢云々

解云○たはやすく　は下にも長いすにもあり欽明紀に元年（九月新羅を征事を議給ふ條に）少計軍卒不レ可ニ易征ニ云々新羅怨曠積年不レ可ニ輕爾而伐一後薩卷に（あすらの所に至て學材を乞處に）天女下まして遊給ふ所なりたはやすく來れる罪たにあり續紀に（第一詔に在頭の詔詞に出たる次第なり）天下乃政乎多夜須久行止无所念坐而などあり容易と云に多を發語におき波を助辭とせる也故波字なくても云り等閑ならず輕からぬよしなり○見るましきものを　は下（御狩行幸の段）にも對面すまじきと申すと有も同格の辭なり詞瓊綸に此辭は賤しく聞よからぬものなり見るまじは見じといひたへまじはたへじと云ぞ雅言には有ける但し語を下へ續くる時に見るまじき云々など云は常の事にて書紀の歌にすらよるまじき川のくまくまなど見ゆとあり宇治拾遺十四に（海雲比丘童子に云詞に）但今は汝を見るまじき事の有なりとて云々○やすきいもねずは今世の心にてはやすくと云べき詞づかひと聞ゆれど當時はかく云し也萬葉十二に一わぎもこに又も近江のやすの川は安寢も不宿爾こひわたるかも六帖に一言よりもゆるぎの森に住鷺のやすきいもねず戀わたるかも躬恒集に一打延て安きいもねずこりきりす秋のよなく／＼鳴つゝぞふる後拾遺（赤染衛門）

一鳴ぬよるも鳴夜もさらに郭公まつとて安きいやは
ねらるゝ（異本にやすくと有は誤なり）文には初花巻に（寛弘二年十月門家に行幸の用意の處）
におぼし急がせ給ふに安きいも大とのごもらずな
どある例もて知べし○闇の夜に出ても穴をくじり
てゝかしてよりのぞきかいまみまどひあへり　抄
本にやみのよにもてゝかしてよりのぞきかいまみ
云々古板本に闇夜に出ても穴をくじりかいまみ云
々寫本にかいまみの上にあるひはと補へり無くて
宜しければとらず今は抄本に古板本を補て用つの
ぞきもかいまみも同意なるを斯樣に重て云る下に
所をし願をたてなど此書には殊に多し○穴をくじ
り　は神武紀に天手抉八十枚（手抉此云多衢餌離）註に以二手指一
剔抉也今所レ謂手壺小壺之類と云り（穴か凹むるなり）和名抄
十五に唐韻云鑴（許規反和名久之利）角錐童子佩レ鑴說文云角鋭端
可二以解一結者也字鏡に剈宛（同烏丸反削也挑也割也久自利惠留）沙石集（六巻）
に邪命說法は三千世界の人の眼をくしるよりも罪
也など見ゆ此は指先もて垣に穴を彫あくる事也○
のぞき　は字鏡に闚（苦規反覦也覗也望也佐也字加々不又乃曾先）覘（勅弔反見也視也乃牟）
覹（乎槊反窺也之良字加々不）と有てのぞくものぞむも同意也中務
集に池にのぞきたる松に藤かゝれり○かいまみは

古事記に（鵜葺草葺不合命誕生の段に）竊伺を傳にかきまみと訓て垣
間見なり是をかいまみと云は音便にて後の事なり
とありさて此段帳の内よりも不レ令レ出かしづく事を
云り玉造小町壯衰書に被レ寵二華帳之裏一不レ歩二外
戸一被レ愛二朱簾之内一無レ行二傍門一長恨歌に楊家有レ
女初長成養二在深窓一人未レ識など有意にて此詩の
詞によりて箒木巻におやなどたちそひもてあがめ
ておひさきこもれる窓の内なるほどはたゞ片かど
を聞傳へて心をうごかす事もあめりと有は此をと
れるにもあらん歟○よばひ　は古事記に（八千矛神の御歌に）佐
用婆比に在たゝし用婆比にありがよはせとある傳
によばひは萬葉に結婚と書り靈異記には伉儷（不與波）
ともあり言の意は呼より出たらむ今世の語に婦を
よぶと云も此なり竹取物語にさるときよりなむよ
ばひとは云けると云るは殊更に興に作て云るなり
萬葉に夜延爲（ヨバヒス）と書るも正字にはあらずと云れたり
伊勢大和の物語にはことに多く出たる言也夜に隱
て這わたると云意にはにはあらぬを此は其意なり
と云なせるが興なり然に玉葛巻にけさう人は夜に
隱れたるをこそよばひとは云けれと見え新猿樂記

に十三娘者云々沂來有二夜這人一と書るは夜延と心得たる也さるは本は呼なれども夜延の意として附附しき事のさまなれは當時はやく然心得たるなるべし久方の雨と云とを催馬樂に謠訛てひぢかさ雨と云事となりて須磨巻などにも肱笠と云意と心得てひぢかさ雨とかぶりきてと取る同し類なり俊蔭巻に（とし蔭の事を）かたちありさますべて人にすぐれたれば我も〳〵と娘妹持たる人は婿にせむ婿にせむとよべど云々と有を一本にはのたまへどゝ有又伊勢物語に（三十二段）昔物云ける女に（四十五段）昔男ありけり人の娘のかしづくいかで此男に物いはむと思けり宇治拾遺（巻三）に小式部内侍に定頼中納言もの云わたりけり俊蔭巻に（俊蔭女の事を）帝春宮父にめす女にも御文賜へど耳にも聞いれず（仲忠に琴を勸むとて）左大将まさよりが勞たしと思ふ女の童侍る今夜の御祿には其を奉らむ云々春宮のたまはするにも出し立られぬ女とらせむとのたまふぞ有がたきとあり是は貴人なる故のたまふと云るにて皆同意なり又妻とふと云も同じ祝詞に語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止亞とある言どひ即物云と云意妻とふのとふ此言どひのとひにて全同意也（訪問の意にあらす）猶大和物語（百三段）に中興の近江介云々此女はになく傅イ皇子たち上達部よばひ給へど帝に奉らむとて合せざりけりと有などは憶に呼と云意と聞えたり

人のものともせぬ所にまどひありけどもなにのしるしあるべくもみえす家の人どもにものをだにいはんとていひかくれどもことゝもせず

人の平生ゐぬ所などにかよひわぶれどもあふべくもあらずと也竹取の家人に言葉などかけてはしわたさせんとすれども聞入だにせぬさまなるべし

〇頭注云人のものとも　此者とは物音の略語歟萬十四さぬ山にうつやをのとのとよめるも斧の音なりといへり其外第四に夜音之遠音第二に浪音乃などあまたよめり

解云〇上の條は先一わたり云て又此に委しく云文法なり〇ものともせぬ　此ものは物々しきなど云物にて物の數ともせぬ所と云事歟猶叶へりとも聞えず必誤字あるべし按にとはしの誤にて人の物みもせぬにて人も不居所と云事にもあらむか不用事するさまなり〇何の驗あるべくも見えず　は紅葉

賀茂に[illegible]時めけしきも恥かしういとほしければ何[illegible]しろしめしなくて過ゆくとあり○ことゝらせず　はとゝはたへを遺れるにて管も不[illegible]爲なるべしと吉田千足人[illegible]が云りしぞ宜しかるべき

あたりをはなれぬ君達夜をあかし日をくらす人おほかりけるおろかなる人はようなきありきはよしなかりけりとてこずなりにけり

とてもうけひくましき事に無用の歩行はよしなしと也　○頭注云おろかなる人　疎略なる人なり萬十八おろかにぞわればむもひしとよめる同意思といふにはあらす

解云〕あたりをはなれぬ公達夜を明し日をくらす人多かり　は小町壯衰書に君臣子孫爭婚姻於日夜一富貴主客競二伉儷於時辰一と有に倣たり人字は抄本に從て加へ諸本多かりけると有を古板本によりて削つ○戀慕ふ人々多かりけれど大方はとても叶はじと思切て退たるに此殘れる五人は甚々心深く思惑へる人々なり○おろか　はおほろかまたおろかなど云言を省たるなり萬葉六卷に聖武天皇[illegible]ますらをの行とふ道ぞ凡可爾おもひて行な丈夫の伴

記[illegible]に不二鬱而在一終意之心一鈎の下可レ老下に[illegible]心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ花宴卷に[illegible]かうやうの折にも先此君を光にし給へば帝もいかでかおろかにおぼさむなど有を考知べし大方に思人にて志深からず疎略なる人と云事なり○やうなき　は諸本ようと作れど無益の意なれば誤なりやくを音便にやうと云り益は呉音イヤク漢音エキなり呉音を用たるなり○ありき　は古事記に遊行と有を傳に阿流伎と訓べし萬葉に阿流久阿留伎などあり物語書にありくとのみ見えたればありくと云ぞ雅言の如く聞ゆめれど其は後の事なりと云れき此は即ありきと有ぞよきさて女の許などへ忍ありきするをたゞありきと云り催馬樂に「いかにせんやをしのかも鳥いでゝゆけば親はありくとさいなめど夜妻は定づやさきんだちや葵卷に葵上物氣の處に源君忍遊行の事を誰もくく思しなげくに稀ありきなど便なき頃なればなどあり○よしなし　は終なき由なしなどの意なるべけれど是も即[illegible]不用などの意と聞ゆ下[illegible]によしなく御方方にも渡給はず和泉式部集につれづれなるをりよ

しなし事におぼえし事ども書付しに宇治拾遺（巻八）に
（吉貴山命遊か段に）もとの國（信濃）へ歸らむと思けれどもよしなし
さる无佛世界のやうなる所へ歸らじなどあり
其中になほいひけるはいろこのみといはるゝ人五人（かぎりイ）
おもひやむ時なくよるひるきたりけり（イナシ）
猶ひたすらにいひよる人々はと也　○頭注云いろ
このみどいはるゝ　伊勢物語にあめの下のいろご
のみ源のいたると云々
解云○猶云ける　は健冬は（名高き色好なども云れば此も名の顯たる人々の意にて）
名を歟と云つれど猶とするかた穏なるべし○色好
といはるゝ限五人　古板本によりつ抄本には人五
人と有古今序に色好の家伊勢物語（三十九段）に源至と云
天下の色好なりなどあり○思やむ時なく夜晝來け
り　校本には夜晝なくとあり古板本に來たりけり
とあれと類本に從て削つ
その一人はいしつくりの（名ともイ又ノイニ其名ひさりはみイ）おん子一人はくらもちの（イナシ）
みイおん子（イナシ　右イ）一人は左大臣あべのみむらじ（みうしイ）○大納言一人は（一人はイ　イナシ）
大伴のみゆき○中納言一人はいそのかみ○もろたか（一人はイ　イナシ　のイまイ　だイ）
此人々也けり世の中におほかる人をだに少しもかた

ちよしときゝては見まほしうする人たちなりければ（人イ）
かくや姫をみまほしうして物もくはずおもひつゝ彼（しイ）
家に行てたゝずみありきけれどもかひあるべくもあ
らず文をかきてやれども返事もせずわびうたなどか（やれどもかへしもせずイ）
きてつかはすれどもかひなしとおもへども
見まほしうするとは得て相見むとおもふ也　物も
くはず　論語終日不レ食以思無レ益是等の文勢成べ
し　たゞずみ　寸歩（遊仙窟）　彳亍（文選）　わびうた　侘歌（懸歌也）
○頭注云その名とも　一本可レ随但し源氏繪合巻云
安倍の多がちゝのこがねをすてゝ火ねずみのおも
ひかた時に消たるもいとあへなしと云々いにしへ
の本には安倍の多と有なるべし　物も食す思ひつ
ゝ彼家にゆきたゝすみありき　萬十六いひはめど
うまくもあらずありけどもやすくもあらずあかね
さす君がこゝろしわすれかねつも　欽明紀云食
不レ甘レ味寢不レ安レ席　萬十六に立住（ダヽズミ）と書り訓義是
歟　わびうた　萬四つれもなくあるらむひとをか
たおもひにわれしおもへは惑つゝもあるか萬葉中
此惑の字所々ワビとよめり惑歌とも書べし常に困
窮する人をわび人といふにはかはるべし

解云○類本寫本には其名ども石作の御子くら持の御子云々と五人次々書つゞけて一人はと云事なしそれも宜かめれど此物語の文体すべて言を重て云る事多ければ此も一人は云々一人は云々と細に云るぞ宜しかるべく思はるゝ故今は抄本によりつさてあべのみむらしの下大納言一人は大伴のみゆき中納言一人は石上麻呂たかと有は錯置（ミタレ）たること疑なけれど例によりて改つ○石作のみこ　凡皇子の御名の例文德實錄卷一に先朝之制每ニ皇子生ニ以ニ乳母姓ー爲ニ之名ー焉故以ニ神野ー爲ニ天皇（嵯峨）諱ーと見えたり（猶皇子の御名の事委記傳三十ノ七丁に見ゆ）石作車持などは乳母の姓なるよしに取る也石作とせしは佛の石鉢を僞作れる事云むとて設たる名也姓氏錄に（左京神別）石作連火明命六世孫建眞利根命後也垂仁天皇御世奉ニ爲皇后日葉酸媛命ー作ニ石棺ー献レ之仍賜ニ姓石作大連公ー也とあり續後紀（十ノ三丁十五ノ一丁）に石作王と云見ゆ○くらもちの皇子は姓氏錄に（左京皇別）車持公上毛野朝臣同祖豐城入彥命八世孫射狹君之後也雄略天皇御世供ニ進乘輿ー仍賜ニ姓車持公ー　とあり續紀に車持朝臣の人多く見ゆ同姓歟車をクラと稱はルマの切ラとなればなりさて

くら持の皇子と云名を設たるはくらは闇の意に取て僞し給ふによりてくらと思依れるなるべし僞なきをあかき心とも闇き事なしとも云又博奕する者の道理ならぬ事するをくら事と云采に操を搆て人を謀をくら采と云とぞ○右大臣阿倍のみうしは諸本左大臣あべのみむらしとかき寫本には此に右大臣三字を脫して末には右大臣とあり繪合卷に引たるは阿倍のおほしとあり何も御主人（ミウシ）の誤也故今左を右にみむらしをみうしと改つ○大納言大伴のみゆき　は御行也○中納言石上のまろ句たゝ此人々なりけり　諸本もろたり此人々まろたりなど誤れり今改つ抑此三人の事田中道麻呂主云此人々續紀に見えたりみむらしは源氏物語におほしと有に從べしみむらしとは後人御主人を訓かねて心當に訓付たるなるべし石上のまろたかは一本にまろたゞと有ぞよき麻呂は名たゞは唯にて下に續く詞なりと口自（クチヅカラ）云れしを鈴木氏聞つとて語られき此說眞事に宜し書紀に持統天皇十年冬十月巳巳朔庚寅假賜ニ　正廣參位右大臣丹治眞人嶋資人一百二十人正廣肆大納言阿倍朝臣御主人大伴宿禰御行並八十

人直廣壹石上朝臣麻呂直廣貳藤原朝臣不比等並五十人ニとあるを見れば此三人の名を借たるなりけり○阿倍　は姓氏錄に（左京皇別）阿倍朝臣孝元天皇々子大彥命之後也と見え天武紀に十三年阿倍臣賜レ姓曰二朝臣一と有○みうしは御主人（ミウシ）なり其を源氏物語におほしと有ぬ猶誤也御は後世おほんおんなど呼故におうしおほしなど訓ひがめみむらしは御うしと書たるをおむらしなど寫し色々混亂してむの入たるに又うをらと誤たるもの也師云御主人は美宇志と訓へし古事記に丹波比古多々須美知能宇斯王（傳二十二）と有を書紀に道主とあり奴志は能宇志の切たるにて大人也此人の姓天武紀持統紀には布勢朝臣とありて持統天皇十年の條に始て阿倍朝臣とあり續紀には阿倍布勢朝臣御大人と書る處もあり布勢朝臣は姓氏錄に阿倍朝臣同祖とあれば此人の族もと布勢なりしを阿倍に改られしなるべしと云れき（阿字古事記書紀續紀姓氏錄等には阿とのみあり續後紀には安字を用て今は多く安をのみ用たり倍は皆倍とのみ有ども李部王記に安陪氏と作りとぞ）續紀に文武天皇四年八月丁卯阿倍朝臣御主人大伴宿禰御行並授二正廣參一褒二善政一也また大寶元年三月甲午授二大納言正廣參阿倍朝臣御主人正從二位中納言直廣壹石上朝臣麻呂正正三位一同日以二大納言正從二位阿倍朝臣御主人一爲二右大臣一中納言正正三位石上朝臣麻呂爲二大納言一同月壬寅賜二右大臣從二位阿倍朝臣御主人絁五百疋絲四百絇布五十段鍬一萬口鐵五萬斤備前備中但馬安藝國田二十町一同年七月壬辰勅先朝論レ功行レ封時賜二大伴連御行阿倍普勢臣御主人云々人十一各一百戶一（按に大伴宿禰御行は此年正月薨せられ連と有も違る樣なれば別人かと見ゆれど御主人も阿倍普勢臣とあれば別人にはあらず今は壬申年の功に隨て賜レ封なれば即壬申の記に然ある儘に此も記されたるなるべし）　同三年閏四月辛酉朔右大臣從二位阿朝臣御主人薨遣二正三位石上麻呂等一弔二賻之一難波朝左大臣倉梯麻呂之子也（難波以下十三字書紀通證に引たるを取つ）とあり當時左大臣は多治比島公なり御主人公は左大臣には昇られねば次下に右大臣と有に從て此も改（續紀卷三に御主人公男廣庭卷二十三に麻孫島麻呂みゆ）○大伴は姓氏錄に（左京神別）大伴宿禰高皇產靈尊五世孫天押日命之後也初天孫彥火瓊々杵尊神驛（アモリマシ）之降（トキ）也天押日命大來目部立二御前一降二于日向高千穗峯一然後以二大來目部一爲二天靫負部（アメノユゲヒベ）一天靫負之號起二於此一也雄略天皇御世以二天靫負一賜二大連公一奏曰衞レ門開闔之務於職已重若一身難堪望與二愚兒語一相伴奉レ衞二左右一勅依奏是大伴佐伯

二氏掌二左右門闘一之緒也と見え天武紀に大伴連佐伯連姓日二宿禰一とあり○みゆき　は御行なり續紀に大寶元年正月己丑大納言正廣參大伴宿禰御行薨帝甚悼二惜之一遣二直廣肆榎井朝臣倭麻呂等一監二護喪事一遣二直廣壹藤原朝臣不比等一就レ第宣レ詔贈二正廣貳右大臣一御行難波朝右大臣大紫長德之子也とあり○いそのかみ　は姓氏錄に（左京皇別）石上朝臣同饒速日命之後也（宇摩志麻治命十六世孫物部連公麻呂贈物部朝臣姓改賜石上朝臣姓）とあり師（紀傳）云此細書は後人の舊事記に從て書加へたるものなるべし連公と公字を添たるは例なき事にて舊事記のみ然あるなりさて物部連麻呂は天武紀に出たれば朝臣の姓を賜へるは信に此人（麻呂）の世なり又石上と改まりし事は書紀に見えざれども同卷の末又持統紀に石上朝臣麻呂と見え（大參朱鳥元年にも三年にも石上朝臣麻呂と見ゆるな四年には物部麻呂朝臣とあり）次に十八氏を擧たる處にも石上とあれば是も此人の世に改まりし事明けしさて石上は石上の神寶を物部氏の掌て氏を石上と改住地も即石上に住けむによれりと云れき○麻呂　は續紀に元正天皇養老元年三月癸卯左大臣正二位石上朝臣麻呂薨帝悼惜焉爲レ之罷レ朝詔遣二式部卿正三位長屋王左大辨從四位下多治比眞人三宅麻呂一就レ第弔賻之贈二從一位一右少辨從五位上上毛野朝臣廣人爲二太政官之使一式部少輔正五位下穗積朝臣老爲二五位已上之誄一兵部大輔正六位上當麻眞人東人爲二六位已下之誄一百姓追慕無レ不二痛惜一焉大臣泊瀨朝倉朝庭大連物部目之後難波朝衛部大華上宇麻乃之子也とあり中納言なりし事は上に出せる大寶元年三月甲午の紀に見えて其日御主人公は右大臣に麻呂公は大納言に昇進たり（是に從二中納言一とありさて慶雲元年に封一千一百七十戸をとあり此公の事猶あれども略きつ）○たゞ　は俗にタッタ一ッなど云也　抑此三人皆世に功績有て寵を蒙りかく高き官位に昇進給ひし人々なれば後世までも名を云傳たるによりて借用たるなるべしさるを此物語にてはいと嗚呼の人々と聞えたるかあぢきなく覺ゆれば殊更に委しく擧つるになむ○世中に云々　大かたの女の中にても少しよろしと聞ては見まほしうして色めきたる人々なるに殊に赫映姫は世に類なき美人なればまして甚く戀慕はるゝよしたり○見まほしう　は校本にえまほしうとあり○人々　は校本によりつ他本には人たち又人どもな

どあり○見まほしうして　し字は本居翁の說によりて補つ見まほしうするとある語勢なり枕冊子六巻に方弘が詞に　此殿上の墨筆は何者の偸み隱したるぞ飯酒ならばこそほしうして人の盜まめとあり此上にましてとある意なり校本には此もえまほしうとあり古事記に白菟段に汝命獲之(ナガミコトツエタマハム)萬葉二巻に「あはもよ安見子得たり人皆のえかてにすとふやすみこ得たりなど有て得まほしと云かた勝れるが如くなれども諸本みな見まほしうと作り見まほしと云もたゞに目に見る事にはあらで得と云も逢て云も同意にて逢ことなし古今戀三に安倍清行朝臣「つゝめども袖にとまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり小野小町「みるめなき我身をうらとしらねばやかれなで海士の足たゆく來る　師云みるめなき浦とは逢かたき身と云意なり　小世繼物語九十段に富藤公宮路氏に女に契給ふ詞にゆめ／＼親心あさく人あはすとも人見ることとすな云々なと猶多かり○物もくはず　は末天の羽衣の段に天皇嬪[illegible]にな嬪がらせ給ひて物も聞しめさずともあり萬葉十六に戀二夫君一歌「いひくへどうまくもあらずあるけども安くもあらず茜さす君が心し忘かねつも○む、ひつつ　は思侘つゝと云意也○わびうたなと書てや

れども　は抄本につかはすれども かく活例はかけろふの日記に是を始にて 又々しおこすれどもとあり とあるは遣と書たる本を无心者の假名に作て誤れるなり此は戀する男の方に付て云る詞なり遣字はやるつかはす又おこすと訓り字書に送也と註してやるつかはすは此方より彼方に物を送をいひおこすは彼方より此方に送を云り 猶つかはすの事下に云 へし古今夏歌の詞書に隣より常夏の花をわびにおこせたりければ惜て此歌をよみてつかはしける又戀四むかしおこせたる文どもを返すとてよみておくりけるなど有にて心得べし○かへしもせず　此詞諸本になきは必脱たるべければ補つ○かひなしと思へども　は幾度行ても目に見る事だになければとてもかひなき步行とは兼て思知とも徒には得も不レ居して戀しさに催されつゝあくがれ出て艱難辛苦をして通來るなり思へどもは來けりへ係れり

霜月しはすのふり（けイ）こほりみな月のてりはたゝくにもさはらずきたり

霜のふり氷のはるにもいとはず日てりし雷なるにもたえずくるとなり　霹靂（ハタヽク、カミナリ）頭注云霜月しはすは色葉集に霜しきりにふるゆえ霜月といふ

と云々漢にはふるく九月を霜月といひ我國には
十一月をいふ其月は異なれども其義は同しと東雅
に見えたりしはすと年終なりシとはトシの上略三
十年(ミソヂ)四十年(ヨソヂ)などいふヂはシの轉したるなりシは年
なる事知るべしハスとはハツなり我國の語に事の
終をハツといへは極月の字をシハスともよむなる
べしといへり萬三四極山(シハス)　みな月の　萬十一みな
月のつちさへさけててる日にも我袖ひめや君にあ
はすして童蒙抄云この月もろ〳〵の草木の日にや
けつくるによりみなつきといふ云々奥義抄云農の
ことどもみなしつきたる故みなしつきといふ一説
此月まことにあつくして水泉かれつきたる故みづ
なし月といふ云々

解云○降氷は十一月十二月ころ風あらく雪の降
にも又道を埋て歩行がたきにも氷れる夜の寒さに
もなり○照はたゝく　は本居翁の云く照霆なり萬
葉十九に光神鳴波多𡢽嬬(ヒカルカミナリハタヲトメ)とあるも冠辭より受たるは
鳴はたゝくと受たるなりと云れき字書に霆雷餘聲
也又霹靂也又雷也また或書に霹靂をハタヽガミナ
リと訓り字鏡に礔礰 石聲 比々呂久又奈留又 比々佐久又波多々久 霹靂 波多女久 とあ
るは雷聲にはあらねど聲を形容て波多と云る同

例也六月の地さへ割て照日の暑にも夕立して雷鳴
はたゝくにも不厭來たるなり降氷照霆は甚く省
略たる言なり宇治拾遺巻二に老女ハ詣ノ處ニ山上なる卒都婆に麓より峯
に登ほどさがしくはげしく道遠かりけるを雨降風
吹雷鳴しみ氷たるにも又暑く苦しき夏も一日もか
かず必上りて此卒都婆を見けりとあり此の趣に似
たり○さはらず來けり　は障とせずと云意也萬葉
四巻に「石上ふるとも雨にさはらめや妹があはむと
云てしものを貫之集に屏風に雨ふる田うゝる處「一時過ばさなへ
もいたく老ぬべし雨にも田子はさはらざりけり
三ノ句しはみの誤か　宇治拾遺巻三に平仲本院侍従か許に忍行たる處に侍従　かゝる雨に
はいかになどいへば是にさはらんはむげにあさき
ことにこそ云々などあり

此人々あるときは竹とりをよひいだしてむすめを我
にたべとふしをかみ手をすりのたまへはおのがな
さぬ子なれば心にもしたがへすとなん○いひて月日
をむくるかゝれはこの人々家にかへりて物○おもひ
○やむべくもあらずさりともつひにをとこあはせざ
らむやはとおもひてたのみをかけたりあながちにこ
ゝろざしをみえありく

おのがなさぬ子なれば　竹の中に拾ひて實の子にもあらねば心にまかせぬと也　あながちに　夜晝かよひて心ざしの深さをしひて蘇映姫に見られむとする也大和物語によろづに心さしみえければ云云強アナガチ　○頭注云神代紀汝所生兒必當ナサム男矣萬九父母がなしのまに〱はしむかふおとのみことは云々今俗にもなさぬ中などいへり　剛アナガチ　故同遊仙窟解云○喚いでゝ　かゝる處抄本には皆よびいだしてとやうに作り諸本にはいでゝとのみ有によれり下皆同じ俊蔭巻に琴どもを取出てとあり○手を摺のたまへど　は抄本にはのたまへばとあれど此言は月日を過すと云へ係れゝばどと有かた宜し夕霧巻に大將女二宮に強に逢むとし給ふな小少將止る處にあが君とかく押立て一向なる御心なつかはせ給ひそと手をする宇治拾遺十巻に東の男猿丸なさる處に猿手を摺てかなしめども更にゆるさずなど猶多かり手を摺足を摺は爲便方なく切なる時にするわざなり故物を乞願とき然すれば乞願ことゝを手を摺とも採手するとも云り○なさぬは不レ生ウマヌと云に同じ古事記に爲生成國土奈何クニウミナサムトオモフハイカニ藤原君巻に此養子ひとりなして隱ましにきなど有今もまゝ親子をなさぬ中と云り○心にもしたがはずなむ云々空蟬巻一本にしたがへずともあり異事なれど空蟬巻に君を戀給ふ處に強て思かへせど心にもしたがはず苦しきを云々思きらむとおもほす自の御心にも戀しさはしたがはずとなり　したがはずばは姫の上を翁が云也したがへずは不レ令レ隨にて翁自我事を云意なり何にても聞ゆべし○月日をすぐすは古板本に從つ抄本におくると有もあしからず古今雜上に「取とむる物にしあらねば年月をあはれあなうとすぐしつる哉宇治拾遺巻六初丁に後世をばとふらはで月日はかなく過さふらふ也又巻七の一丁に月日をおくれども有○かゝれば　は上件をさす言にて心を盡して行通ひ翁にこへども事成べくもあらねばと云意なり思止むと云へ係れり○物を思ひ　の下に佗てと云言漏たるが如く聞ゆれど上にも物もくはず思つゝとあれば元來なかりしなるべし○いのりをしくわむをたて　は抄の異本にねがひをたてと有はわろしぐわんは願字の音なり凡物語の詞にねがひをたつなど云ことをさ〱見あたらず悉皆字音にてグワンと云り土佐日記十二月二十二日の條に和泉國まで平にとねがひたつと有も本ぐわんと有けん

を窩説れるなるべし祈も願も同意なるを重たる言也りやめむとすれども　と云事脱けむ徭べしと本居翁の云おこされしに從つ赫映姫を得むとて種々に心を盡しかども承引ざれば今は爲便なくて戀る心を止給へと祈也萬葉三十に「いかにして忘るものを天地の神を祈ど我思ましぬまた三十「天地の神をも我は禱てき戀とふものはかつてやまずけり六帖第五に「つらき人忘なんとてはらふれば身そぐかひなく戀こそまされ猶伊勢物語六十四段の戀せじとみたらし河にせし御禊と云歌のくだり沙石集十一の二丁の熊野の某何者梨上總國の女の詣たるを見て係想して本宮權現に此意止給へと祈しなど同じ類ひなり
○男合せざらむやはは　大和物語百三十八段の故御息所の御姉つひに男せで亡給へると赫映姫と似たり其詞におやなど男あはせむと云けれど云々伊勢物語井筒の段におやなどあはする事もきかでなむ有ける
○たのみを懸たり　は神佛に祈てもとにもかくにも思の止まじければ又更に思やう翁さは云とも遂には男不合で止べきにあらずと自我心を思たのみて又彼家に行通ひて志の深きよしを見ゆるなり○

あながち　には鈴木氏云俗にムシヤウニと云意なり強字をあながちともしひてとも訓同意なり○心ざしを見えありく　此五人みな同樣によばひ給ふさま大和物語の菟原美女(ウバラヲトメ)の段のうばら男茅沼(チヌ)男に似たり其の詞に是も彼も云々萬に志を見えければ思侘ぬと有見えは見られと云事にて戀る心ざしの深きよしを姫の許に達ぬへく家人に見られんとするなり貴人の御前ゆるさるゝを目見えと云も始て見られおくを云に同し下御狩行幸の段に更に見ゆべくもあらずと有ありくは彼家に行通を云事上に云るが如し

これをみつけて翁かぐやひめにいふやう御身(わか子のイ)はほとけへんげ(くふ)の人とまうしながらこれ程(こゝらイの歟)○おほきさまでやしなひたてまつるこゝろざしおろかならず
かくや姫は化生の人なれば佛へんげとはいふなりおろかならずとはこれまでやしなひし心づかひおろそかならすとの事也疎(オロソカ)○頭注云狹衣に中納言のすけのつぼね狹衣をほむる詞にげに世の人の聞ゆらんやうにへんげのものにやとおほえ給ふ云々輕易(オロカ)天智紀

解云○是を見附て　は五人の人々の志の深きを翁見聞たればえうち捨おかで姫に告るなり○わが子の佛　は抄本に御身は佛と有は誤なるべしいたく尊み親みて我佛と云り下天の羽衣の段にもあが佛とあり俊蔭卷に太政大臣の小君の音に俊陰女の事をあが　佛　おろかになおぼしそ○變化の人　は同縁に仲忠琴を彈ふ處に變化の者なれば子の手母にも勝れり藤原君卷に正賴公の子達のことを世界の人なほ此族はたゞ人におはしまさずへむぐゐの者なり天女降て產給へるなりと聞え給ふと有此は變化人にはあれども男女のかたらひはすべき事と云へ係れり○こゝら大きさまで　は抄本にこれ程と有て下の傍にの字を補へり始其に從しを是程と云ことといかゞと本居翁も云おこされつれば猶按にこれ程とあるもこゝらと云言を聞つかずおぼえてさかしらに改つるなるべし又こゝらは必かゝるを誤たる歟とも思しを更に六帖うつほ等の證を得て本の宜しき事をしりぬ六帖第六に「程もなく散なむものを櫻花こゝら久にもまたせつる哉俊陰卷に右大將北山の室に至て母との種姓を問給ふ處に客人こゝら烈しき道に打越て獸の滿々たる山を尋たる心をばえおろかにはおぼさじ猶のたまへとせめ問給へば云々明石卷に須磨浦にて天變の處に何の報にかこゝら横さまなる浪風におぼゝれむなどあるは同例の言なりこゝらは常には物の員數の多きを云へど此ざまに云時は甚しき意と聞えたり

翁のまうさん(むイ)事きゝ給ひてんやといへはかくやひめ何事をか(句イ)のたまはん(むイ)ことは(をイ)うけたまはらさらむへんげの者にて侍けむ身ともしらずおやとこそおもひ奉れといふ(いへばイ)翁うれしくものたまふものかなといふおきなとし七十(ナヽソヂ)にあまりぬけふともあすともしらず此世の人は男は女にあふ事をす女は男にあふことをすイ

けふともあすともしらず　人命朝不レ待レ夕の事也

男は女に　倶舍論夜摩天纔抱成レ婬都史多天但由レ執レ手樂變化天唯相向笑他化自在天唯相視成レ婬隨レ彼諸天男女膝上童男童女欻然(タチマチニ)化生　又云南贍部州之人一生之中成レ婬無數かくやひめはへんげの人なれば此世の人はとことわる也大和物語に男あはせんといひけれど合(アフ)○頭注云あふことをすとは日本紀に婚(ミアハス)此義

解云○何事をか句　かはかはの意にてのたまはん事は何をかは辭まうさん皆悉したがひ侍るべしと

なり○へんげのものにて云々　は姫の返答なり變化者との給へども幼かりし間の事はしらず我は實に父母と思をるぞと也○いへば　は類本にしたがひつ諸本にはいふとあり○うれしくも云々　は翁の答にて姫の承引たるを悦なりさて次に翁の意を述るなり○なゝそぢ　此ちと言は一つ二つのつに同じくはたち(廿)もゝ(百)ちち(千)よろづ(萬)皆かぞふる言なり○今日とも　此のとも類本に從つ諸本なきもあしからず齡老ぬれば今日明日の程にも命死なん事もしらず甚はかなしと云事を昔も今も常云なれたる詞なれば甚く省て云へども能聞ゆるなり翁の在む限はと云て結べり下には翁の命今日明日ともしらずとあり落凹物語に(中納言の事を)老たまへれば夜中曉ともしらぬを又老おとろへて今日明日ともしらぬをなどあり○此世の人は　は赫映姬は竹中より出て尋常の人ならねば此ことわれるなるべし俱舍論に夜摩天纔抱成婬都史多天但由レ執レ手樂變化天唯相向笑他化自在天唯相視成レ婬隨レ彼諸天男女膝上童男童女欻然化生と有を抄に引り作者は此語を下に思る歟○女は男に逢ことをす　此九字抄の

本行にはなくて異本とて小字に作り男は云々と重なりて煩しきやうなれど諸本に有ぞよろしき古事記に伊邪那岐命云々伊邪那美命云々御合生レ子云々とあり凡て娶字を其意にメスアフなど訓り　そのゝちなん門○ひろくもなり侍るいかでさる事無て○おはせんかくやひめのいはくなむでうさる事かし侍らむといへば

源氏薄雲に門ひろげさせ給ひて一門も是より繁昌するといふ也　なむでう　何條也なにとてさやうの事をせんと也　○頭注云なむでう　狹衣に少將とのゝ御めのとの家かりてしはしわたし奉らむなんでうことか侍らんなと云々何事かなといふかことし

解云○門もひろく成はべる　はも字諸本ひろくの下にあり類本によりて改つ門は氏といはんが如く一家一門の子孫繁昌を云り續紀の詔(第二十八)に明久淸岐心以天仕奉乎氏々門方絶多麻方須治賜止云々また一詔(三十)に先祖乃門毛滅繼毛絶あて宮卷に(源侍從あて宮の東宮に參給ふを戀惑ふ時父大臣の詞に)是は成出ぬべし門をも廣げ氏をも持べきしもかくあればいみじくなん薄雲卷に(源君秋好中宮に明石姫君の事なの給ふ詞に)數な

らぬ幼き人の侍るおひさきいと侍遠なりやかたじけなくとも猶此門ひろげさせ給ひて侍らず成なん後にも數まへさせ給へなど聞え給ふと有源氏の一門繁昌の事を思すなり○いかでかさる事なくてはおはしまさむ　は類本に從てか字は字は今補つ諸本おはせむと有もわろし翁男女の交合をなし子孫繁昌する是人間の定法なれば然やうに爲べしと云勸るなり變化の人と申ながらと云る結なり○なでふ　は何と云といふ言を音便に切て云るなり此にては何とてと云意なり椎本卷に八宮薨給へる左姫君たちゆかしみ給ふ處に亡人に成給へらむ御さまかたちをだに今一度見奉らんとおぼしのたまへどと有に阿者利の答になてふさる事かは侍べきとあり是も同意なり

へんげの人といふともをんなのみもちたまへりおきなのあらんかぎりはかうてもいませかし此人々のとしつきをへてかうのみいましつゝのたまふ事をおもひさだめてひとり／＼にあひ給へやといへは

かうても　斯ても也翁のいけらん内はかくてもやみ給ひねのち／＼は心ざしふかき人をえらびてあひ給へと也　ひとり／＼　とは一人の事也大和物語にひとり／＼にあひなは今一人かおもひは絶なんと云々　○頭注云うつほ菊の宴の巻に「われひとり鶴と松とを見るよりもひとり／＼は君にとぞおもふ　古今におもふとちひとり／＼が戀しなばともよめり

解云○かうても　は如此てもを音便に云るなり○いまずかりなむかし　は抄本にいませかしと有いますかるはいまぞかるとも云て在字をよめり伊勢物語三十八段に昔西院帝とまうす帝おはしましけり其帝の皇女に崇子とまうすいまぞかりけり又九十六段堀川のおほいまうち君と申いまぞかりけりと有おはしますと云同意にていさゝか輕方につかひたり若紫巻に尼君紫上のいはけなきを歎く詞にたゞ今おのれ見捨奉らばいかで世におはせんとすらむとていみじくなくと有に似たり女は獨在べきにあらず翁の在むほどは此てもいまさめ翁亡なりて獨にては在まじければ男を定給へと也○ひとり／＼に　は師記傳山佐知海佐知の下に云一人々々は幾人も有中に何にまれ一人と云るにて其餘の人に對へて云り古事記に山佐知も己が佐々知々と重ね云は凡て物を對へて云時の古言の格にて

山佐知の方は海佐知に對へ海佐知の方は山佐知に對へて云るなりさる例は萬葉巻九長歌に遠津國黄泉の界に蔓つたの各々向々天雲の別し往ばこは弟の死をよめるにて只一人の事なるを向々と重ね云る是世に留れる吾身に對へて也又古今戀歌に思どち一人一人か戀死ば誰によそへて藤衣きむ 此は思交せる男と女との中に何方にまれ一人が若戀死ばと云にて今一人にむかへ云り 今世の心もて思へば一人々々は一人毎にと云か如く聞ゆれどもさにあらずと猶委云れき六帖源氏其外の物語の類に多く沙石集にも見えたる皆同意なり大和物語の菟原美女の段にひとり／＼にあひなば今一人が思は絶なむとあるは殊に此と同しさまなり○逢たてまつり給ひねといへば は抄本に逢給へやとあり

かくやひめいはくよくもあらぬかたちをふかき心もしらてあだ心つきなばのちくやしき事もあるべきをとおもふはかりなり世のかしこき人なりともふかきこゝろざしをしらではあひがたしとなむおもふといふ

他心 うるはしくもあらぬかたちにて人のこゝろをもしらすあひ後悔する事あらん世にときめく人なりともこゝろざししらずはあはじと也 ○眞注云あたといふアは發語にて他なり日本紀には仇適をアダメクとよみ萬葉には異手枕と書り かしこき人なりとも 萬四「いせの海磯もとゞろによするなみかしこき人に戀やわたらむ

解云○よくもあらぬかたちを は卑下の詞なり美麗にもあらぬ容貌なる我を戀慕ひ給ふ人々なれは實に深き御心はあらじ今我心輕く承引て後男の心變轉て悔れんとき悔すべき故に能々深き眞實心なりと知はてし上ならでは得あはじとなり詞を甚く略たる文也萬葉巻二に「梓弓引かばまに／＼よらめども後の心を知がてぬかもとある此に合へり○あだ は轉やすく變やすきを云り 師の玉霰可考 ○世の は其事を剛く云言なり世のひがもの世の好物など云り○かしこき人 は高貴の人にて恐るべき人と云意也縱貴人にもあれ其を恐て逢べきにあらず唯志深く眞實あらむ人ならではとなり

おきないはく思ひのごとくものたまふかなそも／＼いかやうなるこゝろざしあらん人にかあはんとおぼすかばかりこゝろざしおろかならぬ人々にこそあめ

れ
我おもふにひとしくおはすさりながら此人々こゝろざしおろそかならぬにと也　疎　曾毛曾毛續日本紀
〇頭注云おろか　萬十八「おろかにぞわれは思ひしおふのうらのありそのめぐり見れどあかずけり此おろかにぞとあるもおろそかにぞといふ也小大君集つゝみの大宮に物きこえけるに四月に郭公の聲をふたりながら聞たりけるほどにおろかになり給ひにければ云々　そも〳〵　抑光仁紀　字書反語辭又然之辭又發語辭　大和物語に大江の玉淵が娘に亭子院のとはせ給ふことばにそも〳〵まことかなととはせ給ふ云々
解云〇思の如くも　は我思の如くなり翁も兼て然思居たり其如く宣たまひける哉とて姫の詞を諾なひ喜ぶさま也〇そも〳〵　は鈴木氏云く論語に夫子至於是邦也必聞其政求之與抑與之與と有に同じく按て與す義の字を以てそも〳〵とは訓なりと云れき按に俗言にソレハマアとて其意をとひ又文の中間に言立て其事を語る始に云りと聞ゆ貫之集蝶通の歌の序に神おはしげもなしやそも〳〵何の神とか申ととへば土佐日紀正月七日の條に抑いかゞ讀だるなど云るを思べし〇かばかり　は戀慕ふ五人の如此ばかり寒暑も不厭通來るを見て疎略ならぬにこそ見ゆれ此上に志の深と云むは如何樣の事ぞと翁のあやしみ問へるなり

かぐやひめのいはくかばかりのふかきをか見むといはんいさゝかのこと也人のこゝろざしひとしかんなりいかてか中におとりまさりはしらむ五人の〇中にゆかしきものを見せ給へらんに御こゝろざしまさりたりとてつかうまつらんとそのおはすらん人々にまうし給へといふよき事なりとうけつ

若箇遊仙窟　かばかりとはいかばかり也　聊　ひとしかんなり　とは齊きと也　優劣事　ゆかしきものとはめづらしき物の事也しろきからすをよめる歌に「たぐひなく世におもしろき鳥なればゆかしからずとたれかおもはん　そのおはすらん人　とは五人の人々也　背同　承同　諾　〇頭注云いさゝか　萬十九「いさゝかにおもひて來しを田子の浦に咲る藤見て一夜へぬべし　輕小日本紀　つかふまつる　從身履中紀　ゆかしき　古事記應神天皇段云成人是

無悒（ユルシャ）云々

解云○なにばかり　は古板本によりつ抄本にかばかりと有はいかばかりと作しをい字を寫漏せしなるべし末摘花巻に（源君琴を聞給ふ段に）何ばかりのふかき手ならねど物の音がら筋ことなるものなれば云々とあり○人の志ひとしかなり云々　は翁の云る詞なるべし何ばかり云々いさゝかの事なりと云るは姫は既に此事思依つる由なれば何でか勝劣はしらむと云る殊更めきて聞えたりさて此の文彼苑（ウバラ）原をとめの段に志の勝らんにこそあはめと思ふに志の程たゞ同様也と有て遂に鳥を射ことに思依しとゆかしき物見むと云ると似たり○五人の人　の諸本人のと云言なきは脱せるなるべし寫本に從て加へつ○ゆかしき物　は見まほしき由也枕冊子にとくゆかしき物人の子生たる云々思ふ人のおこせたる文云々箒木巻（品定の段）に近き御厨子なる色々の紙なる文とも引出て中將わりなくゆかしがればさりぬべき少しは見せん片はなるべきもこそと許し給はねば其打解一傍（補）しと思されむこそゆかしけれ○御志勝たりとて云々　は皆等しき御志なれば一方には定べからねばゆかしき物聞ひたらむに宗侍らむとなり○よき事也云々　は翁の答なり諾たる由の答背かくざまに云り枕冊子に（大進成昌が家に皇居行啓の時成昌清少納言の寐たる所に來たる事を語る處に）消息をするによかなりと諾かいはむ宇治拾遺巻四に（女の宿借處に）今夜ばかり宿させ給ひなんやと云はよく侍なん入ておはせと云

口くるゝほどれいのあつまりぬ人々あるひはふえをふき或は歌をうたひ或はしやうかをしあるひはうそをふきあふぎをならしなどするに

れいのあつまりぬ　とは人々例のごとく來るなり　しやうか　唱歌歟　嘯（ウソフク）口ふえの事也嘯旨と云ふみありうそふきの事をくはしく書たり今はから國にもうそふきの法しる人なしとぞ　扇をならし　とは扇の骨を爪にて彈きなどしおほめかす也　○頭注云あるひは笛をふき或はうたをうたひ　伊勢物語に此をとこは人の國より夜ごとに來つゝ笛をいと面白く吹て聲はをかしくてあはれにそうたひける云々　扇をならし　とは扇をたかくつかひならし通ひ來たる由をしらす也今物語云さつまの守忠度と云人ありある宮はらの女房ともの中さんとて

つぼねのうへさまにてためらひけるがことの外夜の更ければ扇をはら〳〵とつかひならして聞しらせければ云々　うそをふき　源氏紅梅にかはふえふつゝかになれたる聲して云々此かはふえといふに同し弘安源氏論義に天暦の比の記云宴會の時諸卿入興のあまりかはふえをふくといへり同日の小一條左大臣記に諸卿うそをふくと有と云々

解云○例のあつまりぬ人々　は抄本によりつ人々二字例の上にある本もあり類本にはなし○或は　は文どもに多くあるはと訓れど此は下にあるひはと假名にかけるに從て訓つ○しやうがをし　は笛の譜を謡を唱歌と云り下若菜巻に夕霧拍子とりてさうがし給ふ院も時々扇打ならしてくはへ給ふ著聞集（巻六）に大納言宗俊卿草子筥の蓋を拍子に打て萬秋樂の序を唱歌にせられけり○うそをふき　口笛を吹なり神代紀（海神宮の祭一書）に天孫宜下在二海濱一以作二風招一とあるを或註に風招即嘯也毛詩注曰嘯蹙レ口而出レ聲とあり紅梅巻に（按察大納言折二梅花一處に）かはぶえふつゝかに馴たる聲してと有も同じく口笛なり源中最秘抄に天慶五年正月七日引二青馬一酒盃十一巡王卿有二酒氣一吹二皮笛一今日李部王紀吹レ嘯之由有レ之また源氏論義に天暦の比の記に宴會の時諸卿入興の餘皮笛を吹と云り同日の小一條左大臣の記に諸卿嘯を吹と云り亦文範卿節會の時皮笛を吹諸人嘲弄すと云るも同じ事にやとあり此文範卿の事續古事談（巻下）には嘯を吹ければとあるにて宇曾も皮笛も同事なるを知べし○扇をならし　は若紫巻に頭中將懐より笛取出てふきすまし給ふ辨の君扇をはかなう打鳴して豊原の寺の西なるやとうたふとあり上に笛吹唱歌しなど有に思へば此も扇子もて拍子を取て打ならすなめり猶扇をならす事種々有べし著聞集好色部に（女房の局に男來る處に）此に在と知られむとて扇のかなめをならして遣ひければ又今物語にも（十訓抄）に薩摩守忠度ある宮ばらの女房に物申さむとて局の上にてためらひけるが殊の外夜の更ければ扇をはら〳〵と遣鳴して聞しらせければ又狹衣上一に（狹衣君菖蒲葺な見給ふ處に）ちひさくあやしき家共にも只一筋づゝ葺渡を憐み給ひつゝ扇を笛に吹給へる夕ばへ云々（此は今世扇の先に紙を當て吹ならす音チヤルメラと云笛の如し然ども此は然にはあらで扇を笛の如く横たへ笛吹まねをし給ふなるべし）などあり是ら物の音もて姫を誘出さんとするさまにて今も係

想する女の門に立て手を拍鼠啼などする古今かはる事なし

翁出ていはくかたじけなく〇きたなげなる(もイ)ところにとし月をへてものしたまふ事ありかたく(きはまりたるイ)かしこまる(りイ)とまうす

汚穢日本紀 辱畏 ○頭注云かたじけなく とは彼を崇己を嫌の詞舒明紀に歡愧をカタジケナガルと讀り きたなし とは無レ殷の義と云り分明ならぬ意歟又景行紀に穢陋をキタナシとも見えたり

解云○かたじけなくも はも字類本によりて補つ

舒明紀に四年十月唐國使人高表仁等到二難波津一云々曰風寒之日餝二整船艘一以賜レ迎之歡愧貴人の賤き我を惠給ふは君の恥給ふべき事なるに其をも不レ顧めぐみ給ふを歡意にて己ゆゑに君を辱しむる義なり故に君を崇て己を謙意となれり桐壺卷にいとはしたなき事おほかれどかたじけなき御心ばへの類なきを頼にて云々と有⊙きたなげなる所は古事記に伊那志許米志許米岐穢國書紀に汚穢を枳多儺枳とよめり萬葉四卷にいかならむ時にか妹が葎生の穢屋戸爾入まさむかもとあり○きはまりたるかしこまりとまうす 抄本にはありがたくかしこまると有り宇治拾遺六卷に孔子に逢て臾のいはくきはまりてはかなき人にこそ又迷神に惑されし條に我は左京の官人也九條にて止べきにかうまで來つらむきはまりて由なしと有恐多き限と云意なり此門に立給ふ人皆貴人なれば不承引を甚く恐惶よしなり此にて詞を止て次に姫に談合たる由を演るなり○さて次の條いたく詞の脫たるを補つる理を行中に小書して喩しつ

おきなのいのちけふあすともしらぬをかくのたまふ君達にもよくおもひさだめてつかうまつれとまうす(せイ)(ばイふかき御心をしらではとなむまうすさ中もイナシ)もことわりなりいつれもおとりまさりおはしまさねば○御こゝろさしのほどは(ゆかしき物みせ給へらむに)見ゆべしつかうまつらん(むイ)事はそれになん(むイ)定むべき(べげイ)といへ(ふイ)はこれよき事なり人のうらみもあるまじといふ

いづれもおとりまさり 是より赫映姫の言葉を翁の告る也 それになん とはゆかしき物見せ給へと云し事也 是よき事也 是より翁が言葉也

解云○翁のいのち云々つかうまつれ 是は翁姫に夫を設べき事を勸たるに姫か答たる樣を五人に告

る處なれば次の申もことわりなりといふ言聞えず故に「と申せば」とありて次に先翁に答たる姫の詞再度出ずべきなり故いま申せばの三字補つ「ふかき御心をしらではとなむまうすさ申すもことわり也」と十七字あるべし申字次の行に有に移て一行を漏せし也さ申もことはなりと云は翁が意なり「いづれおとりまさりおはしまさねば此下又漏せり此にも再たび「ゆかしき物見せ給へらむに」と十二字ありて御心ざしのほどは見ゆべしと續くべきなり「つかうまつらむことはそれになむ定べき」といふ是迄姫の云し言を五人の人々に翁が傳ふる也り○此段は翁此五人のことを赫映姫に告しに姫の心様を五人に對て告述なりさて姫に告たる事は上に翁の申さむこと聞給てんやと云より此世の人は女は男に合事をす云々深き志をしらでは云々ゆかしき物見せ給へらむに云々翁よき事なりとうけつと有を云なれば此文再度云述べき處なり故右の如く前件を詞を省略て出したる物なるべし然を甚く寫脱漏したれば解得ざりしを此補ては熟く分別たり今補つるは説明を加へつ其餘は諸本の儘なり○定べきといふ　は諸本に此

をいへば下なるをいふと有は錯置たるなるべしさて此五人並貴人なるに翁直に對て云言なれば云と云ては无禮ければ必申侍ると有べき處なれば然よむべし上に世界の男あてなるも賤しきも云々は甚麤き事なれは敬言は无ても有ぬへし色好と云るゝ限り人と有よりは皇子を始大臣納言にて貴人の限と定りぬればかしこみて來給ひ文ふ道給など云べきを敬言なく只手を摺のたまへごと有のみ也以上は地の詞なり又此人々云々かうのみいましつつのたまふ事を云々よ有は翁が姫に言にて少異なり翁出て云て云云年月を經て物し給ふ事云々より前件へ係ては直に五人のうま人に申言なればかくのだまふ君だちにも云々勝劣おはしまされば云々など少も无禮げなる事なしされば此も必申はべるさ有べき事なり凡て地の文はなめしく書たれとも對ては恐みて云り正しき文なり○是よき事なり　は翁が詞也○いへは　は地の文也上に云る如く此はいふと諸本に有此は姫の詞を翁か諸たる山を五人に告るなりいふといへはと不取更(トリカヘズ)では御志の程は見ゆべしと云事も翁の詞と聞えよき事なりと云事五人の詞と聞えて解べからずさて此もマウセバと不云ではなめし地の言ゆゑ左に訓を改つ五人の人々もよき事なりといへばおきないりていふ入てかくや姫に右の返事をいふ也　○頭注云五人の人々もよき事なりと　大和物語に此川にうきて侍る水鳥をい給へそれをいあて給ふらん人に奉らんといふ時いどよき事也といひてといへるに同し

解云○よき事なりと云へば　はノタマヘバと有べしされと文の地なれは難はなし○入ていふ　は翁入て五人の諾たるよしを姫に告云なり

かくやひめ石つくりのみこには○（天竺にイ）佛の御石のはちといふ物ありそれをとりてたまへといふくらもちのみこには東の海にほうらいといふ山あるなり（あンなり）それにしろかねをねとしこがねをくきとし白き玉（しらたまイ）をみとしてたてる木ありそれ一枝をりてたまはらん（むイ）といふ今ひとりにはもろこしにあるひねずみの皮ぎぬ（かはごろもイ）を給へ大伴大納言にはたつのくびに五色にひかる玉ありそれをとりてたまへいそのかみの中納言にはつはくらめのもたるこやす貝○（ひとつイ）とりて給へといふ

契沖河社にいはく詩曰由㆑醉之言俾㆑出㆓童羖㆒注曰童羖無㆑角之羖羊必無之物也史記封禪書曰齊桓公既覇會㆓諸侯於葵丘㆒而欲㆓封禪㆒管仲曰云々於㆑是管仲睹㆓桓公不㆒㆑可㆓窮以㆑辭因設之以㆑事曰古之封禪鄗上之黍北里之禾（索隱曰韋昭曰言以㆓不㆑可㆑得之物㆒）所㆓以爲㆑盛江淮之間一茅三脊所㆓以爲㆑籍也東海致㆓比目之魚㆒西海致㆓比翼之鳥㆒云々於㆑是桓公乃止又刺客傳荊軻

黄索隱曰燕丹求㆑歸秦王曰烏頭白馬生㆑角乃許耳丹乃仰㆑天歎烏頭即白馬亦生㆑角風俗通及論衡皆有㆓此說㆒仍云厩門木馬生㆓肉足㆒也これらのるゐなるべし　○頭注云舊本今昔物語皆心をつくして云せけるに女初には空に鳴る雷を捕へて將來れ其時に會はんと云けり次には優曇華と云花ありそれを取て來らん時に會はんと云けり後には不打に鳴る鼓と云ものありそれを取て得させたらんをりには自ら聞えんなど云て會ざりければ云々かくや姫の求るものは今とことなり

解云○天竺に　諸本になきを校本に從て補つ師（玉勝間卷四）に云源氏物語に佛の御迦陵頻迦の聲御一腹宮の御侍從のめのとなとある是らの御てふ言今世の心にて思へば佛の迦陵頻迦の御聲など云べきに置處更て聞ゆと云れき此も此定にて佛の石の御鉢と云へく聞ゆ河社に佛の御石鉢は西域記に波剌斯國云云釋迦佛鉢在㆓此王宮㆒また南山住持感應傳に世尊初成道時四天王奉㆓佛石鉢㆒唯世尊得㆑用餘人不㆑能㆑持如來滅後安㆓鷲山㆒與㆓白毫光㆒共爲㆓利益㆒四天王おのく一ッの石鉢を奉らるゝを佛四を重て按（オシ）て

とし給へる鉢也と有抄に續博物志に佛樓沙國有佛鉢受三二升許青玉也或曰青石或曰雜色而黑多四際分明厚可一分貧人以少華投中即滿富人以多華正復百千萬斛終不滿或曰在月支國又水經注に西域有佛鉢今猶存其色青紺而光以上和名抄(僧房具)に四聲字苑云鉢(博末反俗云波智)學佛道者食器也(猶別記に出)○といふは姫が翁に告る言なり○蓬萊山の事は列子に渤海之東有五山岱輿員嶠方壺瀛州蓬萊也其上臺觀皆金玉也珠玕之樹叢生而五山之根無所連著隨潮波上下不得暫峙焉帝恐流於西極使巨鼇十五擧首而戴之迭爲三番六萬歲一交焉國讓卷に左大將殿大なる海形(脱乎)をして蓬萊の山の下の龜の腹にはかぐはしきるゐを入たり山は黑方侍從くのゑ香合たき物共を土にて造玉の枝並立たりと有を抄に引たり○玉枝　は蓬萊のにはあらねど淵鑑類函に洞冥記云大初三年東方朔從西那國還得風聲木十枚實如細珠風吹枝如玉聲有武事則金革之響有文事則琴瑟之響上以枝賜大臣人有病則枝汗將死則枝折里語曰年末半枝不汗此木五千年一濕萬歲一枯緒雲之世生阿閣間

也と有は玉枝に似たりと秦翁云おこされき○是は右大臣安倍のみうし也此に名を出さで今ひとりと云るおもしろし○火鼠の皮ごろもゑは諸本かはきぬとも皮ころもとも有何にてもよかめれど歌にかはころもと有に從て一方に定つ猶六帖の皮ころもの題に「とこしへに夏冬ゆけや裘扇放たず山に住人(萬葉卷九詠仙人形歌なり)萬葉十六に彌彥の神のふもとに今日らもか鹿の伏らむ皮服著而角附なから(是は何にても宜き中に猶カハコロモと云ぞ勝れる)又卷二日並知命を傷る歌毛許呂裳遠春冬かたまけく幸ましゝ宇陀の大野はおもほえむかも字鏡に毦(布也加波巳呂毛又彌乃)和名抄に說文云裘(音求和名加波古路毛俗云加波岐沼)皮衣也未摘花卷にはふるきの皮きぬ十訓抄に(右衞門督伊涉卿父兼明親王の玩給ひし)苑裘賦をうさきのかはころもと云て笑れし事あり凡皮ころもと云る方多くきこゆめり○火鼠の事は和名抄に神異記云火鼠(和名比禰須三)取其毛織爲布若汚以火燒之更令清潔以上河社に㒵錄に云く日南北景縣有火鼠取毛爲布燒之而精名火浣布(㒵錄は張勃撰三十卷今皇國に無き書なりとそ)搜神記に云く崑崙之墟有炎火之山山上有鳥獸草木皆生於炎火之中故有火澣布非此山草木之皮枲則其鳥獸之毛也漢世西域

貢獻此布中間久絶至魏初時人疑其無有文帝以爲火性酷烈無含生之氣著之典論明其不然之事絶智者聽（中略）刊百十廟門之外及太學與石經並以永示來世至是西域使人獻火浣布袈裟於是刊滅此論（以上抄）に本草綱目に時珍曰火鼠出西域及南海火州其山有野火春夏生秋冬死鼠産其中甚大其毛及草木之皮皆可織布汚則燒之即潔名火浣布（以上）齊東野語に昔温陵有海商漏舶搜其橐中得火鼠布一疋遂拘置郡帑凡太守好事者必割少許歸以爲玩外大父常守郡亦得尺許余嘗親見之色微白類木綿絲縷蒙茸若蝶粉蜂黄然每洗以油膩投之熾火中移刻布與火同色然後取出則潔白如雪了無所損後爲人強取以去（以上）華夷珍玩考に岑樓愼氏曰予聞昆斎傳火浣布與蕉麻無異而色微青黑因憶少年園中所見火浣布無以異（以上抄）太平御覽に晉書を引て云く外國進火浣布晉武帝爲衫衣來幸石崇家崇家奴五十人皆衣火浣布衫帝大慙（是は今の晉書には無とこ）秦（嘗寫へ送らる）抑上に引る諸書（猶此外にもおほかれどもたゞ同様なれは略つ）皆火鼠の毛を以て織たる布也此は其布にはあらで其皮ながらの衣と云事なれば殊に得かたき由なるべし○龍は和名抄に文字集略云龍（力鐘反和名太都）四足五采甚有神靈者也白虎通云鱗蟲三百六十而龍爲之長也と見ゆ○首の玉とは荘子雜篇に荘子曰河上有家貧恃緯蕭而食者其子没於淵得千金之珠其父謂其子曰取石來鍛之夫千金之珠必在九重之淵而驪龍頷下子能得珠者必遭其睡也使驪龍而寤子尚奚微之有哉（以上）沙石集（卷七）に恒河の邊に梵志ありて梵行を修す河中より大蛇出て常には身にまとはれて馴親しむいぶせくむつかしく覺て佛に歎申に佛のたまはく彼蛇は玉（たま）賣りやと問給ふ首に持て侍ると申すさらば其玉をこへと仰らるさて梵志其玉をこひければ汝は少欲知足なる故にこそなつかしく思ひてむつみつれ我玉は只一もてる寶なり與ふべからずとて其後は不来とあり似たる事なれは引つ猶下に云へし○五色は字音に唱へし○つばくらめは和名抄に爾雅集註云鷰（和名豆波久良米）白脰小鳥也と有字鏡には種々の字を出して皆つばひらこと訓り（猶花野冊子に委く云つ）○子安貝は子安の貝との字ある本は惡し既に名目と成てはのと不云例なる事記傳の八尋殿十握

鯛などの下に師の説たるを可レ考今は抄本の充に
よりつ抑子安貝と云物は今世にも有て産婦に握持
しむれば産安しと云へり是机上に置て紙を揩て光
澤を出すによし貝光祿と云物なり此は鷄の持たる
其貝を得むと云歟河社に史記三代世表第一に云く
詩傳曰湯之先爲レ契無レ父而生契母與ニ姉妹一浴ニ玄
丘水一有レ燕銜レ卵墮レ之契母得故含レ之誤呑レ之即生レ
契（索隱曰按史所レ引出ニ詩緯一後曰詩緯曰殷本紀云玄鳥翔レ水遺レ卵娀簡狄取而呑レ之）契生而賢堯立
爲ニ司徒一姓レ之曰ニ子氏一 子者茲シ々ヘ益大也詩人美
而頌レ之曰ニ殷社一上（詩云）芒々天命ニ玄鳥一降而生レ商々
者質殷號也是は燕の卵が子胤に成たるにて（かひはかひこの意）
（かくも思へど然あらむにこ持たゝと云事不レ合）燕の産の事には由あるやうな
れど猶わ遠しまた三才圖會に石燕出ニ零陵郡一形似
蛸而小或云生ニ山洞中一因ニ雷雨一則飛出墮ニ於沙上一
而化爲レ石今人以催レ生令ニ婦産兩手各握ニ一枚須臾
子即下採無レ時と有は鷲の石に化たるにて握持て
産の安きは似たれとも貝にはあらずまた西京雜記
に元后在レ家嘗有ニ白燕一含ニ白石大如レ指墜ニ后績筐
中一后取レ之石自剖爲レ二其中有レ文曰母ニ天地一后乃
合レ之遂復還合乃寶錄焉後爲ニ皇后一云々是は燕の

持たる物なる事は似たれと貝にあらす（以上は河社又抄に引たるを取て大秀論を加つ）又酉陽雜俎に段成式郡從有レ言少時嘗毀ニ鳥
巢一得ニ一黑石一大如ニ雀卵一圓滑可レ愛後偶置ニ醋器中一（或人）
忽覺ニ石動一徐之見有ニ四足一如レ綖擧レ之足亦隨縮（是酢貝なるべけれはこやは衍字にて只酢貝ならん歟と云れと用かたし）是は鳥巢中に物有事は
似たれと由なし本草綱目に時珍曰云々人見ニ白燕一
主レ生ニ貴女一故燕名ニ天女一なとあれば燕は産の事
に故有事多し正しく當れる事はなけれど右等の書
どもを思て子安貝と云物もあれば引合て作れるな
るべし○ひとつ（ともイ）と云事（めイ）抄本にはなし
翁かたき事○にこそあなれ此國にある物にもあらず
かくかたき事をはいかにまうさんといふかくやひめ
何かかたからんと云ば翁ともあれ（まれイ）かくもあれ（まれイ）まうさ
んとて出てかくなん聞ゆるやうに見○給へ（せ歟）といへは
なにかかたからん 難題と云ほどの事にもあらず
いとやすきそと也 かくなん かやうに申そと聞
ゆる樣にゆかしきものをもちきてあひたまへと也
解云○かたき事ともにこそあめれはともと云言
寫本に從て加つあめれは諸本あなれと有を校本に
從て改つかたき事は俗にデキニクイコトと云るに

同し河杜に詩に云く由レ醉之言俾レ出ニ童羖一注云童羖無レ角之羖羊必無之物也（箋ニ羖羊之性牝牡有レ角）史記封禪書に齊桓公旣ニ覇テ會ニ諸侯於葵丘一而欲ニ封禪一管仲曰云々於レ是管仲睹ニ桓公不一レ可ニ窮以一レ辭因設之以レ事曰古之封禪鄗上之黍北里之禾（索隱云韋昭曰設以ニ不レ可レ得ノ物一）所ニ以爲一レ盛江淮之間一茅三脊所ニ以爲一レ藉也東海致ニ比目之魚一西海致ニ比翼之鳥一云々於レ是桓公乃止（以上）刺客傳荊軻賛に索隱云燕丹求レ歸秦王曰烏頭白馬生レ角乃許耳丹乃仰レ天歎烏頭即白馬亦生レ角風俗通及論衡皆有ニ此說一仍云廐門木馬生ニ肉足一也とあり是らの諸書の意をとれりと見ゆ今昔物語には雷また優曇華また不レ鼓鳴鼓を得むと云り　○いかに申さむと云は何にしても不レ可レ得難題なれば翁此人々をいとをしみて云出むも附なく心苦しく思て猶豫なり　○とまれかくまれは抄本にともあれかくもあれ陽炎日記（解環中五）にも然いへり土佐日記（終の言）には諸本の如くとまれかくまれとありモアを切てマと云るなり何にても有なむ　○かくなむは何にて下に申侍ると云言を略けり姫が云々と申侍るなり（見せ給へ　せ字抄本に補たるに従つ

御子達上達部（皇イ）きゝておいらかにあたりよりだになありきそとやはのたまはぬといひてうんしてみなかへりぬ

御子　王孫の事也　かんたちめ　公卿也左右大臣などの御子を云也　おいらかおとなしやかに也　かくやひめの家のあたりへだにくなとはのたまはて難題をいひかくるとうらみてかへれる也大和物語によりたにこでにはかにうせにける　傍（アタリ）勿歩（ナアリキ）行（ソ）　憤（ウンシテ）　世をうらみたるをいふなり　○頭注云上達部　官は宰相位は三位已上をいふといへりあたりよりたにとはあたりへよりだにとへの字を加へてこゝろうべき歟うつほ物語嵯峨院卷に思ひまどひてあたりのへちをだにふまず云々　伊勢物語にあてなる女の尼になりて世の中をうんして云々　枕草子にむげにこそおもひうんしにしかど云々慍の字なりうらみいきとほる意といへり契沖云うんじてともくんじてとも云屈の字の音を和語にはさはいへりクとウ同韻通れはくんをうんとはいへりと云々今案にくんじとは浮舟卷におほしくん

ぜそと有紫明抄に思召くつしそと也云々契のいへる是也

解云○おいらかは落窪物語二巻に中納言の四君に男君頭の男〻て給ふ處に我と云て人求ぐ〻せんとの給へば女君いとけしからず聞(イナ)とおぼさばおいらかにこそしか女はめ上若菜巻に源君こりずに朧月夜君に逢給ふ事を紫上に語給へば中空なる身の爲苦しさて併に和ぐみ給へば源氏の言にはかう安からぬ御けしきこそ苦しけれ只おいらかに引摘などして教給へ云々などあり契沖法師は俗にオトナシウ師はジンジヤウニと云に當れりと云れき猶此は手短ウ無造作になど云意なりと鈴木氏云れき○あたりよりだには邊をだにと云意なり古事記肥川上段に箸從其河流下とある傳に今の語ならば從二其河上一と云べきを如此云るは古語のさまなり從(ヨリ)は装(チ)い意ぞ須磨巻に沖より舟どもの謡のゝしりて漕ゆく云々古今春下深養父の歌詞書に山川より花の流けるをよめるなど同しと云れき○なありきそ云々此は赫映姫かくとても不レ可レ得物をゆかしと有は畢竟我等を嫌ひ給ふ事なれば然回遠く云むよりは一向に手短く我家の邊に勿寄來とのたまへかしと云るなり下龍首玉の段に家の邊だに今は通らじと有は

大納言の方より疎む意にて此反也○うんして　此言はん字を省てうしてとも云り後撰雑一詞書に世中を思うして侍ける比業平朝臣佗ぬ今は限と山に思に入侍へ宿むも須磨巻に六條御息所葵上にもな一節うしと思聞えさせし心誤に此に息も思ひうんじて別給ひにしと源氏君おぼせば云々などあり抄に憤字を當たり字書に一字吻也周語陰陽憤盈、積也憤怒而積滿也とありかンの音なればい昌黎また李吟翁ノ四丁枕册子抄四は愠字なりと云れきかいは紆問切説文怒也に作り愠廣韻怨也倉韻積恨也うんじ根意怒意は无と聞ゆ集韻紆勿切音鬱心所二鬱積一也さあるは然べし又倦か或は憂かならむと云人もあれど然あらんには直にウミテウクテなどこそいはめ何も宜とは聞えず此言は困じ調じ怨じなどの類にて必字音とこそ聞えたれ故按に愠字にて鬱の同音うんぜんよりは直に鬱字なるべし字書に一紆勿切音鬱説文木叢生者書五子之歌鬱陶乎予心疏――憤結積聚之意とあり佗果て心の結ぼゝれる意と聞ゆれは此字よく當れり此ウツを省てウジともンに轉てウンジとも云例は屈をクシともクンジとも云へり須磨巻十二丁に打くして思しけるに竹川巻に十三丁に我身はいとゞくんじいたく葵巻四丁に思くつして猶甚多しなど有を考てウッをウンとも云べきを證べし

猶此をんな見では世にあるまじきこゝちのしければてんぢくにあるものもてこぬものかはと思ひめぐらしていしつくりの御子はこゝろのしたく(みイ)○ある人にててんちくにふたつとなきはちを百千萬里の程いきたりともいかでかとるへきとおもひてかくやひめのもとにはけふなんてんちくへ石のはちとりにまかるときかせて三年許(經てイ)大和の國とをち(ほイ)のこほりに

見ではなほ赫映姫にあはずはと也　いしつくりのみこ　新撰姓氏錄云石作火明命六世孫建眞利根命後也垂仁天皇御世奉ニ(ホンタメ)為皇后一(トシ)日葉酸媛命作ニ石棺一獻レ之仍賜ニ姓石作大連公一也云々　したく　支度　天竺　百千萬里　百里千里萬里と次第に重ぬる言葉也唐詩に僧の天竺に行を送る詩に十萬里程多少難なといふ同し文勢也　とをち　十市郡　とをちのこほりにこもりゐたるなり　○頭注云したくはシタヽクミの略歟　和名抄大和國十市(止保知)儀不審

解云○猶この女云々思ひめぐらして　此一條は五人の凡ての意にて下五段の冒頭なりされはたとひ天竺にある物なりともと云り故石作王天竺に二となき鉢なれはえ得まじきとて天竺には往かはで贋物を覓給へるは相違に非と鈴木氏云れき○不見では　は即えではの意也○心のしたくみ　は下天羽衣い段にたゝかふべきしたくみをしたりとも云々とあり故に此には諸本み字なけれど備つ頭書にしたくは下タクミの略訓歟と云り按に同言の重れるは一省く例なれば是もタ一略たるならむ宇治拾遺卷九に佛師に物とらする處に封付たる物を見て家に持て行て其物は彼事につかはん彼物は此事につかはんとしたくし思ける云々又十三に慈覺大師纐纈城に到處にくべきしたくをしてと有猶續古事談上五十丁清輔朝臣の事可レ考何も下巧と云意と聞ゆタ字ミ字を略たる言か按に下學集に支度用意義也と有も同意と聞ゆ類聚國史に延曆二十四年二月庚戌造石上神宮使正五位下石川朝臣吉備人等支ニ度功程一申ニ上單工一十五萬七千餘人一大政官奏レ之云々又西宮記に四界祭陰陽寮向ニ四界一祭以ニ藏人所人一為レ使四角祭陰陽寮宮城四角祭有レ使所入以上天下有レ疫之時陰陽寮進ニ支度一料物官宣とあり猶多し延喜式にも見えたり字書に廣韻支度也晉書職官志有ニ度支尚書一大戴禮燕支レ地註支猶レ計也前漢律歷志云度者分寸丈尺

引也又唐書百官志云度支掌下天下租賦物産豐約之
宜水陸道途之利歳計所ㇾ出而支ニ調之一と見えて度
支二字共に計意なればしたゝくみと云も下の心に
はからひ用意する意にて自づから通へり 按にタクミと云言ば細
と云言に上にタの一言を加へたる議をタバカリと云類なるべし工
も彼を左し是を右しとかれて思量事にて糸を彼方此方取交して打
細に似たり然ればタ字は元
來なくて下細にも有るべし 然に唐の官名は度支と云なる
を皇國には下上に支度と用たるは元來シタクミと
云言の有に從て字を當用たるにてさだ定に沙汰の字
を書類ならん歟されどはやく支度と諸書に見え今
に然云へば下工などの意とは元來異事なるか 古き諸書
にシタクと云てミを省たる言ならんには此物語にもシタ
クと有べき理なりさればミハ衍ならんとも思はるゝなり 言も義
もよく似通ひたる言なれば委云置て後人の考を待
のみ ○三年ばかりへては本に經てと云言なきを
今補つ此言なくては末の結なくて聞えずかくて此
三年計の間は甚く忍給ひて諸所方々佛鉢に似つ
かはしき物を求て歩行給ひし事を略たりと心得べ
し○とほちの郡には句なり和名抄に大和國郡名十
市止保知とあり師傳記云十はトヲなるをトホと云は地
名なれば後に訛れるなるべしと云れき拾遺雜賀一條攝政の歌
に「暮ばとく行て語らむ逢事のとほちの里の住う

かりしを遠と云掛たり 遠と掛云たり
ある山寺にびんづるのまへなるはちのひたくろにす
みづきたるをとりてにしきのふくろに入て作りはな すイ
の枝につけてかくやひめの家にもてきてみせければ
ひんつる 四分律云賓頭盧本此優塡王臣由ニ精勤一
故王放出家得ニ阿羅漢一賓頭盧翻ニ不動一也感通傳曰
今時有下作ニ賓頭盧聖僧像一立ㇾ房供養上亦是一途然
須下別施ニ空座一前置ニ椀鉢一至ニ僧食時一令中大僧爲上ㇾ受
不ㇾ得下以ニ僧家盤孟一設上ㇾ之以ニ凡聖一雖ㇾ殊俱不ㇾ觸ニ
僧食器一若是俗家則隨ニ俗所ㇾ設恐僧不ㇾ知附ニ此編一
出　鉢　順和名鈔學ニ佛道一者之食器也胡人謂ニ之
孟ニ混黑 ひたすらに黑き也作りはなの 伊勢物語
にむめのつくり枝にきじをつけてと云々此類なり
○頭注云艶書などをはじめ物を贈るに花紅葉など
に付る事上古の風也萬十玉章の君がつかひの手折
こし此秋萩は見れどあかぬかも
解云 ○ある山寺に此あるは 一書或人などのある
なり此の詞づかひのさま伊勢物語八十段に鴨川の邊
に六條わたりに家をいとおもしろく作てと有に似
たり ○びんづるは四分律に云く賓頭盧本此優塡

王臣由精勤故王放出家侍阿羅漢賓頭盧留不動也上請賓頭盧經に賓頭盧頗羅墮誓阿羅漢とありて賓頭盧者字也頗羅墮誓者姓也〃あり感通傳に今時有作賓頭盧聖僧像立房供養亦是一途然須別施空座(請ーー經にも空座なり)前置椀鉢至僧食時令大僧爲受不得以僧家盤盂設之以凡聖雖殊俱不觸僧食器若是俗家則隨俗所設恐僧不知附此編出以上賓頭盧像の事は寂照堂響谷集(三巻)に道安法師夢見梵僧頭白眉長云々先此無安聖像至宋泰至末正勝寺僧法願正喜寺僧法鏡等始圖形矣とあり(此文ともは抄に引たる僧たちに聞て記つるなり)又昔此梵僧の像を食堂などに安て衆僧の食する時先此像に供養せし故に前に鉢を置つるなるべし○すゝ付たるを　は本に皆すみ付たるとあれど校本に從て改つ墨は附べき所にあらねば必煤なるべし煤付舊びてたふとげに見えしさまなり和名抄に唐韻云炲煤(臺梅二音和名須々)灰集屋也古事記(大國主神作筑紫造の段)に凝烟と書り○錦の袋に入れて　は俊陰卷に(琴を埋處に)琴錦の袋に入たる一つと褐(カチ)の袋に入たる一つ錦のはなむ風かちのをばはし風と云清輔朝臣袋冊子に(簡能に刺て相濟處に)自懐

中錦の小袋を取出其中に艶書一筋あり示云是は吾重寶也長保消之時の艶書なりなど猶あり○作花の枝に附て　は伊勢物語(九十八段)に梅の造枝に雉を付て奉る若紫卷に(北山僧都源氏君に物奉る處に)金剛子の數珠を云々透たる袋に入て五葉の枝に付云々大和物語(段三)に京極の御息所より亭子院の御賀つかうまつり給ふとて云々捧物一枝に枝せさせて給へと聞え給ひければなど多かり古へ貴人に物奉るには花などの枝に附て奉しなり藤井氏(高貞緒釋五に)云捧物など木枝に付るは神佛又はよき人に奉る物はたゞに不置とてする事にて今世に臺に居て奉る同し意ばへなるべし○もて來て　は古本もちてきてと有(モチテと云は具なれども然云て聞苦しき處もあり)

かくやひめあやしかりて見れ(るにイ)ばはちの中に文ありひろけてみれば「(石造御子)うみやまのみちにこゝろをつくし(きイ)はてないし(みイ)のはちのなみだながれけ

血の涙にかけてよめるにや猶たづぬべし

解云○あやしがりて見るに　は抄本見ればとあり下に同言近ければ惡しとても得給ふまじき物を見

せ給へと申つるに其を得たりとて持來給ひしを甚く不審み怪しむなり先鉢を見むとすとて其中なる文を見付たる也○歌 海山の云々　は第四の句諸本ないしのはち校本おいしの鉢とあり御石の鉢にて歌なればみつしの鉢と訓べきなりハチのチ字を血のなみだにかけてよめり澪標卷に（乳母の歌）うちつけの別ををしむかことにて思はむかたにしたひやはせぬ初句乳付をそへたる同し意ばへなり一首の意は天竺へゆく道百千萬里の間海をわたり山をこえ辛苦辛勞を盡して其艱難には血の涙も流したりきと云て然して取來たりし是ぞと云意にて其御石の鉢を詞に籠てよみ給ひしなり又按に第三の句つくしはては天竺は西の國なれば筑紫國を通はてゝ遠く行給ひし由を兼たる詞なるべし

かくやひめひかりやあると見れば（るにイ）

續博物志云佛摟沙國有ニ佛鉢一受ニ三升許一青玉也或曰青石或曰雜色而黑多四際分明厚可ニ二分一貧人以ニ少華一投レ中即滿富人以ニ多華一正復百千萬斛終不レ滿或曰在ニ月支國ニ又水經注西域有ニ佛鉢一今猶存其色青紺而光云々　河社に　西域記云波刺斯國釋迦佛之鉢在ニ此王宮一南山住持感應傳曰世尊初成道時四天王奉ニ佛石鉢一唯世尊得レ用餘人不レ能レ持如來滅度後安ニ鷲山一與ニ白毫光一共爲ニ利益一四天王各ひとつの石はちを奉らるゝを佛四つを重ねておしてひとつとし給へるはちなり

解云○光やあると見るには抄本に見ればと有此は又見るにの方勝れり眞の佛鉢には光あり其色青紺而光と水經注に見えたる事上に引り

ほたるばかりの光だになし

（赫衣姫）おく露の光をだにも（ぞイ）やどさましをぐらの（イナシ）山にてなにもとめけむ

ほたるばかりとは少しの光りもなきとなりされはをぐら山につゞけたり　業平の歌に　おほゐがはうかへるふねのかゞり火に小倉の山はなのみなりけり螢火光神　これも神の威光のさゝやかなるをいふ也一闇（カンジャク）○頭注云此をくら山とよめるは大和なり前に大和の國十市（クチ）郡にある山寺にといへるにて知るべし大和志云廣ニ小倉山寺一倉橋上峰號ニ小倉山一云々即十市郡也萬八ニ夕されは小倉の山に鳴鹿のこよひは鳴ずいねにけらしもとよめるに同

解云○螢は　和名抄に兼名苑云螢胡丁反一名熠燿上一入反和名保太流と有○歟おく露の光をだにぞは抄本にだにもと有鈴木氏云一本だにぞと有宜しぞと云てましと結ふ格あり云々こそ有へき事なれと云意なり第四句抄本にをぐらのとあり寫本の字なきに從つをぐらを闇き意に係たり頭書に大和志に云く廢小倉山寺倉橋上峯號二小倉山一云々即十市郡とあり此寺は此物語造れる比名高く聞えしなるべし一首の意は彼鉢を似せんと思さばせめて露ばかりの些少なる光をも宿して持ておはすべきものを心幼く暗を名にしも負たる小倉山にて覓求出し給ひしは何故ぞとなり赫映姫小倉山寺より取來給へる事は可レ知にあらねど无レ光に付て小倉山よりや取來給ひけんと云るが按に當れるさまに語れるなるべし

とて返し出すはちを門にすて丶此歌のかへしをす

石造御子

しら山にあへばひかりのうするかとはちをすて丶は(もイ)たのまる丶かな

とよみ(てイ)入れたりかくやひめ返しもせずなりぬみ丶にもき丶入れざりければいひか丶(わづらひイ)つらひてかへりぬ

彼はちをすて丶又いひけるよりぞおもなき事をははちをすつるとはいひける

かくやひめのうるはしきにまけて鉢の光りのうすらぐとの歌なるべし　か丶つらひて　葵の卷にうえか丶つらひ給へはと云々源氏物語の注にかけしらふ意也　鉢と恥をいひかけてはちをすつるとは云也　おもなき事　とは無二面目一と云事也　○頭注云しら山にあへはとは前のをぐらの山とよめるに對していふ歟　つひか丶つらひ　こ丶にてはいひわづらふ義と聞ゆいひか丶りわつらふ也文選に鞅掌カ丶ツラヒとよむといへり字彙云詩小雅王事鞅掌鞅所二以拘一レ物言爲二王事一所レ拘也鞅與レ快同快不レ服也情不レ足也　うつぼ物語菊宴上におもほしいてやすると思へどさもあらねばはちをすて丶といふはかりになん聞ゆると云るもこ丶を用ひたり

解云○かへしいだすを　はを字類本に從て補つ姫より光もなき石鉢にて贋物なれば皇子の坐ます所へ返し出せるなりかくて皇子鉢を受取て遂に叶はじとて門に出給ふことを略けりされば此を字あるいとよろし　歌白山に　は小倉山と云るに對て姫

の容貌の色白くて光あるを白山と取成る也其光の甚く赫るに逢ては氣壓れて鉢の光の消滅たる歟と也光のうすとは夜明て燈火の光なく望月の空に星の影の見えざるが如しさて門外に鉢を捨ても若此鉢の光現て又取上もやせんと自己が心に頼を係るよし也眞物ならねば固より光は无ことなれども光有よしに云なしたるが無面なり鉢を恥にそへてよめり○とよみて入たり　は門より家内にいれ給ふなりて字古板本に從て加つ○かへしもせず　は普本に從つ寫本には返事とあり下にも歌の返事とあり○いびわづらひて　は諸本かゝづらひと有を誤として改置つるを後に類本を見るにわづらひと有落凹物語巻一に女君男もなくておはするを左近少將に令奉らむとてあこきが勸むる處にかくてのみはいかゞはしはてさせ給はむと云にいらへもせず云わづらひて居たる程にとあり○おもなき　は萬葉巻一によひに逢て朝面無アシタオモナミ隱にか云々昨夜將枕して恥ヽ翌朝面隱する意もて隱し序させり又枕冊子抄三に主殿司こそ猶をかしきものはあれ云々年老て物の例などしりておもなきさましたるも附々しく目安しとある季吟翁の注におもなきは面強く物にうてぬさまなりと云れたり鈴木氏云萬葉なるは言の本にて無二面目一かくるゝ意なれども中昔の詞づかひには轉變て即こゝに云る如く恥を捨てかゝる事にて俗にオジヅヨウまたツラ厚ニなど云意となれりと云れき猶紅葉賀巻に源君源內侍に逢給ひし後朝奴衣を返す處に「恨ても云かひぞなき立かさね引て歸し波のなごりに底もあらはにとありおもなのさまやと見給もにくけれどわりなしと思へり內侍源君の面厚なろ物ぞと思さんと危ぶむなり梅枝巻に兵部卿宮御書を源氏の大臣御覧し驚ぬからまでは思給へずこそ有つれさらに筆投捨べしやとねたがり給ふ源言かゝる御中におもなく下す筆の程さりともとなん思給ふるなど戯給ふと有是等を考て中昔の言格を知べし○恥をすつとは云ける　は寫本によりつ諸本にすつるとあるゝ字は衍なり偽事あらはれはてゝ再云よる便もなき事なるに強くたのまるゝ哉など返しの歌よみなどし給へるを恥を捨と云るなり捨とは不レ顧なり夕良巻に夕良君死て源君を送る處に惟光御氣色のいみじきを見奉れば身をすてゝ行になを不顧なり今も人目わろく恥を不レ思の心の欲まゝに物するを然云り鉢と

恥と同言（請罰にはしれ拘付なり）なるに從て恥を捨といふ言の
趣を説が如き上によばひ下にあへなしかひなしの
類わざとあらぬ因緣（物語をして）一興とせるなり忠
こその巻に（故左大臣の北方を左大臣に係畏して嫌ひければ自改させらるゝ處に）恥をすてゝ
云出むとおぼして落窪物語（二巻）に（中納言の子たち右近少將が門督の許に參ることな）越
前守大夫など唯今の所なれば恥を捨て參仕まつる
なとあり

くらもちの御子はこゝろたばかりある人にて

姓氏録曰豊城入彦命之孫雄略天皇御世供ニ進乘輿一
仍賜ニ姓車持公一　こゝろたばかり　心に思慮の
ある也神代巻曰思兼神有ニ思慮之智一　○頭注云車
持をくらもちといふはルマの反りラなれは也
解云心たばかりは古事記（大國主神根國に行ます條）に御祖命告子
云可ニ參向（マヰデヨ）須佐能男命所坐根堅洲國一必其大神議（タバカリタマヒナン）也
とある傳にたばかるは唯はかるなりと云れたり又
香椎宮段（字書に）權（機謀）字をも然訓り下（子安貝の段）にたばかり申さ
ん又あしくたばかりて伊勢物語（十一段）に大將出てた
ばかり給ふやう空蟬巻に（源氏小君に宣言に）さりぬべき時を見
て對面すべくたばかれと宣給ひわたればと有を師
の講説にサリヤクシコシラヘルなりと云ひ縣居翁
はたばかりは手して物を甚とも（寄）心に（云）事をも
云事となれりと云契冲法師はたよるたわすると云
類にてはかると云言なりと云れき（師は此説を取れしなきべし々に義なし）
伊勢物語なるは右大將（常行）山科の禪師の皇子に始て
見え給ふに唯なほやは有べきとて千里の濱の石取
に遣給ふ事なればかろし此は姫を欺て思慮工るに
ておもし石作皇子のしたくみに同し

おほやけにはつくしの國にゆあみにまからんとてい
とまうしてかくや姫の家には玉の枝とりになんま
かるといはせてくだり給ふにつかふまつるべき人々
みな難波まで御おくりしける（りイ）

公（オホヤケ）官（同）浴（ユアミ）　もろこしにて卿大夫などの休息する
事を休沐（ホク）といふ類にや宇治拾遺云いさ給へゆあみ
にと云々　○頭注云つくしの國にゆあみにまから
んとて　つくしは和名鈔云筑前（筑紫乃三）（久知）溫泉萬葉集
第六云帥大伴卿宿ニ次田温泉一云々「湯の原に鳴あ
したづは吾ごとく妹にこふれや時わかずなく又古
今集八詞書に云源のさねがつくしへゆあみむとて
まかりける時にと云々散木集に云わざの事はてゝ
歸りけるにすい田の湯のむかひに有ければ立より

てあらんとはなけれど足などをすゝぎてついでによめる「かなしさのなみたもともにわきかへるゆゆしきことをあみてこそくれ　筑前國御笠郡湯原といふ所にむかしは温泉ありけるとかや今も湯出し所とて其跡殘れりといへり

解云○おほやけには云々　は朝廷に暇を賜はるには浴湯にと申立赫映姫には蓬萊にとしらせ私には潛跡て玉枝つくらせ給ふ事をよく書調たる文甚めでたし○筑紫國に湯浴に　は九國の内温泉はいくらも有べし海を隔たる所ならでは今附々しからねばつくしにと僞給ひしなり萬葉卷六に大伴卿宿次(スキ)田(タ)温泉一聞二鶴喧一作歌 湯の原に鳴芦鶴の我如妹に戀れや時わかずなく 散木集悲歎 に 帥大納言經信卿薨後の處に わざの事はてゝ歸けるにすいたの湯の向に在ければ立寄て浴むとはなけれども足などをすゝぎけるついでによめる 悲さの涙も共に涌返るゆゝしき事を浴てこそくれ 和名抄に筑前國 筑紫乃三知乃久知 御笠郡次田(スイタ) 郷名訓未欠たり散木集にすいたと有は音便なり正しくスキタと訓へし　又肥後國山鹿郡に温泉郷あり又三代實錄 卷四 に肥前國温泉神に進レ位給ひし事見ゆ古今 離別 に源のさねが筑紫に湯あみむとて罷ける時にと詞書あり當時名高き温泉有し成べし○くだり給ふ

は筑紫を差て難波に下給ふ也○仕まつるべき人々は皇子は皇子の格にて供奉すべき人々數多なるを難波まで送らせて忍給ふ御旅なりとて省きやつして御供人大概は京に返し給ふなり

御子(皇イ)いとしのびてとのたまはせて人もあまたゐておはしまさずちかうつかうまつるかぎりしてゐて(出イ)給ひぬ○(御イ)見おくりの人々見奉りおくりてかへりぬ

ゐて　ひきゐて　以(非ア)ちかふつかふまつる　近習の人はかりにてと也　○頭注云率とも書萬七おほ海のまもるみなとのことあるにいづくに君が吾率凌是もひきゐて也又將(非ア)とも舊本今昔物語に將行をつれゆくとよめり

解云○ゐて　は師傳記云率とは身に添へ付るを云てゐてゆくは身に副て行なりひきゐは引從へて身にそふるなりと云れき○近う仕まつる限して出給ひぬ　は抄本にゐてとあれど上にゐておはしまさずとあれば此は出と有ぞよき仁德紀に近習舍人武烈紀に近侍舍人と有をチカク仕マツルトネリと訓り此も舍人なるべし舍人は天皇皇子王のつかひ給ふ人なり 儐解三の卅下に云つ さて今召連給ふは殊に親しく仕ま

つる限にて彼大事をも漏し給へる者なり若紫卷に源君北山に物し給ふ處に御供にむつましき四五人ばかりしてまだ曉におはすと有は此に似たり〇御送の人々　は御字古板本に從つ見送と作るは悪し〇見たてまつり送て歸りぬ　は難波津より船に乘て出給ふを供奉の人々見奉て京に歸て又濟歸給はんとは皆てしらぬよしなり下にさをとゝしの二月十日ごろとあり

おはしましぬと人には見え給ひて三日ばかりありてこき〇(かへりイ)給ひぬ

玉の枝とりにといつはりてひそかに來り歸り給へるなり　〇頭注云こき給ひぬ　來歸歟不甘異本隨ふべき歟濟歸にや

解云おはしましぬ　のまし寫本に脱せり〇人には見え給ひて　は筑紫をさして行たまふさまを世の人にも供奉の人にも見られ給ふなり内々には蓬萊にと知人も有へし濟歸給はむとは知人有べからず見えの事は上に云つ〇こぎかへり給ひぬは抄本かへりと云言を漏せり

かねて事みなおほせたりければ其時ひとつのたから(たくみイ)なりける〇うち(かイ)たくみ(まろらイ)六人をめしとりてたはやすく人よりくまじき家をつくりて

かねて事みな　かねていひこしらへたる事なれはと也　ひとつのたから　當時だいいちの重寶と人のほむる名人の匠なるべし　内匠　禁裡の大工也人めすくなき所をゑらびてと也　〇頭注云一本かぢなくみ　可隨歟　鍛冶工なるべし和名鈔云四聲字苑之鍛冶打二金鐵一爲レ器也鍛冶乖也云々しかれどもうつぼ物語吹上卷にしろかねこがねのかぢ二十人ばかりゐてと書れたれば物語やうの物には字音にかゝはらず古俗にならひてかぢと書へきにやうつほ物語も源順作と河海抄に見えたり一本のかぢたくみと有によつて思ふに今うちたくみとあるは鍛工歟金鐵をうつとはいへり又かをうに誤にや

解云〇かねて事皆仰たりければは京にて作物所(ツクモドコロ)の工に密に談合おき給ひしなり〇一のたくみなりける　は諸本ひとつのたからと有按にひとつのは一と書て字音にイチと呼べきを意を未得者の誤てひとつと寫せるなり類從の異本には一のと作り

一の意なりたからはたくみを（なかに）みならに寫誤たる也攝政關白を一の人と申せり職原抄に執柄必蒙二一座之宣旨一故稱二一人一月宴卷に（貞信公薨後の處に）世ノ中の事を實賴左大臣（號二小野宮一貞信公長男）仕まつり給ふ九條殿（師輔公貞信公二男）二の人（于時右大臣）におはすれど猶一くるしき二の人にと思聞えさせためる沙石集に光明峯寺禪定殿下鎭西の圓爾房を請じ登せて東福寺を建立ありて聖一和尚とて師弟の義おはしき日本國總講師に成したてまつらむと思食けり其故に聖一と云名はひじりのいちと思食されて附られけるとも云り繪合卷に（源君の事）を琴ひかせ給ふ事なむ一のざえにて次に横笛などある是等みな第一の意なり上若菜卷に御裝束限なく淸らを盡して名高き帶御佩刀（ミハカシ）など云々古世のひとつの物と名ある限は皆集ひ參る御賀になむ有けるとあるは（按に是は古代殊に一故ありて名高き物と云事なるべし孟津抄にひとつの物は天下第一の名物なりと有はいかゝ第一の意ならは必イチとこそいはめ）此に異なり○うちまろら　は諸本うちたくみ古板本かぢ工とあり和名抄に内匠寮宇知乃多久美乃豆加佐とあれば其かと思へど然らず又古板本は鍛冶工かと聞ゆれど猶誤にて此は必うちまろらをうちたくみと（まをたにろをくにらをみに）誤またかちたくみと（うをかに）寫誤たるなり内麻呂は工匠の名なり（次下に見ゆ）○人より來まじきいへを造て　は在野冊子に家と屋との差別は委しく辨置つるを可レ考

かまと（へイ）をみへにしこめてたくら（工等イ）を入給ひつゝ御子も同し所にこもり給ひてしらせ給ひたるかぎり十六そをかみにくとをあけて玉の枝をつくり給ふ

竈を三重に造りこめて煙などの見えぬ用意なるべし　たくらは匠等の略語也　しらせ給ひたる限　御子の知行所十六ケ所なるにや　竈（クド）　順和名に文字集略曰竈（クド）（七經反和名久度）竈後之穿也　そをかみ　添上郡のことにや猶尋ぬへし　○頭注云たくらはたくみのみ文字なだらかなるをらに誤たるにてたくみを入れ給ひつゝにても有べし又たくみらのみ文字を脱する歟

解云○かまへを三重にしこめては諸本かまどをと有は下にくどと有によりて竈ならんと思ひて誤れるなるべし構を三重に爲籠てと聞ゆ故改つ字書に構架屋也又結乪也と有て家屋を經營意また心を用ひ己を固め敵を防ぐやうの意ある言なり古語拾遺（橿原宮段）に構二立正殿（ミアラカ）一落凹物語（卷二）に（女君部屋の内にて典藥助入來まじくする事な）

内ざしに差こもらむと思て萬こあくまじきやうにかまふ云々宇治拾遺十一に頼信[illegible]守たりし時平忠恒なうたんとする處に入海の遙に差入たる向に宗と造て居たり此海を儘に廻りてよせば日頃へなむ其間に逃もし又寄られぬ構もせられなむ今日の内によせてせめんとあり此も垣を三重にして寄來む人を防くなり吹上上ノ巻に種松が家のさまな四面八町の内に三重の垣をし三のつひぢをするたりと有同しさまなるべし○皇子も同所に籠給ひて　は御心を盡し給ふよしなり○しらせ給ひたる限十六そをかみにくどをあけて　は諸本皆同じけれどもかみにくどをあけてと云言いかゝ決めて誤なるべし上にかまどと有によりて竈(クド)和名抄に四聲字苑云竈則到反與竈同和名加萬炊爨處也文字集略云竈七紅反和名久度竈後穿也とあり我里人はへつひなくどといへりとせる説に由なししらせ給ひたる限十六そは此皇子の知行の莊園十六所と云事と聞ゆれば其莊より出くる物成を玉枝造らせ給ふ費としてと云事なるべけれど誤字脫字多くて聞え難きなるへしかみは守くとはくらかくらをあけては倉に納たる稲なとを出して其費とする事か嵯峨院巻に政頼左大将神樂し給ふ處にあるしり經なのことは美作より米二百石奉りためり伊余の御封

御莊の物もてまうで來ためれば正藏しこと仕まつらすべかめれ藤原君巻[illegible]御倉開て家司(ケイシ)どもある限の物どもを運び出して此人どもにくる宇治拾遺六巻に帝釋天留志長者に化して人に物與ふる處に物吝む神を祭たる驗にや其神放て物の吝からねばかくするぞとて藏どもをあけさせて云々寳物を出して配とらせければ云々又信貴山飛倉の處に大なるあぜくらの有を開て物取出す程になどある如く倉を開てと云るが如し又落凹物語巻二に中納言三條の家造らせ給ふ處にあこたち我等が住まむにいと麗うよしと云て二年ばかりに出くる莊の物を盡して築土(ツヒヂ)より始て新しく築まはして古材一交へず大事にて作らせ給ふ又巻三に右衛門督に家造られたる處に多の物を盡して造けるがいみじき事云々など有をも思へし是は若後人の考の助にもならむかとて自己か臆説を記しつるになむ○玉枝を造給ふ　は先一わたり云とおめて次に又其事を委云文法なり續古事談に一條院圓融寺に御幸ありけるに内裡より院の御送物瑠璃の香呂金の御珠數箱銀の紅梅の枝に鶯の居たるに附られたりけりと有如此類の物作物所(ツクモドコロ)に仰て作らせ給ふ事なるべし

かくやひめのたまふやうにたかはすつくり出〇ついで(イ)とかしこくたばかりて難波にみそかにもて出ぬ舟にのりてかへりきにけりと殿につげやりていといたくくるしがりたる(げなるイ)さまにして居たまへり(イナシ)

たかはずつくり出つ　漢武故事曰神屋前庭植ニ玉樹ニ珊瑚爲レ枝以ニ碧玉ニ爲レ葉或青或赤悉以ニ珠玉ニ爲ニ之子ニ皆空ニ其中ニ如ニ小鈴ニ鏘々有レ聲　みそかには　ひそかに也　かへりたりと我家につげおこせて旅行にくるしめるていをつくらるゝ也

解云〇かぐや姫のたまふやうにたがはず作いでつ　は古本にいづと有もよし上に白銀を根とし黄金を莖とし白玉を實としてと云るにたがはずなり漢武故事に神屋前庭植ニ玉樹ニ珊瑚爲レ枝以ニ碧玉ニ爲レ葉或青或赤悉以ニ珠玉ニ爲ニ之子ニ皆空ニ其中ニ如ニ小鈴ニ鏘々有レ聲抄と有は造物にて此に同し〇かしこく　はよくいたくなど云意なる事上に云つ〇たばかりて　此解も上に有人知まじき謀事を甚よくしてなり〇みそか　はひそかとも云みとひと通て同言なり密字を訓る能あたれり伊勢物語(九段)にみそかなる所なれば門よりもえいらでと有は密に通所と云事にて歌に「人しれぬ我通路の關守はとよめり京にて作れる玉枝を難波に人しれず持出して蓬莱山より採來給へるさまを示し給ふ也〇船に乘て　は今殊更に船に乘給ふなり〇歸來にけりと殿に告やりて　は態と乘給ひし船ながら居たまひて京の迎を受給ふなりさるは甚いたく隱し給ふ僞事なれば殿の人々にも蓬莱に行給ひし體を示し給ふなり〇くるしげなるさまして　は抄本に苦しがりたるさまにしてとありたるはけるの誤とすれば其も惡からねど今は古板本に從つ年經し船中に疲給ふ體を示し給ふなり

むかへに人おほくまゐりたり玉の枝をば長ひつに入てものおほひて持てまゐるいつか聞けんくらもちの御子はうどむぐゑの花持てのぼり給へりとのゝしりけり

ながひつ　順和名曰櫃(音與レ貴同和名比都俗用ニ匱字)匱折(?)櫃小櫃似レ厨向レ上開闔器也　うどんぐゑ　うどんげ也翻譯名義集云優曇鉢羅此云ニ瑞應ニ般泥洹經云閻浮提内有ニ尊樹王ニ名ニ優曇鉢ニ有レ實無レ華優曇鉢樹有ニ金華ニ者ニ世乃有レ佛　物おほひてとは長櫃

にきぬなどかけたる也　何地にて聞たるやめつらしき花とりて都にのぼり給ふと雜人はらのさわぐけしきなるべしめづらしき枝なればうとんげとはいふなり　○頭注云うとんくゑ　クヱの反ケにて法華經をほくゑ經變化をへんぐゑといふがごとしはじめにはほうらいといふ山にしろかねを根としこがねをくきとし白き玉をみとしてたてる木とのみいひてここにうとんぐゑといへる今昔物語にしるす所によくかなへり

解云○迎に人多く參たり　は先に御送仕奉りし人々なと參たるへし○長櫃　は和名抄に蔣魴切韻云櫃音與レ貴同和名比都俗有二長—韓—折—小—等之名一似レ厨向レ上開闔器也○物おほひて　は今世の油單と云物の如き覆ひ古代も有し成べし○優曇華のはな　は若紫卷に北山の僧都の歌に「うどんぐゑの花待得たる心地して深山櫻に目こそ移らねと聞え給へば源君ほゝゑみて時有て一度開なるは難かなる物をとのたまふと有河海抄に天台云優曇華三千年一現々則金輪王出云々抄に翻譯名義集に云く優曇鉢羅此云瑞應また般泥洹經に閻浮提內有二尊樹王一名二優曇鉢一有レ實无レ華優曇鉢樹有二金華一世乃有レ佛と有を引り玉枝なれども世人は珍しき物なれば語傳ふる間に紛亂てうどむぐゑと評成たるなり其物を心得たがひて世に評こと今も有ものなりおもしろし○のゝしり　は云騷よしなり

これをかくや姬きゝて我は此御子にまけぬべしとむねつぶれておもひけりかゝるほどに門をたゝきてくらもちの御子おはしましたりとつぐ

むねつぶれて　心塡　むねやみて也　○頭注云源氏帚木卷におぼす事のみ心にかゝり給へればまづむねつふれてと云々今俗にはつとおもふなといふかことしきもつぶすといふにも通ふべし淸少納言枕草子の記にこゝろぎもゝつぶるゝやうにともいへり萬葉に我胸は破れてくだけてとこゝろもなしともよめり狹衣にはむね心をつぶしつゝとも云り

解云○此皇子に負ぬべし　はとても取得たまふまじき蓬來の玉枝をと申つるに能謀て今既に持來給ふ由世にも云さわげば若や實に玉枝とりておはしもしつらむさらば遁べき方なくて負て逢奉べきに

歟とていたく思惑るなり○むねつぶれて　は落凹物語卷二に典藥助今夜來ぬべき由を告たる處に女君聞に胸つぶれて更にせん方なしとあり胸ふたがるとも云り寫本にむねうちつぶれてとあり今はうちと云言なきに從つ○おはしましたり　とある二所のまし類本に從て補つかく同言をきらはず重て云る此物語の文體也

旅の御すがたながらおはしましたりといへばあひ奉る御子のたまはく命をすてゝ彼玉の枝もて來るとてかくや姫に見せ奉り給へといへば翁持ていりたり此玉の枝にふみ○ぞつけたりける

車持御子
いたづらに身はなしつともたまのえをたをらでさらにかへらざらましこれをもあはれとみてをるに

かくや姫の當惑して此歌をもあはれにおもはぬさま也　○頭注云かへらさらまし　此てにをは今をもて見れは如何侍らん今はかへらましやはかへらさらめやなど有べき歟かゝるてにをはの違萬葉集などにも見ゆればいにしへはかくて通しけるにや解云○あひたてまつる　は翁が出て皇子に對面し奉るなり○もちて來たりとて　はもてとある本もあり上十四丁左にもて出ぬ又もちて登など二樣に云り聞よき方に從べしとては下に云々といへばとあれば寫本の无に從べく聞ゆれど諸本の有に從つ○奉給へといへば　は皇子の御上を云地の言なり此もノタマヘばと訓べし○命を捨て　は歌にいたづらに身はなしつともと云る即命をすつと云に同じ玉枝とらむとて身命を不顧しと云事なり○翁持て入たり　は玉枝を姫の居所へ持入也○文をぞはを字校本に從て加つ○歌いたづらに云々玉のえをは抄本に從つ寫本にえだと有はわろし梅枝卷に「花のえにいとゞ心をしむるかな人のとがめむ香をばつゝめど眞木柱卷に「かばかりの風にもつてよ花のえに立並べき匂なくともとあるを證としつさらにを寫本はたゞにと有其も惡からず一首の意は未玉枝を採得たまはぬ前の意にて如此志を剛く立て辛して採給ひし由をしらせんとて枝に付給へるなり○是をもあはれと見てをる　に赫映姫も此玉枝は眞寶の物と思てかくまで皇子の心を盡し給ふ事とあはれみ奉りさりとて逢まじき身にしあればいかにとかせんと大く物思居る上に翁も玉枝を寶物と思て走入て返事を催促なりをもと云る次の

翁の勸め催促すに當れる言也　おはしますと云こと古事記高津宮段に吉備國行幸の條に彌黑日賣令ㇾ大ニ坐其國之山方地ニ而云々とある傳三十の四十一丁七の二十九丁に坐はマシマスと訓べし上のマシは坐字にあたりて居賜ことなり下のマスは附云崇詞にて賜と云辭なり　さてマスとタマノとハ似たる言なれど其中に從てまた別あり混べからず　おましますと云は大のホを省きおはしますと云はホマの切ハとなれるなりとあり大はいたく崇て稱奉る辭なり是は上に云べきを書漏して此に載つ

竹取の翁はしり入ていはく此御子（皇イ）にまうし給ひしほうらいの玉の枝をひとつの所（もあやしき處なくイ）○にあやまたずもておはしませり何をもて（ちイ）○とかく（かイ）まうすべき（イナシ）少しの相違もなくもてき給へり此うへは何をあらかふべきと也

解云○翁入て　は上に翁走もちていりたりと有て又走入てと云言いかゞしく聞ゆめり始持て入しは姫の前に出せしのみなり然をすみやかに答せねば翁は寶物と思てあれば返事催さむとて走ハたる也

○一の處も　は諸本ところをと有又を字无もありをはもの誤と見ゆれば改て補つ○あやしきところなく　は類本に有を以て補つ是は疑なきよしなり

○あやまたず　は不ㇾ令ㇾ違と云意なり桐壺卷に帝更衣の卒去後の御局に故大納言の女更衣の遺言あやまたず宮仕の本意とかく物たりし昔はかひあるさまにこそ思渡つれとの給へりとあるは上に更衣の事を母の中使へ申に故大納言今はとなるまで只此人を宮仕の本意必遂させ奉れ云々たゞ此遺言をたがへじとばかりに出し立侍りしを云々とある事なり○何をもちてかゝ（句）は抄本にち字なきはわろしか字諸本になきを今補つ必有べき處なり○とかく申べきにあらず　はにあらず四字諸本に无（ナキ）はよく聞ゆれど類本の有に從つ何を以てかと句してとかく申べきと云言一省て次に云改たる趣なり

旅の御すがたながら我（御イ）○家へもより給はずしておはしましたりはや此御子にあひつかうまつり給へといふにものもいはずつらずゑをつきていみしく（じうイ）なけかしげに思ひたり

つらづゑ　支頤（ツラツヱ）ほゝづゑ也源ニ葵卷につらづゑつき給へる御樣と云々　概　○頭注云古今集なげきこる山とし高く成ぬればつらずゑのみそ先つかれける伊勢集「夜もすがら物思ふ時のつらづゑはか

ひなだるさぞしられざりける

解云○我御家へも　は抄本御字なし落凹物語三卷に入諸のことを我御殿にてし給はんとおぼせど若紫卷に我御罪のほどおそろしうなどあり○あひつからうまつり給へ　あひ云々と云事相思相戰なとは物を互にする意にて伊勢物語二十三段に相思はでは相思の反にて我はおもへど彼方には思はぬなり下の天羽衣段に相たゝかはむ心もなかりけりとあり自他相思自他相戰なるを今世の詞に相濟不ニ相替一などいと多く遣ふは唯添たる言にて意なしと聞ゆ宇治拾遺二十增賀を戒師に召たる處に年まかり寄て風重く成て云々參まじく候つるを態と召つれば相搆て候つるとあるは對る處なく今世の相濟不相替に似たれば古代も唯添てと云つるが又遂てのて字を脱せるかとも思ど猶いかがあらむ語の調も心ゆかず聞ゆめり又按に即相思の類にて翁が詞にたゞ仕奉給へと云べきを聊姫を傳て皇子と相互にと云意を輕く含めて相とは云るか猶未さだめえず○物もいはず　は抄本に從つ諸本いはでと有もよろし○つらづゑ　は俗にほゝ杖共臂杖共云りつらはほゝたり和名抄に野王按云頰

音挾和名豆良一云保々面旁目下也とみゆ甚く物思する時頰に手を掛肱を杖として打かたぶきたるなり枕册子九卷に如意輪は人の心をおぼし煩て頰杖をつきておはする世にしらずあくれに恥かし伊勢集の屛風の歌に夜一夜物思たる女の頰杖をつきたる處を夜もすからもの思ふ時のつらづゑは肱だるさぞしられざりけるかひなをかひなき意に係たり○おもひたりは校本にはおぼえたりとあり

此御子いまさへ皇イらイ何かといふべからすといふまゝにえんにはひのぼり給ひぬ翁ことわりにおもふ此國にみイ見えぬ玉の枝なり此たびはいかてかいなひまうさむ人さまもよき人におはすなどいひゐたり

いまさへ　今は何かといふ事もあるましきと也

否イナム　人樣も　人柄もよき人なりと也　○頭注云伊勢物語にいたじきのしたにはひありきて云々

解云○さら　は諸本さへと有らを誤てへに轉たるなり故改つ○何かと云べからず　は彼是と論に不及と云意也○云まゝに　は隨ての義にて俗に直にと云むが如し上に何をもちてかとかく申べきと翁の云へるを聞て其詞をたのみて縁に上り給ふなり

○えん　は和名抄屋宅具に唐韻云檐余廉反字亦作簷和名能岐屋檐

也また文選注云飛簷此間音比左志檐頭似鳥翅舒飛之狀也とあればえんはのきの字音をとりたるにて注よ今の板敷簀子を云ならんと思しはあらず鈴木朖云えんは今も云えん也漢字なるへしゐとほしの意なりと云れき下學集家屋門に椽也板敷と見えたりすのこともえむとも云しなり和名抄居宅具に唐韻切韻云簀音責功役式板敷簀子乃古床上藉竹名也とあるは古代の椽は簀子を張たれは板敷にしても猶古の名を用てすのこともいふし由を云るなり落窪物語一巻に左近少将四君の許に始て通給ふ處に格子のはさまに入奉りて留守のとのゐや見つくると己もしばし簀子にをり君見給へば云々格子を木の端にていとよう放て押あけて入ぬるに伊勢物語四段にあばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりてと有も格子より外い椽なるべし大和物語に貞眼宗貞少将五條邊にて雨に逢て或女の家に入たる處に男椽に上りてゐぬ云云簾の内よりしとねさし出たり引よせて居ぬとあるは此皇子の樣にも思よそへつべし○はひ　は師記傳波比岐神の下に云はひ入とはたゞ歩み入にて今世にも人をはひると云是なりはふとはいざゝかの間の處を步き行事也源氏物語などに家内などにて彼より此へ來る事なさんはひわたると多く云り後世には

虫などの行をのみはふとは云和名抄に虫行也波布日本紀に伏地之虫それも虫などは甚小き物にていさゝかの程をわづかに歩行く物なる故に云なるべく又人の匍伏て手と足として行をはふと云字鏡に匍匐波比由久とあり是も遠くは得行れぬ物なれば聊の間を行意より云なりと有此は匍伏の意にはあらで椽のもとに坐しがやをら歩み上り給ふなり未ゆるさぬを推て上り給ふよしなり○ことわりに思ふ　は我御家へも寄給はず旅の御裝束なから坐ましつればとく逢給はむとて上り給ふを尤さも有べき理ぞと思ふなり夕貝巻に夕貝君葬の處に右近が詞に烟にだぐひて慕參なむといふことわりなれどとあり○此たびは云々　は翁は貝物と思て左右に姫を勸る也○人ざまもよき人におはす　は澪標巻に宣旨の娘のことな人ざまも若やかにをかしければ藤末葉巻に夕霧の事を柏木の心人ざまの思さまにめでたきにとあり

かくやひめ○いふやうおやののイたまふ事をひたぶるにいなびまうさんことのいとをしさにほイとりがたきも得イのを○かくあさましくもてくる事をゆかしとは申つるをイ○ねたく思ひなむイはべるといへどイ○

永ヒタフル　一向と云こゝろ也ひたすらなといふもおなしこゝろなり　最愛イトヲシ　淺猿アサマシ　姤　一向にいなといはは

んもびんなければ得かたきとものを乞しにかくあさまにもちくればねたみおもふなり　辭（イナミ）　○頭注云哀不忍聽（イトチシカル）崇峻紀　此こゝろ也

解云○かくや姫の　抄本の字なし○おやの宣給ふ事　とは上に翁の申さむこと聞給ひてむやと云て女は男に逢事をす云々一人々々に逢奉給ひね云々門も廣く成はへるなど云へりし事なり其を我心の儘にひたぶるに辭て男せじとは親の志に不レ從が氣の毒さに申苦しくて謀計を以てえしも取給ふまじき物をゆかしと云難題を云て遁れむとしつるを思もよらず持來たるを殘念に思となり○ひたぶるに　はひたすらと云に同し頓字永字切字を書り伊勢物語十段に三芳野の田面の雁もひたぶるに君が方にぞ依と鳴なる桐壺卷に（更衣卒去の處に母上の詞に）灰に成たまはんを見奉りて今は亡人とひたぶるに思成なむ云々○いとほしさに　は俗に氣ノ毒ニ思フと云に似たり空蟬卷に（空蟬君脱すべして逢奉らざりしを小君に恨たまふ處に）二條院におはしましぬ有さまのたまひてをさなかりけりとあはめ給ひて彼人の心を爪彈をしつゝ恨給ふいとほしうて物もえ聞えず夕貝卷に六條わたりにも解がたがりし御氣色を引返しなのめならんはいとほしかし（源君始には强て戀慕てなびき給ふて後は等閑にし給ふを氣の毒なりと云り）○えがたき物を　は諸本取がたきとありえと書しを元と見誤て寫せるなるべし佛の御石鉢と云物取て賜へ龍の首の玉取て賜へなどあれば取にても宜かめれど猶此は得がたきの方勝れり故今改つ○ゆかしとは申つるを　諸本詞を多く脱して聞えず故今此九字補つ○かくあさましくもてくる事をなむ　諸本もて來たると有上に持て來りなど有ど此は必もてくると有べき語勢也なむ二字補つる由は下に云べし下（四十三丁）にかくあざましき虚言にて有ければ又（子安貝段縣の上に落たる處に）あざましがりて云々と有縣居翁云あざましは（憎ましなりと云れつるはいかがこは好方にも憎方にもいふなり）思の外なる事の甚しきを云故に多く驚たるさまに聞ゆと（勢語古意に）云れたり此說宜しくおぼゆ又呂熹が俗にアキレルと云意師のケシカラヌと云意なりと云れたるも然り此もとても得まじき物を取來たるを思の外なる事と驚あされたる由なり伊勢物語（四十六段）に昔男甚善しき友有けり云々月日へて遣たりける文にあざましうえ對面せで月日へぬる事云々（思の外久しく不レ逢よしなり）桐壺卷に（源君三にて着袴の處に）かゝる人も

世におはする物なりけりとあざましきまで目を驚かし給ふ夕貞卷に夕貞君人のけはひ甚あざましく柔におほどき[illegible]ほどきたる事の甚しきを云る[illegible]源君にかはりて思ひしよりも味小秦成也赤藤壺卷に上[illegible]門院十二にて入内し給ふに少いはけたる事なく云々あざましまでおとなびさせ給へり宇治拾遺卷三に[illegible]に思かけずあさましと思てあさましく嬉しけれ[illegible]行を考わたすべし○ねたく思侍るといへと猶翁は閨の内しつらひなどす　は諸本ねたく思ひ翁は云々とありかく七字を不レ補では文不レ通然侍ことゝいへど聞も不レ入と補つるを本居翁きゝもいれずと云意を猶の語にもたせて略たらむも宜からむと云れしに從つさて今侍ると補つるに付て上になんの辭を加つ本居翁も既く文の脫たりと知て詞を補置つと云遺されき斯て大概は聞ゆめれど猶不レ足心ちはすなり○ねたく　はねたむと同言也古事記宇佐由比の段に其神之嫡后須勢理毘賣命甚爲嫉妬レ有て字書に妬都故切同レ妬說文婦嫉レ夫也詩注以レ色曰レ妬以レ行曰レ忌と見えたれど物語文の類には俗にクチヲシ或は殘念など云意と聞えたり箒木卷に中川宿に空蟬と小君と物云を聞給ふ處にねぶたげに云て顏引入つる聲すねたう心留ても問きけかし[illegible]不レ勝な[illegible]人に不レ似心狀の猶さえず立離けるもねたく云々[illegible]似しは[illegible]君に不レ靡なはなきなれば再逆事にねたく口惜となり

おきなはねやのうちしつらひなどす翁御子にまうすやういかなる所にか此木はさふらひけむあやしくうるはしくめでたきものにとまうす

河社に蓬萊の山の玉の枝はうつぼ物語向ゆつりの卷に左大將殿おほいなるうみかたをしてほうらいの山のしたのかめのはらにはかぐはしきるゐをいれたり山はくらばうじゝうくのえからあはせたき物ともをつちにてつくり玉の枝なみたちたり文選に珊瑚をたまのえたと點せり寶樓閣經云上古生ニ三竹一金爲ニ莖葉一七寶爲レ根於ニ枝梢上一皆有ニ眞珠一云々小牕別記海外有ニ蓬萊閬苑一第一山曰ニ廣桑一有ニ瓊樹之林一又有ニ瑤林一云々海內十洲記曰玄洲有ニ金芝玉草一云々圓機活法曰玉枝漢武帝得ニ西那國玉樹一賜ニ近臣年高者一有レ病則枝汗云々

解云○しつらむ　は家屋を構へ座席を取繕などするを云り帚木卷に宮腹の中將は云々里にても我方のしつらひまばゆくして夕貞卷に源君六條何がしの院に至給處に御

車入させて西對に御座などよそふ云々預いみじく經營しありて假そめなれど淸げにしつらひたりとあるは御簾かけわたし凡帳褥など設よひふさまなり○いかなる所に歟　は蓬萊山中に何さまなる所にかと問へる也○めてたきものにも　の下に有哉と云言を略たり

御子（皇イ）こたへてのたまはくさをとゝしの二月の十日ごろに難波よりふねにのりて海中に出てゆかむかたも（はイ）しらずおほえしかとおもふ事ならて○世の中にいきて何かせんとおもひしかばたゞむなしき風に任せてありく命しなばいかゝはせんいきてあらん限り○か（はイ）くありきてほうらいといふらん山にあふやと海に（浪にイ）こぎたゝよひ○（こきイ）ありきて我國の内をはなれてありきし（ありきまはりしにイ）に

さをとゝしの　萬葉にをとゝしのさきつ年と云々
思ふ事ならて　玉の枝をとらてはと也　むなしき風に　王維送二鬼監一詩歸帆唯信風　命しなば　命なくはせひなしと也　（頭注云難波よりふねにのりて　神武紀云到二難波之碕一會下有二奔潮一太急上因以名爲二浪速國一亦曰二浪華一　萬十五大津の三つにふなのりこぎ出ていづれの島にいほりせんわれ

さをとゝし　さとは前也をとは遠也彼方と書て遠き意のことし

解云○さをとゝし　校本にはさいつとしと有をとゝしは一昨年（字ハ萬葉四に前年と書又六にをとつひを前日十七に乎登都日と有を六帖には一昨日ヽ作り）なれば猶又其前年をさせりさはさきを省ける言なるべし萬葉（卷四）に前年之先年從今年まで戀れど何も妹に逢がたきとあり俗にはたゞにサキヲトヽシと云り平春海翁（假字大意抄）に云前年の事を乎止々志と云乎登都日の乎登と仝同語と見ゆれば是をも乎の假字に定るなりをとつ日はをちつ日をとゝしはをちとしなり過去し方を差てをとゝ云は遠近ををちこちなど云をちにてとゝ通言なれは其義疑べき事に非ずをちは其語の本は彼と物を差て云言なるが自から遠き意あれば遠き事をも過去たる方をも云なりと云れき萬葉（六の二十四丁）に前日毛昨日毛今日毛見つれども云々又に十七山の峽そことも見えず乎登都日毛きのふもけふも雪の降ればさて是より以下の詞は徒に身はなしつとも云々の歌をことわりたるなり○二月十日　はきさらぎのとをかとよむべ

し○海中　は古本に海の中と有は悪しの字なくてうみなかと訓へし此事は下雷首段に云べし伊勢集御製に はうみ しるべする雲の船だになかりせば世を海中に誰かとはまし○思事ならでは　はは字寫本に従て加つ○唯むなしき風にまかせて　は何方を差て行べき援もなければ空しく憑まれぬ風に従てそこはかとなく漕行給ふ由なり○生てあらむ限は寫本に従ては字を加つ○波に漂こぎありきて　は諸本海に漕漂ありきて寫本波に云々とあり校本に従て改つ海に漕波に漕とては語を不レ成○我國のうちを離て　は外海大洋に出たる由なり○ありきまはりしに　は古板本まかりと有は飛かと思へど誤なり類本に従て改つ抄本此三字なしさてまはると云に二様あり物を中にして回ると又そこはかとなくまはるとなり佛足石碑の歌に此御跡を麻波利まつればと有は佛跡を中にして巡廻なり宇治拾遺巻一に一庭を走まはり舞と云るはそこはかとなく庭中を歩行まはるなり此も其に同し○鈴木氏云此皇子の答の詞同様の事の重なりたるは口に任たる虚言の躰なりと云れき按に此に生て何かせんと云て又命死ばいかゞせん又ありきと云言徒に四重たり次條に海底にも入ぬべく海に沈むとしき海の様なる物むくつけゞなる物草樹を食物としき貝を取て命をつくなど重なれり

ある時は浪あれつゝうみのそこにも入ぬべくある時には風に付てしらぬ國に吹よせられておにのやうなるもの○來て(出イ)ころさんとしき或時にはこしかたゆくすゑもしらで海にまぎれ(ずイ)んとし○ある時には(きイ)かてつきて草のねをくひものとし○或時○(にイ)はいはんかたな(くイ)きむくつけ(げイ)○なるもの(イナシ)ゝきてくひかゝらんうしさあ(としきイ)(ふときイ)(にイ)○は海の貝をとりていのちをつく

文選海賦於レ是漁子徂レ南極レ東或屑ニ沒於黿鼉之穴ニ或挂ニ罥於岑嶅之峯ニ或掣ニ掣洩洩於裸人之國ニ或汎ニ汎悠悠於黑齒之邦ニ或乃萍流而浮轉因ニ歸風ニ以自反これらの文勢によりてかけるなるへし　ころさんとしくひかゝらんとし　文選招魂東方長人千仭唯魂是索南方雕題黑齒得ニ人肉ニ祀以ニ其骨ニ爲レ醢この外夜國巴大濕などいふ國は今も人の肉を食ふとぞ　○頭注云鬼のやうなるもの　四聲字苑曰鬼ハ

人死ル神魂也宇治拾遺に僧伽多渡海の時惡風にあひて羅刹國に行し事なと見えたり　むくつけなるものゝ　蓄動氣と書おそろしきなり

解云○或時　と言此云に六あり抄本に始或時はと有て次三或時には末二に字なし寫本は都てに字なし類本は類書本の上一有のみ古本は始或時にとあり今は抄本に從て末二つに字を補つ按に始を或時はと云て次よりは或時にはと云る大祓詞に天津罪此云々國津罪此波と云る體又俗の高砂と云謡物に千秋樂は民をなで萬歳樂には命を延と謡へる全此と同語勢なりさて斯しも云並たるは文選海賦に於是舟人漁子徂ㇾ南極ㇾ東或屑ニ沒於黿鼉之穴或挂ニ罥於岑嶅之峯ニ或掣ニ々洩々於裸人之國ニ或汎ニ々悠々於黑齒之邦ニ或乃萍流而浮轉或因ニ歸風ニ以自反などあるに倣ニ據て書るなるべしと抄に云り　波あれつゝ海の底にも入ぬべく　は類本も字なし波のあるゝとは不ㇾ治を云て荒振神など云あらびあらぶに同し土佐日記正月十八日條に海あらければ舟出さず又一月九日條にゆくりなく風吹出てたげとすれども〻〻尻へ退に退く殆打はめつべし云々千早振神の心のある〻海に鏡を入て且見つるかな○鬼のやうなる物出來て殺さむとしき　は抄本出字なしとしきを類本にはとすとあり鬼の事は師の玉勝間十の三丁藤井氏の勢語新釋一の二十二丁に見え猶松の落葉と云書に委噞されたる由なれば此には略つ宇治拾遺六卷に昔天竺に僧伽多と云人商の爲に五百人の人を卒て船に乘て金の津に行けるに俄に荒き風に逢てしらぬ世界に吹寄せられけるにいみじうらうたげなる女ども出來ぬ僧伽多をはじめ人々やがて語らひ付て住ける程に此女日毎に三時ばかり晝寢す其貞の氣踈く見ゆるを怪しくおぼえたるに是より先にとられたる人のある所に到て此女の甚怖ろしき事を聞て遁るに舟もなければ補陀落山の觀音を念じけるに白馬出來り其に乘て海をわたる時女ども忽にたけ十丈計の鬼に成て十四五丈高く踊あがりて叫めゝしるかくて僧伽多天竺に歸て二年計すぎて彼女來たり僧伽多太刀を拔て殺さむとするを怒て女内裡に愁訴つ帝王其女の美顔を見て召上せて共に臥給ひつるに三日になりぬる朝日に血をつけて世間を見廻りして軒より飛が如く雲に入て失ぬ間に見れば帝王の頭一喰殘して有ける由今は要を取て記せり

かゝる物語に據てかけるなるへし○來しかた　はこしと訓べきを古板本にきしと作たるは惡し○行末もしらず　は抄本しらでとあり○海にまぎれむとしき　抄本き字なしまぎるといへ行たも不レ知さすらひ失るを云り若紫卷に（藤壺三條宮に退出給ひ源氏君訪給ふ時に）見ても又逢夜稀なる夢の內にやがてまぎるゝ我身ともがなとある注に此夢中にて我身も消亡たき由なりと云り○粮齎て草根を喰物としき　頭本此もとお抄本ら字なしかては字鏡に餱（胡溝反平乾飯也食也加禮伊比又保志比）和名抄に類（攷餅）に四聲字苑云餉（訓加禮比於久留俗云加禮比）以レ食遺レ人也また類（名類頭に）若聲切韻云糧（字亦作レ粮和名加天）行所レ賫レ米也又云儲レ食也と見え萬葉（五卷）常しらぬ道の長手をくれ〳〵といかにか行む可利豆はなしに一云可例比はなしになど行古へ旅行には乾飯を持行て水にほとばして食しを後に錢の通用出來て旅にて食物を買ふ其直をかりてとも省てかてとも云又食物を直にかてとも云しなり（さて乾飯ならでも旅の食物なかれひと云は古名もて呼るなり）○いはむ方なくを抄本なきと誤れり○むくつけゞなるもの　け字一古板本に從て加つ此けは其樣子を云言也抄本ものゝとあるの字一同本に從て除つむくつけしとは俗にオソロシといひ氣味ワロシなど云意なり夕貞卷に（夕貞君ハ雅姓しれぬ事な）名告せし給へ甚むくつけし又（條に）（御息所の物怪ニ夕貞君絶入たる處に）只此枕上に夢に見えつる形したる女面影に見えてふと消亡ぬ云々甚めづらかにむくつけゝれど云々又（物怪の事を末に）大方のむく〳〵しき譬へむかたなし○殺さむとしき云々くひかゝらむとしき　と云事抄にいはく文選（招魂辭）に東方長人千仞唯魂是索南方雕題黑齒得ニ人肉一祀以ニ其骨一爲レ醢なほ夜國巴大温（ハラヤイル）たと云國は今も人肉喰ふとぞ

旅のそらにたずけ給ふべき人もなきところにいろいろの病をして行方空もおぼえず舟のゆくにまかせてうみにたゞよひて五百日といふたつのこくはかりにうみの中にわづかに山見ゆふねのうちをなんせめて見る

船中の人をおこしなどしてせまりて見さする也逼○頭注云萬四八百日徃はまのまけこも我戀にあにまらめや沖津島守

解云○旅のそらにたすくべき人もなき所に　は諸本たすけたまふべきとあり按に助くなど作たりけ

んを助給ふと見誤て寫せしなるべし故今改つ宇治拾遺十三に（天竺に渡れる僧岩穴に入て不レ出處に）前を通る人に是助よと喚はりけれど耳に聞入る人もなしたすくる人もなかりけり〇ゆくへすらも　は寫本ゆくかたそら諸本行方空と有方はへと訓べしそらはすらの誤かと健冬が云に從て改つ猶按にゆかむそらもの誤かも知かたし〇五百日　はいほかと訓べし〇辰の時はかりに　は抄本に辰のこくとあり古板本に從て改つ玉蔓巻に（長谷詣の處に）辛して椿市と云所に四日と云巳時計に生る心ちもせでいき著給へり宇治拾遺巻十に（牛の失たるを求出たる處に）六日と云巳時計に坐に此牛歩み入たり云云など有〇遥に山見ゆ　は抄本わつかに一本にはかになど有何にても宜かめれど今は古本に從つ俊陰巻に（斧音な求て行處に）駿足（トキアシ）を出して剛き力を勵みて海河峯谷を越て其一年暮ぬ又明年も暮ぬ三年と云年大なる峯に登て見囘らせば嶺天に付てさかしき山遥に見ゆとある此に似たり〇船の中をなむ　は本居翁を字はよりの誤歟と云おこされき猶按によりとをと通へる事上（解一の四十九丁）に云しが如くなれば此もをにてよりの意とすべし〇せめて　は強てと云に同しく薄々と山の如き物の見えたるを強て山と見なして其意に成て能々見ろ由なり枕冊子に（木の花は）梨花云々あいなく見ゆるを唐に限なき物にて文にも作なるをさりともも有やうあらむとてせめて見れば花びらの端にをかしきにほひぞ心もとなく付ためる俊陰巻に（仲忠幼時身上を語處に）はか〲しくも身上をえ知侍らず母に侍る人にせめて問しか云々

うみの上にたゞよへる山いとおほきにてあり

列子曰渤海之東有二五山一岱輿員嶠方壺瀛州蓬萊也其上臺觀皆金玉也珠玕之樹叢生而五山之根無レ所二連着一隨二潮波一上下不レ得二暫峙一焉帝恐レ流二於西極一使三巨鼇十五擧レ首而戴二之迭爲三番一六萬歳一交焉これらの本文によりてかけるならん

解云たゞよへる　は著ところ定まらず動揺ことを云り箒木巻に（品定の段尼になれる女の話に）濁にしめる程よりもなまうかびにては却て悪道にもたゞよひぬべくぞ覺ゆる夕貞巻に（夕貞君の死たる處に）此程まではたゞよふなるを何の道に定りて赴らむとおもほしやりつゝとあり列子に五山之根無レ所二連著一隨二潮波一上下不レ得二暫峙一焉と云る即たゞよふなり

その山のさま高くうるはしこれやわがもとむる山ならんとおもひにさすがにおそろしくおぼえて山のめぐりをさしめぐらして二三日ばかり見ありくに

徑循　あちこちとありくなり　又棹さしめぐるなり

解云我もとむる山ならむとおもへと　は諸本おもひてど有に從てとくのほらむとおもへどと補つれど今二字改てよく聞ゆめり

天人のよそほひしたる女山の中より出來てしろかねのかなまるを持て水をくみありく

かなまる　順和名曰日本靈異紀云其器皆鋺和名加奈末利洛陽伽藍記云以金錐汲水五色絲爲緶云々宇治拾遺にかなまりと云々　河社に天孫の海神の宮にいたり給へる時のさまを神代紀にかゝれたるをまなべり　日本紀云彦火々出見尊至海島就其樹下徙倚彷徨良久有一美人排闥而出遂以玉鋺來當汲水

解云○天人のよそほひしたる女云々　河社に此段天孫の海神の宮に到給へる時のさまをまなべりと云れき古事記（海神宮段）に火遠理命即登其香木以坐爾海神之女豐玉毘賣之從婢持玉器將汲水之時於井有光仰見者有麗壯夫云々とあり○かなまりは和名抄（瓦器類）に說文云盌烏管反字亦作椀辨色立成云小盂也また（金器類に）金椀は日本靈異記云其器皆鋺（俗云賀奈萬利今按字所出未詳古語謂椀爲磨利）宜用金椀二字落窪物語（巻三）に白銀の金盌一具枕冊子に（あてなるもの）削氷の甘葛に入て新しきかなまりに入たるなどあり

これを見てふねよりおりて此山の名を何と○まうすとふに女こたへていふこれはほうらいの山也とこたふこれをきくにうれしき事かぎりなし此女○かくのたまふはたそととふ我名はほうかんるりといひてふと山の中に入ぬ

寶嵌瑠璃なるべし　仙女の名にや又くらもちの御子いつはりて名乘にや○頭注云ほうかんるり仙女の名なるべしされはふと山の中に入ぬといへり

解云○船よりおりて　は舟より陸に轉を下と云り然を陸は高く舟は低ければ心得たがひて今の人は舟より上るなど云めり舟には乘と云は舟を出るを下と云べきことなり下（巻三）に（大伴大納言）松原に莚敷てお

ろし奉るといひ土佐日記（正月十三日條）に便よろしき所に
おりてゆく椎本卷に（匂宮長谷詣のついで宇治宮を訪給ふ處に）故ある宮なれ
ば人々心して舟より下給ふなとありされど中右記
（玉勝間卷五に引り）寛治八年八月十五夜（鳥羽殿月見御遊の條）に寄二御船一於
東渡殿一上皇令レ乘給云々夜及二三更一從二御船一令レ上
給了と有は御舟を下て御殿に上給ふ事なれどもお
ると云言を忌て書給へるにて格別の事なるべし〇
此山の名を何とか申と問に女こたへていはく　は
か字今補きに字抄本にありいはく古板本に從つ諸
本いふとあり松下枝卷に（後三條天皇住吉詣の條に）こゝはいづこ
ぞと問せ給ふ東宮大夫（能長）そ傳へ問給ふ是は長柄と
なん申と云と有地名をとふに凡てかうやうに云り
こゝは此山のと有故何とかと云り〇かくのたまふ
は誰そととふ　と云も地名を問に同格なり〇ほう
かんるり　は皇子の僞作給へる仙女の名なり
その山をみるにさらに上るべき樣なし其山のそはひ（づイ）
らをめぐれば世の中になき花（イナシ）〇木（のイ）どもたてり（りイ）こが
ねしろかねるり色の水山よりながれ出たる
そはひら　岨（ソハヒラ）爽山のかたはら也　るり色の水　博
物志云崑崙山出二五色之水一また佛經に餓鬼見レ水

爲レ火天人見レ水爲二瑠璃一云々　〇頭注云郢曲に蓬
萊山には……いはほがそはにかめあそぶ云々
解云〇登べきやうなし　は嶮岨て上り得ざる由な
り〇そはづら　は諸本そはひらと有も惡からねど
古本に從つ忠見集（歌の詞書）に山づらなる女の家に云々
かげろふの日記（上の五ノ五丁）にやまづらをみれは霧ぞげ
に麓をこめたる（解環に改たるよろし）など云りそは嶮岨しき處
を云り〇花の木　はの字古板本に從て補つ〇こか
ね白かね瑠璃色の水　は博物志に崑崙山出二五色
之水一と有をとれる歟

それにはいろ〳〵の玉のはしわたせり其あたりにて
りかゞやく木ともたてりその中に此とりて持てまう
で來りしはいとわろかりしかどものたまひしにたが
はましかはと〇（てイ）この花を折てまうできたるなり山は
かきりなくおもしろし世にたとふべきにあらさりし
かど此枝をゝりてしかはさらに心もとなくて船に乘
ておひ風吹て四百餘日になんまうできにし大願〇（のイ）力
にや難波よりきのふ南（なむイ）都にまうできつる更に鹽（潮イ）にぬ
れたる衣〇（をイ）だにぬぎかへなでなん（イナシ）たちまうてきつる（こイ）
とのたまへは

てりかゝやき 神代卷に云臺宇玲瓏 たがはましかば かくや姫のあつらへしに違はゝあしからんと也 便風（オヒカゼ） きのふ南都に 此比の都ならの京と見ゆ ○頭注云四百餘日四百よひと讀べき歟蜻蛉日記にはつかよひのほどゝ書りうつほ物語菊宴卷にはやよひ十のよひばかりにはじめて已いてきたれは云々 難波よりきのふ南都に 恐くは是南都にあらざるへし難波よりきのふなんみやこにといへるなるべし桓武天皇延暦十三年遷ニ都山背葛野郡一給ひしより新京北なるに對して舊都を南都とは稱するなるべし奈良の京の時南都とはいふべからず又平安京の人南都へ行べきいはれなしさればきのふなんみやこへといへるをあしくひつゞけしなるべし

解云○いろ〳〵の玉の橋 は下卷三の火鼠裘を入たる匣の如く種々の玉を合成たる橋なる由なり○照耀樹 は金銀珠玉の花咲たる木なれば也○此採て持てまうで來たりしは は抄本に從つ此字古今これとあり寫本に持てなく印本にまうてなし○たがはましかばとて はて字校本に從て補つ種々の金銀珠玉を取交て甚めでたく花咲たるが多かりしかど姫の宣たまひしに違て心に叶はでは惡からむとて其たがはぬは佗（ヨソ）いよりはわろかりしかど是を取來しぞと也まうでは姫の許を貴みて云言なり○山は限なくおもしろし は蓬萊山の景色のよきを云り校本におもしろくとあれど諸本によりつ○更に心もとなくて は師云おぼつかなく心もとなくと云は待遠なる意に多く云りと云れたり此は赫映姫にとくあはまほしくてといふ意なり下天羽の段に天人おそしとこゝろもとなかり給ふ伊勢物語八十三段に御送してとくいなむと思ふにつかばさざりけり此右馬頭心もうとながりて若紫卷十九丁に山水に心とまり侍ぬれど内よりおぼつかながらせ給へるも恐ければなど多かるを可ㇾ考 蓬萊の山のさまたとしへもなく甚めでたくて心をとゞめて能々見まほしく思しかど此玉枝を得てはたゞ赫映姫に逢まほしくていかでとく本國に歸らむとのみ思て其山の景色のめでたきにも心もかゝらずとく舟に乘ぬとなり更にとは姫の戀しさは元來暫も忘るゝ隙はなけれど此玉枝を採得て既に逢べき方便なりぬれば一

入戀しさの進める由なり〇追風ふきて　は類本に追手の風と有もよろし風はチともシともいふなりはやちをはやてとも云如く追手は即追風なるべしかくて嵐の風と云如く重て云る言なり〇四百餘日は校本によほかあまりとかき頭書に四百よひと訓べきかと云かけろふの日記にはつかよひ菊宴巻に三月すのよひばかりとあり是等は書さまの惡きなり始は二十餘日十餘日と書たりけんをハツカアマリトヲカアマリなど訓へきに二十よ日十よ日と餘字を假名に作る誤よりヨヒとひが訓せしなり皆改べし本居翁こゝは字音にてシヒヤクヨニチと唱べしと云おこされき蓬萊より歸路の日數なり〇大願の力　は諸本大願力と書り本居翁タイクワンノチカラと訓べしと云れしに從ての字を補つ疑巻に御堂供養の處に殿の御前佛の御前にて三昧の火をうたせ給ふ此大願のちからによりてと有例なり〇きのふなむ都に　を抄本にきのふ南都と作るはわろしなむは辭なるをや〇しほにぬれたるきぬをだに　は誠らしきさまをけやけく見せ給ふ由なり抄本を字なきは惡し〇こち　は此方なり萬葉七巻に我せこをこちこせ山と人はいへど君もきまさぬ山の名にあらし六帖第五笛題にから竹のこちくの聲も聞せなんあなうれしとて思知べく笛竹の池の堤は遠くともこちくてふ名は忘さらなん呉竹を此方來(コチク)と添たり　印本にこちをたちと誤れり寫本に從て改て補つ

翁歌 翁きゝてうちなげきてよめる

くれ竹の世々のたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し

翁が野山に竹をとりし時もかゝる苦しきめは見ざりしと也　呉竹(クレタケ)　さやは　とは左樣にと也　〇頭注云くれ竹の世々の竹とりとは竹にはよと云もののあればそれにそへて翁か年ふりたることを世々の竹とりとはいふなりかく老ぬるまで竹をとるとて野山にまとひありけともと也さやはといへるも竹の縁語也古語拾遺に佐夜懇(サヤケ)竹ノ葉之聲也　云々　萬二人丸さゝのはのみやまもさやにと云々又第二十さゝのはのさやぐ霜夜ともよめりふしをのみ見しといへるも竹の縁語也

解云〇きゝて　は寫本になし〇打なげきて　は皇子の僞言を翁は眞實と思ていたく感てあはれ〳〵

と歎息て歌よめるなり○歌呉竹の世々の竹とるは年久しき山なり一首の意は翁山野に交て竹をとる事久しき程に種々艱難はしつれども今皇子の物語給ふ如く打續きて辛苦のみはせざりしとなり諸本竹とりと有はわろし校本に従て改つよふしは竹の縁語もてよめり

是を御子皇イ聞てこゝらの日ごろおもひわび侍つるこゝろはけふなんおちゐぬるとのたまひて返し

車持ミコ
わかたもとけふかはければわびふイしさのちくさのかずもわすられぬべしとのたまひ

こゝら　おほく也　黄葉のちりてつもれる我宿にたれをまつむしこゝらなくらん　おちゐぬるとは安堵すると也　ちくさの　多くのおもひもわすらるゝとなり　○頭注云幾許コヽラ萬

解云○是を皇子きゝて云々　は翁が眞實と思て感て歌まで讀つれば既に聟に成り奉りぬべく思ほして心落着給ふなり○落居ぬ　は思侘て騒し心の治まり着なり俊陰卷に俊陰女子産し時嫗の詞に今は心おちゐにたりかゝる寶を持て何事か思ほすべき桐壺卷に帝源君を愛し給ふによりて若や春宮にも一の皇子朱雀の御母安心なかりしを明年の春坊一の皇子に定り給

云々女御御母こきでんも御心おちゐ給ひぬなど有○歌我たもと云々　は年來戀泣し涙に濡し袖も今日かくや姫に相逢こと定ぬれば心落着てかわき遠き海を渡りし千辛萬苦種々の艱難も忘果ぬべしと也○の給ふ　は寫本に従つ類本抄本の給ひ㨗と有もよし

かゝるほどにをとこども六人つらねて庭にいで來たりイ○一人の男ふ○みイばさみに文をはさみて申

ふばさみに文　訟の文を竹などにて挾む也　○頭注云今昔物語にふはさみに文をさしてと云々

解云○男ども　は類本どもなし○出來たり　は抄本たりなし○ふみはさみ　は寫本に従つ諸本ふばさみと有其も惡にはあらず大鏡にふんばさみ内裏式に插書杖西宮記に奏杖又書杖など有とぞ或書引るあて宮卷に治部卿あて宮春宮に参給ふを恨給ふ處にうれへ文をつくりてふむばさみにはさみて出立給ふと有は治部卿みづから持行給ふなり又宇治拾遺十一に忠恒兼ての支度にたがひて我既に攻られなんず云々と云て名簿ミヤウブを書てふみはさみに插て云々郎等にもたせてともあり此は内麻呂忠文を書て自捧持て來たるなるべし

つくも所のつかさイ
くもむづかさのたくみあやべのうちまろまうさく玉

の木をつくりてつかふまつりし事こ國をたちて千餘（五穀イ又イニハ心なくだきてトアリ）
日にちからをつくしたる事すくなからずしかるにろ
くいまだたまはらずこれをたまひてわろきけこに給（はりてわかちてけごにイ）（りイ）
はせんといひてさゝげたる
公文司（クモンツカサ） 綾部（アヤベ） 内麿（ウチマロ） くもん所の下役なる
べし こ國は此國なり 祿 餼子（ケコ） 祿をたまひて
餼子の料にせんとなるべし けことは飯櫃のこと
也 ○頭注云五穀とある異本宜歟 あやへ疑くは
漢部歟綾部の姓未考神功紀今桑原――漢人等
始祖也云々官職知要に漢部と見ゆ 祿玉編祿賞賜
也 伊物に手づからいひかひとりてけこのうつは
ものにもりけるを見てと云々闕短抄家子と書とい
へり
解云○作物所のつかさのたくみ 抄本につくも所
くもむつかさの工校本につくも所もくつかさの工
古本つくも所に類本の字なささを今補てとりつ拾芥
抄中本に作物所（在進物所西有別當預熟食同書所内竪）また中本内作物所小府
監ともありリ字ノ字を省て呼名目なり西宮記に改
鑄云々令勘錢文云々令書字樣奏聞賜作物所彫

定云々下鑄錢司云々（玉勝間卷十に引り）續後紀に承和十五年
三月甲子永安門西廊有火云々初是作物所冶師（カヂ）行
火之所延也吹上の上の卷に（吉松か家の體の畫を注たる處に）是は作
物所さいく三十人ばかり居て沈蘇芳紫檀らして割
子折敷几どもなど色々に造るろくろしども居て合（ゴ）
器（ギ）ども同し物してひく云々是は鑄物師の所云々こ
こは鍛冶屋云々（按になしきつくゑの細工のろくろしいもじがち皆始作物所と云内にこもれり）月宴
卷に右の頭には作物所の別當右近少將爲光云々つ
くも所の方にはおもしろき洲濱をゑりて汐滿たる
形を作て色々造花をうゑ松竹などを彫付ておもし
ろしなどあり○あやべのうちまろ は匠司の姓名
なり拾芥抄本中に（姓尸の部宿禰の條）漢部とあり姓氏錄に漢人高
安漢人川内漢人などに見ゆ漢部と云姓は見えず○つ
くりて仕奉し事 はて字抄本に從て加へつ○心を
くだきて は抄本にこ國をたちて類本に五穀云々
他本に五こくなどある皆誤也抄にこ國は此國なり
と云り此國をコクニコヽクなどは云べきにあらず
もし此國を立ては皇子に從て蓬來に到りし事を云
かと聞ゆれど此は其僞を露顯はす處なれば不合
又類本に五穀を斷てとあるも此に由なし假名にて

こゝくと書し故に古國の方（字音）とも五穀とも誤れるなり今按に心ろをくたきてなりく（ろかくにこなちに誤たを脱せるなるべし）故改つ心を砕とは此は玉枝つくるべき工に心を勞し事也力を盡しは其細工に骨折しにて心を摧（クダ）き力を盡すと對へ云り落凹物語一（卷）にあこぎ唯一人して云合へき人もなければ心一を千（ヂ）になして萬葉集十（卷）に雨ふれば瀧つ山川石にふり君之摧情はもたず（君に心砕は掛ましきしなり）匂宮卷に（女一の宮に係想し給ふことな）三宮年にそへて心をくだき給ふめる院の姫宮云々などあり○ろく　は祿字の音なり欽明紀に（十七年條）頻賞祿皇極紀（四年條）に將レ給レ祿孝德紀（二年條）に重二其祿一天智紀（元年條）に褒賜二爵祿一なとあり君より賜ふ物を云り是を被物（カヅケモノ）と云は君より賜物大氏絹布衣服を得てかづくより云るなるべし嵯我院卷に（左大將政賴神樂し給ふ處に）よしのり此神樂のことさるの饗の事及祿とも物の師（樂人なり）とねりどものろくに賜ふべき布の事など定給ふ云々皆ざゑ名のりす云々あなかまはやとて被わたり皆人ぬ云々ざゑの男公達に御衣脱て皆々かづけ給ふなどあり○是をたまなりて　は類本に從つ抄本にたまひてと有は惡し師云たまひたまふと云は物を授る方に付

て云言なり賜はりたまはると云は受る人に付言なりと云れき然れは此はたまはりと云べき處なり印本寫本に給てとかけるは何とも分別がたし此詞たびてと云もよしたびは賜通なりマヒを約てビマフを約てブとなりマハリを約てヒ｜マハルを約てブ｜となれり土佐日記（二月九日の條）に御舟より仰たぶなり云々はたまふ也○わかちて　は類本抄本にわろきとあり他本には此言なし按にわかちての誤なるべし（かなろにちをきに誤て字を脱せるなり）配分して家子にとらせんとなり○けご　は家子なるべし伊勢物語（二十三段）にてづから飯匕（イヒガヒ）をとりてけごの器物に盛けるを見てと云るけども同し萬葉集一（卷）に去來子等（イザコドモ）早もやまとへ大伴の御津の濱松待戀ぬらむ（卷三卷二十にも同さまにあり）とある子等とは妻子奴婢なと凡て自己に從者を云と師いはれき即家人にて家の子の古言なるへし谷川氏（和訓栞）の説にけごはげすの事にや家兒なり上總にて下部の事を云りといひ余か飛驒國の詞に一家に在人を算るに誰が家は何人（イクタリ）けごなど云り今は其家の主從（ズサ）ともにかぞふるに云へども本は家子何人など從者にのみ云けんかし此も内麻呂に從て下につかはるゝ細工人

を云なるべし按に家を古くやか家持カモチヤといふカをケに轉てやけ三宅なミヤケ宗在と云りかくてヤケコと云けんを省て終にけごと云ふるべし家字の音にはあらずヤカと云に別にあり顯昭法橋散木集注に流しつるけごのみわ器枝篠の中にてさやたの早苗採もやられずとある歌けごは笥子なり伊勢物語にもけごの器を書りと云る顯注抄に說るなれたりよくかなへり笥子籠子の事としては下に又うつはものと云ては同物重なりて聞ぐるし家子とする時は是も彼も妨なく解安し○たまはせむは俗にモラハセツと云意なり

竹とりの翁此たくみらがまうす事は何事ぞとかたふきをり鼻イ御子はわれにもあらぬけしきにて肝消ゆべき心地してイきもきえ○ゐ給へり

住よし物語にわれにもあらぬこゝちしてかへらせ給ふ　○頭注云かたぶきをりとは翁何事かと耳をかたふけて聞也中務集に川水にかけのかたぶく青柳は蛙の聲をあはれとやきく

解云○かたぶきをり　はを物怪しみ審しみて其由を思ひ案するさまなり桐壺巻に高麗人源君の相を考る處に　相人驚てあまたゝびかたぶき怪しむ國の親と成て帝王の上なき位に上るべき相おはします人の其方にて見れば亂思ふる事やあらん公の固と成て天下を輔る方にて見れは又其相たかふべしと云とあり此も玉枝を眞物と思居たるを加此云來たれは翁は甚く怪しと思へるなり師説に居住有と同格の語言にて語の終にてもをりと云なりと記傳に云れたり○我にもあらぬ氣色にて　はしたくみ事あらはれて現し心もなく魂も身に不副なり新撰集一に人てふる心ばかりは其ながら我は我にもあらぬなりけり樺巻に朧月夜君の里居の間に源君通給ひて在ける時父大臣源君の帶疊紙など見付たまひし處に紛はすべき方もなければいかゞはいらへ聞え給はむ我にもあらでおはするを宇治拾遺七巻に長谷に籠て幸得し傳に　えもいはずよき馬に乘たる人云々此馬急に倒て只死に死ぬれば主われにもあらぬけしきにて下て立居たりなどあり

○肝きえぬへきこゝちして居給へり　は類本に従て八字補つ無ても聞えはすれど言不足こゝちす

是をかくやひめきゝて此奉る文をとれといひて見れは文に申しけるにイやう御子の君千餘イ○日いやしきたくみらともろとも○同所にかくれゐ給ひてかしこき玉の枝をつくらせ給ひてつかさもイナシたまはらんとおほせ給ひき是を此頃あんずるに御使ひとおはしますべきか

くやひめのえうし給ふへきなりけりと承て此宮より給はらんとまうして給ふ（賜はろイ）べきなりといふをきゝてつかさも給はらんと　内匠の司などになさんとのたまひしと也　これを此ごろ玉の枝を持てかくやひめの方へ入給ふべきとなればかくや姫よりろく給はらんと也　えうし給ふべきは用ひ給ふべきといふ事也　○頭注云貴　重　共にかしこきと讀りんと（日本紀）　此頃案するに己下の詞未詳　つかさも給ら一人少允二人大屬一人少屬二人云々とれにても　顯宗紀授官と有　内匠寮頭一人助一人大允歟　用はよう要はえう歟

解云○此奉る文をとれと云て見れは　は姫に仕る人在さまにて赫映姫文を可ニ取來一と侍女に云付て令取て見れはの意なり甚く略たる文なり奉る文とは皇子に内麻呂か奉れる由なり枕册子に（法興院近き二條の新殿）に渡給ふ處に内（一條天皇）より御使にて式部亟栞まゐれり御文は大納言（伊周公）とり給ひて殿（道隆公中宮の御父）に奉らせ給へば引ときていとゆかしき文かな許され侍らばあけて見侍らんと宣給はすればあやしうと（中宮定子）おぼいためりかたじけなくも有とて奉らせ給へどとらせ給ひてもひろげさせ給ふやうにもあらずもてなさせ給ふと有を考て其さまを知べし○文に申けるやう云々　此文詞の終さたかならず是を此頃案するにと云るよりは内まろか口自申言と聞ゆめり文の意を得て云さまにかける歟鈴木氏云茲は文詞にて口狀にはあらず但し終の處少し聞え難し誤字あるにや赫映姫文をとりて見たるよしこそあれ口狀を更に云べきにあらずと云れき賜はるべきなりと云まで文言と見れば有を見てと有べきなり云を聞てにては不叶が如し○千餘日　の餘字上の文によりて加つ○諸共に　のに字抄本になし○かしこき　は上なるも同意にて此は甚しく俗にタイソウナルなど云心ばへなり○つかさも賜はんと　は抄本にたまはらんと有はわろし古板本に從てら字を除つ上にも云如く賜はらんは俗にモラハウと云に當りて受方に附て云言なればば此に不レ叶賜はんは俗にクレウと云に當りて授方に云言なり此も官を與へむと仰られつるなり顯宗紀（十一丁）に授レ官とあり○御つかひとおはしますべき　は下（御狩行幸の段）にかぐや姫答て奏す己が身は此國に生給で侍らばこそつかひ

給はめとあり本は嗔仕る事なるがおのづから御娶
ます事を合たる言となれり古事記玉垣宮段に丹波彦多
々須道大人王の女の事を茲二女王淨公民故宜レ使
猶大山祇神女の條推古紀の御歌など可レ考藤原君卷に三春のたかもとの事を年の高く成
まで妻もまうけずつがひ人もつかはぬ人なりなど
有て今世にも妾をメシツカヒツカヒモノなど云に
同し然ば此も御つかひ人と有けんを脱せる歟俊陰
卷に俊陰本後一人のつかひ人ものこらす空木の條に椎栗其
水に落入て流來つゝ云々つかひ人ひとり得たらん
やうに便有ておほゆとあるは常の使人にて妻妾に
はあらねど使人と云例に引つ人字なくても聞ゆれ
は補ざりき唯妾たるべきと云意と心得て宜し○え
うじ　は要字の音にて俗にホシガルと云意なり武
備志第二百三十一卷譯語の下に要ホシ攻求不要イヤ依也と見ゆとぞ異稱日本傳に
載たる　新猿樂記に十四御許大君貪欲要レ物今昔物語に載たる
此物語に籠を作て要ずる人にあたへてなど猶物語類に多あり
○此宮より　は即かくや姫の家をと云聞ゆ此皇子
かくや姫に住給ふべきなれは宮とは云るなるべし
○賜はらんと申てたまはるべきなり　は抄本に給
ふべきと有はわろし此詞いかにぞや聞ゆれど俗語

に轉せばよく聞ゆ此宮より可レ被レ下由を申てモラ
フべきなりと云るなり
かくやひめくるゝまゝにおもひわびつることゝちわら|ゑみイ
ひさかえて翁をよびとりていふやうまことほうら|○にイ
いの木かとこそおもひつれかくあさましきそら事に
てありければはや返し給へといへば翁こたふさた|○さくイ
かにつくらせたるものと聞つればかへさんことい
とやすしとうなづきをり
くるゝまゝに　とは心地もくらく思ひわつらふ也
笑ひさかえ　とは顏色の直りたる也○頭注云安サ
定ダガ紀　或人云源氏物語にゑみさかえとありこゝも
笑さかえと有しを寫誤歟云々按に明石卷に老もわ
すれよはひのふることゝちしてゑみさかえてといへ
り此說さもと覺ゆ可用歟住吉物語にはゑみまけて
ともいへり　笑儲エミマケ
解云○かくや姫暮るまゝに　は類本に姫のとあれ
ど諸本になきぞよろしき日暮ては逢べき期に近づ
くを日の暮行にしたがひて追々せまりて思侘たり
しが玉枝を僞と知て甚々うれしき樣也○ゑみさか
えて　は校本に從つ諸本わらひさかえてと有笑と

書てヱミと可レ訓をわらひと假名に寫せるにて咲榮てなり古事記に（八千矛神の御歌に）朝日の惠美佐迦延伎豆明石卷に（入道源君を見て云言に）老も忘れ齢のぶるこゝちしてゑみさかえてとあり○誠に蓬萊の木かとこそ　はに字古板本に有に從つ類本か字なし此度は翁も姫も始より无レ疑寶物と思をりたるさまなり○はやとくは寫本に從つ諸本とく二字なし同意の言を重たるなり師（大祓詞後釋に）云萬葉に眞蘇木綿（マソユフ）と云は眞佐木綿にて佐を眞の意とする時は眞佐と同事の重なるはいかゞと思人有べけれど眞と佐とは意を通て言ば異なる故同意を重て云事萬葉にさはにおほみとなども有が如しと云れき此も其例なり○さだかに　を類本にさすかにと有は惡かるべし書紀に定字また不欺と書たるをサダカ不貞をサダカナラズと訓たり師の古今集遠鏡にさだかと云言をシッカリトと譯されたりうなづきをりは寫本にうなづきてと有は惡し谷川氏云うなづくは點頭を云項槃（ウナジン）なりと云り遊仙窟に領狀を訓り諾よしを形狀にて知らするなり帚木卷（品定段）に（頭馬）不繫舟の泛たる例もげにあやなしさは侍らぬかと云ば中將うなづく又すきたわめらん女には心おかせ給へ云々といましむ中將例のうなづくなどあり

かくやひめ（赫夜姫）の心ゆきはてゝありつる歌のかへし

まことかと聞てみつればことのはをかざれる玉のえだにぞありける

といひて玉のえだもかへしつ竹取のおきなさばかりかたらひつるがさすがにおぼえてねぶりをり御子（皇イ）はたつもはしたゐるもはしたにて居給へり日のくれぬればすべり出給ひぬ

こゝろゆきはてゝ　とは心はれゆく也　ねぶりをり　とはしらぬ顔にて居也　○頭注云心ゆきはてゝ　萬十二忘哉語意遣集雖過不過猶戀（ワスレメヤモノカタリシテコヽロヤリスグレトスギズナホコヒシケ）こゝろやりはなぐさむたり萬葉に意遣を多くナグサミとよめり今心ゆきはてゝとあるも心やりといふに同し狹衣に物などげによげにおくすれば心ゆきはてゝと云々　さすがにおぼえて　さすがといふ詞本（ト）をわれぬ意あり前に翁玉の枝得たまひしやうなどくはしくとひ聞て呉竹のよゝの竹取野山にもさのみわびしきなどよみかはせしをうけて書けり　御子はたつもはしたゐるもはした　はしたは半なり中

間に有ていづれへもつかぬといふ俗に立もたゝれずも居られずといふが如し孫姫式「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしたに我家なりぬべらなり

解云○心行はてゝ　はいふせかりし思のおのづから晴行を云心を遣思ひ遣と云は憩と晴し遣云なりはてゝは露計も殘らす思の无なれるなり○有つる歌　とは玉枝に附たりしいたづらに云々の歌なり　○歌まことかと云

云　は皇子の艱難辛苦して海を渡て取來給ひし由を演述給ふ事を眞實と承て玉枝も實に蓬萊の物ぞと思て見つれば然にあらず皆僞事にて唯言語を眞實らしう餝こしらへ給へる玉枝にて侍けるよと也珠玉は物の餝とする物なれば錺れる玉とは讀るなり詐字をカザリと訓り雄略記九年條に新羅を伐に將軍紀小弓宿禰役地にて卒しぬ其子兒大磐宿禰役地に到て將小鹿火宿禰が掌る兵馬船官及小官等を執るを小鹿火深怨て乃詐告ニ於韓子宿禰一曰大磐宿禰謂レ僕曰下我當中復執ニ韓子宿禰所レ掌之官一不上久也云々と有は韓子宿禰が承諾べく言語を錺詐れるにて此に同し又詐意はなくて詞を美麗くするをも云り續古事談第二臣節の部に陣の定文かくと云事は云々されことに詞をもかざらす云人あれば其心を取て

我詞をつくりていみじくかきなす悅目抄に大方歌のよきと云は心を先として珍らしき節をもとめ詞をかざり讀べきなり心あれども詞かざらざれは歌おもてめてたしとも聞えず俗しくあしき言を去て雅かによき言を以したつべき事を云り○玉枝も返しつ　は歌の返しに添て玉枝も返しつとなり返すと云言を疊たる秀句なりも字心を付べし○さすが　は俗言もたがはず伊勢物語二十四段にあはじとも云ざりける女のさすがなりけるが許に云遣けるとあるを藤井氏に新釋云さすがと云はわろき事の中によき事の有に付て云言なりと云れきしかしながらさりながらなど同言なり萬葉にはしかすがと云り其を約てさすがと云なり此は僞事既に顯ぬればいたはるべき事にはあらねど翁は玉枝を實と思ひ姫を皇子に合奉らむと思つれば親しう談合し事をさすがに氣の毒におぼえて目を閉て眠れるさまをなして物不云で居なり○立もはした居もはした　は校本に二所ながらはしたなとありなはなしの略なるべしな字なきが宜よしは下に引る落凹物語もて知べしはしはしたはしたなしと云皆同言なり上にも不レ達下にも不著中間にたゞよひた

るやうの事を云り故に迷惑たる意不都合なる事不レ足ことと俗にテモチブサタと云意つきなき事よるべたき事などに云り姓ははしひとを間人と書此岸より彼岸にわたす物を橋又はしふれと云器物より口中へ渡すものを箸と云も中間に有意なるべし澪標卷に赤石上住吉詣し給ふに源君も參合給ひたる處に甚はしたなければいかゝせんと思惑ふなり立交數ならぬ身のいさゝかの事せんに神も見入給ふべきにもあらず歸らんにも中空なりと有中空を思べし半字をはした百に不レ足十に不レ足をはしたと云も未滿よしなりあひあひだなほとなども同意なり古今集雜下世の憂事をよめる歌の中に木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬべらなり遠鏡にドチラヘモ不着物ニと譯されたりと有を孫姫式にははしたに我身とあり後選集戀四題しらず伊勢家集には思事有ける比身の程をしればはしたに成ぬべし思へば胸のこがれのみする我身の嘆しきを思へば乞願事もおぼつかなく叶まじきを歎意なりはしとはしたと同意なる事を知べし伊勢物語初段におもほえず古郷にいとはしたなくて在ければと有を契沖法師はなまめきたる人の住べきさまにもあらぬ古里に落着ぬやうにて有を且は憐む意にいとゞ心ち惑ふなりと云はれきよき家によき人の居るは付々しきを荒かる宿に佳人の有は附なく事たらはぬさまなり桐壺卷に更衣を妬人の多事を云處にいとはしたなき事おほかれど又帝にめされて朝局に歸處にえさらぬめだうの戸をさしてめ此方彼方心を合てはしたため煩はせ給ふ時もあり上のはしたなき事と云る注のことし是は迷惑する事なり箒木卷に品定段三上二丁に歌よむと思へる人の云々すさまじき折々讀掛たるこそ物しき事なれ返しせねば情なしえせざらむ人ははしたなからん云々出過て歌讀人なれば面白しとも思はぬ事故返しせざるも情なくむつかしとて返せぬも付わろくいゝかせんと惑さまなり若紫卷に北山の聖のことなかうやうなる人驗あらはさぬ時はしたなかるべきも唯なるよりはいとほしう思ひ給へつゝみてなんいたう忍て侍つる云云此聖驗の名高きを若驗なくては源君のいかめしうして祈らせ給ひてはすさましく附なくて聖の名をれに成て氣の毒なる事も出來むと思して殊更に忍やつし給ふなり又僧都に逢給ふ處にかる〳〵しき有さまをはしたなうおぼすとはさる人に逢給はむ思がけもなくてやつれて物し給ふを僧都に逢給ふには不都合なる御形を恥給ふなり又源君架上を得まほしく僧都に宣給ふことばにまだ

似げなきほどとはしたなくやオホサンなどのたまふは紫上は漸十歳なればもの思しり給はず付なくやのこゝろなり又源君葵上に對面し給ふ處によと共にはしたなき御もてなしを思ほしなほる折もやと云々は女君の心あまり正し過て源君と御心あはぬ故夫婦の中らひ付々しからぬ也大和物語芦刈の段に我さまのいとらなく成にけるを思はかるにいとはしたなくて芦も打捨て走逃にけりはもとの妻に逢るは嬉しくなつかしけれど身おとろへて貧しければ恥かしくて見えやせん隱やせんと差當て思惑る也枕冊子句にははしたなき物異人を喚に我かとて差出たる者まして物とらする折はいとゞ人たがひにて出たるも付なくまして物とらする時は物も不レ得て歸がすさましくてもちぶさたなるさまなりまたあはれなる事を人の云く打泣にげにいと哀とは聞ながら涙のふつに出こぬいとはしたなし泣て語を聞人も不レ泣は心に信ぜぬやうにて付なきなりこれらもと中間に惑意より起りて侘しき意恥かしき意すさましき意など大抵人目わろく付々しからぬ意に聞えたり又枕冊子に月影のはしたなさに後さまにすべり入たるとは月影あまりあかくて隱へき據もなく人目わろく附なき山にきこえ帚木卷に源君空蟬君に逢給ふ處に鬼神もあらだつまじき御けはひなればはしたなくてこゝに人ともえのゝしらず枕册子に幼子の物を引さがず事を云處に其をまさなとばかり打立て取かくさでさなせそ損なふなとばかり笑て云親もにくし我えはしたなくもいはで見こそ心もとなけれと有は情なく思やりなくなど云意と聞ゆめり是遠慮なく云放つ事にて付なき出なりさてなしと云言は意はなくて唯添たる言なり無の意にあらず落凹物語二卷に清水寺にて中納言北方三位中將ゝ局爭ふ處に道を塞て更にやらねばはしたなくて云々又局とられたる處にはしたなき事限なし歸らむにもはしたに侘しと云も恐なりと有は此と全同しさまなり上にはしたなきと云て下にはしたにと有を證とすべし又萬葉集十三に打延而云々標結と聞てし口より立らくのたづきもしらず居らくのおくかもしらに云々戀にこがれてせむすべなき意とあるたづき即據にて此句全こゝに同し契沖法師の說源注拾遺一に懸居翁の說古語勢意一にあれども委からねば此にひかず藤井氏の不都合にと云意と云れたる宜し〇日の暮ぬればすべり出給ひぬ　此十三字寫本に脫

せりすべるは忍て後さまへ引退也枕冊子八の十四丁に
細殿の一の口に殿上人たてりしを漸すべりうせな
どして宇治拾遺十四に（入たがひにて刑部錄と云獵の官人來けるが不興にて退座に）臆官う
しろざまへすべりゆくなどありせんすべもなく思
惑て日のくるゝを據としてさまあしく出給ふなり
かのうれへせしたくみ○をばかぐやひめよびすゑて
うれしき人どもなりといひてろくいとおほくとらせ
給ふたくみらいみじくよろこびて思ひつるやうにも
あるかなといひて歸る道にてくらもちの御子ちのな
がるゝまで調せさせ給ふろくえしかひもなくみなと
りすてさせ給ひてければにげうせにけり
思ひつる・おもひしまゝになりたるを也　調させ
給ふ　せめさいなみ給ふ也源氏葵の巻にさすがに
いみじうてうせられて心くるしげにと云々　○頭
注云かのうれへせしたくみ　憂訴せし匠なり　懲
せさせ給ふ歟
解云○彼うれへせし工らをば　は抄本に從つ寫本
にはうれへをしたるたくみは校本にその云々工ら
をと有ら字は校本に從て加つうれへは身に憂事あ
るを人々告を云又其事云々せさせ給へなど願をも

云なり上に引たる宴物語の忠文は今云數屋なり此
は玉枝造し價を不レ得事た歟なり續古事談[illegible]の王
に昔平城天王の御時までは云々高き机の上にうれ
へ文の筥と云物をおかれたりければあやしの民百
姓まで申文をもて參て此筥にいるゝと有六帖四に[illegible]
かたこひは苦しき物とみこもりの神にうれへてし
らせてしがな宇治拾遺七に[illegible]窮
寒守きゝて前に呼て問ければ[illegible]うれへ成に[illegible]
と悦てなど多かり○人どもなり　は寫本なり校本
せり○ろくいとおほく　は類本にろくどもと有皇
子のとらせ給ふべきろくを玉枝の僞あらはれて嬉
しき儘に赫映姫より出せるなり○思つるやうにも
有かな　は姫の與し給ふ事を知て此に來つるに使
の如く此より得たりと悦也○ちようせさせ給ふ
は抄本調せさせ寫本とゝのへさせと有は誤也頭書
に懲ぜさせ歟と云本居翁は打擲の打ならんと云れ
き何れ是か未思得ここゝに血の流るまでとあると
枕冊子に[illegible]する處に藏人たゞたかゞ參たるに此翁丸
犬[illegible]うちちやうじて犬島につかはせ云々[illegible]る處にあな
いみじ犬を二人してうちたまひ死ぬべし流させ給

ひけるが歸參たりとてちやうじ給ふとあるは正し
く打擲をちやうじと云り打を字音にも訓にも重て
云歟（上に早とくなど云同例なり）今俗にもうちちやうちやくと云り
宇治拾遺（卷三）に（狐恨て家を燒處に）かゝる物も忽にあたをむくゆ
なりかやうの物は搆てちやうずまじきなりと有は
狐を射殺たる恨なり物語書の類に物のけちやうず
と云事多かる落窪物語（卷二）に中納言の北方清水詣の
時三位中將車爭し給ふ處に北方へ云遣給ふ詞にこ
りぬやといはせて末に女君父中納言にしられんこ
とをのたまふ處に男君の詞にしられて後はいとほ
しくてえ北方ちようぜし今少しちようぜんとある
は唯こらす意ときこゆ懲は廣く打擲も即こらすな
れば猶懲字の方ならむか能可ㇾ考○祿得しかひも
なく云々　は皇子僞を顯露しぬる事を痛く腹立て
匠等が歸る道に隱待居て打擲し且爐より得たる物
を皆取放ち捨給へば匠等も空しく逃失たりとなむ
かくて此御子（皇イ）一しやうのはお是に過るはあらし女を
得ずなりぬるのみにあらず天下の人の○（見イ）おもはん事
のはづかしき事とのたまひて
のみにあらず　かくやひめをえずそれのみにあら
ずとなり
解云○皇子の下は|字抄本に從て除つ○すぐるはお
らじ　校本すぎたるは（とも有）○あめのした　（なア）
メガシタと云は惡し○見思はむ　は見字抄本にな
し○恥かしきこと　は云さして與思ふ意を含たる
言にて事哉と言を添て心得へし下（天羽衣の段）にもくち
をしくかなしき事などあり女を不得も恥なる上に
世間の人の此皇子を見もし此由を聞もして微笑は
むことを恥かしき事哉と深く恥思食たり
たゞ一所ふかき山へ入り給ひぬ宮つかさ（所歟）さふらふ人
人みな手をわかちてもとめ奉れども|御死に（イナン）もやし給
ひけん得見つけ奉らずなりぬ御子の御供にかくし給
んとて年ごろ見え給はざりけるなり（けりイ）○これをなん玉
ざかるとはいひはじめける
宮司　御子の宮につきたる人々なり　大和物語に
手をあうちてもとめさわぎけり　玉遠（タマサカル）　さかるは
とほさかるなり　頭注云御子の御供にかくし奉る
玉離（タマサカル）歟
解云○たゞ一所　は師（記傳三に）云凡て古は神をも人を
も數ては幾柱と云り稱德紀の宣命には二所の天皇

と有中昔の歌物語などにも貴人をばみな幾所と云り今世の俗言に御一方御二方と云が如しと云れきたゞは俗にタツタと云意にて上にたゞ此人々と有に同し侍ふ者もつれ給はぬ由也按に赫映姫と同しく二所住給はむとて思たくみ給ひし事のかひなくて一所住給ふと云る也○宮司　は臣の家にて家司（ケシ）と云に當れり宮の萬の宰人（ミコトモチビト）なり○さふらふ人々は類本にさふらひしと有今皇子おはしまさぬ故過去し言とせるなるべけれど猶皇子の宮を離たる人ならねば諸本の萬ぞ宜しき○手を分ちて云々　は所々に人夫を分配て皇子の行方を探求也○御死もや　は必誤有べし今俗こそ御死去などはいへ御しにとは云べくも非ず御字衍歟或は下に詞多く脱せるなるべし今はしばらく御字よまで有べし御子の御行方を探求る人の得見付奉らで思へる心也○見付奉らずなりぬ　を類本に成にけりと有は也と云ことと二處に有を見まがへて一行寫漏せしなめり○御子の御供に　は抄本に御供と書たるによりつ御朋友の意かと思つれどいかゞあらん故按に是は宮司侍人の種々に手を盡して尋求たてまつるに得みつけぬを釋たる詞にて世間の人に見えじと身を隠し給ふは更にもいはず御自の從者にだにも身を隠して見え給はずと云にて甚太く恥給ふ意を釋たる詞なるへしされはだにと云言脱たるべし類本にはて　は御身を隠し給ふと云事なめれど猶かくれと有べく聞ゆれ字を志と寫誤れるか若然ならんには是より以下なりけりまで脱せり○かくし給はむと御子のの字ははの誤とすべし○年ごろ　は年を經てなり月ごろ日ごろなど同例の言也○見え給はざりけるなりけり　一本に從てけり二字補つ○玉ざかる　は魂避にてたましひも拔失て心のうつけたる由を云言なるべし余が飛騨國の言に幼き兒のおよづけゆくほど又立反ていはけなくなる三歳ばかりなる兒の小便などを漸知らせたりつるが又立かへり洩して衣を濡しなとするなり賤者の言にサと云言をシーヤと云り襲をシーヤギ渚をナギシーヤ床錦をシーヤシキ等をタマジーヤカヘルはザシヤと云り必此玉さかるを訛れる言なるべし此皇子いはけたる事して御心もうつけをさなく成給へるを玉の枝に就てたまざかると云言の本緣と云なしたる也山家集に戀百十首の中にいとほしや更に心のをさなくてたまぎれらるゝ戀もする哉とあるは此にも彼方言にも其意よ

く通て聞ゆめり同意の言なるべし

解追考云〇御子に皇子又王又親王と書こと師説に王は凡古は皇子より諸王迄通て天皇の直の御子のみならでも其御子孫をも姓を賜はぬ限は皆御子と申て王字を書り然を後に親王と申す號出來ては美古とは親王をのみ申て諸王をは意富伎美（イホキミ）と申て美古とは申さぬ事となれりさて天皇を始奉て皇子諸王迄通て大君と申て彼王字を意富伎美共訓り然ども古へは其御名に附て某王と申時は王は美古とのみ訓て意富伎美とは訓ざりしを後には親王を美古と申すに別て專諸王をのみ某王とは書て其をは某のおほきみと唱て親王と別つ事となれり親王と申號天武紀四年の處に始て見ゆ然れども御名の下に附て某親王と申事は彼御世には未有ざりし事と見えて書紀には某皇子とのみあり續紀に至て皆某親王とは記されたりと（記傳二十二また四十に委しく）云れたり然れば此物語つくれる比も猶字こそ書別ためれ唯申には直の皇子ならぬをも美古と申つべければ石作王車持王も諸王の由にて書つるにも有べし

左（右イ）大臣あべのみむらじ（みうしイ）はたからゆたかにいへひろき人にてお（ぞイ）はしける

安倍三蓮　新撰姓氏錄云大彥命孫名代天武御世獻ニ之楊花一勅曰何花代奏曰辛夷（カラシ）花也群臣曰是楊花也名代猶强奏曰辛夷花也因賜ニ（イヘヒロ）安倍志斐連姓一生　又阿陪　阿閉　同祖也　財豐廣庶

解云〇右大臣阿倍のみうし　は諸本左大臣阿倍のみむらしと有を改つるよしは上に委云り〇たからゆたかに　は宇治拾遺十二に（貧かりし人信の心を起して富たる庭に）はからざるに財出きて家の內ゆたかに成ぬ猶上の金ある竹取て翁の豐饒になれる處可ㇾ考〇家ひろき　とはたゞ御屋鋪の廣き由にはあらで御家門の一族數多なるよしを云るなるべし上（解）に翁の姫に男定べき事を勸る處に門も廣くと云る同意なるべし（一族を一家一門と云り）富貴にして家門繁昌し給ふ大臣なる由なり〇人にぞ　は寫本によりつ抄本に人にてとあり

そのとし來り（わたりイ）けるもろこし船のわうけいといふ人（ものイ）のもとに文をかきてひねすみの皮（裘イ）といふなるものかひておこせよとてつかうまつる人の中に心たしかなるをえらびて小野のふさもりといふ人をつけてつかはす

王卿などかくにや本字不詳　小野房守　○頭注云
心たしかなる　萬十二　たしかなるつかひはなし
と心をそつかひにやりしゆゑに見えきや
解云○其年わたりける　は古本に從つ抄本には來
りけるとあり○もろこし船のわうけいと云もの
は類本にいふ人とあり商のために來泊せる唐人な
りわうけいとは今作たる名なるべし○心憶なるを
撰て　は其えらばれたる人に房守なり○をのゝふ
さもりと云人をつけて　は書狀に房守を添附て王
卿が許につかはすなり
もていたり(てイ)○かのうらにをるわうけいに金(こがねイ)をとらす
わうけいふみ○ひろげ(たイ)て見て返事かく火鼠のかは衣
此(我イ)國になきものなり
河社に呉錄曰日南北景縣有ニ火鼠一取レ毛爲レ布燒レ
之而精名ニ火浣布一捜神記云崑崙之墟有ニ炎火之山一
山上有ニ鳥獸草木一皆生ニ於炎火之中一故有ニ火浣布一
非ニ此草木之皮一則獸之毛也魏文帝以爲火性酷烈無ニ
含養之氣一著ニ之典論一刊ニ廟門之外一是時西域使ニ人獻ニ
火浣布袈裟一於レ是刊ニ滅此論一按に呉錄は張勃が作
にして百餘卷あり絕てめづらしき書也契沖は如何

なる才學にて見られしにや　○頭注云本草綱目日
時珍云火鼠出ニ西域及南海火州一其山有ニ許火一春夏
生秋冬死鼠產ニ其中一甚大其毛及草木之皮皆可レ織
布汚則燒レ之即潔名ニ火浣布一云々遺きをさとめす
して證とするにたるへし
解云○もて到て　は抄本て字なし博多浦に持て到
れるなり○彼浦に　を古校本に唐とかけるはうら
をからと見て誤れるなりそを又寫本にもろこしと
作り今は抄本にうらと有をとりつ　さて其浦は古昔
異國船の著し浦にて筑前國博多浦と心得べし續紀
二十　に天平寶字三年三月庚寅太宰府言府官所レ見
方有ニ不レ安者四一據ニ警固式一於ニ博多大津及壹岐對
馬等要害之處一可下置ニ船一百隻以上一以備中不虞上云
云太宰府者三面帶レ海諸蕃是待而自船云々また十二
五八年七月甲寅新羅使大奈麻金才伯等九十一人到
著太宰博多津一云々また續後紀八　に承和六年十月
丁巳遣唐使錄事正六位上由代宿禰武益所レ駕新羅
船一艘歸ニ著筑前國博多津一また三代實錄十三　に貞觀
八年十月三日甲戌先レ是九月一日大唐商人張言等
四十一人駕ニ船一艘一來ニ著太宰府一是日勅ニ太宰府一

安ニ置鴻臚館ニ隨レ例供給また二三十 元慶元年八月二十二日庚寅先レ是太宰府言去七月二十五日大唐商人崔鐸等六十三人駕ニ一隻船ニ來ニ著管筑前國ニ問ニ其來由ニ崔鐸言從ニ大唐台州ニ載ニ貴國使多安江等ニ頗齎ニ貨物ニ六月一日解レ纜今日得レ投ニ聖岸ニ是日勅宜依レ例安置供給（貞觀の例を云に安置の下鴻臚館三字を脫せるか供給の下出雲國云々と有るは出雲國ニハベラノムと同たれど誤レ聞ゆ出雲國は次條レ始なるべし）とあるも先博多に著て太宰府に從れるなるべし是等は商人ながら公に奏て格別なれば鴻臚館に置給ひさらぬは博多浦に居しなるへし散木集に俊頼朝臣の父太宰府にて薨給ひし後の歌の詞書にはかたに侍ける唐人どもの數多まうで來て訪けるに云々宇治拾遺十四に（定重唐人に物借し條に）かゝる程に日數つもりて博多と云所に著にけり定重船よりおるゝまゝに物かしたりし唐人の許に行たりければ唐人も待悅て酒のませなどしてとあるを按べし○金をとらす　は裘の價の金子なり此段金字多し皆こがねと訓べし只かねとあるは脫せるなり和名抄に爾雅云黃金謂ニ之璗ニ（徒黨反）其美者謂ニ之鏐ニ（力幽反）即紫磨金也說文云銑（蘇典反和名古加禰）金之最有ニ光澤ニ也萬葉十八なる家持卿の長歌には久加禰と有○文を

は抄本を字なし○文 火鼠のかはごろも云々　は王卿が初度の答文なり○我國になき物なり　は諸本此國とあるを秦氏の我國と改べしと云れつるに從つ我國は王卿が本國にて唐土を云なり先唐國にも無よしを云り

むとにはきけどもいまた見ぬもの也世にある物ならば此國にもてまうできなましいとかたき商なりしかれどももし天竺にたまさかにもてわたりなばもし長者のあたりに（こかれイ）とふらひもとめむになきものならば使にそへて金をは返し奉らんといへり

遲近　長者　名義集曰西土豪族也富商大賈積レ財鉅萬威稱ニ長者ニ　○頭注云いと難き商にこそ　商とはいにしへは每歲の秋布穀の類僦に成し後百貨をもて布帛に代るをアキモノスといひ行て賣をアキビトといひしなり即秋物秋人なり商は秋なり金商たといへり萬十六商變しらすとの御法あらばこそ我下衣かへしたまはめとよめり是は商の事をアキとのみもいへり

解云○世に有物ならは此國にも云々　は王卿も火鼠の皮と云物未レ見世界に有物か無物かも辨さる

を寶に世界に有物ならば此日本國にも將來(モテキ)て有べしとなり王卿いま博多に居ゆゑ此國とは皇國を申なり○いとかたき商なり　は得がたき由をいふなり○もし天竺に　は崑崙南海火州などいふ國は天竺に近かるべき故に天竺には稀に有もせんと思へば天竺までも尋求て見侍らむとなり此國にも唐國にも既に無よしいへる故に天竺にはといへるなり○たまさかに　は靈異記に偶(多眞佐可爾)邂逅(二合タマサカニ)とあり其文に云(女兒を鷲にとられたる父八年の後其女を見たる條に)彼父邂逅次ニ有レ見之宗ニ遂得ニ是子一また(遠江國鵜田藥師佛沙中に在て我をとれと聲を出しゝを聞て僧の佛像を得たる處に)僧叩求レ之邂逅得レ聞ニ沙底有ニ音云々堀見有ニ藥師佛木像一　左右耳缺云々有レ緣偶値願我修理云々萬葉卷九に詠ニ浦島子一歌に「わたつみの神のをとめに邂爾いこぎむかひて相かゝらひ云々などあるは字書に説文邂逅相遇增韻不レ期而會曰ニ邂逅一と有て不レ求に不慮に相遇意六帖(河題)に「陸奥に在と云なる玉川のたまさかにだに逢よしもがなとよめると此の文とは未レ然を云るにてあへな憑ながら求る事の幸に遇もやせんと末を思ふ意と聞えたり○もて渡なば　は其出

産の國より天竺になり○長者　は名義集に西土豪族也富商大賈積レ財鉅萬咸稱ニ長者一とあり其が齎らむ寶の中には種々珍奇の品も多かるべければ若其火鼠の裘も有て買得る事もあらんか若なくて不ニ買得一は價の金子返し侍らんとなり○使にそへて　は書翰に付ておこされたる房守に金子を添てなり使に添てと有にて王卿と共に房守も唐土に到れるさまをしらせたり○抑此の消息文往返の事詞を多く略たればよくせずば紛ぬべし先うちつけに聞ては此王卿が初度の返事に世に難レ有物ながら尋ては見侍らむと云を直に彼使房守船に乘て歸朝して右大臣殿に上る此消息には火鼠の裘からうじて求て奉るとあること不審と聞え詞多く脱たるらむと誰も思ふべし能々心を着て見ざれば辨がたし其略たる事をば悉消息文を以しらせたる物也博多にて此文を書て別に使をたてゝ右大臣殿の御許に京に參らせ右大臣殿其文を披見給ふ事を略き又房守王卿と共に唐土に渡し事を略けり(初度の文中に唐へ渡し事知るければなり)又王卿裘を求得て文を添て房守に渡せし事を略て(第二度の文中にしるければなり)彼もろこし船來けりと其使房守が歸

朝の事を直に書續たるものなりさて王卿が裘得たる由は彼消息文に云て掲焉(シルシ)ければ不レ書なり初度の消息文に使に添て金を返し奉らむと云るにて房守を唐に留たる事炳焉(シルシ)し房守歸朝して右大臣殿に文を上ると云に第二度の返書は王卿唐土より奉る尋しるしかく見わくれば其意明白にわかれて甚々おもしろく省略たる文なりかし

かのもろこし船きけり小野のふさもりまうてきてまうのぼるといふ事をきい(聞イ)てあゆみとうする馬をもち(てイ)○はしらせむかへさせ給ふ時に馬に乗りてつくしより只七日に(のぼりイ)○まうで(りイ)來る

あゆみとうするとは駿足の馬也　○頭注云むかへさせ給ふと句にてとき(駿)馬にのりて云々と有しを寫誤歟　和名鈔云穆天子傳云駿馬之美稱也（漢語抄云土岐宇萬）解云○まうで來て　は唐土より皇朝に詣來てにて博多に著たるなり○まうのぼる　は彼著津より京都に詣上るなり○聞て　は房守か歸朝の事を右大臣の聞給ひてなり○歩とうする馬をもちて　は抄本て字なしとうはとくの音便なり類本にはとてとあり此比はとうと云つらむと思へば多本に從つ和名抄に穆天子傳云駿（音俊漢語抄云土岐宇萬日本紀私記云須久禮太留宇萬）馬之美稱也とありさて迎に駿馬を出し給ふは暫時も早く赫映姫に遇給はんとし給ふ下心なるべし○ときに馬に乗て　は頭書にたまぶと句して駿馬にと有しを寫誤れるか(句)と云りされど下（燕子安貝の段）にも手に平める物さはる時に我物握たりと有に語勢同しければ猶本の方宜かるべし○筑紫より　は筑前國博多津より平安城まで陸路行程凡百六十里餘有とぞ○たゞ七日にのほりまうで來たり　は抄本のぼり三字なし類本に從て補つ抄本に來る古板本にきたると有を改て今きたりとす遠路を不日に登れるよし也

文を見るにいふ火鼠のかは衣からうじて人を出して求め(てイ)○奉る今の世にも(むかしの世にもイ)○此皮はたはやすくなき物なりけりむかしかしこき天竺のひじり此國にもてわたりて侍ける西の山寺にありとき丶およびておほやけにまうしてからうじてかひとりて奉るあたひの金すくなしとこくし使にまうせしかば(しゝイ)わうけいがものくはへてかひたりいま金(こがねイ)五十兩給る(賜はイ)へし船のかへらんについ(けイ)てたびおくれもしかね(こがねイ)たまはぬものならは彼

裘イ
ころものしちかへしたべといへる事を見て
かうじて　幸也　かしこき天竺　賢とはほむる
詞なりはらもん僧正などの類なるべし　公に　官
府にうつたへて也　國司　筑紫のうちの國司なる
べし　質　給賜　おこせたまへと也　○頭注云あ
たひの金すくなしとこくし使にまうせしかはわう
けいか物くはへてといへる此國司は唐土にての事
と聞ゆ
解云○いはく　は類本にいふと有はわろし○此消
息は第二度の返事なり前條の解に委しく辨證つる
を考て知べし○もとめて　は抄本て字なし類本に
取てとあり○むかしの世にも　七字抄本に脱せり
○たはやすくなき物なりけり　は初度の文に來レ
見物なりなど云る結にて粲の如く誠に得がたき物
なりけりと云るなりけりの言味はふべし○かしこ
き　は此にては徐と云意○聖　は高僧と云が如し
○此國　は唐國なり今度は王卿は博多に不レ渡して
唐土に居て裘と文とを房守に附て贈れるなり○も
てわたりて侍りける　は天竺より唐土に將來しが
在し由なり侍は有の意なり○西の山寺　は王卿が
住る都の西山の由なるべし○おほやけに申て　は
王卿が私に云入ては買まじければ公に申て公の威
を以買得たりとことごとしく云なせる也○こく
し　は彼寺ある地の國司也公に申て買事なれば王
卿が直の應對にはあらで國司より寺に應對せし由
なり○使にまうしゝ　は王卿より國司の許へ遣し
し使にて代金不レ足と使に對て國司の云る也許た
に申せしと有はわろし申しゝと云格なれは改つさ
て始申とは下より上に告を云言なれば此は國司よ
り王卿が使へ云る詞なれば仰せしと云べく思へり
はあらず是は右大臣殿に奉る文なれば國司と使と
の格にはかゝはる事なく右大臣に對してかしづき
て申と云るなり○王卿が物加へて　は右大臣前に
遣し金不レ足ば王卿が金五十兩を添て買得たりと
ぞ○船の歸らむにつけて　は抄本につきてと有王
卿は來朝せざれは彼唐船の歸便に送給へとなり○
たび　は賜也○おくれ　は可レ送なりおくれと云は
無レ敬やうなれどたびと云か敬言なればかく云べ
きなり○皮ころもの質　は抄本皮を彼と誤れり質
とは其かはりの物にて此は今俗に代物と云が如し

宇治拾遺十四に筑紫太夫貞重京に上る處に唐人に物を六七千疋が程
借とて太刀を十腰質に置けるとあり
こがねイのことにイかならずおくるゝき物にこそあなれイ
何おほす今金少しにてこそあなれ〇うれしく〇ておこせたるかなとてもろこしのかたにむかひてふしイしを
かみ給ふ此かはころもイかはきぬ人たる箱を見ればくさ〴〵のう
るはしきるりをいろへイえてつくれり
何おほす　今すこしの事を何と仰せらるゝと也
裘　種々　魏志注云瑠璃本是石出二大秦國一凡十種
之色また水品瑠璃のるゐ入レ火不レ焚　いろえて
はいろどりてなり
解云〇何おぼす　は右大臣裘おくれるを賢物とも
知たまはず甚く悦て心もそらにて王卿に答給ふ詞
を此ながら獨言給ふ也〇今金少の事にこそあなれ
は諸本少しにてとあり類本に従て改つあめれと
有は悪かるべし〇必迯るべき物にこそあなれ　は
寫本に従て補つ按にあなれと云辭近く二有を見紛
へて諸本は脱せるなるべしさて物もと有を必誤と
見ゆれば物にと改つ〇うれしくして　は抄本し字
なし〇唐の方に向ひて伏拝給ふ　は佛祖統記に法
師源信云々咸平六年遣二其徒寂照一持二教義二十二

問一詣二南湖一求レ決法智爲レ其一々答釋照欣領歸レ國
信大服二其説一両向禮謝と有とそ冷標卷に明石に乳母なと下し給ふ
に處入道待とり悦聞ゆる事限なし其方に向て拜聞え
て御心ばへを思ふに云々とあるなど太く悦たる意
ばへよく似たり〇うるはしき　はうるはしウラ心也くハ
しは微クハシなり善愛美麗などの字の意にて善物愛せら
るゝ物は心の深く濃にかゝる意の言也此玉の美麗
なる事なり〇瑠璃　は凡て玉の類を云なるべし魏
志注に瑠璃本是石出二大秦國一凡十種之色と抄にあり
故に種々のと云り〇いろへて　は諸本いろえてと
あるを今假字を改つ下二十八丁なる御行大納言の屋の
處をも可レ考又取字の草ひをえと作るか萬葉七卷に
「月草に衣ぞ染る君がため彩色衣すらむと思ひて又「
鴨頭草に服色取すらめども移ろふ色と云が苦しさ
又大和物語に染殿内侍在中將によみて遣ける「秋萩を色どる風の吹
ぬれば人の心も疑はれけり返し「秋野を色どる風は
吹ぬとも心はかれじ草葉ならねばなどあればいろ
どるにても有べけれど猶六帖草部に「春雨に標ぞ結ふ
し花にけさこくはいろへて咲みちにけり又向阿法
師の父子相迎に淨土の體を寶林寶樹會に到らしむ見れ

ば七寶を磨て七重たがひにいろへたる植木光をつらねて立並ぶとあるは无量壽經に或有寶樹紫金爲本白銀爲莖瑠璃爲枝水精爲條珊瑚爲葉碼碯爲華硨磲爲實或有二寶樹云々と枝葉華菓互に種種取替て云るを譯したる文也又平家物語に（那須宗高扇を射たる處）與一かちに王衽いろへたる直垂などあるは色合の義にて古事記（雄略天皇御製）に麻那婆志良袁由岐阿閉和名抄に壅阿倍毛乃などのあへ（はせを約たるへ）なり故今はいろへの方をとりつ（へをエの如く呼は假字を誤れるなり）

かはぎぬを見ればこんぜうの色るりけのすゑにはこがねの光しさゝやきたり○たからと見えうるはしき事ならぶべき物なし火にやけぬ事よりもけうらなる事かぎりなし

こんぜうの色るり　るりはなりの誤り歟但し名義集曰瑠璃此云青色寶言金翅鳥之卵殼鬼神得之出賣與人名紺瑠璃云々　毫末　さしやき　とは細くうるはしき也齊東野語曰昔溫陵有海商漏舶搜其橐中得火鼠布一疋遂拘置郡帑凡太守好事者必剖少許歸以爲玩外大父常守郡亦得尺許余嘗親見之色微白頗類木綿絲縷蒙茸若蝶粉蜂黃然每浣以油膩投之熾火中移刻布與火同色然後取出則潔白如雪了無所損後爲人強取以去　華夷珍玩考曰岑樓愼氏曰予聞見爲傳火浣布與蕉麻無異而色微青黑因憶少年閩中所見火浣布無以異また昔の惡帝異國より火浣布を奉りしをかざみにぬはせて石崇が家に御幸し給ふに石崇がやつこ五十人許みな火鼠の衣きて出たり惡帝おほいにはお給ふとぞ又氷蠶といふ虫にておりたるにしきは火に入てやけず水に入てうるほはすとぞ更にけうの物なり　近頃江戸の人に火浣布をおるものあり石のわたといふものを用といへり是も齋東野語の注に石岩有絲可織爲布亦不畏火未知果否云々　けうら　はきよらなるへし

解云金青は和名抄に本草稽疑云金青者空青之最上也とあり○金の光かゞやきたり　は諸本光しさゝやきたり類本さゝりたりと有なし字は衍と見ゆれば除校本に從てさゝをかゞと改つ○げに寶と見え　は諸本けにと云ことなきを今補つ寶と見えと云言文詞の拍子あしく聞えて上下に詞脱たるべしと云しを本居翁上にげにと云事有べき處也と云

れつるに從へり〇雙なし　は抄本限なしとあり
むべかくやひめのこのもしかり給ふにこそありけれ
とのたまひてあなかしことて箱に入れ給ひて
宜　さればこそかくやひめほしかり給ふにこそと
也　太惶(アナカシコ)　古語拾遺に甚しき事をあなといへり神
代卷に惶をかしこととよませたりしかれは文などの
おくに太惶とかくは恐惶と同意也こゝにてはほむ
る心もありけり
解云〇うべゝは抄本にはむべとありうめ(梅)うま(馬)なと
云いふ後世は皆むに轉れり(如レ此例往々冊子に委云)〇かぐや姫
の好もしがり給ふ　は抄本の字有に從つかく麗け
れば姫は好欲がり給ふぞうべなると宣給ふなり〇
あなかしことて　は物を尊重する意なり鈴木氏云
五人の中にも車持皇子は赫映姫の心を能量知られ
けむ其外は大方はおぼえぬを此大臣は殊に係ても
知給はざるなり二人の御子のしたくみ心なりにる
次にはかゝる人おはしまさでは物語の興は有まじ
きなり今世にも財豐なる人の心はかゝるぞ多きと
云れき
ものゝ枝につけて御身のけさういといたくしてやり
てとまりなんものぞとおほしてうたよみくはへても
ちていましたりそのうたは
かぎりなきおもひにやけぬかはごろもたもとかはき
てけふこそはきめ
化粧(ケサウ)　やりてとまりなん　裘をつかはしてとまら
んと也　萬葉集第一長歌(上略)あみのうらのあまをと
めらかやくしほのおもひそやくる我下心　〇頭注
云やりてとまりなんものぞとおほしてとはいかに
もかくやひめの承引して留置かるべき物ぞと思ひ
てといふなるべし
解云〇けさう　は假粧の字音にて貌つくるを云り
伊勢物語(井筒の段)に此女いとようけさうして落凹物語
二卷に(兵部少輔の體な)顔は白き物付けさうしたるやうにしろ
うなど有〇いといたうして　寫本にいとゝかしく
いたうしてとあるは衍なるべし〇やがてとまりな
ん　は抄本やりてと誤れりやがては其儘と云んが
如し枕冊子に(入讒の處に)誠にいとたふとくあはれなれ
ばやがて留ぬへくぞおぼゆるとあり御家には歸給
はで裘を废して其儘姫の家に宿給はんとなり下に
其御下心たがへる事いはむとて先かく云るなり此

裘な眞實の物とおぼしゝ故なり○歌よみくはへて　は歌を作て添てと云意か又はよみには意なくて唯歌を副てと云意にもあらむか古事記須賀宮段に作御歌とあるを師は御歌よみし給ふと訓べし神武紀に爲御謠之此云宇多預瀰ーとあり枕冊子にも歌よみしておこせたるとあり今世にも女童の語に云ことなりと傳に云れたり又賤者の言に唯歌と云べき處を誰は歌よみの上手また此所には云々と云歌よみがあるなど云は只歌の上手歌があると云意な言にて此も其意と聞ゆるやうなり○歌限なき云々結句けふこそは見め　は寫本に從つ諸本きめと有は誤なるべし思ひを火に添て不レ燒と續たり末句は姫を戀泣給ふ涙に濡たる袂の今日相遇べき嬉さに乾て此裘著たる赫映姫を相見給はむ事を喜悅給ふ由なり先にきめと有つるに從つるに此裘は姫の著む料に要ずるなれば右大臣のきめと宣給ふは違へるに付て今は見めと有を用つ裘袂とはつゞけたれど意は然らず右大臣の袂なり

といへり家の門にもていたりてたてり竹取出きてとり入てかく（はくイ）やひめに見すかくや姫の（かイ彼イ）かはころも（皮イ）○（なイ）見ていふうるはしきかはころもなめりわきてまことの皮ならんともしらず竹取こたへていはくと（まイ）もあれかく（まイ）もあれ先しやうじ入奉らん世の中に見えぬかはころも（イ）きぬのさまなればこれを○と（まことイ）おもひ給ひぬ（れイ）人ないたくわびさせ（イナシ）給ひ奉らせ給ふそと（ひイ）いひてよびすゑたてまつれり

辨（リキン）請入（シヤウジイレ）　是をとおもひ　是ぞ火鼠の裘と思ひたまへと也　○頭注云是をと思ひ給ひぬ　とは是こそまことの裘と翁は思ふといふにや姫に對しての言葉ならばぬの字ねなどにてやあらん　わびさせ惑萬

解云○家の門に云々　は右大臣竹取が家の門前に到て立ながら云入給へば翁出來て裘の筥を取入る也○かの裘　は諸本かくや姫のと有を抄本にか字脱たるかと云るに從て補つ○うるはしき皮なめり　は此も皮ころもかはきぬなどある本もあれど類本寫本の無に從つめりは其樣を推量意の言なれば今日前の事なれば此に叶ざるが如くなれども分て不レ知と次にいはむとて聊疑意にてなめりと云るなり○わきてまことの皮ならむともしらずわきてはしらず　と云に係て見べし眞實の皮ともえ辨へ

しらずと云なり○とまれかくまれ　は抄本にはと
もあれかくもあれと有何にてもよろし○しやう
じ　は請字の音也下四解中臣房子勅使の條にも竹取
の家に毀て請じ入て云々とあり總角卷に宇治大君御病の時世
に驗ありと聞ゆる人の限あまたさうじ給ふ沙石集
卷八に主喜びて請し入などありて靈異記一卷に小子部栖輕捉ㇾ雷條雄
略天皇の勅詔に汝鳴雷奉ㇾ請之耶答曰將ㇾ請古言には麻勢と
云り字書に請韻會此郢切説文謁也左傳僖十年余得
ㇾ請ニ於帝一矣とあり○是をと思ひ給ひね　はをを字ぞ
の誤かと思へど諸本皆をなりをの下に眞實と云言
を加へて心得べし下に世になき物なれば是をまこ
とゝ疑なく思はむと宣給へとある即此詞を具に云
るなり抄本ねをぬに誤れり○人ないたくわびさせ
奉らせ給ひそ　は諸本侘させ給ひ奉らせ給ひそ類
本は侘させ給ひそとあり上の給ひは衍と聞え類本
は奉らせを脱したりと見ゆれば今は給ひを除て取
つ翁何にもせよ世に比類なき美麗なる裘なれば實
の火鼠のと思定て此右大臣に逢給へと勸むるなり
○喚居たてまつれり　は門前に待居給ふ右大臣を
喚入て屋の内に居奉れるなり車持皇子は推て縁に

さへ上り給ふに此大臣は質直にて門に待居給へり
車持皇子はいたく工なし給ふに是は人に謀られ給
ふ利と鈍とを擧たる物語なり
かくよびすゑて此度はかならずあはん（むイ）と女（おうなイ）の心にも
おもひをり此おきなはかくやひめのやもめなるをな
げかしければよき人にあはせんとおもひはかれども
せちにいなといふ事なればえしひぬはことわりなり
やもめ　寡　字書無ㇾ夫云ㇾ寡　せちに　は切に也
解云○此一條は皆地の詞なり○おうなの心にも
は諸本女と有を校本に從て改つ鈴木氏云女は嫗に
て竹取が妻を云なるべしと云れしぞよき翁も嫗も
此度は必姫は此大臣に逢奉るべしと思ひ居なり○
やもめ　は和名抄に無ㇾ妻曰ㇾ鰥和名夜無乎無ㇾ夫曰ㇾ寡和名
夜無女とあれど源氏物語に柏木行爲の詞をやもめ住
にて過しつゝ落窪物語に兵部少輔をさへやもめ臥して
はなど男の獨住をもやもめと有を多く出して荏野
冊子に記しつ○歎かしければ　は此は姫の若き程
に夫を定めずて齢更なば惜しからむ事を歎かしく思
ふ也○思はかれども　は抄本に從てを字を加つ○
せちにいなと云事なれば　はせちは切字の音なり

切千結切迫也急也と有意なり　いなは古事記發端に吾者到於伊那志許米々々岐穢國而在祁理とある傳に伊那は辭否などゝ同言にて此は惡み厭ふ辭言なり書紀に不須也と也字を添られたる信に其意ありと云れたり字書に信假燕切與申同正韻御不受也とあり姫は翁の心のいとほしさにあらはに辭みはせねど其實は男する心なければ其意を得てかく云るなり○えしひぬは理なり　は石作車持の御子の時も勸はしつれど強には云はぬなりそは姫の心に堅く辭む樣子なればなり

かくやひめおきなにいふ此かは衣は火にやかんにやけずばこそまことならめと思ひて人のいふ事にもまけめ世になきものなればそれをまことゝうたがひなくおもはんとのたまふ猶これをやきてこゝろ見むといふ翁それさもいはれたりといひて大臣にかくなんまうすといふ大臣こたへて云此かはゝもろこしにもなかりけるをからうしてもとめたつね得たる也なにのうたがひ○有んさはまうすともはややきて見給へといへば火の中にうちくべてやかせ給ふにめら〳〵とやけぬされはこそことものゝ皮なりけりといふ

さは　さはいへやきて見給へとなり　めら〳〵おめ〳〵とやけれる也　ことものゝ　外の皮なりと也　○頭注云めら〳〵とやけぬ　沙石集第八云既ニキエカヽリタル炭ノ火此油ニモエツキテ油ヲカケタルヤウニヘラ〳〵トヤケテアトナク失ニシト云々是モめトヘ同韻にて同し詞然物のつよからずはかなき體なるべし今俗に女子などの涙もろきをめろ〳〵泣くといふも類語なるべし　ことものの皮　異物皮

解云○此裘は云々　は上に翁の世ノ中に見えぬ云々と云る等なり　云々こそまことならむと　は諸本ならめとあれどこその結は下のまけめに係りて結べり故に此は必むと有べき處なれば改つ○人の云事　とは右大臣の宣給ふ御ことと也此は大臣の前ならねはなめしく云なり○世になき物なれば云々のたまへ　とは翁上に云しことを今姫の口より云るにて諸本のたまふ類本のたまひてと有はのたまへの誤なりと足立稻直が云る宜し上より續ては姫と翁の私言なれど燒て見むと云事を大臣へ宣給へと

姫が云なり是迄のかくなん申と云詞に能叶へり故
改つさて上には是をと思ひねとあるは此に具に云
むとて語を省たるなり〇猶　は翁が言に問に此道
なく美麗なる裘なれば眞實の物と心得よとあれど
姫は其眞僞は燒て知べしと云なり眞の物と思へと
有に付て猶と云るなり〇さも　は然も也〇いはれ
たり　は謂字をいはれと訓り下四釋に勅使の言にい
はれぬ言なし給ひそとあり字註に事有レ可レ稱曰レ
有レ謂失ニ事宜ニ不レ可ニ名言ニ謂ニ亡レ謂と見えたる意
なり姫が言を聞て理に叶たりし翁が諾たる答なり
〇大臣　と書たる此段にてはおとゞと訓べし師説十九ニ云
大臣はおほおみと訓べし古の大臣は皆知レ此訓へ
きなり後世には大臣をおとゞと云そは殿舍をも云
と一にて大殿の訛れるなり又物語書などにおほい
どのと云るも大殿なりと云れき〇かくなむまう
す　は上に其詞燒て試むとあれば省て云るにて姫が云
云申と姫の詞を大臣に傳ふるなり〇唐にもなかり
けるを　は類本になかりしとゝありとよなの誤にて今辛し
て唐土より買得たれど本は唐にも無物にて買得が
たき物なる由を宣給ふなり〇もとめたづね　は類

本に取尋と有は誤なり此本求字を取に誤りしためは求尋れる事猶上にも有諸本
門索也覓也乞也と註したづねは尋也と字書
に見えて共に同意の言を重たる上にものぞき垣間
見はやとてなど有類なり〇何の疑かあらむ　は大
臣此皮を實物と深く思憑給ふたりか字諸本になき
を今補つ以上大臣の御詞なり〇さは申ともと云々
は翁が大臣に答て如レ仰可レ疑にはあらねどもと云
なり然はとは大臣の何の疑かあらむと宣給へる處
にて憶に云むには然は仰らるともと云べきを翁の
自己が詞にしてさは申ともと云なるべしかゝるさ
ま今も有ことなり上より是云々せよなど仰あるを
受て其意を戻かむとする時サウ申マシテモなど云
即是なり先に此言は火鼠皮は不レ燒物と云詞たり然は申ともの意と聞しはあらず〇打くべて
は火中に物を入て燒を云り夫木抄雜十寂蓮火燒鳥の
歌に「思かね柴とりくぶる山里を猶さびしとや火
燒鴨なり尚後拾遺并艶詞子などにもあり〇やかせ給ふに　は大臣翁
か云に隨て入に仰て令レ燒給ふなり〇めらくと
やけぬ　は皮搭板なとの薄き物の燒る樣をいへりべら
べらともめらくとも云り沙石集八下に火對に執心の地に不レ燒幅に語行
无常の文を書て投掛たればやけたる處に火此紙に燃付て油を掛たるやうに

べらく\とやけて跡なく失にしと有鈴木氏云一句に言少なるいとをかしと云れき○さればこそ句と此にて句斷絕て異物の皮なればこそ燒たれと云意を含て異物の皮なりけりと治定したる詞也と鈴木氏云れき是は翁が詞なり　やとりまでは地の詞なり

大臣これを見たまひて御かほは草の葉の色にてゐた(レイ)まへりかくやひめはあなうれしとよろこびてゐたり彼よみ給ひける歌の返し箱に入てかへす　姬「などりなくもゆとしりせはかはごろも思ひ(火)のほかにおきて見ましをと○(ぞイ)ありけるさればかへりいましにけり

草の葉の色にて　史氏有二菜色一是は飢て色の青き也　沐魄經曰後漢安息三藏安世高譯相視面目並青　などりなく思ひにはもゆるといふ緣あればかくやくる物としらば火の中に入まじきにと也　○頭注云おもひを火によせて　火の外に置て見るべきをと也[illegible]惠女集「手なるれど猶ひねすみのかはなればあつさぞまさるおきやしてまし

解云○御顏は草の葉の色して　は類本御字なし字類本に從つ緒本色にてとあり古事記中卷の末に秋山之下

氷壯夫の訓注に知二此竹葉青一如二此竹葉萎一而青萎ともあるは病て面の青むべしとなり此は急に恥見る時は面の赤くなるを其最甚しき時は青くなるをかく云り宇治拾遺卷二に[illegible]に血付たるを見たる[illegible]打見るまゝに色をたがへて倒惑ひ走歸てと有も青めりしなるべし○歌などりなく云々　火鼠の皮は不レ燒物と聞しかへ燒て見れば少しも不レ殘燃はてたりしは思の外なる事なりかく燃べきものと兼て知たるならば火の外に置て見べきを燒失しは惜き事かなとなり惜むをは終のな字に含めり思を火に取成たる後撰集戀一に「君こふと濡にし袖のかわかぬは思ひの外にあればなりけり伊勢物語百二十一段に「鶯の花を縫てふ笠はいな思ひをつけよほして歸らむなと多かり○そ有ける　は抄本そ字を脫せり○歸いましにけり　は火鼠の裘は贋物にて燒たる故に張合なくすさまじげに歸給ひし也

世の人々あべの大臣(よイ)火鼠の皮衣をもていましてかくやひめにすみ給ふとなこゝにやいますなどとふある人の云(いはくイ)皮は(裘イ)火にくべてやきたりしかばめらくとやけにしかばかくや姬あひ給はずといひければ是を

きいてぞとげなきものをばあへなしと○いひける
無遂　事のとげざるをいふ也　無端　あぢきなき
也安倍なしとの秀句也　〇頭注云かくや姫にすみ
給ふとな　さらしな日記に侍從大納言の姫君よな
といへる筆法に同し　河海抄無敢
解云○大臣は　は校本に從ては字を加ふ○住給ふ
とな　は古事記水垣宮段に三輪大神活玉依姫婚給ふ處に活玉依毘賣其
容姿端正於是有神壯夫云々相感共婚住之間云々と
あるを傳三十二に共婚住をすめると訓べし古は男の
女の許に來通て夫婦の交會するを住と云りきと有
猶萬葉古今等を引て委云れたりなは云おさふる言なり落凹物語卷一に兵部少輔が事を藏人少將に云詞に　いと清げなる相聟取給ふてけりな夕
貌卷に源君も夕貌も名を隱し給ふ事を　何れか狐ならむなど多かる
言なり○こゝにやいますなどとふ　は竹取の家人
などに世の人の問なりこゝとは竹取が家なり○あ
る人のいはく　は其時其所に在合たる人の答るな
り或人の意にあらず下天羽衣の段に　もある人の毛の穴
さへと云り其下に委し解べし○かはころも　は諸本皮とのみ
有て衣と云ことなし校本に有に從つ○とげなき
は無利氣なり六帖一に霜を題　浮てぬる鴨の上毛にお

く霜の心とげなき世をもふる哉霜の不レ釋に云掛たり　玉勝間三十
に萬葉十一に「ねもころに片思するか此頃の吾情利
の生る利もなし又十二に「朝夕にねのみしなけば八衢
の刀其己呂毛あれは思かねつも又卷十二「衾道を引出
の山に妹をおきて山路をゆけば生ヶ毛無いけると
とは利心心利の利にて生る利心もなく心の空けた
る由也と云れきされば此も爲便なく氣力の盡たる
さまを利益なきといひ皮衣なる故に氣を毛に執成
たるなり氣は似氣なし負氣なしなどの氣也○あへ
なし　は綺合卷に此物語の事を安倍のおほしがち
ぢの金を捨て火鼠の思ひ片時に消たるもいとあへ
なしとあり桐壺卷に更衣卒去の處に　絶はてぬるとて泣さわ
げは御使もいとあへなくて歸參りぬ夕貌卷に夕貌君息
絶たる處へ惟光來たる處に　召入て宣給ひ出むことのあへなさにふ
と物もいはれず十訓抄卷三に相撲の手伊成が事に　少し寄て弘
光が手を取て前さまへ強て引たるにうつぶ
しにまろびぬあへなきこと限なしなど有河
海抄に無レ敢なりとあり字書に敢勇也と注したれ
ば此字能あたるべし師云俗言に張合なく力の落た
りと云意なりと云れたり御主人おとゞ火鼠裘を眞

寳の物と思取給ひて彼皇子に逢むと思決て物し給ひしを其心たがひて御心ヲ空け勇も張りなくすさましく御家に歸り給ふを安倍氏なるから其よりあへなしと云始たる由に云る例の一興の作ごとなり○とは云けるは　諸本は字なきを例に從て今補つ

大伴のみゆきの大納言は我家にありとある人をめしあつめてのたまはく

姓氏錄曰大伴道臣命十世孫佐氐彦之後也　河社にかくや姬を思ひ懸ける五人が中にひとりた伴の大納言みゆきは文武天皇の御代の贈右大臣大伴宿禰御行これを思へる歟但し作物語なれば其人と定めんもをこがましくや

解云○我家に有とある人を召集て　は類本にを字はなくてめしあつめと有に從て補つ今家中と云て其屋敷の外に住ても其仕へ人を云に同じ

たつのくびに五色のひかりある玉あなりそれをとりて奉りたらん人にはねがはむ事をかなへむとのたまふをのこともおほせの事を承てまうさくおほせの事はいともたふとし但し此玉たはやすく得とらしをいはんやたつのくびの玉はいかゞとらむとまうしあへり

最實　貝ごとはかしこまりぬれどもつねの玉ただに得かたき物なるをましてたつの玉はとなり　莊子河上翁家（頭註云莊子河上翁家云々に見えたり但莊子の文と大同小異あり他書より引用せしにや）貧恃緯蕭而食其子沒於川得千金珠謂其子取石來鍛之曰夫珠必在九重之淵驪龍頷下子遭其睡也使其寤子尚奚微之有哉　大智度論曰摩尼寶珠在龍王腦中人得此珠毒不能害人火不能燒又曰如意　五色の光り　彼に多くのふみに五色の光ある事見えず但し時珍本草綱目引博物志曰張華得龍肉云々則生五色云々また龍骨をえらぶに五色なるをよしとすと醫書に見えたり

解云○五色の光ある玉　は寫本五色に光玉とあり上には寫本の如くあれど此は少し加へたるぞよき○願にむことを云々　は龍の首の玉を獻たらむ賞には望願はむ事ゆるさむとなり○但し此玉云々此玉とは凡玉と云物は得がたき物なるを殊に龍首に秘めたらむ玉はいかゞしてか取らべきと仕人等の甚難き事に思ふよしをも其にた納言の前にて

申なり

大納言のたまふ君のつかひといはんものは命をすててもおのが君のおほせ事をばかなへんとこそ思〇べけれ此國になきてんぢくもろこしの物にもあらず此國の海山よりたつはおりのぼるもの也いかにおもひてかなんぢらかたき物とまうすべきをのこどもまうすやうさらばいかゞはせんかたき物なりともおほせ事にしたがひてもとめにまからむとまうすに

しからばせひなし得がたき物なりともとりにゆきて見むとなり

解云〇のたまふ　はのたまはくとかのたまうやうとか有べき處なり此事は凡例に云き〇君のつかひと　は上蓬萊玉枝の段に赫映姫をつかひと云る處に云し如く此も人と云字有けるを同言重れは誤脫したるかとも思べと猶人字脫たるにはあらじかくも云べきことなり君字古板本類本てんと有は誤なり〇思べけれを類本おもはへと誤れり〇この國の海山より云々鈴木氏云おりは山よりのぼるは海よりといふ意なるべしと云れき或人云霖雨などして山を崩し其の洪水に乘て大蛇の川を下りて海に出るを龍に成と云り又越中國射水郡奈古浦今放生津と云の人泉田某云過去し文化六年七月十一日の日朝より雨風烈しかりけるに未ばかりに少し晴たれど沖の方は猶曇て薄墨のやうなるに中に殊に黑き雲一筋立登りたるが又下りて海面今一尺計になりては上り下りする間に波にひたと付かと見えしが中にちひさく龍の形見えて光ひらめきつゝ上りしが後はなごりなく空晴たりと云り其地の翁は昔もかゝる事有けり龍の登る也と云りとぞ又同所の人岡田某は信濃國木曾の山中にて見たりと云り其は六月比にて夕立いたく降てはれむとする時にて尾の方半とおぼしきより末ほのかに見えつとかたりき又扶桑畧記二十に法皇御記を引て云く寛平元年十月朔己未云々即位之間自ニ乾角山中一黃龍騰レ天大宰少貳清原令望爲ニ最大井灘使一見レ之從五位下橘有棟參ニ梅宮一之次見レ之丹波博士丹波有冬在ニ彼國一見レ之件三人慥見レ之往々見多也とあり〇いかに思てか　は大納言おのが武きにまかせて易き事ぞと勵まし催せらるゝなり〇なんぢら　を寫本にはきんだちと有汝と云

べき處をきんだと云こと蜻蛉日記[illegible]に見えたれど此は仕へ人なれば然は宣給ふまじき事なり○難き物なりとも　は物字類本に事と有も宜し○いかゞはせん云々　は大納言奉公の忠勤すべき道理を釋きかせて仰給へば爲便方なく出立むと申なり

大納言みわらひてなんぢらが君の使となをながしつ　君のおほせ事をはいかゞはそむくべきとのたまふ

へいせい大納言のもとにある人としられながらいかて命をそむくべきと也　○頭注云大納言みわらひて　見笑て歟又微笑てにてすこしわらふ歟宇治拾遺に門部府生うすわらひてといへるに同しきにや　なんちらか君の使と云々　君につかふとにて奉仕の義歟

解云○大納言見笑て　はつかへ人とものの臆病なるさまながら仰事を蒙て然らば玉取に罷らむと申を見て笑給ひて次の詞を述給ふなり鈴木氏云此段凡て此大納言の健て嚴しき心ばへを談て興とせるものなり大伴氏は先祖天忍日命は瓊々杵命高千穗峯に天降まししゝ御供に仕へ給ひしより日臣命神武天皇の東征に從て功を立給ひ世々健き事を以御門を守り仕奉る氏にて天平勝寳元年の詔續紀十七丁にも大伴佐伯宿禰は云々海行かば水づく屍山行かば草むす屍王のへにこそ死なめのどには不死と云来る人となも聞召と宣給へる事見えたり萬十八二十丁可しむ是らの意をもて見べしと云れき○なむぢらの下諸本が字ありがはゞの誤ならむと云しを鈴木氏一本が字なきに從べしと云おこされき○君のつかひと　は大納言自己わが御つかひ人に宣給ふ言なれば君字は吾字を誤れる歟吾君牛と誤る例萬葉に多しと云置つれど是は凡て世間の事にして宣給ふにて上に君のつかひと云むものは云々と有をおし返して再委しく宣給ふなり故君と有て妨なし抜にたゞ祖と云べきを人の祖たゞ子と云べきを人の子など云同例の言にも有べし○名をながしつ　は名の普く通達して世人の能知たるをいへり今は名を腐すと云と同し意に取て悪名の立よしに云思めれどしからず萬葉巻二に「妹が名は千代に將流姫島の小松が末に苔むすまでに又十八「ますらをの清き其名を奈我佐敝流ながせるを延たる言なり云々續紀宣命解四ノ五詔「に宣位乎賜利昌死豆波善名乎遠世爾流傳天云師なたすは長くするてに久しく傳るをいふ三代實錄

卷五に狹手彦再使ニ海外ニ征ニ伐國ニ盡ニ力絶域ニ復立二國ニ身存ニ當時ニ功流ニ後代ニ云々後撰集（雑四）にニ移はぬ名に流たる河竹は何の世にか秋を知べき貫之集に（延喜の御歌に）「山にてそおとらざるらめ君が名は天の川まで流いにしぞ（貫之の高名を譽稱たるなり）是ら皆善名の久しく傳へ廣く知らるゝ事を云り又源氏物語なるは大方惡名の方に云り箒木卷にかろびたる名をや流さむ明石卷に後世まで輕々しき名をや流し終むと思し亂るとあるは箒木の結なり榊卷にうき名をのみながしてと有名の傳へ聞ゆる意は同し

たつのくびの玉とりにとて出したて給ふ此人々の道のかてくひものに殿の内のけ（きイ）ぬわたせになどあるかぎりとり出して（いでゝイ）○つかはす（そへてイ）此人々ども歸るまて（てイ）いもひ（ゐイ）をしてわれはをらん（むイ）此玉とりえでは家にかへりくなとのたまはせ（けイ）たりおの／＼おほせうけたまはりてまかり（いでイ）○○ぬ

絹綿錢　いもひ精進の事也　物忌　齋日東鑑

解云○龍の首の珠取にとて云々　は鈴木氏云今更かくいはても有ぬべきを人笑はせむと殊更にした

る筆意なり○のたまひて　を抄本にのたまふと有はわろし○道の糧食物に　此に字は料にと云意なり糧の事は上（玉枝の段）に云きかても食物も同物なるを例の重云り○絹綿錢など　は即食物の料なり昔は金錢ならでも絹綿などをも物の價とせしなり殿の内の有限出し盡し給ふは此事には物惜みし給はず玉取に行者どもの悦べくし給ふなり○取出て添て　は抄本に取いだしてと有て添てを脱せりそへては寄と云に同じく玉取に出る人に與給ふなり○此人々ども　は類本に人どもと有○いもゐをして我はをらむ　は大納言龍の玉取得べき願など立給ひて身を愼み精進しておはするなりいもゐは齋居（イマヒヰの約轉たる）なるべし忠こその卷に（忠こそのおはさぬを父歎給ひて）公事も知給はず只いもゐ精進をし給ひて忠こそに相見むとのみ行ひ給ふ大和物語に（良少將を尋る處に）妻子どもは更にもいはずいもゐをして世中の神佛に願を立まどへど音にもきこえず○家に歸くな　は君の爲には命をも捨よと有同意也○のたまはせけり　は抄本たりと有○おの／＼仰承りて罷いでぬ　は皆旅立したるなり寫本に從ていでを補つ

龍のくびの玉とりえずは歸りくなとのたまへばいづちも／＼あしのむきたらむかたへいなんずかゝるすき事をしたまふ事とそしりあへりたまはせたる物はおの／＼わけつゝとり或はおのが家にこもりゐ或はおのがゆかまほしき所へいぬ

大和物語にあしのむかんかたへゆかんとて人の國へいきける　すき事　源氏箒木卷に好色の事也

○頭注云おのかゆかまほしき所へいぬ　立往（イヌ）履中紀

解云○龍の首の玉　は類本にくびをかしらと有は惡し○取えずは　は上に取えではと宣給ひし事也此は承る方より云改たるにて能かなへり○いづちも／＼　はちは方の意にてあちこちと云ち後方をうしろでと云てに同し地にはあらず何方へなりともと云意なり大和物語芦刈段に男はかくはかなくていまずかめるを見てはいづちも／＼えいくまじ女も男を捨てはいづちかいかむ云々○足の向たらん方へは大和物語に右京大夫宗行君の三郎にあたりける人は博奕をして親兄弟にもにくまれければ足のむかむ方へゆかむとて他の國へいきたり宇治拾遺三十に慈覺大師纐纈城を通出る處に　今はかうと思して足の向たる方へ走給ふとあり何所をはかと定たるあてもなき由なり玉持たらむ龍の居所そこと差所も有まじき也

いなんとす　は類從の異本に從つ本行にはゆかんとす諸本にいなんずとありとすの字なし是も惡からず此言の事は下解れの十三丁に云べし○斯るすき事と　すきことは此にては好色を云り小世繼物語に平仲本院侍從に係想する處にすきものと云れける人なれば箒木卷にかゝる好事どもを末世にきゝつたへて云々下の事は例の事哉の意なり○そしりあへり　は靈異記に誹ソシ字鏡に訾茲此反上毀害也思也曾志留呰嗤同充之于之二反嗤也阿左介留又於毛留又和良不と有其人の上を惡さまに云なり○賜はせたる物に　は與ふる君の方に附て云る詞也類本にたまはらせとあり

○各々分つゝとり　は諸本とるとあれど今は抄本に從つ此言下に續く意にて家に籠り居行まほしき處へいぬと云へ係れりて字あれば能聞ゆれど無ても宜し○或は家にこもり居云々　は人の前にては足の向たる方へいかんと云つれどとても龍首の玉は取得まじきを知て隱れて己が家に居る者もあり又自が行むと思ふ物語などをも爲しにて龍首の玉とらむとは絕て不思由なり

親君とまうすともかくつきなき事をおほせ給ふ事と
ことゆかぬもののゆゑ大納言をそしりあひたり
つきなき　にけなき事をのたまふと也　事ゆかぬ
らちのあかぬ事ゆゑと也史記曰夏孔甲時天降ニ
龍二一使ニ劉累擾一レ之ニ龍死以食ニ夏后一夏后使レ求懼
而遷去略文　これらに思ひよりしにや　○頭注云かく
つきなき事　無便宜也遊仙窟に方便をツキツキシ
とよめると表裏古今集誹諧「あひみまくほしはか
すなく有なから人につきなみまとひこそすれ「人
にあはんつきのなきにはおもひおきてむねはしり
ひに心やけせり是らもにつきのなきといふを月に
よせたりつきなきとは今俗にもいへり
辭云○親君と申とも　は親には孝を盡し君には忠
を勤べきものと云二を一に擧たる詞なり國譲下卷
に仲忠北方産の備重を仲忠死むと騒く處に　かんのおとゞ仲忠母　曰もこそ二あ
れ一所を親君と頼み奉る我子にはなどかくは宣ふ
云々懷風藻河島皇子傳　に忘ニ私好一而奉レ公者忠臣之雅
事背ニ君親一而厚レ交者悖德之流耳公羊傳に君親無レ
將是ら君と親と一に云る例なり○かくつきなき事
を仰給ふことゝ云々　は頭書につきなきは無ニ便
宜一なり遊仙窟に方便をツキ〳〵シとよめる表裏
なりと云り古今集誹諧に相見まく星は數なく有なか
ら人につきたみまとひてこそすれ此歌に戀人に云依
べきたづきなき由なり此も龍の住所はいづこ其玉
は云々して取べしと云方便もなくとても爲得へか
らざる事を仰給ふ事哉君親には命を捨ても仕べし
とは云ど親にもあれ君にもあれ餘なる事を仰給ふ
事哉と論あへるなり○事ゆかぬものゆゑ　は其事
の不調にて俗に埒ノアカヌと云意あたるべし榊卷
に六條御息所に曉別の處に　わりなき御心惑に中々事もゆかぬに
や沙石集に父の借たる物を貸たる人の子に返すを不レ受處に　度々問答往復して
事ゆかざりければ云々とありものゆゑは類本にも
の二字なし古今集秋歌に「秋たらで逢てとかたき女
郎花天の河原におひぬものゆゑを師はハエテ有デ生
モナイニ「たが秋にあらぬ物故女郎花など色に出
てまだきうつろふを誰カ俺タト云秋デモナイニと
譯されたりされど此は逆も調へキ事デモ无ニ依テ
と云なるべし
かくやひめすゑんにはれい○やうには見にくしとの
たまひて美はしき家をつくり給ひてうるしをぬりま

き給○して返し給ひてやの上にはいとをそめて色々○ふかせてうち〳〵のしつらひにはいふべくもあらぬあやおりものにゑをかきてまごと○はりたり

れいやうに　常のやうにては見ぐるしきと也　うるしをぬり　唐小説曰陳武帝以青漆塗壁内曰青樓　蒔繪　神代卷にうぶやを鸕鶿羽にて葺給ひしたぐひなるべし　綾織物　間ごとの障子にはりたる也　○頭注云返し給ひては　色とり給ひてなとにや返は色の字の誤りしはとりのなたらかなりしかしとなれるにやあらん　彩

解云○赫映姫すゑんには云々　はかくや姫は世に類なく清らに屋の内さへ光かゞやく女なれば常並の御殿にては附々しからねば新に普請をして屋を構給ふなりあて宮卷に治部卿の主あて宮の御爲にとて家を造て制度を設て心に吉日を取て御迎にとて云々とあり　記の八尋殿傳に古妻問するには先其屋を造しことと見えて云々と云れつれど此は其古きにもあらねば妻迎むとて態と屋造する當代の例には有べからず○例のやうには　抄本の字なし按ににの下て字を漏せる歟○屋　は御殿也抄本に家と作るは惡し家と屋との差別は荏野冊子に委云き○漆をぬり蒔繪をし　は蒔繪をのを字寫本に從て加普本にしの下て字あれど除の伊勢物語七十七段に普を刻て蒔繪の形に此歌を書て或人の隨筆に南山墨談に云く蒔繪の法はもと倭國に出たり宣德年中楊某と云者を倭國に遣はし其法を傳へしむ其子楊塤是を習て自新意を出し五色金鈿を以て並べ施こす云々とあり○いろへし　は抄本に返し古寫本にかへし校本壁しと作類本には此言なし普本には蒔繪して返しとて字あり頭書に返は色字の誤歟と云るそよきしはえの誤にていろえかさてえは取の誤か又本かへしと作るにて上にいを脱しかはろを誤れるにも有べし猶此色とりいろへ事は上九のひらに云つるを可考南山墨談に五色金鈿と云る如く此も彩色の蒔繪か又詩常の丹青を施たる蒔繪か知がたし○屋の上には云々糸を以葺は善美を盡せるなり糸をふけるにはあらねど續紀二十八に稱德天皇神護景雲元年四月癸巳東院玉殿新成群臣畢命其殿葺以琉璃之瓦畫以藻績之文時人謂之玉殿を見え遊仙窟に金臺銀闕蔽日干雲云々水精浮柱的皪含星雲母飾窓玲瓏映日長廊四注爭施玳瑁之椽高閣三重悉用琉璃之瓦白銀爲壁照曜於魚鱗碧玉緣階參差於雁齒

など云るも似たり○色々に　は寫本に從てに字を補つ○内々のしつらひには云々　以上は外の構を云以下は内の構を云る也○云べくもあらぬ云々は此殿に張給へる綾織物は尋常のにはあらで云にも云れぬ甚よき品なるよしなり○間毎に張たりは抄本に字なし校まはりにとあるは誤なり間は今も何の間くれの間など云間なり

もとのめとも(どイ)は○(みなおひはらひてイ)かくやひめをかならずあはんまうけして獨あかしくらし給ひ(ふイ)

もとのめ　とは北の方思ひ人などなるべしそれをとほさけて獨ふし給ふ也　○頭注云下モの文にはなれ給ひしもとの上へはかたはらいたくと云々

解云○もとの妻どもは云々　下に離給ひしもとの上と云事あり此は其離縁の事にて此本の妻どもと云る即上北方又妾などにて如レ此なめしく云べからねと赫映姫に比べては物の數にもあらぬよしにて大納言の心に成てかく无禮しくは書るなるへしさて此下必詞脱て文言つゞかす故○みなおひはらひて　と云こと今補つ此に能似たる事藤原君卷に上野宮源正賴の九君あて宮を戀て聟にならむとし給ふ處に　唯今世にある上達部みこたち此殿の聟に成を今正に我をもせんとて妻をも追拂ひて今左大將正賴の家に往て我住らんにめす人あらば思疎みなむと宣ひて待おはします云々宇治拾遺卷四に三河入道まだ俗にて在けるときもとの妻をばさりつゝ若く容よき女に思附て其を妻にて云々と有に傚ひもとのめどもと有に從て上に皆と云言を加へて補つ○かくや姫を云々　此を字にと云べきが如く聞ゆめり是は古と今と人の物云ぶりの異なるにて古今集の詞書に「逢坂にて人をわかれける時に「音羽山の邊にて人を別るとて後撰集に人を云煩てつかはしけるなどある同格の言なり○獨あかしくらし給ふ　は彼上野宮の我すめらむにめす人あらば思疎なむと宣給ひし意ばへなるべし

つかはしゝ人はよるひる待給ふにとしこゆるまでおともせず心もとながりていとしのびてたゞ舍人二人めしつぎとしてやつれ給ひて難波(イナシ)の邊におはしまして

玉とりにつかはしゝ人たづねに也　舍人(トネリ)　名次(メシツギ)　窶(ヤツレ)

解云○つかはしゝ人　は龍の玉とりに出し給ひし

入也類本につかひし人と有は誤なり○音もせず は彼人々何ともかとも申參らせぬ由なり○心もとながりて は待かねてと云意なり○とねり は古事記傳三十三に舍人は左右近く親く仕奉る者なり書紀に近習舍人近侍舍人左右舍人などあり天皇及王たちの使給ふ者にて臣の家には此稱なし續紀卷五に和銅三年秋七月丙辰左大臣舍人正八位下牟佐村主相摸と見えたるは後の事なるべし名義は殿侍か書紀に帳內官者兵衞なども有と見ゆ是は甚上代の事にて和銅の比より後々は臣下に仕も舍人と云ること例證多かり又攝政關白に內舍人を賜ことも職原抄に見えたり萬葉十三に高市皇子の城上殯宮に仕る舍人の長歌に 朝者召而使夕者召而使遣之舍人之子等者行鳥之羣而侍有雖待不召賜者云々と讀るにて是は皇子なれど臣にても同事なれば其仕ふる樣甚親きを思べし宇治拾遺卷八に下野武正と云舍人法性寺殿に候けり又十三筑紫に大夫貞重と申者有けり貞重か舍人に仕へけるをのこ云々などあり○めしつぎとして は寄生卷は匂宮嫁取三日の夜祿を給ふ處に めしつぎとねりなどの中には亂がはしきまでいがめしうなん有ける花鳥餘情に西宮抄に院宮雜事中御隨身勤ニ夜行ニ召繼奏レ時云々今案親王家又召繼あり式部卿重明親王嫁娶のとき召繼已下に錢二萬を祿に賜ふよし李部王記に見えたり云々と有初花卷に花山院御車の御供を大童子云々四十人中童子二十人召繼どもはもとの俗ども仕まつれり著聞集卷十に承安五年競馬公景に持しける賞に公景は元より院の召次所に候けり孰景叡感の餘に次日召次所に候へきよし仰下されけり拾芥抄中末院司部に召次所あり又柏木卷に廳の召次所とあり宇治拾遺卷五に侍田舍より上て主の寶子に逢處に 近うめしつかふ侍出來て御出居へ參らせ給へと云ければ悅て參にけり此召つぎしつる侍しばし候はせ給へと云て云々とあり鈴木氏はつきは給ツギなりと云れき猶召繼の字義ならむか○やつれ給ひて は御供人を省畧て出立給ふ由なり他より云にはやつれ自云にはやつしと云此は地にて他より云言なり若紫卷に源君北山に詣給ふ處に 御供に睦まじき四五人計して云々誰ともしらせ給はずいといたうやつれ給へれどしるき御さまなればあなかしこや云々又僧都の坊の事を源君詞 心恥かしき人住なる所にこそあなれあやしくも餘やつしける哉きゝもこそすれなど宣給ふとあり源註拾遺葵に 襤褸をやつると訓れ

ばⅹ衣より出たる詞なるべし字書に襤盧甘切[illegible]音藍褸力主切音縷玉篇衣壞也揚子方言南楚凡人貧衣被醜弊或謂ニ之褸裂一或謂ニ之襤褸一とあり神代紀に火酢芹命日以襤褸而憂之曰ニ吾已貧一矣乃歸ニ伏於弟一と訓り○難波の邊に　は邊字ほとりと訓べきを寫本にヘンと讀たるは惡し

問ひ給ふ事は大伴の大納言の人や船にのりてたつころしてそがくびのたまとれるとや聞ととはするに

そがくびの　それがくびのなり　萬葉十六に境部王歌に「とらにのりふるやをこえて青淵にたつとりてこん劒たちもか

解云○大伴大納言の人や　は大伴のと訓べし類本寫本に大納言の下殿字あれども凡て名下殿といはぬ例なれば今はなきに從つ此や字下なると重りていかゞしく聞ゆめり上は大納言人や云々其が首の玉とれると結り上は此事慥ならねば疑の意を以問給ひ下はとゝ受て直に聞たるや如何と宣給ふにてやきくと結たる言なり○とはするに　は彼舍人に令レ問給ふなり

船人こたへていはくあやしき事かなとわらひてさるわざするふねもなしとこたふるにおちなきことする船人にもあるかなえしらでかくいふとおぼして我弓のちからはたつあらばふといころしてくびの玉はとりてんおそくくるやつばらをまたじとのたまひて船にのりて海ことにありき給ふにいととほくてつくしの方の海にこぎいで給ひぬいかゞしけんはやき風吹て○世界くらがりてふねを吹もてありくいつれの方共しらず船を海中にまかりいりぬべく吹まはしてなみは船にうちかけつゝまき入神はおちかゝる樣にひらめきかゝるに大納言はまどひてまだかゝるわびしきめ○見ずいかならんとするぞとの給ふかぢとりこたへてまうすこゝらふねに乘てまかりありくにまだかかるわびしきめを見ず御船海のそこにいらずば神おちかゝりぬべしもしさいはひに神のたすけあらば南海に吹れおはしぬべし

おちなき事する頭注云神功紀磐（オチ）又慓トモ　恐れけもなくいふ船人かな我勇をしらぬならんとほこり給ふ也

神はおちかゝる頭注云後撰集「ちはやふる神にもあらぬ我中の雲井はるかになりも行かな是等神とのみよめり　神とは雷也　まだかゝる　いまだかやうなる

めに過ずと也　こゝら船に　おほく舟にのりてありきしかともと也　○頭注云船を海中にまかり入ぬへく　可ニ下(マカリ)去入一　可ニ往(同)入一　下去式　往紀解云○船人答ていはく云々　は龍を殺など云事思もよらず甚怪しく有まじき問事哉さる事や有べき是は決て本性の人にはあらじ狂氣にもやあらむと思ひて笑て然やうのわざする船もなしと答たるなり○をぢなきことゝする　は船人龍を甚おそろしき物と思たるさまを見てかよわき返答する者哉とのたまふなりをぢなきの義は次に云べし稻直云ことするはこたへするの誤かと云るもさる事ながら鈴木氏云ことゝいふといはで事すると云例は下狩行幸の段にいはれぬことなし給ひそ又物しらぬことなし給ひそともありと云れき其同格の言なるべし○えしらでかく云とおぼして　は武き人は龍を捉事を舟人は不レ知で云にやと思して御自己の猛勇なる事をのたまふなり仁德紀に六十七年於吉備中國川島河派有ニ大虬一令レ苦レ人云々笠臣祖縣守云々即擧レ劍入レ水剸レ虬萬葉六十に境部王詠ニ數種物一歌「虎にのり古屋を越て青淵に蛟(ミツチ)龍とりこむ劒刀もがと有

大方似たる事なり又首卷三十八丁に載たる太平廣記の水精など縣守に似たり此大納言も實に彼等か勇勢おはしまさば此に宣給ふ詞空しからじはや○我弓の力は云々　は大伴氏にましませば掌給ふ處甚武くおはするよしなり○ふと　は俗言にチョツト世話ナシニなど云意にて甚易く射殺さんとなり下解四にもふと子安貝をとらせ給へ俊蔭卷に波斯國に到處に馬走寄と思ほどにふと首にのせて飛に飛て云々○玉はとりてむ　を類本にいとりと有は惡し○遲く來る　は後撰集春上に前栽に紅梅を植て又の春遲く開ければ宿近く移て植しかひもなく待遠にのみにほふ花哉又冬歌親の外に在て遲く歸ければ遣はしける人の女の八なりける神无月時雨降にも暮る日を君待程は長しとぞ思ふ　是ら花の未開ほど父の歸を待佗たる時に詠るにて此も歸事の遲き者どもと宣ふなり○やつばら　は殿ばら法師ばらなども同じ著聞集十七に大納言泰通卿狐狩の處に古狐の言に若くさふらふやつばらにこの御氣色のやう申含さふらひなばいかてか懲侍らず候べきとあり此は惡みて宣ふなり○海每に　は紀伊の海土佐の海など所々に名の變ればかく云るなり龍は不レ居か龍を見付は殺して玉とらむと搆て所々方

方尋求給ふなり○筑紫の方の云々　は漸々に漕行つゝ遠くつくしの方に到ませるなり○いかゞしけむ　は風起雲立くるを何故ならむと怪しむなり○早き風吹て　は抄本て字なし早と云こと剛き意に通よしは別に荏野冊子に云き○世界くらがりて　は暴風吹起て黑雲急に覆て四方八面皆闇がりたるなり大鏡卷八に宇多天皇の時式部卿宮の侍從に加茂大神物宣ふ處にはかに霧立て世間くらがりて東西もおぼえず暮いぬるとやと覺えて云々著聞集十七に近江守仲兼變化物に逢たる處に日暮て世中暗くてなどあり○海中　はうみなかと訓べし今も沖中と云に同し伊勢集に長恨歌のうた「しるべする雲の舟だになかりせば世をうみなかに誰かとはまし○まかり出ぬべく　は寫本に從つ諸本入ぬべくと有は惡し上玉枝の段にも海中に出て云々我國の內を離てと有皇國を遠く大洋の方に吹廻しつゝ漸々に出行を云りまかりとは皇國を離出る由也○波は船に打かけつゝまきいれ　は舟を沈めんとて波を打掛て渦卷入やうなり○神は落かゝるやうにひらめきかゝる　は明石卷に須磨の天變の末の處に波の音あらき事嚴も山も殘まじき氣色なり神の鳴ひらめくさま更に云む方なくて

落かゝりぬとおぼゆるにある限さかしき人なしとあり神は雷なり和名抄に兼名苑云雷公一名雷師カ回反和名伊加豆知　一云霹靂辟歷二反俗云加美於豆一云加美止介さて彼舟皇國を遠く離て海中に吹出し波打掛て海底に入ぬべく上より は雷落かゝりぬべく三を以て追責る由なり然れは上の海中に入ぬべくと有は出ぬべくの誤にて入としては卷入に徒に重れるを思べし古今集俳諧に「枕より跡より戀の責來れば爲便方无みぞ床中に居ると有歌に似たり浪は云々神は云々大納言は云々とは字を重たるは同集秋下に「秋は來ぬ紅葉は宿に降敷ぬ道踏分て訪人はなしと有は字に同し須磨卷に上巳禊の處に俄に風吹出て空もかきくれぬ云々海面は衾を張たらむ樣に光滿て雷鳴ひらめく落かゝる心ちして辛うじてたどり來てかゝるめはみずもあるかな云々かくて世は盡ぬるにやとこゝろ細く思惑に云々と有は此に能似たり此物語を思て書るなるべし○わびしきめはみす　はは字古本に從且上に引る須磨卷かゝるめはみずも有哉とある文に隨て改つ諸本めをとあり○いかならむとするぞとのたまふ　は風は遠く大洋に吹出し浪は舟を沈め入れむとし雷は落かゝりぬべし此身は如何成ゆかむと畏惑ひ給ふなり次の條に檝

取此三の難義の答を申せり○かちとり　は景行紀十八年ノ條には挾抄者績紀巻三十三ノ十九丁に梶師和名抄に文選
呉都賦云篙工檝師和名加知止利又舟具釋名云檝音接一音集使
舟捷疾一也兼名苑云檝一名棹奴効反一音饒和名加遅と有○こゝら
は師説にこゝたこゝだくそきだくなど云るを萬葉
に字は多く幾許と書り數の多かるを計らず凡に云
言なりそこばくこゝらなど云るは今京に成ての書
ならでは見えずと大祓後釋云れたり此は海を廣くの意
か多年の義か何れにも有べし上妻問の段にこゝら大き
さと有處可ㇾ考○まかり　は貴所より賤所に下るを
云言なれど貴人に對て語らふ時は唯他に行をまか
ると云又行にも歸にもあらで只輕く添ても云り是
も對人を敬て云心は同じと藤井氏消息文例に委云れたり
此も唯添たるなり○かく侘しき目をみず　は抄本
には此もかゝる侘しきとあれとも此は詞をかへて
かくと云目をと云るなり○御船　は抄本御字なし
○海の底に不入ば　は前條に波は舟に打掛つゝ巻
入とある結にて海底に沈没ことは脱たりとも上よ
り雷落かゝりぬべしとなり○神の助あらば　は雷
の落かゝる事を諸の神の御助に依て脱なば南海に
到給はむとなり○南海　は字音に呼べし中にの字
ある本は悪し前件に海中に出ぬべくと云へる是な
り御舟南方に進み〳〵て南海のおそろしき國に著
べしと申て左ても右ても死事の脱べきやうなしと
て泣なり南海國の甚々畏べきよしは首卷三十九丁に載
つるを可ㇾ考
うたてある主のみもとに仕まつりてすゞろなるしに
をすべかめるかなと○かぢとりなく
薄情　辛漢書また不意とも書こゝろならさる也　情
なき君の御許に奉公して思はぬ死をするとなげき
たり　○頭注云古事記安康天皇段云夜既曙詑可ㇾ
幸ニ獵庭一乃進ㇾ馬出行爾侍ニ其大長谷王之御所一人
等白宇多氏物云王子云々うたての詞はしめてこゝ
に見ゆ別樣萬萬葉集第二十秋といへは心そいたき
うたてけに云々
解云○うたてある　は古事記に須佐男命の惡業の事を猶其惡態
不ㇾ止而轉とある傳に是は本より有事の愈進て殊
に甚しくなるを云言なり萬葉二十に「何時はなも不
戀有とはあらねども得田直比來戀の繁きも轉字を
書は轉り進む意を取なるべし書紀に武烈天皇御所

行(ワザ)を言所に設ニ奇偉(ウタテ)之戯一などあるは右の意より移りて平穏に尋常ならで奇僻く善からぬ意ときこゆ貫之集に蟻通神の事をうたてある神なりと云るも是なりと云れき此も其奇偉よからぬ態し給ふ君に仕へてと申意なり〇すゞろなる　は伊勢物語宇津山の段のに我入むとする道は甚闇う細きに蔦葛は繁りて物心細くすゞろなる目を見る事と思ふにと有を縣居翁云すゞろはそゞろと同くて此は思かけぬ辛きめ見る云意なり文選の註に坐者无レ故辭と云又不慮不覺など心得も皆叶へりに頭書　今も心も心ならず浮たるさまをそゞろと云に同しと云れたり新釋の説猶不レ諧猶足立稲直の説紫式部日記解卷二あり不慮に世の常ならぬ死やうをする事かとて泣なり〇しにをすべかめる哉　は萬葉十六に「いさなとり海哉死爲流山哉死爲流死許曾海は潮干て山は枯すれ伊勢集に式部卿宮亡給ひて御四十九日終て家に罷る人「君によりはかなきしにや我はせむこひ返すべき命ならねば亭子院歌合に「人戀とはかなきしにを我やせむ身のあらはこそ後も相見めとあり〇檝取なく　は今不慮に命を亡はむ事を悲めるなり此檝取なくと書る筆勢いとをかしくて笑を止

かたきぞかし

大納言これを聞てのたまはく船にのりては梶取のまうす事をこそ高き山と〇たの(もイ)めなどかくたのもしげなく(きイ事なイ)〇まうすぞとあをへどをつきてのたまふ

船頭のいふ事をたのみとするに何とて情なくいふぞと也　あをへと　順和名歐吐(ヘトツク)　〇頭注云梶取　文選呉都賦檣工檝師和名加知止利萬七「浪たかしいかに梶取水鳥のうきねやすべき猶やこぐへき解云〇楫取の申事をこそ云々　はいかに建き人にても船にては進退かなはねば楫取が詞につきて其を憑みに心も落着ものを楫取しも今死ぬべしとなけばまして大納言は力なく思ほすなり〇高き山とものため　はも字なくても聞ゆれど類本に從て加つ此詞は古き諺なるべし舒明紀五丁に既而泊瀨仲王別喚ニ中臣連河邊臣一謂レ之曰我等父子並自ニ蘇我一出之天下所レ知是以如ニ高山一恃之云々公忠集に「おり登り見るかひもなし白雲の山と頼し君しみえねは左に此歌は延喜帝隠れさせ給ひて殿上もせさりけろ程に山に雪の降かゝれるを見てよめるとあり　續詞花集に片岡社に書付けるうた作人不レ知「片岡と人はいへども我は唯高き山とも憑まるゝ哉祭使卷に致仕大臣あて宮を得むとて宮内に宣ふ詞に此に

は後日痛き人も侍らず高き山と恃み聞えむなどあり○憑もしげなき事を申ぞ　は諸本云々なく申てとあり類本に従て三字加つ○靑へどをつきて　は和名抄に病源論云胃氣逆則歐吐上於后反字亦作嘔倍止都久又太萬比　皇極紀に四年入鹿臣を斬時子麻呂等以レ水送レ飯恐而反吐と訓古事記金山彦神の段には多具理とあり谷川氏云へどは反吐の音なり鈴木氏云あをへどと云は今俗黄水と云て舟輿に酔る者の吐物なりと云れき宇治拾遺十五に門部府生が従者海賊に恐る處に黄水をつき合たりとあり

かおとり答てまうす神ならねば何わざをかつかうまつらん風吹波はげしけれとも神さへいたゞきにおちかゝるやうなるは龍をころさんともとめ給ひさふらへは○あるなりはやてもりうのふかするなり

あるなり　龍をとらんすれはかくあるぞと也　はやてもりうの　今昔物語に龍の人と化して來る事を書て此風は我吹せつる也と云々　暴風ハヤチ和名

○頭注云あるなり　は風波の荒るるをいふ歟

解云○神ならねば　は鈴木氏云按に是は大納言のなどかくは憑もしげなくは云ぞと宣ふを受て楫取我身神ならねば何態をか仕奉らん我を憑まむより早神を祈給へと申なるべしさては仕と云言も附々しく聞ゆと云れき○何わざをか仕まつらむ風吹波烈しけれども　は上に反る語格にて風波烈けれども神ならぬ身なれば如何にしてか止べきと申なりと越中人弘中重義云り古今集春歌詞書に雲林院の御子の許に花見に北山の邊に罷れりける時常には北山の雲林院の御子の御許にと云めり宇治拾遺一巻に利仁將軍或五位に薯蕷粥食せんとて誘ふ處に利仁來て云やういざゝせ給へ湯浴に太夫殿といへば太夫どの湯浴に誘させ給へなりなど前後に云ると同格なり○神さへいたゞきに落かゝるやうなるは龍をころさむと云々　は下に龍は鳴雷の類にこそ有けれと有を思合すべし詩に天昏地黒蛟龍移雷驚電撃雌雄隨とありいたゞきは和名抄に頂顙陸詞曰顛天反訓伊太々岐頂也顙音寧頭上也○求給ひさふらへば　此給ひ候と云ことといかゞしき詞なれども例ある事なり宇治拾遺一巻に鬼の酒宴の處にたゞ目鼻はめすとも此瘤は許したまひ候はむ又巻三鳥羽僧正國俊と戯る條に出させたまひ候ひつる云々猶此物語に多し沙石集巻六に莊嚴坊法印に答給ふ鎌倉右大臣の詞に世間の様は一人は悦べども一人は歎く事有今はいろひなさふらひそ但し仰をばたが

へじと思給ひさふらへば是は承はりぬ云々などあり〇かくあなり　は校本に従てかく二字補ひあるなりとある字を除つ類本に求給ふ故にあるなりと有は悪し此詞は如此有也にて音便にあなりと訓べし下狩行幸段にも山本ちかゝなりとあり頭書にあるは海の荒るを云かと云るはあらず〇はやても龍のふかするなり　は和名抄に史記云暴風雷雨漢語抄云八夜知又乃和木乃加世八雲御抄にはやちは海神のふかする風也と有は此文に依給へるか風はしともちとも云又ちを通はしててと云例追風をおひてと云りたつをりうと有本はわろし

はや神にいのり給へといふよき事なりとて梶取の御神きこしめせ音なくこゝろをさなくたつをころさんとおもひけりいまよりのちは毛〇一すぢをだにうごかし奉らじとよごとをはなちて立ゐなく〳〵よばひ給ふ事ちたびばかりまうし給ふ

梶取の御神　住吉明神也　心をさなく　心のおろかにてと也　不肖　不叡日本紀　毛一筋　感通傳唐時得二龍毛一其色赤黄云々　よことを　ちかひ事をなして祈る也　〇頭注云よき事也可景行紀　心をさなく　心不賢也仁徳紀我雖二不賢一豈棄二先帝之命一云々公忠集「水海にしほたるばかりをさなくて都にとしの老にける哉散木集に「ふしつけのをとろか下にすむはへの心をさなき身をいかにせん　よごとを　云々　孝徳紀白雉元年二月奉賀　天智十年正月奏二賀正事一持統紀四年正月讀二天神壽詞一續日本紀正暦五年二月奏二神吉事一延喜式云中臣進就レ座宣二祝詞一右いづれもよことゝ讀は同しけれども和語の意は續日本紀に吉事と書る意なるべし但しこゝは風波を祈なれば式の祝詞の意歟萬二十「あたらしき年の始の初春のけふ降雪のいやしけよこと

解云〇よきことなりとて　は諾へる由を答る言なり上妻問の段に例を引たり〇梶取の御神　は土佐日記正月二十六日の條に手向する所あり梶取して幣奉らするに幣の東へちれば梶取の申て奉ることは此幣の散方に御船速に漕しめ給へと申て奉るとあり按に今世船靈神此事は荏野冊子に云つと申て梶取の祭れる神あり古へも如此事有て船にての祈はむねと梶取にせさする事にてや有けむ若然ならは此も梶取の祭れる御神と宣

給ふ意にやさて此は楫取は風波荒くて船の事にのみかゝづらひて祈すべき暫の隙だになければ大納言の祈し給ふよしなるべし○をぢなく　は音なくをとなく校本念なくなどあり本居翁云皆をぢなくを寫誤れるなりと云遺されしに從て改つ古事記甕栗宮段歌垣の歌におほたくみ袁遲那美許曾すみかたぶけれ傳にをぢなみは拙省なり續紀三十詔に先乃人波謀乎遲奈之我方能久都與久謀天必得止天牟念天雄略紀に舍人性懦弱緣レ樹失レ色また怯欽明紀に微弱などあり拙愚なる意弱さ意など兼たる言なりと有此は拙愚なる由なり○心をさなく　は心の至深からぬにて長無なり幼少を云も同じ此言上と大方同意なるを例の垂たるなり夫木抄九雜に「ふし附のおどろが下に住はえの心をさなき身をいかにせむ蜻蛉日記解環中八ノ四丁にうたて心をさなく云々と有○毛の末一すぢをだに　はの末抄本になしすゑをすぢと有本は誤なり○動かし奉らじ　は障らじと云程の事なるをこと〳〵しく動かしと云る也○よごと　は吉詞にて轉て祝詞の事となれりと鈴木氏云れき祝詞式に出雲國造の神賀吉詞台記宇治左大臣頼長公記玉勝間巻一に引たり　の康

治元年大嘗會別記に中臣壽詞を載られたり谷川氏云古書に禱祈賀壽等の字をほぎと訓又神代紀に呪祝壽等の字をほぐとよむ呪祝通じて善惡に就て云辭なりされば天神の天稚彦を呪て以二惡心一射者則當レ遭レ害以二平心一射者則當レ無レ恙と宣給へりと云り即此も雷鳴風波を止給へと祈給ふ詔刀詞なり○はなちて　は聲を惜まず喚立る由なり嵯峨院巻に平中納言の上野宮日比へて訪給はぬはいかにさ問給へば　上野宮大に驚給ひて彼まさときの朝臣いなと申給ふ事ぞと聲を放て宣ふ時に云々あて宮な慕給ふに不叶と心得給ひしなり　續古事談巻上に後三條天皇の御前にて大二條殿重任の事を腹立て殿座を起て出させ給ふとて大聲を放て宣給はく云々など多かり○立居　は神を拜み給ふ形也大神宮儀式帳に四段拜奉且短手二段拍一段拜又更四段拜奉短手二段拍且一段拜奉畢と見えたり猪神拜の事は記傳玉勝間等に委みゆ　書紀の私記に謂レ拜爲二乎加無一言乎禮加々無也と有起居折屈なるべし桃華蘂葉に女房神拜兩段再拜乍レ居四度禮レ之とあれば男は起居するを知べし此は祝詞も千度計申給ふなれば拜の數も限なく多かるべし○千度計申給ふけにやあらんけはからと云言の約たるにて故にやと云意なり落

凹物語巻四に源大納言病の處に定業の命にても延給へと人にも願立さすけにやあらん少し怠て云々明石巻に朱雀院の御夢に桐壺帝見えさせ給て末の處に睨ニラミ給ひしに見合給ふけにや御目煩給ひて堪難う惱給ふなど物語書どもに甚多かる言皆此意にて聞ゆ

けにやあらんやう／＼むイ神なりやみぬ少ひかりてあイ風は猶はやく吹檝取○いふのイいはくイ是は龍のしわざにこそ有けれ此ふく風はよき方の風也あしき方の風にはあらずよき方におもむきてふくなりといへども大納言は是を聞入給はず三四日ふきてふきかへしよせたり濱をみればはりまのあかしのはまなりけり大納言南海の濱にふきよせられたるにやあらんむイとおもひていきつきふし給へり船にあるをのこども國につげたれば國のつかさまうでとふらふにも得おきあがり給はで船そこにふし給へり

いきつき　氣衝イキツキ萬葉嘆息する意也又くるしき意也

國のつかさ　播磨の守也　○頭注云けにやあらん驗にや也其しるしにや雷やみしとなり　和名鈔云播磨國　明石安加志

解云○漸雷なりやみぬ少あかりて風は猶早く吹は類本ぬ字なし諸本少しひかりてと有は必誤なり始光は電光の殘れるかと思つれど雷鳴止て雷光は有まじき事なり故今改つ上に世界くらがりてと云る首尾なり雷も止闇かりしも明り初しかど風はまだ其儘剛く吹となり○檝取のいはく　は抄本に楫取いふと有○龍のしわざにこそ有けれ　は大納言龍を殺さむと爲給ひける過を悔て今より後に龍にいろはじと神に禱給ひし驗ありつれば楫取が按にたがはず然なりけりと知はてたる由なり○よきかたの風なり云々　は先に吹しは南海に押出しぬべき風の早かりしが今は直りて北方に向て吹風ぞとなりさて大納言南海をいたく恐怖給ふ故に惡き方には不レ吹吉き方に赴て吹風ぞと幾度も／＼もくだ／＼しきまで申せども猶疑て眞實としも得聞入たまはぬなり○三四日　はみかよかと訓べし彼早く吹し風吉方に吹不レ絕で三四日經て播磨國に吹寄たるなり疾風三四日吹てと云に南海遙に吹出せし由を知らせたる文なり○播磨國明石の濱なりけり　は楫取が慥に其所と見定たる由なり和名抄に播磨國明石安加志郡明石鄕と有○大納言南海の濱に

云々　は風は吉方に吹と申ても聞入給はず濱に着たりと申せば南海の濱ぞとおぼして甚く恐怖て得しも疾く起上り給はぬなり○いきづき　は息衝なり萬葉十四東歌に「澳に住(スモ)を鴨のもころやさかとり伊伎豆久妹をおきて來ぬかも師云長き息を衡て戀思ふ妹と云事なり南海とのみ思入て御心をえのどめ給はで歎息のみし給ふなり○舟にある男ども　は舍人などなり○國に告たれば　は抄本に從つ諸本告たれどもと有は起上り給はずと係りて聞ゆれど猶はと有方勝べし播磨國司に告知らせたるなり大納言始は人に知られじとて忍て出給ひしかど如此甚く惱煩ひ給へば舍人などの力に不及で國司の謀ひを請むとて告たる由なり○國の司まうで訪ふにも　は播磨守速來て問奉れど猶南海の濱と思ほして速も起出給はぬなり弓勢の剛きを自負し給ひしに引替て甚臆し給ふをかしさを書顯せるなり○船底に臥給へり　は起上り給はぬ形を云り土佐日記正月九日の條に男もならはねばいとも心細し增て女は舟底に頭を衝當てねをのみぞなく又二月六日の條舟醉の淡路島の巨子(オホイコ)都近く成ぬと云を悦て舟底より頭をもたげて云々など舟の中にての病者の形狀なり

松原に御むしろしきておろし奉る其時にぞ南海にあらざりけりと思ひてからうじておきあがり給へるを見れば風いとおもき人にてはらいとふくれこなたかなたの目にはすもゝをふたつつけたるやうなり

面はれて　目の邊赤くなりたる也　○頭注云風いとおもき人にてはらいとふくれ　病源論曰風邪寒熱毒氣客ニ經絡一使ニ血澁不ニ通壅結皆成レ腫也又云心煩悶而嘔逆氣急而腹滿如レ此者殺レ人云々　目にすもゝを　同書曰目或如ニ杏核大一或如ニ酸棗之狀一腫因レ風所レ發云々

解云○松原に　は明石の濱のなり南海ならぬ事を示奉らむとて濱邊に假に莚を敷設て強て舟より下し奉れるなり○其時にぞ　は起上り給へるをと云へ係れり○南海にあらざりけり云々　は始上のその結にてあらざりけると有べく思しかど諸本悉けりとあり故思へば此一句限の結なりかくて今漸實を知て安心して起給ふなり○風いとおもき人にて　は如何しく聞ゆる詞なれど當時の詞遣ひにて此大納言は風を引給ふ毎に重く惱給ふ御本性ぞと

云義なり大鏡一巻に三條天皇云々本より御風重くおはします宇治拾遺十二巻に冬嗣公叡實を訪給ふ處に僧申やう風おもく侍に醫師申に隨て蒜を食て候なり又同巻に増賀の言に年まかりよりて風重く成て著聞集六巻に大納言宗俊卿云々殊に風病おもき人にて笛の柄にも紙を巻てぞ遣はれけるなどあり○腹いとふくれ云々目には李を二つ附たるやう也　は病源論に風邪寒熱毒氣客ニ經絡ニ使ニ血澁不ㇾ通壅結皆成ㇾ腫也また心煩悶而嘔逆氣急而腹滿如ㇾ此者殺ㇾ人また目或如ニ杏核（カラモヽ）大ニ或如ニ酸棗（サネブト）之狀ニ腫因ㇾ風所ㇾ發と抄頭書に引てあり　本書に杏とあるを此には李（スモヽ）と云りすもゝは和名抄に李子兼名苑云李音里一名黄吉和名須毛々とあり

是を見奉りてそ國のつかさもほゝゑみたる國におほせ給ひてたごしつくらせ給ひてによふ〳〵（をイ）になはれて家に入給ひぬる○

ほゝゑみ　微笑　たごし　順和名腰輿唐令云行障ニヨフ六具分ニ左右ニ夾車其次腰輿和名太古之　によふ〳〵　吟によひ苦しむ也　○頭注云頰笑の義即今昔物語に頰笑と書り含ㇾ笑也ホヽフヽ通す含を頰張と云がごとし「あさぼらけほゝゑむ梅のかほをこそ我もをかしとをりてながむれ源引歌弄花ホヽヱム解云○ほゝゑみたる　は頰咲なり笑はまほしきを念して唇に其形の顯るゝなり宇治拾遺五巻に父に不ㇾ似子父に似たりと云せんとて人を集へて父の道たる侍をいづこか故殿に似たると云ければ其外は烏帽子のみ似たりと云るを笑處に呼て令ㇾ云に烏帽子の外はなり似させおはしまさずと云ければ人々頰笑て一人二人づゝ逃笑にけりと有さま思べし藏開巻にほゝと咲ふと云るほゝは笑ふ聲にて此に異なり○國に仰給ひて　は是も播磨國に仰てなり○たごし　は和名抄に唐令云行障六具分ニ左右ニ夾ㇾ車其次腰輿和名太古之　齋宮式に腰輿一具沙石集一巻に寶地房の澄眞法印夢に西坂本より十禪師の登らせ給ふに參相ぬ手輿にして云々とあり○によふ〳〵になはれて家に入給ひぬるを類本にはになはれ給ひてとあり此物語の文給ひと云言重なるべき處は上の一つを略たりと見ゆる處多し心得おくべし終のを字抄本なきは惡しによふはうめく又俗にウナルと云に同し靈異記中巻に呻爾與フ字鏡に㖡詩伊反出ニ氣息ニ心呻吟也志那久又佐離與夫又奈介久また呻舒神反吟也歎也左萬與不又奈介久落凹物語二巻に兵部少輔後朝のさまな文やらむとて歌によひをる宇治拾遺六巻に僧加多鬼國へ行たる處に一つの隔あり云々内を

見れば人多くあり或は死或はによふ聲す又（十三に慈覺大師入二纐纈城一し條に）後の方に一宅ありよりてきけば人のうめく聲あまたす云々又異所をきけば同じくによふ聲す云々などあり腰輿に乘ながらうなりつゝ荷なはれて京の御家に歸給ふなり

いかでか聞けむつかはしゝをのこどもまゐりてまうすやうたつの首の玉をえとらざりしかばなむ殿へもえまゐらざりし玉のとりかたかりし事をしり給へればなんかんだうあらじとてまゐりつるとまうす

つかはしゝ　玉取にやりし人々也　勘當

解云○いかでか聞けむ　は甚く人目を忍て歸給ひし由を知らせたる詞なり○つかはしゝ男ども　は玉取に出し給ひし男共なり○玉を得とらざりしかばなむとのへもえまゐらざりし　は抄本に從つ古板本になんてん寫本に南殿類本に南海など誤れり下のえ字は類本にはなしなむはぞと同辭にて結もその格に同じ故に下をしと結たりかばなむと續ける例夕貌卷に（右近に夕良君の事問たまふ處に）誠に海士の子なりともさばかりに思ふをしらで隔給ひしかばなむつらかりしとの給へば須磨卷に夜更にしかばなむ例の不し思なるさまにやおぼしなしつると有にて知べし

○玉の取がたき事を　は大納言御自玉取に物し給ひて玉の易く取得まじき事を能知給ひたればとなり○かんだう　は勘當の字音なり今世オシカリと云程の事なり俊陰卷に（若小君失給ひたる處に）大殿には云々兵衛佐君（小君の兄）をいみじうかうがへ給ひて御前馬添ひ男どもは云々かんだうせられ舍人雜色は打しばらせ云々落凹物語（卷一）に（三日夜物語に）いかでかく濡させ給へるぞと聞ゆれば惟成か勘當重しと侘つるが苦しさに

又かんかふと云るも同じ枕册子に（むさくなる物）えせものの從者かんがふる宇治拾遺（卷八）に（俊行朝臣地獄に至て蘇て詞書に逢し事を語る處に）我は死けるにこそと心得てかんがへられつる事ども有つるありさま云々などあり

大納言おきいで○のたまはくなんぢらよくもてこずなりぬ龍はなるかみのるゐにてこそありけれ

日本紀曰雄略天皇七年七月天皇少子部連蜾蠃に詔してのたまはく我三諸が岳の神のかたちを見む事をおもふ汝膂力人にすぎたりみづからゆきて捉へ來るべし蜾蠃すなはち三諸が岳にのぼりて大なる蛇を捉へて天皇に奉る其雷虺々目精赫々天皇おそ

れて目を蔽ひて見たまはず殿中にかくれ入給ひ其神をば岳にはなたしめたまひ改めて名をたまはりて雷とす　靈異記には栖輕矛を持て天にむかひ雷神急降るべしといひしかば豐浦寺と飯岡との間に落たり即輿にのせて帝に奉ると云々是らにてなるかみのるゐとはいふ也

解云○大納言起出て　はて｜字今補つ寫本に起居てと有は惡し船中に烈しき風波に逢給ひ甚く氣を揉嘔吐し風を病給ひて未平愈し給はぬさまなり○汝等よく持て不來なりぬ　は始玉取に出立せ給ひし時強く嚴めしく仰給ひしに甚く變て今は玉不レ取しを譽給ふがをかしきさまを云るなり○龍はなる神のるゐにてこそ有けれ　ば諸本皆るゐとあり類字の音也按に類字を書てたくひと訓べきをるゐと寫たるにやあらむ此は大納言の推量に宜ふ事なれど龍と雷と同類の由有べし須磨卷に急に風吹出て云々海の面衾を張たらむやうに光滿て雷鳴ひらめく云々海の中の龍王のいといたう物めでするものにて見入たるなりけりとおぼすに云々と有は此文を取れるにやあらん又舊事記に素戔烏尊乃拔ニ所レ帶十握劒一寸ニ斬其蛇此蛇一爲ニ八段一毎レ段成レ雷總爲ニ八雷一飛躍昇レ天また雄略紀に七年天皇詔ニ少子部連蜾(ス)蠃(カル)一曰朕欲レ見ニ三諸岳神之形一汝膂力過レ人自行捉來蜾(ス)蠃(カル)答曰試往捉レ之乃登ニ三諸岳一捉ニ取大蛇一奉レ示ニ天皇一天皇不ニ齋戒一其雷虺々目精赫々(ヒカリヒロメキ)天皇畏蔽レ目不レ見却ニ入殿中一使レ放ニ於岳一仍改賜レ名爲レ雷と見えたるを靈異記(上卷初條)には天皇勅ニ栖輕一而詔汝鳴雷奉レ　請之耶云々其落處今呼ニ雷岳一云々と有て蛇の事なし蛇は龍に化と云物なれば是等も緣ある事とすべし

それが玉(なイ)○とらん(むイ)とてそこらの人々のがいせられ(なイ)○んとしけりましてたつをとらへたらましかば又事もなく我はかいせられなましよくとらへずなりにけり(むイ)

莊子に葉公子高龍をこのむ文をちりばめ采をほしいまゝにしこれを畫きこれをきざみ種々いぎやうの龍をきざみ畫く日夜弄て厭はず眞の天龍これを聞て深く感じ降りて眞の質を示し頭をあげて牖を窺ひ尾を堂中に引たり葉公是を見て大に驚き恐れ其魂魄を失ふ是葉公龍をこのむにはあらずかの龍に似て眞の龍にあらざる物を好むなりと云々これ

らの故事を用ひしにや　○頭注云そこら　若干也
おほくの人々といふ也萬葉に千萬ソコハクとよめ
るに同義

解云○其が玉を　抄本を字なし○がいせられなむ
としき　は類本な字なしがいは害字の音也そこな
ふと訓を古より御覽じなどの如く字音に云習へる言なり字書
に害何蓋切利害之對又殘也禍也とあり俊蔭卷に右大
將北山の空に琴音を求て入給ふ處に檀特山に入ともかねまさ獸に施すべ
き身かは獸がいの心なすやと見給へとて御馬を走
打入給へば又仲忠幼て空に住を京に誘たまふ處に今日の獸のさまは堪べ
しとやは見えたる云々京へ誘給へかゝる物に害せ
られぬる人は菩提も取難き物なりと宣へば云々と
あり○そこら　は若干の字をそこらともそこばく
とも訓り數多を凡に云言にてこゝらと云も同じ○
又こともなく　は俗にもかく云と異事なし必定決
定など云意なり○我は害せられなまし　は假令汝
等が龍を取ても我は其龍捉ふる根元なれば必定我
を恨で害をなすべきぞとなり○能とらへずなりに
けり　は類本にやみにけりと有龍を殺さゞりし事
を返す〳〵擧悦びたまふが可笑しきなり

かくやひめてふおほぬす人のやつが人をころさん（むイ）と
するなりけり家のあたりだに今はとほらじ男どもゝ
なありきそとて

今昔物語に盗人蝦蟆（カヘル）やつはかくつよきそ　なあり
きそ　頭注云莫歩行（ナアリキソ）をとこともゝかくやひめのあたり
ありくなと也

解云○大盗人の奴が　は大納言赫映姫の取得まじ
き物をゆかしと云るを惡みて宣ふ也藤原君卷に盗野
宰相あて宮によばひ文を參らせて返事と心得たるが非れは腹立て取次したる女の方に投やりて此女よき盗人
也いかでか汝は右大將主の娘の文とて媼の文はも
て詣來る落凹物語に女君を盗出し處に北方あこぎと云盗人の
かく人もなき時を見付てしたるなりなどあり○人
を殺さむとて云々　は龍はえ殺さずして却て龍を
とらんとして殆害せられむとし給ひつるより彼女
は人を殺さむと謀て龍首の玉を得させよと云る也
と思知給ひたる由也○あたりだに今はとほらじ
は赫映姫を疎ましく思て家近くだに寄らじと宣ふ
なり嵯峨院卷に今世の男は先人を得むとて云々とある下に幽なるすまひし
て淋しげなるを見てはあなむくつけ後の煩とやな
らんと思惑てあたりの土をだに践ずなど有上妻問の段

にあたりよりなありきそとやは宜たまはぬと有は姫より疎むべしと云るなり此と異なり

家に少のこりたりける物ともはたゝの玉（イナシ）——とらぬもはのどもにたびつ足を閉てはなれ給ひしもとの上はかたはらいたく（らなきりてイ）わらひ給ふ

はなれたまひしもとの上　遠ざかり給ひし北の方なり　○頭注云はなれ給ひしもとの上は　前にもとのめともはかくや姫をかならずあはんまうけして獨りあかしくらし給ひといへる首尾なり　かたはらいたく　舊本今昔物語に傍痛とかけり今異本にはらをきりてと有を合せ思ふに片腹痛の義歟今ゐ強く笑へは腹いたきを裂るやうなともいへり

解云○家に少し殘りける物共は云々　は上には家の内の絹綿錢など有限とりいでゝ遣はすと有されば殘は甚少なかるべし○玉とらぬ者にたびつ　は玉取て獻らむにこそ賞祿をも賜べかめれ然を玉とらざりし故害せられ給はざりしとて悦て物を賜がをかしきなり○離給ひしもとの上は　は上にもとのめともは皆離給ひてとある首尾なりさて此貨の大伴御行のおとゞの北方は世に稀なる貞女なりけり續紀四卷に元明天皇和銅五年九月己巳大伴宿禰御行之妻紀朝臣音那以夫存之日相ニ勸爲國之道ニ夫亡之後守ニ固墳之意ニ朕思ニ彼貞節ニ感歎之深宜レ賜ニ五十戸一と見えたり○腹を切て笑給ふ　は抄本にかたはらいたくと有は誤なるべし新猿樂記に都猿樂之態嗚呼之詞莫レ不ニ斷レ腸解ニ頤者也云々定緣者嗚呼之神也先見ニ其形ニ而ニ一斷之腸ニ形能者猿樂之仙也未レ出ニ其詞ニ解ニ萬人之頤ニまた續古事談に宇治にて連歌する處乘經あやくゞを縦縫にきる人なれずと云て次を織部正に是なさばやと清輔朝臣の附べきこと答ニ約たるに其句を人に云れて興さめたる歟に清輔こはいかにと支度たがひて何となく興て頭掲たり此事を不レ知人は何とも不ニ心得ニあやしげに思たるに兄弟三人此次第を語たるにぞ其座の人々頭をきりて笑合たりけるとあり今云可笑に不レ堪ふらふを腹が切ると云は裂けるやうに思程の事なり宇治拾遺一に利仁狐を使にて遣したるに狐付胸を切にきりてやませ給しかば云々と有も胸の切裂如く痛と云事なり

いとゞふかせ（てイ）つくりしやはとび鳥のすにみなくひもていにけり世界の人の云けるは大伴大納言はたつのくびの玉（やイ）とりておはしたるいなさもあらず御ま

なて二つにすも丶のやうなる玉をぞそへていました
るといひければあなたへがたといひけるより○世に
あはぬ事をばあなたへがたとはいひはじめける
あなたへがた　大臣城　唐人調謔有ニ桃花面皮杏
子眼孔之事一但し是は杏子のたねの如くめのちひ
さくいてたるをいふなり　○頭注云すも丶のやう
なる　毎名苑云李一名黄吉　和名類毛々　本綱云其子大如レ
極如レ卵其色紫朱黄紅云々　あなたへかた　とは玉
をとりておはしたるいなどいふより起りたる詞な
ればあなたへがたはアナ玉得がたの略語なるべし
解云○糸を背せて云々　はて字諸本になきを今補
つ○鳶鳥の巣にくひもていにけり　は赫映姫居給
はむとて美麗を盡し給ひし屋の不用になりて守人
もなければ鳶鳥など己が巣造らむとて咋へ持て往
しなり萬葉一巻に「春霞流る並に青柳の枝咋持て鶯
鳴も　胡蝶巻に水鳥ともの番をはなれず遊つ丶細
き枝其を咋て飛ちがふなどあり鈴木氏云凡てかや
うのたぐひ玉さらぬ賓漆もとの上へ事新造の屋など前に有し事を漏さず結
とぢむるは文法のめてたきなりと云れき○玉やと
りて　は抄本や字なし世間の人大伴大納言歸給ひ

ぬと聞て其家人などに問聞様なり○いなさもあら
ず　は家人などの答也○玉をそ添て　は校本に玉
をそろへてと有もよけれと諸本に從ひ○あなたへ
かたと云けるよりぞ　はそ字抄本になし龍の玉は
得取給はて御目に李子の様なる玉を添て歸給へり
と云を聞ていとをかしくてえ不レ堪て笑よしに云
りあなは古語拾遺に事之甚切皆稱ニ阿那一とあり差
當て切に思ゆるを阿那云々と云と師云れたり播磨
國司の頬笑るも本の上の腸を斷て咲給ふもをかし
きに堪がたき故也さて李子と云に就て實の李なら
は喰物なるを是は李には似たれ其實は腫物なれば
物喰をたべたぶなど云ば食がたしと云意にあなた
へがたと云るなりと鈴木氏云れき○世にあはぬ
とは身の沈世に成不レ出時に不レ相をもいへど是は上に親君と申ともかく
つきなき事を仰給ふ事哉と龍の玉取に遣はされし
人々の云合りし事にて世に附もなく道理にあ
たはぬ事は爲得かたきを云意なり此はとても
難レ成をせよと君より仰る无理なる事なれば
あはぬ事と云り臣の其を承て爲不レ得はあへぬと
云べし鵜草葺不合命と申御名の義の如く爲不

レ合意また古事記近飛鳥宮段に（天皇御父の仇雄略天皇の御陵を仁賢天皇少壊て歸給ひしことを）既以是恥足示後世（フデニカクハヂミセマツリツレバノチノヨニシメンニモアヘナム）とある足字には（漢文）タレリといふをあへなむと訓る意など（傳卷九卷四十三）可レ考○あなたへがた は類本此にあなと云言なし其も宜かるべしたへは堪字を借り字書には口含切勝也任也可也とありたへたふと活用言なり其事をよく心得て爲得る人を堪能といひ其を成ことあたはざるを不堪といひて不レ合と云に同意なるを以て知べし是も例の一興なり此段は殊に人笑はすべく一際をかしく書なしたるなり

〔追考〕○（初丁）火鼠の裘と云なる物 は諸本火鼠の皮と云なる物買て云々と有て衣とはなし赫映姫の始て云出せる處にも王卿か答の文にも共に皮衣とあれば必脱たりと見ゆれば今補つ○（三丁左）王卿が答の文に昔には聞共未見ぬ物也 と有を類本にいまだ見ずさふらふ物也と有もよろし○（十七丁左）御顔は草の葉の色して は鳴門中將物語に（藏人帝の御心よせの女の行方を見うしなひけるよしを奏すれば）御氣色あしくて尋出さずば咎有べき由を仰らる藏人青ざめて罷出ぬとあり○（廿四丁右）大伴大納言我弓の力は 云々と宣ふは萬葉（卷二十）に（安積皇子薨之時大伴家持卿ノ長歌の）中に「丈夫の心振起し劒刀腰に取佩梓弓靭取負て云々又（反歌）「大伴の名に負靭帶て萬代に憑し心いづくかよせむ又（卷七詠月）「靭懸る伴雄廣き大伴に國榮えむと月は照らし（此歌は火鼠裘段の始に家廣と有證ともすへし）猶神代紀姓氏錄にも見えて大伴氏は靭負のかみにて代々射術に勝れ給ふゆゑなることを知べし

竹取物語抄補注卷之下

中納言いそのかみのまろのたかの家につかはるゝをのこともものもとにつばくらめのすくひたらばつけよとのたまふをうけたまはりて

石上諸貴敕　姓氏錄曰神饒速日命之後也物部連公麻侶賜二物部朝臣姓一改賜二石上朝臣姓一　鷰　順和名云豆波久良米

解云○石上の麻呂　は姓の下の字を付て訓べし抄本にもろたかの類本にまろたりはとあり其外の本どもまろたりもろたりなど皆誤れり今改つるよしは上に委しく云つたりは妻問の段に麻呂たゞと有をたりと誤てよりたりまでを名と心得て此も脱たりと思て猥に補たるなめれば今削去つは字は類本によれり○家につかはるゝをのこども　は大伴大納言の我家に有とある人を召集てと宣ひし同意を此は詞を更て語れるなりさてつかはるゝはつかふるはるの約と云と同じく男共の方に就て云言なり中納言の使給ふ方より云るにはあらず

何のやうにかあらんとまうすこたへてのたまふやう

つばくらめのもたるこやすかひをとらんれうなりとのたまふ

河社につばくらめのこやす貝は　史記三代世表第一云詩傳曰湯之先爲レ契無レ父而生契母與二姉妹一浴於玄丘水一有レ燕銜レ卵墮レ之契母得故含レ之誤呑レ之即生レ契（索隱曰按地序引也字華收日詩四月　殷本紀云玄鳥翔水遺卵娀簡狄取而呑之）契生而賢堯立爲二司徒一姓レ之曰子氏一子者茲々今大也詩人美而頌レ之曰殷社（詩云）芒々天命二玄鳥一降而生レ商々者質殷號也予按に此説牽强とやいふべき三才圖會云石燕出二零陵郡一形似レ蚶而小或云生二山洞中一因二雷雨一則飛出墮二於沙上一而化爲レ石今人以催レ生令二婦產一兩手各握二一枚一須臾子即下採無レ時本草綱目曰玄鳥至時祈二高禖一可二以求一レ嗣　西京雜記云后在レ家背有下白燕合二白石大如一レ指墮二后績筐中一后取レ之石自剖爲レ二其中有レ文曰母二天地一后乃合レ之遂復還合乃寶錄焉後爲二皇后一云々

解云○燕の巢くひたらば　は和名抄に孫愐切韻云鳥巢在レ穴曰レ窠（音科）在レ樹曰レ巢（音曹訓須一云須久不）宇治拾遺卷六に鷹の巢咋たるを見付てとあり鳥の巢造をすくふと云は本枝わらしべ埴土などを咋持來て造れば然云

なるべし○れう　は諸本やう又用など誤れり下に
從て改つれうは料字の音なり字書に連條切量也度
也數也云々又人物材質也杜甫詩山僧供ニ詩料ー俊蔭
巻にに右大將兼政北山の空に迎に物ー給ふ處に女の料に袿一重小袿衣貫子
の料に絹の差貫摺狩衣袿袴など嚢に入て云々など
有○子安貝　は類本古板本に何處も々々々子安の
貝との字あり抄本此にはなし末に有處もあり今は
无き本をとりつ
をのこどもこたへてまうすつばくらめをあまたころ
して見るにだにもはらになきものなりたゞし子うむ
時なんいかてかいたすらん○とまうす人だに見れば
うせぬとまうす
つばめの子うむ時用ふるなるべけれども人見れば
其まゝ消るとなり
解云○鷰を數多殺して見るにだにも　は男共子安
貝は腹中に有物と心得てかく申なりに字類本に從
て加へつ○但し　は徒と云言の轉たる意か字書に
但徒寶切徒也凡也任從也又空也云々本訓に裼偏脱ニ
衣袖ー也借爲ニ語辭ー　とあり言意は凡と云に似たり
○子産とき云々　は腹を割て見ても然云べき物は
无けれども子産には何樣にしてか出すらむとなり
○はらくかと申　この言上四字類本にははら
〳〵か一寫本はら〳〵か校本はなし古板本はらくか出すらんと申と讀けり必
らくるとあり抄本普本には此四字なし若はかと
誤字脱字有べし左右に考れども未ニ思得一若はかと
申の三字衍にて一寫本のはら〳〵とある宜しくて
巣に集たる燕の人に怖て飛散さまならんかと思へ
ど猶言たらぬ心ちす故又按につばくらめと申もの
はと有けんをつを脱しくらを下上に又くはらにもらはくにも亂ふ字なり
めをかに誤下にものはを脱せるにもあらんか是は
試に云のみされど善本を得むまで姑く然訓おきて
んかし○人だに見れば　は燕が人を見れば驚て失
去也燕が人が見ると云意にはあらず
又人のまうすやうおほゐつかさのいひかしくやのむ
ねのつくのあなごとにつばくらめはすをくひ侍るそ
れにまめならんをのこどもをゐてまかりてあぐらを
ゆひ○あげてうかゝはせんにそこらのつばくらめ子
うまさらむやはさてこそとらしめたまはめとまうす
大炊寮　職原鈔云掌ニ諸國御稻田及公私熟食等事ー

眞成(遊仙窟)ゐては以也 あぐらをゆひあけて 順和名云風俗通云靈帝好胡服京皆作胡床此間云阿久良 そこら 多き意なりこゝらとおなし ○顕注云いひかしく 飯炊(萬五) 日本紀爲飯いひかしくとよめり今いふめしをたく也 大炊寮 在宮城内宮内省東 日本紀雄略天皇御歌施都麻枳能阿娯羅爾陋々何云々釋云施都卷也是以藁變柄卷胡床也云々一説附靭海云唐穆宗改胡床曰繩床云々是座下に設繩綱故之名歟今俗に椅子といふ類歟或は俗くらかけきやたつと稱して床几の高さ四五尺許にて番匠用る所のものあり今いふ所是に似たり

解云○大炊づかさ は和名抄に大炊寮(於保爲乃豆加佐)とあり按に大飯の義ならば假名於保比と有べきを爲とあるはいかゞ傳寫の誤かと思に扶桑略記(二十七)に一條天皇寛和二年十月十日圓融法皇幸大炊河云々と作るを日本記略には同事を遊幸大井河と有て即都西の大井川なり當時既く比と爲と亂て聞えしか又比と爲と通へる例あるか(紀と爲と通ふ例はあり)未考○飯かしく は飯を調を云り今俗にメシタクと云に同じ炊爨をかしくと訓字鏡に爆(之亭反上炊也伊比加之久) 𤋮(丘高反煎也煎ニ熟鳥宗亭一也倍留又伊留)𤍠(丘到反熬也熟飯也奈戸又加志久)と見えたり○屋の棟のつくのあなごとに燕はすくひはべり 活本につくをつゝと有も解べからず諸本はべるとあるを今改つ今世つくと云物は柱の外に屋の傾たるなどを支ふる物を云り其には非じ又つくはつかの誤にて和名抄に功程式云束柱(豆賀波之良)とある其か穴毎には屋を建る時束柱に穴を穿て立て後は不用にて(大佛殿の柱の穴の如く)有物歟されど燕は穴には巣くふ物に非ず故猶按に燕の巣は屋の内にて鼎の上なり然は壁に烟を出す穴有て燕も出入に便よければ其を據に穴有ごとに巣くへるなるべくおぼゆ其に就て按に飛驒山中にて農家の屋の梁より上に簀子を敷て二階の如く搆へて冬は烟草など乾かすべき類の物を置夏は蠶を飼處をつしと云り若は古代たゞ梁より上を云名にて敷物なき屏をもつしと云けむか梁より上なれば棟近き處にて軒の方にはなしされば屋の棟のと有にも合ひ烟を出す穴も有へき處(なり火爐の上に釣たる物をあまと云古名も斐太に遺たれば其より上の處をつしと云も古名にて)つくはつしの誤にもあらむか

○まめならむ男は 繼體紀に(元年天皇を奉迎使)敬憚傾心委

レ命翼レ盡ニ忠誠ニと有て忠誠は公に仕に心正しく眞
實を盡す意なり又遊仙窟に斂色（言正ニ其顔ニ也）有ニ嘆容ニ也をまめ
だつ眞成（不ニ設語ニ也）正首（俗ニ眞成ニ也）をまめやかと訓るは戯て居
たりしが腹立て容を改心を正したる（俗に眞成にと云如く）にて
異意なるが如くなれども正しくする意一つにて忠
誠も同意也奉公に誠有て正しからむ男をとなり○
率て罷て　は此も行方の賤にはあらず對へる人を
敬て罷と云り○あぐらを結て。　は抄本て字なし古
事記に胡床また呉床と有をあぐらと訓り和名抄（座臥）
具に風俗通云靈帝好ニ胡服ニ京皆作ニ胡床ニ（此間名阿久良）縣
居大人揚座ならむと云れしとぞ此は常の胡床には
あらで燕の巣の下に假に揚り居べき處を縄以て結
て作れるなり即あなゝひと同物なるべし○うかゞ
はせんに　は令　伺になりうかゞふは徒に見には
あらで何ならむと其様體を密に見ろ意なり竊伺を
常にはうかゞふと訓をかいまみとも訓たるもて知
べし古事記（大宜津比賣神の段）に立ニ伺其態ニ爲ニ穢汚而奉進ニ云
々とあり○そこらの燕子うまざらむやは　は類本
に子をとありを字无ても宜し多の燕あれば其中に
は子産のも無には非じと云なり○さてこそは　然

為てこそなり
中納言よろこび給ひてをかしき事にもあるかなもつ（イナシ）
ともえしらざりけりきようある事まうしたりとのた
まひてまめなるをのこども二十人許つかはしてあな
ゝひにあげ（げイ）すゑられたり殿より使ひまなくたまはせ
てこやすの（イナシ）かひとりたるかとむか（さイ）はせ給ふ
有興　あなゝひ　河社に和名鈔造作具部云辯色立
成云麻柱（阿奈々比）三代實錄第三十八元慶四年十二月四
日右大臣基經太政大臣にし給ふ宣命曰政平（安奈々比）相
助奉母久奴（奈利）とあればあなゝひは支るこゝろに名
づけたるなるべし　○頭注云もつともえしらざり
けり　尤は字書に甚也最也といへりえしらざりは
よく知らざりなりえとよと通神代紀善（エ）とよみ又住（スミ）
吉日吉（エヒエ）等可見　忠誠（マメ）（日本紀）　今所謂あなゝひは今俗
に云あししろの義也舊本今昔物語第二十二廣澤寛
朝僧正強力語云仁和寺ノ別當ニテ御ケレハ彼寺ノ
壞タル所ヲ修理セントテ麻柱（アナヽヒ）ヲ作テ口傍ニ工（ミト）
モ數來テ修理シケルニ　盗人ノ我衣ヲ剝ントシツ
レハ盗人ノ尻ヲフタト蹴タリツレバ其盗人ノ蹴ラ
ルヽマヽニ俄ニ失ヌルナリ　僧正彼レハ黒ク裝ヒ

ツル男ナリト宣ヘハ八人數麻柱ニ上リテ見レバ麻柱ニ落セマリテ可レ動樣モナクテナト云々此語にあしろなる事明らか也そのかみ古き竹取物語の繪に見侍りしにもあしろにのぼりたる所をかきたり

解云をかしき は興あると云に同じく此なるは其言を諾なひ悅ぶ意なりさてをかし 假名い事字鏡に可咲奈加之乎 見咲貌阿 とあるは乎己と活て嘲咲方とし面白き方擧る方はおむかしの略にておかしと可レ書と田中道麻呂の說に從て師は定られつれど今は蜻蛉日記にをかしを悶に云懸たるによりて嘲咲も欺笑もをかしと云は唯笑ことにて何れも同意として然書つ 是は人々の論に從て思定つ 笑をゑむと云言ゑみさかえますと云は歎笑ことほゝゑむと云は嘲笑かたななどもゑむと云は同意なれば其に准ても知べきなり〇もとも は道[illegible]に合て諾たる由に云り下篇 尤長也 最 最要也勝也尤也極也 の字をモツトモと訓り〇えしらざりけり は中納言かくよき方便は未ニ寄レ思しと也〇きよう は興字の音なり字書に虛凝切起也盛也尙也と見ゆ 師云漢音キヨウ呉音コウ 上のをかしき事にも有哉と宣へる同意なり土佐日記に[illegible]に今[illegible]に別たる歌よめりとあり〇こゝにいふ[illegible]は續日本紀三[illegible] 元正天皇即位し 詔に是以親王始而王臣百官人等乃淨明心以而彌務爾彌結爾阿奈々比奉輔佐奉牟事爾依而志此食國天下之政者平久長久將在止奈 所念 云々師の解一巻に云く阿奈々比奉は輔佐奉と同意の言と聞えたりかくて言の然云本の意を考るに足荷なるべし凡て足は人にも器にも下に在 揭支持物なり荷は物を揭持を云俗には枴の兩端に物を着て擔をのみになふとはいへども其には限らざる事なりかゝればば此言は物の足の揭支持が如く臣の下に在て君を輔持を云なり和名抄造作具に麻柱阿奈々比 道麻呂云麻は衍の誤なるべし 小右記長和四年造内裏の事を記されたる處にも安奈々比結とあり是等は今世に足代と云物とえたり麻柱と書る字はいかならむしらねども足代は扶揭て下を支持物なる故にぞあなゝひ云名は負つらむと云れき又今昔物語 本朝 廣澤寛朝僧正強力語に仁和寺の別當にて御ければ彼寺の壞たる所を修理せんとて麻柱を作て日毎に匠ども數來て修理しけるに云々盗人我衣を剝むとしつれば盗人の尻

をふたと蹴たりつれば其盗人の蹴らるゝ儘に俄に失ぬる也云々僧正彼は黒く装ひつる男たりと宣へば人數麻柱に上りて見れば麻柱に落せまりて可ㇾ動様もなくて云々と書に 抄ノ頭あり○揚居られたり 世は下の段 天羽衣に番にすゑて守らず伊勢物語五段に夜毎に人を居て守らせければと有に同じ○使隙なくは甚おぼつかなく待かね給ふ故使を打頻て賜はすなり○とはせ給ふ は使をして令ㇾ問給ふなり抄本にむかはせと有は問字を向と見て誤なるべし

つばくらめ（ぼイ）もひとのあまたのぼりゐたるにおぢてすにのぼりこずかゝるよしの（御返事イ）かへしをまうしければきゝ給ひていかゞすべきとおぼし○わづらふに（めしイ）○つか（かのイ）さの官人くらつ丸（まろイ）とまうすおきなまうすやう

懼「かのつかさ 大炊寮の官人也 くらつ丸

解云○おぢて は字鏡に忙怕（オトロク怯也又北山に怯豆又乙々岩毛止奈留波に怖は驚）字の誤か とあり○巣に はも字一本にあれど燕もに直て聞ゆればそこよかめる○のぼりこず は古板本にのぼりたらずとあるもよろし○御返事を申ければ 諸本御字なし抄本かへし古板本申たればと有今は類本に從つ○おぼしめし は類本に從て補つ○わづらふ は中納言此事に深く心を懸給ひて片時も早く貝を得まく貝食に思ほす如くもあらねば心を苦しめ惱給ふ也○かのつかさの官人 ば抄本にかの を脱せりかのつかさは大炊寮なり○くらつまろ は鈴木氏云この翁が名のくらはつばくらのくらをとりたるか有作王は石鉢により月の岩笠まーの都に由有て聞ゆと云れたるに成て按にこゝにくらを下上に爲たるなるべしさては字なければもまろのまとばと普通へばは略たこなり○申やう云々 はくらつまろ中納言の御殿に參て申詞なり

こやす貝とらんとおぼしめさばたばかりまうさん（むイ）とて御前にまゐりたれば中納言ひたひをあはせてむか（むイ）ひ給へりくらつ丸（まろイ）がまうすやうこのつばくらめのこやすがひはあしくたばかりてとらせたまふなりさてはえとらせ給はじあなゝひにおどろ〳〵しく二十人（ひとのイ）○のぼりて侍ればあれに（よりイ）つまうでこずなり（むイ）

薬首（ヒタヒテアハセテ）一おどろ〳〵しく 源氏注におどろしは賞也歎也 頌 あなゝひ は足代のたぐひと見えたり

○頭注云敏達紀　相計（タハカル）　舒明紀散卒（アラレイクサ）とあり今あれてとあるは此あられの中略歟

解云○ひたひを合せて　は親しく物語し給ふさまなり和名抄に楊雄方言云額五佰反ヨ北　北東齊謂ニ之額ト蘇朗反　幽州謂ニ之顛ニ反丁谷　俊蔭卷に人／＼のなしむ處に　父母としかげ悲しみ思やるべし三人額を集へて血の涙を落して出立て云々又あすらの處に　嫗翁子ども孫など居てからべを集へて木を切こなすなど同じさまなり○あしくたばかりて　は子安貝取べき謀の惡きと也○えとらせ　は類本にえとらさせと有は衍か○おどろ／＼しくして　は驚く計り甚しき意と聞ゆ帚木卷に繪の事を人の不ニ見及ー蓬萊の山荒海の怒れる魚の姿漢國の烈しき獸の形目に見えぬ鬼の貌などのおどろ／＼しく作たる物は心に任せて一際人の目を驚かして云々又馬頭が話に　指一を引寄て咋て侍しをおどろ／＼しくかこちて云々などあり○二十人の人の上て侍れば　は古板本に從て人のを補つ類本に人々の云々侍るなればと有は衍なるべし上の褰問の段に五人の人の下　天羽衣の段　に二千人の人をと有格なり俊蔭卷三丁に三人の人並居て琴を彈給ふ四丁三人の人問て云く十三丁　七人の人皆禮拜して申さくなどあり

○あれて　はあらびあらぶとも云て疎く遠離意なり古今集戀に「故郷にあらぬ物ゆゑ我爲に人の心のあれて見ゆらむ萬葉卷二に日並知命殿後舍人の歌に　嶋宮池の上なる放鳥あらびな往そ君不ㇾ坐とも「たくひれの白濱波の寄もあへずあらぶる妹に戀つゝぞをるなどよめり燕の人に怖て寄つかぬを云り○よりまうでこずなむ　は抄本によりなし同本こずなりと有をなんと改つ類本寫本にはなりなしよりは巣に依著なりまうでは中納言を敬て云る事上にも四に罷と云る同じ格なり

せさせ給ふべきやうは此あなゝひをこぼちて人みなしりぞきてまめならん人一人をあらたにこイゆいせすゑてつなをかまへて鳥の子うまんむイおひだイまにつなをつりあげさせてふとこやすがひをとらせ給ひなばむイはむイよかるべきとまうす中納言のイに巳下まうてきぬマデナシたまふやういとよき事なりとてあなゝひをこぼちてイし人みなかへりまうできぬ中納言くらつ丸まろイにのたまはくつばくらはいかなる時にか子をうむとしりて人をばあぐべきとのたまふくらつ丸まろイまうす

やうつばくらめ○子うまんとする時は尾をさゝげて七度めぐりてなん産おとすめるさて七度めぐらんをり引あげてそのをりこやすがひはとらせたまへとまうす中納言よろこび給ひて萬の人にもしらせ給はでみそかにつかさにいましてをのこどもの中にまじりてよるをひるになしてとらしめ給ふ

つなをかまへて　つなにてあくらを引あぐる　頭注云あくらな引あぐるいかゝあらこ歟やうにかまへたるなり　みそかに　ひそかにおほゐ寮に行給ふなり　よるをひるに　説苑曰以レ夜繼レ日　住吉物語に萬をすてゝよるをひるにまゐり給ひと云々　○頭注云あなゝひをこぼちて　萬八秋田刈借庵も未壊者とよみ又いたゝの橋の壊者ともあれはこぼつもこぼすも同義されはつぎの詞にあなゝひをこぼしといへり　あらたにのせするゑ　あらた恐くはあらこの誤にてあらこにのせするゑなるべし末の詞にあらこに人をのぼせてつりあげさせせと有に知るべしあらこ奥に注す

解云○こぼちて　は先に結て造りし麻柱をたゝむを云り萬葉卷八に忌部首黒麻呂歌秋田刈借廬毛未壊者雁鳴寒霜毛置奴我二倭陰卷に倭陰死後に人もなきなめりと思ひて萬の往還の人は屋共もこぼちとりつれば云々枕册子卷五五節の局を皆こぼちすかして云々などあり猶下に云べし○人皆しりぞきて　は古事記に退字をしりぞきと訓傳四上にそきは遠離ことなり後方へ曾久を云とあり土佐日記二月五日の條にたけどもたけどもしりへしぞきにしぞきてと有はり字を略たる也扨此は中納言の方に付て云處なればしりぞけてと云へき處ぞと云りしを鈴木氏云理はさる事ながら文詞には如此事も有べき歟下に麻柱をこぼし人皆歸りまうで來ぬと有も理もて云ば人皆かへし給ひぬと不云では違りと云れき○人一人を　は類本一人なし○あらこ　は抄本こ字をたと誤れり神代紀書一に鹽土老翁云々作二大目麁籠一内二火々出見尊於籠中一投二之于海一云々古事記中卷の末に取二其伊豆志河之河邊之節竹一而作二八目之荒籠一と有傳にあらとは目の疎きを云とあり○あひだに　は古板本間にと作抄本まにと有もよろし今は寫本に從つ○綱をつりあげさせて　は按につりはくりの誤なるべし籠は釣と云へど綱をと云てはくりと不云ではつゞかねばクリと訓つ和名抄𦇶絲具に唐韻云繰訓久

流
絡レ絲取也と見え繩葛などの類の歌に來るに紛
てよめる皆是なり○給はむなん　は抄本に給ひな
ば類本給なんと有今は活本に從つ○いとよき事な
り　は承引たる答の言なりさて此に彼二十人の者
どもの麻柱を壞て歸べく仰渡し給ふ事を略けり故
次の詞彼者どもの心としたる如く聞ゆめり中納言
の方に就て云むには麻柱を壞たせて人皆歸らせ給
ひぬと有べき處なり○あなゝひをこぼちて　は諸
本こぼし人皆云々とありし字はちを誤下にて字を
脱せるか此言放と同格にて言の八衢に所レ謂左行
四段こぼしはなしと多行四段こぼちはなちとに活用けり故光をは
なち矢をはなつと云べきをはなしはなすと云て宜
しからんやは然れば此も必こぼちてと有べきことと
上のこぼちてに同し扨此言おのづからなる時は良
行下二段の活こぼれこぼるはなれはなるとなれり上に引たる今昔
物語に彼寺のこぼれたる所を云々大和物語に俊子が宅
こぼれたる家にて俊陰卷に二十五丁こぼれたる蔀のも
とに四十六丁屋も皆こぼれはてにたりなどあるは星霜
を經て自然と破壞れたるにてひとの態と壞ちたる
にはあらず水のこぼるゝ水をこぼすなど云は別なるが如なれども根本は同言なるべし故今改つ

○宜たまふ　は校本にとはせ給ふとあれどとらず
○燕は　校本に從ては字を補つ○尾をさゝげて
は類本さげてと有は漏せるなり○産おとす　は俊
蔭卷に仲忠生る處にうまれおつる即偏己が衣の懷に抱き
て云々とあり○引上て　は籠をなり○とらせ給へ
と申　は寫本に給べきとあるは辭不レ調○みそか
に云々　は貴人のさる所へ物せられて賤き男等に
交給はんは似げなければ甚く忍ていませしなるべ
し○まじりて　は寫本に校たる本におはしまして
と有も宜し○夜を晝になして　は顯宗紀に播磨國
司伊與來目部小楯云々適會二縮見屯倉首縱賞新室一
以レ夜繼レ日住吉物語に姫君住吉ノ尼が迎給ふ處に萬を捨てよるを
ひるになして參給へとあり暫の隙もなく不レ怠い
そしみ給ふ由なり○とらしめ給ふ　は男等に令レ
取給ふなりさて此の文古事記の須佐之男命の御あ
らびの段に猶其惡態不レ止而轉と云置て次に其御
爲態を記されたるに似たり
くらつ丸（まろイ）かくまうすをいといたくよろこび○てのた（たまひイ）
まふこゝにつかはるゝ（いイ）人にもなきにねがひをかなふ
ることのうれしさとのたまひて御ぞぬぎてかづけた

まひ(ひイ)ふつさらによさり此つかさにまうでてことのた
まひ(ひイ)ふてつかはしつ
我つかふ人にもあらぬに心つかひする事のうれし
きとなり　御服　くらつ九にかつけ給ふ也　よさ
り　うつぼ物語藏開の卷によさりつかたになりぬ
ればと云々　○頭注云よさり　は夜去也春されば
秋さればなどいふが如し夜になりて也此つかさと
は大炊寮歟次の詞に日くれぬれば彼つかさにおは
してと云々　かつけ給ふ　祿給なり　天智紀撫ニ
其背ニ褒賜ニ爵祿ニ云々大和物語に四位五位是に物
ぬぎてとらせさらんものは座をたちねとのたまふ
ければかたはしよりかみしもみなかづけたれは云
々すべて貴人よりたまはるものをかづくとはいへ
り
解云○悅たまひて　は寫本に從て補つ○此につか
はるゝ人にもなきに　は中納言の仕人にもあらぬ
を子安貝取難にし給ふをあはれみ奉りて相議まゐ
らするを甚く喜給ふなり前の龍の玉取に行しは仕
人なるすら使々出立ざりしに對たるなるべし○願
をかなふる事のうれしさと云て　は寫本うれしさ

と有は誤なり是は此謀に依て赫映姬を得給はんの
願の叶べきことを悅給ふ由なり貝を得給はむのみ
にはあらず事の嬉しさと結べる語格宇治拾遺卷八に
敏行を夢に見て友則三井寺の僧の許に行し處に　かくおはしましたる事の嬉し
さと云はとある全く此に同し歌には此さ字多し萬
葉卷三に　さゝら浪いそこせぢなるのとせ川音のさ
やけさ瀧つ瀬每に古今歌に　咲花に思付身のあぢ
きなさ身に痛の人も不知て後撰卷十四に逢はかりな
くてのみふる我戀を人目にかくる事の悲しさ又が
云々さと云るも同格也橋姬卷に後世をさへたどり
知給ふらむが有難さ古今十三に　現にはさもこそあ
らめ夢にさへ人目を守と見るが悲しさなど歌にも
詞にも多かり○御衣　はおむぞと訓べし祝詞式に
御服春日祭平野祭と書たるをみそと訓り袖をそで
表手なり衣桁をみそかけ催馬樂高砂と云ぞ是也○かづけ
は介被也字音に誤とも云り玉枝の段に見し考　谷川氏云琵
琶行に纏頭をかづけものと訓り被物の義也下學集
に纏頭賜路也童使之と見えたりと云り衣類絹錦など上よ
り賜りて打被て座を立より云名なるべし大和物語
に亭子帝鳥飼院にて玉淵が女に物たまふ處に　みかど御袿一重袴たぶ云々是に

物脱でとらせざらむ者は座よりたゝねと詔たまひければ云々皆かづけたれば被き餘て二間ばかり積てぞ置たりけるとあり○さらに は字書に更古行切音庚隷省作レ更代也復也改也とありさらにと訓ときは復改の意なり○夜さり は伊勢物語六十九段に朝には狩に出し立てやう夜さりはそこに歸こさせけり催馬樂卷柳に朝に取ようさり取云々とありさりは春されば夕されば のされに同じかるべし按にされば萬葉に之在ゆと書たれどさり同言にて共に時の意と聞えたり契沖こてよしたりよさりなどもいへり○此つかさにまうでことのたまひて は此は彼と云意なり歌に是や此これぞこのと云る皆彼の意なりこは來れよと云意なり次下に紙燭さして來と有に同じ此衣脱て給ふは中納言の御殿にての事なりくらつまろは大炊寮の官人にはあれど晝夜寮にのみ居にはあらず自が私宅も在て歸りもするなり故に又更に今夜彼寮に來て此貝とる態を助てよと宣給ひて衣はたびつるなり○つかはしつ はかれが家に返し遣つなりと鈴木氏云れき伊勢物語八十三段に御送りしてとくいなむと思ふに大御酒たまひ祿たまはむとてつかはさざりけりとあり

日くれぬればかのつかさにおはして見たまふにまこと（にイ）と○つばくらめすつくれりくらつまろまうすやう（にイ）○をうけて（尾さゝげイ）めぐるにあらこに人をのぼせて（イナシ）つゝあけさせてつばくらめのすに手をさし入させてさぐるにものもなしとまうすに中納言あしくさぐればなきなりとはらだちて

をうけて 尾をさゝげてなり　荒籠 めのあらきかこなり　○頭注云つかさにおはして 大炊寮になり○あらこに人を云々 古事記云取其伊豆志河之河島一節竹作八日之荒籠云　信云○日暮ぬれば彼寮におはして は上に萬の人にも知らせ給はで密に寮にいましてとある即是なり中納言先に來給ひしが歸給ひて今又更に來たまひしにはあらず ○誠に は抄本に字を漏せり○燕巢つくれり は前に密に寮にいましとあるに此に夜しも燕の巢作れるを始て見給ひたるが如く聞ゆるはいかゞ又くらつ麻呂が相議を喜び給はゞ其時にこそ祿は賜べきに間なく中間に賜はせたるはいかゞ按に中納言くらつまろが相議を悦び給ひ直に其態夜な日に成て令取給ふと云に書續けたるは例の先

云置文法なり此事上に云り故に御衣を被け給ふも中納言
の家にての事又所柱を壊つ事も其を諾ひ給ふ處に
直に書つゞけたる也燕はいかなる時にか子うむと
問給ふも別時にあらず日暮ぬれば寮におはしてと
有も密に寮にいましてと有も共に同一時なるを再
度云るなりけりされど燕夜しも立回て子うまん事覺束なし○くらしつまろ
の下が字あらまほし若は脱せるか○申やうに　は
抄本に字補たる宜し○尾をさゝげて　は校本に從
て　改つ諸本をうけてと有は誤なるべし○荒籠に
人をのせては古本に從つ諸本のほせてとぼ有は衍
なるべし○鷲の巣に手を差入させて　抄本此十一
字を脱せり○物もなしと申に　此に字无てあらま
ほしく聞ゆ然れど有て惡にはあらず
たればかりおぼえんむイにとて我のぼりてさぐらんとの
たまひてこにのりてつられのぼりてうかゝひ給へる
につばくらめをさゝげていたくめくるにあはせて
手をさゝげてさぐり給ふに手にひらめるものさはる
時にわれ物にきりたり今はおろしてよおきなしえた
りどのたまひてあつまりてとくおろさんむイとてつなを

ひき過してつなたゆる則すなはちイ イナシにやしまのかなへの上にの
けさまにおち給へり
たればかりおぼえんに　誰か能をならんともしらぬ
に我のぼらんと也　籠　扃ヒラノル　おきなしえたり　取
得たりとくらつ丸にのたまふ也　釜頭和名に加奈倍　のけさ
まに　あふのけにおちたまへる也　○頭注云たれ
はかりおぼえんに　誰に命じて取らせんとおもふ
ほどの人もなきにと云歟　とくおろさんとてつな
を引過して　おろすに綱を引とは事たがひたるや
うなれと事急におろさんとするには先綱を强引上
てさておろすなるべし　則にやしまのかなへの上
に　一本に則にのに文字無を正とすへし文德實錄
齊衡二年十二月丙子朔大炊寮大八島竈神云々色葉
和難云釜をばやしまといふ也大嘗會行幸にも釜の
わたるを八島のわたると云々　伊勢集「のけさま
に君におはれし我なれやせなかあはせに人のなる
らん
解云○誰ばかりおぼえむに　は落凹物語巻二に笛の袋縫べき
人なければ繼母さむ方なく部屋にこめたる女君の處に　藏人少將笛の袋逢する
に取ふれむ人のおぼえぬまゝにとみに手もふれぬ

ほどにもて煩らひて北方云々是唯今絶給へと云へばとある意ば〜能似たり誰が此事は為得べきと思回らすに為えむ人を不思寄と宣て御自己物と給ふ也○籠にのりて　は抄本に從つ諸本どほりて類本入てと有○手をさゝげて　は继冬さゝげはさし入の誤ならむと云けれど諸本皆さゝげと有て詞にも尾をさゝげて廻に合てとあれば即さゝげにて宜し○手に平める物さはる時に云々　は類本にはさはりける時云々と有上段の裏に（に字なし）に歩駿する馬を以て迎へさせ給ふ時に云々と同じ語勢也○翁しえたり　は此翁とはくらつまろを宣給ふなり彼翁が謀計たる事なれば其許が云如く貝とる態を為得たりと悦びて翁を喚係て宣ふなり落凹物語一巻に（三日夜調度餅あこぎ）調得て悦處にしぞしつとて嬉し又常に自誇をしたり貌と云り（さて翁とは中納言御をたゝへるかさも思つれど然にはあらず）○綱を引すぐして　は釣上たる籠を下さんとては綱を延し遣べきを周章て却て強く引過して物に障などし、縄の斷切たる也○綱たゆるとは切るゝ也古く緒糸縄などの斷切を絶と云り○すなはち　は類本とことに抄本則になど有は悪し抄に校たる一本すなはちと有てに字なきぞよき同珠菴記にすなはちやがてと同意なりと有俗に切ルト直に切ルト也備なしと云が如し萬葉八に（大伴家持鶯歌一首）ほとゝぎす鳴き登時君が家にゆけと追しは到けむかも貫之集に　春立むすなはち毎に君がため手にも摘べき若菜也けり續紀に嘉祥元年七月甲申因幡國守倍神奉授從五位下即預官社以下國府西有失火隨風飛至府舍將燒國司祈請登時風轉火滅靈驗明白也谷川氏云晉書載記に登加羅錢芥隱筆記に房杜傳登殺用唐律即時為登即時殺之博物志に即日を登日と書りと云り枕册子下段山に里にても明る即大事にして見せにやる寄生侍に（宇治の中君中納言に文參らせ給て後しく物し給にれたる願給ふ詞）　咽ならずゆるさせ給へりし悦にすなはちも參らでほしく侍りしをなど諸の物語書どもに即と云るも皆此意也○やしまのかなへ　は天智紀廿下に大炊省有八鼎鳴云々文徳紀に齊衡二年十二月大炊寮大八嶋竈神火武主比命庭火皇神並授從五位下三代實錄の貞觀元年正月大炊寮大八嶋竈神八前授從五位下ともあり八島と云るは何なる義か未思得ず和名抄（類聚）金器に說文云鼎（和名阿之）三足兩耳和五味之寶器也とあれた古史考云釜（和名賀奈閉一云未呂賀奈倍）黄

帝造也また類（釜火）四聲字苑云竈（和名加萬）炊爨處也とあり
今俗釜をも加萬と云故に竈を加麻と云は釜より出
たる名と思人あれど然らず古へ釜を加萬と云る事
なしと師云れたり○のけさまに　は仰樣なり面を
上に背を下に墮落給へるなり故に腰を打給ふなり
伊勢集に「のけさまに君に負はれし我なれや背な
か合に人のなるらむ
人々あさましがりてよりてかゝへ奉れり御目はしら
めにてふし給へり人々○水を（御くちにイ）すくひ入奉るからうじ
ていき出たまへるに又かなへの上より手とり足とり
してさけ（げイ）おろし奉るからうじて御こゝちはいかゞお
ぼさるゝととへはいきの下にてものは少○（レイ）おぼゆれ
どこしなんう（ごイ）とかれぬ
しらめにて　目をまはし給へる也　生出　こしな
ん　こしのあたりうとくおほゆると也萬葉に離を
かれてとよませたりしからばうとかれは疎離なる
べし　○頭注云しらめにて　白日也ラとロ同音類
眼上竄せし也　いきいて　は息出にてもあるへし
こしなんうとかれぬ　異本にこしなんうこかれ
ぬ可用歟

解云○あさましがりて　は驚たる意なり上（玉枝の段）に
委云つ○かゝへたてまつれり　は抱字をかゝへと
もいだくとも訓れど唯いだくとは少意異なるべし
かゝは搔にて揭て抱くやうの義ありと聞ゆ言の八
衢（波行下二段活）にかゝふるは竹取物語に云々蜻蛉日記に
やがてのりてかゝへて物しぬ楚王夢卷に泣々かゝ
へまつらせ給へりなどのみ有てかゝふかゝふるか
ゝふれと云る見あたらざれどもかく活く例なり（行也）
（二段の活にてかゝゆ云々と云言かと思へど猶こゝの活言なるべし）とあり（和訓栞にはかゝゆと出せり）落凹物
語（二卷）に（典藥助か言に部屋にて）御代に翁こそやまめとかゝへてを
りとあり○御目は白眼にてあり　は氣絶て瞳の上
りたるなり○御口に水をすくひ入奉る　御口に三
字今補つかゝる時面に水吹事は昔も今もする事な
り此は救入奉るとあれば必御口にと不云ては不レ
調水を口に入面に灌げば氣を驚かして蘇生ればな
り伊勢物語（五十八段）にかくて物いたく病て死入たりけ
れば面に水そゝぎなどして息出て云々宇治拾遺（三卷）
に（鳥羽僧正國俊と戯する處に）僧正は例の事なれば衣脱ほどもなく
例の湯殿へ入てえさいかさいとりふすまと云て湯
槽へ踊入てのけさまにゆくりもなく臥たるに恭局

の足に（關俊が入つるなり）尻骨を突て死入て差反臥たりけるが近うつかへ侍よりて見れば目を上に見附て死入て寝たりこはいかにと云どいらへもせず待て面に水吹などしてとばかり有てぞ息の下におろ〳〵云れけるに此戯いとはしたなかりけりとある此に能似たり○からじて云々　は此に在合たる人々甚く骨折てやう〳〵として息出給へりとなり伊勢物語（三十九段）に今日の入相ばかりに絶入て又の日の戌時ばかりになむ辛じて息出たりける菊宴卷に（宰相物思に死入たる處に）辛じて息出て息の下に物云などすとあり○又鼎の上より云々してさげおろし奉る　とあれば息出給はざりし先は鼎の上に其儘にて人も登て抱などせしが如聞ゆれど是も綱絶る即と云より直に抱へ水を口に入などする方に語續けたるにて鼎上より下し奉れるは其より前なりし事をおくれて語れるなるべし故に辛じて息出給へりと云と辛じて御心ちはいかゞと問と同一時にて辛じてと云二ッながら一ッと聞えたり然れは息出給へりと句して次の事を云べきを給へるにと有は傳寫ほとに次文に續かぬをいぶかりてさがしらせし物かさげおろしは共に同意なる事を例の重たる言なり○御こゝちはいかゞおぼさるゝととへは　は云々おばゆるなりと答給ふと云意に係れり古く病をこゝちと云けれど此は只御心持なり夕顔卷に（某院にて夕顔君絶入たる處に）われかの氣色なり物怖をなんわりなくせさせ給ふ御本上にていかにおぼさるゝにかと有近きこゆと有此に似たり○いきの下にて　は落窪物語二卷に（女君痛く侍る處に）胸の痛く侍ればと息の下にいふ猶菊宴卷（上に引たるな）に可惜物は覺ゆれど　は落窪に（女君）唯今更に物なんおぼえぬといらふればとあり○腰なんうごかれぬ　は摘本に從て改つ諸本うとかれぬと誤れり下に御腰は折にけりとあり和名抄に說文云腰（於霄反或作𦝫和名古之）身中也遊仙窟云細腰支（師古之波勢）玉葛卷に（長谷詣に步疲たる事を）足の裏うごかれずとあり

されどこやすかひをふとにぎりもたればうれしくおぼゆる也まづしそく○（さイ）してこのかひがほ（頭注云此貝貌なり）見むと御くしもたげて御手をひろげ給へるにつばくらめのまりおけるふるくそをにぎりたまへるなりけりそれを見給ひてあなかひなのわざやとのたまひけるよりぞおもふにたがふ事をばかひなしと○（はイ）いひける

不圖（フト）紙燭（シソク）擡頭（タシモタゲ）放屎（クソマル）遂襲（ツギ）日本紀○頭注云もたれは持てあれば也テアの反タ也　つばくらめのまりおける　からたち原かりはらひそけくらたてんくそとほくまれくしつくる刀自萬十六に出　かひなしといひける　かひとは代りなりかばかりまて心をつくせしに其代りもなしと也かひはかへの通音なり萬十六「あちいひを水にかもなし我待し代（カヒ）はかつてなしたゝにしあらねは此代をかひとよめるに知るべし俗に物のあたひをやらすして押て取やうの事を無代といふも是也

解云○先しそくさして來　は抄本さ字を脱せり夕貝卷に物狂出たる處に宿直人おこしてしそく差て參れと云へと宣へば宇治拾遺卷九に醜き智取たる處に扨面はいかゞ成たるらむとて脂燭さして人々見れば云々和名抄に雑題有ニ紙燭詩一紙燭俗音之曾久江次第には脂燭と作りこは下知の言にて來れよと云意參れと有も同意なり古今戀四に「月夜よし夜吉と人に告やらばこてふに似たり不待しもあらず小世繼物語に螢の飛ありくを彼とらへてことゝ此螢に宣ひければとありて此貝かほみむとは諸本しそくさしてこゝの貝と書たれば誤謬たるを本居翁上のこは來にて何して此貝と讀べしと云遣されきさてかゝる物に貌などは云べくもあらぬ事なれど幼げに愛親しみて斯宣ふなり阿陪の大臣の唐國の方に向て何おぼす云々とて伏拜給ひしに似たる意ばへ也○御くしもたげて　は臥乍ら頭ばかりを持擧たまふ也頭を御くしと云事古くは見えず此比よりの事なるべし師云和名抄に首加宇倍頭訓同ㇾ上ニ一云賀之良とあれど又顱加之良乃加波良髑髏比登加之良なども有て加之良と云ぞ正しき名なる美久志と訓は凡て貴人のをば後にも加之良とは不云で然云めれど久志はもと髮の事かくしけづるとも云も髮をけづる也さて髮をけづる具なれば櫛をも久志とは云歟其はくしけづりと云べきを畧て然云は譬ば庖丁がつかふ刀なれば庖丁刀なるをやがて其をも庖丁とのみもいひ田子の持桶なれば田子桶なるを田子と俗の云も同じさて髮のある處なる故に頭をもみくしとは云かゝうべも髮方也然はあれど櫛の名は甚古ければ此を本にて其を刺處なる故に髮をも頭をも云なるべしいかにまれ頭を云は古語ならじと記傳卷五云れたり○御手をひろげ給へ

るに　は握給へる指を起し開給へる也指折を手を折と云り伊勢物語十五段の歌に「手を折て云々とよめり○燕のまりおける古屎を云々　まるとは屎するを云今も豊太山中人然云り尿いまりも是なり又屎尿するなひるともこくとも云り和名抄に痢を久曾比理乃夜方比霍亂を之利與利久智與利古久夜萬比とより　古事記に屎麻理散書紀に送糞此云倶蘇麼屢萬葉十六に「からたちのうばら刈そけ倉建む屎遠麻禮くしつくる刀自此蔦の屎まりし後日數へて能乾て平めに成たるなり○かひなし　は抄頭書に云かひとは代なりかばかり心を盡せしに其代もなしとなり萬葉十六に「味飯を水に釀なし吾待し代者曾無たゞにしあらねば夫君娶二他妻一正身不レ來を恨て女の作歌なり以上此歌舊訓はかはりはぞなきとあるを解に卷八に「たなぎらひ雪も不降か梅花不開之代爾そへてだにみむと云代に同じ此はしるしはぞなきとも訓べしと縣居翁云れき千蔭按にかひはかつてなしとよまんかかひはかはりの約たる言なればなりとありかくてかひなしとは此意なるを貝の无かりし故云初たる由に云なしたるは例の戯なり○とは云ける　は諸本は字を脱せり例に従て今補つ

かひにもあらずと見たまひけるに御こゝちもたがひてからびつ（ひイ）のふたに入られ給ふへくもあらず御腰はをれにけり中納言はいと（はイ）いけたるわざしてやむことを人にきかせじとし給ひけれどそれをやまひにていとよわくなり給ひにけり

遂例　からひつ　順和名云韓櫃ひつのふたなどにのせてかへるべくもあらぬなり　○頭注云いといけたる　未詳今按いたいけなるわざしてと云歟トとタタとナ共通すたるは萬葉に在と書りをさなきわざしてといはんかことし日本紀に不賢不敏など書り此意歟前にも大伴の大納言の詞に心をさなくてたつをころさんと思ひけりといへるに同しかるべし　からびつのふたに入られ給ふべくもあらず禁中にて死亡の人などは左樣の物などに入て出す例歟日本紀略云延喜八年六月二十六日云々俄而雷聲大鳴墜二清涼殿坤第一柱上一　大納言兼民部卿藤原清貫衣燒胸裂天亡　民部卿朝臣載二半蔀一至二陽明門一載レ車云々

解云○貝にもあらずと見給ひけるに云々　は彼古屎を實に貝と思ほして爲得たりと悦給ひしが其御心持たがひたるなり○唐櫃の蓋に入られ給ふべく

もあらず　は蓋にだにと有けんをたにと云言重たれば一つ脱したる献上に玉枝を長櫃に入られたる如く此も子安貝を取得て赫映姫の許に速送給はん料に兼て唐櫃を設置給ひつるが子安貝を得たりと思ほしゝは非で唐櫃の身には更なり蓋にだに入らるべくもあらず設置給ひつる唐櫃が不用になれる由なるべしと云しを鈴木氏　は如此物　は唐櫃の蓋に入て送る事と見えたり唐櫃の身を用むは大に過たるべし此外にも物の蓋に入て物する事どもは諸書に多く見えたりと云れき蓋に物入る例は枕冊子に祭の比云々の下に　青朽葉二藍などの物ども推巻つゝ細櫃の蓋にいれ云々もて歩行こそをかしけれ續古事談に宇治殿平等院造て莊園多く寄られける時所々の米を少しづゝ長櫃の蓋に蒔ならべて云々など見えたり此もさる事にぞ有べき猶按に櫃の身は大に過たれども子安貝は甚小さき物なめれば蓋も猶大に過たりされど赫映姫に其を以送べき物なれば事々しく唐櫃て設置給ふにてこそ有らめ扨入られ給ふと云てといかゞ貝を入給はんとならば入給ふべくもとか入らるべくもとか云べく入られ給ふと云ては中納言病

身と成給ひて物に入られ給ふと云る如く聞ゆめりされば頭書に禁中にて死亡の人などは然る櫃の蓋の類物などに入て出す例かとて其故事日本紀略の延喜八年夏雷にうたれて死せし藤原清貫卿の尸を載二半蔀一自二陽明門一載レ車とある例を出したりかゝる例は宇治拾遺巻下に蔵人式部丞貞高臺盤に額をあてゝ死たるを出す處に殿上の疊ながら舁出て出ぬればとあるを引たれど然にはあらじ腰折給ひては歩ては得歸給はざめれば物に入られとか載られ給ひてとは云べけれど入られ給はざるに殊更に然云るはいかゞ若はられはさせと有しを誤れるか此一件猶未うまく解得されども姑鈴木氏の説に從てられをさせと訓つ○御腰は折にけり　は前には腰なんうごかれぬと御自のたまへり○いはけたるわざして　は抄本いといけ普本いくいけ寫本いひいけ類本はらはけたるなど皆誤れり校本にいわけと有は改たるか必いはけたるの誤なれば改つ此言いはけなしと云るも　なしてふ言は意先しばしたなしなはしたわりなしなわれてさも云たぐひにて同意なり繪合巻に秋好中宮の體を　いとおもりかにて夢にもいはけたる御ふるまひあらばこそおのづからほの見え給ふついでもあらめ深君いゆかしく思ほすなり　心にくき御けはひのみ深さまされば云々赫藤壺巻に上東門院十二にて入内の處に　姫君い御ありさま云々御形をかしげに

おはしますまだいと幼かるべき程にいさゝかいはけたる事なく云々あさましきまでおとなびさせ給へり云々是等を見れば心をさなくて思慮もなく物する由なりいはけてはあらぬ由を源氏に心にくきと云榮花におとなびさせ給ふと有にて明らかなり
○やむことを　は病事をなり古事記に大神を在坐て病臥在と有をやみこやせりと訓り尋常の病には非で幼き態より爲出給ひし病なれど恥て人に知せじとし給ふなり○其を病にて　は腰を折給ひし上に人の知らむ事を心に痛く恥て病給ふ故又其が病となれる由なり○給ひにけり　は類本に字なし

かひをえとらずなりにけるよりも人のきゝわらはん（むイ）事を日にそへておもひ給ひければたゞにやみしぬるよりも人ぎゝはづかしくおぼえ給ふなりけりこれをかくや姫きゝ（てイ）○とふらひにやる歌（つかはしけるイ）姫としをへて波たちよらぬすみのえのまつかひなしときくはまことか（よしイ）とあるをよみてきかすいとよわき心（こゝちイ）にかしらもたげて人にかみをもたせてくるしきこゝちにからうじてかき給ふ（中納言イナシ）かひはかくありけるものをわびはててしぬるいのちをすくひやはせぬとかきはへる（つイ）○た（とイ）え入給ひぬ是を聞てかくや姫すこしあはれとおぼしけりそれよりなんすこしうれしき事をば（ばイ）かひあるとはいひける

たゝにやみしぬるよりも　病よりは人聞をはぢてしに給ふとなり　かひはかく　匙は物をすくふうつはなればかけてよめるなり　○頭注云まつかひなしときくは　待に松をそへかひなしに　無貝をそへたり古今集「ひさしくもなりてけるかなすみよしのまつはくるしきものにぞ有ける　もし此まゝ死んは尋常の病死ならねばはづかしと也
解云○貝を得とらず云々　は類本貝をもと有は衍なるへし○云々よりも人の聞笑はむ　と九字類本に脱せり此より以下は上に云る事を再委しく云るなり○日にそへて　は日にそひてと云べき格の言なるを歌にも皆かく云例なる事師の玉霰に委云れたり恥しく思ほす心日々彌増ていとゞ病の重くなれる由なり○とふらひにつかはしける歌　は諸本やる歌寫本ける歌と誤れり姫の贈れるを受る方にて云言なれば必つかはしけると云べき處なり上問妻の段にやれどもと有下に委辨たるを可レ考○歌年を

經て云々　は待を松に代を貝に云よせ立よらぬの序に浪と云り扱松に名だゝる住吉の詞もてしたてたるなり一首の意は前年は毎日毎夜來通給ひしを打絶て久しく立寄給はず我ゆかしみて待はべる貝も无しと永侍るは實にやとなり古今戀五に「久しくも成にける哉住吉のまつは苦しき物にぞ有けるとあるを思て作るなるべし〇いとよわきこゝちには抄本心にと有はち字を脱せり次に苦しきこゝちとある二のこゝちは唯心持惡など云とは異なり當時病氣の事をこゝちと云るにて弱き病苦しき病によりてと云意なり貫之集に（蟻通の歌の詞書に）馬のこゝちやみにけり見はてぬ夢卷に關白殿御こゝちいとおもし云々御こゝち猶惡う思さるれば御風にやなど思して云々御こゝち増らせ給ふ（諸本重く成給ふなり）など云り〇歌かひはかく云々　諸本かくをなくと誤れり今は抄本に從つ抄に匙は物を救ふ器なれば乘てよめりと云り和名抄十四に說文云匕（卑履切和名加比）所以取飯也（兼名苑云匕一名匙音提是支反上同）とあり[illegible]情を題て歌作て問ひ給ふか嬉しければせめては子安貝とらんとて勞せし代には此歌を得たりと悦びとても其情を掛給はゞ逢事を聴し給ひてよ戀侘て将に死なんとする命も延ぬべきに其を救ひ助くる匕は斯さだかに有ものを何とて救ひ給はぬぞいかで救給へよかしとなり師の（言玉の緒の）說にやはせぬと結たるは一格なり古今春上に「櫻花春加れる年だにも人の心に飽れやはせぬ何とて飽れぬ事ぞ飽れよかしと云意なりと云れたり〇と書はつると　は下のと字寫本に從て補つ類本にはてゝ云々と有と宣し鈴木氏云此と字常言にもある事なり書終と一時に云々と云意なるべしと云れき按に書終即時と云意なれば上に綱たゆる登時とある同じ語勢なり諸本と字なきは若すなはちと云言脱たるにもあらんか〇絶入給ひぬ　は息絶給ふなり伊勢物語九段に云々と載て絶入ければと有〇少しあはれと思しけり　は姫を戀侘て其事によりて遂に身を亡し給ひければあはれと思へるなり〇少し嬉しき事　とは後に言傳たる諺の意を云るにはあれど詞歌を作て姫の贈れりしを悅給ふ事にて返歌にかひはかく有ける物をと宣給へるを云なり

さてかくや姫かたち（イナシ）の世に似ずめで（イ）たき事をみかど

きこしめして内侍なかとみのふさ子にのたまふおほくの人の身をいたづらになしてあはざるかぐや姫はいかばかりの女ぞとまかりて見てまゐれとのたまふふさこうけたまはりてまかれり竹取の家にかしこまりてしやうし入てあへり女に内侍のたまふおほせごとにかくや姫のかたちいうにおはす○也よく見てまゐるべきよしのたまはせつるになんまゐりつるといへばさらばかくまうし侍らんといひて入ぬ

中臣房子歟一女に　竹取が妻女なとにや　○頭注云世に似ず　世上に似よるものもなきを云　身をいたづらになして　いたづらになすとは死るをいふ拾遺集「あはれともいふべき人はおもほえず身のいたづらになりぬべきかな　元眞集「戀わびて身のいたづらになりぬともわするな我によりてとならば是等同意　内侍なかとみのふさこ　凡冊ニ内侍一則指ニ掌侍一也四人内第一ノ曰ニ勾當内侍一其次各稱姓或営内侍源内侍之類也云々内侍とは官司の號也しかるに於ニ掌侍一内侍の字を用は一官の判官なる故也云々

解云○内侍　は後宮職員令に尚侍二人掌下供ニ奉常侍一奏請宣傳検ニ校女嬬一兼知ニ内外命婦朝參及禁内禮式之事上典侍四人掌同ニ尚侍一唯不レ得ニ奏請宣傳一若无ニ尚侍一者得ニ奏請宣傳一掌侍四人掌同ニ典侍一唯不レ得ニ奏請宣傳一と有是は内々の御事たれば女官を以勅使とし給ふなるべし○中臣のふさ子　中臣氏は天兒屋命の裔にて中執臣の義大中臣本系に高天原初而皇神之御中皇孫之御中執持伊賀志桙不レ傾ニ本末一中良布留人稱ニ之中臣一者など有に依て此も天皇と赫映姫との中に立由に此姓なる人を思寄しなるべし大中臣の姓は鎌足公の時藤原と改しかども猶中臣金連など有こと記傳十五に委辨られたり○多の人をいたづらになしてあはざンなる　は下に多の人殺てける心ぞかしと有も同し彼五人の人の心を盡し身をも亡して戀慕けれども終に不レ逢し其女は決て尋常の者にはあらじ容儀行状何ばかりの女ぞ見て參れとて勅使を下し給ふなり　いたづらは徒字　註に空也　又萬葉巻一に無用と書て其意なれど此は下に殺てけるとある同意なり實に此事によりて薨給ひしは石上中納言計なれど皆いみじき恥を見給

ひて山に隠れなどもし給ひしもあれば凡に殺てと
詔給ひしなり拾遺に一あはれとも云べき人はおも
ほえで身の徒に成ぬべき哉伊勢物語（段歎二十三）に「不相
思でかれぬる人を留かね我身は今ぞ消竟ぬめると
書て徒に成にけりと云るは死し事を云り○うけた
まはりて　は房子彼勅命を奉てなり○かしてまり
て　に勅使ある事を承て敬恐みて請し入奉るなり
○おうな　は竹取が妻なり諸本みな女と誤れり校
本に改たるに從つ勅使女官なれば翁は憚て嫗出て
受奉るなり○仰ことに　は勅詔なり○いうに　は
優字の音（師云漢はイウ呉はウ或イユ）なり字書に於尤切優々和也又
寛也饒也などある意にて手弱やかなる樣を云なる
べし○おはすとなり　はと字いま補つ天皇いまだ
赫映姫を見そなはさず人傳に聞食し事なれば其言
なくてはいかゞされば「と」字を補て然聞ゆべし○か
くと申侍らん　は嫗勅命を承て其仰事の趣意如レ
此と姫に傳へむとなりと字類本によりて補つ○い
りぬ　は勅使の前を退く姫の居所に行なり
かくやひめにはやかの御使に對面し給へといへばか
ぐやひめよきかたちにもあらずいかてか見ゆべきと

いへばうたてものたまふかな御門（帝イ）の御使をばいかで
かおろかにせん（むイ）といへばかくやひめの答る（イナシ）やう御門
のめしてのたまはん（むイ）事かしこしともおもはずといひ
てさらに見ゆべくもあらずうめる子のやうに（はイ）○あれ
どいと心はづかしげにおろそかなるやうにいひけれ
ばこゝろのまゝにもえせめず
おろかにせん　天子の使をおろそかにいかでと也
かしこし　畏　恐有（萬葉）　君の仰もおそろしから
ずとなり　こゝろはづかしげに　翁も平生かくや
ひめのいうなるに心をおきてまろうどなどのやう
にてあれは我子なれとも心のまゝにもえせぬ也
薄情（ウタテ）　○頭注云うめる子の樣にあれと云々心のま
ゝにもえせめす　前におのがなさぬ子なれば心に
もしたかへずといへる首尾なり又父子不レ責レ善の
義歟
解云○はや彼御使に云々　は此上に嫗入て姫の許
に來て勅詔を告る事を省て直に姫を催事を語れる
也○よきかたちにもあらず　は上（求問の段）にも能もあ
らぬ形を云々とあり○うたてものたまふかな　は

古事記穴穗宮段に大長谷皇子と市邊押齒王と狩したまふ條に來日出之時忍齒王到大長谷王假宮之傍而詔未寤坐早可白也夜既曙詑可幸獵庭乃進馬出行爾侍人等白宇多弖物云王子故應愼以上古文大長谷王の侍人ども忍齒王の朝早く催し給ふをうたてしく思て王に申なりとある此に似たればの字一補て物のたまふと改むと思つれど不然でも能きこえ又此には調も惡ければさて置つ轉の解は上龍首の玉の段にあり姬がいかでかみゆべきと云るをさては勅に違へばあしくものたまふ哉と云意を嫗が如此云る也○帝 の下に寫本君字あるは衍なるべし○おろかに は疎略に也○かくや姬の下抄本の字あり○帝の召てのたまはむこと はて字は必誤と聞ゆ故姑と訓べし○かしこしともおもはず は帝の召と有ては奉ㇾ畏て違背すまじき由を嫗の申せば姬は恐多事とも不ㇾ思となり又按に帝王に召れて后女御の位に齊かれむ事を結構なる事とも不ㇾ思と云意なるべし此かしこしと云言の事上おひたちの段に云しを可ㇾ考○みゆべくもあらず は勅使は姬を見にとて立させられつるを可畏とも不ㇾ思など氣隨を云て勅使に所見べくもなき樣子なり○うめる子のやうにはあれど は今は字を補つ寫本にあはれと有は若下上に誤れるか○いと心はづかしげに は鈴木氏云此にも恥かしと云るは俗に氣ヅカヒナまた氣ガオケルと云に當れりと云れき幼より養育つれば甚親しくて我産たる子の如くなれども實は我子に非れば氣がおけて嫗が思ふ通に云責もせずとなり紫式部日記に人々を評せる所に和泉式部と云人こそ面白う書かはしけれ云々口にいと歌の讀みゝなめりとぞ見えたる筋に侍るかし恥かしげの歌よみやとはおぼえ侍らず は甚心深き人ならば心置るゝ歌人さは不ㇾ思となり夕顏卷に夕顏君死たるよし人にしらすなと宣ふ處に尼君ましてかやうの事など諫らるゝも心はづかしくなむおぼゆべきと口固め給ふ源氏君乳母に合ㇾ知ては對面し給む時氣遣に思はんとなり○おろそかなるやうに云々 は鈴木氏云おろそかとは疎遠にて親しく睦ましからぬ由なり赫映姬己が心の不ㇾ進ゆゑ常とは異にて睦ましからず氣の置るやうに構て居ゆゑ嫗も心の隨に責ても得不ㇾ勸なり

○內侍おうないのもとに歸り出てくちをしくこのむイをさなきものはこはく侍る者にてたいめんすましきじイとまうすないしかならず見奉りてまゐれとおほせごとむイありつるものを見奉らではいかでかかへりまゐらんこくわ

うのおほせごとをまさに世にすみ給はん人(むイ)のうけたまはりたまは○(らイ)で○(はイ)有なん(むイ)やいはれぬことなし給ひそとことばはぢしく(はづかし)いひければ

こはく侍るものにて　強　心はげしくておもふまゝにならずと也　こくわうのおほせごとを　普天之下無レ非ニ王土一率土之濱無レ非ニ王臣一國王とは一國の王をいふなり天竺唐土などには國おほくわかれぬればおの〳〵國王ありけるなり但し我國にも帝をさして國王とまうす事古く見え侍る　ことはぢしく　言葉にてはづかしむる也

解云○くちをしく　は内侍に申詞なり姫の出べき事を左右云勸れども聞いれぬをくちをしとなり此くは土左日記(正月廿五日の條)にくちをしく猶日の悪ければゐざる程にぞ今日二十日あまり經ぬる　と有思の不レ遂を恨やうの意なり俗に殘念ナと云に當れりくちをしくと先云置て其由を下に云るなり(二月七日條にもれたく云ざらまし物をと有も同し語勢なりくちをしき事哉れたくも言哉と言を添て心得べし)○此をさなき者　は赫映姫を云り○こはく侍る者　は古語拾遺に天鈿女命古語於須女其神強悍猛固故以爲レ名今俗強女謂ニ之於須志一此緣也と見えをとめの巻に(槿齋)

院の事を故桃園宮にも然心こはき者に思はれ奉りて過侍にしをとあり今世にも心剛く不ニ承引一を情ごはしと云り○對面すまじき　此きの字上にそや等の言なければはとゝ受るにきとは不レ云格なるが如し宇治拾遺にうましきと云ける者ども(此文天羽衣の段に委引つ)と有も上に其格の言なし下に言を略たる意なるべし○と申す　は對面すまじきまで姫の言にて其を嘔とゝ受て姫が斯申と内侍に傳ふるなりされば地の詞に今一とまうすと云べきを省たり○まさに世に住給はむ人のうけたまはり給はでは有なむや　は寫本にうけ給はでとありは字は抄の異本に從て補つうけ給はりは聽と云に同じ此事を下にきくべくもあらずとありまさに云々有なんやは伊勢物語(三十九段)に今の翁まさに爲なむやと有同格なりやはやはにて(塗籠本には即やはと有とぞ)裏に反る辭なれば承て出て所見給へと云意となれり○謂れぬことなし給ひそ　いはれは上(火鼠の裘の段)に云つしたまひも云給ひの意なる事上(龍首の玉の段)に云つ猶ひとりごちまつりごつなど云はことしことすの約たるなりと云りともに言爲の意なり○詞はぢしく云ければ　は類本にはづかしくと有是

は即國王の云々と云る事にて更に歛色て言ぶりを改て剛く恥かしむる由に云成せるにて恥がましくと云むゟ同かるべし宇治拾遺巻三に本院侍従に懸想しけるに遂に不ㇾ逢し事平仲な恥て我ながらも世に恥がましくねたくおぼえしとあり

これを聞てましてかくやひめ聞べくもあらず國王のおほせごとをそむかばはやころし給ひてよかしといふ此内侍歸りまゐりて此よしをそうす御門きこしめしておほくの人○ころしてげる心ぞかしとのたまひてやみにけれど

まして　赫夜姫たとへかくまうすともかくやひめは聞入じとなり　おほくの人をころしてげる　五人の人々をなやませしもかくこゝろづよければぞと也　○頭注云おほくの人をころし　うつほさかの院の巻に藤つほむかしより名たり給ひておほくの人をいたづらにしなしと云々　これを聞てましてかくや姫聞べくもあらずトハ此物語の作者地の詞歟國王の仰事をといふよりかくやひめの再答なるへし

解云○此上に言多く省畧たり嫗内侍の詞を承て又姫の居所に入て姫に傳ふる事を畧て直に姫の容體を語れるなり○是を聞て　は内侍の詞を傳聞てなり○まして　は本來不ㇾ承引ㇾうへに國王の權威を以仰背まじき由を聞て彌增りて心剛くなれる容體にて地の言なり内侍の歛色たる當れるなり○きくべくもあらず　は承引かむさまもなきなり字書に聽他定切聆也靜也受也從也など見えたる意にて熟く耳に聞て心に承引よしなり○國王の云々はや殺し給ひてよかしと云　は違勅の罪には死を賜ふともよしとなり○かくて此下に又嫗歸り出て姫が答し言を内侍に申せる事を畧けり○此内侍　このは輕く添たる言と聞べし○そうす　は皇國言にはまをす（まうすと云は音便なり）と云べきを奏字の音にかく云り字書に則候切人臣言ㇾ事章疏曰ㇾ奏と有○多の人を殺してける心ぞかし　此言は強く侍る者にてと云るに答給ふやうの御言なり上に多の人の身を徒に成てと詔ひしに同し○と詔たまひて止にけれど　は多人身心を盡して戀慕ふをも竟に不ㇾ聽過し者なれば勅命なりとて容易には承引まじと思食て一度は止給ひけれどなり類本に止にけるされどゝあり

猶おほし(めしイ)○おはしましてこの女(なうなイ)のたばかりにやまけん(むイ)とおぼし○て(めして竹取の翁をめしイ)おほせ給ふ汝が持て侍るかくやひめ奉れかほかたちよしときこしめして御つかひ○たびしか(ケイ)どかひなく見えずなりにけりかくたい(ぐイ)〳〵しくやはならはすべきとおほせらるゝ(イナシ)

たい〳〵しくやは　勅命をかくはあなつらせしと也　褻(ナラヘス)　○頭注云たばかりにやまけんとおぼしては計(日本紀)まけんとおぼしてはたばかりにやまけんまけはせじと也　源氏きりつほ巻にかく世の中の事をおぼしすてたるやうになりもてゆくはいとたいたいしきわざなりと人のみかどのためしまでひきいでさゝめきなげきけり云々岷江入楚云たい〳〵しきは懈怠の意なり退怠の意云々　染(ナラフ)(日本紀)

解云○猶おほしめしおはしまして　は諸本めしなし校本に従て補つ類本はましもなし再更に思起し給ひて事謀給ふ也○此女の　を一本はおうなと有は誤なりをうなと訓べし即赫映姫なり○謀にや負むと思食て　は上にゆかしき物と云るは赫映姫男にあはじとての謀事なりかくて彼五人の人々此姫の謀計に皆負て空しかりしに當て朕は負給はじと強て思召立給ふなり○竹取の翁を召て　此一句難波人佐野春樹補べきよし云つとて寫本に書加たるに從つ實になくては汝がと詔給ふ當なくてきこえす諸本脱せるが傳はれるなるべし○聞食て　又御使を賜しかどなど天皇の大御詔は御自己敬言を詔給ふ事下に例を引て委云べし○かひなく　は態と勅使を立給ひし代もなく赫映姫房子に不相見ことなり○かくたい〳〵しくやはならはすべきと仰らる　は勅命を輕々しく疎畧に心得習はすべきにあらず必勅の如く姫を上べしとなり師(玉小櫛巻五)云たいだいしきは本たみ〳〵しと云けむを音便にてみをいと云なせる詞なりたみ〳〵しとは舌たみて詞たみてなど云たみにて直からず横さまにゆがめるやうの意なり萬葉に回轉などかいてまがれる道をたみたる道などよめりと云れき按に言の本意はさることならめど俗に打ヤリニスルといふやうの意物を疎略にする意ときこゆ何にまれ吉からぬことなれば此言アルマジキなど譯せば何にも當れるがごとし桐壺巻に(帝更衣の卒去を悲しみ給ふ處に)世中の事をも思し捨た

る様に成ゆけばいとたい〳〵しきわざ也と人の朝の例まで引出さゞめきけり 花の朝は唐玄宗のことに政事を疎略に怠給ひしよしなり 夕貌巻に 行觸の穢有て参内し給はぬ事を源君頭中將に宣ふ詞に 甚こそたい〳〵しく侍れとつれなく宣給へど云々 是は疎略がましけれどゝいふ意ときこゆ 又源君鳥邊山に物し給ふ處に 馬にて物せんと宣ふをたい〳〵しき事とは思へど 甚輕々しく有まじき事とは思へどなり 俊蔭巻に 若小君の先にし奉る出たる處に太政大臣いつかゝる心歩行は習しぞ甚たい〳〵しき事なり我心惑はすとて責給ふは 大臣いたく愛し給ひて外にも出し給はぬを父の心が疎略にして父の心を惑はすと宣ふなり 大和物語に 奈良帝若手と云鷹を愛し給ひしに預給へる大納言そらし給ひける事を奏し給ふ處に 面を守らせ給ひて物も宣給はずたい〳〵しと思したるなりけり 輕々しく疎略にしたる故にそらしたりと思召御氣色なり など諸の物語に多かるを考渡して知べし

翁かしこまりて御返事まうすやう此めのわらははたえて宮つかへ(づイ)つかうまつる(りイ)へくもあらず侍るをもてわづらひはべる

もてわつらひ　もちなやむと也

解云○宮づかへ　は天皇の大御前に仕奉を云然るを下ざまにも云るは後の事成べし宇治拾遺四巻に今は昔人の許に宮仕して在なる侍ありなど云り○もてわづらひ侍り　は諸本侍ると有を上にそや等の誤なければ改つ翁も帽も勅詔の疎畧にすべからざる由を聞えて云勸れども不二承引一を甚憂事に持攪よしを奏するなりわづらふはすか〳〵と行通らず攪ひ悩むを云なり

さりともまかりておほせたまはんとそうす

さりながらかへりて仰事をまうし聞せんと也　奏

解云○さりとも　は然有ともなりとても承引まじきさまなれども猶改て仰の旨を云聞らむとなり○仰たまはむと奏す　は寫本に仰事給はむと有此詞脱字有べしとて仰給ふやうに申侍らむと奏すと補はむとせしを鈴木氏是は古文の簡にて妙なる處ぞ本の儘にて然心得べしと云れき

これを聞しめしておほせ給ふ○(やうイ)などか翁の○(手にイ)おほしたてたらんものを心にまかせざらん此女(むイ)もし奉りたるものならは翁にかうふりをなとかたばせざらむ

翁がそだてあげし子を心に任せぬ事あらんやかくや姫奉りなば翁に官位をたまはんと也　冠

○頭注云おほしたてたらん　生立にて源氏などに多きことば也猶下春雨生中長萬物上　云々おふしともおほしとも通用萬葉第二十夜麻夫伎者奈泥都々於保佐

牟云々同巻伊波保㑹於布流須我乃根能云々たてたらんはたてゝあらん也テアの反タ也翁が育てあらんものをとなり

解云○聞食て　は翁が申言を傳奏にて聞食上給ひてなり○仰給ふやう　は勅部を奏者より翁に仰下シ給ふ也やうは類本に從て補つ○翁の手に　は下にみやつこ麻呂が手にうませたる子にてもあらずとあり後篇巻に父母が手を別れし日よりなど有手なり抄本に脱せり○おほしたてたらむ　は育をおほすと云り萬葉巻二十に「山振は奈涯都々於保佐牟在つゝも君來ましつゝかざしたりけりとよめり帝も造麻呂が生る子ならぬ事は知し召て汝が持て侍る赫映姫また翁が手に生立たらむなど詔給へど甚々強悍て養父母の心にも從はぬ事は未知ろしめさぬ故かく宣ふなり○翁に冠をなどかたばせざらむ　は類本を字を脱せり古板本一寫本に給せと作たるはたまはせと訓べきか類本抄本にはたばせと作たり何れにても宜し宇治拾遺十一に貧女清水寺に願掛たる處に是を給れとて御帳の帷を甚能畳て前に打おかると見て云々さば是より外にたぶべき物の無にこそ云々又まどろみ入たる夢に云々唯たはん物をば給ばらでかく返し參らする怪事なりとて又給ばると見る假名書なるは唯たばん物と有一なれど其に效て給字皆たばと訓べし　とあり冠は加我布理なるを和名抄にも加宇布利と有は音便なり冠賜ふは五位に叙せらるゝなり小世繼物語に勸修寺内大臣高藤公君かりける時栗栖野の鷹狩に急雨にあひて大領宮道彌益が家に一夜宿給ひて女に逢て産給ひし姫君胤子宇多天皇に娶れて后と成給ひ醍醐天皇を産給ひしに依て彌益をは四位に成し給ひし故事の例を思べし

翁よろこびて家にかへりてかく(ぐイ)や姫にかたらふやうかくなん(むイ)御門のおほせ給へるなほやはつかうまつりたまはぬといへばかくやひめこたへていふ(はくイ)もはらさやうのみやづかへつかう(奉イ)まつらし(じイ)とおもふをしひてつかうまつらせ給はゞきえうせなむ(ずイ)○もはら頭注云源氏夕霧にもはらうけひかすとかしらふりて云々　専也伊勢物語にもはらあひごともえせでと云々　きえうせなん　我形の消はてんと也

解云○悦て　は冠賜はむと有事を也○かくなむも冠の事なり○猶やは　はかく翁には冠給はむと

有て甚めでたき事なり其にても猶仕奉給はぬか仕奉給へかしとなり此辭の事は上(子安貝の段)にしぬる命を救やはせぬと云歌の解に云つ○もはら　は師(記傳十五)云專は一筋に方よりて他義を交へぬ意などに用たり全字一字をも訓る皆其意なり○強て仕奉らせ給はゞ消亡なんず　は翁官位を得まく欲て強て宮仕に出し立給はゞ身を失ひ命を亡ても宮仕はせじとなり此に消亡と云るは常に死事を消入など云とは異にて實に火の消雪のきゆるが如く身體消むと先口走云る意なり下に影のやうになり又本の形體に成などせし術あるを思べしなんずは下(天羽衣の段)に迎に人々まうでこんずと有も同じ末を係て云詈言なり宇治拾遺(巻三)に(本院侍從の許に平仲來たる處に)あはれ遺戸を開ながら忘て來にけりつとめて誰が開ながらは出にけるぞなど煩はしき事に成なんずたてゝ踊らむ程も有まじ云々著聞集(巻十)に(競馬のことを)高遠と國文と定下されけり高遠は云々强力の聞え有國文は小男無力の者なりければ疑なく取て投られなんずと人々思たりけりとあり

みづ(つイ)かさかうふり仕て(つかうまつりてイ)しぬばかり也

御司冠など給はらば我はしにうせん(頭注云官位をうけたりとも其名ばかりにてやがて死んと也)となり

解云○みつかさ冠仕奉て　はあて宮の卷に(源侍從の事を)つかさかうふりを人と等しく賜はりなど有つかさは官かうふりは位なりみ字は翁を敬て御官と云姫の宮仕に就て賜ふ官位なれば仕奉てと云り○しぬばかりなり　は一旦勤に從て宮仕つかうまつり翁の官位したまひし上とく死ばかりぞとなり上には消亡なんずと云て此には常人の如く死と云改たるなり

翁いらふるやうなしたまひそ○かうふり(つかさイ)もわか子を見たてまつらでは何にか(はイ)○せん(むイ)さはありともなどかみやづかへをし給はさらん(ざイ　むイ)死給ふ○やうやはあ(べきイ)るべきといふ

みやづかへせばしになんとは誠しからぬ事ぞとうたかふなり　○頭注云なしたまひそ　勿爲　かうふりも我子を見奉らては何かせん(萬十一)　玉しける家もなにせん八重むくらはひたる小屋もいもとしをらはの意なり

解云○なしたまひそ　は頭書に云勿爲給ひそなり

爲は姫の詞に官位仕奉てと有と同じく翁の官位姫が爲る由なればなり先かく云置て次に其由を云る例の文なり死給ふばかり辭み給ふ事ならば翁が官位を爲給ふ勿となり○つかさ　抄本に脫せり○何にかはせむ　はは字寫本に從て補つ翁官位を得たりとも我子を亡ては代なき事となり○さは有とも　は翁は猶官位を得まほしき執心ある由なり○などか宮仕をし給はざらむ　は何故に辭み嫌給ふぞとなり○死給ふべき　抄本へき無ぞ宜き○やうやは有べき　はは字抄本に從て補つ死と云事は有まじき事なりと云るなり

なほそらごとかとつかふ（うイ）まつらせてしなずやあると見たまへあまたの人のこゝろざしおろかならざりしをむなしくなしてしこそあれ

猶此上にもいつはりとおぼさはみかどにたてまつりて見給へ必ずしにうすへし五人の人々をもかくあればこそあひたてまつらざりしぞとなり

解云○猶虛言歟と云々　は翁官位に執心有て强て宮仕の事を云ば死計に辭むを虛言かと思召ば宮仕に出し立て猶不死で居かと試給へ實に死べきぞとなり○數多の人の志云々　彼五人は誠に戀慕て甚く志を盡したるをだに空しくなして不ㇾ逢し其人々の思はむ心も有事なり是は只昨今日の淺はかなる事なり帝の仰事とて其に隨着べきにあらずとなり

きのふけふみかどののたまはん（むイ）事につかん（むイ）人きゝ（ぎイ）やさしといへは（ばイ）

人きゝはづかしきと也　何をして身のいたづらにおいぬらんとしのおもはん事ぞやさしき　○頭注云注のごとくやさしきとははづかしき也俗に心ある人をやさしき人といふも心はづかしき人と云義なるを今は風流なる事とのみ思へり童蒙のため再ひ筆をくはふ

解云○人聞やさしと云ば　やさしと云言は恥かしき意ながら他の上を思て自が心のおかるゝ方を云恥かしと云は廣く我身の恥なる事を思ふ意と聞ゆ或人今俗にヤサシと云は優に雅たる人を云ば其意を用て萬葉卷五に「玉島や此川上に家はあれど君をやさしみ顯さず有きと作る歌を松浦少女が大伴卿に對て君は都の品高き宮人におはすれば其をやさ

しみ思ふから我賤しき家所を顯はすが恥かしきと含めたるなりと云り大柰抜に此歌にては其意と聞ゆめれど打任ては然は云難かるべし廣く考わたすに對人に心のおかれて恥かしく思を云と聞えたり恥かしと云も心のおかるゝ由に云へるは紫式部日記に和泉式部を恥かしげの歌よみやとはおほえずと云るは心置るゝ歌人とは不ㇾ思と云意なる事上三十のひら に云るをも可ㇾ考萬葉卷五に「世間を宇之等夜佐之等思へども飛立かねつ鳥にしあらねば 世の間の人に心をおけるなり 古今俳諧歌 に「何をして身の徒に老ぬらん年の思はむ事ぞやさしき 身ニ積々齢ノ思慮が恥カシイと譯されたり 眞木柱卷に 髭黑大將玉蔓君を語らひ給ひけるに木の北方の父式部卿宮の宣ふ言に 今は然今めかしき人を渡してもてかしづかむに片隅に人わろくて副物し給はむも人聞やさしかるべし 世人に心を置給へる此に同し人わろくと有此方の恥の意ぞ などあり是等其對方に心を置て自己を恥る意なるを思べし今の俗意は甚く轉たるなり今帝の召に應ては始妻問の段 に世のかしこき人なりとも深き志を不知では逢がたしと云し心もとほらず女御后と竊き傅かれむを喜べる樣なる心根義理の正直からぬを世人も欺べければ其を深く恥かしむ由なり

今の世の諺にもかゝる樣なるを襟ぉと著とて悟む同じ意ばへなり

おきなこたへていふ天下（はくイ）〇（のイ）事はとありともかゝりとも御いのちのあやふき（さイ）こそおほきなるさはりなれ（イナシ）ば猶つかふ（うイ）まつるまじき事をまゐりてまうさんとて（むイ）内に參りてまうさんとなり〇頭注云天下の事は云々とは世界の事はともあれかくもあれかくや姫の命にはかへじといはんがごとし

解云〇あめのした はてんかと作たる本は惡し天が下と云も惡し〇と有ともかゝりとも は叄翁の官位の事に係れる答なれば世界の事は何樣にてもと云て身は貴くても卑てもとなり〇御命の危さこそ は抄本あやふきと有宮仕に出したてば不ㇾ死やあると見給へと姫云を受たる答にてさる事して試見むは君が命に係る大事なれば然危ことはせじとなり〇猶仕奉まじき事を は類本に猶かう云々と有は衍なるへし此猶は俗にヤハリと云意なり〇參てまうさむ は內裏に參てなり まゐりてまうすやうおほせの事のかしこさにかのわらはをまゐらせん（むイ）とてつかふまつれば

御門の仰のかたじけなさにかくやひめを奉らんと
つかまつればと也
解云○仰の事　は類本の字なし○かしこさに　は
勅を恐畏み奉りて疎略には爲奉らぬ由を申なり○
彼わらは　は赫映姫也○參らせむとて仕奉れば
は仰の如く等閑ならず宮仕の事を種々に勸め仕奉
ればと云意なり

みやづかへにいだしたて(なばイ)おはしぬべしと(すイ)まうすみや
つこ丸(麻呂イ)が手にうませたる子に○(てイ)もあらずむかし山に
て見つけたるがかれは(かゝればイ)心ばせも(意イ)世の(イナシ)人に似ず(ぞイ)○侍る
とそうせさす

心の人間にことなるは化生の人なればぞとなり
○頭注云みやづかへにいたしたてておは　おはなの
誤にていだしたてなばなるべし
解云○宮仕に出し立なば　は抄本になをおと作り
(普本同じ)必誤なれば改て補つ類本出奉らしと有も誤な
り○造麻呂が手に云々　上にも詔になどか翁が手
にと有○子にても　は類本子にて(も字はなし句)と有に從
て補諸本子にもと有○山にて見付たるかゝれば
は校本に見付て侍ると有てよけれど本の儘にて聞
ゆればとらず下に子にて侍りと詞を加へ心得べし
上に子にても非ずと有て其意能聞ゆれば略けるな
り上にそや等の辭なくてたると結たるは下に意を
含たる言なる事言玉緒に變格と云れたる類也かゝ
ればを諸本見付たるがかれはと作たるはか字一濁
て上に着て下を彼者と云意に取たるらめど此は
如レ此有故なればの意と聞えたり○こゝろばせも
は天武紀(十一年八月癸酉詔)に凡諸應考選者能檢ニ其族姓及景
迹一方後考レ之若雖ニ景迹行能灼然一其族姓不レ定者
不レ在ニ考選之色一とあるを考證に景迹考課令に凡定
ニ官人景迹功過一義解に景迹者景狀也猶言ニ狀迹一也
選叙令に凡應レ選者皆審ニ狀迹一義解に謂考中功過
謂ニ之狀一也履行善惡謂ニ之迹一也行能考課令に功過
行能義解に善惡爲レ行才藝爲レ能古今名物に「いさゝ
めに時待間にぞ日は經ぬる心ばせをば人に見えつ
ゝ(心アヒと譯したり)明石卷に(明石上のさまを聞給ふ處に)事に觸て心ばせあ
りさまなべてならずも有ける哉とゆかしう思され
ぬにしもあらずとあり類本には心操と作り○世の
人に不似ぞ侍る　は變化の者なれば心さまも常人
の如にはあらずとなり○奏せさす　は翁云々と申

給へとまうす由なり
御門おほせたまはく(かンイ)みやつこまろが家は山もとちか
くなり御かり(のイ)にみゆきしたまはんやうにて見てむ(むイ)や
とのたまはす
詞林採葉に云竹取翁が家は富士山の麓と云々　狩春秋
みゆき　蔡邕獨斷云幸者宜幸也世俗謂レ幸爲ニ
僥倖ニ車駕所レ至民臣被ニ其德澤ー以僥倖故曰レ幸也
○頭注云山もとちかくなり　和州幽考云高市郡竹
取當世鷹取とかけり詞林採葉曰竹取翁舊跡は當世
大和國に竹取の城とておとろ〱しく聞えし是也
可考　竹取翁は駿河國大綱の里に住し人なれば別人に
ぞ侍なん　此説亦可考　契沖萬葉勝地篇云高市郡高取萬葉第
十六云昔有ニ老翁ー號曰ニ竹取翁ー也コレ作意ヲ以テ
儲ニ翁名ー寄ニ其懷ー述也高取元竹取歟司ヲ以テ借用
歟亦竹取物語是等因而名曾思附述作爲歟云々是も
前説によられし歟志高取山勢峭拔爲ニ郡主山ーとあ
ればば山もとちかくといへる其よせある歟しかし高
市郡は十市郡の北に續たれは石作の御子の石の鉢
取にといつはりて十市郡の山寺にこもられしはあ
まりほどちかくや侍らん

解云○山本ちかゝなり　は諸本ちかくなりと有は
かゝの重點を長く引て覚にくに轉たるなり故改つ
帝大御心に推量定て詔給ふ御命なり按に斯て聞え
はすれど若はめりを誤れるにもあらんか○御狩の
行幸　は抄本御狩にと有を校本のと有に從つ野の
行幸などの例なり普本類本には脱せり行幸を古く
はいでますと云り　古事記には幸行と書て然訓り係卷六卷十一可レ考幸字の義は續古事談第二にみえたり　みゆきと云は古事記　朝倉宮段　また天武紀　七年　に鹵簿　令彼　を解に鹵播導文籍也係に漢書儀云天子車駕次第謂ニ之鹵簿ー兵衛以ニ甲盾ー居レ外爲ニ前導ー皆著ニ之簿ー故曰ニ鹵簿ーと見えたり
みゆきのつらと訓り師　係卷四十二　云萬葉に吾行なども
あれば天皇のをば御行と云つべしと云れたり古は
雄略天皇　四年八月　の吉野の御狩今の京にては交野芹生
野など御狩繁かりしを思べし○詔賜はす　は帝の
御命を奏者をして令レ宣給ふなり翁が家は山本近
く在べければ御狩の行幸に准へて出坐て赫映姫不
慮なる處に到て見そなはしてむとの御計事なり然
し給ひては如レ何と翁が心を問しめたまふなり
みやつこ丸(まろイ)がまう(むイ)すやういとよき事なり何か心もな
くて侍らん(ばイ)にふとみゆきして御らんぜられなん(むイ)とそ
うすれは

かくや姫か何心もなくてあらん時不圖御ゆきあれやと也

解云○何か心もなくて　は古板本に心もとなくと有は衍なり鈴木氏云何かとはとかくと云に同じと云れき彼是と思慮分別もなく不意なる處におはし坐て御覽ぜられよとなり○ふと　は俗にチョットと云意なる事上に云き○古板本寫本に行幸して御覽ぜん御覽ぜられと有は衍なり

御門にはかに日をさだめて御狩に出給ふてかくや（ぐイ）姫の家に入給ふて見給ふ（ひイ）に光みちてけうらにてゐたる人有是ならん（むイ）とおほ（ぼイ）して○（近くよらせ給ふにイ）にけ（げイ）て入袖を捕へたまへに（はイ）おもてをふたぎてさふらへどはじめよく御らんじつればたぐひなくめでたくおぼえさせ給ひてゆるさじとすとてゐておはしまさん（むイ）とするに

光りみちて　かくや姫の形光りて室中にみつる也

ゆるさじとすとて　御門のはなたすしてつれて歸らんとし給ふ也　○頭注云にげて入袖を云々　にげてとは今の俗語をもて見れば義違ふやうなれど去の字をニゲともよめば去與レ走同意なればはしり入りてと心得べし

解云○にはかに　は急卒になり思し立て日數の間もなく御狩の日を定給ふなり○是ならむと思して　は其光ある人を是ぞ赫映姫なるべきと推量に定給ひてなり○ちかくよらせ給ふに　此一句諸本に漏せるを寫本に從て補つ○袖をとらへ給へば　は類本に袖を取ておさへ給へばとあり校本給へればと有○おもてを塞てさふらへど　校本どもと有片袖もて面を覆ひ隱せし也○たぐひなくめでたくおぼえさせ給ひて　は何か心もなくて居たる間に此姫の顏貌端正にて世に比類なしと熟く御覽じて御心に能思し知給ひしなり○ゆるさじとすとて　此云々とすと云事下天羽衣の段に云べしとて　はとのたまひてと云を略たる言なり○ゐて　は引率て大内に還幸まさむとし給ふなり

かくや（ぐイ）ひめこたへてそうすおのが身は此國にうまれてはべら（ばイ）はこそつかひたまはめいとゐておはしまし（イナシ）がたくや侍らん（むイ）とそうす御門などかさあらん（むイ）なほゐておはしまさん（むイ）とて御こしをよせ給ふに此かくや（ぐイ）ひ

めきとかげになりぬはかなくくちをしとおぼしてげにたゞ人にはあらざりけりとおぼしてさらばおんもにはゐていかじもとの御かたちとなり給ひね
もとイ
かくやひめは天上の人なれば此國に生れ侍らばといふ也　きとかげになりぬ　屹かくやひめのかたち影の如くなりて手にもたまらぬ也　太平廣記に秦の始皇溫泉にみゆきして天女に戯れしかば天女怒て帝に唾はきせし事有これらのおもかげなるべし　○頭注云いとゐて　最將イトヰテ○はかなく　無計日本紀　くちをしは朽惜の義歟○きとは舊本今昔物語卷二十三行土佐國掘金語に忽と書り此意歟

解云○この國に生れて侍らばこそ云々　は赫映姫此國の人の胎に孕れて生たるならば此國王の仰に不レ違隨がひ奉べき事なれど我は不然ば隨がひ侍らずとなり○ゐておはしがたくや云々　は率ておはさんとすとも然はえし給はじと申て率ておはさんとせば消亡むの下心あるよしなり○などかさあらむ　は姫の率ておはし難くやと奏せる御答にて强に率ておはさむとし給ふなり○此　は彼の意也○きと、　は俗にチヤツト此言は便ノ字をつやくと訓る古言の訛たるにてつやさの約れるなるべしと千村君の氷高考に言加へ置つるを考べしと云意と聞ゆ稻直が俗にチツキニと云意と云るもよし讃岐岐典侍日記に局より急たる氣色にてきとおはしませ三位藤三位殿絶入らせ給ひぬと云て云々著聞集に坊門院に年來召つかふ蒔繪師ありけり仰らるべき事有てきと參れと仰られたりければ宇治拾遺卷三に定賴中納言云々經をはたと打擧て誦たりけり云々小式部內侍きと耳を立るやうにしければなどあり○影に成ぬ　は帝强に率ておはさんとて御輿を寄給ふに依て今は遁れむ方なくて影に化て形體を消べくせるなり上に消亡せんずと云るもかゝる術あればなり平家物語靑山の段に廉承武が靈の顯たることを影の如なる者村上帝の御前に參じて唱歌をめでたう仕ると有に同じさまなるべし○はかなく　は師說答問錄に妹がり吾がりと云言は如何と道丞が問るに答られけるやう此がりと云言ははかりを約たるなりはを略がゞをがと約云なりさてはかりとは後撰戀二に中將更衣出て御文遣したりければ一今日過ば死まし物を夢にても何處をはかと君は問まし返し延喜御製あり伊勢物語二十段に何處をはかりとも覺ざりければなどあるはかと同じく其行あて所を云と云れたり此を以按

にそこはかとなくと云はかも同意にて何處へ行べきとも當所なき事にて徒然草に云るも何事を書記とも定たる事なき意也然は量字議字も本同意にて定を云ばはかなしと云も定もなく當もなき意を本にて漸に轉ては取締なき意本意の不レ達意又假初なる意死事にも云り此は憾に取所もなき由なり○おぼしくちをしと　は俗に殘念なりと云意なり○おぼせどを誤れるか今て　の下脚詞脫たるか又はおぼせどを誤れるか今は姑然訓て在べし○げに　は赫映姫は變化の物なる山は兼ても聞食知坐けれど今かく影と成るに就て彌凡人ならぬ事を思食知給ふ由なり○さらば　は率行給はんとすれば影に成れる故然計に辭とならば率行事はし給はじと也○御許には　は諸本御ともとあれど寫本に從て改つ御もとは御所なり○本の御形と成給ひね　は古本御字なし校本形にとあり

それを見てだにかへりなん（むイ）とおほせらるればかく（ぐイ）やひめもとのかたちになりぬ御門猶めでたくおぼしめさるゝ事せきとめがたしかく見せつるみやつこ丸（まろイ）をよろこび給ふさて仕まつる百官（のイ）○人々にあるし（じイ）いかめしうつかふ（うイ）ま（つイ）かる

人々にあるし　百官おの〳〵其職をつかさどりてまかりいづる也　主（アルジ）（ツカサドル）○頭注云みやつこ丸をよろこび給ふ　ト句にてさて御供百官に翁がいかめしう饗應する也　饗（アルシ）百官は職原抄云孝德天皇大化五年始置二八省百官一云々百官非二官有一レ百之謂一謂二官數之多一也つかふまつるもゝのつかさの人々にとよむべし

解云○其を見てだに云々　は今は率ておはする事かなはねば本の形體だに見て還らまほしと思食よしを詔へば影と化れりしが又本の體と成るになむ有ける○猶めでたく　は影と變つるが再本體に成ければ更に改りてめでたく思食由なり○塞止がたし　はいかで率行むと思食御心の進み給ひけれども率行難ければ唯めでたしと思食御心の塞止難しと云る面白し裏の意はいかでと思食心の進むが塞止がたき由なり○かく見せつる造麻呂を悅給ふは造麻呂か議て行幸の事を姫に不レ令レ知熟く爲おほせて帝に見せ奉れるを甚く喜びたまふなり○百官の人々に　は抄本百官人々に寫本百官人の類本

百官人々（に字なし）など有ての字无を今補つ職原抄に孝徳天皇大化五年始置二八省百官一とあり必百の員數には非ども數の多き義なりとぞ古事記（朝倉宮段）に一時天皇登二幸葛城山一之時百官人等云々とある此に似たり然れども此は字音に唱べし（百官の字は明宮段にも出たり）　鹵簿に仕奉し人々なり○あるじ　は主人と云言なるを轉て主人の禮をなして客をもてなし饗膳を設を云り○いかめしう　は師（記傳三十二）云いかしに嚴重茂字を書り右三字を合て心得べし物語書どもに事の壯に大に麗き事をいかめしと云る是なりと云れたり

みかどかく（ぐイ）やひめをとゞめてかへり給はん（むイ）事をあかずくちをしくおぼしけれどたましひをとゞめたる心ちしてなん（むイ）かへらせたまひけるお○（ほイ）ん（むイ）こし○（にイ）奉りてのちにかく（ぐイ）やひめに帝（イナシ）かへるさのみゆきものうくおもほえてそむきてとまるかく（ぐイ）やひめゆゑ御返事（をイ　イナシ）○姫むぐらはふ下にもとしはへぬる身の何かは玉のうて（むイ）なをも見むこれを御門御らんじていかゞ（とゞイ）歸り給はん（むイ）そらもなくおぼさる御こゝろは更にたちかへるべくもおぼされざりけれどさりとて夜を明し給ふべきに

○あらねば（もイ）かへらせ給ひぬ

かへるさの　百官とともにかへれども心ばかりはかぐや姫にひかれてあとにのこると也　むぐらは ふ　いやしき所にすみなれたれば内にまゐりてもせんなしと也六帖に「何せんに玉のうてなもやへむぐらはへらん中にふたりこそねめ　○頭注云たましひ（タマシヒ）を云々　萬十二「山すげのやまずて君をおもへかも吾心神の此頃はなき○かへるさの云々　そむきてとまるかぐや姫故かへるさの行幸ものうくと句をかへして見るべし第三のて文字いかゝ　歸り給はんそらもなく　萬十二　わきもこか夜戸出のすがた見てしより心そらなりつちはふめども俗に何もするそらがないなどゝいふがごとし

解云○赫映姫を止て　は率行むとし給へど隨はねば爲便なく置て還給はんとし給ふなり○あかずは不レ飽不レ足などの意なり○おぼしけれど　は歸り給ふと云言へ係れり○魂を止たる心ちして　は御製に含たる意を先此に書顯せるなり萬葉二十に「山菅の不止て公を思へかも吾心神之此頃はなき（解に）古今（雜下）に陸奥（は心利のと訓り）「飽さりし袖の中にや入にけ

む我魂の无こゝちするとよめる此に似たり○おほむ輿に　は諸本御抄本おんとあるをほ字を補つ大御と云言の音便に轉たるにておんと云も其がまた約れる也抑大御と云事古は天皇の御上にのみ申しかど（神にも甚尊に申と知へし記傳十一可レ考）音便に頽てはたゞ一通の敬言となれる也○奉て　は貴人を敬て俗にメサセマスと云意にて衣車船などに云り夕貌卷に狩の御衣を奉り若紫卷に御車に奉る程明石卷に夜の明はてぬ前に御舟に奉れとてなどあり○赫映姫に　とのみ云て製て賜ふと云言を省けり○歌かへるさのみゆき　は還幸なり師說に行幸を伊傳坐と云語の本は出る意に云つるにも有べけれど必さらでも唯往給ふにも來給ふにも云り今の俗言に御出と云を往にも來にも用るも同し意ばへなりと云れたり此も還給ふは宮に入給ふなれば然云まじきが如なれども右の說に準て心得べし抑此歌末句を始に回して聞べし鈴木氏云背向て止とは赫映姫帝に眞ほには向奉らで後の方を向て立止と詔給ふなり斯て次の詞にいとゞ歸給はむ空もなくと云る能叶へりと云れきかく天皇の命に不レ隨家に止れる赫映姫故に

還御の行幸を物うく出立給ひ難く思食て　と詔ひ終て御魂を止給ふ御心持のせさせ給ふと申意を含たるなり物うく　は古今（春上）に　春立と花も匂はぬ山里は物うかる音に鶯のなくと有を師は鳴トモナサウナと譯され契冲法師は文集に花寒懶發鳥慵啼とあるを引れたり字書に懶落蓋切音頼惽懶嬾惡也慵蜀容切晋鱅懶也とありて字中に有ども結句に有も同意にて所レ謂て止つゝ此の歌どもの意を云不レ盡言外に含たる格なり能々心を着べしさて然含たる意を前の詞に先云置て歌には省ていはぬ文の工甚めでたし○御返事を　は寫本に從てを字を補つ帝の御歌の處に赫映姫にと有に附々しく聞ゆめり並ては文の答を返事と云歌の和（コタヘ）を返しと云りされと伊勢物語（十九段）に蝦手の紅葉の甚面白きを折て女の許に道より云やる　君が爲手折れる枝は春乍かくこそ秋の紅葉しにけれとて遣たりければ返事は京に著てなんもて來たりける歌いつの間に移ろふ色の附ぬらむ君が里には春なかるらしと有は歌の和を返事と云る此に同じ又枕冊子に（行成卿餅餤を贈れる答）に唯返しをいみじう赤き薄樣に云々自まうでこぬ

下部は甚れいたうなりとなん見ゆるとて紅梅に付
て奉ると有は消息文を返（カヘシ）と云り○歌むくらはふ下
にも云々　は六帖（第六草部）に　何せんに玉の臺も八重
葎にはふらん中に二人こそ寢めとある歌の意詞をと
れり帝の率ておはさんとし給ふに就て御答申せる
やう自己は葎の延繁たる下の賤しき伏屋にも年經
て斯仕馴侍し身なる物を今更何しに玉臺の美麗し
き御殿に參らむ事を願むやとなり葎は和名抄には
本草云葎草（上音律和名毛久良）と有を萬葉（四の五十四丁）に牟具良布能
穢屋戸爾云々又（十九の四十四丁）牟具良波布伊也之伎屋戸母
云々と有さて此（六帖）歌は萬葉（十一）なる　玉敷有家毛何
將爲八重六倉覆小屋毛妹與居者（結句之か豆か脱せるなるへし）と有
を訛て傳たるか第四句本にはへらんと有は必誤と
見ゆれば延と改つ又生の誤にもあらんか○是を御
覽じて　と有は返し歌は赫映姬口自奏たるらんと
思へどかく有は物に書て献たる也けり○いとゞ歸
給はん空もなく　は帝御心に還幸を懶し給ふ上に
又一つ事有て彌留らまく思食由にていとゞと云り
其は此歌を奉たるを御覽じたる故に也按に彼本歌
の八重葎這らん中に二人こそねめと有を思召て又

更に止らまほしく思成給ひて玉臺に歸給はむも此
姬なくてはかひなく思食て彼歌と共に唱習へる（六帖
に竝べ載たり）葎生て荒たる宿の戀しきに玉と造れる宿も
忘れぬと云歌の意に成給ひて此竹取が賤しき宿に
ても迫て一夜だに御寢まして歸給はまほしくて夜
を更し給へるさまに執成せる工いと面白し心を著
べしさて此（六帖）歌を思し依て歸難くし給ふ由を令知
むとて本歌の詞を皆乍取て唯末一句を殘したるを
帝は却て其結句に（二人こそ寢めとあるか）思食つきていとゞ歸
難く思ほす由なり斯て赫映姬も帝の本意なく還出
ますを欺たる意を含て作るさまなり空（も）なくは氣
を失ひたるやうなる處に云り家持集と云物に　天
漢歸らむ空も思ほえず不絕別と思物から明石卷に（た
天變の條の末に）家な離境を去て明暮安き空なく歎給ふに宇
治拾遺（三卷）に（虎の難を除たる處に）肝心失て船漕空もなくてなど
あり○御心は云々　はわりなく歸がたくし給ふを
供奉の人の勸（すゝめ）けむさまはけれどゝ有にしるし○さ
りとて夜を明し給ふべきにもあらねば　は類本に
從ても字を補つ甚いたう跡がてにし給ひて夜の更
たるさまを此詞にてしらせたるなり

つねにつかふ(うイ)まつる人を見給ふにかくやひめのかたはらによるべくだにあらざりけりこと人よりはけうらなりとおぼしける人のかれにおぼしあはすれば人にもあらずかく(ぐイ)や姫のみ御心にかゝりてたゞひとり過し(ずぐイ)給ふ

こと人よりは　常の人よりはうつくしきと見給ひしかたくもかくやひめにあはせては人のやうにも見ぬ也　○頭注云かくやひめのかたはらに云々源氏紅葉賀に源氏の中將は青海波をぞ舞給ひけるかたてには大との丶頭中將かたちようい人にはことなるを立ならびては花のかたはらの深山木なり云々

解云○赫映姫の傍に寄べくだに非りけり　は校本寄べくもとあり師の玉勝間八巻に此詞の事を俗語に物を競てこよなく劣れるをそばへもよらぬと云に同しと云れたり紅葉賀巻に源君と頭中將と舞給ふ處に立並ては花源氏をたとふの傍の深山木頭中將なり嵯峨院巻に仲頼有大將の饗應の夜あて宮を見たる處にいみじくめでたくあたりも光赫くやうなる中に天女の降たるやうなる人あり仲頼是は此世間に名立たる九君あてみやなるべしと思よりて見るにせん方なし云々かくて家に歸て病に成て臥たる處になくめでゝしと思し妻も物ともおぼえず片時もみねば戀しく悲しく思しゝ前に向ひ居たれども目にもたゝず云々こと人より云々と有に似たり宇治拾遺巻六に羅刹女を南天竺王の見たる處に帝御覽ずるに云む方なく美くし若干の女御后を御覽じ競るに皆土塊の如し是は玉の如しなど似たる事なり○唯獨すくし給ふ　は抄本に從つ大伴大納言本の妻どもを追拂て獨明し暮し給ふと有同し意ばへなり宇治拾遺巻九に美濃國の人妻におくれてやもめにて過しけるがとあり寫本には獨すみし給ふと類本の異にもあり其も宜し幻巻に紫上卒去の後獨住は殊にかはる事なけれど云々とあり類本すごしさ有は惡し

よしなく○御かたく(てイ)にもわたり給はず

女御更衣などの御かたにも入給はぬなり　無緣(ヨシナク)

解云○よしなくて　は徒にと云むが如し○御方々にも渡給はず　は赫映姫のみ御心に掛りて清らと思しゝ人だに人にも非ぬ如く思して后女御の御方々に御婚ます事もなく常に來通坐けるを今は何ぞ御用などなくては渡給ふ事もなしとなり幻巻て紫上卒去の後絕て御方々にも渡給はず云々御獨寢に成ては

とあり
かくやひめの御もとにぞ御文を書てかよはさせ給ふ
御かへり（返事イ）さすがににくからずきこえかはし給ひて面白く（きイ）木草に付ても御歌をよみてつかはすかやうにて御心をたがひになぐさめ給ふほどに
さすがににくからす　返事のつれなくもあらぬなり　○頭注云さすかににくからす　金葉集　あふ事はながめふるやの板ひさしさすがにかけてとしの經ぬらむ艶書など木草に付る事前にいへり但此木草につけてとは折ふしの木草におもひよせてといふ歟
解云○赫映姫の御許にぞ　は外の御方々へは渡給はず赫映姫にぞとなり常に此姫に御心を掛給へど御婚坐ことかなはねば迫ては御文を通はし給ふ也○御返事　は諸本此に事字なきを校本に有は補るか○さすが　は姫を率往むとし給へば影に成など帝を強顔ふり奉つれどもさすがに文通はすには然ばかり憎らしくはもてなし奉らずと也さすがの解は上玉枝の段に委云つ○聞えかはし給ひて　は専姫の方に係れり○面白き木草につけても　は木草の花紅葉によそへてもなり桐壺卷に源氏藤壺女御に睦給ふ處に幼き心ちにもはかなき花紅葉につけても心ざしを見え奉りこよなう心よせ聞え給へれば蓬生卷に蓬生君の事なおのづから又いそぐ事なき程は同心なる文通はしなども打してこそ若き人は木草に附ても心を慰め給ふべけれど云々などあり玉の小櫛二の四丁に物のあはれしると云事の條に春夏秋冬時々の花鳥月雪の類をおかしきさまに書顯せるなど源氏物語の事なり是皆人の心を動かしあはれと思はする物にて心に思事ある時は殊に空の氣色木草の色もあはれを催すくさはひとなるわざなりと云れしを思べし諸本おもしろくと有を類本に從て改き○御歌をよみてつかはすは姫の方へ木草の花などによそへて御製を遣はすなり
追考　○廿五丁右赫映姫とふらひにつかはしける歌とは姫の贈れるを受る中納言の方に付ていふ言なりおこすは彼方より此方におこすとのみ云をつかはすと云言は此方よりやるに云は己が態を口白云なり又彼方より贈を受る方にても然云は即彼方の態を此方にて云詞なり後撰三戀におほやけ使にて東の

方へ罷ける程に始て相知て侍る女にかくなん止事なき道なれば罷ぬるなど申て下侍けるを後に（勅使な他）人改定らるゝ事有て召返されければ此女悦ながらに諸實方へ問につかはしたりければ道にて人の志贈て侍ける呉服と云綾を二端包て（女の許に）つかはしける清原諸實　くれはとり綾に戀しく有しかば二村山も不越成にき（此に女の問につかはしと云ひ綾を諸實よりつかはしと云り）又（慶賀）典侍明子父（敦忠）の宰相の爲に賀し侍けるに玄朝法師の裳唐衣縫てつかはしたりければ明子　雲別る天の羽衣打著ては君が千歳にあはざらめやはなど有を以しるべし

○（三十一丁左）此をさなき者　は大和物語（菟原美女の段）に親の云やう誰も志の同様なれば此をさなきものなん思煩にて侍るなど云る今世我子を悴と云同し意ばへにぞ云けむ

○かやうにて　は寫本て|字なし土佐日記にはかうやうとあり如レ此樣を省たる言也帝と姫と互に御文を通はし御歌をよみかはし給ふを云り

みとせばかりありて春のはじめよりかく（ぐイ）や姫月のおもしろう出たるを見て常よりも物思ひたるさまなりある人の月のかほ見るはいむ事とせいしけれどもともすればひとまにも（はイ）月を見ては（イナシ）いみじくなき給ふ

月かほ　只月の事なり源氏には月のかほとあり古今醫統に小兒に月をゆびさゝしむる事なかれ月を指ざせは兩耳の後に瘡を生ず月食瘡と名くと云々　ひとまにも　人のなき間に也　○頭注云源氏須磨卷に天上の御あそびこひしく所々ながめたまふらんかしと思ひやり給ふにつけても月のかほのみまもられ給ふ云々〻後撰集　月をあはれといふはいむなりといふ人のありければ　よみ人しらす　獨ねのわびしきまゝにおきゐつゝ月をあはれといみそかねつる（又小町集に出）源氏やとり木におい人とも今はいらせ給ひね月見るはいみ侍るものをと云々

解云○三年計も有て　は御狩の行幸有し後凡三年過て月を見て物思ふ事始まれるなり○春の始より　は天に昇れる其年の春にて赫映姫月都に歸ぬべき催しの有ける由なり○月の面白う出たるを　は寫本にいづるをとあり明石卷に十五夜の月おもしろう靜なるに鈴虫卷に月やゝ差揚り更ぬる空面白きになどあり空晴て景氣のよきを云り○常より

も物思たるさま也〃は姫は本月都の人なれば常にも月を見ては故郷を戀る意有て物思やうなるを此事は人知に非ず此春は常より殊に物思の增りざまに見えしらるゝなり○ある人の　は姫に近く在人の中にて又或人のなり古板本の字なし此のはがに通て制しけれどもへ係れり○月の貌　は古板本寫本の字なし須磨巻に源君八月月の甚花やかなるに今夜は十五夜なりけりとおぼし出て殿上の御遊戀しく所々ながめ給ふらむかしと思遣給ふにつけても月の顔のみまもられ給ふ二千里外古人心と誦し給へる例の涙も止められず云々夜更侍りぬと聞ゆれど猶入給はず　見る程ぞしばし慰さむ回りあはむ月の都は遙なれどももと有は此の文を思て延て書るが如し猶月の顔と云事明石巻八丁御法巻十七丁にも出たり○忌事と　は後撰戀二に月を哀と云は忌なりと云人の有ければよみ人不知　獨寢の侘しき儘に起居つゝ月を哀と忌ぞかねつる此歌小町集には中絶たる男の忍て來て隱て見けるに月の甚哀なるを見て寢む事こそ甚口惜けれと簀子にながむれば男忌なる物をと云を不聞貌にてと在　宿木巻に中君二條院に座處に　老人どもなど今はいらせ給ひね月見るは忌侍る物を云々白氏文集詩內府に莫下對二月明一思中往事上損二君顏色一減二君年一とあり○せいしけれども　は姫に仕る婢女など月見給ふなと止る由なり制字の音なり字書に之世切法度也禁制也斷也止也など註せる意なり○ともすれば　はともかくもと云とにてやゝもすればと云意なり夫木集雜九鳥歌に正治二年百首寂蓮法師　ともすれば雪の深山に鳴鳥の思定めぬ身のゆくへ哉○ひとまには月を見て云々　は諸本人まにも月を見てはと有類本に從て改つ人の不見隙と云事なり古今春上貫之　暮と明と目がれぬ物を梅花いつの人間に移ひぬらむ落窪物語に女君の事を北方典藥助に語はんと思て人間をまつなどあり

七月十五日（のもちイ）の月に出ゐてせちに物おもへるけしき也ちかくつかはるゝ人々竹取の翁につげていふ（はくイ）かく（ぐイ）や姫れいも月をあはれがり（がイ）給へ（ひイ）○ども（けれイ）此ごろとなりてはたゞ事にもはべらざめ（ざイ）りいみじくおぼしなげ（げイ）く事あるべしよし〱（くイ）見奉らせたまへといふをきゝて

れいも　平生も月を見れどももと也　よし〱　翁に來りて其ていを見給へと也　○頭注云よし〱にては文義不通異本のよく〱可然

解云○もち　は諸本十五日と書たり萬葉卷三に不盡の嶺に降おける雪は六月十五日消者其夜降けりと

有十五日をもちと訓り字書に說文云日月之望作レ
望膽望之望作レ望月滿與レ日相望以朝レ君也从レ月从
レ臣以レ壬釋名云月滿之名也と有て望字をもちと訓
り師の眞暦考にもちとは滿てふ意にて月の滿たる
を云なり一月の中此十日計が間をもちと云り中旬
の間皆がら空の月の正しく圓には非れども缺たる
處なくやゝ滿たれば然云なりと委猶云れたり然れば
此も唯中比月の盛の程にて十五夜の一夜には非と
知べし次の八月の處にもちばかりと云る凡十日の
頃なるべきにも知べし今此世界に在も唯三十日計
が間と成ぬればいとゞ物思の添れるなるべし○せ
ちに　は切字の音なり過し月々に比ればこよなう
物思ひの増れるさまなり○けしき　は氣色の字音
なり○近くつかはるゝ人々　は姫の身許近く仕る
婢女なり○例も　は寫本につねもと有も宜し祝詞
式に伊勢の大御神の祭どもの祝詞に常毛奉流大幣帛乎とあるは例も
と云に同じ○月をあはれがり給ひけれども　は諸
本給へどもと有を類本に從て改つ此姫の性として
常にも月に對て歎息せらるれども此七月は甚異に
て去し月々の狀には非ねば婢女が翁に告令知する

なり○たゞことと　にも侍らざめり　は尋常に異な
る大事と云意にて今世にもたゞことならずと云り
凡人をたゞびとゝ云たゞに同じ○いみじく　は言
義は忌じくなれども轉ては只甚しき意となれり○
思し歎事有べし　は唯一通に月を哀給ふにはあら
で殊に心中に遣方なき物思有べしとなり○よく
〳〵見奉らせ給へ　は類本見奉れ給へと有奉りを奉れと云事源氏物語には多し婢女ども姫の容體を告て翁嫗にも能其行狀
を見屆て左にも右にも議給へとなり
かくや姫にいふやうなんでうこゝちすればかくもの
を思ひたるさまにて月を見給ふぞうましき世にとい
ふかくやひめ○見ればせけむてゝろぼそくあはれに
侍るなでう物をかなけき侍るべきといふ
なんてう　いかなるこゝちすればとなり　うまし
き世に　たのしき世に也　美世間　○頭注云日
本紀　可美（ウマシ）可怜（同）もと味より出てよろつ
にわたる古語なり
解云○なでふこゝちすれば　此は如何樣なる心持
のする故歎給ふぞとなり○うましき世に　は宇治
拾遺卷四に三河入道寂昭發心の段に雉を生ながら捉へて人の出來

りけるをいざ此雉生ながら造りて喰む今少し味はひやゝきと試見むと云ければいかでか心に入らむと思たる郎等の物も覺えぬがいみじく侍なんいかでか味はひ増らぬやうはあらむなどはやし云けり云々斯て前にて生ながら毛をむしらせければ暫はふた〳〵とするを壓て唯むしりにむしりければ鳥の目より血の涙を垂て目をしばたゝきて是彼に見合せけるを見てえ不堪して立除者も在けり是がかく泣ことゝ笑ていとゞ情なげにむしる者もありむしりはてゝおろさせければ刀に隨て血のつぶ〳〵と出けるを拭ひておろしければあさましく堪がたげなる聲を出して死果ければおろし竟て煎燒などして試みよとて人々に試させければ事の外に侍けり死たるおろして煎燒したるには勝たりなど云けるをつぐ〳〵と見聞て涙を流し聲をたてゝおめきけるにうましきと云ける者ども支度たがひにけりさてやがて其日國府を出て京に登りて法師に成にけり云々とある此うましきと云言此と同意なり美しきは苦々しきの反對にて竹取翁が家富てあれば憂事もなき世なる物をと云意なり うまきうまくうましとは常にいへどしくしきなど活用たるは いと珍らしき詞づかひにて他に見し事なし○月を見れば　は諸本かくや姫見ればと有抄本に月字脱たるかと云る宜し猶按に此物語の詞づかひ凡翁云々赫映姫云々とはなくて翁いはくかくや姫答るやうなどあれば此もさやうの言有けんをも脱せるか然れども御狩行幸の段にかくや姫よき形にもあらず云々と云るは答たる言也されば此も月をと補て聞ゆべし○世間　はよのなかと訓べし萬葉五の八丁三十丁に世間と書るをよのなかと訓りせけんと作たる本は惡し○心細く哀に侍り云々　は月見れば千ぢに物こそと讀る如く唯何となく世間が悲しく心細く覺ゆるのみにて別に思歎くにはあらずと答ふるなり

㊂

かく〔ぐイ〕や姫のある所にいたり〔てイ〕○見れば猶もの思へるけしきなりこれを見てあが佛

河社にあが佛はことわざに我家の佛たふとしといふに同し仲文集に．あが佛かほくらべせよ極樂のおもておこしをわれのみぞせんかつほ物語としかげの卷にあが佛愚なるにおぼしそといふ也我本尊ともおもふ人をいふなり

解云〇赫映姫の在ところに到て云々　上は翁と姫と對面にて物云交すさまなるに此に又斯あるはいかゞしく聞ゆるを鈴木氏云是は上の應對とは別時なれば翁其後と云言を上に加入て心得べしと云れき〇猶　は上に月を見れはたゞ世間の物悲しさにて別に思事の有には非ずと云慕れども猶にて俗にヤハリと云意なり〇是を見て云々　は姫が物思の事をいたく心に懸て危ふむ故に幾度も強て懇に尋問なり〇吾佛　は上の段に我子の佛とあり

なに事(かイ)〇思ひ給ふぞおぼすらん事(むイ)何事ぞといへば思ふこともなし物なむ心ぼそくおぼゆるといへば(ばイ)は翁月な見給ふ(ひイ)ぞ是を見たまへばものおぼすけしきはあるぞといへばいかで(かイ)〇月をば見(イナシずイ)〇ではあらん(むイ)とて猶月出れば出ゐつゝなげきおもへりゆふやみにはものおもはぬけしきなり

なみたまふそ　見たまふ事なかれと也　いかで月を　いかでか月を見ずしてはをらんと也　〇頭注云千載集　具平親王　ひとりゐて月をながむる秋の夜は何事をかは思ひ殘さむ　月な見給ふそ云々源氏宿り木に月な見給そよ心そらなれはいとくるしと云々樂天贈内詩莫下對二月明一思中往事上損二君顏色一減二君年一

解云〇思事もなし云々　は赫映姫たゞ同樣にのみ答ふるなり〇月勿見給ひそ　は姫別に物思事はなしとて月にのみ託付(カコツク)れば然らば月見給ふ事を止給へと云るなり〇いかでか月を不レ見て　はあらむとて　は姫の答に月見る事をば止はせじとなり〇猶月出れば云々　と云る七月十六夜より後のさま見ゆ此猶は翁が制するも不レ聽ヤハリの意なり〇夕暗には云々　は二十日より後のさまなり

月のほどになりぬれはなほ時々はうちなげきたきなどすこれをつかふものども猶物おぼす事あるべしとさゝやけどおやをはじめ(てイ)〇何事ともしらず

つかふものども　かくや姫のめしつかひ也　囁(サヽヤキ)〇頭注云さゝやけど　雖囁(サヽヤケド)なり囁下篇之渉切私罵云々相書に私言といへり靈異記に囈をよめり萬葉耳言をさゝめくとよめるも同義

解云〇月のほどに成ぬれば　は八月三日頃より後の夜々のさまなり面白く書取たる文なり味はふべ

し〇打歎き泣などす　は三十丁に翁は泣歎て俊蔭巻に俊蔭女詳しくて傳世を有りしに貧の王とて此子をさゝげて養ふかくて清暮し歎明す月日はかなく過ゆくあて宮巻に父部卿禮レ少將景正宣に當れる處に泣なげく事限なしと有なげきは長息にて心に思結ほゝるゝ事ある時はあはれ〳〵と長き息の衝るゝを云なり俗に泣も歎も一つに心得たるは誤なり〇さゝやけど　は小聲に物云事にてさゝは小の義なり婢女の云合する私言を云り萬葉七の三十四丁人曾耳言（サヽメキシ）為また靈異記中巻第十五條に嗟（サヽヤイテ）とあり〇おやを始て　は抄本て字脱たり〇何事ともしらず　は月の哀より外に決て物思有らむとは推量知れど其思は何事ぞとも知人なきなり

八月十五日（の望（モチ）イ）ばかりの月に出ゐてかくやひめいといたくなき給ふ人目も今はつゝみ給はずなき給ふ（ぐイ）是を見て親どもゝ何事ぞととひさわぐかくや姫なく〳〵いふ先々もまうさんとおもひしかどもかならずこゝろまどはし給はん（むイ）ものぞとおもひて今まですごし侍りつる（ぐイ）なりさのみやはとてうち出侍りぬるぞおのが身は此國の人にもあらず月のみやこの人なり

月のみやこ　起世經云佛告二比丘一月天子宮殿縱横正等四十九由旬四面垣牆七寶所レ成月天宮殿純以二天銀天青瑠璃一而相間錯一分天銀清淨無レ垢光甚明曜餘之一分天青瑠璃亦甚清淨表裏映徹光明遠照亦爲二五風一攝持而行亦云於二此月殿一亦有二大輦一青瑠璃所レ成輦高十六由旬廣八由旬月天子與二諸天女一住二此輦中一以二天種々五欲功德一和合受レ樂隨レ意而行月天子身壽五百歳子孫相承皆於レ彼治云々又龍城錄曰開元六年上與二申天師道士鴻都客一八月望日夜因二天師作一レ術三人同在二雲上一遊二月中一過二一大門一在二玉光中一飛浮宮殿往來無レ定寒氣逼レ人露濡衣袖皆濕頃見二一大宮府一榜曰二廣寒清虛之府一其守レ門兵衞甚嚴白刃粲然望レ之如二凝雪一時三人皆止二其下一不レ得レ入天師引二上皇一起躍レ身如レ在二烟霧中一下二視玉城崔巍一但聞二清香藹鬱一下若二萬里瑠璃之田一其間見レ有二仙人道士一乘レ雲駕レ鶴往來若二遊戲一少焉步向レ前覺二翠色冷光相射目眩一極寒不レ可レ進下見有二素娥十餘人一皆皓衣乘二白鸞一往來舞二笑於廣陵大桂樹之下一又聽二樂音嘈雜一亦甚清麗上皇素解二音律一熟覽而意已傳頃天師亟欲レ歸三人下若二旋風一忽悟若二醉夢中廻一爾次夜上皇欲二再求一往天師但笑

謝而不レ免上皇因想ニ素娥風中飛舞袖被一編レ律成レ
音製ニ霓裳羽衣舞曲一自レ古消レ今清麗無三復加於是一
矣　○頭注云狹衣にねのかぎり吹き給へるはげに
月の都の人もいかてかはおどろかざらむ云々
解云○望ばかり　は廣く中旬を云り此は十日頃な
るべし○甚痛く泣給ふ　は朔ばかりの程は忍々に
物思さまにて然しも无かりしが漸々に歎息まさり
て甚太しく成て今は人目も包あへず泣也拾遺に方賀
「人目をも不レ包物と思せば袖の涙のかゝらましや
は千歳に行光「あぢきなく不云で心を盡す哉包人目
も人の爲かは○泣給ふ　と云言類本此には无し上
と重なりて徒なるが如なれど必有べき也○悶騒は
姫今は只泣になければ翁も嫗も驚騒て強て歎息の故
を問なり○前々も　は翁の問し其節々なり○心ま
どはし　は姫の別なん事を告なば翁嫗戀慕ひ思惑
ひ給はん事を勞はしみて疾も打出ざりしとなり○
すぐし　は古本に從つすごしと有は訛なり○さの
みやは云々　は今までは包たりしかど天に昇べき
事の月影の滿行まに／＼近づけは然ばかり云竟べ
きにあらねば今は語出あかすぞとなり○己が身は
云々　は今天に還升に就て姫の稱姓を云顯はすな
り○此國の人にもあらず　はも字はの誤かと思へ
どさておきつ輕く添たる言と見ゆ○月の都の人な
り　は校本にものなりと有はさかしらに改つるか
下十二丁にも月の都の人にて俊蔭卷十四丁に都卒天の人
と生にきと有月都の事は首卷四十八丁に委記しつ

それをなん（イナシ）むかしのちぎりありけるにより○（てイ）なん（むイ）此
世界にはまうてきたりける

翁と前世の因縁ありてしばらく身をよせしとなり
解云○其を　は然をと云意に聞ゆ此下になん二字
諸本にあれど削つ下のなんと重て聞苦し必衍なる
べし○昔の契ありけるによりてなむ　は宿世の因
縁など云意ばへ也類本に契なりけるにと有も宜し
て字なきは惡し○此世界にはまうで來たりける
は天上は尊く此界は卑をまうて來と云るは差向た
る翁を敬たる言也此下にぞ字校本に有はさかしら
に加つるか此は依てなん來けると結べるなり

いまはかへるべきになりにければ此月の（むイ）十五日にか
のもとの國よりむかへに人々まうで（むイ）こんずさらずま
かりぬべければおぼしなげかんかかなしき事をこの

侍よりおもひなげき侍るなりといひていみじくなく
を
さらず　時をさらずかへりぬべければはと也
解云○十五日　はもちと訓べき事上に云り此は中
句を廣く云るには非で正しく其一日を指せり○彼
もとの國より　は姫の本國月都也類本もとの三字
無○むかへ　は還方へ令レ向の意ぞ○こんず　此詞
遣ひの事は上解四の三十七丁にも下十三丁に罷なんとすると
ある下にも云べし○さらず　は伊勢物語八十三段に老
ぬればさらぬ別の有と云へば彌見まく欲き君哉と
よめるさらぬに同じ避遁るゝ事不レ能を云りさて
此の詞續俄なるやうなればさらばの誤かと云しを
本居翁も鈴木氏もさらずにて宜しと云れたれど猶
然ば不レ避と二つながら有まほしく後に類本を見
ればさらば罷ぬへければとあれど諸本皆さらずと
有が上に此詞の捨難くさらばのみにては語勢よわ
く聞ゆれば上に詞脱たるらむと思はるゝなり○悲
しき事を　は心惑はし給はん物ぞと有同意なり寫
本さ事をの傍にさにと付たり本行の儘にて宜し○
此春より云々　は上に月の面白く出たるを見て常

より物思さまなりとある此事なり
翁ゝはなでうことをのたまふぞ竹の中より見つけき
こえたりしかどなたねの大きさおはせしたわがたけ
たちならぶまでやしなひ奉りたるわが子を何人かむ
かへ聞えんまさにゆるさんやといひて我こそしなめ
とてなきのゝしる事いとたへがたげなり
なたねの　きはめてちひさかりしより長の翁とひ
としきまでやしなひし子をむかへにくるともいか
でゆるしやらんやとなり　○頭注云なたねの云々
和名鈔云蕓薹蘇敬本草注云蕪菁 和名阿乎奈 云々古事記
用二菘字一蕪菁之子或菘子倶謂二菜種一
解云○なてふ事を宣給ふぞ　は姫が我は月都の人
也と云るを不レ思もよらぬ由なりて云は一本に
從て補つ○竹の中より見付きこえたりしかど　此
かどは我丈立云々へ係る言なり寫本にときにと傍
に附たるは菜種の大さと云に不レ續とて御かしら
せしなるべしきこえは古事記の八千矛神の御歌に
阿夜爾那古斐伎許志と有傳一に勿戀謂ひそと云む
が如し是は人の言て我に令レ聞意より云るなり然
れども其言人を尊みて云時ならては不レ云言也久

中昔の物語文などに申と云べきを聞ゆと云ること常多し其は尊む人に申すのみ云りされば古言の使許須とは使ざま表裏の違なり今人は古言雅言の使ざまを不レ知きこすきこゆとをも一に心得又人の己に對て言と云事をきこゆと云など甚くひがことなりとあり此きこゆは俗に申とも省てマスとも云如く意はなくて敬て徒附添たる言にてはべりさふらふなど云類なり○菜種の大さ　とは始〈解一初丁〉竹中より出し時三寸許なる人と有を此は殊更に小さく譬て云るなり○我たけ立並ぶまで　は幼かりし姫か翁の高さに立並までなりに字を加へて心得べし又我たけだちに並までか何にも有べし空蟬卷に〈源君を見違て云言に〉民部の御許なめりけしうはあらぬおもとのたけだち哉と云丈高き人の常に笑はるゝを云なりけり老人是をつらねて歩きけると云て今唯今〈小君も〉立並なんと云とあり○養ひ奉たる我子を　は幼少より養育し我子なれば他に領じて迎に來る人有べきかはとなり○何人か迎へ聞えむ　は按に上には姫を迎へに來ぬべき臣の方に付て迎に人々詣こんず　と姫の云るを此には迎に遣す君の方に付て答たるにて誰かは我女を迎とる人君あらむと答るなり○まさにゆるさむや

は迎に來たりとも許して出し立むやはとなりまさにと云言は古事記に方字〈府良切今也〉をまさかりにと訓る意〈傳十七〉又萬葉に麻左可と云言も同意と聞ゆ〈玉勝間八可レ考〉梓弓末よし不知然ども眞坂者君に縁にし物をと二十有は今差當たる時を云て俗に眞最中と云意なり然ばまさにも眞盛にの略にて今差當ては云々せんやと云意也〈谷解四の三十二丁可レ考〉○我こそ死なめとて云々は姫が他所に去と云はゝ其より先に我こそしなめとなり○のゝしる　は騷く由なり○いとたへがたけなり　は堪忍がたく歎き悲しむ狀なり物語の地より云る辭なり

かくや姫○いふ〈のイ　はくイ〉月のみやこの人にて父母ありかた時のまとてかの國よりまうでこしかどもかく此國にはあまたの年〈のイ〉をへぬるになんあり〈むイ〉ける

天上の壽は人間に過たる事遠ければかくいふなり毘沙門天に住する人の壽は人間の五十年を一晝夜とし人間の一萬八千年を一歲として五百歲をたもつと云々又薪莚王願經〈月支々海譯〉無思想天の壽八十四千萬劫と云々これらによりて片時とはいふなり解云○赫映姬のいはく云々　は余は月都の人にて

其國に今現に父母在ぞとなり抄本の字なくいふとあり〇片時のまとて　は類本に間と作抄本にまとてと有寫本にはあひだと有もよけれど明石卷に(源君)の歌に秋夜の月毛の駒よ我戀る雲井にかけれ時の間も見むと有に從て訓つさて智度論(三十五)に四天王壽五百歳人間五十歳爲二四天王處一日一夜一亦三十日爲二一月一十二月爲二一歳一以二此歳一壽五百歳爲二人間九百萬歳一猶抄に萍莎王五願經(月支々謙譯)に無思想天の壽八十四千萬劫などあるを思て云るなるべし〇數多の年を經ぬるに云々　は下(四十丁)に翁かくや姫を養ひ奉る事二十餘年に成ぬと云りの字一本に從て加つ无も宜し

彼國の父母の事もおぼえずこゝにはかくひさしくあそびきこえてならひ奉れり(なむイ)〇(脱詞平イ)いみじからん(むイ)こゝちもせずかなしくのみ〇ある(むイ)されどおのが(がイ)心ならずまかりなんとするといひてもろともにいみじうなく

隔生即忘とて世をへだてぬればあとさきの事を覺えぬものゆゑかの國の父母の事もしらずといふ也いみじからん天上にかへるもうれしからぬことゝ也　〇頭注云ならひ奉れり　染(ナラフ)(日本紀)

解云〇父母の事もおぼえず　は久しく此界に在ければ本國の雨親の上をも不二思出一忘たるやうにて在しとなり始ことゝもを子ともと云るかと思しは非ず〇ならひ　は馴を延たる言なり姫は天人なれども此竹取の翁嫗を親として久しく馴睦し由なり〇いみじからむこゝちもせず　按に此上に月都に歸らむ事など云一句必脱たりと聞ゆさるは下(二十九丁)に彼都の人は清(ケウラ)にて老もせず思事もなく侍るなりさる所へまからむずるもいみじくも侍らずとあり同意なり月都は甚めでたく此世界にはこよなう勝り又父母の座坐本國なれば疾歸らまほしき理なれども此世界に馴親つれば父母の所に歸らむ事を嬉しき心ちもせず今別れん事のみ一向に悲しと云意なるべしいみじは甚しき意なれども(四丁可レ考)此は俗に結構ナル事トモ不レ思と云意なり(解四の三十丁可レ考)〇悲しくのみなんある　は鈴木氏なむと云言脱せしかと云れしに從て補つ〇されどおのが心ならず　は余は歸まほしく思はねど其月都の迎へ辭み難ければ无(ス)術便(ベナク)天に升べきなり我心には非ずと斷れるなり〇罷なんとすると云て　は鈴木氏云此る字衍の如く

聞ゆれど下にことよなど歎息の意を含たる一格也と云れき上十一丁右に引たる空蟬卷に是をつらねてありきけれるとある同格の言なりすするは爲なり上御幸の段に許さじとすと有に同し下二十五丁に彼國の人來は皆開なんとすとあるは此に同じくなんと云て末を係たる詞にて上行幸の段に消亡なんず此巻九丁右に迎にまうでこんずとと字なきず濁音は爲に非ずぞに通ひて副たる言にて元來異言なれども意は大氏同樣に聞えたり大和物語に惡闍法師が行ひしに深き山に入なんとすべしと云ていにけり宇治拾遺三上に上津出雲寺の別當淨覺が夢に見るやう我父の別當いみじう老て杖つきて出來て云やうあさて未の時に大風吹て此寺倒なんとすべし倒ルベシ然に我此寺の瓦の下に三尺計の鯰にてなん行方なく水も少なく狹く暗き所に在て淺ましう苦しき目をなんみる寺倒れば壞て庭に這あるかば童部打殺てんとすシ殺ヘ其時汝が前にゆかむとすクユべシ童部に打せずして鴨河に放てよ云々と云此なんとすと云言べしと云意と聞ゆ罷なんとするは罷べし開なんとすは開べしなり猶下葛卷に太宰小弐病中に玉葛に言を我さへ打捨奉りていかなるさまにはふれ給はんと

すらむハフレ給フベキ月宴卷に冷泉院の后寳多く持給へるがハシ宮に宮を子とし給はんとする處には寳の王に成給ひなんとす給フベシなど有も同じ枕冊子に言の葉の文字あやしく遣ひたるこそあれ唯文字一つにあやしくもあてにも賤しくも成はいかにかあらむ云々難義の事を云て其事させんとすといはんと云と字を失て唯いはんずる里へ出むずる此このる字若は衍かなど云へばやかて甚わろし增て文を書ては云べきにもあらずとあり是も此と字の事か未得解

つかはるゝ人〇もとしごろならひて立わかれなん事をむイ心ばえへイなどあてやかにうつくしかりつる事をみならひてこひしからん事のむイたへがたく湯水〇もイのまれずおなじ心になげかしかりけりがイ

ならひて 年比なれて也 〇頭注云心ばえ立操コヽロバエ綏靖紀 氣推古紀 意氣皇極紀 など書り伊勢物語にといふ歌の心ばえなりと云り あてやかにうつくし云々 質慈愛ウツクシ共日本紀

解云〇つかはるゝ人々も は類本に從つ諸本人字一なし此一條は婢女マカタチの歎を書り〇立別れむ事を

の下に詞脱たるか如し（四ふにと有べきか）又は略たるにて下の歎かしがりけりと云へ係れるかと云しを鈴木氏云脱たるには非ず下に添れるなりと云れき○心ばへは上（解の四十二丁右）に景迹（コヽロバセ）と有も大氏同言ながら少差別有べし澪標卷に（源君冷泉帝を後見給ふ處に）大臣（源君）萬に到らぬ事なく云々濃なる御心ばへの甚哀に見え給ふを（藤壺）頼もしき物に思きこえ給ひてとあり谷川氏はこゝろばえは書紀に意字又意氣立操心許などをよめり心映の義なるべしと云り師は心ばへと作れたり檝取魚彥は下延（シタバヘ）の類なりと云り○あてやかには伊勢物語（十五段）には（紀有常）人柄は心うつくしうあてはかなる事を好てとありあては上（解一の十一丁）に見ゆ○うつくしかりつることをは寄生卷に（匂宮中君に琴勸め給ふ處に）凡て女はやはらかに心うつくしきなんよきこととこそ其中納言（薫君）も定むめりしかとあり心操の愛らしさを云なるべし類本には愛かりけるとあり○戀しからむことの堪がたく云々は姫の昇天し給ひたらば其時に姫の景迹などを思出て戀しからむと今より思侘て堪忍難くするなり○湯水も飮まれずは胸塞がれる心ちして湯水だに咽喉を不レ通なり推古紀二十九年に廐戸豐聰耳皇子薨云々時に老如レ失二愛兒一而鹽酢之味在レ口不レ嘗月宴卷に（九條殿々御冷泉帝を生給ふ時 皇子の外祖父）元方大納言かくと聞に胸塞かる心ちして物をだにも不レ喰なりにけり云々一皇子（廣平親王）の母女御（元方卿女）の湯水をだにもまゐらで沈てぞ臥給へると有○同じ心に歎かしがりけりは竹取の翁嫗と婢女どもゝ同心に別を惜み歎くなりがりは悲しがり嬉しがると云同言なり

此事をみかどきこしめして竹取が家に御使つかはさせ給ふ御使に竹取出あひてなく事かぎりなし此事をなげくにひげ（髮イ）もしろく腰もかゞまり目もたゞれにけり翁今年は五十ばかりなりけれども物思ひにはかた時になん老になりにけりとみゆ

上の文に翁とし七十にあまりぬと書りこゝにて五十ばかりと書たるは相違にやはたゆゑある事にやたづぬべし　○頭注云此事をなげくにひげも白く萬九詠浦島子歌に若有之皮毛皺奴黑有之髮毛白班奴云々　腰屈目䁾（コシカヾマリメタヾレ）文選風賦云得レ目爲レ䁾　下の文にかくや姫をやしなひ奉る事二十餘年になりぬと云々しかれば此所七十許としてよく

かなふべし年を前後に書誤たる歟
解云○この事を　は姫が月都に歸らむこといふよしを帝の聞召しなり○御使つかはさせたまふ　は帝の臣にあふぎて令ㇾ遣給ふといふ地の詞なり　つかはし給ふとは異なり　然を校本につかはし給ふと有はさかしらせしものか此言は下に給ふと云言不ㇾ添例なりと師玉霰云れき後撰二戀に長明親王の母の更衣里に侍けるに遣はしける延喜御製「よそにのみ云々三戀鉤殿のみこに遣はしける陽成院御製「つくはねの云々など帝の御なれど遣し給ふとは不ㇾ云なり○髮も白く　は類本に從つ諸本ひげと有は誤なるべし髮を閣て髭を云べきに非ず浦島子歌に若かりし皮も皺みぬ黑有之髮毛白班奴云々土佐日記に頭もしらけぬとあり○目もたゞれにけり　は甚く泣傷て爛らしたるなり字書に瞥莫結切音蔑目赤也䁾瞯目赤貌玉篇にたゞれめと訓り○翁今歳は五十計なりけれども云々　は類本なりしかと有上要間の段に翁七十に餘りぬ下迎の人に云詞に赫映姫を養たてまつる事二十餘年に成ぬと有を五十計と云るが不審に就て左右に論に健冬が云く翁七十に餘ぬとは自己云る詞にて實なり此は勅使の詞なれば翁が齢先には五十計ならむと見えしが今見れば物思に依て急に衰へて老屈たりと云るにて勅使の推量言なれば違へるに非と云り鈴木氏云此說よく助得たるが如なれども猶心ゆかず按に是は作者の取弭たる過と見むこそよかめれさしも心して造成せる源氏物語すら前坊の御息所の年紀の不合など後にもある事なりと云れき又或人の說に上に七十餘の由見え下に姫を養こと二十餘年と有を合れば實は百歳計なるを姫を得て後心寬けく物思無りければ形若やぎて五十計と見ゆめるを此度の物思に俄に老て實の百歳計の顯たるなりと云り此意を以見れば健冬が說も宜様にも思はるれど猶ふと取弭たるたるべし按に上には翁七十に餘ぬ今明日とも不ㇾ知など姫の男すべきを勸むるには年老たらでは付なく此は物思に依て急に老たりと云むには實は老人にては叶はねば其を云むとて語勢に任せて取弭して始末たがへて語れるなるべし猶下勅使少將の事又文籤に渡せし頭中將の事も誤か下四十九丁同じ考物思に依て急に年老たる例は土佐日記正月二十一日條に船君なる人浪を見て國より始て海賊報せんと云なる事を思

ふ上に波の又おそろしければ頭もしらけぬ七十八丁は海にあるものなりとあり

御使おほせごととて翁にいふいと心ぐるしく物思ふなるは誠にかとおほせたまふ竹取なく〳〵まうす此十五日になむ月の都よりかくや姫のむかへにまうでくなるたふとくとはせ給ふ此十五日には人々給はりて月の都の人まうでこばとらへさせんとまうす御門のありがたくもとはせ給ふ也武官の人々をたまはりてむかひにこし人をふせがんとまうすなり

解云○仰事とて　は勅命を翁に傳へらるゝなり○いと心苦しく　は俗に氣の毒と云意なり帝の御心に甚氣の毒に思召由を先諾ふにて此にて切る言なり翁の心を苦しむる事と聞ゆるやうなれど不レ然物語などに心苦と云る皆他より氣の毒に思と云意なり○物思なるは云々　は翁赫映姫の近き程に天に升べき由にて物思と云事を中は實かと令レ問給ふを痛く略たる文なり○此望になむ　は正しく十五日を差せり○たふとくとはせ給ふ　は貴き御志を以令レ問給ふを辱く思由にて下に歎息の意有て事哉と云言を添て心得べし○此もちには　類本に字なし是も正しく十五日なり○人賜はりて　は姫を留むとて防戰べき兵を希なり○月都の人　は類本人々と有○とらへ　は捉側角切捕薄故切などの字を訓り

御使かへりまゐりておきなのありさままうしてそうしつる事どもまうすをきこしめしてのたまふひとめ見給ひし御心にだにわすれ給はぬに明くれ見なれたるかくやひめをやりて○いかゞ思ふべきかの十五日つかさ〳〵におほせてちよくし○少將高野のおほくにといふ人をさしてろくゑのつかさあはせて二千人の人を竹とりが家につかはす

高野大國　差　さしつかはす也　ろくゑは左右近衞左右衞門左右兵衞あはせて六衞なり　○頭注云ちよくし少將　少將五位殿上人中爲二譜第公達一者任レ之職掌同二中將一○高野云々　姓氏錄云大草命之後也

解云○御使　はおほんつかひと訓べけれど地の詞にてはみつかひと云べし　此事既云へきを忘て此にいへり○翁のありさま申て　は急に老衰し翁の容體を勅使の申さるるなり谷川氏云ありさまは書紀に消息また狀字文

選に景迹遊仙窟に行跡東鑑に形勢をよめりと云り○奏しつる事　は翁が十五日には人々賜て云々など奏せし事なり○一日見給ひし御心にだに忘給はぬに　と詔給ふは天皇の大御言は御自の上に敬の御言を宣ふ御事なり上（御狩行幸の段解四の三十三丁）に顔形よしと聞し食て御使をたびしかど（三十六下）此女奏たる物ならば（四十二丁）御狩の行幸し給はむやうにて（四十五丁）猶率ておはしまさむとてなどある皆御自の御上を御口自敬て宣給ふなり（奏者の吾言にして下し傳るには非ず）雄略天皇の御製古事記にあぐらゐの神の御手もち彈琴に舞する女常世にもがも書紀に（四年八月行幸吉野宮云々）天皇乃口號曰やまとのをむろが嶽に猪鹿臥とたれかこの事大前に奏す大君はそこと聞し玉纏の胡床にいまし倭布纏の胡床に坐云々又萬葉（卷六）に聖武天皇（賜酒節度使等）御製に天皇朕宇豆乃御手以掻撫曾禰宜賜打撫曾禰宜賜云々など見えたるもて知べし○且暮朗たる云々　は翁嫗が歎息の心を推察まします大御言なり○如何思べき　と有下にと宣たまひてと云言脫たるが如なれども上にのたまふと云て其宣給御言を云々と云るなれば脫たるにはあらずされど此書には稀なる

事なり○もちの日　は諸本十五日と書りもちのひと訓べし今は假字に作つ○つかさ〴〵に仰て　は竹取が家に遣はすべき兵卒を其官々の上に仰て驅催さしめ給ふ也小右記に召右兵衛督公信其詞云右の武舎人乃官乃藤原朝臣又召左兵衛督賴定其詞云左刀武舎人官乃源朝臣と有とぞ○勅使には　は寫本に從てには二字補つ○少將高野のおほくに　は類本に葛野とあり按に天より降人を防べき御使なれば高字のある姓に思ひよれるか姓氏錄（和泉神別）に高野大名草命之後也（同條に紀直神魂命子天御食持命之後也大村直紀直同祖大名草彥命男枳彌命之後也）また（右京諸蕃別）高野造出自百濟人佐平余自信之後也と有○六衛のつかさ　は左右近衛府左右衛門府左右兵衛府を六衛府と云和名抄に職員令云近衛府兵衛府衛門府（山介比乃加佐）とあり其官人近衛に大將中將少將將監將曹府生衛門府兵衛府に各々督佐尉志府生あり皆弓箭兵仗を帶て宮城を守護る武官なり其下に仕る人等合て二千人なるべし

家にまかりてつい（ひイ）○ぢの上に千人屋の上に千人家の人々○（いさイ）おほかりけるに合てあけるひまもなくまもる（らすイ）に此まもる人々も弓矢（箭イ）をたいして（かりイ）お○もやの内には

女ども○ばんにをりて守らす なうなイなイ すゑイ

築地(ツイヂ) 母屋(オモヤ) 番(バン) ○頭注云ついぢのうへにし云々
和名鈔云淮南子云舜作ニ築墻一 和名部以加岐一云豆以比知 築土ノ義歟 家の人々おほかるに 竹取が家人を合せて也まもる人々弓矢をたいし 伊勢物語にをとこ弓やなぐひをおひて戸くちにをり云々 おもやの内には 母屋内也契沖云古語に母をおもといへるもそだつる思のおもき故なるべし おもやを本としてさまざまのやほそどのひさしなと出來るはあまたの子に似たればおもやとはいふなるべし

解云○家に罷て は内裡を退出て竹取が家に來たれるなり○ついひぢ は諸本ついぢと有是は本築土なるをついひぢと云はき字を略けるなり ついぢとは書べからず 此も略て云るかと思へど後なる伊勢物語にも不レ略云へれば改つ 和名抄に淮南子云舜作ニ築墻一 和名都以加岐一云豆以比知 とあるは既音便に呼るなり古の築土は今世の如く柱を立屋を葺たる物に非ざる事伊勢物語 五段 についひぢの崩より通ひけり著聞集 十九 に 花山院の事を 四面の築土の上には瞿麥をひしと植られければ花盛には色々樣々にて錦を山に覆へるに似たりこれに依て花山の號は有と申ける誠にやと有もて知べし又 十七に矢負大納言狐狩の條に 侍共に皆用意を仰てけり明日下人ども數多具して不レ漏參べし面々に杖又弓矢など用意すべき由仰つ明日四方を能固めて築土の上屋の上に人をたて又天井の上に人を入て皆獵出して出む處を打殺し射殺さんと定てけりと有は此に似たり○家の人々甚おほかりけるに は類本おほくありけるにと有竹取が家に使はるゝ人々也○合て は賜はれる六衞府の人々に家人を副合て人數いと多き也 あけるひまもなく守らす 專家人にかゝりて官人には不レ拘言なり築墻も庭も屋上も人の不レ居處なくなりあけるは虛あるにて不レ實隙の無也抄本守るにと有○此守人々も弓箭を帶してをり は家の人々なり官の人々は弓矢帶せる事更にも不レ云竹取が家人も弓矢を帶せる由なり帶ノ字音を用たり字書に帶當蓋切紳也又佩也禮月令帶以弓韣 と有をりは校本に從つ諸本弓矢を帶しておもそのとあるはり字脫し假字を誤たるならん○もやの内には は諸本おもやと誤れり 母屋の母をおもと心得て誤れるなるべし今改つもやの事師 記傳 卄七 云身とは中に主とある處

を云屋の中に主とある處を身屋(ムヤ)と云役に母屋と云は夜を誰れるなりと云れたり○をうなどもを番にするて　は抄本を守なしするては諸本をりてと有を改つ居字を書たりけんをするともをりとも訓字なればをりと寫たる誤なり上の段(子安貝)に麻柱(アナナヒ)に揚するられたり又人一人を荒籠に載するて伊勢物語に夜毎に人をするて守らせければとありばんは番字の音なり字書に番字猥切音翻前漢武帝紀賢良直宿更番と有意にて本相更て物する事なるを轉ては其となく物を守やうの類に云り其は番々相更て守より轉れるなり此ま意は守目にするてと云むが如し宇治拾遺卷四に二人の子を舟の守目に載おきてと有に同し浮舟卷に宿直人にてかはる〳〵さふらへばおのが番に當りて云々是は猶更ノ意なり宇治拾遺十二に成陽院の御釣殿に番の者寢たりければ是は守の者と云むが如し所な

女(通イ)ぬりこめ(ごイ)の内にかくやひめ(ぐイ)をいだかへて(たイ)をり翁もぬりごめのとさして(なイ)とくち(ぐイ)にをりおきなのいふか(はくイ)ばかりまもる所に天の人にもまけむやといひて

いだかへて　いだきて也　塗籠(ヌリゴメ)　○頭注云女ぬりこめの内に　前に女どもばんにをりといひ又女ぬりごめの内に云々と云る此女は竹取が妻にてはじめにめの女にあづけて養すといへる嫗なるべし　翁もぬりこめの戸さして戸くちにをりゆ伊勢物語にあばらなるくらに女をおくにおし入て男弓やなくひをおひて戸ぐちにをり云々前に守る人也弓矢をたいしといへるよりこゝの體よく似たり又源氏夕霧に女二の宮ぬりごめに人おはす事あり○天の人にもまけんやと　はかなき書ざま古風面白し

解云○塗籠の内に　は鈴木氏云ぬりごめは古の室の遺製なるべし屋の内に土を厚く塗こめて今の土藏のやうにして器財を入置所にしたりと見ゆ其用は今の納戸に同かるべしと云れき古事記傳四十三新室の解に凡て牟瀨と云はたゝ舍など云とは異にて家の内にても奥方に在て室字なかくも此意なり升レ堂未レ入レ室など云ふにても可レ知夏は籠かなる屋にて古へは土を以て築て塗こめて涼しく冬は暖る處なり書紀履中卷に室をヨドノとも訓り大和物語に紀國の室の郡に行人は風のさむさもいとし四にてられじ今世にムロと云物も土を以て塗籠たるを云りさて又後世に母屋と云は身屋と聞ゆるを又室屋の切りたるにてもおらむか書紀神代卷に无戸室(ウツムロ)天武卷に御窟殿(ミムロドノ)また御室院など和名抄古今に辨色立成云室地室也一云漆丘云どあるも塗籠たる殿なるべし

云とあり和名抄に白虎通云黄帝作レ室以避二寒暑一音七和名左呂師説は是に從られたる歟又四聲云寢殿寢七稔反和名閨夜方言腰云與止乃寢室也とあり師説は古なり後世は寢殿と塗籠とは別なる由は次に引る御法巻にて知べし御法巻に源君の薩壵の御許に忍て物し給ふ處に人々驚うまかへば我にもあらで塗籠に押入られておはす云々君は塗籠の戸細目にあけたるをやをら押あけて云々と有を稱名院御説に帳臺のやうにしてむく所也又御法巻に八講の聴聞所しんでんの西の塗籠なりけり花鳥餘情にぬりこめば寢殿の廂に壁を塗回し妻戸などして自然の調度など置處を云なり續古事談に奈良の僧綱の房へ盜人入て房主を捉て云音に房中の者音せば汝を殺べし庫塗籠あけよと云て萬の物心の儘に取てと有は器財を納置しと思はる何にまれ甚奥まりたる處なれば姫を抱て入居れるなり源君の潛まり隱居給ひしを思べし○いだかへてをり　は欽明紀十三年に擁護をいだきまもると訓り常に抱字を書り塗籠の奥に入たる上にも猶姫の自身立出まじ　嫗に抱かせて働せじとして居なり○翁も塗籠の戸をさして戸口にをり　は類本に從てを字を補つ伊勢物語六段にあばらなる倉の有けるに女をば奥に押入て弓籙を負て戸口に云々居たりけると有は若おそろしき物の外より入來むを防がむ爲なり此は姫の外に出まじく翁が守護をるなり

○天の人　は字音にてんの人と訓べくも思つれど猶あめの人と訓へし下四下五丁に天人と有處に云べし朝廷より賜はりし人を始て數多の人々外を守り翁嫗婢女等内を護れば天の人來たりともいかでか負むと心剛く憑めるなり

屋の上にをる人々にいはく露も物そらにかけらばふといころし給へまもる人々のいふかばかりしてまもる所にかは○り一だにあらばまづいころして外にさらさんと思ひ侍るといふ翁これをきゝてたのもしがりをり

翔　かはり　かはりたる事あらばと也又かはほりのあやまり歟　○頭注云かはり一だに　蚊飛蟻歟いたつて小きものにてもあらば射殺さんといふ也露も空に翔はといふに對し見るべし和名抄云蚊音文和名加小飛蟲○蟻一名飛蟻和名波阿里蟻有レ翼能飛也ハアリをハリとのみいふはハにアのひゞきあればアを略じてハリといふ也今俗もしかいへり○外にさら

さんと思ひ侍る。外肆（ニサラス）なるべし字彙肆刑陳ニ其尸ー
曰レ肆
解云○屋上に居人々に云く　は翁屋ノ上なる人に
物云かくるなり○露も　は細小なる譬言にて露計
など今も云り○ふと射殺し給へ　といふと有べき
を略たり○かはほり　を抄本かはり諸本かはかり
と誤れり抄にかはほりの誤歟と云ぞよき故改つ和
名抄に本草云蝙蝠一名伏翼（和名加波保里）と見えたり是は
夕暮に空を飛ものなれば翁が物空に翔らばと云に
就て蝙蝠と答たるなり○外　はとと訓べし類本ほ
かにと有はわろし○さらさむ　は肆字の意なり字
書に肆息利切韻會既刑陳レ尸曰レ肆禮月令仲春之月
命ニ有司ー省ニ囹圄ー去ニ桎梏ー毋ニ肆掠ー註肆謂ニ死刑
暴レ尸也周禮秋官掌囚凡殺レ人者踣ニ諸市ー肆レ之三
日とあり○たのもじかり　は屋上の人々の闘く答
るを深く憑に思なり
是をきゝてかくやひめ（ぐイ）はさしこめてまもりたゝかふ
べきしたくみをしたりともあの國の人を得たゝ（りイ）かは
ぬなり弓矢して（箭イ）いられじかくさしこめてあるともか
の國の人々（こはイ）はみなあきなむ（んイ）とすあひたゝかは（むイ）んとす
とも彼國の人きなばたけき心つかふ人もよ（イナシ）もあらじ
仕計（シタクミ）たゝかはんとしたくみをすとも天上の人
とはえたゝかはじと也　○頭注云したくみをした
りとも　したゝくみの夕文字脱する歟前にもいし
つくりの御子は心のしたくある人にてといへるも
同義歟　みなあきなんとす　あきなんはあけなん
也一本とすの二字なきをよしとすべし　かの國の
人きなば　來ば也
解云○是を聞て　は上なるが紛て再入る衍かとも
思はるれど諸本皆あり○赫映姫は云々此にいはく
とか又は末にといふとか有べきを脱せるか此は姫
はと云るは字力有て聞ゆれば下の結の（よも非じの）下に
有けむと思はる○さしこめて　は古事記（石屋戸段）に
閉ニ天石屋戸ー而刺許母理坐也とある傳（八巻）に閉を立
と云は師説に上代には戸を常は傍に退置て閉むと
ては其を持來て立塞ゆゑなりと云れき（後世の遣戸は此の便よくしなしたるになるべし排戸は上代よりあり）を刺
は閉たる戸に物（萬葉に一に釘刺固とし）
て固るを云と（諸本引て甚要）云れたりこめは令レ隱なり○し
たくみは下巧の意ならむと云事上（解二の初丁）に委云つ
○あの　は彼に同し今俗にもあの云々と云り但し
多

かのは醜はしき言あのは打解たる言と聞ゆと鈴木
氏云れき空蟬巻に空蟬君を源氏の心あいつらき人の強に世を
ゝむもさすがにいとほしければ落窪物語巻二に北方
典薬の助門る也しが不門いかであなたに侍りし笛取てとあこぎに
告侍らむと云へば北方聞さしてあの笛の篋えんとあ
めりなど有○人を得たゝかはぬなり　此を字は人
を扣と續けるなりたゝかふは戰之韻切闘也なり扣合の
義なり○弓箭して射られじ　は天の人は矢のたゝ
ぬ術有よしなり○彼國の人こば云々彼國の人きな
は云々　同事をこばときなばと聊言を替て云る面
白し○開なんとす　は人も手不レ觸して自然に開
ぬべしとなりとすの事は上十三丁左に云つ○相戰はん
とすとも　を類本するともと有は悪し○武き心つ
かふ人よもあらじ　は下にさかしき人なしと有に
おなじ得不レ戰なりと云るを再委しく云るなり
翁のいふやう御むかへにこん（むイ）人をば長きつめしてま
なこをつかみつぶさん（むイ）さか（がイ）がみをとりてかたぐりお
とさんさか（がイ）しりをかきいでゝこゝら（りイ）のおほやけ人に
みせてはぢみせんとはらだちをる
落窪物語にはらだちかなくりてと云々今昔物語に
死人のかみをかなぐると云々かみを引ぬく事也
さかしりをかきいでゝ人のしりをはぎておほくの
官人に見せんと也　欽明紀に新羅王我國の軍にか
ちて伊企儺といふ人をとらへしかば伊企儺しりげ
たを王のかたにむかへしんら王わがしりをくらへ
とさけびし事あり唐書に郭弘覇といふもの爽をう
ちに出るとて則天皇后にへつらひてまうしけるは
彼えびすをとらへその筋をぬき其しゝむらをくら
ひ其血をすゝり其髓をたゝんと云々文勢相似たり
○頭注云長きつめして　大鏡に爪は長くかたなの
はのやうにてといへり　さかしりを云々或人云さ
かは汝といふならんさか父に似てといへるさかな
らんこゝは罵ていふ也云々愚案汝がといふべき文
義とみえずさか髮をとりてといふに對せし詞なれ
ば逆尻をなるべし俗にさかさまにしてといふに同
しき歟文體わらはしきさまに書なせり七八十翁
如二小兒一などいふに似たり
解云○翁の云やう云々　嫗が得たゝかはじなど云
に依て吾武き由を云也しこむ人　を古本に來たら
むと有も宜し○眼をば摑みつぶさむ　つぶすは破

とは少し異にて形丸きやうの物を或摑み或押て毀す意なり目つぶる胸つぶるなど云赤染衛門集に「虫の血をつぶして身には不着とも思初つる色なたがへそ返し「虫ならぬ心をだにもつぶさでは何に附てか思初べきとよめり○さがは古事記高津宮段に斯賀斯多爾また斯賀阿麻理などある傳三十六に斯賀は其上に云る物を差て其がと云ことなりとあり此のさがも斯と佐と通音にて同言なるべし契冲法師の己之をさがしと同意と云れたるとは異なり天の人來ば其が髮其尻をと云事なり前說又按に平家物語にしや冠を打おとせ宇治拾遺に貫之東人に令似て作る歌とて「あなてりや虫のしや尻に火の著て小人魂とも見えわたる哉猶しや頬しや足しや衣など卑しめ嘲る辭あり此も必其意なるべき處なればしやと云を約て直音にさと云るにもあらむか古事記傳十九の志夜胡志夜の解に右の書どもを引て中昔の語どもなるは車者の字音の如く呼しと聞ゆるを上代には然る言なければ志と夜とを憎に續べし車者の音の如くならんとは貫之の歌必七言なるべければなりと有を思へば此物語作れる頃シャと云拗音を直音にサとも呼けんと思はるゝなり此も憎てしや

髮しや尻と云べき語勢なり此は後に思寄つ前にさがは斯賀と同意なりと云しを鈴木氏は抄の頭書に逆髮なりと有說に從てさか髮を取とは本を手の大指の方して握を云なり逆尻は裳の裾を上方へ搔揚て尻を顯はすを云歟又は尻より臟腑を搔出る事を云か何れも生剝逆剝の詞に本著て剛く健く云言と聞ゆ其之の意と見ては穩ならずと云れき本居翁はさがは斯賀と同意と云說宜し大平も元より然思へりきと云遣されき何れ吉けん今思わかねど己は猶逆髮逆尻の說宜ともおぼえず又シャが髮など云例なくしや冠しや頬など云れば唯にが字なくしや髮しや尻と云べければ余後說も非なるべし○かなぐりおとさむは帚木巻に空蟬君に始て逢給ふ處に並々の人ならばこそ荒らかにも引かなぐらめ葵巻に六條御息所の夢に姫君と思しき人の甚淸らにてある所に往てとかく引まさぐり現にも不レ似武く嚴き頓心出來て打かなぐるなど見給ふ惡靈に出て葵上な責るなり定家卿鷹の歌に「端鷹のかなぐりおとす鳥の毛を云々とよみ給へるは搔薙の義なるべし搔は凡て手先してする事を云り此も其ながら源氏物語なるは唯其狀にて大らかに鷹の歌と此とは毛

を戀とむしるとは少し異なれども搔薙落す意同じ
○恥見せむ　は古事記（神代段）に言レ令レ見レ辱レ吾とあ
ろ同巻に恥を與るな恥かかすと云は古語たりと有類
本に恥をとあり今は无に從つ○と腹立をり　はと
云てを省けり
かくや姫いはくてはたかになのたまひそ屋の上にを
る人どものきくにいとまさなし
大話（遊仙窟）　大言（出雲風土記）　空穗物語くらひらきの卷に
生れ給ひてこはたかになき給ふと云々　無正　○
頭注云古本忠岑集に　山ざとの秋こはたかに鳴も
のはつままどはせる鹿にぞありける
解云○こわだか　は聲高也惠を和こ轉て下の言に
續けたるなり忠岑集（古本）に一山里の秋こわだかに啼
物は妻惑はせる鹿にぞ有ける藏開卷に生給ひてこ
わだかになき給ふ（抄に引り）○まさなし　は桐壺卷に（更衣）
（な姉處に）此彼の道に怪しき態をしつゝ送迎の人の衣の
裾堪かたう正なき事どもあり紫式部日記に（御産の五夜午養の）
（處に）殿を始末て攤うち給ふ紙の爭いとまさなし枕冊
子に（人の連れ來し子物取散す處に）手自引さがし出て見るこそ甚惜
けれ其をまさなどばかり云て取隱さでさなせそ損

なふなと計笑て云親も惡しと有是は本義は無レ正
にて猥にしどけなきを云めれど廣く唯不レ良を云
言と聞ゆ推古紀（十六年小野妹子臣唐王の書を失たる時に）天皇勅之曰雖レ有ニ
失レ書之罪一輙不レ可レ罪其大國客等聞レ之亦不レ良乃
赦レ之不　坐也とある不良此に似たり○此下に若は
詞脱たるか赫映姫翁の無正言いへるを制して直に
自己が昇レ天事を徐に云る少し附なく聞ゆめり
いますかりつる心ざしともを思ひもしらでまかりな
んずる事のくちをしう侍りけりながきちぎりのなか
りければほどなくまかりぬべきなめりとおもひ（い）か
なしく侍るなり
ありつる縁をすてゝ天上にかへらん事かなしきと
なり
解云○いますかりつる　は鈴木氏云在つると云を
崇詞にしたるなり猶上（妻とひの條）に委云つ○心ざしど
もを　は姫を恩み給ひし翁の志なり（先に姫のとせんかくせんと思留）
（し給言と見しは非りき）とも類本なし○思もしらで　は御恩を思
しらぬやうにて今天に昇らんずる事本意には非ず
となり○くちをし　は殘念に思ふなり○長き契の
なかりければ　は翁嫗に久しく添居べき宿世の因

緣の無ければとなり○思ふが悲しくは　かゞ字古板本に從て補つ

親たちのかへりみをいさゝかだ(だイ)につかふ(うイ)まつらでまからん(むイ)道もやすくもあるまじきに

父母を養ひとげずしてかへらんも道にそむける事ぞとなり　○頭注云かへりみ　恩顧歟

解云○親たちのかへりみを　は兩親の恩顧なり須磨卷に帝皇君の夢の中に睨は位に在し時過つ事なかりしかど自から犯し有ければ其罪を終る間暇なくて此世を顧ざりつれと源なき惡み給はざりしなり落窪物語卷二に兵部少輔が父の言に人笑ふとてえ出立も侍らず君たち左近少將等御顧ありて是交らひつけさせ給へなどあり○聊も仕まつらで　は彼恩顧を少も不レ報を有まじき事と思ふなり○退らむ道も安も有まじきに　は今赫映姬天に昇は此界を去て他界に遷なれは人の死に同じされば此世に父母を置て去が心安からぬ意なり續紀三十六光仁天皇皇女能登内親王薨後靈に告給ふ詔解五十八詔に一品贈物不予等乎二世王爾上賜比治賜不勞久(イトナシ)奈思麻之昔罷麻佐牟道波平幸久都々牟事无久宇志呂毛輕久安久通良世止告止詔云御子五百井女王五百枝王の事を思殘し給へるを二世王に上給ひたれば心安かれとなり住吉物語に姬君な父の殿に從給な悅て乳母萬晴ぬる心ちしてとみぢも心安くこそなと云續けて著聞集十五に余舜法橋孝道朝臣の許へ使をやりて今一度見參に入て黃泉路安く退らばやと云りなどあり古本に心安くとあれど今は心字なきに從つ

月(月イ)日ごろも出ゐてことしばかりのいとまをまうしつれどさらにゆるされぬによりてなん(むイ)かくおもひなげき侍る御心をのみまどはしてさりなん(むイ)事のかなしくたへがたく侍るなり

日ごろもいでゐて　春のころより月出ればいでゝなげきし事はと也　ことしばかりの　天上の父母に今一年のいとまをねがひしと也

解曰○月ごろも　は諸本日ころと有を改つ春より月を經し事なれば必月ごろの誤なり○ことしばかりの暇を申つれど　は月都に座ます父母に猶此下界に今此一年だに在まほしき由を申乞願つれど許容されずとなり

かのみやこの人はいとけうらに○おい(てイ)もせずなん(むイ)おもふ事もなく侍るなりさる所へまからん(むイずるイ)○もいみじく○(もイ)侍らず

西閂倶祖天上有二憶念樹一物隨レ意而生また多門天に生るゝ人は香樹有て身をくんじ衣樹有て衣を生ず心に任せて受用すと云々思ふ事なく　鬘持天天女不レ念餘天一是四種樂之一也　○頭注云いとけうらにおいせす　けうらはきよら也不老（オイセズ）

解云○けうらにて　は校本に從て字を補つ○老もせずなん　は古板本も字を誤てをと作りなんは云放て意を合たるなり故下の侍るなりと云るには拘はらず其合るは侍ると云言なるを近重れゝば略けるなり○思事もなく侍なり　は月都の人は凡て容儀淸らかにて此人間の如く醜き事なく身體の老衰る事もなく常に若く壯なる姿にて辛苦の思ある事なしとなり○然る所へまからむずるもいみしくも侍らず　は抄本にずる又下のも字を脱せり然やうによき世界へ遷らんを結搆なる事とも不レ思となり其は久しく此に馴て親子と睦み其上恩をも不レ報して退ればなり上（十二のひら）に彼國の父母の事もおぼえず此には斯久しく遊きこえて習ひ奉れりいみじからん心ちもせず悲しくのみなんあると有を此に再委しう云るなり

老おとろへ給へるさまを見奉らざらむこそこひしからめといひて○翁（なくイ）むねいたき事なしたま○ふ（ひイイナシ）そうるはしきすがたしたる使にもさはらじとねたみをり天人の使來るともあひてにならじといきどほり居るなり　○頭注云老おとろへたまへるさまを　不老にして何思ふ事もなき天上へかへらん事もうれしからず翁夫婦が老の末をも見とゝけざらんこそ戀しからめと也　こひしからめといひてと云下に泣くなとの字脫したる歟さなくては翁がことばにつゞきいかゞ前にも心ならずまかりなんとするといひていみじうなくといへり　うるはしきすがたしたる使　前に彼國の人はいとけうらにといへるをうけて書り

解云○おいおとろへ給へるさまを　は今現に姫が眼前に見る狀を云り○見奉らざらむこそ戀しからめ　は老衰たる兩親を此界に捨置て昇なれば親たちを見扱はねば時々思出て戀しかるべしと兼て後を推量て云置なり此件能せずば此後追々衰へ行給はむを其迄もえみずしてとやうに聞ゆべし此見字は見扱の意にて親の恩の報の孝行をもせて捨おく

やうにて天に升か本意ならずと斷れる也○と云てなく　は上にされど己が心ならず能なんずると云て諸共にいみじう泣と有同意也されば此はて字に含めて省たるかとも思へと無ては聞え難ければ泣と云言補つ鈴木氏云此補さる事なり略てはきこえざるべしいみじう泣なと有べき處なりと云れき今はいみじうは上にあればたゞなくと補つ是にて足ぬべし○胸痛き事　は心を苦しむれば胸の痛むを云り古事記（須佐之男命段）に心前をむなさきと訓り○なしたまひそ　は勿宣給ひそと云へき處なり上（龍玉の段）にをぢなきことすると有に同し○うるはしき姿したる使にも　は姬の彼都の人は淸らにてと云るを受て翁其に答るなり○さはらし　は障とせじの意なり（解一の二十九丁可ㇾ考）防戰べき人多くて不負へき勢ひなれば天の使も此方の障とはせしと也○ねたみ　は靈異記に惻（ネタミ）慷慨（ネタミテ）字書に惻痛也愴也慷慨激昂之意字鏡に悁（憂良牟 又止呂志又爾太志）字書に悁忿也と有意なるを土佐日記（二月七日）枕冊子にねたくねたきと云は殘念也と云意と聞えたり

かゝるほどによひうち過て子のこく（ときイ）許に家のあたりひるのあかさにもすぎてひかりたりもち月のあかき（さイ）を十あはせたるば（はイ）かりにて在人の毛のあなさへ見ゆるほどなり

望月　順が和名に云月大十六日小十五日日在ㇾ東月在ㇾ西遙相望也桂明抄に望月は月によりて十四日五日六日の間にみちたる月の事を詠ずと云々

毛孔（ケノアナ）　○頭注云もち月のあかきを十あはせたるばかりにて　伊勢物語に其山をこゝにたとへばひえの山をはたちばかりかさねあげたらむほどしてといへる筆勢に似たり　望月　もちとはみつ也共に通音月滿也　○ある人の云々其あたりに　ありあふ人々の也　榮華物語楚王夢卷にこよひの月ぞまことにかくやひめの空にのぼりけんその夜の月かくやと見えたる云々

解云○かゝるほどに　は姬と翁と物云交す間になり○よひ　は夜の淺き程を云り萬葉に夕暮晩初夜なとの字を書り○子の時はかり　を抄本に子のこくと有は惡し○家のあたり　は垣より外を云り○光たり　を校本おぼえたりと有○望月の明さを云云　は天より降たる人の光なり類本を字なし此事

ゑ楚王夢卷に萬壽二年八月十五日夜今宵の月は甚めでたきもの
と云置たれど誠に明きはいと有がたうのみ有ける
に今夜の月ぞ誠に赫映姫の空に昇けんその夜の月
斯やと見えたるとあり○ある人の　は其處に在合
たる人なり裘を燒處三卷にも在人の云く大和物語刈芦段
のにすゞろなる者に物多く賜はんなど在人々云け
れば宇治拾遺四十に筭術にて人を令レ笑る處に其八分ばかりの竿を
置加と見ればある人皆がら咲坪に入にけりとあり
○毛孔さへ見ゆる程なり　は天人の光にて人の毛
孔までも細に見ゆる程となりほどは譬の凡を云言
なり伊勢物語に富士山を喩す言に日枝山を二十計
重上たらむ程してとあり
大空より人雲にのりておりきて土（地イ）より五尺ばかりあ
かり（がイ）たるほと（どイ）にたちつらねたり○（是を見てイ）内外なる人の心ど
も物におそはるゝやうにてあひたゝかはん（むイ）心もなか
りけりからうじて思ひおこして弓矢（箭イ）をとりたてん（むイ）と
すれども手に力もなくなりてなえか（へイ）ゝ（がイ　まイ）○りたる中に
心さかしきものねんじていん（むイ）とすれどもほかざまへ
いきけれはあれもたゝかはてこゝちたゞしれにしれ

てまもりあへり
壓（オソハル・ネンシテ）念　こゝろをとりなほして也　萎（ナエヲ）　たゞしれ
にしれて　心のうとくおろかなるやうになりゆく
なり土佐日記にわらはまでゑひしれてと云々白癡（シレモノ）
本朝文粹○頭注云あひたゝかはん心もなかりけりトハ
前に相たゝかはんとすとも彼國の人來なはたけき
心つかふ人もあらしといへる首尾なり　からうじ
ておもひおこし漸發念歟　あれもたゝかはて（言）我
もたゝかはて也心さかしく射んとせしものなり
しれにしれて　萬九世間之愚人とも書り
解云○人雲に乗て　は天より迎の人なり○おりき
て　は古事記邇々藝命段に天降をあもりと訓りあまお
りの約言なり○つちより五尺計あがりたる程に立
連ねたり　は門より外にての事なるべし下に家に
造麻呂まうで來と云る門外に在て云入たりと聞ゆ
五尺はいつさかと訓べく思しかど字音にごさくと
呼ぞ可からむ天の人なれば直地（ヒタツチ）には下り不レ著な
り○是を見て　は天の迎の人を見てなり抄本此一
句なし○内外なる人の心ども　は屋の内外なり内
なるは翁嫗婢女等外なるは六衛の官人家の人等な

り人どもの心と云べきを心どもと云は當時の詞格なるべし○物におそはるゝやうにて　は類本やうにしてとあり字鏡に魘於琰反眼中見良於曾波留字書に魘於琰切說文夢驚也類篇眠不祥也とあり按に字鏡の眼良は眠中見ㇾ鬼の誤なるべし帚木卷に源君空蟬君に逢給ふ時ともかくも思ひわかれず物におそはるゝ心ちしてやとおびゆれどゝ有夢中に胸を押さへたる心ちして聲も不ㇾ發手足もうごかれず心惑物なり此も其如くなり○相戰はむ心もなかりけり　は强て云居たるが徒に戰する心も失はてたるなり○からうじて思發して　は惑たる心を漸々として勵み發して弓矢を取立むとすれば手力失て心を併たるかひもなきなり○なへ　は字鏡に[illegible]蘕三形同力圓反平係也茶也倭利爾反手奈戶和名抄に說文云蘕訓阿之奈閉此云那閉久行不ㇾ正也とあり○かゞまり　は屈なり字書に屈區勿切正字通凡曲而不ㇾ伸者皆曰ㇾ屈とあり此は手の屈めるなり字鏡に僂傴々也曲也低頭也加々萬留又世久豆夫木抄か源仲正かたくなや後方の園に若菜摘かゝまりありく翁姿の按に世久豆は背の曲也加々萬留は背にも手にも云べし僂子も何にも用べし穀梁傳に曹公子手僂また荀子に僂ㇾ指と有とぞ○心さかしき者　は類本に心ざしさかしきと有は衍か多の

人の中には剛弱種々の人在てたゝ魘たる樣にて心も虛たる又心は發たれども手攣僂て弓矢も取立えぬ又殊に剛きが矢は放たれどもえ射あてぬも有なりさかしき賢字をさかしともかしこしとも訓て愚ならず鈍からぬなり古今集序に云々心々を見給ひてさかしおろかなりと知し食けむと有此は心を張力を勉たる者なり明石卷に雷鳴ひらめくさま更に云む方なくて落懸ぬとおぼゆるに在限さかしき人なし沙石集卷七に大虵女子を追來に父下郞なれどもさかくしき者にて虵に向て此女は我女なり母は繼母なりとあり○ねんじて　は念字の音なり字書に念奴占切爾雅釋詁思也疏常思也釋名念黏也意相親愛心黏著不ㇾ能ㇾ忘也と有が轉て堪忍の意に用たり强て心を勵み黏て不ㇾ忘とするより忍る意に轉たるなり伊勢物語二十段に此女いと久しく在て念じ佗てにや有けん云おこせたる今はとて云々夫いの呼反すやと待佗たるなり帚木卷に指喰女の事を行前長くみえむと思はゝつらき事有とも念じてなのめに思成てとあり○いむとすれども外れざまへいきければ　は天の迎衆を射むとて矢を放たれども傍にそれて射不ㇾ得なり既に赫映姬弓

矢して射られじと云おけり射るとは當れるを云言也萬葉卷三に「丈夫が幸矢(サツヤ)手挾み立向ひ射的(マトカタ)潟は見るにさやけし○あれもたゝかはで　あれは海上にて浪風の騷ぐを荒と云合戰に荒に荒てと云は軍卒の建び出て立向ふ敵のなきを云荒振神は疎み騷て不ㇾ從を云り此は其反にて建び荒ひて戰ふ人なしとなり鈴木氏云上にえ字脫たるか荒戰はぬ事をあれも不ㇾ戰と云はいも不ㇾ寢引も不ㇾ切と云類の言なり○こゝちたゞ癡にしれて　は萬葉卷九に詠二浦島子一歌にしれたるひとゝ作るを愚人と書り言を重るは其事を強く云るなり心神うつけて愚鈍に成竟たるなり上にあの國の人をえたゝかはぬなりと既に云り○まもりあへり　は防く人共どち互に目を見合てあきれて在なり師記傳十九云凡てまもると云は本は候ひ考るより出て目を不ㇾ放て見るも害あらせじと物を守護も皆此より轉れる意なりと云れたり此は唯心もなくて見合て居なり

たてる人どもはさうぞくのきよらなる事物にも似ずとぶくるまひとつぐしたりらがいさしたり

裝束　飛車　順和名曰兼名苑注云奇肱國人能作二飛車一從ㇾ風飛行故曰二飛車一按に本文山海經に見えたり羅蓋　○頭注云たてる人どもは　前に大空より人おりきて土より五尺許あかりてたちつらねたりといへり

解云○たてる人ども　は家の外に五尺計上に立てある人どもにて迎の天人なり○さうぞく　は裝束の字音なり字書に裝狙良切束也裹也又飾也東書王切縛也とあり古事記傳十一に束裝をよそひと訓り○きよら　は上には皆けうらと有を此のみきよらとあり源氏落凹抔にも二樣にあり○とぶくるま　は和名抄に兼名苑註云奇肱國人能作二飛車一從ㇾ風飛行故曰二飛車一と有て訓を不ㇾ記ねど登夫久留萬と訓べし元來和名は有まじき事なり○具したり　は別に一輛持來たる由なり赫映姬を載べき料なり○らかい　は羅蓋なり和名抄伽監具に涅槃經云幢幡寶蓋和名岐沼加散また綿綺類唐韻云羅此間云良一云蟬翼綺羅亦網羅也とあり羅もて張たる蓋なり赫映姬にさしかくる料なり

其中に王とおぼしき人○宮つこまろ家(イナシ)にまうで(でイ)こといふにたけくおもひつるみやつこまろも物にゑひたるこゝちしてうつぶしにふせり

おきなが家に下りてものいふ也　○頭注云たけくおもひたるみやつこまろ　前に長き爪して眼をつかみさか髮を取などいへるを思ふべし

解云○其中に　は立並たる人々の中になり○王とおぼしき人　は容儀裝束の甚淸らなるに依て此方より推量に王なるべしと見しなり月都の王には非ず姬を迎ふる正使也○家に造麻呂まうで來と云は彼正使より又使を以て造麻呂此に參れと云入たるなり家とは門より內を云へは此詞にて垣の外門前に立並て家內には不レ入を知べし抄本は家にと云事造麻呂の下に有は惡し○健く思つる　は前に其之髮を云々其之尻を云々など罵り建び居しかど今は魂去て其態を得働かぬなり○物に醉たるこゝちして　は類本おそひたると有醉人の正體もなく心も不レ慥瘡々としたる狀なり○うつぶしにふせり　は頭を低て伏たる也玉篇に俛無辨ノ切低レ頭也俯弗武切下レ首也頫睡卷切低レ頭也說文音俯　此等の字うつぶすと訓り彼王と思しき人の前に出て低頭て伏居なり言を省て書るなり

いはく汝をさなき人いさゝかなるくどくをおきなつくりけるによりて汝がたすけにとてかた時のほどゝてくだしゝをそこらのとしごろそこらのこがねたまひて身をかへたるがごとくなりにけり

なんぢをさなき人　不賢　汝おろかなる人といふなり　功德　身をかへたる　翁がにはかに富貴になりたるをいふ也　○頭注云汝をさなき人いさゝかなるヲ　汝不賢翁いさゝかなる功德をとつゞけ見るべし　そこらの年そこらのこがね　若干也身をかへたるか事　枕草子に身をかへたらん人などはかくやあらんと見ゆるものたゞの女房の御めのとになりたる　御まへにそひふし御帳のうちをゐ所にして女房どもをよひつかひ云々

解云○いはく　は正使の云なり○汝をさなき人　は頭書に汝不賢翁いさゝかなる功德をと續け見べしと云り鈴木氏云翁を幼と云は心の不賢と見ても齡を云と見ても宜し天上不死の仙人の目には七十翁も何ばかりのおとなに非すと云れき大秀前に幼人とは若赫映姬を云るが文詞前後錯たるならむと思しを鈴木氏云赫映姬は此にてこそ幼かりけれ天上にては幼も非ず罪に依て謫れたる人なればなり

されど此段に赫映姫を差す詞も无ては叶はぬ處なれば旁々疑がはしと云れき○降しゝを　は赫映姫を下しゝなれど然不レ云は如何なり王と思しき人の翁に對して始に云言にゆくりもなく其指物を不レ云で片時とて下しゝをと云る言不足が如しされど次に近く赫映姫云々と其降しゝ由を云れば初には不レ云しなるべし又翁字の在所も甚迫りたる處なり此一條言亂脱などしたりと見ゆ○そこらの年ごろ　は唯片時の間とて下しゝが多年に成ぬとなり言を省て書り○そこらの金賜ひて　は上（生立の段）に節毎に金ある竹を見附る事重なりぬとある其なり○身を更たるが如く　は貧しく賤しかりし翁が比類なき姫を持數多の金を得て豐に富たれば生を隔身を更たるが如しとなり枕册子に身をかへたらむ人などはかくやあらむと見ゆる物唯の女房の御乳母に成たる御前に添臥御帳の内を居所にして女房どもを喚つかひ云々とあり

かくやひめはつみをつくり給へりければ（ばイ）かくいやしきおのれがもとにしばしおはしつる（をイ）なりつみのかぎりはてぬればかくむかふる○翁はなきなげくあたはぬ事なりはやかへし奉れといふ

天上の人いさゝかのつみあれば人間に謫せらるゝ事其例あり李白を謫仙人といふも是におなし

解云○罪をつくり給へりければ　は俊蔭卷に（琴彈かせ聞て文殊の到る處に）七人の人皆禮拜して申さく我は昔都卒天の内院の衆生なり聊なる犯ありて忉利天の天女を母として此世界に生れて七人の輩を同所に住ます云々樂人ら（七人なり）阿彌陀三昧を琴に合て七日七夜念じ奉る時に佛現て宣給はく汝等は昔勤ふかく犯は淺かりしに依て都卒天の人と生れにき今淺ましかりししんねの報に國土の衆生に生たり其業漸盡にたりと有に似たる事也○おのれが許に　は汝が許になるを賤しめて云言也古事記（根堅洲國段須佐之男命の言に）意禮爲大國主神云々而居是奴也（傳十）また（白檮原宮段兄宇加斯押を張たる條に）伊賀所作仕奉於大殿内者意禮先入明白其將爲仕奉之狀而と有て此言意禮と云は古かるべけれど宇治拾遺には兩ながら用たり神樂歌に（篠浪）「芦原田のいなつき蟹のやおのれ（汝イ）さへ婦を不レ得とてや云々古今（俳諧歌）に「足引の山田のそほづおのれ（汝イ）さへ我を欲と云うればしきこと宇治拾遺（卷十）に（猿丸に生贄を供を止る處に）

此犬どもを取入て云やうおのれら此日比勞はり飼つるかひ有て此度我命にかはれおのれらよと云て云々 猿を引伏たる處に 其猿を俎板の上に引伏せて首に刀をあてゝ云やう わおの れが人の 命を斷宍(シヽ)むらを食などする者は斯ぞある云々しや首切て犬に飼てんと云ば云々又 同卷に應天門の火の事顯る段に出納と舍人さ口論する處に いかで情なく幼者をかくは爲るぞと云ば出納云やうおれは何事云ぞ云々我君大納言 伴善男 のおはしませば云々舍人大に腹立ておれは何事云ぞわか主の大納言を豪家に思ふかおのが主は我口に依て人にてもおはするは不レ知か我口開ては己が主は人にては有なんや云云と有 是は伊賀の傳にも引べし 師記傳十九 云伊賀は阿賀と通へりさて於能禮とは自己を云稱なるに又人を賤しめて云にも用ひ意禮とは人を賤しめて云稱なるを今世には自己の事を然云此等の例を以見れば阿賀と云も自己の事なるを人を賤しめて云にも用ひしにや是又今世にも然りと云れき○むかふるを は寫本に從てを字を補つ○あたはぬ は古事記 八千矛神娶二八上姫一段 に美刀阿多波志都と見え雄略記に與二一夜一而娠とあるを師 傳十 云阿多波須は一に寄會て御寢處を與にし給ふ意ならむか人に物を與と云は令二河多波一にて其物を其人に寄著る意より出ためれば本は一ッにて落めり又漢文に不レ能と有をあたはずと訓は字書に能は勝任也とあれば勝任(タフル)も本あたふるのあを省けるたらむか勝任は其事によく至り着を云不レ勝は其事に得至り不レ着意なるべし然れば不レ能も不レ勝も本は右の阿多布と一ッなるかと云れたり此は道理に不レ合由を不能事と云るか又唯常に不レ能二云々一と云意にて姫を止めむとすとも止(シ)不レ勝(アヘ)と云意にもあらむか○はやかへし奉れ は類本にはいだし奉れとあり

翁こたへてまうすかく(ぐイ)や姫をやしなひ奉る事二十餘年になりぬかた時とのたまふにあやしくなり侍りぬ又こと所にかくや姫とまうす人ぞおはしますらん(むイ)といふこゝにおはするかくやひめはおもき病をし給へばえ出おはしますまじとまうせば其返事はなくて屋の上にとぶ車をよせていざかく(ぐイ)や姫きたなき所にいかて(イナシ)かひさしくおはせん(むイ)といひ(ふイ)たてこめたる所の戸すなはちたゞあきにあきぬかふ(うイ)しども、人はなくし

てあきぬ
格子　たゞあきに　人もなくてあくなり空穗物語
くらびらきの卷にあけたまへばたゞあきにあきぬ
と云々　○頭注云かふし　和名鈔云篱子竹障名也
字亦作レ笿
解云○二十餘年　ははたとせあまりと訓べし○片
時と宣給ふに　は翁醉たるが如くなれば心惛なら
で聞あへぬさま也王と思しき人の詞に片時の程と
云るは姬を下す時の心にて下にそこらの年ごろと
云るを得不レ聞し狀にて事の違へる論をする也○
あやしく成侍りぬ　は姬を養ふは二十餘年に成ぬ
るに迎の人は片時と云るを怪しとなり○ことゝこ
ろに云々　は此方の年數と天の人の云ると甚く違
れば我方なる赫映姬には非じ若他所に同名の人在
て紛て此に迎に來給ふならむとおぼめきて云也○
といふ　は次の翁の言なれば此に結てはいかゞと
云しを鈴木氏云態と二ッに切たる文也下にも赫映
姬しばしまてと云て衣著つる人は心異に成と云物
一言云々と云てと有も同じ漢文にも如此風ありと
云れき○此におはする云々　は今一人かぐや姬有
べしと云に就て我方なるは病をしてと云立るなり
○え出おはしますまじ　は病中なり得出給はじと
虛言して姬を出さじとするなり○其返事はなく
て　は迎の人翁が論ふ詞は不ニ聞入一それに口合か
かづらはず姬を率て往なり○屋の上に云々　は天
より下て天に上る車なれば人間のとは甚異にて
門よりは不レ入人の出入所には介レ寄ざるなり○い
ざ　は誘ひ催す言なり萬葉に率去來など書り宇治
拾遺巻一に利仁五位を率なふ言にいざゝせ給へ湯浴に太夫殿とあ
り○久しくおはせむ　は暫時も早く月都のめでた
き故鄕へ歸給へと勸め率ふなり○閇こめたる所の
戶　は塗籠の戶なり○卽　は車を寄る其時直にの
意なり即は解ノ十六丁に委云つ○たゞあきにあきぬ　は前に姬
の言に斯さし籠て有とも彼國の人來ば皆開なんと
すと云り是も人はなくて自然あくなり○かうし
は和名抄に通俗文云篱子俗用ニ格子二字一竹障名也とありカ
クシをかうしと云は音便なり○人はなくして　は
是も自然開るなり
女いだきてゐたるかくや姬とに出ぬえとゞむまじけ
れば たゝさしあふぎてなきをり竹取心まどひてなき

ふせる所によりてかくや姫いふこゝにも心にもあらで○まかるにのほらむをだに見おくり給へといへども何しにかなしきに見おくり奉らん我を○いかにもせよとてすてゝはのぼり給ふぞぐしてゐておはせねとなきてふせれば御心まどひぬ

とにいてぬ　戸の外に出る也　ぐしてゐて住吉物語に我もともにぐし給へと云々　○頭注云たゝさしあふぎてなきをり　あふぎては仰てなり俗にあをぬくといふ天向也アハあめぬくはむくなりあふぎてなきをりは仰レ天歎息するなり

解云○抱て居たる赫映姫　は立ともたゝせじ逃ともにがさじと嫗が抱て居たる姫なれども手に力なく攣てえ不レ留なり○外に出ぬ　は塗籠の外に出たるなり○えとゞむまじければ　は抱締て出さじとしたるが手の力盡たればとても止る事叶はじと思なりて得不レ塞して默止あるなり　○さしあふぎて泣をり　は赫映姫車にのらむとするを嫗は止むべき心も方便も盡竟たれば仰て泣居なり○此にも　は赫映姫自己を云なり○心にもあらで　は姫の心にも今天に歸まくは欲はねば互に餘波の惜き由なり○かく　は一寫本に從て加つ前に此にかくと云言脱たるべしと云しが後に得たる寫本に有しなり○何しに云々　は姫の還昇を見ばいとゞ悲しさは増るべけれど何のかひ有べくも非ぬ事なれば見送らじとなり○我をば　は類本に從ては字補つ○いかにせよとては　抄本いかにもと有は惡し○御心惑ひぬ　は古板本こゝちと有此は姫の詞にて翁は御心まどはし給ひたり斯ては我申おく事も憶には得聞給はじとて文を書置なり

文を書おきてまからんこひしからんをり／＼とり出して見給へとてうちなきて書ことには此國に生れぬるとならばなげかせ奉らぬほどまで○侍らで過わかれぬる事かへす／＼ほいなくこそおほえ侍れぬぎおく衣をかたみと見給へ月の出たらん夜は見おこせたまへ見すて奉りてまかるそらよりもおちぬべきこゝちすと書おく

人間にうまるゝ縁あるならば翁を見送るまでもならでかくわかるゝ事のほいなきと也　形記念遊仙窟見萬葉集　○頭注云ことには　ことは詞歟　詞曰と

云んが如し　まかるそらよりも　萬葉にみちのそ
ら路ともよめり源氏夕顔かゝるみちの空にはと云
々天人なれはいよ〳〵よせ有ておちぬべきとはい
へり　萬十六傳云龍レ薄之後還ニ賜寄物一俗云加多美
解云○ことは　は言者也抄本こことには古板本類本
ことばゝと有を鈴木氏一本にことはと有と云れた
るに從つ○文此國に生れぬるとならば　は己は此
國に産たる者ならばとなりる字は衍なるべし○な
げかせ奉らぬ程まで　は差向たる人の死後の事を
云に若萬歳の後など云如く顯露には忌々しくて云
雖ければ斯云るにて其意は翁嫗身まかり給はん後
までに在て己かく先立別れて歎かせ奉るは有まじき
事なれどもと云意なるべし○はべるへきをはべら
で　は上の六字今補つ諸本はべらで過云々と有を
寫本其傍にはべるべきをと書添たるは異本に有け
るを加へしか又改直さんとか知がたけれど斯不レ
云では不レ叶語勢なれば二ツながら取て補つか
く六字の如く云ては下にはべらでとは无ても聞ゆれど
さすがに捨がたくて補添つるになん此文詞脱字誤
字有と見ゆ後人善本を得て改てよかし猶本居翁は

さもえ侍らでとあらまほしと云れしかど无ても聞
えはすればさてもさつ○過別ぬる事　すぎとは此
世界を過去て天上に歸を云て人の死に同じしぬと
云もすぎいぬと云を約たる言なれば全同意なるを
思べしことは例の歎息の意を含たる也○かへすか
へす　は今の俗に云も同じ其事を打返し〳〵思ふ
由也○ほい　は本意の字音なり云々せんと思入た
る事のしおほせたるを本意を遂と云其意不レ遂を
ほいなしと云り此も姫の心には歎かせ奉らぬ程ま
で侍らまほしと思ふ其本意不レ遂して心にもあら
で月都に還るを本意なくおぼゆと云るなり○かた
み　は形見なり亡人と成て後其人の持つる物著つ
る衣などを見れは其人の面影の見ゆる由の名なり
萬葉十六に商變領爲跡云御法有者許曾吾下衣變賜米
右傳云時有ニ所レ幸娘子一也寵薄之後還ニ賜寄物一俗云
ニ可多美一於レ是娘子怨恨聊作ニ斯歌一獻上また遊仙窟に
交成ト娘に別る時遂喚ニ奴曲琴一取ニ相思枕一留與ニ十娘一以爲ニ
記念一是は義を以て訓すとあり歌には甚多し今不レ擧○月の
出たらむ夜は云々　は姫今月宮殿に還月中を住所
とすれば月を見遣せ給へとなり○空よりも落ぬべ

く　は天に昇る道の空にて姫も別の悲しさに心惑
て堕落ぬべしとなり
天人の中にもたせたる筥ありあまの羽衣いれり
酉陽雜俎天人衣無二經緯一　又比紅兒詩に天人の衣
は重さ六銖と云々搜神記曰豫章新喩縣男子見三田
中有二六七女一皆衣二毛衣一不レ知二是鳥人一匍匐往得下
一女所二其解一毛衣上取藏レ之即往就二諸鳥一諸鳥各飛
去一鳥獨不レ得レ去男子取以爲レ婦生二三女一其母後
使二女問一父知三衣在二積稻下一得レ之衣而飛去後復以
迎二三女一女亦飛去是等も羽衣の類なるべし　ひさ
かたの天の羽衣むべしこそ君がみけしと奉りけれ
解云〇天人　は頭書にあまびとゝ訓べし狹衣上一に
中將の笛の音に　あまびとだに聞すぐし給はで降おはして云
々とあり〇令持たる筥　は從者の天人に令レ持た
る筥なり〇天の羽衣　は抄に云く酉陽雜俎に天人
衣無二經緯一また比紅兒詩に天人の衣は重さ六銖ま
た搜神記に云々此文は卷首の物の變して人に化る條に出しつ伊勢物語十五段に「
久方の天の羽衣うべしこそ君がみけしと奉けれと
あり
またあるは不死の藥入れり

不死の藥はすなはち仙丹の事也月中の兎藥をつく
といふも是なり異域志曰長生國在二穿胸國之東一其
地有二不死樹一食レ之則壽有二赤泉一飲レ之不レ老云々
張衡靈憲志云羿得二不死之藥於西王母一嫦娥竊レ之
以奔レ月將レ往枚二筮之於有黄一有黄占レ之曰吉翩々
歸妹獨將二西行一逢二天之晦芒一毋レ驚毋レ恐後レ且大
昌嫦娥遂託二身於月一是爲二蟾蜍一
解云〇不死の藥　は三代實錄卷八に清和天皇貞觀六
年正月十四日延曆寺座主圓仁卒云々圓仁蟄二居叡
山北極草庵一夢從レ天送レ藥形如二甜瓜一半片噉レ之其
味如レ蜜傍有レ人語云此是三十三天不死妙藥覺後口
裏餘味飮レ之三過與二夢中噉一其味不レ異經二旬日一知二
身健眼明一圓仁在レ此心無二染著一得レ絕二攀緣一云々
抄に云く不死藥は即仙丹の事なり月中の兎藥を搗
と云も是なり異域志に長生國在二穿胸國之東一其地
有二不死樹一食レ之則壽有二赤泉一飮レ之不レ老云々ま
た張衡靈憲志に羿得二不死之藥於西王母一嫦娥竊レ
之以奔レ月將レ往枚二筮之於有黄一々々占レ之曰吉翩
翩歸妹獨將二西行一逢二天之晦芒一毋レ驚毋レ恐後レ且
大昌嫦娥遂託二身於月一是爲二蟾蜍一とあり吹上下卷

に(帝仲忠に琴勧給ふ處に)仲忠が爲には天子の位かひなしや蓬萊の不老不死の薬の使としてだにこそは宣旨遁れがたさに依て渡れりと有

ひとりの天人いふつぼなる御薬奉れきたなき所の物きこしめしたれば御こゝちあしからむものぞとてもてよりたればいさゝかなめ給ひて少○(しイ)かたみとてぬぎおくころも(衣(キヌ)イ)につゝまん(むイ)とすればある天人つゝませず御ぞをとり出して(てイ)きせんとすその時にかく(ぐイ)やひめしば(ばイ)しまてといひてきぬきせつる(イナシ)人は心ことになるなりといふもの一こといひおくべき事ありけり(イナシ)といひて文かく

羽衣をきれば人間天上世を隔つる故心異に成と也

○頭注云御薬奉れは　下知にあらす御薬奉り也きたなき所　穢土の義歟天上より下界をさしていふ意成へし　御そ　日本紀に衣一字をミソと讀り解云○壺なる御薬たてまつれ　はこれは唯獻上の意に非ず今世に召上られよといふにて嘗たまへの意なり○穢き所の物云々　はこの下界は穢き由にてその所の物食給ひたれば心ち悪かるべければ清き天上の薬を嘗れば其心も爽やぎ身も清まはる由にて勧むるなり○もてよりたれば　は薬を持て姫の方に近著寄也○いさゝか　は寫本にわづかと有○少し　は句切べし薬を少し包まんと係れり○形見とて脱おく衣に(薬を形見こてには非ず)　は類本にはおき給ふとあり給ふは无も悪からじ上に脱置衣を紀念と見給へとある其衣なり○つゝませず　とあれど下に翁嫗薬も不レ喰とあれば少しは遺せるなるべす○御衣　はおんぞと訓べし寫本にみそとあれば然訓もよけん○著せんとす　は從へる天人彼筥に入たる羽衣を取出て姫に著せんとするなり○暫しまてといひて　は抄本に従つ諸本といふとあり○きぬ著つる人は心異に成なりといふ　は諸本きせつるとあり此羽衣を著れば此世界の心は變て天上界の心に化事にて下に天の羽衣打きせ奉つれば翁を愛し悲しと思しつる事も失せぬ云々と有事なればせ字必衍なり故除つさて此のといふと云へるも上のといひても无てあらまほし上に他所に赫映姫と申人ぞおはしますらむといふと有三字も除べく云しを鈴木氏二に切たる物なりと云れつればさて

おきつれど此は三に切れるにて此一つだに无からましかばと思なり其故は此衣きれば物思の消失る事をけやけく別て事々しげに不云でも有べく意も下に續く處なれば旁々といふを除去ば輕く聞えて宜しきなり故今は不讀で有なんとす〇物一言云
云　は帝に奉る文の事なり彼衣をきればさる心も失ぬべければ衣不ㇾ著以前に文かゝむとて暫可待と云るなり

天人おそしと心もとながり給ひかくや姫物しらぬ事なのたまひそとていみしくしづかにおほやけに御文奉り給ふあはてぬさまなり

帝に文奉るなり　官家　〇頭注云天人あまひとゝよむべし狹衣にあまびとだに聞すべし給はでおりおはして云々〇心もとなかり給ひは給ふなり句
あはてぬさま也　急　日本紀
解云〇天人遲しと　は云てと云言を略たり疾く天に還給へ遲しと云て急ぎ催すなり此天人とは正使を差か下に心本ながり給ふと敬て云れば必正使の言と聞ゆるを姫の答に物しらぬ云々と云るはいかが正使ならばさばかり輕しくは云腐すまじき事也又は衣奉る從者藥を包ませぬ天人などの卑しく下ざまなる者か然ならむには物語の地言にはあれど給ふとは云まじき處なり猶可ㇾ考〇心もとながり給ふ　は待遠なる山なり〇物不ㇾ知こと勿宣たまひそ　はかくや姫久しく此に在て今離別るゝ時なれば方々に云置事も多かるを情なく急催すれば世なれず物しらぬ人ぞと賤しむるなり〇靜に　は彼天人の詞を不用で心靜に文かくなり〇あわてぬさま　は字鏡に惶急（鬱失ㇾ意也於比由又阿和豆）また周章をあはつと訓り六書音義に周章怔營貌又懼貌亦作ㇾ慞と有とぞ人の催急がしむる時は心あわたゞしく成ものなるを赫映姫は心靜に文を書が周章たりとは見えぬなり

文詞かくあまたの人を給ひてとゞめさせ給へどゆるさぬむかへまうできてとりいでまかりぬればくちをしくかなしき事宮づかへつかふまつらずなりぬるもかくわづらはしき身にて侍れば

かく程もなくてむかへにくる身なればとなり
解云〇かくあまたの云々　は文詞なり六衞の官人二千人を賜ひし事なり〇ゆるさぬむかへ　は上に

月ごろも出居て今年計の暇を申つれど更に不ㇾ聽に依てなむと云るに同じく今夜限に升天すべき使の來てなり○とりゐて　は取率てなり諸本いでと有を鈴木氏一本ゐてと有よろしと云れしに從て改つ○まうで來て云々まかりぬれば　は消息文例にまうではまかると對て卑き所より尊き所へ行を云言なるを己が許に人の來る事をまうでと云も對て云先の人を敬てなりとて此文を引れたり○くちをしく　は殘念なる哉の意なり○悲しき事　は例の事哉の意なり○わづらはしき身　は自由ならず己が心の儘ならぬ身と云意にて斯やうに間无く天に還べくいつまでも此に居難き由なり

こゝろえずおぼしめされつらめども心づよくうけたまはらずなりにし事なめけなるものにおぼしめしとどめられぬるなん心にとまり侍りぬ」とて　姫　今はとてあまのはごろもきるをりぞきみをあはれとおもひ出けるとてつぼのくすりそへて頭中將をよびよせてたてまつらす

なめけ　無禮〔萬水一露〕ぶれいなるものと御門の思召ん事心にかゝると也　つぼの藥とは　不死のくすり也　○頭注云なめけなるものに　清少納言になめけなるもの云々日本紀に輕をよめり萬葉無禮と書り

解云○心不ㇾ得思食つらめ共云々　は帝の大御心深く召しかども難面申て終に召に不ㇾ應しを何なる心にかむげに物の哀も不ㇾ知者歟と不審思食けんとなり心えずとは他者の意の趣を自己不㆓知得㆒を云り○なめげ　は貴賤を押並にする意にて埃嚢抄に平字をなめしと訓る意なるべし繼體紀〔十六丁右〕に輕字を訓萬葉〔卷六〕に无禮ともふな〔二十〕无禮恐と作るは義に從れる字なり帝をしも无ㇾ禮輕氣に執成者ぞと思食つらむ其故は如此煩はしき身にて侍ればと斷れる也○思食とゞめられ　は大御心に然思決て大座ましつらむと思ふが余が○心にとまり侍ぬるとなりとまりは淳滯る意にて心係りになると云由也○〔歌〕今はとて　は今は限と云て此界を離るゝ時を差せり伊勢物語〔十五段〕に〔紀有常が妻に別るゝ時〕今はとていくを云々〔其文の詞〕かう〳〵今はとて退るを云々と有○天の羽衣きる時ぞ　は羽衣を着れば此世の心は轉變ゆゑきむとする限に臨て君を思出と也をりはよりと

も云り萬葉巻二ノ三十丁長歌に時々と書てをり〳〵と訓る
を師にはより〳〵と訓れき又三節祭をみをりのまつ
りと訓り谷川氏ををりはよりの轉なるべしと云り
然ればよりの方古くて師も然訓れしかつ君を哀と
思出ぬる　は懇に戀慕たまひし物を心剛く宮仕せ
ざりしをいとほしう心苦しう思出奉るとなり鈴木
氏云一本に思知ぬると有も宜しと云れき又入ぬる
出けるなどある本も有○壺の藥　は不死の藥なり
其に文を添てなり○頭中將　は何なる人か姫を留
る勅使は少將高野大國と云人也勅使を闕て殊更に
朝廷に使を發て頭中將を喚寄たるには非じ然れは
上十九丁左に少將とあるは頭字を脱し中字を少に寫誤
たるか又は翁の年の違へるが如くふと此にて少將
を忘て頭中將と語れりしか○たてまつらすは帝の
大御前に令ㇾ獻なり例の末の事を先云おく文也
中將に天人とりてつたふ中將とりつればふと（ほイ）あまの
羽衣うちきせ（たてまつイ）れりつれば翁をいとをしかなしとおぼ
しつることもうせぬ此きぬきつる人は物思ひ（イナシもイ）なくな
りにければ車にのりて百人ばかり天人ぐして上り（昇イ）
ぬ其のちおきな女（媼イ）ちのなみだをながしてまどへどか

ひなし
埃囊抄云なきつくして泪の出ぬを血の泪といふ也
又大和物語に泪のかゝりたる所は血の泪にてなん
ありけるいみじうなけば血の泪と云ものは有もの
になん云々　○頭注云ふと天の羽衣うちきせ　狹
衣に紫の雲たな引わたると見ゆるひんづらゆひて
いひしらずをかしげなるわらはのさうぞくうるは
しくしたるかうはしきものふとおりくるまゝにい
とゆふか何ぞと見ゆるうす衣を中將にうちかけて
袖を引給ふ云々　此衣きつる人は物思ひもなく
前に彼みやこの人はいとけうらにおいず思ふ事も
なくといへり　車にのりて　狹衣に雲のこしよせ
てのり給ひぬ名殘にほひばかりとまりてと云々
ちのなみた　易曰泣血漣如　毛詩云鼠思（フツキ）泣ㇾ血無ニ
言不ㇾ疾　長恨歌云回ㇾ首血涙相和流　萬葉十六云
昔有ニ娘子一字曰ニ櫻兒一也于ㇾ時有ニ二壯子一共挑ニ此
娘子一　兩壯子不ㇾ敢ニ哀慟一血泣漣ㇾ襟云々古今集
に「ちのなみだおちてそたきつしら川は君が世ま
での名にこそありけれ
解云○天のはごろも打きせ奉つれば　は文をと壺と

を中將に渡せる即時羽衣を令レ著也○翁たと云々
は此衣に着更れば今まで人間の事は悉忘れて生を
隔たる如く心の變る德有由なり上に此事は既に云
置たるなり○車に乘て　は彼天より具し來りし飛
車に乘れるなり○百人ばかり　は天より迎に來し
主從都合ての人數なり○血の淚を流して　は翁嫗
此離別を甚太く泣悲しむ狀なり大和物語に良少將法師長谷寺に詣いろに其妻夫の行方知むと祈を忍、開居處に　夜一夜泣明して朝に見れば蓑
も何も淚の掛りたる處は血の淚にてなん有けるい
みじうなければ血の淚と云物あるものになん有ける
とぞとあり○惑へど　は失レ意てほれたる也○か
ひなし　は何に云ても姬は留まる事なく羽衣を著
て後は愛しむ心さへ消失たれば泣悲ともかひなし
となり

あの書おきし文をよみてきかせけれど（やイ）何せんにか命
もをしか（むイ）らんたがためにか何事もようもなしとて藥
もくはずやがておきもあがら（ずイ）でやみふせり

あの書置し　かくや姬の書おきし文也　○頭注云
あの書おきし　アノハカノ歟同韻通　何事もよう
もなし　無用の人といはんがごとし

解云○あの　は彼に同し上二十丁に釋つ○書おきし文を讀
て令レ聞けれど　は文言を聞心もなく餘所事にし
、て己が思事を云る也○何せんにか命も惜からむ
は翁が言にて藥を不レ服と思ふ由なり此より上に
不死藥くへと勸むる事を略たり○何事もやうもな
しとて　は遺せる文も益なしとなり諸本ようとあ
れどようは用の假字な益も无の意と聞ゆれば改つ此下に聞も不レ入と云言を略けり○藥も不レ食　は不死
の藥不レ食也古へ藥を服するをくふと云り今世藥を飮と云に同し
かげろふの日記に女君西山に徙る時うは席の下に兼家公のつと
めてくふ藥と云物疊紙の中に差入て有しが云々宇
治拾遺卷三に腰折たる雀を飼ふ處に銅藥にこそげてくはせ又十三顯城の條に物不レ云藥を食せて次に肥る藥をくはすとあり
○やがて　は其儘也○起もあがらず　は始迎の人
の前に頻に伏たる其儘起あからぬなり○病ふせり
は古事記に火神を生ましゝに依て伊邪那美命病臥在とあるに似たり

中將人々○ひきぐ（なイ）して歸りまゐりてかくや姬をえた
かひとめずなりぬる○をこま（ささイ）／＼（ぐイ）とそうす藥のつ
ぼに御文そへてまゐらすひろげて御覽じていと（いたくイ）○あ

はれがらせ給ひて物もきこしめさず御あそびなども
なかりけりだいじん上達部をめしていづれの山か天
にちかきととはせ給ふにある人そうするがの國に
あるなる（イナシ）山なん（むイ）

都良香富士記曰富士山者在二駿河國一峰如二削成一直聳屬レ天云々焦氏筆乘曰日本國名二倭國一東北數千里有レ山名二富士一又名二蓬萊一國中最高山三面皆海一朶直上頂有二火烟一秦時徐福入レ海求レ藥終止レ此至レ今子孫稱二秦氏一 ○頭注云中將 前の頭中將歟 中將華族四位任レ之執柄息若一世二世源氏中納言之時兼レ之云々○大臣上達部 大臣宮中事一向統二領之一故云二一上一云々孝德天皇大化元年以二阿倍倉梯麿蘇我山田石川麿一爲二左右大臣一是始也 上達部は官は宰相三位以上をいふといへり

解云○中將 は頭中將なり按に姫を天に返さじと留る使は高野大國也後に來たる人ゑたゝかひ不レ留よしを奏すべくもあらず又其官人を引具すべくも非ずされば始に大國を少將とあるは必誤と按定つれば上（十九丁左）に少將と有を頭中將と訓を改つ○得戰ひ不レ留成ぬる事を は抄本る字无し○こまごまと は細々にて委しく奏す也○物も聞食さず は赫映姫の升天を聞食て甚太く歎息かせ給ひて供御を聞こしめさぬなり○御遊なども无かりけり は管絃などもせさせ給はぬなり此條桐壺卷の更衣卒去の後帝の御歎に能似たり其處の文にやがてながめおはしますかうやうの時は御樂などせさせ給ひしに云々又末に朝政事は怠らせ給ひぬべかめれ物なども不二聞食一朝餉の氣色ばかり觸させ給ひて大床子の御物などはいと遙に思召たれば云々とあり○大臣 は和名抄に於保伊萬字智岐美と見え又おほおみとも訓べけれど此は字音に呼ぞ宜しかりける○天 はあめとも訓べし天に近高山を求給ふなり○ある人 は大臣上達部の中にて或人なり○駿河國に在山なむ は一本に此もあむなるとあれど此は无に從つ即富士山なり

此都もちかく天もちかく侍るとそうすこれをきかせ
給ひて御門あふ事も（イナシ）なみだにうかぶ我身にはしなぬ
くすりもなにゝかはせん（むイ）かの奉る不死のくすりに文（壺）
（に文イ）つぼぐして御使にたまはすちょくしには月のいはが
さといふ人をめしてするがの國にあなる山のいたゞ（だイ）

きにもてつくべきよしおほせ給ふみねにてすべきやうをしへさせ給ふ御ふみふしのくすりのつぼならべて火をつけてもやすべきよしおほせ給ふそのよしうけたまはりて兵者○もあまたぐして山へのぼりけるよりなん其山を○ふじの山とは名付けるそのけぶりいまだ雲の中へたちのぼるとぞいひつたへたる

月岩笠　例の作名也　都良香記名富士取郡名云々また不死不盡の異名あり但此物語は例の寓言にて兵士に富といふに書なせり秘藏抄に富士の十名をあけて云藤嶽　鳴澤高根　常磐山　塵山　二十山　三重山　新山　見出山　三上山　神路山

都良香記云山頂中央窪下體如炊甑甑底有神池亦其甑中常有氣蒸出其色純青窺其甑底如湯沸騰其在遠望者常見烟火云々　更級日記にいふ其山のさまいと世にみえぬさまなりさまことなる山のすがたのこんじやうをぬりたる樣なるに雪のきゆる世もなくつもりたればいろこきゝぬにしろきあこめきたらんやうにみえて山のいたゞきのすこしたひらぎたるよりけぶりはたちのぼるゆふぐれは火のもえたつもみゆと云々　清異錄曰呉越孫總監丞侑富傾藩朝用千金市得石錄塊天竇嵯峨如山命匠治爲博山香爐峰尖上作一暗竇出烟則聚而且直穗淩空實美觀親朋傲之呼不二山云々しかればふじの烟はもろこし人も賞する事ひさし　○頭注云此都もちかく　いかゞ○あふ事のなみだ云々　あふ事の無とかけてうけたり○文つほ云々　勅書と藥壺也前に一人の天人つぼなる御藥奉れと云り○其山をふしの山とは云々　士に富の說いかゞ侍らん勅命をうけて不死の藥を燒し山なれば不死の山と云といへるなるべし其文義下もの文へかけて見るべし　ふしの山とは名付ける其煙いまだ雲の中へたちのぼる云々此ふしの山とは名付ける其煙といへるに意を付へし詞林採藥の說も不死なり

解云○此都も近く　は平安城に痛く遠からぬ由也○天も近く　は富士山の巔世に勝て高ければ天に近しと奏せる也○歌逢事も云々　は逢事も無と云事を淚に云係給ひさて泛ふ身と云續け給へり○うかぶ身　とは御心の治まらず靜まらぬ由なるべし赫映姬を御心深く戀慕給ひしかど竟に隨ひ奉らで

天に昇つれば御物思に大御身も浮たる如く思食なれば不死藥を開召て御長壽を持給ふも何のかひなき事ぞと宣給ふ意なり○不死藥の壺に文具して　は諸本不死藥に文壺具してと有必錯置と見ゆれば改つ猶文字の上御字を脱せるかおんふみと訓べし○勅使には調の岩笠　は作名也鈴木氏云此姓のつきは月都によしありてきこゆと云れき其意もて作れるなるべし姓氏錄に（左京諸蕃）調連水海連同祖百濟國努理使主之後也譽田天皇諡應神御世歸化孫阿久太男彌和次賀夜次麻利彌和弘計天皇諡顯宗御世蠶織獻ニ絁絹之樣ー仍賜ニ調首姓ーまた（河内諸蕃）調曰佐水海連同祖に（同條）水海連出レ自ニ百濟國人努理使主ー也とあり○峰にてすべきやう教させ給ふ　は帝御自己その勅使に教給ふなり○其由　は帝の教給ふ山上の態の事なり○つはもの　は抄に兵者とかきて即其意なり俊蔭卷に東國より都に敵ある人報せんと思て四五百人の兵にて人離たる所を求るに云々ふせるものゝふども猿の渡ともしらでと有（猶甚多し）兵は本兵器を云稱なるが兵士を云は後世の事なり古事記（白檮原宮段）に故爾其弟神沼河耳命乞ニ取其兄（神八井耳命）所持之

兵ニ入殺ニ當藝志美々ーとある傳十二に兵は和名抄に兵庫寮豆波毛能と訓べし刀鉾の屬の總名なり書紀に鋒刃兵器兵仗兵革など皆然訓り名義は鐔物なり（和名抄に鐔都美波）匠具農具其餘も諸器に刀鉾の屬の物は多かる中に兵器に局りて鐔ある故に此名を負るなり漢國にても兵字はもと械也とも戎器也とも注して其義なるを轉して其兵を執人を多く兵と云る其をも誤て都波毛能と訓るから後世には只勇士の稱の如くなりて剛者の意と心得て刀鉾の屬の名なる事をば不レ知なりぬ皇國にては古へ其人を指て都波毛能と云る事は无りき書紀などに人を云る兵字また卒字などを然訓るは誤なり又其をイクサビトなどゝ訓る是ぞ宜しきとありされば兵卒をツハモノと云は此物語の頃より上つ方遠からぬ世よりの言なるべし○其山をば　は上の例に從ては字今補つ○富士山とは名附ける　は此名を負せたりと云其義定かならず抄に儀が自己の說には此物語は例の寓言にて兵士に富と云に書なせりと云りげに兵者ども數多具して山へ登けるよりなんとあれば此說の如くきこえ又此御

使は不死藥を燃すが主たる業にて兵士は其に屬たる者なれば其を名に負はんやうもなしと見るには不死の意と聞ゆ頭書に昌喜は勅命を奉て不死藥を燒し山なれば不死の山と云と云るなるべしふじの山とは名付ける其烟云々と云るに心を著べしと云るもさる事なりさて富士は濁音を不死の淸音と一に云るは如何しく聞ゆれど上に鉢を捨と云を恥を捨る事に云なし安倍氏なるに依てあへなしととり喰がたを堪がたと云ひ又歌の云掛など淸濁をきらはぬ事常なり大和物語に　狩にのみ來る君待と振出て鳴しが山は秋ぞ悲しきは鹿を志賀山に云掛たり此物語に云々の由緣にてと云る名義は只一興に語れるのみにて本より寓言なれば大秀は二ながら取てんとす其故は此作者の工にて富士の字義にも叶ひ不死の言にも叶ふべく作成せるにも有べしとぞ思ふ不死に取方は表士に富と云義は裏なり都良香の記に古老傳云名ニ富士ニ取ニ郡名ーとあるは實なり○其烟は不死藥を燃したる烟なり（猶不盡山の燃ること別にいふへし）○雲の中へ立上るとぞ　は天に近き高山にて令レ燒給ふは、彼藥を天上に返し給ふ御意延（ミコヽロバヘ）なれば其藥の氣の殘たらむ間は烟も不レ絶立上りて雲中に入となり○云傳たる　は不盡山の烟の立は此樣の由緣にてと語傳たりと云意なり

竹取物語緣起

竹取物語は何人の書おけるにや本據詳ならず契沖阿闍梨も其博聞を賞して其作者を論ぜず古人の傳説には源順の所作といへりまことそれらの人ならではいかでと思はる故に順の略傳を首にしるす

弘仁天皇　定（始賜ニ姓源ニ大納言至ニ從四位下左京大夫）　攀（コツル）　順（從五位上能登守）　順ひとゝなり博聞強記にして萬葉集に點し和名抄をあらはす世に稱する梨壺の五人順そのずゐ一也○頭注云　昌喜按に此物語を源順作などいふ説あれどひがことなるべし源氏繪合の卷に竹取物がたりの繪はこせのあふみ手は紀貫之かけりと云々河海抄云巨勢相覽一説に云巨勢金岡相覽同人也云々如ニ高名錄ー者相覽は猶先代也云々花鳥餘情云巨勢相覽は金岡子云々金岡は寛平之時之人爲ニ其子ー則可レ爲ニ貫之同時人ニ云々　弄花抄云金岡子也除目成文抄云讚岐小目（サクワン）從八位下畫師巨勢朝臣相見昌泰

二年二月除目執筆時平公云々順の作ならは相覽貫之などか書たるとはいふべからず昌泰延喜の頃既にふりにし物かたりなれば相覽貫之がかきたりとはいふなるべし順の作といふ説は非なるをしるべし　河海抄云うつほ物語は源順作と云々しかるをうつほ物語内侍のかみの巻云それはかくや姫こそさふらふへかなれ上こゝは玉はたおくりてさふらはんかし内侍のかみこやすかひはちかくさふらはんかし云々竹取順の作にてうつほ又順の作ならば自ら作れる物をかく引用すへからず是又順の作にあらざる一證なり松浦物かたり奥書云貞觀三年四月十八日云々而紫式部物語のいできはじめのおやなる竹取といへりしかれば猶貞觀の頃よりもふるきものと見るべし猶予が古物語ともの時代勘物にくはし

契沖河社にいふ竹取物語は源氏にものかたりのいできはじめのおやと云り　右竹取と名つけたるは萬葉集第十六云竹取偶逢ニ九箇神女ニ贖ニ近狎之罪ヲ作レ歌昔有ニ老翁一號曰ニ竹取翁一也此翁季春之月登ニ丘遠望忽値ニ煮レ羹之九箇女子一也百嬌無レ儔花貌無レ止云々此竹取はたかとりとよむを昔はたけとりとよみける歟にてこれをもとゝして名づけたらし顯昭六百番歌合の時今のたけとりをたかとりとよまれたるを判者これをなんぜられたりされど大和物語に「たかとりがよゝになきつゝとゞめけんきみはきみにとこよひしもゆく　かくあれば通はしても苦しからぬにや竹の中に入ある事は内典に見えたり寶樓閣經不空三藏譯弘法大師將來第一云佛云乃往古昔至乃有ニ三仙人一云々時彼仙人得レ法歡喜心生ニ踊躍一於ニ其住處一便捨ニ身命一所レ捨之身猶如ニ生酥一消融入レ地即於ニ沒處一而生ニ三竹一金爲ニ莖葉一七寶爲レ根於ニ枝梢上一皆有ニ眞珠一香氣芬馥常有ニ光明一所レ有見者無レ不ニ欣悦一其竹生長十日則自剖裂各於ニ竹内一生ニ一童子一顏貌端正令ニ人樂一レ見最勝端嚴光色殊麗相好成就時三童子則於ニ是時一竹下結跏趺坐即入ニ正定一至ニ第七日一於ニ其中夜一皆成ニ正覺一其身金色三十二相八十種好圓光嚴飾時彼三竹皆變成ニ七寶樓閣一云々くはしくは經にあり是は寶樓閣大陀羅尼の不思議力をとかれたる經なり經には男子なるを女子にとりなしてこれをもとゝしてかき出せる歟已上　○頭注云

竹取竹取の事　六百番歌合俊成卿判云左歌竹取翁事たかたけは兩様にもたるべし然而此翁にとりてたかとりといひけりと云證據ぞ有べら云々委は歌合を往而見よ　顯昭陳状曰萬葉集竹取翁事たかとりたけとり兩説也萬葉にも兩點侍り但堀川院百首懷舊題に中納言師時卿歌に「春をかにのぼりて見けんたかとりのこゝのこらがとをしぞ思ふとよまれて侍れは堀川院の御前にて令レ講歌に彼人たかとりとよまれて別の難も聞え侍らねば其説に付て詠せるよし申したけとりとは詞ばかりにて彼卿の歌程の證據も聞えず又評歎もえ出されねば如二只今一は勝鞭をさし侍るべし竹とりとよまれたらん人にこそ證據は尋申さまほしく侍れ但判詞に萬葉は順が和せる後假名は付たれば和歌計こそ和したれ竹取は詞也兩説之點不可有之由如何順萬葉集の歌ばかりを訓して詞をは不レ讀とは誰人の定侍けるぞ詩歌文書詞にも作者の名にも不審あれは勘讀常事也萬葉集中已有様に文筆尤可レ被二黙留一也所謂無常悲歎等詩四首幷序松浦仙媛云々序九首櫻兒縵兒云々傳十六通贈答狀十三通鎮懷石才記三通已上皆黙本有之順沒後自筆之本侍らすとも移點の本侍は同事也内外傳本書籍も此定也翻譯三藏の眞筆も制作論師之正本も世に不レ留事侍れとも展轉書寫の功により點本も世にあれは其に付て受習して智惠をひらき侍也云々今按に日本紀に其所棄竹刀終成二竹林一故號二彼地一曰二竹屋一云々　又遂登二長屋之竹島一しゝろ又竹葉瀬名入これ等をおもへば竹何といふべきものはタカといへるがいにしへの正訓なるべしたとへば酒も下にありては一夜酒醇酒といひ上におきては酒槽酒蟻といふがことし今も白酒酒宴などいふめり仙覺萬葉集抄にもタカトリと點せりもとより此物語も彼萬葉の翁が名より出たりと見ゆれば古風を存してたかとりとよぶべくこそ又此物語を一名赫夜姫物語ともいへり源氏蓬生巻にからもりはこやのとしかくや姫物かたりの繪に書たるをそときゞのまさぐりものにし給ふといへり

古老傳曰此山麓乖馬里有二老翁一愛レ鷹嬢飼レ犬後作レ筴爲レ業竹節間得二少女一容貌端嚴光明照耀爰桓武天皇御宇延暦之比諸國下二宣旨一被レ撰二美女一坂上田邑

麻呂爲ニ東國勅使一富山裾老翁宅宿終夜不レ絶ニ火光一問ニ子細一是養女光明也云田邑麻呂即上洛奏ニ事之由一於レ是少女登ニ般若山一入ニ巖崛一畢帝幸ニ老翁宅一翁奏ニ由緒一帝悲泣脱ニ帝玉冠一留ニ此處一登ニ頂上一臨ニ金崛一少女出向微笑曰願帝留レ此帝即入レ崛訖玉冠成レ石在ニ于今一彼翁者愛鷹明神也嬢者飼犬明神也 已上 今考之云ニ富山縁起一之上者仰雖レ可レ信ニ用之一時代甚不審也疑若天智天皇歟彼帝近江宮ニテ崩シ玉フト云ドモ實ハ不レ然白地ニ御馬ニ召テ出マシテ隱玉フ所ヲシラス宇治山ノ麓ニ御鞋片落(カタヽヽオツ)コレヲ取テ山陵ニ籠タテマツル鞋石トテ長サ三尺計有レ之富士金崛ヘ入玉フハ此帝歟可レ詳 ○頭注云天智天皇歟云々富士金崛ヘ入玉フ此帝歟 詞林採薬此説誤れり天智紀云十年九月天皇寢疾不豫 或本八月 ○十二月癸亥朔乙丑天皇崩ニ于近江宮一癸酉殯ニ新宮一云々國史如レ此是明證也杳落所に築陵之説信用するにたらず

鴨長明巡歴記云〔頭注云由阿の見られけん長明巡歴記といへる書此人の外古き物に引用せるを見ず眞僞いといぶかし〕 要取 此山ノ傍ニ採竹翁ト云者有宅後ノ竹林ニシテ鶯ノ卵子ヲ得タリ養テ子トス少女トナリテ身ノカタハラヲテラス百媚アリ見人斷レ腸聞者心ヲ動スコレヨリシテ青竹ノ中ニ黄金出來テ貧翁忽ニ富人トナリニケリ英華ノ家好色ノ道月卿爭レ光雲客重レ光艷言ヲツクリ戀懷ヲ抽ヅ時ノ帝叡聞ニオヨビテ御狩遊ノ由ニテ姫ノ竹亭ヘ幸アツテ鴛ノ契ヲムスビ松ノ齡ヲヒキ玉フ竹姫後日ヲ契リ申ケレバ帝空ク返玉フカタヘノ天是ヲシリテ飛車ヲイダシテ迎ヘテ天ニ昇リヌ鶯姫帝ノ御契リノサスガニ覺テ不死ノ藥ニ歌ヲ書副テ留テゲリ其歌ニ云 今ハトテアマノ羽衣キル時ゾ君ヲアハレトオモヒイデヌル帝御返歌 逢事ノ泪ニウカブ我身ニハシナヌ藥モナニヽカハセン 勅使智計ヲメグラシテ富士ノ嶺ニノボリテ此藥ヲ燒アゲヽリト仍テ此山ヲ不死山ト云ケルヲ郡ノ名ニ付テ富士ト申ケルナリ 已上詞林採薬抄

○頭注云舊本今昔物語卷廿八云今ハ昔○○天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ竹ヲ取テ籠ヲ造テ要スル人ニ與ヘテ其功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ翁籠ヲ造ランガタメニタカムラニ行竹ヲ切ケルニ篁ノ中ニ一ノ光アリ其竹節ノ中ニ三寸バカリナル人有翁是ヲ見テ

思ハク我年來竹取ツルニ今カヽル物ヲ見付タルコ
トヲ悦ヒテ片手ニハ其小人ヲ取今片手ニハ竹ヲ荷
フテ家ニ歸テ妻ノ嫗ニ篁ノ中ニテ此女子ヲコソ見
付タレト云ヒケレバ嫗モ悦テ初ハ籠ニ入レテ養ケ
ルニ三月バカリ養ヒケリ例ノ人ニナリヌ其子ヤウ
ヤウ長大スル儘ニ世ニナラビナク端正ニシテ此世
ノ人トモ覺ザリケレバ翁嫗イヨ〳〵之ヲカナシミ
愛シテ傳タル間ニ此世ニ聞エタカク成ニタリ而ル
間翁亦竹ヲ取ランガ爲ニ篁ニ行ヌ竹ヲ取ニ其度ハ
竹ノ中ニ金ヲ見付タリ翁此レヲ取テ家ニ歸ヌ然レ
ハ翁忽ニ豐ニ成ヌ居所ニ宮殿樓閣ヲ造テ其レニ住
ミ種々ノ財庫倉ニ充チ滿テリ眷屬衆多成ヌ亦此兒
ヲ儲テヨリ後ハ事ニ觸レテ思樣ナリ然レハ彌ヨ愛
シ傳クコト無限シ而ル間其時ノ諸ノ上達部殿上人
消息ヲ遣テ假借シケルニ女更ニ不聞リケレハ皆心
ヲ盡シテ云セケルニ女初ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ將
來レ其時ニ會ハムト云ケリ次ニハ優曇華ト云花有
ケリ其レヲ取テ持來レ然ラム時ニ會ハムト云ケリ
後ニハ不打ヌニ鳴ル鼓ト云物有其レヲ取テ得サセ
タラン折ニ自ラ聞エムナド云フテ會ザリケレバ假

借スル人々女ノ狀形ノ世ニ不似微妙ナリケルニ耽
テ只此ク云ニ隨テ難堪キ事ナレドモ舊ク物知タル
人等ニ可求キ事ヲ問ヒ聞テ或ハ家ヲ出テ海邊ニ行
或ハ世ヲ捨テ山ノ中ニ入リ此樣ニシテ求ケル程ニ
或ハ命ヲ亡シ或ハ不返來ヌ輩モ有ケリ而ル間天皇
此女ノ有樣ヲ聞シ食シテ此女世ニ並無ク微妙シト
聞我レ行テ見テ實ニ端正ノ姿ナラバ速ニ后ト爲ト
思シテ忽ニ大臣百官ヲ引將テ彼翁ノ家ニ行幸有ケ
リ既ニ御マシ着クルニ家ノ有樣微妙ナル事王ノ宮
ニ不異ズ女ヲ召出ルニ即參レリ天皇此レヲ見給ニ
實ニ世ニ可レ譬者無ク微妙ナリケレバ此我カ后ト
成ラムトテ人ニハ不近付ザリケルナメリト喜ク思
シ食テヤガテ具シテ宮ニ返テ后ニ立テムト宣フニ
女申サク我レ后トナラムニ無限キ喜ヒ也ト云トモ
實ニハ己人ニハ非ヌ身ニテ候也ト天皇宣ク汝チ然
ラハ何者ゾ鬼カ神カト女ノ云ク己鬼ニモ非ス神ニ
モ非ス但シ已ヲハ只今空ヨリ人來テ可レ迎キ也天
皇速ニ返ラセ給ヒネト天皇此レヲ聞給テ此ハ何ニ
云フ事ニカ有ラム只今空ヨリ人來テ可レ迎ニ非ス
此レハ只我ガ云事ヲ辭ビムトテ云ナメリト思給ケ

ル程ニ暫許有テ空ヨリ多ノ人來テ輿ヲ持來テ此女ヲ乘セテ空ニ昇ニケリ其迎ニ來レル人ノ姿此世ノ人ニ不似リケリ其時ニ天皇實ニ此女ハ只人ニハ無キ者ニゾ有ケレト思シテ宮ニ返リ給ニケリ其後ハ天皇彼ノ女ヲ見給ケルニ實ニ世ニ不レ似形有樣微妙ナリケレハ常ニ思シ出テ破無ク思シケレドモ更ニ甲斐無クテ止ニケリ其女遂ニ何者ト知ル事無シ亦翁ノ子ニ成ル事モ何ナル事ニカ有ケムト惣テ不ニ心得ヌ事也トナム世ノ人思ケル此ル希有ノ事ナレバ此ク語リ傳タルト也　今昔物語如此今流布の本と大方相似たり又前に引るうつぼ物語內侍のかみの卷云それはかくや姬こそさふらふべかなれ上こゝは玉はたおくりてさふらはんかし內侍のかみこやすがひはちかくさふらはんかし云々同菊宴云おもほしいづやと思へどさもあらねばはちすてと云はかりになんときこゆるとあるも石造の御子の事をいへり是等今の本の趣ときこゆ又源氏物語云かくやひめの此世のにごりにもけがれすはるかにおもひのぼれるちぎりたかく○あべのおほしがちぐのかねをすてゝ火鼠のおもひかたときにきえたるもいとあへなしくらもちのみ子のまことのほうらいのふかき心もしりながらいつはりて玉の枝にきずをつけたるをあやまちとなす云々是又今本と全同じかくうつぼ源氏なとに引る所今とおなしければ此本正本にて長明か巡歷記の鶯姬幷次の風土記の說信用にたらす

國名風土記に曰甲斐國トハ昔ハ富士山ノ麓ニ竹取ノ翁トテ竹ヲ種テアキナヒケル者アリ彼翁園生竹林ニシテ鶯ノ卵ヲ見付タリ暖メ置クソノヽチ程ヲヘテ是ヲミレバ容顏優ナル寵姬トナリケリシカルニカレヲ養子トスタケシ後ニカノ翁ガ田作リケル時ニ暇ナカリシカバ養母ノ詔ヘテイハク隙ナキ時ニシモ何トカヤ手助トナリ玉ハザルトナサケナク云ケレバ鶯姬コレニ怒ヲナシテ富士山ノミネニノホリテ岩ヲ蹴破テ湯ヲ走ラカシ田ツクル人ノ所ミナ燒石トナル件ノ祖父母ハニゲテ白根ガミネヘユキ又彼田カケル馬モニゲテ信州駒ガミネニスミケル其駒主ヲワスレズ常ニナレシカバカノ馬ヲコヽロニ入テ飼シユヱナリ此トコロヲ飼國ト云シカルヲカナカキニ甲斐トカクナリ黑駒ト云モ甲斐國ヨリ

イツルナリ　○頭注云風土記ニ馬ヲ心ニイレテ飼シユヱ飼ノ國ト云シヲカナガキニ甲斐ト書トイヘルハ　今按本朝逸史引ニ類聚三代格一曰天長四年十月甲辰太政官符置甲斐國牧官○此國所領牧與ニ信濃國一同頃年蕃息漸多繫飼蔵倍云々是等によりし附會の説なるべし古事記云開化帝皇子日子坐王之子沙本毗古王者日下部連甲斐國造之祖云々景行紀云自ニ日高見國一還之西南歷ニ常陸一至ニ甲斐國一云々飼國と書る事なし一説山間の國なり峽は加比故名となる歟といへり

此物語は寶樓閣經によりてかきたるやうに契冲阿闍梨はしるされしかども猶似たる事あなれ　柰女耆婆經（後漢安世高譯）佛在世時維耶離國王苑中自然生ニ一柰樹一枝葉繁茂實又加大既有ニ光色一香美非レ凡王實愛ニ此柰一自レ非ニ宮中尊貴美人一不レ得レ噉ニ此柰果一其國中有ニ梵志居士一財富無數一國無双又聰明博達才智超レ羣王重ニ愛之一用爲ニ大臣一王請ニ梵志一飯食畢以ニ一柰實一與レ之梵志見ニ柰香美非レ凡乃問レ王曰此柰樹下寧有ニ小栽一可ニ得乞一不王曰大多ニ小栽一吾恐レ妨ニ其大樹一輒除ニ去之一卿若欲レ得今當ニ相與一即以ニ一柰栽一與ニ梵志一歸種レ之朝夕灌漑日々長大枝條茂好三年生レ實光彩大小如ニ王家柰一梵志大喜自念我家貧財無數不レ減ニ於王一唯無ニ此柰一以爲不レ如今已得レ之爲レ無レ減レ王乃取食レ之而太苦澁了不レ可レ食梵志更大愁惱乃退思惟當下是土無ニ肥潤一故上耳乃提ニ取百牛乳一以飲ニ一牛一復取ニ一牛乳一煎爲ニ醍醐一以灌ニ柰根一日々灌レ之到ニ至明年一實乃甘美如ニ王家柰一而樹邊忽復生ニ一瘤節一大如ニ手拳一日々增長梵志心念忽有ニ此瘤節一恐妨ニ其實一適欲ニ斫去一復恐レ傷レ樹連日思惟遲廻未レ決而節中忽生ニ一枝一正指レ上向洪直調好高出ニ樹頭一去レ地七丈其杪乃分作ニ諸枝一周圍傍出形如ニ偃蓋一華葉茂好勝ニ於本樹一梵志怪レ之不レ知ニ枝上當何所レ有乃作ニ棧閣一登而視レ之見ニ枝上偃蓋之中乃有ニ池水一既清且香又有ニ衆華彩色鮮明披視ニ華下一有ニ一女兒在ニ池水中一梵志抱取歸長ニ養之一名曰ニ柰女一至ニ年十五一顏色端正天下無双宣聞ニ遠國一有下七國王同時俱來詣ニ梵志所一求中娉柰女上以爲ニ夫人一梵志大恐怖不レ知レ當ニ以與一誰乃於ニ園中一架ニ一高樓一以ニ柰女一著レ上出謂ニ諸王一曰此女非ニ我所レ生自出ニ於柰樹之上一亦不レ知ニ是天龍

兒神女耶鬼魅之物今七王俱來求之我設與一王六王當怒不敢愛惜也女今在園中樓上諸王便共議有聽得者便自取去非我所制也於是七王口共諍之紛紜未決至其夕夜萍莎王從伏竇中入登樓就之共宿明晨當去柰女白曰大王幸枉威尊接近於我今復相捨而去若其有子則是王種當何所付王曰若是男兒當以還我若是女兒便以與汝王即脫手金銀之印以付柰女以是爲信便出語群臣曰我已得柰女與其一宿亦無奇異故如凡人故不取耳萍莎軍中皆稱萬歲曰王已得柰女六王聞之各還去下略のちに柰女男子を生せり世に稱する醫王耆婆これなり又廣博物志にいはくもろこし義興といふ所に吳堪といふ人ありわかうしてあがたの吏となる其家荊溪といふ川にちかしある時川邊にて大なる螺を得たり取還りて家におくにはかにうるはしき女となる吳堪よろこびておのが妻とす人々名づけて螺婦と呼ぶ也あがたのかみこれを聞ていかにもして得まく思ひ吳堪をせめていはく世に蝦蟆毛といふ物あなりそれとりてこよしからずは汝が妻本れとはたる吳堪家にかへりてこれを愁ふ螺婦いはくいとやすき事なりとてまてとに大なる蝦蟆の毛はへたるをあたへたりよろこびてあがたにもてゆき奉るかみのいはく此度は更に鬼臂をとり來れといふ吳堪かへりて妻にとふにこれもやすしとてとらせたりよろこびてあがたにもちゆくかみこれを見るにまことにおそろしき鬼の臂也かく世になき物をいふに隨てもちくればかみ思ひわづらひて此度は聞も及ばぬ物をと思ひてことさへぐやうに禍斗を出せといひけり又かへりて妻にとふいかなる物ぞと螺婦のいはく遠き國に有獸の名なりいさそれもとて須臾にとり來りてかみの本に行かみ其けものを見るに常の犬也いかで禍斗とはいふぞととふ螺婦曰此獸は火を食として火のくそをまり侍るなりかみさらばとて火をくはするによくとくひけりしばらくして火のくそをまりける程にそこらの家々ども只やけにやけてかみの一家皆やけしにけるされば螺婦は天女の類ならんと語りつたへたり

物語のうちのかくや姫が言に帝につかへさせなばきえうせなんと云は甘澤謠に唐の武三思が妾に素娥

といふあり美麗にして歌舞をよくすその比賢人のきこえある狄仁傑素娥の事をきゝて其歌舞を見んとて武三思の許に行しに素娥俄ににげて見えず武三思驚さて隈々求るに壁のあはひに蘭麝のかをりありいとほそきこゑにてまうしけるは妾は人間のたぐひにあらず眞は花月の精なり天の帝我を人間につかはしてきみたちのこゝろをまとはさしむしかるにいま賢人の徳におされて己か身消うせぬる也といひておともなくなりぬかやうの説をおもひて書るなるべし

前々の説にてはかくや姫は淺間大明神のやうに聞ゆしかるに唐土の文に日本に貴楊妃の祠ある事を記せり今の熱田明神是也されば富士をも蓬莱といひ熱田をも蓬莱と呼ふなり俗説に玄宗皇帝わか日のもとかたふけむ心有しかば熱田明神美女と化して唐の世を亂し給へり馬嵬にて失ひ奉りし時其むねより白鳥いでゝ東に飛去れりすなはち熱田の神體なりと云々此説謬妄也といへども尾張風土記曰富樫山有レ神號ニ白鳥神一日本武尊所レ化白鳥也云々

参しかればあつたの神體は白鳥なる事明けしさて堅瓠集と云ふみに楊貴妃は白鷗の精なり故に其爪甲（ツメ）赤銅のごとくなりしとぞ白鷗もしろきとりなれば此事よく合へり長恨歌にも蓬莱宮にいたりて楊貴妃にあへる事あれはこゝに記して異聞をひろむる事しかり

浪華　藤原　儀

我子たゝしやまふのひまもとめて此竹とりのこゝろえかたきふし〳〵をめやすきやうにしてんといふをいかにをこかましきことしいてゝ人々のそしりをすかのねのなかきよにのこすらんなといひしろふ程に玉くしけふたゝひのかうかへもえせて身はついによもつまうとゝなりぬかつ入江のぬしはゝやうよりのしたしきうからにていけそ日の契りたかへしととかくしあつかひ給へるは其はしのことはにつはらなるへしさるをふみあきなふをのこの何事をかおもひけむこのさくら木にゑりてよもやまにつたへんとせちにもとむるをさゝかにのいかてさるふるまひはなとたゆたふにはた頼氏の此ふみのはしめにことそへてんなときこへ給ふるはかはむしのさせるひかことにもあらさらんかしとおもふはおんなのしれ〳〵しさにこまのかほまとに見るとかいふめるにやあらむ

竹取物語注跋

先兄伯鳳著竹取語註其病間之作也使弟翔與翼隨口錄之蓋出于暗記者居多云始成未及校閱而逝矣入江子昌喜恐其書不溥也更爲校之再四而亦補其說之未備即其所補則別標出焉以與泊氏之所爲不相混也噫泊氏即世翼亦尋逝今也數年而其書全成感愴曷可已會書肆某請上梓乃與入江子謀再校以與之泊氏而有知其謂之何書中之所引據今將一々就其書而校正焉有力未能及者深恐疎漏之不尠耳雖然泊氏之才之學則吾　春水先生之序盡之大方君子其功歸咎于泊氏幸甚

天明三年癸卯九月

弟　翔仲鵬謹識

徒然草野槌

全

徒然草野槌

有㆑客謂曰凡稱㆓物語草子㆒以行㆓于世㆒者多出㆑自㆓婦人女子之手㆒故有㆓喔咿嚅唲之語㆒無㆓教誨訓誡之法㆒唯見㆓冶容紛粧之態㆒未㆑聞㆓丈夫雄豪之風㆒且或煩㆓諸緊冗㆒失㆓諸嘈雑㆒或流㆓於鄙俗㆒淫㆓於虚誕㆒往々皆然獨有㆓紀氏古今倭歌集序及土佐日記㆒而已此與㆓婦人兒女之口㆒誠異日之談也繼㆓紀氏㆒而後作者雖㆑不㆑遠然其唯兼好耶曰兪余時偶見㆓徒然草㆒於㆑是乎取㆓其言㆒以書之

羅山子

徒然草野槌上之一

人の心をたねとしてよろづのことくさとなれるといふこの道かの道ことならぬ事なり五のたなつものゝたねは人の心なればそのおふるところはめぐしひたすことはりなり世にうまれたる物いづれかこの心なからん佛も此たねよりぞ出けるにかへりてたねをたゞむとにやいとあやしかりける凡木草の名をしりてたねをたづぬるごとくことばをしりて其心をきはめしるこそめでたけれそのまち〳〵わびだめあるにたとふれば道ははじめもありおはりもありこれぞまことにひじりのをしへ也けるこの道かの道うちとなしすぎたるはおよばぬにおなじきゆへにまよひてよからぬことになりぬむかしちはやふる神世にかやのひめをのづちともいへば草のたねをつれ〳〵しるしてのづちとなづく五のたなつものわかたぬ世のしれ物にしめさむとおもふ心の本より草木の理にふたつなきゆへなるべし

かいとのとりのとしの秋夕顔のちまたにて露をしたで筆をすゝぎ侍る

卜部系圖

○大織冠鎌足─意美麿─清麿─諸魚─智治麿─

─日良麿─豊宗─好眞─兼延─兼忠─兼親─

─兼政─兼俊─兼康─兼貞─兼茂─

─兼名（右京大夫）─兼顯─慈遍（大僧正 南朝詔）
　　　　　　　　　　　　─兼雄（民部太輔 従五上）
　　　　　　　　　　　　─兼好（藏人 左兵衛佐 以二俗名一爲二法名一）

─兼直─兼藤─兼益─兼夏─兼豊─兼熈─兼敦─
　　　─兼富─兼名─兼倶─兼致─兼滿─兼右─
　　　─兼見

風雅集十七世をのがれて木曾路と云所を過侍るとて
　　　　　兼好法師
おもひたつ木曾のあさきぬ淺のみそめてやむへき袖の色かは

新千載集十六建武二年内裏千首歌に題を給はりて讀て奉りけるとき春植物といへることを
久かたの雲井のとかにいつる日のひかりににほふやまさくらかな

同十八雜歌下
すめはまたうき世なりけりよ所なから思ひしまゝの山さともかな

同十九　兼好法師が母身まかりにける一めぐりの法事の日さゝげ物にそへて申つかはしける
　　　　　前大納言爲定
別にし秋はほとなくめくりきて時しもあれとさそしたふらん

返し
めくりあふ秋こそいとゝかなしけれあるを見しよは遠さかりつゝ

新拾遺集六冬部
あし鴨のはらふ翅になみこえてうは毛の霜やなをこほるらむ

同第九羇旅部
旅のそらいく夕くれに待出て山のはかはる月をみつらん

同十一忍久戀
忍やま又ことかたに道もかなふりぬる跡は人もこそしれ
新後拾遺集八炭竈を
すみかまも年のさむきにあらはれぬけふりや松のつま木なるらん
同第九離別歌
都おもふ草のまくらの夢をたにたのむかたなく山風そふく
同十六雜歌
後の世をなけかぬほとそしられける身のうきにのみそてはぬれつゝ
新續古今集六百首歌奉りし時寒草
手枕の野邊の草葉の霜かれに身はならはしのかせそさむけき
同十一忍戀を
みさひ江のそこの玉ものみたるともしらるな人にふかきこゝろを
同十二玉津島の社に奉りける歌の中に祈戀を
いかにせん神のうけゝる御祓とて見し面影もわすれはてなは
同十三戀部題しらす
こぬ人をなをこりすまにまつ山はいくよなみこす契りなるらん
同第十五　絶戀を
うきたひにこれそかきりとかこちしははかなくたのむ心なりけり
同第十七　雜歌
のかれえぬおひその森のもみちはゝ散かひくもるかひなかりけり
以上十六首は右の五代の集に見えたり
兼好法師自讃歌二首
そらにたつ名のみのこりてうき雲のあとなきものはちきりなりけり「いかにしてなくさむそとも世の中をいとはてすくす人にとははや
又兼好が歌なりとて或人のかたりしは
世中をわたりくらへていまそしる阿波の鳴戸は波風もなし
高野山金剛三昧院に兼好自筆の短冊五枚あり是は或人夢に南無釋迦佛全身舍利と云事を見て各に歌

よましむる時に兼好もよめるなりと直義朝臣其跋を書り其歌云

つたへきてきくも初音を郭公太山にのみと何たつぬらん

香に匂ひたへなる色にあらはれてみのりの花や春をつくらむ

理即より究竟にいたる佛こそひとつこゝろの玉とみゆらめ

柴の戸にひとりすむ夜の月の影とふ人もなくさす人もなし

武藏野や雪ふりつもる道にたにまよひのはてはありとこそきけ

つれ〳〵ぐさは吉田兼好法師が作也兼好は後醍醐天皇の時の人なり高武藏守師直にまみえて師直に代て鹽冶判官が妻のもとへ艶書を書てやりけるとや徹書記が物語に或云兼好は後宇多院の北面の侍なり帝崩してのちに髪をきりて遁世す此時淨辨慶運頓阿兼好の四人を世に四天王と號すとなり此草紙をつれ〳〵くさと名つくる事は發端のことばをもつて號するなりくさは草紙の義なるへし又清書せざる前を草案とも草稿ともいふなり

此草紙のことば大かた枕草紙源氏物語の體をうつせり兼好は天台の敎を學びて又莊老の道をもうかがふと見えたり世俗をいきとほり生死無常を觀じ時序を感じ風景をうつし男女の情をいひて己がこゝろざしをのべたりまことに和語の文章におゐて殊にすぐれたるものなり

つれ〳〵なるまゝに日くらしすゞりにむかひて心にうつりゆくよしなし事をそこはかとなくかきつくればあやしうこそものぐるおしけれ

是まで序なり六條宮の御撰の伊勢物語の眞字本に徒然と書てつれ〳〵とよめり閑寂の心なるべし

日くらし　終日の義也詞花「日くらしに山路のきのふしくれしは富士の高根の雪にぞありける云伊勢物語「くれがたき夏の日くらしながむればそこはかとなく物ぞかなしき　硯にむかひて「何となく硯にむかふてならひよ人にいふべき思ひならねば風雅集にあり　よしなしこと　由來なき事なり　そこはかとなく「神無月風に紅葉のちる時はそこはかとなく物ぞかなしき　そこともなき義なりはかは助語也

いでや此世にむまれてはねがはしかるべき事こそおほかめれ帝の御位はいともかしこし竹の園生の末葉まで人間のたねならぬぞやんごとなき一の人の御有さまはさら也たゞ人も舎人など給はるきはゝゆゝしと見ゆ其子むまごまではゝふれにたれどなをなまめかしそれよりしもつかたは程につけつゝ時にあひしたりがほなるもみづからはいみじと思ふらめどいと口おし法師ばかりうらやましからぬものはあらじ人には木のはしのやうにおもはるゝよと清少納言がかけるもげにさることぞかしいきほひまうにのゝしりたるにつけていみじとは見えず增賀ひじりのいひけんやうに名聞(ミヤウモン)ぐるしく佛の御をしへにたがふらんとぞおぼゆるひたふるの世すて人は中々あらまほしきかたもありなむ人はかたちありさまのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ物うちいひたるきゝにくからず愛敬(アイギャウ)ありて詞おほからぬこそあかずむかはまほしけれめでたしと見る人の心おとりせらるゝ本性(ホンシャウ)見えんこそ口おしかるべけれしなかたちこそ生れつきたらめ心はなどか賢(カシコキ)より賢にもうつさばうつらざらんかたちこゝろざまよき人もざえなく成ぬればしなくだり顔にくさげなる人にも立まじりてかけずけをさるゝこそほいなきわざなれありたき事はまことしき文の道作文和歌管絃の道また有職(ユウショク)に公事(クジ)のかた人の鏡ならんこそいみじかるべけれ手などつたなからずはしりがき聲おかしくて拍子とりいたましうする物からげこならぬこそをのこはよけれ

よましむる時に兼好もよめるなりと直義朝臣其跋を書り其歌云

つたへきてきくも初音を郭公太山にのみと何たつぬらん

香に匂ひたへなる色にあらはれてみのりの花や春をつくらむ

理即より究竟にいたる佛こそひとつこゝろの玉とみゆらめ

柴の戸にひとりすむ夜の月の影とふ人もなくさす人もなし

武藏野や雪ふりつもる道にたにまよひのはてはありとこそきけ

つれ／＼ぐさは吉田兼好法師が作也兼好は後醍醐天皇の時の人なり高武藏守師直にまみえて師直に代て鹽冶判官が妻のもとへ艶書を書てやりけるとや徹書記が物語に或云兼好は後宇多院の北面の侍なり帝崩してのちに髻をきりて遁世す此時淨辨慶運頓阿兼好の四人を世に四天王と號すとなり此草紙をつれ／＼くさと名つくる事は發端のことばをもつて號するなりくさは草紙の義なるへし又清書せざる前を草案とも草藁ともいふなり此草紙のことば大かた枕草紙源氏物語の體をうつせり兼好は天台の教を學びて又莊老の道をもうかがふと見えたり世俗をいきとほり生死無常を觀じ時序を感じ風景をうつし男女の情をいひて己がこゝろざしをのべたりまことに和語の文章におゐて殊にすぐれたるものなり

つれ〴〵なるまゝに日くらしすゞりにむかひて心にうつりゆくよしなし事をそこはかとなくかきつくればあやしうてそものぐるおしけれ

是まで序なり六條宮の御撰の伊勢物語の眞字本に徒然と書てつれ〴〵とよめり閑寂の心なるべし

日くらし　終日の義也詞花「日くらしに山路のきのふしくれしは富士の高根の雪にぞありける伊勢物語云「くれがたき夏の日くらしながむればそこはかとなく物ぞかなしき　硯にむかひて「何となく硯にむかふてならひよ人にいふべき思ひならねば風雅集にあり　よしなしこと　由來なき事なり　そこはかとなく「神無月凬に紅葉のちる時はそこはかとなく物ぞかなしき　そこともなき義なりはかは助語也

いでや此世にむまれてはねがはしかるべき事こそおほかめれ帝の御位はいともかしこし竹の園生の末葉まで人間のたねならぬぞやんごとなき一の人の御有さまはさら也たゞ人も舍人など給はるきはゝゆゝしと見ゆ其子むまごまでははふれにたれどなをなまめかしそれよりしもつかたは程につけつゝ時にあひしたりがほなるもみづからはいみじと思ふらめどいと口おし法師ばかりうらやましからぬものはあらじ人には木のはしのやうにおもはるゝよと清少納言がかけるもげにさることぞかしいきほひまうにのゝしりたるにつけていみじとは見えず増賀ひじりのいひけんやうに名聞（ミヤウモン）ぐるしく佛の御をしへにたがふらんとぞおぼゆるひたふるの世すて人は中々あらまほしきかたもありなむ人はかたちありさまのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ物うちいひたるきゝにくからず愛敬（アイギヤウ）ありて詞おほからぬこそあかずむかはまほしけれめでたしと見る人の心おとりせらるゝ本性（ホンシヤウ）見えんこそ口おしかるべけれしなかたちこそ生れつきたらめ心はなどか賢（カシコキ）より賢にもうつさばうつらざらんかたちこゝろざまよき人もざえなく成ぬればしなくだり顔にくさげなる人にも立まじりてかけずけをさるゝこそほいなきわざなれありたき事はまことしき文の道作文和歌管絃の道また有職（ユウシヨク）に公事（クジ）のかた人の鏡ならんこそいみじかるべけれ手などつたなからずはしりがき聲おかしくて拍子とりいたましうする物からげこならぬこそをのこはよけれ

いてやは發語の詞也　いともかしこし　最もおそれあるとなり可畏と書て左傳にも日本紀にもかしこしとよめり　竹の園生　竹園は親王をさす王子皇孫の末葉までと云義なり園生の生は蓬生淺茅生の類にて生植の意なり古文苑に枚乘が作れる梁王兎園賦に脩竹檀欒夾ニ池水一とあり史記世家に梁孝王は漢文帝の子なり景帝の兄弟なり方三百餘里の苑を築り宮室を作り複道を作りて平臺につゞける事三十餘里なり西京雜記に孝王の苑に落猿岩栖龍岫鴈池鶴洲めづらしき果樹あやしき鳥獸多くあり餘多の宮觀相連れり時の人名づけて梁孝王の竹園といふ又脩竹苑とも名づく朗詠に此花是非ニ人間種一再養ニ平臺一片霞、此花是非ニ人間種一瓊樹枝頭第二花とあるも皆親王の事をいふなり杜子美哀ニ王孫一詩高帝子孫盡隆準龍種自與ニ常人一殊　やむごとなき　源氏桐壺にやんごとなききはにはあらぬか　花鳥餘情にやんごとなきとはきわめて上﨟のしなをいふ無レ止(ナシヤンコト)と書り一の人　攝政關白をさす職原鈔に執柄必蒙ニ一座之宣旨一故稱ニ一人一　さらなりは　殊更の義也　たゞ人　毛詩に匪ニ直(タヽノ)也人一こゝのたゞ人とは攝關のほかの人をさすか　舍人など給はる　近衞の舍人は隨身也是を木府の隨身といふゆるされを蒙りてつるゝなり小隨身は御ゆるしに及ばず家々にあり　はふれにたれど　おちぶれたる義なり放埒と書にや古今に「身はすてつ心をだにもはふらさじ終にはいかゞなるとしるべく放棄(ハナチスツ)る意なるべし　なまめかし　やさしき義也古今に「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時　それよりしもつかた　五位六位殿上人受領等の類成べし　したりがほ　ほこりたる顏也　法師ばかり　木のはし　榾柮(コツトツ)小木也或云木頭(キノハシ)木斷也　古今に「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべらなり　清少納言がかける　清少納言が枕草紙におもはむ子を法師になしたらんこそ心ぐるしけれたゞ木のはしのやうに思ひたるこそいと／＼おしけれさうじものゝあしきをうちくひていぬるをもいかゞはものゝゆかしからむ女などの有所をもなどかいみたるやうにてさしのぞかずもあらんそれをもやすからずいふまいてけんじやなどはいとくるしげなり清少納言は

肥後守清原元輔が女一條院の皇后につかへし女房なり　いきほひまうにのゝしり　時にあひて威勢あるなりまうは猛の字也のゝしるは訇の字也　増賀ひじり　和州多武峯の僧也　撰集鈔ニ云むかし増賀聖人といふ人いまそかりけるいとけなかりけるより道心ふかくて天台山の根本中堂に千夜こもりてこれを祈給ひけれども猶實(マコト)の心やつきかねて侍りけん或時たゞひとり伊勢太神宮にまうでゝ祈誓し給ひけるに夢に見え給ふやう道心をおこさんとおもはゞ我身を身となおもひそと示現をかうぶり給ひけりうち驚ておぼすやう名利をすてよにてそ侍れさらば捨よとてき給へりける小袖衣みな乞食どもにぬぎくれて一重なる物をだにも身にかけ給はずあかはだかにて下向し給ひけりみる人不思議の思をなして物に狂ふとこそ見ざまなどのいみじさにうたてやなどいひつゝうちかこみ見侍れども露心もはたらき侍らざりけり道々物もらひつゝ四日といふに山へのぼりもと住ける慈恵僧正の室に入給ひければ宰相ノ公(キミ)のものにくるふとてみる同朋もあり又かはゆしとてみぬ人も侍りけるとか

や師匠の僧正ひそかにまねき入て名利をすて給ふとはしり侍りぬたゞかくまでのふるまひは侍らじはやたゞ威儀をたゞしくして名利を離れ給へかしといさめ給ひけれども名利をながく捨たん後はさにもこそ侍るべけれとてあらたのしの身やおうおうとて立はしり給ひければ僧正も門の外に出給ひてはるばると見をくりてすゞろに涙をながし給へりけり増賀はつゐに大和國多武峯といふ所へさそらへいりて智朗禪師の庵のこたばかり棲りけるにご居をしめ給へりける　元亨釋書十云釋増賀平安城人諫議大夫橘恒平之子也十歳父母送ニ睿山ニ與ニ慈恵ニ性聰穎操履潔學綜ニ顯密ニ尤遂ニ止觀ニ而惡ニ利名ニ絶ニ交謁ニ安和上皇勅爲ニ供奉ニ佯狂垢汚而逃去太皇太后敬事爲レ師而延ニ宮中ニ便於ニ衆女中ニ出ニ麁語ニ又罷去慈惠任ニ僧正ニ入レ宮賀謝翼從甚盛賀帶ニ乾魚ニ爲レ劍乘ニ瘦牸牛ニ交ニ先驅之列ニ緒徒叱而去レ之賀勵レ聲曰僧正之前驅(ダウミ)去レ我誰乎聽者笑而伏應和三年如覺法師勸上ニ談岑ニ因レ是居焉長保五年六月九日滅年八十七　をよそ人の名聞をもとむるは身をさかへんためなり佛菩の極所(キハマルトコロ)は形もなく身も

なし泥名利をや我が一身すなはち一佛となりて一佛よく河沙の世界にあまねく一身よく千手千眼を具す双手両目なきものも猶九百九十八の手目あるにあらずや叔山無趾が足きられたるも足よりたふときものあればなり四大假合して又ほどもなく分散する事なればふかく道心あらむ者は身をもかたちをも忘るべしいかんぞ名をもとめ利を貪むや増賀上人の名聞ぐるしとてあかはだかにてはしりありき風顛漢となれるもさも有べき事也世間の法師の金襴を肩にかけて塵埃心に生ずる物は額に泄をひたさゞらんや　ひたふる　一向と書りひたすらの義也八雲御鈔にひたふるは一向又ふてたるよしなり伊勢物語「みよしのゝたのむのかりもひたふるに君がかたにぞよるとなくなる　人はかたちありさまの　あいぎやう　愛敬と書り　めでたしと見る人の　、像貴美麗の人をいふ　本性　生れつきの天性なり　しなかたち　源氏箒木にいまはただ品にもよらじかたちをはさらにもいはじいと口おしくねぢけがましきおぼえだになくは物まめやかにしづかなる心のおもむきならんよるべをぞつゐのたのみ所には思ひおくべかりけるしなとかたちと心とを論じて心を本とす　孟子盡心曰形色天性也惟聖人然後可二以踐一形疏云人之形與レ色皆天所レ賦性所レ有也　陸魯望雜説曰昔之聖者其首有二若レ牛者一其形有二若レ蛇者一其喙有二若レ鳥者一其貌有二若二蒙倛一者上彼皆貌似而心不レ同焉可レ謂二之非一人耶即有下平脊曼膚顏如二渥丹一美而狠者上貌則人矣其心則禽獸又悪可レ謂二之人一也然則觀二貌之是非一不レ若下論二其心與二其行事一之爲上レ不レ失也事文類聚後集十八　賢より賢にも　論語學而篇に賢レ賢易レ色をかしこきよりかしこからんとならばいろをかへよとよむ點古來あるによりてこゝに引用るなり　ざえなく　無レ才なり　しなくだり　日本紀二十五云大夫以上各有二差降一　かけず　度量ならぬ意也　文のみち　讀書學問の道也まことしきと云へること心をつけてみるべし　ゆうそく　有職ものしることありとよめりよろづ物に心得て故實を存じすべをしれる者をいふ禁中のことどもよくわきまへ知れるのみにあらず　公事　おほやけごとゝ讀り禁中の行事を公事まつりごとゝいふ　人の鏡

唐書魏徵薨太宗臨レ朝嘆曰以レ銅爲レ鑑可レ正ニ衣冠一以レ古爲レ鑑可レ知ニ興替一以レ人爲レ鑑可レ明ニ得失一朕常保ニ此三鑑一內防ニ己過一今魏徵逝一鑑亡矣　手などつたなからずはしりがき　東坡文集云眞生レ行々生レ草眞如レ立行如レ行草如レ走未レ有下未ニ能立一而能走上也　河海抄云眞の字は人の衣冠たゞしき體也行字はありく體也草字は人の走れる體なり

げこ　酒をのむ者を大戸といひのまざる者を小戸といふ事白氏文集に見えたり日本にては上戸下戸といふ酒宴遊曲の座にてはのまざれば惡客なればみだれざるほどにのめとにや然れども伊勢物語にけこ（蘭子）のうつは（器）ものとあるはいやしき義也此段にてもいやしからぬやうにといへるにや　又いたましうする物からげてならぬとはいたみながらも興に乘じて酒をのむといふ義もあるにやされど痛飲と云へるはしゐて多くのむ事なり

此段人間世に生れて人の品々を云に王公卿大夫士より其ありさまをいひて法師の事までいひくだし世をのがらふるものをあらまほしき事といふは兼好が身の上によそへたるべしかくのごとく人品を評してしなにもよらずかたちにもよらず心をかしこきにうつさんといへる此段の本意なりそのうへに才藝のあらまほしき事を男子のわざとすべしと云へる義なるべし

いにしへのひじりの御代の政をもわすれ民の愁國のそこなはるゝをもしらずよろづにきよらをつくしていみじとおもひ所せきさましたる人こそうたておもふところなくみゆれ衣冠より馬車に至るまで有にしたがひてもちいよ美麗をもとむる事なかれとぞ九條殿の遺誡にも侍る順德院の禁中の事どもかゝせ給へるにもおほやけの奉り物はをろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ

いにしへの聖の御代　史記秦本紀韓子曰堯舜采椽不レ刮茅茨不レ剪飯ニ土塯一啜ニ土形一　六韜曰帝堯王ニ天下一之時金銀珠玉不レ飾錦繡文綺不レ衣奇怪珍異不レ視玩好之器不レ寶淫佚之樂不レ聽宮垣屋室不レ堊甍桷椽楹不レ劉茅茨偏レ庭不レ剪　群書治要引ニ六韜一曰茅茨之蓋不レ剪　きよら　淸の字也花麗の義なり　ところせき　所狹なり　おもふところな

く　おもひつきなきなり心にくからぬ義なり　九條殿の遺誡　一巻あり右丞相師輔公なり　順徳院後鳥羽院第三の皇子也　禁秘鈔一巻あり禁中御鈔とも名づく　おほやけの奉り物　帝王へ奉る物也公の字をおほやけとも讀り遊仙窟には天事と書ておほやけごとゝ讀り

此段人の君としてはおのれをつゞまやかにしおごりをきわめずいにしへの賢君をしたひて國を憂へ民をうれへて用を節せよといへるこゝろまことに殊勝の事なりもろこしの聖王は申におよばず善相公の意見封事を見侍りしに我朝神明のあまつひつぎ傳へ給ひし昔より國富民ゆたかにして風俗うすからずみつぎかろくゑだちおろそかにして一國の政たとへば一身のごとしされば君子國と名づくるは虚名にあらず中古徳おとろへ政きびしくなりもてゆくに佛法のはじめて我朝につたはる事欽明天皇より濫觴して推古天王よりてのかたいよ／＼さかんなるゆへに君臣士民にいたるまで財産をつくし田園をすてゝ多くの寺塔を建立す天平年中に大寺をたて大佛をつくり天下の工を費し又諸國七道にも國分寺を作る其費すでに正税十分の五なり桓武御宇に及びて都を長岡にうつし又此京を經營し大極殿豐樂院をかまふ百敷のつかさのおもどころ王子姫宮の第宅后妃女御の宮館人の目をかゞやかす俗に所謂大内裏とは是なるべし天下正税の費五分ノ二に及べり仁明天皇位につかせ給ひてよろづ紛奢を愛し器物をゑりぎざみ錦綉を縫かざり給ふによりて農業をさまたげ女功をそこなふ其上に酒色歌舞のあそび古今にまれなるほどなれば府庫もむなしく賦歛もしげかりき天下の費二分の一なり貞觀年中に應天門大極殿燒たりしを昭宣公の力を持て期年の間に成風の功をなすといへども其費なきにあらず一分の半に及ぶ時はすでにむかしの十分の一にあらず國の衰弊おしてしるべし又思ふにいにしへの明君は儉約をたとび驕りをいましむ澣濯の衣蔬糲の食後世の法にあらずや今王化おこなはれず風俗うすくして上中下にいたるまで衣服飲食の奢り都鄙のわいためなく日々に行水のながれてかへらざるがごとくしばらく其しるしを申さば貞觀元慶の世には王子大臣も皆すゞし(生)のつくしぎ(筑紫絹)

ぬを夏のかざみ(汗衫)としさらし(晒)のあしきぬ(絁)な上のはかま(表袴)としあづま(京)あしきぬをしたふづ(襪)としそめあしきぬなくつ(履)のう、(裏)とせしにいまは諸司史生のものもみな白きかとり(縑)をかさみとし白き絹をうへのはかまとし白き綾をしたふづとし菟褐(トカツ)をくつのうらとすまして女の衣服は婢妾にいたるまで齊紈越綾をきりたちて袖を一入再入の紅にそめ衣を千聲萬聲の砧にさくその外の奢靡あげてかぞへがたしこれによりて田園荒蕪して盗賊おこり獄訟おほからんこれをいましめずんば聖徳をわづらはすのおそれあり檢非違使に仰て人品にしたがひ居所衣服の制法を施行し給へといへり是は延喜年中にたてまつる所の封事也これをみれば延喜の御時さへはやおとろへたる末の代とも申べしましていはんや兼好が時の事をやされども九條殿の遺誡順徳院の仰せ事また殊勝におぼえ侍る

萬にいみじくとも色このまざらむ男(ヲノコ)はいとさう〳〵しく玉の卮(サカヅキ)の當(ソコ)なき心地ぞすべき露霜にしほたれて所さだめずまどひありき親のいさめ世のそしりをつゝむに心のいとまなくあふさきるさに思みだれざるはひとり寝がちにまどろむ夜なきこそおかしけれさりとてひたすらたはれたるかたにはあらで女にたやすからず思はれんこそあらまほしかるべきわざなれ

色このまざらむ　文選に宋玉か登徒子好色賦あり

さう〳〵しく　さびしき義なり倭名集に寂寞と書てさう〳〵しとよめりこゝにてはことたらぬ意なるべし

玉のさかづき　金樓子玉卮無レ當桂花無レ實（宋王球子王位中書令筵席虚靜門無二異賓一王臺首日宿　玉亦是玉卮無レ當爾當底也今俗猶レ有二匡當之言一詢府）

あふさきるさ　往(ユキ)さま來(クル)さま也こなたかなたの義にもかようべし八雲鈔にとするもかくするもとあり古今に「しかりとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに　源氏は、木々にとあればかゝりあふさきるさにて

おかしけれ　やさしき意なりほめたる詞也夕顔卷になき給ふさまいとおかし

ひたすら　ひとへなり

たはれ　風流とも狂とも書り萬葉集「たはれをと人はいへどもまたしらすわれをかくせり獺(チン)のたはれを「秋くれば野邊にたはるゝ女郎花いづれの人かつまでみるべき

此段色このまざるは人情にあらざれば無下の事な

りと思へる兼好が心いとおかし末に妻といふ物は男のもつまじき物なりといひ又子をもたぬものは物のあはれをしらぬといへるをげにさる事なりといへば兼好が本意あさからず侍るされば飲食男女は人の大欲存せりと禮記に見えたり誠に男女の道は飲食よりもまさりて人のすてがたき物なり蘇武が胡國にありて十九年まで艱難をしのぎ忠節を全すといへども胡婦をめとりて子をうめりされば色欲の道は蘇武もまぬかるゝ事あたはずと東坡が論あれど然はあらず男女の道は人倫のことはりなればいかんぞ蘇武をひが事とせむや好色の家には孔子の南子にまみえ漢水の女に事を問を戀の山にはくし(孔子)のたふれともいふべきにや兼好がひたすらたはれたるをあしき事なりといへるさもありぬべき事也然とも妻子をわたくしにして父母の養をかへりみざるは五の不孝のうちの其一なれば親のいさめ世のそしりつゝむにいとまなしといへるはいかゞ侍るべきや人をやしなふ者も口よりいれど又人をころすものも口より入がことし男女は人倫のことはりにてあれどすぎて淫なれば人倫をみだる此故によろづの事は過不及なきをよしとするとしるべしむかし孔子は關雎の詩をよみてたのしめども淫せずとほめ給ひ孟子は太王の色好む事を論じて此心を天下におしひろめば内にうらみの女もなく外にむなしき男もなかるべしと侍るめり

後の世の事心にわすれず佛のみちうとからぬこゝろにくし

不幸に愁にしづめる人のかしらおろしなどふつゝかに思とりたるにはあらであるかなきかに門さしこめて待こともなくあかしくらしたるさるかたにあらまほし顯基中納言のいひけん配所の月罪なくて見ん事さもおぼえぬへし

ふかう　一本に深の字を書り不幸の字是歟　ふつゝか　いやしき義也　待こともなくは世に求めなきなり外をねがふものは待事あり　逍遥遊云猶ニ有ㇾ所ㇾ待者也　顯基の中納言　西宮左大臣高明公孫大納言俊賢卿の一男なり　顯基の事詳に續世繼に二所にあり　選集抄書中納言顯基と申人いまぞかりけり後冷泉院の御時朝につかへ給ひて寵愛いやめづらかにしておほくの人をこえなんとして

二しなの位にのぼり給へりけるが常は林下のとぼぞをもとめて世をのがるゝ心ふかくなんおはしけるなめりしかるを心はなるゝ緣のいまだつきやり給はざりけるに帝はかなくならせ給ひしかば中納言天台山にのぼりてかしらおろして大原と云所になん行ひすましていまぞかりけり朝につかへしそのかみよりさは明暮はあはれ罪なくして配所の月をみばやと涙をながし古墓(フルツカ)いづれの世の人ぞ姓と名をしらず年々春草のみしげしと詠してけしからずなみだをながし給へるとかやさて中納言草の戸さし閉にしていひしらずめでたく往生し給へりと遊心集に載られて侍し云々案ずるに選集抄に詳略の二本あるか右の段のせたるとのせざるとあり一本の第三に云むかし播磨の國竹の岡といふ所に庵りむすびておこなふ尼侍りもとはむろの遊女にて侍りけるがみめざまなどもあしからざりけるにや醍醐の中納言顯基に思はれ奉りて一とせのほど都になん住渡り侍けるがいかなることか侍りけんすさめられ奉りてむろに歸りて後又も遊女のふるまひをなどし侍らざりけるとかや或時中納言の內のひと舟に乘て西國より都さまへゆきけるをうかゞひみて髮をきりてみちの國がみにひきつゝみてかく書たり「つきもせずうきを見るめのかなしさにあまとなりても袖ぞかはかぬと書て船になげいれ侍りて後ひたすら思ひとりて此所に庵りとかくこしらへて思ひすまして侍りけるなり中納言是をみ給ひてあめしづくとなきこがれ給ひけるなりさて此尼はたゞわくかたなく朝暮念佛し侍りけるがつゐに本意のごとく往生して來りておがむ人おほく侍りけり其庵りの跡とて今の世まで朽たる松の木の見え侍りしは柱などにこそすゞろにむかし床敷思ひやられて侍る人里もはるかにとをざかり侍るにかなはぬ女の心にてとかくしてあやしげにこそひきつくろひ侍りけめかてなどはいかゞかまへ侍りけんと返々いぶせく侍る同し女といひながらさやうのあそび人などになりぬれば人にすさめらるゝわざなどをもいたく思ひとるまではなきなる物をひたすら浮世にことよせてこりはてにけん心の程いみじく覺えて侍り此中納言もいみじき往生の人にてはいまぞかりけりと傳にはのせて侍ればさ

やうの事にてつれもなき心の思ひ驚て世を秋風の吹にけるにこそ今は又むつましきしんじやうの菩薩のともにてこそいまぞかるらめとおもはれて其事となくあはれにも侍るかな

配所の月つみなくてみむ事　配所は流罪左遷の人のある所なり　配所は必ずしも配所にあらず遠國海島にしもあらずこゝも配所なるべし貧賤にしづみ飢寒にくるしみ時にあはず君に得ずよろづうれへある身はいづくも配所なるべしをのれあしき事あらばさかへかゞやくとも其心はつみなるべしをのれひが事なくば外より至る物をいかんぞ罪とせんや此心にて月を見ばいづくも配所なるべし近比世の山の山人市原にて月をみてよめる歌に「罪なくてさすらふ身にし月見ればむかしの人はむべもいひけり　罪なくして配所の月をみむと云につきて菅右相の事おもひあはせられ侍る菅相西府に左遷せられて九月十三夜詩曰昔被二榮華簪組縛一今爲二貶謫草萊囚一月光似レ鏡無レ明レ罪風（身イ）氣如レ刀不レ破レ愁隨レ見隨レ聞皆慘慄此秋獨作二我カ秋一この詩をよめば滿身の愁あり近比藤斂夫作二紀州弱浦（ワカノウラ）菅神廟碑一其略云都府樓之瓦觀音寺之鐘幽鬱無聊之懷不レ可レ掩也蓋非二素行之學一而然耶非耶當時詠二赤舄几々一者有耶無耶彼一時此一時雖レ欲レ無二不豫之色一其不レ可レ得焉不レ可レ爲レ非二素行之學一也と云へりそれ富貴にも貧賤にも夷狄にも患難にもむかふところとして自得せずと云事なきは素行の學なり菅相は我邦の鴻儒なり君を憂へ民を憂ふいかんぞ不豫の色なからんや蘭省の花の時都をおもひ蜀魄の聲に君をうれへ峨眉山の月に秋をかなしみ藍關の雪に馬をとゞめて心をやる涙を催すにやまして汨羅の波長沙の風罪ありとやせんなしとやせむ天恐三文人未レ盡レ才常敎三零落在二蒿萊一と元遺山がいへるもさる事にや菅相顯基などは此心いかゞ有けん羑里（ユウリ）の琴には天王聖明なりとながめ東山の雨には赤舄几々たりとうたふ菅相顯基の及かたき所なり人の德惠術智は患難よりすゝむ事なれば富貴安樂なるものもかならず孤臣孽子の心を守るべきなり

我身のやむ事なからんにもましてかずならざらんにも子といふものなくて有なん前中書王九條太政大臣花園左大臣みなぞう絶ん事をねがひ給へる染殿大臣

もろ子孫むはせぬぞよく侍る末のおくれ給へるはわろき事也とぞ世繼の翁の物語にはいへる聖德太子の御墓をかねてつかせ給ける時もこゝをきれかしこをたて子孫あらせじと思ふ也と侍りけるとかや

子といふものなくて　一本ニ女子といふものなくてとあり　前中書王は中務卿兼明親王延喜の御子也詩文能書の人也具平親王をば後中書王と申なり

九條の太政大臣伊通公也　花園左大臣　有仁公也後三條院孫輔仁親王の御子也　御ぞうたえん事を　ぞう曾ノ字也子孫をいふ韵會に曾重也自ニ曾祖一至ニ無窮一皆得レ稱ニ曾孫一　染殿のおとゞ　太政大臣良房謚は忠仁公と申也染殿の后の父清和天皇の外祖父也　世繼の翁の物語一名大鏡　藤原爲業法名寂念といへる人世繼の物語をつくる文德天皇より後一條院まで十四代百七十五年帝王大臣等の事をしるせり其上卷に染殿の大臣の子のおはしまさぬ事を行末まさりたるやうにのせたり　聖德太子　用明天皇の御子也厩のほとりにてむまれ給ふ故に厩戸の皇子と申又上宮とも八耳とも申也　平氏聖德太子傳暦曰太子巡ニ御陵一勅ニ墓工一曰汝斷ニ四路一

胅意趣有レ二一者爲レ令レ無ニ大行道之煩一二者我子孫爲レ令レ無ニ日本之相續一又曰子孫不レ續豈云ニ大谷一孔子遺教無ニ後嗣一者爲ニ不孝一矣吾爲ニ釋迦大聖弟子一豈爲ニ孔子小賢弟子一云々

此段子孫のなきをよき事なりといへるは莊子が多ニ男子一則多レ懼といへる意なるべしそれ道は人倫を離れず男女に始りて父子あり父子あれば則君臣あり兄弟あり朋友あり世をのがらふる者身のいさぎよからん事をねがひて人倫の道を亂るこれ聖人のいましめ也いかんぞ人を鳥獸の群に同じうせんや然るを伯夷叔齊顏淵子孫ある事をきかず後なきを不孝とせば夷齊顏子も不孝ならんやなどいふ人あり大なる僻事なり夷齊顏子もとめてする物にあらずをのづから至れるものを命とす彼山林寂寞をこのむ者みづから私をたてゝ子孫なからんとす人の心のたねならんやかれ佛老をこのみて父子をすて夫婦をはなるといへど佛老もとより子孫なきにあらず比丘尼總持經を見侍りしに釋迦の妻は耶輸多羅なり其子を羅睺羅といひ其妻を瞿夷といへり羅什三藏も妻子なきにあらず老子の子を段干宗とい

ひ宗か苗裔假は漢文帝につかへたり道士張道陵も又子孫なきにあらず如レ此なれば佛老もいかんぞ人倫をすてはてんやそれを學ぶ者のわろく心得てかくなりもてゆくなり聖徳太子は名たかき人なれど浮屠に淫溺し給ふゆへに後の世の儒徒よきわが方人なりと依託してそのことを記せる者の陵をきりたち給ふをよき事なりといひて釋迦は大聖孔子は小賢なりとほこり說は君子の取ところにあらず呂黎が所謂不三惟擧二之於口一而又筆二之於書一といへるげにもとぞおぼゆる道の行はれず道の明らかならざる誠に此故にあらずや是は太子の子孫なからん事をねがひ給へる事天下古今の法にあらずとおぼえ侍るゆへになん大乘の法は酒肆婬妨即道場なりといひて末世の比丘は肉をくひ女色に耽りて在家の人に異ならずされば小乘は却て殊勝なりと或人の申されしはさもあるらん毘曇雖レ劣佛法根本といへるも此心なるべし若又後なきは不孝なりとて國君は内寵おほく士庶人は妻妾をわたくしせば精氣をついやす故に子孫を得ざるさきに國家の破るゝもあり病をうけて身をうしなふもあり此故に人の種族は天地のさきよりありて我身につたはり我身より子孫に連續してたえざる時は天地と終に至る是つねの道なるゆへに陰陽不測を道といふと周易にも誠たり誠に天地の間種類の大なる事如レ此なれども其過不及を嫌ふ故に孔子は好色をいましめ子思は色をさけよといひ孟子は妻子を私するを不孝として又後なきを三不孝の第一大事といへるなるべし

あだし野の露きゆる時なく鳥部山の烟立さらでのみ住はつるならひならばいかに物のあはれもたからん世はさだめなきこそいみじけれ命ある物を見るに人ばかりひさしきはなしかげろふのゆふべをまち夏のせみの春秋をしらぬも有ぞかしつく／＼と一年をくらすほどだにもこよなうのどけしやあかずおしと思はゞ千年を過すとも一夜の夢の心地こそせめすみはてぬ世にみにくきすがたを待えて何かはせんいのちながければ辱おほしながくとも四十にたらぬほどにてしなんこそめやすかるべけれそのほどすぎぬればかたちをはづる心もなく人に出まじらはん事をおもひ夕の陽に子孫を愛してさかゆくすゑを見んまでの

命をあらましひたすら世をむさぼる心のみしかくも
のゝあはれもしらずなりゆくなん淺ましき
あだし野「あだし野のはぎいすゑこす秋風にこぼ
るゝ露や玉川の水 俊頼 ふるき歌枕を見侍しに阿太
志野大和國にあり或曰山城國にあり俊頼朝臣玉川
によみ合せりかの玉川又いづれの名所とも知がた
し清輔の抄に名所に載たるを八雲鈔に不審し給へ
り或歌合の判詞にあだし野名たかゝらぬにや有所
しる人すくなし　又化野共かけり　河海に承暦の
歌合に嵯峨野を過てあだし野まで行けんもあぢき
なしといへり「誰とてもとまるべきかはあだし
野の草の葉ごとにすがるしら露 續古今西行　鳥部野
性靈集十云天長四年五月勤操大德於二中京西寺
北陸一奄然而化荼二毗東山鳥部南麓一　世繼中卷云
長保三年皇后東三條院詮子崩十二月廿四日葬二鳥
戸野一元亨釋書釋文豪居二洛陽城四條坊釋迦院一治
暦二年五月十五日於二鳥部野一積レ柴燒レ身厭(エンテ)レ都瞻
禮嘆嗟 治暦後冷泉院之年號　顯昭拾遺抄云鳥戸山は阿
彌陀峯也其すそを鳥邊野といふ　一鳥邊山谷に烟
のもえたらばはかなくきえし我にしらなん 拾遺 思

ひかねながめしかども鳥部山はては烟もたゝず
成きに 詞花圓融院御歌　「薪つき雪ふりしける鳥邊野
は鶴の林の心地こそすれ 後拾遺法橋忠命　「分きつる袖の
けしきか鳥邊野のなく〳〵かへる道芝の露 玉葉俊成 こ
ゝにあだし野の露鳥邊山の烟といふはたゞきゆる
時なくたちさらでといひかけんための枕ことばな
るべし　かげろふのゆふべをまち「夕ぐれにい
のちかけたるかげろふのあるかなきかの世にもす
むかな 弄花に遊絲蜉蝣蜻蛉野馬陽焔などの字をあ
げたり又草をかげろふと云事もあり林希逸莊子口
義野馬遊絲也水氣也杜子美所謂落花遊絲白日靜是
也　蜉蝣は朝に生じて夕に死する虫なり陽焔は弘
法の十喩詩中に詠二陽焔喩一あり莊子翼云野馬遊氣
也又云天地間氣如二野馬馳一也　夏の蟬の春秋をし
らぬ　夏のせみを一本に夏のむしとあり古今の眞
字序にて春鶯を春のとりとよみ夏蟬を夏のむしと
よむ一義ありとかや　莊子逍遙遊に朝菌不レ知二晦
朔一蟪蛄不レ知二春秋一此小年也陸德明音義菌其隕反
天陰生二糞土一見レ日則死蟪蛄寒蟬也一云蝭蟧 希逸
口義云朝菌大芝也亦名二日及一生二於糞土一 叢生見レ

日則死彼但知㆑有㆓朝暮㆒而已安知㆑有㆓晦朔㆒也蟪蛄寒蟬也春生夏死夏生秋死不㆑見㆓四時之全㆒故曰㆓小年㆒　こよなう　八雲抄に事外なりとあり　河海には無越とも閑雅とも書りかぎりもなしと云義なり閑雅は幽玄の義に通すべし　見にくき姿　老をとろへたるをいふ　いのちながければ　莊子天地篇多㆓男子㆒則多㆑懼富則多㆑事壽則多㆑辱是三者非㆑所㆓以養㆑德也　四十にたらぬほどにて　論語子罕篇四十五十而無㆑聞焉斯亦不㆑足㆑畏也已陽貨篇年四十而見㆑惡焉其終也已　ゆふべのひに子孫を愛し　白氏文集第二秦中吟不致仕云七十而致仕禮法有㆓明文㆒何乃貪㆑榮者斯言如㆑不㆑聞可㆑怜八九十齒墮雙眸昏朝露貪㆓名利㆒夕陽憂㆓子孫㆒挂㆑冠顧㆓翠緌㆒懸㆑車惜㆓朱輪㆒金章宵不㆑勝傴僂入㆓君門㆒誰不㆑愛㆓富貴㆒誰不㆑戀㆓君恩㆒年高須㆑請㆑老名遂合㆑退㆑力云々　さかゆくすゑ　さかへゆくすゑなり　古今に「今こそあれわれもむかしはおとこやまさかゆく時も有こしものを　世をむさぼる心のみふかく　論語に及㆓其老㆒血氣既衰戒㆑之在㆑得又云老而不㆑死是爲㆑賊といへる本文にもかよふべきにや

徒然草野槌 上之二

世の人の心まどはす事色欲にはしかず人のこゝろはをろかなる物かなにほひなどはかりのものなるにしばらく衣裳にたきものすとしりながらえならぬにほひには必心ときめきする物也久米の仙人の物洗(アラ)ふ女の脛の白きを見て通をうしなひけんは誠に手あしはだへなどのきよらに肥あぶらづきたらんは外の色ならねばさもあらんかし女はかみのめでたからんこそ人のめたつべかめれ人のほど心はえなどはものうちいひたるけはひにこそ物ごしにもしらるれことにふれてうちあるさまにも人の心をまどはしすべて女のうちとけたるいもねず身をおしともおもひたらずたゆべくもあらぬわざにもよくたえしのぶはたゞ色をおもふがゆへなりまことに愛着の道その根ふかく源とをし六塵の樂欲(ゲウヨク)おほしといへどもみな厭離しつべし其なかにたゞ彼まどひのひとつやめがたきのみぞ老たるもわかきも智あるも愚なるもかはる所なしとみゆるされば女の髮すぢをよれる綱には大象もよくつながれ女のはけるあしだにて作れる笛には秋の鹿

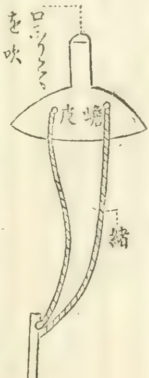
かならずよるとぞいひ傳え侍るみづからいましめておそるべくつゝしむべきはこのまどひ也

世の人の心まどはす事　禮記禮運篇飮食男女人之大欲存焉程伊川曰淫聲美色易㆑惑㆑人　源氏手習に人の心まどはさむとていできたるかりの者にやとうたがふ　白氏文集第四新樂府古塚狐妖且老化爲㆓婦人㆒顏色好見者十人八九迷假色迷㆑人猶若㆑是眞色迷㆑人應㆑過㆑此彼眞此假俱迷㆑人云々　衣裳にたきものすと　白氏文集樂府太行路云爲㆑君薫㆓衣裳㆒君聞㆓蘭麝㆒不㆓馨香㆒爲㆑君盛㆓容飾㆒君看㆓金翠㆒無㆓顏色㆒　えならぬ　八雲抄にえならぬはおもしろうゆうなるとなりえもいはれぬ義なるべし　心ときめきする　枕草紙に心ときめきするものよきたきものたきてひとりふしたる　久米の仙人　元亨釋書十八久米仙者和州上郡人入㆓深山㆒學㆓仙法㆒食㆓松葉㆒服㆓薜茘㆒一旦騰㆑空飛過㆓故里㆒會婦人以㆑足踏㆓浣衣㆒其脛甚白忽生㆓染心㆒即時墜落漸喫㆓烟火㆒復㆓麁裳㆒然鄕黨契劵當㆑署㆓其名㆒皆書㆓前仙某㆒今舊劵之中往々猶有㆓手澤㆒悉然嘗於㆓高市郡㆒營㆓精舍㆒鑄㆓丈六藥師金像幷二菩薩像㆒所謂久米寺也後又修㆑仙凌㆑空飛去又有㆓大伴仙安曇仙二人㆒與㆓久米㆒相後先兩仙菴基今猶在㆓和州㆒贊曰昔婬女誓曰我不㆑跨㆓一角仙頸㆒不㆑出㆑山果然久米見㆓白脛㆒而墜有㆑以矣哉於戲色之毀㆑人也可㆑不㆑愼乎　外のいろ　かりの色也　此段かりの色香とまことの色香とを以て人の心をとらかす事をいへる白氏が古塚の狐の心なるべし然れども六根六塵いづれもみな迷悟のわかるゝ門戸なれば釋氏すでに是を論ず久米の仙人が事は波羅奈國（ハラナイコク）の一角仙人が扇陀女の頸にのれる類なり毘婆沙論に優陀延王あまたの宮女をひきゐて鬱毒波陀山（ウツドクハダセン）にあそびしに五百の仙人虚空をかけりしが此ところをすぎて色を見聲をきゝ香をかぎて神足をうしなひ山林のうちに落る事翼なき鳥のごとし王その宮女を見ゑ事をいかりつるぎをぬきて五百の仙人の手足をきるゆへに仙人眼識退に住するあり耳識退に住するもあり鼻識退に住するもありされば佛の說には眼に色を見ざるを好眼とす耳鼻口も又しかり他の女人をみては我が母のごとく我が姉妹のごとく我がむすめのごとく思はゞいかんぞたはけんやたとへば畫瓶の中に不

淨をもるごとく革囊に血をもるごとく觀じて本來ある所なく四大因緣假合の物なりとおもはゞ色慾を斷の道なるべし然れども見もせず聞もせずかぎもせざらんは眼耳鼻のあるかひなし山谷か桂香をきゝて禪をさとり少陵は妙香をきゝて心清まり莊子は鼻徹を顫とすといひ道宗には鼻神を靈堅と名づく鼻にかぐ所いかんぞ耳目の見聞に異ならんや聖賢の道に鼻にかぐところは四勿九思の外なりといへども惡をさることは惡臭をにくむがごとくし西施が不潔には人みな鼻を掩ふといふ時は物の善惡の鼻より入てまどはす事もさもあるべき事なり

女は髮のめでたからん　詩君子偕老篇〔鬒髮如レ雲不レ屑レ髢也　左傳昭二十八年昔有仍氏女鬒黑而甚美光可二以鑑一名曰二玄妻一　文選西京賦衛后興二於鬒髮一飛燕寵二於體輕一　けはひ　河海に氣の字をよめり日本紀に形勢とかき新猿樂記に景氣と書り　うちあるさま　水鏡にうちある人にだにとあり平人を云なりしかれば常住體の義なりたゞあるさまなるべし　うちとけたるいもねず　拾遺に「君こふる涙のかゝる冬の夜は心とけたるいもにねられず　たゆべくもあらぬわざにも　堪忍すべくもあらぬ事にもよく堪忍するは色を思ふがゆへなり　愛著のみち　恩愛執著なり　六塵の樂欲　眼耳鼻舌身意を六根とし色聲香味觸法を六塵とす　たゞかのまどひ　色欲をさす　いかばかりこひの山路のしげゝれば入と入ぬる人まどふらん　女の髮すぢをよれる綱には大象もよくつながれ　或人云女の髮にて大船をつなぐと云事梵網經の說に有となん女のはける屐にてつくれる笛

鹿笛ノ圖



ある人の申されしは近代參河國安部山人都にのぼり名ある遊女のはける屐をとりて歸り笛につくりて阿邊山中に入これをふくに鹿のおほくよる事常のあしだにて作れる笛よりもまさりてしるしありとかたり傳る　鹿笛の作樣あまたあり鹿のはらごもりの皮を用るもあり又鹿の耳のうちの皮を用る

もよし笛かわけばならず吹とき口にてぬらすなり

太平廣記四百四十三云江陵松滋枝江村射レ鹿者率以ニ陶河烏脛骨一爲レ管以ニ鹿心上脂膜一作レ簧吹作ニ鹿聲一有ニ大號小嗁一呦々之異一或作ニ麀鹿聲一則麌鹿畢集蓋爲ニ牝聲一所レ誘人得ニ殺レ矢而注レ之　山獺と云獸あり其肉補益の功ある事海狗瑣陽肉蓯蓉などよりもはなはだしまれにも得がたき故に獵師女をつれて山中にいり山獺のある所をうかゞふ女木の下にありて是をまつ山獺女の氣をかぎて出來る女はしりにぐ山獺其木をいだきてもだへあがく其木たちまちかる獵師是をとらふといへり此事本草綱目に見えたり鹿の女の屐の笛をきゝしると相似たりみづからいましめて　自警とかくべし。朱文公自警の詩に十年浮レ海一身輕歸對ニ梨渦一却有レ情世上無レ如ニ人欲險一幾人到レ此誤ニ平生一と云へり此詩の心は宋の胡澹菴忠肝義膽ありて秦檜が國政をあやまる事をいきどをり秦檜をきらんといふ表狀を捧しにより南方へ流され十年を經てゆるされ還りし時湘潭にて酒をのむ黎倩と云へる女を顧盻して梨頰生ニ微渦一といへる事を朱子かく作りて自警とせり微渦は咲る顔にゑくぼのあるをいふ黎倩を梨花にたとへたり兼好が色欲のまどひをみづからいましめておそれよといへるは朱子の此詩にをのづからかなひ侍る澹菴が節義秦檜が威をおそれずして梨渦に情なきにあらずまことに鐵作心肝也斷魂とあるは此まよひなり項羽高祖のたけく勇るも虞姫戚夫人に對してなみだを流し周郎が赤壁にて孟德をやぶりしも小喬にまどはずしもあらずまして況や其外の人誰かよく色欲を斷んや朱子のみづからいましめられしはまことに大賢君子の心なるべし

家居のつき〲しくあらまほしきこそかりのやどりとはおもへど興ある物なれよき人ののどやかに住なしたる所はさし入たる月の色も一きはしみ〲と見ゆるぞかしいまめかしくきらゝかならねど木立物ふりてわざとならぬ庭の草も心あるさまにうちある調度もむかしおぼえてやすらかなること心にくしとみゆれおほくのたくみの心をつくしてみがきたて唐の大和のめづらしくえならぬ調度どもならべをき前栽の草木まで心のまゝならずつくりなせるは見るめも

くるしくいとわびしさてもやはながらへ住べき又時のまゝ烟ともなりなむとぞうち見るよりおもはるゝ
大かたは家居にてそことざまはおしはかられ
つき〳〵しく　さもありぬべき義也俗につきのよきといへり　かりのやどり　逆旅(ゲキリヨ)　寄寓　さし入たる月のいろ　背山の山人の歌に「たえてやは人は忍ばん草の庵に月もすみけり我もすみけり此歌にて此段を見るべし　いまめかしくきらゝかならねど　うるはしくみがきたてたるにはあらねどもといふ意なり　木だち物ふりてわざとならぬ庭の草わざとならぬとはとりつくろはず自然の體なり陶淵明が眄ニ庭柯一以怡レ顔といひ又木欣々以向レ榮といひ周茂叔が窓前草はらはずして自家の意思と一般なりといへるおもひやられ侍る　すのこ　簀子(スノコ)と書　すいがい　すいがきなり透垣とかく　でうど◯調度とかけりゑぼしかけのやうなる物をいふと云人あれども只一切の手まはりの道具をいふなるべし菊亭の右府にて中獅要略抄をみ侍りしに調度懸一人二人若干人とありそれを持てありく奉行人を云と見えたり　おほくのたくみの心を盡して　家を華麗に作れるを云　唐の日本の　唐物日本物の色々の器を云　前栽　草木まで心のまゝならず　枝をため葉をすかしわざとつくろいたてたる體也　ながらへ住べき又時のまのけふりともなりなん　白樂天履道居詩莫レ嫌地窄林亭小莫レ厭家貧活計微多少朱門鎖ニ空宅一主人到了不ニ終歸一又呉融廢宅詩不ニ獨凄涼眼前事一咸陽一火便成レ原
おほかたは家居にこそ　家を作るの式様は居家必用と云ふみに見えたり雅尚齋が燕閑は遵生八牋にのせたり其人に相應すべき家居にて其上に好む所はあるべし春秋に桓宮の楹に丹ぬりたるきを刻(キザム)ことをいましめ論語に臧文仲が居蔡をそしりて公子荊が居室をよしとほめたり

後徳大寺大臣の寝殿に鳶ゐさせじとて縄をはられたりけるを西行が見て鳶のゐたらん何かはくるしかるべき此殿の御心さばかりにこそとてそのゝちはまいらざりけると聞侍るに綾小路宮のおはします小坂とのゝ棟にいつぞや縄をひかれたりしかばかのためし思ひ出られ侍しに誠や烏のむれゐて池のかへるをとりければ御覧じかなしませ給ひてなんと人のかたり

してさてはいみじくこそと覺しが德大寺にもいかなるゆへか侍りけん

後德大寺のおとゞは實定公也　西行東鑑六云佐藤兵衞憲清法師今號ニ西行ト保延三年八月遁世云々即秀郷九代嫡孫也陸奥守秀衡入道者上人一族也　非蛙抄曰德大寺に歌の間といふ所有寢殿の西の角の間也是後德大寺左府の西行に被ㇾ對面ける所也

綾小路宮　烏のむれゐて　白樂天大嘴烏詩探ㇾ巢呑ニ燕卵ヲ入ㇾ簇啄ム蠶虫ヲとあればかへるをとりくふのみにあらず

神無月の比栗栖野といふ所を過てある山里にたつね入事侍しに遙なる苔のほそ道をふみわけて心ぼそくすみなしたる菴あり木の葉にうづもるゝかけ樋のしづくならでは露をとなふ物なし閼伽棚に菊紅葉など折ちらしたるさすがにすむ人のあればなるべしかくてもあられけるよとあはれに見るほどにかなたの庭におほきなる柑子の木の枝もたはゝになりたるがまはりをきびしくかこひたりしこそすこしことさめて此木なからましかばとおぼえしか

栗栖野　醍醐の邊也又沙門常曉山城國小栗栖路傍棄子也と釋書にあり萬葉さし板のくるすのをのゝ萩の花散なん時に行て手向ん　閼伽棚　閼伽は水の梵語也阿伽共書　枝もたはゝに　枝のたはむ事なり古今「おりて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたはゝにをけるしらつゆ　杜子美呈ニ呉郎ニ詩堂前撲ㇾ棗任ニ西鄰ニ無ㇾ食無ㇾ兒一婦人不ㇾ爲ニ困窮ニ寧有ㇾ此祇緣ニ恐懼ニ轉須ㇾ親即防ニ遠客ニ雖ニ多事ニ使ㇾ插ニ疎籬ヲ却甚眞已訴ニ徵求貧到ㇾ骨正思ニ戎馬ヲ涙盈ㇾ巾

呉郎と云もの來て子美が瀼西の家に居れり其堂前に棗あり西鄰の寡婦ぬすみとりてくらふ事は貧しきゆへにかくする也彼おそるべき程にしたしみて念比すべしまして制禁すべからずされども他寇盜のふせぎのために籬をばゆふべし棗をうつを停止するにはあらず此婦の貧困を見て世間の兵亂を思ひ出しかなしむと也子美が此心を推廣めば仁政なるべし文王の園へ芻蕘者雉兎者の行も此心なるべし子美が棗をおしまざるは兼好が栗栖野の山里の柑子をかこひたるをきらへる心に通せり

此段山家の景氣をよくうつしてあらまほしきやうにおぼえしに柑子をきびしくかこひしを見て思ひ

おとりせられけるさもありなんされども山林は法禁は非常のぬす人をふせぐそなへいにしへよりなきにもあらずくだ物をおしむもの世におゝかりもろこし和嶠がすもゝはさねをかぞへて錢をはとり王安豐がすもゝは人のうへん事をきらひてさねをきりてうる陸龜蒙が橘は野人にわかたず王儉が帳下には柑子たゞれたり皆これ愛惜するところあれどもいやしからぬにはあらず日本にも萬壽の北六波羅密寺の沙門講仙庭前に橘をうゑて常に愛し翫びしかば死して後蛇となりて橘樹の根をまとひてありけるとなん

おなじ心ならん人としめやかに物語しておかしきことも世のはかなき事もうらなくいひなぐさまむこそうれしかるべきにさる人有まじければ露たがはざらんとむかひゐたらんはひとりあることゝちやせんたがひにいはんほどの事をばげにと聞かである物からいさゝかたがふ所もあらん人こそ我はさやは思ふなどあらそひにくみさるからさぞともうちかたらはゞつれ／＼なぐさまめとおもへどげにはすこしかこつかたも我とひとしからざらむ人は大方のよしなしごといはんほどこそあらめまめやかの心の友には遙にへだゝる所の有ぬべきぞわびしきや

うらなく　表裏もなきなり心底を殘さゞる義なるべし　つゆたがはざらん　すこしもたがはざらんとなり　かこつとはたがひにとやかくやとすこしいひあらそふ義なるべし朋友には切々偲々するこゝろにや　われとひとしからざらん　伊勢物語「おもふことといはでぞたゞにやみぬべきわれとひとしき人しなければ

此段をのれをしれる友と心に思ふ事を殘さず物語せんにたがひに評論するうちにすこしあらそふ所あるはすなはち益友なるべし其人まれなれば心へだゝる人にたちむかはんは面友なるべし

ひとり燈のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞこよなうなぐさむわざなる文は文選のあはれなる卷々白氏文集老子のことば南花の篇此國の博士どものかける物もいにしへのはあはれなる事おほかり

ともし火のもと　韓退之が符讀書城南詩云時秋積雨霽新涼入郊墟灯火稍可親簡篇可卷舒

ふみをひろげて　攤（ヒログ）展（ヒロゲ）見ぬ世の人を友とする

唐書狄仁傑爲レ兒時門人有ニ被レ害者一吏詰衆爭辯對仁傑誦レ書不レ置吏責レ之仁傑曰黄卷中方與ニ聖賢一對何暇偶ニ俗吏一語耶　司馬溫公獨樂園記迂叟平日讀レ書上師ニ聖人一下友ニ群賢一　こよなう　無超と書りこゆることなき也八雲抄にはるかにと云義なり　文選　梁武帝子昭明太子の撰ところ也周の末より六朝までの詩文をあつむ卅卷あり唐の李善是を注して世にひろむ李善が本に呂延濟劉良張銑呂向李周翰五人の注をくはへて六臣註と名付六十卷とす李善が註なきをば五臣註と號す日本にてむかしより讀來る中にことに菅家の點じ給ふをよしとす　白氏文集　唐の白樂天が集也わかき時より長慶年中までの詩文をあつめて白氏長慶集と名づく五十卷にて五帙とす元稹序あり長慶以後のを加へて七十五卷とし白氏文集と名づく今の世に行はるゝは七十一卷あり十帙とせり帙は書衣なり書籍をつゝむもの也渤海の使者來りて菅丞相の詩を見て白樂天に似たりといひければ丞相よろこび給へりとなん詠歌大概にも白氏文集第一第二の帙常に握翫すべしとあり　老子　姓は李名は耳字は伯陽又老聃とも名づく楚國の人なり周に仕へて柱下史となる周を去て西にゆく時函谷關にて關令尹喜に逢五千言をあらはし授く今の老子經是なり八十一章あり漢の河上公是を註す又は道德經とも名づく宋の末に林希逸口義あり　南華の篇　莊周字子休宋人也隱遁して書を著す皆老子道德の意にもとづく三十三篇あり南華眞經とも名づく晉の郭象是を注し唐の玄英が疏あり宋の林希逸が口義あり莊子が文章は古今の奇筆也老子も莊子も史記に傳あり　此國の博士ども　博士は博學得業の人也官位令に紀傳明經明法算道の四家各博士をたてたり日本の博士どもの文集には懷風藻一卷經國集二十卷本朝文粹十四卷續本朝文粹十四卷文華秀麗集三卷無題詩十二卷此類多し又一家にては野相公が集菅家文草善相公が集都氏が文集江吏部集橘在列集源順集などの類なるべし

此段一本に文は文選老子の詞とありてあはれなる卷々白氏文集とあるをけしたりいかゞおぼつかなし

和歌こそなをおかしき物なれあやしのしづ山がつの

しわざもいひ出つればおもしろくをそろしき猪のしもふす猪の床といへばやさしくなりぬこの比の歌は一ふしおかしくいひかなへたりと見ゆるはあれどふるき歌どものやうにいかにぞやことばの外にあはれにけしきおぼゆるはなし貫之がいとによる物ならなくにといへるは古今集の中の歌くづとかやいひつたへたれど今の世の人のよみぬべきことからとはみえず其世の歌にはすがた言葉このたぐひのみおほし此歌に限てかくいひたてられたるもしりがたし源氏物語には物とはなしにとぞかける新古今にはのこる松さへ峯にさびしきといへる歌をぞいふなるはまことにすこしくだけたるすがたにもやみゆらんされど此歌も衆議判の時よろしきよし沙汰ありて後にも特更に感じ仰下されけるよし家長が日記にはかけり歌の道のみいにしへにかはらぬなどいふ事もあれどいざや今もよみあへるおなじ詞歌枕もむかしの人のよめるはさらにおなじ物にあらずやすくすなをにして姿もきよげにあはれもふかくみゆ梁塵秘抄の郢曲のことばこそ又あはれなる事はおほかめれ昔の人はたゞいかにいひすてたることぐさも皆いみじくきこゆるにや

和歌こそなをのなをの二字なき異本ありもし前段と此段を一段とせばなをの字は文選老子などにあたりてかけたる詞なるべし　おかしきは　おもしろきなり　おそろしき猪　八雲抄寂蓮法師が云けるは歌のやうにいみじき物なしゐのしゝなどいふおそろしきものをもふすゐの床などいひつればやさしき也ましてやさしき物をおそろしげにいひなす無下の事なり　詞の外に　子貢は貧して樂むことを聞て詩を引子夏は詩を聞て禮を後とすることを知るされば楊龜山曰非下得二之言意之表一者上能レ之乎商賜可三與言二詩者以レ此也　和歌をよむものも又かくぞあるべき　貫之がいとによるものならなくに　古今第九羇旅部にあづまへまかりける時道にてよめる「糸によるものならなくに別路の心ぼそくもおもほゆる哉貫之　古今集の中の歌くづ　源氏物語にはものとはなしに　源氏總角にわがなみたをば玉にぬかなんとうちずし給へるいせのごもかうこそはありけめとおかしう聞るもうちの人は聞しりがほにさし答へ給はんもつゝましうて物

とはなしにと貫之が此世ながらのわかれをだに心ぼそきすぢにひきかけゝむをなどげにふる事ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出給ふ此物語は紫式部が作也貫之が物ならなくにをものとはなしにとあらため書たり　新古今にはのこる松さへ

祝部成仲が歌に「冬のきて山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯に淋しき　家長　後鳥羽院の時の人也新古今源家長和歌所開闔に成てはじめて參りし日奏し侍し「藻鹽草かくともつきじ君が代の數に讀(ヨミ)をく和歌の浦波　家長は高明公の十代の孫なり(右馬助 前但馬守)　歌のみちのみいにしへにかはらぬ八雲抄に西行がゆめにもいづれのわざもおとろへ行にたゞ此道計末代に絶べからずと見えたりといへり　いさや　不知と書りいにしへにかはらぬと云事をぼしらずとなり　歌枕　源氏玉かづらによろづの草子歌枕とあり花鳥に歌枕とは名所の歌をあつめたるをいへり能因法師が五代集の歌枕ありこゝにては詞のつゞき枕詞などの事を云べし　梁塵秘抄　後鳥羽院の御作也神樂催馬樂の類をえらびあつめ給ふ也後成恩寺殿の註あり杜佑通典百四十五云漢有二虞公一善歌能令二梁上塵一起上　博物志第八云秦青撫レ節悲歌聲震二林木一響遏二行雲一謂二其友一曰昔韓娥東之レ齊遺レ糧過二雍門一鬻レ歌假レ食而去餘響遶梁三日不レ絶云々故雍門人至レ今善歌哭效二娥之遺聲一也　此故事によりてうたひものを梁塵といふ也　郢曲　元稹か梅詩に郢曲琴空奏瀛奎律髓に載たり　文選宋玉對二楚王問一客有下歌二於郢中一者上其始曰二下里巴人一國中屬而和者數千人其爲二陽阿薤露一國中屬而和者幾百人其爲二陽春白雪一國中屬而和者數十人引レ商刻レ羽雜以二流徵一國中屬而和者不レ過二數人一而已是其曲彌高而和彌寡郢は楚國の都也是より歌謠を郢曲と云也　ことぐさ　言種と書此段と前段と合せて一として見んもよかるべし文章詩賦和歌郢曲の事をいふ中にいにしへをしたひて今を議せりみぬ世の人といひいにしへのはあはれなるといひ此比の歌はといひふるき歌どものといひ今の世の人といひその世の歌にはといひ古にかはらぬといひいざや今もといひむかしの人のといひむかしの人はといひていくたびも昔をあはれがりて今はいかにと評論するなり

いづくにもあれしばし旅たちたるこそめさむる心ちすれそのわたりこゝかしこ見ありきゐながびたる所山里などはいとめなれぬ事のみぞおほかる都へたよりもとめて文やる其事かゝ事便宜にわするなゝどいひやるこそおかしけれさやうの所にてこそ萬に心づかひせらるれもてる調度までよきはよく能ある人かたちよき人も常よりはおかしとこそ見ゆれ寺社などに忍びてこもりたるもおかし

神樂こそなまめかしくおもしろけれおほかたものゝねには笛篳篥常に聞たきは琵琶和琴

神樂のおこりは天照大神天の岩戸をさしてこもり給ひし時天下とこやみになりければ諸神いのり申されけるに天鈿目命まさきのかづらをかづらとしひかげをたすきとしてうたひまひ庭燎をたきしより事はじまれり古語拾遺に見えたり梁塵秘抄には「深山にはあられ降らし外山なるまさ木のかづら色つきにけりとあるを庭燎の歌にのせられたり又内侍所の御神樂は一條院の時よりおこりて隔年に行はる承保より毎年に行はる壽永の亂に内侍所西國へわたらせ給ひて三年を經て都へかへり給ひければ三ヶ夜の御神樂あり是は別して臨時におこなはるさて此所にて御神樂の時主上行幸あり庭燎をたき本末の座をまうけ笛篳篥本末のうた和琴次第に拍子なんどとりて舞うたふ事どもくはしく公事根源抄に見えたり　和琴　一にはあづまごとゝも名づく昔神代には弓六張をならべてひきけるを後に琴につくりて六絃をかけて彈ずるなり日本にてもろ〳〵の樂器のかしらたるにより花鳥餘情の序にあづまをもろ〳〵の器のうへにをき紫をよろづの色のなかにたとふとあり　つねにきゝたきは琵琶和琴とあるを一本に常にきゝたきはびさわうみやいちとあり毘沙王宮一と書り

山寺にかきこもりて佛につかふまつるこそつれ〳〵もなく心のにごりもきよまる心地すれ

人はをのれをつゞまやかにしておごりを退けて財をもたず世をむさぼらざらんぞいみじかるべきむかしよりかしこき人の富るはまれ也もろこしに許由といひつる人はさらに身にしたがへるたくはへもなくて水をも手してさゝげて飲けるを見てなりひさごといふ物を人のえさせたりければ有時木の枝にかけたり

ければ風にふかれてなりけるをかしかましとてすてつ又手にむすびてぞ水ものみけるいかばかり心のうちすゞしかりけん孫晨は冬月に衾なくて藁一束ありけるを夕には是にふし朝にはおさめけりもろこしの人はこれをいみじと思へばこそしるしとゞめて世にもつたへけめこれらの人はかたりも傳ふべからず

つゞまやか　約の字也儉約を守る也　むかしよりかしこき人のとめるはまれなり　孟子滕文公上篇に爲レ富不レ仁矣爲レ仁不レ富矣とあり伯夷叔齊は首陽の下に飢顔淵はいやしき巷にありて糟糠にだもあかず閔子騫は蘆花の絮うすく原憲は桑のとぼそ雨もり子夏はうづら衣をつゞり南華老人は粟を監河侯にかり五柳先生は環堵の風にたえがたく浣花翁は家破れて常に傘をもてり陳後山は衣をしりぞけて寒えたりかうやうの人おほかり　許由　堯天下をゆづらんとの給ひけれども受ずして去事莊子に見たり　高士傳許由隱二箕山一以レ手捧レ水飮レ之人遺二一瓢一得以取飮々訖掛二於樹上一風吹歷々作レ聲尙以爲レ煩遂去レ之　なりひさご　ふくべ也和名集に云瓢奈利佐古掛レ水器也　心のうちすゞしかりけん　心の清涼なる也白樂天が詩に但能心靜即身涼　孫晨　蒙求云孫晨字元公家貧織レ席爲レ業明二詩書一爲二京兆功曹一冬月无レ被有二藁一束一暮臥朝收

もろこしの人はこれをいみじとおもへばこそ　代々の史を見るに太史公が伯夷傳を作りしより後世の筆をとれるもの隱逸のものゝために傳をたてずといふ事なしもとより濁富の清貧にしかざる事をさとれるにやちかごろ大明の高濂が八牋の終りに塵外遐擧牋をあげて古今の間世をさりて天下をかろんじ或は俗をのがれて貧賤をあまなふもの百餘人をのせたりいみじとおもへるにあらずや

折節のうつりかはるこそものごとにあはれなれもののあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれどそれもさる物にて今一きは心もうきたつものは春のけしきにこそあめれ鳥の聲なども事の外に春めきてのどやかなる日影にかきねの草もえいづるころよりやゝ春ふかく霞わたりて花もやう〳〵けしきたつほどこそあれ折しも雨風うちつゞきて心あはたゞしくちりすぎぬ青葉になり行までよろづにたゞ心をのみぞなやます花たちばなは名にこそおへれなを梅のにほひ

にぞいにしへの事も立かへりこひしうおもひいでらるゝ山吹のきよげに藤のおぼつかなきさましたるすべて思ひすてがたきことおゝし灌佛の比祭の比わか葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ世のあはれも人の戀しさもまされと人のおほせられしこそげにさる物なれ五月あやめふく比早苗とるころ水雞(クヒナ)のたゝくなど心ぼそからぬかは六月の比あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり六月祓又おかし七夕まつるこそなまめかしけれやう／＼夜寒になるほど雁なきてくるころ萩の下葉色づくほどわさ田かりほすなどとりあつめたる事は秋のみぞおほかる又野分のあしたこそおかしけれいひつゞくればみな源氏物語枕草子などにことふりにたれどおなじ事又今さらにいはじとにもあらずおぼしき事いはぬははらふくるゝわざなれば筆にまかせつゝあぢきなきすさびにてかひやりすつべき物なれば人の見るべきにもあらずさて冬がれのけしきこそ秋にはおさ／＼をとるまじけれ汀(ミギハ)の草に紅葉のちりとゞまりて霜いとしろふをける朝やり水より烟のたつこそおかしけれ年のくれはてゝ人ごとにいそぎあへる比ぞ又なくあはれなるすさまじき物にして見る人もなき月のさむけくすめる廿日あまりの空こそ心ぼそき物なれ御佛名荷前の使たつなどぞ哀にやんごとなき公事ともしげく春のいそぎにとりかさねてもよほし／＼おこなはるゝ樣ぞいみじきや追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれつごもりの夜いたうくらきに松どもともして夜半すぐるまで人の門たゝきはしりありきて何事にかあらんこと／＼しくのゝしりてあしをそらにまどふが曉がたよりさすがに音なく成ぬるこそ年のなごりも心ぼそけれなき人のくる夜とて玉まつるわざは此比都にはなきをあづまのかたにはなをする事にて有しこそあはれなりしかかくて明ゆく空の氣色昨日にかはりたりとは見えねどひきかへめづらしき心ちぞする大路のさま松立わたして花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ

折節のうつりかはる　此段兼好みづから枕草子源氏物語に似たるやうにいへど其筆力いかでか清紫二女の彫管(トウクハン)におとらんや源氏幻卷にとりわき十二ヶ月の感哀をしるせり　ものゝあはれはあきこそまされ　拾遺「春はたゞ花のひとへに咲計物の哀

は秋ぞまされる　源氏春秋のあらそひに昔より秋に心よするひとはかずまさりけり　白樂天詩大底四時心總苦就レ中腸斷是秋天　心もうきたつものは春のけしき　東坡が妻王夫人汝陰堂にて春夜の月を玩ひ春月は秋月にまされりといへること趙德麟が侯鯖錄に見えたり月さへ春は秋にまされりと云人ありまして花鳥のいろも音もあるをや　鳥の聲なども　陳圖南野花啼鳥一般春といへる詩にもかよへり又東坡が詩に春山磔々鳴ニ春禽ー此間不レ可無ニ我吟ー　のどやかなる日影　長閑と書り　東坡內制集五云仙家日月本長閑送レ臘逐レ春豈亦然杜子美が詩に遲日江山麗春風花草香とあり　やゝ春ふかく　やう〳〵春ふかふなるなり二月のころをいふ　ちりすぎぬる青葉　王駕が詩に云雨前初見花間葉雨後兼無ニ葉底花ー只心をのみぞなやます　王荊公が春色惱レ人眠不レ得といへるにもかよふべし　はなたちばなは名にこそおへれ　名にこそ立たる也　古今に「さ月待花橘の香をかげば昔の人の袖のかぞする　なを梅のにほひ　花橘の昔を忍ぶはさる事なれどもなを梅の匂ひに昔も戀しき也「梅

花あかぬ色かも昔にておなじかたみの春のよのつき　梅のにほひにむかしこひしう思ふ事　もし色このみの家よりいはゞ梅の花のさかりに去年をこひて西對へいきしは在中將也維浮の梅花の本にて淡粧素服の人と酒もりせしは趙師雄にあらずやもし又世をいきどほるものよりいはゞひとり花をひねりて香をかぐものは義之彥謙が徒にあらずやもし又詩人の家よりいはゞ前村の一拔園林の半樹いかで雪の時の昔をおもはざらん　山吹のきよげに

灌佛のころ　是より夏のことをいふ也灌佛は四月八日におこなはる此佛生會は推古天皇よりはじまる釋迦如來の倶毘藍城にて生れ給ひける時天龍下て水をそゝぎて釋尊にあぶせ奉しことを申なり公事根源に見えたり　尊生八牋第三引ニ玄樞經ー曰二月初八日乃佛生日也周建レ子以ニ子月ー爲ニ歲首ー是以ニ十一月ー爲ニ正月ー也莊王九年四月初八日釋迦生以レ子至ニ卯月ー是今二月也二月八日爲ニ佛生辰ー無レ疑々不レ知者不レ考ニ歲首建支ニ猶以ニ四月ー爲ニ成規ー何其謬歟　祭のころ　賀茂の祭を云也賀茂の國祭は四月中の申日おこなはる是賀茂の本祭成べし賀茂祭

は中の酉日おこなはる人々あふひかづらをかけて祭る也前日に賀茂松尾の社司此あふひをさゝぐる也此祭は欽明天皇より始る又申日に關白の賀茂詣と云事もあり皆公事根源に見えたり　若葉の梢涼しげに　白樂天詩綠樹陰前逐ニ晩凉一　五月あやめふくころ　天平十九年五月に勅ありて百官諸人ことゞゝく菖蒲の蘰(カツラ)をかくべしかけざらん物は宮中に入べからずと定めらる弘仁式にも五月三日平旦に菖蒲よもぎ花など南殿の前におくとあり公事根源にみえたり　拾芥云五月四日主殿寮葺ニ內裡殿舍菖蒲ニ事文類聚前集云端午以ニ菖蒲一或縷或屑泛レ酒又云端午刻ニ菖艾一爲ニ小人子或葫蘆形一帶レ之辟レ邪王沂公帖子云明朝知是天中節旋刻ニ菖蒲一要レ辟レ邪　荊楚記云五日以レ艾縛ニ一人形一懸ニ于門戶上一以辟ニ邪氣一　早苗とる　躬恒歌「昨日こそさなへとりしかいつのまにいなばもそよと秋風ぞふく　白樂天詩碧毯線頭抽ニ早稻一　水鷄のたゝく　たゝくとは鳴なり「まだ宵にうちきてたゝく水雞哉たが門さしていれぬ成らん　源氏明石に春秋の花紅葉のさかりなるよりはそこはかとなく茂れるかげどもなまめかしきに水鷄のうちたゝきたるはたが門さしてとあはれにおぼゆとあり　あやしき家に夕がほの　源氏夕貌卷にかの白くさけるをなん夕がほと申侍る花の名は人めきてかうあやしき垣ねに咲侍ると申　夕顏卷に住侍る人夕がほの花をからの歌にもつくりけるかと背山の山人に尋ければそこの文そこの卷に有とて告られしかば悅びて其卷をひらき見る世中の人はふみを見てもむかし晉書をよむものゝ額(ガク)の名につくらん字をおぼえざるがごとく我もさにこそあれといと口をしよくぞおしへ給ひけるいつか忘れ侍らん杜子美が除架の題注に瓠架なりとあり其詩に云東薪已零落匏葉轉蕭疎幸結ニ白花ニ了寧辭ニ靑蔓除一秋虫聲不レ去暮雀意何如寒事今牢落人生亦有初杜が集は人の家ごとにあれど今の人はよく讀てしるものすくなし此時夕顏卷の歌と言葉とを書て給へり　蚊遣火　古今戀歌「夏なれば宿にふすぶるかやり火のいつまで我身下もえにせん　詩學大成蚊詩幾回揮レ扇摩難レ去纔被ニ薫烟即便レ除　拾遺風體抄慈鎮歌「しづのおがけふりいぶせき蚊遣火にすゝけぬ物はゆふがほのはな

六月祓　八雲抄に云六月祓邪神をはらへなだむる故になごしと云なり河邊に五十串(イクシ)たてあさの葉などにてする也夕又夜する事也後撰に「賀茂川のみなそこ清て照る月を行てみんとや夏ばらへする題はみな月ばらへしに河原にまかり出て月のあかきをみてといへりしかるを六月晦也そこすみて照る月如何詠べしとあり定家卿の注云みな月ばらへ明月之由人疑レ之古人六月之比必出ニ川原ニ臨レ祓又納涼及絲竹之遊及歌詩之興恒例也不レ限ニ晦日ニ是稱ニ皆月祓ニ長元之比或人記御倉小舍人來可レ參ニ皆月祓ニ之由催レ之件祓六月十三日也　公事根源に云大祓は六月晦日百官ことごとく朱雀門にあつまりて祓をする也六月十二月二たびあり天武天皇の御時より始る又今日家々に輪をこゆることあり「みな月の名越のはらへする人は千歳のいのちのぶといふ也此歌を唱るとぞ申傳へ侍るしかるに法性寺關白の記に「思ふ事みなつきねとてあさのはをきりにきりてもはらへつるかな此歌を詠べしと見えたり　延喜式第八に六月晦日大祓の祝詞をのするを見るに今ト部の家に中臣祓といへるに大同にして首末の言葉小異也六月に閏月あらば祓いつおこなはれんやといふに後の六月に有べしといふこと東鑑に見えたり　七夕まつる　是より秋のことををいふ也　公事根源云七月七日の夜おこなはる天平勝寶七年より始まる乞巧奠とも七夕祭とも云也今夕は牽牛織女の逢夜なれば烏鵲天河にきたりて翼をのべ橋となして織女をわたすこと淮南子續齊諧記などに見えたり香花をそなへ供具をとゝのへて庭上に文をおき竿のはしに五色の糸をかけて事をいのるに三年の内に必かなふと云り此故に乞巧と申也　風土記曰七月初七夜洒ニ掃中庭ニ施ニ几莚ニ設ニ酒脯ニ牽牛織女相會守レ夜者咸懷ニ私願ニ或曰見ニ天漢中ニ有ニ奕々白氣光曜五色ニ以レ此爲ニ徵應ニ見者便拜願乞レ富乞レ壽無レ子者乞レ子惟得レ乞レ一不レ得ニ兼求ニ三年乃得　やうやう夜さむに　八月の比也　雁なきてくるころ　月令云仲秋之月鴻雁來　萩の下葉色づくほど　季秋の比也　おぼしき事　世繼序におぼしき事いはぬはげにぞはらふくるゝ心ちしけるかゝればこそむかしの人は物いはまほしくなればあなを堀てはいひいれ侍りけめ　かいやり

すつべき　書やりすつるなり　さて冬がれの氣色　是より冬をいふ　をさ〳〵　源氏物語に多き詞也頗と云こゝろなり　すさまじき物にして　源氏あさがほの巻に時々につけて人の心をうつすめる花紅葉のさかりよりも冬の夜のすめる月に雪のひかりあひたる空こそあやしういろなきもの丶身にしみて此世の外のことまで思ひながされおもしろさもあはれさものこらぬおりなれすさまじきためしにいひをきけん人の心あさゝよとてみすまきあげさせ給ふ　總角によの人のすさまじきことにいふなるしはすの月よのくもりなくさしいでたる　河海云清少納言枕草紙にすさまじき物しはすの月夜おうな(嫗老女也)のけさう又十列冷物に十二月々夜扇等あり篁が日記にしはすのもち月の比月いとあかきに物語しけるを人みてこれぞあなすさまじしはすの月夜にもあるかなといひしもぞあはれなりける　御佛名　十二月十九日より廿一日まで三ヶ日なり或は一夜も例あり此佛名と云は三世の諸佛の名號を唱て六根の罪を滅する心也誠に佛名經にとかるる所の功德ははかりなきにや寶龜五年十二月より始る承和の比は毎年佛名三ヶ日の間は諸國にて殺生禁斷のよし格に見えたり委く公事根源に載たり　元亨釋書九釋靜安從ニ西大寺常騰一學ニ法相一嘗居ニ比良山一讀ニ十二佛名經一禮拜修懺其聲聞ニ帝闕一諸州間有ニ聞者一因レ茲勅賜ニ僧官一承和五年奏置ニ宮中季冬佛名懺一　荷前(ノザキ)　十二月吉日を撰ぶ先十三日につかさ〳〵をかねて定らる使は公卿のも殿上人のもあり荷前とは十陵八墓に年の終りに幣帛を奉らせ給ふ也先十陵の第一は天智天皇の御さゞき山城國山階にあり昔此帝御馬にめされて山しなの里に行幸有て其まゝ還り給はざりき然るに崩所をいづくともしる人なし唯御沓のをちとゞまりたる所に陵をぞたてけるいと不思議なることにて侍りき其外は白壁天皇の田原のみさゞき桓武天皇の柏原の陵崇道天皇の八しまの陵仁明天皇深草のみさゞきなど也さのみはしるすに及ばず　延喜式祈年の祓の祝詞に荷前と書てはつほと讀り　公事　禁中に行はるゝまつりごと也　追儺　公事根源云十二月晦に行はる今日はなやらふ夜なれば大舍人寮鬼をつとめ陰陽寮祭文をもて南殿の邊につきてよ

むト卿以下是をおふ殿上人ども御殿の方にもて桃の弓葦の矢にてゐる仙花門より入て東庭をへて瀧口の戸に出づ今夜御所にともし火を多くともす東庭朝餉臺盤所のまへのみぎりに燈臺をひまなくたてゝともすなり追儺と云は年中の疫氣を拂心也鬼といふは方相氏のこと也四目ありておそろしげなる面をきて手に楯矛をもつ又侲子とて二十人紺の布衣着たるものを卒て内裏の四門をまはる也慶雲二年十二月に初まる此年天下に百姓多く疫癘に惱され侍りしゆへなり　案ずるに儺は疫をおいはらふことと也戯のやうなれどもいにしへの禮にて周禮禮記論語にものせたりそれより後世々の禮儀志にしるさずと云事なし殊更文選にのせたる張衡が東京賦に詳なり其辭曰卒歳大儺驅ニ除群癘一方相秉レ鉞巫覡操レ茢侲子萬童丹首玄製桃弧棘矢所レ發無レ臬飛礫雨散剛癉必斃煌火馳而星流逐ニ赤疫於四裔一然後凌ニ天池一絶ニ飛梁一捎ニ魑魅一斮ニ獝狂一斬ニ蜲蛇一腦ニ方良一囚ニ耕父於清冷一溺ニ女魃於神潢一殘ニ夔魖與ニ罔象一殪ニ野仲一而殲ニ游光一八靈爲レ之震慴況魃蜮與ニ畢方一度朔作梗守以ニ鬱壘一神荼副焉對操ニ索葦一目ニ察區陬一司ニ執遺鬼一京室密清罔レ有レ不レ韙云々後又漢志第五卷にもあり　四方拜　公事根源云元正の寅の時天皇屬星をとなへ天地四方山陵を拜給て年災をはらひ寶祚を祈申さるゝ儀にて侍にや此事いつ始るとも見えず仁和五年正月寅刻に天地四方屬星山陵を拜し給ふ由宇多帝の御紀にあれど濫觴とは見えず又皇極天皇雨を祈給ふとて南淵河上に行幸ありて四方を拜し給ひければ雨五日までふりくる由日本紀に載たればこれなどをや始とも申べからん其上屬星を拜して災難を除く趣は天地瑞祥志といふ書にも見えたり　足を空にまとふ　いそがはしくありく義なり源氏あふひの卷にあしを空にてたれも〳〵まかで給ひぬ　なき人のくる夜とて玉まつる　曾禰好忠が歌「玉まつる年のおはりに成にけりけふには又やあはんとすらむ此歌拾遺にも有たまは魂魄を云也鎭魂と書て玉しづめと讀り　明ゆく空のけしき　年の終までをいひ盡して又春に立かへりたることをこゝにいふ此段の發端に折節のうつりかはると書出したるによく相應せりをんな文字に書るも男文字の文法に異ならず是

を常山の蛇の首尾相救ふといふ又此段秋と冬との間に源氏枕草子の例をひく是もゆるやかにしてつまらぬ筆法なり　大路のさま松たてわたし　素盞烏尊の南海へかよひ給ひし時宿を巨旦將來にかり給ひけれどもかし奉らず蘇民將來やどをかし奉る其後尊いかりて巨旦をころし其家をほろぼさる是を後の世までのしるしとせんとて巨旦が墓の上に生たる松を年の始に門に立る也此事晴明が簠簋內傳に見えたり

此段四季のうつりゆく次第風物景氣の形容筆にまかする所おもしろく覺え侍る貫之が梅をかざすよりはじめて郭公をきゝ紅葉をおり雪を見るに到るまでといひ曾丹が「あらたまの年のみそぢにあまるまで春はちりほふはなをおしみかね秋はおつる木の葉に心をたぐへ夏はうはひもさゝて風に向ひ冬はさびしき宿にむもれゐてあれたるやどの隙をわけ過ゆく月のかげをかずへつゝあけてはくるゝひさかたの月日をのみもすぐすかなといふむかしの人の四季をいひのべたるは猶も多かるべし其後清紫の二婦人をおきては兼好が詞すぐれ侍る詩文にも又かくぞ有べき顧凱之が四澤の水奇峯の雲明暉の月孤松の嶺東坡先生が四時の詞に到るまで節序を感せずといふ事なしちかごろ雅尙齋が四時の幽賞こそ今一きわあはれなることそおかしけれ　容齋隨筆十四云士之處レ世見二紛華盛麗一當レ如下老人之撫中節物上以二上元清明一言レ之方二少年壯盛一晝夜出游若レ恐レ不レ暇燈收花暮輙帳然移レ日不レ能レ忘老人則不レ然未三嘗置二欣戚於胷中一也　かくのごとくなるに至らん事は誠に柴立灰心の者にあらずんばかたかるべし兼好が心もそれをしたふといへど又花鳥に涙をそゝぎ心をうごかすの感慨あるべし

なにがしとかやいひし世すて人の此世のほだしもたらぬ身にたゞそらの名殘のみぞおしきといひしこそまことにさておぼえぬべけれ

なにがし　某の字を讀べし　此世のほだし　古今「世のうきめ見えぬ山路へいらんには思ふ人こそほだし成けれ　もたらぬ身に　もたぬ身也　空の名殘　年月のうつりゆく空を名殘おしく思ふと也李白は豪放の謫仙人なれども餘春を惜む事あり或人のかたりしは大德寺の僧一休身まかる時に

草木までなづかしといひけるとなん此段の心にかよはんかし行川のながれは絶ずしてしかも本の水にあらずと鴨長明がいひけんは詞はやさしけれど晝夜をすてざる光采をばいかでしり侍らん

徒然草野槌　上之三

萬の事は月見るにこそなぐさむ物なれある人の月ばかりおもしろき物はあらじといひしに又ひとり露こそあはれなれとあらそひしこそおかしけれ折にふれば何かはあはれたらざらん月花はさら也風のみこそ人に心はつくめれ岩にくだけて清く流るゝ水の氣色こそ時をもわかずめでたけれ沅湘日夜東に流去(ナガレサル)愁人の爲にとゞまること少時(シバラク)もせずといへる詩を見侍りしこそあはれなりしか嵆康も山澤にあそびて魚鳥をみれば心たのしぶといへり人とをく水草きよき所にさまよひありきたるばかり心なぐさむことはあらじ

沅湘日夜　三體詩戴叔倫詩沅湘日夜東流去不レ爲ニ愁人一住少時ト注云身不レ得レ去故怨ニ水之去一所三以深傷ニ己之不一レ能レ去也蓋叔倫事ニ曹王於湖湘一故有ニ是作一秦少游謫ニ郴州一有レ詞云郴江幸遶ニ郴山一爲レ誰流下ニ瀟湘一去正用ニ此意一・沅湘　沅水湘水皆水名　嵆康も山澤にあそびて　文選四十三嵆康與ニ山濤一絶レ交書云游ニ山澤一觀ニ魚鳥一心甚樂レ之一行作レ吏此事便廢安能捨ニ其所一レ樂而從ニ其所一レ懼哉　嵆

康字叔夜竹林七賢の其一人なり晉書に傳あり　人遠く水草きよし　玄賓僧都の歌に「とつ國は水草きよみことしげき都の內はすまぬまされり

此段月露風水をあらはによくうつし出せり李白が廬山の瀑布をみ東坡が赤壁にあそびし面影ありしかも末にみやつかへせずして山林に遊ぶを心のなぐさみと決せり

何事もふるき世のみぞしたはしき今やうは無下にいやしくこそ成ゆくめれかの木の道のたくみのつくれるうつくしきうつはものも古代の姿こそおかしと見ゆれ文の詞なとぞ昔の反古(ホンゴ)どもはいみじきたゞいふ言葉も口おしうこそなりもてゆくなれいにしへは車もたげよ火かゝげよとこそいひしを今やうの人はもてあげよかきあげよといふ主殿寮人數たてといふべきをたちあかししろくせよといひ最勝講御聽聞所なるをば御かうのろとこそいふをかうろといふくちおしとぞふるき人はおほせられし

木の道のたくみ　大工番匠の類なり周禮の考工記にもろ〳〵のたくみをあげたり木石金石をおさむる工あり　古代のすがた　考古圖博古圖など云書ありいづれもいにしへの鼎などの圖俎豆の形などをうつしとゞめてあり後の世の工の及ぶ所にあらず論語に觚(コ)不觚とあるも今の器はいにしへの制法にあらざることを云なり　文の詞　文章或は往來消息をいふ　反古　反故とも書り物をかきちらしたるふるき紙をいふその多くあつめたるをば反故堆といふ禪錄に見えたり　和名十三云齊春秋云沈麟士少淸貧以ニ反故一寫ニ書數千卷一　たゞいふ言葉　平生の常談なり　主殿寮人數たて　主殿つかさは夜の行幸の時火をもつことをつかさどる　最勝講　一條院長保四年五月七日に始ておこなはる吉日を撰て五ヶ月あり清涼殿にて最勝王經を講せらる東大寺興福寺延曆寺園城寺四ヶ大寺の僧衆參りておこなふ也證義講師聽衆などあり公事根源に詳なり　御かうのろ　御講の廬也最勝講の論議を聞召所を云廬はいほりとよめり關白の內裏にて休息する所を直廬と云がごとし直は宿直の義なり

此段よろづの事いにしへのは末の世よりもまされりと云げにもとぞおぼゆる宋の六一居士周秦漢の碑文をあつめ撰て集古錄と名づくもろこしの人は

いにしへをいみじと思ふ故也こゝらの人はいひもいでざるに兼好が心ざしありがたしとぞ覺る古文尙書にも見え侍るされば文宣王の生知なりしもいにしへをこのむとの給へりさはいへど祖龍がからき政には是古非今皆けづりはらはれてわざはひをまぬかるゝ人まれなりし此故に時をしるを學者の要とす今の世に生れて古人の道にかへるは災難をまねくものなれば明哲の君子はいにしへをこのみて又今にもしたがふべしいつかよく論語中庸をよむものとともに此事をかたらん

おとろへたる末の世とはいへどなを九重の神さびたる有樣こそ世づかずめでたき物なれ露臺朝餉何殿何門などはいみじとも聞ゆべしあやしの所にもありぬべき小蔀小板敷高遣戸などもめでたくこそきこゆれ陳に夜の設せよといふこそいみじけれ夜御殿のをばかいともしとうよなどいふ又めでたし上卿の陳にて事おこなへるさまは更なり諸司の下人どものしたりがほになれたるもおかしさばかり寒き夜もすがらこゝかしこに睡居たるこそおかしけれ内侍所の御鈴のをとはめでたく優なる物也とぞ德大寺太政大臣はおほせられける

九重　都の內を云一條より九條まであり長恨歌にも九重城闕といへり　よつかず　世をはなれたる儀也　露臺　內裏御殿の間の名也　朝餉　淸涼殿の內の南にあり朝餉間二間なりこゝにて朝夕供御を奉る南に平敷二枚東北に絹の屛風を立夜御殿の方に副障子あり御屛風の內外に御調度を置なり禁秘抄河海などに詳也　何殿何門　一本になに殿を南殿と成すは非也　內裏の殿門數多ある故に一々に其名をいはぬなり其名は禁秘抄拾芥抄に見えたり　小板敷　名目抄に神仙門中を云今は殿上にあり　高遣戸　今は淸涼殿の坤の廊下の間にあり　陳に夜のまうけせよ　設は灯などを用意する事也又まうけとは灯にもかぎるべからず　かいともしとうよなど云　火をとくはやくともせと云事也陳にて夜のまうけと云夜御殿にてはかいともしと云と書わけたり燈を所によりていひかへたり　禁秘抄云夜御殿四方有二妻戸一南大妻戸一間也帳同二淸涼殿一東枕疊御座敷也御枕有二二階一奉レ安二御劒神

璽ニ皆有レ覆蘇芳也御劍東南帳四角有ニ燈樓ニ又帳南西北敷レ疊爲ニ女房座ニ　河海云夜御殿の御帳の四角に灯樓あり搔燈とて夜る火をけたず是は寶劍神璽の御ためなり　上卿の陣にて　上卿とは大臣大中納言等の公卿の陣にて惣奉行するを云節會の時は内辨とも申也　諸司のしも人どもの　諸司とは百官職寮司等を云なりしも人とは諸司の下々の人を云なり

德大寺のおほきおとゞ

- 公實 閑院春宮大夫 權大納言
  - 實行 八條太政大臣 三條流號轉法輪
  - 通季 大納言 西園寺流
  - 實能 德大寺左大臣 德大寺流
    - 公能 大炊御門右大臣
      - 實定 後德大寺左大臣
        - 公繼 野宮左大臣
          - 定基 德大寺太政大臣
            - 公孝 後德大寺太政大臣

此段禁裏の樣は末の末にも目出度しと云兼好初は仕官せしによりてよく見聞し故也邊部人の來て長安城を見て是ぞ天子おはします所也と思ふ御殿の名さへしらずかしいかんぞ百官の富を見侍るべき唐の王建が宮詞をつくれるもよくぞ知ての事也又よくはいへどみづからまのあたり心みざればよくしるものはかたはら痛く思ふべしたとへば杜牧が阿房を賦するはめでたく聞ゆれど趙高李斯がよくときかたりにはしかざるがごとしよろづの道も又如レ此

齋王の野宮におはします有さまこそやさしく面白きことのかぎりとは覺えしか經佛などいみてなかご染紙などいふなるもおかしすべて神の社こそすてがたくなまめかしき物なれや物ふりたる森のけしきもただならぬに玉がきしわたしてさか木にゆふかけたるなどいみじからぬかは殊におかしきは伊勢賀茂春日平野住吉三輪貴布禰吉田大原野松尾梅宮

齋王は内親王八齋王を一本に齋宮となせり齋宮のおこりは日本紀に見えたり　日本紀第四崇神天皇六年以ニ天照大神ニ託ニ豐鍬入姫命ニ祭ニ於倭笠縫邑ニ仍立ニ磯堅城神籬（イソノカタキノヒモロギ）ニ同第六垂仁天皇廿五年三月離ニ天

照大神於豊耜姫命一託二于倭姫命一爰倭姫命求下鎮二坐大神一之處上而詣二菟田筱幡(ササハタ)一更還之入二近江國一東廻二美濃一到二伊勢國一時天照大神誨二倭姫命一曰是神風伊勢國則常世之浪重浪皈國也傍國可怜(ウマシ)國也欲レ居二是國一故隨二大神敎一其祠立二於伊勢國一因興二齋宮于五十鈴川上一是謂二磯宮一則天照大神始自レ天降之處也　同第七景行天皇廿年二月遣二五百野皇女一令レ祭二天照大神一　豊耜倭姫五百野みな皇女なる故に是より後代々の帝の御むすめを伊勢神宮へ奉らるゝ也大神へみやづかへし給ふ儀也若帝御むすめなき時は親王のむすめを立給ふ例あり野宮におはします齋宮に立給ふに三年の神事あり其間三度の御禊あり先齋宮に備り給ふ事をうらなひさだむるを卜定と云さて齋院へ入給はんとて御禊有明年野宮へ入給はんとて禊あり又明年伊勢へくだり給はんとて禊あり二年の八月より翌年八月迄野宮におはします齋宮齋院の事延喜式に詳也花鳥云伊勢齋宮の野宮は嵯峨のありす川にあり賀茂の齋院の野宮は紫野にあり　續日本紀三十二云寶龜三年十一月以二酒人内親王一爲二伊勢齋一權居二春日齋宮一

三代實錄第三貞觀元年十二月廿五日丙午伊勢齋恬(シツ)子(イコ)内親王於二鴨水邊六條坊門末一修レ禊賀茂齋儀子内親王於二同水邊侍賢門末一修レ禊並入二初齋院一同第四云貞觀二年八月二十五日伊勢齋恬子内親王臨二鴨水一大修二禊事一即日入二野宮一　延喜式第五齋宮凡天皇即レ位者定二伊勢大神宮齋王一簡二内親王未レ嫁者一卜定若無二内親王一者依二世次一簡二諸王女一卜定　やさしくおもしろき事の　源氏賢木巻に野宮の事を書り其詞云物はかなげなる小柴がきをおほかきにていたやどもあたりあたりいとかりそめ也くろ木の鳥井どもはさすがにかう〳〵しうみわたされてわづらはしきけしきなるにかんづかさの物どもこゝかしこにうちしはぶきてをのがどち物いひたるけはひなどもほかにはさまかはりてみゆひたきやかすかに光て人げすくなくしめ〳〵としてこゝに物おもはしき人の月日をへ給へらんほどをおぼしやるにいといみじう哀に心苦しとあり　經佛などいみて　延喜式第五齋宮忌詞内七言佛稱二中子一經稱二染紙一塔稱二阿良々伎一寺稱二瓦葺一僧稱二髮長一尼稱二女髮長一齋稱二片膳(カタシキ)一外七言死稱二奈保留

一病稱二夜須美一哭稱二鹽垂一血稱二阿世一打稱レ撫肉稱レ菌（クサヒラ）墓稱レ壤（ツチクレ）又別忌詞堂稱二香燃一優婆塞稱二角筈一同第六齋院司凡忌詞死稱レ直病稱レ息泣稱二鹽垂一血稱レ汗肉稱レ菌打稱レ撫墓稱レ壤　又一說に佛稱二保禰一とあり又立すくみとも云り　詞花集雜部に選子內親王賀茂のいつきと聞えける時西にむかひてよめる「思へどもいむとていはぬとなればそなたにむきてねをのみぞ鳴　榊にゆふかけたる　榊とも賢木とも書り　八雲抄榊かえだにしらが付などいへるもゆふ也　木綿　四手　麻　幣　神道の家に沙汰ある事なり　ことにおかしきは伊勢賀茂春日　伊勢　天照太神の廟なり垂仁天皇の時大和姬神代よりの神鏡神劒を取て伊勢國宇治の河上に鎭座し給ふ其川を御裳濯河と申は大和姬御裳をあらひし故也又河上に五十鈴あるによりて五十鈴河とも申今の內宮是なり其後雄略天皇廿二年御託宣によりて丹波の與佐より豐受太神をむかへて伊勢の度會郡山田の原に勸請す今の外宮是也豐受太神は國常立尊也此時まで大和姬なを死せずしておはしける詳に日本紀幷神皇正統紀に見えたり　賀茂

雷神也下賀茂は御祖神也糺（タヾス）宮と申也上賀茂は別雷神也昔賀茂健角身命のむすめ玉依姬河邊に遊ふ時丹塗矢流來る取てかへりて家の櫓にさす扨一人の男子を生り其父をしらんために盃を男子にもたせて汝が父に與ふべしと云時かの矢の前に置此矢はず鴨の羽なれば其姓を賀茂氏とする也此時男子我は天神の子なりと云て飛で天にのぼり雷と成是今の上賀茂なり玉依姬も同時に天に上り槻（ツキノキ）樹の下にくだりて神となる是今の下鴨也丹塗矢も又神となる今の松尾大明神是也神道の家には大巳貴の變化なりと申也　又古事記云大國主神娶下坐二胸形奧津宮一神多紀理毘賣命上生下子阿遲鉏高日子根神上此阿遲鉏高日子神者今謂二迦毛大御神一者也迦毛者賀茂也　又日本紀には雷は火神軻遇突智の所變也とあり　春日　春日四所大明神者第一殿武雷命第二殿齋主命第三殿天津兒屋根命第四殿姬大神也神護景雲二年大和國三笠山に此四神はじめて跡をたれ給ふ姬大神は天照大神の分身也日本紀に皇孫天降り給ふ時武雷命齋主神はさきへ降りて豐葦原の中國を平げらる兒屋根命は皇孫を守り奉りて皇孫と同

時に降り給ふ是即藤原氏の祖師也武雷命は武甕槌神とも申常陸鹿島明神是也齋主命は經津主神とも申下總の香取明神是也　平野　山城國葛野郡にあり延喜式に平野神四座今木神久度神古關神相殿比賣神とあり公事根源には第一御殿源氏第二平氏第三高階氏第四大江氏總ては姓の祖神あり延暦年中に此社を草創す　住吉　日本紀伊弉諾尊日向橘の檍原にて祓し給ふ時海底より出る三神也底筒男命中筒男命表筒男命と申是住吉大神也神功皇后新羅國を攻給ひし時此神あらはれて軍のさきがけし給ふてついに三韓をしづめらる神託によりて長門國にいわひまつる扨又皇后攝津國に到給ふ時ますみよしの國なりと託宣ある故に其所に鎭坐す又筑前那珂郡にも社あり三ケ國にて皆住吉と云也底筒中筒表筒を三座とす然るに社家には天照太神を一座とし田霧姫を一座とし底筒中筒表筒を一座とし神功皇后を一座として住吉四社の明神と申なりト部兼直歌に「西の海やあふきが原のしほちよりあらはれ出し住吉のかみ　三輪　大和國にあり日本紀に素盞烏の子大巳貴神を大國主神とも申其魂魄出雲國より大和國三諸山へうつり給へば宮をたてゝいわふなり是を大三輪神と申崇神天皇の姑倭迹々姫を此神の妻とし給ふ此神常に晝見えずして夜來る姫あやしみて晝見え給はねばうるはしきすがたをみずと云神答て明朝汝が櫛笥に入て有なんおどろきおそるべからずと云姫いよ〳〵あやしみてつとめてみればうつくしき小蛇櫛笥にわだかまりて長さふとさしたひものごとし姫おどろきさけぶ神はおうらみて俄に人の形と成て汝すでに我にはぢ見せつ我も又汝にはぢみせんと云て虚空に飛で御諸山にのぼる姫悔て箸をもちて陰をついて死ぬ又舊事記には大巳貴の活玉依姫にかよひしに屋上より往來しければ苧玉卷(チダマキ)に針を付神のもすそにかけてみれば鑰のあなよりいでゝ節渡(セトサ)山吉野山を過て三諸山にとゞまる其糸三わげのこる故に三輪山と申也「我庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひきませ杉たてる門とよめる歌は古今集に有レ之　貴布禰　貴船とも書り山城國愛宕郡にあり龍神なれば晴をいのるにも雨を請にも此社を祭る也軻遇突智の所變に高龗と申神は是なるべし是も王城の守護

神にておはします　吉田　此社は春日明神を勸請する也貞觀年中藤原山蔭卿建立す一條院永延元年初て奉幣使を立奈良の京にては春日長岡京にては大原野平安城にては此社皆帝闕にちかくありて寶祚を守給ふ御堂關白の法成寺をたてゝ殊に吉田をあがめ興福寺春日社に擬す又神樂岡に霹靂神の祭事ある事は延喜式第一に載レ之　大原野　此山を小鹽と申なり文德天皇時始て此祭を行はる春日と同體也春日は程遠き故に后妃夫人參詣のたよりあらむがために此所へ移申さるゝなり　松尾　大寶元年秦都理はじめて此社を立たり日吉三輪當社皆同體の神也延喜式第九神名帳山城國葛野郡松尾神社二座とあり　梅宮　山城國にあり橘氏の祖神也嵯峨天皇の后嘉智子は贈太政大臣橘清友のむすめ也清友は諸兄が孫奈良丸が子也嘉智子は仁明天皇の母也承和年中に勅して此社を祭る橘是定これを管領すと也此嘉智子檀林寺を立給ふによりて檀林皇后とも申也今の天龍寺其舊跡也后の遺詔にまかせ其屍を西郊に捨しかば鳥獸とりちらして手の拳(コブシ)殘りしを拾て葬る所を一拳と申也みめかたちうつくしくおはせしが世の人に色欲のまよひを絕しめんとてからを野外に捨よと仰けるとなむ枕草子云神は松尾八幡大原野春日いとめでたし平野はいたづらやのありしを何する所ぞといひしに御こしやどりといひしもいとめでたしみこもりの神又おかし賀茂更也稻荷

此段の末の詞枕草子を學べり此法やまと詞等にあるのみならず古文にも此體あり　莊子胠篋篇云子獨不レ知ニ至德之世一乎昔者容成氏大庭氏伯皇氏中央氏栗陸氏驪畜氏軒轅氏赫胥氏尊盧氏祝融氏伏戲氏神農氏又史記夏本紀太史公曰禹爲ニ姒姓一其後分封用レ國爲レ姓故有下夏后氏有扈氏有男氏斟尋氏彤城氏褒氏費氏杞氏繒氏辛氏冥氏斟氏戈氏上文選西都賦云後宮則有ニ掖庭椒房后妃之室一合歡增城安處常寧茝若椒風披香發越蘭林蕙草鴛鸞飛翔之列　此等の類を推して筆を下さば不休の力有べしかの五十鈴川の宮はかやをきらずたるきをけづらず千本もゆがまず鰹木もそらず正直清明にして神德久しくさかりなれば誰人か如在の心あらざらんや

飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれば時うつり事さり

たのしひかなしひゆきかひて花やかなりしあたりも人すまぬのらとなりかはらぬすみかは人あらたまりぬ桃李ものいはねば誰とともにかむかしを語らんまして見ぬいにしへのやむごとなかりけん跡のみぞいとはかなき京極殿法成寺など見るこそ志とゞまり事變じにけるさまはあはれなれ御堂殿の作りみがゝせ給て庄園おほくよせられ我御ぞうのみ御門の御うしろみ世のかためにて行末までとおぼしをきしときいかならん世にもかばかりあせはてんとはおぼしてんや大門金堂などちかくまで有しかど正和の比南門は燒ぬ金堂は其後たふれふしたるまゝにて取たつるわざもなし無量壽院ばかりぞ其かたとて殘りたる丈六の佛九體いとたふとくてならびおはします行成大納言の額兼行がかける扉あざやかに見ゆるぞあはれなる法花堂などもいまだ侍るめり是も又いつまでかあらんかばかりの名殘だになき所々はをのづから石ずへばかりのこるもあれどさだかにしれる人もなしされば萬に見ざらん世までを思ひをきてむこそはかなかるべけれ

飛鳥川の淵瀨　古今「世の中はなにか常なる飛鳥川昨日のふちぞけふは瀨となる「昨日といひ今日と暮してあすか河流れてはやき月日成けり「飛鳥川淵は瀨に成世なりとも思ひそめてし人は忘れじ　又古今序にあすか川のせになるうらみも聞えず

時うつり　古今序にたとひ時うつり事さりたのしみかなしひゆきかふとも此うたのもじあるをや　陳鴻長恨歌傳時移事去樂盡悲來

野ら　野原也萬葉に草の字をのらと讀りまた野等とも書り「里はあれて人はふりにし跡なれや庭も籬も秋の野らなる

桃李ものいはねば　史記李廣傳贊桃李不レ言下自成レ蹊　菅三品詩桃李不レ言春幾暮烟霞無レ跡昔誰栖

京極殿　拾芥中末云京極殿土御門南京極西南北二町其南一町被レ入二道長家一或大入道殿家上東門院是也後一條後朱雀後冷泉三代帝於二此所一誕生匡衡宅皇后四人於二此所一誕生此家紀伊島賀茂明神通給云々後一條後冷泉被レ加二南一町一

法成寺　五條河原にあり後一條院行幸し給ひしことなど榮華物語にあり京極殿には宇治關白賴道公すみ給へと道長公の御遺言也

志とゞまり事變じ　昔の主人の後の世迄と思ひをく志はとゞまり其事樣は

うつりかはるなり　庄園多くよせられ　道長公御病中に法成寺へ庄園おほく寄附せられたる事榮花物語に有　我御ぞうのみ　我御曾孫也　帝の御うしろみ世のかため　攝政關白大臣などの儀也　金堂　倭名集云佛殿は金堂なり　風雅集かたのゝ尼法成寺に參りて讀侍ける歌「くもりなくみがける玉のうてなには塵もゐがたき物にぞ有ける　正和の比　花園院の年號なり　無量壽院　法成寺にあり阿彌陀を安置せらるゝ故に無量壽院と名づく佛九體ある事は九品の淨土にかたどり印相なども上品中品下品にかはりめ有也此院作らるゝ事世繼にも見えたり　丈六　佛のたけは一丈六尺あり　善導往生禮讃偈云正坐跏趺入二三昧一相心乘レ念至二西方一觀二見彌陀極樂界一地上虚空七寶莊彌陀身量極無邊重勸二衆生一觀二小身一丈六八尺隨レ機現圓光化佛等二前眞一　勸善書第六云宋楊傑繪丈六阿彌陀隨身觀念感佛來迎　行成大納言は謙德公伊尹の孫義孝の子也能書の家也道風佐理行成を三跡と云也　兼行が書ける扉　兼行延久四年七月任二大和守一南家の人なり　或記云法成寺の額は大納言行成卿阿彌陀堂の內の扉は兼行手跡也　或抄云延久三年三月十八日大極殿額可レ使三誰人一書二乎公卿僉議之時兼行朝臣應レ撰已書大內殿舍額今度尤可レ書之由右大臣師房公被二計申一之　かばかりの名殘だになき法成寺などのごとく名有所さへ如レ此況や其外の舊跡はいよ〳〵知人なき也

此段我身の榮る時に子葉孫枝の猶しげらむことを兼て思へども程なくうつりかはる事闘恭の石を拾ふがごとし汾陽が舊宅には古槐冷じく金谷園の花は風雨あはたゝし睽を始として二世三世より萬世に至るべしと云しも一炬の火三月の紅ならずやされば驪山を過るものゝ漢文陵を拜するためしあれば君も臣も驕を窮めずして只德をつとむべき也道長公佛法をこのみて後までの福をいのりて寺を立られしが寺ははやくなくなれば其福もかひなきことにや

風も吹あへずうつろふ人の心の花になれにし年月をおもへばあはれと聞しことの葉ごとにわすれぬ物から我世の外に成ゆくならひこそなき人のわかれよりもまさりてかなしきものなれされば白きいとのそま

んことをかなしひ路のちまたのわかれん事をなげく人も有けんかし堀河院の百首の歌の中に「昔見しいもが墻根は荒にけりつはなまじりの菫のみしてさびしきけしきさる事侍りけん

かせも吹あへずうつろふ人の心の花に　古今に貫之歌「櫻花とく散ぬともおもほえず人の心ぞ風も吹　あへぬ小町歌「色みえてうつろふものは世中の人の心の花にぞありける　わが世の外に成ゆく

世上の心の外に移りかはりなり行事はなき人の別よりもかなしく覺ると也　白き絲のそまん事をかなしみ　高辨上人しろき絲を人の心にたとへたる事をよめる「むかしたれ人の心をしらいとのそむればてまる色になしけん風雅集　淮南子曰揚子見ニ逵路ニ而哭之爲下其可ニ以南ニ可中以北上墨子見ニ練絲ニ而泣之爲下其可ニ以黄ニ可中以黒上高誘註曰憫ニ其本同而末異ニ　堀川院百首　兩度の百首あり初度の百首は權大納言藤原公實勸進之こゝにひく昔見しのうたは則公實卿の歌なり菫の題なり　或説に後度の百首は永久四年の冬なりと有樹頭樹底之殘紅片ニ々東西ニ零ニ亂上下ニ其子未レ結薄倖哉五更風無賴哉封家姨不ニ亦錯恨ニ乎花飛比ニ色衰ニ也風狂比ニ人心ニ也宜レ恨ニ我衰ニ何恨ニ人心忽變ニ哉太行巫峽元在ニ人心ニ豈他求乎玄都千樹妖ニ艷春風ニ榮亦榮矣一旦唯見ニ兎葵燕麥ニ而已矣烏衣國之烏入ニ王謝堂ニ未レ幾飛在ニ尋常百姓家ニ夫惟人之適世失レ所レ依乎不レ得ニ於君ニ乎故曰遯レ世而無レ悶是常人之所レ不レ及也今讀ニ此段ニ未レ免ニ於悶而悲ニ吁千樹之桃五更之風可ニ並按ニ焉

御國ゆづりの節會おこなはれて劒璽内侍所わたし奉らるゝほどこそ限なう心ぼそけれ新院のおりさせ給ひての春よませ給けるとかや「殿もりのとものみやつこ餘所にしてはらはぬ庭に花ぞちりしく今の世のことしげきにまぎれて院にはまいる人もなきぞさびしげなるかゝるおりにぞ人の心もあらはれぬべき

御國ゆづり　天子の位を春宮へ讓り給ふ時の節會也讓國とも御讓位とも申也　劒璽内侍所　是を三種神器と申也　劒は寶劒とも天叢雲劒とも申素盞烏尊出雲の國にて八岐蛇を切給ふ時大蛇の尾の中に有しを取て天照大神に奉る後に人皇に及で伊勢大神宮に有しを日本武尊東征の時是を申出し帶し

給ふ駿河國にて賊徒火を放て尊を燒んとしける時尊此劒を拔て草をはらひ給ひければ火烟賊徒に吹かゝりて逃亡ぬ是より草薙劒とも申す其長さ十握ある故に十握劒とも申すはじめ大蛇の尾の中にありし時叢雲たなびく故に天のむらくもの劒とも申す是代々の御寶物なり　璽は神璽なり天照大神天の石窟にこもらせ給ひしとき諸神いのり申て天の香久山の坂樹の上枝にかけたる八坂瓊之御統是也又は八坂瓊の曲玉と申す天照大神素盞烏とちかひ給ひし時御髻にまとひ付させ給ひける物なり又は素盞烏尊此玉を羽明玉と云神よりうけて後に天照大神に奉り給ふ共申也是も御寶物也　内侍所　賢所とも申す神鏡の事也八咫鏡とも眞經津鏡とも申也是も天照大神岩戸に籠り給ひし時天の香久山の坂樹の中枝にかけていのり給ひし也これは諸神はかりて日神の御形をうつして鑄給ふ鏡なり大神此鏡に向はゞ我にむかふごとく思ふべしとの給ひしことあり鏡のおはします所を内侍所とも賢所とも申也　此三神器の事は舊事紀古事紀日本紀に皆詳なり　神代卷云天照大神賜下皇孫天津彥火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物上とあり又大神の勅に殿を同して安置すべしとありしによりて上古は同殿にまし〳〵しが垂仁天皇より別殿にすゑ給ひ殊に改作りて神代よりのは大和姫に授給ひて伊勢にうつらせ給ふと也賢所の事委く禁秘鈔にもあり新院　おりゐさせ給ひ　御位をおりゐ給ふ也　とのもりのとものみやづこ　主殿寮の下司ども禁中の掃除をするなり　とものみやつこ　ともは伴氏のもの主殿寮の下部となるなりみやづこは御奴の字なり

此段讓國の時内侍所劒璽わたさるゝと心ふ周の成王の崩し給ふ時赤刀大訓弘璧戈弓の類をつらねて康王の位に即し事思ひやられ侍る末段にとのもりのうたまいる人もなきなんどいへるをみれば唐の玄宗の心ならず肅宗に位を讓て蜀より還りて後南内にすみ給ひしおもかげありされば樂天も西宮南苑多二秋草一宮葉滿レ階紅不レ掃といひしまして李輔國が政をまゝにして二帝を辦髦とせしをや

諒闇の年ばかり哀なる事はあらじ倚廬の御所のさまなど板敷をさげあしの御簾をかけて布のもかうあら

〱しく御調度どもをろそかに皆人のさうぞく太刀平緒までことやうなるぞゆゝしき

諒闇　書說命上曰王宅憂亮陰三祀蔡氏傳云亮亦作諒陰古作闇按喪服四制高宗諒陰三年鄭氏註云諒古作梁楣謂之梁闇讀如鵪鵪闇謂廬也即倚廬之廬儀禮翦屛柱楣鄭氏謂拄楣所謂梁闇是也宅憂亮陰言宅憂於梁闇也先儒以亮陰爲信默不言則於諒陰三年不言爲語復而不可解矣　朱子語類問諒陰以他經考之皆以諒陰爲信默惟鄭氏獨以爲凶廬天子居凶廬豈合禮制朱子曰所引翦屛拄楣是兩事拄音知主反似是從手不從木也蓋始者戶北向用草爲屛不翦其餘至是改而西向乃翦其餘草始者無柱與楣簷著於地至是乃施短柱及楣以拄其楣架起其簷令稍高而下可作戶也梁闇未詳古定制如何不敢輒爲之說但假使不如鄭說亦未見天子不可居廬之法又問諒陰之義朱子曰孔氏曰諒信也陰默也刑氏釋之曰信謂信任家宰胡氏釋之曰信能默而不言也二家皆用孔訓而爲說不問鄭氏於禮記又讀作諒闇言居倚廬

大抵古者天子居喪之名　諒闇の說 孔安國はまことにもだすとよみ鄭玄は梁闇の義にとり闇と庵と音通じて倚廬なりとす朱子此兩說あるによりて定がたく其制法も難知思ひ初論語集註には其義を詳にせずといへど蔡氏に口授する時は倚廬の義をとれと云是によりて蔡氏が書傳に鄭玄が說をひく也まことにもだすとよむ時は下の三年物いはずとあるに詞重複するゆへなり　あしのみす　壒囊抄云倚廬の御所は板敷をさげ葦の御簾布木瓜太刀平緒其外裝束等みな非常なり一說にみすを翠簾と書ぬのゝもかうを布帽額と書り木瓜はぼけ也もつかうとよめり兩說なり　太刀　黑作にて銀のかな物なり　平緒　これも黑染なり　ゆゝしき　こゝにてはいま〱しきなり

靜におもへばよろづに過にしかたのこひしさのみぞせんかたなき人しづまりて後ながき夜のすさびに何となきぐ足とりしたゝめ殘しをかじと思ふ反古などやりすつる中になき人の手ならひ繪かきすさびたる見いでたるこそ只其折の心ちすれ此比ある人の文だに久しく成ていかなるおりいつの年なりけんと思ふ

は哀なるぞかし手なれし具足なども心もなくてかはらずひさしきいとかなし

すぎにしかたの　枕草子に過にしかた戀しき物かれたるあふひひいなあそびのてうど又折から哀なりし人の文つれ〴〵なる日さがし出たる　人しづまりてのち　人のねしづまりたる也後漢書列傳五來歙書云臣夜人定後とあり　すさび　手すさびの儀也なぐさむ心に通べし　具足　よろづの道具なり　なき人の手ならひ　源氏幻卷におちとまりてかたはなるべき人のふみども物のつゐでに御覽じつけてやらせ給なんとするにかのすまの比所々より奉らせ給ひけるも有中に彼御手なるはことにゆひ合せてぞありけるみづからしをかき給へる事なれど久しう成にけることゝおぼすにたゞいまのやうなるすみつきげに千とせのかたみにしつべかりけるを見ず成ぬべきよとおぼせばかひなくてうとからぬ人々二三人ばかりおまへにてやらせ給いとかゝらぬ程の事にてだに過にし人のあとみるは哀なるをまして　新拾遺に江侍從身まかりける男の文をとりあつめてやりすつとてよめる「見るまゝに落る涙の玉章はやるかたもなくかなしかりけり

文選五十六潘安仁が書る楊仲武誄云披レ帙散レ書屢覩二遺文一有レ造有レ寫或草或眞執玩周復想二見其人一紙勞二于手一涕沾二于巾一　白樂天感二舊詩卷一詩夜深吟罷一長吁老淚燈前濕二白鬚一二十年前舊詩卷十人酬和九人無

人のなきあとばかり悲しきはなし中陰のほど山里などにうつろひて便あしくせばき所にあまたあひゐて後のわざどもいとなみあへる心あはたゝし日數のはやく過るほどぞ物にも似ぬはての日はいと情なう互にいふ事もなく我かしこげに物ひきしたゝめちりちりに行あかれぬもとのすみかにかへりてぞ更にかなしき事は多かるべきしか〴〵のことはあなかしこ跡のためいむなる事ぞなどいへるこそかばかりのなかに何かはと人の心はなをうたて覺ゆれ年月へても露わするゝにはあらねど去者は日々に疎しといへることなればさはいへど其きはばかりは覺えぬにやよしなしごといひてうちもわらひぬからはけうとき山の中におさめてさるべき日ばかりまうでつゝ見れば程なく卒都婆も苔むし木葉ふりうづみて夕の嵐夜の

月のみぞことゝふよすがなりける思ひいでゝ忍ぶ人あらんほどこそあらめそも又ほどなくうせて聞つたふるばかりの末々は哀れとやはおもふさるはあととふわざもたえぬればいづれの人と名をだにしらず年年の春の草のみぞ心あらん人はあはれと見るべきをはては嵐にむせびし松も千とせをまたで薪にくだかれ古墳はすかれて田と成ぬそのかただになく成ぬるぞかなしき

中陰　人死して未來生の中間に先五陰のかたちを得る故に中陰と名づく五陰は色受想行識是なり或は一七日乃至七々日の間佛事を修する也隨願淨土經幷無常經等に見えたり　大藏一覽第一尊者設摩達多曰中有極多住七々四十九日定結生故尊者世友曰中有極多住經七日不久住故問曰若七日內生緣和合彼可結生若爾所時生緣未合彼豈斷壞答曰彼不斷壞謂彼中有乃至生緣未和合位數死數生無斷壞故云々　心あはたゝし　源氏に君は御念誦し給ひておぼしめぐらすにいと心あはたゝし河海に心いそがはしき儀也　周章(アハタヽシ)　援(アハタヽシ)　ものにもにぬ　物にたとへんかたもなきと云意也　はての日　四十九日也　行あかれぬ　分散と書てあかるゝと讀り爰にては別々になりて退散する義なり　又わかなあかといひわかつをあかつといふ時はちとあと通ずる故にあかるゝもわかるゝ儀なるべし　しか〱の事　日本紀に云々と書てしか〱と讀り河海に色々のいひ事と云義なり　史記汲黯傳上曰吾欲云々とあり又然々と書てしか〱とよむ事もあり是は如此々々の義也　あなかしこ　下學集曰穴賢上古時倭漢兩國未知家人居土窠恙虫螫入故本朝書札末相勸云穴賢言土窠之穴賢閉塞可防恙虫無恙と云字は戰國策より出たり何事もなきかといはふ詞也然れば世俗の消息の末に穴賢と書は其無事なるをめでたしといふ心なるべし書簡尺牘の書尾に自嗇保嗇自愛至祝珍重など書がごとし又所によりて穴かまへてと云義もあるべし　かばかりのなかに何かは　かくばかり哀傷の中にといふ義なり　年月へても　源氏玉鬘に年月へだゝりぬれどあかざりし夕がほの露わすれ給はずさるものは日々にうとし　文選廿九古詩云去者日已疎來者日已親出郭門直視但見

丘也墳古墓犂爲田松栢摧爲薪白楊多悲風蕭々
愁殺人思還故里閭欲歸道無因誹曰去者謂
死也來者謂生也不見容貌故疎也歎愛終日故
親也　さはいへど　上の年月へてもわすれぬと云
にあたりての詞也わすれぬと云そのきはばかりは
覺えぬにやむさとしたるよしなし事いふて笑ふ
ことも有ぞとなり　きはばかりとはきはほどにと
云心也　からは　死骸也源氏桐壺にむなしき御か
らをとあり　けうとき　河海に氣疎と書りおそろ
しき儀なり　卒都婆　翻譯名義集第七窣堵波西域
記云浮圖又曰偷婆又曰私偷簸皆訛也此翻方
墳亦翻圓塚亦翻高顯義翻靈廟劉熈釋名云
廟者貌也先祖形貌所在也又梵名塔婆發軫云説
文元無此字徐鉉新加云西國浮圖也言浮圖者此
翻聚相戒壇圖經云原夫塔字此方字書乃是物聲
本非西土之號若依梵本瘞佛骨所名曰塔
婆　よすが　たより也　そも又ほどなくうせて
それも又也その忍ぶ人も程なくうせて後は聞傳ふ
る計也　いづれの人と名をだにしらで　白氏文集
古墓何代人不知姓與名化爲路傍土年々春草
生　其かたゞになく　其かたちだになくなりぬる
ことのかなしきなり
此段人死て後の事を哀に書り文選古詩去者日已疎
と云にもとづけり其人の昔を思出さば哀なる事忘
がたかるべしいま又陳後山が思亭記を引て是に考
合すべし其畧云今夫升高以望松梓之下丘壠而
行墟墓之間荊棘莽然狐兎之迹交道其有不思
其親者乎請名之曰思亭云々賢不肖異思後豈
不有望其木思以爲材視其榛棘思以爲薪
登其丘墓思發其所藏者乎於是遽然流涕以
泣云々
雪のおもしろうふりたりし朝人のがりいふべき事あ
りて文をやるとて雪のこと何ともいはざりし返事に
此雪いかゞ見ると一筆の給はせぬ程のひがひがしか
らん人の仰らるゝ事聞いるべきかは返々口おしき御
心なりといひたりしこそおかしかりしかいまはなき
人なればかばかりのこともわすれがたし
人のがり　人のもと也許の字也伊勢物語にむかし
紀のありつねがりいきたるにとあり「思ひかねい
もがり行ば冬のよの河風さむみ千鳥鳴也

九月廿日の比ある人にさそはれ奉りて明るまで月見ありく事侍しにおぼし出る所ありてあないせさせて入給ひぬあれたる庭の露しげきにわざとならぬにほひしめやかにうちかほりてしのびたるけはひいと物あはれ也よき程にて出給ひぬれとなをことさまの優におぼえてもの丶かくれよりしばし見ゐたるに妻戸を今少しをしあけて月みるけしき也やがてかけこもらましかばくちおしからまし跡まで見る人ありとはいかでかしらんかやうの事はたゞ朝夕の心づかひによるべしその人ほどなくうせにけりと聞侍りし

あないせさせて　案内せさする也　猶ことざまのゆうに　事様の優に也　枕草紙その比いたうすいたる物にいはれ心ばせある人の九月ばかりにいきてあり明のいみじうきりみちておもしろきに名残思ひ出られんとことばをつくしていづるにいまはいぬらへと遠くみをくるほどえもいはずえんなりいづるかたを見せてたち帰りたてじとみの間にかげにそひて猶いきやらぬ様にいま一たびいひしらせんと思ふに有明の月のありつ丶もと忍びやかに打いひてさしのぞきたるかみのはしらにもよりてず五寸ばかりさがりて火をさしともしたるやうなりけるに月の光もよほされておどろかる丶心地しければやをら出にけりとかたりしか

今の内裏作り出されて有職の人々に見せられけるにいづくも難なしとてすでに遷幸の日ちかく成けるに玄輝門院御覽じて閑院殿のくしがたの穴はまろくふちもなくてぞ有しと仰られけるいみじかりけり是はえうの入て木にてふちをしたりければあやまりにてなをされにけり

遷幸は　新殿へ移り給ふを云　玄輝門院　伏見院の母后也洞院山階左大臣實雄公の女也　閑院　拾芥中末云閑院二條南西洞院西一町冬嗣大臣家金岡疊二水石一公季公傳領レ之　えうの入て　葉の字なるべし五葉の松千葉の花などいへる字の意なるべし

甲香はほら貝のやうなるがちいさくて口のほどのほそながにしていでたる貝のふた也武藏國金澤といふ浦に有しを所の者はへなたりと申侍るとぞいひし

甲香　本草圖經曰甲香今醫家稀レ用但合香家所レ須又有二大小一用レ小者佳也可三聚レ香使二レ不一レ散也　和

名集曰異物志曰甲香俗云音合螺屬也可下合二衆香一燒上之皆使レ益レ芳獨燒則臭　へなたり　一本にばへとありばいを云にやおぼつかなし今金澤にて尋ぬればばいと云ひ又つぶとも云也兼好が時にはへなたりといひけるにやばいに似てすこし大にして口のほそながき貝ありそれをへなたりと云歟

手のわろき人のはゞからず文かきちらすはよし見ぐるしとて人にかゝするはうるさし

或は生れながら菽麥をわきまへざる物或は柳肘姜手なる者或は事にいとまなきものなどは人にかゝすることも有べしさもなくばおのれみづから筆をとらんことよかるべし嚴州烏石寺に岳飛張俊劉光世三人姓名を題せしに光世書をよくせずして侍女意眞かわりてかく後に姜堯章是を見て劉郎可三是疎二文墨一幾點二胭脂一腕二綠苔一といふ詩を作れりされば涑水先生の資治通鑑三百餘卷を撰しに皆自筆にかきて一字の草なきことを涪翁も感ぜしか程伯子の字をうつす時によからんとにはあらずたゞ敬すべしといへるはげにさることぞかし

久しくをとづれぬ比いかばかりうらむらんと我をこたりおもひしられて言葉なき心ちするに女のかたより仕丁やあるひとりなどいひおこせたるこそ有がたくうれしけれさる心ざましたる人ぞよきと人の申侍しさも有べき事也

わがをこたり　わがかたよりの懈怠也　仕丁やあるひとり　仕丁とかきてつかはれよほろと讀り下部の事也下人一人やといたきといひおこせたるなり

徒然草野槌上之四

朝夕へだてなくなれたる人のともある時我に心をき引つくろへるさまに見ゆるこそ今更かくやはなどいふ人も有ぬべけれどなをげに／＼しくよき人かなとぞおぼゆるうとき人のうちとけたる事などいひたる又よしと思ひつきぬべし

此段男女朋友の間をいへり　交ひさしければかならずいやなくなりてみだるゝ也禮のうちに和あり和のうちに禮あるこそ禮樂の道とは云べけれされば晏子が人とよく交るは久敷して敬あればなりうとき人のうちとけたるは交あさくして言葉ふかき事なればいかゞ有べきと云人もあれど一たび物いひてよし立談一双の璧もむかしよりある事なればにや

名利につかはれてしづかなるいとまなく一生を苦しむるこそをろかなれ財おほければ身を守るにまどし害をかひ累をまねくなかだちなり身の後には金をして北斗をさゝふとも人のためにぞわづらはるべきをろかなる人の目をよろこばしむるたのしみまたあぢきなし大なる車肥たる馬金玉のかざりもこゝろあらん人はうたてをろかなりとぞ見るべき金は山にすて玉は淵になぐべし利にまどふはすぐれてをろかなる人也うづもれぬ名をながき世に殘さんこそあらまほしかるべけれ位たかくやんごとなきをしもすぐれたる人とやはいふべき愚につたなき人も家に生れ時にあへば高位にのぼりをごりをきはむるもありいみじかりし賢人聖人みづからいやしき位にをり時にあはずしてやみぬるまたおほしひとへにたかきつかさ位をのぞむも次におろか也智惠と心とこそ世にすぐれたる譽も殘さまほしきをつら／＼思へばほまれを愛するは人の聞を喜ぶ也ほむる人そしる人共に世にとどまらずつたへきかん人又々すみやかに去べし誰をかはぢ誰にかしられん事をねがはん譽はまた毀の本也身の後の名のこりてさらに益なし是をねがふも次におろか也たゞしゝゐて智をもとめ賢を願ふ人のためにいはゞ智惠出ては僞あり才能は煩惱の增長せる也つたへて聞學びてしるはまことの智にあらずいかなるをか智といふべき可不可は一條也いかなるをか善といふ誠の人は智もなく德もなく功もなく名もな

し誰かしり誰か傳えん是德をかくし愚をまもるには
あらず本より賢愚得失のさかひにをらざれば也まよ
ひの心をもちて名利の要を求るにかくのごとし萬事
は皆非也いふにたらず願ふにたらず
名利につかはれて　莊子盜跖篇子正爲名我正爲
利名利之實不順於理不監於道　害をかひ
文選不懷寶以買害兮不飭表以招累　身のの
ちには金をして　白氏文集五十一身後堆金拄北
斗不如生前一樽酒　唐書秦王引尉遲敬德爲
右府參軍屢立大功隱太子嘗以書招之贈金
皿一車固辭秦王曰公之心如山岳雖積金至斗
豈能移之（秦王者謂太宗也隱太子者太宗兄建成也）金は山にすて、莊子天
地篇藏金於山藏珠於淵不利貨財不近貴
富不樂壽不哀夭不榮通不醜窮　文選東
都賦捐金於山沈珠於淵　同第三藏金於山
抵璧於谷注云抵側擊也　うづもれぬ名　白氏文
集遺文三十軸軸々金玉聲龍門原上土埋骨不埋
名　おろかにつたなき人も　父祖の蔭によりて不
肖の子孫も官位にのぼることあり昔は官をゑらぶ
に賢才を用ふ後世其家になり來るを例とす是を世
官と云よき政にあらず又愚なれども時にあへるは
楊國忠が愚にして國柄を弄が如し　賢人聖人みづ
からいやしき位にをり　孟子萬章下篇爲貧者辭
尊居卑辭富居貧辭尊居卑辭富居貧惡乎宜
乎抱關擊柝孔子嘗爲委吏矣爲乘田矣　人の
聞をよろこぶ　論語顏淵篇云夫聞也者色取仁而
行違居之不疑在邦必聞在家必聞　莊子逍遙遊
云擧世而譽之而不加勸擧世而非之而不加
沮定乎內外之分辨乎榮辱之境　譽は又そしり
の本也　韓退之送李愿序與其有譽於前孰若
無毀於其後與其樂於身孰若無憂於其心
身の後の名　通鑑魏主叡曰選擧勿取有名名如
畫地作餅不可啖也　晉書張翰曰使我有身後
名不如即時一盃酒　智惠いでゝは僞あり　老子
云大道廢有仁義智惠出有大僞　王介甫注云智
者知也惠者察也以其有知有察此大僞所以生
也　息齋注云不幸而又有小智小慧者竊仁義而
行之則僞自此滋亂自此始又老子曰絕聖弃智
　煩惱　大智度論曰煩惱者能令心煩作惱故名
煩惱又曰屬婬瞋屬癡是名煩惱　大藏一覽

詳ニ也　傳て聞學びてしるは誠の智にあらず佛書よりいはゞ偏智權智小智世智便聰之類也眞實の智は圓鏡平等觀察成作是を佛心の四智とす其體を法界と云法界の用は四智也其體用は一心なり莊老の實智をいはゞ愚なるがごとく嬰兒のごとく中央之帝爲ニ渾沌一と云是なり我儒より實智をいはゞ生知の智知仁の智舜の大知これなり鑿智は眞實の智にあらず良知の智是非の智是又眞實なるゆへに致知を大學のをしへとするなり　可不可は一條也　莊子齊物論云方（マサニ）可方不可方不可方可又云可ニ乎可一不ニ可乎不可一物固有レ所レ然物固（マコトニ）有レ所レ可無ニ物不レ然無ニ物不ニ可故道通爲レ一　是善惡是非可不可然不然曲直邪正一切世間の物論を齊するの意なり

何をか善といふとは天台の善惡不二六祖の不思善不思惡とあるに通ずべし

まことの人は　眞人と書道遙遊云至人無レ己神人無レ功聖人無レ名　梁武帝建レ寺度レ僧達磨曰無功德

名利の要をもとむる發端の詞に應映せり

此段名利におぼるゝ者をいましめて筆にまかする所おもしろく侍る兼好は莊老をこのみて又台教をうかゞへり利をむさぼるは人の情なれば誰しも有事にてあれど富（トメル）者の不仁にして禮をこのまざる故に天子諸侯もかならず驕をきはめ身をうしなひ國をやぶる鉅橋鹿臺は却て周のさいわひにあらずや臣としては聚斂するもあり盜臣たるもあり劉瑾朱寧が家財は籍沒の爲につむにあらずや庶民としても貨殖すれば禍を招く譬ば罪なき鳥獸の羽毛歯革の爲に殺（コロサ）るゝがごとし誠におそるべきは是也又名を求むるものは內に實なく外をかざる故に久しければ僞となる名は實の賓なり世の聞えをこのみて其行のなきをば聞也達にあらずと聖人の給へり心に忠信を主として人にしらるべきの德あらば求ずとも名はをのづからいたるべし然らば實の賓も主も不二なるべしされば神仙を好むものは張翰が身後の名あらんより即時一盃の酒にはしかじと云へる心をひきて長生せむことをねがふ己ありてこそ名もよけれなく成て後何の益あらんその傳ふべきかん世の人も又ついにはなくなればともに益なし是兼好が心にも相似たりされどまのあたり古より善人惡人の名は殘れば芳を傳へ臭を殘す事いちじ

るく侍る又不肖なれども高明の家に生れ或は君にさいわひせられ又聖賢なれども時にあはず貧賤なる事をいへる此段の警策なれど下の詞に佛老の見解を以て決する事口おし可不可は一條にして賢愚得失のさかひにおらざるをいたれる道とす是莊子が齊物論の心と金剛經の應無所住而生其心との義にすぎず禪家には是を水上の葫盧といふ我道はしからず不貪を寶とする故に民の利する所を利す善仁を寶とするゆへに玩好の物をたつとばず一人の私にあらずして天下の利なり今も堯舜の心あらば則堯舜の名あらん人の性は善なれば人々皆聖賢の心あるべし内あれば外あり實あれば名あり如何ぞ仁義をすてゝ名をなさん聖人は可もなく不可もなし是を佛老に引合せて見る者あればさす所に不同あり可もなく不可もなきの間に義あり義あれば時に宜くしてをのづからみちにあたる佛老は手のくだしがたき所をかたく守りてかぶりもふらずさしあたりたる所をとりて日用の工夫とし森羅萬象皆いたづら事也とするゆへに名利をすて生死に着せずと云ていみはゞかる所なく恣に行ふ也もし兼好に我道を聞しめば向上の工夫有べきにいと口おしからずや是兼好が兼好たるのみなることにや古人云豈啻黠が見解あらんや又顏子が工夫なし　名利の要をもとむる　の要の二字衍文也莊子盜跖篇に興レ名就レ利と云て下の句に非三以要二名譽一也とあり要の字に假名付たるを合せて誤り來れる也

或人法然上人に念佛の時睡におかされて行をゝこたり侍る事いかゞして此さはりをやめ侍らんと申ければ目のさめたらんほど念佛し給へとこたへられたりけるいとたうとかりけり又往生は一定とおもへば一定不定と思へば不定也といはれたりこれもたうとし又うたがひながらも念佛すれば往生すともいはれけりこれも又たうとし

法然上人　源空也姓漆（ウルマ）間氏美作國稻岡人也父時國母秦氏長承二年四月七日生年十五從二延曆寺功德院皇圓一剃落受戒三期之間通受二台敎一又從二黑谷睿空一稟二密乘及大乘律一凡大藏經律論他宗章疏靡レ不二検閲一晩見二源信往生要集一乃棄二所業一倡二淨土專念之宗一承安四年出二黑谷一居二洛東吉水一盛說二專修及圓頓菩薩大戒一緇白靡然向レ風嘉應帝召入レ宮受

戒藤相國兼實延問ニ淨土之事一空述ニ選擇集一呈レ之專修之徒取爲ニ秘要一建永二年二月竄ニ讃州一建暦元年詔追赴ニ都城一二年正月居ニ大谷一染レ疾其徒安ニ彌陀像於床頭一且爲ニ臨終助標一空曰佛菩薩眞身今又來也二十五日高唱ニ佛號一諸徒助和午時著ニ傳持之慈覺僧伽梨一頭北面西誦ニ光明遍照偈一而寂年八十臘六十六 元亨釋書第五 昔韋提希夫人(イダイケブニン)の爲に如來十六の觀想を開く是淨土念佛の始也其外修多羅に散在して見えたり龍樹天親の二菩薩も此法を修す中華にては東晋の遠法師廬山に入て蓮社を結ぶ曇鸞道綽相續て此宗をひろむ天台大師も淨土十疑論を作て世におこなふ唐の世に及びて善導盛に唱る故に道俗男女のしたがふ事風になびける草のごとし彌陀の化身也とぞ人申ける又少康といへる沙門も善導のあとをしたふ諸人の著述多けれ共天台の十疑善導の疏義ことにすぐれて覺え侍る本朝にては空也上人初てより惠心の僧都往生要集をゑらびて深く信ずる故に安養に生る其後法然上人あまねく諸宗にわたるといへども此宗にしくはなしとて他宗をすてゝ專修の法をたてたり台家には法然も往生要集を見て覺り知といへど淨土家には直に善導の書をよみてさとるうへに又奇夢の告ありていよ〳〵他念なしと申侍る月輪相國のために作れる撰擇集今の代まで彼家の授受相傳にて有となん其門人多かり或は即便往生と云は衆生往生せずば彌陀も正覺をとらじとの大願ありて既に十劫以前成佛し給へば一切衆生も悉皆彌陀同時に成佛す今日唱る念佛は其佛恩を報ずるなり或は當得往生と云は無知の凡夫多の罪をつくりて地獄に落べきに一たび彌陀を信ずれば衆罪皆消滅して極樂國土に往生する也或は又今一念にたすけ給へとかたく信ずる時攝取して捨給はぬ其時決定往生と思ひて是を信心と名づけ其上の一期の間申念佛は報謝なりといふ或は又臨終念佛すればかならず佛菩薩の來迎にあづかるともいふかくまち〳〵に成ゆく類多かり夫往生とは西方に生るゝ也西方は西方にあらず又東南北にかぎらず西方は清淨國土也念佛は清淨心也阿彌陀は清淨身也身心心土もとより不二なれば念阿彌陀佛極樂國土とは申也壽命無量なるゆへに梵語に阿彌陀といへりそこを悟るを往生と名づく一切の形

有ものは限あり心は虚空のごとく形なき故に心の悟を無量壽覺とも申也まよへるものは十萬億土さとれる物は去此不遠也たとへば弱水三萬里を隔たる蓬萊も身裏に蓬萊十二樓あるがごとし曇鸞の丹經を焼すてゝ念佛を修し呂洞賓が袖裏の青蛇を抛て黄龍に参せしは身裏蓬萊を唯心淨土にかへたるなるべし然れば長生不死といへるも往生して壽命無量なりといへるもともに共さす所なきにあらずとしるべしされども念佛の弊有事は又よく知べき也此世の貧賤飢寒にくるしむ者は早く死して極樂にむまるべしと云てみづからくびくゝり水火に入もあり又一たび念佛する力にて無量罪を消滅すと云て殊更にあしきことをする者もあり又男女をすゝめ入とて却て法を犯す故に法然の弟子安樂が六條河原にて斬るゝがごとくなるもあり又愚なる人人をそゝのかしていよ〳〵いつはりを恣にして口に念誦すれどもその心は雜亂おほく妄念のみ増長せるものは淨土門の罪人なるべしたゞ蓮花の淤泥より出て泥にそまざるごとく世にあらば娑婆即寂光とも蓮花國とも申べき也今の人々念佛するもの多き故に示しさとさんためあら〳〵筆にまかせはべる心あらん人いかゞ思ふべきや

因幡國に何の入道とかやいふ者のむすめかたちよしと聞て人あまたいひわたりけれども此むすめたゞ栗をのみ食てさらによねのたぐひをくはざりければかゝることやうのもの人に見ゆべきにあらずとておやゆるさゞりけり

いひわたりけれども　源氏東屋にいと念比にいひわたりけりとあり　栗をのみくひて　異本に栗とあるは非也京六條町に老尼あり常に大豆を食て更に米をくはず人の所へゆけば豆腐を烹てくはせけり人みな豆婆とぞ云ける又伊豆國三島に或人のむすめあり五穀をくはずたゞ菓をのみくいけるが是は或人に嫁しけるとなむ

五月五日賀茂のくらべ馬を見侍りしに車の前に雜人立へだてゝ見えざりしかば各おりてらちのきはによりたれどことに人おほくたちこみてわけ入ぬべきやうもなしかゝるおりにむかひなるあふちの木に法師のゝぼりて木のまたについゐて物見るありとりつきながらいたう睡て落ぬべき時に目をさますこと度々

なりこれを見る人あざけりあざみて世のしれ者かなかくあやうき枝の上にてやすき心ありてねふるらんよといふに我心にふと思ひしまゝにわれらが生死の到來たゞ今にもやあらんそれをわすれて物見て日をくらすをろかなることはなをまさりたる物をといひたれば前なる人どもまことにさにこそ候けれ尤をろかに候といひてみなうしろを見かへりてこゝへいらせ給へとて所をさりてよび入侍りにきか程のことはり誰かは思ひよらざらんなれども折からのおもひがけぬ心地して胸にあたりけるにや人木石にあらねば時にとりて物に感ずる事なきにあらず

五月五日賀茂の　元亨釋書二十八一演法師欲レ安ニ觀音像一廣求ニ靈區一貞觀中到ニ平安城東北鴨河西岸ニ于レ時此地搖震紫雲降垂蓮花紛亂奇香薫郁演喜而搆ニ伽藍一以レ故號ニ感應寺一一日老翁持ニ釣竿一出ニ河中一語レ演曰我此地之主也自レ今應レ爲ニ護伽藍神一我有ニ神力一能除ニ魔障一去ニ疫癘一又結ニ好夫婦一調ニ適産育一所謂牛頭天王者也我好レ眠一歳三百六十日只五月五日醒餘日皆臥端午之朝初起向レ天吐レ氣其氣或爲ニ雲霞一或爲ニ雨露一觸レ萬不レ同其所レ觸或爲レ藥或爲レ毒或爲ニ惡瘡一或爲ニ疾疫一皆是有情之業感也非ニ我強爲一也言已形隱演錄ニ神言一奏レ朝勅ニ黄門侍郎藤長良一就ニ其地一七日夜行道念誦以報ニ神德一　一演法師は大中臣氏洛城人なり　くらへむま　競馬と書なり　世のしれもの　源氏帚木にしれものゝ物語をせん花鳥にしれ物などはざれものなどいふがごとし萬葉第九詠ニ浦島子一歌に世間之愚人(シレタルヒト)之吾妹兒爾　をろかなる義なり　左傳晉悼公周子有レ兄無慧不レ辨ニ菽麥一故不レ可レ立杜預曰菽大豆豆麥殊レ形易レ別故以爲ニ痴者之候一不慧蓋世所謂白痴　人木石にあらねば　遊仙窟云心非ニ木石一豈忘ニ深恩一　白氏文集人非ニ木石一皆有レ情不レ如不レ遇ニ傾城色一　伊勢物語にむかしおとこありけり女をとかくいふこと月日へてけりいわ木にしあらねば心ぐるしくやおもひけむ

唐橋中將といふ人の子に行雅僧都とて教相の人の師する僧ありけり氣の上る病ありて年のやう〳〵たくるほどに鼻の中ふたがりて息も出がたかりければさま〴〵につくろひけれどわづらはしくなりて目眉額などもはれまとひてうちおほひければ物も見えず二

の舞の面のやうに見えけるがたゞをそろしく鬼のかほになりて目はいたゞきのかたにつき額のほど鼻になりなどしてのちは坊のうちの人にも見えずこもりゐて年久しくありてなをわづらはしく成て死にゝけりかゝる病も有事にこそありけり
唐橋　村上源氏久我の庶流なり

大納言正二 雅親──侍従正五下 通頼
唐橋権大納言正二 通資──参議中将正三 雅清──行雅 僧都

教相　眞言宗に經論聖教を學を教相としおこなひをするを事相とす　氣のあがる　源氏若菜下に氣のゝぼりぬるにやうちおほひければ眉額などはれて目の上へおほふなり　二の舞のおもて　伶人の舞の面也色赤しておそろしき也安摩とておかしき舞あり其次に舞を二の舞と云也　鬼のかほになりて　剪燈新話に載たり馮大異が鬼穴に入て鬼のかたちに成てかへりたれば里人どもおそれて近づかざることおもひ合せ侍る
此段奇異の病の有事をいへり案ずるに莊子　人間世支離疏者頤隱ニ於齊一肩高ㇾ於ㇾ頂會撮指ㇾ天五管在ㇾ上兩髀爲ㇾ脅註云會撮髻也五管五臟之腧也　又大宗師篇にいへる子輿が病もかくのごとし莊子が詞は寓言なれども又實なる事も有べし唐の悟達國師に人面瘡の病ある事編年通論佛祖統紀勸善書等に有又人あり膊（カタ）に人面瘡を生じて酒食を瘡の口よりくはしむ貝母（バイモ）をのませて愈ぬと酉陽雜俎に見えたり又人の鼻より鉄針のごとくなる鬚はへたる事或は腹中に應聲虫のある事などゝ捜神秘覽にのせたり又名醫類案には種々の奇疾をしるせりしかれば行雅僧都の病もさもあるべし又河内の矢田寺に繪草紙あり繪は住吉法眼が筆也と云傳ふ色々のめづらしきあらぬ異病を書り其草紙近世人々取ちらして屏風障子などにはりけり又一鷗宗閑といへる醫師筑紫へまかりけるにある所にて宿を借る婦人出合て主人の疾を見せしめんと云入て見れば一人耳目口鼻もなくして坐せる者あり是我が男なりと云驚て出てゝ委く問へば彼婦人いかなる前世の因果にやかゝる人と契けるぞやみづから飲食を與れば手にとりて頂の上にをき頂に口有て物をくふと

云かゝるあやしき事もあることにやと人にかたりき

春のくれつかたのどやかに艶なるそらにいやしからぬ家のおくふかく木立ものふりて庭に散しほれたる花見過しがたきをさし入てみれば南面のかうし皆おろしてさびしげなるに東にむきて妻戸のよきほどにあきたる御簾のやぶれより見ればかたちきよげなる男のとし廿ばかりにて打とけたれど心にくゝのどやかなるさまして机の上に文をくりひろげて見ゐたりいかなる人なりけんたづねきかまほし

えんなるは艶の字也みやびかと讀り春風艶陽の景の體なり　花見すぐしがたきを　有レ花便入レ門主人莫レ問レ誰　白氏文集遙見二人家一花便入不レ論二貴賤與中親疎上

あやしの竹のあみ戸のうちよりいとわかき男の月影にいろあひさだかならねどつやゝかなる狩衣にこきさしぬきいとゆへつきたるさまにてさゝやかなる童ひとりをぐして遙なる田の中のほそ道を稲葉の露にそぼちつゝわけゆくほど笛をえならずふきすさびたるあはれと聞しるべき人もあらじと思ふにゆかんかたしらまほしくて見をくりつゝ行ば笛を吹やみて山のきはに惣門のあるうちに入ぬ

つやゝかなる　うつくしき意也　狩衣にこきさしぬき　濃紫濃紅の色也裝束にさしぬきは紫色なり
ゆへつきたる　似合たる義なり　さゝやかなる
ほそやかにちいさき也源氏帚木にさゝやかにてふしたり河海に細々許少々　いなばの露にそぼちつゝ
そぼちはぬるゝ也　古今「心から花の雫にそぼちつゝ鶯とのみ鳥の鳴らむ　えならず　ゑもいはず面白き義也　吹すさび　手ずさみ口ずさみの類なり又ふきやむ義もあり又すさびに愛するとたゆむとの兩儀あり此段と上の段とをよみて見れば東坡が李節推を尋て風水洞にあそびし景氣あるやうに覺え侍る男色の事は歷代の史におほく見えたり大明國へ入人の申しは湖廣道には男色のことを栽尾と云とかたりしはさもあるらむ

榻にたてたる車の見ゆるも都よりは目とまる心ちして下人にとへばしか〳〵の宮のおはします比にて御佛事などさふらふにやといふ御堂のかたに法師どもまいりたり夜寒のかせにさそはれくるそらたきもの

ゝにほひも身にしむこゝちす寝殿より御堂の廊にかよふ女房のをひ風よういなど人めなき山里ともいはず心づかひしたり心のまゝにしげれる秋のゝらはをきあまる露にうづもれて虫の音かごとがましく遣水の音のどやか也都のそらよりは雲の往來もはやき心ちして月のはれくもる事さだめがたし

此段を前段と一に書つゞけたる本有いかゞあるべき・・・・・・

榻　和名集榻之知床也車をすえておく物なりくらかけのやうなるもの也　女房のをい風よういなど　ようい用意と書　をいかせはたき物の匂也　源氏東屋にうちはらひ給へるをい風いとかたわなるまで東のさと人もおどろきぬべし　虫の音かごとがましく　加言と書り　源氏幻巻「つれ〳〵と我なきくらす夏の日をかごとがましきむしのこゑかな　又誓ふ心又かこつ心又かこつけの儀其所によりてかわるべし

公世の二位のせうとに良覺僧正と聞えしは極てはらあしき人也けり坊の傍におほきなる榎の木のありければ人榎木僧正とぞいひける此名然べからずとてかの木をきられにけり其根の有ければきりくいの僧正といひけりいよ〳〵はら立てきりくいをほり捨たりければそのあとおほきなる堀にて有ければ堀池僧正といひける

公世　閑院の末流箏一流の家なり

八條相國 實行—三條內大臣 公教—權大 正二 實國—參議 從二 公清—從三 實俊—二位侍從爲洞院 公世 實雄子
滋野井 實國　八條 公清
山 良覺大僧正

せうと　兄也又兄弟姉妹をも云背夫共書郭槖駝は せかゞまりて槖駝といへる馬に似れば人是を駝と名づく駝我が名によく相應したりとてみづからもとの名をかへて駝と云淵明は宅邊に五柳樹あるによりてみづから五柳先生と號す松うへしものを栽松道者といふ又松菊主人と云人もありかやうの類多かり榎木僧正といへばとてあしき名にはあらざるに何とてはらあしくいかりけるぞや唐の方玄英がことも思ひ出られ侍る方干唇かけて兎の口に似たれば缺唇先生といふかくかたわなる物は及第しがたしと云によりて醫師に逢つくろひければ人又補唇先生とぞ申ける或時人に逢てあやまりて三拜

しければ又方三拜とぞ申ける後に鑑湖にかくれ居て山野をありきければ時の人方處士と號す身まかりてのち門人玄英先生とぞ謚しけるかゝる事も世にありける事にこそ　皇朝類苑四十六江南邊鎬柔懦寡斷唯好ニ釋氏一初從レ軍平ニ建州一凡所ニ克捷一惟務ニ全活一建人德レ之號爲ニ邊羅漢一及レ克ニ湘潭一鎬爲ニ統軍一諸將欲ニ縱掠一獨鎬不レ允軍入ニ其城一巷不レ改レ市潭人益嘉レ之謂ニ之邊菩薩一及レ帥ニ於潭一政出ニ多門一絕無ニ威斷一惟事ニ僧佛一楚人失レ望謂ニ之邊和尚一

柳原の邊に强盜法師と號する僧有けりたび〳〵强盜にあひたるゆへにこの名をつけにけるとぞ

南都に强盜法師と號する僧あり惡人のうちにまじりて盜賊をなす夜る人の家に忍び入にも人よりさきに入又人より後に出財物をわかつ時も人にくれてをのれはとらず用のあらん時はうくべしといふ久しくして賊徒をすゝめ惡をあらため善に趣かしめんとおもふ心あり是によりて强盜法師といふ名を得たりくはしく沙石集に見えたり　それ名に五つのしな有事春秋傳に見えたり後世の稱呼すくなからず跖か盜賊たるにより盜跖と號するはまことに惡名なれど人によりてかわるべし衞の君の名を惡と云その臣に石惡と云者あれど必しもともに惡人には定めがたし僑如はゑびすの名なれども叔孫得臣ゑびすを討て其子を叔孫僑如と名づけ鴟夷は馬の皮にてつくれる袋也吳王是に子胥をもりて殺す范蠡それを戒てみづから鴟夷子皮と名をかへたり是によりて見れば名を聞て其實を委くたづねずは人をあやまる事あるべしされどまた義平が伯父の義廣をうつにより惡源太とよばれ景淸が伯父大日といへる沙門を殺す故に惡七兵衞と號せらるゝたぐひあればその行跡により名もしたがへり幽厲の諡を子孫として改事あたはざるがごとし

或人淸水へまいりけるに老たる尼の行つれたりけるが道すがらくさめ〳〵といひもて行ければ尼御前何事をかくはの給ふぞとゝひけれどもいらへもせずなをいひやまざりけるを度々とはれてうちはらだちてやゝはなひたる時かくまじなはねば死ぬる也と申せばやしなひ君の比叡山に兒(チゴ)にておはしますがたゞ今もやはなひ給はんと思へばかく申ぞかしといひけり有難き志なりけんかし

清水　はなひたる時　萬葉「ますらをが弓もつかたのまゆねかけはなひ〻もとくいもにあはむかも　古今「出てゆかん人をとゞめんよしなきにとなりのかたにはなもひぬかな　毛詩邶風終風篇寤言不レ寐願言則嚏註曰我甚憂悼而不レ能レ寐汝思ニ我心如レ是我則嚏今俗人嚏云人道レ我此古之遺語也　瑣砕錄曰占ニ噴嚏一子日酒食卯日大吉辰日婚合午日喜事酉日客至戌日嫉思亥日君子思餘皆凶　漢書藝文志嚏耳鳴雜占十六卷 師古曰嚏音丁計反　李濟翁資暇集今人每レ嚏必自祝レ所レ祈云々案邶終風篇注願猶レ思也言猶レ我也蓋他人思レ我我則嚏レ之也鄭又稱古遺語每レ嚏云ニ人道一我以爲他人說レ我々則嚏此正得其願言者非ニ呪願之願一非ニ語言之言一今則自祝乃由ニ誤解一詩句一爾　容齋隨筆第四云今人噴嚏不レ止者必噀レ唾祝云有レ人說レ我婦人尤甚云々嚏音帝鼻氣　まじなわねば　日本紀第一定ニ其禁厭之法一

光親卿院の最勝講奉行してさふらひけるを御前へめされて供御をいだされて食せられけりさて食ちらしたる衝重を御簾の中へさし入て罷出にけり女房あなきたな誰にとれとてかなと申あはれければ有職のふるまひやむごとなき事なりとかへすがへす感ぜさせたまひけるとぞ

光親卿　東鑑二十五承久三年七月十二日按察卿光親 去月出家法名西親者爲ニ武田五郎信光之預一下向而鎌倉使相ニ逢于駿河國車返邊一依レ觸ニ可レ誅之由一於ニ加古坂一梟首訖時年四十六云々此卿爲ニ無双寵臣一又家門貫首宏才優長也今度次第殊成ニ競戰之忠一頻有レ達ニ君於正慮一之處諫議之趣頗背ニ叡慮一之間雖ニ進退惟谷一書ニ下追討宣旨一忠臣法諫而隨レ之謂歟其諷諫申狀數十通殘ニ留仙洞一後日披露之時武州後悔惱ニ丹府一云々　又源光行か海道記にも光親の事あり　ついがさね　衝重とも筑重とも書りわりごのやうなる折敷なり　やんごとなきこと　こゝにてはほめたることば也此段の心は最勝講の奉行たるにより威儀をつくろふいとまなく物くひちらしたるついがさねをそのまゝさしをくてとのいそがはしき時はかく有べし器物をふところにして出べきにもあらずまたをくへ入て女房にさづくべき所にもあらずその日は講日なれば奉行のつとめを專ずるゆへなりそれを有職のふるまひなりとおほせけることば

にもと思ひ侍るたとへば君の前にても甲冑の士は蓙拜せざるがごとし

老來て始て道を行ぜんとまつことなかれふるき墳おほくは是少年の人也はからざるに病をうけて忽にこの世をさらんとする時にこそ初て過ぬるかたのあやまれる事はしらるなれあやまりといふは他の事にあらず速にすべき事をゆるくしゆるくすべきことをいそぎて過にしことのくやしき也其時悔ともかひあらんや人はたゞ無常の身にせまりぬる事を心にひしとかけてつかのまもわするまじきやさらばなどか此世のにごりもうすく佛道をつとむる心もまめやかならざらん昔有けるひじりは人來て自他の要事をいふ時答て云今火急の事ありてすでに朝夕にせまれりとて耳をふたぎ念佛してつゐに往生を遂げりと禪林の十因に侍り心戒といひける聖はあまりに此世のかりそめなる事を思ひてしづかについゐけることだになく常はうずくまりてのみぞありける

老來りてはじめて道を　朱文公勸學文勿レ謂今日不レ學而有ニ來日一勿レ謂今年不レ學而有ニ來年一日月逝矣歳不ニ我延一嗚呼老矣是誰之愆　ふるき墳　李卓吾淨土決云古人句云莫下待ニ老來一方學上レ道孤墳盡是少年人　待ニ老來一始莫レ學レ道古墳多是少年人　すぎぬることのあやまれる　莊子蘧伯玉行年六十而知ニ五十九年之非一　淵明歸去來辭覺ニ今是而昨非一　つかのまも　新古今「夏野行をじかの角のつかのまも忘れずぞ思ふいもが心を　八雲抄につかのまはたとへば草かりてつかぬるほどゝ云へり時の間也　小鹿の角の束の間は鹿の新く角を生ずる時一束ばかりに短をいふ夏月に角を生ずる故に夏野ゆくとよめり　禪林の十因　禪林は寺の名也東山永觀堂なり其永觀律師の作れる往生十因一卷あり一廣大善根故二衆罪消滅故三宿緣深厚故四光明接取故五聖衆護持故六極樂他生故七三業相應故八三昧發得故九法身同體故十隨順本願故　心戒　或云心海歟　新後撰九　心海上人一念不生をよめる「草のはにむすばぬさきの白露は何をたよりてをきはじめけん　同十八心海上人「命をばいかなる人のおしむらんうきにはいけるみこそつらけれ

應長の比伊勢國より女の鬼に成たるをゐてのぼりたりといふ事ありて其比廿ばかり日ごとに京白川の人

鬼見にとて出まどふ昨日は西園寺にまいりたりし今日は院へ参るべしたゞ今はそこ〳〵になどいひあへりまさしく見たりといふ人もなくそらごとゝ云人もなし上下たゞ鬼の事のみいひやまずその比東山より安居院邊へ罷侍しに四條よりかみさまの人皆北をさしてはしる一條室町に鬼ありとのゝしりあへり今出川の邊より見やれば院の御棧敷のあたり更にとほりうべうもあらず立こみたりはやく跡なき事にはあらざめりとて人をやりて見するにおほかたあへるものなし暮るまでかくたちさはぎてはては闘諍おこりて淺ましきことゞも有けりそのころをしなべて二三日人のわづらふ事侍しをぞかの鬼のそらごとは此しるしをしめす也けりと云人も侍し

應長　花園院の年號なり　ゐてのぼりたり　つれてのぼりたる也以の字をも將の字をも書也伊勢物語にゐていきけりとあり　院の御棧敷　たちこみたり　一本にたちこもたりと有　はやくあとなき事は　八雲抄にはやくはもとよりなどいへる心也

凡訛言妖言の世におこなはるゝ事古今なきにあらずあやしき衣服をきる人あるをば服妖といひ常ならぬ言語あるをば言妖といひめづらしき歌謠あるをば謠言といひ草木鳥獸虫魚に到るまで常をうしなへば陰陽の理にそむく故にかならず孽診となる也五行家に是を専いふ事にて漢書の五行志にくはしくしるせり漢の成帝の時に訛言ありて只今洪水至らんとすと長安城中大きにさはぎみかどをはじめ山にのぼらん船にのらんなどありしを王商すこしもあはてたる事なくいつはりなるべしとかたく申ければはたして洪水なかりけり日本にても怪異の物語は人々する事なれど我こそたしかに見たれといふ者はまれなり然れども君の德なく政あしければ天地の和をやぶるゆへに非常の事もいたるべし

龜山殿の御池に大井河の水をまかせられんとて大井の土民におほせて水車をつくらせられけりおほくのあしを給て數日にいとなみ出してかけたりけるに大方めぐらざりければとかくなをしけれども終にまはらでいたづらにたてりけりさて宇治の里人をめしてこしらへさせられければやすらかにゆひてまいらせたりけるが思ふやうにめぐりて水をくみいるゝ事め

でたかりけり萬に其道をしれる者はやんごとなきもの也

龜山殿　龜山院嵯峨の龜山の麓に山莊を立て御隱居有し故に龜山殿と申也　水をまかせられんとて　西行歌「眞管おふるあら田に水をまかすればうれしがほにも鳴蛙かな　家隆歌「庭の面にまかせし水も岩こえて外にせきやる五月雨のうち　水車　東坡集十三無錫道中賦二水車一詩翻々聯々御レ尾鴉犖々确々蛻レ骨虵分レ畦翠浪走二雲陣一刺レ水綠鍼抽二稻牙一注曰江浙間人目二水車一爲二龍骨車一　水車の用は田へ水をかけてひでりにそなふるためなれば其造式と其圖とをしるして王氏が農書につまびらかなり

徒然草野槌上之五

仁和寺にある法師年よるまで石淸水をおがまざりければ心うく覺てある時思ひ立てたゞひとりかちよりまうでけり極樂寺高良などをおがみてかばかりと心得てかへりにけりさてかたへの人にあひて年比思ひつることはたし侍り聞しにもすぎてたうとくこそおはしけれそも參りたる人ごとに山へのぼりしは何事かありけんゆかしかりしかと神へまいるこそ本いなれとおもひて山までは見ずとぞいひけりすこしのことにも先達はあらまほしき事也

仁和寺　寛平法皇の御庵室有により御室とも申也

石淸水　貞觀年中に和州大安寺の僧行敎筑紫宇佐八幡に參りし時大菩薩夢に見えて汝王城に歸るべし我もともに行て天子を護らんとの給ふ行敎夢覺て奇異の思ひをなし都にのぼる時山崎に到る其夜又夢に我すむ所を見よとの給ふ覺て見れば東南男山鳩嶺に大なる光あり行敎すなはち奏聞して勅使を立られ宇佐を此處に勸請ある也神皇正統紀公事根源元亨釋書等に見えたり　かちより　徒歩より

也
極樂寺八幡宮護國寺別當安宗開山也縁起云大安寺傳燈大法師位安宗謹言伽藍壹院號曰二極樂寺一在二山城國久世郡科手上里一右件寺奉二為石清水八幡大菩薩三所君達梵天帝釋天神地祇一兼師僧父母六親眷屬三有法界有識無識皆悉爲レ令レ往二生極樂淨土一以二去元慶漆年一始所二建立一也云々安宗者行教和尚之弟子也　高良武内宿禰也日本紀にあり天武二年二月八日高良託宣曰譽田天皇御宇爲二晨昏武畧之健將又公卿補任武内神大臣孝元天皇五世孫也在官二百四十四年春秋二百九十五年但薨年月日人不レ知レ之或云仁徳天皇五十五年丁卯薨或説かわらは玉垂命也　かばかり　かくばかり也

是も仁和寺の法師童の法師にならんとする名殘とて各遊こと有けるに醉て興に入あまり傍なる足鼎を取て頭にかづきたればつまるやうにするを鼻をおしひらめてかほを指入て舞出たるに滿座興に入こと限なししばしかなでゝ後ぬかんとするに大かた拔れず酒宴ことさめていかゞはせんとまどひけりとかくすればくびのまはりかけて血たりたゞはれにはれみちて息もつまりければ打わらんとすれどたやすくわれずひゞきてたへがたかりければかなはですべきやうなくて三足なるつのゝ上にかたびらをうちかけて手をひき杖をつかせて京なるくすしのがりゐて行ける道すがら人のあやしみ見ること限なし醫師のもとにさし入てむかひゐたりけん有さまさこそことやうなりけめ物をいふもくゝもり聲にひゞきて聞えずかゝる事は文にも見えず傳たるをしへもなしといへば又仁和寺へ歸てしたしき者老たる母など枕上によりゐてなき悲しめどもきくらんとも覺えずかゝるほどに有ものゝいふやうたとひ耳鼻こそきれうすとも命ばかりはなどか生ざらむたゞ力をたてゝひき給へとて藁のしべをまはりにさし入てかねをへだてゝ頸もちぎるばかりひきたるに耳鼻かけうげながらぬけにけりからき命まうけて久しくやみゐたりけり

あしかなへ　鼎の字を讀り和名集説文云三足兩耳和二五味一寳器也世俗に云手どりなべの類也拾遺「つの國のなにはわたりに作る田はあしかなへかとえこそ見わかね　かなでゝ　奏の字を讀り歌舞すること也　くゝもり　神代卷溟涬（クヽモリ）と書り分明なら

ざる也　文にも　臂書をいふ　まくらがみ　枕上
なり枕もとをいふ　からきいのち　辛苦の義也
御室にいみじき兒のありけるをいかでさそひ出して
あそばんとたくむ法師ども有て能あるあそび法師と
もなどかたらひて風流の破子やうの物念比にいとな
みいでゝ箱ふぜひの物にしたゝめ入てならびの岡の
便よき所にうづみをきて紅葉ちらしかけなど思よら
ぬさまにして御所へ参りて兒をそゝのかしいでにけ
りうれしと思ひてこゝかしこあそびめぐりて有つる
苔のむしろになみゐていたうこそこうじにたれあは
れ紅葉をたかん人も哉験あらん僧達いのり心みられ
よなどいひしろひて埋つる木のもとにむきて數珠を
しすり印ことことどしくむすび出などしていらなくふ
るまひて木の葉をかきのけたれどつや〳〵物も見え
ず所のたがひたるにやとてほらぬ所もなく山をあさ
れどもなかりけりうづみけるを人の見をきて御所へ
まいりたるまにぬすめる也けり法師どもことのはな
くて聞にくゝいさかひはら立てかへりにけりあまり
に興あらんとする事は必あいなき者也
風流のはりごやうの物　ふりうと讀べしやさしき

義なり破子とも破籠とも書り飲食を入る具也和名
云樏子(カレヒゲ)今俗所レ云破子是也以レ餉送レ人也　そゝの
かし　唆の字也　いたうこそこうしにたれ　いた
うは甚とも傷共痛とも萬葉に書り　源氏須磨にい
たうこうじ給ひにければ花鳥にこうは困の字なる
べしくたびれはてたると云心也　紅葉をたかん
白氏文集林間煖レ酒燒二紅葉一石上題レ詩拂二綠苔一
いひしろひて　互にいふ義也　いらなくふるまひ
て　こと〳〵しくふるまひたる也　つや〳〵物も
みえず　さきにうづみたる破子見えざる也　山を
あされども　求也求食(アサル)は鳥などの食を求也　定家
歌「よらはたゞ見なれぬ草もなかりけりさわらび
あさる山のたよりに
家の作りやうは夏をむねとすべし冬はいかなる所に
もすまるあつき比わろき住居はたへがたき事也ふか
き水は涼しげなし淺くてながれたる遙にすゞしこま
かなる物を見るに遣戸は蔀の間よりもあかし天井の
高きは冬さむく燈くらし造作は用なき所をつくりた
る見るも面白く萬の用にも立てよしとぞ人の定あひ
侍し

家の作りやう　造家式は居家必用などにも見えたり　夏をむねとすべし　楊誠齋詩矮屋炎蒸不レ可レ居高天爽氣亦全無　あさくて流れたる　造作は用なき所を　莊子曰知二無用一而始可三與言二用矣地非レ不二廣且大一也人之所レ用容レ足耳然則廁レ足而墊レ之致二黃泉一人尙有レ用乎惠子曰無レ用莊子曰然則無用之爲レ用亦明矣

久しくへだゝりてあひたる人の我方にありつる事かず〳〵に殘なく語つゞくるこそあいなけれへだてなくなれぬる人もほどへて見るははづかしからぬかは次さまの人はあからさまにたち出てもけふありつる事とていきもつぎあへずかたり興ずるぞかしよき人の物語するは人あまたあれどひとりにむきていふををのづから人も聞にこそあれよからぬ人は誰ともなくあまたの中にうち出て見ることのやうにかたりなせば皆おなじくわらひのゝしるいとらうかはしおかしき事をいひてもいたく興ぜぬと興なき事をいひてもよくわらふにぞしなのほどはかられぬべき人のみざまのよしあしざえある人は其事など定あへるにをのが身をひきかけていひ出たるいとわびし

あからさま　暫の字をよめり又白地とも書りかりそめの儀也　いきもつきあへず　二條院讃岐歌「わたつ海のなみまかきわけてかづくあまのいきもつきあへず物をこそおもへ　よからぬ人は誰ともなく　こゝをば曲禮の譏言することなかれ勦說することなかれ雷同することなかれといへる所をもちて見るべし　らうかはしき　亂かはしき也源氏夕顏にらうかはしき大路にたちおはしてとあり

人のかたりいでたる歌物語の歌のわろきこそほいなけれ少し其道しらん人はいみじと思ひてはかたらじすべていともしらぬ道の物がたりしたるかたはらいたく聞にくし

道心あらば住所にしもよらじ家にあり人にまじはるとも道をねがはんにかたかるべきかはと云はさらに道しらぬ人也げには此世をはかなみ必生死をいでんと思はんに何の興有てか朝夕君に仕へ家をかへりみるいとなみのいさましからん心は緣にひかれてうつるものなれば閑ならでは道は行じがたしそのうつは物昔の人に及ばず山林に入ても餓をたすけ嵐をふせぐよすが無てはあられぬわざなればをのづから世を

むさぼるにたる事もたよりにふればなどかなからんされはとてそむけるかひなしさばかりならばなじかはすてしなどいはんは無下の事なりさすがに一度道に入て世をいとはん人たとひ望ありともいきほひ有人の貪欲おほきににるべからず紙の衾麻の衣一鉢のまうけあかざのあつ物いくばくか人のついへをなさんもとむる所はやすく其心はやく定ぬべしかたちにはづる所もあればさはいへど惡にはうとく善にはちかづく事のみぞおほき人と生たらむしるしにはいかにもして世をのがれむことこそあらまほしけれひとへにむさぼる事をつとめて道にをもむかざらんは萬の畜類にかはる所有まじくや

道心あらば住所にしもよらじ　沙門は既に出家と名づくるうへは桑下にも三宿せずと後漢書にあり又釋尊も樹下石上に端座し給へりいかんぞ居所をさだめんや　君に仕へ家をかへり見る　惠遠法師のときより沙門不レ敬ニ王者ニ不レ拜ニ父母一などいへることはいひ出せり又棄レ恩入ニ無爲一眞實報恩者といひ一子出家九族登レ天など云論文あり　心は縁にひかれて　本生心地觀經ニ云心如ニ流水一念々生滅於ニ前後世ニ不ニ暫住一故心如ニ大風ニ一刹那間歷ニ方所一故心如ニ猿猴一遊ニ五欲樹一故心如ニ飛蛾一愛ニ燈色一故心如ニ野鹿一逐ニ假聲一故心隨ニ萬境一轉々所實能幽　よすが　たより也　貪欲おほき　法華經諸苦所レ因貪欲爲レ本若滅ニ貪欲一無レ所レ依レ　此　紙の衾　一鉢のまうけ　事文類聚前集僧問ニ守清禪師一如何是和尚家風曰一瓶兼ニ一鉢一到所是天涯　あかざのあつもの　范堯夫布衾銘藜藿之甘綈布之溫名敎之樂德義之尊　六韜鹿裘禦レ寒布衣掩レ形糲粱之飯藜藿之羹

此段の道をねがはん道しらぬの道の二字みな後世と書又末の道におもむかざらんの道の字を菩提と書ける本あり非か　夫佛道を求る者山林にも市朝にもかぎらず心は同じかるべしといふ人あれどみやづかへし家をいとなまばしづかなる心まれなる故に俗縁にひかれて道を行じがたしされど山林に入ても飢寒を忍びがたければ又むさぼる心もしばらく有べけれどもさすが世の人のはなはだしきにはまさるべし草衣木食の身は大なるついへもなく事たることもすみやか也貧賤をはづる所はあれど

も善にはすみやすく惡には遠ざかることとなれば世をのがれてこそ道をば求やすけれ然らざれば畜類にことならずといへる兼好が心佛道におゐてはさも有なん若或は眞俗不二といひ世間相常住といひて大乘の道は善をもとらず惡をもすてず色は氷にして空は水也煩惱はしぶかきにして菩提は熟柿なればいづれもみな本來一體也など思ふ故に三毒いよ〳〵増長してまのあたり魔道に入是らの人は兼好が罪人也稻のひいでざるはひゑの熟するにしかず大乘をほしいまゝにするはかへりて小乘の殊勝なるにしかず若又我道よりいはゞ兼好がいふ所の道は何事をさすや君臣父子夫婦兄弟朋友の外に道あらず人の道は須臾もはなれざる事は魚の水をはなれざるが如し沙門は君をすて父をすて男女をはなれ世のまじはりをたち山林にのがれて寂寞枯槁なれば人倫をいとふ人倫絶するを禽獸とす兼好は世俗を畜類とすれど儒より見ればかの世をのがれて人倫をみだる者を禽獸とす道は人にあり人こそよく道をひろむれいかんぞ人をすてゝ道をえん是孔孟の異端をふせぐ道にして昌黎が家法なるべし

大事をおもひたゝん人は去がたき心にかゝらんことのほいを遂ずしてさながら捨べきなりしばし此事はてゝおなじくはかの事沙汰しをきてしか〳〵の事人の嘲やあらん行末難なくしたゝめまうけて年來もあればこそあれ其事待んほどあらじ物さはがしからぬやうになど思はんにはえさらぬことのみいとゞかさなりて事のつくる限もなく思ひ立日もあるべからずおほやう人を見るに少し心あるきはゝ皆此あらましにてぞ一期はすぐめるちかき火などににぐる人はしばしとやいふ身をたすけんとすればはぢをもかへり見ず財をもすてゝのがれざるぞかし命は人をまつものかは無常の來る事は水火のせむるよりも速にのがれがたき物を其時老たる親いときなき子君の恩人の情捨がたしとてすてざらんや

大事をおもひたゝむ　法華經方便品世尊唯以二一大事因縁一故出二現於世一　水火のせむるよりも　孟子豈有レ他哉避二水火一也如二水益深一如二火益熱一

老たる親いときなき子　花山院十九にならせ給ふ時悲華經に妻子珍寶及王位臨二命終時一不レ隨者とあるを御覽じてひそかに位をのがれ出家し給ふ佛

者には殊勝なる有難き法皇かなといへば此段の心にもかなふべしされども公道よりみれば御氣のちがはせ給ひてかくならせ給ふといひ傳へたるぞ誠なるべき

眞乘院に盛親僧都とてやんごとなき智者有けりいもがしらといふ物をこのみておほくくひけり談義の座にてもおほきなる鉢にうづだかくもりてひざもとにおきつゝくひながら文をもよみけりわづらふこと有には七日二七日など療治とて籠居て思ふやうによきいもがしらをえらびてことにおほく食て萬の病をいやしけり人にくはする事なしたゞひとりのみぞくひけるきはめてまづしかりけるに師匠死にさまに錢二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを坊を百貫にうりて彼是三萬疋をいもかしらのあしとさだめて京なる人にあづけをきて十貫つゞとりよせて芋頭をともしからずめしけるほどに又こと用にもちふることなくて其あしみなに成にけり三百貫の物をまづしき身にまうけてかくはからひける誠に有難き道心者なりとぞ人申ける此僧都ある法師を見てしろうるりといふ名をつけたりけりとは何物だと人のとひければさる物を我もしらず若シあらましかば此僧の顔に似てんとぞいひける此僧都みめよく力つよく大食にて能書學匠辨說人にすぐれて宗の法燈なれば寺中にもをもく思はれたりけれども世をかろく思ひたる曲者にて、萬自由にして大方人にしたがふといふことなし出仕して饗膳などにつく時もみな人の前すへわたすをまたず我前にすへぬればやがてひとり打食て歸りたければひとりついたちて行けりとき非時も人にひとしく定てくはずわがくひたきとき夜なかにも曉にも食てねふたければ晝もかけこもりていかなる大事あれども人のいふことききいれず目さめぬれば幾夜もいねず心をすましてうそぶきありきなど尋常ならぬさまなれとも人にいとはれずよろづゆるされけり徳のいたれりけるにや

眞乘院　盛親僧都　いもがしら　芋頭とも芋魁ともかけり　あし　錢を料足と云心也　とはなに物ぞ　しろうるりとはなにものぞと云義なり　法灯　佛法を燈にたとふる也佛灯傳灯などいへるも此義なり　ときひじ　佛家の法に一食にて日中を過ては物をくはず或一人の沙彌ありて一度の齋飯にた

えかねければ佛ゆるして晩に又くはしむ是を非時とす四分律に見えたり此段盛親僧都のいもがしらをこのみてくいたる事をいふもろこしにもさるためしあり　編年通編十八云南嶽明瓚禪師者不レ知ニ何許人一初宰相李泌乾元中辭入ニ衡岳一瓚隱ニ居上封一泌往謁レ之也誦レ經其聲先悲悽而後悅豫泌雅知レ音因謂曰將非ニ避隱者一有ニ尝霄意一乎瓚唾レ之曰莫ニ相賊一莫ニ相賊一泌色不ニ爲動一也久之見ニ泌立候不一レ懈乃曰飯未泌曰未也瓚撥レ火出レ芋食レ泌與語久之辭去瓚撫ニ其背一曰好做ニ十年宰相一至レ是泌用レ事爲レ帝言ニ其高行一有レ詔徵レ之使者至ニ石窟一宣ニ麻命一曰尊者起謝レ恩瓚鼻涕垂レ頤凝坐略不ニ以介ニ意使者歎ニ其淳正ニ不ニ之迫一回奏ニ其事一帝咨美之數四不レ已瓚嘗著レ歌曰飢來喫レ飯困來即眠愚人笑ニ我智一乃知焉不ニ是痴鈍本體如ニ然要レ去即去要レ住即住云々　東坡七云他年記ニ此味一芋火對ニ懶殘一注唐李泌與ニ明瓚禪師一遊明瓚釋徒謂ニ之懶殘一者云々懶殘性懶而食レ殘故以爲レ號事見ニ高僧傳一　印月江將ニ二懶殘一云芋魁從レ此價連城　遵生八牋六高濂冬時幽賞雪夜煨レ芋談レ禪云雪夜偶宿ニ禪林一從レ僧擁レ爐旋摘ニ山芋一煨剝入レ口味較ニ市中一美甚欣然一飽因問レ僧曰有レ爲是禪無レ爲是禪有無レ所レ有無非レ所レ無是禪乎僧曰子手執レ芋是禪更從何問余曰何芋是禪僧曰芋在ニ子手一有耶無耶謂レ有何有謂レ無何無有無相滅是爲ニ眞空一非レ空非ニ非空一空無レ所レ空是名曰レ禪執レ空認レ禪又着ニ實相一終不レ悟レ禪此非ニ精進力到得一惡根緣未レ能ニ頓覺一子曷レ觀レ芋乎芋不レ得レ火口不レ可レ食火功不レ到此芋猶生須ニ火到芋熟一方可レ就ニ齒舌消滅一是從ニ有處一歸レ無芋非ニ火熟一子能生嚼レ芋乎芋相終在レ不レ滅手レ芋嚼盡謂無非レ無無從レ有來謂有非レ有有從レ無滅子手執レ芋今着ニ何處一余時稽ニ首慈尊一禪從ニ言下一喚醒　盛親僧都のふるまひ誠に凡人にあらず懶殘に似たり錢三萬疋を芋頭の價にすてたるはかの芋火をはらひて李泌に逢鼻涕をたれながら勅使にむかふに異ならず物くいたければくいねむたければ晝も眠るは彼飢喫困睡に同じ宗の法灯たるは彼嶽頭一生禪にひとしかるべし有難き無欲の人也けり猪頭蜆子布袋政黄牛端獅子が類も又しかり御産のとき甑落す事はさだまれる事にはあらず御胞衣とゞこほるときのまじなひなりとゞこほらせ給は

ねば此事なし下さまよりことおこりてさせる本説なし大原の里のこしきをめす也ふるき寳藏の繪に賤き人の子うみたる所に甑落したるを書たり

御産の時こしき落すこと　平家物語第三云后御産の時御殿の棟より甑を轉がす事有けり皇子御誕生には南へ落し皇女誕生には北へ落すを是は北へ落したりければいそぎ取上落直したりけれ共猶惡き御事にぞ人申ける　甑　和名集云蔣魴切韻云甑音與レ勝同和名古之岐　炊レ飯器也　御胞衣　神代卷及レ至二産時一先以二淡路洲一爲レ胞　とあり胞衣をゑなとよめり後の物のこと也　ふるき寳藏の繪に　儒書佛書圖繪日本の記錄歌書等にかぎらず種々の寳物をおさむるを寳藏と云宇治の寳藏蓮華王院の寳藏東大寺の御藏などの類也

此段皇后元妃御産の時甑落す事あれども必しも貴き人のする事と定れるにあらず卑賤の物より事おこれりと也　詩小雅斯干篇乃生二女子一載寢二之地一載衣二之裼一載弄二之瓦一朱子曰瓦紡時所レ用之物舊見二人書三列女傳漆室女手執二一物一如二今銀子樣一者意其爲二紡塼一也然未レ可レ必　詩に云る瓦はいかやうなる物ぞと人うたがふ故に朱子列女傳の繪の女の手にもてる物を見てこれなるべしと人にしめせりいま兼好が甑落すことを寳藏の繪を引て考合せたるげにもとぞ覺る

延政門院いときなくおはしましける時院へまいる人にことつてとて申させ給ける御歌「ふたつもじ牛の角もじすぐなもしゆがみもじとぞ君はおぼゆるこひしく思ひまいらせ給ふとなり

延政門院は後嵯峨院の皇女なり　かなづかひこふたつもじ　いうしのつのもじ　しすぐなもじ　くゆかみもじにはこひしくと書といへど此時はそのさたいまだおこなはれざるにやたとひ沙汰ありとても幼少の姫宮よませ給ふことなればすこしもくるしからず明魏法師はすでにかなもじつかひをやぶりてい、ゐ、を、お、え、ゑの類皆ひとつに書べしといへり　事文類聚引二白氏文集注一云鄭玄家牛觸レ墻成二八字一とあり牛の角かきにあたりてその あと八の字のかたちありしかれば八の字をも牛のつのもじと云べし　いの字を云ふに似たり　叡山の緣起に竪の三點に横の一點を加へ横の一點に竪の三點を加

へて山王とすといへりまた横川を三とし竪三を川とす類説にも習の字を三々横兩々縦と云類也又詩にもあり　樂府解題井謎云二八三八飛泉仰流蓋二八三八爲二五八一五八四十也四十爲二井字一故錢昭度食レ梨詩三八飛泉繞レ齒寒　是も事文類聚續集に載たり此井謎の詩を以てみれば延政門院の御歌も和歌のなぞ〳〵なるべし

後七日の阿闍梨武者をあつむる事いつとかや盗人にあひにけるより宿直人とてかくこと〳〵しくなりにけり一年の相は此修中のありさまにこそ見ゆなれば兵を用ん事をだやかならぬこと也

後七日　公事根源云眞言院御修法正月八日より七日おこなはる今年金剛界なれば明年は胎藏界年にかはる〳〵修せらる後七日の御修法とは此事也天長六年に弘法大師大唐の內道場に准じて眞言院を宮中に立られて承和元年より大師即ち此法を初め行はる　東寺一の長者我本坊にて元日より行ひて八日より七日の間眞言院にて修する故に後七日と申也禁中元日より白馬(アヲムマ)の節會までは公事多きゆへに沙門參らず八日より始るなり仁明天皇の時大內中務省にて弘法大師此秘法を修すさて表を奉りて永代の規式をさだめんと申さるゝによりて勘解由司の廳を改めて眞言修法院を立らる今の眞言院是也八日に開白して十四日の結願に當て大師請來の袖衣をき曩祖附屬の五鈷を持して玉體にちかづき二器の香水を加持して灌ぎ奉り又群臣にも灌ぐ也

阿闍梨　名義集闍梨或阿祇利或阿遮黎耶唐言二軌範一隋言二正行一能糾二正弟子行一故　一年の相は此修中　年のはじめの御祈禱修法なるに警固と號して武士兵具を用てさはがしき事一歲の相をだやかならぬと云たる也

車の五緒は必人によらずほどにつけてきわむるつかさ位にいたりぬればのる物なりとぞある人おほせられし

車の五緒　簾　靑編糸五緒一　文藍革緣　文小鞆繪　裏ノ緣ハ靑唐綾　上緒不レ入二革崎一

車の五緒の事を長嘯子へたづね侍ければ右のごとく書て給はれり

此比の冠はむかしよりはるかにたかくなりたるなりとぞある人おほせられし古代の冠桶をもちたる人は

はたをつぎて令用るなり
冠桶とは冠箱也まげ物に薬を入て漆ぬりにしなしぢまきゑなどをして箱の内を錦にてはる　はたをつぎて　冠桶のはたをづぐ也　本朝のいにしへ冠の製法代々にすこしの不同あれども中古より唐國の衣冠をうつせり故に宋　濂が日東曲にも千年猶效ニ漢衣冠ニと作れりとなん　石林燕語余見ニ大父家居及燕ニ見　賓客ニ率多頂帽而繋ニ勒帛ニ猶未ニ甚服ニ背子ニ帽下戴ニ小冠簪ニ以レ帛作ニ横幅ニ約レ髪號ニ額子ニ處ニ室中ニ則去レ帽見ニ冠簪ニ或用ニ頭巾ニ也古者士皆有ニ冠帽ニ乃冠之貴製頭巾賤者不レ冠之服耳勒帛亦有ニ垂紳之意ニ雖レ施ニ之外ニ不レ爲レ簡背子本半臂武士服何取ニ於禮ニ乎或云勒帛不レ便ニ於搢笏ニ故稍易ニ背子ニ然須レ用ニ上襟ニ掖下與レ背皆垂レ帶余大觀間見下宰執接ニ堂吏ニ押中文書上猶冠帽用ニ背子ニ今亦廢矣而背子又引爲ニ長袖ニ與ニ半臂製ニ亦不レ同裹ニ賤者巾ニ衣ニ武士服ニ而習レ俗之久不ニ以爲レ異古禮之廢大抵類レ此也　事文類聚續集　通天冠天子所レ冠漢製ニ之秦禮无レ文祀ニ天地明堂ニ平冕郊人不レ識謂ニ之平天冠ニ　恭道獨斷進賢冠古緇布冠儒者之服也前高七寸長八寸後高三寸一梁下大夫一命所レ服兩梁再命大夫二千石所レ服三梁三命上大夫公侯所レ服ニ禮圖　黄冠野夫黄冠草服也郊特牲　法冠一曰柱後柱後惠文高五寸以レ縦爲ニ展筩鐵柱卷ニ執レ法者服レ之或謂之獬豸冠獬豸神羊能別ニ曲直ニ楚王嘗獲レ之故以爲レ冠　輿地志　御史侍中金蟬尤貂漢官儀　武冠俗謂ニ之大冠ニ環纓无レ蕤以ニ青絲ニ爲レ緄加ニ双鶡尾ニ竪ニ左右ニ爲ニ鶡冠ニ云鶡者勇雉也故趙武靈王以表ニ武士ニ秦施レ之焉同上

岡本關白殿盛なる紅梅のえだに鳥一双をそへて此枝につけてまいらすべきよし御鷹飼下毛野武勝に仰られたりけるに花に鳥つくるすべしりさふらはず一枝にふたつゝくる事も存知候はずと申ければ膳部に尋られ人々にとはせ給ひて又武勝にさらばをのれが思はんやうにつけてまいらせよとおほせられたりければ花もなき梅の枝にひとつを付てまいらせけり武勝が申侍しは柴の枝梅の枝つぼみたるとちりたるとにつく五葉などにもつく枝のながさ七尺或は六尺返しかたな五分にきる枝の半に鳥を付つくる枝ふまするえだありしゝら藤のわらぬにて二ところ付べし藤のさきはひうち羽の長にくらべてきりて牛の角のやう

にたむべし初雪のあした枝をかたにかけて中門よりふるまひて參る大みぎりのいしをつたひて雪にあとをつけてあまおほひの毛をすこしかなぐりちらして二棟の御所の高欄によせかく祿をいださるればかたにかけて拜してしりぞく初雪といへども沓のはなのかくれぬほどの雪にはまいらずあまおほひの毛をちらすことは鷹はよはごしをとる事なれば御鷹のとりたるよしなるべしと中き花に鳥つけずとはいかなる枝にか有けむ長月ばかりに梅のつくり枝に雉をつけて君がためにとおる花は時しもわかぬといへること伊勢物語に見えたりつくり花はくるしからぬにや

岡本の關白　家平公也大織冠廿四代の孫近衛殿の一流なり

太政大臣攝政關白 近衞兼經 號岡屋 ― 關白左大臣 基平 號深心院 ― 關白左大臣 家基 號淨妙寺 ― 左大臣 經平 號後淨妙寺 ― 關白左大臣 基嗣 號後岡屋 北木流今ノ近衞殿也

家基 ― 號岡本關白左大臣 家平 ― 經忠 ― 經家 子孫ナシ

付レ鳥枝事　柴高七尺五寸普通の柏木よりは葉せばく闊くしてうらおもてに毛おひたり是を鳥付る柴と云也一說云たもん柴と云もの也年の內は立枝をへだてゝ雄を左にあげて付て雌をさげて付レ之年明ては雌を左にあげて付り春は雌を賞翫する故也付やう口傳有或は柴を用といへども春は梅秋は紅葉に付る事常の義也大臣大饗の時是を用ゆ又初雪の朝雉を人につかはす時の作法也又鷹野より人のもとへつかはすには三四尺の柴の枝を刀めを付ずして本を相はしらかして付る也一双を付るやうたしかに知人なし秦在冏說又四條大納言隆親卿の說柴のたけ六七尺雌雄一双を付る也又大臣大饗元服移徙如レ此ノ時用レ之産所へ遣にも同じさまの小松に付也義氏朝臣說鷹野より人の許へ雉を遣るには柴ならねども荻薄をはじめて何にても付也一說には松に鳩を付る事あり山鳩也義家の朝臣以後不レ付レ之鶉をは荻薄の枝に付小鳥をば紅葉の枝に付たり雀をば竹の枝に付る也十月にはふじ柴に付と云御鷹飼武久が說也見二河海抄一　下毛野武勝　續日本紀などには下野國をも下毛野國と書り爰にては氏と見えたり　返し刀　木竹によらずはすきりにきりて其のうらをきりそぐを返し刀と云　雪に跡を「初雪に我とは跡をつけしとて先朝たゝぬ人を

待かな　あまおほひの毛　花に鳥つけずとは　これより以下異本になしかみに武勝が花に鳥つくる術知らずと云に對して云なり　伊勢物語昔おほきおほいまうち君と聞ゆるおはしけりつかうまつるおとこ長月ばかりに梅のつくり枝にきじをつけて奉るとて「わがたのむ君がためにとおる花は時しもわかぬ物にぞ有けるとよみて奉りければいとかしこくをかしがり給ひてつかひに祿たまへりけり
賀茂の岩本橋本は業平實方也人の常にいひまがへ侍れば一年參りたりしに老たる宮司の過しをよびとゞめて尋侍りしに實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば橋本やなを水のちかければと覺え侍る吉水和尚「月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにありはらとよみ給けるは岩本の社とこそ承りをき侍れどをのれらよりはなか〳〵御存知などもこそさふらはめといとうや〳〵しくいひたりしこそいみじくおぼえしか今出河院近衛とて集どもにあまた入たる人はわかゝりける時常に百首の歌をよみてかの二の社の御前の水にて書て手向られけり誠にやんごとなき譽ありて人の口にあるうたおほし作文詩序などいみじくかく人なり

岩本は業平也橋本は實方也

桓武―平城―阿保親王―在原行平
　　　　　　　　　　　―業平―棟梁
　　―嵯峨

業平　三品彈正阿保親王第五男也故號ニ在五中將ヲ母桓武女伊豆（イトウ）内親王也年月日任ニ左近將監ニ承和十四年正月補ニ藏人ニ嘉祥二年正月七日從五位下貞觀四年正月七日從五位上五年二月十日左兵衞權佐六年三月八日右近少將七年三月九日右馬權頭十一年正月七日正五位下十五年正月七日從四位下元慶元年正月十五日左近權中將十一月廿一日從四位上二年正月十一日相摸權守三年十月藏人頭四年正月十一日美濃權守同廿八日卒年五十六天長三年阿保親王上レ表曰無品高岳親王之男女先停ニ王號ヲ賜ニ朝臣姓ヲ臣之子息未レ預ニ改姓ニ既爲ニ昆弟之子ニ寧異ニ齒列之名ニ於レ是詔ニ仲平行平守平等ニ賜ニ姓在原朝臣ヲ業平躰貌閑麗放縱不レ拘畧無ニ才學ニ善作ニ和歌ヲ詳見ニ三代實錄ニ

貞信公
忠平——師尹五條左大臣號小一條——定時侍從々五位上——實方右中將正四位下陸奥守長德四年十一月十三日於二任國一卒

藤原實方は中將まで成し人也禁中にて行成卿とあらそひありて冠を打落したる其咎に依て歌枕を見て參れとて奥州へつかはさる則彼地にて卒云々其後西行下向して「くちもせぬその名ばかりをとゞめをきてかれ野のすゝきかたみとぞ見るとよみしと也新古今載二此歌一　一條院時實方中將奥州に謫せられて阿古野の松をたづねけれどもしる人なし鹽竈明神翁の形を現して昔出羽奥州一國にて有しが分て二つと成故に阿古野の松は今出羽にありといへり又實方馬にのりて奥州名取の笠島道祖神の前を過ける時下馬せよと人のいひけれどもきかず馬俄たをれて實方も共に死けりその社のそばに埋む其靈化して雀となりて王城にとび來り殿上の臺盤に入て鳴けるとなむ　吉水和尚　法性寺關白忠通公子也久壽二年乙亥四月五日生法諱道快養和元年十一月六日改二名慈圓一山門六十二代座主居二東山吉水一嘉祿元年九月廿五日滅年七十一嘉禎三年三月八日諡二慈鎭一吉水は今の丸山なり　月をめで　めでは愛する義なり　今出河院近衛　今出河院とは龜山院の后常盤井相國實氏公の孫中宮嬉子也即西園寺公相公の御女也弘安六年八月十三日爲レ尼三十一歳文保二年四月十五日崩年六十七　近衛は近衛局也大炊御門庶流大納言伊平女也伊賴卿覺道上人實伊僧正などの姉也井蛙抄六云近衛局九歳の時より厚氷といふ歌をよみ續古今よりこのかた五代の勅撰に逢て歌數もあまた入詩なども作り雜作集にも入佛法にも立入一生不犯の禪尼なり法華經十萬部よまれうるはしく宮仕などもせず續古今の時五月に菖蒲重の衣きて今出川院中宮と申に參し權大納言と申されき歌でとにめづらしく優美によまれし人也　新拾遺　今出河院近衛歌「恨ても猶したふかな戀しさのつらさにまくるならひなければ

筑紫になにがしの押領使などいふやうなるものゝありけるが土おほねを萬にいみじき藥とて朝ごとにふたつづゝやきて食ける事年久しくなりぬ或時館の内に人もなかりける隙をはかりて敵襲來りてかこみせめけるに館のうちに兵二人いできて命をおしまず戰ひて皆おいかへしてげりいとふしぎに覺えて日比

こゝにものし給ふとも見ぬ人々のかくたゝかひし給はいかなる人ぞと問ければ年來たのみて朝な〳〵めしつる土おほねらにさふらふといひて失にけりふかく信をいたしぬればかゝる徳も有けるにこそ

押領使　東鑑七云鎮守府將軍兼陸奥守従五位上藤原朝臣秀衡法師出羽押領使基衡男同九云泰衡文治三年十月繼二父遺跡一爲二出羽陸奥押領使一管二領六郡一　此に筑紫の押領使とある時は出羽奥州にかぎらず　土たほね　土大根也和名云爾雅集注云蒀音福和名於保禰俗用二大根二字一根正白而可レ食レ之兼名苑云菜菔上音來　本草云蘆菔音服孟詵食經云蘿菔上音羅今案菔蘆菔皆蒀之通稱也　皇朝類苑六十八云菜品中蕪菁菘芥之類遇レ旱其槃多結成レ花如二蓮花一作二龍蛇之形一此常性無レ足レ怪者一熙寧中李賓知二潤州一園中菜花悉成二荷花一仍各有二一佛一座二于花中一形如二雕刻一莫レ知二其數一暴乾レ之其相依然或云李君之家奉レ佛甚篤因レ此有レ異

書寫の上人は法華讀誦の功つもりて六根淨にかなへる人也けり旅のかりやに立いられけるに豆のからをたきて豆を煮ける音のつぶ〳〵となるを聞給ければうとからぬをのれらしもうらめしく我をば煮てからきめを見する物かなといひけりたかるゝまめからのばら〳〵となるをとは我心よりすることかはやかるゝはいかばかり堪がたけれども力なき事なりかくな恨給ひそとぞ聞えける

書寫の上人　性空平安城人從四位上橘善根子也母源氏空十歳持二法華一三十六出家乃往二日向國霧島一結レ廬而居　永延二年化人來告曰播磨書寫山是鷲嶺之一峯也居レ此者發二菩提心一得二六根淨一空至レ山結二庵西洞一茅薦爲レ席紙楮爲レ衣山鳥野獸來自馴創レ寺曰二圓敎寺一空於二山中一毎年三九月轉二法華一爲二國民之福一增賀法師在二多武峯一求二上紙一空送レ之賀歎息曰性空者其淨二六根一者歟寛弘四年三月十三日誦二法華一而寂年八十元亨釋書及撰集抄等に有レ之

六根淨　眼耳鼻舌身意を六根とす　大豆のからをたきて　世說曰魏文帝嘗令三東阿王曹植一七步作レ詩不レ成者當レ行二大法一應レ聲爲レ詩曰煮レ豆持作レ羹漉レ以爲レ汁萁在二釜下一然豆在二釜中一泣本自同根生相煎何太急帝深有二慙色一曹植字子建魏曹操子文帝弟也

此段には非情の物にものをいわせ前段には非情の

物に精靈をあらはす是陳思王が豆萁詩にもとづき性空の六根淨を引合すといへども又莊子が罔兩の問答櫟社樹の夢語などの類思ひ出しけるにや後世の梅堯臣か四禽言東坡晦翁が五禽言山谷が禽語の和答これ皆寓意の戯也無住法師の沙石集を見侍りしに南都にある學生の坊のほとりにて螺と蜷(タニ)と問答して前後あれば螺と云何とて輪子をもありと云ざるさきにすでに輪子の名を得たる故也背の上くぼみて谷に似るゆへに蜷と云何とて團子をもたにと云ざるさきにすでに團子の名を得たる故也と云り兼好が筆力は無住法師にまさりて覺え侍るなれ律呂によく通ずれば鳥獸の聲をもしると云り介葛廬は牛鳴を聞て三犧をうまん事をしり公冶長は鳥雀の聲をしり顔淵は桓山四鳥のわかれをしり劉三復は馬語に通じ白龜年は禽語に達せりされはよく音をしるものは風聲鶴唳といへどもしらざる事なしといひつたへたり蔡中郎が桐をやく火聲をきゝてよき琴材なる事をしるはさも有べしふかく信ずる物には土大根も我兵と見え多くうたがふものには八公山の草木も敵の兵とみゆきよき耳には豆萁の聲も聞えおそれ迷ふものには風聲も敵の聲とおもふ是一心上の信疑迷悟わかるゝ所なりもし無情の説法をいはゞ溪聲は廣長舌なり水鳥樹林念佛念法にあらずや性空は何ときけるぞや兼好はいかゞ思ひけるぞや九原おこさまほし若又魏槐の石のものいひ社主の草木につくごときの類はよき事にあらず吾邦にも千早や振神代のむかしは岩根このたち草の垣葉を物いふとなり

元應の清署堂の御遊に玄上はうせにしころ菊亭大臣牧馬を彈じ給けるに座につきて先柱をさぐられたりければひとつおちにけり御懷にそくいをもち給たるにてつけられにければ神供のまいるほどによくひてことゆへなかりけりいかなる意趣が有けん物見ける衣(キヌ)かづきのよりてはなちてもとのやうにをきたりけるとぞ

元應　後醍醐の年號なり　清署堂　拾芥中末云大嘗會五節於ニ此所一行レ之　玄上　琵琶の名也玄上の二字ともに淸てよむと濁てよむと兩義也　枕草紙玄上牧馬井尹渭橋無名なとあり　禁秘鈔云玄上累代寶物也置ニ中殿御厨子一根源樣人不レ知レ之掃部

頭貞敏渡唐之時所レ渡琵琶二面其一歟紫栴直甲也大宋人云紫栴者大樣不レ可レ過二六七寸一直甲之條不レ信云々但此甲非二只物紫栴一也凡此琵琶云レ體云レ聲不可說未曾有物也爲二靈物一人爲レ跡之時有二貴人一如何跡にはするぞと云入二人夢一皆着二直衣一人也靈物中越レ他以二不淨手一不レ可レ取昔無レ覆自二近比一有二沙汰一有二覆并臺一　紫唐綾無文也藥摺レ貝　此琵琶靈驗內裡燒亡之時飛出撥面文消所々有二赤色一不レ知二其繪一代々有二沙汰一未レ決俊房云良通云琵琶移二玄上一彼撥面文不レ可レ違彼唐人打レ毬形也或云玄象谷二青鉢之水一所謂號二玄象一又玄上宰相獻二延喜帝一仍號二玄上一兩說也但妙音院入道付二玄上說一歟　古事談云牧馬與二玄上一一雙名物也時人不レ辨二勝劣一爰有二信義一時雅三位息信明博雅三位息兩人不レ知二勝劣一初信義彈二玄上一信明彈二牧馬一更無二甲乙一信明彈二玄上一信義彈二牧馬一其聲雲泥故時人皆云信明超二信義一玄上勝二牧馬一云々　菊亭のおとゞ　右大臣兼季公也　ぢうをさぐられければ　柱の字也ことぢとよめり琵琶にてはぢうといふ琵琶のぢうはもとより四つありめくら法師の琵琶の柱は五つあり　きぬかづき　衣被とかく宮女の事也

此段かねて用心思慮すべきことをいふ諸事この心得有べしいつぞや室町家將軍の時何阿彌とかやいふ同朋に書軸をかけさせられけるに壁の釘をさぐりて見ければ其まゝおちけりうちなをして後に軸をひらきかゝげるとある人の語り侍りしを思ひ出ぬ又ちか比人のかたりしはある猿樂の山伏のかたちに成ていのりをするとてあまりにつよく數珠をすりきりて懷の中よりこと數珠を取出しなをいのりける用意の所はさもあるらめどわざとたくみてせうはいかゞ侍らん

名を聞よりやがて面影はおしはからるゝ心地するを見る時は又かねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ昔物語をきゝても此比の人の家のそこ程にてぞ有けんと覺え人も今見る人の中におもひよそへらるゝは誰もかく覺るにや又如何なるおりぞたゞいま人の云事も目に見ゆる物も我心のうちもかゝる事のいつぞや有しかとおぼえていつとはおもひ出ねどもまさしく有し心ちするはわればかりかくおもふにや

名を聞より　熊孺登贈二佐山人一詩一見二淸容一愜二

素問ニ有レ人傳是紫陽君
いやしげなる物居たるあたりに調度のおほき硯に筆のおほき持佛堂に佛のおほき前栽に石草木のおほき家のうちに子孫のおほき人にあひて詞のおほき願文に作善おほく書のせたるおほくて見ぐるしからぬは文車の文塵づかのちり
調度の事は上に見えたり又源順が倭名集にも調度部とて上中下あり佛僧具圖書具武具衣服器財具馬具等に至るまで諸物具を載たり然れば一切の具を調度と云と心得べし源氏物語にも調度めく物とあり　前栽に石草木のおほき　庭に奇樹怪石をあつめてながむるは興あれどもあまりにおほきをきらふなるべし　家の中に子孫のおほきは家の肥たるなりとてめでたき事なるに今あしき物とするは例の兼好がこのめる莊子に多男子則多レ懼とあるによりてかくいへるなるべし　願文に　本朝文粹十三に慶滋保胤が菅廟ノ願文大江匡衡が熱田社の願文三善道統が大般若の願文等あまたのせたり　文車ふぐるまは今禁中にあり又東寺にもあり失火などの時早く引出さん爲の用なり　莊子云惠子多レ方其書五車　晉張華雅好ニ書籍一身死之日家無ニ餘財一惟有ニ文書一溢ニ于机篋一嘗徙レ居載レ書三十乘　柳子厚文集陸文通墓表其爲レ書處則充ニ棟宇一出則汗ニ牛馬一　ちりつか　塵をすつる所也
此段おほくてあしき物とよき物とをいひつらねて其中に多くて見ぐるしからぬはといふこれ文法也古文にも此例あり　詩七月篇七月在レ野八月在レ宇九月在レ戶十月蟋蟀入ニ我牀下一張文潛曰於ニ七月已下一皆不ニ道破一直ニ至ニ十月一方言ニ蟋蟀一非下深ニ於文章一者上能爲レ之邪容齋隨筆十四　莊子人間世云澤若レ蕉希逸口義云本是若ニ澤蕉一却倒ニ一字一曰ニ澤若ニ蕉此是作レ文奇處雲澤也夢亦澤也雲夢昔皆爲レ水今有レ土可レ耕不レ曰ニ雲夢土作一レ乂而曰ニ雲土夢作一レ乂玄亦纖纁亦纖不レ曰ニ玄纁纖一而曰ニ玄纖纁一此文法也　莊子養生主云庖丁爲ニ文惠君一解レ牛手之所レ觸肩之所レ倚足之所レ履膝之所レ踦砉然嚮然奏レ刀騞然口義云砉然嚮然皆是其用レ刀之聲却以ニ奏刀兩字一安ニ在中間一文法也

徒然草野槌上之六

世にかたりつたふる事まことはあいなきにやおほくは皆虚言也あるにも過て人は物をいひなすにまして年月すぎ境もへだゝりぬればいひたきまゝに語なして筆にもかきとゞめぬればやがて又定りぬ道々の物の上手のいみじき事などかたくなゝる人のそのみちしらぬはそゞろに神のごとくにいへども道しれる人は更に信もおこさずをとに聲と見るときとは何事もかはるものなりかつあらはるゝをもかへり見ず口にまかせていひちらすはやがてうきたることゝ聞ゆ又我も誠しからずは思ひながら人のいひしまゝに鼻のほどおごめきていふはその人のそらごとにはあらずげに／＼しく所々うちおぼめきよくしらぬよしゝて去ながらつま／＼あはせてかたるそらごとはおそろしき事也わがため面目あるやうにいはれぬるそらごとは人いたくあらがはず皆人の興ずる虚言はひとりさもなかりし物をといはんも詮なくてきゝゐたるほどに證人にさへなされていとゞ定りぬべしとにもかくにもそらごとおほき世也たゞ常にあるめづらしからぬ事のまゝに心得たらむよろづたがふべからず下ざまの人の物語は耳おどろくことのみありよき人はあやしきことをかたらずかくはいへど佛神の奇特權者の傳記さのみ信ぜざるべきにもあらずこれは世俗の虚言を念比に信じたるもおこがましくよもあらじなどいふも詮なければ大方は誠しくあひしらひて偏に信ぜずまたうたがひ嘲るべからず

あいなき　無レ愛河海無レ間源語類聚源氏桐壺にあいなう目をそばめつゝとあり　かたくな　頑の字也　うきたると　浮言とも浮詞とも書りそらごと也鼻のほどおこめきて　源氏帚木にはなのわたりおこめきてかたりなす　おかしきをねんじたる心也　つま／＼　はし／＼也

よき人はあやしきことをかたらず　論語述而篇子不レ語二怪力亂神一　佛神の奇特權者の傳記　佛經におほくのする所の佛菩薩鬼神の神變奇特又神明の不測(フシキ)なること其外權者化身のたゞ人にあらざる物の傳記ども不思議多かるべし皆一々いつはりと定めがたし　おこがましく　嗚呼と書りおかしきと云儀也

蟻のごとくにあつまりて東西にいそぎ南北にわしる高きあり賤きあり老たるあり若き有行所あり歸家あり夕にいねて朝におくいとなむ所何事ぞや生をむさぼり利をもとめてやむ時なし身を養て何事をかまつ期する所たゞ老と死とにありその來る事速にして念々の間にとゞまらずこれをますあひだ何のたのしひかあらんまどへる物はこれをおそれず名利におぼれて先途のちかき事をかへり見ねばなりをろかなる人はまたこれを悲しふ常住ならんことを思ひて變化の理をしらねば也

蟻の如くにあつまりて　文選蟻同と書　豫章文集
夫據(二)功名之會(一)嫮(二)姱一世(一)其與(二)蟻丘(一)亦有(レ)辨乎
白蟻戰酣千里血黃粱炊熟百年休功成名遂人間世欲(下)夢(二)槐安(一)向(レ)此游(上)　唐の淳于棼が家に古槐樹あり酒に醉ふしければたすけ起して歸りてふせり夢にふたりの使者來りて槐安國王よびむかふといふ棼車に乘て槐樹の本に到り一つの穴に入城門有其額を大槐安國と書り殿上にのぼりて國王にまみゆ王よろこんで棼を壻として金枝公主を妻あはすさかへ富る事かぎりなしかくて南柯郡に亂ありゆきておさむべしとて棼をつかはす車馬ちまたにみちて公主もしたがひゆく郡に到りて政をする事二十年官にすゝみ位にのぼりて富貴をきわめり男子五人女子二人をうめり其後公主病にあひて失ぬ棼國に歸りて公主を盤龍岡に葬るかゝる所にある人書を捧て國におごるものあれば宗廟のわざはひあらんと云ければ王俄に棼を故鄕へかへれと云てつかはす彼ふたりの使者をめして棼を送らしむ既にあなを出と思へば夢さめぬ我が童の庭を掃ひて夕の日なを西にかくれずあやしく思ひて槐穴をたづねみれば穴のうちひろくして城のごとく殿のごとくなるつちくれの堆うへに蟻あり幾千萬といふ數をしらず其中に二の大蟻あり是國王と夫人と也又一つの穴を尋て南にさせる枝にのぼる蟻又其數をしらず是南柯郡也又一の穴ありまがりて龍蛇の蟠れるかたちに似たり是盤龍岡也棼夢中のことを感じて人をつかはし其穴をふさぐ此夜風雨俄にあらくして槐樹ゆるぎ動く朝にかの穴を見れば蟻みななく成て行がたをしらず宗廟のわざはひあらんと云しは是なんめり此事陳翰が大槐宮記に見えたり今

此段に人間世を蟻のあつまるにたとへたるいはれなきにしもあらず　變化の理を　莊子云已化生又化死生物哀レ之人類悲レ之注物之初生本無而有又化而死則是既有而無同二乎一理一而人物之類自以爲二悲哀一愚惑也

此段の結語に常住ならんことを思ひて變化の理をしらねばなりといへる兼好が見たる所也莊子が夢に蝶となりて周なる事をしらずさめて周となりて蝶なる事をしらず是を物化といふといへるを郭子玄が注に蝶となる時周をしらざれば死したるに同じ夢さめて周と成て蝶をしらざればけふの莊周もいづくんぞ昨日の蝶にあらざる事をしらむ人のかりねして百年の間をすぐと思ふもさめて後非なり今のいけるは死して後に又非なる事も有べしといふ湛然の弘決に莊子夢に蝶となりて南園の花蘂にあそび百年のたはふれをなすと書り百年は花にやどりてすごしてき思へば蝶の夢にぞ有けると匡房のよめるも是也金剛經に一切有爲法如二夢幻泡影一如レ露亦如レ電應レ作二如レ是觀一とゝけるは誠に常住ならぬことをよくのべたり徐雲嶠が口義に此六喩觀は莊子が夢蝶のたとへよりもまされりといへど其心はことならずとぞ莊子が筆法は力ましておぼえ侍る又すでに化して生じまた化して死するを愚なる人はまどひてかなしむといふ化蝶翁が常談なれど世の人のいひ出すべき言の葉にあらず三千世界に芥子ばかりも佛の身命をすてぬ所はなしといへど又有無常斷の四見をきらいて一旦種々說法すれど終には四見ともに佛道の外にあらず我常在二此娑婆世界一といひて壽命無量なれば肉眼をはなれ佛眼より見れば世間常住滿目青山いかんぞ輪廻せんやたとひ輪廻すとも往來八千返何物か佛たらざらんこれ佛光の見解なるべしもしそれ變化の理をいはゞ變は化の漸にて其あとをひとつにせずわかき者の老に至るが如し化は變のなれるにて其かたちを同じうせずたちまちあるものゝたちまちなくなるがごとし陰陽造化の道みな變化して萬物をの〳〵性命をたゞしうするは古今の常の理也聖人乾坤の三卦におゐて其秘をもらせり心あらん人は腹にあぢはへ心にうまくせば其ことはりは方寸にありて萬物みな我にそなはることをしるべし是眞

實の道理也さきにいふ所の異端の虛にはしり風をとらふるごとくにして身にたしかならぬ漫說にはあらずとしるべし

つれ〴〵わぶる人はいかなる心ならんまぎるゝかたなくたゞひとりあるのみこそよけれ世にしたがへば心外の塵にうばゝれてまどひやすく人にまじはれば言葉よその聞に隨ひてさながら心にあらず人にたはふれ物にあらそひ一度はうらみ一度はよろこぶ其こと定れる事なし分別みだりにおこりて得失やむ時なしまどひの上に醉り醉の中に夢をなす走りていそがはしくほれてわすれたること人皆かくのごとしいまだ誠の道をしらずとも緣をはなれて身を閑にしことにあづからずして心をやすくせんこそ暫たのしふともいひつべけれ生活人事伎能學問等の諸緣をやめよとこそ摩訶止觀にも侍れ

生活人事　止觀第四曰緣務有レ四一生活二人事三伎能四學問とあり　生活は身命を救ふ產業なり人事は人間の事にまじはりあづかる也伎能はよろづの藝能なり學問は内外の書をよみ習也かやうのことも皆我心のさはりとなればすてやめよとなり是止觀の趣なり　智顗字德安天台大師とも智者大師とも申也南岳思大和尚に嗣法すといへど自解發明の人にて法華の旨をふかくしれり陳隋二代の帝にまみえ師範となれり後に天台山の佛隴寺に住す妙法蓮華經の題號を釋するをば玄義と云十卷あり經の文段を釋するをば文句と云十卷あり其上に觀心のことをのぶるをば摩訶止觀といふ摩訶は梵語大と翻す十卷あり此三十卷を本書と號す天台は懸河流瀉の辯舌なれば其說おほくことをその弟子章安灌頂筆記せり其後妙樂大師湛然玄義を注するをば釋籤と云十卷あり文句を注するをば疏記と云十卷あり止觀を注するをば弘決とも輔行記共云十卷あり此三十卷を末書と名づく合て三大部として天台六十卷と申也弘決の内多く儒書莊老諸家の說を引ゆへに日本にて具平親王仲範朝臣是を注して外勘抄と名づけたり

天台家系圖

惠文—思大（一名惠思）—智者—灌頂（章安）—智威—
—惠威—玄朗—湛然（妙樂）—道邃—最澄（傳教大師）

世のおぼえはなやかなるあたりになげきもよろこびもありて人おほく行とふらふ中にひじり法師のまじりていひ入たゝずみたるこそさらずともと見ゆれさるべき故有とも法師は人にうとくてありなん

世のおぼえはなやかなる　富貴威勢華麗の人也

なげきもよろこびも　或は死葬愁歎の有時もあり　或は婚禮冠禮祝儀の時もあり

世中にその比人のもてあつかひぐさにいひあへる事いろふべきにはあらぬ人のよくあないしりて人にも語きかせとひきゝたるこそうけられねことにかたほとりなるひじり法師などぞ世の人の上はわがごとく尋聞いかでかばかりは知けんと覺ゆるまでぞいひちらすめる

今やうの事どものめづらしきをいひひろめもてなすこそ又うけられね世にことふりたるまでしらぬ人は心にくしいまさらの人などのある時こゝもとにいひつけたることぐさもの〻名など心得たるどちかたはしいひかはし目見あはせわらひなどして心しらぬ人に心えずおもはする事世なれずよからぬ人のかならずある事なり

いまやうの事　新樂府に時勢粧と書て今やうすがたとよめり

何事も入たゝぬさましたるぞよきよき人はしりたる事とてさのみしりがほにやはいふかた田舎よりさし出たる人こそ萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれされば世にはづかしきかたもあれどみづからもいみじと思へるけしきかたくなゝりよくわきまへたる道には必口をもくとはぬ限はいはぬこそいみじけれ

よき人はしりたることゝて　漢石慶馬をつかさどりて其數を知りしが景帝いくつ有ぞと問給へば策を以てかぞへて馬六疋と云の類也なをものぼりていはゞ聖人の大廟に入て事ごとに問給へる事もあり　世にはづかしきかた　心にくき人と云心也

口をもく　禮記口容止と云主人不ㇾ問客不ㇾ先擧とといへるに通ずべし

人ごとに我身にうとき事をのみぞこのめる法師は兵の道をたて夷は弓ひくすべしらず佛法知たるきそくし連歌し管絃をたしなみあへりされどをろかなるをのれが道よりは猶人に思ひ侮られぬべし法師のみにず

あらず上達部殿上人がみさまゝでをしなべて武をこのむ人おほかり百たび戰て百度勝もいまだ武勇の名を定がたし其故は運に乘じてあたなくだく時勇者にあらずといふ人なし兵つき矢きはまりてつゐに敵に降らず死をやすくして後始て名をあらはすべき道なりいけらんほどは武にほこるべからず人倫に遠く禽獸にちかきふるまひ其家にあらずは好て益なきこと也

此段法師のみにもあらずと云より分て別段とする本あり

夷（エビス）爰にては田舍の武士をさす　上達部　公卿也　殿上人は四位五位六位あり　武をこのむ人おほかり　左傳衛公子州吁嬖人之子也有寵而好兵又曰州吁阻兵而安忍阻兵無衆安忍無親衆叛親離雖以濟矣夫兵猶火也弗戢將自焚也　百たび戰て　孫子謀攻篇百戰百勝非善之善者也不戰而屈人之兵善之善者也　山谷詩百戰百勝不如一忍　兵つき矢きはまりて　司馬遷報任少卿書曰李陵與匈奴單于連戰十有餘日一國共攻而圍之轉鬪千里矢盡道窮救兵不至士卒死傷如積陵未沒時使有來報漢公卿王侯皆奉觴上壽後數日陵敗　敵に降らず　通鑑綱目第二劉友益書法曰亡國之君其辭五死之上也執虜次之以飯次之獲次之降爲下　人倫に遠く禽獸にちかき　孟子離婁上篇曰爭地以戰殺人盈野爭城以戰殺人盈城此所謂率土地而食人肉罪不容於死故善戰者服上刑連諸侯者次之辟草萊任土地者次之　莊子說劍篇曰庶人之劍蓬頭突鬢垂冠曼胡之纓短後之衣瞋目而語難相擊於前上斬頸領下決肝肺此庶人之劍無異於鬪雞一旦命已絕矣無所用於國事今大王有天子之位而好庶人之劍臣竊爲大王薄之

此段其家々の所業をつとめて良治の子は裘つくることを學び良弓の子は箕つくることをならふごとくすべしをのれが所作にもあらざるをこのむはひが事也思ふこと其位より出さずまして身におこなふは益なくして害あり殊に兵の道は始終の名を全ふしがたし涿鹿の蚩尤が戰をはじめとし吳起龐涓も兵法をしるといへども或は楚人にころされ或は馬陵にやぶる項羽八ヶ年の戰に常に敗北せずとい

へど終に烏江の鬼となり李陵衛律北征の大將として葵花の太陽にかたふくにしかず馬謖は蜀の名將なれ共街亭にやぶられ符堅が百萬の英雄をひきいしも八公山の草木にをそれて敵の兵かとあやまる然れば兼好がいふごとく運に乘ずれば勇者ならずといふことなし破竹のいきほいを得てはいかなるにぶきものも草木の兵にはまさるべしいまのつはものゝひとをころさん攻城野城せんとのみねがひしたふは誠に孟子の云ごとく人のしゝをはむの罪上刑にあたるべし君子より是を見れば犬ほえて牙をあらはせば牛角をふるに似たり兼好も禽獸にちかきといへるは莊子が庶人の劍の鬪雞におなじといへる心なるべし兵の心にはをのれ敵をおとす國家をおさむと思ひて肥馬長槍僕從あまたつらねてほこりさかへ士のかしらなりといへど天下の四民の外をあげて兵道第一僧道第二なるべし古人曰三世將たるは道家のいむ所なりいかに況や其家にあらずしてみだりに武をこのまんや

屏風障子などの繪も文字もかたくなゝる筆やうしてかきたるが見にくきよりも宿のあるじのつたなく覺ゆる也大方もてる調度にても心おとりせらるゝ事は有ぬべしさのみよき物を持べしとにもあらず損せざらんためとてしなゝく見にくきさまにしなしめづらしからんとて用なきことゞもしそへわづらはしくのみなせるをいふなりふるめかしきやうにていたくこと〲しからずついえもなくて物がらのよきがよきなり

うすものゝ表紙はとく損ずるがわびしきと人のいひしに頓阿が羅は上下はづれ螺鈿の軸は貝落て後こそいみじけれと申侍しこそ心まさりて覺えしか一部と有草子などのおなじやうにもあらぬを見にくしといへど弘融僧都が物をかならず一具にとゝのへんとするはつたなきものゝする事也不具なるこそよけれといひしもいみじくおぼえし也すべて何も皆ことのとゝのほりたるはあしきことなりしのこしたるをさて打置たるはおもしろくいきのぶるわざ也内裏造らるゝにもかならず作りはてぬ所をのこす事なりと或人申侍し也先賢のつくれる内外の文にも章段のかけたる事のみこそ侍れ

うすもの　源氏に玉のおく羅のへうし羅の字をう

すものと讀り倭名唐韻云羅魯何反此間云良一云蟬翼綺
羅也らのこゑなれどもろのこゑあり囉齋(ロサイ)は囉のこ
ゑのごとし羅は金紗などに似たる物也　頓阿　小
野宮大納言能實の後胤也廿四歳迄叡山に修學し
其後高野にのぼる名を頓阿とあらため歌道を專と
す始は名を泰尋といふ又は感空とも號す貞治二年
の比頓阿七十餘歳歟後普光園攝政良基公と問答し
て近代歌の體あしく異風に成を正風體に改て後世
の龜鑑とすべしと思へり其問答を愚問賢注と名づ
く右堯孝末流鳥井小路經厚が説なり
小野宮大納言能實―全春―仁春―仁尋―仁譽―泰
尋
頓阿は兼好同時の人也其詞をこゝに引こと殊勝に
侍る　らてんのぢく　螺鈿軸は卷本の軸に貝をす
り入たる也世繼上云いまやうのあふひやつはなだ
のかゝみ螺鈿の箱にいれたるにむかひたる心地し
給なり　おぼえしか　かの字清てよむ　弘融僧都
權(イチシ)少僧都弘融文保二年十月於二抑小路亭一隨二少將
爲仲入道一受二古今和歌集訓説一云々建武比與二兼好
房一有二因緣一故弘融古今集を仁和寺の居所に預二置

之一　貞和三年伊賀國佛性寺遍照院居住時歳六十一
いきのぶる　源氏によはひのぶると云詞に似た
りゆうにゆたかなる心也　内外のふみ　内典外典
也佛經をば内典とし儒書百家を外典とす天台止觀
にも十段の中三段かけ毛詩も三百篇の内六篇亡し
周禮の六官も冬官かけ大學の格物の傳かけたる類
多し　凡佛書を内典とし儒書を外典とする事浮屠
氏よりいふ私にて天下の公論にあらず聖人の道は
天下古今の法にて常とすべき故に其書を經とも典
とも名づく經典の二字みなつねと讀り堯典舜典と
いひ五經六經といふは此義なり浮屠の説をば西域
にて脩多羅(シュタラ)素怛纜(スタラ)なんどいふを翻譯するものゝこ
と〲しくたふときことゝて聖人の書の號をか
り經といひ典といひ剩内外の字をくはへて尊異す
ること也又佛道の外をば推て外道と號す是皆一人
の私也されば堯舜文武の道にあらざる者をば異端
と名づく又史鉞といへる書には外道の部をたてゝ
浮屠を載するときはもとより佛者はすなはち外道
なるべし
竹林院入道左大臣殿太政大臣にあがり給はんに何の

とどこほりかおはせんなれどもめづらしげなし一上(イチノカミ)にてやみなんとて出家し給にけり洞院左大臣殿此事を甘心し給て相國の望おはせざりけり亢龍の悔ありとかやいふこと侍る也月滿てはかけ物さかりにしてはおとろふ萬の事さきのつまりたるは破にちかき道なり

竹林院　西園寺公衡公竹林院左府と號す　一のかみ　一上は左大臣のこと也左大臣關白なれば右大臣一上なり節會の時内辨をつとむる也　洞院左大臣　洞院實雄公從一位左大臣山階と號す　相國　太政大臣のから名也　亢龍の悔　易乾卦上九亢龍有レ悔象曰亢龍有レ悔盈不レ可レ久也又曰亢龍有レ悔與レ時偕極亢之爲レ言也知レ進而不レ知レ退知レ存而不レ知レ亡知レ得而不レ知レ喪　月みちては　易豐卦曰中則昃月盈則食天地盈虚與レ時消息　釋名云月缺也滿則缺　物さかりにしては　盛者必衰

此段禮讓の理をいへり鎌倉の右大臣實朝初人のいさめをきかず頼朝は大納言をきはめとすとも我は右府にのぼらんと云て終に居ながら位にのぼり其拜賀のために鶴岡に詣てはたして公曉が難にあへり朝につかへん人上﨟下﨟にかぎらず竹林院の大臣のごとく謙退の誠あるべきなり

法顯三藏の天竺にわたりて故郷の扇を見てはかなしひ病にふしては漢の食をねがひ給けることを聞てさばかりの人の無下にこそ心よはき氣色を人の國にてみえ給けれと人のいひしに弘融僧都優に情ありける三藏かなといひたりしこそ法師のやうにもあらず心にくゝ覺しか

法顯高僧傳第三梁惠皎所レ撰法顯傳曰釋法顯姓龔平陽武陽人有二三兄一並髫齓而亡父恐二禍及一レ顯三歳便度爲二沙彌一居レ家數年病篤欲レ死因以送還レ寺信宿便差不二肯復飯一其母欲レ見レ之不レ能レ得後爲立二小屋於門外一以擬二去來一十歲遭二父憂一叔父以二其母寡獨不一レ立逼使レ還レ俗顯曰本不三以レ有レ父出家一也正欲二遠レ塵離一レ俗故入レ道耳叔父善二其言一乃止頃之母喪至性過レ人葬事畢仍即還レ寺嘗與二同學數十人一於二田中一刈レ稻時有二飢賊一欲レ奪二其穀一諸沙彌悉奔走唯顯獨留語レ賊曰若欲レ須レ穀隨二意所一レ取但君等昔不二布施一故致二飢貧一今復奪レ人恐來世彌甚貧道預爲レ君憂耳言訖即還賊棄レ穀而去衆僧數百人莫レ不二

歎服一及レ受二大戒一志行明敏儀軌整肅常慨二經律舛闕一誓レ志尋求以二晉隆安三年一與二同學惠景道整惠應嵬等一發レ自二長安一西渡二流沙一上無二飛鳥一下無二走獸一四顧茫々莫レ測レ所レ之唯視レ日以准二東西一望二人骨一以標二行路一耳屢有二熱風惡鬼一遇レ之必死顯任レ緣委レ命直過二險難一有レ頃至二葱嶺一々冬夏積雪有二惡龍一吐レ毒風雨沙礫山路艱危壁立千仞昔有レ人鑿レ石通レ路傍施二梯道一凡度二七百餘所一又躡二懸絙一過レ河數十餘處皆漢張騫甘英所レ不レ至也次度二小雪山遇二寒風暴起一惠景噤戰不レ能レ前語レ顯曰吾其死矣卿可二前去一勿レ得二俱殞一言絕而卒顯撫レ之泣曰本圖不レ果命也奈何復自力孤行遂過二山嶮一凡所二經歷一三十餘國將レ至二天竺一去二王舍城一三十餘里有二一寺一逼レ暝過レ之顯明日欲レ詣二耆闍崛山一寺僧諫曰路甚艱阻且多二黑師子一亟經噉レ人何由可レ至顯曰遠涉二數萬一誓到二靈鷲一身命不レ期出息非レ保豈可レ使下積年之誠一既至而廢上耶雖レ有二險難一吾不レ懼也衆莫二能止一乃遣下兩僧一送上レ之顯既至レ山日將レ曛夕二欲二遂停宿一兩僧危懼捨之而還顯獨留二山中一燒香禮拜翹二感舊跡一如レ覩二聖儀一至レ夜有二三黑師子一來

蹲二顯前一舐レ脣搖レ尾顯誦レ經不レ輟一心念佛師子乃低レ頭下レ尾伏二顯足前一顯以レ手摩レ之呪曰若欲二相害一待二我誦竟一若見レ試者可二便退一矣師子良久乃去明晨迅返路窮二幽梗一止有二一逕通行一未レ至里餘忽逢二一道人年可二九十一容服麁素而神氣儁遠顯雖レ覺二其韻高一而不レ悟二是神人一後又逢二一少僧一顯問云問者年是誰耶答云頭陁迦葉大弟子也顯方大惋恨更追至二山所一有二橫石塞一于室口一遂不レ得レ入顯流レ涕而去進至二迦施國一々有二白耳龍一每與二衆僧一約令下國內豐熟上皆有二信効一沙門爲起二龍舍一幷設二福食一每レ至二夏坐訖龍一輙化作二一小蛇一兩耳悉白衆咸識二是龍一以二銅盂一盛レ酪置二龍於中一從二上座一至レ下行之遍乃化去年輙一出顯亦親見後至二中天竺一於二摩竭提邑波連弗阿育王塔南天王寺一得二摩訶僧祇律一又得二薩婆多律抄雜阿毘曇心綖經方等泥洹經等一顯留三年學二梵語梵書一方躬自書寫於レ是持二經像一寄二附商客一到二師子國一顯同旅十餘或留或亡顧レ影唯己常懷二悲慨一忽於二玉像前一見二商人以二晉地一白團絹扇一供養不レ覺悽然下レ淚停二年復得二彌沙塞律長雜二含及雜藏本一並漢土所レ無旣而附二商人大

舶循海而還舶有二百許人値暴風水入衆皆惶懅即取雜物棄之顯恐棄其經像唯一心念觀世音及飯命漢土衆僧舶任風而去得無傷壞經十餘日達耶婆提國停五月復隨他商東適廣州擧帆二十餘日夜忽大風合舶震懼衆咸議曰坐載此沙門使我等狼狽不可以一人故令一衆俱亡共欲推之法顯檀越厲聲呵商人曰汝若下此沙門亦應下我不爾便當見殺漢地帝王奉佛敬僧我至彼告王必當罪汝商人相視失色僶俛而止既水盡糧竭唯任風隨流忽至岸見藜藿菜依然知是漢地但未測何方即乘船入浦尋村見獵者二人顯問此是何地耶獵人曰此是青州長廣郡牢山南岸獵人還以告太守李嶷々素敬信忽聞沙門遠至躬自迎勞顯持經像隨還頃之欲南飯青州刺史請留過冬顯曰貧道投身於不及之地志在弘通所期未果不得久停遂南造京師就外國禪師佛馱跋陀於道場寺譯出摩訶僧祇律方等泥洹經雜阿毘曇心垂百餘萬言顯既出大泥洹經流布教化咸使見聞有一家失其姓名居近朱雀門世奉正化自寫一部讀誦供養無別經室與雜書共屋後風火忽起延及其家資物皆盡唯泥洹經儼然具存煨燼不侵卷色無改京師共傳咸歎神妙其餘經律未譯後至荊州卒於辛寺春秋八十有六衆咸慟惜其遊履諸國別有大傳焉 一切經廣字函高僧法顯傳一卷 東晉沙門釋法顯自記下遊天竺事上 法顯到獅子國一僧伽藍名無畏山有五千僧起一佛殿金銀刻鏤悉以衆寶中有一青玉像高三丈許通身七寶焔光威相嚴顯非言所載右掌中有一無價寶珠法顯去漢地積年所與交接悉異域人山川草木擧目無舊又同行分披或流或亡顧影唯己心常懷悲忽於此玉像邊見商人以一白絹扇供養不覺悽然涙下滿目 編年通論第四東晉義熈七年法師法顯自西域還初顯至獅子國同侶皆無存翩然自止會有以納扇供佛者顯見之動東歸之思 故郷 こゝにては支那をさす 漢ノ食 支那は上唐虞三代より下元明に至るまで數千年の間代々の號おほきにおして漢といひ唐といひて支那の惣名とする事は漢は世をたもつこと四百年にあまり李唐は三百年に及ぶ故に其全盛の時をとりて號とする也此意朝鮮人崔溥が漂海錄にもあり和漢

といひ倭唐といふも此義なり　人の國　他國をいふ春日明神の託宣に他國より我國の他人より我人のといへり

人のこゝろすなほならねば僞なきにしもあらずされどもをのづから正直の人などかなからんをのれすなほならねど人の賢をみてうらやむは尋常也いたりてをろかなる人はたま〳〵賢なる人を見て是をにくむおほきなる利をえんがために少しきの利をうけず僞かざりて名をたてんとすとそしるをのれが心にたがへるによりて此嘲をなすにてしりぬ此人は下愚の性うつるべからずいつはりて小利をも辭すべからずかりにも賢を學べからず狂人のまねとて大路をはしらば則狂人也惡人のまねとて人をころさば惡人也驥をまなぶは驥のたぐひ舜を學は舜の徒なり僞ても賢をまなばんを賢といふべし

人の心すなを　廉直也　正直の人なとかなからん　論語に十室之邑有二忠信一といひ孟子性は善なりといふ心也　賢をみてうらやむ　論語里仁篇見レ賢思レ齊焉見二不賢一而內自省也　賢なるを見て　大學人之有レ技娼疾以惡レ之人之彥聖而違レ之俾レ不レ通　下愚之性　論語陽貨篇上智與二下愚一不レ移　狂人のまね　狂人走不狂人走　淮南子曰狂者東走逐者東走東走則同所二以東走一則異　惡人のまね　楊子法言二曰人之性也善惡混脩二其善一則爲二善人一脩二其惡一則爲二惡人一　驥を學ぶは　楊子法言一曰晞レ驥之馬亦驥之乘也晞レ顏之人亦顏之徒也　舜を學ぶ　孟子滕文公上云顏淵曰舜何人也予何人也有レ爲者亦如レ是　孟子告子下云曹交問云人皆可二以爲一堯舜一有レ諸孟子曰堯舜之道孝弟而已矣子服二堯之服一誦二堯之言一行二堯之行一是堯而已矣子服桀服服一誦二桀之言一行二桀之行一是桀而已矣

惟繼中納言は風月の才にとめる人也一生精進にて讀經うちして寺法師の圓伊僧正と同宿して侍けるに文保に三井寺やかれし時坊主にあひて御坊をばてら法師とこそ申つれど寺はなければ今よりはほうしとこそ申さめといはれけりいみじき秀句也けり

惟繼　一本に伊嗣と書は非也惟繼中納言平氏西洞院嫡流也元德二年任二權中納言一建武二年任二文章博士一曆應五年出家七十六歲法名妄俄康永　二年四月十八日卒七十八歲　風月の才　詩歌文章の才也

とめるとはさかりに多くある義也　圓伊僧正　伊平大納言の孫也風雅集にも前権僧正圓伊の忍待戀の心をよめる歌「宵の間は誰も人めをつゝめばとふくるつらさを忘れてぞまつ　文保　花園院の年號文保元年四月二十五日山門より三井寺をやくことあり　寺法師　諸山おほしといへども山とばかりいふ時は比叡山なり諸寺おほしといへども寺とばかり云時は園城寺也園城寺はすなはち三井寺の事なり　秀句　秀逸の詩歌をいふ義もあれどこゝにては誹諧の戯言なり

下部に酒のまする事は心すべきことゝ也宇治に住けるをのこ京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧をこじうとなりければ常に申むつびけり或時迎に馬を遣したりければ遙なるほどなり口つきのをのこに先一度せさせよとて酒を出したればさしうけ〳〵よゝと飲ぬ太刀うちはきてかひ〴〵しげなればたのもしく覺えてめしぐして行程に木幡のほどにて奈良法師の兵士あまたぐしてあひたるに此男立むかひて日暮にたる山中にあやしきぞとまり候へといひて太刀をひきぬきければ人も皆太刀ぬき矢はげなどしけるを具覺坊手をすりてうつし心なく醉たる者に候まげてゆるし給はらんといひければ各嘲て過ぬ此をとこ具覺坊に逢て御坊は口惜きことし給つるものかなをのれ醉たる事侍らず高名仕らむとするをぬける太刀むなしくなし給ひつることゝいかりてひたぎりにきりおとしつさて山だち有とのゝしりければ里人おこりて出あへば我こそ山だちよといひて走りかゝりつゝきりまはりけるをあまたして手おほせ打ふせてしばりけり馬は血つきて宇治大路の家にはしり入たり淺間しくてをのこどもあまたはしらかしたれば具覺坊はくちなし原にによひふしたるを求出てかきもてきつからき命生たれど腰きり損ぜられてかたわに成にけり

下部とは　下劣の者なり　心すべきことゝ也　心づかひすべきとなり　申むつび　昵　いひ通し親む義也　はるかなるほどなり　遠路の義也是は具覺坊がことばなり　よゝとのみぬ　源氏夕顔の巻によゝとなきぬとありよゝはなく聲也河海に君によりよゝ〳〵とよゝ〳〵とねをのみぞ鳴よゝ〳〵〳〵と六帖　源語類聚によゝは能々とあり今案にては能々とのむとみべき也とまり候へといひて

やるまいぞ〳〵と云心也　うつし心　萬葉に現心と書り源語類聚にうつし心ならぬとは狂亂心なり
まげて　枉の字也理をまげてわびたる也　くちなし原　木幡の邊にくちなしはらおほし新古今知家の歌に「木幡山あるはさながら口なしの宿かるとてもこたへやはせん　によひふした　呻吟
或者小野道風が書る和漢朗詠集とて持たりけるを有人御相傳うける事には侍らじなれども四條大納言撰れたるものを道風かゝむこと時代やたがひ侍らん覺束なくこそといひければさ候へばこそ世にありがたき物には侍りけれとていよ〳〵秘藏しけり
道風　河海云木工頭小野道風正四位下參議峯守孫太宰大貳葛絃男　從四位上木工頭道風朝臣寛平五年生村上天皇康保三年十一月卒七十一歲　一說云延喜五年生云々　御相傳うける事には　相傳實なきことにてはあらじと也うけるは浮虛の義なるべし　四條大納言　公任卿也康保三年生萬壽三年入道時六十一歲　道風死去は公任誕生の年也　和漢朗詠集　公任の撰する所上下卷有昔はふしをつけてうたひけるとなん日本人と唐人との詩文の詞を撰ぶによりて和漢と號するか詩文と和歌と載故に云か但和歌は公任已後の人書加たるか世傳大二條關白敎通を聟君として朗詠を引出物にゑらばれたりとなん　道風が朗詠は羲之が千字文といふ類也千字文は梁武帝の時周興嗣が作なり武帝の鍾繇王羲之が手跡の內一千字をゑらび出して千字文を寫したり其後或は板に開くによりて其石摺を羲之が千字文と云羲之死て武帝生るゝ時までは百年にあまれり
此段世におろかなるものゝことをいふ誠に此類おほかり此比朝鮮人の編たる筆苑雜記を見侍りしに其內に　少日與ニ同學ニ三人ニ遊ニ山寺ニ見ニ一畫佛頭ニ其上ニ曰ニ孔子讃吳道子畫蘇軾書ニ或曰古畫必妙盡ニ神而去ニ哉有ニ强料レ事者ニ曰孔子周人也漢明帝時佛法始入ニ中國ニ謂ニ孔子讃ニ佛無レ理且吳道子唐人也安有ニ吳道子畫而孔子讃ニ乎蘇軾生ニ於千歲之後ニ安得下與ニ孔子ニ同レ時而書中所レ著之讃上乎必後世好レ事者所レ爲也子等皆年少不レ料レ事信レ之后於ニ一貴公子家ニ見ニ此畫ニ乃稱ニ古今第一ニ而爲ニ畫譜之首ニ予審レ諦視レ之則所謂孔子讃者列子所レ言孔子曰西方

有ニ大聖人一名曰レ佛不レ言而信無レ爲而化之說也蘇軾取而書レ之前日强料レ事者之言可レ付ニ之一笑一後世不レ知ニ本末一而强解レ事者皆此類也　又案說苑曰宋愚人得ニ燕石一藏レ之以爲ニ大寶一周客聞而觀レ之主人齋七日端冕玄服發レ寶革櫃十重提巾十襲客見俛而掩レ口胡盧而笑曰燕石也主人大怒曰盲瞽之言藏愈固守愈謹

奥山に猫またといふものありて人をくらふなると人のいひけるに山ならねどもこれらにも猫のへあがりて猫またに成て人とる事はあなる物をと云者有けるを何阿彌陀佛とかや連歌しける法師の行願寺の邊にありけるがきゝてひとりありかん身は心すべきことにこそと思ひけるころしもある所にて夜ふくるまで連歌してたゞひとり歸けるに小川のはたにて音に聞猫またあやまたずあしもとへふとよりきてやがてかきつくまゝに頸のほどをくはんとす肝心もうせてふせがんとするに力もなく足もたゝず小川へころび入てたすけよやねこまたよや／＼とさけべば家々よりまつどもともしてはしりよりて見ればこのわたりに見しれる僧也こは如何にとて川の中よりいだきおこしたれば連歌のかけものとりて扇小箱など懐に持たりけるも水に入ぬ希有にしてたすかりたるさまにてはう／＼家に入にけりかひける犬のくらけれど主をしりてとび付たりけるとぞ

猫また　和名猫 音苗爾古麻善捕レ鼠也　金花猫は黄なる猫なりばけて婦女をおかして煩をなすその雄猫におかされたるは雄をころしてこれを治し雌猫におかされたるは雌をとらへてこれを治すといふこと續耳談月令廣義などいふ書に見えたり　何阿彌　其名たしかならぬ也　行願寺　元亨釋書十四云釋行圓鎭西人寛弘二年遊ニ帝城一頭戴ニ寶冠一身披ニ革服一都下呼爲ニ革上人一於ニ賀茂神祠側一營ニ行願寺一安ニ千手像一以ニ圓衣一革俗呼ニ行願寺一爲ニ革堂一　松どもともし　松明也　連歌のかけもの　賭

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸やすら殿といふものを知て常に行通しに或時出て歸來たるを法印いづくへ行つるぞと問しかばやすらどのゝがりまかりて候といふ其やすら殿は男か法師かと又とはれて袖かきあはせていかゞ候らん頭をば見候はずと答申さなどか頭ばかりのみえざりけん

やすら　安良殿と書歟　袖かきあはせて　はぢきしはめる體歟　此段の意は急に問つめられて如レ此答ること有べし只今そこにて人とあいて物語したるといふに其人は何色の衣服をきたるなど人にとはれてそれは覺え候はずなど云事もあり相國寺の横川和尚に木篇に日の字かけるはいづれの文字にて侍ると人の問ければ篇もつくりももくの音なればば相の字ももくの音なるべしといふ時にそばなる人相國寺の相の字にあらずやと申ければ横川大にわらはれけり

赤舌日といふ事陰陽道には沙汰なきこと也昔の人是をいまず此比なにものゝいひいでゝいみはじめけるにか此日ある事末とをらずといひて其日いひたりしことしたりしことかなはずえたりし物は失ひつ企たりし事ならずといふをろか也吉日を撰てなしたるわざのすゑとをらぬをかぞへてみんも又ひとしかるべしその故は無常變易のさかひ有と見るものも存ぜず始ある事も終なし志はとげず望は絶ず人の心不定なり物皆幻化也何事かしばらくも住する此理をしらざる也吉日に惡をなすに必凶也惡日に善をおこなふに必吉なりといへり吉凶は人によりて日によらず

赤舌日　赤口日なり　通書大全曰赤口日忌ニ會レ客證レ事買賣一又云主ニ口舌宮爭一　かなごよみにしやく口とある是也口と舌と同じ儀也　陰陽道　職原陰陽寮掌ニ天文曆數事一昔者一家兼ニ兩道一而賀茂保憲以ニ曆道一傳ニ其子光榮一以ニ天文道一傳ニ弟子安倍晴明一自レ此已後兩道相分　無常變易の境　涅槃經諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂　天台四門有門空門非有非空門亦有亦空門　物みな幻化也　圓覺經幻身滅故幻滅亦滅幻滅々故非幻不滅　何事かしばらくも住する　釋氏に成住壞空の說あり　吉日に惡をなすに必凶なり　たとへばうらなふ者の卦の吉にあたれども惡事をすれば必凶なり卦の凶にあたれども善事をすれば必吉なるがごとし　事文類聚前集十二沈顈時日無ニ吉凶一辨云古者國家將レ有レ事ニ乎戎祀一必先擇ニ時日一以定ニ其期一是用備ニ物於有司一習ニ儀於禮寺一俾下臻ニ其慮一而戒中其誠上非レ所下以定ニ吉凶一決中勝負上也後之惑者不レ詳ニ其故一推ニ考時日一妄生ニ穿鑿一斯風不レ革拘忌益深至レ使ニ凡庶之家一將欲下越ニ一溝隍一折中一葭葦上必待レ擇レ日

而後爲之搆一衡宇一薙一榛蕪一必審方位而後爲之且吉凶由人焉繋時日夫四達之衢輪蹄未嘗息也五都之市貨賄未嘗絶也萬家之邑斤斧未嘗斷也七雄之世戰伐未嘗已也其凶也必由於人其吉也必由於人故吉人凶其吉凶人吉其凶一於人之所爲而已矣然則惑者不知其在人也有一不吉則罪於時日矣且以不謀之將不練之士有能以日時勝者乎不耕之士不實之谷有能以時日穡者乎以鐵爲金以石爲玉有能以時日濟者乎是皆不能也則時日於人何有哉夫王者之兵以德勝霸者之兵以義勝其次以智其次以勇故古之名將未嘗不以此而戰勝也未嘗不以此而立功者也　羅浮子嘗應或人之求而著軍書題說其中論時日其畧曰孫子之論兵也有五焉其二曰天々者陰陽寒暑時制也言用兵者必順乎天時也寒暑者冬夏之時也時制者陰陽四時之制所謂時日支干孤虛王相之說起自風后之孤虛書及范蠡之占歲此其所流傳未可知也則豈又可悉廢哉然今姑以不避陰陽拘忌者枚舉之夫往亡之日兵家所忌晉武帝曰我往彼亡吉孰大焉遂平慕容氏甲子者紂所亡兵家忌之後魏武帝曰紂以甲子亡武王以甲子勝遂破賀驎鄧禹以六甲窮日理兵以敗劉均劉裕不避折竿沈幡之凶兆以擊盧循而走之皆是太公折蓍毀龜之遺意也耶尉繚子曰黄帝刑德者人事而已矣孟子曰天時不如地利地利不如人和言盡于此而已耶然又有一理康節先生出行不擇日或告之以不利則不行蓋曰人未言則不知既言則有知而必行故鬼神敵也是亦可不思乎嗚呼時日用捨存於其人矣

徒然草野槌上之七

或人弓いる事をならふにもろ矢をたばさみて的にむかふ師の云初心の人ふたつの矢をもつことなかれ後の矢をたのみてはじめの矢に等閑の心あり毎度たゞ得失なく此一矢に定べしと思へといふわづかに二の矢師の前にてひとつをゝろかにせんと思はんや懈怠の心みづからしらずといへとも師是をしる此いましめ萬事にわたるべし道を學する人夕には朝あらんことを思ひ朝には夕あらん事を思ひてかさねて念比に修せん事を期す況一刹那のうちにをひて懈怠のこゝろあることをしらんやなんぞたゞ今の一念にをいてたゞちにすることの甚かたき

弓いる事　中庸子曰射有レ似二乎君子一失二諸正鵠一反求二諸其身一　孟子盡心上大匠不下爲二拙工一改中廢繩墨上羿不下爲二拙射一變中其彀率上　君子引而不レ發躍如也中道而立能者從之　莊子田子方篇列御寇爲二伯昏無人一射引レ之盈貫措二杯水其肘上一發レ之適矢復沓方矢復寓當二是時一猶二象人一也　口義云引レ之盈貫開レ弓而至レ滿也前手直而肘平可三以致二一盃水於其上一言定也發射也適去也沓重也又也　矢方去而矢又在二絃上一沓二於弦上一者纔去而方來之矢又寓二於弦上一矣此言三一箭接二一箭一如レ此其神速也象人木偶人也　道を學する人　論語里仁篇朝聞レ道夕死可矣といひ朱文公勸學文勿レ謂今日不レ學而有二來日一と云へる義に通ずべし　一刹那　一彈指頃六十五刹那

牛を賣者あり買人明日そのあたひをやりてうしをとらんといふ夜のまに牛死ぬかはんとする人に利ありうらんとする人に損ありとかたる人あり是を聞てかたへなる者の云牛のぬし誠に損有といへども又大なる利あり其故は生あるもの死のちかき事を知ざる事うし既にしか也人又おなしはからざるに牛は死しはからざるにぬしは存せり一日の命萬金よりもおもし牛のあたひ鵝毛よりも輕し萬金を得て一錢を失はん人損ありといふべからずといふに皆人嘲て其理は牛の主に限へからずといふ又云されは人死をにくまば生を愛すべし存命の喜日々にたのしまざらんやをろかなる人この樂をわすれていたづかはしく外のたのしひをもとめこの財をわすれてあやうく他の財をむ

さぼるには志滿事なしいける間生をたのしまずして死に臨て死をゝそれは此理あるべからず人みな生をたのしまざるは死をおそれざる故なり死をおそれざるにはあらず死の近事をわするゝ也もし又生死の相にあづからずといはゞ實の理をえたりといふべしといふに人いよ〳〵あざける

牛をうるもの　史記貨殖傳烏氏倮畜牧及レ死斥賣畜乇ニ川レ谷量ニ馬牛一任氏力ニ田畜一人爭取ニ賤賈一任氏獨取ニ貴善一橋姚致ニ馬千匹一牛倍レ之云々　貨殖傳にのする所をみれば牛馬を賣買する事いにしへより甚多し牛馬の市を駔儈といふ　一日の命　大智度論曰設滿ニ世界一寶無レ有レ直ニ身命一　鵝毛よりも　司馬遷報ニ任少卿一書人固有ニ一死一或重ニ於太山一或輕ニ於鵝毛一　死をにくまば　孟子告子篇生亦我所レ欲死亦我所レ惡　生死の相にあづからす　釋氏は不生不滅を涅槃とし生死即涅槃といふ根來の聖憲の八識田中下ニ阿字一刀一生死亦斷涅槃亦斷といひ莊子が死生大なれ共變ずる事あたはずといひ老子の死而不レ亡者壽といへる是皆生死の相にあづからざる理を云なるべし兼好が例の天台莊老を好める所なり　實の理をえたり　玄義第一心名ニ不生一亦復不レ滅心即實相　人いよ〳〵あざける　老子の下士は道を聞てわらふといへる心なり

此段牛を論ずる所は易の無妄の卦とおなじからざれども牛を以て物理を論ずる趣は相にたり無妄の卦六三无妄之災或ニ繫之牛一行人之得邑人之災象曰行人得レ牛邑人災也いふこゝろは道を行人あり人のつなげる牛をひいてさる其邑にをる者ぬすめるかとうたがはれてとらへとはるゝほどに災にあふと也牛の得失を以て思ひの外に災難にあふは無妄の災なり无妄は眞實自然の義也六三の位をる所たゞしからざる故に此わざはひあり意外に出たる災なればなり又案ずるに欲は人ごとにあるもの也市町の民はいふにおよばす千石の家は萬石の家をねがひ家有ものは國郡をねがひ小國のあるじは大國をねがひ大國の主は天下をのぞむしかれば欲のきはめは天下にとゞまる今朝天下をとりて夕に死なばいかんといふに子孫にのこすべきこともなくは天下をとらんといふ人有べからずしかれば欲のきはめは命にすぎたるものなし天下にかえざるほ

どのいのちをもちていけるあいだよろこびさるはまことに世のしれもの也されども百歳にたらずして死するは必定なりそれをおもはゞかねて朝暮なきかなしむべきにさもなきことは生あるものゝ死するはつねの道理なればはじめておどろかざるなるべし如ㇾ此よろづの事理をきはめしらばうたがひもなくまどひもあるべからずかく有がたきいのちなれども君子の生をすてゝ義をとり身をころして仁をなすは仁義の心をよくしれる故なり是をしらざるものは一朝の怒に身をわするゝもあり欲につき色におぼれて命をうしなふもあり是又血氣のなす所也故に仁義をたつとひて血氣をいましむるは聖人の教なり兼好が存命のよろこび日々にたのしまざらんやといふはいかゞおもひけるぞや

常盤井相國出仕し給けるに勅書を持たる北面あひ奉りて馬よりおりたりけるを相國後に北面なにがしは勅書をもちながら下馬し侍りし者なりかほどの者いかでか君につかふまつり候べきと申されければ北面をはなたれにけり勅書を馬の上ながらさゝげて見せ奉るべしおるべからずとぞ

常盤井相國　實氏公也公經公の子西園寺流也　北面　上北面下北面とて有上北面は諸大夫なり下北面は五位六位譜代の侍を云也高倉院御宇因幡堂の額を平等寺と號し宸翰を賜る時に勅使車に乘ながら内陣へやりとほして勅額を納たるより彼寺の緣起にあり勅書もちたる人は車馬より下まじきなり

箱のくりかたに緒をつくる事いづかたにつけ侍るべきぞとある有職の人に尋申侍しかば軸につけ表紙につくる事兩說なればいづれも難なし文の箱はおほくは右につく手箱には軸につくるも常の事也とおほせられき

軸とは左表紙とは右なり昔の文箱は卷物などのやうに一方に付たると見えたり緒一筋なり左右のくはんを引とをして一方に一結びむすぶ也結ぶ方を付るとはいふへし

めなもみといふ草ありくちばみにさゝれたる人かの草をもみて付ぬれば則いゆとなんみしりてをくべし

めなもみ和名集本草注に云葈耳一名羊負來 葈音子和名奈毛美　今俗に稀薟をめなもみとよめり其莖

薬蒼耳に似たるゆへなるへし蒼耳を蛇傷の所につくること本草に見えたり又天名精地菘鶴虱此三をめなもみとよめり或はいのしり草とも號す鶴虱は地菘の實也本草に地菘を蟲虵のさしたる所にぬるとみえたり和名集には天名精をはまだかなともはまふくらとも訓せり天名精は則地菘なり

其物につきて其物を費しそこなふ物かずをしらずあり身に虱あり家に鼠あり國に賊あり小人に財あり君子に仁義あり僧に法あり

小人に財あり君子に仁義あり　老子曰大道廢有ニ仁義一　莊子駢栂篇意仁義其非ニ人情一乎彼仁人何其多レ憂也仁義又奚連々如ニ膠漆纆索一而遊ニ乎道徳之間一爲哉使ニ天下惑一也虞氏招ニ仁義一以撓ニ天下一也奚必伯夷之是而盜跖之非乎天下盡殉也彼所レ殉仁義也則俗謂ニ之君子一其所レ殉貨財也俗謂ニ之小人ニ其殉一也夫適ニ人之適一而不ニ自適ニ其適一雖ニ盜跖與ニ伯夷一是同爲ニ淫僻一也余愧ニ乎道徳一是以上不ニ敢爲ニ仁義之操一而下不ニ敢爲ニ淫僻之行一也同馬蹄篇毀ニ道徳一以爲ニ仁義一聖人之過也　同胠篋篇攘ニ棄仁義一而天下之徳始玄同矣　僧に法あり　源氏物語に吉祥天女法げくさしといへり　維摩經云法猶可レ捨而況非法　止觀云觀法雖レ正着レ心同レ邪惠能曰心迷法華轉心悟轉ニ法華一　傳教大師曰雖レ讃ニ法華經一還死ニ法華心一　虱は鶉衣のうちより介冑に至るまで人の身に生じて血食し鼠は我墉をうがち衣枷調度に至るまでくいやぶり盜賊の人をころし婦女財寶をかすめ國をみだる財のさかりて入て小人の利にさとくしてあつめおけるいづれか其物について其物をついやすわざはひならざらん然るに君子の仁義と僧の法とを虱鼠盜賊に異ならぬやうにいへる兼好がさす所おぼつかなし兼好は佛老をこのめりかれ煦々を仁とし孑々を義とするゆへに道すたれて仁義ありといひ仁義は人情にあらず仁義をするは聖人のあやまりなりといふ又佛法僧はすでに三寶なるに法をすつべしといひ觀法も心に着すれば邪に同じといふかやうの心にて仁義も法も物をついやす事虱鼠におなじといへるなるべし法は浮屠の事なれは浮屠の者みづからいふべし儒者はいふにいとまなし仁義は儒者日用の道なればあら／＼申べし杏壇の敎には仁といふことも

あり義と云事もあり仁義とつらねていへる事易の大傳の一句ばかりなり鄒國公にいたりてはじめて仁義を必つらねていふもとより人の心の外にあらず其事のしなにかなふ所おなじからざれば五常の名をたつといへど理一分殊の故なりと知べし仁義をとりあやまる者莊老にかぎらず墨翟が兼愛は仁をあやまり楊朱が爲我は義をあやまり宋の襄公の列をなさゞるにつゞみうたず二毛をとりこにせず成安君が淮陰にやぶらるゝはみな仁義をあやまてる軍也項羽の士卒の疵をなで血をすふは婦人の仁也古今人我のよろしき所をしらざるは非義の義也俗儒は仁義をよき事也とのみ心得て其名にかかはり其跡になづむ者もあり如ㇾ此なれば莊老のみにあらず俗儒にも仁義のつゐへ有べし聖人はしからず仁義によりておこなひて仁義を行ふにあらず性善の理のまゝに隨ひて惻隱する時あり羞惡する時もあり是を天理をほがらかにして人欲を去といふ天より生れつく所の性心の上に毛のはしばかりも增減する事なし浮屠は平等利益と云て君父をすて莊老は恬澹無爲を道として仁義は人の情にあらずといふ或は不思善不思惡といひ善惡不二邪正一如といひ或は善をして名にちかづく事なかれ惡をして刑にちかづくことなかれといひ仁義をもせず淫僻をせずといふ是皆善惡の中間に心をやりて終にいみはゞかる事なきの小人とことならず此故におして仁義をも君子をついやす物なりとて身の虱家の鼠にひき合て論ず兼好が詞つゐへあり病ありよくわきまへしらずんば人をそこなふべし　或本に財に小人あり仁義に君子あり法に僧ありとかけり兼好が詞をたすけてみんとてかくあらためたるなるべしされど駢拇篇の語にて見れば兼好が本意にあらず

たうときひじりの云置ける事を書付て一言芳談とかやなづけたる草子を見侍しに心にあひて覺えし事ども

一しやせまじせずやあらましと思ふ事はおほやうはせぬはよき也

一後世を思はん者は糂汰瓶一もゝつまじきこと也持經本尊にいたるまでよきものをもつよしなき事なり

一遁世者はなきにことかけぬやうをはからひて過る

最上のやうにて有也
一上﨟は下﨟になり智者は愚者になり德人は貧に成
能ある人は無能に成べきなり
一佛道をねがふといふは別のことなしいとまある身
になりて世の事を心にかけぬを第一の道とす
此外も有しことゞもおぼえず
糂汰瓶　じんだはぬかみそなり瓶はつぼなり糝粏
とも糝粏とも秦太とも書り沙石集に大原の僧正往
生要集をよまれけるを法然坊春乘坊聽聞せられ
ける時春乘坊秦太瓶一つも執心とゞむまじきこと
也と法然坊へ申されければ大原僧正隨喜の感涙を
ながされけるとなん又精進魚類物語にも糂汰のこ
とあり玉篇云糂（息感反以レ米和レ羹也　糝古文　糂籒ー文）
よきものをもつまじきことなり　遁世者にかぎら
ず儒學をせんものも此の趣むきを知べし謝上蔡五
經の要語をあつめて冊子とし明道に見せければ玩
レ物喪レ志といはれて五體より汗をながし又よき硯
な秘藏しけるが終に冊子も硯もはふらしすてたり
二程全書に見えたり道に心ざして惡衣惡食をはづ
ることなかれと聖人ものたまへり　上﨟は　﨟は
出家する者髮をそり授戒してより一夏九旬の間勤
行するを﨟と云僧﨟戒﨟是也僧の位は戒﨟の前後
によりて次第する也是より事の次第するを﨟次と
いふ職原に極﨟とあるも位階の名也然れば上﨟下
﨟は上位下位といはんがごとし　智者は愚者にな
り　史記老子曰君子盛德容貌若レ愚　荀子曰孔
子曰聰明聖知守レ之以レ愚功被ニ天下一守之以レ讓勇
力損レ世守之以レ怯富有ニ四海一守之以レ謙此所謂挹
而損レ之之道也　通鑑曰論語曾子曰以レ能問ニ於不
能一以レ多問ニ於寡一有若レ無實若レ虛犯而不レ校昔者
吾友嘗從ニ事於斯一矣唐太宗問ニ此義於給事中孔穎
達一穎達具釋ニ其義一以對且曰非ニ獨匹夫如ニ是帝王
內蘊ニ神明一外當ニ玄默一若位居ニ尊極一炫ニ耀聰明一以
レ才凌レ人飾レ非拒レ諫則下情不レ通取レ亡之道也　佛
道をねがふ　禪家に放下着といへるは萬事をなげ
すつるをいふ　此外もありし　孟子萬章下孟獻子
有ニ友五人一焉樂正裘牧仲其三人則予忘レ之矣
堀川相國は美男のたのしき人にてそのことゝなく過
差をこのみ給けり一子基俊卿を大理になして廳務お
こなはれけるに廳屋の唐櫃みぐるしとてめでたく作

り改らるべきよし仰られけるに此唐櫃は上古より傳りて其始をしらず數百年をへたり累代の公物古弊をもちて規摸とすたやすくあらためられがたきよし故實の諸官等申ければ其事やみにけり

堀河の相國　基具公也久我の一門　過差　おごれる義なり　大理　職原曰檢非違使此云ニ使廳一淳和天皇御宇天長年中初置レ之異朝尤重ニ此職一昔唐虞代皐陶爲レ士此云ニ大理一周禮立レ官之日大司寇即此任也後代置ニ大理寺一本朝又以ニ刑部省一爲ニ糺判之官一天長年中准ニ唐朝一置ニ使廳一蓋是大理寺也但別當以下爲ニ宮下職一爲ニ衞府一之人補レ之云々　別當一人唐名大理卿　參議已上尤擇ニ其人一也補ニ此職一之人必帶ニ衞門兵衞督一世俗說補ニ大理一之人可レ備ニ七德一所謂譜第器量才幹有識近習容儀富有云々　廳務　廳は檢非違使の政をきく所也廳の字をまんどころと讀り　廳屋の唐櫃　訴狀文書などを代々入置物なるべし和名には韓櫃と書り㠯めでたく作り　うつくしく結構につくらむとなり　規摸　規矩摸範なり　此段いにしへより傳れる器をあらため作るべからずと云器のみにあらず爲人府庫をつくりける時閔子騫舊貫によらばいかん何ぞ必しも改め作らんといひければ孔子是をほめ給ふ

久我相國は殿上にて水をめしけるに主殿司土器を奉りければまがりをまいらせよとてまがりしてぞめしける

久我相國　雅實公なり　土器　かはらけとはよむべからずどきと音にてよむべし節會の時の盞也土にて作る形は馬上盞に似たり　史記　晉世家曰重耳過レ衞去過ニ五鹿一飢而從ニ野人一乞レ食野人盛ニ土器中一進之重耳怒趙衰曰土者有レ土也君其拜受レ之　まがり　也足素然云殿上の定器をはまがりと云也昔は四位五位六位殿上に日夜つめ奉公したる也これを殿上人と云朝夕臺盤に着て食せしぞ其を臺盤をおこなふと云其食を行ふことを日給と云と見えたり殿上日給と云簡を立て置るも此事なり此簡に當時の殿上人の名を悉記する也まがりの字鋺の字なるべしと長嘯子思へりされども日本紀第二卷に玉鋺をたまのまりとよめり一書には玉壺玉瓶とあれば兼良公も卜部兼倶も鋺はつるべなりとおもへり和名集金椀日本靈異記云其器皆鋺　俗云賀奈萬利今按鋺

字所出未レ詳古語謂レ椀爲二磨利一宜レ用二金椀二字一也椀即盌字　まりをまがりといはん事又おぼつかなし或說に貝をすりて作れる飲器をまかりと云奥州邊田舍などにありとなん

或人任大臣の節會の內辨をつとめられけるに內記のもちたる宣命をとらずして堂上せられにけりきはまりなき失禮なれども立歸とるべきにもあらずおもひわづらはれけるに六位內記康綱衣かづきの女房をかたらひて彼宣命をもたせて忍やかに奉らせけりいみしかりけり

任大臣の節會はかた節會とて階の間より西ばかりを構て行ふ也是西禮の義なり　內辨　其日の一の座なり　宣命　時の大內記書て出す　堂上　紫宸殿へのぼる也　失禮　しちらいとよむ過失の儀也　六位の外記　少內記と云五人あり　康綱　中原康綱正六位上權大外記歷二德治以來五代一從五位下日向守源重尙男德治年中改二姓中原一

尹大納言光忠入道追儺の上卿をつとめられけるに洞院右大臣殿に次第を申請られければ又五郎男を師とするより外の才覺くはじとぞの給ひけるかの又五郎は老たる衛士のよく公事になれたる者にてぞ有ける近衛殿着陣し給ひける時軾をわすれて外記をめされければ火たきて候けるが先軾をめさるべくや候らんとしのびやかにつぶやきけるいとおかしかりけり

尹大納言　異本に平大納言とあり　追儺　儺囊何反又乃多反くはしくかみに見えたり　事文類聚云昔顓項氏有二三子一亡而爲二疫鬼一一居二江水中一爲二瘧鬼一一居二若水一爲二罔兩蟚鬼一一居二人宮室區隅中一善驚二小兒一爲二小鬼一於レ是以二歳十二月一命二祀官一時儺以索二室中一而敺二疫鬼一焉東海度索山有二神荼欝壘之神一以禦二凶鬼一爲レ民除レ害因制二敺儺之神一季冬先レ臘一日大儺謂二之疫一　呂氏春秋云前歳一日擊レ鼓敺二疫癘之鬼一謂二之害除一亦曰レ儺　洞院の左大臣　實泰公又號二後山本一　次第を申請られ　追儺を行ふ次第也　又五郎男　衞士　衛門兵衞の被官火をたく物也　軾　名目抄には膝突と書り小半疊のうすべりなり和名に軾は車前なりとて車のとしきみとよめり然はひざつきとはおなじからず　火たきてさふらひけるが「見かきもり衛士のたく火のよるはもえひるは消つゝ物をこそ思へ和名に

助鋪と書てこやともひたきやとも讀り如二衛士屋一也

大覺寺殿にて近習の人どもなぞ〳〵を作りてとかれける處へくすし忠守參りたりけるに侍從大納言公明卿我朝の者とも見えぬ忠守かなとなぞ〳〵にせられにけるを唐瓶子とときてわらひあはれければはらたちて退出にけり

大覺寺殿　後宇多院也　くすし忠守　丹家康頼十一世忠守典藥頭内院昇殿歌人正四位下　公明侍從は兼官也正親町三條庶流也　なぞ〳〵　謎の字也玉篇謎米閉切隱言也　から瓶子　平氏忠盛の義也忠盛は清盛の父也ときやうの心は吾朝のものにあらぬは唐也忠盛は平氏也即から瓶子也瓶子平氏聲相通する故に平家物語にも五節の時伊勢へいじはすがめなりとはやし鹿谷の會合にもへいじたほれたりへいじのくびをとるなどあり凡謎子は日本にむかしよりいひ傳へたり俗說にする〳〵べたりをはねつるべとときさゝかきわけてしかぞすみけるをさしかさとときの類おほし　夫謎は隱語とも廋詞ともいふ左傳にしるせる山麴藭麥麴山癸のことは史記の滑稽傳漢書の東方朔か郭舍人と覆射するのたぐひ又は叱々朔來の類其外唐の則天の時許欽明突厥にいけどられて靈州城に至り大によばはり　良醬梁米と墨とをもとむ心は良將の精兵をひきいて夜ゑびすをうてといふ心なり又詩にもなぞあり　宋陳亞自爲二亞字謎一曰若教レ有レ口便啞且要レ無レ心爲二惡中間全沒二肚腸一外面任レ生二稜角一又荊公作二詩謎一云佳人佯醉索二人扶一露出胸前白雪膚走人二綉幃一尋不レ見任他風雨滿二江湖一乃賈二島李白羅一隱潘閬四詩人名也元祐間士大夫好レ事者取二達官姓名一爲二詩謎一如下長空雪霽見二虹蜺一行二盡天涯一遇二帝畿一天子手中執二手簡一秀才不下肯着中麻衣上謂二韓絳馮京王珪曾布一也又取二古人一而傳以二今事一如下人々皆戴二子瞻帽一君實新來轉二一官一門狀送還王介甫潞公身上不中曾寒上謂二仲長統司馬遷謝安石温彥博一也又遯齋閑覽王荊公戯謎云畫時圓寫時方冬日短夏時長呂吉甫解云東海有二一魚一無レ頭亦無レ尾更除二脊梁骨一便是這日謎此事類說事文類聚等に見えたり　古樂府の藁砧にもとつけるなるべし明皇雜錄に蘇頲卅の字を詠して曰く丑雖レ有レ足甲不レ全レ身

見二君無一口知二伊少一人是は字を分拆していへり又玉壺清話に丁文果善射覆太宗置二一物器中一文果曰蘤々華々山中探レ花雖レ無二官職一一日兩衙啓レ之乃蜂也又取二一物一令レ射文果曰有レ頭有レ足不レ石即玉欲レ要レ縮レ頭不レ能レ入レ腹乃歴書石龜也是は東方朔か遺流なるべし

荒たる宿の人めなきに女のはゞかる事あるころにてつれ〳〵と籠りたるを或人とふらひ給はんとて夕づく夜の覺束なきほどに忍びて尋おはしたるに犬のこと〳〵しくとがむれはげす女のいでゝいづくよりぞといふにやがてあないせさせて入給ぬ心ぼそげなる有様いかで過すらんといと心くるしあやしき板敷にしばしたちたまへるをもてしづめたるけはひのわかやかなるしてこなたといふ人あれはたてあけ所せげなる遣戸よりぞ入給ぬる内のさまはいたくすさまじからず心にくゝ火はあなたにほのかなれど物のきらなど見えて俄にしもあらぬにほひいとなつかしうすみなしたり門よくさしてよ雨もぞふる御車は門のしたに御供の人はそこ〳〵にといへばこよひぞやすきいはぬべかめると打さゝめくもしのびたれどほどなければほのきこゆさて此ほどの事どもこまやかにきこえ給に夜ふかき鳥もなきぬこしかた行末かけてまめやかなる御物かたりに此たびは鳥も花やかなる聲にうちしきれば明はなるゝにやと聞給へと夜ふかくいそぐべき所のさまにもあらねは少したゆみ給へるに隙しろくなればわすれかたき事などいひて立出給ふに梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの艶におかしかりしをおぼし出て桂の木のおほきなるがかくるゝまで今も見送り給ふとぞ

はゞかることある比にて　ものいみなどや　ある人とふらひ給はんとて　此ある人は何人ぞや此人のうはさを此段に始終いふ也若又兼好が自託するにや　ところせけなる　所せばげなる也　俄にしもあらぬにほひ　常々のそらだきものたきしめたる匂ひなり　門よくさしてよ　女房たちの下部にいひ付る詞也　雨もぞふる　雨もふりかせうずらんと云也　こよひぞやすきいはぬべかめる　こよひは心やすくぬべきなりと云て内衆どものさゝめく也　夜ふかき鳥も　夜半過て後やう〳〵一番鷄鳴なり　此度は鳥も　夜あけがたの鳥也　ひましろ

う　明はなれたる心也赤壁賦に東方之白とあり
桂の木の大きなるが　今其所をとをり給ふに其時の事を思ひ出て　桂の木のかくるゝまで見をくると語り給ふ也菅家歌に「君かすむやとの梢をゆくゆくもかくるゝまでにかへりみしはや

北の屋かげに消のこりたる雪のいたうこほりたるにさしよせたる車のながえも霜いたくきらめきて有明の月さやかなれどもくまなくはあらぬに人ばなれなる御堂の廊になみ〳〵にはあらずとみゆる男女となげしにしりかけて物かたりするさまこそ何事にかあらんつきすまじけれかぶしかたちなどいとよしと見えてえもいはぬにほひのさとかほりたるこそおかしけれけはひなどはつれ〳〵きこえたるもゆかし

此段も前段と同じく艶にやさしきことを云なりさやかなれどもくまなくはあらぬ月は明なれども木陰などにてくらく見ゆるなるべし　なみ〳〵にはあらず　ほめたる詞也殿上人なるべし　なげしにしりかけて　長押は上下にあり承塵とも書りこゝにては下のなげし也源氏夕顔になげしにもえのぼらずとあり　つきすまじけれ　詞も盡まじきと也　かぶしかたち　女のかしらつき也かみかたちと云儀也右の兩段は優なる躰枕草紙源氏などのおもかげあり

高野證空上人京へのぼりけるにほそ道にて馬に乘たる女の行あひたりけるが口ひきける男あしくひきて聖の馬を堀へおとしてげり聖いとはらあしくとがめてこは希有の狼籍かな四部の弟子はよな比丘よりは比丘尼はをとり比丘尼より優婆塞はをとり優婆塞より優婆夷はをとれりかくのごとくの優婆夷などの身にて比丘を堀へ蹴入さする未曾有の惡行なりといはれけれは口ひきの男いかにおほせらるゝやらんえこそ聞しらねといふに上人なをいきまきて何といふぞ非修非學の男とあらゝかにいひてきはまりなき放言しつと思ひける氣色にて馬ひきかへしてにげられにけりたうとかりけるいさかひなるべし

狼籍　籍は踏也狼のものをふみちらしたるごとくみだれがはしき儀也漢書注に見えたり　四部の弟子　法華經比丘比丘尼優婆塞優婆夷　翻譯名義集第一比丘名ニ乞士ㇾ清靜活ㇾ命故又曰名含ニ三義一破惡ニ怖魔三乞士又翻云ニ除饉一比丘尼通稱ㇾ女爲ㇾ

尼尼得ニ無量律儀ニ故應レ次ニ比丘ニ又稱ニ阿姨ニ優婆塞名ニ信士男ニ優婆夷名ニ信士女ニ又云ニ清淨士清淨女ニ雖レ在ニ居家ニ持ニ五戒ニ男女不ニ同宿ニ故云ニ善宿男女ニ　西域記鄔波索迦唐言ニ近事男ニ舊曰ニ伊蒲塞ニ又曰ニ優婆塞ニ皆訛也鄔波斯迦唐言ニ近事女ニ舊優婆斯又曰ニ優婆夷ニ皆訛也言ニ近事ニ者親近承ニ事諸佛法ニ故又曰百歲比丘尼見ニ初受戒比丘ニ當ニ起迎逆禮拜問訊請令レ坐比丘尼不レ得ニ罵ニ謗比丘ニ々々得レ說ニ尼過ニ　いきまきて　源氏玉鬘にかのけんかいきまきしけはいい河海にいきまくははらだつ也いきどをる儀か　はうこん　放言と書こと葉をはなちて惡口する也

女の物いひかけたる返事とりあへずよきほどにする男はありかたきものぞとて龜山院の御時しれたる女房どもわかき男達のまいらるゝ毎に郭公や聞給へると問て心みられけるになにがしの大納言とかや數ならぬ身はえきゝ候はすと答られけり堀川內大臣殿は岩倉にて聞て候ひしやらんとおほせられたりけるを是は難なしかずならぬ身むつかしなど定あはれけりすべてをのこをは女にわらはれぬやうにおぼしたつべしとぞ淨土寺前關白殿はおさなくて安喜門院のよく教まいらせさせ給ける故に御詞などのよきぞと人の仰られけるとかや山階左大臣殿はあやしの下女の見奉るもいとはづかしく心づかひせらるゝとこそおほせられけれ女のなき世なりせは衣文も冠もいかにもあれひきつくろふ人も侍らしかく人にはぢらるゝ女如何ばかりいみしき物ぞと思ふに女の性は皆ひがめり人我の相ふかく貪欲甚しく物の理をしらずたゞまよひの方に心もはやくうつり詞もたくみにくるしからぬ事をもとふ時はいはず用意あるかとみれば又あさましき事までとはずかたりにいひ出すふかくたばかりかざれる事は男の智惠にもまさりたるかと思へば其事跡よりあらはるゝをしらずすなほならずしてつたなきものは女也其心に隨てよく思はれん事は心うかるべしされば何かは女のはづかしからんもし賢女あらばそれも物うとくすさまじかりなん只まよひをあるしとしてかれにしたがふ時やさしくもおもしろくも覺へき事也

しれたる女房　ざれたる女也　堀川の內大臣　其守公也號ニ岩倉內大臣ニ

堀河流正二大納言　　岩倉内大臣正二　　従一太政大臣
通具（ミチトモ）――具實（トモサネ）――基具
　　　　　　　　　　　　　　　　　　堀川太政大臣
内大臣
具守
従一右大將

いはくら　浄土寺の前關白　九條殿師教公號ニ巳心院一又號ニ浄土寺一元應二年六月七日薨四十四歳　安嘉門院　後堀川院女御浄土寺太政入道公房公の女也山階の左大臣　實雄實氏公の弟西園寺の一家洞院　かく人にはぢらるゝ女　是より一轉して女の心のひがめる事を云

人我の相ふかく　藏乘法數云般若四相

我相――執取自體
人相――數取餘趣
衆生相―種々變異相續
壽者相―一報命根不斷

寸陰おしむ人なしこれよくしれるがをろかなるかをろかにしてをこたる人のためにいはば一錢かろしといへども是をかさぬればまづし幾人をとめる人となすされば商人の一錢をおしむ心切也刹那おぼえずといへどもこれをはこびてやまざれば命を終る期忽にいたるされば道人はとほく日月を惜べからすたゞ今の一念むなしくすぐる事をおしむべし若人來りて我命あすは必失はるべしと告しらせたらんにけふのくるゝあひだ何事をかたのみ何事をかいとなまん我等がいけるけふの日なんぞ其時節にことならん一日のうちに飲食便利睡眠言語行歩やむ事をえずしておほくの時をうしなふ其あまりの暇いくばくならぬうちに無益のことをなし無益の事をいひ無益の事を思惟して時を移すのみならず日を消し月を亘て一生を送る尤をろかなり謝靈運は法華の筆受なりしかども心常に風雲の思を觀ぜしかば惠遠白蓮の交をゆるさゞりき暫もこれなき時は死人におなじ光陰なにのためにかおしむとならば内に思慮なく外に世事なくして止ん人は止修さん人は修せよとなり

寸陰おしむ　淮南子曰聖人不レ貴ニ尺之璧一而重ニ寸之陰一時難レ得而易レ失也　晋陶侃曰禹惜ニ寸陰一人可レ惜ニ分陰一これよくしれるか　理をしりて光陰を惜ぬか　一日のうちに飲食　莊子盜跖篇人上壽百歳中壽八十下壽六十除ニ病瘦死喪憂患一其中開レ口而笑者一月之中不レ過ニ四五日一而已矣天與レ地無レ

窮人死者有レ時操ニ有レ時之具一而託ニ於無レ窮之間一忽然無レ異ニ騏驥之馳過一レ隙也不レ能下說ニ其志意一養中其壽命上者皆非ニ通レ道者一也　我等がいける今日の日は屠所におもむく牛羊のたとへに似たり無益の事をして一生をおくるは枉過ニ一生一蟻旋レ磨と云に似たり　謝靈運は法華の筆受　南史謝靈運幼穎悟文章之美與ニ顏延之一爲ニ江左第一一世稱ニ顏謝一與ニ族弟惠連一爲ニ刎頸交一每レ對之輙得ニ佳語一嘗於ニ永嘉西堂一思レ詩不レ就忽夢ニ惠連一即得下池塘生ニ春草一之句上常云此語有ニ神助一宋元嘉中爲ニ永嘉守一郡有ニ名山水一肆レ意遨遊尋レ山陟レ嶺必造ニ幽峻一登躡常著ニ木屐一上レ山去ニ前齒一下レ山去ニ後齒一與ニ何長瑜等一爲ニ四友一小字客兒襲ニ父爵一封ニ康樂公一世稱ニ謝康樂一　通鑑綱目曰宋元嘉十年謝靈運有レ罪誅靈運好爲ニ山澤之遊一從者數百人伐レ木開レ徑百姓驚擾或表ニ其有ニ異志一靈運詣レ闕自陳上以爲ニ臨川內史一靈運遊放自若爲ニ有司一所レ糾遣レ使收レ之靈運執ニ使者一興レ兵逃逸作レ詩曰韓亡子房奮秦帝魯連恥追討擒レ之上愛ニ其才一降レ死徙ニ廣陵一已而棄市　三體詩黄滔遊ニ東林寺一詩翻譯如ニ曾見一白蓮開滿レ池註廬山記謝靈運即ニ東林一翻ニ涅槃經一曰鑿レ臺植ニ蓮池中一詩意謂見ニ白蓮一猶レ見ニ靈運一　正法華添品法華芬陀梨法華妙法華などいひて五度の飜譯なれども靈運が名はあらず了譽も靈運法華の執筆なりといふされど了譽は兼好より後の世の人なれば是もおぼつかなし今の世に行はるゝ妙法華は晉の羅什の飜譯にて其弟子僧叡が筆受なり天竺の梵語を唐土にて通事するを飜譯といふそれを唐字にかきうつすを筆受と云涅槃經は靈運が筆受也淨土宗の了譽が直牒の第九に惠遠法師衆をあつめ四十八日念佛を行す淵明靈運其衆にましはらんとするを淵明をばゆるし靈運をばゆるさず人々あやしみて淵明は酒をたしみをろかに放逸たり靈運は有智精進の人なり何とてかれをいれこれをいれざるといふ惠遠頌を作ていはく靈運不レ入心雜起故淵明競引心專一故といへり靈運は法華執筆の者なり雜起心ありて餘行を修するをきらふ故なり　高僧傳晉惠遠見ニ廬峯清靜一足ニ以息一レ心始住ニ龍泉精舍一刺史桓伊乃爲レ遠於ニ山東一立ニ房殿一即東林也絕塵淸勝之賓並不レ期而至彭城劉遺民豫章雷次宗鴈門周續之新蔡

畢穎之南陽宗炳等凡百有二十三人並棄レ世遺レ榮依レ遠遊止廬山記遠法師居ニ廬阜一三十餘年影不レ出レ山跡不レ入レ俗送レ客過ニ虎溪一虎輙鳴號昔陶元亮居ニ栗里一山南陸脩靜亦有道之士遠師嘗送ニ此二人一與語道合不レ覺過之因相與大笑今世傳ニ三笑圖一三體詩註云高僧傳劉遺民雷次宗等依ニ遠公於廬山一遠於ニ精舍无量壽像前一建レ齋立レ社期レ生ニ西方一陶元亮訪ニ遠公一聞レ鐘有レ省攅レ眉而去　事文類聚前集云謝靈運求レ入ニ淨社一遠師以ニ心雜一止之范寗在ニ豫章一遠師請レ入レ社范不レ能レ從　廬阜雜記遠師結ニ白蓮社一以レ書招ニ淵明一陶曰弟子性嗜レ酒若許レ飲即往矣遠許之遂造焉因勉令レ入レ社陶攅レ眉而去嵩沖靈抄書記謝靈運欲レ入ニ遠公社一遠公拒之曰子髮續(クロク)而鬚美面與レ身戾非ニ令(ヨクスル)レ終之相一請多行ニ陰德一戒飭三年而後可靈運怒曰學レ道在レ心安以レ貌耶遠笑而不レ答後靈運果如ニ遠所一レ料廬循反遠與レ之執レ手言笑知レ人之鑑何明ニ於靈運一而暗ニ於循一如レ此耶　黄子耕題ニ謝靈運墓一詩曰心雜難レ爲ニ蓮社友一翻レ經背與ニ俗流一通可レ憐一對登レ山履埋在ニ池塘芳草中一風雲の思ひ靈運風月を吟詠するといふのみにあらず漢の

二十八將を風雲の將と云ごとく龍吟虎嘯の心ありて時に勢に乘して功名を立てんと思ふ義也　謝靈運は昔の謝奕か孫にして文章も妙也然れども宋の劉裕か昔の代をうばへるにそのまゝ仕へて官位をうけたり其ほしいまゝに遊山翫水して民のわづらひをなす故に人うたがひて謀反をするとつげければ宋の君靈運をとらへんとする時終に兵をおこして晋のために仇をむくはん事張良が韓のためにするごとくならんと心にみづから思へどすでに宋につかへたればいかんぞ張良がこゝろざしに同じからんやはたして靈運とらへられてころされぬ淵明は晋の隱逸にして滿簡の淸風宋の年をけづる我道に心ざしある者なりかの遠法師此二人をよく見しる事まことに奇特に侍る遠師もたゞの人にあらず僧中の英俊なり佛經の世におこなはるゝもはじめは四十二章經などのたぐひにてたゞ緣業をのみときしに惠遠支遁僧肇より莊老の肺肝を廣長舌の根本とすたとひ吾道とさす所かはるとも方寸に見る所は守得てあるべしみづから心をしるゆへに人をしる事もくらからぬにやされども廬循を友なひて

したしかりしが後に廬循謀反しぬ奈何ぞ遠師よく靈運をしりて廬循をしる事のくらきや是又おぼつかなし了譽がいふ所は人を專修の道に引入んとて靈運は雜心を起し淵明は餘行を修せずといふ如何ぞ淵明を知事の井底の蛙なるや淵明はをろかならず了譽をろかにして淵明をしりがたし其出處進退道に近き者なれば廬山におもむくとも柳下惠がかたはらをけがさず韓退之が衣をとゞむる心有べし靈運が蓮社に入んと求るは賓王智度が鐵衣をぬぎて僧衣をきるに同しかるべし富貴をねがふ志をとげずやむ事を得ずして一旦方外にまじはらんとする者也其人がらを遠師したひてひくもありきらひてこばむもありすでに飮酒戒を破り虎溪の橋をすぎて三笑の名あれど淵明後には眉を攅て歸り去時は其心又遠師がよくしる所にあらずまして了譽が云如く淵明をおして無智の念佛申の人といはんや最愚也　暫くもこれなき時　飮食便利等無益の事なきは死人に同しと也　止ん人は止修せん人は修せよとなり　止は止觀修は修行也是觀行の二つ也

高名の木のぼりといひしをのこ人をゝきてゝたかき木にのぼせて梢をきらせしにいとあやうくみえしほどはいふこともなくておるゝ時に軒長ばかりに成てあやまちすな心しておりよと言葉をかけ侍しをかばかりに成ては飛おるゝともおりなん如何にかくいふぞと申侍しかば其事に候めくるめき枝あやうきほどはをのれがをそれ侍れは申さずあやまちはやすき所に成てかならす仕る事に候といふあやしき下﨟なれとも聖人のいましめにかなへり鞠もかたき所を蹴出してのちやすく思へば必落と侍るやらん

高名の木のぼり　都盧の身輕くして高木にのぼること西京賦に見えたり又上竿奴と云は高き竹木のうへにのほる物なり日本にてのくもまひの類也

人をゝきてゝ　掟の字也法度をおしゆるをいふ

聖人のいましめにかなへり　易繫辭曰君子安而不ㇾ忘ㇾ危存而不ㇾ忘ㇾ亡治而不ㇾ忘ㇾ亂是以身安而國家可ㇾ保也

鞠もかたき所を蹴出して　韻會鞠居六切說文蹋鞠也徐按蹋鞠以ㇾ革爲ニ圓囊一實以ニ毛髮一蹙踘爲ㇾ戲亦曰蹋鞠古今注黃帝習ニ兵之勢一劉向別錄蹴鞠黃帝造以練ニ武士一或云起ニ戰國一漢霍去病傳穿域蹋鞠注服虔曰穿ㇾ地作ニ鞠室一也

雙六の上手といひし人に其行をとひ侍しかばかたんとうつべからずまけじとうつべきなりいづれの手かとく負ぬべきと案じてその手をつかはずして一めなりともをそくまくべき手につくべしといふ道をしれる敎身を治め國を保ん道も又しかなり

双六　說文博局戲六着二十二棊一古者烏曹作レ博丹文子曰博塞二關塞之宜一得二周通之路一　聲譜云博陸采名也陳思王製二雙陸局一置二骰子二一至二唐末一有二葉子之戲一未レ知二誰置一遂加二骰子一至レ六骰合レ作レ投投擲之義今作レ骰非　道をしれるをしへ　羊をかうを見て身をおさむる事をしり釣をたるゝを聞て國家を治ることをしり木をうゆる道を聞て民をおさむるてだてをさとる雙六の道にても又さも有へし太公が兵法にかつことなけれども又まくる事なしといふを武王にかたり孟子が人にかたんとすると人をおそるゝ事なきとを以て北宮黝孟施舍が勇にたとふる此段にあわせて見ば淺よりふかきに至るべき也欣賞全編に中華幷に四夷の雙陸を載たり其中に日本國の雙陸をもあげて圖說をしるせり

圍棊双六好てあかしくらす人は四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふとあるひじりの申し事耳にとゞまりていみしくおぼえ侍る

圍棊　博物志堯造二圍棊一以敎二子丹朱一或云舜以二子商均愚一故作二圍棊一以敎レ之其法非二智不一レ能也論語陽貨篇飽食終日無レ所レ用レ心難矣哉不レ有二博奕者一乎爲之猶賢二乎已一　孟子博奕好二飮酒一不レ顧二父母之養一二不孝也　四重五逆　四重は五戒の内飮酒を除て殺盜婬妄を云律に波羅夷罪と云唐には斷頭罪ト云也人の頭をきれば再び生ぜざるがごとく此四重罪を犯せば懺悔しても滅せざる也　五逆罪は殺レ父殺レ母殺二阿羅漢一破二和合僧一出二佛身血一

それ基圍の道は堯舜の時より有といひ傳ふれどもまことしくもあらずされど陸象山が圍棊を見て河圖の數なりといへれば無智の者のくはしくしがたきやうにうたがはしけれど胡旦がやすき道とすれば聰明なる者もよくせずかたき事かとすれば下愚小人も上手なるありといへるまのあたりあること也聖人のいましめに博奕をだもするはやむにまされりとあるは終日いたづらにあらんよりは博奕なりともせよといへるやうなれとさにはあらず聖人博

奕を人にせよと教るにあらずとりわき心を用る事なき者の非をかさんとてかくいへるうちにをのづから博奕をはなはだにくみきらふ心あるなり
明日は遠國へをもむくべしときかん人に心閑になすべからんわざをは人いひかけてんや俄の大事をもいとなみ切になげくこともある人は他のことを聞入ず人の愁喜をもとはずとはすとてなどやとうらむる人もなしされば年もやう／＼たけ病にもまつはれ況世をものがれたらん人また是におなじかるべし人間の儀式いづれの事か去難からぬ世俗のもだしがたきに隨てこれを必とせはねがひもおほく身もくるしく心の暇もなく一生は雜事の小節にさへられてむなしくくれなん日暮塗遠し吾生既に蹉跎たり諸緣を放下すすべき時也信をも守らし禮義をも思はじ此心をもえざらん人は物狂ともいへうつゝなし情なしとも思へ毀ともくるしまじ譽ともきゝ入し

日くれみちとをし　史記伍子胥掘二楚平王墓一出二其尸一鞭レ之三百曰吾日暮塗遠吾故倒行而逆施之註子胥言心在レ復レ讎常恐下且死不上レ遂二本心一今幸而報豈論二道理一乎譬如二人行前途尙遠而日勢已暮一故其在二顚倒疾行一逆レ理施レ事何得冀二吾順理一乎　史記王父偃曰吾日暮途遠故倒行暴施之　蹉跎　韓文烏乎吾意其蹉跎註曰不レ遂二其意一韻會蹉跎失レ時也一曰跌也異本に蹉蹋とある非なり　信をも思はし禮義をもおもはじ　莊子盜跖篇比干剖レ心子胥抉レ眼忠之禍也直躬證レ父尾生溺死信之患也鮑子立乾勝子不二自理一廉之害也孔子不レ見レ母匡子不レ見レ父義之失也此上世之所レ傳下世之所レ語以爲士者正二其言一必二其行一故服二其殃一離二其患一也

此段兼好が好む所の佛老の餘論也彼信をすて小節とし禮義をもて末事とする故に一大事の根本は佛法なれば諸緣をすてゝ世俗の毀譽を心にかくべからずと也儒者の道にも尾生がごとくなり信をきらひて君子は諒あらずと云大人は言必信あらずと云非禮の禮非義の義をせずといへどそれは名になづみ跡にかゝはりて變に通ぜぬ愚人をいましむることなれ如何ぞ忠信をまもらず禮義を思はずして道にいたらんや仁義禮樂を駢拇贅疣として人の天性にあらずと云莊子が過高の論いま更めづらしからずされど兼好が筆も人の好て世にもてあつかへは

道心さへあらば信も禮義も失ひてもくるしからぬかと思へば惡に入やすき故にことはりあかすなり毀ともくるしまし　莊子逍遙遊擧レ世而譽レ之而不レ加レ勸擧レ世而非レ之而不レ加レ沮定ニ乎內外之分ニ辨ニ乎榮辱之境ニ斯已矣

四十にもあまりぬる人の色めきたる方をのつからしのびてあらんはいかゝはせんことに打出て男女の事人のうへをもいひたはるゝこそにげなく見苦しけれ大かた聞にくゝみぐるしき事老人のわかき人にまじはりて興あらんと物いひゐたる數ならぬ身にて世の覺えある人をへだてなきさまにいひたるまづしき所に酒宴このみ客人に饗應せんときらめきたる

饗應　あるしすとよめり　八雲に食物まふけしたるをばあるじと云

徒然草野槌上之八

今出河のおほい殿嵯峨へおはしけるに有栖河のわたりに水の流たる所にてさい王丸御牛を追たりけれはあかきの水前板までさゝとかゝりけるを爲則御車のしりに候けるが希有の童かなかゝる所にて御牛をばをふ物かといひたりければおほい殿御氣色あしくなりてをのれ車やらむ事さい王丸にまさりてえしらじ希有の男也とて御車に頭をうちあてられけりこの高名のさい王丸は太秦どのゝ男料の御牛飼ぞかし此太秦殿に侍りける女房の名ども一人はひさくち一人はことつち一人ははふはら一人はをとうしとつけられけり

今出河のおほいとの　菊亭兼季公也西園寺太政大臣實兼公三男也　有栖川　歌枕に云有巢川本院ノ邊ちはやふるいつきのみやの有栖河まとつとゝもにぞかげはすむべき京極前太政大臣右二條大皇大后宮賀茂のいつきと申ける時　本院にて松枝映レ水といふ心を讀給へるとなん又云「きみまさぬみそちはあれてありす川いむすかたをもうつしつる哉西行法師右齋院お

りさせ給て本院のまへをすぎけるにおりておはしましける處へ女房に申つかはしけるとなん　一葉抄云伊勢の齋宮の野宮は嵯峨の有す河にあり賀茂の齋院の野宮は紫野に有　あかきの水　足がきの水也　太秦殿　信清公也號坊門又號太秦内府關白道隆公の後也　女房の名ども　其名義未詳凡人物の名にその義をわきまへかたきことあり刀を孟勞といひ矢を金僕姑といひ撾を骨朶といひ魚を姬隅といひ餅を牢丸と云の類すくなからず莊子に載する人の名どもみな寓言なれば齧缺王倪被衣意而子の類しひて解釋せず又佛經にも不飜の梵語ありことに元朝の人の名に胡語多し鐵木眞を成吉思といひ達魯花赤窩闊臺弘吉剌速不臺奥都剌合蠻失烈門忽必烈兀良哈歹阿藍答兒阿里不歌八合思八不魯花阿合馬阿里海牙なんど云の類あげてかぞふべからず蒙古の音あれどもその字なきゆへに中華の音のちかき物をとりてその名字とす日本にても上古神代の詞此類尤多し山は人の口より出といへど天を天となづけ地を地と名づくるの理自然なり自然の音聲あれば則自然の言語ありと知べし文字の母ありて子をうむごとく言語にも母ありて又子をうむ故に千言萬語となるなり近比俗説に語りしはあるものゝ名をえんようはく（緣をよくはく故也）かんようし（酒のかんをよくする故なり）めいとうし（妻を愛する故に）と號すといひ傳へたり

宿河原といふところにてぼろ／＼おほくあつまりて九品の念佛を申けるに外より入來るぼろ／＼のもし此御中にいろをし房と申ぼろやおはしますと尋ければ其中よりいろおしこゝに候かくの給ふは誰と答ればしら梵字と申者也をのれが師なにがしと申し人東國にていろをしと申ぼろにころされけりと承りしかば其人にあひ奉りて恨申さばやと思ひて尋申也といふいろをしゆゝしくも尋おはしたりさる事侍りきこゝにて對面し奉らば道場をけがし侍るべし前の河原へまいりあはんあなかしこわきさしたちいづかたをも見つぎ給なあまたのわづらひにならば佛事の妨に侍るべしといひ定て二人河原へ出あひて心行ばかりにつらぬきあひて共に死にゝけりぼろ／＼といふもの昔はなかりけるにや近世にぼろんじ梵字漢字など云ける者其はじめ也けるとかや世をすてたるに似て

我執ふかく佛道をねがふに似て闘諍をこと〻す放逸無慙の有さまなれども死を輕くして少もなづまざるかたのいさぎよく覺えて人のかたりしま〻にかきつけ侍る也

宿河原　攝津國にあり　ぼろ〳〵　暮露と書といへども梵論と書べきなり梵字漢字なといふ名もあれば也ぼろ〳〵の草紙一巻あり虚空坊といふもの身の長七尺八寸力強しえかきかみぎぬに一尺八寸の太刀をはきひるまきの八角棒をよこたへ一尺五寸の高屐をはき髮長く色黒くしてぼろと云者になり一人の美女を妻とし同行三十人諸國をありくといへり其後に薦僧と云もの僧とも見えず俗とも見えず山伏ともみえず刀をさし尺八を吹せなかにむしろをおひ道路をありき人の門戸に立て物を乞もらふ是ぼろ〳〵の流也と云傳へたり

此段ぼろ〳〵の世をすて〻佛道をねがふやうなれども我執ふかく闘諍をこのむことをいへり誠にその口を餬ひありきて朝に一錢を得て暮に一溢をおさむる丐人なり一旦溘死することを何ともおもはぬ故に闘諍をこのみて飛蛾の火に入がことし佛道を修すると云名はあれど其弊如此に至ることも世敎のためを思はざるひがことよりおこれりされどぼろ〳〵が其師のために仇をむくひて死を快くすることのいさぎよきを兼好がとれる此段の本意也世の人の君父の仇を忘れ武夫のひくましき處をにげはしるはぼろ〳〵の有さまにおとれり

寺院の號さらぬ萬の物にも名をつくる事むかしの人はすこしも求ずたゞありのま〻にやすく付ける也此比はふかく案じ才覺をあらはさむとしたるやうにきこゆるいとむつかし人の名もめなれぬ文字をつかむとする益なき事なり何事もめづらしきことをもとめ異說このむは淺才の人のかならずあることなりとぞ

友とするにわろき者七あり一には高くやんごとなき人二にはわかき人三には病なく身つよき人四には酒を好む人五にはたけく勇る兵六には虚言する人七には慾ふかき人よき友三あり一には物くる〻友二にはくすし三には智慧ある友

此段朋友に善惡ある事をいふ論語に益者三友損者三友とあるに本づけり高くやむことなき人は上交すれば必諂ふ事あり萬章友を問時に長貴を挾んで

友たらずといへりわかき人は血氣さかんなる故に陸放翁が少年豪英の交は同參の夜雨にしかずといへる心あるべし病なく身つよき人は寒暑をおそれず又飲食をも恣にする故に他人をそこなふ也されども我におゐては孟襄陽が多病故人疎といへると思ふべき也酒をこのむ人は事のみだれをなして僻事出來する事おほかりたけく勇る兵は一朝のいかりに身をわすれて父母の憂をのこし暴虎憑河の悔もあるべし虚言する人は萬事たつべからず朋友信あるは五倫の常也慾ふかき人は久しく睦びかたし勢利の交君子のにくむ所なれば古人是を醴のごとしといふ論語にも放ニ於利一而行多レ怨といへり是皆友とするにあしき者なりよき者をいはゞ物くるゝ友車馬輕裘ともにやぶるともうらみなからんと云は子路がねがひにあらずやくすしをいはゞ東坡山谷は龐安常をともなひ朱文公は郭長陽夏醫にまじはり吳幼淸は藏同甫をしるの類すくなからず智惠ある友は童蒙の求に應じ又たがひに講磨濡沾のたすけあるべし

鯉のあつもの食たる日は鬢そゝけずとなん膠にもつくる物なればねばりたるものにこそ鯉ばかりこそ御前にてもきらるゝ物なればやむごとなき魚なり鳥には雉さうなき物也雉松茸などは御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず其外は心うき事也中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に雁の見えつるを北山入道殿の御覽じて歸らせ給ひてやがて御文にてかやうの物さながら其姿にて御棚にゐて候し事見ならはずさまあしきこと也はか〱しき人のさふらはぬゆへにこそなど申されたりけり

鯉の羹食たる日は鬢そゝけす　魚を膠にねるを鰾といふ瑣碎錄に鯉魚膠を墨に磨て身にさせば青黑にして愛すべしとあり其上周詩にも炰レ鼈膾レ鯉といひ豈其食レ魚必河之鯉と云魯の君より孔子へ鯉魚を贈事も有鯉魚やんごとなき物と思る誠に佳魚也　雉　儀禮相見之贄各執レ雉大夫執レ鴈注雉取ニ其守レ介不ニ失レ節鴈取ニ其候レ時而行一也皆禮納采用レ鴈　松茸　本草綱目に菌蕈の類多し香蕈とあるは松茸の類なるべしたけくさびらを耳と云日本に茸の字をかくは耳の字を誤れるなるべし貞和集有ニ松茸頌一茸字書たり鹿茸の茸の字義を以て見れば

松茸とも書べき歟　中宮　後探草院の中宮也　北山入道殿　西園寺の實氏公也常盤井相國と號す則中宮の父也　夫雉と鴈とは堯舜三代の時より相見禮に用る物也舜典に二生一死と云へるは卿大夫はいける羔雁をとり士は死る雉をとる也鴈は時をたがへす行列の次第を亂ざるにとる雉は死る時けなげなるにとる宗廟にそなふる時は疏趾と名づく山梁の雉をば孔子も時哉との給へり又雉を華虫と名づけて舜の衣にゑかき又禹貢に羽畎夏翟とあるは羽山より五色の雉を奉りて其羽を旌旗車服の飾とする也是もやんごとなき鳥にて侍る然ども鴈は雉よりまされる故に大夫は鴈をとりて君に見へ士は雉をとりて禮をなすなり此段に耆をば用ひ鴈を用ふることをばきらふ是日本の故實なるべししからずば北山入道殿の心は君子は庖厨をさくる義ありていへるにや

鎌倉の海にかつをと云魚は彼さかひにはさうなき物にて此比もてなすもの也それも鎌倉の年よりの申侍しは此魚をのれらわかゝりし世まではは か／＼しき人の前へ出る事侍らざりき頭は下部もくはずきりて捨侍りしもの也と申きかやうの物も世の末になれば上さままでも入たつわざにこそ侍れ

鰹と云字本草綱目韻書等分明ならず　海篇心鏡に鰹音堅大鮦也とあり　萬葉集第九水江之浦島兒之堅魚釣鯛釣矜及七日と云へり又式部大輔石上堅魚朝臣といへる人の歌も同第八にのれり倭名集にも鰹魚加豆乎とある時は鰹とも堅魚とも書なり然れば昔より其名かくれなき魚也又此魚をほしかためて調味の料とする事も久しき事なるべし兼好が時代に貴人などの生にて食ことをあやしみけるにや

凡堅魚のみにあらず昔食て今食はぬ物あり昔食はずして今食もあり昔ありて今なきもあり昔なくて今あるもあり又土地によりて有無ありむかしも今もなくて中頃ありし物もあり時代によりて用捨あり草木鳥獸萬物に至るまで皆かくのごとし

唐の物は藥の外はなくとも事かくまじ書共は此國におほくひろまりぬればかきもうつしてんもろこし舟のたやすからぬ道に無用の物どものみとりつみて所せくわたしもてくるいとをろか也遠物を寳とせずとも又得がたき貨をたうとまずとも文にも侍るとか

や
唐の物は藥の外　龍腦麝香牛黄などの類日本になき物なり人參も近代は朝鮮より來貢す延喜式典藥寮には人參も日本諸國の土産に往々ありといへどもいつの頃よりかとめ失ひけん今は日本になし
ふみどもは　傳教大師は一切經をさへ書寫されたり兼好もふみともはかき寫してんと云されとも中華の書ども本朝にわたらぬもおほかり又代々の名儒秀才の撰集文章たらずあるなれば見まくほしき事也
唐船の　尚書盤庚篇若レ乘レ舟汝弗レ濟臭ニ厥載一　唐玄宗開元二年胡人上言海南多ニ珠翠奇寶一因言ニ市舶之利一又欲下往ニ師子國一求中靈藥醫嫗上上命ニ楊範臣一往求之範臣奏曰彼市舶與ニ商賈一爭レ利殆非ニ王者之體一胡藥之性中國多不レ能レ知況於ニ胡嫗一豈宜レ寘ニ之宮掖一此胡人眩惑求レ媚無レ益ニ聖德一上從レ之通鑑
遠き物を寶とせず　尚書旅獒篇不レ寶ニ遠物一則遠人格　老子經曰不レ貴ニ難レ得之貨一使ニ民不レ爲レ盜
養ひかふものには馬牛つなぎくるしむることいたましけれどなくてかなはぬものなればいかゞはせん犬はまもりふせぐつとめ人にもまさりたれば必有べしされば家ごとにあるものなれば特更にもとめかはずとも有なん其外の鳥獸すべて用なきものなり走る獸は檻にこめくさりをさゝれ飛鳥は翅をきり籠に入られて雲をこひ野山をおもふ愁止時なし其思我身にあたりて忍がたく心あらん人是をたのしまんや生を苦しめて目をよろこばしむるは桀紂が心也王子猷が鳥を愛せし林にたのしふをみて逍遙の友としきとらへくるしめたるにあらず凡めづらしき禽あやしき獸國に育はずとこそ文にも侍るめれ
養ひかふもの　周禮六畜注獸可レ畜者六嘼牛馬羊犬豕鷄養レ之曰レ嘼用レ之曰レ牲又云在レ野曰レ獸在レ家曰レ畜々與レ嘼同許救反　莊子秋水篇何謂レ天何謂レ人曰牛馬四足是謂レ天落ニ馬首一穿ニ牛鼻一是謂レ人郭象注曰人可レ不ニ服レ牛乘一馬乎服レ牛乘レ馬可レ不三穿ニ絡之一乎牛馬不レ辭ニ穿絡一者天命之固當也苟當ニ乎天命一則雖レ寄ニ之人事一而本在ニ乎天一也　希逸口義云牛馬四足得ニ於天自然一者不レ絡不レ穿將無レ所レ用此便是人心一段事
犬はまもりふせぐ　金樓子陶犬無ニ守レ夜之警一瓦雞無ニ司レ晨之益一東坡云

養レ猫以捕レ鼠不レ可三以レ無レ鼠而養二不レ捕之猫一畜レ犬以防レ姦不レ可三以レ無レ姦而畜二不レ吠之犬一　家ごとにある物なれば　孟子　雞鳴狗吠相聞而達二乎四境一　老子云鄰國相望雞犬之音相聞ゆ　走る獸は　莊子天地篇因可三以爲レ得乎則鳩鴞之在二於籠一亦可二以得一　在二纏繳之中一而自以爲レ得則是罪人交レ臂歷レ指而虎豹在二於囊檻一亦可二以爲一レ得矣　司馬遷報二任少卿一書曰猛虎在二深山一百獸震恐及三其在二檻穽之中一搖レ尾而求レ食　東坡詩云　鳥因不レ忘レ飛馬繫常念レ馳　生を苦めて　夏桀が無道にして百姓をやぶり妹喜を愛して瑤臺をつくり牛飲するを見てよろこび關龍逢を殺す又殷紂が妲己を寵して婦人の云事にしたがひ鹿臺鉅橋をつくりて天下の賊をあつめ狗馬奇物を宮室にみちをき酒池肉林をついやして長夜の飲をなし熨斗炮烙の刑を行ひて人民をやきころし朝に涉の脛をきり賢人の心をさきはらめる女をさいて其胎内を見るこれみな生をくるしめて目をよろこばしむる也果して桀紂身亡びて國家を失ふ　王子猷が鳥を愛せし　章孝標竹詩院籍嘯場人步レ月子猷看處鳥棲レ烟　此句朗詠にのせたり王徽之字子猷義之が子也風流の人也晉に仕へて爲二黄門侍郎一常に竹を愛してうへて名づけて此君と云此詩の意は其竹間の烟に鳥のをのづから遊棲するを見て愛する義なり　めづらしき鳥　尙書旅獒篇珍禽奇獸不レ育二于國一

人の才能は文あきらかにして聖の敎をしれるを第一とす次には手かく事むねとすることはなくとも是をならふべし學問に便あらんためなり次に醫術を習べし身を養ひ人をたすけ忠孝のつとめも醫あらずは有べからず次に弓射馬に乘こと六藝に出せり必是をうかがふべし文武醫の道誠にかけては有べからずこれを學ばんをはいたづらなる人といふべからず次に食は人の天也よく味を調しれる人大なる德とすべし次に細工萬に要おほし此外の事ども多能は君子のはづる處なり詩歌にたくみに糸竹に妙なるは幽玄の道君臣これをおもくすといへども今の世にはこれをもちて世を治る事漸をろかなるに似たり金はすぐれたれども鐵の益おほきにしかざるがごとし

人の才能は文あきらかにして　六經四書をよみあきらめて聖賢のみちをしるを第一とす其道は君臣

父子夫婦兄弟朋友の間にそなはりて其をしへは仁義孝弟忠信にすぎす其仁義はもとより人の心の中にあり此心は古今をへだてず貴賤をわかたず堯舜も人と異らず人の道をつくしきはむるを聖人と云也　手かく事　書史會要にのする所多しといへ共王羲之趙子昂をはじめ名を得てすぐれたる人すくなし其三昧に入ざれば神妙の名をとる事成難し日本にても弘法道風佐理行成其外すぐれたるは多からすよくすることはならずとも俗にならぬやうにかきならふべきなり　醫術を習ふべし　古人多く醫術を學ぶ晋張華梁陶貞白唐孫思邈か類全く醫者にはあらず學問の上にかねて醫を學ぶ者也宋の東坡夢溪もよく醫をしれり其あらはす書蘇沉良方是也　忠孝のつとめも醫ならずば　小學曰伊川先生曰病臥ニ於牀ニ委ニ之庸醫ニ比ニ之不慈不孝ニ事レ親者亦不レ可レ不レ知レ醫　弓射馬乘事　周禮注禮樂射御書數謂ニ之六藝ニ五射一白矢二參連三剡注四襄釋五井儀　五御鳴和鸞逐水曲過君表舞交衢逐禽左　六藝　一吉凶軍賓嘉五禮　二雲門咸池大韶大夏大濩大武六樂　三五射在レ上四五御在レ上五象形指事會意諧聲轉注假借六書六方田粟布衰分少廣商功均輸盈朒方程句股九數　數　くわしく周禮注疏小學纂疏に見えたり　食は人の天也　帝範務農篇夫食爲ニ人天ニ農爲ニ政本ニ倉廩實則知ニ禮節ニ衣食乏則忘ニ廉恥ニ　史記酈食其傳云王者以レ民人爲レ天而民人以レ食爲レ天索隱曰出ニ管子ニ　論語大全に此語を引て云天者人資而生者也　郷黨篇に聖人飲食の品節をしるし周禮儀禮禮記などにも膳羞の事を詳にす誠に飲食の味をしりてよく調る時はをのづから口より入病有べからず若口腹を恣にするならば易牙が淄澠のあへるをしるほどなりともかへりて子を烹の羹をすゝめて國のみだれをなす事も出來すべし　次に細工　唐虞の代には垂といへる人百工の事を司どれり周禮には考工記をのせてもろ〳〵の器をつくれる法を記す後世の細工といへるは手にてする事の拙からぬを云或は書かき或は樂器を作るもあり　多能は君子の恥る所也　論語子罕篇太宰問ニ子貢ニ曰夫子聖者與何其多能也子貢曰固天縱之將聖又多能也子聞レ之曰太宰知レ我乎吾少也賤故多ニ能鄙事ニ君子多乎哉不レ多也　詩歌に巧に絲竹

に妙なるは　文選十六思舊賦序嵆康博綜技藝一於ニ絲竹一特妙　幽玄の道　八雲抄和歌に幽玄躰有

此段詩歌管絃を以て今の世を治難しと云其理なきにあらず古の詩歌は人の心よりおこりて禮儀にとゞまる貫之が歌の詞は人の耳にちかしといへどそれは上代の事也今の世には其義幽玄也深遠なりとてきゝしれる人すくなしまして音樂の道律呂の調いよ／＼人の耳にとをしいかんぞ人の心を感動して善にすゝめ治世の風にいたらしめんや子游武城を治るに禮樂をもちふ孔子絃歌の聲をきゝて割レ鷄焉用ニ牛刀一と云武城は小邑也大國を治る法を用るに及ばずと也兼好が今世の詩歌絲竹は金鐵のたとへ也といへる牛刀の心あるにやされど禮樂もとより人の心なり人に古今あれど心に古今なしよく用る物は今の樂も古の樂のことし詩歌も又しかり君としてよくおしへば誰かしたがはさらん風を移し俗をかへん事日をかぞへてまつべし此ゆへに子游が道を學べば君子は人を愛し小人はつかひやすしといふを孔子ゆるして牛刀の詞をみづから戯ふれなりとの給へり

無益のことをなして時を移すをおろかなる人とも僻事する人とも云べし國のため君のために止ことを得ずしてなすべき事おほし其あまりの暇幾ならず思ふべし人の身に止ことをえずしていとなむ所第一に食物第二にきるもの第三に居る所也人間の大事此三にすぎず饑ず寒からず風雨にをかされずして閑に過すを樂とすたゞし人皆病あり病にをかされぬれば其愁しのびがたし醫療をわするべからず藥をくはへて四の事求得ざるをまづしとす此四かけざるをとめりとす此四の外をもとめいとなむを驕とす四の事儉約ならば誰の人かたらずとせん

第一食物　鶖座新書云居服食三等湯東谷語レ人曰學者居ニ中等屋一衣ニ下等衣一食ニ上等食一何者茅茨土階非ニ今所レ宜瓦屋八九間僅藏ニ圖書一足矣故曰ニ中等屋一衣不ニ必綾羅錦繍一也夏葛冬布僅適ニ寒暑一足矣故曰ニ下等一食至ニ於飲食一則當下遠求中名勝之物上山珍海錯名茶法酒物々備庶不レ爲ニ凡流俗士一故曰ニ上等食一　たゞし人皆病あり　一切の人既にかたちあれば疾病はなくてかなはざる物也故に孔子も齋戰疾の三のものをつゝしめり

此四つかけざるを　食と衣と居處と藥とを合せて四つとす　杜甫詩分類七多病所ヽ須唯藥物微軀此外更何求

此段衣食居僅に足てしづかに過すを樂とすといへり外をねがひ世を貪らざるところあらまほしき事也然れどものぼりて論せば簞瓢陋巷其樂をあらためず別に指所あり衣食居の三等をたのしむにはあらず德の身を潤す事富の屋をうるをすがごとし若世を貪らずと云て禮もなく義もなくば如何ぞ聖門の樂をしらんされば於陵の陳仲子を蚯蚓なりと孟子の云へるは此意なるべし

是法々師は淨土宗にはぢずといへども學匠をたてずたゞ明暮念佛してやすらかに世を過すありさまいとあらまほし

是法々師　新千載集第十八雜歌下是法々師「のかれてもおなしうき世と聞物をいかなる山に身をかくさまし又新後拾遺集第八秋歌「夜もすがら山おろし吹て衣手のたなかみ川にこほる月かげ

人にをくれて四十九日の佛事に或聖を請じ侍しに說法いみじくしてみな人淚をながしけり導師歸て後聽聞の人どもいつよりもことにけふはたうとく覺え侍りつると感じあへりし返事に或者の云何とも候へあれほど唐の狗に似になんうへはといひたりしにあはれもさめておかしかりけりさる導師のほめやうやはあるべき

此段人をほむることあるにかたへの物のおろかに思慮もなく卒爾にさし出あしきたとへをとりて云が或はわざと人をいひおとさんとてほむる詞のさきをおる類なるべし此段と下の段とを一つにしたる本有いかゞ侍らん

又人に酒すゝむるとてをのれまづたべて人にしゐ奉らんとするは劒にて人をきらんとするに似たる事也二方にはつきたるものなればもたくる時先我頭をきる故に人をばえきらぬなりをのれまづ醉てふしなば人はよもめさじと申き劒にてきりこゝろみたりけるにやいとおかしかりき

人に酒をのませんとておのれ先醉臥人をきらんとする劒にておのれ先みづからきるこのたぐひなきにあらず近比或人の刀をこゝろみんとてむくろをきるにつかにておのれかへのこをつきて死入もの

あり又かま鎗の石つきにて池の龜をつかんとておのれが頸をきりおとすありとかたりき荘子に蟬は樹陰を変して蟷螂の來るをしらす蟷螂に蟬をとらんとて異鵲黄雀の逐來るをしらす鵲雀は蟷螂をくらはんとて荘子か彈丸をしらす荘子は鵲雀をうたんとて露にぬれ荊棘におちいることをしらずとあり

ばく地の負きはまりて殘りなくうちいれんとせんにあひてはうつべからずたちかへりつゞけて勝べき時のいたれるとしるべし其時をしるをよきばくちといふ也と或者申き

ばくち　史記魏世家安釐王四年予二秦南陽一以和蘇代曰王獨不レ見中夫博之所三以貴二梟者上便則食不レ便則止矣是何王之用レ智不レ如レ用レ梟也注博頭有レ刻爲二梟鳥形一者擲二得梟一者合レ食二其子一若不レ便則爲二餘行一也　綱鑑注云博即局戯以二五木一爲レ骰有二梟盧雉犢塞一五者爲二勝負之采一故人刻二一骰一爲二梟鳥形一得レ之爲二上勝一也便宜也　晋書袁耽字彦道桓温少時遊二於博徒一資産俱盡求レ濟於耽一々變レ服懷一布帽一隨レ温與二債主一戯耽素有二藝名一債者不二相識一謂曰卿當レ不三辨二作袁彦道一也遂就レ局十萬一擲直上二百萬一耽投レ馬絶叫以二布帽一擲レ地曰竟識二袁彦道一否其通脱如レ此　馬はばくちの籌也　馬と名づくる事は象戯の馬のごとし

あらためて益なき事はあらためぬをよしとするなり

論語先進篇魯人爲二長府一閔子騫曰仍二舊貫一如之何何必改作

雅房大納言は才かしこくよき人にて大將にもなさばやとおぼしける比院の近習なる人たゞいま淺ましきことを見侍りつと申されければ何事ぞと問せ給けるに雅房卿鷹にかはむとていきたる犬のあしをきり侍りつるを中墻の穴より見侍りつと申されけるにうとましくにくゝおぼしめして日來の御氣色もたがひ昇進もし給はざりけりさばかりの人鷹をもたれたりけるは思はずなれと犬の足はあとなき事也虚言は不便なれどもかゝることをきかせ給ひてにくませ給ひける君の御心はいとたうとき事なり大方いける物をころしいためたゝかはしめてあそびたのしまん人は畜生殘害の類也萬の鳥獸ちいさきむしまでも心をとめて有樣を見るに子を思ひ親をなつかしくし夫婦を友なひねたみいかり慾おほく身を愛し命を惜めること

ひとへに愚痴なるゆへに人よりもまさりて甚し彼にくるしみをあたへ命をうばゝむことといかでかいたましからざらむすべて一切の有情を見て慈悲の心なからんは人倫にあらず

雅房大納言正二位村上源氏號ニ後土御門ニ太政大臣定實公の男　院の近習　此時院御所ニ院おはします後深草龜山後宇多也但後深草龜山は當時法皇歟

近習　禮記月令禁ニ近習ニ注天子親幸者習は狎也近つきなるゝを云　君の御心はいとたうとき事也

雅房犬の足をきりて鷹にかはんとするといへる虚言ならば君として浸潤の譖をあかす事なきいかゞ有べけれどもかゝる事を聞てにくめる君の心を兼好がほめたるは齊の宣王の牛をころさゞるを孟子か是心王たるにたれりと云心にかよへり宋の哲宗は洗手水を蟻にかけさせ給はぬを伊川が此心四海におよぼさば王道也と云も是也　いけるものをころし　佛法に殺生をいましめて放生をおこなへり　いためたゝかはしめて　季氏郈氏が闘雞の事は左傳にあり漢宣帝唐玄宗も是をこのめり又言行錄には王荊公闘鶉のことをのせたり兼好が時分にも相模入道崇鑒闘狗をこのむことあり果して兵亂の前表にて關東亡びぬ昔東坡犬を殺す事を禁ぜんとす有司其法なしと申す東坡が云禮に仲尼の詞を載て敝蓋不レ棄爲レ埋レ狗也死して猶其肉をくらはず況んや是を殺さんやと云　畜生殘害　殘害はそこなひやぶる也鳥獸虫魚のたがひにくいあふを畜生殘害と云倶舍に見えたり　萬の鳥獸ちいさきむしまでも　莊子に虎狼仁也とある時はおそろしき虎狼さへ父子相くらはずいはむや其外の鳥獸昆虫をや夜鶴の子を憶ひ巴猿の腸を斷も是也桓山の鳥の聲も子の別を悲り羊の跪て乳し烏の哺をかへし楚の狍子の死母に食るは親をなつかしむにあらずや猿は猵狙を雌とし麋は鹿とつるみ鰌は魚とあそぶこと齊物論に見えたり獸に牝牡あり鳥に雌雄あり綏々の狐奔々の鶉同宿の鴛鴦雙飛の孔翠比翼比目比肩の物に至まで皆是夫婦を友なふにあらずや詩周南に螽斯は妬忌せずと侍れば餘蟲のねたむ事はありとしるべし大鵬は怒て飛び鷙成が怒りは乳虎のごとし越王は怒蛙を見ていさむ鼃いかりて戈をあげ蟷螂いかりて斧をたのむいきとしいけるものの い

づれか此心なからん　佛印禪師戒殺文鱗甲羽毛諸品類衆生與レ佛心無レ二只爲ニ當初錯用一レ心致レ使ニ今生頭角異一水中遊林裏戯何忍將來充ニ日計一須臾活提在ニ砧床一口不レ能レ言眼還觀或槌擊或刀刺傘入ニ鑊湯一深可レ畏推レ毛將レ羽剮ニ皮鱗一剖ニ脊腸レ心猶吐レ氣美ニ君喉一誇ニ好味一勸レ子勸レ妻同喫嗜只知レ恣レ性縱ニ無明一不レ懼陰司毫髮記命終結冤業至面對ニ閻王一爭敢諱從頭一々報無レ差爐炭鑊湯何處避勸ニ賢家一須レ戒忌一莫下把ニ衆生一當中容易上貪ニ他一臠一還ニ他臠一古聖留レ言終不レ僞若能戒レ殺勤ニ念佛一決到ニ蓮臺上品會一

凡そいけるものを殺すは三教ともにいましむるゆへに當明教は殺生戒を五常の内の仁也と云されば此仁をよくするゆへに釋迦を能仁と名づけたり又道家にも是を禁じて孫眞人が千金方を撰に蝱蟲水蛭の類までを用るその罪にて天仙とならず尸解せり其後に虫魚を草木にかへたりとなん我道もとより物を愛すといへども義にあたりて用る所あり牛を見て殺すは忍びがたしされども鐘にちぬる義あれば其義すてがたきゆへに羊をかへたり若禮もなく義もなくして只ものを用ふまじきならば歐陽公か放生池を論じて田獵をはじめて民をやしなへる伏羲氏は佛者のために地下の罪人ならんといへるまことにおかしく覺え侍る漢劉公に魚を獻ずるものありしに劉公つら／＼見て天の五穀を生じて食とし鳥獸を産して肴とするは人のためなりと云時各げにもと思ふ孔季彥申けるはさやうにはあらず萬物の生おの／＼天地の氣をうく人のために生ずるにあらず人は智あるを以てものをくふことを得たり天地の性人より貴きはなき智ある故也むかし伏羲神農はじめて草木を甞て數多の毒にあたりて後五穀をくふことを得たり是天の物を生ずる事人のためにするにあらず蚊蚋は人をくらひ蚓虫は土をはむ天何ぞ蚊蚋のために人を生じ蚓虫のために土を生ずるならんや此理をしる時は五穀鳥獸の生ずる事本より人のためならず誠に人と物との同生異類なる事を知べし程子蝎頌云殺則害レ仁放則害レ義とあるは心をつけて工夫すべしされば四時の田獵聖賢の制法なれと多くこのみてすさむときは國費へて民くるしむいかんぞいましめざらん孔

子の釣すれども綱せず弋すれども宿を射ずとあるこそ仁義の至極なるべけれ　すべて一切の有情を見て　孔子は仁者は人を愛すといひ孟子は赤子の井にいるを見て怵惕惻隱の心あるを仁の端なりと云王陽明か大學の論には人の瓦石のやぶるゝを見てもおしみ草木の生茂するを見ては喜びかれしぼむを見てはうれへ鳥獸の時を得たるを見ては心よく死るを見てはかなしみ他人のうれへあるをうれへ罪なき者の死につくをあはれむましていはんや我父母兄弟妻子をや此故に三歳の嬰兒も父母を見て愛しわらふ是すなはち良知は我心に從て明なる故に明德といふ明德はすなはち仁なれば民をしたしむといへり人として仁なき時は形に手足のかけたるがごとし本心にかたわなる故に形は人なりとも心は畜類なれば人倫にあらず

顏回は志人に勞をほどこさじと也すべて人を苦しめ物をしへたくる事賤き民の志をもうばふべからず又いときなき子をすかしおどしいひはづかしめて興する事ありおとなしき人は誠ならねば事にもあらず思へとおさなき心には身にしみておそろしくはづかしく淺ましき思ひ誠に切なるべし是をなやまして興する事慈悲の心にあらずおとなしき人のよろこびいかりかなしひたのしむも皆虛妄なれども誰か實有の相に着せざる身をやぶるよりも心をいたましむるは人をそこなふことなを甚し病をうくることもおほくは心よりうく外より來る病はすくなし藥をのみて汗をもとむるにはしるしなき事あれども一旦はおをそるゝことあれば必汗を流すは心のしはざ也といふことを知べし淩雲の額を書て白頭の人となりしためしなきにあらず

顏回　論語公冶長篇子曰盍三各言二爾志一顏淵曰願無レ伐レ善無レ施レ勞　朱子注云伐誇也善謂レ有レ能施亦張大之意勞謂レ有レ功或曰勞々事也勞事非二己所一欲故亦不レ欲レ施二之於人一　物をしへたくること　しへたくるはせむる心也寃字也無實の罪を蒙て云ひらく事得ざるを寃と云又虐字をせたくるとよめり　賤き民の志　論語云匹夫不レ可レ奪レ志　いときなき子をすかし　禪錄に賺レ稚と云語あり　釋典に小兒のなく時黃葉を金なりとて小兒にあたへ是を黃楊止レ啼といふをろかなる衆生を佛の種々

方便してすゝむる義なり又もろこしに張遼といへるたけき兵あり小兒なく時に張遼來るといへばなきやみぬ日本にもむかし大和の元興寺に鬼ある事本朝文粹道場法師傳に見えたり此故に小兒をおどすにかほをしかめて元興寺といふされは楊脩が孔雀のごたへ陸績か懐橘の返事するごとくなる山口しるき小兒まれなれはたはふれにもかれをおどしはおじめんことせんなきこと也孟子いどけなき時隣家にいのこをころすを見て母に問ければいつはりて汝にくわせんためなりといふ母かれに僞をいふは僞をしゆるなりとて態いのこをかいて孟子にくはしむ幼子常視母レ誑といへる禮の本文に相叶へる孟母がこゝろざしまことに賢也　おとなしき人のよろこびいたる　禪法には隨レ流認二得性一無レ喜亦無レ憂といふ佛祖の頌あり台教にも不起一念の所を空劫以前とさし威音那畔といひ道家には混沌未分といひて眞空よりみれば喜怒哀樂の七情も盡虛妄なりとすされど斷絕しがたき事水上にうかへるひさごを杖にておさへんとするに似たるゆへに起念の瓢不生の杖と台家に論ぜり我儒より見

れば寂然感通の理未發已發の中いかんぞ七情をすてんや是眞實にして虛妄にあらず　身をやふるよりも　夏の禹の水を治て大功あれと旨酒をにくめる功は水をおさむるよりもまされりいかんとなれば水は人をおぼらすといへと酒をのみて人の心をみだすは水のわざはひよりはなはだしき故也　病をうくる　左傳昭公元年醫和曰晦淫惑疾明淫心疾陶隱居云人生二氣中一如二魚在一レ水々濁則魚瘦氣昏則人病邪氣之傷レ人最爲二深重一精神者本宅身以爲レ用身既受レ邪精神亦亂　七情の病ある事列子にのする文摯か故事をはじめ諸書に多し醫書にも多見えたり　藥をのみて汗を求る　嵆康養生論夫服レ藥求レ汗或有レ弗レ獲而愧情一集渙然流離終レ朝未レ餐則囂然思レ食而曾子銜レ哀七日不レ饑云々　精神之於二形骸一猶二國之有一レ君也神躁二於中一而形喪二於外一猶下君昏二於上一國亂上於下一也故君子修レ性以保レ神安レ心以全レ身愛憎不レ棲二於情一憂喜不レ留二於意一泊然無レ感而體氣和平又呼吸吐納服食養レ身使三形神二相親表裡倶濟一也文選凌雲の額を書て　世說新語補十六云陵雲臺樓觀精巧先稱二平衆木輕重一然後造構乃

無鎦銖相負揭臺雖高峻常隨風搖動而終無傾倒之理魏明帝登臺懼其勢危別以大材扶持之樓即頽壞論者謂輕重力偏故也洛陽宮殿簿曰陵雲臺上壁方十三丈高九尺樓方四丈高五丈棟去地十三丈五尺七寸五分也韋仲將能書魏明帝起殿欲安榜使仲將登梯題之既下頭鬢皓然因勑兒孫勿復學書文章叙錄曰韋誕字仲將京兆杜陵人太僕端子有文學善屬辭以光祿大夫卒衛恒四體書勢曰誕善楷書魏宮觀多誕所題明帝立陵霄觀誤先釘榜乃籠盛誕轆轤長絙引上使就題之去地二十五丈誕甚危懼乃戒子孫絕此楷法著之家令又魏書廿一韋誕傳あり

物にあらそはず己を枉て人にしたがひ我身を後にして人を先にするにはしかず萬の遊にも勝負をこのむ人は勝て興あらん爲也をのれが藝のまさりたる事をよろこぶされはまけて興なく覺ゆべき事又しられたり我負て人をよろこばしめんと思はゞ更にあそびの興なかるべし人にほいなく思はせて我心をなぐさまむこと德にそむけりむつましき中にたはふるゝも人をはかりあざむきてをのれが智のまさりたることを興とす是又禮にあらずさばれはじめ興宴よりおこりてながきうらみをむすぶ類多しこれみなあらそひをこのむ失也人に勝らん事を思はゞたゞ學問して其智を人にまさらんと思ふべし道を學ぶとならば善にほこらず友がらに爭ふべからずといふ事を知べき故也大なる職をも辭し利をもすつるはたゞ學問の力也

ものにあらそはず　曲禮在醜不爭　論語君子無所爭

おのれをまげて　老子云曲則全枉則直夫唯不爭故天下莫能與之爭

我身を後にして　論語仁者己欲立而立人己欲達而達人　老子云欲先民必以身後之　又云不敢爲天下先故能成器長

萬の遊にも勝負を　遯齋閑覽荊公棊品殊下每與人對局未嘗致思隨手疾應覺其勢將敗便斂之曰本圖適性忘慮反苦思勞神不如且已與葉致遠敵手嘗贈葉詩有垂成中斷之句是知公棊不甚高詩又云諱輸寧斷頭悔誤仍搏頰是又未能忘情於一時之得喪也漁隱叢話介甫有絕句云莫將戲事擾眞情且可隨緣道我贏戰罷兩奩收黑白一枰何處有虧成則圖適性忘慮之語信有證矣若魯直於棊不然如偶無公事客休時席上談兵校兩棊心似蛛絲遊碧落身如蜩甲化枯枝湘東一目誠甘死天下中分尙可持誰爲吾徒猶愛日參橫月落不曾知則苦思忘形較勝負於一着與介甫措意

異矣　むつましき中にたはふるゝも　詩邶風云終風且暴顧レ我則笑謔浪笑敖中心是悼注莊公之爲レ人狂蕩暴疾莊姜蓋不レ忍ニ斥-言スル之云々張子厚東銘戲言出ニ於思ー也戲動作ニ於謀ー也　はじめ興宴よりおこりて　魏其侯武安侯はともに漢帝の外戚にして名を天下にあらはす酒たけなわなる時に灌夫が酒失によりて兩人中あしくなり互に恨を含みて天子へうつたへて魏其侯灌夫はころされぬ史漢の本傳に見えたり　人に勝らんとならば　孟子無名之指屈而不レ信指不レ若レ人則知レ惡レ之心不レ若レ人則不レ知レ惡此之謂レ不レ知レ類也又云不レ耻不レ若レ人何若レ人有　中庸云子曰射有レ似ニ乎君子ー失ニ諸正鵠ー反求ニ諸其身ー人にかたんとのみ思ふは君子の心にあらざれども此心なければおこたりたゆみて學問もすさむべし山門の慈惠僧正は日ごとに我と云字を三たび掌に書てみづからもねぶり門徒にもかくいひてねぶらせけるとなん其道にすゝめる心ざしさこそ有けん儒をまなはん者も人とひとしからんと思はずは自暴自棄なるべしゆづりてあらそはざるは君子の德なりといへと仁に當らんとき弓いん時に人にをくれんや　善にほこらす　論語曰願無レ伐レ善　大なる職　孟子の齊卿の位を辭し萬鐘の祿をうけず一百の兼金をとらざるの類也

貧しきものは財をもて禮とし老たる者は力をもて禮とすをのが分をしりて及ばざる時は速にやむを智といふべしゆるさゞらんは人のあやまり也分をしらずしてしゐてはげむはをのれが誤なりまづしくて分をしらざればぬすみ力をとろえて分をしらざれば病をうく

貧しきものは　曲禮云貧者不下以ニ貨財ー爲上レ禮老者不下以ニ筋力ー爲上レ禮

鳥羽の作道は鳥羽殿たてられて後の號にはあらずむかしよりの名也元良親王元日の奏賀の聲甚殊勝にして大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし李部王の記に侍るとかや

鳥羽殿　白川院應德三年立ニ鳥羽殿ー　元良親王　陽成院の御子　元日奏賀の聲　朝賀の時に有事也　大極殿　拾芥云大極殿朝堂院正殿名ニ八省院ー又云八省院天子臨朝即位諸司告朝所又謂ニ之中臺ー　李部王　延喜御子式部卿重明親王也其あらはし給ふ

記錄を李部王記と號す式部を吏部といふ事は法式を司どるものを吏と云故也行理行吏の字皆通用すること音同じき故也左傳正義に見えたり

夜のおとゞは東御枕なりおほかた東を枕として陽氣をうくべき故に孔子も東首し給へり寢殿のしつらひ或は南枕常の事也白河院は北首に御寢なりけり北はいむ事也又伊勢は南也大神宮の御方を御後にせさせ給ふ事いかゞと人申けりたゞし大神宮の遙拜は巽にむかはせ給ふ南にはあらず。

東枕なり　禮記云寢時東首。　孔子も東首し給へり　論語鄕黨篇云疾君視之東首加ニ朝服一拖レ紳朱子注云東首以受ニ生氣一也新安陳氏云天地生氣始ニ於東方一或問疾君視之方東首常時首當レ在ニ那邊一禮記白云寢常當ニ東首一矣平時亦欲レ受ニ生氣一恐不ニ獨於疾時爲一レ然朱子曰常時多ニ東首一亦隨レ意臥時節如ニ記云請ニ席何向一請ニ衽何趾一這見ニ得有ニ隨レ意向時節一然多是東首故玉藻云居常ニ戶寢常東首也常寢ニ於北牖下一君問レ疾則移ニ於南牖下一

高倉院の法華堂の三昧僧なにがしの律師とかやいふものある時鏡を取て顏をつくづくと見て我かたちの見にくゝ淺ましき事を餘に心うく覺えて鏡さへうとましき心地しければその後ながく鏡をおそれて手にだにとらずさらに人にまじはる事なし御堂のつとめばかりにあひて籠居たりと聞傳しこそありがたくおぼえしか

高倉院　後白河院第三の御子也。三昧　此云調直定又云正定亦云正受圭峯疏云不レ受ニ諸受一名爲ニ正受一遠法師云夫稱ニ三昧一者何專思ニ寂想一之謂也思專則志一不レ分想寂則氣虛神朗氣虛則智恬其照神朗則無ニ幽不一レ徹斯二乃是自然之玄符用レ一而致レ用也云々　天台止觀略明ニ四種一一常坐二常行三半行半坐四非行非坐云々四種三昧皆依ニ實相一實相是安樂之法四緣是安樂之行所ニ以始末皆依ニ法華一即法華三昧之妙行也翻譯名義集詳也　鏡をとりて　三國志魏夏侯惇從ニ征呂布一爲ニ流矢一所レ中傷ニ左目一時夏侯淵與レ惇爲ニ將軍一々中號レ惇爲ニ盲夏侯一惇怒レ之每レ覽レ照恚怒輒撲レ照著レ地　白樂天感鏡詩今朝一拂拭自照ニ顦顇容一照罷重惆悵背有ニ雙盤龍一　許渾詩高歌一曲掩ニ明鏡一昨日少年今白頭

かしこげなる人も人のうへをのみはかりてをのれを

ばしらざるなり我をしらずして外を知といふことはりあるべからずされば己をしるを物しれる人といふべしかたちみにくけれどもしらず心のをろかなるをもしらず藝のつたなきをもしらず數ならぬをも知らず年の老ぬるをもしらず病のおかすをもしらず死のちかき事をもしらずおこなふ道のいたらざるをもしらず身の上の非をしらねばまして外のそしりをしらず但かたちは鏡に見ゆ年はかぞへてしる我身の事しらぬにはあらねどすべきかたのなければしらぬに似たりとぞいはましかたちをあらためよはひをわかくせよとにはあらずつたなきをしらばなんぞやがてしりぞかざる老ぬとしらばなんぞ閑に身をやすくせざる行をろかなりとしらばなんぞ茲を思ふこと茲にあらざるすべて人に愛樂せられずして衆にまじはるは恥也かたち見にくゝ心をくれにして出仕へ無智にして大才に交り不堪の藝をもちて堪能の座につらなり雪のかしらをいたゞきてさかりなる人にならび況及ばざる事を望みかなはぬことをうれへ來らざることをまち人に恐れ人に媚るは人のあたふる恥にあらずむさぼる心にひかれてみづから身をはづかしむる也貪る事のやまざるは命ををふる大事今こゝにきたれりとたしかにしらざればなり

人のうへをのみはかりて　論語學而篇不レ患ニ人之不ニ己知一患レ不レ知レ人也注尹氏曰君子求ニ在レ我者一故不レ患ニ人之不ニ己知一不レ知レ人則是非邪正或不レ能レ辨故以爲レ患也　老ぬとしらばなんぞ閑に　人生待足何時足未レ老得レ閑方是閑　茲を思ふ　尙書大禹謨念レ茲在レ茲　雪のかしら　古今「春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき　高蟾詩人生莫レ遣ニ頭如一レ雪縱得ニ春風一亦不レ消　東坡三馮頻久已歎ニ殘雪一

資季大納言入道とかや聞えける人具氏宰相中將に逢てわぬしのとはれんほどのこと何事成とも答申さゝらんやといはれければ具氏いかゞ侍らんと申されけるをさらばあらがひ給へといはれてはか〴〵しき事はかたはしもまねびしり侍らねは尋申までもなし何となきそゞろごとの中におぼつかなき事をこそ問奉らめと申されけりましてこゝもとのあさき事は何事成ともあきらめ申さんといはれければ近習の人々女房なども興あるあらがひなりおなじくは御前にてあ

らそはるべし負たらん人は供御をまうけらるべしと
さだめて御前にてめしあはせられたりけるに具氏お
さなくより聞ならひ侍れど其心しらぬ事侍りむまの
きつりやうきつにのをかなかくほれいりくれんとう
と申事は如何なる心にか侍らん承らんと申されける
に大納言入道はたとつまりて是はそゝろことなれば
いふにもたらずといはれけるを本よりふかき道は知
侍らずそゞろごとをたづね奉らんとさだめ申つと申
されければ大納言入道負に成て所課いかめしくせら
れたりけるとぞ

資季大納言　法興院攝政兼家公末孫號二楊梅一　具氏宰相中將村上源氏通方卿孫通氏卿子　わぬし　汝也吾の字をわとよむなり人をさして吾子と云も此義也俗にをぬしと云かごとし　はか〳〵しき事ば　具氏の詞なり　まじてこゝもとの　資季のことは也　御前にて　院の御前なり　供御をまうけらるべし　ふるまひかけのあらそひなり　馬のさつりやう　道理もなく人のいひ傳へたるそゝろことは今ゟ有事にて其名目計にて何のわけも分明ならざるなり　所課　課はおふすとよめり其所作をしおふするを云爰にてはかけにまけてふるまひをせられたるなり

くすしあつしげ故法皇の御前にさふらひて供御の參
りけるに今まいり侍る供御の色々を文字も功能もた
づね下されてそらに申侍らは本草に御覽しあはせら
れ侍れかしひとつも申あやまり侍らしと申ける時し
も六條故内府參り給ひて有房つゐでに物ならひ侍ら
んとてまづしほといふ文字はいづれの偏にか侍らん
とゝはれたりけるに土偏に候と申たりければ才のほ
ど既にあらはれにたりいまはさばかりにて候へ床し
き所なしと申されけるにどよみに成てまかり出にけ
り

あつしけ　故法皇　花園院號二萩原法皇一　本草　神農はじめて作り給ふ梁陶隱居是を注し唐宋の儒醫代々增藥あり　御膳にあがる物を一々に本草に引合られればその氣味能毒寒熱温涼そらに申所に相違あるまじきと云也　六條の故内府有房從一位内大臣和漢の才能者也村上源氏通光公孫也　しほといふ文字　韻會鹽余廉切說文鹵也從二鹵監聲一古者夙沙初作レ煮二海鹽一徐曰黃帝臣也集韻或作レ塩俗

作レ塩非レ是　監居銜切從ニ臥䀌ニ省レ聲　臥五貨切
伏也從ニ人臣ニ取ニ其伏ニ也人臣事レ君俯僂也　いづ
れの偏　文字のへんつくりと云時は偏旁とかくな
り　どよみに成てとは　どつとわらはれてと云心
也響をどよむとよめり「秋萩にうらびれをればあ
し引の山下とよみ鹿の鳴らむ「杣人は宮木ひくら
しあし引の山の山びこ聲とよむらん

徒然草野槌下之一

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは雨に
むかひて月をこひたれこめて春の行衞しらぬもなを
哀に情ふかし咲ぬべきほどの梢ちりしほれたる庭な
どこそ見所おほけれ歌の言葉がきにも花見にまかれ
りけるにはやく散過にければともさはる事ありてま
からでなどもかけるは花を見てといへるにおとれる
事かは花のちり月のかたふくをしたふならひはさる
事なれどことにかたくなゝる人ぞ此枝かの枝ちりに
けり今は見所なしなどはいふめる萬の事も始終こそ
おかしけれ男女の情もひとへに逢みるをばいふ物
かはあはでやみにしうさを思ひあたなる契をかこち
長夜をひとりあかし遠き雲井を思ひやり淺茅かやと
にむかしをしのぶこそいろこのむとはいはめ望月の
くまなきを千里の外までながめたるよりも曉ちかく
なりて待いでたるがいと心ふかう青みたるやうにて
深き山の杉の梢に見えたる木のまの影うちしぐれた
る村雲かくれのほどまたなく哀なり椎柴しらかしな
どのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ身

にしみて心あらん友もかなと都戀しう覺ゆれすべて月花をはさのみ目にて見る物かは春は家を立ちさらても月の夜は閨のうちながらも思へるこそいとたのもしうおかしけれよき人はひとへにすけるさまにも見えず興ずる樣も等閑なりかた田舍の人こそ色こく萬はもて興ずれ花の底にはねぢよりたちよりあからめもせずまもりて酒のみ連歌してはては大なる枝心なく折取ぬ泉には手あしさしひたして雪にはおり立てあとつけなどよろづの物よそながら見る事なしさやうの人の祭見し樣いとめづらかなりきみごといとをそし其ほどは棧敷不用なりとておくなる屋にて酒のみ物くひ圍碁双六などあそびて棧敷には人をおきたれはわたりさふらふといふ時に各肝つぶるゝ樣にあらそひ走りのぼりて落ぬべきまで簾はり出てをしあひつゝ一事も見もらさじとまほりてとありかゝりと物ことにいひてわたり過ぬれば又わたらんまでといひておりぬたゞ物をのみゝむとするなるべし都の人のゆゝしげなるは睡ていとも見ずわかくすゑ〴〵なるは宮つかへにたちゐ人のうしろにさふらふはさまあしくもをよびかゝらずわりなくみんとする人もなし何となく葵かけわたしてなまめかしきに明はなれぬほどしのびてよする車どもの床しきをそれかかれかなど思ひよすれば牛飼下部などの見しれるもありおかしくもきら〴〵しくもさま〴〵に行かふ見るもつれ〴〵ならず暮る程にはたてならべつる車ども所なくなみゐつる人もいつかたへか行つらん程なくまれに成て車どものらうがはしさもすみぬれば簾たたみもとりはらひ目の前にさびしげになりゆくこそ世のためしも思ひしられて哀なれ大路見たるこそ祭見たるにてはあれ彼棧敷の前をこゝら行かふ人の見しれるかあまた有にてしりぬ世の人數もさのみはおほからぬにこそ此人みなうせなんのち我身死ぬべきに定りたりとも程なく待つけぬべし大なる器に水を入てほそきあなをあけたらんにしたゝる事すくなしといふともをこたるまなくもりゆかはやがてつきぬべし都の中におほき人しなざる日は有べからず一日に一人二人のみならんや鳥部野舟岡さらぬ野山にも送る數おほかる日はあれどをくらぬ日はなしされば棺をひさくもの作りてうちをく程なし若きにもよらず強きにもよらず思ひかけぬは死期也けふまでのが

れ來にけるは有かたき不思議也しばしも世をのどかには思ひなんやまゝ子たてといふものを双六の石にて作りてたてならべたるほどはとられん事いづれの石ともしらねともかぞへあてゝひとつを取ぬればその外はのかれぬと見れど又々かぞふれば彼是まぬき行ほどにいづれものがれざるに似たり兵の軍に出るは死にちかき事を知て家をもわすれ身をもわする世をそむける草の庵には閑に水石をもてあそびて是をよ所に聞と思へるはいとはかなししづかなる山の奥無常のかたききほひ來らざらんや其死にのぞめる事いくさの陣にすゝめるにおなじ

花はさかりに　此下の句ののみと云字心あり花のさかり月くまなきを見るのみにあらず花の未開の時もちりすきて後も月のくらき夜も風雨の曉も見るに心有べきとなり　蔡君謨吉祥寺探花詩花未ニ全開一月未レ圓看レ花待レ月思依然明知花月無情物若使ニ多情一更可レ憐蒙齋云二未字有レ意此是花月之關レ情處花月無情猶能動ニ人之感觸一所謂多情却被ニ無情惱一之意　くまなきは　河海に阿の字曲の字を書り　たれこめて「たれこめて春の行衛もしらぬまに待し櫻もうつろひにけり　歌の詞かき　歌の小序也　かたくなゝる人　頑の字也　萬事も　月花のみにあらず上に月花をいひて下に男女の事をいはんとてかくかける詞つゞきよし　おかしけれとは　おもしろけれと云心也　男女のなさけも　是より色好むとはいはめと云まで相逢さるの戀のなさけふかきと也　遠き雲井を「わするなよほとは雲井に成ぬともそら行月のめぐりあふまで　望月の　十五夜の月をいふ　謝希逸月賦美人邁兮音塵闊隔ニ千里一兮共ニ明月一唐李嶠百詠三五二八夜千里與レ君同　白氏文集三五夜中新月色二千里外故人心　曉ちかくなりて　古今序秋の月を見るにあかつきの雲にあへるがごとし　すべて月花をは　莊子駢拇篇吾所謂聰者非レ謂ニ其聞レ彼也自聞而已矣吾所謂明者非レ謂ニ其見レ彼也自見而已矣　遵生八牋五云水樂洞雨後聽レ泉我輩豈無レ耳哉更當下不ニ以レ耳聽一以レ心聽上　春は家を立さらで　山谷詩春去不レ窺レ園黄鸝頗之詩　月の夜は閨の內　杜甫詩今夜鄜州月閨中唯獨看　あからぬもせず　そらめもせず　よそめもせずしてまもる也　「大井河岩浪たかし

筏士よ峯の紅葉にあからめなせそ　泉には　李義山殺風景花上曝レ裩清泉濯レ足　祭みしさま　賀茂の祭なり　棧敷不用なりとて　祭のわたるを待ほど棧敷に居る事無用なりと云也　あらそひはしりのぼりて　奥なる屋より棧敷へ俄に我さきにとのぼる也　みやこの人のゆゝしげなるは　ゆゝしとは善悪につかふ詞也爰にてはほめる詞也　あふひかけわたして　賀茂の祭の日あふひをかくるなり　きら〳〵しく　美麗の義也　たてならべつる車　見物の車也　らうかはしき　みだれかはしき也　源氏夕顔にらうかはしき大路に立おはしましてとあり　すたれたゝみも　棧敷の道具也　世のためし　祭の始終を見て世間治亂盛衰の事をおもひ出すなり　大路をみたるこそ　見物群集の人の皆ついには死べければ我も其數にいらんと也　こゝら　源語類聚云巨々等とは多也　大なる器に水を入　漏刻の水の皆滴りつくるかことし　後漢書王符傳山林不レ能レ給二野火一江海不レ能レ實二漏巵一　一日に一人二人のみならんや　神代卷上云伊弉冉尊曰愛也吾夫君言二如レ此一者吾當縊二殺汝所治國民日將千頭一伊弉諾尊乃報之曰愛也吾妹言二如レ此一者吾則當産二日將千五百頭一　鳥部野　上卷に見えたり　舟岡　西行歌「舟岡のすそのゝつかの數そひて昔の人に君をなしつる　ひつきをひさくもの　淮南子　鬻レ棺者欲二民之疾病一鬻賣也　孟子公孫丑矢人惟恐レ不レ傷レ人函人惟恐レ傷レ人巫匠亦然故術不レ可レ不レ愼也　注巫者爲レ人祈祝利二人之生一匠者作二爲棺椁一利二人之死一趙岐注云巫欲二祝活一人匠梓匠作レ棺欲二其蚤售一利在二於人死一也　和名集云棺音官一音貫和名比止岐所二以盛一レ屍也　まゝ子だて　二●一○三●五○二●二○四●一○一●三○一●二○二●一○　如レ此黒白の石をならべてかぞへて十にあたるを除也　まぬき　脱の字をまぬくとよむ但爰にては間拔の義なるべし　水石をもてあそび　唐田　遊岩隱二箕山一高祖幸二其門一曰先生此佳否答曰臣泉石膏肓烟霞痼疾

祭すきぬれば後の葵ふようなりとて或人の御簾なるをみなとらせられ侍りしか色もなく覺え侍しをよき人のし給ふ事なればさるべきにやとおもひしかど周防内侍か「かくれともかひなき物はもろ友にみすの

葵のかれ葉なりけりとよめるも母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉をよめるよし家の集にかけりふるき歌のことはがきにかれたるあふひにさしてつかはしけるとも侍り枕草子にもこしかたこひしき物かれたる葵とかけるこそいみじくなつかしう思ひよりたれ鴨長明か四季物語にも玉たれに後のあふひはとまりけりとぞかけるをのれとかるゝだにこそあるを名殘なくいかゞとり捨へき御帳にかゝれるくす玉も九月九日菊に取かへらるゝといへばさうぶは菊のおりまでも有べきにこそ枇杷皇太后宮かくれ給て後古き御帳の内にさうぶくす玉などのかれたるが侍りけるを見ておりならぬねをなをぞかけつると辨のめのとのいへる返事にあやめの草はありながらとも江侍從がよみしぞかし

此段の祭も賀茂の祭也此日人々あふひかつらの蘰をかくる也賀茂松尾の社司まへの日よりしかるべき所々へ奉る四月中の酉の日也公事根源に見えたり又諸道具にあふひをかくる故に榮雅の歌にけふといへば簾のみかはあふひ草ふるきふみにもまきそへてけり　後のあふひふようなりとて　祭すぎて後の葵無用なりとなり

周防内侍　周防守繼仲か女後冷泉院の女房なり

ふるき歌のことはがき　新古今にはやう物申ける女にかれたるあふひをみあれの日つかはしける實方「いにしへのあふひと人はとかむともなをそのかみのけふぞわすれぬ　返し　よみ人しらず「枯にけるあふひのみこそ悲しけれ哀とみすやかものみづかき　枕草子　清少納言作三冊あり　鴨長明か四季物語　四巻あり　くす玉　公事根源云五月五日節會天皇武德殿に出御なりて宴會を行はれ群臣に酒を給也内辨なども四節に同じ人々皆あやめのかづらをかく日かけのかつらのことし典藥寮あやめのつゞみを奉る群臣に藥玉を給ふ五色のいとを以てひぢにかくれは惡鬼をはらふと中本文侍り　荊楚歲時記に長命縷續命縷とあるもこれなるべし　枇杷皇太后宮　昭宣公の女朱雀院母后穩子　折ならぬねを　千載集　辨乳母「菖蒲草泪の玉にぬきかへて折ならぬねを猶ぞかけゝる　返し江侍從「玉ぬきしあやめの草は有なから淀野はあれん物とやはみし　淀野は寢殿によせたる也「あや

め草よとのに生る物なれはねなから人は引にそありける

たまぬきしの歌は新拾遺にも載たり其詞書に枇杷の皇太后宮かくれさせ給ふてのち御帳のうちを何となく見いれ侍りけれはしかせ給たりける菖蒲の草の侍りけるを見てよめるとあり ◎

家にありたき木は松さくら松は五葉もよし花はひとへなるよし八重櫻は奈良の都にのみありけるを此比ぞ世におほく成侍るなる吉野の花左近のさくら皆ひとへにてこそあれ八重櫻はことやうの物也いとこちたくねぢけたりうへすとも有なん遲さくら又すさまじむしのつきたるもむつかし梅は白きうす紅梅ひとへなるがとく咲たるもかさなりたる紅梅のにほひめでたきもみなおかしをそき梅はさくらにさきあひて覺えをとりけをされて枝にしぼみつきたる心うしひとへなるかまづさきてちりたるは心とくおかしとて京極入道中納言はなをひとへ梅をなん軒ちかくうへられたりける京極の屋の南むきに今も二本侍るめり柳又おかし卯月ばかりのわかゝえですべて萬の花紅葉にもまさりてめでたきものなりたち花かづらいつれも木は物ぶり大なるよし草は山吹藤杜若なでしこ池には蓮秋の草は荻すゝきゝちかう萩女郎花ふぢばかましほにわれもかうかるかやりむたう菊黄菊もつたくず朝顏いづれもいとたかゝらずさゝやかなる墻にしけからぬよし此外世にまれなる物からめきたる名の聞にくゝ花も見なれぬなどいとなつかしからずおほかたなにもめづらしくありがたき物はよからぬ人のもて興するものなりさやうの物なくてありなん

松は五葉　唐詩鼓吹に李賀五粒松の歌作るとあり五葉の松なり　酉陽雜俎世言ニ松五粒ー者粒當レ言レ鬣自有ニ一種ー名レ鬣皮如ニ鱗甲ー結レ實多新羅多ニ此種ー　八重櫻　一條院の御時ならの八重櫻を人の奉りけるを御前に侍ければ其花をたまはりて歌よめと仰ければよめる伊勢大輔「いにしへのならのみやこの八重櫻けふ九重に匂ひける哉吉野の花　古今序春のあした吉野の山の櫻は人麿が心には雲かとのみなん覺えける　左近のさくら　内裏に左近の櫻右近の橘有　ことやう　異風體なり　ねぢけこちたし　ねぢけは佞(ネヂケ)の字也口きゝかましき也萬葉「なら坂や兒手かしはの二おもてとにもか

くにもねちけ人かな　こちたしは　事外なりことくしき心也　遅さくら　晩櫻と書　王荊公詩山櫻抱レ石映ニ松枝一比ニ並餘花一開最遅只有ニ春風嫌ニ寂寞一吹レ香渡レ水報レ人知此詩を本集には山櫻と題せり　全芳備祖には櫻桃の部に入たり　遅き梅　東坡詩二月驚ニ梅晩一幽香此地無　京極の入道　風雅集十五定家卿はやうすみける家にしばし立入てほどへ侍けるおりかのみづからうへて侍ける梅の木の枝にむすびつけゝる　永福門院内侍「わすれしな宿は昔にあとふりてかはらぬ軒に匂ふ梅かえ　返し　前大納言爲世「くち殘るふるき軒端の梅かえも又とはるべき春を待らし　卯月ばかりのわかゝえで　杜牧詩霜葉紅ニ於二月花一といひ或は又新緑勝レ花なといふ心なるべし　池には蓮　謝靈運廬山に入て東林の池を堀蓮をうへたり蓮を賞ずるものおほけれどもことにいちしるきは周茂叔なり　めでたき物なり　愛すべき物也と云義也　きちかう　桔梗也　古今物の名の歌　秋ちかう野は成にけり白つゆのをける草葉も色かはりけり　しをに　紫苑也にとむと通ず　われもかう　ふぢはかまと云草也と云説あり「むさしのゝ霜枯にみしわれもかう秋しもをとる匂ひなりけり　狭衣　りんたう　龍膽(リウダン/リンダウ)也　黄菊　月令に菊有ニ黄花一とあれは菊花は黄なるを正色とす　さゝやか　ちいさき心也河海に細々(サヤカ)許　少々(サヽヤカ)　からめきたる名　奇怪の草木を愛し植て神農も知給はねば本草にも見えずなんとほこりのゝしるは聞にくきことにやされども海石榴は博望が西域に使してより其種を取來り中國にひろまる韓退之王元之も吟詠せずしもあらず海棠は海外より來りてあれど楊妃が睡にたとへたり嵩山の思惟樹は西天の貝多也唐人の詩に貝多文字古(フリダリ)と作れり戎王子は月支國の花の名也杜老が詩に萬里戎王子と作れり又字書にもまれに見えたり榿木を植たる事も杜詩にあればあるにや

身死して財殘る事は智者のせざる處也よからぬ物たくはへ置たるもつたなくよき物は心をとめけんとはかなしこちたくおほかるまして口おし我こそえめなどいふものども有て跡にあらそひたるさまあし後はたれにと心ざす物あらばいけらんうちにそゆづる

べき朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ其外は何もゝたでそあらまほしき

こちたくとは　こと〳〵しき心也又事外なり　前漢書韋賢及玄成俱以レ明レ經至レ相諺曰遺二子黃金滿籯一不レ如レ敎二子一經一山谷詩遺二金滿籯一常作レ災龐德公居二峴山之南一平生不レ入二城府一劉表問曰先生不三肯受二官祿一何以遺二子孫一曰世人遺レ之以レ危我遺レ之以レ安後漢書古人の賢なる者はとめる者すくなし家に儋石のたくはへなきを美談とす唐の元載が胡椒八百石晉の石崇か錦步障五十里あるもはたして益なかりき伏波將軍か財を親族故舊に與へほどこして世の人のあつめをけるは守錢の奴なりと云り誠にやさしき志なるべし

悲田院堯蓮上人は俗姓は三浦のなにがしとかやさうなき武者也故鄕の人の來りて物がたりすとて吾妻人こそいひつる事はたのまるれ都の人はことうけのみよくて實なしといひしを聖それはさこそおぼすらめともをのれは都に久しく住てなれて見侍に人の心をとれりとは思ひ侍らずなべて心やはらかに情あるゆへに人のいふほどの事けやけくいなひかたく萬えいひはなたす心よはくことうけしつ僞せんとは思はねどともしくかなはぬ人のみあればをのづからほいとほらぬ事おほかるべしあづま人は我かたなれとげには心の色なく情をくれひとへにすくよかなるものなればはじめよりいなといひてやみぬにぎはひゆたかなれば人にはたのまるゝぞかしとことはられ侍してそこのひじり聲うちゆがみあら〳〵しくて聖敎のこまやかなることはりいとわきまへずもやと思ひしにこの一言の後心にくゝ成ておほかるなかに寺をも住持せらるゝはかくやはらぎたる所ありてその益もあるにこそと覺え侍し

悲田院　拾芥中末云在二鴨川西畔一施藥院別所也養二孤子病一者也　延喜左右京職式云凡京中之路邊病者孤子仰二九ケ條一令レ其所レ見遇隨レ使必取送中施藥院及悲田院上　さうなき　無レ雙　無二左右一ならぶ物なきなり　吾妻人　異本にあづまのまうさとありまうさは猛者也　日本武尊東征の時橘姬海にいりて死す尊歸り上り給ふ道にて東をかへりみ橘姬の事を思ひ出し吾婦やとの給ひしより東をあづまと云日本紀に侍れども順か和名には文選を引て

邊鄙をあづまとよむとあれば東方にかぎらざることにやされど大かたは關東をさして云なり　聖それはさこそ　聖は堯蓮也これより堯蓮の答詞なり
けやけく　尤の字甚しき義なり
心なしと見ゆる者もよく一言いふもの也ある荒夷(アラエビス)のおそろしげなるがかたへにあひて御子はおはすやととひしにひとりも丶ち侍らずと答しかば扨は物のあはれはしり給はし情なき御心にぞものし給らんといとをそろし子故にこそ萬のあはれは思ひしらるれといひたりしさも有ぬべき事也恩愛の道ならではかゝるもの丶心に慈悲有なんや孝養の心なき者も子もちてこそ親の志は思ひ知なれ世をすてたる人のよろづにするすみなるがなべてほだしおほかる人の萬にへつらひ望ふかきをみて無下に思ひくだすは僻事也其人の心に成て思へば誠に悲しからんおやのため妻子のためには恥をもわすれぬすみもしつべき事也されば盗人をいましめひがことをのみつみせんよりは世の人の饑ず寒からぬやうに世をばおこなはまほしき也人恒の産なきときは恒の心なし人きはまりてぬすみす世おさまらずして凍餒のくるしみあるはとがの者絶べからず人をくるしめ法をおかさしめてそれをつみなはん事不便のわざなりさていかゞして人を惠むべきとならば上のおごりつひやす所をやめ民をなで農をすゝめば下に利あらんこと疑ひあるべからず衣食尋常なるうへにひがことせん人をぞ誠の盗人とはいふべき

よき一言　論語不ニ以レ人廢一レ言又子貢曰君子一言以爲レ知一言以爲ニ不知一言不レ可レ不レ愼也　左傳鬷蔑字然明晋叔向如レ鄭然明從ニ收レ器者一立ニ於堂下一言而善叔向曰必鬷蔑也下レ堂執ニ其手一以上曰子如不レ言吾幾失レ子矣　荒夷の　心なき田舍人也禮記雜記下孔子曰少連大連善居レ喪三日不レ怠三月不レ解期悲哀三年憂東夷之子也注言下其生ニ於夷狄一而知上レ禮也　子故にこそ萬のあはれは　池の尼の頼朝をたすけ熊谷か敦盛をたすけんとするも我子のことを思ふゆへなり父子の道は天倫なればたれかあはれを思はざらん陶淵明が一力をやとひ我子のもとへ送りて汝の薪水の勞をたすく是も又人の子也よく遇すべしといへる仁愛の道也されば子として父母の心をうけて子の心とせばをのづか

ら孝も有べければ所レ求二乎子一以事レ父未レ能也といへるは子を思ふごとくおやを思へといへる義も通ふべき也　するすみ　白氏文集偶吟詩眼下有レ衣兼有レ食心中無レ喜亦無レ憂匹如身後有二何事一應向人間無レ所レ求靜念レ道經深閉レ目閑迎二禪客一小低レ頭猶殘少許雲泉興一歲龍門數度遊　沙石集第四此詩を引てするすみと云は人の一物も手にもたで行貌也下郎はすつすみと云り應向は足ふみたてぬと云事也所住なくして杖つくほどの地も持ぬと云が如し一物もたくはへず少分の地も持ずして棄はてぬる身はよろづ世間の事なくして佛道修行しつべしと云匹は匹夫の義にて無一物の獨身なるを云　近比大明より新渡の長慶集を見侍しに匹の字を正の字に書り誤也應向はさしあたりてむかふ儀也面墻の心も有べし　ほだし妻子也上卷に見えたり　無下におもひくだすは遁世者の人の妻子にほだされてあるを見て思ひあなどるは勿論なれども其あふぎたうとめる釋尊さへ耶輸多羅瞿夷羅睺羅を思はずもあらず又妻子を愛するは觀音慈悲の心なりと云は止觀の旨也兼好が子を思ふ人の心になりて見よといへるげにもとぞ覺ゆる此心をおしひろめて君として群臣を我身のごとく其人に成て思ひ百姓を子のごとく愛せばなどか天下のおさまらざらん　ぬすみをもしつべき　後漢書吳祐順帝時遷二膠東侯相一祐政惟仁簡以レ身率レ物吏民懷而不レ欺嗇夫孫性私賦二民錢一市レ衣以進二其父一父得而怒曰有二君如一レ此何忍レ欺之促歸伏レ罪性慙懼詣レ閤持レ衣自首祐屛二左右一問二其故一性具述二父言一祐曰掾以レ親故受二汚辱之名一所謂觀レ過斯知レ仁矣使二歸謝一レ父还以レ衣遺レ之　人恒の產なき時は　孟子梁惠王上篇曰無二恒產一而有二恒心一者惟士爲レ能若レ民則無二恒產一因無二恒心一苟無二恒心一放辟邪侈無レ不レ爲已及レ陷二於罪一然後從而刑レ之是罔レ民也焉有二仁人在一レ位罔レ民而可レ爲也是故明君制二民之產一必使下仰足三以事二父母一俯足三以畜二妻子一樂歲終レ身飽凶年免中於死亡上然後驅而之レ善故民之從レ之也輕云々黎民不レ饑不レ寒然而不レ王者未レ之有一也　人きはまりてぬすみす　家語云獸窮則攫鳥窮則啄人窮則詐　論語に小人窮する時はこゝに濫すとあるも此儀也　凍餒ハ孟子盡心篇所謂西

伯善養レ老者制ニ其田里一教ニ之樹畜一導ニ其妻子一使レ養ニ其老一五十非レ帛不レ煖七十非レ肉不レ飽不レ煖不レ飽謂ニ之凍餒一文王之民無ニ凍餒之老一者此之謂也

それ書をよみ道を學びたる人は義理を知故に飢寒身にせまれども惡事をせずこれ恒心ありと云かやうの人は百千人が中にもまれ也大方の人は困窮にのぞみては僻事をもしぬすみをもする也されば王者の政は人の飢寒せぬやうにする也耕作をつとめしむれば口腹の飢をまぬかれ桑麻をうゆれば布帛おほきゆへに膚體の寒をふせぐ山林川澤民と利を同じくして一人の私とせざる時は材木ともしらずして廬舎をつくりやすく鳥獸の肉くらふに乏しからず農人の品を上中下に定めて田畑をあづけてよく作らせ其相應に屋敷をもあたふ是を民の恒の産と云也君より如此民をめぐみ養ふ時は飢寒の憂なし衣食に事たりても教を聞されば禽獸の動きはたらくに異ならず是によりて人倫の父子君子夫婦兄弟朋友此五典を敎て孝悌忠信をしめししらしむる也人間の品は此五の物のみなり此道を行ふ理は本より人の心中にあり心は一にして君に對しては忠といひ父母に對しては孝と云是仁義の本心也よく是を知時は勤て善をなして惡をはをのづからする事なき也是聖人敎養の道也是を王道と名づく堯舜の政孔孟のをしへ皆如此せんが爲也世衰へ君くらくして道おこなはれざる故に百姓恒の産なくして一日の飢寒だにまぬかれがたしまして況や父兄に仕へ妻子を養ふべき事をや此故に或はいつはり曲りて惡ことをし或はたゝちに晝夜を分たず人を殺しぬすみをもする也然れば貧しき者の憂へ苦しむことは必定にて不審なし富ものも當時苦しむ事はいかにやと不審なれどもよく心をつけてみればそれも不審なし世は無道なれば罪なきものゝ罪にあふこと有故也上くらく下へつらひ相互に利をむさぼる故に貧しき者はいよ〳〵苦しみ富る者も安穩の心なし如レ此にて國家の治まるましきことは目前の道理なり心あらん君敎養の道を行ひて國家を治めは文王は我師也といはざらめかも

人の終焉の有さまのいみじかりし事など人のかたるを聞にたゞ閑にしてみだれずといはゞ心にくかるべきををろかなる人はあやしくことなる相をかたりつ

けいひし言葉もふるまひもをのがこのむかたにほめなすこそ其人の日來の本意にもあらずやと覺ゆれ此大事は權化の人もさだむべからず博學の士もはかるべからずをのれたがふ所なくば人の聞にはよるべからず

終焉は　臨終也焉は助字也　いみじかりし　よきことゝほめたる也　あやしくことなる相をかたりつけ　奇特の瑞相ありたりなど云てもとよりなきことをもかたりつくるなり　およそ人の臨終の時花ふる紫雲たつなどいひて種々の奇瑞をいへど大やうはまことすくなし風雨雷電の時に善知識の死るも有べしかたちあれば病あり病にしな多ければ思ふまゝにあるべからずされば圓覺寺の開山佛光の頌に老僧舍利包二天地一莫下向二空山一撥中冷灰上と云夢窓の夢中問答の中にも此心をいへりされども尋常の人は平生おさ〳〵しけれども死期に臨てはみだるゝ也文信國か節を全してころされ謝畳山か食はずして餓死する類楚の龔勝か下にたちがたし猶ものぼりていはゞ子路が纓をむすび曾子の簀をかゆるうらやましくあらまほしき事なり

栂尾の上人道を過給けるに河にて馬あらふをのこあしく〳〵といひければ上人立とまりてあなたうとや宿執開發の人哉阿字々々と唱るぞや如何なる人の御馬ぞあまりにたうとく覺ゆるはと尋給ければ府生殿の御馬に候と答けりこはめでたきことかな阿字本不生にこそあなれうれしき結緣をもしつるかなとて感淚をのごはれけるとぞ

栂尾の上人　明恵上人なるべし高辨也栂と梅ともとは通しけるにや東山の僧雪村諱友梅栂尾に至りて此山の名は我諱の字也といへる事岷峨集にのせたり湖海新聞に梅を木母と名つくと有時は栂梅相通すと見えたり　元亨釋書五釋高辨姓平氏紀州在田郡人父重國嘗爲二嘉應帝衞兵曹一九歲從二高尾山上覺一讀二倶舍頌一十九從二興然一稟二兩部密法一自爾止二北山栂尾一盛唱二賢首宗一寛喜四年正月十九日唱二彌勒號一而寂年六十　宿執開發の人　前生にて修練したる功德乃開發して今阿字を唱ふると也又自然發得するを云事も有　府生殿　職原下云左右近衞府府生大將判二授之一大納言大將不レ召二仕府生一大臣大將以上召二加府生一也又左右衞門左右兵衞にも

開府生有　阿字本不生　大毘盧舍那經有情及非情阿字第一命又云我覺本不生新羅國靈妙寺僧不可思議釋云秘密中秘釋者阿字自說ニ本不生ー　阿の字を讃するに無不非の三義有炳現阿字素光色といひ八識田中下ニ阿字一刀ー生死亦斷涅槃亦斷といへるは密家の常談也　馬の足を阿字と開府生を不生と聞なせる上人の耳感應のいたりなり

御隨身秦重躬北面の下野入道信願を落馬の相ある人也能々つゝしみ給へといひけるをいと眞しからず思ひけるに信願馬より落て死にゝけり道に長しぬる一言神のことしと人思へりさていかなる相ぞと人の問ければきはめて桃尻にして沛艾の馬を好みしかは此相をおほせ侍りきいつかは申誤たるとぞ云けり明雲座主相者に逢給てをのれ若兵仗の難やあると尋給ければ相人誠に其相おはしますと申いかなる相ぞと尋給ければ傷害のをそれおはしますまじき御身にてかりにもかくおぼしよりてたづね給ふ是既に其あやふみのきさしなりと申けりはたして矢にあたりてうせ給にけり

御隨身　沛艾　文選籍田賦龍驥騰驤而沛艾注馬行貌

此相をおほせ侍る　源氏桐壺やまとさう（相）をおほせ（課）て　いつかは申あやまりたる　何の字也いづれかは也荘子達生篇東野稷以レ御見ニ荘公ー進退中レ繩左右旋中レ規荘公以爲文弗レ過也使ニ之鈎百而反ー顔闔遇レ之入見曰稷之馬將レ敗公密而不レ應少焉果敗而反公曰子何以知レ之曰其馬力竭矣而猶求焉故曰レ敗家語魯定公問ニ於顔回ー曰子亦聞ニ東野畢之善レ御乎對曰善則善矣雖レ然其馬將ニ必逸ー公不レ悅其後三日東野畢之馬逸公聞レ之促レ駕召ニ顔回ー々々至公曰前日寡人問ニ吾子ー以ニ東野畢之御ー而子曰ニ其馬將ニ逸不レ識吾子奚以知レ之顔回對曰以レ政知レ之而已矣昔者帝舜巧ニ於使ニ民而造父巧ニ於使ニ馬舜不レ窮ニ其民力ー造父不レ窮ニ其馬力ー是以舜無ニ逸民ー造父無ニ逸馬ー今東野畢之御也歷レ嶮致レ遠馬力盡矣然而其心猶求レ馬不レ已臣以レ此知レ之公曰善哉吾子之言其義大矣願少進乎顔回曰臣聞レ之鳥窮則啄獸窮則攫人窮則詐馬窮則逸自レ古及レ今未レ有下窮ニ其下ー而能無レ危者上也公悅群書治要十　明雲　久我太政大臣雅實公孫顯通卿子也山門の座主也　箭にあたりてうせたまひけり　壽永二年天台座主明雲僧正を法住寺

の御所へ招請し給へり十一月十九日木曾義仲兵を率して法住寺殿を責やぶる僧正も馬に乘て遁んとし給ひけるを木曾が大將楯六郎親忠が放矢に御腰の骨を射させて眞逆に落給ひ立もあがり給はざりけるを親忠か郎等落重て御頸をとる盛衰記三十四に見えたりそれ相は周の叔服戰國の唐擧漢の呂公許負が類より世々にたゆることなし貴賤のしるし其身にとり吉凶のきざし掌をさすが如し麻衣道者は人相經をあらはし袁忠徹は古今識鑑を撰ふ貴高なる者福壽なる者貧賤なる者夭死の者刑傷の者盜賊の者いづれも其圖說を記し其類例を擧たりされ共孔子の形陽虎に似て虞舜項羽重瞳一樣の看をなしかたき時は此術必とすべからず相を論ずる人あまたあれど呂東萊か博議にいへる趣誠に古今の公論也今此段に明雲のことをいへる左氏傳の六鷁退飛は風吹故なるは宋の襄公是何の祥そや吉凶いかんと叔興にとはれければ君問ことを誤てり陰陽の事は君の身に預からずといへり明雲のみつから兵仗の難やあると尋るは是も問ことを誤てる也襄公は後五年軍にやぶれ明雲は終に流矢にあたる　此

一段明雲座主より以下を別段とわけたる本あり

灸治あまた所に成ぬれば神事にけがれありといふ事ちかく人のいひ出せる也格式等にも見えずとぞ

格式　嵯峨天皇の時弘仁格弘仁式を撰す淸和天皇の時貞觀格貞觀式を撰す醍醐天皇の時延喜格延喜式を撰ずこれを三代格式と申也律と令とに合せて明法家に博士を立つ歐陽か唐書にも武德律　式　令貞觀律　令格式　永徽律　式令格　垂拱式　格　新格　散頒格　留司格　開元前後格　令式格　式　律令事類等の名をのせたり我朝の律令格式も唐國のを學びて作れり　唐書刑法志云古之爲レ國者議レ事以レ制不レ爲ニ刑辟一懼三民之知二爭端一也後世作ニ爲刑書一惟恐レ不レ備俾三民之知二所レ避也其爲レ法雖レ殊而用レ心則一蓋皆欲三民之無二犯也然未レ知下夫導レ之以レ德齊レ之以レ禮而可レ使三民遷レ善遠二罪而不中自知上也唐之刑書有レ四曰ニ律令格式一令者尊卑貴賤之等數國家之制度也格者百官有司之所ニ常行一之事也式者其所ニ常守一之法也凡邦國之政必從ニ事於此三者一其有レ所レ違及人之爲レ惡而入ニ于罪戾一者一斷以レ律

四十以後の人身に灸をくはへて三里をやかされば上氣の事あり必灸すべし

四十以後の人　明堂灸經曰男子三十已上不レ可レ不レ灸ニ三里一三里所ニ以下一レ氣也　三里穴在ニ膝下三寸一足陽明經也或云在ニ膝眼三寸一

鹿茸を鼻にあてゝ嗅べからずちいさき蟲ありて鼻より入て脳をはむといへり

鹿茸　鹿のふくろ角也　本草曰孟詵曰主レ益レ氣不レ可ニ以レ鼻嗅一其茸中有ニ小白蟲一視レ之不レ見入ニ人鼻一必爲レ蟲レ顙藥不レ及也　瑣碎錄云鹿茸麝香肉蓯蓉切不レ可ニ就レ鼻聲一蓋有ニ微蟲一

能をつかんとする人よくせざらんほどはなましいに人にしられしうち／＼よくならひえて指出たらんこそいと心にくからめと常にいふめれどかくいふ人一藝もならひうることなしいまだ堅固かたほなるより上手の中にまじりて毀りわらはるゝにも恥ずつれなくすきて嗜む人天性其骨なけれども道になづまずみたりにせずして年を送れば堪能のたしなまざるよりは終に上手の位にいたり德たけ人にゆるされて雙なき名を得る事也天下の物の上手といへども始は不堪の聞えもあり無下の瑕瑾もありきされども其人道のをきてたゞしく是をおもくして放埒せざれば世のはかせにて萬人の師となる事諸道かはるべからず

能をつかん　藝能也　うち／＼　内々なり　堅固かたほなるより　一向初心の時よりと云義也　つれなくすきて　强面(ツレナク)强顔おもてづよく藝能にすきてと云義なり　天性その骨　生れつきの器用也　なづまず　泥なづまずはとゞこほらぬ也　堪能　藝能にたへたる器用也　德たけ　德の長ずるなり　不堪　かなはぬ義也無器用なるを云　瑕瑾　二字ともに玉のきず也恥辱などかく事を云なり　道のおきてたゞしく　法度を守る也　放埒せざれば　みだりにせざる義也　世のはかせ　博士と書世の物しりと云也

善珠法師は光明皇后の孽子(ゲッシ)也沙門となりて唯識を學べともをろかなるゆゑにみづから恥辱としいよ／＼はげみつとめて夏月のあつきにかうべはれて瓜のごとくたゞれ鬚髮もぬけ落るまでやまざりければひろく三藏をあかせり又明詮法師元興寺にて法相をまなぶ天性にふくして寺を出さらんとす雨

滴の庭前の石をうちてくぼめるを見てかくやはらかなる物の極てかたき物をうがつはいかにそやとてすなはち我房にかへり年ひさしく學で法相宗の名をあらはせり昔物ならふ人こゝろざし屈していなかへまからんとて近江の國をとをりける時に或人斧を石にてとぐ者あり何の爲ぞととへば針にするなりと答ふかの人さてはかうやうの者もあるぞかし吾こゝろざしば無下におとれりとて又都へ上り學問して終に博士と成其所をすりはりと名づくと云傳ふ釋氏に善珠明詮あるごとく儒家にもいらん者いかでか生れながらさかしき事あらんや人一たびせばをのれ百たびし人百たびせばをのれ千たびしてよくせんになどか物をなさゞらん

或人の云年五十になるまで上手にいたらざらん藝をば捨べき也はげみ習へき行末もなし老人の事をば人もえわらはず衆に交りたるもあいなく見ぐるし大かた萬のしはざはやめて暇あるこそめやすくあらまほしけれ世俗の事にたづさはりて生涯をくらすは下愚の人なり床しく覺えむ事は學び聞とも其趣をしりなば覺束なからずしてやむべしもとより望ことなくしてやまんは第一の事なり

とし五十になるまで　論語子罕篇後生可レ畏焉知ニ來者之不一レ如レ今也四十五十而無レ聞焉斯亦不レ足レ畏也已　大戴禮修身篇曾子曰年三十四十之間而無レ藝則無レ藝矣五十而不ニ以レ善聞一則不レ聞矣七十而未レ壞雖レ有ニ微過一亦可ニ以免一矣　ゆかしくおぼえんことはとは　其藝のゆかしく思ならば也　おぼつかなからずしてとは　不審さへないほどならばなり

此段老に至るまでならざる藝をばすてよといへる一往さもあるべきやうなれども高適は五十にしてはじめて詩を學て少陵にほめられ蘇老泉は三十にてはじめて學問して文章の名を得たり詩文のみにあらず師曠が教に若より學ぶは朝に出行がごとし中年にしてするは日中に行かごとし老て學ぶは燭をとりて夜行がごとしまなばざるにはまされり古詩云少壯不ニ努力一老大徒傷悲此心あらん者わかきはつとむべし老たりともすつべからず燭なくて夜るゆかんは危からずや聖人の四十五十にして道をきく事なき物をいましむる事は時々に及て學をす

ゝむるの敎誨なり

徒然草野槌下之二

西大寺靜然上人腰かゞまり眉白く誠に德たけたる有樣にて內裏へまいられたりけるを西園寺內大臣殿あなたうとのけしきやとて信仰のきそくありければ資朝卿是を見て年のよりたるに候と申されけり後日にむく犬の淺ましく老さらほひて毛はげたるをひかせて此氣色たうとくみえて候とて內府へまいらせられたりけるとぞ

西大寺　大和國にあり七大寺のうち也拾芥云高野天皇天平勝寳元年創レ之至二天平神護元年一十七年造畢くわしきことは續日本紀に見えたり　靜然上人　西園寺の內大臣　實衡公也左府公衡公の男又竹林院と號す　資朝卿　權中納言從三位檢非違使別當後醍醐天皇の時の人也日野俊光卿の三男老さらほひて　莊子に髐の字をさらほふとよめり此氣色のたうとく見え候とて　內府の靜然を崇敬せらるゝは眉白く腰かゞまりて見ゆるは年のよりたる故也老たる者かたうとく見ゆるならば此むく犬も老たるとて內府へ戯れてまいらせられけるに

や　上巻にある導師を唐の狗に似たりと云ものもありされば唐人の詩に烏宿池中樹僧敲月下門僧歸夜船月龍出曉堂雲林下聽ㇾ經秋苑鹿溪邊掃ㇾ葉夕陽僧なんどいへるもみな僧を畜類に對する也又朝鮮國に沙門あり形甚矮小にして雞に似たりければ人皆此沙門を雞僧と申けると情齋叢話に見えたり

爲兼大納言入道めしとられて武士ともうち圍みて六波羅へゐて行ければ資朝卿一條わたりにてこれを見てあな浦山し世にあらん思出かくこそあらまほしけれとぞいはれける

爲兼大納言　毘沙門堂と號す　定家　爲家　爲敎

爲兼 權大納言 正二位

應長元年依ㇾ勅撰ニ進玉葉集一正和元年奏ニ覽之一同二年十月十七日剃髮同四年十二月廿八日東使として召とられ佐渡へ流罪せらる公卿補任に見えたり或說に爲兼佐渡島へ流されて和歌三十三首を讀阿彌陀佛といふ字を竪横すぢかいに讀り是によりて赦免して嘉元二年歸洛と云々風雅集爲兼東へまかりけるにやす河を渡りけるに讀る「やす川といかでか名にはなかれけんくるしきせのみあるとおもへば　六波羅　北條家兩人の一族を京都におき畿內西國の政を行はしむ是を兩六波羅と號す東鑑に詳なり　あなうらやまし　さきてこそちるともちらめあさかほのあなうらやまし一時の花やましといへる心をつら〳〵思ふに北條氏鎌倉に居なから帝王をなみし幼稚を立て將軍とし其身ほしいまゝに國家をかすむる事年久し我朝廷の臣として君を延喜天曆の時のことくし北條をほろぼしてみづから國政をとらんと思ふ故に男たる者身死してともならばなれもし本意を遂は敵を又如此せんものをと思へばまことに爲兼は世にあらん思ひ出かくあらまほしき事なるべしと是資朝の心のことばにあらはれりたるなり其氣分は楚の石乞か事成爲ㇾ卿不ㇾ成而烹固其職也といひ前漢の主父偃が大丈夫生不ニ五鼎食一死卽五鼎烹耳といへる心なるべし又蒯通か漢祖に向て天下の英雄みな帝のする所をせんとねがふといふ是によりて見れば資朝も又北條がするごとくせんと思ふなり　ちか比豐臣太閤のいまだ筑前の守たりし時佐久間玄蕃をいけ

どりて車にのせ京の大路をわたしければ玄番人にかたりてわれ軍にかたは筑前守を如し此せんと思ひしといふと也かの資朝も後醍醐の密謀の臣也とて六波羅へめしとられ北條がはからひとして佐渡へ流されはたしてきられぬいと不便の事なり

此人東寺の門にあまやどりせられたりけるにかたはものどものあつまりゐたるが手も足もねぢゆがみうちかへりていづくも不具にことやうなるを見てとり〳〵にたぐひなき曲者也尤愛するにたれりと思ひてまもり給けるほどにやがて其興つきて見にくゝいぶせく覺えければたゞすなほにめづらしからぬ物にはしかずとおもひて歸りて後この間うへ木を好てことやうに曲折あるを求て目をよろこばしめつるはかのかたわを愛するなりけりと興なくおぼえければ鉢にうへられける木とも皆ほりすてられにけりさもありぬべき事也

此人　資朝也以上三段皆資朝の事を誌せり此人ことやうなる志氣なみ〳〵の人にあらず　鉢　盆山也

世にしたがはん人は先機嫌をしるべしついであしき事は人の耳にもさかひ心にもたがひて其事ならずさやうの折ふしを心得べき也但病をうけ子うみ死ぬる事のみ機嫌をはからずついであしとてやむことなし生住異滅のうつりかはる實の大事はたけき河のみなぎるがごとししばしもとゞこほらすたゞちにおこなひゆくもの也されば眞俗につけて必はたし遂んと思はんことは機嫌をいふべからずとかくのもよひなく足をふみとゞむまじき也春くれてのち夏になり夏はてゝ秋のくるにはあらず春は夏の氣をもよほし夏より既に秋はかよひ秋は則さむくなり十月は小春の天氣草も青くなり梅もつぼみぬ木の葉のおつるもまづ落てめぐむにはあらず下よりきざしつはるに堪ずて落る也むかふる氣下にまふけたる故にまちとるついで甚はやし生老病死の移來る事又是に過たり四季は猶定れるついであり死期はついでをまたず死は前よりしも來らずかねてうしろにせまれり人皆死ある事を知てまつこととしかも急ならざるに覺えずして來るおきのひかた遙なれども磯よりしほのみつるがごとし

機嫌といふ字は佛書に出たり　耳にもさかひ

漢書張良傳忠言逆於耳　病をうけ子をうみ死ぬ
る　病産死の三也　生住異滅　藏乘法數曰四相に
麁細あり生老病死は麁の四相なり生住異滅は細の
四相也生は生れ出る處住は人間に居住して老身と
なり異は病をうけて異形になる滅は死去也　たけ
き川の　論語子罕篇子在川上曰逝者如斯夫不
舍晝夜程子曰此道體也天運而不已日往則月來
寒往則暑來水流而不息物生而不窮皆與道爲體
運乎晝夜未嘗已也　眞俗　眞は出世間　俗は
世間也　春くれて後　六韜云春道生萬物榮夏道長
萬物成秋道斂萬物盈冬道藏萬物靜盈則藏々則復起
莫知所終莫知所始　秋はかよひ　下くゝる
水にあきこそかよふらしむすふ泉の手さへすゞし
き　小春　四季はなを四季次第あるゆへに四序と
云也節序と云も是也　まへよりしも來らず
論語瞻之在前忽然在後　おきのひかた　程子曰
今夫海水潮日出則水涸是潮退也其涸者已無也月出
則潮水復生却不是將已涸之水爲潮水自然能生
也余安道海潮圖序古之言潮者多矣或言如槖籥翕
張或言如人氣呼吸或云海鰌出處皆亡經據唐世盧

肇著海潮賦以謂日入海而潮生月離日而潮大自
謂極天人之論世莫敢非予嘗東至海門南至武
山旦夕候潮之進退弦望視潮之消息乃知盧氏
之談出於胸臆所謂蓋不知而作者也夫陽燧取火
於日陰鑑取水於月從其類也潮之漲退海非增
減蓋月之所臨則水往從之日月右轉而天左旋一
日一周臨於四極故月臨卯酉則水漲乎東西月
臨子午則潮平乎南北彼竭此盈往來不絶皆繫
於月不繫於日何以知其然乎夫晝夜之運日東
行一度月行十三度有奇故太陰西沒之期常緩於日
三刻有奇潮之日緩其期率亦如是自朔至望常
緩一夜潮自望至晦復緩一晝潮若因日之入
海激而爲潮則何故緩不及期常三刻有奇乎肇又
謂月去日遠其潮乃大合朔之際潮殆微絶此固不知
潮之準也夫望朔前後月行差疾故晦前三日潮勢長朔
後三日潮勢極大望亦如之非謂遠於日也月弦
之際其行差遲故潮之去來亦合沓不盡非謂近於
日也盈虚消息一之於月陰陽之所以分也夫春
夏晝潮常大秋冬夜潮大蓋春爲陽中秋爲陰中歲
之有春秋猶月之有朔望也故潮之極漲常在春

秋之中一濤之極大常在二朔望之後一此又天地之常數也昔竇氏爲レ記以謂潮虚二於午一此候二於東海一者也近燕公著レ論以謂生二於子一此測二於南海一者也又嘗聞二於海賈一云潮生二東南一此乘レ舟候レ潮而進退者耳古今之說以爲地缺二東南一水歸レ之海賈云潮生二東南一亦近レ之矣今通二二海之盈縮一以誌二其期一西北二海所二未嘗見一故闕而不レ紀云嘗候二於海門一月加レ卯而潮平者日月合朔則旦而平後三刻有奇上弦則午而平望巳前爲二晝潮一望巳後爲二夜潮一此皆臨海之候也遠海之處則各有二遠近之期一月加レ酉而潮平者日月合朔則日入而平上弦則夜半而平望則明日之旦而平望巳前爲二夜潮一望巳後爲二晝潮一此東海之潮候也又嘗候二於武山廣州一月加レ午而潮平者日月合朔則午而潮平上弦則日入而平望則夜半而平上弦巳前爲二晝潮一上弦巳後爲二夜潮一月加レ子而也平者日月合朔則夜半而潮平上弦則日出而平望則午而平上弦巳前爲二夜潮一上弦巳後爲二晝潮一此南海之潮候也白氏文集五十三潮詩早潮纔落晚潮來一月周流六十廻不二獨光陰朝復暮一杭州老去被二潮催一　潮を論ずるもの古今おほかり程朱の說に其理すぐべからず今しばらく礒より潮のみつると此段にかける事を思ふに潮のさしひき急流なるをみれば澳より來り礒よりかへるなるべしされどもおきも礒もみちひ同時なれば下より湧出るこやとも覺ゆされは程子の潮い退くものは則なく成て又來る潮は自然に生ずといへるげにさも有べし

大臣の大饗はさるべき所を申うけてをこなふ常の事也宇治左大臣殿は東三條殿にてをこなはる內裏にてありけるを申されけるによりて他所へ行幸ありけるさせることのよせなけれども女院の御所なとかり申故實なりとぞ

大臣の大饗　大臣の官に任ぜらるゝときの饗應なり　宇治左大臣殿　宇治の惡左府賴長公保元の亂にうたれたまひぬ是は知足院關白忠實公の二男法性寺關白忠通公の弟なり　東三條殿　拾芥中末云四條院誕生所或重明親王家云々二條南町西南北二町忠仁公家貞仁公大入道殿傳領長久四年四月晦日燒失

筆をとれば物かゝれ樂器をとれば音をたてんと思ふ盃をとれは酒を思ひさいをとればだうたん事を思ふ

心は必事にふれて來るかりにも不善の戲をなすべからずあからさまに聖教の一句を見れば何となく前後の文もみゆ卒爾にして多年の非をあらたむる事もありかりにいま此文をひろげざらましかは此ことをしらむや是則ふるゝ所の益なり心更におこらずとも佛前にありてずゞをとり經をとらは怠るうちにも善業をのづから修せられ散亂の心ながらも繩床に座せば覺えずして禪定なるべし事理もとより二ならず外相もしそむかざれは內證かならず熟すしゐて不信を云べからずあふぎて是をたうとむべし

筆をとれば　異本に樂器より以下を茶器をとれば茶をたてんと思ひ盃をとれば酒をのまんと思ひさいをとれば雙六うたんことをおもふとあり　陳師道思亭記云日之所レ視而思從レ之視ニ干戈一思鬪視ニ刀鋸一則思レ懼視ニ廟社一則思レ敬視ニ第家一則思レ安

攤うたん事をおもふ　韻會寒韵攤他干切手布也增韻用也按也又廣韻攤レ蒱四數也集韵亦書作レ攣　鮑宏博經意錢者何承天纂文曰詭億一曰射意一曰射數即攤錢也　李僖翁資暇集錢戲有下每以二四文一爲中一列上者即史傳云々所意錢是也　俗謂ニ之攤錢一亦曰ニ攤鋪一其錢不レ使ニ疊映欺惑一也疾道レ之故謂ニ其音一音攤爲ニ他乾反一音鋪爲レ蒲厥義此耳今人書ニ此錢戲率作ニ樗蒲字一何貶ニ樗蒲之甚一耶案樗蒲起レ自ニ老子一今亦爲ニ呼盧一者不ニ宜雜ニ其號於錢一說ニ攤鋪之義一皎然可レ見　杜子美夔州歌長年三老長歌裡白晝攤錢高浪中箋註曰攤錢蜀人賭錢之名後漢梁冀傳少好ニ意錢之戲一注引ニ何承天纂文一詭億一曰射意一曰射數即攤錢也　大鏡師輔公の傳にだうたせ給と有雙六の事を云と見えたり

不善の戲を詩云善戲謔兮不レ爲レ虐也

聖教　經論等を云

あからさま　暫の字也白地とも書り

卒爾　論語注卒爾輕遽之貌

繩床　梵網經に菩薩十八物のうちなり　李白草書歌行宣州石硯墨色光吾師復倚ニ繩床一 謂ニ懷素一

事理もとより　心にさとるを理とし身に行ふを事とす事と理とを各別にして一偏に著するをば理障事障と云てきらふ也事理不二とたつるは台家の論也外相不レ背內證必熟と云も惠心僧都の常談なり

盃のそこをすつる事はいかゝ心得たると或人の尋させ給ひしに凝當と申侍るはそこにこりたるをすつるにや候覽と申侍しかはさにはあらず魚道也流を

のこして口のつきたる所をすゝぐなりとぞおほせられし

凝當　韻會當丁浪反底也韓子巨巵無レ當註無レ底也　魚道　下學集云魚道建ニ殘盃一也以ニ餘瀝一洗ニ盃痕一喩ニ之魚過ニ舊道一故曰ニ魚道一也魚雖ニ游ニ泳大海一終不レ忘ニ舊道一者是又出所未レ詳也

みなむすびといふは糸を結びかさねたるが蜷といふ貝に似たればいふとあるやん事なき人おほせられきになといふはあやまり也

みなむすひ　公家の表袴或は聖道の袈裟などのかざりに糸を以てむすびさぐるあり是をみなむすびと云　和名集云崔禹錫食經云河貝子和名美奈俗用ニ蜷字一非也音拳連蜷虫屈貌也殼上黑小狹長似ニ人身一者也

此段のみなむすびをになむすびとし末のになと云をはみなと云はと書たる異本あり誤也

門に額かくるをうつといふはよからぬにや勘解由小路二品禪門は額かくるとの給ひき見物の桟敷うつもよからぬにやひらばりうつなどは常の事也桟敷がまふるなどいふべし護摩たくといふもわろし修する護摩するなど云也行法も法の字をすみていふわろし濁りていふと清閑寺僧正仰られき常に云ことにかゝることのみおほし

額かくる　掲ッ字也　大鏡上實頼公の傳によろつのやしろに額のかゝりたりとあり　平家物語に額うち論ありよからぬ詞成べし　勘解由小路二品禪門　世尊寺行忠卿也　ひらばり　平張　護摩たく　護摩は梵語也焚燒と飜す然ればたくと云は重言なる故に嫌ふ也然れども梵語には重複おほし阿伽は水の梵語にして阿伽の水といひ摩訶は大の梵語にして摩訶大迦葉なんどいへり　清閑寺　東山しる谷の近所にあり　拾芥下本云清閑寺佐伯公行建立

花のさかりは冬至より百五十日とも時正の後七日ともいへど立春より七十五日おほやうたがはず

時正　彼岸の中日を時正といふ或僧家の説に龍樹菩薩の記をひきて都率天の側ニ靈所臺ありそこに樹あり二月花開七日七夜而落秋八月七日果成摩醯首羅梵天帝釋等各集りて七日之間世間善人惡人の名を印記す生死此岸涅槃彼岸故曰宜レ取ニ七日修ニ善業一いはゆる春秋七日也此事たしかならぬにや

砥平石の錄に彼岸は日本風俗なり唐土にこれなしといへり

遍昭寺の承仕法師池の鳥を日來かひつけて堂のうちまでえをまきて戸ひとつをあけたれば數もしらず入こもりける後をのれもいりてたてこめてとらへつゝころしけるよそほひおどろ／＼しく聞えけるを草かるわらは聞て人につげゝれは村のをのこどもおこりて入て見るに大雁ともふためきあへる中に法師まじりて打ふせねぢころしければ此法師をとらへて所より使廳へ出したりけりころす所の鳥を頸にかけさせて禁獄せられにけり基俊大納言別當の時になん侍りける

○遍照寺　拾芥云廣澤僧正造地　廣澤僧正は寛朝なり此寺嵯峨にあり○使廳　檢非違使廳也別當あり職原に見えたり○基俊　久我の一門基具の二男也　沙門の罪をば大方輕々敷なだむるは近代の弊法也　僧尼令すでに訓戒を垂たり石晋の高祖は佛像よくもの云と云ひふれて諸民を迷す僧徒を誅し唐の李德祐は甘露寺の常住物を訴る沙門を罪し柳渾は家に放火せる僧を刑す棠陰比事に見えたり

太衝の太の字點うつうたずといふ事陰陽の友から相論の事有けりもりちか入道申侍しは吉平か自筆の占文の裏にかゝれたる御記近衛關白殿にあり點うちたるを書たりと申き

○太衝　筆談七云六壬天十二辰之名古人釋二其義一云々九月木可レ爲二枝幹一故曰二太衝一々々者日月五星所レ出之門戸天之衝也○もりちか入道○吉平安倍晴明子吉昌兄也主計頭陰陽博士年八十五卒○うらふみ　占書とも占文とも書り名目にはせんもんと云也○裏にかゝれたる　むかしの本はあつき紙に書て卷本にするゆへに注釋をも勘文をも其裏にかきてみる也今のとぢ本の首書のごとし　范曄か父名泰也故に後漢書に泰の字を太と書り大學の大の字鄭玄讀て泰の音とすといへど朱文公の章句には大小の大なりと云

世の人あひあふ時しばらくも默止する事なし必言葉あり其事を聞におほくは無益の談なり世間の浮說人の是非自他のために失おほく得すくなしこれをかたる時たがひの心に無益のことなりといふ事をしらずあづまの人の都の人に交りみやこの人の吾妻に行て

身をたて又本寺本山をはなれぬる顯密の僧すべて我俗にあらずして人にまじはれる見ぐるし

○我俗　我風俗なり一本に屬の字をかけり我族類なるべし

人間のいとなみあへるわざを見るに春の日に雪佛を作りて其ために金銀珠玉のかざりをいとなみ堂をたてんとするに似たり其かまへをまちてよく安置してんや人の命ありとみるほども下より消る事雪のごとくなるうちにいとなみまつ事甚多し

○雪佛　貞和集子元雪佛頌一華鑿出一如來六出團々咲臉開識得髑髏元是水摩耶宮裏不レ投レ胎　子元は佛光國師祖元也又雪達磨雪布袋とあるも雪にて其像を作るなり　又張文潛戲作雪獅絶句ニ六出粧成百獸王日頭出後便郎當撑レ眉拄レ眼人誰怕想汝應レ無レ熱ニ肺腸一　雪にて獅子をつくりたると見えたり○安置　二字ともにをくとよむ也佛をすへをくをいふ

此段雪佛のたとへ金剛經の六喩莊子が朝菌蟪蛄のたとへの心あり

一道にたづさはる人あらぬ道のむしろにのぞみて哀わが道ならましかはかくよそに見侍らじ物をといひ心にも思へる事常のことなれどよにわろく覺ゆる也しらぬ道の浦山敷おぼえはあなうらやましなどかならはざりけんといひてありなん我智をとり出て人にあらそふは角あるものゝ角をかたふけ牙あるものゝ牙をかみいだすたぐひ也人としては善にほこらず物とあらそはざるを徳とす他にまさる事のあるは大なる失也品の高さにても才藝のすぐれたるにても先祖の譽にても人にまされりとおもへる人はたとひ言葉に出てこそいはねども内心にそこはくのとがありつつしみて是をわするべしをこにもみえ人にもいひけたれわざはひをもまねくはたゞ此慢心なり一道にも誠に長しぬる人はみづからあきらかに其非をしる故に志常に滿ずして終に物に伐ることなし

○あらぬ道の　我道にあらぬなり○角あるものゝ　牛羊のたゝかひ虎狼猪犬のたゝかふたぐひの如しと也○善にほこらす　上卷に見えたり○品の高き　位品のたかき也○そこはくのとが　若干の罪ありと也○をこにもみえ　嗚呼と書り世俗にしれものなんと云義なり○いひけたれ　いひけさるゝ

也源氏帚木巻光源氏名のみこと〳〵しくいひけたれ給ふとかおほかるべし○志常に見たすして　巽本に見たらずしてとあり　曲禮志不レ可レ滿樂不レ可レ極

年老たる人の一事すぐれたる才能ありて此人の後には誰にかとはんなどいはるゝは老のかたうどにていけるもいたづらならずさはあれどそれもすたれたる所のなきは一生此事にて暮にけりとつたなく見ゆ今はわすれにけりといひてありなん大方はしりたりともすゞろにいひちらすはさばかりの才にはあらぬにやと聞えをのづからあやまりもありぬべしさだかにも辨へしらずなどいひたるはなをまことに道のあるじとも覺えぬべしましてしらぬ事したりがほにおとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひきかするをさもあらずと思ひながら聞居たるいと侘し

○老のかたうど○すたれたる所なきは　一生其道をすてずしてつとめたる也

何事の式といふ事は後嵯峨の御代までは云ざりけるを近きほどよりいふ詞なりと人の中侍しに建禮門院の右京大夫後鳥羽院の御位のゝち又うちずみしたることをいふに世のしきもかはりたる事はなきにもと書たり

○後嵯峨院　人皇八十七代也土御門第二皇子○建禮門院　高倉院の女院永子也平清盛女也○右京大夫　藤原伊行女也三位中將平資盛に心を通せし人也建禮門院の官女也右京大夫家集云わかゝりし程より身をようなき物に思ひとりにしかばたゞ心よりほかのいのちのあらるゝだにもいとはしきにまして人にしらるべきことゝはかけても思はざりしをさるべき人々さりがたくいひはからふこと有て思ひのほかにとしへてのちまたこゝのへの中をみし方の契返々さだめなくわが心のうちもつれなくすそろはしふぢつぼのかたさまなどみるにもむかしすみなれしことのみ思いでられてかなしきに御しつらひもたゞ我心のうちばかりくだけまさるかなしさ月のくまなきをながめておぼえぬ事もなくかきくらさる昔よろしかなるうへ人などにてみし人々をもくしき上達部までみなあるにもとぞあらましなくぞあらましなど思つゞけられてありしよりもげに心の中はやらんかたもなくかなしきこ

と何にかはにんたかくらの院の御氣色にいとようにまいらせさせおはしましたる上の御さまにもかずならぬ心の中ひとつたえがたくきしかた戀しく月をみて　今はたゞしゐてわするゝいにしへを思いてよとすゝめる月かな

さしたる事なくて人のかりゆくはよからぬ事也用ありて行たりとも其事はてなばとくかへるべし久しく居たるいとむづかし人とむかひたれば詞おほく身も草臥心も閑ならず萬の事さはりて時をうつすたがひのため益なしいとはしげにいはんもわろし心つきなき事あらん折は中々そのよしをもいひてんおなじ心にむかはまほしく思はん人のつれ〴〵にていましばしけふは心閑になどいはんは此かぎりにはあらざるべし阮籍が青き眼誰もあるべきことなり其ことゝなきに人の來りてのどかにものがたりしてかへりぬるいとよし又文も久しくきこえさせねばなどばかりいひをこせたるいとうれし

○人のかり　人の許なり論語子游曰有二澹臺滅明者一行不レ由レ徑非二公事一未三嘗至二於偃之室一也○おなじ心にむかはまほしく　我と志同しき友の來りて閑にかたりなぐさむを云○阮籍が青き眼　竹林七賢の内也　晉書阮籍字嗣宗不レ拘二禮敎一能爲二青白眼一對レ之及二嵇喜來吊一籍作二白眼一喜不レ懌而退喜弟康聞レ之乃齎レ酒挾レ琴造焉籍大悅乃見二青眼一由レ是禮法之士疾レ之若レ讎籍時率意獨駕不レ由二徑路一車迹所レ窮輙慟哭而反○其事となきに人の來てのどやかに　是は人のもとへ行て用をかなへんとにはあらずたゞとふらひかたりてしづかに慰まんと也但ことしげくときめきたる人の所へは斟酌あるべきことなり○ふみも久しく　何かの用事はなくて久しくおとづれざるなどいひおこせたるもうれしきと也枕草紙さはがしう時めきたる所にうちふるめきたる人のをのがつれ〴〵といとまおほかるならひにむかしおぼえてことなることなき歌よみておこせたるすさまじ　此段の心明か也右の枕草子の詞に考合せて互見すべき也

此一段その事となきよりわけて別段としたる本あり惺窩も別段とせり

貝をおほふ人の我まへなるをばをきて餘所を見わたして人の袖のかけ膝のしたまで目をくばるまに前な

るをば人におほはれぬよくおほふ人は餘所までわりなく取とはみえずしてちかきばかりおほふやうなれどおほくおほふなり棊盤のすみに石をたてゝはじくにむかひなる石をまほりてはじくはあたらず我手もとをよく見てこゝなるひじりめをすぐにはじけばたてたる石必あたる万の事外にむきて求べからずたゞこゝもとをたゞしくすべし清献公が言葉に好事を行じて前程を問ことなかれといへり世をたもたん道もかくや侍らん内をつゝしまず輕くほしきまゝにしてみだりなれば遠國必そむく時はじめてはかりことをもとむ風にあたり濕に臥て病を神靈にうたふるはおろかなる人なりと醫書にいへるがことし目の前なる人の愁をやめ惠をほどこし道をたゞしくせば其化とをくながれんことをしらざるなり禹のゆきて三苗を征せしも師を班して德をしくにはしかざりき

○貝をおほふ　貝あはせの事なるべし○棊盤の角に石をたて　後漢書梁冀傳冀能挽ニ滿彈棊一注挽滿猶ニ引強一也藝經曰彈棊兩人對レ局白黑棊各六枚先引レ棊相當更先彈也其局以レ石爲レ之　事文類聚前集云魏文帝善レ彈レ棊能用ニ手巾角一時一書生又能低レ頭以ニ所レ冠葛巾一撇レ棊○ひじりめ　ひずみ也○禹の事外にむきて　貝をおほひ石をはじくことのみにあらず諸事己を正しくして外をねがひもとむべからず　中庸子曰射有レ似ニ乎君子一失ニ諸正鵠一反求ニ諸其身一○清献公か詞　言行錄後集五趙抃清献公字閲道衢州人擧ニ進士一事ニ仁宗英宗神宗・官至ニ參政一排韻趙抃氣貌清逸人不レ見ニ其喜慍一自號ニ知非子一爲ニ待御史一彈劾不レ避ニ貴勢一京師號爲ニ鐵面御史一皇朝類苑三十六云馮瀛王詩雖レ淺近而多ニ義理一曰窮達皆由レ命何勞レ發ニ嘆聲一但知行レ好事莫レ要レ問ニ前程一冬去氷須レ泮春來草自生請君觀ニ此理一天道甚分明○遠國必そむく　論語遠人不レ服則修ニ文德一以來之既來之則安レ之注内治修然後遠人服有レ不レ服則修レ德以來レ之亦不レ當レ勤ニ兵於遠一○風にあたり　本草序云眞誥曰常不ニ能愼レ事上者自致ニ百痾之本一而怨ニ咎於神靈一乎當レ風臥レ濕反責ニ他人於失覆一皆痴人也夫愼レ事上者謂ニ擧動之事必皆愼思一云々○その化　德化也○禹のゆきて　書大禹謨帝曰咨禹惟時有苗弗レ率汝徂征禹乃會ニ群后一三旬苗民逆レ命益曰惟德動レ天無ニ遠弗一レ屆禹班レ師振レ旅帝

乃誕敷ニ文徳ー舞ニ干羽于兩階ー七旬有苗格蔡氏傳云三苗國名在ニ江南荊揚之間ー恃レ險爲レ亂者也

わかき時は血氣うちにあまり心物にうごきて情慾おほし身をあやふめてくだけやすき事珠を走らしむるに似たり美麗をこのみて寶をついやし是をすてゝ苔の袂にやつれいさめる心さかりにして物とあらそひ心に恥うらやみこのむ所日々にさだまらず色にふけり情にめで行をいさぎよくして百年の身を誤り命を失つるためしねがはしくして身のまたく久しからんことをば思はずすけるかたに心ひきてながき世がたりともなる身をあやまつことは若き時のしわざ也老ぬる人は精神おとろへあはくをろそかにして感じうごく所なし心をのづからしづかなれば無益のわざをなさず身をたすけて愁なく人のわづらひなからん事を思ふ老て智のわかき時にまされる事わかくしてかたちの老たるにまされるがことし

○わかき時は　論語曰君子有ニ三戒ー少之時血氣未レ定戒レ之在レ色及ニ其壯ー也血氣方剛戒レ之在レ鬪及ニ其老ー血氣既衰戒レ之在レ得○情慾　七情六慾也○玉をはしらしむる　韻府張九齢議論如ニ下レ坂走丸ー

美麗をこのみて　戰國の諸公子の門客をあつめて珠履をはき玳瑁を簪にし唐の少年の銀鞍白馬千金蛾眉を買の類也○苔のたもと　遍昭歌　みな人は花の衣に成にけり苔の袂よかはきだにせよ　遠藤武者盛遠が年十八にして人の妻を忍び其夫を殺しうばひとらんとて夜あやまりて女の頸をきり大に驚きかなしみて出家して名を文覺とつきける類あり○百年の身　白氏文集第四新樂府井底引銀瓶云爲ニ君一日恩ー誤ニ妾百年身ー○あはくをろそかにして　年よりては精神おとろへ血氣淡薄にして物に感動する事すくなし

小野小町が事きはめてさだかならずおとろへたるさまは玉造といふ文に見えたり此文清行がかけりといふ説あれど高野大師の御作の目錄にいれり大師は承和のはじめにかくれ給へり小町のさかりなる事其後のことにやなを覺束なし

○小野小町　古今序小野小町はいにしへの衣通姬の流なりあはれなるやうにてつよからずいはゞよきをうなのなやめる所あるに似たりつよからぬはをうなのうたなればなるべし　中院准后親房古今

序注小野小町の事不ニ分明一仁明天皇承和の比の人出羽國郡司か女國色無双の人也或説に弘法大師のつくらしめ給ふ玉造といふ物あり是は玉つくりの小町と云者昔は色形はなやかなりしか老衰たるさまを詩につくらしめ給たる也然而小野玉造其姓各別の上他人たりと云事無レ疑い かさまにも老後は沈淪して奥州の方にて介ニ死去一歟實方朝臣下向の時にふるき首の目の穴より薄の生出たりけるをみてとりのけたりとも云也小町思ひつゝの歌は業平を戀てよめり色見えての歌は大江惟章が妻と成し時心がはりして藤原朝行が聟に成ける時よめりわひぬれはの歌は文屋康秀三河椽に下時具すべしと云時の返事なり　無名抄云業平朝臣かみをはさむとてこもり居たりける程に歌枕とも見んと數寄によせてあづまのかたへ行けるみちのくにいたりてやそ島と云所にやとりける夜野中に歌の上句を詠するこゑあり秋風の吹につけてもあなめ〳〵といふあやしく覺えてこゑを尋つゝ是を求に更に人なしたゞ死人のかうべ一ありあくる朝猶是を見るにかのどくろの目の穴より薄一本生たりけるが風のなびくをとのかく聞えければあやしくてあたりの人に此事を問或人語て云小野小町此國に下て此所にして命を終ぬ則頭是也と云こゝに業平哀にかなしくて涙を押て下ノ句を付たり　小野とはいはじすゝき生たりとぞ付たる其野をは玉造の小野とぞ云けるとぞ侍る玉造の小町と小野小町と同人かあらぬ物かと人々おぼつかなきことに申てあらそひ侍し時人のかたり侍しなり　古今十二しもついつもてらに人のわざしける日眞濟法師のだうしにていへりける言葉を歌によみて小野の小町がもとにつかはせりける　安倍清行朝臣　つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり　返し小町　をろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへす瀧つせなれば　顯昭古今抄に眞靜善祐法師弟子也善祐密ニ通二條后一者也云々是異説也○玉造と云文玉造小町子壯衰書云予行路之次歩道之間徑邊傍有ニ一女人一容貌憔悴身體疲痩云々予問レ女曰汝何鄉人誰家之子有ニ父母一哉無ニ子孫一歟女答レ予曰吾是倡家之子良室之女焉壯時憍慢最甚衰日愁歎猶深云々文繁故に略す○清行　安倍清行か三善清行か

と案ずるに三善清行なるべきか世に善相公と云これなり淨藏貴所の父也其文章とも多く本朝文粹にのれり算道の達者也寛平延喜の比の人也〇高野大師　弘法大師也大師附法傳並元亨釋書第一に詳也此段小町弘法時代前後の事をいへり弘法は仁明天皇承和二年三月二十一日入定年六十三其平生の著述三教指歸秘府論性靈集秘藏寶鑰等の書とも多かり玉造の文も大師の作なるかと兼好か云ごとく享徳年中に沙門祐成か玉造の跋にも大師の御作也と云り今眞言家へ尋れば御作の目録にいらずといふ兼好がみたる所の目録の本おなしからぬにや又玉造に樂天が秦中吟の詩を學と云り白氏文集第二に秦中吟は長安にて貞元元和の間つくれりとあり大師入唐は貞元二十年にあたれり樂天が死去は大中元年日本の承和十四年にあたれり大師入定より十三年後也然は秦中吟を學びて玉造を作れるといふも大師におゐてはあまりにまぢかく覺え侍る其上玉造の文大師の筆力よりはよはくおとりたるにや侍らん眞濟法師と小町同時なるやうに古今集に見えたり眞濟は弘法の弟子にて弘法入定より二十六年以後貞觀二年死去せり又小町が思ひつゝの歌は業平によみてつかはす業平元慶四年五十六にて卒す大師入定の時業平纔に十歳也小町いかんぞ十歳の人を戀慕せんやされば小町がわかくさかりなる事は大師より後なるべきこと也玉造の書を見るに遊仙窟の體に似たる所もあり此婦人の美麗歡娯をのべて後老衰して乞丐人の形に成たるを云所は琵琶行も似たり末に人間の盛衰を悟りて佛道にみちびき入るゝ所は大師の生死海賦九相の詩の心にも似たり此文清行書りと云若善相公ならば其文章相似たるやうに覺え侍る此人儒者の風ありて延喜帝へ奉る意見封事などには佛法は世教國政の爲にあしき事也と申されきされども其他の文詞詰眼辞などには佛道を結尾にかゝれたりしかれは安倍清行か文也といはんも又覺束なし又長明か無名抄に玉造の小野といへば同人のやうなりといへど親房のいへることく玉造も小野も皆姓氏なれば小町と云名はたま〳〵同じくとも玉造小町と小野小町と別人にて有べきにや又奥州にてふるき髑髏の目よりすゝきの生たるを見たるを無名抄には業平

也といひ親房抄には實方也と云これも兩説なり

小鷹によき犬大鷹につかひぬれば小鷹にわろくなるといふ大につき小をすつることはり誠にしかなり人事おほかる中に道をたのしふより氣味ふかきはなし是實の大事なり一たび道を聞てこれにこゝろざゝん人いづれのわざかすたれざらん何事をかいとなまんおろかなる人といふともかしこき犬のこゝろにおとらんや

○小鷹によき犬　史記蕭相國世家高帝曰夫獵追殺ニ獸兎一者狗也而發蹤指ニ示獸處一者人也今諸君徒能得ニ走獸一耳功狗也至レ如ニ蕭何一發蹤指示功人也史記李斯臨レ刑謂レ子曰吾欲レ與レ汝牽ニ黃犬一臂ニ蒼鷹一出ニ上蔡一逐ニ狡兎一得乎　樂府左牽レ黃右擎レ蒼

徒然草野槌下之三

世にはこゝろえぬことのおほきなりともあることにはまづ酒をすゝめてしゐのませたるを興とすること如何なるゆへとも心えず飲人の顔いと堪がたけに眉をひそめ人めをはかりてすてんとしにげんとするをとらへてひきとゞめてすゝろに飲せつれはうるはしき人も忽に狂人となりてをこがましく息災なる人も目のまへに大事の病者となりて前後もしらずたふれふすいはふべき日などは淺ましかりぬべしあくる日まで頭いたく物くはずによひふし生をへだてたるやうにして昨日の事覺えずおほやけわたくしの大事をかきてわづらひとなる人をしてかゝるめを見することと慈悲もなく禮義にもそむけりかくからきめにあひたらん人ねたく口惜と思はざらんや人の國にかゝるならひあなりとこれらになき人事にて傳聞たらんはあやしく不思議におぼえぬべし人の上にて見たるだに心うし思ひ入たるさまに心にくしとみし人もおもふ所なくわらひのゝしり詞おほくえぼうしゆがみひもはづしはきたかくかゝげてようゐなき氣色日來の

人とも覺えず女は額髮はれらかにかきやりまばゆからず顏うちさゝげてうちわらひ盃もてる手にとりつきよからぬ人はさかな取て口にさしあてみづからもくひたるさまあし聲の限り出して各うたひまひ年老たる法師めし出されてくろくきたなき身をかたぬきて目もあてられずゝちりたるを興し見る人さへうとましくにくしあるは又我身いみじき事どもかたはらいたく云きかせあるは醉なきし下さまの人はのりあひいさかひて淺間敷をそろし恥かましく心うきことのみありてはてはゆるさぬ物どもをしとりて緣より落馬車より落てあやまちしつ物にものらぬきはゝ大路をよろぼひ行てついひお門の下などにむきてえもいはぬことゞもしちらし年老袈裟かけたる法師の小わらはのかたをゝさへて聞えぬ事どもいひつゝよろめきたるいとかはゆしかゝる事をしても此世も後の世も益有べきわさならはいがゝはせん此世にはあやまちおほく財を失ひ病をまうく百藥の長とはいへど萬の病は酒よりこそをこれ憂わするといへど醉たる人ぞ過にしうさをも思ひ出てなくめる後の世は人の智恵をうしなひ善根をやく事火のごとくして惡をま

し萬の戒を破りて地獄におつべし酒をとりて人に飮せたる人五百生が間手なき者に生るとこそ佛は說給ふなれかくうとましと思ふものなれどをのづから捨がたき折も有べし月の夜雪のあした花の本にても心長閑に物語して盃出したる萬の興をそふるわざ也つれ〲なる日思ひの外に友の入來てとりをこなひたるも心なぐさむなれ〲しからぬあたりの御簾の中より御くた物みきなどよきやうなるけはひしてさし出されたるいとよし冬せばき所にて火にて物いりなどしてへだてなきどちさしむかひておほく飮たるいとおかし旅のかりや野山などにて御さかな何などいひて芝の上にて飮たるもおかしいたういたむ人のしゐられて少し飮たるもいとよしよき人のとりわきて今ひとつ上すくなしなどの給はせたるもうれしちかづかまほしき人の上戸にてひしひしとなれぬる又うれしさはいへど上戸はおかしく罪ゆるさるゝ者也醉草臥てあさいしたる所をあるじのひきあけたるにまとひてほれたるかほながらほそきもとゞりさし出し物もきあへずいだきもちひきしろひてにぐるかいとりすがたのうしろ手毛おひたるほそはぎのほどお

かしくつきくし
○しゐのませ　孟子離婁上是猶ニ惡レ醉而強ニ酒○
・うるはしき人も忽に狂人となりて　前漢書蓋寛饒
賀ニ許伯入第一曰無ニ多酌レ我々則酒狂丞相魏侯笑曰
次公醒而狂何必酒也　又酒の異名を狂藥と云也○
あくる日まで頭いたく　宿酒のさめざるを云莊子
狂醒三日不レ已晉書劉伶曰天生レ劉伶以レ酒爲レ名一
飲一石五斗解レ酲　說文酲病レ酒也○生をへだてた
ろ　死たる物に似たると也○からきめ　辛勞なる
めなり○人の國　異國なり○あなり　あるなり○
ひもはづし帶おびとけひろげの事也○まばゆから
ず　はぢざる也羞明○我身いみじきこと　我身を
よしとみづからほむるなり○ゑひなきし　萬葉
かしこしといふものよりも酒のみてゑひなきする
ぞましてあるらし　たゞにゐて語らひするは酒の
みてゑひなきするになをしかず也源氏若菜にゑひ
なきこそ○のりあひいさかひて　罵詈喧嘩する也
白樂天等レ勸酒詩云莫レ怪近來都不レ飲幾廻因レ醉却
沽レ市詐料平生狂レ酒客如今變作ニ酒悲人一○ついひ

ぢ　築地也○えもいはぬ事　爰にては嘔吐するの
類也○百藥の長　前漢書食貨志鹽食肴　將酒百藥
之長也○憂わするといへど　東方朔傳銷レ憂者莫レ
若レ酒古樂府何以忘レ憂唯有ニ杜康一杜康善造レ酒故爲
ニ酒名一○過にしうさをも　詩云憂心如レ醉又云憂心
如レ酲○後の世は　上に此世にはといひ爰に後の
世はと云今生後生酒をのめばあしきと也　往生禮
讚云恒以ニ瞋恚毒害火一焚ニ燒智惠慈善根一○萬の戒を
破りて　飲酒戒を破れば自餘の戒をも破る也　大
藏一覽第三云毘婆沙論云有ニ一鄔波索迦一稟性仁賢
受ニ持五戒一專精不レ犯後於ニ一時一爲レ渴所レ逼見ニ一
器中一有レ酒如レ水遂取飲レ之爾時便犯ニ飲酒戒一時有レ
隣雞一來入ニ其舍一盜殺而噉復犯ニ殺與レ盜戒一隣女尋レ
雞來入ニ其室一强逼交通復犯ニ邪行戒一隣家告レ官訊
問拒諱復犯ニ誑語戒一如レ是五戒皆由レ酒犯佛告ニ諸
比丘一汝等若稱レ佛爲レ師者自レ今已往下至ニ茅端所レ
沽酒滴一亦不レ得レ飲　同第四云諸經要集云長老莎
伽陀能降ニ惡龍一偶因ニ施主一持レ酒與飮醉倒在レ地無レ
所ニ覺知一佛與ニ阿難一行到ニ是處一見レ之知而故コトサラニ問是
誰耶阿難答言降龍長老莎伽陀佛言蝦蟆今尙不レ能レ

降爭奈龍耶佛歎曰聖人飲酒尙有此失何況凡夫又云如未曾有經開飲酒文殊問經開食肉等計此乃佛初成道時量衆生機不可頓斷頓制所以漸開漸制後知衆生根熟便乃永斷永制纖毫不許酒有三十五失般若論云佛告難提酒有多過一費財二多病三多諍四無恥五惡名六少智七所得不得八自說隱事九作事不成十愁本十一力少十二色壞十三不敬父十四不敬母十五不敬沙門十六不敬婆羅門十七不敬叔伯十八不敬佛十九不敬法二十不敬僧二十一友惡人二十二遠善人二十三破戒二十四無慚愧二十五不守六情二十六縱色二十七人憎二十八親嫌二十九行不善三十捨善三十一不任用三十二不涅槃三十三狂因三十四惡道三十五意不能修惠也此事大藏一覽第四にもあり文少異也○酒をとりて人に飲せたる人　梵網經心地法門品云是酒起罪因緣而菩薩應生一切衆生明達之惠而反更生衆生顚倒之心是菩薩波羅夷罪又云若佛子故飲酒而生酒過失無量若自身手過酒器與人飲酒者五百世無手何況自飲不得教一切人飲及一切衆生飲酒況自飲酒若故自飲教人飲者犯輕垢罪

孟子離婁下禹惡旨酒而好善言注戰國策曰儀狄作酒禹飲而甘之曰後世必有以酒亡其國者遂疏儀狄而絕旨酒○かくうとましと思ふ物なれど　是よりわけて別段とする本あり今合せて一段とす是より上には飲酒のあしきことをいひ是よりして飲酒のよき事を云なり○月の夜雪の朝花の本　陳鴻長恨歌傳驪山雪夜上陽花朝　李白月下獨酌詩花間一壺酒獨酌無相親擧盃邀明月對影成三人　又楊誠齋月下傳盃詩鶴林玉露に見えたり　謝惠連雪賦梁王遊於兎園乃置旨酒命賓友大寶遺事王元寶毎大雪掃雪開徑迎客飲宴謂之暖寒會　李白宴桃李園序開瓊筵而坐花飛羽觴而醉月　白樂天詩花下忘歸因美景樽前勸醉是春風○なれ〳〵しからぬあたりの御簾の中より　唐書に粟田眞人が唐國に入て則天皇后にまみへて麟德殿に宴しけるとあり又宋史に東坡が宜仁皇后の御前に侍りし事ありかやうの事思ひ出ぬ御酒（ミキ）神酒（ミキ）祭時如此書也○火にてものいり　宋壺山夜雪詩一爐柴火三盃酒誰記山陰有戴逵○御さか

な何かかな　催馬樂に我家は戸はり帳をもたてたれは大君きませむこにせんみさかなにはなによけんあはひさたをかゝせよけん○ちかつかまほしき人の　盧山三咲竹林七賢飲中八仙の類のことし○罪ゆるさるゝ　張安世は郎官の醉て殿上にゆばり小便したるをゆるし丙吉は御吏の醉て丞相の車上に吐を醉飽の失を以て士をすつへからすと云てつみせす漢書にあり醉人をは不ㇾ罸と云義あれとも世敎のためには大飲を戒むへき事也○あさいしたる　あさねしたる也○ひきあけたる　戸障子などをあけたる也○ひきしろひて　きるものなどきるまもなくひきつり持行也　此段酒を飲事のよきとあしきとをいふ其體筆にまかせてよく形容せり黄帝は酒を以て漿とすれは人の疾病と成と素問にあかせり夏后氏は酒をにくみて儀狄をうとめり周公旦は酒誥を作りて國民をいましめて只まつりにのみ酒をのめとの給へり君も臣も沈湎して身を亡ぼし國を破る古今少からず誠にいましめおそるべき也然とも洼樽杯飲是禮の始也いかんぞ玄水をすてんや其上量なけれども亂におよぼさずとあるは魯論に見えたり堯夫仲晦も三盃の微醺を興せすしもあらず酒は賓主のよろこびを交へ隣里の好を修するものなればすつべからず又すごすべからず　大藏一覽第三末曾有經云昔波斯匿王遊獵飢甚勅斬ニ厨官名修迦羅一語此一人稱ニ王意ニ者末利夫人聞ㇾ之即具ニ酒饌往至ニ王所ニ共飲相樂王瞋乃歇輙宥傳ㇾ命莫ㇾ殺ニ厨官ニ王至ニ明日ニ顏色憔悴夫人問何患耶王言昨日饑火所ㇾ逼怒殺ニ厨官ニ悔恨愁耳夫人笑曰其人猶在王大歡喜王即白ㇾ佛末利夫人持ニ佛五戒ニ犯ニ此飲酒妄語二戒ニ其事云何世尊答曰似ニ此犯ㇾ戒得ニ大功德ニ無ㇾ有ㇾ罪也　又云祇陀太子曰得ㇾ酒念ㇾ戒不ㇾ行ㇾ惡也佛言若如ㇾ汝者終ㇾ身飲ㇾ酒有ニ何惡ニ哉

黑戸は小松御門位につかせ給て昔たゝ人におはしましゝ時まさな事せさせ給しを忘れ給はて常にいとなませ給ける間なり御薪にすゝけたれば黑戸といふとぞ

○小松御門　光孝天皇號ニ小松天皇ニ仁明第二皇子也元慶八年二月即位時歳五十四仁和三年崩年五十七○黑戸　清涼殿の北にある瀧口戸の西○たゞ人におはしましゝ時　未ニ即位ニの時也○まさなど

無レ正事也今時の料理などして間食類なるべし〇御薪　正月十五日百官各薪を獻て宮內省に納事天武帝の時より始て御薪と名る事延喜式公事根源などにあれ共爰にては只小松帝の位につき給はぬ時まさなことの折たかせ給ふ薪柴也

鎌倉中書王にて御鞠ありけるに雨ふりて後いまだ庭のかはかざりければいかゞせんと沙汰有けるに佐々木隱岐入道鋸のくづを車につみておほく奉りたれば一庭にしかれて泥土のわづらひなかりけりとりためけん用意ありかたしと人感じあへりけり此事をあるものゝかたり出たりしに吉田中納言のかはきすたごのよういやはなかりけるとの給ひたりしかははづかしかりきいみしと思ひける鋸のくづ賤くことやうの事也庭の儀を奉行する人かはきすなごをまうくるは故實なりとぞ

〇鎌倉中書王　後嵯峨院第一の皇子宗尊親王一品中務卿征夷大將軍北條が時鎌倉にて將軍に成給ふ中書は中務の唐名王は親王也〇佐々木隱岐入道　東鑑四十建長二年十二月廿九日隱岐太郎左衛門入道心願者佐々木隱岐前司義淸嫡男幕府近習也俄出家遁世訖云々與二若狹前司泰村一度々爭二座着上下之事一而及二喧嘩一故今及レ此云々〇鋸のくづ　晉書陶侃嘗造レ船其木屑竹頭皆令二籍而掌一レ之其後元會大雪始晴廳事前猶濕於レ是以二所レ掌木屑一布レ地蕭服之題二陶侃一詩曰致二力中原一了無レ事竹頭木屑是功名〇吉田中納言　藤房歟萬里小路を吉田とも號するなり

或所のさふらひども內侍所の御神樂を見て人にかたるとて寶劔をば其人そもち給へるなどいふを聞てうちなる女房の中に別殿の行幸には晝御座の御劍にてこそあれとしのびやかにいひたりし心にくかりきその人ふるき典侍なりけるとかや

〇內侍所の御神樂　上卷に見えたり〇寶劔　御神樂おこなはるゝ時內侍所へ行幸ある其時もたせ給へる御劔は晝の御座の御劍也それをしらずして寶劔かと云はあやまり也寶劒は三種の神器の內也ひの御座は淸涼殿にあり〇別殿　爰にては內侍所を指なるべし〇典侍　內侍司に尙侍二人典侍四人掌侍四人あり供奉奏請宣傳の事を司る也禁秘抄云典侍の職尤重爲二御乳母一之人者諸大夫女聽レ之云々

案御釼二つあり寶釼と神璽とは常に夜御殿の御帳中御枕の上に安置す壽永の亂に寶劒入海の後清涼殿の御釼を用らる是晝御座の御劒也

入宋の沙門道眼上人一切經を持來して六波羅のあたりやけ野といふ所に安置して殊に首楞嚴經を講して那蘭陀寺と號す其聖の申されしは那蘭陀寺は大門北むきなりと江帥の說とて云つたへたれと西域傳法顯傳などにも見えず更に所見なし江帥は如何なる才覺にてか申されけん覺束なし唐土の西明寺は北むき勿論なりと申き

○入宋　支那へわたるに唐の世なれは入唐といひ宋元の時なれば入宋入元と云也○道眼上人　道元かと云人あれと別人なるべし道元は越前永平寺の開山にて日本曹洞宗の始也　釋書云道元建長五年八月死然れは兼好より前代の人也爰の道眼兼好同時也此草子の末に兼好那蘭陀寺に行て道眼の談義を聞たりとあり○一切經　大藏經也五千餘卷と七千餘卷との多少あり○首楞嚴經　十卷あり大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經と題せり疏云首楞嚴者梵語也涅槃云首楞者名二一切事竟一嚴者名レ堅即一切事究竟堅固也得二此三昧一觀法如レ幻於レ法自在云々　唐則天神龍元年中天竺沙門般剌密帝於二廣州制止道場一譯正諫大夫房融筆授烏長國沙門彌伽釋迦譯語　長水沙門子濬疏を作り懷遠これを釋す又師子林惟則も會解を著す

○那蘭陀寺　楞嚴經を中印度那爛陀大道場經とも申なり疏云那爛陀此云二施無厭一即龍名也西域記云菴沒羅園有レ池池中有レ龍名二施無厭一寺近二彼池一故以標號○江帥　大江匡房卿也大宰帥なる故に江帥と云　匡衡・擧周—成衡—匡房儒台（正二位權中納言）　江次第江談など云書も皆匡房作也ものしりにて口きゝなる故に世にかうそつなる物と云詞も江帥の字なりと云ならはせり○西域傳　玄弉三藏天竺へ渡りての記錄十二卷あり西域記と名づく○法顯傳　法顯三藏渡天の記錄也七卷に見えたり○西明寺　唐にて法相宗沙門圓測の居たる寺也圓測は窺基の弟子基は玄弉の弟子也白氏文集にも西明寺牡丹の詩有

さぎちやうは正月に打たるぎちやうを眞言院より神泉苑へ出して燒あぐる也法成就の池にこそとはやすは神泉苑の池をいふ也

○さきちやう　三毬打三毬杖爆竹　左義長如此書やうあまたあるなり　顯昭袖中抄十云十節錄黃帝取ニ蚩尤頭ー毬之今毬杖是也以ニ彼例ー漢土年始用ニ件事ー國中無ニ凶事ー仍日本國學ニ其例ー年始打ニ毬杖ー然則毬杖玉苅春と云也　事文類聚爆竹神異經西方深山中有レ人長尺餘犯レ人則病ニ寒熱ー名曰ニ山臊ー人以レ竹著ニ火中ー爆烞有レ聲而山臊驚憚　歲時記爆竹燃草起ニ於庭燎ー　諸書を考るに爆竹は除夜と元日とにする事也上元にあらず上元には漢武帝の太乙を祭るに昏時より夜のあくるまでおこなふを事の始として燃燈の事あり又天竺にも正月十五日僧徒あつまりて灯をともし佛舍利を見る事あり爆竹の事なし日本のさぎちやうは僧家にいひ傳るは漢明帝の時はじめて天竺より佛法わたる五岳の道士是をやぶらんと訴によりて其しるしを見んとて佛經を左にをき道士の書を右におきて火をかくるに道士の書燒失すされは左の儀長せりと云て左義長と云又西域義長や東土やとはやす西域佛法の義まさりて東土へ流布すと云事也ともいへり是は皆沙門の書をける事なれは我道を譽たるなるべし此段に正月に打たるきちやうとあれは袖中抄の說に同し此義をよしとすへきなり○眞言院　拾芥云在ニ八省北ー僧綱入候勤ニ御修法念誦等ー○神泉苑　拾芥云天子遊覽所以ニ近衛次將ー爲ニ別當ー乾臨閣謂ニ之正殿ー金岡疊石二條南大宮西八町三條北壬生東善女龍王常見ニ此所ー上代卿別者有ニ公當ー長保年中道綱補レ之

ふれ〳〵こゆきたんばのこゆきといふ事よねつきふるひたるに似たれは粉雪といふたまれ粉雪と云べきをあやまりてたんばのとはいふ也かきや木のまたにとりたふべしとある物しり申き昔よりいひける事にや鳥羽院おさなくおはしまして雪のふるにかく仰られけるよし讃岐典侍か日記に書たり

○こゆき　謝女は雪を鹽にたとへ香山は雪を玉屑に比し王勉は雪を豆稭灰にたとふるためしあれは米粉にたとへたる事さも有へし○かきや木のまた牆垣樹木の岐なり○讃岐すけが日記　三卷あり紀貫之土佐日記に舟子のうたふ歌を書載たりはるの野にてそねをばなくわかすゝきに手きるきるつんだるなをおやゝまほるらんしうとめやくふらん

かへらやよんへのうないもかないもがなせにこはんそらことをしておきのりわざをしてぜにもゝてこすおのれだにこず凡神樂催馬樂などもそのうたふ聲にひかれて字音の轉ずる事おほしてことに童謠俗謳はいよ〳〵いひあやまるへし俗間に傳る賴朝の時鎌倉の謠歌に一りけんぢやう二けんちやう三りけんしやう四けんしやうしこのはこの上にはゑもはもをとり十方鶍豆なかえたよ黑蟲は源太よあめ牛めくらが杖つゐてとほるところそれはそこへつんのけ是は鎌倉の町わりの一間町二間町など云義也しこのはことは厠にひさしく居をいふ此時局の女房君の寵有しかく有しと也ゑもはもをとりとは右衛門八と云者君の氣にいりて鳥をとるなり十方をありきて鶍をとり豆をゑにする也豆がなくは餌よといふ義也くろむしはからすぐちなはの事也源太是をとりてくろやきにし君へ進する也あめうし日くらとは是も時の威勢あるもの盲目なりそのありくを人々恐れてあたりをのけといふ義也又此時の俗歌に橋の下の菖蒲は折どもおられずかれどもかられず伊東殿土肥殿土肥がむすめ梶原源八介殿のけ太郎殿是は蒲御曹子の御連枝なれどよはきにもつよきにも何の用にたち給はぬを菖蒲のおれどもおられずといふ也其外伊東殿より下は時の大名權柄の人にてもてあつかふたりといふ心なり又一說に上の歌は最明寺の時の事也あめ牛は最明寺を申也とも云傳たり又高雄の法華會は傳敎大師よりはじまり每年三月十日におこなはる紫野にて人多くあつまり高雄は法花會やすらにはてよと云べきを今はあやまりてやすらいはなよとはやすなり此事彼山の緣起に見えたり

四條大納言隆親卿からざけと云ものを供御にまいらせられたりけるをかくあやしき物まいるやうあらじと人の申けるを聞て大納言鮭といふ魚まいらぬ事にてあらんにこそあれ鮭のしらぼし何條事かあらむあゆのしらぼしはまいらぬかはと申されけり

○隆親　四條隆季―隆房―隆衡―隆親　權大納言正二位 撿別當

○からざけ干鮭と書和名云崔禹錫食經云鮭 折青反 名佐介今案俗用鮭字非也 鮏音生 鯹魚一名也 其子似苺 音茂今按苺子即覆盆也見唐韵 赤光一名年魚春生年中死故名之　凡魚を生ながらほしかはかしたるを淡魚とも鱐魚とも云串に貫きたるを鮑

魚とも鮿魚とも法魚とも云鹽につけたるを醃魚鹹魚鮑魚鱁魚と云本草綱目にあり○鮭のしらぼし東鑑第十建久元年十月十三日頼朝於二遠江國菊河一佐々木三郎盛綱相二副小刀於鮭楚割一獻（居二折一）以二子息小童一送二進御宿一申云只今削レ之令レ食之處氣味頗懇切早可二開食一歟云々殊御自愛彼折敷被レ染二御自筆一曰まち得たる人の子さけもすはやりのわりなく見ゆる心さし哉○鮎のしらぼし　和名云鮧魚一名鮎魚（和名安由揚氏漢語抄云銀口魚又云細鱗魚）春生冬死故名二年魚一　宗廟を祭るに薧魚曰二商祭一鮮魚曰二脡祭一と曲禮に見えたり稭（サシテ）二魚鱐一以爲二夏槁一助二生皁一也と云事は古の訓なりと國語に見えたり鮭も鮎とひとしくよしある魚なれば供御にまいるべきもの也又本草綱目なを見るに鱖魚はさけなり鰷魚はあゆ也今和名集に云ところの鮭と鮎と世に久しく書傳るゆへにしばらく引用るなり

人つく牛をば角をきり人くふ馬をば耳をぎりてそのしるしとすしるしをつけずして人をやぶらせぬるはぬしのとが也人くふ犬をば養ひかふべからず是みなとかあり律の禁なり

曲禮獻レ鳥者佛二其首一畜レ鳥則勿レ佛也注佛謂レ捩二轉其首一恐二其啄之害一レ人也畜者不レ然順二其性一也又曰效二馬羊一者右牽レ之效レ犬者左牽レ之注效陳獻也以二右手一牽レ之爲レ便犬以二左手一防二其齧噬一事文類聚云庾嶷遁レ世不レ仕牛馬有二踶齧一者恐レ傷レ人不レ鬻二於市一　周書西旅貢レ獒太保乃作二旅獒一用訓二于王一曰犬馬非二其土性一不レ畜珍禽奇獸不レ育二于國一注獒犬高四尺能知二人心一可レ使者猛而搏人者異二於常犬一律廐牧曰凡馬牛及犬有二觝蹋咬人一而記號拴繫不レ如レ法若有二狂犬一不レ殺者笞四十疏云依二雜令一畜産觝レ人者截二兩角一蹋レ人者絆レ足齧レ人者截二兩耳一此爲二標幟羈絆之法一

相摸守時頼の母は松下禪尼とぞ申ける守をいれ申さるゝ事ありけるにすゝけたるあかりさうじのやぶればかりを禪尼手づから小刀してきりまはしつゝはられければせうとの城介義景其日のけいめいして候けるが給はりてなにがし男にはらせ候はんさやうの事に心得たる者に候と申されければ其男尼が細工にもまさり侍らじとてなを一間づゝはられけるを義景皆をはりかへ候はむははるかにたやすく候べしまだ

らに候も見ぐるしくやとかさねて申されければ尼も後はさは〳〵とはりかへんと思へどもけふばかりはわざとかくてあるべき也物は破れたる所ばかりを修理して用る事ぞとわかき人に見ならはせて心つけんため也と申されけるいとありがたかりけり世をおさむる道儉約を本とす女性なれども聖人の心にかよへり天下をたもつ程の人を子にてもたれける誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ

○時頼關東の執權正五位下相摸守號ニ最明寺ニ法名道崇くわしく東鑑元亨釋書にあり

北條平時政—義時—泰時—時氏—經時
　　　　　　　　　　　　　　　—時頼

○松下禪尼　東鑑四十四建長六年十月六日相州室産ニ女子ニ加持若宮僧正隆辨驗者清尊僧都也奥州女房松下禪尼相州等群集安東左衞門光成奉行有ニ祿物等銀劒五衣馬ニ置レ鞍云々○守をいれ申さるゝ　禪尼へ相摸守を請待せらるゝなり○せうとの城介義景　せうとは兄弟也禪尼と義景と兄弟也秋田城介義景

ふ事也東鑑に詳也○けいめい　遊仙窟には營媒と書り爰にては經營と書べし夕顔巻にけいめいとあるを源語類聚に敬命と書りうやまいしたがふ義也○物は破れたる所　貞永式目に小破之時且加ニ修理ニとあるは泰時か法政也彼禪尼がやうのためしを見聞しゆへに如レ此して先祖の風を時頼に教へしめすなり○儉約をもとゝす　論語子曰以レ約失之者鮮矣又曰奢則不孫儉則固與ニ其不孫ニ也寧固何晏集解云去レ奢從レ約謂ニ之儉ニ

此段儉約を人の上たる人にしめさんと也されは萊公が寢所一青幃二十餘年時々有ニ破壞ニ益命補葺とあり其三公の位にのぼりて樓臺をたつるほどの地さへなきありがたき心なりしからざれば劉宋の君の葛灯籠麻繩拂を見て田舍翁の具也と云へる子孫なきにあらず

城陸奥守泰盛はさうなき馬のり也けり馬をひき出させけるに足をそろへてしきみをゆらりとこゆるを見ては是はいさめる馬也とて鞍を置かへさせけり又足をのべてしきみに蹴あてぬれば是はにぶくしてあやまちあるべしとてのらざりけり道をしらざらん人か

はかりをそれなんや
○しきみ　閾とも閫とも書り　道を知れる人はおそれおもふ事御を執にかぎらす萬事にわたるべし我心に敬を存するも又然り入ㇾ虚如ㇾ有ㇾ人執ㇾ虚如ㇾ執ㇾ盈といへるは主一の工夫にあらずやよく敬して事をおこなはゞあやまちすくなかるべし故に先儒敬の字を釋するに畏の字を用る事此義なるべし
吉田と申馬乘の申侍しは馬ことにこはきもの也人の力あらそふべからずと知べしのるべき馬をはまづよく見て強き所弱き所を知べし次に轡鞍のぐにあやうきことやあると見て心にかゝる事あらば其馬をはすべからず此用意を忘れざるを馬乘とは申也これ秘藏の事也と申き
○はすべからず　馳騁の字也逸足をとるべからずと也
此段も前段と同く馭藝の上につきての心得をいふなり
萬の道の人たとひ不堪なりといへども堪能の非家の人にならぶ時必まさる事はたゆみなくつゝしみてかろ〳〵しくせぬとひとへに自由なるとのひとしからぬ也藝能所作のみにあらず大方のふるまひ心づかひもをろかにしてつゝしめるは得の本也たくみにしてほしきまゝなるは失の本なり
○不堪　無器量也○非家　其家にあらざる人也
此段其家に生れつきたるはにぶけれとも非家のさかしきものよりまされりと云大かた尋常の事也家に殘せる書も有相傳うくるともあり見聞のなれたる事もあれは鄭家の婢の毛詩をうたふがごとし非家のものゝにはかに學ぶとかはれる事勿論なるべしされともいたりてさかしき者は此限にあらず京なる醫者の時めきたるが數世の醫師法印なんどよばるゝ人に逢て醫學を談話する時そなたは年もわかし習へる功もふかゝらじなんどおのれ家傳の宿醫がほして云けれは左樣にもあるべけれとも又一歳の猫兒の十歳の鼠をとるもあれはたゞ其人によるへくや候らんと答へ申けると或人のかたりき醫術よろづの藝のみにあらず學問の道も又然り○おろかにして　聖門にても參子參鈍にして篤實なれはついに一貫の傳を得たりしかれども眞の下愚は惡に入て善に入る事なし桀紂か惡も畢竟は下愚の

至極也○たくみにして　蘇秦張儀か揣摩の法たくみならざるにはあらす然もおごりいつわりほしひまゝなるゆへに果して災難にかゝれり

或者子を法師になして學問して因果の理をもしり說經などして世わたるたつきともせよといひければ敎のまゝに說經師にならんために先馬に乗ならひけり輿車もたぬ身の導師に請ぜられん時馬などむかへにおこせたらんにもゝじりにて落なんは心うかるべしと思ひけり次に佛事のゝち酒などすゝむる事あらんに法師の無下に能なきは檀那すさまじく思ふへしとて早歌と云ことを習ひけり二のわざやう／＼さかひに入ければいよ／＼よくしたく覺えて嗜けるほどに說經習ふべき隙なくて年よりにけり此法師のみにもあらず世間の人なべて此事あり若き程は諸事につけて身をたて大なる道をも成し能をもつき學問をもせんと行末久しくあらます事とも心にはかけながら世をのどかに思ひて打おこたりつゝまづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日を送れはこと／＼なす事なくして身をもゝたず悔れとも取かへさるゝ齢ならねは走りて坂をくたる輪のごとくに衰へゆくされは一生のうちむねとあらまほしからん事の中にいづれかまさるとよくおもひくらべて第一の事を案じ定て其外は思ひすてゝ一事をはげむべし一日の中一時の中にもあまたのことのきたらんなかに少しも益のまさらん事をいとなみて其外をはうちすてゝ大事をいそくべき也何方をもすてじと心にとりもちては一事もなるべからすたとへば碁をうつ人一手もいたづらにせず人にさきだちて小をすて大につくがことしそれにとりて三の石をすてゝ十の石につくことはやすし十をすてゝ十一につく事はかたしひとつなりともまさらんかたへこそつくべきを十まて成ぬればおしくおぼえておほくまさらぬ石にはかへにくし是をも捨ずかれをもとらんとおもふ心にかれをもえず是をもうしなふべき道なり京にすむ人いそぎて東山に用ありて既に行つきたりとも西山に行て其益まさるべきとを思ひえたらは門より歸りて西山へゆくべき也こゝまできつきぬれは此ことをは先いひてん日をさゝぬ事なれば西山の事はかへりて又こそ思ひたゝめとおもふ故に一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる是をゝそるべし一事を必なさんと思はゝ他の

事は破るゝをもいたむべからす人のあざけりをも恥べからす萬事にかへすしては一の大事成へからす人のあまた有ける中にてあるものますほのすゝきまそほのすゝきなどいふ事ありわたのへの聖此ことを傳知たりと語りけるを登蓮法師其座に侍りけるか聞て雨のふりけるに簑かさやあるかし給へ彼薄の事ならひにわたのべの聖のかり尋まからんといひけるをあまりに物さはがし雨やみてこそと人のいひければ無下の事をもおほせらるゝ物哉人の命は雨のはれまをもまつ物かは我もしにひしりもうせなば尋きゝてんやとて走り出て行つゝ習ひ侍りにけりと申傳たるこそゆゝしく有がたう覺ゆれ敏ときは則功ありとぞ論語と云文にも侍るなる此薄をいぶかしく思ひけるやうに一大事の因縁をぞおもふべかりける

○世渡るたつき　たつきはたより也○早歌　今の小歌の類成べし神樂催馬樂の中にも早歌有○坂をくだる輪　後漢皇甫嵩傳閻忠曰逆レ坂走レ丸迎レ風縦レ棹豈云易哉○碁をうつ人　棊經を爛柯經と號す其中に捨レ小而取レ大と云事あり○ますほのすゝき　長明無名抄云雨の降ける日或人のもとに思ふどちさしあつまりて古ことなどかたり出たりけるついでにますうの薄と云はいかなる薄ぞなどいひしろふ程にある老人のいはくわたのべと云所にこそ此事知たる聖はありと聞侍しかどほの〴〵いひ出たりけり登蓮法師其中にありて此事を聞て詞すくなに成て又とふこともなくあるじに簑笠しばしかしたべと云ければあやしと思ひながらとりいでたりけるに物語をも聞さして簑うちきわらぐつさしはきていそぎ出けるを人々あやしかりて其謂をとふにわたのべへまかる也年ころいぶかしく思ひ給へしことをしれる人有と聞てはいかでか尋にまからざらんといふおどろきながらさるにても雨やみて出たまへといさめけれどはかなきことをもの給ふかな命は我も人も雨の晴まなどを待べき物かは何事もいましづかにとばかりいひすてゝ出けりいみじかりける數寄もの也さて本意のごとく尋相てとひきていみしうひさうしけり此事第三代の弟子にて傳へならひ侍也此薄同さまにてあまた侍りますほの薄まそをの薄ますうの薄とて三草は侍也ますほの薄といふは穂の長て一尺ばかりあるをい

に彼ます鏡をば萬葉集に十寸（マス）のかゞみとかけるに
て心つべしまそをの薄と云ば眞麻の心也これ俊頼
朝臣の歌に讀て侍るまそをの糸をくりかけて侍と
よ糸などのみだれたるやら也ますうの薄とは誠に
すはうなりと云心也すはうの薄と云べきを言葉を
略したる也色深き薄の名なるべし是は古今集など
にたしかに見えたることはなけれども和歌のなら
ひかやうの古とをもちゐ侍るも又よのつねのこと
也又あまねくしらず見だりにとふべからず越前名
所色濱しほのまにますうの小貝ひろふとて色の濱
とは云にやあるらん西行　○登蓮法師　世の中の人
の心のうき雲に雲がくれするありあけの月詞花集
〇敏則有レ功　論語陽貨篇　○一大事因緣　法華經
云世尊唯以ニ一大事因緣一故出ニ現於世一
此段無益の所作をならふ内に年老て死に近し只一
大事を片時も早く學びて餘事をさしおくべしと也
げにもとぞおぼゆるされども又嶮岨艱難つぶさに
なめざれば能知がたき事もあり宋の張横渠わかふ
してよりひろくもの學で年十八にしてよく兵法を
談す功名を立ん事是也と自負するを范文正公儒者

は何ぞ兵を事とせんと云てすゝめて中庸をよまし
むよみて未心得ぬ事ありとて釋氏の法莊老の書を
學ぶこと數年いよ〳〵心得るにたらずとて六經に
立かへりて工夫あり洛陽に到て二程にまみへ道學
のものがたりして大にさとりて吾道はこゝにあり
他に求べからずと云て則異學をすてゝ關中の大儒
となる早悦ニ孫吳一晩逃ニ佛老一といへるは是事也
今日は其事をなさむと思へどあらぬいそぎ先出來て
まぎれくらし待人はさはり有てたのめぬ人は來りた
のみたる方の事はたがひて思ひよらぬ道ばかりはか
なひぬわつらはしかりつる事はことなくてやすかる
へき事はいと心くるし日々に過行さまかねて思ひつ
るに似す一年の事もかくのことし一生の間も又しか
なりかねてのあらまし皆たかひゆくかとおもふにを
のづからたかはぬ事もあれはいよ〳〵物は定がたし
不定と心得ぬるのみ誠にてたかはす
○待人は　鄧侯挽不レ來謝令推不レ去○不定と心得
ぬるのみ
兼好は人間不定とおもへは萬事ちがはすといへり
是日前ある事にて佛老の見所なり或人程子に釋氏

生死無常の説いかゞと問ければ程子古今生あれは死あり是すなはち常也若生て不レ死かへりて是無常なりと云り平常の道古今の定理なり事かはれども理はかはらぬ也易は交易變易の義ありて其名を得たり是さだまれる理にあらずや水火山澤の互に氣を通し寒暑晝夜のかはる〳〵來る誰か不定とせん

妻といふものこそをのこの持まじきものなれいつも獨ずみにてなど聞こそ心にくけれ誰がしかむこに成ぬとも又如何なる女を取すへて相住など聞つれは無下に心をとりせらるゝわざなりことなる事なき女をよしと思ひさだめてこそそひゐたらめど賤くもをしはかられ能女ならは此男をぞらうたくしてあが佛とまもりゐたらめたとへはさばかりにこそと覺えぬべしましして家のうちをおこなひおさめたる女いと口おし子などいできてかしづき愛したる心うし男なく成て後尼になりて年よりたる有さまなき跡まで淺ましいかなる女なりとも明暮そひ見んにはいと心つきなくにくかりなん女のためも半空にこそならめよそながら時々通ひすまんこそ年月へてもたえぬなからひとゞならんあからさまにきてとまりゐなどせんはめづらしかりぬべし

○妻といふ者こそ　南史齊何點隱居不レ仕絶レ昏何尙之强爲レ娶ニ任氏一禮畢將ニ親迎一點涕泣求レ執ニ本心一遂罷既老又娶ニ魯國隱者孔嗣女一雖レ昏亦不ニ與レ妻相見一別レ宇以處レ之人莫レ諭ニ其意一張融爲レ詩嘲レ之曰惜哉何處士薄暮遘ニ荒淫一

○らうたく　良たくよき心也○あが佛　吾日本紀にあかとよめり　源氏手習卷にあかほとけ京にいで給はゞこそあらめ　花鳥にあか佛は我佛也　中宗朝裴談崇ニ奉釋氏一妻悍妬談畏レ之嘗云妻有レ可レ畏者三一少之時視レ之如ニ生菩薩一安有ニ人不レ畏ニ生菩薩一及ニ男女滿一レ前視レ之如ニ九子魔母一安有ニ人不レ畏ニ九子魔母一至ニ五六十一薄施ニ粧粉一或靑或黑視レ之如ニ鳩盤茶一安有ニ人不レ畏ニ鳩盤茶一本事詩及太平廣記○子などいできて　公羊傳母以レ子貴子以レ母貴　後漢書母愛而子抱

此段妻をさだめて常にもたずしてまれまれに女とかよひたる心よしといへり古今の人を見るにわかふして娶ざるあり壯にしてめとるあり妻死て後再

めとらざるあり道士桑門の外一生妻をもたぬ人まれ也周澤か三百六十日齋し李益が門をとぢて妻をふせぐよからぬ事也齊の何點は齊梁の間にありて隱逸の名をあらはし武帝につかへず節をたかふる事後世まで稱せらる妻をめとらず年久ありて後に婚をなすといへ共別室において相見へず人その心をしることとなしといへり兼好が心も何點が心ありけるにやそれ男女は人倫の本也男子に家室あらんとねがひ女子によきむこをもとむるは天下父母の心也男は外をおさめ女は内をたゞす家法にあらずや妻子和いで父母に順ふ家の榮にあらずやいかんぞ五倫をさりて道を求めん兼好は佛老の跡をしたゐて妻帑の累ひある事をいふといへども又女にあからさまに引通ひたるがよしといふ時は何點が妻をもたず世を遁れて常の人にまされとも老て女をめとりて張融にわらはるゝがごとし袴をざへや高師直かもとにて艶書をやとはれかきて師直が心にちがひけん誠に無下におぼゆる

夜に入て物のはへなしといふ人いと口おし萬のものきらかざり色ふしも夜のみこそめてたけれ晝はことそぎをよすけたる姿にてもありなん夜はきらゝかに花やかなるさうぞくいとよし人のけしきも夜のはがけぞよきはよく物いひたる聲もくらくて聞たる用意ある心にくしにほひも物の音もたゞ夜ぞひときはめでたきさしてことなる事なき夜うち更てまいれる人のきよげなるさましたるいとよしわかきどち心とどめて見る人は時をもわかぬものなれはことにうちとけぬへき折節ぞけはれなくひきつくろはまほしきよき男の日暮てゆするし女も夜ふくる程にすべりつゝ鏡とりて顔などつくろひて出るこそおかしけれ

○はへ　映　花の夕榮なども書なり○をよすけたる　桐壺巻にをよすけおはする源語類聚に日本紀を引て助及と書り○夜のほかげ　火かげ也○けはれ　褻晴　けはなれたる義也はれは法禮の義也又私公とも書へし常にきる物をけごろもといひ朝服禮服をはれぎぬといふ○ゆする　東屋巻にゆするのなごりにや　河海に沐い字を書り沐浴を云○すべりつゝ　奥に入事也今も御前より女の局へおるるをすべると云也

此段きよき男もよき女も夜のけしき一きわよきと

也今も少年の風呂あがり女の曉粧みな人の目たつ
もの也
神佛にも人のまうでぬ日夜まいりたるよし
　前段のあまりなり
くらき人の人をはかりて其智をしれりと思はむさら
にあたるべからすつたなき人の碁うつ事ばかりにさ
とくたくみなるはかしこき人のこの藝にをろかなる.
を見て己が智におよばすと定て萬の道のたくみ我道
を人のしらざるをみてをのれすぐれたりと思はん事
大なる誤りなるべし文字の法師暗證の禪師たがひに
はかりてをのれにしかずと思へる共にあたらずをの
れが境界にあらざる物をばあらそふべからず是非す
べからず

○くらき人　愚闇の人也　莊子小知不レ及ニ大知一
又曰大知閒々小知閒々注閒々言ニ智量大小不
同一也　賈生服鳥賦小知自私兮賤レ彼貴レ我○萬の
道のたくみ　百工也
尚書五子之歌予視ニ天下愚夫愚婦一一能勝レ予
○文字の法師暗證乃禪師　止觀第五暗證禪師誦文
法師と有是也文字法師は教相を習て坐禪をしらぬ
也暗證禪師は坐禪工夫を專として教相にくらき也
儒者にも誦文暗證あり漢唐訓詁の儒は誦文也江西
の學者は暗證也訓詁にかゝわるものは支離影響の
弊あり頓悟に走ものは虛遠詖淫の病あり故に尊ニ
德性一道ニ問學一此二のものかくまじき也學で思ひ
おもひて學ぶ時は必罔殆(モウタイ)の病なしと云事を知べし
達人の人を見る眼は少しもあやまる所あるべからず
たとへば或人の世に虛言をかまへ出して人をはかる
事あらんにすなほにまことゝ思ひていふまゝにはか
らるゝ人ありあまりにふかく信を起してなをわづら
はしく虛言を心得そふる人なり又何としも思はて心
をつけぬ人あり又いさゝか覺束なくおぼえてたのむ
にもあらすたのまずもあらで案じゐたる人あり又ま
ことしくは覺えねども人のいふ事なれはさもあらん
とてやみぬる人もあり又さま〳〵に推し心得たるよ
しゝてかしこけにうちうなづきほゝえみてゐたれと
つや〳〵知らぬ人あり又すいし出してあはれさるめ
りと思ひながらなをあやまりもこそあれとあやしむ
人あり又ことなるやうもなかりけりと手を打てわら
ふ人あり又心得たれどもしれりともいはず覺束なか

らぬはとかくの事なくしらぬ人とおなじやうにて過る人ある又この虚言の本意をはしめより心得て少しもあざむかすかまへ出したる人とおなし心になりて力をあはする人あり愚者の中の戯だに知たる人の前にては此さま〳〵のえたる所詞にてもかほにてもかくれなくしられぬべしましてあきらかならん人のまどへる我等をみんこと掌の上の物を見んか如し但かやうのおしはかりにて佛法までをなすらへ云へきにはあらず

○達人の人を見る眼　賈誼鵩鳥賦　通人大觀兮物無レ不可一注通一作レ達　眼にあまたの品有父母所生の眼を肉眼とし内外の彌樓山を見を天眼とし諸色を見て染着無を惠眼とし眼根清淨にして色を見てあやまつなき事を法眼とし一眼に諸眼の用を具するを佛眼とすと法華玄義にあり　唐の太宗の李道玄か軍にうたれん事をしり裴行儉が王楊盧駱が終あしからんことをしり宋の蘇洵か王荆公が姦を辨る類すくなからず況や聖賢の眼目をや文宣王の視觀察鄒國公の眸子を見る類まことにのがれかくるゝ所なし○すなほにまことゝ思ひて　校人魚を烹食ていつはりて池に放つといへは子產まことゝ思ふ類也是は道理のある處なれば智者もあざむかるゝ事あるべし愚者は道理なき事をもまことゝ思ひて信ずるもの也あまりに深く信を起して　一犬吠レ形萬犬吠レ聲一人傳レ虚萬人傳レ實おろかなるものの佛神の奇瑞をいへばいよ〳〵とりそへて雪上加レ霜如し○又何としも思はて　馬耳の東風なるべし○又いさゝか覺束なく　狐の氷をきくが如し疑而未レ決之人也○又まことしくは覺えねとも　以レ誤襲レ誤　唐風采苓の詩をよまんもの此いましめを知べし○又さま〳〵に推し　不レ知之爲レ知之これ論篤而色莊者にちかし○又すいし出して　狗のさきたちゆきて又たちかへり人にしたがふを猶豫と云其心定れるところなし○又ことなるやうもなかりけりと　以レ鐵作二門限一鬼拍レ手而笑○又心得たれとも　不レ逆レ詐而先覺者乎○又此虚言の本意を張儀か楚にありて鄭袖と謀を通ずるかことし　凡人の言眞僞あり僞をまことゝするは愚なれども智者はまれなれば多くはあざむきたらさるゝ也明君は浸潤膚受の行れぬやうにするを本とす兼好は佛

法までをなぞらへ云へからずといへども我道よりみれば彼元來虛妄也莊老は蒜蟲を籠にせり台家には種々說法といひ二十八品皆名方便といひ禪家には小玉を呼の手段なりと云いかんぞ自らいつはりて人を眞實の道にひきいれんや○掌の上の物　天眼第一の阿那律三千世界を見る事掌上の菴摩菓を見るがごとしと淨名經にあり　中庸曰治レ國其如レ示二諸掌一乎論語にもあり

徒然草野槌下之四

ある人久我繩手を通りけるに小袖に大口きたる人木造り地藏を田の中の水にをしひたして念比にあらひけり心得がたく見るほどに狩衣の男二三人出きてこにおはしましけりとて此人を具していにけり久我内大臣殿にてぞおはしける尋常におはしましける時は神妙にやんごとなき人にておはしけり

○木造の地藏　木にてつくれる地藏なるへし○久我内大臣殿　通基公也○此殿常は神妙におはせしが　今此段の趣は氣ちがいたる躰と見えたり

東大寺の神輿東寺のわか宮より歸座の時源氏の公卿まいられけるに此殿大將にてさきをはれけるを土御門相國社頭にて警蹕いかゞ侍るべからんと申されければ隨身のふるまひは兵仗の家がしる事に候とばかり答給けりさて後に仰られけるは此相國北山抄を見て西宮の說をこそしられざりけれ眷屬の惡鬼惡神ををそるゝ故に神社にてことにさきをゝふべき理りありとぞおほせられける

○東大寺の神輿を内裏へふる時其間東寺に置なり

東寺の若宮○此殿　上の段の久我内大臣也○さきをゝはれける　隱聲在二河海一　又喝道前呵警蹕みなさきこゑ也眞言には阿吽の二字のならひありと云○土御門相國　定實公也久我の庶流○警蹕　前漢列傳十七梁孝王得レ賜二天子旌旗一從二千乘萬騎一出稱レ警入言レ蹕注師古曰警者戒肅也蹕止二行人一也言二出入一者互レ文耳出亦有レ蹕漢儀注皇帝輦動左右侍二帷幄一者稱レ警出レ殿則傳レ蹕止レ人清レ道也　韻會蹕本作レ趕○隨身のふるまひ　大將のつれらるゝ隨身にさきをおはせらるゝ也○北山抄　公任卿の作也一本に小野抄とあり小野宮の抄也○西宮の説　西宮記は西宮左大臣高明公作也河海云昔は内々のありきにもさきをおいけりと云々用心のため也變化の物ぬさき聲におそるゝと云り西宮左大臣神泉苑の艮角にて變化の物にあはれけるにもさき聲する時はひき入けるとあり

諸寺の僧のみにもあらず定額の女孺といふ事延喜式に見えたりすべて數さだまりたる公人の通號にこそ

○定額　續日本紀文武天皇大寶元年八月皇親年滿者不レ論二官不一皆入二賜レ祿之額一　弘仁文曰太政官府禁二斷京職畿内諸國私作一伽藍一事右奉レ勅定額諸寺其數有レ限私營作先既立レ制比來所司寛縱曾不二糺察一如經二年代一無二地不一レ寺　十八史略第七元以二耶律楚材言一始定二天下賦稅一上田每レ畝稅三升中田二升半下田二升水田一畝五升商稅三十分之一五戶出二絲一斤一以給二諸王功臣湯沐之賜一鹽每二銀一兩一四十斤永爲二定額一　みな數の定りたるを定額と云也唐志に出たり○女孺　禁秘抄云近代不レ着レ衣只小袖唐衣也以二左道姿一御調度觸レ手上下格子奉仕是藏人等如在不當故也御所中掃除眀油役女孺所レ知也○延喜式五十卷あり延長年中右大臣忠平勅を奉て博士どもをあつめて是を撰す

揚名介にかぎらず揚名目（サクワン）といふものもあり政事要畧にあり

○揚名の介　やうめいのすけとのゐものゝふくろみつがひとつ是源氏物語三ヶ大事也と云名ばかり國の介に成たる者也○揚名目　受領に諸國に守介掾目の三のしなあり職原に見えたり○政事要略百三十卷あり惟宗允亮撰記二公務交替糺彈雜事至要臨時雜事等一

横川行宣法印が申侍しは唐土は呂の國なり律の音なし和國は單律の國にて呂の音なしと申き

○行宣法印　非蛙抄六信實女子辨内侍は老の後尼に成て坂本の北にあふきと云所に籠りゐて侍けり龜山院きこしめして七夕の御會の時題をつかはされければ七夕の衣に秋きても露をく袖の狹ければ七夕づめになにをかさましとよみて侍りけるをげにこそとあはれがらせおはしましてつねに御とふらひなど侍けるよしあふきに行宣法印とてふるきものゝ侍しか語り申侍りき　梶井の門跡仰られしは大原の聲明は余所にまされり慈覺大師大原に居て川の流の聲を聲て呂律をわかち定らると云傳たり良忍の融通念佛の音も世にかはれりとなん又或僧申けるは呂はなゑてやはらかなる聲也律はたちてこはき聲也唐人の音聲は和にして聞わけがたし日本人の言語は清濁あらはにきつくきこゆる是呂律の不同也と云り又韻鏡を說く者梵僧傳ㇾ之華僧續ㇾ之と云によりて西域にはよく音をしり中華には音をしらずしてよく文字をしる是故に悉曇に通ずる者まれなりと云さにはあらず五聲十二律八音いづれもよくしらずんは樂を制作しがたし古の聖賢皆一代の禮樂を制して中和の域にいたらずと云事なし周禮禮記其外歷代の史ことく〵く律呂をしるせりされども樂經秦火にやかれて全書世に傳らず是故後世の俗儒よくわきまへがたし蔡西山が律呂を議し柯尙遷が黃鐘を論ずる三代の遺音に相叶ふべき也律呂は陰陽の音なれは誰か陰陽をわけつめんや獨陽不ㇾ生獨陰不ㇾ成陰中に陰陽有陽中に又陰陽あり冬至子之半に大音聲正稀なるは音聲の源にあらずや律管灰を飛して自然の根本なる事を知人は中和の氣をうけて生るゆへに人々各中和の音あり或東西の遠き或夏夷の隔たる言語の不同ありとも其音あるほどの者いかんぞ律呂陰陽の外ならんやすでに鳥獸の聲をさへ聞しれるもの昔はあれは律呂をはなるゝ音有べからず只一概に此國は律にして彼國は呂也と云いかゞおぼつかなし六律六呂は一年十二月の數にあつ四時の變あれとも元是一氣流行して年をなすいかんぞ律と呂とを分つめんやめぐりて宮をなすと禮記に云るは是なるべし世の音學にうときものたまたま沙門の梵音を知か

とおそれ伎者の調子を聞しるやとまとふ耳なきものゝごとし

吳竹は葉ほそく河竹は葉ひろし御溝にちかきは河竹仁壽殿のかたによりてうへられたるは吳竹なり

○晉戴凱之竹譜植物之中有レ名曰レ竹不レ剛不レ柔非レ草非レ木小異空實大同節目　或茂ニ沙水一或挺ニ岩陸一條暢紛敷青翠森肅質雖レ冬蒨性忌ニ殊寒一云々厥族之中蘇麻特奇脩幹平節　大葉繁枝凌レ群獨秀蓊茸紛披篔簹射筒箖箊桃枝長爽纖葉清肌薄皮千百相亂洪纖有レ差○河竹　六百番定家佛名歌　河竹のなびく葉風にとし暮て三世の佛の御名を聞かな○御溝禁庭の溝也　唐于祐得ニ御溝紅葉一題レ詩○仁壽殿拾芥云南殿北九間四面　禁秘抄に仁壽殿の東北の角に延喜天暦の時より梅をうへられたる事あり

退凡下乘の卒都婆外なるは下乘内なるは退凡なり

○西域記九云如來御世垂ニ五十年一多居ニ靈鷲山一廣說ニ妙法一摩訶陀國頻婆沙羅王爲ニ聞法一故興ニ發人徒一自ニ山麓一至ニ峯岑一跨レ谷凌レ岩編レ石爲レ階廣十餘步長五六里中路有ニ二窣都婆一一謂ニ下乘一即王至レ此徒行以進一謂ニ退凡一即簡ニ凡人一不レ令三同往二其山頂一　下乘は王の車馬よりおるゝ義也そこにある卒都婆を云退凡は凡人をしりぞくる義也そこにある卒都婆を云下乘は山下に有ゆへに外也退凡は山中にあるゆへに內なり

十月を神無月と云て神事にはゞかるべきよしはしるしたるものなしもと文も見えず但當月諸社のまつりなき故に此名あるか此月萬の神達太神宮へあつまり給ふなど云說あれども其本說なしさる事ならば伊勢にはことに祭月とすべきにその例もなし十月諸社の行幸其例もおほしたゞしおほくは不吉の例也

○神無月　貞治の比藤澤山桑門由阿が萬葉集の注をして詞林采葉抄と名づく其第六に云一天下の神無月をは出雲國には神在月とも神月とも申也我朝諸神參集給ゆへ也其神在の浦に神々來臨の時小蛇の作する如なる篠舟波上に浮事數も知す諸神は彼浦の神在の社に集り給ひて大社へは參給はず此神在の社は不老山と云所に立給ふ神號ニ佐大明神一と申也是則傳奏の神にてましますむ大社をは杵春明神と申也別當をは國曹と申也大社は素盞烏尊にておはします日本國の諸神を天照太神をこそ宗廟の神

なれは尤尊敬あるべきに何とて此大社を御祖神として參りあがめ給ふぞと云不審ありそれは子細深秘なる也　卜部流の神書を說く者申けるは素盞烏のかくれましますは冬十月也是故に十月を素盞烏のつかさどり給ふべき也と勅しましますす故に諸神出雲國へ參り給ゆへに出雲には神有月と申と語りき兼好すでに其家に生れて神道を知べき人なりしかれとも此兩說こゝにさたせざる時は本據とするにたらざるか　十月を陽月と名る事は陽なきをうたがふと爾雅などにもあり十一月ははじめて一陽來復するゆへに十月は極陰の月也されども陽月と云陽の果して絕無なるまじき道理也陽神のなき月と云義にて神無月と名くること料簡する人もあり

○諸社の行幸　拾芥云松尾寬和元年十月十四日　北野寬弘元年十月二十一日　日吉延久三年十月二十九日

勅勘の所に靱かくる作法今はたえてしれる人なし主上の御惱大方世中のさはがしき時は五條の天神に靱をかけらる鞍馬にゆぎの明神といふも靱かけられたりける神也看督長の負たる靱を其家にかけられぬれは人出いらず此事絕て後今の世には封をつくることになりにけり

○勅勘　天子の御勘當也○靱　箭室一名步叉山谷詩倒レ靱收ニ蓮葯一と云は蓮實のぬけ出たる穴が矢を入るうつぼに似たり日本紀神代上天照大神背負ニ千箭之靱與ニ五百箭之靱一今は矢籠也今の平胡籙の類なり○世の中さはがしき時　時氣疫癘の時也○五條の天神　少彥名神也高皇產靈尊の子也大己貴と天下を經營して疾病を治る事なんどし給へる事日本紀第一に見えたり今に到るまで節分に五條の天神に人々參て朮餅（ヲケラモチ）などをうけてゑやみをのぞき出行の首途をいはひなどするは其遺法なるべし○鞍馬ゆぎの明神　○看督長　職原云撿非違使此云ニ使廳一、本所乃靱負廳也　當使補ニ看督長六十六人一此爲レ遺ニ諸國一也

犯人をしもとにてうつ時は拷器によせてゆひつくる也拷器のやうもよする作法も今はわきまへしれる人なしとぞ

○犯人　罪をおかせる人也○しもと　和名云唐令云笞音知和名之毛度　大頭二分小頭一分半又云杖音仗和名都惠　皆削ニ去節目一長三尺五寸許　漢景帝の時議して曰文帝

肉刑を除て輕刑の名ありといへども法をつかさどる者笞にて多くたゝく故に重罪にことなるとなし其上多くはたゝき殺さる或は死ざれともかたわものと成て用にたゝず今より定て笞五百を三百とし三百を二百とせよといへり其後又あらためて三百を二百をし二百を百とす景帝又箠令を定む箠(ムチ)の長さ五尺其本のふとさ一寸の竹也末のほそさ半寸其ふしをけづり去る笞にあたる者は臀をうつ人をかへず一人してうつ也○搒器　玉篇搒苦老切打也

比叡山に大師勸請の起請といふことは慈惠僧正書始給ける也起請文といふ事法曹にはその沙汰なしいにしへの聖代すべて起請文につきてをこなはるゝ政はなきを近代此事流布したる也又法令には水火に穢をたてず入物にはけがれあるべし

○大師勸請の起請　元享釋書釋良源姓木津氏近州淺井郡人也延喜十二年九月三日生焉十二上叡仙師事理仙延長六年禮尊意登增受戒云々康保三年八月補天台座主領山務者二十年天元四年爲大僧正兼法務聽輦車永觀三年正月三日唱彌陀而滅年七十四賜諡慈惠○朝廷よりは慈惠と許り論號すれとも山門にはおして慈惠大師と云也傳教弘法慈覺智證の外には大師なし○起請文　本朝文粹十二に前中書王の山亭起請とて文一篇あり誓詞にあらず是は兼明親王龜山にこもりおはして山莊の約會を書て懷をのべ給り　又東鑑第六安樂寺別當安能僧都來關東而進永久起請安樂寺別當濫望人義絶狀爲安樂寺別當濫望背氏擧依起大衆義絶事　右背父命者非子道背氏擧者非氏人然者在殷(在頁子)不可爲子也嚴實(是綱子)不可爲氏人天神御起請有限任氏擧次第所補任也今背氏擧起大衆之譴公家可禁制氏人可義絶之狀如件永久六年正月十二日氏長者式部大輔菅原在良右辨官下大宰府(永久鳥羽院年號)○法曹明法家を云法曹共法家とも申也律令をよくならひしりて沙汰し行ふ家なり法曹至要抄といへる書もあり　職原云明法博士二人(唐名律學博士)明法道之極官也中古以來坂上中原兩流爲法家之儒門以當職爲前途昔允亮道成等以明法道任廷尉佐勘解由次官等坂中兩家立家已來以廷尉法儒大判事爲先途　○起請文と云事もろこしに盟誓をたて

て牛馬の血をすゝり其詞を記して土にうづみ約する處若そむかば此牛のことくきりほふらるゝ罪にあたらんと諸神にちかふ也周禮春秋傳等に委くしるせり日本にては天照大神素盞烏とちかひましませば神代にもありける也初は盟誓といひしを人の代の末にいたりて白川鳥羽の御時も起請文と云事あるよし貞永式目起請のうらがきにあり武内宿禰が甘美内と探湯し允恭帝の時氏族のみだれを定めんとて湯をさぐらせ斧をやきてにぎらせらるこれを後世に火起請湯起清の始なりとす兼好が古の聖代起請文につきて行はるゝ政なしと云時は應神允恭の時の探湯のみにあらずすべて起請はよからぬ事なりと思ふなるべし日本紀に誓約の字をうけひとよめり起請の字是訓によりてうけをたつるといふにやなをおぼつかなし或人外記の常忠に火起請はいかゞど尋ければ常忠火をつかみてやけまじきならば水をつかませよ水にてやけんと答けり火は必燒へし燒ぬ不思議あらば水にて又やくべき不思議あらんとなり此時火起請の事しばらくやみぬ異國に罪人の實否をたゞさむとて象にかゝしむる類なるべし聖賢いかんぞ水火を以て罪を正さんやしからずは崑崗の火玉も石もともにやくがごとくならん常忠一旦の辨を云といへども却て法を弄ぶにちかし其道理をあきらかに辯せばをのづから火の物をやくべき事は必定なるを水をにぎりてもやけむといひまぎらはかすはよくその理をしれるにあらずされどもおろかにして人に火をつかませんよりはまされり○又法令には　是より別段としたる本有○水火にけがれをたてす　天地の間水火なき處なしいづれをけがれとせん其器物は穢有べし○いざなみの尊かくれ給ひしかはいざなぎの尊おひつきてあひたまふによもつひぐひせりとの給ふ故にいざなぎゝたなしとて歸り給ふこれ世人の同火(ヒトツビ)を忌事のおこり也　後成恩寺殿日本紀纂疏云水火是天生之物無レ分ニ染淨一而神事忌レ火何也曰火雖ニ是淨一因レ物而穢故不レ食ニ炊爨之物一而已

德大寺右大臣殿撿非違使の別當の時中門にて使廳の評定をこなはれける程に官人章兼が牛はなれて廳のうちへ入て大理の座のはまゆかの上にのぼりてにれうちか見て臥たりけりをもき怪異なりとて牛を陰陽

師のもとへつかはすべきよし各申けるを父の相國さき給て牛に分別なし足あれはいづくへかのぼらざらん庭弱の官人たま〳〵出仕の微牛をとらるべきやうなしとて牛をば主にかへして臥たりけるたゝみをはかへられにけりあへて凶事なかりけるとなんあやし見をも見てあやしまざるときはあやしみかへりて破といへり

○德大寺の右大臣殿　公孝公也○使廳　撿非違使の廳也○官人章兼○大理　撿非違使別當の唐名也はまゆか○にれうちか見て　本草綱目齝草一名牛轉草即牛食而復出者俗曰二向嚫一　和名曰爾雅集注云獸呑レ芻噬反出而嚼牛曰レ齝（音台害韻有二笞詩二音一字亦作二䶩一和名邇介加無）詩小雅無羊曰爾牛來思其耳濕々（注詞而動二其耳一濕々然）　郊牛の口やぶれたるをトひ又其角を鼷鼠いくひたるをうらなふて改めたる事春秋傳に見えたり此義にて今の牛をも陰陽師へつかはすべきよし申にや○父の相國　公孝の父太政大臣實基也○足あれはいづくへかのぼらざらん○性理字義云大抵妖由レ人興凡諸般鬼神之旺皆由二人心一興レ之人以爲レ靈則靈不二以爲一レ靈則不レ靈人以爲レ恠則恠不二以爲一レ恠則不レ恠伊川嘗人官廨多レ妖或報曰鬼擊レ鼓其母曰把レ槌與レ之或報曰鬼打レ扇其母曰他熱故耳後遂無レ妖只是主者不二爲レ之動一便自無了細觀二左氏所謂妖由レ人興一一語說二得極一出明道石佛放レ光之事亦然○庭弱の官人　章兼をさす　韻會尫烏光切跛曲脛也或作レ尪亦作レ尩荀子賤レ之如レ尫注廢疾之人　しかれは庭弱はいやしくわかき義也○あやしみを見てあやしまざる　千金方黃帝雜忌咒曰見レ恠不レ恠其恠自壞

龜山殿たてられんとて地をひかれけるに大なるくちなはかずもしらずこりあつまりたる塚ありけり此所の神なりといひてことのよしを申ければいかゞあるべきと勅問ありけるにふるくより此地をしめたる物ならはさうなくほりすてられがたしと皆人申されけるに此おとゞ一人王土にをらん虫皇居を建られむに何のたゝりをかなすべき鬼神はよこしまなしとかむべからすたゞみなほり捨べしと申されたりければ塚をくづして蛇をは大井河になかしてけりさらにたゝりなかりけり

○龜山殿○ふるくより　舊の字也久しき義也○此

おとゞ　前段の實基公也〇王土におらん虫　草も木も我大君の國なれはいづくか鬼の宿と定めん〇鬼神はよこしまなし　俗に鬼神に横道なしといふがごとし〇左傳莊三十二年云神聰明正直而壹者也蛇のたゝりをなすも有吉兆をしめすもあり鄭門内外の蛇は厲公子儀か戰を表し梁王殿上の蛇王世充か屋邊の虵は皆是不祥也沛澤の虵は漢祖にきられ桓壁の虵は唐太宗に敵のきたらん事をしめすに似たり廣東の佛像の巨虵は胡打鬼がためにうたれてたゝりをやめ永州野庿の大蟒は畢應祥がためにやぶらる柳宗元は屋宅をつくらんとて虵を野外に放棄て宥ニ蝮虵一文をつくれり　孤樹裒談第二曰南京國學之址舊爲ニ積レ屍之所一謂ニ之萬人坑一毎レ遇ニ天陰雨濕一行人多爲レ鬼眩有ニ至レ死者一因建ニ雞鳴寺一設レ醮以度而鬼又夜飛レ磚擊レ瓦僧人怖恐馬太后聞而告ニ于太祖一曰此祭ニ孔子大聖人一以鎭レ之是曰遷ニ大成木主于此一鬼遂不ニ復爲一レ祟因建ニ國子監一焉

經文などの紐をゆふに上下よりたすきにちがへて二すぢの中よりわなの頭をよこさまにひき出す事は常の事也さやうにしたるをは華嚴院弘舜僧正ときてなをさせけり是は此比やうの事也いとにくしうるはしくはたゞくる〳〵とまきて上より下へわなのさきをさしはさむべしと申されけりふるき人にてかやうの事しれる人になん侍りける

人の田を論ずるものうたへにまけてねたさに其田をかりてとれとて人をつかはしけるに先道すがらの田をさへかりもてゆくを是は論じ給ふ所にあらずいかにかくはといひければかるものども其所とてもかるべきことはりなけれ共僻事せんとてまかる者なればいづくをかからざらんとぞいひける理りいとおかしかりけり

〇世説新語補十二云鍾毓兄弟小時値ニ父晝寢一因共偸ニ服藥酒一其父時覺且託レ寢以觀レ之毓拜而後飲會而不レ拜既而問レ毓何以拜毓曰酒以成レ禮不ニ敢不一レ拜又問レ會何以不レ拜會曰偸本非レ禮所ニ以不一レ拜異本云孔文擧有ニ二子一大者六歲少者五歲晝日父眠小者床頭盜レ酒飲レ之大兒謂曰何以不レ拜答曰偸那得レ行レ禮　莊子曰田成子一旦殺ニ齊君一而盜ニ其國一所レ盜者豈獨其國耶并レ與ニ其聖知之法一而盜レ之　左傳宣公十一年申叔時曰牽レ牛以蹊ニ人之田一而奪ニ之牛一

牽レ牛以蹊者信有レ罪矣而奪二之牛一罰已重矣　鍾氏が兒の酒をぬすみて拜せるは盗の中禮なき也田垣か齊をうばふは其國のみに非ず禮樂刑政をも皆ぬすむ也牛をひきて人の田に入るゝはくせ事也それをいましめんとて牛をおさへとるはかへりて罪おもし王者にあらざれば禘の祭をせず魯侯の禘をして灌するとき不敬なるは非禮の中の非禮也又唐の天子の惡き行跡あるを史官おそれてしるさゞるときに既におこなひしことなれば悔ともとりかへしがたし唯其ありのまゝにしるせと云是はあらはれて惡をする也それを一たび變じて善にいたらばいかばかりよからん　日本紀曰　神尊以二天垣田一爲二御田一時素盞鳴尊春則塡レ渠毀レ畔又秋穀已成則亘以二絡繩一

喚子鳥は春の物なりとばかりいひていかなる鳥ともさだかにしるせるものなしある眞言書の中に喚子鳥なく時招魂の法をはをこなふ次第ありこれは鵺也萬葉集の長歌に霞たつながき春日のなどつゞけたり鵺鳥も喚子鳥のことさまにかよひて聞ゆ

○喚子鳥は　古今　おちこちのたつきも知らぬ山中におぼつかなくも喚子鳥哉　喚子鳥稻負鳥百千鳥是古今集の三鳥也長谷川式部少輔守尙處にて常緣宗祇基綱の相傳の書を見侍しによぶこ鳥は人をも云猿をも云とあれと猿と云がよきなりとしるせり近代の歌人此ことを秘して口外にいたさずされどもこの草子に揚名介よぶこ鳥などをもかきのすれば兼好が比まではさほとふかく秘せざるとみえたり又もろこしに報春鳥を喚起と云と韓文漁隱叢話などにあれは喚起鳥はよぶこ鳥のたぐひにてもや侍らん又神道にも招魂の法あり余二十四歲の時江戸へまかりけるに越前阿波賀の神主卜部氏の孫周禊に逢て神書どもを見侍しに日本紀三十卷神代纂䟽其外口訣數紙護摩加持などの事をしるせるもありその中に招魂の祭文一首あり讀てみれば宋玉が詞をにせていと拙くいやしかりき又常陸の鹿島流のなりとて神書あり是は大方眞言家より出ると見えて佛菩薩明王などを神の本地なりとせり此祭文を唱へて人の魂魄をまねきよぶ作法ありと書り其後余駿河に侍しに高野の檢校法性院政遍といへる八十餘の老僧來りまみえしかば太相國このつれ

つれ草の招魂の事尋よと仰給ひければ余まかりて間に政遍我が宗に招魂の法おこなひて加持する事はありされども喚子鳥の鳴時行事はしり侍らず魂をよぶといふによりてかく申にやと對へけるを則太相國へ奏し侍る又鵺と云鳥頼政が射たるを以てみればおやしき鳥也臯明通紀にある黑青の恠本草綱目にのせたる姑獲鳥治鳥木客鳥などいへる類にや○招魂　楚辭注云招魂者宋玉之所レ作也古者人死則使レ人以二其上服一升レ屋履レ危北面而號曰皋某復上遂以二其衣一三招レ之乃下以覆レ尸此禮所謂復而說者以爲二招魂一復魂又以爲レ盡レ愛之道一而有二禱祠之心一者蓋猶冀二其復生一也如レ是而不レ生則不レ生矣於レ是乃行二死事一此制レ禮者之意也而荊楚之俗乃或以レ是施二之生人一故宋玉哀二閔屈原無レ罪放逐一恐三其魂魄離散而不二復還一遂因二國俗一託二帝命一假二巫語一以招レ之以レ禮言レ之固爲二鄙野一然其盡レ愛以致レ禱則猶古人之遺意也　曲禮注云復始死時呼レ魂辭也○鵺　鵼ともかけり和名云唐韵云鵼 音空 漢語抄云沼江 恠鳥也　海篇云鵺 音夜 鳥名 ○萬葉集　古今十八云貞觀御時萬葉集はいつばかりつくれるぞととはせ給ひければ讀てたてまつりける　文屋在すゑ　神無月時雨降をけるならのはのなにおふ宮のふることゝそこれ　同序に云くならの御時是よりさきの歌を集めて萬葉集となづけられたりける　同眞名序に曰く昔平城天子詔二侍臣一令レ撰二萬葉集一　今の世に傳る本は二十卷有橘諸兄大伴家持等が撰也と云

○かすみたつながき春日

萬の事はたのむべからずをろかなる人はふかく物を頼むゆへにうらみいかる事ありいきほひありとてたのむべからずこはきもの先ほろぶ財おほしとて賴むべからず時のまに失ひやすし才ありとて賴べからず孔子も時にあはず德ありとて賴べからず顏回も不幸なりき君の寵をも賴べからず誅をうくる事速なり奴したがへりとて賴べからすそむきはしることあり人の志をもたのむべからず必變ず約をも賴べからず信ある事すくなし身をも人をもたのまざれは是なる時はよろこひ非なる時はうらみず左右ひろければさはらず前後とをけれは塞がらす狹き時はひしげくだく心を用る事少しきにしてきびしき時は物にさかひあらそひてやぶるゆるくしてやはらかなる時は一毛も

損せず人は天地の靈也天地はかぎる所なし人の性なんぞことならん寛大にしてきはまらざるときは喜怒是にさはらずしてものゝためにわづらはず

○よろづの事は頼べからず○いきおひありとて　三略柔者德也剛者賊也又曰威多則身蹶講義云威多則反陷ニ其身ー此韓信黥布之不ニ克終ー者皆威多也　項羽の力山を拔喑噁叱嗟千人皆廢するほどなれども終寛仁大度の人にほろぼさる此故に舌柔にして長存し齒堅して先折る事は常樅が戒にして老聃よく此心を得たり○財おほしとて　鉅橋鹿臺は何の益なく紂寶玉を衣て焚死ぬ阿房の雕鐺玉石金塊珠礫も子羽一炬火驪山三月の紅也董卓が郿塢終身の備をなすといへども白刃俄生ㇾ肘黄金讒似ㇾ丘石季倫か富るも季秀がためにころされぬ瓊林大盈の庫藏みち〳〵て德宗出て走る○才ありとて　莊子曰孔子再逐ニ於魯ー窮ニ於齊ー伐ニ樹於宋ー圍ニ於陳蔡ー不ㇾ容ニ身於天下ー　史記儒林傳孔子干ニ七十餘君ー無ㇾ所ㇾ遇注後之記者失ㇾ辭也按家語等說則孔子歷ニ聘諸國ー莫ニ能用ー謂ニ周鄭齊宋曹衛陳楚杞莒匡等ー爾縱歷ニ小國ー亦無ニ七十餘君ー也○德ありとて　論語顏回不幸短命而死　孔顏の心をしらずんは孔顏の樂を得がたし時にあはざる不幸短命なりとて此段前後に常の人と書つらねたり是ひがこと也されど莊子に此體あるによりて兼好か例の筆法なるにや賈生か仲尼墨翟之賢と云退之が孔墨相用ふといへるたに識者の異論なきにあらず君の寵をも　史記韓非傳に衛彌子瑕が君の車にのり桃の餘を君にまいらす寵愛衰て此二事大なる罪なりとて誅せられぬ又楊貴妃國忠か類も果して馬嵬の鬼となれり○奴したがへりとて　後漢彭寵は光武にしたがはずして漁陽にありけるが其奴にあざむきころさる梁冀が妻孫壽は其奴に通して冀も終に奴にころされたり柳公權が奴は杯盂をぬすみ張之定が奴は銀器をぬすめり　日本にても播州犬寺は昔蘇我入鹿が臣に枚夫と云者あり其妻奴とたはけて奴枚夫をあざむき山中に入狩をせんとて是を射殺さむとす枚夫二犬あり一犬飛て奴の弓弦をくひきり一犬おどりあがりて奴の喉をくひころす枚夫犬のために寺を立つ今の犬寺是也（元亨釋書に有）○人の志をも　凡士卒心を變じて敵となりみかたと成事古今甚多し朋友の

間も又然り○約をも頼べからず　張耳陳餘刎レ頸の交をむすびしかども忽敵となりて張耳韓信と同く陳餘を殺す又朋友の道始終とをる事まれなる故に朱穆絶交論を作り劉孝標廣絶交論を作る○是なる時はよろこび非なる時はうらみず　此二句連續したること葉也是なる時もよろこばず非なる時もうらみざる也　山谷作ニ東坡贊一曰其愛レ之也引レ之上ニ西掖鑾坡一是亦一東坡非亦一東坡其惡レ之也投ニ之於鯤鯨之波一是亦一東坡非亦一東坡云々○左右ひろければさはらず前後遠ければふさがらず　此二句おしひろめていはゞ大學絜矩の道孟子左右逢ニ其源一と云の義も通ふへし○せばき時は　莊子天道篇輪扁曰徐則甘而不レ固疾則苦而不レ入不レ徐不レ疾得ニ之手一而應ニ於心一○一毛も損せず　孟子曰揚子取レ爲レ我拔ニ一毛一而利ニ天下一不レ爲也　列子曰楊朱曰古之人損ニ一毫一利ニ天下一不レ與也人々不レ損ニ一毫一天下治矣○人は天地の靈也　周書泰誓惟天地萬物父母惟人萬物之靈蔡氏傳云天地者萬物之父母也萬物之生惟人得ニ其秀一而靈具ニ四端一備ニ萬善一知覺獨異ニ於物一而聖人又得ニ其最秀而最靈一

者　孝經曰天地之性人爲レ貴孔安國傳云凡生ニ天地之間一含氣之類人最其貴者也○天地はかぎる所なし　宋陸子靜曰宇宙吾分内事又曰天地何所レ窮又曰東西海聖人同ニ此心一同ニ此理一南北海聖人亦同又曰人在ニ無窮之中一○喜怒是にさはらず　論語曰顏回不レ遷レ怒程子曰顏子怒在レ物不レ在レ己故不レ遷又曰喜怒在レ事則理之當ニ喜怒一者也不レ在ニ血氣一則不レ遷若ニ舜之誅ニ四凶一也可レ怒在レ彼己何與焉如ニ鑑之照レ物妍媸在レ彼隨レ物應之而已何遷之有　此段も莊老の糟粕に醉るに似たれとも餘段よりは儒者の氣象に近し末に到て心地の工夫をいひて喜怒是にさはらぬやうにといへる兼好もたゞの人にあらす喜怒本來なきもの也と云は佛氏の心なり虛舟のつながざる人の舟にあたらは誰か怒らん無心にして喜怒に應するは莊老の用心也故に李愿仲が朱文公にしめす時に未發の中一たび變して釋氏に陷と云るは是をおそりて也七情は人心の用にしてあらではかなはぬもの也物におほはれ七情にひかるゝ時は必心一偏にひかん故に大學正心の章に具に説出せり喜怒は聖人もあること也喜怒すべき時に喜怒す

るを已發の中となづけ其理そなはれともおこらさる所を未發の中と名く顏子が不レ遷レ怒といへるもすでに怒へき時にいかりて又其を他へうつさゝる義也大明の李南黎が說には怒にうつされずと云り顏子常に此心をとゝのへて本體とこしなへにしづかにして怒を以てうつされずいかるべき時はいかる唯七情のまゝにして少も心躰にさゝわる事なしたとへは明鏡の空なるがごとしかほよき人來れは其影をうつし見にくき者到れは又其形をうつす其人されは鏡の本體もとのことくにして人の形にうつさるゝ事なし南黎一旦いひかへんとてかくのことく論ずれとも分別なきにあらすたゝ程子の說をいひひろめたるなるべし同中に小異あるにや

秋の月はかぎりなくめでたきものなりいつとても月はかくこそあれとておもひわかざらん人は無下に心うかるべき事也

○退之中秋詩一年明月今宵多人生由レ命非レ由レ他今夕不レ飲奈レ老何　歐陽詹翫レ月詩序月之爲レ翫冬則繁霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽レ月霜侵レ人蔽與レ侵俱害レ翫秋之於レ時後レ夏先レ冬八月於レ秋季始孟終十五於レ夜又月之中稽ニ於天道ー則寒暑均取ニ於月數ー則蟾兎圓況埃壒不レ流大空悠々嬋娟徘徊搏華上浮昇ニ東林ー入ニ西樓ー肌骨與レ之疎涼神氣與レ之淸冷

御前の火爐に火をゝく時は火はしゝてはさむ事なしかはらけよりたゞちにうつすべしされはころびおちぬやうに心得て炭をつむべきかり八幡の御幸に供奉の人淨衣をきて手にて炭をさゝれけれはある有識の人白き物をきたる日は火はしをもちゐるくるしからずと申されけり

○火爐　和名比多岐とあれどもこゝにては火ろとよむべし源氏御幸に六條の院より御みき（御酒）御へ（贄）すみ（炭）火ろ（爐）など奉らせ給へり

想夫戀といふ樂は女男をこふる故の名にはあらす本は相府蓮文字のかよへる也晉の王儉大臣として家にはちすをうへて愛せし時の樂なり是より大臣を蓮府といふ廻忽も廻鶻也廻鶻國とて夷のこはき國あり其夷漢に伏して後に來りてをのれが國の樂を奏せし也

○想夫戀　白氏文集六十八想夫憐詩玉管朱絃莫ニ急催ー客聽歌送十分盃長愛夫憐第二句請君重唱ニ夕陽開ー　韻府云手頗訝笛曲有ニ想夫憐ー名ニ不雅ー客曰

南朝製曲號相府蓮語訛爾即王儉蓮幕事排韻云王儉字仲寶袁粲曰此兒雖小已有棟梁之器年十八拜秘書郎仕齊領吏部用庾杲之爲長吏蕭沔與儉書曰庾景行泛綠水依芙蓉何其麗也時人以儉府爲蓮華池　任彥升が書の王文憲が集の序は文選四十六にあり文憲は儉か謚也齊の尙書令となれり儉大臣たりし故に大臣を蓮府と申也
源平盛衰記に仲國か嵯峨法輪へ小督局を尋行て其琴を聞に夫を想ひて戀とよむ想夫憐と云樂也とありこの義あしき也と此段に云也白氏文集に夫憐と云時は夫憐を想ふと云傳たるにや憐をあやまりて戀とせり○回忽　通鑑註薛延陀其先匈奴白樂葛羅氏居薛延陀北安陵水上元魏時號高車郎郎當作部　唐初爲勅勒諸部唐德宗時請改號回鶻言其栖鷙猶鶻鳥之飛也　唐書回鶻列傳云回紇其先匈奴也俗多乘高輪車元魏時亦號高車部云々十八史略第六唐憲宗元和三年沙陀朱耶盡忠與其子執宜來降沙陀勁勇冠諸胡吐蕃每戰以爲前鋒後疑其貳於回鶻欲遷之河外懼而歸唐置之靈州注鶻本作紇德宗時請改曰鶻々鷙鳥也取其鷹揚之義　大明一統志八十九火州本漢時車師前後王地前王治交河城即唐交河縣去長安八千一百里後王治務塗谷即唐蒲類縣去長安八千九百里漢時以其地勢高敞遂名高昌壘云々唐貞觀中平高昌以其地置西州開元中改金山都督府云々初西突厥據後王地與高昌相影響及高昌平懼而來降以其地置庭州領金滿蒲類輪臺三縣長安初置北庭都護府後俱陷於吐蕃其地有回鶻雜居故亦謂之回鶻宋建隆間西州回鶻遣使來貢云々元時號畏兀兒地本朝其地名曰火州云々又曰西蕃即吐蕃也其先羌屬云々　音樂部には回忽想夫戀皆平調に屬す舞なし蠻夷の歌曲中國に來る回鶻にかぎらず胡旋胡騰涼州甘州扶南高麗高昌驃茲康國疎勤などの類樂府雜錄にあり或は舞或はうたふと見えたり白氏新樂府にも胡旋女は天寶の末康居國より獻道州民は道州より貢し蠻子朝は鄭州より來り驃國樂は貞元十七年に來り西涼伎は安西より送來る又日本にては高麗百濟新羅林邑渤海任那などの舞曲を奏する事國史續日本紀等に載たり聖武天皇の時南天竺の婆羅門菩提林邑國の佛哲來れり

天皇則雅樂僚に勅して音樂を調て是をむかふ日本樂部中に菩薩抜頭舞林邑樂などは彼佛哲の來て傳たる也村上天皇の秦氏安に問給ひし勅策にも船太之新靺鞨人爲ニ美談一魚丸之世羅國世稱ニ妙舞一とありとかや

徒然草野槌下之五六

平宣時朝臣老の〻ちむかしかたりに最明寺入道あるよひの間によばるゝ事ありしにやがてと申ながらひたゝれのなくてとかくせしほどに又使來りて直垂などのさふらはぬにや夜なればことやうなりともとくとありしかはなへたる直垂うち〳〵のまゝにて罷たりしにてうしにかはらけとりそへてもていでゝ此酒をひとりたうべんがさう〳〵しければ申つる也さかなこそなけれ人はしづまりぬらんさりぬべき物やあるといづくまでも求め給へとありしかばしそくさしてくま〴〵をもとめし程に臺所の棚に小土器にみその少しつきたるを見出てこれぞもとめえてさふらふと申しかば事たりなんとて心よく數献に及びて興にいられ侍りき其世にはかくこそ侍しかと申されき

〇平宣時(ノブトキ) 大佛陸奥守也東鑑云治十五年自ニ弘安十年一至ニ正安三年一北條五郎時忠後改ニ宣時一系圖云時政時房朝直宣時(執權永恩寺殿) 〇最明寺入道時頼也上に見えたり〇ことやう 異躰也〇なへたる直垂 常住きたる直垂也〇さう〴〵し さびしき也〇くま

くま　ものゝかげのくらき所也○みそ　俗に味噌と書倭名集には未醤と書美蘇の訓也本説詳ならずつきくだきこまかなるを末と云を誤て未の字をかき又其音をひきて味の字をかくと云り今本草にて見れば豔豉豆豉これなんみその類ならしされと豉はしほうちまめと讀り　後漢書光武與ニ馮異一書曰蕪蔞亭上豆粥滹沱河麥飯飢寒倶解　十八史略六宋太祖自レ即レ位或微行幸ニ功臣之家一不レ可レ測趙普每レ退レ朝不ニ敢脱ニ衣冠一一夕大雪普意上不ニ復出一矣久之聞ニ叩レ門聲一異甚亟出則上立ニ雪中一普惶恐迎拜即ニ普堂一設ニ重裀一地坐熾レ炭燒レ肉普妻行レ酒上以レ嫂呼レ之普從容問曰夜久寒甚陛下何以出上ノ曰吾睡不レ能レ着一榻之外皆他人家也故來見レ卿普曰陛下小ニ天下一耶南征北伐此其時也

最明寺入道鶴岡の社參の次に足利左馬入道の許へ先使をつかはして立いられたりけるにあるじまうけられたりけるやう一献にうちあはび二献にえび三献にかいもちいにてやみぬ其座には亭主夫婦隆辨僧正あるじ方の人にて座せられけりさて年毎に給る足利のそめ物心もとなく候と申されければ用意しさふらふとて色々のそめ物三十前にて女房どもに小袖にてうせさせて後につかはされけりその時見たる人のちかくまで侍しか語り侍し也

○鶴岡　東鑑第一云後冷泉院時伊豫守源朝臣賴義奉レ勅伐ニ安倍貞任一時有ニ丹祈之旨一康平六年八月潛勸ニ請石清水一建ニ瑞籬於當國相摸由比郷一今號ニ之下若宮一永保元年二月陸奥守義家加ニ修復一治承四年十月賴朝點ニ小林郷之北山一搆ニ宮廟一被レ遷レ之○足利左馬入道　東鑑四十四云建長六年十一月足利左馬入道正義病惱已危急之間爲レ訪レ之相州令レ向ニ彼第一給二十一日入道正四位下行左馬頭源朝臣義氏法名正義卒系圖云義氏者義康之孫義兼之子母北條時政之女○あるじまうけ　饗應とかけり日本紀にて饗をみあへとよめり俗にもてなすとよむ○一獻　禮記一獻之禮賓主百拜　曲禮君子之飮レ酒也一爵而色灑如也二爵而言々斯三爵而油々以退○うちあはび　熨斗あはび也○隆辨僧正　鶴岡別當也將軍宗尊御不例之時致ニ祈禱加持一依レ爲ニ効驗一爲ニ恩賞一拜ニ領美濃國岩瀧郷一被レ任ニ僧正一吾妻鏡四十二見えたり○さてとし事に給はる足利の染物最明寺のことば也足利にてのそめたる物なるゆへ

に足利の染物と云也今の加賀ぞめなどのたぐひの如し○用意してさふらふとて　左馬入道の言葉也○前にて女房共に小袖にてうせさせて　てうせさせては調へさせる也左馬入道の前にてうするは念をいいるゝゆへなるべし

○世に云傳るは時頼禪門諸國修行して民間の憂を聞難波の尼蘆屋の藤榮佐野源左衞門などに逢れたりとなん東鑑を考るに時頼諸州をありく事見え侍らす其身關東の執權也一日二日も忍びかくれかたし若その一族を名代にたてゝ我身修行しけるにや兄經時在世の間は時頼年わかし兄にかはりて後は世務に暇なし修行の事いとおぼつかなし或人のかたり侍しは天文道の人おちぶれて幽なる所に住けるに禪門一夕來て宿をかる夫婦のみにて人をやとすべき敷ものもなしといひければしばし其あたりに徘徊しける時にかの家の内にて男の聲して今夕天變あり國の主たるほどの人此所にまぢかく來れり不思議の星を見たりと云を禪門聞て歸り後に呼出し鎌倉にて天文博士になされけると申き是もさだめて修行の時のことなるべしそれ微行は君子のする所にあらず漢唐の天子の微行は大方酒宴聲色のため也是大なる惡事也宋の太祖の韓王堂に夜ゆくは敵國をうたんための密謀をかたらんと也是だにも必しもよき事也と定かたし況や其外の事をや民の愁下の苦しみをしらんと思はゞよくしるべき政のてだてあるべきにみづから巡禮の僧のまねをしてありかんはあやうき事也時頼よき生れつきなれども不學のあやまり也その禪をこのむごとくに道をこのみ其道隆を信するごとくに聖賢の書を信ずる物ならは必す京師をゆるかせにすべからす又將軍をかへおくこと小兒をもてあそぶかごとくならざるへし此人父祖より國を治る功あれ其王道の衰亂此時に窮ることなれは又其罪なきにあらす故に五覇の功罪を定るは春秋の義なりと知へし

或大福長者の云人は萬をさしをきてひたふるに德をつくべき也まづしくてはいけるかひなしとめるのみを人とす德をつかんと思はゞすべからくまづ其心づかひを修行すべし其心と云は他のことにあらず人間常住のおもひに住してかりにも無常を觀ずる事なかれ是第一の用心なり次に萬事の用をかなふべからず

人の世にある自他につけて所願無量也欲にしたがひて志をとげんと思はゞ百萬の錢ありといふとも暫くも住すべからず所願はやむ時なし財はつくる期あり限ある財をもちてかぎりなき願にしたがふ事得べからず所願心にきざす事あらば我をほろぼすべき惡念きたれりとかたくつゝしみをそれて小要をもなすへからず次に錢を奴のごとくしてつかひもちゐる物としらはながく貧苦をまぬかるべからず君のごとく神のごとくをそれたうとみてしたがへもちゐることなかれ次に恥にのぞむといふとも怒りうらむる事なかれ次に正直にして約をかたくすべし此義をまほりて利をもとめん人は富の來る事火のかはけるにつき水のくだれるにしたがふがごとくなるべし錢つもりてつきざる時は宴飲聲色をことゝせず居所をかざらす所願を成ぜざれとも心とこしなへにやすくたのしと申き抑人は所願を成せんがために財を求む錢を財とする事は願をかなふるがゆへ也所願有どもかなへす錢あれどももちゐざらんは全貧者とおなじ何をか樂ひとせん此をきてはたゞ人間の望をたちて貧を憂ふべからすと聞えたり欲を成してたのしひとせんよりはしかじ財なからんには癰疽をやむもの水に洗ひてたのしひとせんよりはやまざらんにはしかじこゝにいたりては貧富わく所なし究竟は理即にひとし大欲は無欲に似たり

○大福長者　尊貴年德ある者を長者といへ共こゝにてはたゞとめる者をいふ也天竺の須達長者月蓋長者皆富る人也法花經にも長者窮子の喩あり○限ある財をもちて　莊子養生主吾生者有レ涯而知也無レ涯以レ有レ涯隨レ無レ涯殆已　此語勢に似たり○君のことく神のことく　晉魯褒錢神論曰親愛如レ兄字曰二孔方一失レ之則貧弱得レ之則富强無レ翼而飛無レ足而走解二嚴毅之顏一開二難發之口一錢多者處レ前錢少者居レ後云々當時賄賂の道盛りに行れければ魯褒いきどほりて錢神論を作て譏刺せり兼好も此論のこゝろを以てかきたる所有○火のかはけるにつき　易乾卦曰水流レ濕火就レ燥雲從レ龍風從レ虎孟子曰猶二水之就一レ下也○宴飲聲色　音樂女色を聲色と云　尙書仲虺之誥曰惟王不レ邇二聲色一　長恨歌傳玄宗深居遊宴以二聲色一自娯○抑人は　是より上大福長者の詞を述て是より末兼好が論也　論語

注云抑反語詞○錢あれ共用ひざらんは　後漢の馬伏波が守錢奴と云が如し浮屠氏には是を有財餓鬼と云也○癰疽を病もの○貧富わく所なし　貧者は財を求れども得す富人は財寶多けれどもおしみて用ひず貧者に異ならず若又貧者も足事をしれば安樂の道にして富人におなし究竟は理即にひとし天台家に六即あり理即名字即觀行即相似即分身即究竟即是也理即は佛法の名字をも知ぬ薄地底下の凡夫乃至畜類まで皆佛性を具するを云也名字即は佛法と云名を知たる也觀行即は坐禪修行する也相似即は佛菩薩の行に近くに似たる也分身即は菩薩の位にて衆生濟度のために變現する也究竟即は妙覺の位如來地也　佛も本は凡夫也一切の凡夫狗子の類に至迄悉皆佛性あるを究竟は理即に齊しと云悟了同未悟と云も此義なり又本有圓成佛作什麼爲迷倒之衆生ともいふなり○大欲は無欲に似たり聖濟總錄百九十九曰欲生則三尸生欲滅則三尸滅故至人曰欲者不レ欲不レ欲者欲云々　無智慳貪の人々みな欲深ふして一紙半錢をおしめども後生のためにはあまたの金銀を費すいかんとなれは極樂に生れて金玉の堂に居て百味の飲食をうくる大樂に逢んとの欲心あるゆへに今生にて布施する事無欲に似たり異端の人をまどわす事如レ此

狐は人にくひつくもの也堀川殿にて舎人が寢たる足を狐にくはる仁和寺にて夜本寺の前をとほる下法師に狐三飛かゝりてくひつきけれは刀をぬきて是をふせぐ間狐二疋をつくひとつはつきころしぬ二はにげぬ法師はあまた所くはれながらことゆへなかりけり

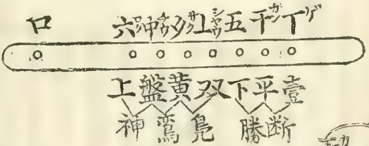
○堀川殿　久我一門基具太政大臣號二堀川一基俊大納言父也○本寺の前　仁和寺を云べし一說云本寺とは今の仁和寺より北の方に野あり本寺の舊跡たる故にや今も本寺野と號す龍安寺より嵯峨へ行に龍安寺の少し西の方に有野を本寺の馬場と云へり此所の事也

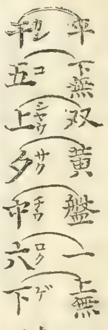
四條黃門命ぜられて云龍秋は道にとりてはやむごとなき者也先日來りて云短慮のいたりきはめて荒涼の事なれども橫笛の五の穴は聊いぶかしき所の侍るかとひそかに是を存す其故は干の穴は平調五の穴は下無調也其間に勝絕調をへだてたり上の穴雙調次に鳧鐘調をきて夕の穴黃鐘調也其次に鸞鏡調を置て中

の穴盤渉調中と下とのあはひに神仙調ありかやうに間々に皆一律をぬすめるに五の穴のみ上の間に調子をもたずしてしかも間をくばる事ひとしきゆへに其聲不快也されば此穴を吹時は必のくのけあへぬ時はものにあはず吹うる人かたしと申き料簡のいたり誠に興あり先達後生ををそると云こと此事なりと侍りき他日に景茂が申侍しは笙はしらべおほせてもちたれはたゞ吹はかり也笛は吹ながらいきのうちにてかつしらべもてゆく物なれば穴ごとに口傳の上に性骨をくはへて心をいるゝ事五の穴のみにかぎらずひとへにのくとばかりもさだむべからすあしくふけばいづれの穴も心よからず上手はいづれをも吹あはす呂律の物にかなはざるは人のとか也器の失にあらずと申き

○四條黃門　笙吹人也○龍秋　豐原氏　樂人笙を吹家也地下也豐筑後統秋か先祖也豐原氏を略して豐と云也○短慮のいたりきはめて荒涼の事　是より龍秋か詞也短慮とは卑下の詞也荒涼とは過言の義也○横笛　常の笛のこと也

十二律 十一月 壹越調 十二月 斷金調 正月 平調 二月 勝絶調 三月 下無調 四月 雙調 五月 鳧鐘調 六月 黃鐘調 七月 鸞鏡調 八月 盤渉調 九月 神仙調 十月 上無調 龍吟調二風音調一





此二調子上の圖と相違の事あり口とは皆ふさぎたる音なり一越にかへる心なり

此說は豐筑後統秋自筆を以て寫也上の圖の說と少相違あり追而可ニ尋究一者也

○ひそかに是を存す　是も卑下の詞也○必のく口をのくる義也吹さまに口をもちなほす心もち也○後生をゝそる　論語子罕篇子曰後生可レ畏焉知ニ來者之不レ如レ今也○景茂　大神氏八幡の山の井と

云所に住す是も笛吹地下の樂人也○呂律の物にかなはざるは　首楞嚴經曰譬如下琴瑟箜篌琵琶雖レ有二妙音一若無二妙指一終不上レ能レ發汝與二衆生一亦復如レ是何事も邊土は賤くかたくなゝれども天王寺の舞樂のみ都に恥ずといへば天王寺の伶人の申侍しは當寺の樂はよく圖をしらべあはせてものゝ音のめでたくとゝのほり侍る事外よりもすぐれたり故は太子の御時の圖今に侍るをはかせとすいはゆる六時堂の前の鐘也其聲黄鐘調のもなか也寒暑にしたがひてあがりさがり有べき故に二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす秘藏の事也此一調子をもちていづれの聲をもとゝのへ侍るなりと申き凡鐘の聲は黄鐘調なるべし是無常の調子祇園精舍の無常院の聲なり西園寺の鐘黄鐘調にいらるべしとてあまた度いかへられけれどもかなはざりけるを遠國よりたづねいだされけり浄金剛院の鐘の聲又黄鐘調也

○是も音樂を論ず前段の如し○天王寺　推古天皇御宇聖德太子建給多聞持國增長廣目の四天の像を安置するゆへに四天王寺となづく○伶人　音樂する者を云黄帝の時伶倫と云樂人有によりて後世に伶人といふ也○はかせ○六時堂○黄鐘調のもなかなり　源順八月十五夜の歌に　水の面にてる月なみをかぞふればこよひぞあきのもなかなりける○涅槃會　二月十五日也○聖靈會　太子の忌日二月廿二日也○いづれの聲をもとゝのへ○尙書云八音克諧無レ相二奪倫一○無常の調子　平家物語に祇園精舍の鐘の聲諸行無常のひゞきあり○祇園精舍の無常院　大藏一覽第二云經律異相云佛大相越須達多長者居二舍衞國一常施二孤獨一故曰二給孤獨一因往二王舍城護彌長者家一爲レ男求レ聘因見二其家請レ佛説レ法須達本事二外道一忽聞二佛法一生二歎喜心一接足作禮而白レ佛言我舍衞國人多信レ邪弟子欲下營二精舍一請レ佛往化上願垂二聽許一佛默受レ請即遣二舍利弗一指授規則遍所求レ踏唯有二祇陀太子一園一廣八十頃林木欝茂幽靜可レ居既得二勝地一往白二太子一太子戲曰滿以レ金布使當二相與一須達喜曰此園已屬レ我矣太子對曰我戲語乎兩成興レ諍時首陀天下爲二評議一以二太子法一不レ應二妄語一價既已決不レ宜二中悔一須達出レ金布二八十頃一須臾欲レ滿尚缺二少地一祇陀即語二須達一園地屬レ卿樹林屬レ我共以上レ佛捉レ繩定レ基之際舍利弗忽笑

須達問二其故一答曰汝始於レ此經營而六欲天宮殿已
成汝果報也即借二須達道眼一果見問二舍利弗一是六欲
天何處最樂舍利弗言第四欲天補處菩薩常彼說法須
達言我生レ此出言既竟餘宮悉滅精舍告レ成凡千二百
處白レ王遣レ使請レ佛安居（禪字函第二卷）祇陀太子の園なれ
は祇園と號す給孤獨は須達長者が名也故に給孤獨
園とも申也天竺の五山祇園精舍竹林精舍普光法堂
那羅寺逝多林是也或又給孤獨園を逝多林と云とも
いへり　祇園圖經云緣覺十二因緣院中有二大金鐘一
風吹音聞二八里一迦葉佛時毘沙門天所レ造每レ至二四
月八日一鐘能誦二迦葉佛涅槃經一四象咸聽レ之○西園
寺　拾芥云衣笠の艮太政大臣公經公の家　東大寺
の鐘法勝寺の鐘五大堂鐘皆鑄損ぜし故改鑄られた
る事東鑑廿九にあり銅の不レ足故也西園寺の鐘は
黃鐘調にいんがため也となり○法金剛院　つき山
の南太秦（ウツマサ）の東に舊跡あり拾芥云本名天安寺待賢門
院御建立也法の字を淨となす本あり淨金剛院は嵯
峨の椎野にあり
建治弘安の比は祭の日の放免のつけ物にことやうな
る紺の布四五たんにて馬をつくりて尾髮にはとうじ
みをしてくものゐかきたる水干につけて歌の心など
いひてわたりしことつねに見及び侍しなども興あり
てしたる心ちにてこそ侍しかど老たる道志どもの今
日もかたり侍る也此比はつけものとしを送りて過差
ことの外になりて萬のおもき物をおほくつけて左右
の袖を人にもたせてみづからはほこをだにもたずい
きつぎ苦しむ有樣いと見ぐるし

○建治弘安　皆後宇多院の年號○祭の日　賀茂の
祭の日也○放免　東鑑廿三建保六年六月將軍家（實朝）
任二大將一爲二拜賀一參二鶴岡一隨兵江判官能範布衣冠
革緒細尻鞘太刀郎等三人雜色四人調度懸一人放免
四人○くものゐかきたる水干につけて歌の心　雲
の井にあれたる駒はつなくともふた道かくる人は
たのまし○道志とも　職原下檢非違使の下に志
有明法道輩六位時任二衛門志一即蒙二使宣旨一也凡志
者奉二行使廳諸公事一之故以二當道一爲二其撰一此號二
道志一也　明法道の輩の使廳の志となり右衛門左
衛門の志となるを道志と云也○つけもの、祭禮の
時わたりものゝつけもの也上に放免のつけものと
有も是也○過差　衣服車馬等のかざり皆法令に過

たる義也
此段賀茂の祭昔よりは兼好が時分にわたりもの丶かざりいろ〳〵の物をとりつけて過差なることを云也今深草祭に櫻町のはうべんうりと云者あり昔にちがひたる事は祭のみにあらず萬の事もおして知べし

竹谷乘願房東二條院へまいられたりけるに亡者の追善には何事か勝利おほきと尋させ給ければ光明眞言寶篋印陀羅尼と申されたりけるを弟子どもいかにかくは申給けるぞ念佛にまさる事さふらふまじとはなど申給はぬぞと申ければ我宗なればさてこそ申さまほしかりつれどもまさしく稱名を追福に修して巨益有べしと說る經文を見及ばねば何に見えたるぞとかさねてとはせ給はゞいかゞ申さんと思ひて本經のたしかなるにつきて此眞言陀羅尼をば申つる也とぞ申されける

〇竹谷〇東二條院　常盤井相國實氏公の御むすめ公子也後深草院の后也〇光明眞言　沙石集二下云醍醐の竹谷の乘願房の上人は淨土宗の明匠と聞ゑき亡魂の菩提をとふらふには何の法か勝たると勅宣の下さりけるには寶篋印陀羅尼光明眞言のすぐれたる由を奏し申さる門弟本意なき事に思て淨土門の師也念佛こそ廣大善根也無上の功德也何事に無下に不足あるまじきに他宗の利益をほめて我家の佛法をつぎにせらるゝ事しかるべからずと申あひければ誠に念佛に衆德を具足して祈念に隨て願望をとくべき道理はすべての善根の德なれば其道理うたがひなし何の法にか其益なからん但し十惡五逆の者往生すといふも善知識に相て我が十念を唱へてこそ來迎にあづかり極樂に生する事なれ寶篋印陀羅尼は十惡五逆の罪人惡道に墮てまぬかるゝに期なきに其子孫ありて此神咒をはづかに七返滿てかの亡魂に廻向すれば忽其洋銅熱鐵變して八功德の池と成り蓮華生して足をうけ寶蓋いたゞきにとゞまりてその蓮飛がごとくして須臾の間に極樂に生して一切種智を證し位補處にありとゝかれたり光明眞言は又儀軌の說に地獄におちて苦患にしづむ亡魂に此眞言一返みてゝ廻向すれば無量壽如來此亡魂に手をさづけて極樂世界へ引導し給其說き況や十二十返誦せん功德はかるべからずと說

れたり又亡魂の墓所にて此眞言を四十九返誦して廻向すれば無量壽如來此靈を荷負して極樂世界へ引導し給と說き又經の中には此陀羅尼を滿て土沙を加持する事一百八遍して此土沙を墓所にちらして死骸にちらせは土沙より光をはなちて靈魂をすくひて極樂におくると說れたり念佛には是ほどの文證いまだ見および侍らず道理あれども文證無事は奏しがたし佛法に偏頗あるべき事なければ自他宗とへだつべきにあらず念佛の中にも分明なる文證あらば追てこそ奏し申さめと申されけると承傳へたり誠に智者と聞しに合て偏執なき心也

たづのおほいとのは童名たづ君也鶴をかひ給けるゆへにと申は僻事也

○後京極良經公の三男九條前內府基家公號二鶴殿一又號二砂金大臣殿一井蛙鈔にも有

此段ある本に上卷の榎木僧正强盜法印の下に書のせたり類をもつてあつむる義なるべし

陰陽師有宗入道鎌倉よりのぼりて尋まうで來りしがまづさし入て此庭のいたづらにひろきこと淺ましくあるべからぬ事也道をしるものはうふることをつとむほそ道ひとつ殘して皆はたけにつくり給へといさめ侍き誠に少しの地をもいたづらにおかんことは益なき事也くふもの藥種などうへをくべし

○有宗入道　安倍晴明十五代の孫也有重が子なり陰陽頭正三位○たづねまうで　兼好が許へ來る也

○道を知ものはうふる事をつとむ　論語憲問篇禹稷躬稼而有二天下一　中庸人道敏レ政地道敏レ樹　後漢列傳廿二樊宏字靡卿南陽人也甞欲レ作二器物一先種二梓漆一人嗤レ之然積以二歲月一皆得二其用一向之笑者咸求假焉

多久助が申けるは通憲入道舞の手の中に興ある事どもをえらびていその禪師といひける女に敎てまはせけり白き水干にさうまきをさゝせ烏帽子をひき入たりければおとこまひとぞいひける禪師がむすめしづかと云ける此藝をつけり是白拍子の根元也佛神の本緣をうたふ其後源光行おほくの事をつくれり後鳥羽院の御作もあり龜菊にをしへさせ給けるとぞ

○多久助　久資と書たる本あり樂人也多氏也今も冷人に多の氏あり多は大の義也出雲の大社をも延喜神名帳には多社とかく神武帝の子神八井耳命は

多氏の遠祖也○通憲入道　少納言入道信西也諸道に通ずる人なり平治元年十二月十三日信頼亂逆時信西見二天變一兼知二其災一入二大和國多原山一自害入レ棺不レ死之前被レ堀二埋土一同月十五日伊賀守光保尋二出此所一注進即掘二出屍骸一斬レ首渡二大路一被レ梟二獄門一

南家巨勢丸ノ後胤 實兼　通憲　澄憲　聖覺　隆義　憲實

元亨釋書廿九云唱道者演說也治承養和之間澄憲法師狹二給事之家學一據二智者之宗綱一台芒射二儒林一而花鮮性具出二舌端一而泉湧一昇二高坐一四衆清レ耳晩年不レ愼二戒法一屢生二數子一長嗣聖覺克二家業一課二唱演一自レ此數世系嗣趺々覺生二隆承一々生二憲實一々生二憲其一朝廷隨二其論導一綴二于閭房一以レ故氏族益繁寬元之間有二定圓者一園城之徒也善二唱說一又立二一家一猶如二憲苗稱一方今天下言二唱演一者皆効二二家一云々痛哉無上正眞之道流爲二詐僞俳優之伎一云々

○こゝに給事と云るは通憲也然れは聲明音藝をは其子の澄憲に傳へ歌舞の手をは礒の禪師に敎ふと見えたり給事中は少納言の唐名也

○礒禪師　東鑑第六文治二年三月一日豫州義經妾靜及母礒禪師自レ京來二于鎌倉一四月八日二品賴朝並御臺所詣二鶴岳一召二靜女於回廊一欲レ令レ施二舞曲一彼天下名人也欲レ見二其藝一再三固辭不レ得レ已而回二白雪之袖一發二黃竹之歌一祐經打レ鼓畠山重忠爲二銅拍子一靜先吟二出歌一　歌云　吉野山峯の白雪ふみ分て入にし人の跡ぞ戀しき次歌二別物曲一後又吟二和歌一云　しづやしづしづのおだまきくりかへしむかしを今になすよしもかな　其壯觀梁塵殆動上下催レ興云々五月十四日祐經梶原景茂千葉常秀八田朝重藤判官代邦通等相二具下若一向二靜旅宿一催レ宴郢曲盡レ妙礒禪師又施レ藝同廿七日入レ夜靜女依二大姬君仰一參二南御堂一施レ藝賜レ祿云々○さうまき　さやまき也○佛神の本緣　佛神の由來緣起也　源平盛衰記十七云世に白拍子と云ものあり漢家には虞氏楊貴妃王昭君などいひしは皆これ白拍子也我朝には鳥羽院御宇に島の千歲若前とて二人の遊女舞はじめけり初は直垂に立烏帽子腰刀をさしてまひけれは男舞と申けり後には事がらあらしとて烏帽子腰刀を止て水干に袴ばかりきて舞ふ其比京中第一の白拍子あり姉をば祇王妹をば祇女と云又佛白拍子と云ものも

あり皆淸盛入道寵愛せしと云り玆には礒の禪師を白拍子の根源也と云盛衰記平家物語には島千歲若前を白拍子のはじめ也と云是兩說にて侍る又男舞と云ことに似たる事元朝にも天魔舞と號す　龍飛紀略第一云元順宗至正十三年哈麻禿魯帖木兒進二西番僧一敎下元主行中房中運氣之術上號二演揲兒法一又進二僧伽璘眞一善二秘此密法一元主皆習レ之詔以二西番僧一爲二司徒一伽璘眞爲二大元國師一各取二良家女三四人一奉レ之謂二之供養一皆謂二元主一曰陛下尊居二萬乘一富有二四海一不レ過三保二有見世一而已人生能幾何當レ授二此秘術大喜樂禪定一於レ是元主從二事於法一廣取二子女一毎二遊宴一以二官女十人一按レ舞名爲二天魔舞一首垂レ髮數辮戴二象牙冠一身被二纓絡一大紅銷金長短裙襖雲肩合袖天衣綬帶鞋襪各執二加巴剌班之器一内一人執レ鈴作レ奏レ樂又宮女十一人練槌髻勒帕常服或用二唐帽漢衫一所レ奏樂用二龍笛頭管小鼓箏蓁琵琶笙胡琴響板一以二宦者長安迭不花一領レ之遇二宮讃佛則按レ舞奏レ樂宮官受二秘法密戒一如二元主一諸弟八郎者與哈麻妹婿禿魯帖木兒老的沙等十人號二倚納一皆有レ寵任在二元主前一相與褻狎甚至二男女裸所處一所レ處曰二皆即兀該一其群僧出二入禁中一無レ所二禁止一醜聲外聞皇太子深嫉二二僧所一レ爲欲レ去レ之而力不レ能（演揲兒法猶レ言二大喜樂一也皆即兀該猶レ言二事々無礙一也）　近年出雲巫京に來て僧衣をきて鉦をうち佛號を唱へて始は念佛おどりといひしにその後男の裝束し刀を橫へ歌舞す俗にかぶきと名づく世の風俗如レ此衰ぬるよと惺窩と物語せしに胡元の天魔舞に今のかぶきによく似て覺え侍ると申されき

○源光行　河内守大監物　源氏物語に河内本と云は此人の所作也○龜菊　東鑑廿五承久三年五月武家背二天氣一之起依二舞女龜菊申狀一可レ停二止攝津國長江倉橋兩庄地頭職一之由二箇度被レ下二宣旨一之所右京兆不二諾申一是幕下將軍勳功賞一定補之輩無二指雜意一而難レ改由申レ之仍二逆鱗甚一故也　龜菊を龜前とも云也後鳥羽院より龜菊が訴訟を鎌倉へ兩度まで仰らるれども義時同心せざるゆへ御氣色あしく成て承久兵亂起る也承久兵亂記云攝津國長江倉橋の兩庄は院中に近く召使れける白拍子龜菊に給たりけるを其恩賞の地頭領家を（後鳥羽院）忽諸しければ龜菊憤を含て歎き申ければ一院やすからず被二思召一て

地頭を改易すべき由被二仰下一けれは義時申けるは地頭職の事上古はなかりしを故右大將(頼朝)平家を追討の解状に日本國の總地頭に補せらる平家追討六ヶ年が間國々の地頭人等或は子をうたせ或は親をうたせ郎從を損ず如樣の勳功に隨て分ち給たらん物をさせる罪なきに義時が計として改易すべきやうなしとて是も不レ奉レ用しかば一院彌安からずおぼしめされ關東亡さるべき事思召定て國々の兵どもことによせてめされけり

後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古の譽ありけるが樂府の御論義の番にめされて七德の舞をふたつ忘れたりければ五德の冠者と異名をつきにけるを心うき事にして學問をすてゝ遁世したりけるを慈鎮和尚一藝あるものをば下部までもめしをきて不便にせさせ給ければ此信濃入道を扶持し給けり此行長入道平家物語を作りて生佛といひけり盲目に敎てかたらせけりさて山門のことをことにゆゝしくかけり九郎判官の事はくはしく知て書のせたり蒲冠者(カバノクハンジャ)の事はよくしらざりけるにやおほくのことどもをしるしもらせり武士の事弓馬のわざは生佛東國のものにて武士に問聞てかゝせけり彼生佛が生れつきの聲を今の琵琶法師は學びたる也

○信濃前司行長○稽古の譽　稽古の字尙書堯典に出たり又後漢書桓榮曰今日所レ蒙稽古之力也これは學問のちから也と云義なり○樂府　古樂府あり新樂府あり文選に樂府の詩歌をのせたり元稹集白居易集等樂府の歌甚多し長恨歌傳にも樂府伎女とあり又樂府雜錄と云書もあり○七德舞　貞觀七年正月更レ名破陣樂曰二七德舞一白氏文集新樂府注太宗爲二秦王一破二劉武周一軍中相與作二秦王破陣樂曲一及レ即レ位宴會必奏レ之以二百廿八人一被二銀甲一執レ戟而舞凡三變每レ變爲二四陣一象二擊刺往來一後更名二七德舞一　十八史略曰唐太宗七年宴二玄武門一奏二七德一云々注曰秦王破陣樂曲更名二七德舞一七德者取下禁レ暴戢レ兵保レ大定レ功安レ民和レ衆豐レ財之義上也　七德の事は古傳宣公十二年に詳也○慈鎮和尚　上卷に見えたり○一藝　退之進學解名二一藝一者無レ不レ庸○生佛○さて山門の事を　慈鎮に召置れたる故にゆゝしく書たるなり○九郎判官　義經也○蒲冠者　從五位下三河守範頼於二遠州蒲生御厨一出生

之間號ニ蒲冠者一頼朝の弟也文治二年於ニ伊豆北條一依ニ舎兄源二位命一被レ討

○此段に云如く平家物語を東鑑に考見れば義經のことは委く範頼の事は略せり又勸修寺良門十三代の孫葉室時長平家物語作者の隨一也と公卿補任にありそれは四十八卷の盛衰記なるべし行長がつくれるは十二卷平家にて生佛に教たり又俗間に平家勘文一冊あり六人の作者を載たり舛誤おほければ信用にたらず凡此物語に數本有盛衰記と平家物語と一事の内に不同もあり長門赤間關阿彌陀寺にて見たりしは十六卷あり又和州より來る本を京なる人の許にて見たりしは廿餘卷ありき又琵琶法師のかたるにも往々に不同あり

六時禮讃は法然上人の弟子安樂といひける僧經文をあつめて造りてつとめにしけり其後太秦善觀房といふ僧ふしはかせを定て聲明になせり一念の念佛の最初也後嵯峨院の御代よりはじまれり法事讃も同じく善觀房はじめたる也千本の釋迦念佛は文永の比如輪上人是をはじめられけり

○六時禮讃　晉の惠遠法師蓮社を結て蓮花漏を刻み六時を禮せしを六時念佛の權輿とす唐の善導往生禮讃偈を撰集て日夜の勤行とす此段に安樂が作也と云は異說なるにやと淨土家の人申き○安樂　法然の弟子也住蓮安樂と云二人あり後鳥羽院の時別時念輪をはじめ六時禮讃を唱て聽聞の貴賤群集せしに官女發心して出家せしかば後鳥羽大に逆鱗ありて住蓮安樂を罪に行ふ官人秀能に仰て六條河原にて安樂を斬る　元亨釋書第廿九云念佛者持誦之一支也修多羅中持ニ于佛々一此方局ニ彌陀一焉或釋迦焉其始與ニ淨土一同出已具ニ于上一矣元暦文治之間源空法師建ニ專念之宗一遺派末流或資ニ于曲調一抑揚頓挫流暢哀婉感ニ人性一喜ニ人心一士女樂聞雜沓駢闐可レ爲ニ愚化之一端一矣然流俗益甚動衒ニ伎戲一交ニ燕宴之末席一受ニ盃觴之餘瀝一與ニ瞽史倡妓一促レ膝互唱痛哉眞佛秘號蕩爲ニ鄭衛之末韻一或又擊ニ鐃磬一打ニ跳躍一不レ別ニ婦女一喧ニ噪街巷一其弊不レ足レ言矣○太秦　廣隆寺也秦氏の人來てありし故太秦寺といふ也○善觀房○法事讃　兩卷上下ある是も善導作なりふしはかせつけたる事善觀坊が所爲歟○千本の釋迦念佛○文永　龜山院年號○如輪上人

よき細工は少しにぶき刀をつかふといふ妙觀が刀はいたくたゝず

○妙觀　元亨釋書云勝尾寺講堂觀音像寶龜十一年七月十八日比丘妙觀刻レ之千臂千目壯麗端嚴又加ニ四天王像ニ凡五尊三十日而成八月十八日妙觀合掌而化觀音之靈應也　仲芳攝州勝尾寺募緣疏にも妙觀雕レ像の事を書りこゝの妙觀は勝尾寺の佛工を云にや又別人の事なるにや京なる人の語りしは人あり細工の上手にて竹木をもつて人形を作り大なる壺甕をきりて疵の見えぬやうに小壺とし小筥などを作るもうつくしかりしが其人さきの折たる小刀三四本ありけるとぞ

五條內裏には妖物有けり藤大納言殿かたられ侍しは殿上人ども黑戶にて碁をうちけるに御簾をかゝげて見る物ありたぞと見むきたれば狐人のやうについゐてさしのぞきたるをあれ狐よとゞよまれてまどひにげにけり未練の狐ばけそんじけるにこそ

○五條內裏　後醍醐院時皇居ありと云傳へたり○藤大納言○未練の狐　鍛錬せぬを未練と云こゝにては功のいらぬ狐有り

そのゝ別當入道はさうなき庖丁者也或人のもとにていみしき鯉をいだしたりければ皆人別當入道の庖丁を見ばやと思へどもたやすくうちいでんもいかゞとためらひけるを別當入道さる人にて此程百日の鯉をきり侍るを今日かき侍るべきにあらずまげて申請んとてきられけるいみしくつき〴〵しく興ありて人ども思へりけるとある人北山太政入道殿にかたり申されたりければかやうの事をのれはよにうるさく覺ゆる也きりぬべき人なくばたべきらんといひたらむはなをよかりなん何條百日の鯉をきらんぞとの給ひたりしおかしく覺えしと人のかたり給けるいとおかし大方ふるまひて興あるよりも興なくてやすらかなるがまさりたる事也まれ人の饗應などもついでおかしきやうにとりなしたるも誠によけれどもたゞ其ことゝなくてとり出たるいとよし人に物をとらせたるもついでなくて是を奉らんと云たるまことの志也惜むよしゝてこはれんと思ひ勝負の負わざにことつけなどしたるむづかし

○園別當入道　基氏卿天福二年十一月十七日上ニ辭狀ニ出家法名圓空○さうなき　無レ雙也○庖丁

日本庖丁者のはじめは四條家の庶流山蔭中納言也○莊子養生主篇に庖丁牛を解事を詳に書り丁氏よく庖厨の事をしりて宰烹するゆへに庖丁と云事是より鑾刀をも云事此類多し伶人名を倫と云て伶倫と云巧匠名を石といひて匠石と云扁と云ものよく車輪をけづりて輪扁と云奕秋名は秋にして奕をよくする故也琴摯はよく琴ひくもの其名は摯也京房易を講する故に易京と云醫和醫緩も醫者也○ためらひ　猶豫とかく○百日の鯉　百日の間毎日つとめて鯉をきらんとなり○まげて申うけん　是非とも申うけきらんと也○北山太政入道殿　西園寺公經公也一條相國とも申き○人に物をとらせたる論語堯曰篇猶二之與一レ人也出納之吝謂二之有司一孟子曰可三以與一可レ無二以與一與傷レ惠　人にものをくるべき時にあたふれば氣味よき也うけたる人もよろこぶべしくれんかくれまじきかなどためらふ時はおしむ心出來る故にうけたるものも氣味あしき也殊更國主などは義にあたりてあたえんと思つゝ其まゝ賞を施すべしさもなき時はくら奉行などの主人によくうかゞひて後日の簿帳を勘るが如し是を有司と云とは是也又くれまじきものにくるれば却て益なきゆへに我恩惠をやぶる也故に君子は取與の間をつゝしむ

すべて人は無智無能なるべきもの也ある人の子の見ざまなどあしからぬが父の前にて人と物いふとて史書の文をひきたりしさがしくはきこえしかども尊者の前にてはさらずともと覺えしなり

又ある人の許にて琵琶法師の物語をきかんとて琵琶をめしよせたるにぢうのひとつおちたりしかば作りてつけよと云にある男の中にあしからずと見ゆるが古きひさくの柄ありやなどいふを見れば爪をおふしたり琵琶などひくにこそめくら法師の琵琶其沙汰にも及ばぬこと也道に心得たるよしにやとかたはらいたかりきひさくの柄はひもの木とかやいひてよからぬものにとぞある人仰られしわかき人はすこしの事もよく見えわろく見ゆる也

○此段を上の段と同段とする本有今分て別段とす

○琵琶法師の物語　平家物語なるべし○ぢう　柱字也　琴にてはことぢとよむ琵琶にてはぢうと讀也絃をのする木也樂人の比巴の柱は四つ琵琶法師

の柱は五つ也〇爪をおほしたり　爪を長くしたる也生長と書ておほしたつるとよむはじめはあしからぬと見ゆる男のひさくの柄の事をいふにおもひおとりてよく見れば爪をもきらずきたなくいやしく見ゆると也〇ひさくのえはひもの木　和名云杓音酌和名比佐古　斟レ水器也俗に柄杓と二字にかくは誤也杓一字かくべし　琵琶の柱には新しき木よりもふるく手なれたるがよき也と今のびわ法師なども云と也こゝの心は檜の木はよけれども檜物師の手にふれてことにひさくの柄などはふつゝかなる物なればよからぬ物也と云儀なるべし

萬のとがあらしと思つゝ何事にもまことありて人をわかずうや〳〵しく言葉すくなからんにはしかじ男女老少みなさる人こそよけれどもことにわかくかたちよき人のことうるはしきは忘れがたく思ひつかるゝもの也萬のとがはなれたるさまに上手めき所えたるけしきして人をないがしろにするにあり

〇萬のとがあらじ　論語多聞闕レ疑愼言二其餘一則寡レ尤又曰言忠信行篤敬雖二蠻貊之邦一行矣〇所えたる氣色　ものなれえたる體にて傍若無人也俗にしてもちかほしたると云類也

人の物を問たるにしらずしもあらじありのまゝにいはんはおこがましとにや心まどはすやうにかへりてとしたるよからぬ事也しりたることもなをさだかにと思ひてやどふらん又誠にしらぬ人もなどかなからんうらゝかにいひきかせたらんはおとなしくきこえなまし

〇しらずしもあらじ　しらで問にはあらじと云儀也〇うらゝかに　何となくやわらかにと也

人はいまだまゝ及ばぬことをわがしりたるまゝにさても其人の事の淺ましさなどばかりいひやりたれば如何なることのあるにかとをし返しとひにやるこそ心つきなけれ世にふりぬることをもおのづから聞もらすこともあれば覺束なからぬやうに告やりたらんあしかるべきことかはかやうのことはものなれぬ人の事有也

〇此段と上段と同段にしたる本あり

ぬしある家にはすゞろなる人心のまゝに入くる事なしあるじなき所には道行人みだりに立入狐ふくろうやうの物も人げにせかれねば所えがほにいりすみこ

たゞなど云けしからぬかたちもあらはるゝものなり又鏡には色かたちなき故に萬のかげ來りてうつる鏡に色かたちあらましかばうつらざらまし虛空よく物をいる我等がこゝろに念々のほしきまゝに來りうかぶも心といふものゝなきにやあらん心にぬしあらましかば胸のうちに若干のことは入きたらざらまし
○狐ふくろう　白氏文集第一凶宅詩梟鳴二松桂枝一狐藏二蘭菊叢一○こたま　山彥　木神　空谷響　樹神　和名第二云文選蕪城賦木魅山鬼今案木魅即樹神也和名古太萬はけ物の類を云　源氏蓬生　かの見しも人かずすくなくなり行本よりあれたりし宮の內いとゞきつねのすみかとなりてうとましうけどをき木だちにふくろうの聲をあさゆふにみゝならしつゝ人げにこそさやうの物もせかれてかげかくしけれこたまなどけしからぬものとも所えてやう〳〵かたちをあらはしてものわびし○又鏡には神秀曰心如二明鏡臺一六祖曰明鏡亦非レ臺　古德云胡來胡現漢來漢現
○此段家を人の形に譬へ主人を心にたとふ莊子は是を養生主と云道家に是を金丹といふ禪家には眞佛屋裏坐すとも屋裏の法身佛報身佛化身佛とも主人公ともいへり主人なき家には行人もみだりに入狐梟樹魂なども來現すと云は奸人家の男女被二遣一般野狐精魅所著一便即捏怪といひ依草附葉竹木精靈野狐精魅向二一切糞塊上一亂咬といふ心也又鏡の中色なきゆへに萬物のかたちをうつすといふは目前昭々靈々鑑覺聞知照燭底安二一切名句一と云心也釋氏一旦心を鏡のことしといへども本分の田地にいたりては鏡のてらしうつすべき物なしたとへば道樹が山中に入て鬼魅をみれども見ざるがごとし故に六窓の猿を迷亂として三種病人をそのまゝ佛なりとする是也又虛空よく物をいるといふは空に眞空頑空あり空在二大覺中一如二海發一一漚一といへるこゝろなるべし大覺は出ることなく入こともなし青霄裏にとゞまらず若出入を論ぜば一期の間闘二諸虛空一也唯自家屋裏物を信得及し了て外に求めずば心といふ物あるべき也是皆浮屠氏の意也若儒者の見所を如何と尋ねば程朱の說を見るべし程子曰聖人之心明鏡止レ水又曰有レ主則虛又曰中有レ主則實々則外患不レ能レ入朱子釋レ之曰有レ主二於中一

外邪不レ能レ入便是虚有レ主ニ於中一理義甚實便是實因擧ニ林擇之語一曰有レ主則虚神守ニ其都一無レ主則實鬼瞰ニ其室一又程子曰定者動亦定靜亦定無ニ將迎一無ニ内外一苟以ニ外物一爲レ外牽レ己而從レ之是以己性爲レ有ニ内外一也天地之常以ニ其心一普ニ萬物一而無レ心聖人之常以ニ其情一順ニ萬事一而無レ情故君子之學莫レ若ニ擴然而大公一物來而順應今以下惡ニ外物一之心上而求レ照ニ無物之地一是反レ鑑而索レ照也又朱子曰主一無適謂ニ之敬一々者一心之主宰而萬事之根本也陳氏曰心之爲レ物虚靈知覺所ニ以爲ニ一身之主宰一也身無ニ此以爲ニ之主宰一則四肢百體皆無レ所ニ管攝一矣然所ニ以爲レ心者又當下由ニ我有一以主中宰之上我若何而主ニ宰之一乎所謂敬者是又一心之主宰也

丹波に出雲と云所あり大社をうつしてめでたくつくれりしだのなにがしとかやしる所なれば秋の頃聖海上人其外も人あまたさそひていざ給へ出雲おがみにかいもちいめさせんとて具しもていきたるに各拝みてゆゝしく信おこしたり御前なる獅子こまいぬそむきてうしろさまにたちたりければ上人いみじく感じてあなめでたや此獅子のたちやういとめづらしふかき故あらんと涙ぐみていかに殿原殊勝の事は御覧じとがめずや無下なりといへば各あやしみて誠に他にことなりけり都のつとにかたらんなどいふに上人なを床しかりておとなしく物しりぬべき顔したる神官をよびて此御社の獅子のたてられやう定てならひあることに侍らんちと承はらばやといはれければ其事に候さがなきわらはべどもの仕りける奇怪に候こと也とてさしよりてすへなをしていにければ上人の感涙いたづらに成にけり

○大社　神名帳には多社と云出雲國の大社は日本紀には素盞烏の子大己貴を祭といひ神祇令には素盞烏也と云り又杵春明神とも號する也○しだのなにがし　志太乃某○聖海上人○かいもちい　攪餅○獅子狛犬○或人金剛經口義をかりて返すとて貼紙の所よく見給へと云おこせしかば此經の要文成べしと目をとめ讀て誠に此所儒書に考合せて工夫すべき事也と後日に逢て申ければそれは落紙の處也けり己が本も脱落したる故に他本にひき校て補書給へと申事にて侍れされども鄭書燕說の義あればあながち誤と定むべきにもあらずと申されき

韓非子曰郢人有下遺二燕相國書一者上夜書謂下持レ燭者上曰擧レ燭而誤書二擧燭一燕相受レ書曰擧レ燭高明高明者擧レ賢而任レ之

柳筥（ヤナイバコ）にすゆるものはたてざま横樣物によるべきにや卷物などはたてさまにをきて木のあはひより紙ひねりを通してゆひつく硯もたてさまに置たる筆ころばすよしと三條右大臣殿仰られき勘解由小路の家の能書の人々はかりにもたてさまにをかるゝ事なし必横樣にすへられ侍りき

○柳筥は硯短冊或鞠冠或又追善の時に經卷等をすゆる臺也柳をもつて造る也けたの木數重半の義說說あり御短冊をすゑて進上の時冷泉家には重にこしらへらるゝ也又三條三光院の相傳とて重半により吉凶の義あり吉事には半を用ひ追善の時經卷をすゆるには重を用ふと也　○三條右大臣○勘解由小路　世尊寺也行成の子孫能書家也

御隨身近友が自讃とて七箇條書とゞめたる事あり皆馬藝させることなき事ども也其ためしを思ひて自讃の事七あり

一　人あまたつれて花見ありきしに最勝光院の邊にてをのこの馬をはしらしむるを見て今一度馬をはする物ならば馬たふれて落べししばし見給へとて立とまりたるに又馬をはすとゞむる所にて馬をひきたふして乘る人泥土の中にころび入其詞のあやまらざることを人みな感ず

一　當代いまだ坊におはしましゝ比萬里小路殿御所なりしに堀川大納言殿伺候し給し御ざうしへ用ありて參りたりしに論語の四五六の卷をくりひろげ給て唯今御所にて紫の朱うばふ事を惡むと云文を御覽ぜられたき事ありて御本を御覽ずれども御覽じ出されぬ也なをよくひきみよと仰事にて求る也とおほせらるゝに九の卷のそこ〳〵の程に侍ると申たりしかばあなうれしとてもてまいらせ給きかほどの事は兒どもゝ常の事なれど昔の人はいさゝかの事をもいみじく自讃したる也後鳥羽院の御歌に袖と袂と一首のうちにあしかりなんやと定家卿に尋仰られたるに秋の野の草のおもとか花すゝきほにいてゝまねく袖と見ゆらんと侍れば何事か候ふへきと申されたる事も時にあたりて本歌を覺悟す道の冥加なり高運也などこと〳〵しくしるしをかれ侍るなり九條相國伊通

公の歎状にもかきのせて自讃せられたり
一　常在光院のつき鐘の銘は在兼卿の草也行房朝臣清書していかたにうつさせむとせしに奉行の入道彼草を取出て見せ侍しに花の外に夕をゝくれば聲百里にきこゆと云句あり陽唐の韻と見ゆるに百里あやまりかと申たりしをよくぞ見せ奉りけるをのれが高名なりとて筆者の許へいひやりたるにあやまり侍りけり數行となをさるべしと返事侍りき數行も如何なるべきにか若數歩の心か覺束なし數行なを不審數は四五也鐘四五歩不ㇾ幾也たゞ遠く聞ゆる心也
一　人あまた友なひて三塔巡禮の事侍しに横川の常行堂のうち龍華院とかけるふるき額有佐理行成のあひだうたがひありていまだ決せずと申傳たりと堂僧ことごと敷申侍しを行成ならば裏書あるべし佐理ならばうらがき有べからずといひたりしに裏は塵つもり蟲の巣にていふせけなるをよくはきのごひて各見侍しに行成位署名字年號さだかに見え侍しかば人みな興にいる
一　那蘭陀寺にて道眼聖談義せしに八災と云事をわすれて是やおぼえ給ふといひしを所化みな覺えざりしにつぼねの内より是々にやと云出したればいみじく感じ侍りき
一　賢助僧正に友なひて加持香水を見侍しにいまだはてぬほどに僧正かへりて侍しに陳の外まで僧都みえず法師共を返してもとめさするに同じさまなる大衆おほくてえもとめあはずといひていと久しくて出たりしをあなわびしそれもとめておはせよといはれしにかへり入てやがてぐしていでぬ
一　二月十五日月あかき夜うちふけて千本の寺にまうでゝうしろより入てひとりかほふかくかくして聽聞し侍しに優なる女の姿にほひ人よりことなるがわけ入て膝にゐかゝればにほひなどもうつるばかりなればびんあしと思ひてすりのきたるになをゐよりて同じ樣なればたちぬ其後ある御所さまの古き女房のそゞろごといはれしついでに無下に色なき人におはしけりと見おとし奉ることなん有し情なしと恨み奉る人なんあるとの給ひ出したるに更にこそ心得侍らねと申てやみぬ此事後にきゝ侍しは彼聽聞の夜御つぼねの内より人の御覽じ知りてさふらふ女房をつくりたてゝいだし給てびんよくは言葉などかけんもの

ぞ其ありさま參りて申せ輿あらんとてはかり給ひけるとぞ

〇近友　〇最勝光院　拾芥云法性寺建春門院

此段前の秦の重躬が信願を落馬の相ありといひたると同じ心也

〇當代　〇坊　春宮坊也位につかせ給はで太子にておはする時の事をいふ〇萬里小路殿　里の御所なるべし春宮の此時おはせし所也〇堀河大納言師信公也後醍醐春宮の時の大夫也花山の庶流堀川と號す〇惡二業之所求也　論語陽貨篇〇秋の野の草のたもとの花すゝき　古今在原棟梁がうた也〇九條相國　〇欵狀　禁中へ官位をのぞみ或は訴訟を申上る時の狀也くはじやうとよむ也くはんとはよまざるとなり〇常在光院　〇在兼卿　參議正二位菅原家也唐橋の祖在良が弟輔方八世の孫也〇草也　下書也詠草文草などのごとし〇行房　世尊寺行成卿より十代の孫也經尹の息の行尹の弟也〇いかた　模（イカメイカタ）範〇よくぞ見せ奉りけるをのれが高名也　是は奉行の入道がよば也〇數行　行の字庚韻にも陽韻にもいれり庚韻にては行歩の義也陽韻にては行列の儀也敬韻にては行跡德行の義也こゝにて數行を直歩の義にとらば庚韻なるべし陽韻なればおぼつかなしと云也又數行猶不審數は四五也なんど書たる本也是は古本にかしらがきしたるを後に書入たるなるべし〇三塔　山門の東塔西塔横川也〇常行堂　〇龍華院　〇佐理、正三位前太宰大貳參議佐理卿小野宮孫一條院長德四年七月晦薨五十五歲　公卿補任〇行成　正二位太宰權帥權大納言行成卿圓融院御宇天祿三年誕生後一條院萬壽四年十二月薨五十六　公卿補任〇位署　姓名の上に官位を書連るを位署と云〇那蘭陀寺　道眼　皆上に見えたり〇八災　憂苦喜樂尋伺出息入息是を八災と云藏乘法數にあり〇所化　師をば能化と云弟子をば所化と云也〇賢助僧正　醍醐三寶院也日野家の人也〇加持香水　正月八日より十五日の朝まで御法事あるを後七日と云其間に三度の加持有加とは佛の三密也持とは行者の三業也彼三密を此三業に持たるを加持と云也〇千本の寺　釋迦堂也二月十五日は遺教經の法事なるべし〇させる事なき事ども自讃するためしに余か弱冠の頃　太相國いまだ內大臣にて

まし〳〵けるが二條の御所にて拜謁し奉りし時発長老佶長老清原極﨟なども祗候せられしが光武は高祖より幾代へたゝりけると尋仰ける各おぼえ申されざりければ汝は覺えたるかと仰事あり光武は高祖九世の孫也と後漢の本紀に見え侍ると申す又返魂香の事は何れの書にあるぞとの給ひければ皆人覺束なきよし也しに返魂香の事史漢の本文には見え候はず白氏文集李夫人の樂府と東坡詩注とには武帝のたきて夫人の魂を來すとしるし侍と申す又屈原か蘭は何をか云と仰られしに朱文公が注には澤蘭なりと候と申す太相國左右をかへりみ給ひて年わかきものゝよくおぼえたりなど感じ仰られき慶長乙巳の年也けり藤斂夫の和歌浦菅神廟碑を書て見せられしに宜擯斥拒絶之不暇却從之邪と云句あり却字いかゞ侍らん而字はまさるべきにや古文におほき中にことに左傳にあまた所此字法あるやうに覺ゆと云ければげにもさにこそとてみづから筆をとりて却の字を而の字にあらたむさて菅相の諱を道眞と云事別に又見るやと申されければ近頃近江甲賀金勝寺の官符は菅相の親筆なるを見侍しに菅原朝臣道眞と位署にたゞしくありといへば斂夫興に入られ侍りき吉田神龍院駿府へまかりて御前にて日本紀舒明皇極の所をよめと仰られしにゑよまざりければ道春を召てよめとの給ふ則よみてげり後に太相國かの家の書をなにとてゑよまざるやと余に仰られたりしに神代の處をはかなをつけてよみ候が人皇紀にはかな點すくなく侍る故なるべしと申上侍りき初余論語何晏集解皇侃疏を見て十七八歳の頃よりはじめて朱子集注をよみ大全をかんがへ程子遺書性理大全をもうかゞひて朋友のために集注の趣あら〳〵ときゝかせたり時二十一歳也一二年をへて深衣をきて講説する事もありき當時日本にて初めて書をよむには奏聞せねば罪なり國法ありなど云人もありそれを何とも心にかけおもはずたゞいよ〳〵讀けりかやうの事ども雕蟲篆刻の童子にかたり侍らんためにとや

八月十五日九月十三日は婁宿也此宿清明なるゆへに月を翫ぶに良夜とす

○八月十五夜を中秋として殊に月を翫ぶ事大かた李唐の世より盛にして詩人文人共詠おほしといへ

ど古樂府に嫦娥怨の曲あり漢人の中秋月なきによりて此曲を作るとある時は漢の世よりもあることにや又枚乘が七發に八月の望廣陵の潮を見るといへり潮は月にしたがひて來往する物なれば是も月と潮とを見るなるべし〇九月十三夜の月を翫ぶことももろこしにはさして文どもにもまれ也日本にては菅丞相宰府にて九月十三夜の月を見る詩あれは其頃よりある事にや法性寺入道相國の九月十三夜の詩を無題詩集にものせたり〇婁宿　東方七星角亢氐房心尾箕北方七星斗牛女虛危室壁西方七星奎婁胃昂畢嘴參南方七星井鬼柳星張翼軫〇正月一日より十二月晦日まで二十八宿を一星づゝ毎日にあてゝ其日の宿とす近代もろこしより來る暦には二十八宿を次第して日數に配す日本には吉備公の相傳也とて別に前後まじはる事あり中頃大内囘祿する日牛宿なりとて牛を除て二十七宿とせり今かんがへみれば八月十五九月十三婁宿にあたるほどに兼好も牛宿を除きたる義を用ひたる成べし八月一角二亢三氐四房五心六尾七箕八斗九女十虛十一危十二室十三壁十四奎十五婁也九月一氐二房三心四尾五箕六斗七女八虛九危十室十一壁十二奎十三婁也

しのぶの浦の蜑の見るめも所せくらふの山ももる人しげからんにわりなく通はん心の色こそ淺からず哀とおもふふしぐの忘れがたきこともおほからめおやはらからゆるしてひたふるにむかへすへたらんいとまばゆかりぬべし世にあり侘る女のにげなき老法師あやしの吾妻人なりともにぎはゝしきにつきてさそふ水あらはなど云をなか人何方も心にくきさまにいひなしてしられずしらぬ人をむかへもて來たらんあいなさよ何事をか打いづる言のはにせん年月のつらさをも分こし葉山のなどもあひかたらはんこそつきせぬ言のはにてもあらめすべて餘所の人の取まかなひたらんうたて心つきなき事おほかるべしよき女ならんにつけても品くだり見にくく年も長なん男はかくあやしき身のためにあたら身をいたづらにならさんやはと人も心おとりせられわが身はむかひゐたらんも影はづかしく覺えなんいとこそあひなからめ梅の花かうばしき夜の朧月にたゝずみみかきがはらの露分いてん在明の空も我身ざまにしのばるべくも

なからむ人はたゞ色このまざらんにはしかじ
○信夫浦　奥州に信夫郡あり　打はへてくるしき物は人めのみしのぶの浦の蜑のたくなわ 新古今 此發端の詞は忍ぶと云にかけたるなり○所せく　所挟源語類聚にあり○くらふの山　山城の名所也暗部山と書也古今に梅の花匂ふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくぞ有ける　歌枕に暗布山とかけり貫之が歌に　秋霧の立ゐる時はくらふ山おほつかなくぞ見えわたりける鞍馬山は別に立たり○はらから　兄弟也○いとまばゆかりぬべし　おや兄弟よくしりて女をむかへたらば恥かしかりなんと也○世にありわぶる○にげなき　不二似合一義也○にぎはゝしき　豊饒富義也○あづま人　田舎人也○さそふ水あらば　古今小町が歌　わびぬれはみをうき草のねをたへてさそふ水あらはいなんとぞ思文屋康秀が三河のぞうに成てあがたみにはえいでたゝじやといひやれりける返事によめるとあり白樂天か琵琶行に長安倡家の女のよく琵琶をひきて世にもてはやされしが年たけて後に茶をうる商人の婦となる類も有○なか人　媒也遊仙窟に桂心と書り　媒妁人は雙方よきやうにいつわりをもいひて婚姻をなすなり○あいなさよ　無レ愛と書りこゝにてはあぢきなさよとなり○わけこしは山　筑波山はやましげ山しげゝれと思ひ入にはさはらさりけり○あたら身を　惜の字をあたらしむとよめり○梅の花かうばしき夜　伊勢物語云又のとしのむ月に梅の花さかりにこぞをこひていきてたちて見いで見とあり○みかきが原　御垣原　大和の名所むかしの皇居の跡也　九重の御垣かはらのひめこまつ千代をはほかの物とやは見る 金葉集

望月のまとかなる事はしばらくも住せずやがてかけぬ心とゞめぬ人は一夜の中にさまでかはるさまもみえぬにやあらん病のをもるも住する隙なくして死期既に近しされどもいまだ病急ならず死にをもむかざる程は常住平生の念に習ひて生の中におほくの事を成して後閑に道を修せんとおもふほどに病をうけて死門にのぞむ時所願一事も成せずいふかひなくて年月の懈怠を悔て此度若たちなをりて命をまたくせは夜を日につぎて此事彼事をこたらず成してんと願ひをおこすらめどやがてをもりぬれば我にもあらず取

みだしてはてぬ此たぐひのみこそあらめ此事まづ人
人いそぎ心にをくべし所願を成じて後暇ありて道に
むかはんとせは所願つくべからず如幻の生の中に何
事をかなさんすべて所願皆妄想なり所願心にきたら
ば妄心迷亂すと知て一事をもなすべからず直に萬事
を放下して道にむかふ時さはりなく所作なくて心身
ながくしづか也

○望月の圓なる事は　易豐卦云月盈則食釋名曰月
闕也滿則缺也望月滿之名也日月遥相望者也○心と
どめぬ人は　心をつけぬ人は一夜の間にさまで月
のかくることはあらじと思ふ也されば十六夜の月
をすでに一分の明をかくとつくれる詩人も有又わ
ざと不同なきやうにいふもあり　鄭谷が十日菊を
淸香一夜に衰へずと云類もあり○如幻の生　金剛
經に如夢幻泡影○妄想　無業禪師曰莫妄想とある
を夢中問答に論ぜる事あり○放下　禪語に放下着

とつかふ也なげすつる義也

とこしなへに違順につかはるゝことはひとへに苦樂
のため也樂といふはこのみ愛する事也是を求るとや
む時なし樂欲する所一には名也名に二種あり行跡と
才藝との譽なり二には色欲三には味なり萬のねがひ
此三にはしかず是顚倒の相よりおこりて若干のわづ
らひありもとめさらんにはしかじ

○とこしなへ　長の字也長時の義也○違順逆順也
佛眼遠禪師云苦樂逆順道在二其中一動靜寒溫自愧
自悔○二には色欲三には味　禮記曰飮食男女人之
大欲存焉

八になりし年父に問て云佛はいかなるものに候らん
といふ父が云佛には人のなりたる也と又問人は何と
して佛には成候やらんと父又佛のをしへによりてな
る也と答ふ又とふ敎候ける佛をばなにがをしへ候け
ると又こたふそれも又さきの佛のをしへによりて成
給ふ也と又とふ其敎はじめ候ける第一の佛は如何な
る佛にか候けるといふ時父空よりやふりけむ土より
やわきけんといひてわらふ問つめられてえこたへず
なり侍りつと諸人にかたりて興じき

○八になりし年　幼よりさがしき者今古すくなか
らず近代八歲の宮の詩歌なども云つたへたりもろ
こしにも謝尙は尼父顏回のわかちを云ひ何晏は答
顧新故のかへりことをし孔穎達は二禮を諳し劉晏

は封禪の頌を獻し寇準は華山の詩を吟じ王元之は蜘蛛の句をつらね黄庭堅は人間八年の詩を賦する是みな八になりし年の事也爰に兼好が云所は法華經八歲の龍女佛にあいて南方無垢の成道を唱ふる記莂をうけし心を以ていへるなるべし〇佛はいかなる物にか候らん　報恩經曰佛以レ法爲レ師佛從レ法生法是佛母佛依レ法住ニ於三寶中一何不ニ以レ法爲一レ初佛言法雖ニ是佛師一而非レ佛不レ弘所謂道由レ人弘是故佛先法後也（見ニ釋氏要覽中卷一）台宗安然法師立ニ始起有情一是無而忽有者也有ニ一禪人一告レ余曰米穀俵中經レ歲蟲生彼有レ疑ニ於此一耳彼豈能知ニ氣化形化之理一哉大藏一覽一云釋迦譜云劫初天地大水彌滿風吹漸滅次第結レ沫化爲ニ天宮一乃至山嶽平陸成レ淵深堰成レ海從レ上至レ下依レ舊建立光音天人乃飛下來各有ニ身光一飛行自在地味香甘因レ食彼故體重光滅復飛不レ起日月始生乃分ニ晝夜一因レ貪レ食故地味遂滅復生ニ婆羅一婆羅滅故復生ニ粳米一長四寸半朝割暮生因レ食レ米故方分ニ男形女相一後貪ニ積聚一制不ニ復生一後相侵盜無ニ能澤者一議ニ立一智者一三摩多一爲ニ平等王一賞レ善罰レ惡衆共給レ之　起世因本經云是平等王子孫相承三十三世善思王後乃證ニ轉輪聖王之位一王ニ四天下一百至ニ師子頰王一凡一百丹一萬五十六王師子頰生ニ四子一一名ニ淨飯一二名ニ白飯一三名ニ斛飯一四名ニ甘露飯一淨飯王生ニ二子一一名ニ悉達多一一名ニ難陁一白飯ニ二子一名ニ帝沙一一名ニ難提迦一斛飯ニ二子一名ニ阿尼婁馱一一名ニ跋提梨迦一甘露飯ニ二子一名ニ阿難陁一一名ニ提婆達多一且悉達多（世尊小名）一子名ニ羅睺羅一

佛說には因緣の趣きかくのごとし雜書に盤古皇を立るに似たり我朝の神代十二世韓國の檀君千年など云がごとし今此下に程子の說を引て人物生出の初を決す　程子遺書十八云或問太古之時人還與レ物同生否曰同莫ニ是純氣爲レ人繁氣爲ニ蟲否曰然人乃五行之秀氣此是天地淸明純粹氣所レ生也或曰人初生レ時還以レ氣化否曰此必燭レ理當ニ徐論一レ之且如ニ海上忽露ニ出一沙島一便有ニ草木生一有レ土而生ニ草木一不レ足レ怪既有ニ草木一自然禽獸生焉或曰先生語錄中云焉知ニ海島上無ニ氣化之人一如何曰是近レ人處固無須ニ是極遠處有ニ不レ可レ知曰今天下未レ有ニ無ニ父母一之人ト古有ニ氣化一今無ニ氣化一何也曰有ニ兩般一有ニ全是氣化而生者一若ニ腐草化爲レ螢是也既是氣化到

合化時自化有二氣化生一之後而種生者　且如下人身上著二新衣服一過二幾日一便有中蟣虱生上其間一此氣化也氣既化後更不レ化便以レ種生去此理甚明○空よりやふりけん　禮記問喪篇云禮義之經非二從レ天降一也非二從レ地出一也人情而已矣

佛說三身壽量無邊經曰文殊白レ佛言我等從レ昔聞二如來說法一如來何佛聞二此說法一佛告二文殊一言過二四十一重內大院一承二大毗盧遮那說法一文殊重白レ佛言四十一重內大院何者是耶世尊復言過二十住十行十廻向十地等覺內大院一承二妙覺地大毘盧遮那說法一文殊重白レ佛言妙覺地毘盧遮那從二何佛一承二說法一世尊復言妙覺地毘盧遮那承二無始無終一心一念本佛說法一文殊重白レ佛言無始無終一心一念本佛承二何佛說法一世尊復言無始無終一心一念本佛承二無心無念本無說法一文殊重白レ佛言無心無念本佛承二何佛說法一世尊復言無心無念本佛上更無二佛陀一無二前佛一無二後佛一無心無念本佛以二不思儀一爲レ體無二本去來一無二三身性一無二十果性一云々今盡不レ記

羅山氏以餘力閱兼好草藁夫彼餔佛老之糟魄揮淸紫之筆精非不瀟洒非不風流非不跌蕩非不戲謔然此與寡欲人易言與要名利者難言與玩詞者易言與不知倭語者難言雖然果哉避世乎夫於隱遯長往之人而復有眷々接引之意者聖賢待衰世之志也我今以此草爲國俗所玩故往往援經書之語解以國諺寫以倭字傳會以筆之恐雖有杜撰之議我然所謂用牛刀割武城之雞奏韶夏聽折楊皇華之耳者耶易曰納約自牖是由人所易曉而善導之也今杜撰解亦是開導國俗之窓牖也其斯而已矣乎楊子雲曰童子雕蟲篆刻俄而曰壯夫不爲也

羅浮散逸道春題

十六夜日記殘月抄補註

全

國學院大學出版部

十六夜日記殘月抄補注

傳曰述而不作信而好古我聞其語未見其人如高田文儒者豈其人歟文儒死者國風博渉羣籍旁就豪俊尋討詁訓研精覃思有季於茲遂訂正古文兼加注釋者前後數十種皆取證先哲不敢臆斷識者推爲允當其有益國學豈淺少乎頃日注十六夜日記既成將雕諸梓會有其友人來入京托巳示余々雅與文儒相識且嘉信好之篤爲題數語附巳返之云

文政紀元甫至後二日

式部大輔菅原長親

古にいはすやひさく學ひて高さに到ると此もゝ歳ばかりをちつ方石上ふる言學ひの道ひらけしより乃樂の葉の名におふ宮の古言をはしめ古をしも手にとれらんか如く詞の林にあそふ人久方の天の下にみちたらはせるは我も人もかくおたしき大御代にあへるさちならぬかはされは四方八方にみちたらへる中には彼ひきゝ埜を分すたゝちに天雲棚ひく高嶺に登れるもあれはあるはさかしき岩かとに足をそこなひあるはふかき谷におち入てよわてししたゝかに打なとすめるも世に多かりそは古の方とて後の世のくすしの方をひきく見下しつゝ高くどゝまれるをはつかに見きゝおほえて藥をあたはるにたちまちに天つちのなせる命をしもあやまてるにひとしきものから此道の毒はもたえ苦しむ事しなけれはさてしも有ぬへけれと其まことは一なれは古學せん人はふかく心を定めて歌をもふみをもよみ書へき事に祉抑てたひ吾友高田與淸ぬし四條局か書し十六夜日記を初學の爲にとて梶の音のつはらにときて梓にのほせらるゝを見るに彼わろものにはことなうたかひて心をひきくししかも上つ代の書ともをひきてしるしあかされしは我

常に思ふにことならねは端書をとひ給ふをいさゝ村竹卿印南野のいなひすて一言しるし侍るとて

ほそ河の細き流も末終に海となりなむ水くきそこれ

賀茂季鷹

殘月鈔のはし書

とゝせの秋のころ我黨の人々つどひて阿佛尼の旅の日記をよめるをりこれかれおもひよれることゝも書つけしをおなしくは注釋にとりなしてさくら木にゑらんとこふものあり料てひとひらかきいつれは一ひらゑり二ひら書いつれは二ひらゑりもてゆくになかはすくるはかりになりにたりそのほといかなるたよりにかやんことなき御わたりにさへきゝそなはしみそなはしけん正三位菅原卿眞名の序書てたまはりしにわか心しりなる屋代の翁も假名のおくかきをそへられたりきしか人々いひはやしもてはやさるゝものから余むかし書のときさとしとや歌文の筆くはへとや教子たちの上につきてなにくれといとましなければこゝろにもあらて書櫃の中にかいやりおきぬさるを板にゑりをへすてやまんことのほいなさと人のせちにいひそゝのかすにさりとていとまなき身にはえたへて鹿島の神官北條時鄰に筆つかしめつそもく我黨のいそしみ人に篠原資重は古き書このめり佐藤以貞は律令の書よめり康哉法師は萬葉集を空によみうかへたり藤原好秋瀧山知之久保長秋加藤豊子は歌

この書の題號な十六夜日記といふは何佛尼の自ら名付けしにはあらで後の人のしわざなりと云ふ方眞如なろしこの日記は阿佛尼が後宇多天皇の建治三年の訴訟のため京都より鎌倉へ下りし途中の事又鎌倉に在りし間の事どもな書きたろものなり

の詠口なり永澤久香皆川徳鄰は手かくわざをこのめり時鄰はとしころわか文案のかたへにひと丶なりてこれかれの書ひろくよみとほりたるいさをなれはいひおほせつれといそかはしき中のしわざなれはかうかへた丶すこともおろかにてあやまれるふし〳〵いと少からすなん文政四年といふとしのすゑの秋知非齋のあるし高田與清しるす

十六夜日記殘月抄例言

いさよひの日記と名づけたるよしは。詞にけふは十六日の夜なりけり。いとくるしくてふしぬ。いまだ月の光かすかに殘りたるあけぼのに。守山を出て行と云々。又うつの山にて行あひたりし山伏のたよりに。とゞけ申たりし人の御もとより。たしかなるたよりにつけて。ありし御かへしとおぼしくて。「旅衣なみたをそへてうつの山しぐれぬひまもさぞしぐるらん。「ゆくりなくあくかれ出しいさよひの月やおくれぬかたみなるべき。都をいでしとは神無月十六日なりしかば。いさよふ月をおぼしめしわすれざりけるにや。いとやさしくあはれにて。たゞ此御返事ばかりをぞまたさきこゆる「めぐりあふすゑをぞたのむゆくりなく空にうかれし十六夜の月。と云々。又れいのところ〴〵への文かく中に。「おぼろなる月はみやこの空ながらまだきかざりしなみのよる〳〵。と云云。などあるによれるなり。さていさよひは。古事記景行段に。宇美賀波伊佐用布云々。萬葉卷三の阿白木爾不知代經浪乃云々。また雲居奈須心射左欲比

落合直文云いさよふとはたゞよふ月といふに同し

云々。また山之末爾射狹夜歷月乎云々。また山際爾伊佐夜歷雲者云々。また十四の巻安乎禰呂爾多奈婢久君母能伊佐欲比爾云々。日本國現報善惡靈異記下巻第廿三縁に。登於坂上。而躊躇見。有三大道云々。訓釋に。躊躇多千意左與比天云々。綺語抄上巻に。いさよふ。山の端よりさし出る月をいふと云々。袖中抄十九の巻に。いさよふ月とは。やすらふ月といふ也。さればすでに山のはより出たる月の。立のぼりやらぬをまつほどをもいふべし。古事記傳廿九の巻に。伊左用布はたゞやすらひてすゝまざる意と云々。十六夜の月をいさよひの月といひしは。和歌童蒙抄一の巻に。いさよひとは十六日のよのつきを云なりと云々。袖中杪十九の巻に。月は日なみにしたがひて。その名かはれり云々。十六日をばいさよひと云々。藻鹽草一の巻に。いさよひの月十六日也。但十七日十八日の月ともいへり。又云いさよふ月といふは。いさよひの月にあらず。いさよひとは不知歷月といへり。いさよふ月とは。山のはより出やすらふこゝろなり云々。八雲御抄三の巻にいさよひの月は十六日の月也云々。是源氏歌故なりと云々。桂明抄に。按に源氏物語に。いさよひの月五所みゆ。夕顏一所。末摘花二所。葵一所。寄生一所なり。歌は末摘花に一首のみ。不知夜月は十六日にてる。望にひかれてこよひならぬ月をも申候はんずれども。うちまかせて。十六日の月をいさよひと申候。雲間木の間などやすらふをも。いさよふと申なり云々。玉の小櫛六に。入かたちかけれども。いまだいらてしばしあるほどの月をいふ。出んとしてしばし出ざるをもいふ。同じ言なり。さもじ清言也云々。此日記を書出けるゆゑよしは。奥書にみゆ。

日記といふ事は。義堂和尚の日工集一の巻に。因記年譜則。人々一生之中。毎日行住坐臥之際。所作事也。日本謂之日々記。余乃曰日用工夫云々。とみえ。三代實錄。十七の巻。廿四の巻。延喜式。圖書寮。空穗物語。藏開上巻中巻同。源氏物語。明石の巻。繪合の巻。狹衣草子。活板本上の一巻。榮花物語。つぼみの花の巻。などにその詞みえたり。此外にもなほおほかるべし。土佐日記には。をとこもすといふ日記といふものを。女もしてこゝろみんとてするなりといへり。から國には。論衡十三の巻効力篇に。然能擧賢薦士。上書日記也。能上書日記者文儒也。また老學庵筆記三の巻に。黃魯直有日記。謂之家乘な

〃尊卑分脈十一云。桓武平氏。貞盛弟繁盛系。度繁。左衛門尉。正五位下。叙留。貞永元年七月二日任佐渡守。

度繁ー┬繁親
　　　├爲高
　　　└女子

安嘉門院四條。法名阿佛。權中納言爲相卿母。歌人とあり。

どみゆ。中國の紀行の親は。紀ノ朝臣の土佐日記なり。これにつぐものは。增基法師が庵主。孝標朝臣ノ女の更級日記をふるしとす。庵主をば。色葉集上の二卷に。歌髓腦の列に載。八雲御抄一の卷。眞俗雜記五の卷。などにもさるさまに書つらねたれど。こはうつなく紀行の躰なれば。群書類從に。紀行の部に收られしを眼ありといふべし。河海抄には。篁日記といふものを引たり。

殘月抄と名づくるは。月の光かすかに殘りたるといふ。詞によれるなり。鈔の字のゆゑよしは師の樂章類語抄の附言にみゆ。袖中抄十四には。四條大納言問答云。抄をば世の人歌論義とぞ申すとあり。

此日記かゝれし時代は。弘安三年にして。關東に下られしは。建治三年十月也。其證は。この日記のうちに。年くれて春にもなりてとありて。夏のほどはあやしきまで。音づれも絕て。おぼつかなさも一方ならず。都のかたは志賀の浦浪たち。山三井寺のさわぎなどきこゆるも。いとおぼつかなし。とあるをみれば。帝王編年記に。弘安元年五月十二日巳時。日吉ノ神輿三基入洛。是依ニ園城寺金堂供養一也。十六日。日吉神輿各皈坐。とある時の事なるべければ。尼公の下られし年は。建治三年なる事あきらけし。それより下の條に。爲守の君としは十六ぞかし。とあるによりて考るに。爲守は嘉曆三年十一月八日逝去終焉ノ歌。むとせあまりよとせの冬のながきよにうきよの夢をみはてぬるかな。と常樂記にみえて。その十六歲は。弘安三年にあたれり。此日記の長歌に。よとせのはるになりにけり。とあるをみれば。建治三年のくれより四年にあたれり。

阿佛尼公は。作者部類庶女部に。安嘉門院四條。但馬守平度繁女。元右衛門佐。法名阿佛。とみゆ。異本に度繁を則繁に作たり。續古今羈旅に。廣繁とあり。廣は度の誤なるべし。扶桑拾葉集作者系圖に。從五位下佐渡守度繁女。號ニ四條一。又稱ニ右衛門佐一。安嘉門院侍女。大納言藤爲家室。中納言爲相母。後剃髮。法名阿佛。號ニ北林禪尼一云々。徹書記物語に。爲相は安嘉門院四條腹の子なり。安嘉門院へまゐりし間。安嘉門院四條といふなり。爲守も此腹なり。安嘉門院四條出家ののち。阿佛房と申ける也。安嘉門院は。後堀川院ノ女御淨土寺太政入道公房ノ女也。云々。とあり。たゞし安嘉門院は。後堀川院の女御にあら

阿佛尼弘安六年鎌倉にて死去せり

安嘉門院は順德天皇の后なり

時の執權北條時宗に訴へたり

阿佛尼の著述は此ほかに庭の訓夜の鶴などあり

ず。紹運錄に。後高倉院の皇女邦子。順德院の皇后後堀川院の御姉君にして。准母にたゝせおはしまし弘安六年九月四日。七十五にしてかくれたまふよし。女院小傳にみえたり。大日本史藤原爲氏傳二百廿二の卷歌人列傳四に。母平氏初仕安嘉門院。號四條又右衞門佐。剃髮法名阿佛。世稱北林禪尼。有才學。所著有十六夜日記冷泉家系圖と云々。本朝列女傳儒人傳三の卷に。安嘉門院四條。祝髮號阿佛。大納言爲家儒人。黃門爲相母也。有女又善和歌。爲敎女又和歌仙女也。皆卓絕之才。閨閤之秀。世幾希。如此之才女。多于一家。世載于勅撰集矣。阿佛有事到鎌倉。其紀行和歌若干。至今行世。爲氏爲相異母兄也。自是倭歌者流分爲二流。爲氏謂之二條家。爲相謂之冷泉家。和歌之學所自出也云々。東見記下卷に。阿佛は平時忠の一門の女也。安嘉門院の衞門佐と云。後には四條とも云。嫁爲家而生爲相。爲氏は宇津宮彌三郞賴綱の女之腹也。爲氏は兄也。爲家末後。播磨の越部の庄を爲相に讓る。爲相幼少故に爲氏是を押領す。於是阿佛鎌倉に下り是を訴ふ。此時爲氏是を爲相にかへす。其狀于今藤谷爲賢の家にあり云々。新編鎌倉志四の卷に。阿佛卯塔の跡は。英勝寺の境內北の方にあり。昔此處に阿佛が卯塔有しとなり。故に俗に阿佛卯塔屋敷とも云ふ。又極樂寺の境內に月影谷と云所あり。阿佛が栖ける地なり。阿佛は藤原爲相の母なりと云々。また六の卷月影谷は極樂寺の地內。西の方なり云々。此所に阿佛屋敷あり云々。英勝寺の地內にも阿佛屋敷と云有彼こは葬たる所なる故に阿佛卯塔屋敷と云。住し處は此谷なりと云々。上野國群馬郡和田山極樂院の境內に。阿佛の石浮圖といふあり歸眞阿佛菴主。康永二年癸未三月二十四日。とみゆ。されど阿佛の墓上野にあるべくもあらず。こは後にゆかりのものなどのたてたるか。またと人の墓にやいまだ考ず。古今榮雅抄序末に。或抄云。爲兼爲相兩人鎌倉に下向の時。同じく不立の義をいへり。爲相幼少にして。父爲家におくれ。母阿佛にさへ生れながらわかれければ。口傳なく不斷の義をすてゝと云々。本朝書籍記增補に阿佛坊作名號四條局。阿佛口傳一卷。うたゝね。中院御文。いさよひの記一卷。假名諷誦云々。吾妻問答に。爲相卿母阿佛といふ人。東へくだりけるに。

長月晦日に。或人連歌を仕とて。阿佛に發句を乞けるに。〽けふばはや秋のかぎりになりにけり。としてつかはしければ。人々百韻して。翌日に又一座侍りけるに。阿佛に發句を所望しければ。〽けふはまた冬のはじめになりにけり。と書て出して。その次に曰歌は題を發句とし。連歌は發句を題目とせり。然ばその時節をたがへずあるべきとなり。と申されけるとかや。彼阿佛は安嘉門院ノ四條とて。女房の歌よみなりと云々。菟玖波集（雜躰連歌 俳諧部）に。前大納言爲家と。安嘉門院四條との連歌あり。稱硯子が手鑑（延寶三年刊本）に。安嘉門院四條が眞蹟の古今の歌切を載たり。

此日記の出來たるころは。假名の法いとみだりがはしくなりはてヽ。ひがとのみおほかれは。今は古今や後撰などの世のつかひざまによりてかけり。そは神樂。催馬樂。菅家萬葉。和名抄。新撰字鏡。延喜式。日本紀竟宴歌。將門記。日本靈異記。などの眞假名に書たるものはいふもさら也。眞蹟とてつたはれる。紀朝臣の古今集。又は堤中納言集。道風朝臣の秋萩帖。のたぐひいづれも假名づかひ相おなじければ。延喜天暦の御世は。古事記。日本紀。萬葉。などのころとはおなじからで。うつれる音もあまた出來し也。さるをあながちに。古假名にのみ改たらんは。其時代の風にかなはずて。中々に僻事也。古く和之留（ワシル）とも。彼之留（ハシル）とも。多和々（タワヽ）とも。等乎々（トヲヽ）ともかよはしいふ類おほかれば。やヽ後の通音なればとて。あやまりとすべきにあらず。ちかごろ古學者だつ人の手になれる。古今。後撰。伊勢。大和。などやうの歌ぶみや。物がたり書に。いにしへに引あてて心もなくかんなを書改たるは。わらふにたへぬとなり。そは古き假名遣にはあらで。中々に今の世のわたくしのさだめ也。委しき事は。樂章類語抄の附言にみえたるがごとし。

作者部類庶女部下に。安嘉門院四條。續古今三（安嘉門院右衛門佐）續拾遺五。（四條）新後撰一。玉葉十。續千載一。續後拾遺一。風雅十五。新千載二云々。續作者部類庶女部に。安嘉門院四條。新拾遺（三首）。新後拾（一首）新續古（五首）云々。安嘉門院右衛門佐とて撰集に載れるうた。續古今三首（羇旅一首。雜下一首。雜上一）四條とて載れるうた。續拾遺六首（秋下一。雜秋一。戀三二。戀四一。戀五一。）新後撰一首。（夏部）玉葉十一首。（秋上二。旅四。戀一一。戀二一。戀四一。戀五一。雜四一）續千載一首（春下）續

後拾遺一首雑下。風雅十一首。春上一。春下一。冬一。旅一。雑下二。戀二四。雑上一。新千載一首。雑中。新拾遺三首。秋下一。雑五一。戀一。新後拾遺一首戀一。新續古今五首。春上一。夏一。秋上一。離別一。戀四一。通計四十四首あり。夫木抄のする所。春一一首。春二二首。春三三。春四一。春五一。春六一。夏一一。夏二一。夏三四。秋一一。秋四二。秋六二。冬二一。冬三三。雑二四。雑三二。雑四二。雑五一。雑六一。雑七二。雑八一。雑九三。雑十四。雑十一一。雑十二一。雑十三一。雑十五二。雑十六一。雑十八一。通計五十一首。みな安嘉門院四條と載たり。歌枕名寄に。引用して歌七首。二の巻山城國に一首。十九の巻尾張に一首。廿の巻伊豆に一首同巻相摸に一首。廿四の巻近江に二首。未勘部上に。安嘉門院左衛門佐とて。磐城山の歌一首あり。異本には四條とあり。佐衛門佐は右衛門佐の誤なるべし。校本七種あり。岡本といふは。岡山少將光政朝臣自筆の本也。金本といふは。金吾中納言秀秋卿自筆の本也。伊本といふは。西院伊村所藏の古寫本也。扶本と云は扶桑拾葉集十二の巻に。收られたる本也。群本と云は。群書類従三百八の巻に載たる本也。これには異同をしるしたれば。そは群イとして擧たり。原本と云は。萬治二己亥歳季夏中旬。洛陽今出川林和泉板行。と奥書ある流布本也。古本と云は。松の舍所藏の古寫本なり。岡本金本伊本は。屋代弘賢翁の校合せられしを得たるなり。

原本。扶桑拾葉本。群書類従本。などには。卷端にいさよひの日記をしるし。伊村本には阿佛道行とあり。其外の本には標目なし。椿葉記の跋に。作者の名字あらはにかゝぬこともみえ。奥義抄。河海抄などもつくり名也。土佐日記は。女房のさまに書なしたるなど云ふに。名をあらはすべくもあらねばかゝず。此日記の中に寫誤れるか。又もとよりさありしか。ひがことゝみゆる詞遣所々ありとて。師の試にあげつらはれしをこゝにあぐ。一の卷二丁左　しるしおかれたりける云々異本にけるの二字无もあれどさては上のその結びにかなはずてはしるしおかれたるとあらまほし。同五丁左　あれまさりつる云々ぬるとあらまほし。同六丁左　書おかれける云々たるとありたし。同十二丁左　書つゞけぬるも云々書つゞくるもと有たし。同十五丁左　たどりいでつ云々いでぬと有たし。同十六丁右　おもひつゞけゝる云々つゞけたるとありたし。同十七丁左　降つる雨云々古本にけると有に従べし。同廿丁右　あつたの宮へまゐり云々宮にまゐりと有たし。同廿一丁左　わたりに

こそときゝしかど云々こその二もじ削らまほし。同廿二丁右 渡りぬるかな云々渡りけるかなと有たし。玉葉に渡りかねぬると有はよし。二の卷[illegible]みしまの明神へまゐるとて云々明神にと有たし。同[illegible]よそになしぬる云々なしたると有たし。同廿二丁右 明日は鎌倉へいるべしといふなり云々鎌倉にと有たし。三の卷上十六丁右 年へにける云々へにけりと有たし。同廿丁右 てんあひぬるも云々てんあへしもと有たし。同廿九丁右 むさしのせんじへ云々せんじにと有たし。

北條時鄰識

十六夜日記殘月抄補注卷之一

むかしかべの中よりもとめ出たりけんふみの名を群本を字无ば。今の世の人のこは夢ばかりも身の上のとゝはしらざりけりな。

○かべの中よりもとめ出たりけんふみ　古文孝經ノ孔安國が序に魯恭王使レ人壞ニ夫子講堂ー於ニ壁中石函ー得ニ古文孝經二十二章ー　○しらざりけりな　本居宣長が古事記傳廿九に那は助辭にて與といふに似ていさゝか歎く意あり此辭萬葉にもはかる中に卷一につらく〜に見つゝ思奈許湍の春野を卷十三にたまだすきかけて思名かしこかれどもこれらの那古事記景行の段の阿斯用由久那の那に似たり此外卷四に我は戀名など牟那とつゞきたるなほこれかれあり終りにあるは卷十六に間使やらばそれと將知名云々。

(補注)むかしかべの中より以下いさよふ月にさそはれて出でなんとぞ思ひなりぬるといふ迄は出立の理由を云り　○夢ばかり　はいさゝかもの意○身の上の事とは云々　落合直文云暗に爲氏の不孝

のことを云へるなりと。

みづくきの岡のくず(葛)葉はら、原本、金吾本、作くす伊本作葛葉は、かへすがへすもかき(書)おくあと(跡)たし(正)かなれども。かひな(無益)きものはおや(親)のいさめ(禁)なり。諸本作なりけり、今据伊本、

○水くきのをかの葛葉　水茎は岡の枕詞也草木の茎のみづみづしきより瑞茎の若とつゞけしにてわとをを通はせいふなるよし宣長が玉勝間一にいへり」萬葉十に雁がねのさぶく鳴しゆ水莖の岡のくづはゝいろづきにけり同十二に水莖の岡のくづはを吹かへし面知兒等がみえぬころかもなど有」てゝには水莖の岡に筆をよせたり六帖五にかひなしと思ひなげちそ水ぐきのあとぞ千年のかたみとなる新拾遺春上夫木雜十四などそのほかものにあまたよめり喜撰式に筆みづくきといふ云々谷川士清が倭訓栞に水莖の義云々空穗祭の使源氏梅が枝狹衣活板一の上などにもみゆ」ては爲家卿のかへすがへすねんごろに書殘しおかれしたしかなる讓狀の制の旨を異母兄の爲氏卿用られずして阿佛尼のうめる爲相卿の所領播磨國細川の庄を押領せられたれば親の制も益なしとはいへり」いさめは天武紀十年に禁イサメ萬葉九に不禁イサメヌなどみゆ奥義抄中に諫をいさむとはよむ也をしふるやうなると也事をすゝむるにもいさむるはある也云々拾遺戀四にたらちねのおやのいさめしうたゝねは物おもふ時のわざにぞありける。

(補注)書きおくあと　爲家卿の遺されし領分の讓り狀すなはち證文を云ふなり落合直文云水莖の岡の葛葉かへすがへすは書置の序なり　○定家卿は父俊成卿より和歌の道を傳へて並なき上手なりしかば從ひて學ぶもの多くかの鎌倉右大臣として百人一首の中にも收めたる實朝公も其門人の一人なりかくて其子爲家孫爲氏爲敎爲相なと相繼きて一世の師範と仰かれ此道に入るものは其門弟ならざるはなかりきかくて爲氏卿の子孫初めは御子左家といひ後には二條家と稱ふ爲敎の家は毘沙門堂爲相の後は冷泉家と云り三家共に用ひられたり其中毘沙門堂の家は中頃絶へて二條冷泉二家和歌の宗匠として近世までにも及べり　○親のいさめは親の禁制なり奥儀抄にいさむは敎ふる樣なる事なり事

をすゝむるにもいさむるはあるなり天武紀に禁をいさむとよめり。

またけんわう（賢王）の人をすてたまはぬまつりごと（政）にももれ。ちゆうしん（忠臣）の世をおもふなさけ（情）にもすてらるゝものは。かずならぬ身ひとつ（一人）なりけりとおもひしりながら。原、伊、扶本、共作しりなば、またさて（然而）しもあらで。なほこのうれへ（憂）伊作うれひこそやる（慰）かたなく（无）かなしけれ。

○なりけり　宣長が玉の小櫛五にすべて文になりけりといへるは上の事の由を解釋したるごとき語のとぢめにおく辭なり。

（補注）賢王の人をすてたまはぬ云々　直文云響きに朝廷に訴へしかと申分立たずなりしを暗にうらみていへるなりと。

さらに（更）おもひつゞくれば。やまとうた（和歌）の道はたゞまこと（唯實）すくなく。あだなる（浮華）すさび（遊）ばかりとおもふ人もやあらん。ひのもと（日本）の國にあまのいはと（天石窟）ひらけ（開）し時よも（四方）の神たち（等）のかぐら（神樂）のことば（詞）をはじめ諸本作ときより、今据群本て。世をおさめ（治）物（モノ）をやはらぐる（和）なかだち（媒）となりにける伊作けりとぞ。此道のひじり（歌仙）たち（等）はしるしおか（記）れたりける。原、金、群、共ける二字无

○やまと歌の道　古今ノ序にやまとうたは人の心をたねとしてよろづのことのはとぞなれりける云々　土佐日記にやまとうたあるじもまらうどもこと人もいひあへりけり云々　空穗ノ藤原の君によばひぶみのやまとうたなきは人あなづらしむるもの也云々　奥義抄序に歌はあめのむかしよりおこりてあらかねの今につたはれりくにつわざのはじめなるがゆゑに和をさきとしとをながむるゆゑに歌を名とすこれをやまと歌といふ云々　千載ノ序にやまとみうた云々　道とは歌道をいへりしきしまの道やまと言のはのみちなどみなおなじ　伊勢ノ大輔ノ集によをつがんとはさら也しきしまの道をさへこそ君はしりけれあとくれてむかしてひしきしきしまの道をとふ〳〵たづねつるかなふみかよふ人だになきはしきしまの道しらぬ身のうきにぞ有ける　風雅ノ雑ノ下定家敷しまの道にわが名はたつの市やいさまたしらぬやまとことのは　此外いとおほかり　宗祇筑紫ノ道ノ記にやまとことのはの道はその家の人又は

大家などにあらずはかなひなかるべし云々また明月記ノ建仁二年七月廿日の條に和歌ノ道吾妻鏡ノ六に歌道などゝも書たり　○ひのもとの國　續日本後紀ノ十九長歌に日本乃野馬臺乃國遠云々萬三に日本之山跡國乃鎭十方云々舊唐書東夷傳に日本國者倭國之別種也以其國在日邊故以日本爲名　○あまいはとひらけし時　天照大神御せうとの素戔鳴尊の勝佐備にあちきなき御しわざありしをいかり給ひて天の石窟にこもりましゝかば六合常闇にて晝夜のわいだめなく群神愁さまよひしをり高皇産靈神八十萬ノ神とゝもにはかりて石窟の前にくさ〴〵の物をとりかざり巧に俳優して神樂せられしと古事記ノ上神代紀ノ上舊事紀二類聚國史神祇一古語拾遺天書紀三類聚神祇本源十五神皇正統記上神道集一などに見ゆ　○かぐらの詞　こは何の詞をいふにや今つたはれる神樂歌は延喜の御世にえらび定られしよし悅目抄にみゆ古語拾遺に天照大神石窟の内にて群神の歌樂するをあやしとおぼして磐戸をいさゝかひらき見出したまひし時上天初て晴衆共に相見ることを得たりすなはち手を伸へて歌舞せしをりのたゝへごとに阿波禮阿那於茂志呂阿那多能志阿那佐夜憩飫憩とあり舊事紀にもとゝの文をとりてしるしたり此稱言を神樂の詞といへるにてもあるべしさてかぐらといふ意は賀茂眞淵翁の神遊考にカミアソビといふべきを神樂の字より誤てカグラといへるよし論せられたり此石窟の前の俳優の神樂を神皇正統記ノ上粟田口猿樂記梁塵愚案抄の上などに神樂の起なりといへり　○ものをやはらぐるなかだち　古今序にをとこをんなの中をもやはらげたけきものゝふの心をもなぐさむるは歌也云々奥義抄ノ序に男女の心をやはらぐるなかだちこれよりよろしきはなし云々　○ひじりたち　日知は日之食國を知看す日神に比したる美稱也神武紀ノ己未の年に大人ヒジリ云々垂仁紀ノ九十九年に神仙ヒジリ云々また聖帝ヒジリノミカド云々續日本後紀ノ十九に聖之御子曾云々萬ノ一に日知之御世從云々此外いとおほかり歌仙にいへるは古今序にかきのもとの人丸なんうたのひじりなりけると有。

(補注)あだなるすさびはかりおもふ人もやあらん

つまらなきなぐさみのしわざ也と思ふ人も或はあらんと也。

ここもまたしふをえらぶ人はためしおほかれど。伊、扶、共作二度ふたゝび伊、作たびたび勅をうけて。世々にきこえあげたるは。たぐひなほありがたくやありけん。そのあとにしもたづさはりてみたりのをのこゞ共伊作なのこ共もちの松尾古木作もいち・のたのふるほぐどもを。いかなるえにかありけん。あづかりもたるとあれど。道をたすけよ。子をはぐゝめ後の世をとへとて。ふかきちぎりをむすびおかれし細川のながれも。ゆゑなくせきとめられしかば。あとゝふのりのともし火も。みちをまもり家をすけんおやこの伊作おやのいのちも諸ともに。きえをあらそふ年月を經て。あやふく心ぼそき物から諸本作ながら今据伊本、何としてつれなくけふまでは金原岡、扶、共は字无、ながらふ原、岡、扶、共作ながらふる、らん。

○ふたゝび勅をうけて　八雲御抄ノ一眞俗雜記ノ五拾芥抄ノ上末など考に定家卿二度勅を承て新古今新勅撰の撰者になられ爲家卿二度宣を奉りて續後撰續古今の撰者になられたれば一代に二度づゝ勅を承て代々撰者になられしよしなるべし　○世々にきこえあげ　古今ノ雜體忠岑ノ長歌に身はしもながらことのはをあまつ空まできこえあげ末の世までのあとゝなし云々　○たづさはりて　景行紀廿七年に携タヅサヘ云々士淸が通證に多都佐倍ハ手副也都ハ助語云々日本靈異記ノ上に携タツ左波り云々萬五に手乎多津佐波里云々與淸按に手執副の義にやとりを省てつに通はしいへるにてもあるべし繼體紀ノ歌に多企阿娑播利と有も叩合副也　糾纆も相副合纒の義とみゆ　○みたりのをのこゞ　與淸按にみたりはふたりの寫誤にや四條が腹の子五人あり長女は紀ノ内侍にて父異也慶融源承は僧也さればこゝは侍從爲相と大夫爲守との二人成べし十四卷系圖ノ爲家卿の子に爲顯爲相爲守三人ならびたれど爲顯は此記にさたなき人なれば四條が腹とも定がたし下文に五つの子共の歌どもみえたれば四條が子は五人なるべくぞ思はるゝ　○ふるほぐども　空穗ノ國讓ノ中ニにほうでなどとりちらし云々源氏橋姫にほぐ

どものかびくさきを袋にぬひいれ云々狹衣活板ニ上にはうぐのはしだにおちゝらぬは云々紫式部日記にふるきはんごひきさかし云々新續古今雜下詞書にはうごなどとりしたゝめ云々和名抄文書具に齊春秋云沈鱗士字雲禎少淸貧以ニ反故寫ニ書數千卷一云々色葉字類抄保部に反古ホグホンゴ云々活板節用集保部に反古ホウグ云々こは爲家卿の殘置れし歌の草稿傳書などをさして云る也 ○はぐゝめ萬九に吾子羽裹云々十五に羽久毛流云々また羽具久美母知氐云々新撰萬葉上に羽裹ハグクム云々○細川の流れもゆゑなくせきとめられ 惺窩文集の系譜客に親家云々 改ニ名俊成一爲ニ皇太后大夫一家居ニ五條一世稱ニ五條三位一別賜ニ播州三木郡細川庄江州坂田郡小野庄一是爲ニ倭歌所奉邑一適子世々襲レ封云々爲家有ニ子三人一長曰ニ爲氏一權大納言號ニ御子左一其後裔稱ニ二條家一又號ニ冷泉一次曰ニ爲教一左兵衞督號ニ京極一季曰ニ爲相一權中納言號ニ冷泉一三家鼎峙各立ニ門戶一正元年中以ニ書券一付ニ播州細河ノ莊於爲氏一爾後爲氏有ニ不孝數事一爲家悔レ之文永十年癸酉七月二十四日十一年甲戌六月二十四日以ニ文劵兩通一付ニ爲相一建治元年乙亥五月一日爲家薨葬ニ嵯峨中院一爲相尙幼故爲氏强奪ニ細川庄一云々此記の長歌に須磨と明石のつゞきなるはそ川山の山川の云々正徹などさめ草に近江の小野の庄播磨の細川の庄は和歌所の永領にて五條の三所よりかはらざりしかども云々播磨國名所産物記ノ下に三木郡細川庄の名也此庄は京極中納言定家卿の采地にして天正のころまで冷泉家の住給ひて今に大雄寺といへる寺に俊成定家兩卿をはしめ塚など有て冷泉家よりいとねんごろに跡吊ひ給ふとなり爲相卿の歌とてむかしより詠し人のかず〳〵に今もかはらぬ細川のさと云々今播磨ノ國美囊郡細川ノ庄と號する所細川中村金屋村脇川村大柿村挑澤村高篠村高篠新田佐野村西村とて九村あり ○のりのともしび 千載ノ釋敎敦家歌に夢さめんその曉を待ほどのやみをもてらせ法のともし火心地觀經ノ三に法寶能爲ニ大法燈一能照ニ生死諸黑闇一云々新譯華嚴經ノ廿五に佛子菩薩摩訶薩施ニ諸燈明一所謂蘇燈油燈寶燈摩尼燈漆燈火燈沈水燈栴檀燈一切香燈無量色光燈施下如キ是等ノ無量燈ヲ上云々佛說施燈功德經に復次

舍利弗於佛塔廟施燈明已死便生於三十三天云々　○きえをあらそふ　小夜のねざめに人の身は朝がほの花の露きえをあらそひ云々續千載釋敎前大僧正範憲歌にいかゞしてひかりそへましともすればきえなんとするのりのともしび。

（補注）きこえあげたるは　歌集を撰定して奏上したることをいふなり　○類なはありがたくやありけん　二たび勅を奉じて選みたる例はまだありしでと稀なるべしとなり　○いかなるえにかありけん　えは緣の字のんを略せるなり如何なる因緣によつてかゝるわけとなりたるにかの意　○ふかきちぎりをむすびおかれし　爲家卿の恩慮深き約束を阿佛尼と固め置きたるをいふ。

をしからぬ身ひとつはやすくおもひすつれども。子をおもふ心のやみはなほしのびがたく。（扶作かたくて、）みちをかへりみるうらみはやらんかたなく。（金作なくて、）さても（伊さても三字无）なほあづまのかゞみにうつさば（諸本作うつさむは、今据伊本、）くもらぬかげもやわらはるゝと。せめておもひあまりて。よろづのはゞかりをわすれ。身をえうなきものになしはてゝ。ゆくりもなくいさよふ月にさそはれいでなんとぞおもひなりぬる。

○子をおもふ心のやみ　後撰雜一兼輔人のおやの心はやみにあらねども子をおもふ道にまよひぬるかな兼輔集にも見えて此歌の次に子のためにのこすゆのちもえてしがなおいてさきだつくひなかるべくといふうたあり　○あづまのかめの鏡　鎌倉の政道をいへり吾妻は古事記景行の段に倭建命云々到足柄之坂本云々故登立其坂三歎詔云阿豆麻波夜故號其國謂阿豆麻也云々景行紀四十年に日本武尊每有顧弟橘媛之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾嬬者耶故因號山東諸國曰吾嬬國也云々」かめのかゞみは北史長孫紹遠が傳に言足爲龜鏡云々祖庭事苑七に龜鑑龜所以決猶豫鑑所以辨妍蚩云々將軍執權次第を按に此時鎌倉將軍惟康親王執權相摸守時宗也　○身をえうなきものになしはてゝ　伊勢物語に昔男有けり其男身をえうなきものに思ひなして京にはあらじ東の方に住べき國もとめにとて行けり云云　○ゆくりもなくいさよふ月に　源氏夕顔に

いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを女はおもひやすらひ云々いさよふ月の事例言にいへりゆくりなくは思ひかけぬこと也景行紀四十一年に不意之間ユクリモナク云々雄略紀に不意オモヒノホカニユクリニと有假名本にはおもひのほかに云々一にゆくりにと有よし也土佐日記にゆくりなく風吹てなどみえて物におほかり源氏少女行幸などにゆくりかとも有。

〔補注〕惜しからぬ身　阿佛尼自身をいふ　○道をかへりみる恨はやらんかたなく　道とは歌の道の事歌道の衰へんことを氣にかける心ぐるしさは慰めんに所なくとなり　○くもらぬ影もやあらはると　鏡に縁故有詞を用ひたり己が身の正しき由明白になることとあらんも知れずとなり物集博士云あらはるゝはあらはすと云はではかなはぬ格なりさるは上にうつすと他動詞に云へる首尾によりてなりと　○せめておもひあまりて　切なる思ひがむねにあまりて心に制し切れぬをいふ。

さりとて(雖然)ふんやのやすひで(文屋康秀)がさそふにもあらず(伊本作さそふ水もあらず、群本作さそふ水にもあらず、)すむ(住)べき國もとむる(求)にもあらず。ころ(比)はみふゆ(眞冬)たつ(立)はじめ(始)の。さだめなき(扶、伊、共、さためなき五字无)そら(空)なれば。ふりみふらずみ時雨もたえず。あらし(嵐)にきほふ(競)このは(木葉)さへ(副)。なみだ(涙)とゝもにみだれちり(散)つゝ。こと(事)にふれ(觸)て心ぼそくかなしけれど。人やりならぬ道なれば。いきうし(行憂)とてもとゞ(止)まるべきにもあらで(伊作あらず)。なに(何)となくいそ(急)ぎたち(立)ぬ。

○ふんやの康秀がさそふ　古今ノ雑下にふんやのやすひでが三河のぞうに成てあがた見にはえいでたゝじやといひやりける返事によめる小野小町わびぬれば身をうきくさの根をたえてさそふ水あらばいなんとぞおもふ小町家集にも出たり古今集目録に文屋の康秀貞觀二年三月廿日任二刑部中判事一年月任二三河掾一元慶元年正月十五日任二山城大掾一三年五月廿八日任二縫殿助一云々拾芥抄ノ上末に先祖不レ見縫殿助云々中古歌仙三十六人傳もまた古今目録と同説也新撰姓氏錄ノ上右京皇別に文室眞人天武天皇皇子二品長屋王之後也　○すむべき國も

とむるにも　○伊勢物語にむかし男ありけり京やすみうかりけんあづまのかたに行て住所もとむとて友とする人ひとりふたりして行けり云々古今羇旅部舊本今昔物語ノ廿四などにこれを業平中將の東行とす與淸按に伊勢物語は業平朝臣世をうきものにおもひけるころ此册子を書ていきどほりをはるけし也されば惟喬親王の沈淪より紀ノ有常が不幸の事所々に見ゆ中に東國にくだりし事その外の事など跡なき物語をくはへて發憤の語をあらはにせじとおほひかくせしなりさて古今にも中將の物語より撰取て載られたれば古今を證として業平の東行を實事とするはひがこと也文德實錄三代實錄公卿補任などの正しき書にはさるよしたえてなしこの伊勢物語の中に後のことのまじれるは後人の筆くはへてもてあそびしがゆゑなれば今の本は業平の手になれる眞面目とはいふべからず　○三冬たつ　萬十七に民布山つき春はきたれど云々夫木冬一仲正歌にみふゆきぬ云々史記東方朔傳に三冬文史足レ用云々　○ふりみふらずみ　後撰冬神な月ふりみふらずみ定なき時雨ぞ冬のはじめ也ける

○人やりならぬ道　古今離別源さね人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざかへりでん顯注密勘に人やりとは人のやるといふ詞なり云々。

（補注）さだめなき空　晴雨の定まりなき天氣のこと也　○嵐にきほふ　きほふは競の字嵐の爲めに木の葉が散るを爭ふをいふ　○ことにふれて　種々のことにつけての意　○人やりならぬ　容易ならぬ道なればの意　○いきうしとても　行きづらきこと

めかれせざりつるほどだにあれまさりつる庭もまがきも。ましてと見まはされて。したはしげなる人々の袖のしづくも。なぐさめかねたる中にも。侍從。大夫（原扶有の字）などのあながちに打くつし（原作つくし）たるさまいとこゝろぐるしければ。さまぐいひこしらへつ　ねやのうちを（原、扶共不な字无）みれば。むかしの枕さへ（原、伊、共作まくらの）さながらかはらぬを見るにも（原、扶、共作見るも）。いまさらかなしくて。かたはらにかきつく。

とゞめおくふるき枕のちりをだに我たちさらば誰かはらはん。

○侍從大夫　諸家傳補任五に冷泉爲家息爲相卿元爲輔文永二四十三叙爵三歳于時爲輔同五八廿四從五位上六歳同八四[illegible]侍從九歳同十二正十八美作權守弘安二八十一正五下十七歳改爲相云々公卿補任亦同十四卷系圖に權大納言民部卿爲家卿息五人内一男大納言爲氏卿流嫡也二男從二位左兵衛督爲敎卿流有子孫但今世無相續號京極三男侍從爲顯無子孫相續四男中納言左兵衛督爲相卿流號冷泉子孫相續五男爲守無子孫云々藤原系圖拾一に爲相冷泉權中納言正二位元爲輔母安嘉門院右衛門佐法名阿佛嘉暦三年七月十七日於關東薨六十五歳道號玄國法名昌久云々爲守侍從正五位下法名曉月云々徹書記物語に曉月坊は淨土宗にてありけるなり爲守云々按に侍從は爲相卿大夫は爲守にて共に四條が腹の子なり　○あながち　景行紀の十二年に强アナガチ云々通證に痛勝之義古語事之切皆曰阿那云々遊仙窟に强アナガチ云々賀茂翁源氏新釋桐壺にたとへば人にてもとりけだものにてもおほくかたにかくれをるを人あまたしてこの穴かしこのくまを吾かちにあさるごとき事をあなくると云且それはみな强てたづぬるなれば所によりて强の字をあながちとも讀り云々　○心ぐるし　伊勢物語に男きゝていと心ぐるしかりければ云々源氏桐壺にわづらはしく心ぐるしうおもひきこえ云々宣長が玉霰に心ぐるしきは物語に多き詞にて俗に氣の毒など云べき意又物の氣づかはしく案じらるゝと云意也然るを近世人たゞ苦しきことにつかふはたがへり云々與清按に心の苦き事にも云る例多し氣の毒と云義のみにあらず　○むかしの枕　我枕はむかし爲家卿とかはせし時の枕ぞと也實治百首戀蓮性見しままに床もはなれぬつげまくらされども人はゆくへやはしる夫木雜十四にこを正三位知家卿の歌とせられしは誤也實治百首戀に又爲繼はらひかねつもれるちりのつらさにもかはすは夢の枕なりけり少將内侍あはぬ世のつもれる數の塵ならば枕にたづやうき名なるらん。

（補注）いひこしらへは賺し慰むるをいふ詞也。
よゝに書おかれけるうたのさうしどものおくがさし
て。あたならぬかぎりをえりしたゝめて。じゞゆう
のかたへおくるとて書そへたるうた。
和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草これを昔のかた
みとも見よ。（金、伊、作さは、）
あなかしこよこ浪かくなはま千鳥ひとかた（原作かくろ）
ならぬ跡をおもはゞ。これを見て侍從のかへりごと
いとゝくあり。（伊作いとしく）
つひによもあたにはならじ藻鹽草かたみをみよの
あとにのこせば（金、扶、伊、共作のこさば、）
まよはましをしへざりせばはま千鳥一方ならぬ跡
をそれとも。このかへりといとおとなしければ心や
すくあはれなるにも。むかしの人にきかせたてまつ
りたくて。またうちしはたれぬ。
○うたのさうしども　伊勢貞丈主の洗革に草紙雙
紙とも草子とも書け共冊子と書を正とす云々好古

小錄下に古書に草子と書又造紙とも書皆假
借也云々伊藤長胤が名物六帖器財一に策子トヂホ
ン云々葉子トヂホン云々簿秩トヂホン云々新撰六
帖五に信實とぢおける枕ざうしのうへにこそ昔が
たりの夢はみえけれ陔餘叢考卅三に程大昌演繁露
云古書皆卷至ㇾ唐始爲二葉子一卽今書冊也此恐未ㇾ必
唐時如下鄴侯插架三萬軸白樂天云新詩三十軸々々
金玉聲徵之序二樂天詩一亦云前後數十軸上是其時用二
卷軸一也筆叢亦謂唐末宋初鈔錄變而爲二印摹一卷軸
變而爲二書冊一云々與清按に中國書に草子と云しは
枕草子を始とすべしては八雲御抄一に淸少納言枕
草子眞俗雜記五に枕雙紙淸少納言仁和寺書目錄に
淸少納言枕草子二卷など見えたればいと後世より
おはせし名にはあらず榮花根合にふたあゐのうは
ぎさうしのかたにてむらごの糸して玉をあげまき
に結びてぜんこきんとおれり源氏玉蔓にかうや
紙のさうしなども見ゆ　○あたならぬ　倭訓栞に
あたはいたづらなる心に云りあた浪あた名あた矢
あた口など是也云々又あたしは他字異字などをよ
めり日本紀にみゆまた餘字をもよめり云々あたに

おもはぬわたならぬなどこれ也云々玉霰にあたなるとは花のちりやすき露の消やすき或は人の心のうつりやすきなどをいふ詞なるを近世人は月日をあたに過すなどいたづらにといふ心につかふはひがことなり云々輿清按にあたといふ詞の本は當の義と虚の義との二つよりおこりてさまざまにうつしいへる也虚の心なるは木のうつはうつ室うつはものうたがたうたがふなどのうつうたをかよはしてあたとはいへる也當の義より出たるは神代紀上に新賊之心わたなふこゝろ云々新撰字鏡小部に快懟也阿太牟云々古今戀四にかたみこそ今はあたなれ云々伊勢集にわがためになにのあたとか春風の云々これらの類は敵のことにて此に對して彼に當ものゝあるがゆゑの語也空穗俊蔭にあたの風吹て云々嵯峨の院にあたし浪こそ云々此あたの風あたし浪は敵のごとく荒ましく烈しきがゆゑの語也萬十九に安多加毛似加云々ては此にむかへて彼が似當れる也神代紀下に他神アタシカミ云々他姫婦アタシカミ云々崇神紀十二年に異俗アタシクニビト云々萬十に他時アタシトキ云々十一に異手枕

アタシタマクラ云々十五に異情アタシコヽロ云々古今東歌にきみをおきてあたし心を我もたは云々此等のあたしも此に對して彼に當るものある也源氏夕霧にすゞろにかくあたへかくして云々狹衣活板一の下にあたへてきぬをせちにひきあけんとするに云々などのあたへはたはぶれあたなふよしにてたはぶれがたきといふがごとしその俗にはたへるそばへるなどいふこれ也以上のあたといふ詞どもはいづれも當の義より出たる也さて虚の心より出しは萬十三に人者充物曾空蟬の世人云々新撰萬葉上に泛名アタノナ云々下に化成皀アタナレド云々古今序にあたなるうたはかなきことのみ出くれば云々春上にあたなりと名にこそたてれさくらばな云々戀二にいのちやはなにぞの露のあたもの云々此類ははかなきとにいへり孝德紀二年に放逸アタメク云々新撰字鏡言部に讕阿太己止云々伊物にわたくらべかたみにしける又名にしおはゞあたにぞあるべきたはれじま云々源氏きりつほにあた人云々帚木にあためきなれたる云々繪合にあたとぞ思ひ給へ云々朝皃に今さらの御あたけ云々又あた

げ過たる人云々若菜下にあたなる男云々手習にあたわざなど丶云々落窪中にあたわざ云々これらははかなく空なる物のとりしまりなきとにいへりそもくあたといふ詞はいと多にしてことくく引出べくもあらねば今はひとつふたつを擧てことわれる也此あたを濁音にいふはひがごとなれは必清てよむべしさてあたならぬかぎりとは俊成卿より代々つたはれる歌草子どもの中にもあたにはかなく益なきをば捨てよろしきのみをあるかぎりえり出て爲相卿の方へ送るよし也 ○わかの浦 續日本紀九に改二弱濱名一爲二明光浦一云々日次記十七康治三年二月十三日條に眺二望不木阿氣禾加浦一云々萬七に若浦に白浪立て云々十二に若の浦に袖さへぬれて云々西遊行嚢抄十五下に若浦は城邊に近き海濱也云々紀路歌枕抄に和歌浦海部郡云々此外若浦のものに見えたるは枚擧に遑なし和歌によみかけたるも新古今賀に源家長もしは草かくともつきじ君か代のかずによみかくわかのうら浪などあまた也増鏡おどろがしたに和歌の浦におり立せ給へばなど文の詞にも見ゆ ○もしは草 色葉和歌集十にもしほとは海中にある草の鹽のしみたるに猶うしほをくみかけくみかけしてほしつけてそれを燒て其灰をたるゝ也云々呉竹集十にもしほ草はただやくしほ也物をかくとによむ也云々源氏まぼろしにかきつめてみるもかひなしもしほ草おなじ雲ゐのけふりとをしれ ○あなかしこ 古語拾遺に古語事之甚切皆稱二阿那一云々舊事紀一にも見ゆ神武紀に大醜此云二鞅奈瀰儞句一云々萬三に痛醜アナミニク云々此外おほかりかしこは萬一に畏の字二に恐の字十一に懼の字十三に惶の字などよめり中頃よりせうそこの終にかしくと書る此轉語也弘安禮節問答に書止に穴賢と書は眞字の恐々謹言と同禮也云々細川家書禮抄にもみゆ ○はま千鳥 奥清按に千鳥の歌萬葉におほくみへたる中に十七に朝獵に五百津鳥たて夕狩に知登理布美多底とあるは五百津鳥にむかへたればあまたの鳥とすべき證也その外にも一種の鳥の名とさこゆるもあれどさだかならず六帖六に山河の石間がくれに住千鳥とよみたるは一種の鳥ときこゆれどなほいかゞあらん和泉式部集四詞書に水のほとりにちどりのた

だひとつたてるを見てと書るをこそたしかなる證どはいはめ字鏡集九倭玉篇鳥部節用集活板知部などに鴴チドリとあり鴴字はかしこの字書に見えずてゝにて行鳥の義をとりてつくり出し字にやゆく千鳥むれたる千鳥風に行くなどよめる歌おほかればなりさてはま千鳥は濱邊に住むよしの名にて神代紀下に播磨都智耐理譽とあり釋紀廿三に濱津千鳥也纂疏下二に播磨津者濱也津亦語助也智耐理者千鳥也海鳥名など見ゆ磯千鳥浦千鳥河千鳥百千鳥むら千鳥友千鳥友なし千鳥いは千鳥などもいへり八雲御抄三下藻鹽艸十にその名をのせられたり千鳥の跡とよめるは古今雑下にわすられん時しのべとてはま千鳥ゆくへもしらぬあとをとゞむる朝忠集に白浪の打出るはまの濱千鳥跡やたづぬるしるべなるらん貫之集下に白浪の打かへすともはま千鳥猶ふみつけて跡をとゞめよ此等をはじめにていとおほかり横浪かくなは夫木冬二に清見がた雪ふる空になくちどりいはにおとせぬ浪やかくらんとあるによれるにやよこ浪は横雨などいふもおなじく横さまにかゝるがゆへの名也金葉連歌詞書に鳥を籠に入て侍りけるがよこ雨にぬれけるをみて云々源氏野分によこさま雨いとひやゝかにふきいる云々玉葉冬爲兼ねやのうへはつもれるゆきにおともせでよこぎるあられまどたゝく也　○よもあだにはならじ　よもはえもの通音也後拾遺雑五和泉式部かへるさをまち心みよかくながらよもたゞにてはやましないさと俗にもよもやなど云り　○しほたれぬ　齋宮式忌詞に哭稱ニ鹽垂ニ云々大神宮儀式帳に啼乎鹽垂止云云々倭姫世記に哭稱ニ鹽垂ニ云々遊山窟に泣涙シホタレテ云々空穗嵯峨の院にしほたるゝ事こそまされ云々源氏桐壺に御しほたれがちにのみおはします云々河海抄に泣をば塩垂と云也云々呉竹集九になく事をしほたるゝといふ云々

〔補注〕おくがき　其の書の成れる故よし又傳來どものことを書きしるすを云　○えりはしたゝめ　選出して仕末をつくるなりしたゝめとはなに事によらず亂雑になれるを整頓するを云　○かたみ　形見にて見えざる人の形として見るべき品物の事也　○横浪　不正なるわざを横より寄するなみによそへていへるなり　○ひとかたならぬ跡　なみ

なみならぬ筆跡の意先祖以來歌道に功名の人々の
稿をさすあとは千どりの緣語也　○三代のあと　直
俊成卿より中二代を經て爲相に傳はれるを云　大
文いふ三代に見よをかけたりと　○おとなし
人らしきの意なり
大夫のかたはらさらずなれきつるを。ふりすてられ　手
なんなごり。あながちに（原、扶、作なこりかち、）おもひしりて。
ならひしたるを見れば。
はる〴〵と行さき遠くしたはれていかにそなたの
空をながめん。とかきつけたる（古有か字）ものより殊にあ
はれにて。おなじ紙に書そへつ。
つく〴〵と空なゝがめそ戀しくは道とほくともは
やかへりこん。とぞなぐさむる。
○手ならひ　古今序に手ならふひとのはじめにも
しける云々空穗嵯峨院に手ならひをしてかく書つ
く云々源氏空蟬に御てならひとりいでたり云々
○つく〴〵と　新萬上に鹿島なるつくばの山の築
築と我身ひとつに戀をつむかも此歌六帖二拾遺戀

五にも出て異同あり濱松一につく〴〵とながめふ
したまへれば云々又おくのかたにそひぶして月を
つく〴〵とながめ出たるに云々此外ものに多く出
し詞也吳竹集四につく〴〵は心をしづめて物を案
じ又は見聞する事なり云々與淸按につき〴〵の轉
語にて目をつけ心をつけてその物にはなれず見も
しおもひもするとなり此をつぐ〴〵とにごりて續
〻の義ともいふべけれど散木一に初卯の杖のつく
〴〵ともよみかけ新萬に築々と書れしなどおもへ
ばなほ附々の意也けり運歩色葉集津部に一々つく
づくと〻ハつく〴〵云三〻ハつく〴〵など見ゆ。
山より侍從の兄のりしも。いでたち見んとておはし
たり。それもいとこゝろぼそし（伊作物心ほそし）とおもひたる
を。この手ならひどもを見て。又かきそへたり。（伊作そへつ。）
あたにのみ（金、伊、作たく、原、岡、作なく、）涙はかけし旅衣心のゆきて
立かへるほど。とはこといみしながら涙のこぼるゝ
を。あらゝかにものいひまぎらはすも。さま〴〵あ

はれなるを。あざりの君は（原作のみは）やまぶしにて。此
ひと〳〵（諸本作此人、今據金及伊本、）よりは兄なり。此たびの道のし
るべにおくり來らんとて出たゝるめるを。此手なら
ひに又まじらはざらむやはとて書つく。
立そふぞ（扶作も）うれしかりける旅衣かたみに賴むお
やの守りは（原作まもりは）

○出より　比叡の山をいへり古今詞書に比叡を山
とのみかけるが二所みゆ拾玉集二に世中に山てふ
山はおほかれど山とはひえの御山をそ云又わが山
ともいへり吾妻鏡十一に自吾山致騷動とあり
平家物語盛衰記義經記長門本平家物語太平記など
にもみゆこは傳敎大師のわがたつ杣のうたよりい
ひし名也　○侍從のあにの律師　寫本藤原系圖に
山法眼源承爲家卿男曉月房弟母阿佛云々印本藤原
系圖十一には爲氏爲守承遍法印源承法眼慶融法眼
爲敎爲顯爲相とついでたり作者部類法眼部に山源
承大納言爲家子云々同續編法眼部にも見ゆ律師は
釋氏要覽上に律鈔解題云佛言善解一字名律師
一字者律也寶雲經云具足十法名律師云々頓語

要門下宗鏡錄四十四などにもみえたり敏達紀六年
十一月百濟王獻律師禪師云々天武紀十二年三月
戊子朔己丑任僧正僧都律師因以勅曰統領僧尼
如法云々通證に律師の官名始出于此文武天皇元
年善往法師任之與敏達紀所謂律師異矣云々續
紀一文武二年三月壬午善往法師爲律師云々三代
實錄八に法橋上人位爲律師階云々按に元亨釋書
廿一塩嚢抄十三釋家官班記濫觴鈔上以呂波字類抄
利部海人藻芥上二中歷四職原抄僧官部拾芥抄中末
簾中抄下撮壤集下運歩色葉集利部など其外ものに
律師の事をしるせるはおほかれど始任の年月をあ
やまりたり　○心のゆきて　古今賀山たかみ雲居
にみゆる櫻ばな心のゆきてをらぬ日ぞなき　○阿
闍梨の君　作者部類法眼部に山慶融大納言爲家子
とみえしこれ也阿闍梨は釋氏要覽上に闍梨寄歸傳
云梵語阿遮梨耶唐言軌範今稱闍梨蓋梵音訛略
也菩提資糧論云阿遮梨夜隋言正行南山鈔云能
糾正弟子行故云々翻譯名義集一三藏法數廿二
大藏法數廿八などにもみゆ元亨釋書廿五に後一條
天皇長元七年十二月敎圓爲阿闍梨何闍梨官自

圓始云々壒嚢抄十三に阿闍梨は六十八代後一條院ノ御宇長元七年甲戌十二月に敎圓始て任ず是此官の始也又或記云安惠内供始任ニ此官ニ是日本阿闍梨ノ始也云々以呂波字類抄安部に淸和天皇御宇貞觀元年巳卯始置レ之或書文德天皇御時被ニ始置ニ云々可レ尋云々拾芥抄中末に已講内供阿闍梨謂ニ之有職ニ云云職原抄僧官部亦同撮讓集下に聖道官阿闍梨云々二中歴四に闍梨傳燈大法師位云々釋家官班記に阿闍梨者被レ寄ニ置諸寺ニ以ニ其闕ニ補任被レ下ニ官符ニ也而貴種之人別而限ニ其身ニ某可レ授ニ傳法灌頂職位ニ之由被レ下ニ官符ニ以レ之稱スニ一身阿闍梨トニ云々海人藻芥ノ上にも出 ○おやのまもり 古今ノ離別に小野の千古がみちのくのすけにまかりける時に母のよめるたらちねのおやのまもりとあひそふるこゝろばかりはせきなとゞめそ。

〔補注〕いでたち見んとておはしたり 阿佛尼の出立を見送らんとて來れる意 ○涙はかけじ 涙をはそゝきかけまいの意一首の意は無益にのみ旅衣に涙そゝぎかけまいこの訴訟のかないて欝憤の散して立ちかへる間はといふ意なり ○ことにいみじ

直文云詞甚じの意にて詞は甚だ氣強き樣なれどもなりと ○あらゝかにものいひまぎらはすもかなしみの樣を知られまじとわざと話の音を勇ましくしてまぎらはすをいふ ○やまぶし 山中に起臥して佛道を修行し加持祈禱などをするものをいふ。

女子はあまたもなしだゞひとりにて。此（諸本作此ころ、今據近及伊本、）ちかきほどの女院にさふらひたまふ。院のひめ宮ひと所うまれたまふばかり（扶イ、及伊、作たまひしはかり、原作給ふ、）にて。心づかひもまとしき樣にて。（原て字无）おとなしくおはすれば。宮の御かたの戀しさ（金、伊、作御戀しさ）もかねてきうしをくついでに侍從大夫などのとはぐゝみ（伊作はこくみ）おはす（諸本作おはす今從金及伊本）べきよしも（原も字无）こまかに書つけて。おくに。

君をこそ朝日とたのめ故郷に殘るなでしこ霜にからすなときこえたれば。御かへりもこまやかにいとあはれに書て。歌のかへしには。（原、金、共作御かへしには、）

思ひおく心とゞめは故郷の霜にもかれじ大和なで

してぞある。
○女子はあまたもなし　紀ノ内侍也阿佛の庭の訓に
紀ノ内侍どのへと書れたるこれ也紀伊といふよび名
の内侍なればかくいへるにや夜の鶴も庭の訓より
以前に此内侍に書ておくられし書也父は爲家卿に
はあらず　○女院　新陽明門院也女院小傳に新陽
明門院藤位子龜山妃深心院關白女母少將通能朝臣
女文永十一六廿八入ニ上皇ノ宮ニ十三十二廿二爲ニ
女御ニ同日敍ニ従三位ニ十四同日准ニ三宮ニ三月廿八
院號正應三四廿六爲レ尼覺隆廿九永仁四正廿二御
事卅五云々本朝女后名字抄に新陽明門院位子文永
十二三廿四院號深心院女云々女院記に新陽明門院
深心院關白女母少將通能朝臣女龜山院妃文永十一
年六月廿八日入ニ上皇宮ニ十三十二年二月廿六日女
御十四同日従三位同日准三宮文永十二年三月廿八
日院號正應三年四月廿六日爲レ尼法名覺澄永仁四
年正月廿六日御事あり卅五云々一代要記ノ後宇多
の條に新陽明門院位子建治元年四月[illegible]日院號右大
臣基平ノ女龜山院ノ女御云々與清按に女院の號は圓
融の皇后東三條ノ院詮子にはじまり門院と稱せる
は一條の皇后上東門院彰子に起れり榮花ノ見はて
ぬ夢に東三條院の事をいへるにおりゐのみかどに
なぞらへてにようゐんときこえさす云々百練抄ノ
四に正暦二年九月十六日皇太后依ニ御惱ニ於ニ式曹
司ニ出家即號ニ東三條院ニ云々神皇正統記ノ中ノ一條
院の條に御母は皇后藤原の詮子後には東三條院と
申后宮院號のはじめ也云々濫觴抄ノ下に女院ノ號正
暦元年五月東三條院號詮子云々續世繼もち月にて
の堂つちみかどの末にあたれば上東門院と申也此
後代々の女院の院號かどの名きこえ侍るめり陽明
門も近衞にあたりたればこのれいによりてつかせ
たまへり郁芳門待賢門などは大炊のみかど中のみ
かどに御所おはしまさねど准らへてつかせたまへ
るとぞきこえ侍る云々類聚符宣抄四の卷に停ニ后
職ニ授ニ院號ニ符宣を載す　○ふるさと　頭注密勘ノ
六に古郷とは住うかれたる里也又あからさまに立
はなれてももとの家をもいふ又住ながら年久しく
成て破れたる家をもよめり云々和訓栞にふるさと
故郷をよめり他國に居るもの本國の郷貫をいふな
り云々與清按に萬葉にふるさとふりにしさとふる

家の里などよみて住ずなりぬる里を云りおからさまに立はなれしさとなどに云はやゝ後の事也 ○なでしこ 本草和名八に瞿麥和名奈天之古云々新撰字鏡草部に瞿麥奈弖之古云々和名抄草類部に瞿麥和名奈天之古一云止古奈豆云々醫心方一諸藥和名部に瞿麥奈天之古云々醫畧抄に瞿麥ナデシコ云云綺語抄下に本文云鍾愛勝衆草故云撫子艶色契千年故云常夏ちとせのみかはとさて讀也云云和歌童蒙抄七奥義抄下散木集注顯注密勘四古今榮雅抄三などの說亦綺語抄に同此本文と云を顯注密勘には家經朝臣の和歌の序にかけりといへり契冲が古今餘材抄三に大鏡裏書云染殿大后少之時容姿艶麗號瞿麥御取美艶多改瞿麥稱常夏花蓋避諱也云々和名抄釋義に瞿麥撫愛而養似母撫育幼兒故常夏花亘夏秋冬三時故以惣云常夏常夏者常義也萬葉十七立山雪云常夏不消云云新井君美主の東雅十五に石竹をば又やまとなでしこなどいひけりなでしこといふ義不詳とてなつとは花の開く事春より秋に至りて常に夏のごとくなるをいふ也云々眞淵翁の續萬葉論三にさて

なつなでしこ同じ物二名也撫子はやさしきはなゝればいひとこなつは夏咲て秋冬もあればいふとみえたり萬葉十七家持立山賦に等許奈都に雪ふりしきて反歌春に多知夜末にふりおける雪を登己奈都爾みれどもあかず加武賀良ならし右の詞書に四月二十七日大伴宿禰云々作之とあるは冬より夏かけて有をいふ也右の歌に和る歌に冬夏とわくともなくしろたへに雪はふりおき云々此反歌にもふりおける雪のとこなつにけずてわたるはと有をもみれば雪は夏迄有まじきものゝ有によりてとこなつに消ずこといひ既に長歌に冬夏とわくこともなくといへりされはなでしこをいふは夏より末久しくあれば常夏といふにうたがひなし秋よむはめづらしからず冬もよめり後撰に源のたゞあきらの朝臣十月ばかりとこなつを折ておくり侍りければ冬なれど君がかきはに咲ぬればむべとこなつに戀しかりけり云々藏玉集夏に俊頼から國に有けることはいざ知ずあづまのおくに生るいしたけ昔東國に島田の時主といふ勇士あり吾家の後の山に一の石あり彼石に靈あり人をなやますによつて時主

件の石を射則箭たち卒その箭ぬけずして花咲けり此花撫子也是は花かさなりて咲云々藻鹽草八にも此山みゆ與清按になでしこからなでしことこなつは共に今世にもなでしこと呼て漢名瞿麥也大和なでしこいしたけは今せきちくとよぶものにて漢名も又石竹といへりこは本草綱目花鏡通雅閩書品字箋般耕錄などかうがへあはせておもひ得たるなりくはしく本文を引いでゝ證せんはわづらはしければ今ははぶきつ。

〔補注〕たゞ一人　紀内侍と呼びし人なり　○さぶらひ給ふ　宮仕へするをいふ也　○院のひめ宮　龜山天皇の皇女　○はぐゝみおほず　養育生長せしむるをいふ　○さてえたれば　申しやりたれはの意　○思ひおく　直文云ひの字にいさゝか暖かなる意あり火を含めたるか　○大和なでしこ　唐なでしこに對していふ瞿麥の一種なり

いつゝのこども（扶作みつのこともの）のうた。殘りなく書つゞけぬるも。かつはいと（金いさ二字无）をこがましけれど。おやのこゝろにはあはれにおぼゆるまゝに。書あつめたり

さのみこゝろよわくてはいかゞとて。つれなくふもすてつ。

○いつゝの子ども　慶融源承女爲相爲守の五人を云り扶桑拾葉本にみつの子どもとあるはひがごと也　○をこがまし　三代實錄卅八に善散樂令人大咲所謂鳩滸人近之矣云々本朝文粹三辨散樂對册に鳩滸來朝自爲解頤之觀云々壒囊抄九に人の不宜に愚なるを鳴呼の者なんど云が如し云々嗚滸は國の名なり異物志云嗚滸は南蠻屬也云々空穗嵯峨院にいとをこがましく云々源氏明石にをこにかたくなしき入道の心ばへ云々應神紀に伊夜于古珥辞弖釋紀に彌尾籠也云々按にをこはをかしの略語なるべしをかしは病床漫筆に玉勝間に可賞はおむかしの略語にておかしの假字可笑は字鏡によりてをかしの假名といへるは無證の臆論といふべし可笑も可賞もをかしといふは同義にて字鏡によりてともにをかしの假字と定むべし蜻蛉日記にみちのくのちかの島にてみましかばいかでつゝじのをかしからまし羊躑躅の岡とかゝれるにて可

賞もをかしの假字なる證とすべし又曾根好忠集に
にははねごはゝゑむ梅のはなをこそわれもをかし
と折てながむれこれにて可賞も可笑も同義にてと
もにをかしの假字なるを證とすべし云々按に釋日
本紀和歌ニに阿々私記曰咲聲也時夜鳩私記曰猶レ
言ニ乎加志ーとみゆ。

〔補注〕をこがまし　烏許などかきて愚の字の意なり直文云俗に馬鹿らしといふに同じ。

粟田口
あはたぐちといふ所より車はかへしつ。ほどなく逢坂の關こゆるほどに（原、金、作ほとにも）
定　无命　不知　雖在
さだめなきいのちはしらぬ旅なれど又あふ坂とたのめてぞ行」野路と云所はこしかたゆくさき人もみえず。日はくれかゝりていと物かなしとおもふに。時雨さへうちそゝぐ。

玉葉旅夫木雜十
うちしぐれふるさとおもふ袖ぬれて行さきとほき野路のしの原。（夫木抄、作さゝはら、）

てよひはかゞみといふ所につくべしとさだめつれど。くれはてゝ行つかず。もり山といふ所にとゞまりぬ。こゝにも時雨なはしたひきにけり。

いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけんまなくしぐれのもる山にしも（原、金、作にして、）

けふは十六日の夜なりけり。いとくるしくてふしぬ。（金、扶、作うちふしぬ、）

○粟田口　和名抄六に山城國愛宕郡上粟田阿波多下粟田云々海道記に粟田口の堀路を南にかいたをりて逢坂山にかゝる云々康富記寶德三年九月廿九日に粟田口神明有ニ湯立ー云々　○逢坂の關　道路國郡分別記に近江滋賀郡逢坂山云々神功紀に武內宿禰出ニ精兵ー而追レ之遇ニ于逢坂ー以破故號ニ其處ー曰ニ逢坂ー也云々孝德紀に近江狹々波合坂山云々日本紀略延暦十四年八月己卯に廢ニ近江國相坂劍ー云云文德實錄九に天安元年四月庚寅始置ニ近江相坂大石龍華等三處之關ー云々相坂是古昔之舊關也云云逢坂の事西遊行囊抄十ー近江名所圖會ーなどに委いへり其外諸書にみえたるは擧るに遑なし　○野路　道路國郡分別記に近江粟太郡野路村云々平治物語中に野路の邊より打後れ給へり頭殿篠原堤にて若者共はさがりぬるかと宣へば云々吾妻鏡四

に著近江國篠原宿云々次至野路云々拾遺雑春長能歌に東路の野らの雪間をわけてきてあはれ都の花をみるかな名所方角抄に野路篠原守山の宜の方なり鏡山の作なり云々西遊行嚢抄十に此所昔は驛宿也云々近き代に引野路移草津云々此外物におほくみゆ　○しの原　和名抄七に近江國野洲郡篠原之乃波良云々延喜兵部式に近江國驛馬篠原清水鳥籠横川各十五疋云々枕草子原はといふ條にしの原云々吾妻鏡四に近江國篠原宿云々東關紀行に野路といふ所にいたりぬ云々東路の野路の朝露云々しのはらといふ所をみれば西東へはるかに長き堤あり北にはさと人すみかをしめ南には池のおもてとほくみわたさる云々行人もとまらぬ里となりしよりあれのみまさる野路のしの原云々うた〻ねの記小嶋口遊歌枕名寄廿四西遊行嚢抄九上木曾路名所圖會一などその外物におほくみゆ與清按に閑田耕筆一に野ぢの篠原の事をいひたれどうけかたしてはふるき篠原の郷が中北野路領に隷せしゆゑの名なるべし領といふは國郡とへだてゝもいひしと已に棟梁集に論せしがごとし吾妻鏡や東關紀行にしるせしさまと今の野路村篠原村の在所さらにたがへりさはみえず○かゞみといふ所　垂仁紀三年に近江國鏡谷陶人云々勅撰名所和歌抄出上に鏡山近江野洲郡云々古今著聞集六に近江國鏡の宿云々吾妻鏡十五に江州鏡驛云々雅經集下にかゞみの宿にて云々歌あり義經記一にせたのからはし打わたりかゞみの宿につき給ふ云々平治物語中に鏡宿を過しかば不破關は敵固たり云々同下に鏡の宿に著云々東關紀行に鏡の宿にいたりぬれば昔な〻の翁のより合つ〻老をいとひてよみける歌の中にかゞみ山いざたちよりてみてゆかん年へぬる身はおいやしぬるといへるは此山の事にやとおぼえて宿もからまほしう云々西遊行嚢抄九上に鏡宿の入口に鏡山あり云々壬申年の亂に天武帝の將鏡王と云人大友皇子の兵に伐れぬ其塚をつきたる處を鏡山と云近江名所圖會四に鏡宿むかしは驛也しが今は馬次なし旅舍おほし云々此外鏡山鏡宿の事所見おほかれど例のくだ〳〵しければ略く○もり山　勅撰名所和歌抄出上に守山近江野洲郡云云古今秋下貫之しらつゆもしぐれもいたくもる山

は下葉のてらず色付にけり此歌よりして後々いと多し名所方角抄に守山といへど山はなし里の名也湖の西野路の北也京より七里也云々平治物語中に森山の宿に入給へば云々此外砂石集五小島口遊平安紀行篳海吾妻路記玄旨法印老木曾越西遊行囊抄十近江名所圖會四などものにあまた出て枚擧しがたし　○いとゞなほ　玉霰いやしげなる句と云條にいとゞなほはいとゞしくといふべし此なほは俗意也といひたれどこの日記の比などむねとよみし詞なれば俗意とていまんと心得ず因に云玉霰にとてもといふ詞いといやしげ也歌などによむべき詞にあらず俗言にとてものとにとてもかなはぬなどいふとても也云々與清按に壬二集下によの中にわりなば人にみえぬべしとても身をやる方ぞしられぬ吉野拾遺上楠正行とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契りをいかでむすばんなどかゝるたぐひいさおほくとみゆるはいかにぞや　○まなく時雨の　新古今冬太上天皇深みどりあらそひかねていかならんまなくしぐれのふるの神杉
〔補注〕またあふ坂さたのめてぞゆく　この坂の名の如く再び出逢ふことを賴みとして契り過ぎ行くとなり　○時雨さへうちそゝぐ　さへはものゝわる上になほかさなる意にて哀げなる上に時雨まで か降り來て一層に悲しみを添ふとの意なり

(未)いまだ月の(光)ひかりは(原扶は字无)(幽)かすかに殘りたる(曙)あけぼのに。(伊あけほのに五字无)もり山をいでゝゆく。やす河(金作やすの河)わたるほど。(金、扶、作ほさに)さきだちてゆく(旅)たび人の駒(コマ)のあ(足)しのおと(音)ばかり(亮)さやかにて。(霧)きり(甚)いと(深)ふかし。(玉葉旅)たび人は(原、金、岡、共作も、玉葉亦同、)みなもろ共に朝(金、伊、共作先)立て(駒)こま打わたすやすの川霧。」十七日の夜は小野の(宿)しゆくといふ所に(止)とゞまる。月出て山の(峯)みねに(連)立つゞきたる松の木のま(間)。(別)けぢめみえていとおもしろし(群作く)。(出)いでゝは(原、扶、伊共作に)夜ぶかき霧(キリ)の(迷)まよひ(群イ作まがひ)に(尋)たどりいでつ。

○野洲河　和名抄五延喜民部式上などに近江國野洲郡云々天武紀上に安河濱云々持統紀に近江國益須郡都賀山云々古事記開化の段に近淡海(チカツ)之安直(ヤスノアタヒ)云祖云々同景行の段に近淡海(チカツ)之安(ヤスノ)國造云々續日本紀

十二に野洲頓宮云々萬十二に吾妹兒爾又毛相海之安河云々此外うたおほし名所方角抄にやす河は三上山の峰を北へながれたり云々西遊行嚢抄九上に野洲川歩渡也川原の闊廣し四五町云々木曾路名所圖會一に野洲川横田川の下流云々近江名所圖會四亦同此川の事更科日記海道記小島口遊雅世卿富士紀行堯孝覽富士記保元物語中盛衰記四十五などその外所見多　○小野の宿　惺窩文集系譜略に江州坂田郡小野庄云々保元物語中に鏡宿をも過しかば不破關は敵固たりとて小關にかゝりて小野宿より海道をば妻手になして云々腰越草子にをのゝはそ道云々正徹懲草に近江の小野の庄云々堯孝覽富士記に小野の宿にて云々歌枕名寄廿四に小野の宿にとまりて云々中務卿親王の歌あり雅經集下に小野の宿たちけるに云々歌三首あり盛衰記四十五に小野細道云々爲相卿海道宿次百首に水うみもみやこの山もみえそめて坂こえくだるをのゝふるみち名所方角抄にとこの山より十町ばかり北にある小野の宿をこれをあさちが小野と云説あり云々老の木曾越に淺茅が小野此ほとりにや云々西遊行嚢抄八に小野村是は本道の小宿也云々神名帳下に近江國滋賀郡小野神社と有は異也こは續日本紀卅二續日本後紀三同五同六三代實錄六などにも出て名神大社也　○けぢめみえて　伊物にそのけぢめみせぬ心なん有ける云々眞淵翁の古意にけぢめとは荷田在滿云別目の畧也とげに源氏物語に松と竹とのけぢめといへるも必けぢめならではかなはず此古本に穴目と書たるは借字なりけりさればけぢめのちは清て唱べし云々倭訓栞に異路目の義なるべし云云濱松中納言の一によろしげなるけぢめもなし云云源氏帚木にそのけぢめをばいかゞわくべきと云云與清按に異筋隔い義にてめは隔の通音也異なる筋にわかれへだゝれるにいふされば差別の字義によくかなへりこを清てよむべしといへる説は中々にうけがたし　○おもしろし　古語拾遺に阿那於茂志呂自注に事之甚切皆稱阿那言衆面明白也云云齊明紀歌に耶麻古曳底于瀰倭拖留騰母於母之樓枳云々萬四に如是阿怜縫流嚢者云々此外多くよめり字鏡言部に譃恂怜也心樂也於毛志呂志云々靈異記上に譃おもしろし云々難字記三言部に譃オモシ

ロシ云々字書どもにみえたるは枚擧しがたしおもしろきは面知の義にて何にもあれ物につけてわすれがたく面のしらるゝよしの語也古語拾遺の面白もゐのづからさる心にかよへりおもむかし面向の義にて亦隣

〔補注〕たび人はみなもろともに云々　直文云たちわたすなどいづれも川霧の縁語なりさめが井といふ水。夏ならばうち過ましやとおもふに。かち人はなほ立よりてくむめり。

夫木雑八名寄廿四新撰歌枕作むすふ手の
むすふ手ににごる心をすゝぎなばうき世の夢やさめが井の水とぞおぼゆる。
新撰歌枕四

「美濃の國原作國に關の藤川わたるほどに。まづ伊まつ二字无　おもひつゞけゝる。

わが子ども君につかへんためならでわたらましやは關の藤川。」不破の關屋の板びさしは今もかはらざりけり。

ひまおほき不破の關屋はこのほどの時雨も月もいかにもるらん。關よりかきくらしつる雨。しぐれに過てふりくらせばみちもいとあしくて。心より外にかさぬひのむまやと云所に。くれはてわど伊原くれはてれさ五字无とゞまる。

末木雑二新撰哥枕四
たび人は蓑打はらふ夕ぐれの雨にやどかり笠縫の里。」

○さめが井　宣長が古事記傳廿八、に近江國、坂田郡に醒が井と云て名高き清泉有て其里の名をも今に醒がゐと云て驛也云々撰集抄七、仲算大德の事の條に近江の國のある山中にて仲算大德淨藏貴所が水をわかしたるをさめがゐの清水といふよしみゆ盛衰記、四十五に醒井の宿を見給へば木陰涼しき岩根より流るゝ清水冷ましや云々東關紀行にさめがゐをみれば陰くらき木の下のいはねより流れいづる云々藤川記にさめがゐといふ所清水いはねよりながるゝ一すぢは上より一筋は下より流れてすゑにてひとつにながれあふ云々小島口遊にて、ゝはさめがゐなるべし云々雅經集下、に思ひゆくそのおもかげに袖ぬれて夢もむすばぬさめがゐの水此外歌いとおほし西遊行囊抄七、上に醒井、清水驛中の左の畔よ

り湧出る水中に石二つあり下流の方にある石を日本武尊の御腰掛石と云傳ふ即札を立てあり清水の出る所の岸の邊に石地藏有云々日本武尊の飲給ひし居寤の清水は美濃不破郡なるべきよし古事記傳廿八に委く論じたり　○むすぶ手ににごる　古今離別貫之むすぶ手のしづくに濁る山のゐのあかでも人にわかれぬる哉　○美濃國　和名抄五に東山國美濃國府在二不破郡一行程上四日下二日管十八田萬四千八百二十三町一段六十五歩正公各三十萬東本稻八十八萬東雜稻二十萬東云々延喜主計式上以呂波字類抄見部拾芥抄中末節用集國郡部大八州記七州名紀原人國記國名風土記上海東諸國記古事記傳十三諸國名義考上などにみゆ美濃といふ名は本巢郡美濃郷よりおこりて眞野の義也此くはしきことは余すでに國名考にいへり諸說おほしといへどもむべなはるゝはたえてなし　○關の藤川　勅撰名所和歌抄出上に關藤川美濃不破郡云々古今大歌所の歌にみのゝくに關の藤川絕すして君につかへん萬代までに此外古歌おほし小島口遊に關の藤川はその名もなつかしければわきてことゝひ侍りし名

はとゞろしけれどさしもなき小河に「萬代までと流れともわかれずされどたえぬためしにはとれりもしくて云々藤川記に藤川の浮のいたのおちたるをみて云々名所方角抄に關藤川野上より一里京也云々西遊行囊抄巻上に不破の關屋の前を南より北に流るゝいさゝかの小河を云土俗わたり長五間計に佐屋川と一流になる古歌に關藤川とよめるは是也里俗は藤子川と云錯をよみたるは相違せり云々茂茂久岐一に關藤川不破郡に在伊吹山より流出藤子川といふ云々美濃名所和歌に關藤川中山道關ヶ原驛の西松尾村にあり北より南へ流云々此外所見多　○不破の關　和名抄五に美濃國不破不破國府云々延喜民部式上に美濃不破郡云々軍防令に三關云々義解に伊勢鈴鹿美濃不破越前愛發云々帝王編年記十に天武白鳳二年七月始立不破關美濃國不破郡二云々爲古口遊二勢多鈴鹿謂二之三關一云々不破は美濃在二不破郡一云々拾芥抄下二中國六以呂波字類抄左部亦同書同紀六年に美濃不破片二關云云天武紀上に不破道云々萬二に與立不破山越而云々萬葉詩地鐘之に今關原の西に大關と云里を古

の歌と云り云々美濃名所和歌に不破郡松尾邑に舊跡有大岡村とも云又小岡村といふも有云々西遊行叢書抄六岡之上木曾路記木曾名所圖會二などにくはしく旅宿をよめるは新古今集中納言太政大臣入すさぬ不破の關屋の板びさし荒にし後はたゞ秋のかぜ拾遺二たびはすゞ不破の關屋の夜床時雨するよのあはれしれとや是等を始としていとおほかり ○笠縫のむまや 美濃名所和歌に安八郡笠縫の里赤坂驛の東南に有昔は驛なりとぞ今笠縫村の東宿地村は驛地の舊跡とぞ云々名所方角抄に笠縫は新幕赤坂などいふ宿より東也云々西遊行叢抄六下に笠縫村中舍は笠木村こいへど眞に笠縫也此間所こもいへり云々倭漢三才圖會七十に笠縫里道ニ青墓赤坂ニ在リ川名ニ揖斐川ニ在リ其川東ニ云々與清按に笠縫の驛はいにしへ笠縫部を置にし所也崇神記に倭國の笠縫邑と云も此の藤川記にあき衣みのゝ中山こえのけば峰にみゆるかさぬひの里遠齒集図游道上にわたるゐせきの杭瀬河南に有は笠縫の里にやしばし云々華等覧富士記園花萬葉記十などにも出むまやは和名抄十に唐令云諸道須ニ置ニ驛者毎ニ三

十里ニ一驛若地勢險阻及無ニ水草ニ處隨ニ緣置ニ之驛和名無末夜云々神功紀五十年に驛ッマヤ云々廐牧令に凡諸道須ニ置ニ驛者毎ニ三十里ニ置ニ一驛ニ若地勢險阻及無ニ水草ニ處隨ニ便安置不ニ限ニ里數ニ其乘具及蓑笠等各準ニ所ニ置馬數ニ備ニ之云々孝德紀大化二年に初置ニ驛馬傳馬ニ云々凡給ニ驛馬傳馬ニ皆依ニ鈴傳符剋數ニ云々續日本紀五に和銅四年正月丁未始置ニ都亭驛ニ云々 萬葉仙覺抄十六に官使のゆきて宿する所をば驛家といふはいまだと續也云々六帖二に東路のうまや／＼と數へつゝあふみの近くなるがうれしさまたあすまぢのささのこはさもあらなくにうまや／＼こ昔をまつかな事物紀原七に漢自ニ郵亭ニ置ニ驛以ニ通ニ達賓客ニ故後世亭傳有ニ驛名ニ通典曰唐三十里置ニ一驛ニ其非ニ通途大路ニ則曰ニ館由ニ是通謂ニ之驛ニ云々說文七に驛は置騎也云々三才圖會宮室一卷倭漢三才圖會家宅類部などに圖をのせたり

〔補注〕たび人はみな打はらふ云々 この歌は雨の爲めに簑笠などいひて詞をあやしたるなり直文云この歌緣語のみにて意味なし

十九日またこゝをいでゝゆく。終夜降ける雨（諸本作つる雨今据古本）に。平野とかや云ほど。道いと（扶有の字）（伊作いとい）わろくて人かよふべくもあらねば。水田の面をぞさながらわたりゆく。あくるまゝに雨はふらずなりぬ。」ひるつかた過行道に立社あり。人にとへばむすぶの神ときてゆるといへば。（伊といへば四字无）まもれたゞちぎり結ぶの神ならばとけぬうらみに我まよはさで。」すのまたとかやいふ河には。舟をならべて。まさきのつなに（扶有て字）やあらんかけとゞめたるうきはしあり。いとあやふけれど（伊作あやふくあれと）わたる。此川つゝみのかたはいとふかくて。かた〳〵は浅ければ。

かたふちの深き心はありながら人目づゝみにさぞせかるらん。（末木雑三）

かりの世のゆきゝとみるもはかなしや身をうき舟を（夫木作の）浮橋にして。とぞおもひつゞけゝる。」また一宮といふやしろをすぐとて。

一の宮名さへなつかしふたつなくみつなき法をまもるなるべし。

○平野茂々久岐爾三に美濃國安八郡に平野庄あり上の笠縫の驛より平野洲俣などみな美濃路の驛也西遊行嚢抄六ノ下に自濃州垂井到尾州宮路是を俗に美濃路と云垂井驛の東の入口垂井川原より左の衢に入東に向て尾州名護屋に到り宮に出るは美濃路也又垂井より京までを中仙道の驛宿とはいへども昔の東海道とは是也昔は今の美濃路の衢に入て一ノ宮下津宣津黑田などの驛を經て宮に出る是東海道也今の美濃路は織田右府安土在城の比新に造らせ給ひし道也行程少し近しと也云々國花萬葉記ノ十に仲仙道は近江路の分は木曾路東山道と一ッ道也美濃路に至りて垂井より大垣へ越て尾州の宮へ出て東海道を行也東山道は垂井より赤坂へ越て直に木曾路をへて關東へ行也故に近江路において仲仙道とて外に道なし云々倭漢三才圖會七十に從美濃出尾州熱田中山道垂井大垣墨俣尾腰萩原稻葉清洲名護屋宮云々自垂井川追分有二道但木曾路下則向赤坂也中山道向大垣

云々與清按に仲仙道は東山道の中道といふ義よりよべるにや美濃路は東海道と東山道の中間の横道なれば也又は美濃の中山を經るがゆゑの名にてもあるべし美濃ノ中山は不破郡にて仲山金山彦神社ある所也さるに今ノ世木曾路をもすべて中山道といふは誤也東山道と木曾路はおなじくて東山道の中岐蘇をへてゆけば木曾路ともいへり岐蘇道は大寶二年和銅六年などに開かれし事續日本紀にみゆ木曾路名所圖會ノ一に南に東海道あり北に北陸道あり木曾路は其ノ中にあれば中山道といふよししるせるはいみじきひがごと也 ○むすぶの神 茂々久岐補三に美濃安八郡平野庄神戸邑結大明神猿田彦ノ大神云々美濃名所和歌に結の神大垣城の東結村に有り結大明神と號す所レ祭猿田彦ノ大神云々西遊行藁抄六下に結村狭渡川の東の岸にあり村の中左に華表あり同ニ結大明神ト云の社は名神也下照姫の靈社とかいふ云々拾遺ノ雜戀に君みればむすぶの神がうらめしきつれなき人を何つくりけん雅世卿ノ富士紀行堯孝覽富士記などにはむすぶの町屋とみえ宴曲集ノ西海道の上には結ぶの森とあり與清按にむすぶの神は高皇産靈神也猿田彦とも下照姫ともいふは共にうけがたし拾遺やその外の歌にむすぶの神とよめるはみな産靈神也美濃のむすぶの神をよみしは此日記を始とすそのに拾遺の歌を美濃とせしは誤也裳は奥義抄中下色葉和難集五色葉集中三春雨抄六古事記傳三和訓栞平部など考て知べし ○すのまた川 神名帳下に美濃安八郡墨俣神社云々正徹ノ慰草に墨俣河は美濃尾張の境とかや云々西遊行藁抄六下に洲俣河舟渡也川の廣さ前のサワタリ川の如し此水上は飛驒山より流れ出る云々美濃名所和歌に墨俣川美濃路墨俣驛ノ東の川なり云々庵主にすのまたのわたりにて雨にあひて云々更級日記にすのまたと云わたりして野がみといふ所につきぬ云々雅世卿ノ富士紀行に濃州すのまたと申所にておのつから名になかれすのまたたぐひあらじとみゆる浪のうへかな堯孝覽富士記にしまつどりつかふうきすのまだみねばしらぬ手なはに心ひくなり宇治拾遺ノ十五吾妻鏡ノ一盛衰記ノ廿七承久物語ノ四太平記ノ十九宴曲集ノ四景清草子ノ下藤川記などにもみゆ與清按にすのまたとは河洲

よりなの侯にわかれてながるゝよしの名なるべし
○まさきの縄　眞拆葛の縄といふべきを省ていへ
りまさきは眞柴の義にて霜にも枯ぬ常盤の葛也萬
七に冬薯蕷葛同九に冬薯蕷都良など書けり倭訓栞
木部に杜仲の葉にゝて小に蔓生するもの一種有て
蔓甚長く夜中に木綿めり是也といへり云々冠辭考
九古事記傳八などにろうじたるを考べし夫木秋六
に薜の歌を載たり　○うきはし　和名抄十に魏
略五行志云洛水浮橋和名宇岐波之云々事物紀原七
に春秋後傳曰周赧王五十八年秦始作浮橋於河上
按詩大明云造舟爲梁孫炎曰造舟比舟爲梁也
比舟於水加板於上今浮橋也故杜預云造舟爲
梁則浮橋之謂矣云々三才圖會宮室二巻に浮橋以
舟爲之以水勢不可爲橋故以浮橋渡之云
々倭漢三才圖會卅四に越前福井北有川其幅
凡百四十丈用八十余艘但舟數多少任水增減耳
其地名舟橋其他用緒川亦不少上野佐野舟橋亦
然矣云々萬十四に上野の佐野の舟橋とりはなし云
々十七に泉の川のかみつ瀬に打橋わたしよど瀬に
は浮橋わたし云々夫木雑三中務卿のみこ鎌倉か

りそめに舟もてあめるうきはしのかけてあやふき
世をわたりつゝ又法眼慶融うき橋に竹のよりつな
打はへて小舟ならぶる富士の川波日本紀略延暦
廿年五月に津濟設舟楫浮橋等云々袖中抄十九に
承和二年六月造浮橋云々常陸風土記に編舟作
橋云々此下物に多くみゆ　○かた淵　神代紀下歌
に以嗣箇播箇拕輔智箇拕輔智箇云々釋日本紀廿三
に以嗣箇播石川也箇拕輔智片淵也云々纂疏下二に
箇拕輔智爾者片淵也云々新撰六帖六衣笠内府岸か
げの水のよどみの片淵に釣をたれたる青柳のいと
○人目づゝみ　萬八に妹がりとわがゆく道の川な
れば附目緘結跡夜ぞふけにける古今戀三にたきつ
せのはやき心をなにしかも人目づゝみのせきとゞ
むらん此外何現に人目をつゝむとよせしは古歌
に多かり　○一の宮　神名帳上に尾張國中島郡眞
墨田神社名神大云々續日本後紀十七に尾張國眞清
田天神云々文德實錄三三代實錄十一にもみゆ尾張
國内神名牒に中島郡正一位眞清田大明神云々神道
集三に尾張國一宮は眞清田大明神是也本地地藏也
云々一宮記に尾張中島郡眞墨田神社眞清田大明神

此也大己貴命云々赤染衛門集上にますだの御やしろといふ所にまうでたりしに云々しづのをのたねはすといふ春の田をつくりますだの神にまかせん承久物語三にをはりのくに一の宮につきしかば云々神社啓蒙四諸社一覧六國花萬葉記九倭漢三才圖會七十一西遊行嚢抄六下諸國一宮巡覽記十三などにも出て大己貴命也一宮は神道集五に崇神天王御時日本諸國多立二一宮一云々仲野安雄が淡路常盤草四に一宮といふ事異説多し崇神天皇の置たまふ天社地社を一宮といひ垂仁天皇の置たまふ國社を二宮といふと又は天社を一宮とし地社を二宮とすと又は一國の守護神の義ともいふ上代には一宮の名なし云々與清按に一宮二宮などいふ名古書にはをさ〳〵あらはれず本朝無題詩七釋蓮禪が著長門境即事詩自注に遠岸有一社當州稱二二宮一とあるがものにみえたるはじめ也蓮禪は保元の比の人なればその以前此名ありし事いちじるしされど崇神の御世におこれりなどいふはいみじきひが言也こは國府の六所宮定りてより後の名とみゆ六所宮の事は已に棟梁集にいへり神道集三社寄抄などにも六所明神の事あれば考合すべし因に云一宮記は古書にあらずそは貝原篤信が筑前續風土記四那珂郡住吉社の條に建武二年尊氏九州下向の時此御神に祈り神領寄進ありし文書今に至て神職の家に留れり其文章云寄進筑前國一宮豊前國河崎庄也右今度之義兵遂本望新天下之安寧家門繁昌所寄進如件建武三年三月八日源朝臣書判有云々右の書及其外の文書に筑前一宮住吉と侍り今は箱崎宮を以て一宮とすいつの比何某の改めけるにや云々とあるに一宮記には箱崎宮を載たれば建武より後の書なる事はうつなし門人北條時鄰がものがたりに鹿島神宮の本をみしに山崎垂加などが比の書樣也とぞ云りさる事ありけんかし

○ふたつなくみつなき　新後拾遺釋教一品親王尊圓券はたゞはなをぞむもふたつなく三つなき物はこゝろなりけり法華經方便品に但以二一佛乘一故爲衆生説法無有餘乘若二若三云々科注に無二者無般若中所帯二也無三者無方等中所對之三也云々本文にまた十方世界中尚無二亦何況有三云々十方佛土中唯有一乘法無二亦無

三云々。

〔補注〕ちぎり結ぶの神ならば　約束を結ぶといふ名を負ひ給ふ神にませばなり　ちぎりとは契約することそれを結ぶとは約束通にすることなり　○とけぬうらみ　何時までも心にかゝりて恨みの晴れぬをいふとけぬは結ぶの縁語なり直文　異腹の子爲氏との恨をいふなり　○かたふちの　直文云のはの如くの意也　○人めつゝみ　堤に包をかねたり直文云人に忍ぶとなり　○かりの世　佛法にこの世はかりの世にて他に永久の世ありとするによれり　○うき舟　水上に舟を浮べてその上に板などを敷きならべたるものをいふなり。

廿日尾張(ヲハリ)のくにおりと(下戸　原、伊、作おもと、)といふむまやを(夫木雜七有いてい)行(不杜)三字、ゆくよさぬ道なれば(伊作ゆき過ぬ道なれは)あつた(熱田)の宮へまゐ(參)りて硯とり出て書(カキ)つけて(伊て字无)奉(タテマツ)るうた(原、伊、作たてまつるうたいつゝ、夫木雜七、作たてまつるうた五首、)

いのる(所禱)ぞよわがおもふとなるみ潟(ガタ)かたひく(群イ作さしひく)潮しほも神のまに(原作袖　隨意)く。

夫木雜七
なるみ潟(ガタ)和(カ)歌の浦風(ウラカゼ)へだて(不隔)ずはおなじ(同)心に神もうく(納受)らん。

夫木雜七
みつしほのさしてぞ來(キ)つる鳴海潟(ナルミガタ)神やあはれと見るめ尋(タヅネ)て。

雨風(アメカゼ)も神の心にまかす(任)らんわが行さき(ユク前途)のさはり(障)あらすな(勿)。

鳴海の潟を過(スグ)るに(已上十一字、原、共、伊、共无、)しほひのほ(汐干間)どなればさはり(障)なく(無)ひかた(干潟)をゆく。折(ヲリ)しも濱千鳥(ハマチドリ)いとおほくさき立(ダチ)て行(ユク)も、しるべ(嚮導)顏(ガホ)なるこゝち(心中)して。

濱千鳥(鳴)なきてぞさそ(誘)ふ世中(ヨノナカ)にあとゝめ(跡留)んとは思はざりしを。

すみだ河(角田)のわた(渡)りにてそありときゝ(聞)し都鳥(ミヤコドリ)といふとり(鳥)のはし(觜)とあし(足)と赤(アカ)きは。此浦(コノウラ)にも有(アリ)たり。

夫木雜九
こととはん觜(ハシ)と足(アシ)とはあかざりしわが(我)すむ(住)かた(方)の

扶イ夫木、共作こしかたの、みやこどりかと(群、及夫木、作も、)

二村山(フタムラヤマ)をこえ(越)てゆくに。山も野もいと遠(トホ)くて日もくれ(暮)はて(果)ぬ。

はるばると二村山(フタムラヤマ)を行過(ユキスギ)て猶すゑ(末)たど(尋)る野べの夕やみ(闇)。

やつはし(八橋)にとゞまら(止宿)んといふ。くらき(暗)に橋も

みえずなりぬ。

玉葉旅 さゝがにのくもで危き八橋を夕ぐれかけて渡りぬるかな。玉葉作かれぬる」

○尾張國　和名抄ノ五に東海ノ國尾張平波里云々國府在リ二中島郡ニ一行程上七日下四日管八田六千八百二十町七段二百十歩正公各二十萬束本稲四十七萬七千束雜稲七萬二千束云々延喜主計式ノ上以呂波字類抄ノ見ノ部拾芥抄中末節用集國郡部尾張風土記八國記國名風土記ノ上古事記傳ノ十四廿七州名紀原諸國名義考上大八洲記ノ六海東諸國記などにみゆ名義は小墾田にて小はそへて云詞はりは田をはりかへすとにて新に墾たる田より里の名出來里の名より國の名出來し也神名帳ノ上に尾張ノ國山田郡尾張ノ神社尾張戸神社續日本紀ノ廿九に尾張國山田郡ノ人小治田連などあれば此小治田の里を省て尾張といひし也小墾田とは今の新田の事と心得べしさて萬ノ十三に小治田之年魚道之水とよめるは小治田はひろき名にて年魚道はそれに管たる地なればなるべし年魚道は今の愛智郡也　○おりとゝいふむまや尾張國圖に中島郡下津村ありおりとを通音にて

おなじ平治物語下義朝うたれの條に玄光一人さをさして杭瀨河をぞくだしけるおり戸に關すゑてくだる舟をさがすほどにこの舟をもよせよといへども云々參考本には府ノ津折戸折津など書き余が家藏の古本にも折戸と書たりされど屋代弘賢主藏の古本余が所藏の又の古本などにおり戸ともおりとゝも書たるが正しくて此日記におりとゝあるも同所也又此日記の原本伊村本などにおもとゝあるは寫しひがめなることうつなければしたがふべからず神鳳抄に尾張國下津御厨云々砂石集六袈裟の德の條に尾張國下津の宿に雷おちて云々雅世卿富士紀行に尾張國おりつと申所を夜ぶかく立侍るとて夢路をもいそぎ來にける旅なれや月にかりねの夜をおりつまで堯孝覽富士記におりつの御とまり垂井より十里云々又おりづの御とまりにてくれにけりのゐてふ駒をひきとめて今やおりづのすくをたづねん名所方角抄尾張國國分に阿波手の森云々下津といふ里の南に森は有云々すのまたより下津の間五里ばかり也云々萱津の原下津より一里ばかり北也云々景清草子下にすのまたあじかおよびの橋

光りわりたるいゐの黒田のしゆくを打過てわりでくぞを過しかばをはりの國にきこえたるあつたの宮にまゐり云々西遊行囊抄ノ六下に萩原云々自此邊左の方行程凡一里半に下津の驛あり是は昔の本海道筋也云々一宮是も昔の海道下津の西北の驛也云々與淸按におりとは登戶にむかへたる名にて河岸の舟へ下る所なればさいふ也そは武藏橘樹郡下總千葉郡などに登戶といふ地ありて共に舟より登る處なるをもてしるべし又は上津下津の意としてもきこゆ　○よきぬ道　傍に枉人らぬ道といふ義也景行紀四十年に枉道よきりて云々萬七にいづこ從ゆかん與奇道はなしに云々十一に君がきまさむ曲道にせん云々曾丹集に春山に木こるこぎりの腰にさすよきつゝよれや花のわたりは源氏眞木柱にかの瀨はよき道なかなるを云々除道にて横切の義なり物ぐさ太郎草子によけ道をしてとほりけるとみゆ本朝の字書に過の字をヨキルとよめりきを濁てよむは誤なり袖中抄十四によくとはその所そのものをさりのぞきて外より過るをいふ也云々よきると云に過と云文字を書てその人の家若はその所をとほるをもいふ云々　○熱田の宮　和名抄ノ六に尾張國愛智郡厚田云々神名帳上に尾張國愛智郡熱田神社云々神代紀上に草薙劍此今在尾張國吾湯市村即熱田祝部所掌之神也云々古語拾遺に草薙劍今在尾張國熱田社云々熱田大神緣起に正二位熱田大神者以神劍爲主本名叢雲劍後改名草薙劍一世祠立於尾張國愛智郡云々東遊行囊抄ノ五に熱田大神宮社領七百十七石別當妙法院神主大宮司田島云々此外熱田の事所見あまたにてわづらはしければ引出ず天智天皇七年に新羅の沙門道行が此社の神劍を盜去まくせし事天智紀七年平家劍卷下熱田緣起盛衰記四十四一代要記天智の條帝王編年記九元亨釋書廿一如是院年代記などにみえたり與淸按にアツタといふは吾湯市田にてユを省きチをツにかよはせしなり吾湯市は年魚淵の義にて相模の愛甲郡も年魚川なるべくぞおもはるゝそはいづれもおほく年魚のすめる淵川なればなるべし上野國圖を考に緑野郡に鮎川といふがあり平家劍卷下に杉の燒倒たれば熱田と名付るよしいへるはうけがたし因にいふ劍卷は今太平記のはしめに附刻

したれは世人太平記の劍卷とおもへりひがごと也屋代弘賢主の藏本に平家劍卷と題號せし古本有太平記の時代よりもいとふるき寫本のさまにみゆこれ平家物語の附錄なるべきよし弘賢主の考あり參考太平記に載られざりしは具眼のしわざにこそ

○鳴海潟　和名抄六に尾張國愛智郡成海奈留美云云神名帳上に尾張國愛智郡成海神社云々熱田大神緣起歌に奈留美良乎美也禮波比保志比多加知爾云云自注に奈留美者是宮酢姫所レ居之鄉名今云ニ成海ニ云々東遊行鑒抄六に昔の鳴海の驛は此所より左の方の山下にて今驛の所は海中にて有しが漸々干潟と成て後道をつけかへて此處に驛家を立云々此外の所見は例のはぶきつ歌によめるは六帖三に小町いかで我心をだにもやりてしがとほくなるみの根がてらにと有を始とす　○かたひく　潟引汐に方人の引をよせたり新撰字鏡水部に潮潟加太云云和名抄一に潟師說加太云々藻鹽草潟部にかたは方の義也云々東雅二に潮涸し方と云義云々冥神が和名抄釋義に潟堅之ニ乎云々和訓栞亦部に潮の引たる跡の形あればいふなるべし云々　○神のまにまに　古今羇旅菅原朝臣このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに六帖一にたまきはる我宿の上に立霞立ても居てもかみのまにまに此歌は萬十に出て君がまにまにと有まにまにはままにといふに同じ日本紀萬葉などに隨任順尋依などの字をまにまにともまゝにともよめり又隨意をもよめり靈異記下に隨滿爾萬爾云々字鏡女部に姣保志支萬爾萬爾などもみゆ

○みるめたづねて　海松菜にみる目といふ詞をよせたり和名抄海菜部に海松和名美流云々萬二に辛の崎なるいくりにぞ深海松おふる云々同五に綿もなきぬのかたぎぬの美留のごとわゝけさがれる云々此外多かりミルメのめは藻の通音にて昆布は廣藻和藻は柔藻滑藻は荒藻の義なるとおもふべし豐後風土記に最勝海藻謂ニ之都米ニとも有さて海松藻を尋てといふは奧儀抄下袖中抄八なとに橋姫物語を引てむいそのめをもとめけることあればこれらにすがりて讀るにや因に云橋姫は橋を守る神にて宇治にかぎれるにあらぬよし神道集七にくはしく云り又世人のことぐさにせる長柄江人柱のもいへば父はながらの人柱

きじもなかずはさられざらましといふ歌の由緒をも記したりき　○すみだ河　武藏葛飾郡に有此郡太井河を界て東は下總西は武藏にて兩國にわたれり太井河は今江戸河とよびて利根河の分流也萬葉仙覺抄五の卷十五の卷などに太井河を境て葛西郡葛東郡といふよしみゆ葛西の内また中河をへだてて東を東葛西西を西葛西と云りさて角田河ふるくは下總なりしに後武藏に隷しと已に棟梁集にろうじたり袖中抄ノ十二にすみだ川をばすだといふとみえてもと隅田の里に起れる河名也歌によめるは伊勢物語古今羇旅を始とす萬葉なるは紀伊の角田河也　○都鳥　伊勢物語にむさしのくにとしもつふさのくにとの中にいと大きなる川ありそれをすみだ川といふ云々しろき鳥のはしとあしとあかきしぎのおほきさなる水のうへにあそびつゝいをゝくふ京にはみえぬ鳥なればみなみしらずわたし守にとひければこれなんみやこ鳥といふをきゝて名にしおはゞいざこととはん都鳥我思ふ人は有やなしやと云々萬廿にふなぎほふなり江の川のみなぎはに來居つゝなくは美夜古杼里かも此外古歌に海にも河にも濱にもよみ又色は白くて嘴と足とは赤きよしいへるものおほかり與清按に都鳥の說おほかれど契沖阿闍梨季吟法印眞淵翁などの伊物の注に鷗といはれしが千古不易の確論なるべしそは鷗にも種類おほくて形もやゝ別あり小野蘭山翁が本草啓蒙四十三に鷗を筑前にてネコドリ筑後にてネコサギ上總にてウミネコ武州本牧にてハマネコとよぶよしいへりこれ鳴聲の猫に似たるがゆゑ也源氏若菜下に猫ねう〳〵といとらうたげになけばと有今打きくにはニヤウ〳〵となくが如し鷗もミヤミヤとなく聲のネウ〳〵ともニヤウ〳〵ともかよひてきこえて猫の聲にいと近ければ某猫といふ名をもよびし也さて都鳥のミヤは聲によりておほせコドリはよぶこどりみさでどりなどの小鳥に同じく大鳥に對へし稱也貝原篤信が大和本草ノ十五に西土にて都鳥と稱する鳥あり背は黑く腹脇白く嘴と足と赤し嘴長しけりの形に似て其形うるはし伊勢物語にいへる都鳥は是なるかともいひたれど武藏下總などの間にさる鳥いとまれ也伊勢物語の都鳥は決て鷗なることうつなし古今著聞集廿に成季

と云者が都鳥を飼て蒔の虫をくはせし事も見ゆ○こと丶はん　事の由を問んと也與清按にこと丶ふといふ語ふるくは唯ものいふ事にいへり用語には必すみていへり古事記垂仁の段に眞事登波受云々萬五に許等々波奴樹爾波安里等母云々廿に麻多己等刀波牟云々又體語には濁ていへり萬十八に許等騰比能等毛之伎云々廿に許等騰比勢武等云々これらの例を考へて知べし後には事の由を尋問とにてと丶へばともこと丶はんともいへりさて都鳥にこと丶ふとよみたるは後拾遺羈旅和泉式部こと丶はゞありのまに〳〵都鳥みやこのことを我にきかせよ散木六に俊頼名にしおはゞしらじなわだの都鳥心づくしのかたはそことも齋宮女御集人をなほうらみつべしや都鳥ありやとだにもとひもきかねば此外擧に遑なし　○あかざりし　嘴と足との色の赤きに厭ざりしとよせ都鳥に都をかけあはせてよめり　○二村山　和名抄六に尾張國山田郡両村布多無良云々延喜兵部式に尾張國驛馬馬津新溝両村各十匹云々能因歌枕に尾張國云々今は參河國碧海郡に屬して沓掛とよぶ所なり詞花秋詞書に三河のくに三村山とみえ八雲御抄五後撰正義名所方角抄歌枕名寄十九新撰歌枕三勅撰名所和歌抄出山部玉葉抄拔書藻鹽草四などにも三河とし夫木雜二十四代集名寄山部には共に両國に入たり歌によめるは兼盛集重之集後撰などをふるしとす東遊行嚢抄七閑田次筆一などにいひたれば考て知べし　○八橋　與清按に八橋に二所ありそは伊物古今古今六帖に見えたる八橋と更級日記舊本今昔物語より後のものにみえしは所異也更級今昔より後にいふは參河國圖を考に碧海郡池鯉鮒宿の東なる里村のつづきに有名所方角抄に八橋花の瀧より八橋の宿三町許西也北より南へ流れたる小川也四角なる木のちひさきを八つわたしたり云々東海道名所記四に今村西田云々海道より北のかた一里ばかりに八橋の舊跡あり云々東遊行嚢抄六に追分池鯉鮒野にあり是より左八橋の道也八橋は自追分到于此十町許云々など云るにて知べしさて伊勢古今のは今の矢矧川の川上などにやあらんそは伊勢物語にみかはのくにやつはしといふ所にいたりぬそこをやつはしといひけるは水ゆくかはのくもでなれば橋

をやつわたせるによりてなんやつはしとはいひける
とあり古今羇旅の詞書はこれをとりて略し書る也
伊勢物語の眞名本に水ゆく川のくもでを水堰河之
蜘手と書てみづゐてかはのくもでとよめり蜘手は
借字にて隈處の義也伊勢の雲津も川の隈處より出
し名也又隈津の義としてもきこゆさて川曲の處に
堰かれし上つかたは水堪てひろ〳〵と瀬もはやか
らず橋などわたすにもたよりよきてとわり也その
廣さ川中へ杭打かまへてつぎ〳〵橋を架わたし此
方彼方に通はせたれば八橋とはいへるなるべし和
名抄八に伯耆國八橋郡八橋也八之とあるも同義と
みゆ伊勢眞名本の水堰を眞淵翁の古意一にミヅセ
クとよみかへられしは中々にひがと也井とは水の
湛し事をいふ井筒堰塞井堤などの井これ也大井貫
辨井上井隈などいふ地名もこれに起りしなるべし
かゝれば伊勢古今にいへる八橋は今の所でとわづ
かなるせゞらき水にはあるまじくぞおもはるゝ更
級日記に八橋は名のみにして橋のかたもなく何の
見所もなしとあるは今の所のさまに聞ゆれば更級
より後の書なるは今の八橋の所をは定むる也さて

伊物の朱雀院塗籠御本に水のくもでにながれわか
れて木やつわたせるによりてなん八橋とはいへる
と有はやゝ後に書かへて詞を改められしなるべし
舊本今昔物語廿四には河の水出て蜘手也ければ
橋を八つ渡けるに依て八橋とは云ける也とあり是
もさる本によりて書出しと見ゆしかはあれど水が
蜘手のさまに流るべきとわりなければうけがたし
古意に水せく川のくもでとして圖を出されしは省
聞抄や闕疑抄の說をたねとしてまうけられけんに
ていとあさ〳〵しきかうがへ也この翁は我爲には
道統の祖なればあなかしこそしりいふにはあら
ず學の道はおほやけなるをはいとすなればいさゝ
か僻案をも述るになん　○さゝがにの　雲とは
ん料の枕詞也允恭紀衣通姫歌にわがせこがくべき
よひなり佐瑳餓泥能區茂能おこなひこよひしるし
も釋日本紀廿六に佐々蟹也謂蜘蛛也私記曰云々
又說蜘蛛之別名也言其躰如蟹住左々原故云云
々冠辭考四にも蜘蛛のさまをいへる一つの名なれ
ば冠らせてよめる也といへり此事諸書にいひたれ
どわづらはしければ引出ず枕詞をやがて蜘蛛の事

としてよめるは古今ノ戀ノ五に今しはとわびにしものをさゝかにの衣にかゝりわれをたのむかと有をはじめとす　○くもで　和歌童蒙抄ノ五にくもでとは柱にちがへてゆるがさじと打たる木を云也されど此八橋はたゞ板を打たるやうにてあるなれば蜘蛛の手はやつあればやつといへる心につきてよめるなり云々保元物語ノ參考ノ一官軍手分の條に蜘手十文字に散々に懸廻りて云々平家物語ノ活板ノ二小松けうくんの條にある障子のうへにくもでゆひたる所あり云々源平盛衰記ノ五成親巳下被ニ召捕一條に一間の障子を大なる木を打違へて蜘蛛手を結たる所あり云々太平記ニ俊基再關東下向の條に蛛手きびしく結て云々秋夜長物語にくもでかくなわ四角八方を斬てまはりける云々閑田耕筆ノ三に畑橋洲が說にくもではくむ手也手をくみたるが如くやり違へたるをいふ蛛をくもと云も糸をくむの音轉也云々屋代弘賢主の參考伊勢物語ノ下にくもでとはくみでの轉音也くみでとは×如キ此ノかたちをいふ云々倭訓栞ノ八にもみえてげに後のくも手といふは組手の義なるべしされど八橋のくもでは隈ニヤ處にて已にろうせしがでとかればこれさおなじからず

〔補注〕和歌の浦風　歌の道をいふこゝはなるみ潟に對して歌道の事を和歌の浦風といへるなり　○さしてぞ來つる　阿佛尼のこの地を指して來れるを潮のさして來るにかけていへり　○鳴海の潟かたひく　なるみがたは愛知郡の海濱の地成就する意をかねたりかたひく潟引に身方になりて引き拔くるゝことをかねてよめり　○神の心に　直文云にの下にはの字を入て心得べしまかすらんとは降らんと欲せばふらし吹さんと思へば吹して自由に出來ることをいふ　○しるべ顏なる心地して無心の千鳥も己を導びき行くやうなる心持のするをいふ　○世の中にあとゝめん　あとゝめんは千鳥の緣語この世に生存してあるをいふ直文云何時迄も世の中に生きながらへんとは思はざりしものをの意なり

廿一日。八幡をいでゝ行に。（夫木秋六作出てゆく日）いとよくは晴れたり。山とほきはら野をわけ行。ひるつかたにな

りてもみぢいとおほき山にむかひて行。風につれなき所々。くちばにそめかへてけり。ときは木どもゝ立まじりて。あをぢのにしきをみるこゝちす。人にとへばみやぢの山といふ。

しぐれけりそむるちしほのはては又紅葉のにしき色かへるまで。此山まではむかしみしこゝちするに。ころさへかはらねば。

まちけりな昔もこえしみや路山おなじしぐれのめぐりあふ世を。山のすそ野に竹のある所に萱屋のひとつみゆる。いかにしてなにのたよりにかくてすむらんとみゆ。

ぬしやたれ山のすそ野に宿しめてあたりさびしき竹のひとむら。日はいりはてゝなほもののあやめもわかぬほどにわたうどゝかやいふ所にとゞまりぬ。

○くちばに染かへて　宇津保ノ國讓ノ下に下人はくちば色の襖など心にまかせてきたり云々源氏ノ總角に岩がくれにつもれる若葉の朽葉すこしはるけのものども云々寳物集ノ二に宗眞紅ノ戀の涙の如何なれば果は朽葉に袖の成らん此外歌にも物語にもおほくみえ二蒲萄色をいへる也袖中抄ノ十二に以二濃青朽葉色一稱二左伊多津萬色一といへり拾遺物名にくちば色の折敷とも有延喜ノ縫殿式西宮記北山抄江次第雅亮ノ裝束抄餝抄後稱念院殿ノ裝束抄菅見記助無智秘抄などをはじめとして服色管見衣服品彙裝束色彙の類の書どもに朽葉色青朽葉黄朽葉赤朽葉薄朽葉の服のみえたるは枚擧に遑なし○青地の錦　錦に青地赤地紺地などあり夫木ノ秋ノ六周防ノ内侍いなり山杉間の紅葉さてみればたゞ青地なる錦なりけり千載ノ秋下後白川院紅葉に月のかかりをさしそへてこれや赤地の錦なるらん源氏ノ繪合に青地のこまにしき云々平治物語ノ上ノ源氏勢揃の條に赤地の錦の直垂云々同下頼朝擧二義兵一條に青地の錦の袋に入られけり云々吾妻鏡ノ四に赤地錦ノ直垂云々管見記ノ御禊行幸服飾部類ノ第三に壽永ノ信範記二云云々赤地ノ唐錦云々神道集ノ十に天

井をば青地の錦にて飾柱をば緋地の錦にて裴せたり云々延喜織部式に緋地・地韓紅地黒絲地中縹地蒲萄地などの錦ありまた八雲御抄ノ三ノ下藻鹽草ノ衣類ノ部などものにあまたみゆさてにしきは貝原篤信が日本釋名ノ下に錦はにには丹也わかき也しは白也きは黄也亦白黄色とまぜたる也云々和名抄釋義に錦西來乎西敷乎自ニ海西ニ來故乎亦出ニ成都ニ爲レ好故乎云々など解キ東雅ノ七にはから國より渡れるもの丶よしいひて新羅の君を尼師今といひしは其故ありとみえたりと有與清按ににしきは丹繁の義にてもと紅葉の繁きさまより出し詞なるべし紅葉の錦は古歌におほく詠り丹は和名抄十三に丹砂似ニ朱砂ニ而不ニ鮮明ニ和名邇とみえし物にて赤色の事也萬葉に丹穗祝詞に赤丹穗などもいへりしきは重播種子重浪などのしきにてしげくかさなれるさま也詞の下に附ていへるは伊斯許理度賣命を古事記傳八に鑄重の義といひたるが如し神武紀に丹敷浦とあるも志摩英虞郡二色郷にて紅葉のながめのよろしき所なればなるべし丹敷浦ふるくは熊野の地に隸せしがゆゑに一名熊野ノ荒坂ノ津ともいへり山家集ノ下に伊勢のいそのへぢの錦の島に磯曲の紅葉のちりけるをみて浪にしく紅葉の色をあらふゆゑに錦の島といふにやあるらんとよめる錦の島も紅葉にておこれる名とおぼゆ宮崎文庫眺望境記に宮崎を錦の河内ともいふ宮崎は四方皆山にて其中悉田なれば秋山の紅葉田面の色付たる時分錦の河内と云と有も又よしあるとすべし垂仁紀五年に錦色小蛇ともあり和名抄ノ十九に文字集畧云蚺蛇ハ文如ニ連錢錦ニ也名和仁之木倍美とみえて赤斑の小蛇也今俗にひなからとよぶひなは小き義からはからにしきをはぶける語にやこれらの丹敷浦錦色小蛇などは西蕃のゆきかひなき程の名なれば綾錦によれるにあらず紅葉によりておほせしふるき詞也綾錦ににしきといふはて丶の紅葉の錦のさまより呼し名にていと後也錦は允恭紀ノ八年にはじめて其名みえ續日本紀ノ五和銅四年閏六月丁巳遣ニ挑文師于諸國ニ始敎ニ習織ニ錦綾ニとあり諸國に錦部といふ地名おほかるは錦織手を置れし所也さて古今春上にみわたせば柳櫻をこきまぜて都ぞはるの錦なりけるとよめるは眞淵翁の續萬葉論ノ一に錦は色

々の糸をまじへおるものなれば柳の綠花の紅咲まじりてえならぬをいふと注せられしごとくや丶後のいひざま也　○千しほ　夫木ノ春六定家谷川の春もちしほの色そめてふかき彌生の山吹の花月清集下あかねさす嶺の入日のかずそへてちしほ染たるいはつつじ哉また一しほ二しほやしほいくしほなどもよめり和漢朗詠集注ノ二に一入再入ノ之紅云々注にひとしほふたしほといふ云々節用集ノ潛板ノ北部に一入ひとしほ云々運歩色葉集ノ比部に一入ひとしほ云々釋日本紀ノ七に今世亦謂ニ一度ニ爲ニ一入也云々古事記傳九酒を釀は志本袁留也と云たる次に物を絞ると云もこれより出たると又物の色を染る度數を一しほ二しほと云も本ト同意云々○宮路山　和名抄ノ六に參河國寶飯郡宮道美也知云々名所方角抄に宮地東に河有北向の里也矢はぎより近し山は高からず衣の里近し二里ばかり也云々東遊行嚢抄ノ七に紺屋町を出て右に見ゆる高き嶺を竹大明神山と云云々宮路山とは此山を云長澤の邊宮路の内也云々東關紀行にやはぎといふ所をいでゝみやぢ山こえ過るほどに赤坂といふ宿あり

云々庵主更級日記海道記吾妻鏡ノ十盛衰記ノ四十五承久物語ノ三などにもみゆ躬恒集にみかはのかみのむまのはなむけせしによめる名にしおへばとほからねどもみやぢ山これをたむけのぬさにせよきみ後撰ノ戀五にきみがあたり雲ゐにみつゝ宮路山打こえゆかん道もしらなく此ほかよめる歌おほかり　○この山まではむかしみし心ちするに　うたゝねの記にちぎりし人にわすられて後の親とたのめる人遠江よりのぼりたるかへさにいざなはれてくだりしよしみゆ　續古今ノ羇旅におもふと侍るころ父ノ度繁朝臣と遠江のくにゝまかりける云々

○時雨のめぐりあふ　詞花冬道雅もろともに山めぐりするしぐれかなふるにかひなき身とはしらずや新勅撰冬兼昌ゆふづくひ入さの山のたかねよりはるかにめぐる初時雨かな萬代集冬崇德院木がらしに紅葉ちりぬる山めぐり何をしぐれのそめんとすらん千載冬頼政山めぐりくもの下になりぬらんすそのゝ原に時雨過也此外時雨にめぐるとよめる歌枚擧すべからず　○山のすそ野　續後撰秋ノ上清輔高砂の尾上の風やさむからんすそのゝ原に

鹿ぞなくなる千載春上基俊春雨のふりそめしより
かたをかのすそ野の原ぞ淺みどりなる與清按にす
そは末衣の義にて衣の末をいふ古事記景行ノ段に
意須比能須蘇云々萬一に珠裳乃須十云々和名抄十
二に陸詞カ曰裾ハ衣ノ下也和名古呂毛乃須曾一ニ云岐
沼乃之利云々皇太神宮儀式帳に腰須蘇高五尺云々
又須蘇長四尺云々又須蘇弘四尺云々止由氣宮儀式
帳に須蘇長五尺云々靈異記ノ上に襴すそ云々同中
に襴 須曾云々字鏡ノ髟部に鬖ハ表服須曾奴波須云
々などみゆ裾山の裾は衣の裾に似たる所なれば云
り又萬九に筑波嶺乃須蘇廻乃田井云々十七に須賣
加未能須蘇末乃夜末能之夫多爾云々廿に多可麻刀
能宮乃須蘇末乃奴都可佐云々などよめるも須蘇廻
は裾曲の義也ふもとのくま也須蘇末は麓邊也末は
備の通音にて邊の義也おしべをおふび共云にて知
べし ○ぬしやたれ 古今ノ俳諧に素性山吹の花
色衣ぬしや誰とへど答へずくちなしにして夫木ノ
春二俊恵春くれば離の島にかけてはす霞のころも
ぬしやたれなる ○竹のひとむら 東遊行嚢抄ノ
七に南田村自リ海道ノ右ノ方田ノ中にあり是竹ノ屋の
里也名所也四條局ノ十六夜日記にいはく山のすそ
野に竹ある所にかや屋一つみゆるいかにしてなに
のたよりにかくてすむらんとみゆぬしやたれ山の
すそ野にやどしめてあたりさびしき竹の屋のさと
所歴日記一に吉田にいでぬそこの里を過て高橋と
いふ所にいたるそのあたりにてぬしやたれとよみ
し竹のやの里をとへば西の方十町ばかりにへだゝ
りて田の中に一村みゆてれなんそれといふをきゝ
てかげうつる深田の水のいろまでもみどりにみゆ
る竹のやの里云々藻鹽草ノ郷部に竹屋ハ里ハ三河み
どりなるいろもかはらてよのつねのいくよかへぬ
るたけのやのさとゝゝ松葉集ノ五に竹屋ノ里ハ參河
云々參河國圖に寶飯郡竹谷村あり ○あやめもわ
かぬ 古今ノ戀一ほとゝぎすなくや五月のあやめく
さあやめもしらぬこひもするかな貫之集九にあや
めもしらぬ大空云々六帖ノ二にもみゆ金葉集にあ
やめもしらず雪のふれるに云々忠見集にあやめみ
るべき今朝は云々六帖ノ一にあやめもしらぬ誰き
ぬはきし云々此外ものにみえたるいとおほかり顯
注密勘ノ戀ノ一に世にあるものは錦ふり物を始て經

の甲貝のからまで文なきものはすくなしあみの日籠の日ぬのめなどいふより色ふしみえわかれくらからぬ時は先文と目とのみえわかるゝをくらきやみにもなり心のはれぐ〜しくいふかひなくなりぬればその物のすがたをあやめもしらずといふとこそ申されし云々○わたうどかや云所　和名抄六に參河國寶飯郡度津和多無都云々延喜兵部式に參河國驛馬鳥捕山綱渡津各十匹云々東關紀行に豊河といふ宿の前を打過るにある者のいふをきけば此道をば昔よりよくるかたなかりしほどに近比より俄にわたうづの今道といふかたに旅人おほくかゝる云々與清按にわたうどわたむづわたうづみな通音にて同處なるべしこは豊河の渡津にや津は處の義としてもきこゆ上にいへるごと下津下戸などの例あれば也。

〔補注〕風につれなき所々　つれなきは平氣なるをいふ紅葉は風に散るが常なれどまた風に平氣なる所々もとなり　○ときは木　四季ともに緑なる松柏の類をいふ　○宮路山　參河國寶飯郡　○宿しめて　住家を定め構ふるをいふ也　○なほものゝあや　直文云なほはやはりの意にあらず愈々の心につかひたるなり。

十六夜日記殘月抄補注卷之二

廿二日のあかつき、夜ぶかく(諸本作き、今据伊本、)あり明の影に出て行く。いつよりも物かなし。

住わびて月の都を出しかどうき身離れぬ有明のかげ。

とぞおもひつゞくる。」ともなる人。あり明の月さへ笠きたりといふをきゝて。(夫木秋四なきて四字无)

たび人のおなじ道にや出つ(作ゐ)らん笠打きたるあり明の月。

」たかしの(字无)山もこえつ。海みゆるほどいとおもしろし。浦風あれて松のひゞきすごく。浪いとたかし。

わがためや浪もたかしの濱ならん袖の湊の浪はやすまで。(上下句有浪字者、善寫誤」)

いとしろき洲崎に。くろき鳥のむれゐたるは。うといふとりなりけり。

(玉葉旅)しらゝ濱に墨の色なるしまつ鳥筆も(扶作ふでの)およばゞ繪に書てまし。(夫木雜九)

」濱名の橋よりみわたせば。かもめといふとりいとおほくとびちがひて。(金作飛かひて)水のそこへもいるいはのうへにもゐたり。

(夫木雜九)かもめ居る洲崎のいはもよそならず浪のかけ(伊作かた)こす袖にみなれて。

」こよひはひく(金、伊、共作ひき、)まのしゆくといふところにとゞまる。此所のおほかたのなをば(扶を字无)濱松とぞいひし。したしといひしばかりの人々などもすむ所也。すみこし人のおもかげもさまざま思ひ出られて。又めぐりあひて見つる命のほども。かへすがへすあはれなり。

濱松のかはらぬかげをたづねきてみし人なみにむかしをぞとふ。

その世に見し人のこむまごなどよびいでゝあひしらふ。」

○あかつき　明時の義也夜のあけんとするころほひをいふ仁德紀卅八年に鷄鳴アカツキ云々　推古紀齊明紀にもみゆ萬二に鷄鳴アカツキ云々同八に五更アカツキ云々同十一に旭時アカツキ云々同十五に安香等吉能之保美知久禮婆云々此外おほかり遊仙窟に更深アカツキフケテ云々また更長アカツキノナガキ云々字鏡日部に暁向レ曙色阿加止支ま

た旭略などの字をもよみ所晨なり於保安加止支ともあり萬十に曉月夜アカツキヅキヨ云々土佐日記にあかつきずくよいともおもしろければ云々砂石集二地藏菩薩利益の條に曉月夜に見れば云々公任集詞書に曉月夜にはすづらをゆけばと云々　〇ありあけのかけ　月はまだ在ながら夜のあくれば有明の月といへり續往生傳阿闍梨延慶が傳に十五日以後月稱晨月云々袖中抄十九に下旬をばおしなべてありあけおほかたは十四五日より月のいらぬさきに夜のあくるをばみなありあけの月といふべけれどくはしくいへば廿日の後をいふべき也云々八雲御抄三上にありあけの月は十五日以後をいふ云々藻鹽草月部に有明月十四日十五日以後の事なり又有明の空とばかりいひても月也又曰有明は廿日後ともいへり云々桂明抄に有明月は曉かけてよぢ出る末の月にて候又廿日より内の月をも殘月におよびては有明と申べきよし先賢申傳候也云々萬十に白露を玉になしたる長月の在明之月夜みれどあかぬかも同十一に今夜の在開月夜ありつゝもきみをおきてはまつ人もなし　〇月のみやこ　源氏

須磨にみるほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月のみやこははるかなれども　新千載釋教後宇多院たづぬべきかたこそなけれむねの内の月のみやこにいつもすむ身は金槐集春ながむれば衣手かすむ久方の月の都の春のよの空秋部にも二首みゆ此外京都を月の都とよめる歌おほしそは天上の月宮にたとへしなり月宮は淮南子覽冥訓に羿請不死之藥於西王母恒娥竊以奔月宮云々今流布の二板本及唐本にも宮の字落たれば藝文類聚一天部北堂書鈔百五十天部二などその外類書どもに引用たるを校合して補べし詞林采葉抄六月桂の條に引るにも月宮とあり太平廣記廿二羅公遠が傳に開元中中秋夜時玄宗於宮中翫月公遠奏曰陛下莫要至月中看否取桂杖向空擲之化爲大橋其色如銀請玄宗同登約行十里精光奪目寒色侵人遂至大城闕公遠曰此月宮也見仙女數百皆素練寛衣舞於廣庭玄宗問曰此何曲也曰霓裳羽衣也玄宗密記其聲調遂回却顧其橋隨歩而滅且召伶官依其聲調作霓裳羽衣曲云々樂府詩集五十六には唐逸史を引て此事を記せり唐の柳宗元が

龍城錄にもみえたれどそは明の胡應麟が筆叢丁集四部正譌部に龍城錄宋王銍性之撰嫁名柳河東銍本意假重行其書耳今其書竟行而子厚受誣千載とありて實は宋王銍が僞作の書也また谷川士清が倭訓栞十六に天寶遺事に唐明皇遊月宮といひたれど流布本說郛本ともに今の天寶遺事にはみえずこは類書より轉引して本書をば押究めぬ誤也起世經十最勝品に諸比丘其月天子最大宮殿縱廣正等四十九由旬周匝上下七重垣墻七重欄楯七重鈴網復有七重多羅行樹而爲圍遶雜色可觀彼諸墻壁皆以金銀乃至碼碯七寶所成四面諸門各有樓櫓種々莊挍廣說如前日天子宮殿乃至衆鳥各々自鳴諸比丘其月宮殿純用天金銀天青瑠璃以爲間錯其二分銀淸淨無垢無諸滓穢其躰皎潔甚爲明曜彼之一分天青瑠璃亦復淸淨表裏映徹光明遠照諸比丘其月天子最勝宮殿有五種風所持而行何等爲五一持二住三順四攝五行以是五種因緣持故其月宮殿依空而行諸比丘其月宮殿復有無量諸天宮殿在前而行無量百千萬數諸天在前而行其行之時受於無量種々快樂彼諸天等皆有名字諸比丘其月天子大宮殿中更復別有青瑠璃輦其輦出高十六由旬廣八由旬其月天子及諸天女入於輦中以天種々五欲功德和合受樂歡娛悅豫隨意而行諸比丘其月天子依天數量壽五百歲子孫相承皆於彼治然其宮殿住於一劫諸比丘其月天子諸身分中光明出已即便照彼青瑠璃輦其輦光照月大宮殿月宮殿光照四大洲諸比丘其月天子有五百光向下照行有五百光傍照而行故名月天子光明也云々竹取物語抄に此起世經を引たるは略文也起世因本經十最勝品も同經異譯にておほかたおなじ立世阿毘曇論五日月行品俱舍論分別世品四法苑珠林七月宮部義楚六帖十七月部などにも月宮殿のことみゆ筆叢癸集雙樹幻鈔中に人鳥經曰日天子城郭縱廣五十一由旬月天子城郭縱廣五十由旬最大星縱廣一由旬最小星縱廣二百步とあれど人鳥經は藏經中には見えずさて天上の月宮を月の都とよめるも大江千里が句題和歌に月宮有路無思人てる月のみやこばかりはありといへどたづねてゆかんことぞしられぬといふを始としておほかり此句題和歌の歌夫木抄秋四に引るには都に道は云々かたぞし

られぬ云々に作り題も月宮有レ路無二内人一に作る契沖が考に内は由字の誤ならんといへりさも有べし竹取物語に此國の人にもあらず月のみやこの人なり云々月のみやこの人にて父母ありかた時のまとてかのくによりまかでこしかども云々狹衣活板本一上にねのかぎりふきたまへるはげに月のみやこの人もいかでかはおどろかざらんと覺ゆるに云云などもみゆ　○うき身はなれぬ　拾玉集一いつとなく心にすめる月のみやうきみはなれぬ友となるべき　○月の笠　字鏡日部に暈比乃加佐云々和名抄一に暈此間云日月加佐云々山家集上に雪とみてかげに櫻のみだるれば花のかさきる春のよの月萬三に久かたのあめゆく月をつなにさし我おほきみはきぬがさにせりと云るもよしあり　○たかしの山　新撰歌枕遠江部に高師山大略三河國に被レ入たり又遠江にと書る本もあり依て兩國に書入侍りぬ然れども遠江なるたかし山とよめるうへは兩國の山かとぞおぼゆる云々六帖二高市黒人あふことを遠江なるたかし山たかしやむねにもゆる思ひは名所方角抄遠江國分に高師山山南は海也中間原

也過れば湖見坂なり云々東海道名所記三に濱名の橋云々松山につゞきて高師山有云々東遊行嚢抄七に高師山湖見坂の左白須賀の北より橋本につゞきたる松山をいふ云々縣居集五東歸に高師は濱名郡にて白須賀と荒井との間大道より北なる山をいふ云々續古今旅政村たかし山夕こえくれてふもとなる濱名のはしを月にみるかな此外濱名橋本によみ合せし歌多し海道記に高師山にかゝりぬ云々山中に境川ありこれより遠江國にうつりぬ云々東關紀行に參河遠江の境に高師の山と聞ゆる有山中にこえかゝるほどに谷河のながれ落て岩瀬のなみことことしくきこゆ境川とぞいふ云々更級日記に三河の國高師の山といふ云々これらを考るに三河遠江にさしまたげる山なることうつなし庵主都の畧などにもみゆ和名抄六に參河國渥美郡高蘆多加之云云神名帳上に參河國渥美郡阿志神社とあるも此所なるべし參河國圖參河二葉松などに高足村あり三川雀二に高石村明神高石村白山みゆ東遊行嚢抄に高師原前後左右曠々たる松原也是を高師山と云名所と云人あれどもさにはあらず高師山は名寄にも

遠州に入て橋本の邊によめり此高師原は三州の内也云々高師村嶺野の里とは此所なるべし云々　○高師の濱　持統紀ノ三年に河内國大鳥郡高脚海云々神名帳ノ上に和泉國大鳥郡高石ノ神社云々萬一に大伴の高師能濱云々これらは和泉の國也持統紀に河内とあるは未和泉國を立られざりし以前なれば也すべてふるくは高石ノ濱は和泉にのみいひたるを三河に高師の濱といへるは更級日記の古印本を始とす歌枕玉叢抄拔書名所方角抄などにも三河國ノ高師濱を擧たり和泉なる高師濱のゆゑよしは楢山拾葉ノ三泉州志ノ二和泉志ノ二萬葉勝地篇ノ五ノ中などものにおほくみゆ　○袖ノ湊　筑前ノ御笠郡に有勅撰名所和歌抄出ノ湊部藻鹽草ノ五武藏野ノ三類字名所集ノ三松葉集ノ六などにも筑前の名所とす筑前續風土記三に袖湊博多に有往古唐船の入し湊也云々博多の東に入海あり夫より西の方那珂郡まで入海通りて有し袖の湊といへり此入海北より南東より西へ打めぐりて袖のかたちのごとくなれば名付しにや今は博多の入足寺と本岳寺の方より片原町といふ所の港橋まで東西に溝通れり今是を大水道と云是袖の湊の殘れる也港橋といふも袖の湊の殘れる溝にかけし故也云々歌によめるは伊勢物語におもほえず袖のみなとのさわぐかなもろこし舟のよりしばかりにと有を始とす此歌の袖の湊を袖に湊と書る本はひがごと也續後撰ノ戀二式子内親王かげなれてやどる月かな人しれず夜な〳〵さわぐ袖のみなとに千五百番歌合ノ戀二三宮うとかりしもろこし舟もよるばかり袖のみなとをあらふ白波續古今冬定家卿同戀二醍醐入道女續拾遺ノ戀一後嵯峨院新拾遺ノ戀二爲定夫木雑七有家などその外伊物の歌を本歌にてよめる歌みな名所の袖の湊にしたれば袖に湊とある本は誤也千五百番歌合顯昭が判の詞に伊勢物語におもほえず袖のみなとのさわぐかなもろこし舟もよせつばかりにと侍歌の上下の句を取ちがへられて侍歟と書るをもおもふべしさるを縣居翁の伊勢物語古意ノ二に袖爾浪渡と書るがよろしくて今本に袖になと、あるは誤れりそをだにあるを又袖の湊とも轉じて筑紫の一つの名所とするは甚しきこと也といはれたれどかへりて甚しきひがごと也袖の湊を筑紫の名所とせざればもろこし舟のよせよしなく

て歌の心深からぬをや　〇白き洲崎に黑き鳥のむれゐたる　土佐日記にくろきとりのもとにしろき浪をよす云々山家集下にからすざきのはまのこいしとおもふかなしろもまじらぬすがしまの黑夫木雜五にあはせばぬ鷺とからすと碁を擣ばたえじすがしま黑白の濱　〇しまつ鳥　古事記神武の段に志麻津登理宇加比賀登母云々萬十七に之麻都等里鵜養我登母波云々津は助辭にて島津鳥鵜とつゞけし枕詞なれど今はやがて鵜の事に云り　〇すごく　字鏡集二ン部に淒スヾシスゴシサムシ云々和玉篇中ン部に淒スゴシサムシキヨシ云々源氏帚木にいはんかたなくすごきとの葉云々又えんにもすごくもみゆる云々此外多し新古今雜下和泉式部秋風はすごく吹とも云々風雅秋上守子內親王殘るもすごきむらすゝき云々壬二集中にすごくやおのれ月をみる云々山家集下にすごくきこゆる山鴿の聲云々身にしみておそろしきをすごしといへりすごしはすゞしと同じくてすゞしさの過て身もひゆるさまなり　〇濱名の橋　和名抄五に遠江郡名濱名波萬奈云々延喜民部式上に遠江國濱名郡云々同兵部式に遠江國傳馬濱名五疋云々三代實錄四十六ニ元慶八年九月朔戊午遠江國濱名橋長五十六丈廣一丈三尺高一丈六尺貞觀四年修造歷二十餘年旣以破壞勅給被ニ國正稅一萬二千六百卌束ニ改造焉云重之集に實方の君のもとにみちの國に下るにいつしか濱名のはしわたらむとおもふにはやく橋はやけにければ水の上のはまなの橋もやけにけりうちけつ浪やよりこざりけん云々更級日記に濱名のはしくだりし時は黑木をわたしたりし此たびは跡だにみえねば舟にてわたる入江にわたせし橋也外の海はことにいみじうあら〱しく浪高くて入江のいたづらなる洲どもにことものもなく松原のしげれる中より浪のよせかへるもいろ〱の玉のやうにみえまことに松の末より浪はこゆるやうにみえていみじくおもしろしそれよりかみはゐのはなといふ坂のえもいはずわびしきをのぼりぬれば三河の國の高師の山といふ云々東關紀行にみづうみに渡せる橋をはまなと名づく云々宗長手記下に濱名橋ひとゝせの高汐よりあら海おそろしき渡りす云々名所方角抄遠江國分に濱名橋水海より北の山ぎは也

橋本より三里餘北也云々東遊行嚢抄ノ七に濱名橋橋本の里を出て右の方に昔の橋の迹と里俗の教る所あり云々明應以前の紀行を考るに都より東に下る者は橋本を過濱名の橋を渡り東より上る人は濱名の橋を過て橋本に到る然れば名所方角抄の趣不審云々縣居集ノ五ノ西歸に濱名の橋は今の新居のわたりの所也今もはし本の里有されど今のわたりの所よりは南によりていと海のきはなるべし云々又云應永三年八月十日波高くして橋かけたりしほとり打やぶられ永正七年八月二十日なゐふりて松原をふりくづしければ湖大海ひとつになりぬそれより所のもの今ぎれのわたりとよびきたれるよし老たるものゝ物語に殘れり云々日本釋名上に明應八年六月十日洪水の變ありて湖と海との間きれて湖入て水海はなくなる故に今切といふ濱名の橋は湖より落る川にかゝりし橋也故に今は跡もなし云々丙辰紀行狀桑拾葉集ノ廿八光廣卿吾妻の道記東海道名所記ノ三などにも今切のことあれど年月を記さずさて濱名橋の事枕草子ノ春曙抄ノ三同十二增基法師が庵主などものにみえたるは擧盡しがたし歌によめるは

拾遺ノ別に兼盛しほみてかほどに行かふたび人や濱名のはしと名づけそめけむ是始也　○浪のかけこす袖にみなれて　浪の石ノ上にかゝりこすをわが袖によせたりわが袖は涙の波の常にかけ越せばそれに水なれて洲崎の石も他ならずおもはるゝよし也みなれは目にみなるゝとにも水になるゝとにもいへり古今ノ戀ノ五兼輔よそにのみきかましものをおとは川わたるとなしにみなれそめけん拾遺ノ戀ノ一大井河くたすいかだのみなれざをみなれぬ人も戀しかりけり空穗ノ祭の使に底ふかき淵を渡るはみなれざをながき心も人やつぐらん　○引馬の宿　遠江ノ敷智郡に有萬一大寶二年太上天皇幸ニ于參河國ニ時長ノ忌寸奧麿引馬野ににほふ榛原入亂衣にほはせたびのしるしに縣居集ノ五ノ東歸に鹿玉郡はたゝ村の西なる坂をのぼれば三方が原也西東は三里ばかり北南は一里あまりぞある此南に崖がけといふ有さて此野を引馬野といふに疑なきにはあらず萬葉集に天皇三河國にいでます時とて引馬野ににほふ萩原入みだり云々と有さらば三河にてそといふべきを阿佛尼のこよひは引馬の宿にやどる此所すべての

名は濱松と書き関東紀行富士紀行また吾妻鏡に建長四年宗尊親王のくだらせ給ふにも引馬の宿にやどり給ふことみえてむかしは疑なかりしなるべし今濱松の北に京へのぼる道を引馬坂ともいひきたれりおもふに此野の東南はやがて三河に近ければ此行幸の官人の隣國にいたれることと有てよめるなるべし云々曳駒拾遺上引馬坂の條にも此よしいへり東遊行囊抄八に引馬野とも或は濱松とも古歌によめり一所ノ二名也或曰濱松庄引馬野也云々與清按に宗牧東國紀行尊海僧正吾妻道記宗長手記などにもみな遠江のよしにいへりさて此引馬の事物にみえしは擧ていふべからず　○はま松　和名抄六に遠江國敷智郡濱松波萬々都云々吾妻鏡二に濱松庄橋本邊云々海道紀に濱松の浦にきたりぬ云々波ははま松には風のうらうへに立とまれとや吹きしきるらん新撰歌枕三に長明浪の音を風のたよりにたぐへきて聲によするははまつのさと夫木雜五に慶融尚し山こえきてみればはま松の一すぢ遠き浦のいり海宗長手記平安紀行にもみゆ東遊行囊抄八曳駒拾遺上に委　○みし人なみに　浪に無とよせたり古今俳諧に枕よりあとより戀のせめくればせんかたなみぞとこ中にをるこれらの類浪に無とよせし古歌おほかり今はみし人もなければ浪に背をとふと也　○むまご　靈異記中に息子萬古云々和名抄二に孫無萬古云々于と無とはつねにかよふ例なれど草假名になだらかに書んには無に從べしこれ延喜天曆の比のてふりなる事は已に樂章類語抄の附言にいへるがごとし　○あひしらふ　遊仙窟に會語應答などの字をあへしらひとよめり節用集阿部に應答アヘシラフ云々運歩色葉集阿部に相白アヒシラフ會釋また應答も同源氏桐壺にともかくもあへしらひきこえたまはず云々帚木に心に入てあへしらひ居給へり云々續世繼かしこきみち〳〵につくろふへきやうなどいひつゝあへしらひやりける云々夜の鶴にくちとくあひしらふ云々三國傳記三に情無くあひしらはんもひとの恨おひてはよしなかるべし云々あへもあひも通音にて逢といふ詞なりしらひはいひしらひ　ひこづらひ　いひつらひ　かかづらひ　あげつらひ　つきしらひなどの　しらひ　つらひもおなじく通はしてはしらふともし

らへともいへり、

（補注）松のひゞき　は松風のひゞきなり　○そての湊の浪　は涙の袖に絶えぬを云へり　○白きすさき云々　は白と黒と文をあやなしたりすさきは海中へ突出したる所をいふ　○う　は烏に似て觜長く先まがれり　○よそならず　は他人ではなしと云ふ意それはわれも波こす岩の如く涙のために袖をぬらし居ればとなり　○見なれて　は見馴れてに水馴をかけていへるなり　○したしといひしばかりの人々　は舊友なりそれは前文にこの山まではむかし見し心地するにとあるに同じく父に誘はれて遠江まで下りたりし時の友人なるべし

廿三日。てんりうのわたりといふふねにのるに。西行がむかしもおもひ出られていと心ぼそし。くみあはせたる舟たゞひとつにて。おほくの人のゆきゝにさしかへるひまもなし。

水のあわのうき世に渡るほどをみよ早瀬の小舟竿もやすめず。」こよひはとほつあふみ（金作とほつあふみの、夫木雜十三作とほた）み、みつけのこふ（諸本作みつけの、今据群本）といふ所にとゞまる。里あれて物おそろし。かたはらに（夫木雜十三かたはらに五字无）水の井（扶作江）あり。

たれか來て見つけのさとゝ聞からにいとゞ旅寢のそら（諸本作そへ、据扶桑拾葉本、及夫木雜十三）おそろしき。」廿四日。ひるになりてさやの中山こゆ。ことのまゝ（原、金、岡、共作中山こゆとのまつ、伊作中山こゆとのまゝ、群作中山こゆることのまゝ、今据扶桑拾葉及夫木）とかやいふやしろのほど。もみぢ（諸本作も道、今据夫木及群本）いとさかりに（諸本さかりに四字无、今据群本）おもしろし。山かげにてあらしもおよばぬなめり。ふかく入まゝにをちこちの峰つゞき。こと山（伊山字无）に似ず。心ぼそくあはれなり。麓の里に菊川といふ所にとゞまる。

こえくらすふもとの里の夕やみに松風おくるさやの中山。（夫木雜二）（諸本作さよ、今据群本及夫木）」あかつきおきて（伊作おきいて）みれば月も出にけり。

雲かゝるさやの中山こえぬとはみやこに告よ有明の月。河おとゝいとすごし。

將渡　豈思量乎　在　而已
わたらんと思ひやかけし東路にありとばかりはきく河の水。」

○天龍のわたり　遠江國圖に長下郡天龍寺村有江戸砂子四ノ下に護本山天龍寺もと遠州天龍川の邊にあり江府へうつりて牛込淨るり坂下の邊にありかの所を元天龍寺前といふなりそのゝちまた四谷へうつるとみえたればこの天龍寺より河の名に呼しなりいにしへは麁玉河とも天の中川ともいへり麁玉河といふはこの河いにしへ麁玉郡に隷たればなり天の中川とは安間てふ里の中を流るゝよしの名にや又は荒場の中川の義にてもあるべし麁玉川ともすれば水荒て河邊の地こと〳〵く荒場となりし例おほかれば也郡名の麁玉ももとは此河によりしにやそは田庭の里なりけんに川あれて後荒玉といへりとみゆ玉はタニハの略語にて田場のよしなること已に棟梁集にいへり武藏の玉川を日遣注畫替入滅章私案抄などには田波河とも多波川とも書たり續日本紀六に遠江國地震山崩壅麁玉河水爲之不流經數十日潰沒敷智長下石田三郡民家百七十餘區云々同二十三に遠江國荒玉河堤決三百餘丈云々とあるにも荒田場の義のうつなきをおもふべしさて天の中川といへるは海道記に天の中川をわたれば大河にて水面三町ばかりあれば舟にてわたる水はやく浪さかしくて竿もさしえねば大なるえぶりをもちてよこさまに水をかきてわたる云々西行物語中に遠江の國天の中川のわたりといふ所にてものゝふののりたりける船にびんせんをしけるに人おほくのりて船あやふくや有けんあの法師おりよおりよといひけれども渡のならひとおもひて聞いれぬさましてありけるに情なくむちをもて西行をうちけりちなどかしらより出てよにあへなくみえけれども西行すこしもうらみたるけしきなくして手をあはせふねよりおりにけり是をてみ供なりける入道なきかなしみければ西行つくつくとまもり都を出し時道のあひだにていかにもこゝろぐるしき事あるべしといひしはこれぞかしみにあらず若いにしへのこゝろをもつべくは髮をそりころもをそめてこそあらめ云々自今已後もかかることとあるべしたがひに心くるしかるべければ

なんぢは都へ歸れとて西行やがて東西へそわかれける云々などあり天龍川といひしは更級日記に天りうといふ川のつらにかりやつくり云々東關紀行に天龍と名づけたるわたりあり川ふかくながれはげしくみゆ云々吾妻鏡廿五に遠江國天龍河云々同卅二にも出盛衰記四十五に明ぬれば天龍河を渡り給云々增鏡新島守にふじ川天龍などえもいはずみなぎりさわぎて云々この外文覺草子太平記二同十四同廿梅花無盡藏二東國紀行宗長手記豆相記羅山文集六十一などものにみえたるは擧盡しがたし藻鹽草川部に天中川此川は諏訪の湖の末なり云々扶桑拾葉集廿八光廣卿あづまの道記に池田よりてんりうをわたる云々これは昔は天中のわたりといひしとみえたり云々水上は信濃すはの池といへり天龍寺といふありといふそれも天ちゆうじにやたづぬべし云々松葉集十一に名寄を引て長明天つ空中なる川の名のみしていつかはやすの渡りなりけん右記云天中河にいたりぬこれは信濃のすは海のすゑとなんいへるわたり舟をみれば掉もさしやらぬなるべしとなん云々東遊行囊抄八に天龍川或は

天中川共船渡の大河なり或時は二瀨となりて大天龍小天龍と號或時は一瀨共なり又或時は三瀨ともなる水底砂石を流して瀨常不定此川の水上は信州諏方の湖なり北より南に流て海に入所は懸塚貝塚など云湊なり此川の海に入所の沖を天龍灘といふ云々曳駒拾遺中に往昔は天龍川の水上庵島といふ所より二筋にわかれて流るゝに西を大天龍と云今の馬籠川也中比より水上堰留て小天龍川へ水をひとつにおとしける云々　○とほつあふみ　和名抄五に東海國遠江止保太阿不三云々國府在豐田郡行程上十五日下八日管十三田萬三千六百十一町三段三十五步正公各二十八萬束本稻五十八萬二千二百六十束雜稻三萬二千二百六十束云々舊事紀國造本紀に遠淡海國造志賀高穴穗朝以物部連祖伊香色雄命兒印岐美命定賜國造云々古事記上に天菩比命之子建比良鳥命遠江國造等之祖也云々萬十四に等保都安布美云々同二十に等保多保美云々柿本集上にとほたあふみ云々賀茂翁の語意考に遠江國はもと登保都阿波宇美といへるをその都阿を約れば多となる故に假字は登保多布美と書也和名抄に

止保太阿不三と有は阿の假字餘れり云々古事記傳七に和名抄に止保太阿不三と有は阿字衍也云々此國には古淵ありしをもて此名を負り近江國の京に近きに對へて遠とは云也云々笈埃隨筆十一に近江は都に近き江といふ心遠江は都に遠き江あるをもて國號とす然るに後土御門院明應八年六月十日或は九日ともいふ大地震洪水してその江湖潟て陸となり湖口切て入海となる今切の渡し是也云々日本釋名上亦同重編應仁記十には永正六年八月二十八日の事とす此外遠江の所見多　○見つけのこふ　圓光大師諱詞傳傳本四十五にみつけの國府と云所に逗留せられ云々甕替地理部に遠江國みつけの國府岩田郡なり天龍川に近し云々正廣日記にみつけのこふうちすぎさやの中山をこえ云々宗牧東國紀行にみつけのこふの傳馬云々年の內の明ぼのかすむ山端を見つけのこふに春はきにけり宗長手記下に見つけの國府堀越六郎亭云々又引馬に一夜みつけの國府ひるどほり云々玄旨法印東國陣道記に見つけのこふといふところにいたりてみるにおなじくもりにてみえず〻角もいさゝら雲にめをくばる

ふじをみつけのこうのいらねば云々紹巴富士見道記に天龍の渡る音夥し見付の里を過てより云々藻鹽草郷部に見付里遠江云々名所方角抄遠江國分に見付の府といふあり名所なれども常に不用之云々按に今遠江國見付の宿のみ磐田郡にてこれいにしへの國府の跡といへり和名抄に國府在豐田郡とあればもと豐田郡の內なりけんに隣郡なれば後磐田郡に隸しにや水の井は水たまれる井なり必しも深くほりたる井にはかぎらず梁塵愚按抄下催馬樂田中井戶の釋に田をつくらんため井といひて池をほりて水をためたる也その水を田にまかせいるゝを井戶といふ也云々反正紀に淡路の瑞井といふも見ゆ　○そらおそろしき　源氏帚木にそらおそろしくつゝまし云々同榊に世のわづらはしさのそらおそろしうおぼえ云々濱松中納言一にそらおそろしう我御ちぎりくちをしうおぼし云々又わが身のちぎりそらおそろしうおぼさるれば云々此外ものにおほくみえてなまおそろしといふ心也そらはうきたることにいへばなまなかの義にもうつしいへり今とりかへばや上におそろしうそらはづかしき

ともみゆ　○さやの中山　和名抄五に遠江國郡佐野云々延喜神名式上同民部式上拾芥抄下なども、におほくみゆ舊事紀天孫本紀に印岐美連公佐夜直祖云々續日本紀九に割遠江國佐益郡八郷始置山名郡云々袖中抄十にさやのなか山とは遠江の國にあり付此山て二の不審あり一には師仲卿云彼土民等さよの中山といへりその後俊成卿もさよとよめり然るに證本等皆さやと書り又遠江にさやと云郡あり又さやにみえにきといひおけるも末にさやの中山といはんずる料ときこえたり古歌のふるまひなり云々名所方角抄遠江國分に佐夜中山但さよの山共西の麓新坂と云東の麓には菊河といふ所有云々東遊行嚢抄九に小夜中山里俗西坂より菊川まで五十餘町を中山と云といへど猶金谷坂までも中山のうちなるべし云々この外さやの中山の說ものにおほくみえて擧るにわづらはしければはぶくては佐益郡の中にあれば佐益の中山といふがたしかなるをさよの長山などいふはいみじきひがことなり古今戀二友則あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人をおもひそめけん同大歌所歌甲斐がねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山古今六帖二東路のさやのなか山さやかにもみぬ人ゆゑに戀やわたらん同六にもみゆ病床慢筆に長山の義をむべなひたるはいかにぞや

○ことのまゝとかやいふ社　文德實錄二嘉祥三年七月丙戌遠江國任事神授從五位下云々任事は事任を轉倒して寫せるなり神名帳上に遠江國佐野郡己等乃麻知神社云々頭注に遠江佐野郡己等乃麻知大己貴命也云々一宮記に遠江佐野郡己等乃麻知神社號事任神猿田彥命云々枕草子社はといふ條にことのまゝの明神いとたのもしさのみ聞けんとやいはれたまふらんとおもふぞいとをかしき云々西行物語中にさやの中山ことのまゝの明神の御前に侍りて云々海道記に山口といふ今宿を過れば路は舊に依て通せり野原を跡にし里村をさきにして打かへ／＼過行ば事のまゝと申社に參詣す云々おもふことのまゝにかなへば杉たてる神のちかひのしるしとぞみん社のうしろに小川をわたれば佐夜中山にかゝる云々東關紀行にことのまゝと聞ゆる社おはしますその御前を過とていさゝかおもひつゞ

けられしゆふだすきかけてぞたのむ今おもふことのまゝなる神のしるしを云々松葉集十に名寄を引て長明入もこんわがねぎごとのまゝならばしばしちらすな木々のもみぢば右さやの中山の道の口なることのまゝといふ社にてよめるとなん云々夫木雜十六相摸神かけてたのみしかども東路のことのまゝにはあらずぞ有ける發心集八にさやの中山のふもとことのさきと申社の前に六十ばかりなるびは法師の小ぼうしひとりぐしたるがすぎゆく云々縣居集丘東歸にさやの中山云々下れば新坂の宿なりすくのはてなる社を今の世には八幡の社なりといふこは延喜式に佐夜郡己等乃麻知神社とあるなるべし云々東遊行囊抄九にくはし其外所見おほかれど舉つくすべからず與淸按に己等乃麻知ともことのまゝともことのさきともかよはしいへるにやまたは己等乃麻知は己等乃麻麻を寫誤れるにてもあるべし神名帳はこれならず誤おほかればなり後の書は此誤を襲たゞなれば用るにたらずさてことのまゝと云名義はことはくどにてくえところの略語也くえは土のくづるゝにいふ萬十四にかまくらのみこしの崎の伊波久叡乃とよめる久叡にまたじところをとゝのみ云は立處臥處なとの類古語おほかりまゝは壝なり土の心まゝに崩たる所をいへり下總勝鹿の眞間上野の大眞間下野の間間田などみな壝におこれる地名なり江戸麻生にまみあなと云所ありこれも壝穴の義なりまみといふ獸の名によれりといふ說はうけがたし乘穗錄初編下に三州吉田の邊に壝之上村ありまゝのうへとよむといへるもまた同この壝のことを武藏相摸にてはかけともはけともいふ相摸高座郡下溝村にはけといふ所有相摸川にのぞみたる壝なり下總常陸にてはぼけといへり下總相馬郡に赤ぼけ村ありぼけはがけの通音なるべしがけはかけくつるゝよしの名にて遠江の厓がけもさる心也 〇菊川といふ所 遠江國圖道路國郡分別記などを考に菊川の里は榛原郡に隷たり吾妻鏡二十五に遠江國菊川驛云々盛衰記四十五に小夜中山にかゝりぬ南は野山谷より峯に移る路雲を分て入心地して尾上の嵐も最冷まし菊川の宿打過て大井河を渡云々承久物語五に中御門中納言宗行卿は小山のさゝゑもん朝長ぐし奉りてくだ

りけるがとほたふみのくに菊川の宿につきたまふこゝをばなにといふ所ぞととひたまへばきく河と申とこたへければ中納言硯をこひよせやどのはしらにかきつけたまふ昔南陽縣菊水汲二下流一而延レ齡今東海道菊川宿二西岸一而失レ命云々海道記東關紀行太平記二などにもこのことみゆ爲家集下にかんなつきまだうつろはぬきくかはにさとをわかれず秋ぞのこれる夫木雜六同十三平安紀行篤海吾妻道記にも歌あり宗長手記下にさやの中山云々菊川といふも此山の中なり里あり云々名所方角抄遠江國分に菊川さやの中山の東の麓なり宿在之川は北より南へながれたりほそき川なり云々東海道名所記三に菊川は坂の下なり河上は菊が淵と名づく菊の花あり云々東遊行嚢抄九に菊川昔は此所驛宿なり云々入口小橋あり長四間東の出口に橋あり長十二間是菊川なり此川を以て宿の號とす此川上に大鹿村の下に菊が淵とて菊花多き所ありと云川下は郡中とて横須賀の方へ落るなり云々　○ありとはかりは　後拾遺雜一馬内侍ゆかばこそあはずもあらめはゝきゝのありとばかりはおとづれよかし

(補注)みつけは　見付に往來の人々を見張る意なり故におそろしとなり　○雲かゝる　は高き意を含む　○おもひやかけし　は思ひがけぬといふ意にてやは反語なり

二十五日。きく河をいでゝ。けふは大井河といふかはをわたる。水いとあせて。聞しにはたがひて（同作きゝしにはかはりて）わづらひなし。河原いくりとかやいとはるかなり（伊かなり、三字脱）。水のいでたらんおもかげおしはからる。

思ひ出る都のことはおほゐ河いくせの石の数も及ばし（新撰歌枕三　慶融阿闍梨）。

うつの山こゆるほどにしも。あざりの見しりたる山ぶしゆきあひたり。夢にも人になどむかしをわざとまねびたらんこゝちして（伊作まなび）。いとめづらかに。をかしくもあはれにもやさしくもおぼゆ（伊有る字）。いそぎ道なりといへば。文もあまたはえかゝず。たゞやむごとなきところ（原作やむごとなさところ）ひとつにぞおとづれきこゆる。（諸本ゝる字无、今据伊本）

わが心うつゝともなしうつの山夢にもとほきむか

し（金、伊、共作みやこ）こふとて。
つたかへでしぐれぬひまもうつの山泪に袖の色ぞこかる丶」こよひは手越といふ所にとゞまる。なにがしの僧正とかやの丶ぼり（扶、群、共作る、）たまふ（諸本此三字无、今按非本）とて。いと人しげし。やどかりかねたりつれど。さすがに人のなき宿もありけり。」

○大井河　仁徳紀六十二年に遠江國司表上言有テ大樹一自リ大井河一流レテ之停ル二河曲一云々靈異記中に駿河國與二遠江國一之界有レ河名曰二大井河一云々舊本今昔物語十二の十二話に駿河國ト遠江國ト堺一ノ河有り大井河と云ふ云々元亨釋書二十八に一沙門渡ル二大井河一水底有レ聲云々　更級日記に大ゐ河と云わたりあり水の世のつねならずすりこなどをこくしてながしたらんやうにしろき水はやくながれたり云々海道記に大井河をわたるこの川は河中にわたりおほく又水さかし流れをこえ島をへだて丶瀬瀬かたくにわかれたり云々東關紀行に大ゐ川を見渡したればはるぐとひろき河原の中に一すぢならずなかれわかれたる河瀬どもとかく入ちがひたるやうにてすながしといふものをしたるに似たり云々雅世卿富士紀行曾海吾妻道記宗長手記下東國紀行盛衰記四十五太平記二宴曲集門などにもみゆ名所方角抄遠江國分に大井河といふ大河北より流れたり末は海へ流入へし底は石などながれ水はにごりて瀬早く舟渡もなく難河なりかちにてわたるなりさよの中山のかたにかなやと云宿あり川の間一里あり河の西は遠江なり東岸は駿河嶋田といふ宿あり云々東遊行囊抄九に大堰川遠駿の堺なり川原の間凡廿餘町北より南へ流て大洋に入海に近し水上は甲信の山々より流出る水常に濁て水底に石を流す其はやきこと普通に超たり日夜瀬替りてつねに不レ定故に昔より船なし南風に水増し北風に水減ず東海道第一の難所なり水溢れ出る時は金谷より島田まで一里の間一面に川となる其時は往還止て金谷島田の兩驛に逗留する旅人多し常に川越と云者ありて交易の人を扶助し渡して價をとる云々藻鹽草山部に打渡すゆくせあまたの大井河みえてぞとほきはつくらの山　○水いとあせて水のかれて淺くなりしなり萬三に久方の天のさぐ

女がいは舟のはてし高津は淺にけるかも同六にしばらくもゆきてみてしが神南備の淵は淺而瀬にかなるらん　○うつの山　伊勢物語にゆき〳〵てするがのくにゝいたりぬうつの山にいたりてわがいらんとする道はいとくらうほそきにつたかへではしげり物ごゝろぼそくすゞろなるめをみることゝ思ふにすぎやうざあひたりかゝる道はいかでかいまするといふを見ればみし人なりけり京にその人の御もとにとて文かきてつく駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり云々舊本今昔廿四の三十五語に業平中將云々駿河國に至ぬうつの山と云山に入らんと爲るに我が入らむと爲る道は糸暗し心細き事无レ限り綺石鷄冠木繁て物哀れなり此くすゞろなるめを見ることと思ふ程に一人の修行の僧會たり此れを見れば京にて見知たる人なりけり僧業平を見て奇異に思て云く此る道をば何で御するぞと業平其に二居て京に其人の許に文を書て付くするがなるうつの山べの云々和名抄六に駿河國有度郡内屋宇都乃也云々駿河風土記に宇都乃谷并山華夷之往路較至レ此爲ニ其難一九折盤石而茂樹藏レ道云々海道記に岡部の里邑を過てはるかに行ば宇都の山にかゝる此山は山中に山ゝ愛するたくみのけづりなせる山なり云々東關紀行に宇都の山をこゆればつたかへではしげりてむかしの跡たえずかの業平かすぎやうざにことづてしけんほどはいづくなるらんとみゆく云々宗長手記上にうつの山に雨やどり此茶屋むかしよりの名物十だん子と云一杓子に十づゝかならずめらうなどにすくはせ興じて云々東遊行嚢抄十に宇津山坂下茶屋是より升る坂路急也此茶店の前右の谷を登るは古道左を登るは今道なり近き世迄古道を通ると云々駿河國志八に宇都山丸子と岡部の間にあり有渡郡なり云々此外宇都山の事所見おほくてわづらはしければあげず　○まねび　伊勢集に鶯のなく音をまねぶ山彦を友ありかほにもとめつるかな此歌夫木春二にもみゆ六帖二にはまねにとあり後撰夏に夏むしの身をたきすてゝ玉しあらばわれとまねばん人目もる身ぞ空穂俊蔭上にまねびつかうまつるいさみなし云々源氏帚木につくろひてまねび出す云々又うとき人にわざとうちまねばんや

は云々狹衣話本一上にあしう人のまねびためるにや云々榮花月宴にまねびやらんかたなし云々此外物語草子の類におほき詞なり通はしてまなぶといへり遊仙窟に人學ヒトノマナブ云々色葉字類抄末部に學マナブ云々疊爲亦同平他字類抄末部に學マナブ云々新韻集歴部に學マナブ云々節用集末部に學マナブ云々爲同源氏帚木にわざとならひまなばねども云々此外おほしまねぶを通音にまなぶともいふにてもとはまねといへる語に用語をそへしなりびはぶりの約にて眞似ぶりなるよし和訓栞末部にいへり神功紀五年に爲マネニシテ云々齊明紀三年に僞マネテ云々靈異記中に效萬爾云々源氏帚木にはかにまかでたまふまねして云々古今雜下詞書にかうちへいくまねにてせんざいの中にかくれて云々同俳諧にさかしらに夏は人まね云々行宗集になびくまねして云々などもみゆ俊頼口傳にはまねかたとも有　○やむごとなき所　與清按にやむごとなきといふ詞古今にはみえず伊勢物語にやんごとなき人の御つぼねより云々又やんごとなき女のもとに云々とあるを物にあらはれし始とす忠峰集長歌にあふみの海をみやりしにやんごとなみのたちしかば云々後撰春上詞書にやんごとなき事によりてまかりのぼり云々同戀二戀三羇旅にも同また同戀三にかくやんごとなき道なれば心にもあらずまかりぬる云々同雜二にやんごとなき人云々同嵯峨の院に空穗たゞこそにやんごとなき人云々同嵯峨の院に二所あり同樓上の上同同たゞこそにやんごとなき事云々同藏びらきの中にやんごとなき所云々同國ゆづりの上にやんごとなきものども云々住吉物語にやんごとなき人云々源氏桐壺にいとやんごとなきゝはにはあらぬが云々帚木にやんごとなきすぢなれど云々源氏には此外いとおほかりその外の書ともに出たるも擧つくすべからず小町集詞書にやんごとなき人とあればこの詞書は後のしわざなるべければ伊勢後撰の上には引がたしさて詞の意とは河海抄に無止事也又無停事也花鳥餘情にやむの二字をばやんとよむべきなどみえあまたの注釋どもも皆これによれり玉小櫛五になほざりにしがたき心よりいひてもだしがたしといふと同じくて無止事也高き人をいふにもなほざりにしがた

き心より出たる也といへるがよろしくきこゆ源注拾遺に蜻蛉日記のやむごと有といふ詞を引たれどそは中卷にやむこと有し二三四日も此心のほどぞかしとありてとゞまる事にいひしなれば引たがへなり新釋やたみ詞に惱事なきなりと注せしは用がたしと強てこの語意を解はよりごとなしの義ともいふべしよとやは通音なりりを音便にむといふはより所なきをコンドコロナキかにもりをカモンなどいふ例に同じさてよりごとなきは寄添事やすからぬにて及がたく捨おきがたきよし也やんごとなき人は品高くて及がたき人なりやんごとなき事は捨置がたき事なりやんごとなき道は捨おきがたくてせんかたなく行道なりやむごとなき所やむごとなきものやむごとなきゝはやむどなきすぢなども及がたきよしなりかく心得れば解がたきふしなし長能集詞書にやんごとなく侍るとあるはうつなくより事なくの義ときこゆ　○こがるゝ　火に焦るるといふより赤色過てこがれかへりたるにいへり拾遺連歌元輔春はもえ秋はこがるゝかまど山後拾遺秋下通俊いかなれば舟木の山の紅葉の秋は過れどこがれざるらん玉葉秋下隆源たきのうへの御舟の山の紅葉はこがるゝほどに成にけるかな壬二集中戀そめし露より袖もうす紅葉こがれにけりな時雨する頃山家集下紅にあらぬたもとのこきいろはこがれてものをおもふなみだかこの外所見おほかれどはぶく　○手越といふ所　駿河風土記鷹河郡部に手越公穀三百七十束三字田假粟百八十九二字田云々手越浦貢ニ食鹽鮮魚□右等ニ云々東遊行囊抄十一に手越阿部川の西山際ノ在所なり長き村也昔は此所驛宿なり云々駿河國志八に手越阿部川渡場の向なり右の驛路にて丸子の東安部川の西邊也云々吾妻鏡一に手越驛云々海道記に宇津の山こえ手越の宿にとまりて云々此外平家物語盛衰記承久物語太平記宴曲集などよりして物にみえたるはかぞへつくしがたし夫木雜八に九條内大臣こぐ舟は苫もはらはでまかぢとる手ごしの崎を出るしらなみ此歌流布本には手でしの崎を出るしら雲と有古寫本と松葉集十に引たるによりて正すべし雅世卿富士紀行におほけなくよその袖までひかばやとみゆる手ごしの里のうかれめ道滋平安紀行に鶯の鳴

し垣ねをすぎやらでこしのたび人しばしやすらふ
堯孝覽富士記にたび人の手ごし河原をのる駒もの
しなみはやしいぞく朝立　○なにがしの僧正　與
清按になにがしはもとその名明らかにしられぬ他
人をいふよりうつりては自己の事にもいへるなり
おのれといふも自己の稱なれどうつりては人をも
しかいふがごとし宣長が玉小櫛五にすべてみづか
らの事を人にむかひてかくなにがしといへるはそ
の時實になにがしといひしよしにはあらず古へは名
をいへることとなるにこれは作り物語にて惟光良清
などをおきて外はすべて人々の名をば作らずして
名をいふべき所をなにがしと書るなりなにがしの
院なにがし寺なにがし僧都などいへるたぐひもそ
の名をいふべきをかくいへり空穗の物語などはつ
くり物語ながらみな人の名をも作れる故に人にむ
かひていふ所にもみな名をいへるぞかしといひし
は偏見なり空穗俊蔭下に日もかたぶけばなにがし
ゐてもきこえんとみえて自他の稱に用し詞なりお
ほかたは名の、られたるをもなにがしの院なにが
し寺なにがし僧都などいふは物語書の女しくなだ

らかなる詞つきなりその世にも女はさだかにその
名をさしてさかしだちいはんより何とやらいふ人
何とやらいふ所などいふがやさしげにきこゆるを
もおもふべし源氏帚木になにがしがおよぶへきほ
とならねば云々又なにがしがいやしきいさめにて
云々などあるも俊蔭のも自己にいへるなり夕貌に
なにがしくれがしとかぞへしは云々又なにがしの
おとゝ云々若紫になにがしの僧都云々松風に何が
しのあそん云々夕霧亦同寄生に何がしのみこ云々
右京大夫集に何がしの宰相中將云々などみえしは
他人をさせる也夕貌に何がしの院云々若紫になに
がし寺といふ所云々又なにがしの嶽云々藤裏葉に
何がしのをしへ云々總角になにがしの念佛云々こ
れらもみな他の事に云りし也此外所見おほかれど
例のはぶきつ」僧正は推古紀卅二年に夏四月云々
戊午詔曰夫道人尚犯法何以誨俗人故自今以後
任僧正僧都仍應撿按僧尼壬戌以觀勒僧爲
僧正以鞍部德積爲僧都即日以阿曇連爲法
頭云々色葉字類抄四愚管抄一元亨釋書廿濫觴抄
上二中歷四などにも此よしみゆ釋氏要覽稱謂部に

僧正史云正者政也自正正レ人克敷二政令一故蓋以僧比丘無レ法若三馬無二轡勒一漸染二俗風一將乖二雅則一故擇下有二徳望者上以二法令一歸二乎正一故云二僧正一此以二僞秦僧䂮一爲レ始也至二梁普通六年一勅二法雲一爲二大僧正一云々

(補注)きゝしにしたがひて云々　は兼て大井川は大川にて渡るに困難なりときゝしが今日は水が淺くて何の煩ひもなしとなり　○河原いくり　直文云こはこの邊にかはら二里かはら三里などいへるによりてかけるなるべしさてかく廣きかはらなれば水の出てたらんときの面影推しはからるとなり　○みやこのことは　大井川は都に事につきて思ひ出つることはかれこれと多しといふ意を大井川にかけていへるなり　○わが心うつゝともなし　山本信哉云この歌の返しは下卷東にて住む所は云々の段に出でたり

廿六日。はらしな河とかやわたりて。息津の濱にうちいづ。(伊作っち出つ)なく／＼出しあとの月かげなどまづおもひ出らる、」ひる立いりたる所に。あやしき黄楊の小枕(諸本作こまくら、今据金本、)あり。いとくるしければうちふしたるに。硯もみゆれば。まくらのしやうじにふしながら書つけつ。

なほざりにみるめばかりをかり枕むすび置つと人にかたるな。」くれかゝるほど(伊有に字様)清見が關をすぐ。岩こす浪のしろききぬを打きするやうにみゆるいとをかし。

清見潟年ふる岩にとゝはん浪のぬれ衣いくかさねきつ。ほどなく暮て。そのわたりの海(伊作浦)ちかきさとにとゞまりぬ。浦人のしわざにや。となりよりくゆりかゝる煙いとむつかしきにほひなれば。よるのやどなまぐさしといひける人のことばも思ひ出らる。よもすがら風いとあれて。浪たゞ枕の上に(伊作枕に二字)たちさわぐ。

ならはずよゝそにきゝこし清見潟荒磯なみのかゝるねざめは。(群イ作かゝるまくらは)

○わらしな川　駿河風土記駿河郡部に藁科川。

出自滋輪津河落海鮮魚怪石等國造取鵜師之貢云々東遊行嚢抄十一に藁科川藁科谷は大郷にて煎茶多く出す所也云々駿河國志八に川上は同國松尾村より出て十里流れ下る所々の小川ども落合て山崎にて安倍川と一になる云々吾妻鏡九に駿河國藁科河邊云々菟玖波集俳諧に手ごしよりわらしな河をわたる人云々　○おきつの濱　駿河國志六に奥津驛は府の東四里云々東遊行嚢抄十二に澳津自江尻到于此一里二町云々和名抄六に駿河國廬原郡息津於木都云々延喜兵部式に駿河國驛馬小川横田息津原長倉各十匹云々吾妻鏡一に奥津之邊云々惣國風土記に蘆河伊穗原郡興津或奥津或沖津驛云々藻鹽草五に奥津川駿河云々海道記平安紀行東關紀行東路纂宗長手記紹巴富士見記歌枕名寄などにみえ永久次郎百首よりして歌によめるもおほし　○なく〳〵出し　新古今羇旅定家こととへよおもひおきつのはまちどりなく〳〵出しあとの月かげ　○つげの小枕　萬十一に夕されば床のべさらぬ黄楊枕いつしかなれがぬしまちがたき小枕は古萬久良と訓べし乎末久良といひしもあれど

萬二同十一などに木枕と書き和名抄十四に陸詞切韻に云枕承頭木也和名萬久良などあるによるべし法然上人行狀畫圖四に慈眼房腹立して木枕をもてうたれければともみゆ　○まくらのしやうじ　臥たる枕の方の障子なり神代紀上に頭邊此云摩苦羅陛脚邊此云阿度陛云々古今俳諧に枕よりあとより戀のせめくればせんかたなみぞとこなかにをるしやうじは和名抄十四に漢語抄云障子屏風之屬也云々與清按に屏風は今の世も同製也障子は今俗の衝立のさまの物をいふ榮花玉の臺に四方に立まはして上にもおほひし事あるをおもふべし寄障子通障子鳥居障子衝立障子副障子絹障子布障子紙障子唐紙障子明障子中障子小障子年中行事障子などみなおなじ賢聖障子荒海障子昆明池障子馬形障子などは繪によれる名也今世の敷居に立る明障子は隆能が春日靈驗記光信が法然上人行狀畫圖福富草子信實が小柴垣梅田相保が西行物語繪光茂が證空阿闍梨繪詞圓伊が一遍聖繪窪田統泰が日蓮注讃または梅津かもん繪詞などにみえて腰を板にせしもあり襖にせしも有又腰なきもありさま〳〵

なりこは正殿寢殿やうのきとしたる殿にはなしいやしき草庵などに用ひしものとみゆ舊本今昔十五の第十五語同二十の第九語などには障紙と書たり又杉障子もふるく有て歌にもよめり　○なほさり朗詠集注五に等閑ナホサリ云々注に尋常なる心云々遊仙窟抄五に平生ナホサリ云々與淸按になほは尙猶などの義にあらず直まに默などの意なり續紀二十二に默在不止云々同二十八に默在去止不得之天云々とみえ同十に猶在倍岐云々同十七に猶止事不得爲天云々などある猶も默　借たるなり萬七に默然不有跡と書るを河海抄花宴の卷にナホアラジとよみ伊物にみやづかへの始めにたゞになほやはあるべきなどあるなほもみな默の義にていたづらにたゞあるさまなりさりは去往の意にて時のうつり去る事なり何わざするともなくいたづらに時日の移去をなほざりとはいへるなりこゝのなほざりもいたづらの義なり　○みるめばかりをかり枕見目に水松藻をよせ刈に借枕をよせ置つといふ詞に里の名の息津をよせたり和名抄十七に崔禹錫食經云水松狀如レ松而無レ葉和名美流楊氏漢語抄云海松和名上同俗用レ之云々歌意はいたづらにみるめばかりの假枕なればわがむすび置しと人にかたるなと枕にいひかけしなり枕にむすぶといふは草枕を結ぶに出て稻枕むすぶ葦枕むすぶなどもよみたり　○人にかたるな　古今秋上遍照名にめでゝをれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

○淸見が關　類字名所集幾部に淸見關滷駿河廬原郡云々駿河風土記鳥渡部の條に廣野姫天皇四年庚寅春前以二淸見關一爲レ限後以二藍染川一爲レ限云々朝野群載二十二天曆十年六月二十一日駿河國司解に國內帶二淸見橫走兩關一云々更科日記に淸見が關はかたつかたは海なるに關屋どもあまた有て海まで釘貫したり云々又云こゝらの國々を過ぬるに駿河の淸見が關と相坂の關ばかりはなかりけり云々盛衰記二十三に淸見關にやどりけり此關の有樣右を望めば海水廣く湛て眼雲の浪に迷ひ左を顧れば長山聳連りて耳松風に冷まし身をそばめてゆき足を峙て步む釣する海人の通夜浪に消ざる篝火世渡る人の習とて浮ぬ沈ぬ漕けるを軍監淸原滋藤と云者副將軍民部卿忠文に伴なひて下りけるが此形勢

を見て漁舟火影冷燒レ波驛路鈴聲夜過レ山と云唐歌を詠じければ折から優に聞えつゝ皆人涙を流しけり云々東遊行囊抄十一に清見關路より左山の出崎巖のある所に古跡あり云々駿河國志六にもみゆ萬三に田口益人いほ原の清見之崎乃見穗乃浦ゆたにみえつゝ物念もなし六帖三に浪のたつ清見が崎にゐる千鳥たれみよとてか跡のさやけき兼盛集によこばしりきよみが關の通路にいづといふことはながくとゞめつ此外所見おほくて擧つくしがたし

○ぬれぎぬ　新萬下にをみなべし秋なる名をや立ぬらんおくしら露を潤衣にきて古今離別にかきくらしことはふらなん春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめん伊物に名にしおはゞあだにぞあるべきたはれじま浪のぬれ衣きるといふなり此外後撰六帖より已下のうた擧つくしがたし大和物語にはぬれごろもともよめり空穗藏開中にあやしきぬれぎぬなりやことすぢにこそみゆめりしか云々源氏紅葉賀ににくからぬ人ゆゑはぬれきぬをだにきまほしがるたぐひもあればにや云々奥義抄下に雨いたくふりてとゞまりなば物へいきつることはそらごとになりなんずればぬれぎぬきせてとはよめりさて雨にぬれ衣ともそへたるなり云々古今題注にぬれ衣きせてとは數長云そらごとをいふ者をとゞめんとして雨のふるにならへりそなどいふは本のことにはあらで雨をかこちてとゞむまことにはしばしもこの人をやらじとなり云々八雲御抄三下にぬれ衣ハなき名也云々藻鹽草衣部同色葉集上三にぬれ衣ハ無實也云々色葉和難集二になき名たつをばぬれぎぬきるといふ也云々後撰正義戀五にぬれ衣といふ事本說ありむかしよき娘持たる人これをかしづきて后にもなどおもひけるにいくほどなくて母なん身まかりにける後の母是をめざましきことに思ひてさま〴〵あしきことを父にかたりけれども父もちひずなほやすからずとおもひてすこしも海の近ければ海士人かたらひて塩たれ衣をとりてかの女がねたるかたはらにかくし置て父をいざなひて口比申せしことそらごとならずあれはいかにとてかのしほたれぬれたる衣をみせたり父まことゝおもひて女をうしなひにけり是よりしてなき名おへるをばぬれぎぬきるといふ周の伯奇が罪をうけし類な

らん云々續萬葉論ノ八にぬれぎぬはいつはりの事にいふなり云々いつはりの事を詞の縁にて或は淚或は波又は雨などにいひかけたるに貫之ノ歌は只よせなくてもよめるにてしるべし云々和訓栞二十一に日本紀に濡をかづくとよみ今もなき名をおほするをかづけるといへりされはかづく海人は皆ぬれぎぬきたれば汚名を被ぶるなどいふ意に海人のかづきによせてぬれ衣とはいひそめたる成べし云々

○くゆりかゝる煙　後撰ノ戀四貫之ノ風をいたみくゆる煙の立いでゝ猶こりずまの浦ぞ戀しき拾遺ノ雜下長歌にかやり火のくゆる心もつきぬべく云々源氏ノ帚木にいみじくにほひみちてかほにもくゆりかゝることゝちするにおもひよりぬ云々大和物語下歌にたきものゝくゆる心は有しかど云々此外所見おほし和訓栞ノ八にくゆる燒物蚊遣火などのふすぶる事をいへり云々薫をはたらかしたるなるべし云々按にくのゑかうなども音を用ひし詞なればくんじかゝるをくゆりともいへるなるべし　○むつかし

　欽明紀に憤ムツカリ云々敏達紀に憤ムツカル、云々土佐日記に船のむつかしきにふねより人の家にうつる云々容穗ノ後蔭ノ下にいみじうむつかりておはしまし云々又ゆるさずせめたりつればこそむつかりながらひきつれ云々源氏ノ帚木に父のとしおい物むつかしげにふとりすぎ云々又專心なしとむつかりておろしつれば云々若紫にむつかしき日の本云々住吉物語にあなむつかしこはなにごとぞ云云又むつかりながら北のかたをしつらひ云々大和物語ノ上にむつかりて親はらからのいふ事もきかで云々又いとむつかしう心もとなく侍れば云々蜻蛉日記ノ中に何をおもはましとおもひむつかるほどに云々又大津のいと物ノむつかしきやども云々此外所見あまたなり散木集ノ二に雲はれぬ五月きぬらしたま衣むつかしきまで雨じめりけり又かやり火の煙になるゝこもすだれ物むつかしきわが心かな同三に秋きては風ひやかなるくれもあるをあつれしめらひむつかしの世や吳竹集ノ五にむつかるとははらたつるをいふ云々和訓栞ノ平部に憤より轉じたる詞なりわづらはしき心にいへり源氏にむつかしげなる大路のさま又小家がちにむつかしきわたり大和物語にさうぞくきよげにしむつかしき事なども

なくてとみえたり俗にむさしと云にかよへり云々

○夜のやどなまくさしといひける人のことば　白氏文集三縛戎人に朝喰飢渴費杯盤夜宿腥臊汚牀席云々唐書百十九武李賈白列傳に白居易字樂天其先蓋太原人云々居易敏悟絶人工文章云々貞元中擢進士拔萃皆中補校書郎元和元年對制策乙等調盩厔尉爲集賢校理月中召入翰林爲學士遷左拾遺云々會昌初以刑部尚書致仕六年卒年七十五贈尚書右僕射宣宗以詩弔之云々東都所居履道里疏沼種樹構石樓香山鑿八節灘自號醉吟先生爲之傳暮節惑浮屠道尤甚至經月不食葷稱香山居士嘗與胡杲吉旼鄭據劉眞盧眞張渾狄兼謨盧貞燕集皆高年不事者人慕之繪爲九老圖居易於文章精切然最工詩云々

○ならはずよ　かゝる荒磯のねざめにはなれぬよし也浪いかゝるに斯有とよせたり壬二集下にねざめしてきかぬを聞てかなしきはあらいそなみのあかつきの夢

富士のやまを見れば煙もたゝず。むかし父の朝臣にさそはれて。いかになるみの浦なればなどよみしころとほつあふみいりひごにはみしかば。富士のけぶりのすゑもあさゆふたしかにみえしものを。いつの年よりかたえし。とゝへば。さだかにこたふる人だになし。

たが方になびきはてゝか富士のねの煙の末のみえずなるらん。古今の序のことばまでおもひ出られて。

いつの世のふもとの塵かふじの嶺を雪さへ高き山となしけん。

朽はてしながらのはしをつくらばや富士の煙もたゝずなりなば。今宵はなみのうへといふ所にやどりて。あれたるおとさらに日もあはず。

○ふじの山をみればけぶりもたゝず　古今序にふじのやまも煙たゝずながらの橋もつくるなり云々萬三にふじのたかねは天雲もいゆきはゞかりとぶ鳥もとびものぼらずもゆる火を雪もてけちふる雪を火もてけちつゝ云々日本紀略延暦十九年六月の

條に駿河國言自ニ去三月十四日一迄ニ四月十八日一富士山巓自燒其則烟氣暗瞑夜則火光照レ天其聲若レ雷灰下如レ雨山下川水皆紅色也云々三代實錄九の卷同十一の卷更科日記などにもみゆくはしくは已に著せし國鎭記にいひたればはぶく　○父の朝臣にさそはれていかになるみの浦なればなどよみし比續古今羇旅におもふこと侍けるころ父平度繁朝臣ととほたうみの國にまかりけるにこゝろならずともなひてなるみの浦をすぐとてよみ侍けるさてもわれいかになるみの浦なればおもふかたにはとほざかるらん云々うたゝねの記に後の親とたのめる人遠江よりのぼりたるかへさにいざなはれてくだりしよしみゆ父の朝臣は平度繁にて四條が後の親なり作者部類庶女部に前但馬守平度繁とあり系圖には徐五將軍維茂八代の孫にて從五位下佐渡守度繁とみゆ　○さだかに　履中紀に不欺サダカ云云又サダケキ云々續紀九宣命に佐太加爾牟俱佐加爾無ニ過事一云々此外宣詔におほくみゆ禮記曲禮上に安定シヅカニサタカニ云々新葛下にしらゆきのふりてこほれる冬なればこゝろ貞丹とけずまるかな與

清按にさだは躰語にてさだかにともさだめともさだすぎてともはたらかしいへりさだは定貞などの字義にて靜の通音也神代紀下に坐定をヰシヅマルとよめるにても知べし萬十一に人間もりあし垣ごしにわぎもこをあひみしからにことぞさだおほき又おきつなみへなみの來よる左太の浦のこのさだすぎて後こひんかもこれらのさだは人のいひ定むるうはさ言也源氏若紫にさだすぎたる御めどもにはめもあやにこのましうみゆ云々又さだすぎたまへる人にそひたまへるより云々枕草子春曙抄四にさだすぎふる〳〵しき人々云々これらは齡かたぶきたるにいへり源氏末摘花に御手はさすがにもじつよう中さだのすぢにてかみしもひとしくかいたまへり云々こはいとよろしからぬ中ごろの手のよしなり此外物語書にいとおほかり河海抄紅葉賀にさだは央の字なり央をばなかばとよむなり百年の半といふ心歟五十餘ばかりの事歟又貞年といふべし云々細流抄ノ若紫にさだは央の字なり齡の半過たるなり云々孟津抄ノ若紫に比すぐる事なり云々岷江入楚若紫にさだは比なり中さだも中比たりさ

だ過は比過たるなり云々源注拾遺若紫に此物語に中さだのすぢなどあるは中比なり年のさだすぎたるとはよきころほひを過る心なり央の字はかなひてもみえぬ字なり云々源氏新釋若紫にさだすぎたる定なり人のなりさだまりたる三十の年比なりそれ過るはさだ過るなり凡公のさだの庭などいふも事を定むる所をいへり後世沙汰の字を用るは誤れり萬葉に此さだ過てといふは此いひさわがるゝ事の定り過てこそあはめといふなり云々紅葉賀にもいへり荒木田久老が肥前風土記標注に志太者時節也萬葉十四阿抱思太毛安波乃敝思太毛云々於毛可多能和須禮牟之太波云々猶有物語詞云左太過人蓋左太者志太之轉語乎云々　○ふもとの塵　古今序にとほき所も出たつあしもとよりはじまりて年月をわたり高き山もふもとのちりひぢよりなりて天雲たなびくまでおひのぼれるごとく云々莊子則陽篇に丘山積卑而爲高江河合水而爲大云々荀子勸學篇に積土成山風雨興焉積水成淵蛟龍生焉云々同脩身篇に蹞歩不休跛鼈千里累土不輟丘山崇成云々文選李斯上書に泰山不讓土壤故能成其大河海不擇細流故能就其深云々白氏文集卅九續座右銘に千里始足下高山起微塵云云　○ながらの橋もつくらばや　古今俳諧に伊勢難波なる長柄のはしも造るなり今はわが身をなににたとへん顯注に敎長卿注云ながらの橋はふりてひさしくすてたるを新しくつくらん樣の心也云々日本後紀廿二弘仁三年六月の條に己丑遣使造攝津國長柄橋云々文德實錄五仁壽三年十月戊辰の條に攝津國奏言長柄三國兩河頃年橋梁斷絶人馬不通請准堀江川置二隻船以通濟渡許之云々宇治殿高野詣記に永承三年十月十一日云々過御長柄橋下之比漸及昏黑云々榮花物語松のしづえの卷延久五年の條に二月はつか天王寺にまうでさせ給ふこの院をば一院とぞ人々申ける後三條院とも申めり云々こゝはいづくぞととはせ給東宮大夫ぞつたへとひ給ふこれはながらとなん申すといふほどにその橋は有やとたづねさせ給へば候よしまうす御舟とゞめて御らんずればふるき橋の柱ただ一のこれり今はわが身をといひたるはむかしもかくふりてありけると思ふもあはれなり云々古今

榮雅抄序の末卷に長柄橋はわたなべのはしをいふ云々攝陽群談七に長柄橋西成郡に屬す今の北長柄村より豐島郡垂水庄に至るの間を指て長柄の橋跡と云り又長柄川今の船渡の邊に於て橋の古株朽殘りて水底にありと云傳たり云々西遊行囊抄十五の上陸西遊行囊抄二などその外物におほかり難波長柄豐碕宮は孝德紀萬葉六などにみゆ　○浪のうへと云所　未詳駿河國圖を考に廬原郡の由比神澤採澤中村小金向田蒲原中鄕岩淵とつゞきて東へ富士川をわたれば富士郡なり朝のほどに富士河をわたれるよしなれば此近所なるべし

廿七日。明はなれて後ふじ河わたる。朝川いとさむしかぞふれば十五瀨をぞわたりぬる。

さえわびぬ雪よりおろす富士河の川風こほる冬の衣手。けふは日いとうらゝかにて。田子の浦にうちいづ。あまどものいさりするを見ても。

心からおりたつたごの蜑衣ほさぬうらみと人にかたるな。とぞいはまほしき。伊豆の國府といふ所にとゞまる。いまだ夕日のこるほど。みしまの明神へまゐるとて。よみてたてまつる。

名寄二十　新撰歌枕三

あはれとやみしまの神の宮柱たゞこゝにしもめぐりきにけり。

おのづからつたへし跡も有ものを神はしるらん敷島のみち。

たづねきてわがこえかゝる箱根路を山のかひあるしるべとぞおもふ。」

○ふじ河　皇極紀三年七月に東國不盡河云々三代實錄九に富士河東野云々本朝文粹十二富士山記に有二大泉一出レ自二腹下一遂成二大河一其流寒暑水旱無レ有二盈縮一云々萬葉三に不盡河跡人乃渡毛其山乃水乃當焉云々駿河風土記に仙河者不二河出レ自二蓬萊峯一故名レ之云々更科日記にふじ河といふは富士の山より落くる水なり云々光行海道記に富士河をわたりぬ此河にこそ石をながす云々羅山文集六十一本朝地理志略に富士山扶桑第一高山云々其麓有レ河亦號二富士河一急流甚險云々丙辰紀行に我國に

名を得たる大河はあまたあれどことに富士川は海道第一の急流なり云々駿州名勝志中に富士川信州八が嶽より流出て甲州にいたり釜なし川油川早川など落合云々駿河國志七の卷の說亦同物茂卿が徂徠集十五峽中紀行上に大泉寺者富士川之濫觴有池亦名富士即機山生時所洗浴水也云々東遊行囊抄十二にも諸說を擧ていひたり ○朝河いとさむし 萬一に旦河渡舟競夕河渡此川乃云々 ○うらゝかにて 與淸按にうらゝかはうるはやかの約言也うら／＼うらゝうらゝかなどみな同語をはたらかしいへりうらはうるの通音にて物のよろしくうるはしき事なりさてものゝつやゝかにみゆるをほめてうるふともうるほふともいへり萬十九に宇良宇良爾てれる春日にひばりあがりこゝろかなしもひとりしおもへば左注に春日遲々鶬鶊正啼云々江談抄四に二月三月日遲々天神令教曰日字良宇良と可詠云々舊本今昔廿四の廿八語にきさらぎやよひうら／＼云々遊仙窟に心虛コヽロウラ／＼シ云々抄五に伴をうるによりて假に心うらうらとなられたるなり云々源氏末摘花に日のいとうらゝかなるに云々同繪合に空もうらゝかにて入の心ののび云々此外多し ○田兒の浦 萬三赤人反歌に田兒之浦に打出てみれば眞白にぞふじのたかねに雪はふりける續日本紀十八に駿河國從五位下楢原造東人等於部內廬原郡多胡浦濱獲黃金獻之云々駿河風土記に伊穗原郡南限美努田子之浦云云田子里或苦屋里云々田子浦云々下河邊長流が續歌林良材上に駿河風土記云てごのよび坂云々てごは東俗のことばに女をてごといふ田子のうらも手子の浦なり云々東國紀行に田子の浦とはこの邊にやなどたづねたれば淸見が關のこなた六里ばかりのほどみな田子の浦となん云々名所方角抄駿河國分に三保の入江より瀉島が原つたひの浦おしなべて田子の浦といふ云々百人一首初學に淸見息津田兒は同郡にて淸見のひがしにつゞきて田兒の浦あるを知べし富士のやまは富士郡にありて隣郡ながらいとはるかにへだゝれりかくていにしへの海道は今のさつた坂の山陰のいそづたひにてそのさつたやまの東の倉澤てふ所に來れば富士見放らる此邊みな田子、浦なりさて此田子の浦より打出て

見ればふじの高根の雪の眞白に天に秀たるをこはいかにとまで見おどろきたるさま也云々笈埃隨筆ノ四に田子の浦はむかしの街道なりしがおやしらずとて高山岩石屏風のごとく礒邊は浪高くしばらくも止事なしその浪の引間に走り通る一騎打にて行人路をかへりみるいとまなし明暦元年の秋朝鮮人來朝に此通路をとゞめ薩埵山をひらきて往來とすゆゑに今田子ノ浦を知人なし云々與清按にいにしへの田子の浦は賀茂翁の初學百井塘雨が笈埃隨筆の說の如くさつたの山陰の礒にて今の倉澤のつゞきの海邊なることは更級日記に田籠の浦は浪高くて船にてこぎめぐると書るにてしるしされど此十六夜日記に田子の浦といはれしは不盡川を東へ渡りての後なれば中昔よりは所を誤れる也湊は駿州名勝志中身延紀行東遊行囊抄十二駿河國志七など考わたして知べし　○いさり　倭訓栞三にいさり萬葉集に礒廻と書てかくよめりいそがりの義そか反さなり同集にいさると用にもいへり漁火をいさり火といひ漁舟をいさり舟といふ是也云々萬二におほ舟に眞梶繁ぬきおほぎみのみことかしこみ礒廻するかも同六に射去すとふぢえの浦に云々同十五にわたつうみのおきべをみれば伊射理するあまのをとめは云々又伊射理するあまをとめらが云々同廿におほみけにつかへまつるとをちこちに伊射里つりけり云々此外よめる歌おほし長明無名抄の說はうけがたし又いさり火は萬十二にしがのあまのつりにともせる射去火のほのかに妹をみんよしもがも同十五に二首同十七同十九などにもよめり和名抄燈火部に漢書陳勝傳云夜篝レ火師說云比平加加利通須今按漁者以レ鐵作レ篝盛レ火照レ水者名レ之此類乎共みゆ又字鏡竹部に笔盛レ穀竹器也伊佐留とありこは同語異物にて今關東の方言にいかきをざるといふ是也舊本今昔廿八の第卅八語には猿籠と書たり倭訓栞十に甲斐のあたりにてはいざるといふよしいへるは古言のこれる也又笊籬の音也といふ語釋は古書をかうがへぬひがことそ　○おりたつたごのあまごろも　田兒の浦に田子をよせ扨蜑衣とつゞけたり源氏葵に袖ぬるゝこひぢとかねてしりながらおりたつたごのみづからぞうき花鳥餘情に田子もいやしき人也早苗など採て泥中におり

たつ者に御息所の身をたとへたまふ也云々六帖一に五月雨に苗ひきうゝる田子よりも人をこひぢにわれぞぬれぬる同二に時すぎばさなへもいたくおいぬべし雨にも田子はさはらざらなん伊勢大輔集にいかばかりたごのもすそもそぼつらん雲間にみえぬころのさみだれ此外田子をよめる歌おほしあまごろもは海士のきる衣也源氏行幸にあかずかなしくとゞめがたくしほ〳〵となきたまふあまごろもはげに心ことなりけり云々　○伊豆の國府　和名抄五に東海國伊豆云々國府在田方郡行程上廿三日下十一日管三田二千百十町四段百十二歩正六萬五千束公六萬束本稲十七萬二千束雜稲四萬七千束云々國造本紀に伊豆國造は神功皇后御代物部連祖天蕤桙命は世孫若　建命定賜國造難波朝御世隷駿河國飛鳥朝御世分置如故云々鎌倉實記三に准后親房記曰伊豆別皇子者景行天皇二十四子武押分命也伊豆風土記曰割駿河國伊豆乃埼號伊豆國云々州名紀原に風土記抄曰伊豆者和名也東相摸西駿河出其中間之國也故伊豆則出之義也又同書此國有溫泉故名伊豆者泉下略也云々國名風土記

上に東のわきに相摸國西は駿河國中間より豆州はるかに海中へさし出たる山の崎にてある也故に出の國と號す一義には伊豆御山に出る湯あり伊豆權現はこの國の鎮守にて御座すこの神は湯を愛したえず湯のうへをはしりあそび給ふ也しかれば走湯出とも准じて伊豆國とかながきに號す也云々走湯山緣起五に以國名號伊豆伊者三瓣寶珠豆者頭首也所謂此龍頭懸三瓣寶珠是故云伊豆云々又云權現示靈夢云伊豆者伊者━惠比須也豆者頭也東境伊人━━惠比須也云々また湯豆州とも書けり與清按に伊豆國の名はじめて應神紀五年にみゆ萬十四に伊豆の海にたつしら浪のありつゝもつぎなんものをみだれしめめや延喜主計式上色葉字類抄以部拾芥抄中末節用集國郡部大八洲記六風土記逸文人國記海東諸國記諸國名義考上國號考二などにも此國の事あれど事ながければはぶく國府は吾妻鏡一に伊豆國府祓土云々太平記十四に伊豆府云々東關紀行に伊豆のこふにいたりぬれば三島社の御しめ打をがみ奉るなどみゆ此外おほかりき○三島明神　神名帳上に伊豆國賀茂郡伊豆三島神社名神

大月次新嘗云々とあれば國の名神大社にて月次祭新嘗祭おこなはれし神也名神は明神とも通はし書けり委事は棟梁集にいひたればはぶく神代紀上に伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智爲三段云々一段是爲大山祇神云々纂疏に今伊豆國三島神社是也攝州島下郡三島鴨社伊豫州越智郡大山積神等同躰異名也云々一宮記に三島大明神大山祇命伊豆賀茂郡云云此外文德實錄三代實錄類聚國史釋日本紀伊豆國神階帳神道集東關紀行平家物語吾妻鏡盛衰記曾我物語太平記宴曲抄名所方角抄神社啓蒙丙辰紀行東遊行囊抄伊豆志等よりして物にみえたるがいといとおほかれば引出んに遑なし伊豆三島の名は續紀十四にはじめてみゆ因に云一宮の事已に一の卷にいひたれど四季物語四月賀茂祭の條に仁和のはじめの年になんもろ〳〵の國に一の宮をさだめたまひし時此御瑞籬を山城國の一宮にさだめられ云云あるを舉ざりき四季物語は長明が作にあらずいと後の僞書なれどさるつたへを心得て書いでけるにや　○宮ばしらめぐり　古事記上に於底津石根宮柱布刀斯理云々萬一に宮柱太敷座波云々柱にめぐるといふ縁語は古事記上に伊邪那岐命詔然者吾與汝行迴逢是天之御柱而爲美斗能麻具波比云々神代紀上にもみゆ此故事に依てよめるなるべし　○筥根路　日本紀略延暦廿一年の條に五月甲戌廢相摸國足柄路開筥荷途云々同廿二年の條に五月丁巳廢相摸國筥荷路復足柄舊路云云吾妻鏡一に筥根通云々同廿七に筥根山神社佛閣火災爭滿月上人草創當山以後五百餘歳未有此例云々箱根山縁起に箱是般若實相之根源故名箱根山因般若寺云々走湯山縁起五に筥根之湖水云々容華集十一に伊陽之東有一大山衿帶南北幾百里其北者曰筥根南者曰伊豆皆天下險也云々東關紀行に筥根の山にもつきにけりいはがねたかくかさなりて駒もなづむばかり也山の中にいたりて水うみ廣くたゝへたり筥根の湖となづく又蘆の海といふも有云々與清按にこゝはほき嶺の義也つきは波氣の通音にて山の嶺をいふ吾妻鏡に於岩井郡厨河點此所坤角儀使次之波氣令候定御館云々舊蹟遺聞一に岩手郡厨河野の西方に八卦村といふ所有そこにや云々波氣家とありけん

に家の字脱たるかといへり此波家も墥によれる名也山家集上によしの山ほき路づたひにたづねいりてはなみし春は一むかしかも同下にあやふさに人めぞつねによかれける岩のかどふむほきのかげ道顯季集にわぎも子は木曾のほきぢにすまはねどなにあふことのかた岸ならん藻鹽草道部にほきとは狩する人の鹿を待時山人などのとほる道にはあらず狩人ばかりとほる道云々たゞ道或云たゞ山人などのとほるをもいふといへりまことに常にいふ詞也云々山ほきぢづたひほきのかげ道云々倭訓栞保部にほきぢ岸險をいふ今も京北山の邊にはいふ詞也又ほきともよめり筑紫人はぼきといひ因幡などにはぼけともいふ也云々などみゆ神名帳下に丹後國竹野郡發枳神社云々同九に筑前國上座郡把伎波木云々これらみな同義也筑前宗像郡宮崎宮もほき崎なるべし墥といふも同じくて萬十四にあしがりの麻萬のこすげともよみたれば筥根はほき波氣墥などによしある名なることおもふべし波氣墥ほけゞけなどの事は已に一の卷にも云たればてらし合せてしれさて筥根を讀る歌は萬七に足柄乃筥根とびこえゆくたづのともしきみればやまとしおもほゆ同十四にあしがらの波姑禰の山に粟まきてみとはなれるをあはなくもあやし又あしがらの波故禰のねろのにこ草の花づまなれやひもとかずねん此外いとおほし四に云がけといふ詞は平治物語中に千束がけと有をふるしといひつべくや　○山のかひある　古今俳諧に躬恒わびしらにましらなゝきそあしびきの山のかひある春にはやはあらぬ按に山のかひにねぎことのかひあるをよせたり今わがはてねぢをこゆるに山の峽などもあるべしそのかひといふ詞はいとたのもしく願事もかひ有てかなふしるべとおもはるゝと也和名抄一に考聲切韻云峽山間陜處也俗云山乃加比云々和訓栞加部下にかひあるかひなきの詞も芽より出たるなるべし詮の字の意といへり或は𣑥をよめり新千載賀に海原や浪にたゞよふ蘆かびのかひある國となれるかしこき云々竹取物語にあなかひなのわざやとのたまひけるよりぞおもふにたがふ事をばかひなしといひける云云抄にかひとは代なりかばかり心をつくせしに其代りもなしと也かひはかへの通音也萬

十六にうま飯を水にかみなしわかちし代はかつてなしたゞにしあらねばこの代をかひとよめるにて知べし云云與清按に竹取物語抄の說宜しききこゆ新萬上に秋の野の千ぐさのにほひわれのみはみれど價無ひとりをおもへば六帖六にとりのこはかへりて後ぞなかれける身のかひなきをおもひしりつゝ此外おほし

廿八日。いづのこふを（伊作いづのこふといふ所を）いでゝはてねぢにかゝる。いまだ夜ぶかゝりければ。たまくしげはこねのやまをいそげどもなほ明がたき橫雲の空。あしがら山（夫木雜六、作あしからのやま）は道遠しとて箱根路にかゝるなりけり（夫木作はこれに）。ゆかしさよそなたの雲をそばだてゝよそになしぬる足柄の山。いとさかしき山をくだる。人のあしもとゞまり（伊作とまり）がたし湯坂とぞ（諸本ぞ字无今据扶群及夫木抄等）いふなるからうしてこえはてたれば（原作と）また（諸本二字无今据扶群及夫木抄等）ふもとにはやかはといふ河あり。まことにはやし。木のおほくながるゝをいかにとゝへばあまのもしほ木をうらへいださんとてながすなり（伊なり二字无）と云。あづまぢの（夫木雜六名寄廿新撰歌枕三）ゆさかをこえて（原本作こして）見わたせばしほ木ながるゝはや河のみづ。湯坂より浦にいでゝ日くれかゝるにとまるべきところとほし。伊豆の大島まで見わたさるゝ海づらを。いづことか（伊か字无）いふととへど。（諸本作は今据伊本）しりたる人も（伊本も字无）なし。あまの家のみぞある。

あまのすむその里の名もしら浪のよする渚に宿やからまし。まりこ河といふ河をいとくらくてたどりわたる。こよひはさかはといふ所にとゞまる。明日は鎌倉へいるべしといふなり。

◉玉くしげはこね　玉くしげはあけといふへかゝれる枕詞也玉はほめたる詞くしげは櫛笥也今俗にくしばこといふ是也和名抄容飾具部に魏武疏云漆畫巖器俗用二唐櫛匣一和名賀良玖師介云々同木器類部に禮記注云笥食器也和名計云々字鏡竹部に篚笥也太加介云々などみゆ崇神紀に吾明旦入二汝櫛笥一而居云々見二櫛笥一遂有二美麗小蛇一云々萬四にをとこ

めらが珠篋有玉櫛のかみさびけんもいもにあはずて此外おほくよめりさて玉くしげはこねとつゞけしは人丸集にあしがらの相摸にゆかん玉くしげ箱根の山のあけんあしたに金塊集下に玉くしげはこねの海はかけごあれやふたくにかけて中にたゆたふなどみえたれど下にあけんともふたともいふ緣語あり金塊の歌のかけごあれやを流布印本群書類從本にけゝれあれやに作り夫木海部にけみあれやに作れるは共に誤也こは契沖が考にてかけごあれやと改たるがよし夫木海部に法眼慶融玉くしげはこねの山の峯ふかく水海みえてすめる月かげ此歌は緣語なくてたゞに玉くしげはこねとのみかさねてつゞけたれば古き格にたがへり冠辭考五の卷を考べし　○よこ雲は萬十一に東細布そらゆひきこすとほみこそめことかるらめたゆたへだつや此をはじめにてよめる歌おほし同四には橫殺雲ともいへり橫霞橫雨橫雪橫時雨などもおなじ萬代春上に仲正みわの山ふもとめぐりの橫がすみしるしの杉のうれなかくしそ古今著聞集七にいかなるよこ雨にか額のぬるゝことはなきに云々右京大夫集詞書に袖にもふところにも橫雪いていりて云々夫木冬一に賴政旅のいほはあらしにさわぐよこ時雨柴のかこひにとまらざりけり又信實風わたるみねの木の間のよこしぐれもる山よりも下葉そむらん筑波集冬に善阿衣手をぬらすは風のよこしぐれなどあまたみえ夫木春二には河上やまだよこぐもる薄みどり浪よりかすむ淀のあけぼのともよめり橫雨橫浪などの事は已に一の卷にもいひたれば考合すべし　○あしがら山　和名抄五に東海部相摸國足柄上足辛乃加美足柄下准レ上云々同六に相摸國足柄下郡足柄阿之加良云々延喜民部式上に相摸郡足上足下云々總國風土記相摸部注に或曰足輕明神昔狩人也或時離二寵妻一有二悲傷一故常見二亡妻之鏡一思二之相摸一如レ見二其亡妻一故曰二相摸一是則卑史之好事之所爲也云々續歌林良材上に相摸風土記に云足輕山は此山の杉の木をとりて舟につくるにあしの輕き事他の材にて作れる舟にことなりよりてあしがらの山と付たりと云々古事記中に倭建命到二足柄之坂本一云々萬三にとぶさたて足柄山に船木きり

きにきりよせつあたら舟木を此外所見おほくて擧るに邉なければはぶく東遊行囊抄十三萬葉勝地篇六などにくはし〇そばだて丶　敧かたぶくるよし也山名のあしがらにあしき人をよせて彼方の惡雲をそばたてかたぶくることのゆかしきと也朗詠山家部に敧枕聽云々字鏡集山部に崿ソバタツ峙同色葉字類抄所部に敧ソバタツ跂峙同節用集曾部に敧ソバタツ峙同新撰集楚部に敧ソバタツ峙側仄同平他字類抄曾部に敧ソバタツ峙側同運歩色葉集楚部に敧ソヅタツ側同和玉篇山部に崎ソバタツ同支部に敧ソバタツ雑字記山部に峩ソバタツ峙同峽ソバダツカヒなどみゆ夫木秋一に隆季さぬる夜の天河原のいそ枕そばだてあへずあけぞしにける側目といふも目をたてざまにして物をみる事也俗言に目にかどを立るといふ是也そばむるそば〱しなどもいひそびゆといふも通音也　〇湯坂　吾妻鏡一に箱根湯坂云々曾我物語七まりこ河の條に湯本の宿を打過て湯坂の峠に駒をひかへ云々與清按に湯坂は湯本よりのぼる坂をいふなるべし湯本は盛衰記四十五に箱根山をもなげき越湯本の宿に

著給谷川漲落て岩瀬の浪に咽けり云々東關紀行に此山もこえおりて湯本といふ所にとまりたれば云云宴曲集海道下にこゝもゆげたはいざしらずまだみぬ湯本早河はやむる駒は大磯のいそぎて過る云云太平記卅八に遊佐入道禪僧の衣を著て只一人京を志してぞ落行けるとかくして湯本まで落たりけるが云々難太平記に相摸國湯本云々宗祇終焉記に箱根山のふもと湯本と云所につきしに云々關東兵亂記二にあたみ日金の山より打こさせ追々に石橋や湯本の邊へかくし置て云々此外ものにおほくみゆ東遊行囊抄十三にくはし因に云ひかへといふ語は源氏紅葉賀にわづらはしさに立たまふをひかへてとみえて引留にいへり物を取をとらふといふに語勢ひとしければ比加敝とも比加布とも書べし俗にひかゆると書は誤也節用集比部に扣ヒカフル控同運歩色葉集比部に扣ヒカフルなどよめり後に底簿底をひかへ帳と云ふ物を記し留れば也　〇はや河　吾妻鏡一に早河邊云々同八に相摸國早河庄云々同十二同同二十五に於足柄山之麓沈于早河

底ニ云々義經記二に相摸のくにこばや河のかせんに打まけ云々海道記に逆河を立て平山を過て高倉宰相中將範茂筥峰山のうみじり急河といふ淵にて底のみくづと沈にけり云々宴曲集海道下にまだみぬ湯本早河云々公卿補任光嚴院の條に平成輔正慶元年五月廿二日於伊豆國早河宿梟首云々常樂記亦同太平記四に相摸國早河尻にて失ひ奉る云々廻國雜記に小田原につき侍れば早河の浦とて水上は大河にて海につゞきたるによりてかやうに申侍るとなんする急とほくながれ出たる早河の浦や千ひろの浪ぢなるらん東國陣道記に早川陣取の山のふもと也名寄に名所のよし有みそぎせし袖こそぬるれおいの浪うつる月日もはや河の瀨に箱根山緣起に相州早河庄云々神道集二に相摸國大早河源上湖池水邊云々相州兵亂記三に早川の浦云々名所方角抄相摸國分にはこねを東へこゆれば小早川とて里あり過行ば小田原といふ云々東遊行囊抄十四下に早川小橋あり歩渡にもする此川上は箱根の北足の湯より流出て塔の澤湯本の邊を流れて此所に至る云云　○もしほ木　もしほ木は垂たる潮を煮料の薪也もしほは初學下に藻を苅集てそれに潮を汲かけて日にほしたるを簀の上につみおきて又更に潮を汲かけてたるゝ故に藻しほといへり藻は鹽木の代りに燒物とおもひ誤る事なかれ云々和訓栞毛部に海藻を苅集てそれに潮を汲かけて日にほしたるを簀の上に積おきて更に潮を汲かけてたるゝ也さて藻鹽草とも藻しほ垂其云也また藻を燒て性を存し漏鑑に盛て潮を汲てそゝぎ其水を釜に入て煮て鹽をもとるをもて藻鹽火とも藻鹽燒ともいへる也又もしほ木ともよめり其木と稱する一種あり云々萬六に朝名藝爾玉藻苅管暮菜木二藻鹽燒乍云々清正集にすまの浦に蜑のとりつむもしほ木のからくも下にこひわたるかな御裳濯川歌合副送にちぎりおきしちぎりの上にそへおかんわかのうらちのあまのもしほ木爲家集下寄鹽木戀海人の住浦のもしほ木今までにからしや心こりはてぬ身は此外所見おほかれど擧ず　○伊豆の大島　神代紀上に次生大洲云々纂疏に大洲者島嶼中爲大故得此

名今伊豆大島也云々東遊行嚢抄十四上に大島のこと大山あり婆砂羅嶽と云山上に社あり大島大權現共或又婆砂羅大明神共申此山の高きこと富士山にひとし燃ることも富士の如し云々南方海島志に大島南北五里東西二里半餘云々伊豆志十六に七島の内にても地形最廣し云々水鏡中走湯山縁起二元享釋書十五保元物語中帝王編年記十拾菓抄江島景空華集九文覺草子太平記廿など所見夥つくすへからず名寄廿に平泰時はれて大しましろき朝なぎにさゝのはうかぶ沖の釣舟鴨長明うらみのみ大しま浪のいかなればながるゝ人のまたもかへらぬ堯惠北國紀行にすむ人もありとこそきけ大しまの山もうきたる五月雨の空因に云和名抄六に相模國鎌倉郡大島ありこは後に江島といへるなるべし大島はもとより伊豆に隷たれば誤るべくもあらず江島ふるくは大島といひけんに片瀬川の川尻の江にある島なれば後に江島ともよべりとみゆ江島は吾妻鏡二に養和二年四月五日乙巳武衛令出腰越邊江島給云々是高雄文學上人爲祈武衛御願奉勸請大辨才天於此島始行供養法之間故以令監臨給密議此事爲調伏鎭守府將軍藤原秀衡也云云今即被立鳥居云々廿二の卷には江島明神廿六の卷には江島龍穴などあり海道記に固瀬川をわたりて江尻の海汀を過れば江の中に一峯の孤山あり孤山に靈社あり江尻大明神と申威驗ことにあらたにして御前を過る下り船は上分を奉る法師はまゐらぬときけば其心をたづぬるにむかし此邊の山寺に禪僧有て法華經を讀誦して夜を明し日をくらす其時女形出來て夜ごとに聽聞してあくれば忽然としてうせぬれば其行方をしらず僧これをあやしみて糸を構てひそかに裾につけにけりあくる朝に糸をたゞしてみれば海上にひかれて彼山に至りぬ巖穴に入て龍尾につけたり神龍顯形して後僧にはおてこれをいれずといへり云々神慮は人しらずきねがならはしにしたがひてふしをがみてとほりぬ江島やさして潮路にあとたるゝ神はちかひの深きなるべし云々東國紀行に大礒江島もろこしが原など聞ゆる所々云々北國紀行に江島へ詣て侍り西の方の渚近く下りてはるかなる岩屋あり内に雨界の

垂跡功德天まします則こゝをも蓬萊洞といへる深秘ありときこゆいはほの苔をしきて手向し侍りしに島花ちらさじと江島守やふざすらんかめのうへなる山さくら花云々太平記五拾葉抄江島景東國紀行名所方角抄相摸國分鎌倉志七神社考六東遊行囊抄十六下などにもみゆさて江島明神を山崎闇齋が遠遊紀行に宇賀魂稲女也といひたるはしひごと也こは綿津見神なるべくや辨天を勸請せしは文覺上人より後の事也　〇しら浪のよする渚　古今雜下しらなみのよするなぎさに世を過すあまの子なればやどもさだめず新勅撰冬八條院高倉さとの蜑のさだめぬやどもうづもれぬよする渚の雪のしらなみ　〇まりこ川　吾妻鏡一に宿丸子河邊云々また來于丸子河邊云々同十九に相摸國丸子河云々盛衰記廿一に丸子川の洪水に云々大礒小礒打過て二日路を一日に酒匂宿につく丸子河の洪水いまだへらざれば渡す事不叶して宿の西のはづれ八木下と云所に陣取云々平家物語十海道くだりの條にこゆるぎのもりまりこ川小礒大礒のうら〳〵云々曾我物語七にまりこ河をわたりけるが云々十郎五月雨にあさ瀬もしらぬまりこ川浪にあらそふわが泪かな五郎きゝて云々渡るよりふかくぞたのむまりこ川親の敵にあふ瀬とおもへば廻國雜記にまりこ川にて俳諧すゞかけのくだりをあげてまりこ川おひつながいつけふはくらさん梅花無盡藏二に毬子河云々關東兵亂記三に曾我故鄉の劍澤の藤を見んとて各々打つれ鞠子川を打渡り成田飯泉を過て云々東遊行囊抄十四上に酒匂川一名鞠子川共云是は古の名也云々次の酒匂の條を考合て知べし　（　）さかはといふ所　吾妻鏡四に酒匂驛云々亦酒匂宿云々同十に酒匂宿云々同卅二に酒匂驛濱御所云々盛衰記廿一に酒勾宿云々義經記四に鎌倉を立て其日はさかはの宿につきたりける云々海道記に道は順道なれども宿を逆川と云所に宿る自注に鹽のさすとき水の上ざまにながるればさかはといふ云々筥根山緣起に當州酒輪鄉云々豆相記に酒勾河云々また出張于小田原三日次于酒勾云々參考太平記十三に酒勾宿云々甲陽軍鑑十一上に田村大かみ八幡平塚に陣どりそれよりこふづ前川さかはまでよせ云々さかはの川出たるにつき云々羅山文集

六十一に相摸國云云酒勾川在小田原東五十町云云癸未紀行に酒勾川の詩あり東海道名所記一に酒勾川富士のすそより流る常には歩渡り冬は土橋をかけらる此川左の方一町ばかりにして海に入なり云々東遊行囊抄十四上に酒勾川云々此川上は御厨領とて駿州堺足柄の邊より流出て此渡の右方五六町にて海に入也云々（鎌倉　和名抄六に相摸國鎌倉郡鎌倉加萬久良云々延喜神名式上同民部式上に相摸國鎌倉郡云々萬廿に鎌倉郡云々古事記中に鎌倉之別云々萬十四に可麻久良乃美胡之能佐吉のいはくえの君がくゆべき心はもたじまがなしみさねにわはゆく可麻久良能美奈能瀨河泊にしほみつなんかたきゞこる可麻久良夜麻のこだる木をまつとながいはやこひつゝあらん詞林采要抄五に鎌倉とは鎌を埋る倉と云詞也其濫觴者昔大職冠鎌足未鎌子と申奉りしころ宿願おはしましけるによりて鹿島參詣之時此由井の郷に宿り給ひける夜感靈夢平生所持し給ひける鎌を今の大藏松が岡に埋給ひけるより鎌倉の郡と申と云因茲思之此歌に

鎌倉山の松とつゞくることは鎌を埋たる所は松が岡也とよめるに非ずや云々北國紀行に淨妙寺云々門外の叢祠は鎌を手向せり往古の緣起らせて何の御神ともしらずといへりさては此御社は大職冠の御鎮座也山なる鎮守はかの靈劍の鎌をさめられし鎌倉山是也云々總國風土記相摸部に神倭磐余彥天皇欲平東夷之時當大山有一國其國之夷背天皇而有現放矢之志勢既天皇察之而塗毒箭而自御射東夷當箭死人以萬數之其屍爲山今之鎌倉之山是也鎌倉者訛也云々名所方角抄相摸國分に鎌倉山里とも北南へ遠き所也東は山西は海也谷々を居所にしたる也谷の字をやつとよめり入口七口皆以巖土堤を切とほしおりこむ在所也云云鎌倉志一に鎌倉山とは大臣山を云と也源順が和名抄に鎌倉郡の内に鎌倉の里有何れの地を云ん歟不分明大臣山を鎌倉山といへば雪下を鎌倉の里と云ん歟云々按ずるに東鑑に陰陽權助國道云所謂四境とは東は六浦南は小坪西は稻村北は山內とあり然れば此内を鎌倉と云へし鶴岡記錄に云鎌倉谷七郷とは小坂郷小林郷葉山郷津村郷村岡郷長

尾郷矢部郷を云なり鎌倉七口とは名越切通朝夷名切通巨福路坂龜谷坂假粧坂極樂寺切通大佛切通此外に小坪切通稻荷坂あり云々鎌倉紀行東遊行囊抄十六下闘光大師行狀翼贊四十九海鏡猿田彥二などにくはしその外鎌倉の事の所見いとさはにしてあぐるにたへず與淸按に鎌倉は峽間谷也かまは竈山竈門山かまどの鬪などのかまにおなじく峽間の心也袖中抄一に常陸風土記に淺くひろきを澤といふにかくせばきをかひやといふともありかひまのひを省てかまとはいへり山の峽稻の頴鱗介の貝などみな物ふたつ有てその間をかひといふによれる名也門をかどゝいふも間門なるべしさて竈門は合間門なりその形峽に似たりくどといふもかまどのまを省てかをくにかよはせいふ語也かま山かまど山かまどの鬪などみなさる谷のありけるより名におへることとうつなし賀茂といふも又おなじ倉は谷の古語なるよし古事記傳五にいへるがごとしげに闇淤加美神も谷靈神萬十七に鶯のなく久良多爾とよめるも名所にはあらでたゞ谷のこと俗言に股ぐらといふも股の谷のよし也けりされば鎌倉は峽間谷にて片倉岩倉戶倉淺倉倉澤などいふ地名もおなじく谷におこれることを知べし因に云みなの瀨川は峯の瀨河の義にて山の峰よりながるゝゆゑの名にやそは大和美濃信濃などに山の峰より流れおつる川おほかり瀑布にはあらずつたはりながるゝ河也所によりて峯の川と呼延喜祝詞式廣瀨大忌祭祝詞に皇神等乃敷座須山々乃自口狹久那多利爾下賜水云々同六月晦大祓に高山末短山之末與理佐久那太理爾落多支都速川能瀨云々などの狹久那多利もおなじくて拆流埀也さくは行宗集に山ざとのさくりの上にしりかけてをしねこく間に雨ぞふりぬるとよめるさくりにひとし今坂東の國にて畠を條々に打かへすをさくるとも又さくをきるともいひさくりて畝つくたるをばさくといへり横ざく縱ざくなど云も畝の筋の眞直に通りたる樣也言の本は拆開に起りてさくりとほせしよしなるべしなだりは雪なだれ人なだれなだれかゝるなだれおつるなどのなだれに通て流埀也倭訓栞十九に長埀の義と云るも聞ゆさるを本居宣長が大祓後釋に眞下埀也とい

へるはさくり又はなだれなどの古言をおもひよらざるしひごと也かゝればみなの川もみなのせ川も峯之川の義にて筑波根のみねよりおつるみなの川是也常陸の名所とのみおもへるはいみじきひがごとにて清輔集に小泊瀬の花のさかりやみなの川峯よりおつる水のしら浪などあだし所にもよめるをしらざる也くはしくは余が松屋筆記十の巻にいひたれば閲て知べし

廿九日　さかはをいでゝはまぢをはるはるとゆく。あけはなるゝ海づらいとほそき月出たり。

浦路行心ぼそさを浪間より出てしらするあり明の月。なぎさによせかへる浪のうへに霧たちて。あまたありつる釣舟見えずなりぬ。

あまをぶねこぎ行方を見せじとや浪に立そふ浦の朝霧。みやことほくへだゝりはてぬるも。猶夢の心地して。

立はなれよもうき浪はかけもせじむかしの人のおなじ世ならば。」

〇むかしの人爲家卿を指ていへる詞也萬一人丸さざなみのしがの大わだよどむとも昔人二またもあはめやも同三博通法師いはやどにたてる松の木なをみれば昔人乎あひみるごとし此外おほし。

十六夜日記殘月抄補注卷之三

あづまにてすむところは月影のやつとぞいふなる。うらちかき山もとにて風いとあらし。やまでらのかたはらなれば。のどかにすごくて。なみのおと松の風（諸本作まつ風、今据扶桑拾葉）たえず。みやこのおとつれいつしかにおぼつかなきほどにしも（伊作にも）うつの山にてゆきあひたりしやまぶしのたよりにことつけまう（伊まう二字无）したりし人の御もとより。たしかなるたよりにつけて。ありし御返しとおぼしくて。

たび衣泪をそへてうつの山しぐれぬひまもさぞしぐるらん。

ゆくりなくあくがれ出しいさよひの月やおくれぬかたみなるべき。都を出しことは神無月十六日なりしかば。いさよふ月をおぼしめしわすれざりけるにやと。いとやさしくあはれにて。たゞ此返事し（群イ作御返し、伊作返し）ばかりをぞ又（伊又字无）きこゆる（群る字无）。

めぐりあふするゑをぞたのむゆくりなく空にうかれしいさよひの月。

○月影の谷　鎌倉志六に月影谷は極樂寺の地内西の方なり云々海鏡猿田彥四に月影が谷極樂寺の境内なり云々名所方角抄相摸國分に谷の字をやつとよめり云々倭訓栞也部に谷はやつの略蜂谷澁谷などこれ也斜谷の時にやとよみ音のごとくいへるはあらず云々師說にやは屋也靜石屋など穴居の世の名也後うつりて人すまぬ洞穴をもいはやといひ又轉りて谷をもやといへりつもじを添てやつといへるは谷門の義にや武藏相摸の俗言にやとともいふを思ふべし谷の戸をやつともやとともいふよりやがて谷の事にもいひうつせし語とみゆ　○山寺の傍　極樂寺也鎌倉志六に極樂寺は靈山山と號す眞言律にて南都西大寺の末寺也開山は忍性菩薩良觀上人と號す云々此寺昔は四十九院ありしと也今吉祥院と云のみあり寺領九貫五百文あり云々東遊行囊抄十六下に極樂寺靈山と號す云々稲村崎より北也云々海鏡猿田彥五にもみゆ吾妻鏡五十に弘長二

年十一月三日陸奥守平朝臣重時卒自注に年六十四于ㇾ時住ニ極樂寺別業ニ云々帝王編年記廿七に永仁六年戊戌四月十日西大寺招提寺大安寺以下三十餘ヶ寺爲ニ關東將軍家御祈禱所ニ停ニ止寺領之違亂ㇾ禁ニ遏殺生之重罪ㇾ云々極樂寺相摸國鎌倉郡云々沙石集五下に鎌倉の極樂寺にある僧夢に見る文殊連歌したる付よとて云々元亨釋書十三に釋忍性姓伴氏和州磯城島人也云々弘長之始入ニ相陽ㇾ止ニ清凉寺ニ云々武州刺史平長時欽ニ性律行ㇾ新ニ極樂寺ㇾ延ㇾ之性移焉云々初正嘉中有ニ沙門ㇾ營ニ一宇ㇾ安ニ丈六彌陀像ㇾ名曰ニ極樂寺ㇾ未ㇾ落而亡武州之父重時遷ニ其宇于今地ㇾ爲ニ齋場ㇾ至ㇾ此武州與ニ其弟業時ㇾ戮ㇾ力修營成ニ巨刹ㇾ云々　○いつしか　何時歟也しは助辭也續紀卅六宣命に伊都之可病止豆云々萬三に何時鴨此夜乃將明跡云々また何時然跡待牟妹爾云云　○おぼつかなきほどにしも　源氏帚木におほいとのにはおほつかなくうらめしくおぼしたれど云々宣長が玉の小櫛にすべておぼつかなく又心もとなくなどいふ言は待遠なる心におほくいへり云云こゝは都の便のまちどほなる間をいへり萬八に水鳥の鴨の羽色の春山の於保束無毛おもほゆるかも同十にこのよひの於保束無荷ほとゝぎすなくなる聲のおとのはるけさこれらはおぼゝしくと同じくて欝悒などの字義にかなへり　○山伏のたよりにことづけまうしたりし　此事一の卷にみゆことづけは言附也その事をおほせ附てやるをいふことづても言傳也源氏帚木にその夜のことにことづけてこそまかりたえにしかとあるは託言して中たえたるにいへり萬八にふるさとのならしのをかのほとゝぎす言告遣之いかにつげきやこは言を告やれるにておなじからず　○ありしおかへし　ありしとはさきに在し事をいふ伊物にわするらんとおもふ心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき咲はなの下にかくるゝ人をおほみありしにまさる藤のかげかも此外物に多し　○かたみ　萬二に吾王乃形見何此焉云々同四に余衣形見爾奉云々また吾妹兒乃形見乃服云々此外おほかり同十六に寄物俗ヘニ云ニ可多美ㇾとみえ遊仙窟抄五には行カタミ云々記念カタミ云々など訓たり人の形をみるがごときたとへなり　○かみな月　和歌童蒙抄二に十月この

月よろづの神たち出雲國へおはしますによりて神無月といふ云々奥儀抄上末に十月天下のもろ〳〵の神出雲國に行てこと國に神なきがゆゑにかみなし月といふをあやまれり云々八雲御抄三上に十月かみなづき出雲國には鎭祭月と云云々詞林采葉抄六に抑〻一天下の神無月を出雲國には神あり月ともじんざい月とも申也我朝の諸神參り集玉ふ故也其神在月の浦に神々來臨の時は少童のつくれる如なる篠舟波の上に浮こと不可及筆數諸神は神在の社に集り玉ひて大社へは參玉はずと申彼神在の社は不老山と云所に立玉ふ神號をは佐太明神と申也云々徒然草に十月を神無月といひて神事にははかるべきよしはしるしたるものなし本文もみず但當月諸社の祭なきゆゑに此名あるか此月萬の神達太神宮へあつまり給ふなどいふ說あれどもその本說なしさることならば伊勢にはことに祭月とすべきに其例もなし十月諸社の行幸その例もおほし但おほくは不吉の例也云々莫傳抄に神去月神無月十月出雲なる松の葉守の宮居には神去月となにをいはまし云々秘藏抄上に十月神無月云々又神なかり月かみ山はからくれなゐになりにけり時雨ひまなき神なかり月云々藻鹽草時節部に神無月出雲國には鎭祭月とも云也又神あり月ともいふ也云々語意考に十月は陰月にて雷のならねばかみなづきといひ云々年山紀聞二に九月にさへ霹靂をよめりされば十月は純陰の月なれば雷のこゑをさまりはべる故に無雷月とはいふなるべし云々小車錦に十月神嘗月也云々萩原隨筆三にかみな月は無上月と書くべし數の上なき心也云々倭訓栞加部下にかみなづき十月をいふ十は數の極なれば數皆月の義といへど神嘗月の義なるべし云々類聚名物考時令部一洗革長烏帽子山陰雜筆一などにもみゆ萬八にかみなづきしぐれにあへる紅葉のふかばちりなん風のまに〳〵同十三にもよめり元眞集にちりはてゝ木葉も空にのこらぬを神なし月といふにぞありける曾丹集に何事もゆきていのらんとおもひしを社は有て神無月かな和泉式部集にもよめり　〇そらにうかれし　風雅旅安嘉門院四條いづかたにあり明の月のさそふらんそらにうかるゝたびのこゝろを

(補注)のどかに　直文云この詞わろししづかに寐

莫の意）と書くべき處也　○さそしくるらん　佐々木信綱云袖に涙の雨のふりしならんと也直文云さそはさこその意にて俗言にさためてと云が如し　○ゆくりなく　直文云偶然の事にて俗にびつくりと云に同じ不意即ち思ひもよらずの意也　○あくがれ　心おちつかぬを云直文云うかるゝと云詞に似て意味少し強し　○たび衣及ひゆくりなく　の二首は前卷二の我心うつゝともなしの歌と引き合せて見るべし　○やさしく　直文云二義有一ははづかしと云ふ意にて一はこの轉りたるにてなつかしき意なりこゝのはなつかしき方なり　○又きこゆる　直文云前のうつの山の段におとづれ聞ゆるとあるを受けてそれに重ねて又也　○たのむ　約束するをいふこの歌は伊勢物語に忘るなよほとは雲井になりぬとも空行く月のめぐり逢ふまでといへるに似たる歌の趣向なり

さきのうひやうゑのかみ（前右兵衛督）（諸本有ためのり四字、群本爲旁注、今據古、）の御むすめ（娘）歌よむ人にて、ちよくせん（勅撰）にもたび／＼いり（入）たまへり。大宮院の權中納言ときこゆる人（群る人二字无）歌の

事ゆゑ朝夕まうしなれ（馴）しかばにや。道のほど（間）の（伊无）おぼつかなさなどおとづれ（音信）たまへる文に。

はる〴〵（遙々）とおもひ（思）こそやれ（遣）たび衣なみだしぐるゝほど（間）やいかにと。

かへり（返）事（諸本作返し、今據伊金剛、）に。

おもひやれ露も時雨もひとつにて山路わけ（分）こし（來）袖のしづくを。

このせうと（兄）のためかね（爲兼）のきみも。おなじさまにおぼつかなさ（群作）などかきて。

古郷は時雨にたち（立）したび（旅）衣雪にやいとゞさえ（寒）まさるらん。

返し。（伊作返事）

たび衣浦風さえ（沍）て神無月しぐるゝ雲（群作空）にゆき（雪）ぞふり（降）そふ。

○前のうひやうゑのかみ爲教　尊卑分脉に爲教は爲家二男京極祖左中將從二位左兵衛督出家明心弘安二五廿四薨其子爲兼其妹爲子從二位云々爲教は爲家同腹の弟也爲子は大宮院權中納言也〔〕○大宮の院　女院小傳に大宮院藤姞子後嵯峨后後深草龜山母大相國實氏第一女母大納言隆衡女准三后從一位藤貞子仁治三四廿八叙從三位十八六月十爲ニ女御一八月九爲ニ中宮一寶治二六十八院號文永九二廿

三爲レ尼通智覺四十八正應五九九御事六十八云々女院記に大宮院姞子冷泉前太政大臣第一女後嵯峨院后後深草龜山兩院母儀母入道權大納言隆衡卿女從一位貞子嘉祿元年誕生仁治三年四月廿八日從三位同年六月三日入內年十八同十日女御同年八月九日中宮寶治二年六月十八日院號年廿四文永九年二月廿三日爲レ尼通智覺正應五九九御事あり六十八云々　○せうと　兄人の義伊物に御せうと堀川のおとゞ云々古今序古注にせうとの御云々その外物におほくみゆ女は兄をも弟をもせうとといへどこゝは正しく兄の事にいへり女は男を指て妹といひ男は女を指て妹といふいにしへのならはし也いもとゝいふも妹人の義にて兄人にむかへたる名也

○爲兼の君　公卿補任に故從二位爲教卿男母故修理大夫三善雅衡朝臣女建長八年正月七日叙爵云々延慶三年十二月廿八日任ニ權大納言一云々正和二年十月十七日出家依ニ上皇御出家一也法名蓮覺後改ニ靜覺一云々　○しぐるゝ雲　拾玉七慈鎭長月の今宵のそらをけがさじとしぐるゝくものおもひしりけり續後拾遺戀一定家しられじなちしほの木葉こもるともしぐるゝ雲のいにしみえねば

(補注)はる〲と云々　落合直文云此歌上の二句を下の三句の末に置きかへて見るべし　○露もしぐれも　直文云此詞の内に淚をもふくめり　○たちし　直文云衣の緣にて裁ち切る意を含めり　○さえまさるらん　直文云風のいたく吹きて寒さの嚴しからんといふ意にて汀　○浦風直文云衣の緣にて裏を懸けたり　○ふりそふ　しぐるゝ雨さへあるに其上にまた雪さへ降りそふとなり

式乾（二字、扶作しきけん群作しきかん）門院のみくしげどのときこゆるは。こがの太政大臣の御むすめ。これも續後撰よりうちつゞき。二たび三たびの家々のうちぎゝ（三字、伊作らかき）にも。歌（伊、金、扶、共有の字）あまたいりたまへるひとなれば。御名もかくれなくこそ。（諸本有ニは字一今據レ群）いまは（伊作も）あんかもんゐんに。御かたとてさぶらひたまふ。あづまぢおもひ立し明日とて。まかりまうしのよしに。（群无）北白河どのへまゐりしかど。見えさせたまはざりしかば。こよひばかりのいで（二字伊无）たちものさわがしく

て。かくとだにきこえあへずいそぎいでしにも、（伊作いてしも、兩作いてにしも）こゝろにかゝりて。（伊作かゝりたまひて 群作かゝりたまひ、）おとづれきこゆ。

○式乾門院の御くしげ殿　女院小傳に式乾門院利子四條准母後高倉第一女母北白川嘉祿二十一廿六爲二內親王一廿八同日伊勢齋宮天福元二五退下卅七六廿爲二皇后宮一依二准母一也延應元十一十二爲レ尼依レ病也四十三眞性智同日院號建長三正二御事五十五女云々院記に式乾門院利子後高倉院御女母北白河院中納言基家卿女也四條院准母儀建久八年誕生嘉祿二年十一月廿六日內親王卜定齋王同三年四月廿二日入二諸司一左近府同年九月廿一日入二野宮一安貞二年九月十九日參二伊勢一寛喜元年四月二日准三宮年卅三天福元年二月五日伊勢よりかへり同年六月廿日皇后准母后文暦元年十一月十二日式乾門院と申同日爲レ尼やまひによりてなり年四十三法名眞性智建長二年月日御事あり五十五云々御くしげ殿は拾芥抄中末に御櫛笥殿在二貞觀殿中一以上臈女房一爲二別當一有二女藏人一云々禁秘抄に御匣殿別當是は非二女御更衣之儀一只御所中沙汰人也上古不レ絶有レ之內藏寮外御服など裁縫所也後冷泉院御時賴宗公女候其後絶無二其人一云々西宮記江次第などにも御櫛笥殿の事みえ源氏には帚木より末々の卷に多く出たり　○久我の太政大臣　後久我太政大臣通光公也尊卑分脈に土御門內大臣通親公子母藤範兼卿女寶治二正十七依レ病辭職同十八日薨六十二歲云々公卿補任諸家傳補任などにくはし　○續後撰　拾芥抄上末に續後撰廿卷千三百六十八首云寶治二年七月日奉レ勅欵建久三年十月廿七日依二後嵯峨院宣一民部卿爲家卿奏レ之云々運歩色葉集志部に續後撰集後深草院建長三年辛亥被レ撰之云々撮壤集下に續後撰廿卷云々　○家々の打聞　慕歸繪詞五正和四のとし閑窓集といふ打聞をするに云々徹書記物語に現葉集は打聞にて侍る也家々に打聞とてそのころのうたをあつめおきてさぶらひし也云々清輔集に俊成入道うちぎゝせらるゝときゝて我ことのはのいりいらずきかまほしきことを尋ぬとて云々　○安嘉門院　女院小傳に安嘉門院邦子後堀河准母後高倉第二女母中納言基家女北白河

院承久三十一廿五爲二内親王一十三同十二一爲二皇后一帝同胞姉依二准母一也貞應三八四院號十六文暦二五十四爲レ尼正如覺二十七弘安六九四御事七十五云々女院紀に安嘉門院邦子後高倉院御女第二母北白河院中納言基家卿女後堀河院准母儀承元三年誕生承久三年十一月廿五日内親王十三同年十二月一日皇后宮年十三此日天皇即位准母儀元仁元年八月四日安嘉門院と申文暦二年五月十四日爲レ尼年廿七法名正如覺弘安六年九月四日御事有年七十五云々

○まかりまうし　神代紀上に就マカル云々去マカル云々就去マカリナントス云々永退ヒタフルニマカリナン云々臨死マカルニオヨンデ云々同下に死人マカルヒト云々など訓り和訓栞に間離の義といへり萬三に今者將罷云々同五に麻加利伊麻勢云々などみゆ縣居翁の説にまかるは必退出のことにのみいふよしいはれたり師説にまかりを退出の義とのみするはくはしからずもと間離(マカル)の義にて別るることにいひさて別れて退くにも轉りてはゐやまひの詞にも用たり後撰春下に琴笛などしてあそびものがたりなどし侍りけるほどに夜ふけにければまかりとまりて云々同雜一に四位には必まかりなるべかりけるを云々拾遺春に子にまかりおくれて侍けるころ云々同別に伊勢よりのぼり侍けるにしのびて物いひ侍ける女のあづまへくだりけるがあふ坂にまかりあひて侍けるに云々同戀一に源公忠朝臣に日々にまかりあひ侍けるを云々竹取物語に舟を海の中へまかりいりぬべく吹まはして云々空穗俊蔭上にまかりこづくる云々これら皆敬する心の詞とせりといはれたりまかりまをしは神代紀下に辭マカリマウシとよみ古今離別に人の家にやどりてあかつきいでたつとてまかりまうしければなどみゆ　○北白川どの　安嘉門院御在所なり

(補注)是も云々　山本信哉云按に前文權中納言の勅撰にも度々云々とあるに對へて云へるにてうちつゞきの上に歌のあまた入り給へりと云詞を入れて聞くべしこゝは下文に跨り續したり　○うちぎき　佐々木信綱云歌など聞書に記し置くを云也と信哉云打聞くまゝに記す由にてうちぎゝと名付けしなるべし　○まかり申し　信綱云暇乞をする事也と　○御かた　職原抄の附錄に着二禁色一云々但

自二中宮御方一時々參之間無レ何非レ可レ脱云々とて女官上臈の處に見えたり

草の枕ながら年さへ（群有も字）くれぬるこゝろぼそさ。ゆき（雪）のひま（問）な（日）さなど。（二字伊无）かき（書）あつめ（集）て。きえ（消）かへり（還）なが（長）むる（見）空もかき（搔）くれ（暗）てほどは雲ゐぞ雪に成ゆく。（二字伊作つゝ）などきこえたりしを。立かへりその御返事たよりあらばとこゝろ（伊、群、共有に字）がけまゐらせつるを。けふは（金扶共无）しはすの廿二日。ふみまちえてめづらしく（珍）うれし（嬉）さ。まづなにごともこまか（巨細）にま（申）うしたくさふらふ（候）に。こよひは御方（カタ）たがへの行幸（ギヤウカウ）の御うへ（四字伊无）とて。まぎる（混）ゝほどにて。おもふばかりもいかゞ（如何）とほい（本意无）なうこそ。

○草の枕　旅寐に草引むすびて枕とする心也萬五に道乃久麻尾爾久佐太遠利志婆刀利志提（ミチノクマヲニクサタヲリシバトリシテ）などよめるにておもふべし萬一に草枕客爾之有者（クサマクラタビニシアレバ）とよめるはたびといふ枕詞也　○年さへもくれぬに　按に建治三年のくれをいふ也　○しはす　語意考に十二月を志波須（シハス）といふは登志波都留（トシハツル）月の上下を略き波は本のごとし都と須を通はしいへり萬八に十二月（シハス）爾者云々仁德紀六十二年に季冬（シハス）云々　○御方たがへ　三代實錄卷十一に貞觀七年八月二十一日己巳天皇遷レ自二東宮一御二太政官曹司廳一爲レ求十一月將レ遷二御内裏一也當二此之時一陰陽寮言天皇御本命庚午是年御絕命在レ乾從二東宮一指二内裏一直レ乾故避レ之焉大和物語にかたのふたがればこよひはえなんまうでぬ云々又かたのふたがりければ方たがへにまかるとて云々源氏帚木にこよひなか神うちよりはふたがりて侍りけりときこゆ云々いづくにかたたがへんいとなやましきにとておほとのごもれりいとあしきことなりとてこれかれきこゆ云云しのびくの御かたたがへ所はあまたありぬべけれどひさしくほどへてわたり給へるにかたふたげてひきたがへほかさまへとおぼさんはいとをしきなるべしと云々河海抄に中神也或長神天一神也金撰經曰天一立二中央一爲二十二時一定二吉凶一云々立二中央一之故號二中神一歟件方古今所二違來一也云々湖月抄に天一神は地星の靈也中央に立がゆゑに中神と號す四方に五日つゝ四隅に六日づゝ巡行すか

やうに日をかさねて長々あるゆゑ長神ともいふ也此神のあるかたをふさがりといふ也このゆゑに方違あること也癸巳より天上して十六日あり此間を天一天上といひて八方へゆきてもさはりなき也云々金葉集戀下にをとこのけふはかたゝがへにものへまかるなどいはせ侍りければつかはしけるきみこそは一夜めぐりの神ときけなどあふこととのかたたかふらん百練抄七に保元二年十二月二十三日の條に仁安二四二十三爲ニ御方違一行ニ幸鳥羽殿一修理大膳職之間爲レ避ニ金神方一云々袋草子三に花洛當ニ大白方一云々和名抄神靈部に天一神和名奈賀加美云々太白神和名比止比米久利云々伊勢集にかたゝがふとて京極なる人の我にいきてそのわたりにしりたる人にこのさとのしるべにきみもいでてなんみやこよりとに家はさにけり江次第抄一に太白一日十一日二十一日在ニ卯方一輪ニ轉八方一九日十日在ニ天地一故名ニ一夜廻一是以四方拜毎年必拜ニ東方一也簾中抄下に大將軍方三年ふたがりなりおほふたがりといふ寅卯辰年は北にふたがる亥子丑方を忌べし巳午未年は東にふたがる寅卯辰の方を忌べし

申酉戌年は南にふたがる巳午未方を忌べし亥子丑年は西にふたがる申酉戌方を忌べしこのふたがりの方には土をほり屋をつくり家わたりむことりこうみ佛供養はかをつくことなどみな忌べし但方違つればいまず又遊行の間はふるきあとをたがへず修理をばする也遊行のほどはこよみにつけたり方違の事は節分の前の夜也我家に一夜もとゞまらず又人の家もしは我家なれども本所にあらざる所にては四十五日に一夜たがふべきなり貫之集十後撰戀二詞書にかたふたがりけるころたがへにまかるとて云々同戀三戀四にかたふたかり云々古今雜上にかたたがへに人のいへにまかれりけるときにあるじのきぬをきせたりけるをあしたにかへすとてよみける友則　蟬のはのよるの衣はうすけれどうつりがこくもにほひぬるかな拾芥下抄末に方違所過ニ亥時一畢可レ過レ不レ得ニ天明一云々光平說一夜方違次日歸ニ本所一之時不レ忌歸忌日并十三日歸ニ本所一忌宇治殿御時議定一宇佐記仁平四三二十見ニ天喜四四一土御門記一云々天一太白自ニ大將軍一王相八封忌方重可ニ忌避一是件大將軍等日數久之故也

見ニ保憲勘文一之由宗明朝臣可レ談也云々枕草子春曙抄四にこよひかたのふたがればたがへになんゆく云々　○行幸　古くは天皇及皇親の出行をすべていでましといひ後には御幸行幸の字をみゆきとよめり　扨天皇には行幸太上天皇には御幸と字をわけて書事は拾遺雜の詞書西宮記などよりして後のものにおほくみゆ皇后東宮には行啓といふ也
（補注）草の枕は旅と云意也　○きえかへり云々　直文云消えは雲の緣語也とさてこの詞は悲哀の極度に達したるをいへる也一首の意は消えかへり霽霽として眺る空も我心もかき暗れて此頃は雪空になりゆくと也　○ほどは雲井ぞ　信綱云隔り居る空の意也○立かへり　は此方の書の狀返事の立ちかへり來れる也即ち便あらはの歌よりひと方にの歌まで及びかきくらしの歌は彼方より立ちかへれる返事也　○申したくさふらふに　直文云今日の書簡文と同じ樣なる書き樣也　○御うへ　直文云俗に御事とての意にて其爲思ふ計もえかゝずと也

御たび（旅）あす（明日）とて御まゐ（參）り有（岡作け）ける日しも。峯殿（ミネトノ）のもみぢ（紅葉）見に（諸本无、今据伊扶群）とて。わかき（若）人々さそひ（誘）に（岡作な）しほどに。後にこそかゝ（何乎）ることども（斯有）きこえ候（伊无）しか。などやかくとも御たつね侍（サムラ）はざりし。

ひとかたに袖やぬれましたび衣たつ日をきかぬうらみ（恨）なりせば。さてもそれより雪になりゆくとおし（推）はかり（量）の　御返事（長見）は。

かきくらし（打暗）（六字、伊、岡、共作なし二字）雪ふる空のながめにもほどはくもゐのあはれをぞしる（知）。とあれば。このたびは又。たつ日をも（扶作）しらぬとある御返し（伊作返事）ばかりをぞきこゆる。

心からなに（何）うらむ（恨）らんたびごろもたつ日をだにもしらず顔にて。

○みねどの　増鏡ふぢ衣に今は峯殿のみひとへにはごくみ給けり云々内野の雪に峯殿の御しうとあづまの將軍の御おほぢにて云々峯殿とは光明峯寺關白道家公をいふ尊卑分脉に道家號ニ光明峯寺殿一又峯殿云々こゝに峯殿といへるは白河の別業をいふ本朝高僧傳十六觀勝寺良胤傳に北白河峯殿自注

に藤道家別墅也とみゆ　○たび衣たつ日　を新古離別にきならせとおもひしものを旅ごろもたつ日をしらずなりにけるかな

(補注)聞え候　は直文云きゝ候ひと云に同　○ひとかた　は私ばかりと云意有　直文云ひと方は一方也此頃は只管の意に用ひたり　○たつ日　又うらみなどは衣服をたつ衣服の裏など皆旅衣と云句の緣語也　○ぬれましは　私丈かぬるゝ事でありましやうなど也○ながめ　直文云俗に云見つめると云に同　○ほどは雲井の　直文云程は鎌倉と京師との間を云るにて雲井の云々こゝに居りて遠方に居らるゝそなたの御辛苦を推察し奉るとの意也

○心からは　信綱云自分の心からなるをの意也

直文云此歌なにうらむらんの下に私こそなかくに涙の爲に袖か沾るゝと云意を含ませたり

あかつき(曉)たより(便)ありときゝて。よも(終)二字、作夜、爲すがら(夜)おきゐ(起居)てみやこ(都)の文どもかく(書)中に。ことに(殊)へだて(隔)な(元)くあはれ(憐)にたのみ(憑)かはし(交)たるあね(姉)君に。をさなきひとぐ\の事さまぐ\に書やるほど。れいの浪風はげ(烈)しくきこゆれば。たゞいま(唯今)あるまゝ(任)のこと(様事)をと(伊作ぞ)かき(書)つ(伊、金、共作づゝ)けける

夜もすがら泪も文もかきあへずいそ(磯)こす(踰)かぜ(岡作なみ)にひとり(獨)おきゐ(起居)て。」又おなじさまにて。古郷には戀しのぶ(慕)おとうと(妹)のあま(尼)うへ(上)にも。文たてまつるとて。いそもの(磯物)などのはしぐ\(端々)もいさゝか(少)つゝ(暴)みあつめ(集)て。

いたづら(徒)にめかり(海藻刈)しほやく(鹽燒)すさびにもこひ(戀)しやなれ(馴)し里のあま人。」

○あね君　中院中將のうへ三位入道といふなるよし下文にみゆ　○おとうとの尼上　女におとうとと云事古事記上に其弟木花之佐久夜毘賣(コノハナノサクヤヒメ)云々古今雜上詞書に妻のおとうとをもて侍りける人に云々源氏花宴に朧月夜の君をいへる所に女御の御おとうとたちにこそあらめ云々續世繼くもゐの卷に國母も后もあねおとうとにおはしませば云々後拾遺戀一紫式部日記水鏡上など物におほくみえて擧にいとまなし　○いそ物　磯にてとりし物を何にてもいへる也古今大歌所歌こよろぎの磯立ならし礒

なつむめざしぬらすな沖にをれなみ枕草子春曙抄四にめを一寸ばかり紙につゝみてやりつ云々又そぞろなるめのはしをつゝみてたまへりしかば云々などみえ伊物にはひじきもといふものおくりし事みゆ　○めかりしほやく　萬三しがのあまのめかりしほやきいとまなみくしげのをぐしとりもみなくに

（補注）　たより都に手紙を遣すによき便宜あるをいふ也　○たのみかはしたる　直文云互に思ひ思はれたる事を云　○をさなき人々　爲相爲守などの事を云也　○泪もかきあへず　とは涙をぬくひあふことの出來がたきを云　○すさび　直文云俗にあそび半分といふ詞にてすさびにもはそを見るにつけての意也見るとは阿佛尼が見ること也　○あま人　直文云蜑人に京の尼君をかけたるなり

ほどへてこのおとゝひふたりのかへりごといとあはれにて見れば。あねぎみ。

たまづさをみるになみだのかゝるかないそこすかぜはきく心地して。このあねぎみは中のゐんの中將ときこえし人のうへなり。今は三位入道とか。原、金、岡、共无、扶及群旁注作は、おなじ世ながらとほざかりはてゝおこなひゐ原、金、岡、共无、たる人なり。」そのおとうとのきみも。めかりしほやくとある返事さまざまにかきつけて。人こふるなみだのうみはみやこにも枕の下にたゝへて。などやさしくかきて。

もろともにめかりしほやく浦ならばなか〳〵袖に浪はかけじを。このま二字伊有あ人も安嘉門院にさぶらひしなり。つゝましくすることともを思ひつらねてかきたるも。いとあはれにもをかし。」

○おとゝひ　兄弟姉妹にいふ稱也萬一に住吉之弟日娘與云々顯宗紀と弟日僕是也などみえしは皆兄弟の事にて後に平家物語源平盛衰記曾我物語義經記太平記などに兄弟をおとゝひといへることとおほしこゝは姉妹にいへり今物語に待賢門院の堀川上西門院の兵衛おとゝひなりけりともみゆ　○たまづさ　萬二に玉梓之使乃言者云々此外おほし使にかうぶらせたる枕詞也同十に玉梓公之使とあるは詞をへだてゝつゞけたり同七に玉梓能妹者珠氈云

々こは妹とつゝけたり同三に玉梓乃人曾言鶴云々こはやがて使のことにいへり代匠記二に玉梓之は文持來る使の枕詞也玉はほむる辭にて玉あづさの略語也又使の事ばかりをも玉づさとよめり玉づさを玉章といへるは漢字によりて後人のしわざ也さてあづさといふは梓弓の梓にして弓の事也第十三にさし柳ねばる梓をとよめるははるといふをうけてあづさ弓をよめり日本紀私記には矢は遣の略語のよしみえたり然れば弓は弦をかけて矢をはなちやるが使は中に立て雙方に文を通はし弓の矢をやるが如くといへる也云々萬葉類林五にたまづさの使とは使は玉づさを及ばすなればかくつゝけたり人とつゝくるも使也妹とは玉づさはいづれにもわたりていへど殊に男女の間にかよはすをせんと歌にもよめば玉づさをかよはす妹といふにや君が使とは男女にわたりてよむべし云々萬葉考二に玉はほむる詞津は助辭佐は章の字音にや云々師説に玉梓は玉豆志の通音也字鏡草部に薏苡子玉豆志苡玉豆志などみえ古語拾遺には古語以レ薏曰二都須一とあり本草和名和名抄などには都之太末と讀り今の

世にもずずだまといふ物にてその實一むらに附てなるがゆゑに玉豆志の附合とつゝけたり妹も相したしむ心にてつゝけし也さてやがて使の事にも又使は文もて行かよふものなれば文の事にも轉じていへりといはれたり此説しかるべし　○人戀る泪の海　古今戀三友則しきたへの枕のしたに海はあれど人をみるめはおひずぞありける　○つゝましくすることども　つゝみ憚らはしき義なり源氏桐壺に物つゝましきほどにて云々同帚木にそらおろしくつゝまし云々住吉物語に都の聞えつゝましさに云々大和物語につゝまくしてたてりけり云々いかなる人のすかすならんとつゝましかりければ云々此外物におほくみえて擧るにいとまなし

（補注）たまづさ　信綱梓は弓にする木なれば矢をやるになぞらへてつかひとも云ひ字を刻する木なれば書狀をもいへり　○おなじ世ながら　直文云我が夫と共に世は同じくしながら故ありて遠さかりしなりと云る説よろし信綱云三位入道と此尼君と兩人在世なから也　○おこなひは佛法修行すること也　○たゝへて水の充滿する意なり

ほどなく年くれて。はるにもなりにけり。かすみ（霞）こめたるながめ（眺望）のたど〳〵（不審）しさ。谷の戸はとなり（隣）なれども。鶯のはつ（初）音だにもおとづれ（音信）こ（來）ず。おもひなれにし春の空はしのび（忍）がたく（難）。むかし（昔）の戀しきほどにしも又みやこ（都）のたより（便）ありとつげ（告）たる人あればれい（例）のところどころへの文かく中に。（伊有も字）いさよふ月とおとづれたまへり（二字伊作ひ）し人の御もとへ。

おぼろ（朧）なる月は都の空ながらまだき（未）かざりし波のよる〳〵（原作よなよな）などそこはか（其不定）となき事どもをかき（群有字）てきこえたりしを。たしかなる所よりつたはりて。御かへりごと（五字伊作返事）を。いたう（甚）ほど（間）もへず（不經）まち見たてまつる。

ねられじな都（ミヤコ）の月を身にそへ（添）てなれ（不馴）ぬ枕の波のよるよる。（群作よなよな）

○たど〳〵しさ　萬四に痛多豆多頭志（アナタヅタヅシ）云々此外おほしたどる心也おぼつかなき也後には通はしてたど〳〵しといへり伊勢集下に夕やみは道たど〳〵し月まちてかへれわがせこその間にもみん此詞たど〳〵しからぬと云時は物のたしかにしらるゝ心になれり源氏帚木に打よみはしりがきかいひくつまおと手つきみなたど〳〵しからず云々　○谷の戸　拾遺雜春に谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせで春も過ぬる住吉物語に初聲はけふぞききつる鶯の谷の戸出ていく世へぬらん源氏夢浮橋に谷の軒端ともあり谷の門を戸にとりなしていふより軒ばとも又谷の戸ぼそなどもいへり後には谷かげの奄の戸や軒をもいへり轉用也　○浪のよるよる　浪の寄るに夜々（ヨルヨル）をかけてよめり古今戀二住のえの岸によるなみよるさへや夢のかよひぢ人めよぐらん　○そこはかとなき　其處（ソコ）をはかとも定たるとなき由の詞也高光集に神無月風に紅葉のちるときはそこはかとなくものぞかなしき小馬命婦集にそこはかとさしてくきなきことのはのさすがにあかぬけさぞ戀しき空穗嵯峨院にそこはかとなくあはたゝし云々源氏帚木にそこはかとなくけしきばめる云々此外ものにおほし新萬下にいづこ葬處（ハテカ）とか人のとひこんとあるも同語也はかは終處の

略語也處をかといふは住處隱處などに同じ

(補注)たど〳〵しさ　信綱云たしかならぬ意也直文云俗にはつきりせぬと云詞也不充分の意〇いさよふ月と云々信綱云爲教卿の女爲子にや〇おほろなる云々一首大意は朧なる月の夜の景色は都の空の儘ながら未聞かざりし此の如き所の浪の寄りくる夜の景色は殊別也と也〇そこはかとなく　信綱云俗意あてどもなくと云意也　〇ねられじな　直文云　なは咏歎の辭にて俗言にいへはこゝは寢られぬ事であるだろうかなとの意也〇身にそへてはこひしたひて身にそふる意なりと信綱云へり

權中納言の君は。まぎるゝことなくうたをよみたまふ人なれば。此ほど（伊有の字）手ならひにしたるうたどもかきあつめてたてまつる。海近き所なれば。貝などひろふをりも。なぐさ（き伊作）の濱ならねば。猶なき心ちして。などかきて。

いかにしてしばし都を忘貝浪のひまなくわれぞくだくる。

しらざりし浦山かぜも梅がゝは都にゝたる（り原作）春のあけぼの。

花ぐもり（伊作晴）ながめてわたる浦かぜに（も原作）霞たゞよふ春のよの月

あづまぢの磯山かぜの（伊作まつ）たえ間より浪さへ花のおもかげにたつ。（は伊作立）

みやこ人おもひも出ば（し原作）あづまぢの花やいかにとおとづれてまし。などたゞふでにまかせておもふまゝに。いそぎたるつかひとて。かきさすやうなりしを。又ほどへず返事したまへり。日ごろのおぼつかなさも。此文にかすみはれぬる心ちしてなどあり（二字、群、古、共作はへり）

頼むぞよしほひにひろふうつせ貝かひある浪の立かへる世を。

くらべみよ霞のうちの春の月はれぬこゝろはおなじながめを。

しら浪の色もひとつにちる花を（の原作）おもひやるさへおもかげにたつ。

東路のさくらをみてもわすれずはみやこの花を人

やとはまし。
○權中納言の君　爲教の女也　○なぐさの濱　和名抄に紀伊國名草郡あり今海士郡に隷して名草山名草濱殘れり紀伊名所圖會五にくはし　○わすれ貝　萬一に大伴の御津のはまなる忘貝家なる妹をわすれてもへや同七にいとまあらばひろひにゆかん住のえの岸によるとふ戀忘貝代匠記にちひさき貝を拾ひてうきを忘るゝと云心にて名づくと見ゑたり一種と不レ可レ見云々和訓栞に讃岐國松が浦に戀忘貝とて蛤類の紋形かきし如なるを名產とするは崇德院播遷したまひし時松島のまつが浦風吹よせばひろひてしのべ戀わすれ貝かく詠じたまひしよし也云々按にこの崇德院の御歌といふは後拾遺別の定賴歌也但上の句松山の松の浦風とあり藤原顯綱集にすはういろなる貝のちひさきをこれなんわすれ貝といふはまことか見しりたりやとて人の見せければこれやさは人わすれ貝おぼつかなえこそしらなみあまにとはゞや夫木雜七にきのくにのなくさのはまにかひ拾ふあまのめざしのおとなかりせば　○花ぐもり　爲尹千首になにとなく雨にはならぬ花ぐもりさくべき比やきさらぎの空爲廣卿集にこれぞこの月の桂の花ぐもりかすむをよそになにうらみけん　○ながめ　ながめは長目にて物を長く打守りみるより云多く嘆息の心に用たりされど遠くみやる事にもたゞ打みることにもいふ曾丹集ににほはねどほゝゑむ梅の花をこそ我もをかしと折てながむれまた山がくれ風にしられぬ花しあらば春はすぐとも折てながめん西宮左大臣集にながめあかでをかしきことをいひしまに戀もわが身をつみてけるかなこれらはたゞみる事にいへる也此外にもいとおほくて擧盡しがたしさるを近世淺見寡聞の輩必嘆息の詞と思ひこり口かしがましくいひのゝしるは笑にたへぬ事なりかし　○うつせ貝　實のなき空しき貝なり萬十一に住吉のはまによるとふうつせ貝みなきこともてわれこひめやも　○はれぬ心　拾玉一春がすみかすみこめたる山ざとのはれぬこゝろを人しるらめや

(補注)まぎるゝ事なく　は信綱云他事に紛れず只一向にの意なり直文云今熱心になどいふ意也　○貝は忘れ貝を云にて忘るゝ事なしと云意をいへる

也　○なほなき心ち　は猶かひもなき心地のせられてと也名草の濱に慰むと云意をかけたり　○浪のひまなく　信綱云浪のたえずよるが如くに少しの暇もなく思ひくだくると也碎くるも浪の緣語也國文辭典云くだくるは心のさま〳〵に思はれてはりさくる樣なるを云　○しらざりし　直文云此句浦出風もの下におきかへて心得べし　○面影にたつ　姿の如くに目に立つと云意也　○かきさすは書きすてたる樣也と也急ぎて淸書もせぬさまなり信綱云書きつくさぬ樣になりとなり急ぎて云ひ殘したる事もありしなるべし直文云俗にかきかけると云詞にて中止することと也信哉云土佐日記の十七日の條に聞きさしに云々と見えたるさしと同語と覺ゆ　○賴むぞよ云々　一首の意は訴訟かかひ有て目出度都へ立ち歸る日を待ちたのむぞよと云意にて二三句は序也さてうつせ貝は浪の寄するときは岸に多く上るもの也　○ながめ　長目にて物思ふ時はそことなく物を長く打守りみるよりいふそれよりうつりて嘆息の意に用ひたり　○おもかけにたつ　直文云目前に發するをいはんが如しさてこの下にまして實際其現場にありて見らるゝそなたの心中はいかばかりならんと入れて心得べし　○東路の云々　直文云この歌みてもといふ句より下なるとはましへ跨り續けり返歌の體を得たり

やよひ(彌生)のすゑつかたわか〳〵(稚々、古、作わなく)しきわらはやみ(瘧病)にや。日まぜ(交)におこる(發)こと二たびになりぬ。あやしう(可怪)しほれ(憔悴)はてたるこゝちしながら。三たびになるべきあかつき(曉)よりおきゐて。佛のおまへ(御前)にて。心を一にして。ほくゑきやう(法華經)をよみつ。そのしるし(其驗)にや。なごり(名殘)もなくおち(落)たる。をりしも(時)都のたより(便)あれば。かゝる(此有)事こそなど古郷へもつげ(告)やるついで(道序)に。れい(例)の權中納言(古无爲教女)の御もとへ。たび(旅)の空にて。あやふ(危)きほどのこゝろぼそさ(心細)も。さすが(扶、古、共有に、たもつ四字、)御法のしるしにや。けふ(今日)まではかけ(掛)とゞめ(留)てとかきて。

いたづら(徒)にあま(海士)の鹽燒烟ともたれ(誰)かはみまし(可見)風に消なば。と聞えたりしをおどろき(驚)てかへりごと(返事)とく(早)し給へり。

消もせじわかの浦道に年をへて光を(原作も)そふるあ

まのもしほび」御きやうのしるしいとたふとくて。たのもしな身にそふ友と也にけりたへなる法の花の契りは。」

○わな〳〵しき　古事記神武の條に手足和那々岐弖云々神功紀に戰々栗々敏達紀に搖震皇極紀に動手叉擇戰などみえ字鏡に悸動也亦惶也和奈々久云々このほかわな〳〵と云る事物語文などにおほくみゆ　○わらはやみ　和名抄病類部に說文云瘧寒熱並作二日一發之病也俗云衣夜美一云和良波夜美云々源氏若紫にわらはやみにわづらひ給ひて云々榊末摘花の卷などにもみゆ　○なごり　萬葉四に難波がた鹽ひの名凝云々文選江賦に綸ニ餘波ヲ乎柴桑ニ海賦に餘浪獨湧云々長恨歌傳に餘波云々源氏明石に月さしてしほのちかくみちくるあともあらはになごり猶よせかへる浪あらきをと云々などみえて餘波なるをものゝのこりたる事にもうつしいへり　○たへなるのり　新續古今釋教俊成あらき海さびしき山の中なれどたへなるのりはへだてざりけり

(補注)わか〳〵しき　直文云わかは形容也こゝは老人には不似合なる童などの爲すべき樣なる病と云意也　○ひませ　信綱云隔日の意也　○おちたる　直文云瘧病にかぎりてなほすといはずものゝけなど云ものゝ樣におとすと云り　○かゝる事こそ信綱云瘧病になやみし事を云直文云こその下にありしかと云詞を略せり　○さすが　しかしながらの意也信綱云さすかにとあるべしさすか何とつづくは此程よりあやまりたりもとはさすがにさすがはなどてにをはを添へて云り　○いたづらに　直文云此下に五の句を入れて聞くべし　○消もせじ　信綱云何とて消え給ふべきと也直文云此詞はもしほびの下に續く言葉にてそこにはの字を省けり和歌の浦路云々は阿佛尼歌道の爲めに辛苦することをいへるにていかなることありともそなたの身のはかなく消ゆる樣なることはあらますまいといふ意也　○たへなるのり　は妙法蓮華經と云をとれる也　○ちぎり　直文云吾々が信心してたのめは佛は其願を開くといふ約束事則ちちぎり也

卯月のはじめつかたたよりあれば。またおなじ人の

御もとへ。こぞのはるなつのこひしさなどかきて。
見し世こそかはらざるらめ暮はてゝ原、群、共作し春より夏こうつる梢も。
なつ衣はやたちかへて都人いまやまつらん山ほとゝきす。その返事又あり。
草も木もこぞみしまゝにかはらねどありしにもにぬ心ちのみして。さてほとゝぎすの御たづねこそ。
人よりも心つくしてほとゝぎすたゞ一聲原、古、作二聲をけふぞきゝつる。」
さねかたの中將の五月まで時鳥きかでみちのくにより續後撰夏實方みやこにはきゝふるす續後撰、群イ、共作りぬらん時鳥せきのこなたの身こそつらけれ。とかや申されたる事の候な。群、古、有ニる字一共そのためしとおもひいでられて。此文こそことにやさしくなどかきておこせたまへり。さるほどに卯月のすゑになりければ。古、さ、作郭公のはつねほのかにもおもひたえたり。人づてにきけば。ひきのやつといふところにあまたこゑなきけるを人きゝたりなどいふを古作さきゝて。
しのびね原、有に字はひきのやつなる時鳥雲ゐにたかくいつかなのらん。などひとりおもへどもそのかひも古も字无なし」もとよりあづまぢはみちのおくまでむかしより。ほとゝぎすまれなるならひにやありけん。一すぢに又なかずはよし。まれにも聞人ありけるこそ人わきしけるよと。心づくしにうらめしけれ。」

○卯月　萬十六に四月與五月間爾藥獵云々また十九に四月之立者云々卯花のさく月なれば卯花月の義也　○ありしにもにぬ　新古今秋上小町ふきむすふ風はむかしの秋ながらありしにもあらぬ袖の露かな　○實方の中將　古事談二に實方をば歌枕見てまゐれとて被レ任ニ陸奥守ニ云々於ニ任國ニ逝去云云實方朝臣の吾嬬くだりの事は此外長明無名抄下寢覺記三續世繼十東齋隨筆十訓抄第八莵玖波集賀の部などにみゆ　○みちのくに　和名抄國郡部に東山國陸奥三知乃於久云々國府在ニ宮城郡ニ鎮守府在ニ膽澤郡ニ行程上五十日下二十五日管三十六田五萬千四百四十町三段九十九歩公八十萬三千七百

五束五把本穎二百三十八萬六千四百三十一束雜穎九十七萬九千七百十五束九把五分云々景行紀に陸奥國云々齊明紀に道奥また陸道奥云々萬葉十四又十八に美知能久云々人丸集にはむつの國とよめり此外延喜主計式上以呂波字類抄見部拾芥抄中末節用集國郡部大八洲記七洲名紀原人國記國名風土記上海東諸國記古事記傳二十諸國名義考上などにくはし東北のはてなれば道の奥と云へる義也五十四郡の事は神道集八節用集平家物語太平記などにみゆ ○せきのこなた 古今戀一に音羽山おとに聞つやあふ坂の關のこなたに年をふるかな ○やさし 長恨歌傳に閑冶ヤサシゲ也と讀り萬葉五に吉美乎夜佐之美云々又世間乎宇之等夜佐之等於母倍共云々竹取物語源氏眞木柱などに人ぎゝやさしとみえたり古今誹諧に何をして身のいたづらに老ぬらん年の思はん事ぞやさしき耻かしき心また閑冶の義に用たり ○ほのか 新撰字鏡イ部に佛仿佛也或爲二髣字一保乃加爾云々萬葉二に髣髴見之云々十に不明云々 ○ひきのやつ 鎌倉志七に妙本寺云々此地を比企谷と云比企判官能員か舊跡也今按するに武州に比企郡と云有頼朝の乳母能員か姨母武州比企郡を請所として居す故に比企尼とし號す甥の能員を猶子として共に此所に來居す故に比企谷と云也云々比企の谷に忍音に卑によせたる也

（補注）こその春夏 直文云上文やよひのすゑつ方云々又卯月の初つかた云々と云へるに對へてこゝに春夏の二季のみとり出でて云る也 ○見し世こそ 直文云諸共に見し世こそ去年の如くにて變らざるらめの意 ○暮はてゝ 直文云春かくれはつるを云ふ春より夏にうつれば青々として繁る稍も昔の如くならずと云ふ意を含めたるにて梢と云詞に吾身をよせたり ○夏衣はやたちかへて 更衣の事をいへるにて四月に春衣を夏衣に着更ふる儀あり ○ありしも似ぬ 信綱云昔にかはりしやうなる心地となり ○心地のみして 直文云此下に其草木の花ともをもろともに見る事も出來ねばさらに樂もなしと入れて聞くべし ○御だづねこそ 直文云この下に殊に感したれなどいふべきことを省けり ○ほとゝぎすただ云々ヿ こゝは阿佛尼にたとへたるなり ○やさしく 直文云ことさら優美の樣に吾は感服せりなどいふことをかきてなり

○ほのかにも　ちよいとでも聞く事なき故に遂に
斷念したりと也　○雲井に高く云々　直文云高く
は上句ひきの對にていつかなのらんは時鳥の雲ゐ
高く名告りいづらんか如く阿佛尼の訴訟の判決し
て正名を世間にためる樣な時はいつ來るであらう
かとなり　○ひとわき　一人は聞きて一人はきか
ぬ事にて郭公の人によりて愛憎あるよとなり信胤
云人の差別をつくるなり直文云里別（サトワキ）と同例なり
又くわと（和德）（諸本作こ、今据新本）く門院の新中納言ときこゆるは。
京極の中納言定家（群、古、共二字无）の御むすめ。ふか草のさき（前）
の齋宮ときこえしに（隨）。ちゝの中納言のまゐらせおき（進置）
給へるまゝにて年へ（經）給にける。此女院は齋宮の御子（傳）
にしたて（爲奉）（古、作たちたまふて）まつり給へりしかば。つたはりて
さぶらひ（候）給なり。うきみこがるゝもかり舟（藻刈）などよみ
たまへりし。民部卿のすけ（典侍）のせうと（兄人）にてぞおはす（古作）
（し）る。さる人（可然）の子にてあやしき（奇怪）歌よみて。人には（古作）
（け）（も）きかれし（不被聞）とあながち（强）につゝみ（藏）給しかど。はるかな（遙）
るたび（旅）の空おぼつか（覺束）なさ（無）に。あはれなる事どもを（古无）

かきつゞけて。
　いかばかり子をおもふつるのとびわかれ（鶴飛別）ならはぬ
たびの空になくらん。と文のことばにつゞけて。歌（不）
（閑）のやうにもあらずかきなし給へるも。人よりはなほ（等）
ざりならずおぼゆ。（古有る字）御かへりごとは。
　それゆゑにとびわかれ（飛）てもあしたづ（芦田鶴）の子をおもふ
かたはなほぞかなし（群作こひし）き。ときこゆ。」
○和德門院　義子内親王とまうす九條廢帝ノ姫宮母ハ
順德院女房右京大夫女院記に文應二年三月八日准
三宮同日院號元内親王弘安十年十二月十日爲レ尼（五十）
（四）法名眞如覺正應二年十二月七日御事有五十六云
云また紹運錄中女院小傳などにもみゆ拾芥抄宮城
部に化德門在二東綾綺殿北一今亦無レ額又云二無名
門一云々又無名門大内圖云右靑瑣門南也當殿如レ此
注文之上以二化德門一又可レ謂二無名門一歟若書誤歟
云二化德門之無名門一者所二分明一也依可二混亂一哉云
云なよ竹中將物語に化德門の御つぼにて云云御鞠
侍し云々　○齋宮　後鳥羽院皇女類聚大補任に建
保五年熈子内親王御歳十三九月十四日立野宮同十

九日着　○うきみこがるゝもかゝり船　續後撰戀五にごりえにうきみこがるゝもかゝりふねはてはゆきゝのかげだにもみず堀川百首柳にもかゝり船ほつつしめ繩こゝろせよ河そひやなぎ風になみよる　○子をおもふ鶴　堀川百首鶴に澤ふかきなか子を思ふあしたづは聲も心も空にやあるらん夫木集雜九に從二位賴氏子をおもふ聲もまがはじ鹽がまのみしまがくれの松の友つる　○なほざり　白氏文集に等閑云々千家詩の注に尋常也とあり遊仙窟に平生をもよめり直有(ナホソアリ)の義と和訓栞にいへり事もなくてあるよし也師說になほは常の義也なほ人も常の人也物の曲れるをなほすと云も常のさまにするをいへりされはなほざりも直去にて平常のまゝにて時日の過去るよし也といはれたり　○あしたづ　鶴は芦間にをりゐるものなればあしたづと云りたづも田にあさるゆゑに田鶴とは云りあしたづは萬葉四また六同十一の卷などにあり契沖はあしげ馬といふも芦花のしろきにたとへし名にてあしたつも又白きよし也といひ入江昌熹も道濟集にほに出たる汀の芦のあしたづの千代にかはらぬ色かとぞみるとあれば鶴と芦花のいろのひとしきよしなりといへり

(補注)門院の新中納言　直文云門院に御仕へ申しゝ女房なり　○ちゝの中納言のまゐらせおきたまへる　直父云父の中納言の我娘新中納言をば齋宮へまゐらせなり　○此女院は　直文云和德門院なり　○まつりたまへりしかばつたはりて　直文云前には母の方(前の齋宮)に仕へ今は御養女(和德門院)の方につたはりてなり　○さるべき人は　然るべき人の意にて即ち定家卿をさす　○たびの空になくらん　直文云空にの下に上の第一句を入れてきくべしなくらんは鶴の緣語なり　○なほさり　深切にて世の常ならずとの意なり　○子を思ふかた直文云かたは方にて都をさすこれに海濱のひがたをかけたり

そのついでに。故入道大納言(爲家)草のまくら(枕)にもたち(立)そ(添)ひてゆめ(夢)にみえさせ給ふよしなど。この人ばかりやあはれ(可憐)ともおぼ(思)さんとて。かきつけてたてまつる。

都までかた(語)るも遠しおもひねにしのぶむかしの夢のなごりを。

はかなしや旅ねの夢にまよひきてさむればみえぬ人の面影。などかゝけ二字、在ってたてまつりし古作を。あながちにたよりたづねてかへりごとしたまへり。さしもしのび給へりしも。をりからなりけり。

東路の草のまくらはとほけれどかたればちかきいにしへの夢。

いづくより旅ねのゆかにかよふらんおもひおきつる露をたづねて。などの給へり。」

○さむればみえぬ　千載雑中にうきことのまどろむほどはわすられてさむればゆめのこゝちこそすれ　○思ひおきつる　新古今雑下左大将朝光あさぢふをたづねざりせはしのぶくさ思ひおきけん露をみましや

(補注)よしなど　直文云かきつけてと云詞に跨續したる文法なり　かたるも遠し直文云もの字深意あり　そは尋常の事さへ都へ云やるは[illegible]して昔を忍ぶ夢語の實事に遠きぼん[illegible]横をかたるも亦の意也さてこの歌は初二の句を五句の下に置きかへて見るべし　○はかなしや　直文云第五の句の下におもかけははかなしやと入れかへて聞くべし　○あながちに云々信綱云强て便を求めての意也　○さしも云々　直文云この句は先方の手紙の中にある文句也　○をりから也けり　前の御手紙の如く感じ給へりし時なればかくこの事も忍び給へりし也けりと云意なり　○おきつる　直文云おきは露をいはん爲に設けたる縁語なり

なつのほどはあやしきまでおとづれもたえて。おぼつかなさも一かたならず。みやこのかたは志賀のうらなみたち。山三井寺のさわぎなどきこゆるも。いとゞおぼつかなし。からうして八月二日ぞつかひまちえ。扶、群、共日ごろよりおきたりける人々のふみどもとりあつめてみつる。

○志賀の浦　景行紀に居ニ志賀ニ三歳云々古事記成務の段に志賀高穴穗宮云々元正紀に志我依智二郡云々萬一にさゝ浪の志我能大和太云々此外萬葉に歌おほかり和名抄に近江國郡滋賀志賀云々　○山三井寺のさわぎ　山とは比叡をさしていへる稱

なるよし上の卷にみゆ帝王編年記に弘安元年五月十二日巳時日吉神輿二基入洛是依ニ園城寺金堂供養ニ也十六日日吉神輿各歸坐云々

侍從のさいしやうの群六字无君のもとより五十首の和歌原字无二をよみたりけるとて。きよがきもじあへずくだされたり。諸作る今据群歌もいと古宇有となをかしくなりにけり群作まけり。五十首に十八首てんあひぬるもあやしく心のやみのひがめこそあるらめ。その中に。

心のみ群イ作こそへだてずとてもたび衣山路かさなるをちのしら雲

とある歌をみるに。たびの空を思ひおこせてよまれたるにこそは。原作いと。心をやりてあはれなれば。その歌のかたはらに。もじちひさく返事をぞ原書无かきそへてやる。

戀しのぶ心やたぐふあさ夕にゆきてはかへるをちのしら雲

又おなじたびの題にて。

かりそめの草の枕のよる／＼をおもひやるにも袖ぞ露けき

とある所にも又かへりごとをぞかきそへたる。

秋ふかき草のまくらにわれぞなくふりすてゝこしすゞむしのねを

又此五十首のうたのおくにことばを書そふ。おほかた歌のさまなどしるしつけておくに昔の人の歌。

是をみばいか計かとおもひつる人にかはりてねこそなかるれ

とかきつく。

○きよがき　古今著聞集六にいろ／＼の色紙を縫慈鎭和尚に淸書を申云々　○てんあひ　吾妻鏡四十八に武州申ニ下供奉人御點ニ被レ遣ニ越後守許ニ云云右御點布衣左長點隨兵短點帶劍云々同五十一に將軍家今年中御詠歌數卷之中抄出三百六十首致ニ淸書ニ是爲ニ合點ニ可レ被レ遣ニ入道民部卿ニ云々明月記建久三年三月七日の條に不レ可レ及ニ合點ニ云々節用集加部に合點云々運歩色葉集加部に合點云々下學集言辭門に合點言同心之義也云々行宗集に露のてん心にかなふものならば云々又朝毎に書おく露のてんなれば云々袖中抄十二に合點してよめる歟云云土御門院御集家隆卿の語に惣テ此中左右點片點

點ニ分申上候云々耕雲口傳に信州中書王になり合點有し時と云々てんをあひたまひて言葉をこまかに書添たまひしにと云々玉勝間十に歌の點に片點諸點といふこと家隆卿の書れたるものにみえたり持統紀に點サタム靈異記に點サスとよめり　○おこせて　萬十八に白玉のいほつつどひを手にむすび於許世伴安麻波むかしくも有か同十九にわきも子が形見がてらに紅の八鹽に染て於己勢多流ころものすそは云々遊仙窟に遣スオコ云々和訓栞に送らすの義といひたれど送越オコスの意なるべし　○たぐふ　神代紀上に耦生タグヒナル字鏡イ部に儕タグヘリ太久比佛足石歌に多具覇利云々萬四に副而ナクヒテ云々その外おほかり　○おもひやるにも　山家集上に露ふかき野べになりゆくふるさとはおもひやるにも袖はぬれけり　○ふりすてゝ　源氏鈴虫におほかたの秋をばうじとしりにしをふりすてかたきすずむしのこゑ

(補注)てんあひ　合點にて同心の意也よろしき歌に點をさすなり　○心のやみ　直文云人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまよひぬるかなといへる歌の意也　○心のみ　一首の意は身は隔りをるとも心のみは隔てずしかしながらさはいひても旅の山路かさなり遠き所に白雲の中を隔てゝをればそなたのそらのみ覺束なく思はるとなり直文云へたてのへ又かさなるなどは何れも衣の縁なり○たぐふ　直文云一物ある上に又一物のそはるをいふ　○かりそめ　直文云一寸の意なり又云この歌のかりと云ひ露といへるは皆草の縁語也　○おもひやるにも　云々は思ひやりてさへも吾袖のぬるゝ位であるまして草の枕なる母上はいかならんとの意也　○ふりすて　五の句の鈴虫の縁語也直文云この歌は縁語いと多し凡て此時代の歌はそれなるをことに甚だしこの鎌倉時代の歌の代表ともいふべからん　○是をみば　云々直文云この歌は爲家の在世中或る人の親なくなり後より歌よむ樣になりたるによみてやりたる歌なりにつかはしければこゝに又阿佛尼のしるしゝなりさてこれをみばは爲家が之を見ばなり

待從　爲守

じゞゆうのおとうとためもりのきみのもとよりも。

三十（原作卅）首のうたをおくりて。これにてんあひて。わろからん事をこまかにしるしたべといはれたり。ことしは十六ぞかし。歌のくらなれば。やさしくおほゆるも。かへすがへす心のやみと。かたはらいたくなん。これもたびのうたにはこなたをおもひてよみたりけりとみゆ。下りし程のにつきを。この人人のもとへつかはしたりしを。よまれたりけるなンめり。立わかれふじのけぶりをみてもなほ心ぼそさのいかにそひけん。またこれも返しをかきつく。

かりそめに立別れても子をおもふおもひをふじの煙とぞみし。」

○ことしは十六ぞかし　常樂記に嘉曆三年十一月八日曉月房逝去終焉歌むとせあまりよとせの冬のながきよにうきよの夢をみはてぬるかなこれによれば弘安元年は爲守十四なり諸本十六とあるは誤なるべし　○心ぼそさ　拾玉集三にすごきかなやくすみがまに立けふり心ぼそさを空にみせつゝ

（補注）歌のくち　歌の詠みはじめ也　○かたはらいたく　見るに氣の毒なるを云直文云笑止千萬の意なり　○心ほそは煙ハ縁語也　○おもひのひに火をかねていへり直文云おもひを見しと跨續せり

また權中納言の君こまやかに文かきて。くだり給ひし後は。うたよむ友もなくて。秋に成てはいとゞおもひいできこゆるまゝに。ひとり月をのみながめあかしてなどかきて。

東路の空なつかしきかたみだに忍ぶ泪にくもる月かげ。此御返事これも古鄕の戀しさなどかきて。

かよふらし都の外の月みても空なつかしきおなじながめは。都の歌どもこのゝちおほくつもりたり。又かきつくべし。

（補注）かたみに　信綱云かたみとおもふたにの意なり直文云こゝの意はなつかしき形見と思ふ處の月影が晴れたるならば心よきに其月だにの意なり

○かよふらし　直文云この詞おだやかならずそはとまれこゝの意はそなたの心のごとく吾が心も同じくとなり

しき島や　やまとの國は　あめつちの　ひらけ初し

むかしより（昔従）　岩戸を明て　おもしろき（面白）　かぐらのこ（神樂詞）
とば　うたひてし（謡　ときく扶）　されば（然　すてられず扶群イ）　かしこき（賢）　ためしとて（例）
ひじりの御世の　みちしるく（道　微　しる群イ）　人のこゝろを（心）　たね（種）
として（なびくめり扶群イ）　よろづのわざを（事）　ことのはに（言端）　おに神まで（鬼）
も　あはれとて（可憐）　八島の外の　よつのうみ（四海）　波もし
づかに　をさまりて（治）　空ふく風も　やはらかに（和）　枝
もならさず　ふるあめも（降雨）　時さだまれば（定）　きみ〴〵（君々）
のみことのまゝに（御言随）　したがひて（従）　わかの浦路の（和歌）
もしほぐさ（藻鹽草）　かきあつめたる（集）　あとおほく（跡　多し原）　それが
中にも　名をとめて（留）　三代までつぎし（繼）　人の子の（もち）
親のとりわき（取別）　ゆづりてし（讓）　そのまことさへ（實　なけ群）　あり（もち）
ながら（群）　おもへばいやし（思賤）　しなのなる（信濃在）　そのはゝ（帚）
木々の　そのはらに（園原）　たねをまきたる（種蒔）　とかとてや（咎）
世にもつかへよ（谷仕）　いけるよの（生涯）　身をたすけよと（扶助）　ち（契）
ぎりおく（置）　すまとあかしの（須磨明石）　つゞきなる（續在）　ほそ川山
の山が（扶古群イに扶群イ古）　は　のわづかに（僅）　いのち（命）　かけひと（懸樋）

て　つたひし水の（傳）　みなかみも（水上）　せきとめられて（堰留）
いまはたゞ（今唯）　くかにあがれる（陸上）　うを（原魚）のごと（如）　かぢを（揖緒）
たえたる（絶）　ふねのごと（舟　にいこて扶）　よるかたもなく（寄方　無）　わびはつ（侘果）
る　子をおもふとて（思）　よるのつる（夜鶴）　なく〴〵みやこ（都）
いでしかど（出）　身はかずならず（不數）　かまくらの（鎌倉）　世のま（政）
つりごと（事）　しげければ（繁多）　きこえあげてし（聞上）　ことのは（言端）
も　枝にこもりて（隠）　むめのはな（梅）　よとせの春に（四年）　な
りにけり　行へもしらぬ　なかぞらの（中虚空）　風にまかす（任）
る　ふるさとは（故郷）　軒端もあれて　さゝがにの　いか（如何）
さまにかは（樣）　なりぬらん　世々の跡ある　玉づさも
さて朽はてば（古）　あしはらの（芦原）　道もすたれて（廢）　いかな（如何）
らん（成）　これをおもへば　わたくしの（私）　なげきのみか（歎）
は　世のためも（為）　つらきためしと（例）　なりぬべし　行
さきかけて（末掛）　さま〴〵に　かきのこされし（書殘）　筆のあ
と　かへす〴〵も　いつはりと（偽）　おもはましかば（いふ人あら扶群イ）
ことわりを　たゞすの森の　ゆふしでに（木綿四手は古）　やよやい（聊）
さゝか　かけてとへ（心掛問）　みだりがはしき（妄）　すゑの世に（末）

あさはあとなくなりぬとか　いさめおきしをわすれずは　ゆがめる事を　またたれか　引なほすとべき　とばかりに　身をかへりみず　たのむぞよそのよを聞ば　さてもさは　のこるよもぎと　かこちてし　人のなさけも　かへりけり　おなじはりまのさかひとて　一つながれを　くみしかば　野中の清水　よどむとも　もとの心に　まかせつゝ　とゞこほりなき　みづくきの　あとさへあらば　いとゞまたく　つるがをかべの　朝日かげ　八千代の光　さしそへて　あきらけき世の　なほもさかえむながゝれと　朝夕いのる君が代を　やまとことばにけふぞのべつる

○しき島の倭國　萬十三に志貴島倭國者云々此外いとおほし崇神紀に三年九月遷ニ都於磯城ニ是謂ニ瑞籬宮ニ云々古事記崇神の段に師木水垣宮云々垂仁の段に師木水垣宮云々欽明紀に元年七月遷ニ都ヲ倭國磯城郡磯城島ニ仍號ニ磯城島金刺宮ニ云々古事記欽明の段に師木島大宮云々敏達紀に磯城島天皇時云々欽明紀に磯城島宮御宇云々孝徳紀にもみゆかく久しき都の地なれば其國の枕詞にもおほせていへる也萬十九に之奇島能人者和禮自久とよめるは敷島を大倭國の事にいひ後々は大八洲の事にもかよはしいへり歌の道をしきしまの道といふも日本の道といはんがごとし　○天地のひらけ初し　萬三に天地之分時從云々などみえて古書の例を考に天地わかれといへどひらけといふはいと後の事也そは神代紀の開闢の字になづみてあめつちひらけと有より誤れり　○ひじりの御代　古事記仁徳の段に故稱ニ其御世ニ謂ニ聖帝世ニ也云々古事記傳三十五に聖帝二字を比士理と訓べし日知の意也但し此は皇國の元よりの稱にはあらじ聖の字に就て設けたる訓なるべし其は漢籍に聖人と云者の德をほめて日月に譬へたることあるを取て日の如くして天下を知しめすと云意なるべし されば天皇を賛奉りて日知と申すは此天皇より始まれる事にて漢國例に效へる稱なりと云々なほ委しくは上の卷にみたり　○人の心をたねとして　古今集序にやまとうたは人の心をたねとしてよろづのことのはとぞ

なれりける　○おに神までもあはれとて　古今集序にちからをもいれずしてあめつちをうごかしめにみえぬおに神をもあはれとおもはせ云々　○よつの海　玉霰によつの海といへることはやゝふるくもみえたれどひが事也いにしへの歌文には多くはよもの海とこそいへれ四海（シカイ）といふもじも四方の海といふ意なり四つの海といふことにはあらず四つの海とてはうみの四つある事になるぞかし云々されど後拾遺集序によつの海浪の聲聞えずこゝのつの國みつぎものたゆることなし云々夫木抄雜五に小侍從よつのうみの波しづかなるきみが代に海土の命もうれしかるらんなどもみえて中ごろよりいひならへることなればふつにいひけつべき事にもあらず　○空ふく風もやはらかに枝もならさず

王充論衡十七是應篇に風不レ鳴レ條雨不レ破レ塊五日一風十日一雨云々西京雜記五に太平之世則風不レ鳴レ條開レ甲散レ萠而已雨不レ破レ塊潤レ葉津レ莖而已云々鹽鐵論八に周公載紀而天下太平國無二天傷一歲無二荒年一當二此之時一雨不レ破レ塊風不レ鳴レ條旬而一雨雨必以レ夜無二丘陵高下一皆熟云々慈慧大師傳に天朗二氣清風不レ鳴レ條云々子日行幸和歌序に風は枝をならさず雨はつちくれをやぶらずよの中たのしければけふのみゆきはあります也云々千載集賀に崇德院ふく風も木々の枝をばならさねど山は久しきこゑぞきゆる榮花月の宴に吹風も枝をならさず云々清輔集にきみが代に枝もならさでふく風は花橘のにほひにぞしる增鏡おどろのしたに吹風も枝をならさず云々思ひのまゝの日記にふく風も枝をならさず云々右京大夫集上に吹風も枝にのどけき云々曾我物語上にふく風も枝をならさずふる雨つちくをうごかさて云々夢意國師集にふく風の枝をならさぬ春云々　○君々の　菟玖波集賀にながれをうくるきみぞきみなる論語六に君君臣臣（タリ）父父子子云々　○三代までつぎし　俊成定家爲家の三代をさしていへり　○信濃　和名抄五に東山國信濃國府在二筑摩郡一行程上二十一日下十管十田三萬九百八町八段百四十歩正公各三十五萬束本稻八千九百五十束雜稻十九萬五千束云々信濃風土記に往（イニ）昔（シヘ）建御名方神等之所レ住之地也治二天下一御神大穴持命又少彥名命建御名方命巡二行此國一給到二坐阿

羅野一詔此國者木葉草垣葉品々也故云品野今云信濃者音之轉也云々景行紀に日本武尊進入信濃是國也山高谷幽翠嶺萬里人倚杖而難升巖嶮磴紆長峯數千馬頓轡而不進云々古事記傳十四に科野國名義は山國にて級坂ある故の名なりと云々また一說に此國には倉科穗科御科仁科蓼科など志那てふ地名いとおほかり科は古いはゆる栲これなり神樂歌にも木綿造る科の原とみえ諏訪神社の御裝束鎧のおどし馬の餝船の綱などにも用ふ然れば科野てふ國名も此木より出たるなり今も級布紙布藤布多布布などを出し更級郡などは殊に楮を多く出して名產也云々倚國造本紀延喜主計式上以呂波字類抄志部拾芥抄中末節用集國郡部大八州記七州名紀原人國記國名風土記上海道諸國記諸國名義考上などにみゆ　○そのはゝきゝのそのはらに　信濃風土記に曾原郷出波々枳木杉松萱等云々綺語抄下に或人云はゝき木の杜の有也其杜いとしらけて杜の中にはゝき木の生たる也夫を遠くてみればあるやうにみえて杜の下に至りてみるに木の茂りてみえぬ也夫を云也或人云帚木に似たる木の其杜にある也夫を遠くてみるにはあるやうにて近くてみればあらぬ也云々俊頼口傳上卷奥儀抄中袖中抄十九續歌林良材上東遊記後編三色葉和難集一色葉集下の二木曾路名所圖會三信濃地名考中西遊行囊抄四の上笈埃隨筆九などにこれかれ云り古今六帖五にそのはらやふせやに生る帚木の有とてゆけど逢ぬきみかな此歌新古今戀一に坂上是則が歌として四の句ありとはみえてと有源氏帚木にはゝき木の心をしらでそのはらの道にあやなくまどひぬるかな信濃國志に薗原山在小縣郡信州與濃州界伊那郡亦有曾乃原云々古今著聞集和歌部に解脫上人のうたおそろしや信濃うみけんはゝき木のそのはらさへにうとましきかな此歌もはゝき木に母をよせその原に其腹をよせたり　○須磨　延喜兵部式に攝津國驛須磨云々萬葉三に須磨乃海人之云此外おほかり吾妻鏡四に播磨國有須磨明石等之勝地云々攝津志十二攝陽群談一の下同五などの矢田部郡の部陸西遊行囊抄四の卷などにみゆ　○明石　和名抄に播磨明石郡明石安加之云々舊事紀國造本紀に明石國造云々神功紀に詣播磨興山陵於

赤石云々允恭紀に赤石海底云々清寧紀に赤石郡云云顯宗紀同孝德紀に赤石櫛淵云々續紀九に播磨明石賀古二郡云々續後紀十五に播磨國明石濱云々萬三に留火之明大門云々此ほかにもあり　○くがにあがれるいを　師說に金光明最勝王經捨身品に大車王の第三子摩訶薩埵太子大慈悲心を起し身を大竹林の餓虎に投與し時其母國太夫人悲傷の事を說る條に爾時夫人迷悶稍止頭髮蓬亂而手槌胸宛轉于地如魚處陸若牛失子悲泣而言云々とみえたる故事によれるなるべしまた莊子外物篇に有中道而呼者周顧視車轍中有鮒魚焉周問之曰鮒魚來子何爲者邪對曰我東海之波臣也君豈有斗升之水而活我哉周曰諾我且南遊吳越之王激西江之水而迎子可乎鮒魚忿然作色曰吾得斗升之水然活耳君乃言此曾不如早索我於枯魚之肆云々共みゆと云々　○かぢをたえたる舟　曾丹集にゆらのとを渡る舟人かぢをたえゆくへもしらぬ戀の道かな新古今戀一百人一首などにものせたりさてかぢをたえは楫緒とて今の艪のはやをといふものゝ絕たるとなるよし諸說をあげて云れし師の說あり　○枝にこもりて梅のはな　古今序に難波づにさくやこのはな冬ごもり今を春べとさくやこの花　○よとせの春　弘安三年なり　○さゝがにのいかさまにかは　さゝかにの蜘のふるまひいかさまにかはなりぬらんとの意なりさゝがにとのみいひて蜘の事とせりさゝがには蜘といはん枕詞なるよし上の卷にくはしくみゆ　○あし原の道　和歌の道の事にてしきしまの道ともいふにおなじ神代紀上に豐葦原瑞穗國とありて御國のはじめ葦のおほかりしゆゑの稱也　○つらき　和訓栞につれなきの略也うきとつらきと相似てつらきは人心の上によりうきは我心の上に就ていふなり拾遺にわれやうき人やつらきとちはやぶる神てふ神にとひみてしがな又二つながら人のうへにも我かたにもつけたる歌もおほし後撰にいかでかくひとつ心をふたしへにうくもつらくもなしてみすらん神代紀上に最惡イトツラウシテ云々萬五に世間乃宇計久都良計久云々　○行さきかけて　古今春上に梅か枝に來ゐるうぐひすはるかけてと云々續萬葉論にかけてといふ詞はこゝよりかしこへわたり彼より

此に渡る事ならずしてはいふ詞にあらず春かけてと此にいふは冬より春にわたるをいふ詞にて春になりてといふ詞にはあらずと云々催馬樂呂歌に无女加江爾支爲留宇久比春也波留可介天云々古今題昭注同顯注密勘秘注抄榮雅抄餘材抄打聞催馬樂考などにこれかれ注したりまた夏かけて秋かけてなどもいへりみな今より末にわたれる詞也新勅撰春下に鎌倉右大臣玉藻かるゐでのしがらみはるかけてさくや河瀨のやまふきの花とあるは夏より春かけてとよまれしなれば以前をかくる事にいへるなり ○たゞすの森　山州名跡志五に愛宕郡糺所名下賀茂とも在ニ今出河口東北二町許一云々此所古への蓼倉也と云々六帖四に始てたゞすの神とよみてその外よめるうた枚擧しがたし名所都鳥四山城名勝志十一洛陽名所集二山城志五内裏雛一諸社一覽三などにみゆ文德實錄十神名式上などの山城愛宕鴨川合坐小社宅神社これなり ○ゆふして　木綿垂なり萬六に木綿取之泥而とよめり木綿は穀木皮もて織れる布にて今の麻に似たるもの也古事記上に取ニ垂白丹寸手一云々神代紀上に天日鷲所作木綿

云々古語拾遺に穀木種植レ之以作ニ白和幣一云々などあるも同物也さて木綿の事は豐後風土記神道獨語古事記傳八萬葉類林十三萬葉柏舟抄由の部和訓栞由の部などにくはしくみゆ穀木は東國にてかぞのきといひて紙にすくもの也古今著聞二十にかうぞの皮といへるこれ也しでは垂と同じ皇極紀に懸ニ掛木綿一云々日本紀竟宴歌に奴佐波志弖氣留云云孝德記に垂此云ニ之娜屢一古事記上に訓レ垂此云ニ志殿一云々此外ものにおほくみえて繁垂の義也しゞのしを省きたれをつゞめしなりまたは下垂の略にても有べし ○あさはあとなく　末の歌にきみひとりあとなき麻の實をしらば云々 ○野中の淸水　古今雜上よみ人しらず古への野中の淸水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ六帖五にも有童蒙抄三に河內國にあり又はりまの國にも云々袖中抄十に能因歌枕を引云野中の淸水とはもとのめを云又和語抄を引云河內の國にも有云々奥儀抄下の中に播磨國いなみのにある也云々顯注密勘にも播磨の稻見野に有といひ又能因歌枕を引れたり能因歌枕の今本にも古今顯昭注にも脱てみえず八雲御抄

五に野中の清水播磨いなみ野に有又河内以二播磨一爲レ本云々歌林良材下　卷色葉集下之一色葉和難集六歌林撲撒十四吳竹集一春雨抄歌林拾葉抄六古今榮雅抄十一餘材抄十七和歌要略抄四藻鹽草十陸西遊行嚢抄五名所方角抄播磨國分增鏡久米のさら山の卷などにもみゆ續萬葉論や古今打聞の眞淵翁說には野中の淸水はいづこともより所なしたゞいづこにもあれもとは家居など有て石井板井のわき出つらん所の荒て野となりしを昔思ひてもとめよりし人のよめるにや題不知なればしるべからずある人は播磨の印南野にありといへり又或人は布留野に有たる也貫之集にいそのかみふる野の道の草わけてし水汲には又もかへらん寂超法師の歌にむかしみしふる野の澤のわすれ水何いまさらにおもひいづらん又堀川院百首にいにしへのふるのゝ道をたづねきて清水を猶もむすびつるかなこれらによらば布留野にいにしへの跡とむべき清水有しなるべし　○鶴が岡　諸社根元記に伊豆國鶴岡八幡後三條院延久年中義家御勸請也兪延奉行之云々二十二社註式に伊豆國鶴岡八幡宮第七十一代後三條院延久年中源義家勸請也兪延奉レ之云々伊豆は相摸の誤也吾妻鏡一に後冷泉院御宇伊與守源朝臣頼義奉二勅定一征二伐安倍貞任一之時有二丹祈之旨一康平六年秋八月潜勸二請石淸水一建二瑞籬於當國由比郷一永保元年二月陸奥守同朝臣義家加二修復一今又奉レ遷二小林郷一云々詞林采要抄五に披見地理全書此所風水山嶺の樣を案するに今の鶴岡は天倉と云山也云々去治承九年に右幕下鶴岡奉レ崇二八幡宮一云々抑鶴岡松岡八幡大菩薩奉二觀請一玉ふこと此又不思議也云々東海道名所記一鎌倉志一源平盛衰紀二十三二蒙集前編鎌倉紀行海鏡猿田彥二神社啓蒙六本朝神社考一諸國一宮巡覽記五國華萬葉記八和漢三才圖會六十七諸社一覽六神社考詳節宴曲集四海道下東野州聞書正廣日紀東國紀行東關紀行廻國雜記海道記東路之裹などにみゆ新拾遺賀に基氏鶴が岡木高き松を吹風の雲ゐにひゞく萬代の聲爲家集にきゝおきし鶴のをかべの松の陰千代のちとせは猶ぞ久しき夫木抄雜三歌枕名寄廿などにもうたあり夫木抄雜十三に祐擧君が代はつるのさとなるまつばらのはまのまさごもかずしらぬかなとあるも能

因歌枕に相摸國うるのさとあれば此所にや
（補注）落合直文云長歌といふものは通常五七五七と始めて終は五句七句七句と止むるを法とすこは奈良朝以前のことにて其後に至りては此法も亂れたり其は萬葉集の歌と古今の長歌とを比較して知らるべしさてこゝなる長歌は古今時代の調にて句法大に亂れて七五七五となれりされはこは長歌としては價なきものなれども然も長歌など云ふものは男子間に於きてすら詠むものまれなる此の時代にありて殊に女にしてつくりたる其の精神の程は實に賞するにあまりありといふべし　○うたひてし　直文云てしは過去の助辭にて昔はかくうたつたといふ意なりさてこゝにて一段落なり　○よろづのわざは喜怒哀樂を云　○思へばいやし　謙遜したる詞なり　○とがとてや　はせきとめられてに跨續せり　○つたひし水の　は親かわさ〳〵子の爲相につたひし也　○せきとめられて　約り兄に横領せられたるをいふ　○よるのつる　なくなくの冠詞なり　○ゆくへも知らぬ　は古郷を思ひやりたる句なり　○風にまかするふるさとは　風にまかして動くか如くしかとふるさとはなり　○世々のあとある　歌道の事を思ひやりたる句なり　○あしはらの道　はしきしまの道といふに同じ　○わたくしのなげき　一家一身の嘆きのみかはなり　○ことわり　曲直の意　○かけて問へ　ゆふしでの緣語也　○身をかへりみず　阿佛尼の身をかへりみずなり　○人のなさけもかゝりけり　我のみならず泰時の如き人も同じくかゝりけりなり　○野中の清水よどむとも　野中の清水か沈みて無くなりてもなり　⊙跡さへあらばいとゞしく　は證據さへあらば決してまくることはあるまい只にまけさるのみならずいとゞしくなり

のこる(殘)よもぎ(蓬)とかこちける(託)といふところのうらがき(裏書)に。くわうだいこぐう(皇大后宮)の大夫しゆんぜい(俊成)の卿の御むすめ(女)。ちゝ(父)のゆづり(讓)とて。はりま(播磨)のくに(國)こしべ(越部)のしやう(庄)といふところをつたへ(傳)しられ(知行)けるを。地頭の（三字）（諸本无、今据扶本）さまたげ(妨)おほく(多)て。（扶、作しるければ、）むかし（群本三字无）むさし(武藏)のぜんじ(前司)へことなる(別樣)そしよう(訴訟)にはあら(非)でまゐら(進)

せられけるうた。古はしられたよくせんにも入原本て字有、扶本作入て候侍とやらん。心のまゝのよもぎのみしてといふうたをかこちて申されける歌。
君ひとり跡なきあさのみをしらば殘るよもぎがかず群イ、作げノ字、をことわれ。とよまれければ。ひやうぢやうにもおよばず。廿一かでうの地とう古本、三字无のひほらを。みなとゞめられて候群、古、共二字无けり。「そのゝち野中のしみづをすぐとて。
續古雜下
わすられぬもとの心のあ有二字、原本、作なし、りかほに野中のしみづかげをだにみし。とよまれたるも。そのこしべのしやうへくだられけるときのうたにて候。三字、古作新勅撰に入て侍し。以上八字群无古本、作にも入侍り、
永仁六年三月一日書之
○のこる蓬と云々　此より下は後の人の裏書によりてかき添しなり　○俊成卿の御女　長明無名抄下に今の御所には俊成卿の女と聞ゆる人宮內卿と二人の女房こそむかしにもはぢぬ上手どもなれ云云作者部類庶女部に皇大后宮大夫俊成女侍從具之母云々夜の鶴に俊成卿女とて御歌讀と云々東野州聞書に俊成卿女と申は中納言の姉か妹かと尋ね侍りければ是は中納言の爲にはめひにて候俊成の爲には孫也歌の器用たるによりて女と契約有也云々悅目抄跋に俊成女こしべの尼御前云々寐覺記五に俊成女連歌の事あり　○越部の庄　和名抄に播磨揖保郡越部古之倍云々安閑紀二年に播磨國越部屯倉云々　○地頭　吾妻鏡六に文治二年三月朔日己卯諸國被レ補ニ惣追補使並地頭一云々また十一に建久二年閏十二月九日癸丑東大寺柱四十八本明年中可ニ引進一之由被レ仰ニ畿內西海地頭等一佐々木四郎左衞門尉高綱爲ニ奉行一云々平治物語下に賴朝平家を亡し天下を治て文治の始諸國に守護を居てあらゆる所の庄園鄉保に地頭を補して云々續古事談二に或人曰諸國の地頭といふ名心得ずいかに付たるやらんと年比おもひし程に或唐書の中に云世に俄に謀反のもの出來たるをうたんとて卒爾兵をあつむる時兵粮米の爲に國々郡々をせめ集めたるを地頭錢といふ文あり是今の地頭の義に叶へり此文をみたる人の付初たるか又里俗などの童謠して云出

たる歟不思儀の事也増鏡新島守に頼朝諸國のそうつゐふしといふ事うけ給はりて地頭職に我家のつはものどもなしあつめけるこの日本國のおとろふるはじめはこれ也云々小夜の寐覺に廣元云々その世に地頭などおかれたるも此人の申されたるとぞ承侍し云々長門本平家物語十九に關東より源二位の代官北條四郎時政上洛す云々天下しづまるうへは諸國に守護人を置庄薗に地頭をすゑて國衙庄保をいはず段別をあて十一町に一町の給田を給るべきよし言上す云々此申狀は過分の事なりと法皇おぼしめしわづらはせたまへども云々源二位ひらに申されければ諸國七道に守護地頭をおかれけりと云々また神皇正統記下砂石集七承久物語一拾玉集五三國傳記十壒嚢抄二などにも地頭といふことみゆ八幡愚童訓上の巻には大地頭といふ詞あり唐書食貨志に大暦元年有二地頭錢一毎畝二十通名爲靑苗錢云々　○武藏の前司　將軍執權次第に武藏守泰時元仁元年十二月十七日任二父讓一補二御後見一仁治三年五月十五日出家法名觀阿同六月十五日死六十號二前司入道一云々　○新勅撰　簾中抄下に新勅撰二十卷後堀川院御時前中納言定家ゑらべり云々拾芥抄上の末に新勅撰集廿巻貞永元年壬辰十二月二日依二當代後堀川綸言一前中納言定家卿奏レ之有レ序假名定家卿書レ之云々増鏡二運歩色葉集四志部にもみゆ　○心のまゝの蓬のみして　新勅撰雜二に平泰時世中にあさは跡なくなりにけり心のまゝの蓬のみして扨麻と蓬をよみ合せたる由は荀子勸學篇に蓬生二麻中一不レ扶而直云々大戴禮勸學篇にもみゆ壬二集下家隆卿歌にしかりとて直き心よ世にたゝずまじるよもぎのあさましのよや　○ことわれ　源氏榊に八島もる玉つみ神も心あらばあかぬ別の中をことわれ　○ひほふ　以呂波字類抄比部に非法云々活板節用集比部に非法云々　○野中の淸水を過とて　續古今雜下に老の後都をすみうがりて野中のしみづをすぐとて皇大后宮大夫俊成女とありてこの歌を載たり

此あぶつばう（阿佛房）と申人は。定家の（古本、卿のよめノ四字有）息爲家の室なり。きんだち五人ましまし候（古、作おはしけり、）はりまの國ほそ川のしやう（庄）を爲家よりゆづりおかれ候（古作えら

古れし を爲。氏たふく（群、古、共たろノ二字有）によりてあふりやう（他腹　押領）
に（古、作せられしさや、）そしよう（訴訟）のために。かまくらへ（古、安佛房、三字有、）
くだられ候（し　古、作時の。）无道（古、道すがら心にうかびし言の葉十二字有、）の日記
にて候（古、作となり、侍）爲氏もちんぢやう（陳状）のためにかまくらへ
下向。兩人共にかまくらにて死去せられし。そしよ（訴訟）
うは爲氏のかたへはつけられず（不被付）候しとぞ（群、作かや、）あぶ
つは安嘉門院の四條と申人なり。爲相のはゝなり」
○爲家　藤原氏系圖十一に爲家ハ權中納言正二位
爲ル二大相國公經公ノ子一母ハ内大臣實宗女建治元年五月
朔日卒七十九歳法名融覺云々　○爲氏　藤原氏系
圖十一に爲氏ハ御子左侍從大納言正二位母ハ宇津宮頼
綱女弘安九年九月十四日卒六十五歳法名覺阿云々

もろこしのかしこきひとのゝたまひしとらのものかたりのやうにしるといふことにあさゝふかさありふむくわとゝせあまりよとせ松の屋のあるしいさよひのにきのちうしやくをつくりてわれにひとことをそへよとこふいてやこのひとのやまとたましゐはたれもしりたることなれとわれはかり深くしりたるひとはあらすはたおもひめくらせはくむしよるいしうにいりぬるをきよかきしつるは今ははやみそとせあまりふたとせになりぬるこれなむるいしうをさくらきにえらせぬるはしめなりしさるをことしまたこのふみのおくにひとことをそへなむことはさらにゆくりなきことにもあらねはにきのなのいさよひためふにもをよはすとにはかのやまとたましゐのたけきにめてゝしも月なかのいつかのひみたまのふゆのまとのもとにゆきにまかへるうのけのふてをさしぬらすとゝはなりぬむそちのおきなみなもとのひろかた

北林禪尼いにし建治の頃打日さす朝を出てとりか鳴吾妻に下られしは今は五百とせのむかしになんなりにたるそか道の記をは十六夜の日記と名つけて本文のみ傳へこしを松之舍の高田の大人はやくよりあ

またのふみあらはしたまへるついて此書の抄をも作らましとまめなる心より半すくるまて注釋かきくはへたまへるにこゝらのをしへ子たちの歌に文にこちたかる言問ひの繁になやまされて徒に書函の底にかいやり置給へるを人ありてせちにこひそゝのかすまに／＼打もおかてすゑの卷の殘れるは北條時鄰ぬしに書つかせられぬおのれ江戸の大城のもとに遊へる日大人の許を訪ひて何くれとものかたらふついて此書のことをも言出たまひて其奥に言そへよとあるを賤手卷數ならぬ身にはいかてかといなひ侍れとかたみに相しれるとちはさえの深き淺きによらめやとしひきこえたまふにさらはとて難波のあしのあしきをもかへり見す刈根のふしのみしかき筆をも染出侍るになん花水庵主春登

下總佐原

永深久香書

殘月抄一二之卷松屋高田大人之注釋同三之卷
北條時鄰子之續筆也

世說問答考證

全


國學院大學出版部

世諺問答序

花のみやこのかたはらよもきか門のうちに世にかすまへられぬひとりのおきなありけりゐはからねとも似たるを友とせるたくひも有けらし春の日のつれつれなくさみによもやまのことゝもかたりはへるついてにさても世のことわさとして年の内にさま〳〵の事申つたへ侍るは何れも根源たしかなる事にやいとおほつかなさよし問侍りしかはおきなのまをすやうその事に侍りとはすかたりもせまほしくおもひたまふれと其事となけれは心のうちにくらしはへるに思ひよりとひたまふこそさいはひなれゐほかたはいたつらなるたはふれことのやうなれとおのつからもろこしより傳れることもありまたわか國にはしまれる事もはへりおほくはわさはひをはらふましなひこととそもにはへるへし老のひかおほえのみこそあるへけれともいち〳〵にとひ給ふならは答侍らむと申侍りしをよろこひなから正月朔日よりしはすのつこもりまてのことゝも翁の答侍りしをひとつものこさすかき集て世諺問答と名付侍るなるへし

世諺問答巻上目録

一 正月をむつきといへる事
一 かとまつの事
一 はこいたの事
一 木丁の玉うつ事
一 屠蘇白散の事
一 餅かゝみすうる事
一 三日にたうやくふくする事
一 わかみつの事
一 七日のかゆの事
一 なぬかに白馬を見る事
一 十五日のかゆの事
一 さきちやうの事
一 萬歳樂の事
一 そみむ將來のこと
一 正月はまゆみの事
一 正月うつえの事

世諺問答巻中目録

一 はつ午の事
一 二月十五日に涅槃像かくること

一　三月三日もゝの花の事
一　同えもきの餅の事
一　同雛あはせの事
一　う月八日佛にゆあひせ奉る事
一　賀茂の祭にあふひかくる事
一　ちまきの事
一　同日くす玉とてかくる事
一　同わらはへの小弓を持いむちの事
一　五月九日の今宮祭の事
一　六月に嘉定日の事
一　朔日に氷くふ事
一　七日に祇園會の事
一　みな月の事
一　七月七日にさくへいを用る事
一　たなはたにものたふくる事
一　七夕に花を立る事
一　十五日に生靈祭る事
一　同すまひの事
一　八月に御靈祭の事
一　同朔日にたのむといふて祝事

一　同日天中の節といふて札を柱に立る事

世諺問答卷下目錄

一　八月に放ゝ會の事
一　九月九日にきくの酒をのむ事
一　賀茂競とてむし入る事
一　十月をかみな月といへること
一　同ゐのこの事
一　ゐの子の御けむちようの事
一　同とうしと申事
一　十一月御火燒の事
一　十二月に節分の豆打事
一　同鉢たゝきの事
一　同節分にしようの餅の事
一　同をけらをたく事

世諺問答考證卷上

江戸　荊山居士日尾瑜　輯

正月

問て曰まつ正月と申侍るはいかなるいはれにや

答正月はとしの始の祝事をして知る人なるはたかひに行かよひいよ〳〵したしみむつふわさをしけるによりて此月をむつひ月と名付侍りその言葉を略してむ月といふとそきゝおよひし

考證　下學集睦月注正月也睦或作眤新春親類相依娛樂遊宴故云睦月　和訓栞云むつき正月をいふ親ましてふ月なれはいふまた生月の義春陽發生のはしめなれはかく名付るなるへし

瑜案するに日本紀に相善をむつふと訓し新撰字鏡には暱をむつむとよめり又はたらかしてむつましと云神代紀に親眤の字をよみまた纏綿をむつまるとよみたるを見れは絲もて結ひたるか如く互に相まつはるをいふを本としてむつましはむつみましはるといふ意とそおもはるされは禪閤もしる人なるはたかひに行かよひしたしみむつふるわさをしけるによりてとは遊はしゝ成へし

問て曰朔日より賤か家居に門松とて立侍るはいつ頃よりはしまれることそや

答いつ頃よりとは確に申かたし門の松立ることは昔しよりあり來れること成へし賤か家居は大かた封戸なるによつて民戸と申侍れと昔は一町のうちを五丈つゝにわりて門を立しかば八つの門ありし也其中に賤か家居を作り侍れば門なかるへきにあらす其門の前に松竹を立侍り松は千とせを契り竹は萬代を契るものなれはとしのはしめのいはひことに立侍るへし

瑜案するに禪閤の御說いまた考據するよしなし定めて確據あることなるへししかれども俊惠法師の家集林葉集の六雜部を見るに正月三日人のもとにまかりたりしに中門にまつをたてゝいはゝれたり『春にあへるこの門松をわけ來つゝわれも千代へむ內にいりぬるといひまた夫木集に待賢門院堀河『山賤のそともの松もたてゝけり千年といはふ春のむかへにまた同集歲暮從三位顯季『門松をいとなみ立とするほとに春あけかたに夜やなりぬらむなと見えて俊惠は俊賴朝臣の子堀河は神祇伯顯仲

の女にして鳥羽院の皇后たりし待賢門院につかへたてまつりし故待賢門院堀河とはいへり顯季は堀河院寛治年中の人にして禪閤の此ふみを作りたまへる天文年中を去事凡四百有餘年なれは此頃ははや賤しきもの丶家には門松たてしと見ゆされと禁中には門松はたてぬ事と見えて細川玄旨の耳底記には禁中並堂上諸家中も正月門に松を不飾なり於諸家中注連を引なり禁中には引かす注連とは繩に紙を切たる丶ものなりといへり然うして後小松院のころはもはや門松立る事一同の風俗を成しとと見えて藤原爲尹卿千首の中に『今朝はまた都のてふり引かへて千ひろのみしめ賤かかとまつとよみ給ひしを見て知るへし千尋のみしめとわきていへるを見れは最早みしめは禁中にても引しにやと思はるれと定めてはいひかたし鎌倉右大臣のころは禁中も注連のみならず門松をさへ立たりと見えて鴨長明か四季物語に明日の爲とて松竹にしりくめのなは取そへてゆつりはしたると家をふき侍る御門公卿の家はいふもさらなりといへるそ證とはすへき御說のより所は猶可尋ては唐山にも似かよひ

たる事侍り歲華紀麗云元日松標ニ高戶ニ註蒼頭問禮俗有下歲首酌ニ椒首ニ而飲レ之者上何也以テ椒性芬香又堪レ作レ藥又折テ松枝千戶ニ以同ニ此義一といへり余が所見如此又有ニ一說一淸明簠簋內傳ニ云北天竺吉祥天ノ王舍城ノ王ヲ商貴帝ト號ク三界ニ遊とテ諸星ニ探題タリ是ヲ天刑星ト名ク娑婆界ニ降テ改テ牛頭天皇ト號ス是毘盧遮那ノ化身也頭ニ犢ノ角ヲ戴キ猶夜叉ノ如シ形ハ人間ニ類ス此天王后ヲ求レ共イマダ得ズ時ニ聲ハ鳩ニ似タル靑鳥飛來ル呼曰我ハ是天帝ノ使者ナリ天王ト同ク帝釋天ニ仕フ我名ヲ毘首多羅ト云フ君イマ后ヲ求ム故ニ帝釋我ヲ以テ告知ラシム南海沙竭羅龍王ニ三八ノ女アリ第一金毘羅女第二歸命女コレ北海ノ龍宮難陀抜難陀城ニ嫁ス第三ハ頗梨女ト云貌甚美麗ナリ君カ妻ニ宜カルヘシ天王大ニ歡テ敎ニ任セテ南海ニ赴ク其道ノ遠サ八萬里ナリ三萬里ヲ過テ日暮馬疲タリ爰ニ南天竺ノ側ニ廣遠國アリ其國ノ主ヲ巨旦大王ト云フ時ニ天王彼門ニ到テ宿ヲ請フ巨旦許サズ天王其ヲ去テ千里ノ松園ニ到ル園ノ中ニ賤女ノ松ノ翠ヲ拾フニ逢リ天王問テ云ク汝ニ宅アリヤ女答テ曰

吾ハ巨旦ガ婢ナリ東ノ方此ヲ去コト一里ニメ蘇民將來ト云フ者アリ家貧ク祿乏シサレ共心慈悲ヲ抱ク彼ニ往テ宿ヲ求ムヘシ依テ天王東ニ到テ曠野ノ中ニ一ノ菴ヲ見ル主ハ蘇民將來ナリ年老テ而モ貧ナリ天王宿ヲ求ム將來咲テ曰我家賤ウシテ三間ニ過ズ若干ノ眷屬ヲ留ル事能ハズ天王曰我獨宿ラハ即可ト於レ是將來粱ノ莖ヲ抱テ席トシ天王ヲ座セシム將來又一ノ瓢ヲ持中ニ粟アリ半分ニ不レ過之ヲ土ノ釜ニ炊テ天王ニ進メ亦眷屬ニモ饗ス天王大ニ悅ヒ汝カ志足ル哉大ナル哉因テ千金ヲ將來ニ賜フ翌日天王南海ヲ凌テ龍宮ニ到ル龍王出テ迎フ天王遂ニ頗梨女ヲ娶ル既ニシテ年ヲ經テ八人ノ王子ヲ誕ム第一摠光天王第二魔王天王第三倶摩羅天王第四得達神天王第五良侍天王第六侍神相天王第七宅神相天王第八蛇毒鬼神ナリ其後天王頗梨女八王子及諸ノ眷屬ヲ率テ本國ニ歸ル時ニ廣遠國ニ到テ巨旦ガ族ヲ滅サントセシカハ巨旦忽ニ心驚キ懼レテ祭畢ノ法ヲ行フ天王其隙ヲ伺テ矢ヲ以テ窓ヨリ射ル呪曰　枳里々々縛曰羅曳示吽嚩吒ソノ時巨旦ガ族咸矢ニ中テ死ス是ニ於テ廣遠國ヲ蘇民將來ニタマフ今ノ世ニ行疫神巨旦ガ子孫ヲ害スルハ是也其巨旦ガ屍ヲ斷テ五節供ニ配メ調伏ノ威儀ヲ行フ所謂年ノ肇ノ門松ハ巨旦ガ墓驗ノ木ナリ上ニ炭ヲ結付ルハ葬送ノ火爐ナリ又元日ノ赤白ノ鏡ノ餅ハ巨旦カ骨肉也同修正祭祀ヲ爲ス引導々師ノ葬禮ノ儀又七草ノ粥ハ不動明王ノ七把ノ髮惡鬼ヲ降伏ス三笈杖燒ノ齋會ハ三毒退治三月三日ノ草餅ハ巨旦ガ耳舌五月五日ノ菖蒲ノ粽ハ巨旦カ髮七月七日ノ索麪ハ筋九月九日ノ黄菊ノ酒水ハ肝血凡神事佛事皆學此爲ニ法例一下畧松下見林曰按此説妄誕不レ足レ觀レ之凡此書以ニ佳節故事一悉爲レ起ニ於巨旦一者甚非也又嘗見ニ備後風土記一有ニ似レ此事一曰素盞烏尊通ニ南海神女一時日暮借ニ宿于巨旦將來一不レ許借ニ其兄蘇民將來一許レ之素盞烏尊大喜欲レ報レ之後爲ニ行疫神一入多死令下蘇民及子孫帶ニ茅輪一稱曰中〇蘇民將來子孫上乃免ニ疫死一今小簡書曰ニ蘇民將來子孫也一正此意雖レ然巨旦蘇民之名非ニ和語一也謹案ニ國史一素盞烏尊行ニ新羅國一據レ此言レ之疑於ニ新羅國一有ニ此事一歟然則蘇民者夷狄之人也盖籠簋管ニ窺風土記一誤爲ニ天

竺事ニ添以ニ門松等說ニとも見えて論ずるに足らさる事なれども多く節序のことに雜引するを以て委細に茲に擧て各條に發せず　又年浪草に一書を引て曰歲始每家食ニ煮餅ニ也門樹ニ松竹ニ也飾ニ藁繩ニ也皆我神國之遺風焉相傳垂仁天皇時大巳貴尊誨ニ大田々根子命ニ曰元月元日以ニ赤白餅ニ祭ニ吾荒魂天刑大神ニ國中無レ災而幸福續凡節辰祭皆始ニ大田々根子命ニ此命常見レ神如レ談レ人故利世祭禮習傳而見レ行云々　是亦たしかならぬ說なれども爰に錄して見聞を廣むるのみ

またしたゆつり葉は深山に有て雪霜にもしほまぬものなれはしめ繩にかさりて同しく引侍るにやしめなはといふものはたりなはによりて繩のはしをそろへぬものなりそは淸淨なるいはれなりはしをそろへぬはすなほなる心なりされは天照太神のあまの岩戸を出給し時しりくめ繩とて引れたるはいまのしめ繩なり淨不淨をわかつによりて神事の時は必引ことに侍り賤か家居に引こととも正月の神をいはひ祭心たてなるへし

考證　しだ通用齒朶とかく本草綱目に載るところの貫衆是也　李時珍曰貫衆此草葉莖如鳳尾其根一本而衆枝貫之故名鳳尾根名貫衆　和漢三才圖會云葉如蕨及狗脊而葉柔薄面青背白四時不死以飾元旦嘉祝物　年浪草云一說齒朶ハモロムキト云和名アルナ夫婦ノ相生ヲ祝スト也又一說齒朶ハ齒ハヨハヒ朶ハエダ朶ハ長延ナルモノ故齡ノ延ル義トイヘリ　楪　交讓木事物異名　弓絃葉萬葉延喜式　和漢三才圖會ニ讓葉木俗作楪此樹ハ新葉生ヒト丶ノヒテ後舊葉落ツ故ニ讓葉ト名ク又和名親子草ト云　しめ繩　神代卷曰太神出盤戶於レ是中臣神忌部神界ニ以端出之繩ニ乃請曰勿復還幸後成恩寺殿兼良公纂疏曰左繩端出此釋ニ其義ニ又解ニ其訓ニ繩者直之義神道以レ直爲レ本左者陽德取ニ淸明之義ニ端出者絢レ索而不レ整雪ニ其所レ餘之芒端ニ也是質朴而不レ飾之意故以ニ直淸質ニ爲ニ神明之德ニ一條繩而具ニ此三德ニ也即注連是也蔀遊燕年中故事要言に引ニト部家說ニ云ウタス藁ヲモッテ左繩ニ絢モノ也端ヲ出ス丁七五三トワカツハ天道ハ十五ニシテナル義也左繩ニスルハ天道ハ左旋スル意也ト云ヘリ

瑜案するに唐山にも又注連に似たる事有荊楚歲時

記云正月帖畫鷄戸上懸葦索於其上挿桃符其傍百鬼畏之といへり然れ共事の本を推せは本邦の注連と自ら同しからす括地圖云桃都山有大桃樹盤屈三千里上有金雞日照則鳴下有二神一名鬱一名壘幷執葦索以伺不祥之鬼得則殺之と云又風俗通曰黄帝書稱上古之時兄弟二人曰荼與鬱住度朔山上桃樹下簡百鬼々妄搰人援以葦索執以食虎於是縣宮以臘除夕飾桃人垂葦索虎畫於門傚前事也などいへるを見て知るへし　しりくめ繩　和訓栞云藁の尻をこめたる繩也　正月の神　八將神の母頗梨女をさす所謂八將神とは　大歳神　大將軍　大陰神　歳刑神　歳破神　歳殺神　黄幡神　豹尾神　是なり祥成事は簠簋内傳に見えたり

問て曰をさなきわらはのてきの子といふてつき侍るは如何なる事そや

答是はをさなきものゝ蚊にくわれぬまじないごとなり秋のはしめに蜻蛉といふむし出來ては蚊をとりくふものなりてきの子といふといふは木連子などをとむぼうかしらにしてはねをつけたり是を板にてつきあくれはおつるときとむほうかへりのやうなりさて蚊をおそれしめむか爲にてきのことてつき侍るなり

考證　をさなし　日本紀に不賢不叡不肖なとをよめり長々しからぬと云義なり夫木集に「ふしつけのおとろか下にすむはえの心をさなき身を如何にせむ　雜談抄云蜻蛉ノ蚊虻ヲ喰フ事本草ニモ注セリ此板ヲ羽子板鬼板ナト云リ表ニ譬ハ大臣家ナトノ内々ノ祝儀ノ體裏ニハ爆竹ノ體ヲ書キタリ寸法不定　ましなひ　和訓栞云日本紀に厭をよめり壓と同しおすなり又禁厭をまじともましなひやむるとも讀たり日本紀に禁咒師見えたり韓退之詩に詛師毒口牙といへり蒼頡篇に伏合人心曰厭と見えたり厭勝も禁術も同し素問に移精變氣論あり瑜案するに谷川士淸子いまたまじなふの訓義に及ばす瑜か意をもて是をおもふにましなふは原來ましものと云より出たる詞にて中臣拔延喜式新撰字鏡等に蠱字を訓し日本紀には毒字をよめり聖武紀に所謂合藥造毒萬法作怪と云是也病源候論に蠱是合聚毒蛇之類以器皿盛之任其自相食噉餘留一存者爲蠱飮食内行之人中之者心腹懊痛

煩毒不レ可レ忍といひ通監集覧に巫蠱女能事ニ無形ニ以レ舞降レ神曰レ巫執ニ左道ニ以亂レ政惑レ人曰レ蠱といへるなどによりて見れはまじものはまどはしものと云ことにて巫覡などの咒咀を行ひて人心をまどはすも毒藥もて人の心を惱亂せしむるも同しきよりましものといひ夫より轉して病災なとある時咒文符間なともてはらふわさをも來る病災をまとはし穢ふてゝろよりましなふとはいひけむさてなふはなひともなへ共動く詞にて體にあつかりたる詞にはあらすおこなふいさなふともなふかと皆同し

こきの子　名義いまたかうがへす年浪草に羽子板のことを胡鬼板ともいひ雜談抄に鬼板とも云しを見れはおにの子といふてゝろにや又蜻蛉の一種に青くして大者を老青とよふ俗におにやんまといふ者あり是等によりていふにや猶可考　頭注云竹叢小野氏淵故隨筆卷二叡山の無動寺又日光山なとにコキノコといふものあり吳越春秋に胡鬼樹といふ本草に郡捻子見ゆ三十二品のうちなるへし後水尾帝御製「つくはねのそれにはあらてこきのこのこよひの月は空にすめ〳〵　山法師のうたに「こんたくや無動寺山のたからまんおへては魚にまさりこそすれコキノコをたからまんと云よしなりと見えたり

問て曰木丁の玉うつことは何事にかたとれるにや

答もろこしのむかし黄帝といふ御門まし〳〵き炎帝の子孫をほろほして位につきたまへり其炎帝の臣に蚩尤といひて惡人あり涿鹿といふ所にて黄帝のために討れしゆゑに其惡靈疫病といふ神に成て國土の人民をほろほせり是によりて末の代に疫病をおそれしめむために蚩尤か身分をつた〳〵にわかちて一つも殘さしとのはかりことに正月にはかの眼の中の人見をぬきて木丁の玉にして打事にせりかの眼のふくりむは三重に有し故に弓射るときの的に三重に繪をかきて中の人見をはのぞきたりしかのみならす正月のもちひはかの肉なり烏頭藻はひげ大根は齒と名つけてくふ事にせり此外五節供といふ事もおの〳〵かたどる所有ていかにも疫病の神をこらしめて人をやましめぬましなひことにし侍るとそきゝ及侍りし

考證　もろこし日本紀に西土また唐をよみ萬葉集には諸越とかけり眞名伊勢物語には諸來ともかけ

りされはもろ〳〵てし來るといふこゝろ共いひもろ〳〵の物を來せし心共いへり　黃帝史記五帝本紀曰黃帝者少典之子姓公孫名曰二軒轅一云々神農氏世衰諸侯相侵伐暴二虐百姓一而神農氏弗レ能レ征於レ是軒轅乃習二用干戈一以征二不享一諸侯咸來賓從而蚩尤最爲レ暴莫能伐二炎帝一欲レ侵二陵諸侯一云々咸歸二軒轅一々々乃修レ德振レ兵治二五氣一藝二五種一撫二萬民一度二四方一敎二熊羆貔貅貙虎一以與二炎帝一戰二於阪泉之野一三戰然後得二其志一蚩尤作亂不用帝命於是黃帝乃徵師諸侯與蚩尤戰於涿鹿之野遂禽殺蚩尤　顯昭袖中抄云十節錄黃帝取蚩尤頭毬之今毬杖是也以彼例漢土年始用件事國中無凶事仍日本國學其例年始打毬杖　雜談抄云萬葉ニ玉キ春ト詠ルモ年始ノ毬打ヲ云增韻又唐史ニ云ハ毛皮ニテ作ル日本ノ蹴鞠ノ鞠ニ類セリ日本ニハ木ニテ造ル近キ頃ノ由ナリ必竟今世女子ノ翫フ手鞠ハ毛毬ニ近キ者也昔ハ大毬ハナカリシト也然レ共後成恩寺殿ノ世諺問答ニ木丁ト遊サレタレハ其頃モ木毬ニヤ唯男兒ノ翫フ地上石間ニ擲ツ便ナラン後鳥羽院ノ稚キ御時ニ殊外毬打ヲ好ミタマヒケレハ文覺上人故アリテ

禁獄ノ時腹立テ此帝ヲ毬打ノ冠者ト言フレケル由平家物語ニ侍ル又俗ニ振々ト稱シテ毬ヲ拂フ者有毬打ト云者ニテ杖ノサキニ付ル者也當代ハ古來ノ摸樣ニ變シテ二三歲ノ幼兒ニ少キ毬打ヲ紙上薄板ニ帖シ鶴龜松竹ナト造テ是ヲ毬打ニ限ルヤウニ稱シ其餘ハ玉振々ト各別ニ呼ブ大ナル非也イツレモ木丁ト稱スベシト云々今玉振々ト云ハ即昔ヨリノ毬打ニテ腰物ノ目貫緣頭ノ繪樣又ハ諸具ノ蒔繪ニモアリ其形狀玉ハ大戶ニ付ル戶車ノ如シ寶盡ノ內ノ七寶ト云物ノ如ク彩ル振々ハ木ヲ八角ニ削リ兩端ヲ細ク中ブクラニシテ細キ方上ノ方左右ニ木瓜形ノ玉ヲ付テ惣體金箔ニテダミ其上ニ鶴龜松竹尉姥等ノ繪ヲ彩色ニスル也用ル時ハ左右ノ玉ヲ取ハナシ別ニシテ是ヲ擲ツ玉トシ八角ノ木ノ木瓜形ノ穴ヘ竹杖木杖ノ如キ棒ヲ貫キ柄トシテ是ヲ玉ヲ打毬杖トス畧シテハ皆己カ得物ヲ用フ○和訓栞云ぎちやう毬打の訛音なりといへり十節錄云々と見えたりもと馬上の業にて武事を習はせし唐の代殊に擊毬を翫へり打毬も同し今正月兒童の弄ふものなるふり〳〵ぎちやう少し異有片木を玉の如く丸く

し椎の形したる杖にて美観をのみ専にし其本を忘れたれど毬杖の變風なるはもとよりの事なりよく平家物語に毬丁の玉と見えたり袖中抄に年の始に毬杖を打をもて玉を春うちとつゝくるなり

瑜案月令廣義曰擊毬戲淮南王上元三夜燈火排レ戸命二市壯女一畵杖擊レ毬至二干捽レ髻毀レ腐流レ血者一止又事物紀原引二宋朝會要一曰毬杖非レ古蓋唐世尚レ之資二玩樂一といひまた續日本紀曰聖武天皇神龜四年正月數王子及諸臣子等集二春日野一而爲二打毬之樂一など見えたるを考へれは黄帝と蚩尤とにはしまれりといふ説はうきたる事におもはる猶博聞の人にとはまほしくなむ

間て曰元三の日は屠蘇白散の酒を飲と云事ありや屠蘇とはいかなるいはれにて名付侍るにや

此事は醫心方金谷園記など書にしるせり屠蘇は草庵の名なりむかし草のいほりに住ける人のこのくすりを其里の人のかたへおくりておほつこもりに井中にひたして元日にとり出して酒樽にひたしてこれをのまは其年疫氣にをかさるましきといへり一人是をのめは一家に病なく一家にのめは一里に病なしといふ

功能侍り

考證　醫心方三十卷丹波康頼作或云丹波雅忠　金谷園記未考　屠蘇は草菴の名也山堂肆考曰歳時記居草菴中毎除夕遺閭里藥一帖令囊浸井中至元日取水置於酒樽名曰屠蘇合家飲之不病瘟疫四時纂要屠蘇孫思邈菴名屠割也蘇腐也　群芳譜曰元日進椒酒次第從少至老今屠蘇其遺意也唐孫思邈有道術作菴名屠蘇除夕遺閭里藥囊浸井中元旦取酒中名屠蘇酒合家飲之不染瘟疫謂屠絕鬼氣蘇醒人魂　一家に飲は一里に病なし　千金方二十九屠蘇酒辟疫氣令人不染溫病及傷寒歳旦之方　大黄十五銖　白朮十八銖　桔梗　蜀椒各十五銖　桂心十八銖　烏頭六銖　菝葜十二銖　以上七味㕮咀絳袋盛以十二月晦日懸沈井中令至泥正月朔旦平曉出藥置酒中煎數沸於東向戸中飲之屠蘇之飲先從小起多少自在一人飲一家無疫一家飲一里無疫飲藥酒滓三朝還滓置井中能仍歳飲可世無病當家內外有井皆悉著藥辟溫氣也又一方有防風一兩　此餘屠蘇の事諸説極ておほし多紀桂山の醫賸中に見えたる屠蘇考に詳なり故にこゝに省く

また屠蘇をは先少兒にのましめよといへり小兒はと

しを得るものなり老者はとしをうしなふといふゆゑなりされは東坡か詩に毋不辭最後飲屠蘇とつくれり年よりてのことにいへり

考證　屠蘇をば先少兒にのましめよといへり云云潛確類書引時鏡新書曰元日飲屠蘇酒先從少者起或有問董勛者答曰俗以小者得歲故賀之老者失歲故罰之　容齋隨筆曰今人元日飲屠蘇酒自小者起相傳已久然固有來處後漢李膺杜密以黨人同繫獄値元日於獄中飲酒曰正旦從小起時鏡新書董勛云正旦飲酒先飲小者何也勛曰俗以小者得歲故先飲酒賀之老者失歲故後飲酒初學記載四民月令云正旦進酒次第當從小起以年小者起先唐劉夢得白樂天元日舉酒賦詩劉云與君同甲子歲酒讓先杯白云與君同甲子歲酒合誰先顧況云還丹寂寞羞明鏡手把屠蘇讓少年然則尙矣東坡亦云但把窮愁博長健不辭最後飲屠蘇其義亦然なは種々の書共引およはさまほしけれと唯本文にしたしきのみを擧たる而已くだ〳〵敷は記し侍らぬなり

是によりて禁中にての御藥にも藥事となつけて童女に御生氣の色の衣をきせられて御前へ召れて屠蘇の酒を飲せられて後に供御に參らすることにせり

考證　御生氣　和訓栞云しやうけ物に御生氣の方生氣の色なと見えたり今生家に作る月令廣義に生氣方正子二丑順輪十二月亥とあり唐の法帖に往東都逐生氣とも見えたり陰陽寮豫十一月進勘文以天子來年御當卦載之生氣者八卦方位之名也云々西宮記に御生氣御服も見えたり雲圖抄に陪膳尙藥着生氣唐衣と見ゆといへり

白散とは五色の藥をつきふるひて二てんにこれを供す功能は大略とそのことし是をは方寸のさしにてすくひて酒に入る

考證　白散具には老君神明白散といふ千金翼に方を載す　白朮二兩　桔梗一兩　細辛一兩　附子二兩炮去皮　烏頭四兩去黑皮　以上五味麤擣篩絳囊盛帶之所居閭里皆無病若有得疫者温酒服一方寸匕覆取汗得吐即差云々又載于外臺祕要及聖濟總錄分兩各有異同

また度瘴散といふは九種の藥をつきふるひて三獻に是を供す山嵐瘴氣をのぞく藥術なり風おこりのものを除く藥なり是をは一錢の茶匙にてすくひて酒に入

て可否よし見えたり
考證　千金方度瘴發汗靑散　治傷寒赤色惡寒發熱頭痛項強體疼方　麻黃三兩半　桔梗　細辛　吳茱萸　防風　白朮各一兩　烏頭　乾姜　蜀椒　桂心各一兩六銖　右十味治下篩溫酒服方寸匕溫覆取汗々出止云々又千金翼別載度瘴散方　麻黃去節　升麻　附子炮去皮　白朮各一兩　細辛　防己　乾姜　桂心　烏頭炮去皮　防風　蜀椒汗　桔梗各二分　以上一十二味擣篩爲未密貯之山中所在有瘴氣之處旦空腹飲服一錢匕覆取汗病重稍加之外臺又載此方文有異同
瑜案するに本文九種の藥をつきふるひてといふをもて見れば千金度瘴發汗靑散の藥味やゝ其數に近くして一品をあます千金翼のゝする所は三品を多くす知らす禪閤のいへる所何によるといふことをよく二方なからこゝにあくるのみ委しくは片倉玄周か屠蘇方考に見えたり　延喜式典藥寮云正月元日御藥白散一劑度瘴散一劑屠蘇一劑千瘡萬病膏一劑又云此日以屠蘇酒盛銀鎗子上火溫之擇童女一人先飲之然後供天子嗣以白散度嶂散三朝而畢　大江匡房江家次第云正月元日典藥寮獻御藥於天子一獻注云屠蘇散也八物細切云々二獻注云卽神明白散也五物搗篩云々又引醫心方云一家有藥一里無病三獻注云度嶂散也九物搗篩云々繼獻千瘡膏　此餘委しくは江家次第公事根源等に其式をのするといへども事繁ければ省つ

問て曰同日齒固といひてもちひかゝみに向ふことは如何なることぞや

人は齒をもて命とするかゆゑ齒といふ文字をよはひともよむ也齒かためはよはひをかたむる心なり

考證　禮記文王世子云齒亦齡也注曰齡字从齒々異名也故又言年齡又言年齒其義一也　大戴禮曰男八月生齒八歲而齓齒是人壽之數也　江家次第曰元日平旦天皇御東廂淸涼殿也自御厨子所供御臺二本內膳自右靑璅門供御齒固具云々齒人年齡云也齒固者延年固齡之義也　源氏初音卷花鳥餘情に齒固は元三の日の事也齒はよはひとよめり齒固はよはひを固むるこゝろなり高坏六本にをしきをすゑ一の臺に餅大根橘をもるなり此餅は近江のひきりの餅を用ひへし
もちひは近江國の火切のもちを用ひ侍るへきことな

りさて正月のかゝみにしてもちふむかふときは古今集に入たる「あふみのやかゝみの山を立たればかねてそみゆるきみかちとせはといふ歌を誦するなり此歌は延喜の御門の御ときさ近江の國より大嘗會の御べたてまつりし時大伴の黒主かよめる歌なり源氏初音の巻にも此うたのことはを引てかけるなりまたは餅は蚩尤か肉となつけてくふ説も侍り」

考證　もちひ　和訓栞云餅養をいふ餅は麪餈也と註せれは小麥團子也饘も麪餅也といへは同し望飯の義望月より出たる名なるべし　かゝみ　後拾遺集詞書にもちひかゝみまたもちひのますかゝみとも見えたりと和訓栞にいへり案するに古歌にかゝみもちひとよめるもの極て多し夫木集三十二に「千代までも影をならへてあひ見むと祝ふかゝみのもちひさらめや堀川次郎百首元日の歌「今日よりはわれをもちひのますかゝみうれしき影をうつしてそ見む又榮花物語に云うへわか宮にもちひかかみを奉らせ給ふたかつき六本にをしきをする一の臺にもちひ大根橋をもるなり近江の火きりの餅を用る故にや此國の鏡山のうたをなかむるなり云々　又俊頼はかためのをしきのしきものにかきつけゝる「我をのみ世々に用ひのかゝみくささきさかえたる影ぞうつれる又源氏初音巻にはかためのいはひしてもちひ鏡をさへとりよせて千年のかけにしるきとしのうちのいはひことゝもしてそはれあへるにおとゝの君さしのぞき給へれば云々　又江次第餅鏡用近江火切といひ侍中群要に近江國火逐作餅解文など見たり　本朝食鑑云本邦自古以餅爲神明之供而作大圓塊以擬鏡形故呼餅稱鏡此擬八咫鏡乎正月朔旦必以鏡餅供于諸神及一家長幼團欒同薦鏡餅以賀新歳凡用鏡餅祝賀儀以二箇相重號一重此諱奇用偶者乎　張天如對類大全餅字下云麥米做成狀如鏡入於爐内烘熟蓋始于戰國是はまさしく邦俗の所謂やき餅にして揭飯にはあらね共成狀如鏡といへるは能似かよひたり

瑜案するに餅といふ名は同しうして物は同しからねど正月元日に祝ひて喰ふことは唐山にも似る事侍り　月令廣義曰餛飩俗名匾食燕都元旦晨起當家者率妻孥羅拜天地祖禰作匾食奉長上爲壽以次交相酬賀といへり遵生八牋花紅餅方用手壓匾とあれば

饜食はおしひらめたる食なり又熙朝樂事曰正月朔日民間設奠於祠堂次拜家長爲椒栢之酒以待親戚隣里以春餅爲上供とも見ゆ是も月令廣義に春餅者薄剖燖菜肉裹食也といへるによれは邦俗のいはゆるもちひとは格別のたかひ也又帝城景物略曰正月元旦啖黍糕曰年々糕といへり是も亦鎭江府志曰　俗毎歲除必蒸米粉作糕相餉謂之年餻とあるを見れは似て非なるもの也唯事の似かよひたるまゝ此にあく　又荊楚歲時記云長幼悉正衣冠以次拜賀進椒栢酒飮桃湯進屠蘇酒膠牙餳云々注膠牙者蓋以使其牢固不動といへるは餅と餳とのけちめはあれともまさしく齒固を祝ふ意也　あふみのや　此歌は古今集第二十大歌所御歌に入て左註に是は今上の御べのあふみのうたと有御へは御贄なり日本紀には饗て大甞をおほんべとよめり　又案するに蚩尤か肉に譬へて餅をくふといふ事いまたより所を得侍らず識者の敎をまて補ぬふべし　江次第禪閤抄曰齒謂人年齡也齒固者延年固齡也御厨子所進御臺二本内膳司供御齒固七坏云々　江次第曰大根一坏　荒串刺二坏　押鮎一坏切盛置頭　煮鹽鮎一坏同切置頭二串　猪宍一坏以雉代之　鹿宍一坏以田鳥代之　精進物供第一御臺　後陽成院以來當時年中行事云御齒固一番御鏡餅二番芋三番燒物四番ひしは五番奈良漬香物　御銚子御配膳典侍五ッ衣にて勤む　此餘建武年中行事及岷江入楚にのする所三說おの〳〵進むる所の品物同しからず江家次第や古き式とやいはむ建武行事は大かた江次第によりしとみゆ　されは諸書を引もらしつ

問て曰三日にたうやくとてつくること侍るにや

答たうやくはかうやくなりかうやくといふは聞わろきによりてたうやくといひかへたり延喜式には千瘡萬病膏といへりもろ〳〵のかさよろつのやまひなはすくのふあるにやさて御藥の儀式は三ヶ日あり第三日には是をつけたまふなり後醍醐院の御次第にはたうやくをは御ひたいと御耳のうらにつけたまふよしのせられ侍り右の第四の指をかゝめてつくるなり是は藥師の印相にて侍るとかや

考證　たうやく　和訓栞云紫式部日記に膏藥をかく書り公事根源にも第三日には御たう藥を奉ると見ゆ千瘡膏なりといへり獨參湯をろくじん湯といふか如く忌たる詞にや片倉玄周か屠蘇方考に本邦

千瘡萬病膏方を載す曰　細辛　乾姜　山椒　肉桂
大黄各七分　以上雷丸油和匀といひてさて此方は千金
黄膏より出たるよしを解せり實にしかることゝお
もはる唯本邦千瘡萬病膏何れの書出るともまた誰
家に傳ふるともいはねば玄周かいふ所も又必とし
かたきにや　後醍醐院の御次第云々　江次第曰第
三日三献供畢次典藥寮供御膏藥次供御匙盛千瘡膏
於金銅小器居中盤供之付於藥女官々々付頭々々傳配
膳々々供之主上取之以右手無名指令塗於左掌給云
々注云由右第四指是藥師印相也○後醍醐院抄傳御
額並耳裏江次第裏書　公事根源同し建武年中行事小注に
も亦しかいへり
瑜案するに那須玄盅か本朝醫談に云手の第四指を
くすり指といふ事は藥師佛の印相より言出したる
なり五臟次第圖には同身寸を藥師指の內のたけに
て定むといへりと見ゆかゝれは無名指を藥師ゆひ
とさへいひて藥つくるに用るもいとふるきことゝ
見ゆ

問て曰立春の日若水とて飲事侍るにや

答おほやけにはふるとしの十二月の土用以前に主水司御生氣のかたの井を封して人にくませすして立春の日の早旦に一返しとて土瓶に入て女官につけてこれを奉れば朝かれひの御座にして御生氣の方へむかはせしめ給ひて是を聞しめすなり私にも此日は井花水とて汲たる水を呑事侍るにや春のはしめにくめはわか水とは申にや

頭注云禪閣兼良公の御手に出る物こゝに止る已下は御息兼冬公の御作なるよし跋文に詳に見えたり

考證　若水と申にや　此文の下公事根源に數件あり云年中の邪氣を除くと云本文あれば殊更是を供するなり江匡房卿の次第には若水を飲とき咒をとなふる事有と見えたりとありて松下見林集釋云嘉祐本草云新汲水却邪調中下熱氣並宜飲之本朝ノ新汲水ハ每朝一番汲立ノ水ナリ若水を飲とき咒をとなふるとは江家次第抄云飲御若水之時有咒萬歲不變水急々如律令云々　江次第曰供立春水事舊年封御生氣方人家井一用之後廢而不用之自御厨子所付臺盤所女房供之於朝餉土高坏上置折敷押紙面　大土器盛立春水居折敷供之陪膳居之於高坏上一度御飮畢徹之　顯昭袖中抄曰「うちなひきけふ立はるのわか

水は誰かいた井にか結そむらむ若水とは立春の日主水司のおほやけに奉る水をいふ也案内しらぬ人は元日に奉るよし僻言なり賀茂の社なとにそ朔日に奉るをも若水と申なるそれは立春になすらへて私に申事なり堀川院の御時に立春のあしたに御前にて今日のこゝろをよめと宣旨ありければ俊頼朝臣か詠る「君かためみたらし川をわか水にむすふや千代のはしめ成らむ　蔀遊燕年中故事要言云爲家卿ノ年内立春ヲヨメルニ「朝氷トケニケラシナ年ノ内ニ汲テ知ラル丶春ノワカ水此年ノ内ニトヨメルニテ若水ハ立春ノヿト知ラレ侍リ元日ニ立春ノアタル時ハ勿論元日ニ汲ヘシ云々　黑川道祐日並紀事云元日朝諸家新汲井水是稱若水倭俗以若字代老弱之弱而用之云々是分明に元日に汲を若水とす然れ共禪閤も立春の日とのたまひ袖中抄及故事要言なとにあくる所の證歌たしかなる上は元日の事とするは誤りなる事疑なし　井華水　本朝食鑑云有稱堀井者能察地中水脈之好處鑿之成井其淺深據水脈也不時初汲曰新汲水若人旣汲之者非新汲水平日第一汲曰井華水

問て曰七日にあつ物をくふは何のゆゑにて侍るそや答正月は小陽の月なりまた七日は少陽の數なり依て朝廷をはじめとして私の家に至るまて宴會をもよほすなりそれにあつものを食すれは萬病また邪氣をのそく術なりといふ本文あり荊楚記といふ文にも羹を食して人俗病なければけふを人日とすると見えたり延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供すと見えたり其なゝくさのわかなといふは薺はこへらせり菁御形すゝしろ佛の座なとなり北野天神も和菜羹吸口と作り給ひたればむかしより侍りし事にや

考證　それにあつもの云々　本文何れの書に出たるや未考公事根源には正月七日に七種の菜羹を食すれば其人萬病なしまた邪氣をのそく術に侍ると見えたりとのみいへり　荊楚記云々　塵添埃囊鈔引荊楚歳時記云俗以七種菜作羹食之人無萬病とあるなとによりて本文をは書給ひしにや然れ共荊楚歳時記の原文を考るに正月七日爲人日以七種菜爲羹とのみ見えたれば埃囊鈔かならすしも證とするに足らす壒囊鈔云　正月七日ノ七草ノアツモノトイフハ七種ハ何々ソ七種ト云ハ異説アル歟不ニ一

准ニ或歌ニハ○芹ナヅナ五行タビラク佛ノ坐アシナミ、ナシ是ヤ七種○芹五行ナヅナハコベラ佛ノ坐スヾナミ、ナシ是ヤ七クサ　又或記ニハ薺蘩蔞五行スヾシロ佛坐田ヒロコ是等也ト云々但正月七日七草ヲ獻スト云フ更ニナシ年中行事ニハ七日白馬節會及叙位事　兵部省御弓奏事　ト計リ記シテ七草ト云フヿナシ十五日ニコソ獻七種御粥事ト註シ侍レ又資隆卿八條院ヘ書進スル簾中鈔ニモ此定也彼鈔名物也豈浮ケル事アランヤ又禁中ノ事年中行事ニシカンヤ既ニ廢務マデ註セリ爭カ當時事漏哉旁不審ナル事也乍去諸人皆七日ト思ヘリ何ナルヿニ歟人ニ可尋也次ニ其故ヲ云ハ大宗家訓トイフ文ニ云ク七種ノ若菜ヲ採テ調テ氏神幷ニ所ノ三寶次ニ父母ニ獻シテ後ニ是ヲ食スレハ春ノ氣病夏ノ瘧病秋ノ痢病冬ノ黄病モ不レ病人ニ三魂七魄ト云神有天ニハ七曜ト現シ地ニハ七草ト成也是ヲ取テ服スレハ我魂魄氣力ヲ増シ命ヲ延ル也太宗文王ノ時ヨリ始ルヿ也ト云々　公事根源云内藏寮ならひに内膳司より正月上の子日是を奉る也寛平年中よりはしまれることにや延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す又天暦四年二月二十九日女御安子の朝臣若菜を奉るよし李部王の記に見えたり云々

瑜案するに壒嚢鈔に年中行事にも簾中抄にも七日七草の事更になきよし解したるは實にさる事なからてはいとふるくよりかゝる風俗なりと見ゆ今一つの證とすへき事あり俊成卿の撰たまへる桐火桶といへる物に正月七日七草をたゝくに七づゝ七度かやうなれば四十九たゝくなりと有識の人申けるとはかりなり是をしひて問申けれはそれまでの事はとてわらひつゝ語給ふと云々（全文下に引へし）此卿御年九十一（或九十三）にして身まかり給ひし元久元年甲子より下公事根源の成し應永二十九年壬寅に至て二百十九年世諺問答の成し天文十三年甲辰に至て三百四十一年を隔つされは七日七種菜の事ふるきよりつたへたる事俄に不審すへきにあらず思ふに正月上の子日に若菜七種を獻せしがなべて七日の行事に成しもとをおしはかるに昔は三月のはらへは上巳を用ひしか後には三月三日を用ふると成しがてとく偶正月上の子日七日に當りし時七種菜を獻せ

しより荊楚歳時記なとの説に附會しておもしろきことに思ひてかく成しにやとおもひ侍るなり　又唐山の書ともに見えたるをいはゝ荊楚歳時記云正月七日爲人日以七種菜爲羹注舊以正旦至七日諱食雞故歳首唯食新菜といひ蘇軾か詩に七種共挑人日菜千枝先翦上元燈と作りしなとぞ人日かゝる事有證とはすへき此餘猶多けれとさして人日の事とせしはをさ〳〵見えぬ様なり今次に錄す　月令廣義曰五辛盤簇葱韭蓴絲芥辣蒜椒爲之又曰七菜羹歳時記揚雄賦五肉七菜朦厭腥臊　熙朝樂事曰立春擧酒則纏切粉皮雜以七種生菜供奉筵間蓋古人辛盤之遺焉耳　事文類聚曰東晉李鄂立春日命以蘆菔芹牙爲菜盤相饋貺遺唐人立春日薦一作作春餅生菜號春盤四時寶鏡參人月令立春日食生菜取迎新之意坡詩漸覺東風料峭寒青蒿黄韭試春盤詩餅如繭紙不可風菜如縹茸劣可縫韭芽杜詩黄苣舒紫蘆菔削冰寒脱齒臥沙壓玉割紅香部署五珍訪詩腸　四民月令曰凡立春日食生菜不過多取迎新之意而已及進漿粥導餘氣　事言要玄引風土記曰正月元日五薰煉形注五辛所以發越藏氣五辛即大蒜小蒜韭菜雲臺胡荽是也類腋引王保定擴言曰安定郡王立春日作五辛盤以黄柑釀酒謂之洞庭春色　是等皆立春の行事とせり　薺　本草時珍曰薺生濟々故謂之薺釋家取其莖作挑燈杖可辟蚊蛾謂之護生草云能護衆生也有大小數種小薺葉花莖扁味美大薺科葉皆大味不及並以冬至後生苗二三月起莖五六寸開細白花云々詩曰誰謂荼苦其甘如薺是也和名ナツナト云秋冬ヨリ春アリテ夏ナシ故夏ナキノ下略也年浪草　和訓栞に云薺をよめり撫菜の義愛する意なるへし新撰字鏡に甘なづなとよめり又蒴をなつなとよめるは心得がたし云々　蘩蔞　本草時珍曰此草莖蔓甚繁中有一縷故名俗呼鵝兒腸菜象形也易於滋長故曰滋草古樂府云爲樂當及時何能待來滋滋乃草名即是也正月生苗葉大指頭細莖蔓斷之中空也有一縷如絲作蔬甘脆也三月以後漸老開細辦白花結小實云々名和ミキ草古歌アリ年浪草　瑜案するに呉竹集にみきくさはこばへといふ草なりとて伊勢が歌を引り「我やとのかきねにおふるみきくさのはなも盛に成にけるかな果して蘩蔞の

事なりや不知　芹　本草時珍曰芹當作蘄从艸蘄聲諸也後省作芹云々呂氏春秋曰菜之美者有雲夢之芹雲夢楚地有蘄州蘄縣爾雅翼云地多產芹故字从斤芹有二種水芹生江湖陂澤之涯旱芹生平地二月生苗其葉對節而生其莖有節稜而中空五月開細白花云々詩云觱沸檻泉言采其芹云々此草冬月アリ倭俗嚴寒ノ間尤賞翫ス和名セリ其性一所ニセマリ合也セマリノ中略ナリ異名根白草又ツミマシ草又エク共云年浪草　和訓栞せり芹を訓す神代記にそりと見えたり此草一所にせり合て生するをもて名とせるなり云云　菘　本草時珍曰按陸佃埤雅云菘性凌冬晩凋四時常見有松之操故曰菘今俗謂之白菜有二種一種莖圓厚微青一種莖扁薄而白其葉皆淡青白色八月以後種之二月開黃花云々是蔓菁之類倭俗稱之曰菜在水田稱水菜又浮菜在圃稱畠菜於諸國稱京菜又在水田曰菘生圃曰菁云々今スヽナトハ小菜ニテ少キ心共云年浪草　和訓栞に云すゞな七種の若菜に入拾芥抄に菁をよめり蕪菁を云されは菘也といへり又すゞは小をいへは今いふよめななるへし薩摩にていふは常に其國に食ふ豆の芽(モヤシ)也　鼠麴草(コギヤウ)　本草佛耳草和名母子草出文德實錄曰田野有草俗名母子草二月始生莖葉白脆云々年浪草　蘿蔔(スヾシロ)　韓保昇蜀本草云葉服俗名蘿蔔按爾雅云突蘆肥孫炎注曰紫花菘也俗呼温菘似蕪菁大根俗名雹突本草時珍曰王禎農書曰北人蘿蔔一種四名春曰破地錐夏曰夏生秋曰蘿蔔冬曰土酥謂其潔白如酥也珍按菘乃菜名因耐冬如二松柏一菜菔乃根名云々是和ニ大根ト稱スル物七種ニハススシロト云スヽノ詞スヽ菜同意小キ心也シロトハ根ノ白キヲ云順和名ニ温菘ヲ古保禰ト訓ス是小大根也スヽノ詞ニ叶ヘルニヤ年浪草　和訓栞云倭名抄に鬌を訓せり小兒剪髮所餘也と注せり又額髮也ともいへり今いふ前髮の事にや月代なとゝいふに據に薄代の義なるへし云々七種の菜にいふものは蘿蔔也といへりされはすゝは凉しき義しろは白の義成へし一說に本草に薊其花如髻也といへはあさみなるへしといへりされは鬌の義によれるなり又薩摩にていふは常は河高菜といふ　佛座　本草時珍曰黃瓜菜其花黃其氣如瓜故名二月生苗田野徧有小科如薺三四五月開黃花々與莖葉幷同地丁但差小耳云云臭蒿(ホトケノザ)一名七器菜又名田平子云々年浪草

附　七種をたゝく説　世説故事苑云打七種菜事諸子ノ考未見按事文類聚ニ歳時記ヲ引テ曰正月七日多鬼車鳥渡家々槌レ門打レ戸滅ニ燈燭一禳レ之以上　倭俗七種ヲ打唱ヘニ唐土ノ鳥日本鳥渡ラヌ先ニト云ハ此鬼車鳥ヲ忌意ナリ板ヲ打鳴スハ鬼車鳥不止ヤウニ禳フ也事文引太平廣記云鵂鶹即鵺也一名姑獲一名夜遊女又名鬼車春夏之交稍遇陰晦則飛鳴而過嶺外尤多入人家鑠人魂氣或云常滴血々々家則有凶咎云々

俊成卿桐火桶に曰正月七日七草をたゝくに七づゝ七度かやうなれは四十九たゝくなりと有識の人申けると計なり是もしひて問申けれはそれまでの事はとてわらひつゝ語り給ふ先七草は七星なり四十九たゝくは七曜九曜廿八宿五星合て四十九のはしを祭るなり唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬさきに七草薺手につみ入て亢觜斗張げに〳〵さりけなき様にて物の大事は侍りけりといよ〳〵あふかれてこそ侍りしか　方外の友了阿曰四十九敲くとは　ナナクサナヅナ　タウドノトリト　ニホンノトリト　ワタラヌサキニ　ナナクサナツナ　テニツミイレテ　カウシトチヤウ　かくの如く成へし

亢ハ東方七宿第二也（宿曜經巻下曰亢宿宜種蒔草木種穀小豆大豆烏麻等皆吉）　觜ハ西方七宿第六也（宿曜經巻下曰觜宿宜種蒔）　斗ハ北方七宿第一也（宿曜經巻下曰斗宿宜著新衣及安久事衣服）　張ハ南方七宿第五也（宿曜經巻下曰張宿喜慶事求少嫁娶修理宅作）二十八宿の中に此四宿農家耕織の事によしある星ゆゑ春のはしめに其御名をとなへて祝ふならむ

問て曰けふおほやけにて白馬を見たまふは何のいはれぞや

答十節記に白馬を馬の性の本とす天に白龍あり地に白馬有また天の用は龍也地の用は馬なりと申本文あり

考證　十節記　源氏榊巻河海抄引之　又天の用は龍也（史記平準書云天用莫如龍（索隱曰易云行天莫如龍是也）地用莫如馬（索隱曰易云行地莫如馬是也）人用莫如龜（索隱曰禮云諸侯以龜爲寶是也））

また禮記といふ文に春を東郊にむかへて青馬七疋をもちゆと見え侍りしまた白馬を青馬と申侍るは馬は陽の獸なり青は春の色なり極めて白きものはあをさめて見ゆるものなりされは青馬とも白馬ともかよひて申にや正月七日に青馬を見れは年中の邪氣をはらふと云本文侍るなり今のわらはへの春駒といふは是

よりはしまり侍るにや

考證　禮記月令云天子居青陽左个乘鸞路駕倉龍載青旂衣青衣　又云立春之日天子親帥三公九卿諸侯大夫以迎春於東郊還反賞公卿大夫於朝　極めて白きものは云々　閑田次筆卷三に云く白馬を青馬といふは誰もしりたる事にて至て白き物は青く見ゆると也然るに此頃六如上人の葛原詩話後編を見るに曰碧桃ハ即白桃ナレハ碧梅トイフモ亦常ノ白キ梅ナルヘシ范成大カ詩ニ不知行到碧梅邊但見天風吹雪以テ證トスベシ此紅梅ニ對シテ云也とあり碧も青も相通すべし云々　年中の邪氣をはらふ　本文未詳　公事根源に云天武天皇十年正月七日御門小安殿におはしまして宴會の儀有てれや七日の節會の始成へからむとのみ遊して白馬の節會の濫觴はたしかにのせ給はす瑜か管見をもて是をいはゝ續日本紀光仁天皇寶龜六年卯春正月七日天皇御楊梅院安殿設宴於五位以上既而內厩寮進靑御馬兵部省進五位以上裝馬と見えたるやはしめならむ

問て曰十五日にかゆを食するは何のいはれの侍るそや

答人の國のむかし黃帝蚩尤を正月十五日にたいらけ給ひしに魂は天狗と成身は地靈と成人民をなやましけれは時に黃帝天に祈りしかは天つけてのたまはく魂魄を崇め弊し身をはめつせよと有しによりて月每に其魂魄に幣を奉り給ひし夫によりて今の世に至るまて正月十五日の亥のときあつきのかゆにて庭上に天狗をまつりて東にむかひ再拜してひさまつきて是を食すれは年中の疫氣をのそくと承りしわたましうふやのときかゆを四方にそゝくも此くのうとそ覺侍る

考證　源氏河海抄夢浮橋引本朝月令云黃帝伐蚩尤之時以正月十五日伐斬之其首者上爲天狗其身伏而成蛇靈　世說故事苑引世風記曰正月十五日煮小豆粥爲天狗祭庭中案上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無疫氣

瑜案するに右の外たしか成證據も見え侍らす思ふに續齊諧記張成か故事に附會してかゝる事起れるにや今次に抄す　吳縣張成夜起忽見一婦人立於宅東南角擧手招成々即就之婦人曰此地是君家蠶室我即是此地之神明年正月半宜作白粥泛膏於上祭我也

必當令君蠶桑百倍言絕失之成如言作膏粥自是後大得蠶今正月半作白膏粥自此始也また荊楚歲時記曰正月十五日作豆糜加油膏其上以祠門戶先以楊枝插門隨楊枝所指仍以酒脯飲食又豆粥插箸而祭之また玉燭寶典曰正月十五作膏粥以祠門戶また范石湖集臘月村田樂府數粥行叙曰二十五日煮赤豆作糜暮夜闔家同饗云能辟瘟氣雖遠出未歸者亦留貯口分至襁褓小兒及僮僕皆預故名口數粥豆粥本上月望日祭門故事流傳爲此なといへるを見て知るへし　枕草子に云十五日には餅かゆのせくまゐる粥の木引かくしてうかゝふ打れしと用意してうしろの心つかひしたる氣色もをかし　狹衣に云若き人々てゝかしてむれゐつゝをかしけなるかゆ杖引かくしつゝかたみにうかゝひまた打れしとしたるすまひ思はくともゝおの〳〵をかしう見ゆるを大將殿見たまひてまろを集りてうてさらはそれも子はまうけむ誠にしるしあるてとならはいとふともねんしてあらむなとのたまへは皆うけわらひたるに云々　紹巴の下紐に云粥の杖にて打古事考ふへし禁中にても粥杖にて女房をうては男子を生すとて打也越前なとにはてと〳〵しきと也本文は不知也云々　又案するに公事根源に猶一説を載て云又高辛氏のむすめ有しか是も心あしくして正月十五日に巷中にしてうせぬ其靈魂とゝまりて道路にさまよひて行人をなやます此人平生粥をのみ好ける故に今日是を祭れはわさはひなしとかや此二說何れをよしとも難定といへり此本文たしかならす猶可尋

問て曰爆竹は何の故にて侍るそや

答神異經云西方の山中にたけ一尺餘の人あり是を見るもの則寒熱に病を得るをもつて以竹火をたきて爆烞の聲あれは別驚去といへりまた事文類聚と申文に爆竹聲中一歲除春風送暖入屠蘇千門萬戶曈々日總把新桃換舊符屠蘇は孫思邈か庵名也屠は割也蘇は腐也と見えたり寒熱和合の氣をそなふるましなひなるへし爆の字は廣韻に火烈と注せりまたはためくとよめり

考證　神異經西方深山中有人焉身長尺餘袒身捕蝦蟹性不畏人見人止宿暮依其火以炙蝦蟹伺人不在而盜人鹽以食蝦蟹名曰山臊其音自叫人嘗以竹著火中爆烞而山臊皆驚憚犯之令人寒熱此雖人形而變化然

亦鬼魅之類今所在山中皆有之　荆楚歲時記正月一
日是三元之日也春秋謂之端月鷄鳴而起先於庭前爆
竹以辟山臊惡鬼注按神異經云西方山中有人焉其長
尺餘一足性不畏人犯之則令人寒熱名曰山臊驚憚玄
黃經所謂山㺐鬼也俗人以爲爆竹起於庭燎家國不應
濫於王者　事物紀原曰歲時記曰元日爆竹於庭以辟
山臊々々惡鬼也神異經曰犯人則病畏爆竹聲宗懍乃
云爆竹燃草起於庭燎風俗通謂起於庭燎不應濫王者
也按周衰之末大夫而僭天子庶人而服侯服者皆是也
奚獨燎明爲不然乎懍之所記或然矣　范石湖集臘月
村田樂府爆竹行叙曰此他郡所同而吳中特盛惡鬼蓋
畏此聲古以歲朝而吳以二十五夜　熙朝樂事曰除夕
人家祀先及百神架松柴參屋舉火焚之謂之籸盆煙焰
燭天爛如霞布爆竹皷吹之聲遠近聒耳　群談採餘歲
此事籸盆作火爆　帝城景物略除夜以松柏枝雜柴燎
院中曰燒松盆熰歲也　通雅曰除日焚柴曰札盆月令
通考吳中風俗除日送舊神焚松柴謂籸盆或曰以松柏
桃杏蒸火曰生盆孫愐曰籸粉滓也韻會曰粥凝歲時雜
記除夕作黃燭以麻籸漬油如庭燎律有元日油籸之義
今籸盆也或作𥻘萅萃青藤曰俗謂之喪盆或燒冬青樹

武林舊事南郊用之又元夕有黃燭盆以上いふ所或は
除日とし或は元日とし或は二十五夜とし十五日の
行事とせし事は見えされ共爆竹に於ては則同し

和漢三才圖會云止牟止正字未詳疑二毬打之訛也
止牟止與左義長二物矣按正月十五日於清涼殿庭燒
青竹以被レ上三吉書於天二十八日亦飾竹結付摺扇於
清涼殿庭燃之唱文師大黒松大夫其徒四人二人翁形二人嫗形被
鬼面蒙赤熊髮二嫗撝大皷二翁逐舞打之童子二人蒙
面蒙赤熊髮打腰鼓又傍著袴肩衣者五人雙立囃之言
止牟止也著摺袴者一人和聲謂波阿未知其來山歲時
記曰元日庭前爆竹避山臊此遺事乎然日不同或云漢
明帝正月十五日試佛經道書勝劣之遺風也是左衣長之義　然
其儀式不拘浮圖事恐附會之說也凡民間十五日朝收
取每家飾藁松竹集一處燒之爲止牟止兒童試筆書上
於天以禁裏二節會唯一度爲之耳云々
案するに漢明帝の故事は詳經圖記に詳に見えたり
本文にあつからぬ事なれは畧之此外にもさぎちや
うには種々の說侍れともてゝには爆竹の義をもは
らに證するのみ

問て曰せんすまんさいといふは何のおこりにてか侍

るらむ

答むかしは男踏歌とて京中の男女聲よきをつとへて内裏にて祝詞をうたひて舞はせられしなり持統天皇の御時は漢人踏歌をそうせしとかや光源氏のかうこしのよはなれたるさまもかのたうかのことそかし

考證　男踏歌　公事根源云踏歌といふは正月十五日の男踏歌の事にて侍るへし近ころ行れ侍るは女踏歌なりそれは十六日光源氏の物語なとにもおほくは男踏歌のことを申侍るにや大かた正月十五日六日は月の頃なれは京中の男女のこゑよく物うたふをめしつとへて年始の祝詞をつゝりて舞をまはせなとせられ侍りし故に踏歌とは申なめりとあるを此にむかし男踏歌とて京中の男女聲よきをつとへてと遊したるは誤なりいかて男踏歌といひて女も混すへきや公事根源に男好の聲よく云々とのたまひしは踏歌のすへてのさまをとける詞にて上へかけて見るへからす　日本紀持統天皇七年正月丁酉漢人奏踏歌　天中記引唐輦下歳時記云先天初上御安福門觀燈太常作歌樂宮女歌舞朝士能文者爲踏歌聲調入雲と見えたるそ踏歌といふことも彼國より起れるあかし成へき　光源氏のかうこしの云々　初音卷云何れも／＼おとらぬ袖口ともこほれ出たるこちたきもの〻色あひなとも明はの〻そらに春のにしき立出にける霞のうちかと見わたさるあやしく心ゆく見物にそありけるさるはかうこしのよはなれたるさま云々かうこし高巾子とかく　細流抄云花に別勘あり狂言かましきものに着する也狂言帽子なと成へし花鳥餘情に西宮抄云召御巾子造仰可奉高巾子二口云々今案するに高巾子の冠は巾子を高くし白き衣にて是を張藏人所より是を下したまふ六位の舞人の内これを着す常に見なれぬ姿なる故世ばなれたるとはいへり猶別にしるす事あり

此餘風はるかの末にとゝまりて千壽萬歳の祝詞をうたひ侍るなり踏歌の舞人萬春樂を奏せしゆゑにまんさいらく／＼とはやすなり

萬春樂　和訓栞云源氏に見ゆ萬春樂なり八句の詩なるを漢音にうたひ句ことの間に萬春樂と唱ふ踏歌の舞人の立さまにいふことなり西宮抄に委く出たりとそ淡海御船の作なりといへり　閑田耕筆二

云千秋萬歳は大和より出るもの一種類なり萬歳村ありとそ河内三河なとより出るも其類か京都にては陰陽家の人小泉より出是は禁裏仙洞后宮計へ參りて世にあまねくは知らす壽詞五段頗古雅にて大鼓一調をもてはやすとなむ彼大和の物はあまねく民間をもめくり舞けり詞柄もやゝ下りてけちかく十餘段小鼓もてはやすさま世にしるてとし因に云彼唱歌にとく若に御萬歳といふ詞何事とも知りかたきを或人とて若にてとてとはに若きのいひなりと又やしよめ〳〵京の町のやしよめといふ事有是もやさめにて艶敷女といへる也京の町のと重ねたるにて知るへしとなむ　右の條を竹苞樓主に語りける次此ものは本いつはかりより興りぬらむといひ出てかたみに考たるに彼人云臥雲日件錄相國寺瑞溪周鳳和尙日記也　文安四年正月二日の條に一種乞食革歳首到人家歌祝言世號之千秋萬歳前后相逐來各與百錢云云また御湯殿のうへの日記云元龜三年正月五日北畠のせんすまんさい三人參るとあるとおのれ云勸進𨾂の歌合第一番に千秋萬歳法師あり此ときは法師にて祝事して來りけるなりまた後成恩寺殿の御作源語秘決に末代に千秋萬歳なといふは男踏歌の餘風なり後嵯峨院の御時にもはやりしてとなりと書たまへりといへは彼人實に世諺問答にも此よし見ゆといふ同公の御作なれは可然なといひしろひける後同し人或人考出さるゝは長明發心集私云此書眞作にあらすといへとも時代格別後の物にはあらしに唐坊行因の條に此人眞言なら ひ初ける頃法師の大あしやりのてゝろみむとや思はれけむ男にてはものゝ眞似をよくし給ひてをかしき方に人興せられけりと聞つるなり千秋萬歳し給へ見むといはれけれはまたこともなく承りぬとて經のつゝみ紙の有けるを頭に打かつきてめてたく舞たりけれは云々下略　又古今著聞集の興言利口部に知足院殿大殿とておはしましける時侍御かん當ありけるには千秋萬歳をもちてはやさせて其侍をまはせられけるさる御かんたうやはあるへき云々先々の證文は皆足利家の中葉の時なり此二件は北條執權の頃ほひの年記なるへけれはやゝ先より有し事なり　以上閑田耕筆

問て云そみんしやうらいとてわらはへのかけ侍るは何のいはれそや

昔武塔天神南海の女子をよはひに行給ふとき日くれたりけれはかの所に蘇民將來巨且將來と云二人のもの有兄弟にて在しなり天神弟の巨且將來に宿をかり給ふに其身富りといへともゆるし奉らすまた蘇民將來にかり給ふに貧なりといへとも宿をかし奉り粟からを座として粟の飯を奉りけり其後八年を經て武塔天神八はしらの御子を引具してかの蘇民か家に至り給ひて一夜のやとをかしつる恩を報せむとて蘇民に第輪をつくへしとの給ふ其夜より疫病萬民をかいせしか其蘇民ひとりつゝかなかりしより今の世に至るまてかれか名をかいて掛るとそうけ給りし

考證　武塔天神　則牛頭天王にして素盞烏尊の御事なり此條の考證は門松のくたりに簠簋内傳及備後風土記を引て委しくいへり可併考

問て曰正月に弓射るは何の故そや

答射禮とてむかしは内裏にて弓射る事の有しなり孝德天皇の御宇に正月弓をいさしむ凡的は蚩尤か眼となつけて是をいたましむるなり仁德天皇の御宇に高麗國よりくろかねの楯くろかねの的を奉りしを盾人宿禰といふものいとはしてかへしけれはそれより日本をとらんといふてとをとゝめけり

考證　仁德天皇の御宇に云々日本紀仁德天皇十二年秋七月辛未朔癸酉高麗國貢鐵盾鐵的八月庚子朔己酉饗高麗客於朝是日集群臣及百寮令射高麗所獻之鐵盾的諸人不得通的唯的臣祖盾人宿禰射鐵的而通焉時高麗客等見之畏其射之勝巧共起以拜朝明日美盾人宿禰而賜名曰的戸田宿禰　扶桑略記仁德天皇十二年甲申高麗國貢鐵楯的等八月於朝廷饗高麗客是日天皇召集群臣令射高麗所獻楯的无敢射通之者但的臣之祖楯人宿禰輙以射通遠客見之恐其國射勢共起拜之因賜其名曰的戸田宿禰新羅國久忘貢調十七年己丑遣的臣楯人宿禰彼國王恐之進絹一千四百六十疋幷種々雜物等載船八十艘　松下見林公事根源集釋に國史を引す今詳に玆に證す

正月五日に射場はしめといふ事むかしは有しなり公卿以下束帶にて是を射るなり天子も御射席に弓矢を御座の左右に立らる是は文武二道をは一をかくへからさるか故に今天子も弓場殿にいて武道をならはせ給ふなり世のみたるゝときは武をもて治め世のをさ

まれる時は文をもてをさむると申なりされは治るとて武をわすれされと申なり是によりて先年の始に射る事になれり弓のおこり除りにことくしけれは略し侍るなり

問て曰正月に卯杖と申事の侍るにや

答ゐのつからもろこしに桃杖をもて惡鬼をはらふ事の侍るなり

考證　淮南子詮言訓云王子慶忌死於劔羿死於桃棓高誘注曰棓大杖以桃木爲之以擊殺羿自是以來鬼畏桃也棓音棒これ桃杖をもて惡鬼をはらふといへる事のもとなり

本朝のおこりを尋れは持統天皇三年正月の卯の日大學寮より奉るよし日本紀に見えたり其後仁壽二年正月に諸衞祝の杖を獻して精魅をおふと見えたり唯是惡氣をはらふことゝろなり

考證　日本紀持統天皇三年正月乙卯大學寮獻杖八十枚云々　公事根源集釋云卯日タテマツル杖故卯杖トイフ文德實錄ニハ剛卯杖ト書タリ漢書王莽傳中云正月剛卯金刀之利服虔曰剛卯以正月卯日作佩之長三寸廣一寸四方或用玉或用金或用桃著革帶佩之今有玉在者銘其一面曰正月剛卯　七修類藁四十五云漢有剛卯正月作而佩之按說文曰㱿音閡改大剛卯以逐精鬼者據此則如宋人立春日戴春勝春幡之事又按野客叢書曰剛者强也卯者劉也正月佩之尊國姓也命而論之乃欲尊王而辟邪爾故王莽傳曰正月剛卯金刀之利皆不得行據此是欲滅漢之意其制服虔曰剛卯以正月卯日作長三寸廣一寸四分或用玉或用金或用桃著革帶佩之今有玉在者其一面曰正月剛卯晉灼曰剛卯長一寸廣五分四方當中央從穿作孔以采絲葺其底如冠纓頭蕤刻其四面作兩行書文曰正月剛卯既央靈殳四方赤靑白黃四色是當帝令祝融以敎夔龍役剛癉莫我敢當其一銘曰疾日嚴卯帝令夔化順爾固伏化玆靈殳既正既直既觚既方庶役剛癉莫我敢當余嘗得一玉嚴卯然按大小及文却如晉說但疾日作疫曰夔化作夔龍靈殳作靈昌而字文皆有古法非今俗書也意乃服漢人而所說與物不類何也思許叔重曰大剛卯則知有小者也是服所言特爲大者乃前漢之物其文之異或當時有省文者爾不然何後漢輿服志所說却與予所得者相脗合邪是晉之所註乃後漢之物予之所有小者也嚴亦非剛之意耶嗚呼一物之微在漢已有不同註者故各有

巽后人不見其物不曾諸說安知義耶なと見えたり此事本文にさして緊要のことにもあらねと文德實錄に剛卯杖と書たりしより思ひよりて類稿をも引及しぬやくなしとな思ひそ

卯杖といふ物はつくも所よりすはまの作物のうへにいはほを作りいはほの中に御生氣の方の獸を作りて奉りて卯杖にあはしむるなり譬は生氣東にあるとしはうさきを作り南にあるとしは馬を作るなり

考證　つくも所は作物所と書　江家次第裏書云作物所在進物所西有別當預　すはま　洲濱とかけり類聚雜要に圖式あり水次に洲と濱とある象を造れり今の嶋臺といふものなりといへと洲濱島臺蓬萊のわかちありともいへりと谷川淡齋いへり　御生氣　詳に居蘇の條下に見ゆ

延喜式をかむかふれは兵衛督以下參りて御杖を奏するると有色々の木とをを五尺三寸つゝにきりて二束三束にゆひて奉るなり是を正月上の卯の日奉れは卯杖といふなり

考證　延喜式左兵衛府式云凡正月上卯督以下兵衛已上各執御杖一束次第參入立定佐一人進奏其詞曰左右兵衛府申正月能上卯日能御杖仕奉氏進良久登申給波久登申勅曰置之醫師以上其稱唯獻畢以次退其御杖榠樝三束一株爲束木瓜三束比々良木三束牟保己三束黑木三束桃木三束梅木二束以上二株爲束椿木六束四株爲束中宮東宮別榠樝一束二株爲束木瓜二束比々良木牟保己一束黑木二束桃木三束梅木二束椿二束並各長五尺三寸

年中行事臺盤所ニ奉ル卯杖ヲトリテ晝御座ノ御帳夜ノ大殿ノ御帳四ノ隅ニ立ル也

世諺問答考證卷上終

世諺問答考證卷中

二月

問て曰此月の午の日いなりに參るは何のいはれにか侍らむ

答弘法大師東寺の門前にて稻おひたる老翁に二月上午の日あひ給ひて則當寺の鎮守に勸請申されたりしかは此寺繁昌せしかは此日をもて縁日とやまうすへからむ

考證　東寶記第一或記云桓武天皇御宇延曆年中於山城國被立平安京之時（本者山背國也而同十二年改山背號山城）建東西兩寺於羅城門之左右（東寺）號左大寺（西寺）號右大寺羅城門之左元在山城國分寺以其跡建立大伽藍而號左大寺云々

神社考曰空海於東寺門前逢負稻老人海祭之以爲東寺鎮守以擔稻故號稻荷　神社啓蒙云或問稻荷神社僧空海於東寺門前逢負稻老人海祭之以爲東寺鎮守以其擔稻故號云奈何曰不知焉者以爲然知焉者不信故予舉其神名使見之者不惑也昔者神社多爲浮屠見攘竊還就浮屠覔其說介之爲其傳爲其紀胥牽之陷于夷狄梵語之中證之以三昧非神喜之猶不得已也雖然至久而不矯則猶治飢於烏喙止渴於酖毒故比不入乎其肺府而救之吭胸之間則庶乎復生矣其號稻荷者所謂荷田神地置倉稻魂故也

瑜曰こゝに引用する神社考は晩近の書なれは此問答に證すへきものならねと啓蒙に解する所も直に此文を引たれは今併せてこゝにあくるのみおもふに羅山翁の記せられしも此問答に原き給ひしにや猶古き物につきて此話の起原をたつね侍るへしさて稻荷社の本說をとはゝ　神社啓蒙云稻荷社者在山城國紀伊郡去王城東南許三里所祭之神三座　下社　大山祇女（非開耶姬延喜式頭註）　中社　倉稻魂（ウカノミタマ）（同名異神有三神而司識各異）　上社　土祖神（ツチノミオヤノ）（延喜式頭註）也勿混

豐葦原卜定記云辰巳乃方（ケル）仁當天倉稻魂乃垂跡阿利夫此神和百穀（タナツモノ）於播（フ）玉故仁名奉神代乃昔與利此峯仁向（ヒ）玉母不知只三峯仁顯（ヒ）玉之和人皇十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡（アトダレマ）寸誠仁諸人哀憐乃御心深久蒼生（アヲヒトクサノツツシン）作物和草乃片葉末天百乃災於禳（ハライタマフト）玉（全文畧之）　啓蒙又云問二月初午說奈何曰元正帝御宇當社影向之日偶二月初午日也故至今用此日（神祇拾遺）　雍州府志云當社出現和銅四年二月九日也從此說以長曆推之則其日偶當初午日然今不用

九日用初午日前諸侍伺初午出ノ詣□六々今諸國用初午日稲荷詣之事なきにあらしを見れは二月十一日を九月との定め同にあれとも和銅年間の昔に必然なり何そ和銅四年よりして下に千何年を久經し用中に十一にしみて稲荷をまつりて東寺の鎮守となすの理から行ふ稲荷の守に附會して稲々になし之を皆にならひて宗海の歌もりはしめしたけふ説は舊圖に事蹟なる事無疑　又參する初午に稲荷詣することもふるくより有し事にて既に紀貫之集第一延喜六年月次の屏風に二月初午いなり詣したる所

獨のみわれこそなくに稲荷山はるの霞の立かくすらむ　夫木集光俊　二月やけふ初午のしるしとて稲荷の杉はもとつはもなしなと見えたり

問て曰二月十五日にねはんそうとてかたる法何の故にて侍るそや

答それ一代教主釋迦牟尼如來下天のはしめを尋れは淨飯王の宮に降誕して七日に其母摩耶夫人うせたまへり

考證　釋迦牟尼如來　翻譯名義集云此云能仁寂默々々故不住生死能仁故不住涅槃悲智兼運立此嘉稱號輔行云本起經翻釋迦爲能仁[illegible]

[illegible]

淨飯王[illegible]

又翻大智[illegible]

生佛故[illegible]

記云[illegible]

耶夫人[illegible]

爲蓮[illegible]

生悉達太子顯現不思議自在神力莊嚴經云摩耶善覺
女（以下八相事略）七日に其母摩耶夫人はうせ給へり（卷ノ二十六葉）（ノ廿九葉）因果
經云太子既生始滿七日其母命終以懷太子功德大故
上生忉利天封受自然太子自知福德威重無有女人堪
受禮者故因將終託之而生爾時太子姨母摩訶波闍提
乳養如母無異又云觀摩耶夫人壽命修短懷抱太子滿
足十月太子便生生已七日已其母命終（ノ十一）寶積經云菩薩（百七ノ九葉）
道生七日摩耶夫人尋便命終善男子此是摩耶夫人命
根盡故也非菩薩咎也菩薩先知在兜術天時以天眼觀
摩耶夫人命終滿十月已餘有七日在爾時菩薩便從兜
術天來菩薩以方便知摩耶夫人命根欲盡故來下生非
菩薩咎本行經云（卷十初葉）菩薩生適時七日摩耶命終　或有師言
耶夫人壽命算數唯在七日是故命終蓋然但往昔來常
有此法其菩薩生滿七日已而菩薩母取命終何以故以
諸菩薩幼年出家母見是事其心碎裂便命終菩薩經云（二ノ十九葉）
菩薩生七日後其母命終故使比丘意所疑云何七日命
終菩薩答也真作是說○當時命終因來下生菩薩經云
何　菩薩生後七日其母便是后壽終盡是生天非菩
薩答前盡已有摩耶夫人命壽終餘有十月七日之期

故從兜術神變來下見人后時以是推之非菩薩答（上ノ八葉）略す

十九にして出家

考證　異説極ておほし一には十九出家二には廿五
出家三には廿九出家四には三十一出家五には三十
出家なりしかれ共諸經に多くは十九出家の説を正
こすと法苑珠林にいへり十九出家の説は本起經瑞（下ノ五葉上）
應經因果經等の説也又文殊記引普賢菩薩所問功德（ノ九葉）（二ノ十八葉）（二ノ十八葉）
經云十九踰城捨國王位三十成道教化衆生と見えた
れ共此經明義になけれは更によく考て知るへしと
そ然れ共未曾有經に羅睺陀羅答目連日菩薩如來爲（上ノ二葉）
太子時娶我爲妻奉事太子如事天神曾無一失其爲夫
婦未滿三年捨吾出家踰越宮城とありこもて十七納
妃の義に約すれは十九出家の説とすへし十七納妃
の説は瑞應經に見えたり詳に八相事略に載す往て
見よ

三十にして成道し給ひて

考證　法苑珠林引（十八四葉取意）普曜經十九出家三十成道元文應
允亦真諦義相應亦引泥洹經四月八日成道今以爲正

九日用初午日故諸俗稱初午詣又謂福參云々今諸國用初午日祭稲荷者據之矣なといひしを見れは二月十一日と九日との差別はあれと和銅年間の鎮座必然たり何そ和銅四年よりして下七十餘年を去延暦中に至てはしめて稲荷をまつりて東寺の鎮守となすの理あらむや稲荷の字に附會して稲をになふ老翁にあひて空海のまつりはしめしといふ說は浮圖の妄誕なる事無疑　又案するに初午に稲荷詣することもふるくより有し事にて既に紀貫之集第一延喜六年月次の屏風に二月初午いなり詣したる所「獨のみわれてそなくに稲荷山はるの霞の立かくすらむ　夫木集光俊「二月やけふ初午のしるしとて稲荷の杉はもとつはもなしなと見えたり

問て曰二月十五日にねはんそうとてかたるは何の故にて侍るそや

答それ一代教主釋迦牟尼如來下天のはしめを尋れは淨飯王の宮に降誕して七日に其母摩耶夫人うせたまへり

考證　釋迦牟尼如來　翻譯名義攄華云此云能仁寂默々々故不住生死能仁故不住涅槃悲智兼運立此嘉稱發軫云本起經翻釋迦爲能仁本經行譯牟尼爲寂默能仁是姓寂默是字姓從慈悲利物字取智慧冥理以利物故不住涅槃以冥理故不住生死長水云寂者理相無相默者示說無說此則即眞之應也（大中記）　翻譯名義云多陀阿伽陀後秦飜爲如來金剛經云無所從來亦無所去故名如來此以法身釋轉法輪論云第一義諦名如正覺名來此以報身釋成實論云乘如實道來成正覺故名如來此約應身釋　道院集要本覺爲如今覺爲來故爲如來　佛書雜說如者來之體來者如之用（已上大中記）

淨飯王　翻譯名義集云首圖駄那或名閱頭檀此云淨々飯或翻眞淨或云白淨（卷三三葉）　佛祖統紀云白淨或云淨飯梵云首圖駄那本行經云謂財德絕備然諸經未見白淨々飯其義何謂（已上八相事略）　摩耶夫人　佛本行經母名摩耶（此言幻）（廿四葉）　涅槃疏云摩耶者賢劫經翻極妙瑞應經翻曰妙（五ノ十四葉）　又翻大智母（瑞應經父王名白淨聰叡仁賢大人曰妙爾義溫良）　華嚴疏云昔云天后能生佛故鈔云新譯爲幻術亦云幻生得幻智門故（七十六ノ廿葉）西域記云摩訶摩耶唐言大術（三ノ六葉）名義集云或云大幻（六ノ七葉）晉華嚴摩耶夫人答善財言我已成就大願智幻法門得此法門故爲盧舍那如來母於閻浮提迦毘羅城淨飯王宮從右脇

生悉達太子顯現不思議自在神力莊嚴經云摩耶菩覺女（以下八相事略）（卷ノ二十六葉）七日に其母摩耶夫人はうせ給へり（一ノ廿九葉）因果經云太子既生始滿七日其母命終以懷太子功德大故上生忉利天封受自然太子自知福德威重無有女人堪受禮者故因將終託之而生爾時太子姨母摩訶波闍提乳養如母無異又云觀摩耶夫人壽命修短懷抱太子滿足十月太子便生々已七日已其母命終（一ノ十一）寶積經云菩薩適生七日摩耶夫人尋便命終善男子此是摩耶夫人命根盡故也非菩薩咎也菩薩先知在兜術天時以天眼觀摩耶夫人命終滿十月已餘有七日在爾時菩薩便從兜術天來菩薩以方便知摩耶夫人命根欲盡故來下生非菩薩咎（一百七ノ九葉）本行經云誕生適時七日摩耶命終○或有師摩（卷十初葉）耶夫人壽命算數唯在七日是故命終雖然但往昔來常有此法其菩薩生滿七日已而菩薩母取命終何以故以諸菩薩幼年出家母見是事其心碎裂便命終（二ノ十九葉）普曜經云菩薩生七日後其母命終故於比丘意所趣云何七日命終菩薩咎也莫作是觀○臨母命終因來下生善權經云何　菩薩生後七日其母便薨后壽終盡福應昇天非菩薩咎前處兜術觀后摩耶大命將終餘有十月七日之期故從兜術神變來下現入后胎以是推之非菩薩咎（以上八相事略）

十九にして出家

考證　異說極ておほし一には十九出家二には廿五出家三には廿九出家四には三十一出家五には七歲出家なりしかれ共諸經に多くは十九出家の說を正とすと法苑珠林にいへり十九出家の說は本起經（下ノ五葉）瑞應經（上ノ九葉）因果經（二ノ十八葉）等の說也又文私記（二ノ十八葉）引普賢菩薩證明功德經云十九踰城捨國王位三十成道教化衆生と見えたれ共此經明藏になければ更によく考て知るへしとそ然れ共未曾有經に（上ノ二葉）耶輸陀羅答目連曰釋迦如來爲太子時娶我爲妻奉事太子如事天神曾無一失共爲夫婦未滿三年捨五欲樂騰越宮城とあるをもて十七納妃の數に約すれは十九出家の證とすへし十七納妃の說は瑞應經に見えたり詳に八相事略に載す往て見よ

三十にして成道し給ひて

考證　法苑珠林引普曜經十九出家三十成道（十八四葉取意）此文應允亦與餘義相應亦引泥洹經四月八日成道今以爲正

云こもまた八相事略に詳也　成道　成道者成就菩提也其梵云阿耨多羅三藐三菩提漢云無上正等正覺（十一ノ十一）法華義疏云阿云無也耨多羅上也三者正也藐者等也又三一也菩提覺也謂道不可加曰無上無所委知為正（一ノ七丁）遍知也同疏云開悟為覺離倒為正至極名最獲得名成化生論註云阿名無耨多羅名上三藐名正三名遍菩提名道統而譯之名為無上正遍道無上者此道窮理盡性更無過者何以言之以正故正者聖智也如法相而知故稱名正智法性無相故聖智無知也遍有二種一者聖心遍知一切法二者法身遍滿法界若身若心無不遍也道者無得道也經言十方無得人一道出生死一道者一無得道也無得者謂知生死即是涅槃如是入不二法門無得相也

八年はゝの恩を報せむことをおもひ給ひて一夏九旬に法を說終に娑羅雙樹の間にして涅槃に入たまひしときのありさまを繪像にうつし二月十五日に入滅したまへはけふこれをかけ奉ることとなり

考證　涅槃經云（北本一初葉）佛在拘尸那城力士生地阿夷羅跋提河邊娑羅雙樹間六卷大般（一ノ初葉）泥洹經云佛在拘夷那竭力士生地熙連河側堅固林中雙樹間（一ノ十三葉）二卷大般涅槃經云（中ノ八葉）熙連河側娑羅雙樹間涅槃疏云相傳云只跋提是熙連今言不爾跋提大熙連小或云廣四丈或八丈在城北跋提在城南相去百里佛居其間涅槃なほ說々多かれと跋提河の事は本文にあらされは粗こゝにあくるのみ　娑羅雙樹　會疏云（一ノ七葉）娑羅雙樹此云堅固四方八株悉高五丈四榮四枯下根相連上枝相合似連理榮枯似交讓其葉豐蔚華如車輪果大如瓶其甘如蜜香味具因茲樹通名一林以為堅固西域記云（六ノ十六葉）其樹類槲而皮青白葉甚光潤四樹特高如來寂滅之所也華嚴疏（六十二ノ初葉）云娑羅林者此云高遠以林木森聳故名（三ノ廿二葉）義集云北遠云冬夏不改故云堅固其華色甚白出華嚴疏（三十七ノ二十七葉）涅槃　涅槃會疏（一ノ初葉）云梵語涅槃此云寂滅以不生不滅故云寂滅文云如來入涅槃永斷于生死又云生滅々已寂滅為樂般云入也夫入涅槃何分大小為簡小乘有餘涅槃故々彼小乘者雖出分段來盡變易故名有餘大乘不然二死已斷梵行已圓不受後有故入涅槃名義集云（五ノ四葉）大經（北本四ノ八葉）云涅言不生槃言不滅不生不滅名大涅槃經曰涅槃名解脫々々者曰

虛無不生不滅等（十五ノ廿一葉）又曰涅者言不槃者言織不織之義名之涅槃不去不來乃名涅槃大毗婆沙論（三十二ノ初葉）云槃爲退涅爲出永出諸趣故名涅槃この條大乘義章（十八初葉至三葉）及華嚴疏鈔（五十一ノ四十二葉）（一ノ三十二葉）略疏（六ノ十五葉）同隨鈔等に涅槃の名義を說りくだ〳〵しければはぶきつ

遺教經なとゝて人の參るも釋尊のすでに涅槃にいらんとしたまふ時に此經をときもろ〳〵の弟子の爲に遺勅を殘したまふ經を今日講讀し侍るなり

考證　遺教經云爾時世尊將入涅槃是時中夜寂然無聲爲諸弟子略說法要汝等比丘於我滅後當尊重珍敬波羅提木叉如暗遇明貧人得寶當知此則是汝大師若我住世無異也持淨戒者不得販賣貿易安置田宅畜養人民奴婢畜生一切種植及諸財寶皆當遠離如避火抗不得斬伐草木墾土掘地合和湯藥占相吉凶仰觀星宿推步盈虛曆數算計皆所不應節身時食淸淨自活不得參預世事通致使命呪術仙藥結好貴人親厚媟慢皆不應作云々大般涅槃經分後云爾時佛告阿難及大衆一切諸佛於此放捨身命故爲涅槃汝等欲得決定眞報佛恩疾得菩提乃至思行業善惡之報如影隨形三世因果循環不失此生空過後悔無追涅槃時至示教如是爾時阿難聞佛語已身心顫動情識忙然悲哽鳴咽深沒憂海擧身迷悶昏亂濁心投如來門前猶如死人爾時阿泥樓豆安慰阿難輕其愁心而語之言咄哉何爲々愁苦如來涅槃時至今日雖有明日則無汝依我語諮啓如來如是四問佛涅槃後六群比丘行汗他家惡性車匿云何共住而得示教如來在世以佛爲師世尊滅後以何爲師若佛在世依佛而如來既滅依何而住如來滅後結集法藏一切經初安何等語爾時阿難如從夢中聞阿泥樓豆安慰其心致令四問漸得醒悟乃至阿難如汝所問佛去世後以何爲師者阿難尸波羅戒是汝大師依之修行能得出世甚深定慧阿難如汝所問佛涅槃後依何住者阿難依四念處嚴心而住乃至阿難如汝所阿如來滅後結集法藏一切經初安何等語者乃至一切經初當安如是我聞一時住其方其處與諸四衆而說是經（自上ノ四葉至六葉）など見えたり

三月

問て曰三月三日に桃花の酒を飲侍るは何の謂れぞや

答人の國の事にや大康年中に山民建山自然武陵といふ所に至りて桃花水になかれしを飲しより氣力さか

む成しかは命三百餘歳におよへり

考證　臆案するに是は正しく晉陶淵明か桃花源記と續齊諧記の中に見えたる劉晨阮肇か天台山に採藥して路をうしなひて仙境に至りしと、混して書きたまへるのみならす三百餘歳におよへりといへるは無稽の事なり殊に大康といへるは晉武帝の年號にして劉晨阮肇か所在をうしなひし時なり初め山に入りしは漢明帝永平年中の事なれはかくは書へからす山民建山自然といふ六字も何れの本にもかくわれとも何の事ともわかりかたし劉晨阮肇なとの誤寫にもやたとも思はれす猶可尋

酒を飲事は周の曲水の宴に盃を流せしよりやはしまりけむ

書入云塵添壒囊鈔引本草云是日酒漬桃花飲之除百病益顏色ト云○第百四十八文獻通考樂考曰日本三月三日有桃花曲水宴○達生錄曰三月初三採桃花浸酒飲除病益顏

考證　宋書禮志曰舊說後漢有郭虞者有三女以三月上辰產二女上巳產一女二日之中而三女並亡俗以爲大忌至此月此日不敢止家皆於東流水上爲祈禳自潔濯謂之禊祠分流行觴遂成曲水史臣案周禮女巫掌歲時祓除釁浴如今三月上巳如水上之類也釁浴謂以香薰草藥沐浴也韓詩曰鄭國之俗三月上巳之溱洧兩水之上招魂續魄秉蘭草拂不祥此則其來甚久非起郭虞之遺風今世之度水也月令暮春天子始乘舟蔡邕章句曰陽氣和暖鮪魚時至將取以薦寢廟故因是乘舟禊於名川也論語暮春浴乎沂自上及下古有此禮今三月上巳祓於水濱蓋出此也邕之言然張衡南都賦祓於陽濱又是也或用秋漢書八月祓於霸上劉楨魯都賦素秋二七天漢指隅人皆祓除國子水嬉又是用七月十四日也自魏以後但用三日不以巳也。晉書束晳傳云武帝問尚書郎摯虞曰三日曲水其義何指答曰後漢章帝時平原徐肇以月初生三女至三日俱亡一村以爲怪乃相携之水濱盥洗遂因水流以汎觴曲水之義起於此帝曰若如所談便非好事束晳曰摯虞不足以知之臣請說其始昔周公城洛邑因流水以泛酒故詩曰羽觴隨波又秦昭王以三日置酒河曲見金人奉水心之劍曰令君制有西夏乃霸因此立爲曲水帝大悅と云り是本文のもとつく所なり又續齊諧記の說晉書とおなしうして文少異同あるのみ故贅せすまた太平御覽三十引風土記

に載する所摯虞か說と同うして徐肇を郭虞に作る
公事根源云むかし王卿なと參りて御前にて詩を作て講せられけるにや御溝(ミカハ)水に盃をうかへて文人以下是を飲よし康保の御記にのせられたり又顯宗天皇元年三月上巳日後苑に幸してめくり水のとよのあかり聞しめすと日本紀に有曲水の宴は周の世よりはしまりけるにや文人とゝ水のきしになみゐて水上より盃を流してわか前を過さるさきに詩を作て其盃をとりて飲ける也羽觴を飛すなといふも此事なるへし云々　但此問答も根源に本つきて著作ましませは御說も同しき事なから事詳に證正しけれはこゝに引用す

問て云けふ草餅をくふは何の故にて侍るそや

答周の靈王(一本幽王ニ作ル)の極めてはらあしくまし〳〵けれは智臣の草餅を常に參らせけれは御心よく成給ひけり夫より皆くふことに成侍りし

考證　壒嚢鈔引或記云三月三日草餅鬼皮トテ食スル也昔舒三女子此日河中死又黄帝三男子此日死何レモ粉餅ヲ作テ是ニ祭也又引十節錄云周幽王淫亂不祭宗廟群臣愁苦于時曲水宴次或作餻獻幽王々嘗之其味珍美也其時幽王曰此餅珍物也可獻宗廟其後周世大治遂致太平後人相傳作餻三月三日進祖靈草餅之興從此始　松下見林曰今案此十節錄故事非也幽王周ノ世ノ惡王ニテ周ノ世ノ衰タルコ幽王ヨリ始ル草餅ハ幽王ニ始ルニ非ス本草ニ陳藏器曰荊楚歲時記云三月三日取鼠麴汁蜜和爲粉謂之龍舌䉽以厭時氣日本ニテ鼠麴草ヲハヽコクサト云母子ソロヒ羔無ヤウニト云祝儀ヲ表スルナルヘシ　因樹屋書影云正月上辰出水邊盥濯食蓬餌以祓邪漢儀也見續博物志今知上巳不知上辰　文德實錄曰田野有草俗名母子草二月始生莖葉白脆毎屬三月三日婦女採之蒸擣以爲餻傳爲歲事嘉祥三年民間訛言云今茲三日不可造糕以無母子也識者聞而惡之至三月仁明天皇晏駕四月亦有檀林皇后山陵之事其無母子遂如訛言今年此草非不繁生民之訛言天假其口とあるを見れはふるくは母子草を用ひしをいつの頃よりか艾草を用ることとはなりけむ

問て曰鷄合と申侍る事は何の故にて侍るそや

答もろこしの事にや明皇と申御門たはふれに鷄を闘はしめ給ひしに程なく位につき給ひしより小兒五百

人をえらひ治鷄坊といふ所をたてゝ鷄をかはせられしとかや又明皇は乙酉の年生れたまひしゆゑ鬪鷄を好み給ひしよし東城老子傳と申ものにて見侍りし

考證 天中記引東城老父傳云玄宗在藩邸時樂民間清明鬪鷄戲及即位治鷄坊以賈昌爲小兒長每至是日萬樂具擧昌導群鷄叙立于廣場勝負既決隨昌在行歸于鷄坊 類聚又引東城老父傳云玄宗在藩邸時樂民間清明節鬪鷄戲及即位治鷄坊于兩宮間索長安雄鷄金毫鐵距高冠昂尾千數養于鷄坊など見えたり

余いまた東城老子傳を見る事を得す故に二書に引所を各てゝにあく且父を老子傳と引給ひしは誤なるのみならす治鷄坊と云所を立てと遊はしゝはよろしからすこは鷄坊を治めてと訓點することにして立てといへは治の字は譯し總れり共に疎漏なることと謂つへし事文類聚曰唐明皇樂民間清明節鬪鷄戲及即位治鷄坊索長安雄鷄金尾鐵距高冠昂尾千數養于鷄坊選六軍小兒五百使敎飼之時賈昌爲五百小兒長天子甚愛幸之金帛之賜日至其家又曰明皇以乙酉生而喜鬪鷄是亂兆之象也[illegible]引異聞錄云賈昌七歲爲鷄坊[illegible]鬪鷄長天寶[illegible]至元和中開九十餘歲人問開元之治曰昌年少以鬪鷄求媚於上安知朝廷之事中御門宮閑記曰鬪鷄事幼主儀也近代長君之時有此事如此鬪鷄の證據少なからすしかるに松下見林か國朝佳節錄に引太平御覽ていはく燭寶典曰寒食此節城市尤多鬪鷄之戲左傳有季郈鬪鷄其來遠矣といはれたるは甚しき謬誤にして玉燭寶典には此節城市尤多鬪鷄卵之戲左傳有季郈鬪鷄其來遠矣古之豪家食稱畫卵今代猶染藍茜雜色仍加雕鏤遞相餉遺或置盤俎管子曰彫卵然之所以發積藏散萬物張衡南都賦曰春卵夏筍秋韭冬菁便是補益滋味其鬪卵則莫知所出董仲舒書云心如宿卵爲體内藏以據其剛髣髴鬪理也と見えて寒食乃は鷄卵を鬪しむることなるをこゝに引るは餘りに不吟味なる事と謂つへし

頭注云日尾氏ノ説非也狩谷氏ノ和名抄箋注ヲ見ルベシ

四月

問て曰四月八日に佛に湯をあひせはな奉るは何の故そや

答此事は推古天皇より初まり侍るとかや

考證　舊事大成經推古天皇紀云天皇微諸王諸卿行灌佛會三輪太神請曰天下人意情不善行事無道則疫神得便而放熱病敗精氣爲天中天聖中聖之眞仙至仙四月八日產於西極國天龍捧產湯如今也移行其會象於吾國則人離人作而趣界外大道以其妙湯灑縣達則疫神退去無國災其禮象云々於正安殿造山形插佛誕狀作木花草花垂本屋簾安案於北上盛五香之五水於五色之五鉢以五色絲結衆花而掛布施於花房以金銅作五寸六歩釋迦像而立金鉢中衆僧修法天皇親灌佛作禮次諸君隨品拜倚灌佛衆僧給布施諸君亦並給云々と見えたれ共此書またく黑瀧山の僧潮音等か妄作に出たるものなれは證とするにたらす案に續日本後紀仁明天皇承和七年四月丙午朔癸丑淸律師傳灯大法師靜安於淸涼殿始行灌佛之事とあるそ國史に見えたるはしめにはあるへきさらは此問答の說は如何わらん公事根源もまたこゝにいふ所に異なる事なし何により給ひけるかいとおほつかなし

釋迦如來の倶毘羅城にて生れ給ひけるとき天龍の下りて水をそゝきて釋尊にあひせ奉りし事をまなふ也

考證　名義集云於閻浮提迦毘羅城淨飯王宮從右脇生悉達太子顯現不思議自在神力　又云迦毘羅此云黃色上古有仙曰黃頭依此脩道　瑞應經云天竺迦維羅衛國者三千日月萬二千天地之中央也三之十一葉　修行本起經云迦夷衛國者一千日月萬二千天地中央也過去來今諸佛皆生此地　十三遊經云迦惟羅閲有八城合有九百萬戶　本行經云摩耶聖母懷孕將滿十月垂欲生時引諸婇女遊嵐毘尼園大吉祥地安祥徐步處々觀看園中有一大樹名波羅叉柔低垂夫人即舉右手欲攀彼樹枝遂生太子放大光明即時諸天世間悉皆遍照　因果經云爾時夫人既入園已諸根寂靜十月滿足於四月八日日初出時夫人見彼園中有一大樹名曰無憂華色香鮮枝葉分布極爲茂盛即舉右手欲牽摘之菩薩漸々從右脇出于時樹下亦生七寶七莖蓮華大如車輪菩薩即便墮蓮華上無扶持者自行七步舉其右手而師子吼我於一切天人之中最尊最勝無量生死於今盡矣此生利益一切人天說此

言已時四天王卽以天繒接太子身置寶机上釋提桓因手執寶蓋大梵天王又持白拂侍左右難陀龍王優難龍王於虛空中吐清淨水一溫一涼灌太子身々黃金色有三十二相放大光明普照三千大千世界（九之十葉）

禁中にて灌佛とて糸にて瀧を落し色々の造花なと供へて鉢に五色の水を入て諸卿佛をあらひ奉る也

考證　高僧傳四月八日浴佛以都梁香爲青色水鬱金香爲赤色水丘隆香爲白色水附子香爲黃色水安息香爲黑色水以灌佛頂　天中記引歲時記云荊楚人以四月八日諸寺設齋以五色香水浴佛共爲龍華會

瑜案するに今行はるゝ荊楚歲時記に此事なし博士の人に問侍るへし佛說灌佛經曰佛言所以用四月八日者以春夏之際殃罪悉畢萬物普生毒氣未行不寒不熱時氣和適正是佛生之日諸善男子善女人於佛滅後當至心念佛無量功德之力浴佛形象如佛在時得福無量不可稱數云々（乙葉）佛說浴像功德經云我今爲汝說浴像法諸供養中最爲殊勝善男子若欲沐像應以牛頭旃檀紫檀多摩羅香甘松芎藭白檀鬱金龍腦沈香麝香丁香以如是等種々妙香隨所得者以爲湯水置淨器中先作方壇敷妙牀坐於上置佛以諸香水次第浴之用諸香水周徧訖已復以淨水於上淋洗其浴像者各取少許洗像之水置自頭上燒種々香以爲供養初於像上下水之時應誦以偈我今灌沐諸如來淨智功德莊嚴聚五濁衆生會離垢

願證如來淨法身　戒定慧解知見香徧十方剎常芬馥願此香烟亦如是　迴作自他五種身云々　永田全齋膾餘雜錄云以四月八日爲佛生日其來尙矣一日讀遵生八牋引玄樞經云二月初八日乃佛生日也周建子以子月爲歲首是以十一月爲正月也莊王九年四月初八日釋迦生以子至卯月是今二月也二月八日爲佛生辰無疑今不知者不考歲首建文猶以四月爲成規何其謬歟

瑜案するに佛生日あるひは四月八日（瑞應經上修行本起經上因果經一灌佛經等）あるひは三月八日あるひは三月十五日（西域記）あるひは二月八日（玄樞經）さま〳〵の說侍れとこゝにあけつらふへき事ならねは其道にかしこき人々にまかするになむ

わらはへのさはのさきに花さゝくるもこれより事おこり侍りしとかや

問て云賀茂祭の日あふひかくることは何のことにてか侍るらん

答祭の日近衛の中將を勅使に立らるゝなり昔ゆめのつけ侍りしより今日人々あふひかつらの蔓をかくると申つたへたり

考證　公事根源云賀茂祭（中酉日）ひつしの日先上卿陣に着て六府をめして警固のよしを仰す當日の使は近衛中將つとむ昔夢のつけ侍りしよりけふ人々あふひ桂の鬘をかくるなり賀茂松尾の社司まへの日よりしかるへき所々へたてまつる欽明天皇の御宇より此祭ははしまる下鴨の御祖上賀茂別雷二の神祭なり此御祖をは玉依姫と申す賀茂建角身命の御むすめなりある時せみの小川の邊に遊けるに川上より丹塗の矢一すちなかれ下る玉依姫この矢をとりて我家のやねにさしはさむ夫よりして無程はらみて男子をうむ然れとも父を誰とも知らさりき或時はかりてことに酒もりをして今の兒に盃をもたせ汝か父にさせと敎へけれは兒其盃をは虚空になけて家のやねをふみ破りてわれは天神の御子なりとて天上をさしてそのほりける則別雷の命是也いまの丹塗の矢は松尾の大明神と後あらはれ給ふにや云々　年中行事秘抄曰　于時御祖神等戀慕哀思夜夢天神御子云各將逢吾天羽衣天羽裳炬火祭鉾乎造待之又鎊走馬取奥山賢木立阿禮悉杯種綵色又造葵楓蘰嚴飾待之坐山木天神御子稱別雷神吾將來也御祖神即隨夢敎令彼神祭用走馬幷葵楓蔓此之緣因也　續草庵集　宗雅

めくみある神と君とのもろかつらもろ心にそかけて見えけり　もえ出し春のふたはの其まゝに夏もしけらぬあふひくさ哉なと見えたり

五月

問て云五月五日にしやうふを用るいはれは何の故にて侍るそや

答混明百節の菖蒲とて一寸かうちに百ふしあるのしやうふあり彼しやうふのね萬病をいやすといへりされは百節なけれとも是をいはひ侍るなり

考證　漢武內傳云漢武帝上嵩山忽見仙人長可二丈問之曰吾九嶷山人也聞中嶽有石上菖蒲一寸九節食

之長生故來採之忽然不見　草木狀番禺東澗生菖蒲皆一寸九節安期生採服仙去古詩石上生菖蒲一寸八九節仙人勸我餐令我好顏色表椅訂九節菖蒲泛琖晴見于類腋　神仙傳中岳石上菖蒲一寸九節可以服之長生　遵生八牋云端午日以菖蒲根生山澗中一寸九節者或屑或切以浸酒　李白詩我來採菖蒲服食可長生　壒嚢鈔云五月五日節供爲レ拂ニ毒虫一也夏毒虫ニ多キ上他國毒虫多交ニ人家一是故菖蒲艾草蓋ニ口上ニ卷ニ茅蛇形ニ名レ粽服レ之表レ殺ニ毒虫一云々　諸書に云所如此にしていまだ并て一寸百節といはず且これを要するに一寸にして百節あるへきにあらす必一寸九節の誤なるへしと思へと諸本共皆かくあれはさし定めてもいひがたけれは其まゝにさしおくのみ

酒中に入或は帶にしあるひは沐浴に入侍る事は本草また太載禮月令なとゝいふ書に侍ることとなり

一頭注云呂元明歲時雜記端午刻菖艾爲小人子或葫蘆形帶之辟邪　皇國にはかゝる例なけれどもたゞ帶にはするめり

考證　本草石菖蒲除一切惡端午日切菖蒲漬酒飲之或加雄黃少許　太戴禮曰五月五日蓄蘭爲沐浴　楚辭云浴蘭湯兮沐芳草　和漢三才圖會曰件日浴菖蒲湯或以石菖根漬酒飲之則㡀邪氣云々是以菖蒲代蘭葉者乎　瑜案するに本文に所謂月令は四民月令をいふ成へし其文に云是日樓子等多勿食之食訖取菖蒲根七莖長一寸漬酒中服之といへり此事なるべし

問て曰けふ粽くふは何の故に侍るぞや

答むかし高辛氏の五子五月五日に船に乘て海をわたりし時暴風にはかに吹て浪にしつみけるか水神となりて人をなやましけるに或人五色の糸にてちまきをして海中になけ入しかば五色の龍となる夫よりして海神人をなやまさすと申つたへたりまたは屈原か汨羅に沈み魚腹に葬せし楚人のまつりし供物とも申にや

考證　高辛氏五子成水神說未詳　續齊諧記曰屈原五月五日投汨羅而死楚人哀之每于此日以竹筒貯米投祭之漢建武中長沙歐回白日忽見一人自云三閭大夫謂回曰聞君當見祭甚善但常年所遺並爲蛟龍所竊今若有惠可以楝樹葉塞上以五色絲縛此二物蛟龍所憚依其言今五月五日作粽並帶五色絲及楝葉皆汨羅之遺風也又元陳元靚事林廣記及明胡文煥事物紀原

等引齊諧記有小異同　珊瑚鈎詩話曰角黍之事肇於風俗昔日屈原懷沙忠死後人每年以五色絲絡粔籹而弔之此其始也
事物紀原引異苑云糉屈原姉所作又月令廣義載其說今不贅　周處風土記曰端午烹鶩進筒糉一名角黍以菰葉裹粘米粟棗以灰煮令熟蓋取陰陽包裹未散之象
和訓栞に云ちまき粽をよめり新撰字鏡倭名鈔に見ゆ糉も同し茅卷なり今は篠の葉葦の葉菰の葉なとにても包めり伊勢物語にあやめかりとよみたれは菖蒲にても包てんか

問て云同ての日藥玉とてかくるは何の故そや

答凡けふをは藥日といひて一切のくすりをはての日とるなり其ゆゑは諸病必五月に發るなり溫氣をえてもろ〳〵のむしへひ鳥けものともか力をえていきをはき出して人の氣力をなやます日なりされはけふ藥草を五色の糸にてとゝのへて臂にかくれは惡氣をはらふとも中本文侍るにやおほやけにも群臣に藥玉を給ふてとの侍るなり

考證　續漢書禮儀志曰夏至陰氣萌作恐物不成以朱索連以桃印文施門戶故漢五月五日以朱索五色印爲門戶飾以難止惡氣今有百索乃朱索之遺事也蓋始於漢本以飾門戶而今人以約臂相承之誤也又以綵絲結紐而成者爲百索紐以作服者名五絲云　又云漢五月五日以二五色印一爲二門戶飾一續漢書所レ謂桃印者也劉昭曰桃印本漢制今世端午以二五綵紹篆符一以相問遺亦以置二戶牖帳屏之間一蓋本二於漢桃印之制一公事根源に云天皇群臣に藥玉を給ふ五色の糸をもて臂にかくれは惡鬼をはらふといへる本文侍るされはにや長命縷とも續命縷ともいへる也　類聚國史卷七十三陽成天皇　元慶七年五月五日庚午天皇御二武德殿一云々賜二親王公卿續命縷一伊勢守從五位下安部朝臣興行引レ客就レ坐供レ食別勅賜二大使以下錄事以上續命縷一（瑜曰客指二渤海客徒一）
瑜案するに是らや藥玉を給りし始ならむ　風土記云端午造二百索一繫レ臂一名長命縷一名續命縷一名辟兵繒一名五色絲一名朱索又有下條達等織二組雜物以相贈上（頭注云螢卷河海抄クスダマ續命縷蘿綵絲さゝ索なと書り何れも藥玉體也五月五日絲所藥玉を供す去年の菊花茱萸を撤して御帳東の柱に結付る也雲州消息云今朝自二或所一給二藥玉一流一作以二百草花一貫以二五色之縷一或草虫形一稱下其花房一芳艷之美有レ興有レ感古人云懸二續命縷一益二人命一云々若此物之謂歟）

長明四季物語　五月かにもりのかみおましつらひ宮の内のかみくすりのつかさをりへのかみなとつとひくす玉奉るなといみしき事のかきりなるへしいとなきは其日をすくさすもてろうし淸所より侍屋のもて行ふを三つ四つの宮たつはそれこゝに奉れさなくは上に聞え奉りてなれにつつみ給ふらむきのふの暮つかた右衛門のおもとにふみつけし是をもきこえ物せむいみしき耻見せてむ奉れとむつからせおはせはしかあらはかみのつかさすけらにのらるへき侍屋のこゝろつかひにてからうして花のりむみつよつ奉りすててゆきぬ

問て曰今日わらはへの小弓をもていむちとてし侍るは何故にや

答むかし左右近衛の馬場にて馬に乗てゆみいし事の侍るなりひをりの日なと申にや是らをや印地のはしめとは申へからむ

考證　ひをりの日　和訓栞に云古今集伊勢物語なとに見えたり眞名本に射禮日と塡り引折の日の義なりといへり五月六日右近の眞手番の日紅の下袴織物の指貫にくゝりもあけすそはを挾て裾の尻を前さまに引折て挾をいへり一説にひをりは標埒の二字なるへし貞觀儀式延喜式なと騎射の式には唯埒のみにて競馬の時は必標と埒と二つありしからは馬場の標埒の日てふときは競馬の日の名となれるなるへし標をひとよむは標位をひゐといふかことし埒をはをりと訓するは萬葉集に馬柵をまをりとよめる類なり柵と埒とは其形異なれと馬を防て溢れさらしむる意は同しよりて埒をもをりとよむこと疑なしといへり標をひとよむは音なるへし又爲家卿の説に歌道の大事のみならす一天下の大事といへるはひをりといふことはに就ての義也神社啓蒙に櫻葉神明宮在洛陽朱雀東近衛西所祭天照太神也此宮上古在右近馬埒五月荒手番之時大陽光華降下馬埒之頭也故世人稱云日降神明と見えたり折と降と音近きをもて此説あり　袖中抄に云顯昭云故六條左京亮顯輔卿申されしは右近の馬埒のひをりの日は天下第一の難義なり云々然はにや此事を注せゝすいならうらにはかはかしく明らかにもいひきらねは一番に注し申なり五月三日は左近の荒手結なり四日は右近の荒手結なり五日に左近の眞

手結なり六日は右近眞手結なり荒手結の日は射手の近衛舍人水干袴にくゝりをわけて褐の尻を女の中ゆひたるやうに引出て其上にむかはきをむすふなり眞手番の日に紅のはかま織物の指貫にくゝりもわけすそはをはさみて褐の尻を袴より前さまに引たうさきて前にはさめりされは此までつかひの日をひをりの日とは云なり女のひをりといふは衣を下さまに引つはをるなり荒手番の日褐の尻を女の中ゆひたるやうにはこひをあらせて上へ引出したれはひをりとはいふへからす荒手番の日は射る事のならしにてかりそめなれば引つはをれる眞手結は射手もさたまり次第をも立つれはしたゝまりつよく引たうさくなり然を近代は只眞手結の日も水干はかまにて引をりてあらてつかひのと同樣なれは何れの日ひをりといふへくもあらぬによりて今の世の人此日をりの日をしらぬなり左近の馬場のひをりの日といふは五月五日なり右近の馬場のひをりの日といふは五月六日なり云々

問て云五月九日の今宮まつりはいつころにかはしまり侍りけむ

答今宮は疫癘の神なり正曆五年の頃より天下しつかならさりしかは社に祭りてときはかきはの祭禮たえすとそうけ給はるその時長能か二首歌を奉りしはまさしく後拾遺に侍るとそうけ給りおよひし

考證　公事根源云紫野今宮是は疫癘の神なり正曆五年長保二年天下閑ならさりし時此神社をまつらる云々

頭注云諸神記云正曆五年六月廿七日被レ安ニ置疫神ヲ於船岡山ニ長保三年五月九日被レ遷テ坐疫神ヲ於紫野ニ京師衆庶行ニ御靈會ヲ被レ遷ニ此所ニ依ニ靈夢ノ告ニ也又云神殿三宇瑞垣(タマガキ)等木工寮修理職所ニ造儲也又御輿内匠寮造レ之

後拾遺神祇　世中さわかしく侍りける時里のとね宣旨にてまつりつかうまつるへきを歌二つなむ入へきといひけれはよみはへりける　ふち原の長能「しろたへのとよみてくらをとりもちていはひそゝむるむらさきの野に「今よりはあらふるこゝろましますなはなのみやこにやしろさためつ　此うたある人云世中さわかしう侍りけれは舟岡のきたに今宮といふ神をいはひておほやけも神馬奉り

たまふとなむいひ傳たる
はしかきと左注とに見えたる世中さわかしとは疫病の事をいへり

頭注云發心集第四云京には人多くやみて世中さわかしくなむあるといふつれ／＼草に主上の御惱大かた世中さわかしき時は五條の天神に靱をかけらる

六月

問て云嘉定と申事は何のゆゑにや

答此事はさらに本說有かたきことにやたゝかの錢の銘に嘉定通寶と侍れは勝といふみやうせむを賞くわむするよしをそ承り侍りし

考證　伊勢貞丈安齋隨筆云林道春庖丁書錄云六月十六日に嘉定あり世俗に申侍るは室町家大樹の時に六月納涼の爲遊に揚弓を射てかけものとし負たるもの嘉定錢十六文を出し食物を買て勝たるものをもてなすなり嘉定は宋寧家の年號にて十七年あり其とし每鑄たる錢に元年より十六年までのしるしあるを十六錢集てける一人ことのもてなしものの代に定るなりといへりされとも室町家年中行事の書には見えず　故實拾要四月十六日云嘉祥善通ル云是親王以下諸家中ニ御祝ノ物ヲ賜フ也多クハ御菓子ナリ但於院中黑米等ヲ賜フ也嘉祥ト云ハ鴨ノ長明四季物語ニ曰カシヤウハ嘉祥トカク仁明帝承和ノ比ホヒニ御榮行コトヲ祈ラセタマヒテ賀茂ノ御社ニ御禊ナトシテ六月アマリ六月ナム吉日ナル由御占フ人々考申セハトテ其日被行年號ヲモ改テ嘉祥トナシ玉フヨリ永ク此事嘉祥ト定メラレシト當社縣主加茂道幹ニ傳フトアリ或曰深草帝御在位十五年六月自豐後國白龜ヲ献ス仍奉賀百官其祥瑞ニ由テ嘉祥ト改元アリト古史ニ見エタリ然レハ此時ヨリノ義歟又曰嘉祥ハ未詳本說諺ニ傳ヘタルハ後嵯峨院立坊ノ御沙汰ニモ不及以前ニ外戚土御門大納言通方卿ノ亭ニ御座シヽ比六月十六日ニ嘉定通寶ノ料足十六錢ヲ以テ供御ノ物求メテ御膳進ラセシ事アリ以其例踐祚ノ後モ此日供御ノ物求テ献シヽ仍テ永ク嘉祥ヲ被用トモイヘリ然レハ嘉定ノ文字ヲ可用事歟但件ノ嘉定錢ハ宋ノ寧宗任位ノ年號ニテ十七年アリシナリ後嵯峨之踐祚ヨリハ十八九年以前ノ事ニテ此俗說モ難信用不審事也尙可尋也

瑜案するに故實拾要に引ところ四季物語にて十二
冊本僞作の方にや正說ともおもはれすなは道春庖
丁書錄によるへき歟
問て云六月一日に氷くふは何のくのう侍るそや
答仁德の御代に大中彥皇子闘鷄野といふ所にて狩し
給ひしに野中に庵有人をつかはして見せ給ふに窟な
りと申其時かの山のあたりなる人をめして問給ふに
氷室なりとまうす皇子其氷をとりて仁德のひしりの
御門に熱月にたてまつらせ給ふ御門叡感有しより氷
室とて所々に冬の雪をとゞめて熱月に奉ることにな
れり
考證　日本紀仁德天皇六十二年五月　延喜式主水
司式曰凡供御氷者起四月朔日盡九月晦日其四九月
別一駄（以八顆爲駄准一石二斗）五八月二駄四顆六七月三駄又曰凡
供中宮氷者五八月四顆六七月六顆　堀川百首　仲
實つけの野に大山守か納めたる氷室そ今もたえせ
さりける　夫木集　宗尊　いにしへのつけの丶み
かりそれよりや氷室のおもいたてはしめけむ　同
俊成　すめらきのみことの末し絕せねはけふもいひ
むろのおものたつなり　同爲相　待えたるけふよ
りなつの氷のためしたえすそなへよなか月までに
同順德院　かぎりあれはふしのみ雪の消る日もさ
ゆる氷むろの山のしたしはもろこしにもさるため
しはいとふるく見えて　毛詩七月篇二之日鑿冰冲
々三之日納于凌陰……左傳……云古者日在北陸而
藏氷西陸朝覿而出之なといへり其用は……本草郎顗
曰藏氷以時則雷出不震棄氷不用則雷不發而震……
食譜云凡夏用氷止可隱映飲食令氣涼斥なといへり
問て云六月に祇園會といふことの侍るはいつの頃よ
りはしまれる事そや
答夫祇園の社のいはれを尋れは素盞嗚尊の垂跡にて
牛頭天皇とも武塔天神とも申しゝなり蘇民將來の事
春の部に委しく申侍りし今七月にちのわとてかけ侍
るも是よりはしまれるにやまた祇園の緣起にのせ侍
るは天竺より北に國あり九相と名つく其國に吉祥と
いふ園あり其園に城あり城に王あり牛頭天王と名つ
くまたは武塔天神といふ沙竭羅龍王の女を后として
八王子をうめり八萬四千六百四十二の眷屬ありと見
えたりわか朝にては素盞嗚尊とあらはれ九相國にて
は牛頭天皇と現したまひしなり貞觀十八年に託宣の

こと有て山城國愛宕郡八坂鄉といふ所に神社をつくられたるなり此祭の日四條京極にて粟の御飯を奉るは蘇民將來の由緒なりとうけ給はるまつりは天治元年六月よりはしまりしなりむかしは大内より勅使をたてられしなり臨時祭とて十五日に侍りし時のことなり十四日には禁中にはとなる事なし馬長なとをつかはさるゝよし見えたり今は其義もなしたゞ氏子の風情をつくすはかりなり是はあつまあそひといふものを内よりむかし奉られし餘風かとそ覺え侍る　かみか代の八坂のさとゝけふよりそきみかちとせはかそへはしむるといふうたを東遊にうたひ舞しよし天延の舊記に見え侍りまた臣下といふものは何のこころにかいとおほつかなしこれはさためて天王の臣下の眷屬のこころにても侍るらむ山鉾なといふは作り物をして神の心をしていさめ奉るこころにや天照太神の岩戸に籠り給ひしとき榊の枝にいろ／＼の物をかけて神樂をしてうたひ舞しかば感にたえすしていて給ひしなり神もものめてするものにや

此條の事正月門松の條すてに詳にす然るに天野信景か鹽尻に牛頭天王の事を辨していはく　信景按自續日本紀至後紀諸疫死多或賜醫藥或祈諸社或轉般若事詳載之而無牛頭天王修法之事然牛頭天王祠後世所建而依延長風土記爲素盞烏尊歟我國疫神名見祝詞式所謂八衢彥神八衢媛神久那斗神凡三神也牛頭天王者見佛經其修法有天刑星儀軌原釋氏所行也然傳教弘法之時未行之歟正史實錄無其所見　又曰尾張津島社傳欽明天皇元年鎭坐不見日本紀又牛頭天王名此時未有歟又曰改曆雜事記聖武天皇天平五年吉備歸朝於播州逢牛頭天王廣峯社記及峯相記說同之　信景按續日本紀二十吉備歸朝天平七年乙亥四月也紀未謂牛頭天王之事　日本後紀類聚國史等無建牛頭天王祠事當時天下疫多然亦無祭牛頭天皇說　淸和帝貞觀十一年以津島天王勸請山城國祇園社云々　三代實錄無此說二十二社註式及改曆雜事記峯相記廣峯記等皆以播州飾磨郡廣峯牛頭天王爲京師祇園本祠　凡國史無牛頭天王之事然則中世以後所祭歟東鑑見尾州津島社名　以上鹽尻の說たゞ本文には貞觀十八年といひ信景の引所には貞觀十一年とすことなる事有といへとも國史に其事なきうへは後世の浮說たる事うつなしまた鹽尻牛頭天

王の梵語を載せていはく　牛頭天王の梵語密宗の次第物に見ゆ世に多く知るものなし瞿摩揭喇婆耶提婆と云瞿摩は牛揭喇婆耶は頭提婆は天曜萢は王の梵語なりといへり　かた〳〵後世の淫祀たる事いちしるし

頭注云茅輪の事異說有　直指祕傳抄第十三神代外錄曰ソサノヲノ尊根國ニ下リ玉フ時雨ニアヒ風ニチカサレ辛苦甚シヨリテ宿ヲ諸神ニカリタマヘトモ諸神ユルサス時ニミタワノ國ニ蘇民將來巨旦將來トイヘル兄弟ノ者アリ蘇民ハ富貧ケレトモ心情愛惠ナリ巨旦ハ家富ケレトモ心情不仁也素盞嗚尊先宿ヲ巨旦ニカリ給ヘリ巨旦カシ奉ラス蘇民ニカリ給ヒシカハカシ奉リヌ且又奉養饗奔涯分ノ及所ヲ盡セリソサノヲノ尊此ヲイタウヨロコヒオハシマシ如何ニシテカ恩ヲ謝セントオホシメス時其夜アナハノ國ヨリ暴疫鬼來リテ國民ヲホロホサントス尊アラカシメ其事ヲシロシメシテ蘇民ニ告テノ給ハク此夜コノ所ニ惡神來ルヘシフレム者ハ亡敗スヘシ我其禍ヲ除ク方ヲ知レリ汝等及ヒ家内ノ者等茅輪ヲ帶ヘシ然ラハ禍染著スルコトアタハス蘇民命ニ從フ其夜ハタシテ暴風トホリヌ明朝ソノ所ノ人民悉ク病惱シテ或ハ死或ハ病キ尊又蘇民ニ告テノ給ハク後世疫氣流行セムトキ汝カ子孫家門ニ題シテ蘇民將來子孫宿ト書シ只茅輪ヲ門楣ニ懸ヘシ然ラハ疫氣ノ禍ヲマヌカルヘシト世俗今ニ門額ニ蘇民將來子孫處ト書ハ此故事ナリト集釋ニ引リ今異聞を廣めむか爲に更にこゝに贅す

問て云みな月はらへは何の故侍るぞや

答夏と秋との剋したるをはらへすつるくのう侍るなり天武天皇の御ときよりはしまれり大はらへといふは朱雀門にて百官一同にせしとかやわたくしの家に輪をこゆるとて　みな月のなこしのはらへするひとはちとせのよはひのふといふなるといふうたをとなふるといへり法性寺の關白の御記には　おもふことみなつきねとてあさのはをきりにきりてもはらへつるかな
といふ歌を詠すへしと見えたり

頭注云日本紀天武天皇五年八月辛亥詔ノ曰四方爲ニ大解除ハ用物ハ則國別國造輸祓柱馬一匹布一常以外郡ノ司各刀一口鹿ノ皮一張钁一口刀子一口鎌一口天

一具稻束旦每ニ戸麻一條此事始トモ見エス神武天皇ノ御時天ッ罪國ッ罪ノ解除あり神功皇后の御時國の大祓アリ六月十二月ノ大祓ノコトハ神祇令延喜式に載タリと公事根原集釋に見えたり

考證　夏と秋との剋したるとは夏は火秋は金にて火剋金なるをはらへすつるを云ふ　公事根源に大祓は六月晦日百官ことく＼く朱雀門に集りてはらへをするなり六月十二月ふたゝひ有（此下大かた世諺問答と同し故略之）東鑑に六月閏ある時は後の六月行ふへきよし見えたり　輪をこゆる　茅輪をいふ和訓栞に茅輪は六月祓の具なり公事根源にもけふは家々にわをこゆることと有とみえ御湯殿記にみな月の輪といへり内内行事に院の廳より大輪麻葉に七五三をつけ上る麻の葉を御持此輪を御くゝり遊し候とあり備後風土記に後世有疫氣則汝云蘇民將來之子孫而以茅輪著腰上と見えたり　新千載集　としなみのなかはをこよひこゆる輪にすかぬきかけてなゝそちはへぬ　又みな月のゝ歌は拾遺集賀部題しらすよみ人しらすのうたなり　なこしのはらへ　八雲御抄三六月　六月祓邪神をはらひなこむる祓ゆゑになこしといふなり河邊にいくし立あさのはなとにてするなり云々

七月

問て云七月七日にさくへいを用るいはれあるにや

答十節記と云書にいはく高辛氏の少子七月七日に死て靈鬼となり人に瘧病をいたす其存日に麥餅を好みしか故にさくへいにて是を祭りて病をのそくと見えたり

考證　壒囊抄一云七月七日節供爲除瘧鬼也昔高辛氏小子是日死然成一足鬼致人病瘧生日常嗜麥餅故此日以麥餅祭之年中離瘧用麥索此謂也十節記ニ見エタリ（世說故事苑引十節記一足鬼作無足鬼其餘義同而文太拙）

問て云けふたなはたに物たむくるはいはれあるにや

答けふは牽牛織女の二の星あひ逢夜なり烏鵲はしとなりて織女をわたすよし淮南子と申書に見えたり香花をそなへ供具をとゝのへて庭上にふみをおきさをのはしに五色の糸をかけて一事をいのるに三年の内にかならすかなふといへり此ゆゑに郝隆は腹中の書をさらし阮咸は竿上褌を手向したためしも侍るにや

考證　二星あひ逢夜　梁吳均續齊諧記云桂陽成武

帝有仙道常在人間忽謂其弟曰七月七日織女當渡河諸仙悉還宮吾向已被召不得停與爾別矣弟問曰織女何事渡河去當何還答曰織女暫至牽牛吾復三年當還明日失武丁至今云織女嫁牽牛　是をはしめとすといへれと漢武帝のころより牽牛織女を配匹の如くいひしことと予別に考あり　淮南子と申書に見えたり　白樂天六帖九橋部引淮南子云烏鵲塡河成橋渡織女とありて是より後明陰勁弦か韻府群玉及ひ淩稚隆か五車韻瑞陳晦伯か天中記等ともに白氏六帖のことし然れとも今行の淮南子此語ある事なし是けたし白氏時記の誤より轉展して誤をかさねたるものなり是等の事余か鵲橋隨筆に詳に辨したれは纔に其一端をあくるのみ　さをのはしに五色の糸をかけて　公事根源も又此趣なりさて竿のはしにいとを掛る事たしかなるものに見え侍らねと白樂天の詩に憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多といへるを見れば唐の頃よりしかる事有し事しらる然るに此二句公任卿の朗詠集に載せたるのみにて白氏文集に無之何によられしにやと疑ひをたくはへたる事久しかりしにすきし頃ある人のひめもたる大江維時の千載佳句といふものを見しに此一句をのせたり此書は極めて珍書にして寫本二卷有もと湯島學問所のものを借得て寫し得たるなりと承き　郝隆は腹中の書をさらし　世說新語排調篇云郝隆七月七日出日中仰臥人問其故曰腹中書也　阮咸は竿上褌を手向し　晉書四十九列傳十九阮咸字仲容陳留尉氏人任達不拘與叔父籍爲竹林之游當世議其所爲咸與籍居道南諸阮居道北々阮富而南阮貧七月七日北阮盛曬衣服錦綺粲目咸以竿掛大布犢褌於庭曰未能免俗　といへる故事なり此等の事もすでに鵲橋隨筆に諸書を引てくはしくいへりき

問て云七夕に仙翁花を人におくることは何のいはれそや

答七月七日を乞巧奠といひて二星を祭り香花をそなふるよしふるくより申つたへたりしかれはけふ花を人にもおくるにや仙翁花は嵯峨の仙翁寺よりはしめていてしゆゑに名とせりといへりまてとにからふみには見えさるにや

考證　下學集仙翁花注云嵯峨仙翁寺始出此花故云仙翁花と見えたり下學集は文安元年になる所にし

て作者車鹿破衲の自序は兼冬卿問答をえらひ終りしは天文十三年なれは下學集は一百零一年の前に有てすてに此説あれは早くよりかゝる傳有しとみえたり兼冬卿もこれによれるなるへし

問て云十五日に靈をまつる事あるにや

答是は佛弟子目連はしめて六通（頭注云六通ハ天眼天耳他心神境宿命漏盡なりまた是を六神通ともいふ）をえて其母の在所を見る餓鬼の中にありしかば是をかなしみ釋尊に問奉りしかは七月十五日に僧を供養せは此くるしみをすくはむと説給ひしより始れり齊明天皇は須彌山のかたを作りこ飛鳥寺にて盂蘭盆會（頭注云我日本にて始て盂蘭盆を供養せしは續日本記云聖武皇帝天平五年秋七月庚午始令大膳職備盂蘭盆供養と見えて公事根源も是に據れたり兼冬卿いかて此事を省かれけむ）をまふけられしとかや盂蘭盆は梵語なり倒懸救器と翻譯す倒懸はさかさまにかくるといふこゝろなり餓鬼のくるしみをおもふにさかさまにかけられたらむかことし救器とは此餓鬼のくるしみをすくふうつはものなり委しくは盂蘭盆經に見え侍り七月十五日に冥官をいましむる日なれはけふをもて佛事をいたすなり

考證　荊楚歳時記七月十五日僧尼道俗悉營盆供諸佛注盂蘭盆經云目連見母生餓鬼中至七月十五日具百味五果以著盆中供養十方大德然後母得脱餓鬼之苦目蓮白佛弟子行孝順者亦應奉盂蘭盆供養佛言大善後人因此廣爲華飾乃至刻木割竹飴蠟剪裁摸花葉之形極工妙之巧宋沙門道誠釋氏要覽（下盂蘭盆）此釋子中孝報恩救苦之要以目蓮救母爲始也梵語盂蘭此云救倒懸也盆則此方器也此經目華梵雙擧也若梵語從聲其盂字不須從皿必執筆者悞爾若于闐等可知也○義淨云盂蘭者西域之語此曰救倒懸即飢虚危苦謂之倒懸也盆乃東夏之音此則救苦之器所以仰大衆之恩光救倒懸之窘急此從義以制名也○古師云盆是鉢但譯時隨俗稱盆々與鉢皆器故也經云是佛弟子修孝順者應念々中常憶父母乃至七世父母年々七月十五日爲作盂蘭盆施佛及僧以報父母長育慈愛之恩○晉沙門惠達姓劉名薩何年二十一忽暴死以心熱故家人未即葬之經七日乃蘇説冥間見一人長二丈許相好嚴麗身黄金色使者報之此觀世音大士也達禮拜菩薩爲説法又爲亡人設福或在寺或家中於七月十五日沙門受臘之日此時彌勝也若割器以供養標題云某甲爲亡人某甲○經又云七月十五日僧自恣日當爲七世父母及現在父母厄難中者（此文又通保安現在父母）具飲百味五果汲灌盆器

香油挺燭牀敷臥具盡世目美以著盆中（盆會之中）供養十方大德衆僧又云初受食時先安湎佛塔中衆僧兜願竟便自受食（若供養佛食回供僧ノ者即此日ニ得他日ハ不通今封ガ寺中設供亡人盖傚之也）明朗仁寶七修類藁卷四（辯說類）七月十五日盂蘭盆之說諸皆主佛經目蓮救母於是日以百味著盆中供佛然不知何謂盂蘭盆也及讀釋氏要覽云盂蘭猶華言解倒懸似有救母之說矣而盆字又無落著問之博識不知也後見老學菴筆記父老云故都於中元具素饌享先織竹爲盆盂狀貯帋錢於中承之以竹道焚倒以視方隅而占冬之寒暖謂之盂蘭盆乃知風俗祀先全無佛氏之意因而考夢華錄亦云以竹斫成三脚上織燈窩謂之盂蘭盆又賣素食擦采飯享先以告報秋成但多賣目蓮經搬其雜劇數言反覆思之盂蘭盆當起於風俗而目蓮救母之事偶符是日且佛氏盂蘭盆三字之音又與之同遂訛而爲盂蘭盆也或當是簇盤盆三字亦未可知但佛教與祀先之事日崇而風俗之事日遠其微也故不復知前起義併筆記華錄抄過亦錯但於三字難通因得其說贅之於藁なとみえたれと猶要覽の說にこそよるへけれ齊明天皇云々　類聚國史日七十八（盂蘭乃條）　齊明天皇三年七月辛丑とのみあり飛鳥寺の事猶可考

頭注云日本齊明天皇三年七月作ニ須彌山像於飛鳥寺西一且設ニ盂蘭盆會一紀

問云七月にすまふとてとるはいつのころよりのことにて侍るにや

答日本紀と申ものにて見侍りしは垂仁七年七月に當麻のむらに勇士あり名をば當麻蹶速といふ力は角をもさきつへし天皇此よし聞しめし是につかふべき人を尋ねられしかば出雲國に野見宿禰と申もの侍りしと奏しければ則めし命せられて相撲を御覧せらる野見宿禰力やまさりけむくゑはやかてしをうちくたきてたち所にふみころしき是をすまひのはしめとや申へからむ

考證　日本紀垂仁天皇秋七月己巳朔乙亥左右奏言當麻邑有勇悍士曰當麻蹶速其爲人也強力以能毀角申鉤恒語衆中曰於四方求之豈有比我力者乎何遇強力者而不期死生頓得爭力焉天皇聞之詔群卿曰朕聞當麻蹶速者天下之力士也若有比此人耶一臣進言臣聞出雲國有勇士曰野見宿禰試召是人欲當于蹶速即日遣倭直祖長尾市喚野見宿禰於是野見宿禰自出雲至則當麻蹶速與野見宿禰令捔力二人相對立各舉足

相蹶則蹶折當麻蹶速之脇骨亦蹈折其腰而殺之故奪當麻蹶速之地悉賜野見宿禰是以其邑有腰折田之縁也野見宿禰乃留仕焉　相撲御覽の事は類聚國史卷七十三に詳なり　伴蒿蹊か閑田耕筆に云相撲に赤裸になる事は後世の弊風なるへしと思ひしに古き繪卷物の相撲の圖を見れは皆赤裸なり是に附て又玉串玉覗生の考を得たれは左に揭く

西宮記内取條註曰玉串氏の按今俗地取といふものなり左は左と手合せし右は右と手合せす　左相撲犢鼻上著狩衣縫陣向幕右犢鼻上著狩衣袴入幕

近代不分別又江家次第内取條云左相撲人參入犢鼻褌上著狩衣差紐插狩衣前中略右相撲犢鼻褌上著狩衣開紐以狩衣前相違夾之裏書曰延久三年江記云次相撲人三十人次第行列其裝束烏帽狩衣犢鼻褌也　差紐狩衣上著帶不著下衣袴徒跣或人曰大内時左相撲人如此是依渡陣座前右相撲依不陣前開紐狩衣前不加帶左右引違夾之令徒坐在右方若左方可用右體歟然而依年來例不改也蕭溪云或は袴を着或は不着あるひは紐をさし或は紐をひらき帶を加ふるさ加へさるとの差別はあれとも畢竟は裸體に狩衣をつけて參るなり手合する時は狩衣をもぬくへし玉串生又按榮花物語根合卷相撲の條はたかなる姿とものゝ並立たりけるそうとましかりけゝと見ゆ古今著聞集には烏帽子水干袴なから重忠の相撲とりし事みゆれとも是はとみのことにてとりあへぬさまなるへし只何れの御前にても裸にてとるなるへしといへるは實にしかるへしさて又是につきてすまひのいにしへのさま及此生の考等ちなみに左に擧く　西宮記召合條註左著蘿花右著瓠花取劔衣等出裏書云天暦七年七月二十八日於仁壽殿前有内取事中略次相撲人三十人立庭中西面有天氣上卿仰云北戸向介次仰云罷入禮列而入畢次始自白丁一々取畢十五番　玉串氏按に北山抄に據るに北戸向の上に東傳向介次仰云の七字有へきか　此時最手額田成速與腋宇治郡利里決勝負成速負畢東部王記應和二年八月十六日有相撲事次相撲著蘿花瓠花巾北山抄内取條云相撲人進出列立御前大將候天氣仰東向次仰北向次仰罷入次相撲江家次第云相撲人等次第進出列立於庭中傍書曰自上臈出大將候天氣仰云東戸向介次仰云北戸向介傍書曰以上依御所之體可改或有先南向次東向之所　次仰云罷入禰一本禰作禮　次相撲傍書云近衞例自上始一番最手與助手取若有拔共可決之者最手獨練退入畢下略　玉串氏云御前へ出東へ向北へ向なとの樣子今いふ土俵入に似たり　裏書云十五番左右各十五番也故相撲人左右各可爲三十人也最手拔手皆

近衛府各補也相撲人者皆近衛之類也召合條云取圓座置幕前二許丈一枚置斂衣料 次一番左先出著葵華取劍置北圓坐進立櫻樹下次右出著瓠華次次番 裏書云葵瓠華造花也一番右詐負事長曆元年以後例云々 蒿溪案賀競馬又凡猷合一番左は必不負若不勝もまた持とする事猷合の例なり 玉串氏云最手の名目三代實錄四十九またうつほ物語俊景の巻にも見ゆ今い丶關ふり拔手助手も推當れは拔手は關脇助手は小結なるへしまた相撲の號とは今の頭取ならむ立合とは今の行事なり弓をもて指圖をなす又結番文と云は今の番付なり又算刺といふことあり勝負の數をとるなり圓座を敷て先矢一筋を立て夫より勝負にしたかひて矢を立つ其體は鳥羽僧正の繪卷ものに見ゆ此卷物相撲の事を考るによしありまた犢鼻のつけやう職人盡歌合相撲人の像及ひ光長か地獄の圖の羅刹の褌州鬼軍の卷物あるひは千本閻魔堂の紛壁の地獄の圖の羅刹の褌を以て合せかむかふへし 又玉串氏云關といふ名目は近世室町殿物語といふものに秀次公相撲を見給ふ條にてゝに面岡の住人につきうすといふ相撲有かくれなき相撲とは申せともさるへき相手なきによりて宵より一番もとらさりけれは人々出て關をとれとそすゝめける行事さゝていそき出られさふらへ遲参は御前へおほそれ有と申されけれは是非なくいてにけり下略 此詞をもて見れは今の世のことく定りたるものとはみえす終に取を關といふにや 蒿溪云前の記錄に近例上より始むともあるひは白丁より一々とるともみえて一定のゝなし秀次公の頃は今世のことく終にとるは上手なるへけれは相撲人の中にて首たるものを稱して關といへるなるへし古に引合すれは最手に當るなり 又云此次に此つきうすか體を云ふに白布を三重にまはしていかにもつよくしめたりけるさて岩根の介は云々あかねの下帶二重にまはして大手をひろけついい立けると有をもて見れはむかしはさしもはれの義に白布あかね布なとにて質朴の義なり今織物繡物の美をつくすは奢侈の至なり蒿溪云むかしの風流は右にいてたる造花をさしはさむときものなりと今世はたゝ奢侈をもて風流とす凡の事みなかくのことし可嘆下略 瑜云是等のこと本文にあつからぬに似たれ共ふるき世のすまひのさまなとみるにたるへけれはここに書載はへるなりけり

問て云七月に御靈とて侍るは何のいはれ侍るにや

答それ御靈八所の本地を尋れは 崇道天皇 吉備聖靈 伊豫親王崇道天皇御子 藤原夫人伊豫親王母也 藤大夫太宰大貳公繼 橘大夫逸勢 文大夫文屋宮田丸 火雷天神 此八の靈を神といはひしなり是をいつより祭ることゝも見え侍らすさためて託宣のことと侍るへき歟乍去年中行事の内にも見え侍らすたゝ是はひとへに私として死靈のたゝりをなためんとての祭とそおほえ侍る近き世にも心たけ

きもの丶靈をは神とまつりてときはかきはの祭をすれはたゝりをとゝめ給ふと申侍る新田よし貞か鎌氏将軍のためにうたれて其靈火雷神となりしがは神とまつりしよし申傳へたり如此事は今の代にもいくらも侍るへきことなり

考證　御靈祭は北村季吟か増山井に八月十八日に出せりさるを一本に此條を八月に載たるは誤なるへし今古寫本にしたかひてこゝに載す　天野信景しは尻に云京師八所の御靈第一吉備聖靈舊記に吉備大臣とす今昔物語に廣繼が祟をなしけるとき吉備大臣に勅して其靈を棍誘せしめ給ふと有此大臣は廣繼か師なり御靈の社は怨靈を和め給ふ祠なり吉備何の怨恨有て祟をなし給ふへき吉備聖靈は文武帝の皇女二品吉備内親王の靈なり第八火靈天神を菅家の靈とおもへるも又しからす是延喜式神名帳に載する大和國宇知郡に祭る所の火雷神社是なり是光仁帝の皇子なり山城國宇治郡靈安寺御靈明神の縁起に若宮を雷神と稱す是すなはち光仁天皇の皇子御母は井上内親王にして[illegible]良親王田戸親王等の御妹なり井上内親王を宇治へおしこめ奉りしとき御懐妊にてかの地に於て御誕生有し後に現し給ふ雷神是なりと云々菅家の靈にあらさる事知るべし雷神と稱するは凡怨靈のかみをいかり神といふことにて所々に同し稱多し但し加茂別雷はいかり神の謂にあらす

太平記三十三（新田左兵衛佐義興自害の事の條に）　かゝりし程に江戸竹澤か忠功抜群なりとて則數箇所の恩賞をそ被行ける（中略）江戸遠江守喜悦の眉をひらひて則拜領の地へ下向しける十月二十三日の暮ほとに矢口の渡に下居て渡の舟を待居たるに兵衛佐殿を渡し奉りし時江戸か語らひを得て鑿を抜て舟を沈めたりし渡守か江戸か恩賞賜て下ると聞て種々の酒肴を用意して迎の舟をそ漕出しける此時已に河中を過ける時俄に天掻曇りて雷鳴水嵐烈しく吹漲て白波舟を漂す渡守周章騒て漕戻さむと櫓を押て舟を直しけるか逆巻波に打返されて水手梶取一人も不殘皆水底に沈けり天の怒非直事是は如何樣よし興の怨靈なりと江戸遠江守懼おのゝきて河端より引返し餘の所をこそわたさめとて此より二十餘町ある上の瀬へ馬を早めて打けるほとに電行前に閃て雷大に鳴

還めく在家は遠し日は暮ぬ只今雷神に蹴殺されぬと思ひければ御助候へ兵衛佐と手を合せ虚空を拜して逃たりけるかとある山の麓なる辻堂を目にかけてあれまてと馬をあをりける所に黒雲一むら江戸かかうへの上に落さかりて雷電耳の邊に鳴閃きける間餘の怖しさに後を屹と顧たれは新田左兵衛佐義興緋威の鎧に龍頭の五枚甲の緒を縮て白栗毛なる馬の額に角の生たるに乘あひの鞭をしとゝ打て江戸を弓手のものになし鐙の鼻に落さかりてわたり七寸計なる雁股をもてかひかねより乳の下へかけすふつと射とほさるゝとおもひて江戸馬より倒に落たりけるかやかてちをはき悶絶擗地しけるを輿に乘せて江戸か門へ舁着たれは七日か間足手をあかき水に溺たる眞似をしてあら難堪や是助よと叫死に死けり中略又其翌夜の夢に畠山入道殿の見給ひけるは黒雲の上に大鼓をうちて時を作る聲しける間何者の寄來るやらむと怖しくて音する方を遙に見遣たるに新田左兵衛佐よしおき長二丈許なる鬼になりて中略夙に輿て斯る不思議のゆめをこそ見てさふらへと語り給ひける言のいまた終らさるに俄に雷火落かゝり入間河の在家三百餘宇堂舍佛閣數十箇所一時に灰燼と成にけり是のみならす義興討れし矢口の渡に夜々光物出來て往來の人をなやましける間近隣の野人村老集りて義興の亡靈を一社の神に崇つゝ新田大明神とて常盤堅盤の祭禮今に不絕とそ承る不思議なりし事ともなり愈案にかゝるためしは枚擧するにいとまなきをこゝには遠からぬをあけて證とし給へるのみなるへし

世諺問答考證卷下

八月

問て云八月朔日にたのむとて人にものたてまつる事の侍るにや

答此事はさらに本説なし世俗の風儀なり或説に建長の頃より此事有はしめはたのみとてよねをしきに入て人のもとへつかはしけるとかやほつかひとてわらはへのもち侍るは此故にやまた圓明寺太閤の文永の記にはこの七八年よりこのかたことに天下に流布せるよし載せられたり誠に建長の頃よりの事なるへしまた後嵯峨院のいまた若宮と申しときよりはしまり侍るとも申何れとたしかにさためかたし

考證　公事根源に二説を引終りて又曰或説には後嵯峨院いまた若宮にて外戚通方卿のかたに御座有し時御閑素をなくさめ申さむとて近習の男女密々たてまつりけるにそのゝちふしきに聖運をひらかせ給ひしかは御嘉瑞也とて内々御さたありけるなと申傳へたり云々　後嵯峨院諱邦仁土御門帝第二子母贈皇后通子贈大臣通宗女　古今著聞集八云第七十八代皇帝後嵯峨天皇と申は土御門天皇第三の皇子なり父の御門寛喜三年遠所にて崩御のこと有し後は御めのと大納言通方卿のもとにかすかなる御すまひにてわたらせ給へは御位の事思召もよらす大納言さへ身まかりにけれは仁治二年の冬の頃八幡へ參らせ給ひて御出家の御いとま申させ給ひけるに曉御寶殿の内に德是北辰椿葉影再改と鈴のこゑのやうにてまさしく聞えさせ給ひけれは是こそ示現ならめとうれしく思召て還御有けりもとの通成中將の亭へはいらせ給はて御祖母承明門院の御所へいらせ給ひて其としも暮にけり同三年正月九日四條天皇十二歲禁中にて崩御のこと有よしのしりけれは後堀川院の御かたには御位につかせ給ふへき宮もおはしまさす定めて佐渡院の宮達そ踐祚あらむすらむとて聞わきたる事はなけれとも時の卿相雲客四辻の脩明院へ參つとふといへとも天照太神の御はからひにや侍りけむ同十九日關東より城介義景早打にてとりてひそかに承明門院へ參りて御位は阿波院宮と定申侍るなり公家にはいかか御はからひにも侍らんと申てやかて法性寺殿

一條大相國へも申入て下りぬ中略三月十八日御とし二十三にて太政官廳にて御即位あり下略或說は此ときの事なるへしといへり桃華蘂葉八朔事正應二年御記云今日家々のいとなみにてたのむ人に物奉る此事はしまりてみうちにおほうあまりけむと覺ゆ就此御記勘之後深草院御代建長の頃ほひより事おこれるにや宗尊親王の御時なるへし　圓明寺太閤とは一條實經公をいふ

問て云八月朔日天中節とゆふ札を柱におし侍るは何の故にて侍るそや

答て此事は陰陽道の秘法といふものに見え侍る火難盜病口舌の災をはらふ術にて侍るなり七月朔日生氣のかたの木をとりて炭にやきて八月朔日日出前に八月朔日天中節赤口白舌隨節滅と書て門におすとみえ侍りむかし人の國の事にや后天中樓にて人と契給ひしに其人つひに望をとけすして忽死して火神となりて天中樓をやきし時后此兕をとなへたまへは失火則きえにしよし書にみえたり

考證　職原抄云陰陽寮掌天文曆數事昔者一家兼兩道而賀茂保憲以曆道傳二其子光榮一以天文道傳弟子安倍晴明自以後兩道相分　天中節　天中記引提要錄云五月五日午時爲天中節類腋亦同　類腋又引王曾帖子明朝知是天中節旋刻菖蒲要辟邪と有は五月五日をいへりこゝに八月朔日とするは未詳また岡田挺之か秉燭譚に拾芥抄に八月朔日天中節と有諸書に五月五日を天中節と云事は往々載たり八月朔日を天中節と云はめつらし拾芥抄下に引　赤口白舌　赤口は惡日の名也つれ〳〵草九十一段に赤舌日といふと陰陽道にはさたなき事なりむかしの人是をいますこのなにものゝいひいとゝいとはしめけるにか此日ある事すゑとほらすといひて其日いひたりしことしたりし事かなはすえたりしものはうしなひつ企たる事ならすと云ゐろかなり下略　而慍齋か鐵槌增補に赤舌日は赤口日なり通書大全曰赤口日忌會客證事買買　又云主口舌喧爭　かなてよみにしやく日とゐる是なり口さ舌と同し義なりと云り　貞德云赤口日の事晴明か簠簋に有之簠簋は陰陽家に秘して其頭世上に出さゝる故兼好見給はさりしと見えたり

瑜案に白舌の事詳ならす猶可考また本文に引る異

國の后の事慥なる出據をしらす拾芥抄（識事部）云八月一日日出以前書八月一日天中節赤口白舌隨節滅押門○昔大國之后於天中樓有契事其人依不遂素懷忽成火神燒天中樓之時后咒言之文也以成火防と見えたるのみ

問て云八月に放生會とて合戰の場に望ても鬪をとゝめはへるは何故にや

答抑八幡大菩薩と申奉るは人皇第十六代のみかと應神天皇の御事なり仲哀天皇の第四の皇子御母は神功皇后なり天下を治給ふ事四十一年寶壽は百十一歳をたもたせ給ひしなり欽明天皇の御代にはしめて神とあらはれ肥後國菱形池に跡をたれ後には豐前國宇佐の宮に鎭り給ひしか清和の御時男山岩清水にうつりすませ給ふそのゝちは奉幣も岩清水に有一代一度宇佐へも勅使を奉らるゝなり八幡と申御名は御託宣に得道來不動法性示八正道垂權迹皆得解脫苦衆生故號八幡大菩薩と有しより八幡大菩薩と號し奉るなりまたは八方に八色の幡をたつる事有密教の唱西方阿彌陀の三昧耶形なり其故にや行教和尚には彌陀の三尊に現して見えさせ給ひけりあるひはむかし靈鷲山にして妙法華經を說とも大自在王菩薩なりとも託宣したまふ

考證　北畠准后親房卿神皇正統記に云第十六代應神天皇は仲哀第四の子御母は神功皇后なり胎中天皇とも又は譽田天皇とも名つけ奉る（中略）天皇天下を治給ふこと四十一年百十一歳おまし〱き欽明天皇の御代にはしめて神とあらはれ筑紫の肥後の國菱形の池といふ所にあらはれ給ふ我は人皇十六代譽田の八幡丸なりとのたまひき譽田はもとの御名八幡は垂跡の號なり故に豐後國宇佐の宮にしつまりたまひしか聖武天皇東大寺を建立のゝち巡禮し給ふへきよし託宣ありき依之威儀をとゝのへて迎申さる又神託ありて御出家の儀有きやかて彼寺に勸請し奉らるされとなほ勅使なとは宇佐に參りき清和の御時大安寺の僧行教宇佐にまうてたりしに靈告有て今の男山岩清水にうつりましますす爾來行幸も奉幣も岩清水に有一代一度宇佐へも勅使を奉て昔天孫あまくたり給しとき御供の神八百萬有き大物主の神したかへて天へのほれりしを八十萬神といへり今までも幣帛を奉らるゝ神三千餘座也し

かるに天照太神の宮にならひ二所の宗廟とて八幡をあふき申さるゝ事最尊き御事なり八幡と申御名は御託宣に得道來不動法性示八正道頭注云八正道の事公事根源集釋に據勒菩薩瑜伽師地輪卷第六十七攝決擇分中聲聞地之を引て委しくいへり本文にさしてあつからぬ事なれはこゝにはふきつさて此得道來の御託宣と申は勝尾寺の開成と申僧に告給ふと申傳たる事なるに八幡宮に大菩薩の號あるは桓武帝の末よりの事なゝ況や十六代應神帝の御代には佛法いまた渡らす欽明帝の御代始て渡り三十一代敏達帝の御代より盛に行はるゝ樣に成行ぬる事なれは應神帝夢にたも知り給はぬ佛法をけむし自ら大菩薩なと託宣し給ふことわり有へく申侍らぬを後に弘法傳教なとの強くつくりをなして此號をすゝめ奉りし物也 垂權迹皆得解脱苦衆生故號八幡大菩薩と有

八正とは內典に正見正聞正思惟正語正業正命正精進正定正惡是を八正道と云おほよそ心正なれは身口おのつから清まる三業に邪なくして內外眞正なるを諸佛出世の本懷とす神明の垂跡も亦是か爲なるへしまた八方に八色の幡をたつる事有密教のならひ西方彌陀の三昧耶形頭注云三昧耶形 密海四種曼荼羅衣云三昧耶曼荼羅所持標幟是也三昧耶古人翻爲新人翻輪圓具足と集釋にいへりをりとのゆゑにや行教和尚には彌陀三尊頭注云彌陀三尊 拾芥下本云阿彌陀觀音勢至二菩薩也の形にて見えさせ給ひけり光明袈裟の上に移らせましくゝけるを頂戴して男山には安置申けるとそ神明の本地をいふ事はたしかならぬたぐひ多けれと大菩薩の應迹はむかしよりあきらかなれは證據おはしますにや或はまた昔於靈鷲山說妙法華經ともあるひは彌勒なりとも大自在王菩薩なりとも託宣し給ふ中にも八正の幡をたて八方の衆生を濟度したまふ本誓よくよく思入てつかうまつるへきにや云々 日本紀神功皇后紀云秋九月庚午朔己卯令諸國集船舶中略于時也適當皇后開胎皇后則取石插腰而祈之曰事竟還日產於茲土其石今在于伊都縣道邊中略皇后從新羅還十二月戊戌朔辛亥生譽田天皇於筑紫故時人號產處曰宇瀰也 同應神天皇紀云譽田天皇足仲彥天皇第四子也母曰氣長足姫尊天皇以皇后討新羅之年歲次庚辰冬十二月ノ生於筑紫之蚊田 扶桑略記第二云 應神天皇十六代治四十一年庚午誕生王子男十四人一人即位女八人 仲哀天皇四男今八幡宮也母神功皇后女帝庚寅歲正月丁朔亥日行年七十即位都ニ大和國高市郡輕島豐明宮なと見え奉りさて日本紀を前に引へきをこし置て正統記をしもさきに引出たるは親房卿のもとつき給ひし所をしらしめてさておちくにしるしをもあけさくをもくはへむか爲なり

頭注云瑜案するに　條禪閤の公事根源またく正統記によりて往々一二字をかへて載せ給へり兼冬卿は是により給へり

肥後國菱形の池　卜部氏二十二社註式（石清水放生會事條下）人皇三十代欽明天皇二十三年正月顯豐前國宇佐郡馬廐峯菱潟池今宇佐宮是也　同書（宇佐八幡宮條下）或書曰豐前國宇佐郡菱形山廣幡八幡宮座郡案東馬城峯頂人皇四十五代聖武天皇神龜四年歳次　就此山奉造神因名曰廣幡八幡大神宮舊記云人皇三十代欽明天皇御宇豐前國宇佐郡廐峯菱潟山間現三歳小兒立竹葉託宣云我是人皇十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也我名曰護國靈驗威力神通大自在王國々所々跡垂於神道是初顯御坐　行教和尚には彌陀の三尊にけむして　二十二社註式　石清水（山城國久世郡）　八幡宮三座（式外）三座内男體一女體二（神功皇后玉依媛）　人皇五十六代清和天皇貞觀元年（己卯）四月十五日行教和尚（傳燈大法師位）奉宣旨參籠宇佐宮仝八月二十三日到來男山之邊一宿之間更倍信心祈願之行教和尚致誠祈請將拜見權現大神之垂跡本身忽行教和尚袈裟之上現三尊因是神殿内奉安云々仝九月十九日差使木工權允橋良基造立御殿六宇（三字正殿三字禮殿）同二年（庚辰）造立寶殿隨則安置御像

注頭云讀吉事談第四行教和尚一夏九旬宇佐宮に籠て晝は大乘經を讀夜は眞言を誦して法樂し奉る九旬みちなむとする時に我に據い近きに向て國家を守り奉んと託宣し給ひければ涙を流して十日延て御體を見奉んと祈るに三衣箱を見るへしと託宣有けれは是を見るに七條の袈裟の上に宇にも非す繪にも非す阿彌陀三尊現し給へり行教此御姿を寫し奉りてさて京へ上りて此よしを奏するに帝の御夢に男山のうへに紫雲立のほりて王城を覆と御覽しき此事なるへしとて急き御殿を作り内裏の中に此御體をかけ奉る人敢て見ることをなしたゝ御殿の扣り御座をしく時うしろ向て敷此内殿は帝にかうはしき香匂へりとそ

瑜案するに本文に肥後國菱形池とあるは神皇正統記によらせ給ひしなるへけれと二十二社注式に豐前國宇佐郡菱潟山間とあるか正しくて肥後國と有は誤なるへし大名寄秋鏡覽なとにも豐國菱の池といへるを出して夫木よみ人しらす　豐國のひしのいけなる菱のねをとりてや妹か袖ぬれにけむとい

へる歌を引り盖てれなるへし
頭注云松下見林公事根源集釋引託宣集一菱形者三山之總名也北辰影向之地也峰形如是之角三山者一龜山在北方似龜形號小倉山 二大尾山在東爲龜山尾三宮山菱形耶小倉乃山之下津石根宮柱太敷立是也又云菱形之稱斯峯之體如菱之角非一山之秀分三方而崎於松林之間有自然之池隨山總名之故稱菱形池
天野信景鹽尻に云應神天皇を八幡と號し奉るは廣幡八幡麻呂と神勅有し故也幡の字に付て八のはた天降せし故と云または彌陀三摩耶形の故なと牽强に說々侍る按に神功紀千繒高繒の證侍るも同し意歟しからは廣繒の八繒と云心にて幡のことには侍らぬにや繒は玉篇に帛也といへり織機よりの假呼なり廣く多く織なる繒帛をもて美稱の御神號にや
瑜案するに中古黠僧愚臣等己か宗旨をはり祈禱誦經なとを衒むか爲に奉宣旨なとに事よせて神社に參籠する樣にて何かしの本地をかみくれかしの託宣を蒙りしなとあとかたもなき虛言とも丶佛經に附會しおほけなくも時の天子を欺奉りしを大臣もまた其非を正す事を知らす無上みたからえたらむやうに尊崇して學術北畠准后のことさも正史にも載する事なき黠僧愚臣の邪說を信用して正統記にしるし甚しきに至ては八幡宮託宣有て出家の儀有なとぬれ衣を着せ奉り天子の祖廟を褻瀆し奉る事いとも／＼可畏ことにあらすやしかしなから神佛混合するはおのつから國威のかろ／＼しうなり行て王位の衰奉るもといなりと云ことを知しめされぬからなり嗚呼正大純粹の神の御國には神てそまさめ何そけからはしき本地垂跡をからむや皇國のめくみをかかふるものたれかなけかさるへきさて此問答作らせたまひし頃は兼冬卿いまた總角にてましまして是非をえらふまての見解もおはしまさす正統記の說をとり入させ給しなるへけれといみしき僻事なりた丶問目のこさく放生會の事の答のみを殘して此一件はけつりさりて可也
放生會と申は元正天皇の御宇養老四年九月異國よりわか朝をとらむとせしさき大菩薩の神力によりて異敵をしりそけ侍てのちたくせん有て合戰の間多くの人をころしぬ放生會を行ふへきよし有しによりて每

日諸國まて此事有放生のいみしき事最勝王經長者子流水品の池魚の事より起れるにや定にいけるをはなつ御ちかひ有りかたかりしことゝもなり

考證　二十二社註式石淸水放生會事條下舊記云人皇四十四代元正天皇六年養老四年庚申豐前守宇奴首男人乎將軍大御神乎奉レ請豆大隅日向兩國在元向拒ニ隼人止志豆等乎伐殺岐大神託ニ宣此隼人多殺留部每レ年放生會奉レ仕留倍今件放生會興自ニ宇佐宮一傳ニ於石淸水一

瑜案するに本文にいへるは此事歟他に所見なし左元向左之向の誤寫なるへし　又註式云第四十八代稱德天皇治三年神護慶雲元年丁未五月十八日御託宣ニ云明日辰時沙門與成豆可レ受ニ三歸五戒一自レ今以後禁ニ斷殺生一但爲ニ國家一有ニ巨害一之徒出來者非ニ此限一云々　故實拾要集八月十五日條下是今日八幡宮放生會也先於殿上宣命奏聞　參陣人々　上卿大納言　大外記　少內記　內藏使　出納　小舍人　右參陣人々也石淸水參向人々　勅使大納言　參議辨　外記　史　官掌　召使　左右近衞府　左右衞門府　左右兵衞府　左右馬寮　內藏寮　樂人　右石淸水參向人々也

同調進物方　官幣內藏寮　宣命大內記內藏使持之　右調進物此分也　最勝王經長者子流水品の池魚の事

唐三藏法師義淨所譯金光明王最勝王經長者子流水品第二十五云爾時長者子流水於往昔時在天自在光王國內療諸衆生所有病苦令得平復受安隱樂中略善女天時長者子妻名水肩藏有其二子一名水滿二名水藏是時流水將其二子漸次遊行城邑聚落過空澤中深險之處見諸禽獸豺狼狐玃鵰鷲之屬食血肉者皆悉奔飛一向而去時長者子作如是念此諸禽獸何因緣故一向飛走我當隨後暫往觀之卽便隨去見有大池名曰野生其水將盡於此池中多有衆魚流水見已生大悲心時有樹神示現半身作如是語善哉々々善男子汝有實義名流水者可愍此魚應與其水有二因緣名爲流水一能流水二能與水汝今應當隨名而作是時流水問樹神言此魚頭數爲有幾何樹神答曰數滿十千善女天時長者子聞是敎已倍益悲心時此大池爲日所曝餘水無幾是十千魚將入死門旋身宛轉見長者心有所希隨逐瞻視目未曾捨時長者子見是事已馳趣四方欲覓於水竟不能得復望一邊見有大樹卽便昇上折取枝葉爲作蔭涼復更推求是池中水從何處來尋覓不已見一大河名曰水生時此河邊有

諸漁人爲取漁故於河上流懸險之處決棄其水不令下過於所決處卒難修補便作是念此崖深峻設百千人時經三月亦未能斷況我一人而堪濟辦時長者子速還本城至大王所頭面禮足却住一面合掌恭敬作如是言我爲大王國土人民治種々病悉令安穩漸次遊行至其空澤見有一池名曰野生其水欲涸有十千魚爲日所暴將死不久唯願大王慈悲愍念與二十大象暫往負水濟彼魚命如我與諸病人壽命爾時大王即勅大臣速疾與此醫王大象時彼大臣奉王勅已白長者子善哉大士仁今自可至象厩中隨意選取二十大象利益衆生令得安樂是時流水及其二子將二十大像又從酒家多借皮囊往決水處以囊盛水象負至池瀉置池中水即彌滿還復如故善女天時長者子於池四邊周旋而視時彼衆魚亦復隨逐循岸而行時長者子復作是念衆魚何故隨我而行必爲饑火之所惱逼復欲從我求索於食我今當與爾時長者子流水告其子言汝取一象最大力者速至家中啓父長者家中所有可食之物乃至父母食啗之分及以妻子奴婢之分悉皆收取即可持來爾時二子受父敎已乘最大象速往家中至祖父所說如上事收取家中可食物置於象上疾還父所至彼池邊是時流水見其子來身心喜踊躍遂取餅食徧散池中魚得食已悉皆飽足中略 佛告善女天爾時長者子流水及其二子爲彼池魚施水施食並說法已俱共還家是長者子流水復於後時因有聚會設衆 妓樂 醉 酒而臥時十千魚同時命過生三十三天云々

早旦にゐのはなを神輿くたらせ給ふときは行幸の儀式にて音樂のこゑ雲をさゝろかし衣冠のよそほひ日にかゝやけり夫にまた引かへて還幸のありさまは神人法師はらに至るまで白杖をつきてかへらぬみちにおくり奉る儀式なり是やこのあしたには紅顔ありて世路にほこれとも夕には白骨となりて郊原にくちぬる世のありさまをしめし給ふ神慮のほとはかりかたく有かたきことゝもなり

頭注云公事根源集釋云十五日上院より下院へ神幸の道路上院の南門より大坂を經て猪の鼻に到り下院の南門に入なり猪の鼻は坂の出崎なり

考證　故實拾要集放生會條下　凡放生會の時八幡宮神輿自山上下の神殿へ神幸之時供奉して公卿束帶式衣冠也還幸之時着烏帽子淨衣供奉也神幸之供奉如此裝束相替也但淨衣と云は白き布を以如狩衣仕立た

るものなり是神事の服なり　朝有紅顏誇世路暮爲白骨朽郊原といへる句は和漢朗詠集無常の題にも引く永濟注に或人云此句冷泉院の御時麗景殿の女御中陰の尅義孝少將頭注云集釋には慶滋保胤の作れる願文なりといへり蓮如の紅顏白骨の文もこれにもとつけり

九月

問て云九月九日に菊の酒飲は何よりおこれることそや

答まつけふを重陽と申は月と日と九陽の數にかなふかゆゑに重陽と申なりまたきくを用る事は世風記といふ書にそ見え侍る費長房といふ仙人汝南の桓景に語ていはく九月九日に汝か家にわさはひあるへし茱萸の嚢をぬひて臂にかけ山にのほりて菊酒をのまは此災きゆへしといひけれは其日にいたりてをしへのことくせしかは其身は恙なくして家中の鷄犬羊ことことく死したりかやうのくのうによりてやらむ昔は大内にて重陽の宴とて茱萸の嚢を御帳にかけて群臣にきく酒を給はりしとそうけたまはるまた後光明峯寺殿の御抄には九月九日は寒温二季のさかひあひあふとき身内わかるゝなり此とき酒をのめば病を得ずさてけふよりさけをわかすといへり寒熱の氣大増大減すれはかならす病のおこるなり故に針灸治も皆肉別をしてするなりまた菊を用る事は魏の文帝うまれたまふのとき紫雲殿上にかゝりて例にも似すはたして七歲にして位につき給ひてけり其時天下のもの壽命十五にすきすことにみかと十五やうやくちかつくの時なけきをふくみてあゆましめ給はす其時彭祖といふ仙人わか菊園のきくのはなをゝりて九月九日にもち參りて奉りたれは帝これを服したまひて延壽七十歲をたもち給ふよし載られたりまた世風記に漢武帝と申みかとの菊酒をのみて長壽を得たまひしことも侍りまた菊にわたきする事いつのころより始るとも見え侍らす唯きくをもて遊ふのあまりに寒霜をふせかむとの心さしとそ覺侍る

頭注云書言故事魏文帝書藏往日來忽逢九月九日九爲陌數其日子月並應故

考證天文年間某比丘か壒嚢鈔一卷九月九日節供爲レ延ニ遐壽一也所ニ以服レ菊云々　世風記云飮ニ菊酒一而以免ニ災厄一又云服ニ菊華酒一令ニ人長壽一云々　又云

九月九日菊花彼鬼眉トテ酒ニ入テ飲レ之萬病去テ命長菊花藥ナル由緒云ハ昔魏文帝七歳即位給或時相者云御壽十五不レ可レ過ト王叡聞有テ歎給時彭祖云仙人帝德奉レ感酈縣菊折テ獻レ之帝是ヲ服御命ヲ延給事七十也彼菊藥ナル因縁ハ周穆王八疋ノ駒ニ乘テ四荒八極ニ不至ト云所ナシ或時天竺ニ到リ給フ西天十萬里ノ山川幽境一時ニ越テ中天竺ノ舍衛國ニ至リ給ヘリ時ニ釋尊靈鷲山ニテ法花ヲ說給フ爰ニ穆王馬ヨリ下テ會坐ニ臨テ佛ヲ禮シテ還テ一面ニ坐シ給ヘリ其時佛問テ曰汝何レノ國ノ人ソ穆王答テ云ク吾是震旦國王也ト如來重テ問テ曰善哉今來ニ此會場一我ニ有ニ治國法一汝欲ニ受持一否穆王曰願信受奉行施ニ理民安國功德一爾時世尊以ニ和語一四要品中八句偈授給今法華中ニ經律ノ法門有ト云其深秘文是也穆王震旦ニ歸テ後深ク心底ニ秘シテ不レ傳レ世此時慈童ト申ケル童子穆王ノ寵愛ニ依テ常ニ帝ノ傍ニ侍リ或時此慈童君ノ空位ヲ過ケルカ誤テ帝ノ御枕ノ上ヲソ超タリケル群臣議曰其例ヲ考ニ罪科非レ淺雖レ然事誤ヨリ出タルヲ以テ死罪一等ヲ宥メテ遠流ニセラルヘシトソ奏ス群議止事ヲ不

レ得慈童ヲ酈縣ト云深山ヘソ流サレケル彼酈縣ト申ハ帝城ヲ去事三百里山深シテ鳥タニモ不鳴雲冥ウシテ虎狼充々タリ然ハ假ニモ此山ニ入人生テ歸ルト云事ナシ穆王猶慈童ヲ憐ミ給ヒテ彼八句ノ内ヲ分テ普門品ニ有二句ノ偈ヲ潜ニ慈童ニ授給テ每朝ニ十方ヲ一禮シテ此文ヲ一返唱ヨトソ仰ラレケル慈童遂ニ酈縣ニ流サレテ深山幽谷ノ底ニ棄ラレヌ依テ慈童君ノ恩命ニ任セテ每朝ニ一返此文ヲ唱ヘケルカ忘モヤセムスラムト思ケレハ傍ナル菊ノ下葉ニ此文ヲ書付タリケル其後ヨリ此菊ノ葉ニ置ケル露僅ニ落テ流ル、ニ谷水皆天ノ靈藥トソ成ニケル慈童渴ニ臨テ是ヲ飲ニ水ノ味ヒ天ノ甘露ノ如ニシテ宛モ百味ノ珍ニモ增レリ加之天人花ヲ擎テ來リ鬼神手ヲ束ネテ奉仕シケル間敢テ虎狼惡獸恐无シテ却テ換骨羽化ノ仙人ト成テケリ是耳ナラス此谷ノ水ヲ汲テ飲ケル民三百餘家皆病ニ消滅シテ不老不死ノ上壽ヲ保ケリ慈童八百餘歳ヲ保テ貌如ニ少年一魏文帝ノ時（文帝即位黄初元年神功皇后二十年に當る）彭祖ト名ヲ替テ文帝ニ此術ヲ授奉ル文帝是ヲ受テ菊花盃ヲ傳テ萬年ノ壽ヲ成ス今ノ重陽宴是也其ヨリ後太子位ヲ嗣給

フ時必先此文ヲ受持シ給フ仍テ普門品ヲ當途王經ト申ナリ此文我朝ニ傳テ代々ノ聖主御即位ノ日受持シ給フナリ若幼主君踐祚ノ時ハ攝政先ツ是ヲ受テ御治世ノ始ニ君ニ授奉リ給フ此八句三國傳來シテ治世ノ秘術除災要法也其源佛法ノ威力菊花ノ德如レ此ノ

瑜案するに周穆王釋迦に見えしと云はもとより僧徒のみめ作の虚言にして慈童か事もたしかなる書に見えたる事なし是まさしく荊州記云菊水出ニ穰縣一芳菊被レ岸水出極香谷中皆飲ニ此水一上壽百二十太尉胡廣久患風疾恒飲後遂瘉年八十二薨（後漢胡廣字伯始南郡華容人）是れ神仙傳に見えたる彭祖か事を附會して作りたりと見ゆさらは信用するにはたらぬことなから壒嚢抄は天文元年壬辰二月三日になれるよし序にみえたれは兼冬卿の此問答を草せられしよりは十三年前に在てすてに世風記群忌隆集等の文をも引用したれは參考の爲にこゝに載るのみ

費長房と云仙人續齊諧記云汝南桓景隨ニ費長房一遊學累年長房謂レ之曰九月九日汝家當レ有レ災急宜去令下家人各作ニ絳嚢一盛ニ茱萸一以繫レ臂登ニ高山一飲中菊酒上此禍可レ除景如レ言擧レ家登レ高夕還見雞犬牛羊一時暴死長房聞レ之曰此可レ代也今世人每レ至ニ九日一登レ山飲レ酒婦人帶ニ茱萸嚢一是也西京雜記（卷三）戚夫人侍賈佩蘭後出爲ニ扶風人段儒妻一說下在ニ宮內一時上九月九日佩ニ茱萸一食ニ蓬餌一飲ニ菊華酒一令ニ人長壽一菊華舒時並採ニ莖葉一雜ニ黍米一釀レ之至ニ來年九月九日一始熟就飲焉故謂ニ之菊華酒一

瑜案するに續齊諧記は梁吳均か作西京雜記は晉葛洪か作といへとも姚際恒か古今僞書考には陳直齋か說を引て必洪か作ならすといへり縱令僞書たりとも吳均より已前にあらは賈佩蘭か說傳聞する所有て書記しゝなるへけれは菊花酒の事後漢の費長房にはしまるにあらすして旣に戚夫人の時に起れるにや然るに隆恒また晁子山か說を引て人或以爲吳均依託爲之とあるを證とせられたれと是かならすしかるへからすもし果して然らは續齊諧記菊酒のこと正に佩蘭によりて說をなすへくして自相鉾楯する事如此なるへからすかにかくに西京雜記誰か作なる事はしらねと猶續齊諧記よりは前にあるへくおほゆ其書さまをたくらへ見て知るへし　吳

門老圃史正志菊譜云菊草屬也以黃爲正所以槩稱黃華漢俗九日飮菊酒以祓除不祥蓋九月律中無射而數九俗稱九日而用時之草也世說故事苑なと見えたり大抵此說なとさるへく聞ゆ

菊にきせわたきする事

瑜案するに類聚國史卷七十五　桓武天皇延喜十六年癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰己乃己呂乃志具禮乃阿米爾菊乃波奈知利曾之奴倍岐阿多羅蘇乃香乎賜五位以已上衣被きくを賞して御製に入してとてゝに始て見えたり其後凡八十年餘を經てきくのきせわたをうたによみしは伊勢か集にはしめて見ゆこゝに凡八十年餘をへてといへるは伊勢か父伊勢守繼蔭三代實錄に仁和二年從五位上藤原朝臣繼蔭伊勢守云々と有然れは此ほと其女のみやつかへに出たる故に伊勢をもて喚名とせられしなるへしと眞淵のいへるによれりいはく都にすみ侍ける時九月八日伊勢か家の菊にわたをきせにつかはしたりければまたのあしたをりてかへすとて　かすしらす君かよはひをのはへつゝなたゝるやとの露とならなむ返し　藤原雅正　露たにもなたゝるやとのきくならははなのあるしや幾代なるらむ此贈答後撰集に入れりきくにわた着することと此ころより始りけるにや此はし書に八日にわたをきせて九日のあしたに菊をさへをりそへてかへされたるよし見えたれはきくの露を移して千代にあはむなとゝての しわざなるべし新勅撰に從一位倫子きくの綿を賜りて是にて老のてひすてよと侍れは　紫式部　きくの露わつかはかりに袖ふれて花のあるしに千代はゆつらむ散木集に菊してかはなてよと人の申ければ　ちることにしはめるかはか花なれはなつともきくのしるしあらめやとよみ隣女唔言といふ書に菊のきせわたの事いかなる故と云ことをしらす古き歌に露を詠るを見れは綿に一夜きくの露をうけてそれを若ゆるましなひにするなるへし今も御所方に綿きせ給ふとき打はらふにも千代はへぬへしの歌をとなへ給ふこそ忠見集に九月九日菊に綿かつけたる所に　萬代も人のわかゆるきくのうへにまゆをひろけてつゆをまつかな　また　花の香をけさはいかにときみかためまゆひろけたるきくのうへの露　かゝれはきせわたをまゆともよむへくやといへるなとおもひ合すへししかるに新撰六帖　信實朝臣　かさねなるきくの着せ綿けふこみれはまたき盛のはなさきにけり　また溪雲問答に通

茂公のうたを出して　さく菊はまたむら〳〵のまかきにも花につくろふけさのきせわたとよみ給ひしは花のさかぬ以前に　着せて花と見せむ料にするわさにかこもおもはるれと古義にはあらぬなるへし　故實拾要集に　御菊居是常御殿の御庭ニ菊綿ヲ加置也陰陽師大黒調進之菊居ト云ハ菊ノ枝一色綿ヲ以テ菊ノ花チ作リ件ノ枝ニ付テ獻之也世是ヲ菊居共菊綿共云也往昔今日菊ノ花不咲事アリテ件ノ事ヲ被用シヨリ始ルト云々なといへるをみて下りてのさまなる事おもひはかるへし

問て云この頃賀茂籠とて虫入る籠の侍るは何の故に賀茂より出侍るにか

答是は殿上の逍遥とてむかし殿上人とものさる野とへむかひて虫を籠にえらひ入て遊て君に奉りしは堀川院の御時よりそはしまりける虫撰とも申なりまたむかしは賀茂の社司なとに仰られて鈴むし松むしなとをめされけるよし故禪閤の仰られしとかやされとむし籠は賀茂よりいて侍ると思ひ合せられ侍る

考證　公事根源下すてに是を載す併せ見るへし禁祕御抄云虫松虫鈴虫類人々進之或被召賀社堀河院御時頭以下向嵯峨野誠有逍遥綵虫屋向撰虫奉之といひまた黒川道祐か雍州府志云下賀茂社司婦人造養松蟲鈴蟲之籠其式纖細刳竹爲籠内安一小筒盛土敷若種露草少許而以紫白糸作藤花自籠上垂下其體堪供觀云々　續千載集神祇部從三位賀茂氏久むしこをつくりて前大納言資季のもとへおくるとて　きみのみそ千とせもあかす聞ふりむわか神やまの萬つむしのこゑ　かへし　いく千代か鳴てへぬらむ千はやふるそのかみ山のまつむしのこゑとも見え年中行事歌合二十八番左撰虫　忠頼朝臣　いろいろのさか野のむしをみや人の花すりころもきてそとるなると見えたり

十月

問て云十月を神無月と申は何の故にてはへるにや

答此月を神無月と申は伊弉冊尊崩し給ふ月なれは申なりまた四方の木葉散すさむ月なりとて葉みなつきと申人有いとおほつかなしまた諸神出雲の大社へ下り給へは申ともいへり

考證　十月を伊弉冊尊崩し給ふ月といふことト部家なとにはならひある事にやいとおほつかなしつ

れ〳〵草六ト六段云十月をかみな月といひて神事にはばかるへきよしはしるしたる物なし本文も見えす但當月諸社の祭なきゆゑに此名有か此月よろつの神たち太神宮へ集給ふなと云說あれとも其本說なしさる事ならは伊勢にはことに祭月とすへきに其例もなし十月諸社の行幸その例も多したゝしおほくは不吉の例なり　藤澤山の桑門由阿か詞林采葉第六に云一天下の神無月をは出雲國には神在月とも神月とも申なりわか朝の諸神參りあつまり給ふ故也其神有のうちに神々の來臨のとき小童のつくれる如くなる篠ふね波上にうかふ事數もしらす諸神は彼浦の神在の社に集給ひて大社へ參り給はす此神在の社は不老山と云所に立給ふ神號佐大明神と申さなり是則傳奏の神にてまし〳〵す大社をは杵舂明神と申なり別當をは國曹と申なり大社は素盞烏尊にておはします日本國の諸神は天照太神をこそ宗廟の神なれは尤尊敬あるへきに何とて此大社を御祖神として參りあかめ給ふそと云不審有それは子細深秘なる事なり

瑜案するに由阿の說は清輔奥義抄に此月諸神出雲の大社に集り給ふ故に名付ると有によられたるか采葉抄奥書に貞治元年壬午十一月十五日於柳營邊藤澤山隱士桑門由阿七十七と有て兼好同時の人なりしかるに兼好舊くより傳へ來りし諸神の出雲の大社に集給ふといへる說によらすして伊勢に諸神の集りたまふといふ說あれともいはれし外に所見なし如何なるゆゑにやされは貞德のつれ〳〵草抄草慰にも其頃は十月に諸神伊勢へ集り給ふとこそ世にいひつらめ今は伊勢への沙汰なし出雲へこそ神の參り給ふとこそ申せいふかしき事なり神無月と云詞は古歌にも多くあれはなき事にてはあるまし有事ならは吉田の家の兼好のしられぬことはあるましきに此段不審なりといへり　つれ〳〵草增鐵槌に云ト部口の神書をとくもの申けるは素盞烏のかくれますは冬十月なり此ゆゑに十月を素盞烏のつかさとり給ふへきなりと勅しまします故に諸神出雲國へ參り給ふゆゑに出雲には神有月と申と語りき兼好すてに其家に生れて神道を可知人なりしかれとも此兩說こゝに沙汰せさるときは本據とするにたらさるか云々

瑜案するに是また兼冬卿の御説に伊弉冊尊の崩し給ひしは十月なりなといへりしに混合したるか畢竟とるにたらぬことなるへし

つれ〳〵草増鐵槌に又云十月を陽月と名付る事は陽なきをうたかふと爾雅なとにも有十一月は始て一陽來復するゆゑに十月は極陰の月なりされ共陽月と云陽の果して絶無なるまじき道理なり陽神のなき月とも云義にて神無月と名つくるかと料簡する人も有　瑜案するに鴨長明四季物語十月古きふみにはかせたつわかゝみ山のふるきねきくさはいつものせしは神は陽の精神鬼は陰の精魂なり此月は一陽もあらてつとめての月より一陽來復の德をあらはせば陽神のおはしみそなはし給はねと云心はへにて神無月とはいへるなるへしとなむふかく神秘にせしてとゝおもへりイ略とあるをみれは鉄槌の説もふるくよりいひ傳へしなるへし　而慍齋増鐵槌作者云私案するに十月を易に坤卦とす☷☷是なり此卦の中に陽の卦なければ陽神なしと云に當るへきにや云々　瑜案するに是もまたふるくよりいひ傳へたる説にてたしかなる物に有しと覺ゆまた十二律の次第を十二箇月に配當すれは上無調を十月とす故に上なし月と云といへる説も有しにや其に出所を忘れたりされと皆附會の説なるべし　谷川士清云かみな月十月をいふ十は數の極なれはかすみなつきの義といへと神嘗月の義なるへし我邦のいにしへも西土にも神嘗祭は十月なりし事其證多し古説に神無月とし出雲の故事をいひ傳へり新續古今集に　あふことを何にいのらむかみなつきをりわひしくもわかれぬるかな大物主神の八十萬神を帥ひて天にのほり給ふは此月なりと出雲國造家の説なり或は雷無月の義なりといへり　瑜案するに雷無月は水戸西山公の御説なり安藤爲章か年山紀聞云十月を神無月と名付るを中略西山にて御夜話の次此事に付て仰に云萬葉集第十三の歌に霹(カミ)靂之(トキノ)日(ヒ)香天之(カルミソラノ)九月乃(ナカツキノ)鍾禮乃(シグレノ)落者(フレハ)といふ歌あり月令には仲秋之月雷始收聲とあれと夫は大かたの事にて右の歌には九月にさへ霹靂をよめるされは十月は純陰の月なれは雷のこゑのをさまりはへる故に無雷月といふなるへし同集に神のこと聞ゆる瀧とよめるも後撰集にちはやふる神にもあらぬわか中

の雲井はるかに成もゆく哉とよめるも雷神なり伊勢物語に神さへいといみしうなり云々この外猶證歌多し考へて知るへしさの給しよし見ゆ諸說紛々何れをそれともさためかたきこととなるへし

問て云十月の亥子といふことはいつのころよりはしまれるにや

答いつのころよりとはたしかに申かたし承安四年の師尚か勘文にも本朝のおこりをはしるさて外朝の本書をそ引申けれはさらに知り難し延喜式にまさしく載せたることさなれは往古より侍る事なるへし群忌隆集といふ書に十月亥日餅を食すれは萬病をのそくよし見え侍る

考證　大外記師尚勘申云　亥子餅事　群忌隆集云十月亥日食餅除萬病　濟民要術云十月亥日食餅令人無病　本朝月令云雜五行書曰十月亥日食餅令人無病　右亥日餅本緣如此奉供事藏人方沙汰候歟外記不知也但內藏寮進殿上男女房料餅各一折櫃　以柳臼杵等於朝餉方令舂御云々仍言上如件　右の勘文は年中行事秘抄に載せたるを屋代弘賢か古今要覽にとり入られたるなり此外に大外記賴業の勘文一通を載せたれとこゝに用なく且いさゝかのかはり有のみなれは省けり

瑜案するに延喜式に亥猪の儀を載せたるよしは公事根源にも　遊したれと今行の本に無之さしもの禪閣式の文を引誤給ふことといと〳〵いふかしき事なりおもふにそのかみ異本ありしこともしるへからす　惟宗允亮政事要略廿五引藏人式云十月初亥日內藏寮進殿上男女料餅各一折櫃と見えて本朝書籍目錄に藏人式一卷橘廣相撰廣相貞觀年中人とあれははやく承和嘉祥のころより行れしなるへし　寺島良安か和漢三才圖會天部云或書曰垂仁天皇之朝三輪太神告白太田々根子命已月上巳亥月端亥天照太神幸魂名富福智惠尊行天地福件巳日降行地曰件亥日昇行天富以五色餅並五色幣及酒菓等誠精祭之國皆消國禍悉發云々如此則垂仁天皇之世始也　瑜案するに此說たしかなる所據なけれは信從するにたらすと云とも因に茲にしるして其妄をわきまふ　塵添壒嚢鈔一卷引雜五行書云十月亥日食餅無病又云豕能生多子故女人羨之至十月家日獻餅祝之家每年產十二子象十二月閏年則十三

子豕猪亥通用也群忌隆集云々(與勘文同) 瑜案するに錦繡萬華谷の説群忌隆集とおなしまた達生録及月令廣義に出つ

問て云十月ゐの子の日御けむちようとて公より私にわかち給ふことの侍るは何の故そや

答先に申ことく此ゐの子の根源たしかにいつよりとは申かたし十月上亥日内藏寮より餅をそなへ奉れはあさかれひにて主上聞し召よし年中行事といふものに見え侍り今は其まねかたはかりなり是を諸臣にわかち給ふ心にて侍るへし上一人より下萬民に至て此餅を食ふへしと見えたりくらりやうの奉る餅の餘風をうつして今も御けむちようとて人々にわかち給ふとそ覺侍る

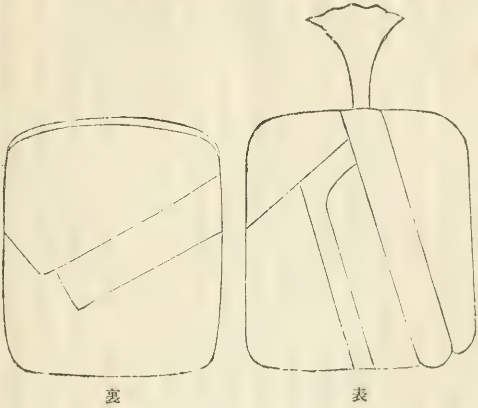
考證 亥猪の事はやく漢土にも有しことにて唐徐堅が初學記云筍民四時列饌傳曰十月亥日食餅令人無病と見えたり 拾芥抄所載年中行事云十月上亥日内藏寮進餅(次々亥同) 小野宮年中行事云初亥日内藏寮進殿上男女房料餅事(各一折櫃) 年中行事秘抄云十月上亥日内藏寮進餅事(中下亥又同 殿上並女房) 亥子餅事 或記云盛朱染盤(立紙) 四枚居御臺一本上女房取之供朝餉次召藏人所鐵臼入其上分持令爲猪子形以綿裹之插於夜御殿畳四角但臺盤所殿上料内藏寮進(以上年中行事秘抄々出) 河海抄引掌中暦云亥子餅七種粉(大豆 小豆 大角豆 胡麻 栗 柿 糖) 瑜案するに是等の粉をねりて餅を豕の形に作りけるにや 後水尾院年中行事云十月井の子亥に當る日なりわしたの裡御けむちようを供す御いきをかけらるゝ夫を人々申出すにしたかひて給はるなり御所々々親王方門跡御比丘尼衆大臣等其外外樣衆八幡別當醫師等にいたるまて小鷹檀紙につゝみ小角にする水引にてゆひて取出内々の男衆院の女中御所々々の上﨟同乳母なとの申出は椙原につゝみて出さる杉原につゝみたるはかくにはすはらぬなり畢竟或は賞翫の人あるひは外樣の人にて小鷹檀紙につゝみたるを給はるなり包の中にいるものは初度は菊と忍と中度はもみちとしのふと三度目はいちやうとしのふとなり銀杏の葉へ申出す人の名を書て包紙にさしはさむなり御けむちようの色は公卿たる迄は黒四品の殿上人は赤五位の殿上人以下は白兒は赤地下の兒は白藏族の人は三度に一度も二度に一度も赤きは黒白きは赤給はるなり家を

賞翫の故なり女中は上﨟のかきりは黑中らうは赤下﨟は白儲君のしむゐうの上らうを初御所々々の上﨟は赤其家にては黑かるへきことなれと禁中にては中らうの准據なれはなりまた后はふはしまさぬ時も后の御料とてひるの御はむに土器みすゑて御けむちよう三色をそなへて御しやうしのうちに盃（瑜案に盃は置の字誤なる事うつなし）　内侍ひとへきぬきてもて參るきく絹のたくいなり丹波國野瀨といふ所より箱に入て獻するもの有則野瀨と名付て夕かたの御祝に供す衛士かちむを進上す高倉傳奏なり夕方の御祝常の御所にて參る御座に例のことく先つくつくをもく參る（臺にす也臺の體兩方に足あり花足の類也當時世俗にゐふのあしうちといふものなり）　陪膳御前にすう少し亥の方にむかはせ給ひて突せ給ひ陪膳御直衣の御袖をおほふ御直衣もとよりた丶みながら御座に置つきをはらはせ給ひて御箸をとらせたまひて供御を少し參る親王女御なとあれは御相伴なり次第にもて參る親王は半尻着用なれは陪膳の人袖をゐはふにおよはす女御のは陪膳の人から衣の袖をおほふ女中も上﨟中﨟は次第に御前にてつく下﨟から衣（上﨟は上﨟のから衣中﨟は中﨟のなり）　のそでをおほふ次第

につき終て番衆所へ御しものから衣を置て出さるをとこのれうとかやから衣はいか丶したる事にか次に御けむちようを供す南に向はせ給ふはい膳手長の人例のきぬをいたきもちて着座かけ帶はかりをかく下﨟はひとへ衣を着すつく〳〵と同體の臺（此臺ゐのこの外日にふれさるものなり）　二つにすゑて供すしろき土器五に御けむちようを入て臺ひとつにすう都合十なり御はしはとらる丶にもおよはす陪膳手長撤せすしてしりそく又西向に居なほらせ給ふ上﨟中﨟下﨟襠斗にてまつ御立次に二こむ御まなを供す御盃常の如くとほりてまた御盃參りて三こむ（のせ）を供す三獻めは天酌にて御とほし例のことく人々天酌のついて初こむに供たる御左のかたに有御けむちようをとらせ給ひてしきゐのうへにおかせ給ひて御ゆひにてはちかせ給ふを給はるなり御けむちようの色前に見えたり但四位殿上人のうち清花の族大臣の子式治兩頭なとは二度の時も三度の時も一度は黑きを給はるなり五位殿上人もまた同し五位職事は兩頭の准據なり是らは賞翫の行衛なり亦職事補せらる丶人は器用を稱せらる丶由にて親王女御第

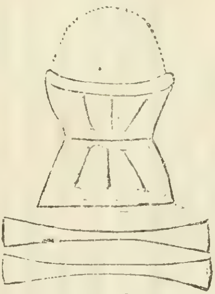
一の公卿なとははちかるゝ迄はなく敷居のうへにおかるゝをさしよりて給るなりゐの子の御祝は兩

鴨脚



度三度共に同しゐの子には女中の衣裳陪手長の外は各りんす唐あやなとの小袖を心次第に着用なり

女房私記云ゐのこ近頃は御けむちよ諸臣に給ふ時外様大納言は小角にのせ鴨脚に名をかき付るつつみ様左に圖す宮々大臣上﨟三位以上は黒餅なり雲客四品はあかし五位以下六位女藏人まて皆白きく紅葉しのふの葉を敷なり小角にのせたるはしろくれなゐにて十文字にゆふなり外様は殿上人まて



巾ほといふ

御所にては上様御つき有て灰をかけて出さるるなり

も小角にのる　典侍は黒　中らう赤　お下より以下白　包紙　御所にては外様は引合につゝむ内々は奉書紙院中にてはいつれも奉書なり
夜に入御盃事有昆布蚫なり此時につく／＼と云てちいさきうすに白きては飯をもり足付にのせ前にさね二本をおくなり是を御前に献ず次に上らうよ

り女藏人にて祝の歌に云　神無月しくれのあめのあしてとにわかおもふことをかなへつく〳〵と三へんうたふ左の袖をおほいて右にてつく歌の間さね一對ともに持てつくなり此ときみな女房小袖はかまなかを云なり（一本に云殿上にて唐衣を肩にかけて歌を唱てつけろ事三度中に穴をあけて灰をいろいを故實）　以上屋代弘か古今要覽に引用する所なり此餘にも種々の日とも引れたれと世諺問答の本文にさしてあつかぬことなれはさのみくたくしくはとてはふき

瑜宥て小倉永世といふ人の隨筆うしの誕といふものを見しに云玄猪を祝するは玄は冬のいろ猪は亥なり亥の月亥の日亥の刻同氣の陰なれは陽氣絶せむとする故に薬を製して陽を助けて其發生を祈るなり依之即刻また生氣をえて一陽來復のひ出生するなり已に其來復の全備して成就するの日を冬至と云といへりむけに近き世の物なから異聞を廣めむか爲に載于此　故實拾要集云　亥日御獻　此御獻自御臺所三獻供之又玄猪御祝有土佐衛士等より獻餅是代々今日獻シ來ル家也又丹波國野瀬ヨリ折數合獻之是代々獻シ來ルニ依テ也凡玄猪ノ爲御祝親王攝家清家諸家中ニ賜御鎰也近習伺候ノ面々ハ於　御前賜之外樣ノ面々ハ長橋ノ於奏者所以使者受之也此餅位階ニヨリテ替リアリ五位者赤一白一也四品以上ハ黑一白一也是ヲ大奉書ニ包ミ内ニ紅葉銀杏垣衣等ヲ入テ包賜之（攝陽群談に能勢郡木代村門太輔より献上するよし委載）公事根源に既に此事を載せ給へり併見るへし瑜案するに朝餉の間は清涼殿に在り凡正月元日二日三日十五日毎月朔節句年中以上二十度てゝにて御膳を供し奉るよし故實拾要集に委く見えたり

十一月

問て云此月とうしと申事の侍るは何の故にて侍るそや

答白虎通に周の代王は十一月を正月とす是を暦家に天正月といふ殷の代には十二月を正月とす地正月とす夏の代には今の正月を正月とす人の正月といへり十一月は一陽はしめて生する月なれは冬至の日より日かけ長くなると申なり陰陽道の暦數を考て十一月に奉る也朔旦冬至と申は十一月朔日の冬至に二十年に一度つゝまはるを申なりいとめてたき祥瑞なれは

異國にも吾朝にも御門賀辭をうけ給ふなりまことにめてたき事にて侍るなり

考證　白虎通三正章云十三月之時萬物始達孚甲而出皆黑人得加功力故夏爲人正色尙黑也十二月之時萬物始芽而白々者陰氣故殷爲地正色尙白也十一月之時陽氣始養根核故黃泉之下萬物皆赤々者正陽之氣也故周爲天正色尙赤也刑昺論語疏曰建子之月爲正者謂之天統以天之陽氣始生爲百物得陽氣微稍動變故爲天統建丑之月爲統者以其物已吐芽不爲天氣始動物又未出不得爲人所施功唯在地中含養萌牙故爲地統建寅之月爲統者以人物出於地人功須修理故謂之人統々者本也謂天地人之本然王者必以此三月爲正者以其此月物生微細又是歲之始生王者繼天理物含養微細又取其歲初爲正朔之始既天地人之三者所繼不同故各正朔不相襲也事文前集二十引孝經說云斗指子爲冬至々有三義一者陰極之至二者陽氣始至三者日行南至故謂之至又詳于瑯耶代醉卷二　異國にもわか朝にも云々　蔡邕獨斷云冬至陽氣起君道長故賀夏至陰氣起君道衰故不賀

和漢三才圖會云古者有冬至賀且祝在十一月朔聖武天皇神龜二年帝始受冬至賀と見えたり何れの書によれるにか猶可考

問て云此月御火燒とて神火をたきて奉るは何の故はへるにや

答此事たしかにおこりとては侍らしたゝし神樂とて諸神の前にて冬必し侍る事の侍る是等をやはしめとは申へき大かた神樂と申は天照太神の岩戸をさして籠り給ひし時諸神の祈申されけるに天鈿女命まさきのかつらをかさしとしひかけのかつらを手すきにしてうたひ舞庭火をたきしかは天照太神あまの岩戸を出給ひしより諸神此事を好み給ふ今も內侍所にて行はるゝ神樂の事にて侍るなり官人の庭火をは燒なり諸卿近衛のめし人なと所作の人よりあひ庭火なとゝて歌うたふもたよりありて覺るはいかに

考證　神代上卷云是時天照太神驚動以梭傷身由此發慍乃入于天石窟閉磐戶而幽居焉故六合之內常闇而不知晝夜之相代于時八十萬神會合於天安河邊計其可禱之方故思兼神深謀遠慮遂聚常世之長鳴鳥使互長鳴亦以手力雄神立磐

戸之側ニ而中臣連遠祖天兒屋命忌部遠祖太玉命掘ニ天香山之五百箇眞坂樹ニ而上枝懸ニ八坂瓊之五百箇御統ニ中枝懸ニ八咫鏡ニ（一云眞經津鏡）下枝懸ニ青和幣ニ（和幣此云尼枳底）白和幣相與致祈禱焉又猿女君遠祖天鈿命則手持ニ茅纒之矟ニ立ニ於天窟戸之前ニ巧作俳優亦以ニ天香山之眞坂樹ニ爲レ鬘以レ蘿ニ（蘿此云比舸礙）爲ニ手繦ニ（手繦此云多須枳）而火處燒覆槽置ニ（覆槽此云于該）顯神明之憑談ニ（顯神明之憑談此云歌牟鵝可梨）是時天照大神聞之而曰吾比閉ニ居石窟ニ謂當豐葦原中國必爲長夜云何天鈿女命嘘ニ樂如此者乎乃以ニ御手ニ細開ニ磐戸ニ窺之時手力雄神則奉レ承天照太神之手引而奉出（下略）玉木正英神代卷藻鹽草ニ云眞坂木ヲ爲鬘トハ賢木枝ヲ髫ニシテ頭上ニ夾ム也云々延喜太神宮儀式帳ニ眞佐岐蔓アリ神樂歌ニハ山蔓トモイヘリ今猶此比モ祭祀ニ用ヒ來レリ（琦曰コレハ眞坂樹トハコト物ノヨミ辨アリキ）蘿ヲ爲手繦ト蘿ハ深山幽谷清潔ノ地ニ生ス其日蔭ニ生スルヲ以テ名トス舊事記ニハ天日蘿ト書古事記ニハ天之日影トカケリ古語拾遺ニ蘿葛ト書リ古歌ニ奥山ノ日蔭ノ蔓カケテナトツレナキ人ニナヒキ初ケム一名手向草一名垂リ苔俗名狐ノ尾カヒ又猿緖ガセト云其色青緑茸ニシテ蔓延ス靱強ニシテ物ヲ結ニ堪タリ依テ此ヲ結テ肩ニ掛ケテ手繦トシ給ヘルナリ手繦ハ手助ナリ（下略）內侍所御神樂　故實拾要集（十二月）是撰吉日被行也　御神樂參向人々　本末拍子付歌（持明院、庭田、綾小路、東園、五辻、此人々也）和琴（四辻）笛（樂人）所作陪從（樂人）人長（樂人）近衛百人　行事所（出納）修理職

右御神樂之時奉行之人々也　同調進物方　神供（大格式）幣紙（圖書寮）幣串（出納）脂燭（御藏）三尋木（南座）疊筵道座（掃部寮）松明（主殿寮）幔（同寮）右御神樂調進物也　天子出御有御神拜但出御之次第如節會也　凡內侍所の御神樂を行るゝには申刻はかりより御催有之鷄鳴のころに終るといへり

十二月

問て云節分の豆うつことは何の故にてか侍るにや年越と世俗にいひならはしてよひは惡鬼の夜行するゆゑに禁中にもむかしは陰陽寮さいもむをよみて上卿已下これを追ふ御所にともし火を多くともして四目有ておそろしけなる面をして手にたてほこをもて內裏の四門をまはるなりまた殿上人ともは御殿の

かたに立て桃の弓葦の矢にていはらふなり是等をかたどりて豆うちて鬼をはらふことのはしまれるにや此内裡にて鬼おはれしことは慶雲二年十二月百姓多く疫癘になやまされしゆゑにはしめられたるよし承りおよひし

考證　惡鬼の夜行する故に　下學集に百鬼夜行注に節分夜也とあれは古くより云しことなり　禁中にもむかしは云々　延喜式方相首親王以下隨次入中庭陰陽寮儺祭畢云々と有貞丈雜記に上卿といふは大臣大納言の内何れにても禁中の公事の奉行を勤る人をさして上卿と云なり（公事とは除目叙位の外政事を行はるゝを云）と見え標記に多々良問答を引て云上卿とは大臣奉行の公事は大臣を上卿と云大中納言奉行の公事をは大中納言を上卿と云その日の上首を上卿と云史記周本紀云王以上卿禮管仲云々といへり　御所にともしひを多く云々　月令季冬命有司大儺旁磔注此月有厲鬼將隨強陰出害人故磔於四方之門また周禮夏官方相氏掌蒙熊皮黃金四目玄衣朱裳執戈揚盾方相（猶言放相如今魌頭是也）帥（與率同）百隸（隸同）而時難（儺同）以索室歐疫（以索室中疫鬼而驅逐之也）といへり是を行ふときもろてしには侲子と云もの有後漢鄧后紀註に侲之言善也善幼童子也漢大儺選中黃門子弟年十歲以上十三以下百三十人爲赤幘皂衣執大鞀また後漢禮儀志云先儺一日謂之逐疫中黃門倡侲子和曰甲作食㱧胇胃食虎雄伯食魅騰簡食不祥攬諸食咎伯奇食夢強梁祖明共食磔死寄生委隨食觀錯斷食巨窮奇騰根共食蠱凡使十二神惡凶掠女軀拉女幹解女肉抽女肺腸女不急去後者爲糧と見え唐志に太卜季冬帥侲子堂贈大儺天子六隊太子二隊方相氏右執盾導之唱十二神名以逐惡鬼鼓吹署令帥鼓角以助侲子之唱といへり此餘通志略廣東新語月令廣義東京夢華錄等に其儀を詳にせり今一々發せす　また上人ともは云々　貞丈雜記に云ふ殿上人とは四位五位六位以下は昇殿はならぬことなれとも昇殿をゆるされて昇殿する人々をは殿上人と云なり昇殿ゆるされさる人は白砂に居るなり　後漢書注引漢舊儀曰方相帥百隸及童女以桃弧棘矢土鼓々且射之以赤丸五穀播灑之　延喜式云方相首云々陰陽寮儺祭畢親王巳下執桃弓葦箭桃杖儺出宮城四門（東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門）　年中行事歌合　内大臣師基　今はた

たひとよになりてわしの矢のいるかてとくにとしそくれぬると詠給ひ公事根源にも殿上人とも御殿のかたに立て桃の弓葦の矢にてゐると遊はしたれはこゝによもきのやと有は轉寫の誤なるへし
是をかたとりて豆打て鬼をはらふさ
瑜案するに是まさしく上に引たる漢舊儀に云る以赤丸五穀播灑之といひ又類書纂要に吳越風俗歳除互擊炒豆交納之日瘟且祝曰湊投といひ廣東新語に小除祀竈以花豆灑屋といひ太平御覽一八百四十豆部龍魚河圖を引て歳暮夕四更取二十豆子二十七麻子家人頭髮少合麻豆著井中咒勑井使其家竟年不遭傷寒辟五溫鬼といひたるなとに事物紀原なゝ漢人嫁娶者下車則撒穀豆以禳三殺といへると東京夢華錄に娶婦有陰陽人執斗內盛穀豆錢菓草節等咒祝望門而撒小兒輩爭拾之謂之撒穀豆俗云厭青羊等殺神也と有なとをさへとり合たる事なるへしまた壒嚢抄には豆をうつことを載せて云く鞍馬ノ奥僧正カ谷御菩薩池ノ邊ニ方丈ノ穴アリ藍婆惣王トテ二頭ノ鬼出テ都ニ入ヘキ由毘沙門ノ告アリシヲ鞍馬寺ノ別當宇多ノ帝ニ奏シケレハ法宗ニ仰ラレテ四十九宗ノ物ヲトリテ方丈ノ穴ヲ封シ三石三斗ノ大豆ヲ煎テ鬼ノ目ヲ打ツフストいへりと俗傳の浮說とるにたらぬことゝなるへし

此內裏にて鬼をおはれしてとは慶雲二年云々
續日本紀第三曰文武天皇慶雲三年十二月己卯有勅令天下脫腰裳一著白袴是年諸國疫疾百姓多死始作大儺　類聚國史十四文武天皇慶雲三年是年天下諸國疫々百姓多死始作土牛大儺　鴨長明四季物語十二月なやらふことは唐土にも侍れとわきて我御國にはかみたけのすへらきのむとせの春よりものし給ふ御事にていみしき御ためしなりと見えたれと此事神武紀に見えされは徵とはなしかたし
因に云胡文煥事物紀原云禮緯曰高陽有三子生而亡去爲疫鬼二居江水中爲瘧一居人宮室區隅中善驚小兒於是以正歲十二月命祠官時儺以索室中而驅疫鬼軒轅本紀曰東海渡索山有神荼鬱壘之神以禦凶鬼爲民除害因制驅儺之神子游篇問於雄黃曰今人逐疫出魁擊鼓呼噪何也雄黃曰黔首多疾黃帝氏立巫咸使黔首鳴鼓振鐸以動心勞形發陰陽之氣鼓擊呼嗥遂以出魁黔首不知以爲樂鬼也或記以爲驅　按周禮有六

儺漢議有侲子要之雖原始於黃帝而大抵周之舊制也周官歳終命方相氏率百隸索室驅疫以逐之則驅儺之始也　事文類聚載疫鬼之事高陽作顓頊氏二則作一則爲瘧下有鬼一則居若水爲魍魎蜮鬼十一字小兒下有爲小鬼三字驅疫鬼下有馬字而無軒轅本記四字　また荊楚歳時記玄中記を引て甚略せり此事本文にさしてあつからぬことなれともそこしにての起源を知らしむるか爲にちなみにかきつく

問て云十二月にはちたゝきのありき侍るは何のいはれにや

答此事さらに根源たしかに申かたし延喜の御門の皇子のかたはましくけるか鉢たゝきの先祖となり給ひし其孝養の爲とかや申いとおぼつかなし蟬丸をめくらの元祖とし延喜御門の御子と申侍るもたしかならぬことなり是をもてこれをおもふにその證跡侍らぬことなれは我等はいかてさため侍るへき

考證　閑田耕筆ニ云鉢たゝきといふもの四條坊門油小路極樂寺より出住僧は法衣を着袈裟をかけて淨家の和尚のさまなり是は一薦とそ其下は常の半剃たる頭にて法衣の上はかりとみゆるものをきるいとあやしきすかたなり然るに貞享頃の板本にて色々の人品をゑかきたるものには素襖のうへに鷹の羽の紋付たるを着たる樣なり其後よく知る人の話をきゝしに衣のうへのことき物にわらためしは元祿以後なり彼鷹の羽の紋も定れる事萬歳の橘の紋の如しとなむ是は僧形相應にして改たるは異樣なり

瑜案するに閑田耕筆にいふ所も是のみにて根源をいはす外に所見も侍らねは起源はたしかならぬことなるへしなほ他日の考をまつのみ　蟬丸をめくらの元祖とし云々此事百人一首像讃抄（延寶訓本菱川師宣畫）に三光院（西三條實枝公天正年間人）の御說をのせて云世人蟬丸を盲人といふは誤れり後撰集雜一あふ坂の關に庵室を作りて住けるに行かふ人を見てと有盲人ならは見る事あるへからす云々又後水尾院御講釋聞書に云三光院說に盲者と云は僻說也とも見えて妄說論なかるへし

問て云節分にしようのもちひとてくひ侍るは何の故にや

答此事さらに知りかたしまた五條天神に侍るよし申
彼天神いつよりあまくたりましますとも見えす定
めて緣起なと侍るへし國史にも見えす儀式にものせ
ぬ神なれはさらに知りかたし此もちひをくへは物に
勝といふくのう侍るよし申傳へたるはかりなり
考證　北村季吟增山の井に云五條天神は少彦名命
なり藥草をつかさとる神とかや世にえやみの事を
司とる神とかや世にえやみはやるときはかさのを
さ劔をかくる事も有神なりえやみのことをつかさ
とる神なれはにや節分にまうてゝをけらをもとめ
てたゝくてとも侍り　神代卷上云大己貴命與ニ少
彦名命一戮レ力一レ心經ニ營天下一復爲ニ顯見蒼生及畜
產一則定ニ其療レ病之方一又爲レ攘ニ鳥獸昆虫之災異一
則定ニ其禁厭之法一是以百姓至レ今咸蒙ニ恩賴一
とある所に玉木正英カ注ニ平安五條ノ天神ハ少彦
名命を祭レリ今猶季冬ノ節分ニ朮ノ供スルノ祭還
レリとのみにていつより祭りしといふよしをあけ
されは詳ならぬことゝ見えたり
瑞案するにしようの餅の事もまた詳ならず鴨の長
明四季物語十二月に云つひなの夜はをけらのもちひ
つくみの鳥なと燒て奉り御かれいひの御事はりに
奉れは是を物の氣えやみやらひぬへき本文侍るな
むと見えたるをけらもちひの事にや
問て云節分にをけらをたくは何の故にや
答風氣をさる藥にて侍るうへ餘薰あしき故に疫病の
かみの夜行する夜なれは是をたきておそれしめむか
ためにて侍るにや
考證　本草綱目に朮に赤白蒼の三種ありすへて和
名をけら也萬葉にはうけらと有李時珍カ曰張仲景
辟ニ一切惡氣一用ニ赤朮一同ニ豬蹄甲一燒レ烟陶隱居亦
言朮能除ニ惡氣一弭ニ災沴一故今病レ疫及歲旦人家往
往燒ニ蒼朮一以辟ニ邪氣一類編載越民高氏妻病恍惚譫語亡夫之鬼憑レ之其家燒ニ蒼朮烟一鬼遽
求レ去ホと有疫邪なとも、ろくのうある事しろへし
右世諺問答は後成恩寺禪閤のかゝしめ給はむとてみ
とりのかみにかうはしきふてのあとを殘したまふと
いへともわつかむ月のはしめより若水のみなもとに
至りて八箇條をしるし給ひつひに其功終らさりしか
はもくろくのみ殘りて詞はなしてゝに桃花の林にあ
そひて累葉のちりをつく一人の壷はへりしかりとい
へとも雪を聚る枝をしらすいはむやすたれたるを

こしかけたるをおきぬいてふるきをたつねあたらしきを知るはまさしく先達のわさなれとかつうは班彪か史記を班虎か書また紫式部か源氏もの語に大貳三位かうち十帖をくはへはへりしてとのあるやうに心經とやらむ致經とやらむ申もの語さうしにて見給ひしことのおもひ出られてかの目錄のむねにまかせて正月七日のあつものより十二月晦日の事にいたるまてそこはかもなきあまのもくつをかきあつめてしつかたく火のほのかに世のことわさをあらはさむとすることとしかり

天文第十三暦中春下旬日

正二位行權大納言藤原兼冬

年齡十六歲撰之

愚竹馬昔作此抄今遮眼前頗不思議之詞等有之自嘲不少堅可禁外見者也

御判

生年二十歲

天文二十年仰傳從兼和書寫之

大井河和歌考證

全

大井河行幸和歌考證

いたくあかりたる世にはいかなりけんむかし延暦のいにしへ都を今の京にうつしたまひてより大堰にみゆきしたまふことたえす國史に見えたりしかはあれとそのきこえたかきは亭子廼帝のおはしましゝをりになん此大御時やてとにものゝこゝろをしろしめしたりけんそのをりに名ある人々をめさせたまひておの〱こゝのつの歌を奉らしめたまひてさて序は貫之のぬしなんつかうまつりけるその序は今の世にものこりてあまのたくなはくりかへししのふ草のしのひあへれと歌はいつの世にかあらしの木の葉ちりうせて行水のあともとゝめすなりぬるはくちをしきわさなりとて撰集あるはこれかれの家の集なとによりてかけたるをおきないあやまれるをたゝしそのいにしへにやゝかへしゝ人は井上文雄となんいふこのぬしとしいとわかけれはかゝることおほやけにものせんもいときゝうしろやすからす思へとかのもろこしの王仲淹はとし十五にて人の師たりとかいへはもののわさはよはひもてさたむへきことかはそもそもこの書よかゝるわかう人のわさにては似つかはしからずおきな人のわさなとやいふへからんたとへおんなおきなゝりともなま〱ならんきはにはくちおかすましきわかうとにてそかくいへるは文政かのえたつにあたれるとし正月はしめになん

岸本由豆流誌

天翁處士書

大井河行幸和歌考證

提要

大井河行幸和歌は（眞淵云今上に行幸と云上皇には御幸といふなりされど三代實錄まではそのわかち見えず西宮抄にはわけて書りそのころよりの事にや云々といはれしがごとく類聚國史の標目にも天皇行幸太上天皇行幸とありて行幸御幸とわけてかゝされば貫之のぬしのころまではそのわかちなかりし事と見えたりされは實は法皇御幸なれど貫之のぬしの時代にしたがひて行幸とはしるせり）いつの比にかほろびうせたりけん今の世には序のみつたはれりそは貫之のぬしの作にてふるくは古今著聞集（卷十四）にのれり（師の藏本著聞集異本に此行幸の一條をのせざる本ありそをよしとは思へど流布の本にのせたればしばらくそれにしたがふのみ）又扶桑拾葉集（卷二）土佐日記附注にものせたりこれらかたみにいさゝかのたがひありいま予が藏本萩原宗固自筆の校本又古寫本一本をもて校合せりそも〳〵この御幸の事は日本紀略古今集大鏡（卷八）大和物語古今顯昭注などにも見えたり猶この外にもありぬべけれどこと〳〵くあぐるにいとまなしこれらの書に見えたる所まち〳〵にてあるは天皇行幸とし法皇御幸としあるは昌泰元年とし延喜七年とし延長四年とすれど實は延喜七年九月十日にて（中古より皆九月十一日なりといへどあやまりなり下にいふを見てしるへし）寛平法皇の御幸也天皇行幸はよく日九月十一日なりさるを眞淵翁の百人一首うひ學びの中なる大井河行幸御幸の考に諸書を引て貫之のぬしの序をかゝれしは延喜七年九月十一日にて天皇行幸の折なるよし定められてさて云古今集に法皇西河におはしましたりける日つる洲に立りといふことを題にて云々又法皇西川におはしましたりける日猿山の峽にさけぶといふことを題にて云々各の諸書に（文雄云こゝに諸書とあるは是則集賴基集拾遺集なとなり）この題詠ありしは行幸のたびとせるにひとり古今にのみ法皇とあるは誤なるべしそれが中に日本紀略に延喜七年九月十一日大井川行幸とありこれ今日はもはら行幸なりしかれば古今に今上とか天皇とか有つらんを例の後人意得たがひて法皇と書かへたるなるべしといはれつるぞなか

なかに誤ならむ（拾遺集是則集類基集などに行幸とありとてもこれらの書によりて撰集のはしめなる古今を誤とはしがたかるべし其上かみの分注にもいへるが如く行幸御幸とわかちてかゝざりし世なれば古今によりたり共これらの集をも又誤とは云がたし）かくいふ證は古今に法皇とありて躬恒集にも亭子の帝の大ゐにおはしませる時に九の題の歌秋水にうかべり云々とあるうへに此書の小序にも重陽後朝太上法皇幸大堰河戸名瀬以眺望又今上幸河邊云々とありて序にもあはれわが君の御代なる月のこゝぬかときのふ云て云々とあり九月十一日の行幸のをりならば一昨日とてそいはめ重陽後朝または九日ときのふいひてなどはかくべからずされば此の御幸は九月十日なる事論をまたすしかも日本紀略延喜七年の條に九月十日甲申法皇召二文人一賦二眺望九詠之詩一云々十一日乙酉天皇幸二大堰一云々とありて顕昭古今注に清輔云此御幸和二貫之假名序一者延喜七年九月十日也法皇主上相共臨幸云々件九詠和歌に有二忠岑假名序一兩人之條不審若撰作歟云々（此文うひ學びにも引たれどいたくたがへり今古寫本に付てあらたむ）ともあれば日本紀略に法皇御幸の事はなけれど序中にのせたる九首の題を顕昭古今注に九詠とあれば紀略に九詠とあるもこの九首題のことなるべししかも顕昭注にも九月十日也とあるを見ても思ふべし又紀略に九詠之詩とありて歌とあらざればかたぶかるゝに似たれどふるく萬葉にも歌を和詩といひ長歌を賦ともあれば詩とありても歌の事とこそおもはるれそのうへこの比はもはら何ごとをも漢籍めかしくかける世なれば歌の事をも詩とはかけるなるべし又九詠の詩と歌とを奉りしにもあるべし

上にもいへるがごとくこの御幸は延喜七年なるをそのをりによめる貫之のあしたづのたてる河べを吹風によせてかへらぬ浪かとぞ見る又躬恒のわびしらにましらな鳴そあし引の山のかひあるけふにやはあらぬ云々の歌どもの延喜五年に撰進せる古今集にいれるはいかにぞやとおもはるれとこは撰進せし後にくはへいれられたるなるべし亭子院歌合は延喜十三年泉大將定國公の四十賀は躬恒集を考ふるに延喜十四年なるをこれらみな古今集にいれられたるを見てもおもふべし

はじめにもしるせるがごとくこの書の序はこれかれに見えたれど歌は今の世につたはらねば撰集あるは家集などにつきてさがしもとむるに四十八首ばかりは見いでたり（この四十八首の中躬恒集に十九首見えたりそは九首題をおの〳〵二首づゝよみてその中旅歴の題のみ三首あなれば十九首とはなれりこれらをのこらず奉りしものにはあらざるべしこは後世のかへ歌などいふ者にて全く奉りしは九首なるべし）小序に六十三首とあれば猶あまたたらざれどもものに見えねばいかゞはせんこのをりの作者は顯昭注に貫之躬恒忠岑是則伊衡頼基等歟とあれどさては六十三首のかずにあはず貞信公をいれて七人とする時はおのおの九首題の歌を奉りて六十三首なるべしこもてこころみにいふのみそも〳〵かうやうなるものゝ注さくなどせんは言の葉のしげき林にわけいりて擧のらうをつみたる人のうへにてこそあれそをはたちにもあまらぬ身の人なみ〳〵に物せんもいとをこがましきわざなれどこはたゞ我どちのかたらひ草にもなさんとてふみ見るまに〳〵かいつけおきしをすゝめたまふ人のあればかくはものせしなり猶月のかつらのさやかならずをぐらの山のをぐらき事のみおほかめれどをぶねさす棹のみじかき才もて大ゐの河の深さこころをさぐり得べけんやとてそのまゝに筆をおきつるはみ世の名を文政といひてもやゝ三年のはるちかきしはすのつごもりになんかくいふは田安の殿人井上文雄

大井河行幸和歌序

重陽後朝　太上法皇幸大堰河戸名瀬以眺望又　今上幸河邊即有　勅喚漁渚好事者各獻秋思和語六十三首應製 並序

内膳典膳正六位上紀朝臣貫之上

文雄云此小序はかたふかるゝふしも見ゆれど宗固本にのせたれはたゞ其まゝにしるしおきつ

戸無瀬

寛平菊合　　惠慶

大ゐ河かはへの紅葉ちらぬまはさなせのきしになかゐしぬへし

好事者

孟子萬章上　孟子曰否不レ然也好事者爲レ之也云云　漢書王褒傳云使ニ褒作ニ中和樂職宣布詩一選ニ好事者一令下依鹿鳴之聲習而歌上之云々同書蔡義傳にも見えたり

あはれ我がきみの御代なか月のこゝぬかは昨日いひてのこれるきくかこしみたまはむ　またくれ●ぬべきあきを●をしみ給はんとて月のかつらのこなたはるの梅津より御ふねよそひてわたし守をめしてゆふ月夜をぐらの山のほとりゆく水の

あはれ

古語拾遺云當ニ此時一上天初晴衆倶相見面皆明白伸レ手歌舞相共稱曰阿波禮阿那於茂志呂阿那多能志云々　日本紀垂仁紀云歌曰烏波利珥多陀珥霧伽幣流比苫菟麻菟阿波例比等菟麻比苫珥阿利勢麼岐農岐勢摩之陽多知波開摩之陽云々

萬葉四　　大伴坂上郎女

早河之湍爾居鳥之縁乎奈彌念而有師吾兒羽裳㦂怜

宣長云阿波禮はもと歎息の辭にて何事にても心にふかくおもふ事をいひて上にても下にても歎する詞なり云々

月のかつら

萬葉四　　湯原王

目ニハ見而手ニハ不所取月内之楓如妹乎奈何責

初學記卷之一引ニ虞喜安天論一云俗傳月中仙人桂樹今視ニ其初生一見ニ仙人之足漸已成形桂樹後生ニ云々

猶西陽雜俎卷之一詞林采葉抄等にも見えたり
山城名勝志卷十云或人云風土記云月讀尊受ニ天照大神勅一降ニ于豐葦原中國一到ニ于保食神許一時有ニ一湯津桂樹一月讀尊乃倚ニ其樹一立之其樹所レ在今號ニ桂里ニ云々

梅津

本朝無題詩卷六　　法性寺入道殿下
桂水梅津尤有レ意花如ニ白浪一月如レ氷云々

拾遺雜下　　よみ人しらす
名のみしてなれるも見えす梅津河ゐせきの水ももれはなりけり

夕月夜小倉山

古今秋下　　つらゆき
ゆふ月よをくらのやまになく鹿の聲のうちにや秋はくるらん

大ゐの河へに行幸（御イ附）したまへればひさかたのそらにはたなびける雲もなくみゆきをまち（さふらひ著）流るゝ水（は著）。そこに（ナシ著）はにてれるちりなくておほむ心にぞかなへるとみことのりしておほせたまふこととは秋の水にうかびては

大ゐ河

躬恒集
さゝむれとゝめかねつも大ゐ河ゐせきをこえて行水のこと

ながるゝ木葉とあやまたれ秋の山を見れば

なかるゝ木葉とあやまたれ

土佐日記云皆人々の舟出これをみれは春の海にあきの木葉しもちれるやうにそ有ける云々
格致鏡原引ニ世本一云古者觀ニ落葉一以作レ舟云々
おる人（ひま著）なき錦とおもほえてもみぢの葉のあらしに散て

おる人なきにしき

六帖第六　　つらゆき
から衣立田の山のもみちははたものもなきにしきなりけり

懷風藻七言述志　　大津皇子
天紙風筆書ニ雲鶴一山機霜杼織ニ葉錦一云々
（ナシ）くもらぬ雨ときこえ菊の花の岸にのこれるをそらなるほしとおどろき霜（櫻氏云霜は朝の誤）のつる河べにたちてくものをる

かとうたがはれ

くもらぬ雨

新古今秋下　曾根好忠

入日さすさほの山へのはゝそ原くもらぬ雨と木の葉ふりつゝ

そらなるほし

古今秋下　としゆき朝臣

ひさかたの雲のうへにて見るきくは天津ほしとそおやまたれける

夕の猿やまの峽になきてひさのなみだをおとし

夕の猿山の峽に鳴て

藝文類聚卷九十五引二宜都山川記一云峽中猿鳴至淸諸山谷傳二其響一冷々不レ絶行者歌レ之曰巴東三峽猿鳴悲猿鳴三聲淚霑レ衣

たびのかりくもぢにまどひて玉づさと見えおそぶかもめ水にすみて人になれたり入江のまついくよへぬらむといふことをぞよませ給ふわれらみじかきこゝろのこのもかのもにまどひつたなきことの葉ふくか（附ナシ）せのそらに（より附）みだれつゝ草の葉の露とゝもにうれしきなみだおち岩浪とゝもによろこぼしきこゝろぞたちかへ（かイ）るもして（著ナシイ附）の言のはよのすえまでのこりいまをむかしにくらべて後（ナシイ）のけふをきかんひとあまのたくなはくりかへししのぶの草のしのばざらめや

たびの鴈

後撰秋中　よみ人しらす

ゆきかへりてゝもかしてもたびなれやくるあきごとにかりくとなく

玉つさとみえ

後拾遺秋上　藤原長能

わきもこかかけてまつらん玉つさをかきつらねたる初かりの聲

新拾遺秋下　西行上人

鳥羽にかく玉つさの心ちしてかり鳴わたるゆふやみの空

玉つさ

萬葉二

（上翠）黄葉乃過而伊去等玉梓乃使之言者梓弓云々

眞淵云玉つさてふことは心得す強ておもふに玉は

はむることはつは助の字佐は章の字の音にや云々
猶契沖雜記玉かつま等にもみえたり

鷗

和名鈔云鷗唐韻云和名加毛米水鳥也云々

われら

古今長歌　伊勢

涙のいろのくれなゐはわれらかなかのしくれにて
云々

兼盛集

ゑひにける我らはしらすあやもなしたかかつけた
るつみにかあるらん

このもかのも

古今大歌所

つくはねのこのもかのもにかけはあれと君かみか
けにますかけはなし

露とゝもにうれしさ涙おち

山家集上

暮ぬめりけふまちつけてたなはたはうれしきにも
や露てはるらむ

よろこはしさ

伊勢物語云よろこほひておもひけらしとそいひを
りける云々

あまのたくなは

神代紀云一書云以二千尋栲繩一結爲二百八十紐一云々
後拾遺集序云これらの集に入たるはあまのたくな
はくりかへし云々
眞淵云たくなはは栲の糸してなへる繩を云也云々

しのふの卿

和名抄云垣衣本艸云一名烏韭和名之乃布久佐

○古今集二首一首は躬恒集にあれはこゝにはふけり

法皇西河におはしましたりける日つる洲にたてりと
いふことを題にてよませたまひける

雜上　貫之

あしたづのたてる河邊を吹かせによせてかへらぬ浪
かとぞ見る

よせてかへらぬ浪

續後撰春下　太上天皇

むらさきのふち江のきしの松かえによせてかへら
ぬ浪そかゝれる

○拾遺集二首（一首はおくに出せり）
延喜の御時大ゐに行幸ありて人々にうたよませさせ
給ひけるに
（雑上）大ゐ河かはべのまつにこととはむかゝるみゆきやあ
りしむかしを（もイ）
○讀古今集二首（一首ハ是則集にあれはここにはふけり）
亭子院西河におはしましたりける日江松老と云こと
を題にてよみはべりける　參議伊衡
（雑中）江にふかくとしは經にけるまつなれどかゝるみゆき
はけふやみるらむ
法皇
一代要記云宇多天皇諱定省號亭子光孝第四子母
皇大后班子女王貞觀九年丁亥五月五日誕生仁和三
年丁未八月二十六日丁卯爲皇太子即受禪十一月
十七日丙戌即位于大極殿治十年寛平九年七月三
日讓位於皇太子即爲太上天皇昌泰二年十月二
十四日出家法諱金剛覺承平元年七月十九日崩於仁
和寺年六十五云々
西河

古今爲家抄云西河とは大ゐ河をいふ也東河とは白
河を云也
讀古今夏　俊成
なるたきやにしの河せにみそきせむ岩こす浪もあ
きやちかきと
○躬恒家集十九首
亭子の帝の大ゐにおはしませる時に（行幸せさせ給へる一本）（ナシ一本）九の（の一本）題のうた秋（ナシ一本）
（の一本）水にうかへり
（紅一本）ての川に木葉とうきてさしかへりみ（ろ一本）は今日よりぞみ
なれそめぬる
秋の浪いたくなたちそおもほえすうきゝにのりて行
人のため
木葉とうきて
夫木卅二　權律師教香
水もせに紅葉のふねをむやひつゝ錦はにかけて風
そ濁ゆく
李商隱詩集云萬里風波一葉舟
みなれそめぬる
源氏寄木卷

うちわたしよにゆるしなきせき河をみなれそめけんなこそをしけれ

うき木

和名鈔云査唐韻云査（字亦作楂和名宇岐々）水中浮木也云々

神代紀云一書云以二無目堅間一爲二浮木一以二細繩一繫二著火々出見尊一而沈レ之云々

博物志卷十云舊說云天河與レ海通近世有レ人居二海渚一者年々八月有二浮槎一去來不レ失レ期人有二奇志一立二飛閣於査上一多齎レ糧乘レ槎而去十餘日中猶觀二星月日辰一自後芒々忽々亦不レ覺二晝夜一去十餘日奄至二一處一有二城郭狀一屋舍甚嚴遙望二宮中一多二織婦一見二一丈夫牽レ牛渚次飮レ之牽レ牛人乃驚問曰何由至レ此此人具說二來意一幷問此是何處答曰君還至二蜀郡一訪二嚴君平一則知レ之竟不レ上レ岸因還如レ期後至レ蜀問二君平一曰某年月日有二客星一犯二牽牛宿一計二年月一正是此人到二天河一時也云々

秋の山にのそむ

けふなれはをくらの山のもみち葉はそこさへ（も一本）てりてみえわたるらむ

秋きりのはるゝまにく見わたせは山のにしきはおりはてにけり

山の紅葉　　せきを

古今秋下

霜のたて露のぬきこそよはからし山の紅葉のおれはかつちる

紅葉おつ

水（庭イ）のおものからくれなゐになるまで（ま一本）に秋にあひかね（あへす）（も一本）

むつるもみちば（一本）（か一本）

風にちるきしのもみちば。（一本六帖）のちつひに（は六）たきの水（池イ本）こそおとしはてつれ

からくれなゐ

古今秋下　なりひら朝臣

千早ふる神代もきかすたつたかはからくれなゐに水くゝるとは

宣長云萬葉集の歌に紅をからあゐともよめりそもそもくれなゐといふは此物もと吳の國よりわたりまうてきたるよしにて吳の藍といふをつゝめたる名なるをそは韓國よりつたへつる故にからあゐともいへる也といへる說のごとし但しからといふは

西の方の國々のなへてのなゝればこれは呉の國を
さしていへるにて呉の藍といふと同じ事にもあるべし

（のこりの一本）
菊のこれり
きくの花けふ（ナら）をまつとてきのふおきし露さへきえず（て）
（一本　る一本）
今盛なり
君がためこゝろもしるくはつしものおきて殘せる菊にぞ有ける

鶴洲にたてり
（たつ一本）
つるのゐるかたにぞ有ける白妙のゐまのぬれぎぬはすゞと見つるは
うらわきて風や吹らむおきつ浪おなしところを立か（に一本）へりつゝ

源氏横笛卷
よをわかれ入なん道はおくるともおなしところをきみもたつねよ（イナニ）

旅のかりゆく
（續千載秋上）
故郷をおもひやりつゝ（おき續千載）ゆく（くる一本）雁のたびのこゝろは空にそあるらし
としことにともひきつらねくる雁をいく度きぬと問人ぞなき
（一本宗本　たひゆくかりイ）
秋ことにくる雁かねは白雲のたひ（道イ）の空にやよをつく（はつく）（さんイ）すらむ

源氏夕霧卷
やまかつのまかきをこめてたつきりもこゝろ空なる人はとゝめす

玉葉旅　　前中納言匡房
かきりあれは八重の山ちをへたつともこゝろはそらにかよふをしれ

故さとを
文雄云續千載集に屏風の歌にとて此歌有よりておもふに集中の歌皆二首づゝなるをこゝにのみ三首あれはてはかならずさくらんなる事しるし

拾遺春　　よみ人しらす
ふるさとのかすみとひわけゆくかりはたひの空にや春をくらさん

かもめなれたり
なれててしおきのかもめはつげなくに後のこゝろを

いかでしるらむ（りけん一本）
洲にをれはいさこのいろ（うちイ）にまがふ鳥てにとるばかり
なれにける哉（り一本）
なれてこしおきのかもめ
列子黄帝篇云海上之人有下好二漚鳥一者上每旦之二海上一從二漚鳥一游漚鳥之至者百數而不レ止其父曰吾聞漚鳥皆從レ汝游汝取來吾玩レ之明日之二海上一漚鳥舞而不レ下也云々　注云漚與鷗通用
猿かひになく（山のかひにさるなく一本）
六帖二古今誹諧歌
わびしらにましらな鳴そあし引のやまのかひあるけふにやはあらぬ
六帖一
こゝろあらばみたびてふたび（ふたゝび六といふ一本）鳴聲をいとゞわびたる物おもふ人に（物思ふ我一本）人にきかすな（きかせさらなん六）
翻譯名義集畜生篇云摩斯吒或云迦毛此云獼猴云々
やまのかひある
古今誹諧歌　よみ人しらす
なけきをはこりのみつみてあし引のやまのかひなく成ぬへらなり

同集誹諧歌　きのよしひと
秋のゝにつまなきしかのとしをへてなそ我戀のかひよとそなく
白氏文集卷十五云三聲猿後垂二鄕淚一一葉舟中載二病身一云々
江の松老たり（いりえ一本）
玉葉集雜三
深みどり入江のまつも年ふればかげさへともに老にけるかな（らしな一本）
老にける松ぞ知らむあゆ（ろ一本）河のみゆきもかくはあらず（さ）や有けむ（りけらしイ）
六帖第二　やまのへのおくら
玉つしま入江の小松おいにけりふるきみゆきの事やとはまし
此歌よくにたり
文維按あゆ河ある河ともに地名かとも思へとさる地名みあたらすまたこと所の地名をよむへくもあらすかにかくにあやまりならんもしありしよのなとにやそは延暦大同世々の行幸ありし所なれは也
又新選六帖第三に行家あさな〳〵日つきそなふる

かつらあゆあゆみをはてふ道もかしてしとあれば
桂河をあゆ河ともいふへきかてはたゞこゝろみに
いふのみなり猶可考

○是則家集九首

大ゐに行幸に秋の山 山秋山にのぞむ大井河の行幸に一本

續後拾遺集秋下

秋の色は千種ながらにかはれるをたれかをぐらのや
まといふらむ

かゝれるイ さやけき一本

千くさ

古今春下　藤原おきかせ

はるかすみ色の千くさに見えつるはたなびくやま
のはなのかけかも

後撰集雜三　なりひらあそん

大ゐ河うかべる舟のかゝり火にをくらの山は名の
みなりけり

かはれるを

按一本のかたまされりそはをくらの山に對すれば
なり

紅葉水にうかふ同行幸に 秋の水にうかふ大ゐ河の行幸に一本

いづかたかとまりなるらむやま風の拂ふ紅葉にふな
ぢまとひぬ

山ち一本 まとひして一本

紅葉水にうかぶ

一本紅葉の二字なきかたまされり

月清集下

つなで引竹の下道さりこめてふなちにまよふよと
の川岸

紅葉ちる大ゐの行幸に 大ゐ河にちる行幸あり一本

續後撰集冬

もみぢ葉のおちてながるゝ大井河せゞのしら波かけ
もとめなむ

ちり一本 とゞ一本

大ゐの行幸に菊の花のこれり 草イ菊きくの花のこりたる大ゐ河の行幸に一本

新古今集冬

かげさへにいまはときくのうつれるは浪のそこにも
霜や置らむ

にイ た一本 ろふ一本

一本うつろふのかたをよしとす

新古今集雜上　冷泉御歌

うつろふはこゝろのはかのあきなれは今はよそに
そきくの上の露

古今秋下　とものり

ひともとゝおもひしきくを大澤のいけのそこにも
たれかうゑけん

雁大ゐ河の行幸に（たびのかり一本）

いくさとのある道なれやあきことに雲ゐの旅のかり（千一本）（を一本）

のゆくらむ（な一本）

　雲ゐのたひ

新古今羇旅　御形宣旨

都にてこしちのそらをなかめつゝ雲ゐと云しはと

にきにけり

（江の松老たる一本）

雜大ゐの行幸に（河一本）

續古今集雜中

此河の入江の松は老にけりふるきみゆきの事やとは

まし

　ふるきみゆき

日本紀略云延暦十四年六月壬戌幸二大堰一云々

文雄按大ゐに行幸ありし事是らをやはしめとはせ

ん其後たゆる事なしてと〳〵くわくるにいとまあ

らす

鶴洲に立り同行幸に（一本ナシ）

新千載集雜上

山ちかみゐりゐるくもとまな鶴のたてる河邊を人や（も一本）

た集

みるらむ

　まなつる

倭姫世紀云葦原中在二稻一莖一生本波一基留爲旦末

千穂茂也彼稻白眞名鶴咋持廻作鳴支云々

堀川百首　紀伊

天の原雲ゐにあそふまなつるをふりさけみつゝよ

はひへぬへし

かもめ人になれたり同行幸に（ナシイ）

行ふねになるゝかもめはさす棹のかへす浪にそあや（れ一本）（に一本）（水こそ一本）

またれける

猿かひになく同行幸に（イナシ）

秋山のかひにみかへりなく猿をよふかく聞てそてそ（聲一本）

ぬれぬる

　みかへり鳴猿

本朝文粹卷二云胡雁一聲秋破二商客之夢一巴猿三叫

曉霑二行人之裳一

○賴基家集九首

大ゐ河の行幸にさま〳〵の題ともをよませ給ひしに（ナシ一本）（ナシ一本）

秋の一本宗本

水にうかふといふ題を

いろ〳〵にうつる（うける一本 かけるイ）心も（衣をイ）あきの水紅葉なかすと人や見
るらむ（ニナシ本にイ）
秋の山を
白露はわきておかじを秋山（秋の一本ナシ）のなどか（一本）紅葉の（も一本）うらこ（すく一本）が（やまの一本）
るらむ（ナシ一本）
うらこかる
拾遺冬　　よみ人しらず
神無月時雨しぬらしくすのはのうらこかる音にし
かも鳴なり
紅葉ちる
もみぢ葉のながれうづまく淵をこそ暮行秋のかたみ（とまりとはみ）
れ（一本宗本）
とはみめ
うつまく
堀河後度百首　　　顯　仲
谷河にながれて花のうつまくは岩根のたきの波か
とぞ見る
六帖第六　　みつね
もみぢ葉のながれてよどむみなとをそくれ行秋の
とまりとはみる
このうたよくにたり
（一本）たひのかり
すむさとのさためなけれはたびのかりそらにそうき
て鳴わたるなる
きくのはな
みゆきをばけふとやかねてきくの花昨日のいろのあ
せでのこれる
あせて
風雅春中　　つらゆき
ふるさとにさける物からさくら花色はすこしもあ
せずぞありける
つるすにたてり
かはちかみすまひすればやまなづるのながれてちと
せありといはるゝ
すまひ
萬葉五　　山上憶良
阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都々美夜故能提（アマサカルヒナニイツトセスマヒツヽミヤコノテ）
夫利和周良延爾家利（フリワスラエニケリ）
拾玉集二

わかやどをひとに見せはや山里のすまひはおなし
すまひなれとも
金葉賀　　　堀河院御製
よゝふれとおもかはりせぬ河竹はなかれてのよの
ためしなりけり
かもめなれたり
白浪やみによせかゝるこもおもはで立もさわかずな
るゝ鳥かな
江の松老たり
江にふかくとしふる松は水底のかげにさへてそいろ
は見えけれ
○忠岑家集八首流布本無此八首
秋山をのぞむ　大井行幸
秋山の紅葉みしまに日もくれて龍田ひめにや宿はか
るらむ
龍田ひめ
古今秋下　　兼覧王
たつたひめたむくる神のあれはこそ秋の木葉のぬ
さとちるらめ
眞淵云龍田彦龍田姫の二大神の只風の神にこそお
はすれ秋をつかさとる神とするはひか事なり云々
古今羇旅　　在原業平朝臣
かりくらしたなはたつめにやとからむあまのかは
らに我はきにけり
紅葉おつ　大井行幸
いろ／＼の木葉おちつむ山ざとは錦にとめるなき名
立らむ
にしき
劉熙釋名卷四云錦金也作レ之用功重其價如レ金故其
製字帛與レ金也云々
菊　大井行幸
霜わけて咲べき花もなきものを色をのこして人をた
つぬる
たびの雁　大井行幸
むかしよりはるたちかへり秋はきぬいづこを旅の光
といふらむ
たびの光
文雄按光の字かならす誤字なり空の字のあやまり
か字體似たりそのうへ集中同題の歌にもたひのそ
らとよめるあり

大ゐの幸
こしふかくねさし入江の松なれば老のつもるは波やしるらむ
　老のつもる
新拾遺雑中　　法印長舜
六十あまりゐなしそらゆく月をみて老のつもれるほとそしらるゝ
同　題
水かげをえにける松はいとゞしく波の上にやおひまさるらん
　文雄云生と老をかねたれは假字さためかたし
鶴洲にたてり　大井行幸
まなづるをたちゐなかせる潟の洲に千とせのあとを殘さゞらめや
かもめなれたり　大井行幸
しら浪のこせともたゝすむれゐつゝ人になつかでみなれたる哉
○拾遺集
亭子院大ゐがはに御幸ありて行幸もありぬへきところなりとおほせ給ふにことのよしそうせんと申て
　　小一條太政大臣貞信公
雑秋
をくら山峯のもみぢ葉こゝろあらは今ひとたひのみゆきまたなん
　御ゆきまたなん
萬葉九
春山者散過去鞆三和山者未含君待勝爾
古今春上　　よみ人しらす
あたなりと名にこそたてれさくら花としにまれなる人もまちけり
六帖第六　　忠房朝臣
よしの山木々のもみぢ葉こゝろあらはまれのみゆきを色かへてまて

室松岩雄
保持照次　校
井上頼致

明治四十二年十二月廿七日印刷
明治四十二年十二月三十日發行

定價金參圓

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行者　三里牛七
東京市神田區松下町七、八番地

印刷者　横田五十吉
東京市神田區松下町七、八番地

印刷所　横田活版所

東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行所　國學院大學出版部